聖なるかな外典“無銘の唄”

ドラケン Ｊ35Ｊ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖なるかな外典“無銘の唄”

【Ｎコード】
Ｎ３５５２Ｎ

【作者名】
ドラケン　Ｊ３５Ｊ

【あらすじ】
——繰り返し見るユメ。見覚えの有る、見覚えの無い景色。
煙るような満天の星空、底知れず淀む奈落。
深い闇の底より見上げればそこに——……月が見えた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
聖なるかなの二次創作小説です。

初投稿なので至らぬ所も多々有ると思いますが、少しでもこの小説でお楽しみ戴ければ幸いです。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

◆Ｅｔｃｅｔｅｒａ　Ｉｎｄｅｘ．．．＆ｑｕｏｔ；透徹城内蒐蔵品案内＆ｑｕｏｔ；

作中で登場する武器の一覧です。

私の表現力不足で『解りにくい』と感じた方はどうぞお読みください。

物語の進行に併せて更新しようと思います。

更新内容：細部調整

開始：２０１０／１０／１８

最終更新：２０１１／１１／２５

◆Ｅｔｃｅｔｅｒａ Ｉｎｄｅｘ・・・&ｑｕｏｔ;透徹城内蒐蔵品案内&ｑｕｏｔ;

†永遠神銃†

◆空位永遠神剣【真如】

～Ｔｈｅ Ｓｐｉｒｉｔ ｏｆ Ｅｔｅｒｎｉｔｙ Ｓｗｏｒｄ Ｖａｃａｎｃｙ〟Ａｅｏｎｅｎ－Ｔｒｕｔｈ”～

▼”天つ空風［カゼ］のアキ”が共に歩む、かつて空位に座した神剣が転生した存在。その神銘の意味は”あるがままで在ること”、異空の生き様を表す語である。修道女の長法衣を纏い、滄海［あお］い髪に繚乱たる花冠を戴く魔金と聖銀の異色瞳の神姫”刧媛アイオネア”を化身及び神獣として持つ。

その起源は”空［くう］”。天と地の境界線、繋ぎ結ぶモノにして断ち斬るモノ。架空の要素に起因する根源力の紡ぎ手であり、根源力に方向性を与える事で神器を。アキの才能の”生誕の起火”を加えれば、効果を宿す殻だけだが『空位』の永遠神剣を創り出す事も可能。

『マーリンＭ３３６ＸＬＲ』型のレバーアクション式ライフル銃に蒼滄［アオ］い波紋の広がる刃紋のダマスカス刃を持つライフル剣銃『永遠神銃』が武器だが、真形は”生命［イノチ］”。より精確に表現するのならば、”無限大を超えて尚広がり続ける、生命の系統樹に列記された普遍の可能性”。故に普通の永遠神剣とは違って、その体現する奇跡は単一ではなく無量大数である。

終わりから始まる永劫回帰の刃、永久機関［パーマネントエンジン］が弾倉。また、”諸法から対象外”であり外的な運命介入や変動効果、果ては神剣魔法の発動対象指定すらも受け付けない。無効化ではなく最初から指定不可で、異能を無効化する能力からでさえ対

象外。事実上、物質的で現実的な暴力以外は効果が無い。

◆無限光の聖剣”アイン＝ソフ＝アウル”

▼完全同調により起源を『真空』として解き放ち、無限光の煌めきを纏い宿すダマスカス刃の片刃剣［エンハンス＝ソード］型と成った【真如】の可能性の一部。波紋のさざめく宝石の如く美しい刃。形は彼が【真如】との契約以前に頼りとした【夜燭】に似る。波紋の刃紋が拡がり続ける聖なる刃の茎［なかご］が柄代わりの、鍔無き大刀。鍔が存在するべき部位には瑠璃色の夜明前の藍空を思わせる宝珠が嵌められ、そこから蒼滄く煌めく無限光が溢れる宝剣。

物事の成り立つ要因である『空』を絶ち、如何な異能や理屈、加護、諸概念に護られていようが完全消滅させてしまう。自身も永遠性を持ちつつも、永遠性を否定する二律背反の聖剣。
だが、真に恐るべきはその特性。『過程を経ずに結果を生み出す』、神速をも上回るその概念。先に放てば反撃の余地すら与えぬ先手必勝を、後に放てば敵の攻撃速度を真っ向から上回っての逆転勝利をもたらす魔剣である。

†空位眷属†

▼【無銘】　二連装中折式拳銃型
〜Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　Ｖａｃａｎｃｙ〝Ｎａｍｅｌｅｓｓ－Ｏｎｅ〟〜

漆黒の梨地に金の装調が施された上下二連銃身のパーカッション式拳銃型の神剣。他の空位永遠神剣のバージョンアップに合わせて、

単発の燧石式から弐発の薬莢式に変更された。実のところ最初から化身として、アイオネアの直衛である”幻影死霊”を持っている。その起源は『虚無』、『永遠不変の無だけが存在している』という事である。モチーフとなったのは『デファイアントデリンジャー』。初代は燧石式［フリントロック］の前装式拳銃『フィラデルフィアデリンジャー』。

秘匿性が高く、隠し持つには最適。なお、アキが根源力操作で創る器は全てカラだが、彼が使用する場合はその”空”自体が銃弾となるので、理論上は弾数無限。加えて各属性の永遠神剣と同様のスキルが使用可能となる。

無の起源により、虚構を撃ち出す。不可視にして無音のその弾丸は、暗殺においてこの上無い威力を発揮する。

▼【比翼】　自動式拳銃型

～Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　Ｖａｃａｎｃｙ〝Ｓｏｌｏ－Ｗｉｎｇ〟～

紅地に金の装調が施された自動式拳銃［オートマチック］型の神剣。化身として、アイオネアの臣下である”比翼の紅金鷲”を持つ。その起源は『業火』。『永遠の時を重ねても消えない炎』である。モチーフとなったのは『デザートイーグル５０ＡＥ』。【連理】と弐挺拳銃で使用される事が多い。

銃身には強烈な反動を抑制すべくコンペンセイターと、近接戦闘用に展開式の片刃バヨネットが取り付けられている。

紅の起源によって、灼熱の波動を撃ち出す。赤特有の高いフォースダメージが特徴。

▼【連理】　回転式拳銃型

～Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　Ｖａｃａｎｃｙ〝Ｃｏｎｎｅｃｔｅｄ－Ｂｒａｎｃｈ〟～

蒼地に金の装調が施された回転式拳銃［リボルバー］型の神銃。化身として、アイオネアの臣下である〟比目の蒼錦蛇〟を持つ。

その起源は『凍結』、『永遠の刻を重ねても溶けない氷』である。

モチーフとなったのは、『コルトパイソン６インチ』。【比翼】と弐挺拳銃で使用される事が多い。

相方と同じく強烈な反動を抑制する為の大型コンペンセイターで、自動式拳銃に見える形状になっている。下部には青い片刃の展開式バヨネットを装備してある。

蒼の起源により、絶対零度を撃ち出す。通常攻撃だけで無く、命中すると凍結して、他のマナと消散するバニッシュ効果が有る。

▼【天涯】　自動式拳銃型

～Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　Ｖａｃａｎｃｙ〝Ｈｅａｖｅｎｌｙ－Ｅｎｄ〟～

純白地に金の装調が施された自動式拳銃型の神銃。化身として、アイオネアの臣下である〟白閃鳳〟を持つ。

その起源は『聖光』、『天空より降り注ぐ神の聖なる光』である。

モチーフとなったのは『ＣＺ－７５』。【地角】と弐挺拳銃で使用される事が多い。

銃身下部には、固定式の白い両刃バヨネットとフラッシュライトが装備され、暗所でも安定した索敵が可能になっている上に目眩まし

にも使用可能。
白の起源によりフェイザー…位相エネルギー整流作用を応用、命中した対象の分子結合を破壊する光を撃ち出す。反動が無い為、連射が容易。

▼【地角】　自動式拳銃型
〜Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　Ｖａｃａｎｃｙ〟Ｇｒｏｕｎｄ－Ｅｎｄ〟〜
深紫地に金の装調が施された自動式拳銃型の神銃。化身として、アイオネアの臣下である〟黒闇龍〟を持つ。
その起源は『魔闇』、『地底より湧き出る魔の邪なる闇』である。
モチーフとなったのは『ベレッタＭ９２ＦＳ』。【天涯】と弐挺拳銃で使用される事が多い。

やはり相方と同じく、銃身の下部には深紫の固定式両刃バヨネットとフラッシュライトが装備されているが、光ではなく闇を放つので【天涯】と組み合わせる事で最大の効果を発揮する。
黒の起源により過重力崩壊地点…則ちブラックホールを撃ち出す。命中した対象を特異点へと換えて崩壊させる。やはり反動が無い為、連射が容易。

▼【海内】　大型回転式拳銃型
〜Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　Ｖａｃａｎｃｙ〟Ｓｅａ－Ｅｎｄ〟〜
翡翠地に金の装調が施された大型回転式拳銃型の神銃。化身として、アイオネアの臣下である〟翠雷の幽角獣〟を持つ。

その起源は『彌榮［いやさか］』、『永久に終わらず尽きる事の無い繁栄』という事である。モチーフとなったのは『トーラス＝レイジングブル』。

銃身には大型コンペンセイターと展開式刺突専用バヨネット、上部にはレーザーサイトを。加えて、グリップ下端には打撃用スパイクが装備されている。

碧の起源により、風によって音速まで加速された鋭いマナ結晶弾を放つ。高いマテリアルダメージと貫通効果を持つ。

†永遠神剣†

◆永遠神剣第六位【夜燭】

～Ｔｈｅ Ｓｐｉｒｉｔ ｏｆ Ｅｔｅｒｎｉｔｙ Ｓｗｏｒｄ ６ｔｈ”Ｄｉｍ－Ｌｉｇｈｔ”～

▼切っ先が湾曲した片刃の両手剣［トゥーハンデッドソード］型永遠神剣。守護神獣は『エレメンタル＝レストアス』。

ダラバから譲られたモノだが、己の壱志［いじ］を貫く為に契約をしていない、あくまで協力関係。空の持ち物である特徴として、『朱い飾り紐』が柄尻に結わえ付けられている。

使い熟しているとは今だに言えないが、元来持つ斬れ味と重さにより破壊力は高い。更に、レストアスの汎用性の高さにより空の戦闘の幅を広げる。

度重なる戦いで消耗しきり、本来ならば休眠しなければならない程に追い詰められていた。その消耗を押し【幽冥】のクォジェと戦い、瀕死の重傷を負った空の意識を繋ぐ為に最後のチカラを遣い消滅し

た。最期の一瞬で掛けた言葉に彼は『永遠』を信じる事を決め、永遠神銃【真如】と契約する決意を固める事になる。
その想いは今も消えぬ焔として、彼の心に確たる”壱志［イジ］”の燭［ともしび］を燈し続けている。

◆永遠神剣第五位【幽冥［ゆうめい］】
～Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　５ｔｈ”Ｏｔｈｅｒ－Ｗｏｒｌｄ”～

▼存在するだけで周囲のマナを汚辱する、漆黒の害毒が凝り固まった翳のような永遠神剣。その神剣としての形状は『波動』であり、共鳴により全てに染み入る能力が有る。意志が固着しており、守護神獣は存在しない。
一部でも残っていれば何度でも再製する難滅性の神剣。触れている万物万象の”流れ”を掌［つかさど］る能力を有しており、神剣の形を作り替える『再製』もその能力の一部。

取り込んだ対象の『存在マナ』を蝕み自己増殖し、最後にはこの世に存在するあらゆるモノに必ず訪れる『夜』－－則ち『死』を齎すなど、多分にウィルスに類似する特徴が有る。ただ、意志在るモノは生物非生物に関わらず浸蝕したとしても『再製』は出来ない。
『地位神剣』の勢力に属する神剣で、遥か昔に【聖威】にエト＝カ＝リファの封印が機能しているかどうかを見張る門番の役目を受けていたが、【空隙】のスールードにその野心を刺激されて暗躍するようになる。

クォジェの意識を浸蝕し乗っ取る事に成功したが、【真如】の持つ”二重否定”により、『自身が否定した不可能』…『予備［ストック］』が有る限り死なない』概念をより強く否定され尽くして、神剣

宇宙から完全に消滅した。

◆永遠神剣第七位【逆月［さかづき］】
～Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　７ｔｈ”Ｍｉｒｒｏｒ－Ｍｏｏｎ”～

エチオピア等で見られた鎌刃剣［ショテル］状の永遠神剣。かつて『奸計の神』”クォジェ＝クラギ”が遣った永遠神剣だが、凍結片から再製された贋物。
盾：則ち『防御の内側』に対して攻撃する事を目的としている剣。打ち合った地点を基点に、鏡写しの攻撃を行う能力を持つ。正に、水面に映る『逆月』のように。

深紅の三日月状の刃には、斬ったモノに『触穢［そくえ］』の神名を流し込む為に細かい溝が刻まれている。
対象が神名を持つ場合は、それを冒し反転させて能力を減少させてしまう。『浄戒』とは別ベクトルで神を弑す厄介なモノ。

傷付く事を恐れる事をやめた空の『光芒一閃の剣』により砕かれて消滅した。

◆永遠神剣第四位【破綻】
～Ｔｈｅ　Ｓｐｉｒｉｔ　ｏｆ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ　Ｓｗｏｒｄ　４ｔｈ”Ｆａｉｌｕｒｅ”～

▼僅かな光を照り返す事すら無い、黒金闇色の鍵剣型の永遠神剣。守護神獣は、黒金の龍騎士である”無間に果てぬ韻律”。化身も同じ姿を取る。傲岸不遜な人物だが、裏表は無い。

『開く』事に特化した神剣であり、その効果は空間や時間にすらも及ぶ。あらゆる封印や制限等を無力化する事が可能。

天位の永遠神剣【永劫】の産んだ眷属だったが、地位の眷属である【弥縫】と出逢いにより離反した。その後、『天位』にも『地位』にも属せずに位も無い、『空位』の【真如】を設ける。
その為に天位神剣や地位神剣から討たれそうになった所を『鞘位』【調律】に救われ、眷属としてのチカラを与えられ化身を持った。以降は【弥縫】と共に【真如】の担い手を探していたが、他を犠牲にしてでも目的を達成しようとするその強硬な姿勢が災いして対立。己のチカラを抑えられてしまい、別々に動く事となった。

◆永遠神剣第四位【弥縫】
～Ｔｈｅ Ｓｐｉｒｉｔ ｏｆ Ｅｔｅｒｎｉｔｙ Ｓｗｏｒｄ ４ｔｈ”Ｔｅｍｐｏｒａｒｙ〝～

▼一点の曇りすらも無い鏡の如き、白銀光色の錠盾型の永遠神剣。守護神獣は、白銀の戦女神である”久遠に響く旋律”。化身も同じ姿を取る。清廉潔白な人物だが、故に融通が利かないのが珠に疵。『閉じる』事に特化した神剣であり、その効果は空間や時間にすらも及ぶ。あらゆる事物に解けない封印や制限等を懸ける事が可能。

地位の永遠神剣【刹那】の産んだ眷属だったが、天位の眷属である【破綻】と出逢いにより離反した。その後、『天位』にも『地位』にも属せずに位も無い、『空位』の【真如】を設ける。
しかし、【真如】は器無くしては存在すら不可能な『生命』だった為に生まれた瞬間から消滅の危機に晒されていた。故に、【破綻】と【弥縫】は一時的に【調律】のチカラで【真如】を保護している間に担い手を見付け出そうと活動する事となる。

The Nameless..."ムメイノウタ"

Prologue...”ムメイノウタ”

「…聞いたか、『一一』。『一一』と『一一』の子の事を」
「ええ、聞いたわ。でもそれがどうしたのよ、『一一』？」

無限の時を持つその世界の中で、両者は語り合っていた。今まで幾度となくそうしてきたが、今回はどうも違っている。

「いや、その……何と言うか、な…」
「……？ちょっと、言いたい事が有るならハッキリ言いなさいよ」

一方は何か口篭る様に言うのに対し、もう一方はからりと。
その開きは天と地程も有る。

「何と言うか、狡いじゃないか。あいつらばかり…どうしてだ？」
「どうしてって…あのね、そういうものだからでしょ？もう忘れたの？」
「忘れるものか！莫迦にするな！！解ってる、解ってるさ…でも、納得なんて出来るものか！！」

気勢を上げる一方に、もう一方は若干引いた。
元々熱い奴だが、此処までではなかったと記憶している。

「ちょ、何よもう！文句なら『一一』と『一一』に言えばいいじゃない莫迦っ！」
「煩い！要するにだな、その……『俺』も子が欲しいんだ！」

その告白に、その無限の拡がりを持つ空間はシーンと静まり返った。
その重苦しさは、空が墜ちてきた様だ。

「……で？」

漸く紡がれた言葉は、酷く冷たい。それに若干気圧されつつ、言葉が紡がれた。

「……いや、『で？』と言われても…」
「だから！何でそれを『私』に言うのって言ってるのよっ！！」
「何でってお前…そんなの決まってるだろうが！！」

流石に憤慨したその声に、決意を固めたのだろう。心を落ち着け、声を大にした。

「つまりはな、お、『俺』とお前で子を成さないかって言ってるんだッ！！」

「「……」」

先程よりもずっと、ずっと重く長い沈黙。
そして、ハァ、と。心の底からの溜息が落とされた。

「……呆れた。信じらんない。そんなので『じゃあそうしましょう』、何て言うと思ってる訳？…莫迦だ莫迦だとは思ってたけど、此処までだったなんてね…」
「……『ー ー』…？」

一度そう呟いて、大きく息を吸い込んだ。そのまま ー ー

「こんの莫迦っ！大莫迦っ！！折角のあんたからの告白だったのにっ！！」

無限の世界全体に響き渡る程の大声を上げてひとしきり罵倒した後、声の主はどんどんと遠ざかっていく。

「な、何だよッ！！ちょ、待て！何処に行くんだ『ー ー』！？！」
「うるさいっ！ついて来るなアホタレ『ー ー』～～っ！！！」

それに追い縋るのだが…その速い事。

「待て、待て『ー ー』！！」

激怒して取り付く島も無い相手に、必死で言葉を紡ぐ。言いたくなかったその本心を。

「その……あ、あ～……ああ……愛してるんだーーー！！……糞、恥ずかしい～～～！！！」

今更な言葉を吐きつつ、逃がさぬ様に。その速度を上げたー ー……

彼は眼を開く。無限に広がる世界の中で、ただ一人。
果てし無い大地。そこにただ一本根を降ろした大樹。枝葉は枯れ落ち、まるで骸の様に、墓碑の如く立ち尽くすその木。

そして、その枯れ果てた大地には無数の『刃』が衝き立っていた。
まるで古戦場の様に。林立する剣、槍、双刃剣、刀、杖。
その他にも、斧、鉈、斬馬刀など、それこそ無数。彼の座り込むその位置以外は、もはや通り抜けるだけでも致命傷を負いかねない。

「……ふ」

梢に背を持たせかけて坐っていた彼は、懐かしいユメに思わず苦笑した。脚甲（グリーヴ）を纏う片脚を立て、そこに頬杖を衝いてうたた寝していた、その間に見たユメに。

「…また始まりだ。また『輪廻の輪』が廻り始めたぞ……」

龍が如き禍々しい甲冑に全身を覆った、長身の偉丈夫。その面相は、やはり龍を思わせる面兜（バイザー）に覆われている。
その鋭い鈎爪の腕甲（ガントレット）に包まれた左手に握られているのは、銀色の鍵。
それを力強く握り締め、彼は一一右手でその腰元から黒い何かを抜き放った。

「…今度こそお前を……『撃つ』。なァ、『一一』……？」

バイザーから覗く鋭くもくすんだ金の瞳が一一昏い、昏い愉悦に染まった……

The Last Name・・・"神世の記憶"

一一天を見上げれば幾億もの星。地を見下ろせば果てし無き深淵。
夜ではなく、それがこの世の理。常夜にして静寂の世界。
僅かな足場には、幾何学的な紋様の刻まれた石箱状の巨石が蒼い燐光を放ち、植物の根がそれを搦め捕り固定している。

薄明に包まれたその世界に、青年は無言で佇んでいた。腕を組み、まるで瞑想でもする様に目を伏せている青年。黒いくせ毛の短髪を持ち、中華風の武術服に身を包む長身痩躯の男性。その足元には紅い、紅い『三日月』が衝き立てられている。
その僅かに開けた空間に、四人の男女が歩み出た。

「……来たか。待ち侘びたぞ」

呟き、組んでいた腕を解いた黒い青年が一団に目を向けた。猛禽の如く鋭い三白眼は、並の人間ならば戦慄を禁じ得ないだろう。

「来てやったわよ…殺してやりにねっ！」

だから、その視線に曝されて尚そう叫んだ少女は人間ではない。
白い、ワンピースの様な服を纏った少女。美しい容貌に憎悪を満たした、流れる黒髪の娘。
その後ろに立つ三人の内、二人も一様に憎悪を向けている。

だが青年はそんな少女達には目もくれず、その三人の背後に立つ一人の少女に目を向けた。

「…やはり美しい……我が『月』よ…」

その眼差しから険が取れた。代わり、親愛の光が燈る。

「……」

だが少女は反応を返さない。人形の様に無表情な、ショートボブの娘。

「御託はいい。とっとと掛かって来い」

人形の如き少女を黒い青年の眼差しから護る様に、青年が一人歩み出た。茶髪に碧眼の、精悍な青年。
その手に持つ双子剣の壱振りを衝き付ける。

「……～～～ッ！！！」

その碧眼の青年が立ち塞がった刹那、黒い青年は憤怒の表情を見せた。それは先程の白い服の少女が見せた物よりも更に深く、強い憎悪。
その激情に任せ、彼は足元の『三日月』を曳き抜く。

「ああ…『オレ』も早く愉しませてもらうとするさ！貴様の惨めな死に様をな！！」

一一それは、刃。深く湾曲した鎌状の刃を持つ彼の『剣』。そこから流れ込む無尽蔵の力。今なら造作も無く、神すらも殺せる！
それを碧眼の青年に衝き付け、彼は力の限りに叫んだ。憎しみの募るその名を。

「一一ジルオル…セドカァァッ！！」

The 1st Name…"空"

「う…ん……？」

目を開き先ず目に入ったのは、見慣れた天井。
身体を起こすと、しばらくぼーっと辺りを見渡す。…うん、間違いなく俺の部屋だ。
たった今まで見ていたユメを反芻する。…繰り返し見るユメ。
もういつから見るようになったのかすら思い出せないほどに長い付き合いの、幻想的な舞台劇。

溜息を落してしまう。その中二な内容に辟易して。俺って奴はそんな願望が有るんだろうか？しっかりしろ、巽空［たつみ　あき］。
妄想に逃げてる場合か。
取り敢えず鳴り出す前に目覚まし時計を止め、寝汗を流す為に湯を浴びる事にした……

くせ毛気味の髪を拭きながら、彼…空は冷蔵庫の扉を開く。そして眉をひそめた。

「しまった…切らしてたか…」

いつも買い置きにしていた缶珈琲。それを切らしていた事に気が付いた為だ。
それを飲む事を日課にしている彼は、切れ長の眼がほとんど閉じられてしまいそうな程に眼を細め、腕を組んで悩み始める。右手で左の二の腕を掴み、軽く握った左手を眉間に当てた。彼が考え事をする時のお決まりのポーズ。

「…無いモンは仕方ないか」

呟き扉を閉めると、リビングに向かいテレビを点ける。情報番組の天気予報が流れていた。何でも降水確率は０％！今日もいい天気です！との事。

妙なテンションの天気予報士の言葉を聞きながら、彼は時間割の確認を始めた。

画面が移り変わる。だが彼は特に注意を向けはしない。

『今日最高の星座は、天秤宮のあなたです』

「…ん？」

そこで彼は、鋭い鳶色（とびいろ）の三白眼を上げた。自分の星座が呼ばれた事に興味を引かれたからだ。

『金運体力運恋愛運全てにおいて人生最良の日です。今日に限らず、これから先三ヶ月間で出逢う人物とは生涯に渡る付き合いとなるでしょう…』

「…へぇ」

そして直ぐに興味を失い、視線を戻す。

『なお、片思いの相手と急接近するでしょう』

その一言に、彼はバッと顔を上げた。だが既に画面は移り変わってしまっていた。

「…はッ。有り得ねェっての」

と、突然吐き捨てる様に自嘲した空。乱暴に電源を落し、制服の上下を身に纏う。鞄とリュックサックを手にリビングを後にしようとして――

「ッと、忘れるトコだった…」

チェストの上に置かれたペンダントを手に取った。ニッケルのチェーンで繋がれた、銀色の鍵の意匠を持つペンダント。
それを首に掛けて上着の内に入れ込み、今度こそ彼は自宅を後にした……

流石に早く家を出過ぎてどう時間を潰そうかと悩んだが、『日課』を熟していなかった事を思い出した俺はいつも通り珈琲を飲む事にした。近くの自販機で珈琲を買い、どうせなら空気の良い場所で飲もうと『天木神社』に足を運んだ。

「はぁ…」

缶珈琲を啜りながらベンチに腰掛け、溜息を漏らす。朝の清涼な空気に満たされた境内は、神聖なまでに清々しかった。
…しかし、人っ子一人居ない。というか、俺は此処で宮司や巫女と会った事も無い。

…いや、あれは…あの人は巫女なんかじゃない。それとは正反対の存在だ。きっと修羅か羅刹の類に違いない。
思い出したその女性の姿を振り払い、思考の海に沈む。

――孤独か。俺は何時でも孤独だった。卑下でも自惚れでも無く、事実として。両親は居ないし、友と呼べる友も居ない。

「…気楽で良いけどな。ってか、何感傷的になってんだ俺は――よっと！」

自嘲し珈琲を煽る。さて、此処からはいつも通りと行こう。全てを飲み干し、その空き缶を構え――投げる。

流麗な放物線を描いて屑篭へと向かったそれは――カンと間抜けな音を立てて縁に当たり、くるくる回って吸い込まれて入った。

朝の校門をくぐる生徒達。そこを一人、長身の少年がくぐった。

ほとんど閉じられている様な細い眼。その為か微笑している様にも見える。人畜無害そうな見た目だが、それは間違いなく空その人だ。

何せこの男、平時から目付きが悪い。普通にしているだけでも他人を圧倒してしまうくらいに。

その筋の人に声を掛けられる事もしばしばある。『あ～君、ちょっと身分を証明出来るモノ有るかい？』と。

――見た目だけは好青年を演じる。それが空の処世術。人間はだいたい第一印象で人となりを判断する。そしてそれが変わる事は余り無い。

だが、会話をすればその冷たさは誰にでも解る。それが他者を寄せ付けない強固な障壁である事が。

「おはよっす～！」

「あ、おはよーさん～」

「お早う」

校門では女子生徒の一団が朝の挨拶を交わしている。空はその一団を避けようと進路を変えて――

「あ、おはよう、空くん」
「っ！あ、ああ、お早う希美！」

その少女に出逢う。緑の黒髪を持つ、ショートボブの少女。たおやかな見た目通りの優し気な物腰。
――永峰希美［ながみねのぞみ］。彼の数少ない知り合いで、今も続く彼の片想いの相手だ。

「今日もいい天気だね」
「ああ…降水確率０％らしいからな…えっと、その…」

突然の事に彼の思考が堂々巡りを始める。上手く言葉を紡げずにへどもどとなる彼を、彼女は不思議そうに見上げた。

「…ぅん？」
「うっ…！いやその、なんだ、あれでその…！」

１８５ｃｍを上回る長身の彼は、大体の相手から見上げられる形になる。それで小首を傾げられてしまうと、彼にとっては想像を絶する破壊力となってしまう。
益々言葉を無くしてしまい、焼け付いた脳味噌で訳の解らない言葉を紡ごうとした瞬間――

「おはよう、空。いい天気だな」
「ッ！ああ…お早う、望」

その目の前にもう一人、彼の知り合いが現れた。茶髪に碧眼の、中性的な顔立ちの少年。――世刻望［せとき　のぞむ］だ。

「相変わらず眠そうだな…ちゃんと寝てるのか？」
「心配しなくても良い。…ていうか望、お前の方が眠そうだ」
「あはは…まぁな…」

その登場に、浮足立っていた空の思考が落ち着きを取り戻す。

「…悪い二人とも。俺今日日直だから急ぐな」
「あ、そうなの？呼び止めてごめんね」

そうして場を切り上げた彼の耳に、その会話が飛び込んで来る。

「も～、望ちゃん！しっかり歩いてよー！」
「いてて、引っ張るなって！今日は特に眠いんだよ…」
「どうせゲームでもやってたんでしょ？望ちゃんと空くんの眠いは訳が違うのっ」

そんな会話をこれ以上聞かぬように、彼は急ぎ足でその場を後にした。

夕暮れに染まるアスファルトの通学路。俺はそこを一人、歩いていた。
腹立ち紛れに石ころを蹴飛ばす。そんな事をした理由は簡単、今日の出来事のせいだ。

…希美、望。似た名前の二人は、幼い頃からの知り合い…幼なじみだ。いや、俺だってそうだが、この二人は別格だ。ただの幼なじみである俺とは違い、希美は…望に恋情を抱いている。そんな事、知り合って間もなく気付いた。それでも努力はした。頻繁に話し掛けたり遊びに誘ったり、贈り物をしたり。そして直ぐ、無駄だと思い

知らされた。
どんなに話が弾んでいても之望が居ればそっちを見、望を誘ってから良いよと言われ、望から貰ったプレゼントを嬉しそうに大事そうに抱きしめた姿を見せられて。

だから正直、望とはそこまで親しくした覚えはない。あくまで希美のついで、だ。だがそれでもあいつは、俺を友人だと思っているらしい。

「……」

嫌いか、と問われれば…どうだろうか。確かに悪い奴じゃない。それ程人付き合いが上手いという訳でも無いのに、クラスでも一定の人気が有る。俺とは凄い違いだ。俺が勝っている物なんて、身長と成績位のモンだろう。

「ッ！？」

その望がいた。遥かに前方で希美と斑鳩会長に両の腕を取られ、暁に何か軽口を叩かれながら、困った様な…しかし満ち足りた笑顔を浮かべていた。
……全く、凄い違いだ。

「……はッ！」

自嘲する。何を莫迦な。羨ましいとでもいうのか、俺は？
不必要だ。俺は俺。俺らしく有り続ければ良い。そう、それだけで。
脇道に逸れる。その先に有る古書店を目指して。まだバイト迄には時間が有る。暇を潰してからでも遅くない。

そんな言い訳がましい理由を付けて、俺は一人歩いたのだった……

「お先に失礼します」
「はーい。お疲れ様、巽さん」
「それでは……」

いつも通り通り一遍の挨拶を交わしてバイト先のコンビニを出る。
そしてポケットから取り出した一粒の飴玉…昔懐かしい透き通った蜂蜜色の甘露飴の包みを解き、含む。俺はどちらかと言えば辛党だし、餓鬼地味ているのは自覚しているが、何故かこの飴だけは止められない。

夜の帳は降りて久しい。信号は、赤が点滅しているだけだ。
夜天を仰ぎ見る。そこには満月。その気高い煌めきを浴びているだけでも、活力が沸いて来る気がする。
…今日は疲れたな。あの夢を見た日は大体そうだが、望と希美の仲の良さが殊更鼻に付く。その苛々を抑えるだけで一苦労なくらいに。ころころと転がしていた飴を頬袋に収め、舌打ちする。止めよう。これ以上ムカついてどうするってんだ。止めだ、止め——

「……？」

そしてふと、気づく。その視線に。ねっとりと絡み付く汚泥の様な、本能的に嫌悪を感じるそれ。

——何処から？
視線だけを巡らす。
自販機、ゴミ箱、塀、空き地、電信柱、街灯——

（あれは……？）

街灯の下、柱に阻まれて光が届かない僅かな暗がり。そこに息を詰めているモノがいる。

ソレは――黒い犬。いや、むしろ狗。動物というよりは獣だ。

だが、目の前のソレから受ける印象は、もっと何か薄ら寒いものだった。犬という存在から感じられる親近感がない、犬に見えるだけの別のモノ。

「グルルルゥ……」

低い唸り声。ソイツの喉笛が奏でたものだ。値踏みでもするかの様に俺を睨みつけている、血の様に赤い瞳。そこに含まれているのは、悪意や害意といった負の感情。

――暗がりから歩み出たソイツは、下手な狼なんかよりずっと強靭な体躯を持っていた。

その四肢に力が篭められたのが判る。本能的に悟った。逃げろ、殺される――！！！

「――ッ！」

刹那、飛び掛かって来る黒狗。恐怖に縛られ、躯は動かない――！！

「ギャイイン！？」

その犬が、空中で横ッ飛びに吹っ飛んだ。俺には、銀色の弾丸にでも吹き飛ばされた様にしか見えなかった。

吹き飛ばされて壁に叩き付けられ、それでも平然と立つ黒い犬。ソ

イツと、立ち尽くすだけの俺との間に一一銀色の狗が立っていた。

「お前は……！」

見覚えのあるその姿。月光に映える、狼の様に気高いその姿。
二頭の狗は睨み合い、牽制しあう。だが、不意に黒い狗が俺を見た。
そして本当に、掻き消す様にその姿が闇に向こうに消える。

「一一ッハァ、ハァ、ハァ…！」

忘れていた呼吸を再開し、胸に手を当てた。確かに見た。

「…嗤(わら)って…た…」

禍々しい顎(あぎと)を歪め、凶悪な犬歯を向いて…嘲笑った。俺を見て。
『いつでも、殺せるぞ』
その愉悦に満ちた眼は、雄弁にそう語っていた。

ヘタり込む様に腰を下ろす。恐怖が過ぎ去り、腰が抜けてしまっていた。そんな俺を、銀色の狗が見詰めている。

「助けてくれたのか……？」

「……」

少し離れた所で、銀色の体毛を夜風に靡かせている狗。一年近く見かける事すら無かったその姿。

手を伸ばすと一瞬身を竦めたが、逃げ出しはしなかった。

「有難うな、綺羅［きら］…」

「クゥーン……」

そのまま頭を撫でる。綺羅は心地良さそうに、紅い瞳を細めた。だがそれは、あの黒い狗とは違って透き通ったルビーの美しさ。と、綺羅の右前肢に血が滲んでいるのに気が付く。あの狗を吹き飛ばした時に、爪が当たりでもしたのだろうか。

ポケットをまさぐり、入れっぱなしになっていたままのハンカチを取り出す。それを巻き、少し強めに結び付けた。

「帰ったらちゃんと診てもらえよ？そうだ、狂犬病の予防接種とかしてるか？」

「……？」

心配になり、答えが返る筈も無いのに聞いてしまう。それに綺羅は小首を傾げた。長めの尻尾が控え目に揺れている。先程の勇ましさが嘘の様だ。

もう一度、今度は下顎を撫でる。猫の様に喉を鳴らし、綺羅は俺の頬を舐めた。

何となく苦笑してしまう。だが御蔭でやっと、腰が立つ様になったのだった。

立ち上がり、周囲を改める。もうあの厭な感覚は無いが、それでも一度感じた死の恐怖は簡単には消えてくれない。

隣の綺羅を見遣る…と、既にその姿はない。相変わらず神出鬼没な奴だな…。

「……ふぅ…」

懐かしい相手に会った余韻に浸る間も無く俺は、落とした袋を掴み上げて足速に家路を急いだのだった……

――赤が舞い散る。それは破片。そして鮮血。

「――ガはッ!??!!!」

袈裟斬りに斬り下ろす右の一撃が『剣』を砕き、逆手に持つ左の逆袈裟斬りが黒い青年の身を割いた。

「……何故、だ……」

ガクリと膝を落し、両手を支えに倒れ込む事だけは避けた。だがそれは紛れも無い致命傷。

「…この程度か。渣［カス］め!!」

「くっ……!」

碧眼の青年の威圧に、黒い青年は気圧される。

惨めな姿だった。溢れんばかりの力を与えていた『剣』は微塵に打ち砕かれ、割かれた身からは血と共に何かが流出して行く。

「…そうか、そういう事か…。これが『浄戒』の力……おのれ、エトル……!!」

何かに気付き、彼は吐き捨てた。地に打ち付けられた拳から血が滴る。

「…覚えておけ…。…『オレ』は決して諦めない……。何度生まれ替わり、死に替わろうと必ず――」

黒い青年は憎悪の眼差しを碧眼の青年へと向ける。碧眼の青年は何の感慨も無く、それを受け止めた。

「必ず――ファイムを救い出す！破壊神ジルオル、貴様から、必ず……！！」

呪詛を吐き捨て、彼は柄に僅かに残った刃で――

「アアアアァァァァッ！？？！」

自らの『心臓』を貫いた――

The 2nd Name…"無限宴"

「あああああぁぁぁぁぁっ!??!」

絶叫と共に目覚めた空。掛け布団を跳ね退け、自らの鳩尾に手を宛てた。

そしてしばらく経ちそれがユメだったと気付くや、忌々しげに溜息を落としたのだった。

休日の神社の境内。その爽やかな空気の中で、俺は珈琲を啜っていた。

…しかし、今回はまた凄い内容だった。あんなのは初めてだ。いつもは剣を衝き付けて終わりだったのに。

「…ああ、糞!」

その生々しい感覚を思い出し、身震いする。止めだ止め。

思考を切り上げ、珈琲を飲み干す。そして空き缶を構え一一投げる。

流麗な放物線を描いたそれは一一

「絶好球ーー!!」

一一パカーーン!!

「あたーー!??!何すんだッ!危ねェだろうがッ!」

竹箒で打ち返され、俺の顔面に命中した。尻餅を衝き、ツーンと染

みる鼻面を押さえる。

「あ～ら、その声は空さんじゃないですか？随分と御無沙汰ですねぇ…一年ぶりでしたっけ？」

「……」

その声に思考が停止する。だが、体は反射的に正座する。そして錆び付いたブリキの玩具の様に、俺はその女性を見上げた。

「…お…お久しぶりです…、時深さん…」

竹箒を持つ、巫女装束に身を包んだしとやか『そうな』、赤みがかった黒髪の女性――倉橋時深［くらはし　ときみ］。俺の……

「あらあら？いつ『師匠』から格下げされたのかしら、不肖の弟子さん？」

…そう、俺の『師匠』だ。小さい頃この神社の境内に居た所を捕まり、以降強制的に師弟関係を結ばされただけだが。

しかも連日厳しいを越えて過酷な程の訓練を積まされた。小学校低学年が悲鳴を上げて助けを乞いながら昏倒するまでなのだから、その鬼畜さたるや推して知るべし。

「勘弁してくださいよ、物部学園に入ってからバイト増やすんで行けないって言ったじゃないですか…」

「聞いてましたよ。いいとは言いませんでしたけど」

「……横暴ウボフォッ！？！」

そこで、裏拳が鼻面に刈り込んだ。鼻を押さえて師匠を見遣る。

「どうしました？突然奇声を上げたりして」
「…いえ、別に…」

しれっと言ったその羅刹に、鼻面を押さえた俺は溜息を落とすしか対処法が無かった。
本当、この人と知り合ってから忍耐力と打たれ強さ、逃げ足と命を諦めない意志を鍛えられた気がする……

「それで、何か変化は有りませんか？」
「昔もよくそれ聞かれましたけど…どういう意味ですか？」
「何も無いのならそれでいいんですよ」

ベンチに腰掛けた時深の問いに、空は怪訝な表情を見せる。
探る言葉を受け流し、彼女はじっと空を見詰めた。全てを見通す様なその深く澄んだ瞳。それを受けて居心地悪そうに頭を掻く空。

昔と同じく耐え切れず、彼は自分の見るユメについて話した。
全て聞き終え、彼女は何かを考え込んでいる。難しい顔をして考え込んでいたが。

「…空さん、久々に訓練をしましょう」
「は？いやちょっ、ぐはぁぁっ！？！？」

と、やおら顔を上げたかと思うと彼女は空を問答無用で一本背負った。
それに対応して受け身を取った空だったが、空中で進行方向が１８０。変われば対応など出来まい。手加減無しで石畳に叩き付けられ、肺から全ての空気を吐き出す。それでも起き上がる。

どうせ寝転んでいても追撃が来るだけだと知っているからだ。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！俺はただ綺羅に助けられたんでその礼を――」

「あらそうですか。それなら一層精進する必要が有りますね。今日は特別メニューです」

「薮蛇ー！？」

その眼差しに本気を悟った彼は、瞬時に思考を回転させた。

――やられる。間違いなくやられる。この人は手加減してくれた事なんて一切無い。

だとすればどうする？

――決まっている。

自決か特攻。その二者択一――

此処で彼は決心した。

そう――やられる前にやるしかない！

「手向かいますよ師匠ォォォッ！」

眼を開く。彼が本気を出す証拠。全身全霊を篭めて遮二無二繰り出した左の正拳突き。その速さは、並の人間ならば反応出来ない程――！！

「ォォォぐはァッ！！？！？」

だったのだが。時深には通じない。その腕を軽々ひしぐと、その威

力を乗せたままで一本背負いを見舞った。

「…ふふ、いくら速く動こうとしても無駄ですよ。時間ごと速くなる私には勝てません」

「もうその冗句（ジョーク）、聞き飽きましたって…」

叩き付けたまま言い放った彼女に、空は苦痛の中でツッコんだ。

「…ふぅ、こんな所ですね。それじゃあ今日はこれまで」

「…うっす……有難う御座いました……」

地に這いつくばっている空に、時深は満足げに言い放ちながら裾に付いた土埃を払った。

「長い事来てなかった割に、身体は鈍っていませんね。もしかして、きちんと特訓していたんですか？」

だが応える声は無い。それもその筈、空は既に意識の手綱を手放している。

それに苦笑して、彼女は近くのベンチに彼を横たえた。自分より遥かに大柄な空を軽々と抱えて、だ。

手水屋で手拭いを湿らせると、それを彼の額に当てる。冷たさに呻いた空を優しく見詰めて――

「――それで、貴方はいつまでそうしているんですか？」

ゆっくりと、斜陽に照らされた境内の端…鳥居から伸びる影を見遣った。

その僅かな暗がりに、潜んでいるモノが在る。見えはしない、だが

一一

「…やれやれ、こちらから仕掛けないと動かないつもりですか？手荒なのは趣味じゃ無いんですけどね一一」

面倒臭そうに呟き、彼女は一一『消えた』。いや、そう見える程に『早く』動いた。

一一ビュン！

風斬り音の後、彼女は鳥居の影を踏んでいた。その手には、畳まれた扇。これが空を斬ったのだ。

「…成る程、速い。自惚れる訳では有りませんが、私の一撃を躱せる者はそうはいません」

その視線の先、鳥居の影から追い落とされた者が立っていた。

一一一言で表すなら、黒い影。希薄で、曖昧な陰り。揺らめく昏い陽炎か蜃気楼。だが、確かにそこに在る…害毒の結晶。

「一一往きますよ、【時詠】」

腰の短剣の柄を握り、そこで漸く彼女は相手を睨みつけた。向き合っているかどうかすら解らない、昏い影を。

その雰囲気が変わった事を感じ取り、影が揺らめいた。

そう見えた時には既に、彼女は自身の影と鳥居の影より生えた有機質な昏い槍の様な触手に姿が見えなくなるまで貫かれている。

「一一いくら速く動こうとしても無駄、時間ごと速くなる私には勝

てません」

影は身構える隙も無く胴を抜かれた。斬り裂かれた胴より、昏い霧が漏れ出す。

だが、ただゆらゆらと。先程と変わらず立ち尽くしている。

それを成した彼女は、少し離れた位置で荒い息を付いていた。

「…やはり、奪っただけの命の予備を持ちますか…」

顔を起こせば、彼の影は何事も無かったかの様に平然と佇んでいる。

それに向けて、忌々し気に舌打つ。この時間樹でも随分と命を喰い潰しているだろうこの存在。

一体どれ程の予備を持ち合わせているのか、想像するだけで気が遠くなる。

「流石……『破片』とは言え本当に厄介な能力……！」

加えて――この能力だ。

彼女の手には、一振りの短剣。密教の宝具の様なその剣に、昏い穢れが染み付いている。

斬り裂いた時に浴びたモノ。彼女の力を奪い去っていく不浄の害毒。

――長くは持たない。あと一撃でもあの影に打ち込めば、完全に毒される。

スッと、目を閉じる。その瞼の裏に浮かぶ少年の顔。ツンツン尖った針金頭の少年……。

「……やれるだけの事をやってみる…そうですよね、悠人さん…！」

目を開いた彼女ーー

「ーーかッ!??!!」

その胸に、『孔(あな)』が空いた。心の臓の有る位置に、寸分の狂いも無く。

ゆらりとその身が傾ぐ。彼女の目に映ったのはーー腕らしきモノを突き出した影。そしてその先端に保持されたーー。

「ーーそれが貴方の『本体』ですね?」

「ーー!?!」

それが打ち砕かれた。時深の振るった短剣により、粉砕された。同時に、胸に孔の空いた時深が、小さなヒトガタに変わる。

「抜かりましたね。私は『混沌の永遠者』で在る前に『倉橋の戦巫女』。この程度の芸当は朝飯前ですよ」

衝き出していたモノを失った影が、ボロリと崩れていく。先程までの有機質さが消え、まるで消し炭の様だ。

「…どうせ消えはしないのでしょう?少し伸びただけ。ですが…覚えておきなさい」

影が、ミシリと音を立てた。その顔面らしき部位に縦の亀裂。

「全てが貴方の思い通りに行くとは思わない事です。運命は…その歩みは他者に否定など出来はしない。その歩み手が決めるものなのですから…ッ!」

返しの刃に頚が斬られ、墜ちる。墜ちて砕けるその瞬間まで、亀裂から覗く眼がジッと、彼女を見詰めていた。

「ん……？」

目が醒める。視界はぼやけているが、やけに柔らかい、紅い枕…

「…目が醒めましたか、空さん？」

「…師匠…？って、なぁッ！？」

その優しい声に視線を上げ、気付いた。膝枕されている。

一気に恥ずかしくなり、身を起こそうとする。だが、手酷く打たれた身体は言う事を聞いてくれない。

「何ですか、そんなに恥ずかしがって。昔はよくしてあげたでしょう？」

「昔は昔ですッ！いい年こいて恥ずかしいんです俺はッ！」

くすくすと笑う師匠。あまつさえ髪を撫でられてしまう。

「…相変わらずの猫毛のくせっ毛。変わりませんね…」

「……師匠…？」

此処で『師匠こそ一切年取った様に見えませんよ』なんて言わない。

そんな事を言ったが最後、地獄巡りの片道切符を受け取らされてしまう。

それに、何だか妙に師匠がしおらしい。まるで今生の別れの様だ。

「…空さん。これから貴方には、様々な困難が降り懸かるでしょう。

それは時に貴方の力を大きく上回り、敵うべくも無い程に強大なう

ねりとして貴方を呑み込むかも知れません」

と、真面目な顔をして見詰められる。こういう時の師匠の言葉には、妙な迫力が在る。まるで、未来が見えているんじゃ無いかと思える程に。

「…ですが、諦めないでください。例え独りきりの独りよがりでも、貴方が信じる貴方の道を、ただ一筋貫き通してください。吹き抜ける一陣の風の様に、天つ風の如くただ真っ直ぐに…」

その右手が差し出される。差し出された掌にはお守り。俺は無神論者なのでこういう物には詳しく無いが、安全祈願らしい。

…全く、師匠の言う事はよく解らない。いつもの事だ。

身体を起こす。随分と良くなった。少し身体を解して、師匠と向き合った。

「……『自分で選んだ道を迷わず進め』…、師匠の言葉の中で、これだけは気に入ってるんですよ」

「ふふ…そうですね。馬鹿正直に真っ直ぐ…それだけが貴方の取り柄ですから」

「うわ、酷いですよそれ…」

受けとったお守りをポケットに入れ、周囲を見渡す。宵の帳が降りた境内に、満月の煌めきが注がれていた。

綺羅の姿はない。最後まで現れなかった。折角買ったビーフジャーキーも無駄になった様だ。

「じゃあこれで。また…来ます」

「一一え?」

挨拶に、師匠は変な顔をした。意外そうな顔。
何か変な事を言ったかな、と自分の言葉を反芻しようとした時、師匠が笑った。

「…ええ。それじゃあまた、会いましょう…」
「…うぃっす…」

その優しい笑顔に苦笑を返して、サムズアップする。昔師匠に仕込まれた癖だ。
久方ぶりに思わず出たその癖が恥ずかしくなり、俺は足速に石段を降りたのだった。

笑顔を向けられてサムズアップし、困った笑顔を見せた少年が見え無くなった。
その様子を見届け、彼女は境内の『結界』を解く。そして、ベンチに腰掛ける時深に歩み寄った。

「…いいのですか、時深。彼を野放しにしても」

それは、黒髪の美女。着物の様な奇妙な服装をしている。

「いいんです、環姉さん。運命はその歩み手が紡ぐべきもの。他人が口出ししていいものでは有りませんから」

その女性こそ、この天木神社の神主である倉橋環［くらはし　たまき］その人。
環は少し困った様に微笑む。もう見えない少年に目を向けて。

「…時深。貴女にはどんな未来が見えたのですか……？」
「…明日を境に見えなくなりますから解りません。…ですけど、覚悟は決めてありますから」

言い、彼女は腰本の短剣を手にとった。その刃は随分とくすんでいるが、次第に煌めきを取り戻し始めている。

「……ッ…」

時深が眉をひそめる。その胸を押さえて。彼女の持つ未来視の力を持ってしても避けきれなかったあの一撃に刈られた傷が、疼いている。

――反則だろう、あれは。あんな物、自分の様に未来を見る力でも無い限りは太刀向かう事すら出来やしない。

そして、例え見れたとしても近づく訳にも遠ざかる訳にもいかない。本当に…厄介な能力だ……

だがそれでも。もしアレに呑まれてしまうくらいならば――自分が討つ。それが師たる者の責任。

「……吉と出るか凶と出るか…今は待つとしましょう…」

ただ、叶うなら…光有れと。そう願わずにはいられなかった……

The 3rd Name.‥"白月"

時は正午過ぎ。快晴の下、屋上は心地の良い風が吹き渡っている。
登校時に買っておいたコンビニのお握りを珈琲で流し込んで、青く澄んだ空を見上げた。

此処に居る理由は二つ。一つは一人に成りたかったから。そして二つ目は、教室で始まった望と希美の弁当のやり取りを見たくなかったからだ。……そう言えば斑鳩会長も居た気がする。興味なかったから覚えてないけど。

――今頃、望は希美の弁当に舌鼓を打っているのだろうか。
そんな事を考えると、食欲が減退してきた。もう一つ有るお握りを掌で弄んで……無理矢理それを押し込み、胃に入れる。珈琲もすべて飲み干した。

「――はぁ…」

壁にべったりと背を預け、瞼を閉じる。瞼を通して感じる日の光が、鎖された視界を朱鷺色に染め上げる。
その光を、左腕を日避けに防ぐ。本当に――

「【忌々しい」】

暖かな陽光を浴びてまどろんだ俺は、思わず口を衝いた台詞に違和感を覚えた。
俺が言いたかったのは――そんな言葉だったか――？

ゆっくりと昏い方に沈んでいく意識に、その答えは出せなかった……

「――……ん？」

ふと、何かが聞こえた気がして、眠り込んでいた事に気が付いた。
目を開いて先ず飛び込んできたモノは――紅い空。

「なっ！？！」

――夕方！？ヤバい、寝過ごした！無遅刻無欠席が目標だったのに――！！
慌てて身を起こし、携帯の時計を確認しようとして――莫迦らしくなった。

――だったらどうしたと言うのか。もう時は戻らない。今更そんな事に何の意味が有るのか。
まるで誰かにそう諭された気分。心の奥深くまで染み入る考えだった。

再び壁に背を預けると、心静かに空を見上げる。鮮血の如き紅から宵の蒼へと移り変わる中途の空。昼と夜の中間、極彩色に彩られたその空。

「……綺麗だな」

そう、独りごちる。目から鱗が落ちた様な感慨を抱く程幻想的な風景。
だからだろうか。

「ほんまどすなぁ、綺麗やわぁ…」

応えて響いたその声にも、さして驚く事はない。何事も予想の範疇ならば、驚く必要など何処にも無い。

目線を上げて見れば、女と目が逢った。背を預けている壁の天頂に腰掛けている。

昼間ならば見る事は出来無かっただろうが、今は斜陽が真横からその姿を宵の闇に浮かび上がらせていた。

第一印象は、美しい女。年の頃は俺よりも少し上。物部学園指定の制服ではなく、瀟洒な朱い小袖を身に纏う女。

夕陽を熔かし込んだ様な淦(あか)い長髪を風に靡かせ、値踏みする様に挑発的な切れ長の紅(あか)の瞳を向けている。

と、女が高みより飛び降りた。翻りはためく袖が印象に残る。

「……くふふ」

タン、と足元に着地し、口元に袖を宛ててこちらを見ながら微笑む。そして気安く俺の左脇に身を滑り込ませた。枝垂れ掛かる様に頭を肩に乗せて来る。淦だと思っていた白い髪がサラリと流れた。途端に甘ったるい麝香(じゃこう)の様な香気が感じられる。

「…案外に肝が据わってはるんどすなぁ、も少しくらい驚きはると思ったんどすけどぉ」

「…別段驚く必要も無いだろう。喚び寄せたのは俺だ」

「まぁそうどすなぁ。呼ばれて飛び出てぇ…て奴どすわぁ。くふふ……」

触れそうな程近くで、紅を引いた様に艶やかな唇が言葉を紡ぐ。その誘う様な視線を受け流し、左腕に触れた硬質な感触を確かめるべく視線を落とした。

それは女の腰帯に挿された双振りの小刀。合口とも脇差しとも取れるモノだ。どちらも漆黒の鞘に収まり、鍔を持たない鞘と同色の柄には紅い飾り紐が結わえられているだけ。飾り気が少ない、この女の雰囲気に佳く似合うと言えるだろう。

――だが、そんなモノはどうでもいい。俺の目を釘付けにしたのは、同じく腰帯に挿された漆黒の銃把。そこから感じられる、圧倒的な存在感。

「くふふ…コイツが気に入らはった御様子でぇ…。でもまぁ、御高くつきあんす。無償の奇跡は存在せぇへん、在るんはただぁ、代償を果たす契約のみぃ……」

「構うか。望み以上だ」

思わず口角が釣り上がる。漸く、この機会を手に入れた。

「それはようござんしたぁ…。ところで『契約者』はん、『矛盾の成り立つ条件』て解りあんすかぁ？因みにこれは剣の届かぬ間合いから、盾の守れぬ箇所を撃ち抜く、『最強の剣』であり『最強の盾』にありんす…」

「…ふん、それこそ…」

勝手に抜き取ろうとすると、それを女は手で抑えた。そして、意味ありげに笑う。

強引にその戒めを振り払い、くるりと左手で回転させて番（つが）える。

「『矛盾してる』って言うんだろうが」

――黒の梨地に流麗な金の装調が施された燧石式拳銃［フリントロック］。バレルは無く、薄い直方体の基部に直接銃口が穿たれている。

その下部には、虹色に煌めく宝石の様な石が嵌められていた。

その銃口を夕陽と夕闇の狭間、境界の溶け合う空間へと向ける。

そこに在ったのは――三日月。返り血を浴びたかの様な、深紅に染まったその姿。

左腕に焼け付く痛みが走る。だがそれすらも、心地好い。

「……これで契約は結ばれあんした。この記憶は消えやす。でもぉ、魂に結わえられたこの契約は例え破棄されても未来永劫、輪廻の先まで有効。…もう逃れられやしませんえ？…くふふ」

その呟きすらも何処か遠く。俺は美しいその拳銃を眺めていた。

「帰ってきたか、俺の――」

その拳銃に、何かが触れた気がした――

――キーンコーンカーンコーン……

「…ん、ク…！」

間延びしたその音で目を覚ます。高い空は、幾許かの雲が流れる蒼穹。
凝り固まった背筋を伸ばしてから溜息を吐いた。
何か夢を見ていた気がしたが、肝心の内容は霞が掛かった様に漠としている。そして直ぐ、別の重要事項を思い出した。

「一時十五分…」

懐から取り出した携帯で時間を確認する。眠っていた時間はほぼ三十分と言ったところか。
とすれば今のは五限目の予鈴だ。何と無く、ホッとした。

「皆勤はまだ狙える、か…」

立ち上がり…少し眩暈を覚えて…壁に手を付いて身体を支え、昇降口の扉を開いた。

ふらつく身体を支える為に付いたその左腕に、朧な紅い紋様が浮かび上がった事に気付いたのはただ一一眩き太陽の光に焼かれた、青白い月だけ……

朝の昇降口で外履きから上履きに履き替え、教室に向かう。
昨日今日と珍しく夢を見なかった為、すこぶる快調だ。

「よっ、巽！」

ざわめく生徒達の合間を縫って、俺は教室に向かった……

「って待て待て、ちょっと待てって巽！」

ざわめく生徒達の合間を縫って、俺は、教室に、向かった……

「巽ー！巽空ー！たーつーみーあーきーくーん！！」

「……はぁ…何か用か、森」

これ以上騒がれては敵わない。俺のリュックサックを掴んで引き留めようとしているその人物に向け、氷点下の視線と言葉を叩き付ける。

にへらっと笑った鹿毛色の髪の少年ーー森信助［もり　しんすけ］に。

「んにゃ、見かけたから挨拶しただけだって」

「…そうか。じゃあまたな」

ざわめく生徒達の合間を縫って、俺は教室に向かった。

「じゃなくて、一緒に教室行こうぜって言いたかったんだよ！」

そうして歩き去ろうとした俺の目の前に回り込む森。

「……何でだ？」

「何でって……クラスメイトだろ？他に有るかよ」

…あっけらかんと言ってのけた森に、溜息を禁じ得ない。その思惑が読めないんだ、こいつは。何を考えているのかさっぱり。よく俺にこうして絡んで来るのだが、それで一体何の得が有るんだろうか？

「巽くん、おはよ。信助のお守りご苦労様」
「…ああ、お早う阿川」

森の少し後ろから、栗毛色の少女が現れた。――阿川美里［あがわみさと］。森とは馬が合うらしくよく一緒に居るところを見かける。その縁でか俺も知り合いだ。

――キーンコーンカーンコーン……

「ヤベーッ！予鈴鳴ったぞ！急ぐぜっ！！」
「うわっ、遅刻は勘弁！ほらほら、巽くんも急いだ急いだ！」

誰のせいだと思っているのだろうか。まァ、とにかく奨学制度を利用している手前遅刻は不味い。
俺も二人に合わせて駆け足に変えた。

昼休み、何時も通り屋上で昼食を摂ろうとしていた空。だがそれより早く彼は信助に捕まり、美里共々一緒に昼食を摂る事となってしまっていた。

「…てか、日頃からビニ弁はどうよ？」
「栄養偏るわよ？もっと彩りよく食べないと大きく成れないんだから」
「これ以上大きくならなくて結構だよ。…今までだってこれで大丈夫だったんだ。何も問題はな――」

諌める二人に、珈琲を飲みながら歩いている空。

――バーーーン!!!

「イバフォッ!?!?!?」

その珈琲をもう一度煽ろうとした彼を、開いた扉が打ち据えた。御蔭で彼は自らの顔面に左フックをぶちかます事になってしまった。

「さーて、お昼よお昼。今日こそは望くんに私のお弁当を選んで貰うんだから!暁君はどうする?」

「毎度毎度、希美ちゃんをからかってそんなに楽しいですかね、斑鳩先輩?…ま、面白そうだから見に行きますけど」

その扉の向こうから現れたのは、どちらも飛び切りの美形。紅い長髪の少女――現物部学園生徒会長の斑鳩沙月［いかるが　さつき］と、銀髪を後ろで一房に纏めた少年――暁絶［あかつき　ぜつ］。望と希美の二人とあわせて、仲良し四人組として知られる人物である。

蹲る空に気付いているのかいないのか、沙月は近くに居た美里に望の居場所を聞き、既に希美が一緒に居る事を聞いて慌てて駆けて行った。その様子を笑って見送り、絶は。

「……で、大丈夫か、巽?」

顔面を押さえていた空に言葉を掛けた。

「……何がだ?」

「ほぅ…無かった事にしようと……?」

空はすっと立ち上がり、何事も無かったかの様に平然とした顔をし

た。
因みに、沙月と絶と空は以前、望と希美の紹介で知り合っている。
…それ以上でもそれ以下でも無いが。

「取り敢えず、顔を洗って来た方がいい。珈琲で大変な事に成ってるぞ？」
「……」

絶の指摘に、空は近くの姿見で自分の姿を見た。そしてすっとトイレに消えていく。それを三人は苦笑しながら見送った。

「なーんか肝心な所が抜けてるんだよな、巽の奴は…」
「みたいだな。あいつは……望と同じクラスだったっけ？」

信助の言葉に、絶はクスリと笑いながら問う。肯定が返り、知っているのかと聞かれて『知り合いの知り合いってだけさ』と彼は答えた。

そこに空が帰って来る。頭を洗い、珈琲塗れになった上着を右脇に抱えた姿で。
それを見て、絶の表情が一瞬変わった。飄々としたそれまでの笑顔を吹き消し、まるで刀の様に鋭い目付きに。

「……おっと、急がないとまた望が宙を舞う事になるな。じゃあ三人とも、俺はこれで」

だがそれも一瞬。また笑顔を浮かべながらそう言い、手を振りながら踵を返した。そして、誰にも聞こえない程に小さな声で呟く。

「探るか、『一一』？」

その声に答える者は、当然居なかった。

The 4th Name…"黒衣の剣士"

いつもより閑散とした校舎内。その廊下で、空は物品の確認を行っていた。黙々と目と手を動かす彼の隣で。

「うーん、なかなかに盛大な内容だよなぁ…こりゃ骨が折れるぜ…」

その軽薄者はぶつくさと文句を垂れていた。森信助である。

「…先ずは仕事を熟したらどうだ?遣らなきゃ終わらないんだからな」

「そりゃそうだけどな。…なぁ、巽」

その口調が神妙な物に代わり、空は黙って続きを待つ。

「…もっとさ、クラスメイトと話してみたらどうだ?」

信助が紡ぐのは、空にとっては聞き飽きた台詞。勿論信助からではなく、幼稚園以来通った全ての教育施設の教員からだ。

「…放っとけ」

鋭い視線と共に返ったのはただ一言。言外に『もう喋るな』の意を含んでいる恫喝。

それでも食い下がろうとした信助に、その視線のままで空は歩み寄る。微動だにせず、信助はそれを見詰めていた。

「……俺の分は終わりだ。じゃあな」

その信助にリストを差し出し、立ち去るべく背を向ける。その背に。

「だったら手伝ってくれてもい～だろ～、空く～ん♪」

「ッ何しやがる、止めろ！！離せ気色悪い！！」

信助がふざけて負ぶさった。それを振り落とそうと身をよじるが、信助は面白げに声を上げるだけ。周囲の生暖かい視線が集まるのを感じ、彼は一層躍起になった。

「コラそこー！遊んでるんじゃないのー！！」

そんな空と信助に、雷が落ちた。スパパーン、とそれはもう景気の良い音を立てて。

空は茜色に染まり始め、既に下校時刻は回っている。だが俺と森は先程の件で阿川の叱責を食らっていた。正座させられて既に一時間。肩に大きなハリセンをもたせ掛け、阿川は青筋が立ちそうな程に憤慨していた。

「いい、二人とも！遊んでる暇は無いのよ、ホントにまずいのよ、うちのクラスは！全く、信助はともかく巽くんまで遊んで……！巽くんには信助の歯止め役を期待してるんだからねっ！」

ビシリとそれを突き付けられる。何でも今日登校する際にゴミ捨て場で拾ったらしい。

…拾うなそんなもの……ていうかなんだ、なんか…帯電してないかアレ…？

まァ取り敢えず、今は先に否定しなくてはならない事が在る。

「悪いけど、そんな期待には応えたくない…」
「何だよ～、釣れない事言うなよアッキ～♪うりうり」
「ぐあぁぁっ！？止めろこの阿呆ッ！そして誰がアッキーだッ！！」

その台詞に反応した隣の阿呆が、へらへら笑いながら脚を突いてくる。先述の通り既に正座してから一時間以上が経過している。痺れきったそこへの刺激に、俺は堪らず身をよじった。

「…そう、まだ解らない訳ねぇ…？良いわよ、解るまで説教してあげるから！」
「「すいませんっ！！？」」

不本意にも、森と同調してしまう。今の阿川にはそうなってしまう程の威圧感が在る。
結局、阿川の小言と小突きは五時を回るまで続いたのだった。

いつも通りの挨拶を交わしてコンビニを出る。そしていつも通りに溜息を落として、弁当と缶珈琲の入った袋を揺らす。
いつもと同じ行動だが、いつもと違うモノがある。慣れでポケットを探ろうとして気付いた。今日は私服ではなく制服だった事に。

買ったばかりの飴の袋を破く。どうするか迷ったが、残りは取り敢えず上着のポケットに突っ込んでおく。
…あの後俺は遅刻寸前でタイムカードを押した。当然着替える暇など無く。同僚からは嫌な顔をされたが、店長は『巽さんがギリギリなんて、珍しい事もあるねぇ』と笑っていたが。というかあの人は笑っている所しか見た事が無い気がする。

「…ん？」

目の前の四ツ辻の向こうに、何かが息を詰めている。見えたのではなく、そう感じた。
目を凝らしてみるが、勿論何も見えない。だが、居る。壁の向こうから張り付く様な視線を感じられる。
思い出すあの恐怖。黒い獣の息遣いが蘇った——その刹那。

「——ッ!?!?!?!」

心臓を鷲掴みにされた様な衝撃が走る。どうやって息をしていたかも思い出せなく成る程に。
間髪入れずに脇道に逸れる。あの犬が無差別の通り魔とするなら、これは明らかな対象を持つ連続殺人鬼のそれだ。
走る。ただ速く、疾く。一瞬たりとも気を抜かず、ただ前方に向かって。振り向けば取り返しの付かない事になる。それだけは理解出来る。

「くはッ、ハッ、ハッ！」

そして、大通りへと抜けた。夜間帯とはいえ人通りはそれなりにある。振り向いてみても、もうあの圧迫感と視線は消えていた。

「…畜生」

呟き、冷や汗を塗れた全身をわななかせながら。俺は何処かに捨ててしまった弁当を買い直すべくコンビニを目指した。

――自動ドアを潜った少年を見送って、その男は自然な足取りで路地の陰に立った。欧米式の軍服に似た装束、腰に翻るマント。それに隠す様に挿された、飾り気の無い太刀。
そのいずれもが黒に統一されており、ともすれば宵闇に溶け込んでしまいそうだ。

「…やれやれ、驚いたな。まさか気付かれるとは思わなかった」

男は誰にも聞こえない程に、小さく呟く。

「はい。正直に言えば意外です。どう見てもミニオン並に低位なのですが」

それに答える声があった。だが、男の周囲に人影はない。怜悧な口調のその声に全く驚く事も無く、『見くびっていたようだ』と告げた。

「気に病む事は無いかと。あの程度では、どの道手駒にも脅威にも成り得ません」

慰めにも聞こえる言葉に、男は肩を竦めて自嘲する。

――偶然を装って接触するつもりだったのだが、驚く程鋭敏な感知だった。そしてその逃げ足の速さときたら。この自分が、ほんの一瞬とはいえ出し抜かれたのだ。
男は笑った。笑って、つい『喚んで』しまった刀を握り締めた。

「そうだな。思わず――……殺してしまいそうになるくらいに、な…」

冷酷な眼差しを、蛍光灯に照らされながら雑誌の立ち読みに興じる人物に向ける。と、またも何か感じたのか、少年はあろう事か男の居る方に視線を向けた。

「――まぁいいさ。覚醒すらしていない転生体など、今は放っておこう」

男の声は、その少年の入ったコンビニの屋根の上で冴えた空気を震わせる。一瞬という言葉よりも短い間に、そこまで音も無く移動していた。月光に照らされる、銀灰色の長髪を一本に纏めた美形の顔立ち。切れ長の青い瞳。

「了解しました。では、今宵は如何なさいますか」

その肩に何かが乗っている。それが、先程から男が会話していた存在。白銀の髪と紅の瞳を持つ小さな少女。

「とにかく、今は目障りな犬どもを始末するとしよう。最低限は仕事をしなければ、目を付けられかねん」

「そうですね。ただでさえ監視付きですし、これ以上の枷は遠慮したいですから」

男は達観した笑みを見せた。諦観とも取れる静かな笑顔。眉根を寄せて言うや、肩に乗る相方はスッと立ち上がり空中を舞う。その姿はまるで、羽を持たない妖精か天使。

「――往くぞ、ナナシ」

「――はい、マスター・ゼツ」

言葉の響いた直後、二人の姿は掻き消えた。後にはただ、風が啼く

のみだった……

The 5th Name…"幽月"

果てしなく遠い闇に充たされたその世界に、二つの『光』があった。

「…さて、準備完了ね。それじゃあ始めるとしましょうか」

一つは女。アラビア圏の踊り娘の様な、露出の多い服装。翡翠細工の様に美しい、碧のショートヘアと揃いの瞳。

「了解した」

そしてもう一つは男。朱いマントと覆面を纏った、武士を思わせる筋骨隆々の偉丈夫。その狼の様に獰猛な眼光。

「「我らこそ、この世に『光をもたらすもの』――」」

――その見詰める先は、朝陽を浴びる物部学園――

――目覚めた時、彼の気分は最悪だった。キリキリと差し込まれる様な鋭い頭痛に高い熱。吐き気と目眩。

だが、彼に休むという選択肢はない。今日はただ準備に当てられているだけの休日だと言うのに、だ。

「大丈夫、巽君？家まで送っていきましょうか？」

「…大丈夫です。ご心配をお掛けしてすいません、椿先生」

心配げに付き添う青みがかった長髪の女性――担任の『椿早苗「つばき　さなえ」』に断りを入れ、彼はゆっくりと昇降口を出た。本当にゆっくりと、まるで何かを待ち侘びる様に。

「ッ！？」

そこで、彼は本当に些細な石ころに躓きよろける。何とか踏ん張り堪えた――刹那、激震が世界を襲った。
それに今度は完全に転び、仰向けに天を仰ぐ。煌々と満月の煌めく夜天を。

そして、その頭上に影が立つ。幽鬼の如く立つ、黒い狗。あの日、彼を襲ったあの狗だ。その姿が揺らぐ。揺らぎ、次第に崩れ…やがて、女の姿に変わった。狗の体毛と同じ漆黒の髪を後ろで纏めた、まるで人形の様に整った美しい顔立ち体つきの女。
飾り気の少ない、まるで軍装の様な衣装は、日本では見かける事の無い異質なモノ。

だが彼が注目したのはそこではない。その手に提げた一振りの刀。その刀をゆらりと抜き放ち、女は何の躊躇も無く寝転ぶ空に向けて振り下ろした。

「――なッ！？」

すんでの所で体を転がし、白刃を辛うじて躱す。刃は火花を散らして、易々とコンクリートを斬り欠いた。
ふらつく身体を何とか立ち上がらせながら、彼は女を見遣る。そして今更気付いた。一人ではない。青い髪、緑の髪、赤い髪、黒い髪。数十人にも上る色とりどりの女達が校庭にひしめいている。
路面を斬り欠いた女だけが、ゆっくりと彼を見つめた。

それに、彼は凍りついた。ただ虚ろな黒い穴の様な瞳に。
そのまま女は無造作に近寄り――刀を横薙ぎに振りかぶった。

「逃げろーーーーッ！そいつは危険だッ！」
「ッ！」

その声が木霊した時、彼の身を縛っていた戒めが解けた。僅かに躯が倒れた事で、寸分違わずその頚を狙いすましていた一太刀が逸れる。彼の目の前を閃きが走り、その巻き起こした風圧に背中から勢い良く植え込みに倒れ込む。

「ぐ…糞……！」

枝が折れ、葉がちぎれた。背に感じる痛みと不快な額の熱に、彼は悪態を漏らす。
左手を額にやると、その手は真っ赤に血塗れていた。

そして見える、満月を背に立つ女。その瞳には何の情動も無い…――いや、ある。その濁りきった双眸には、狗の姿をしていた頃と同じ。生命を奪う事への渇望を湛えていた。
刀の刃を天に向けて刺突の構えを取る。その狙いは眉間。文字通り止めを刺そうとしている。

「…熱い……！」

彼は呻く。額ではなく、左腕の熱さに。

『…解き放て……』

その心の奥に声が響く。聞き覚えのある声。

『解き放て、『オレ』の神の名を！！』

突き出された切っ先が迫って来る。命を奪う喜悦を見せ始めた女の顔が垣間見える。時間の流れが、やけに遅い――！！

ザス、と。刀は地面を突き通した。やがて、その刃を伝って鮮血が土に滴る。

「…ふっ、ふふ……」

声が木霊する。低く地を這う様な、重苦しい笑い声。
それが俺の声だと、今更ながら気付く。

「ぐふっ、が、フ…！！」

女の口から血が零れる。女の振るった太刀が俺の頬を掠めただけなのに対し、その鳩尾からは刃が突き出ていた。夜の闇が結集した様な、昏い刃。
その刃が、身の内に沈み込んでいく。その苦痛に女は意識を飛ばし、ガクリとうなだれた。うなだれて、笑った。

「…御機嫌どすなぁ、判らん事もありんせんけどぉ」

ゆっくりと上がった顔。その顔付きが、変わっている。先程までの無表情が嘘の様な、妖艶な流し目。

「…随分ゆっくりした登場だったな。契約者を見殺しにする気か？」

「お待たせしましたなぁ、堪忍しとくんなましぃ。お加減は如何でござりんすかぁ？」

ころころと笑うその甘ったるい雰囲気は間違いなく、いつか夢の中で出会ったあの女。胸の傷口から昏い霧が漏れ出、彼女の身体を覆う。

それはやがて『ミニオン』の戦闘服を、黒い小袖の様な着物に変えた。

同時に自身の髪に両手を伸ばしてそれを解く。サラリと艶やかな、濡れ羽烏色の髪が流れた。

「…いい気分だ。まるで極上の酒精に溺れている様な…」

心地好い、だというのに清々しく透き通った心。安っぽいヒューマニズムなど捨て去った様に、心が軽い。

「それはよぅござんした…。お気に召した様で、わっちも安心しましたわぁ」

女は小太刀の血曇りを懐紙で拭い、その紙を放る。風に舞い消えていくそれを見送ると、突き立ったままの刀に映った俺自身と目が合った。

血に塗れながらも恍惚に歪んだ顔と。

「それ、わっちが貰ってもええどすかぁ？」

掌を頬に添え、うっとりと。大好物を目の前にした様な視線を向ける女。いや、文字通りに『大好物』か。

「好きにしろ。それが契約だ」

「お～きにぃ」

袖で血を拭いながら言う。言うや、女は刀を引き抜く。途端にブルリと、ミニオンの刀は断末魔の如く震えた。

それに舌舐め刷りする女の、まるで獲物を嬲る毒蛇の如き酷薄な眼差し。ならば、震える刃に添えられた昏い小太刀は猛毒の牙。

「くふふ…いっただきま～すぅ」

哀れな獲物は刀身の煌めきを奪い取られる。月光に煌めいていた刃は漆黒に染められ、朽ち果てる様にボロボロと崩れていった。

「舞台は整った…後は俺の役者次第、か」

その様子を無感動に見届け、左腕を星天に座す満月に向けて伸ばす。捲れた袖から覗く腕に、朧な紅い紋様が走っている。その紋様が溶け込めば溶け込む程、無尽蔵の力が湧き出て来る。その心地好さに浸っていた俺の耳に、凛々しい声が響いた。

「……皆には、指一本触れさせないからっ！」

見上げた先、校舎の屋上に少女の姿がある。紅い長髪に白い羽飾りを着けた、輝く剣と魔法陣の如き盾を備えた少女。その身に纏う白を基調とした装束はこの学園の制服に似ているが、神剣の効果か若干アレンジが加えられている。

それが、跳躍した。普通なら自殺以外の何でもない高さ。だが今の俺なら理解できる。あの程度の高さで『永遠神剣』の主が死ねる筈が無い例え頭から打ち付けられても打撲で済む。

事実、少女は平然と校庭に降り立った。その勢いのままに、輝く剣を振るう。その剣から放たれた閃光がミニオン達を捉え貫き、消滅

させた。

「あれまぁ、派手好きなお嬢はんどすなぁ…」

呆れた様な、見下す様な言い方をする和装の女。

…あれは、斑鳩生徒会長か。まさかあの女も神剣士だったとは。どうやら注意する対象が増えた様だ。

【そうどすなぁ、気ぃ付けなあきまへんぇ？】

心の内に響いた声に思考を中断する。勤めて冷静に『何だ』と応じる。

【くふふ、精神結合くらいでそないに驚かんでもぉ】

だが、女にはそんな機微すらも筒抜けらしい。耳元で睦言を囁く様な口調に、不快さもあらわな視線を向ける。それを軽く受け流してこちらに流し目を向けながら艶然と微笑む。あまつさえ、左手に持った扇子で自身を扇ぎ始める始末だ。

（便利な事だな、ならとっとと俺の考え通りに動け）

悲鳴と怒号の飛び交う中、悠然と髪を靡かせる女に苛立ちを感じながら命令を告げる。女はパン、と小気味良い音を立てて扇子を閉じ、唐突に慇懃な態度に変わる。

【あ～い、わっちは『神喰らい』たる『永遠神銃』【無銘】が象徴…『幽（かす）かな月』とかいてユヅキと詠みあんす。あんじょう宜しゅうに、わっちの旦那はん】

恭しく頭を垂れ、気取った所作でかしづく女ー幽月。その差し出した拳銃を左手で掴み取り番えると、胸に押し当てて目を閉じる。

（……【無銘】…『神喰らいの神銃』、か）

その無明の闇の中で、伏流をイメージする。力の流れを埋没させ、気配を絶つ為に。それが可能である事は解っている。

だが直ぐに、闇が消える。校庭を埋め尽くさんばかりのミニオンを向こうに回して大立ち回りを見せている斑鳩会長。それを見遣る幽月の視界が流れ込み、俺の視覚に混乱をきたす。

ー糞、鬱陶しい！苛立ち紛れに、強引に精神結合を断ち切る。ブツリと映像が途切れ、闇が帰ってきた。

「あん！もぉ…」旦那はん、乱暴過ぎますわぁ…

闇の中に響く不満げな声を無視して、今度こそ精神統一しそれを完成させた。これで俺の存在は他の神剣に気取られる事は先ず無い。気配を隠すのでは無く埋没させる方式。ひとまずは安心だろう。

だが、ただの隠蔽である以上慢心は出来ない。所詮は弱者の足掻き。強者を討ち倒すには細心の注意を払い完璧を推敲し、一点の瑕疵も無い完全な遂行を成し遂げる以外には無い。

そう、不可能を可能にするしか無いのだ。

「さて、始めるとするか」

ーその機会が今、漸く廻ってきたのだ。永い時流の果てに！

決意と共に目を開く。何度生まれ替わり、死に替わった事か。永遠とも思われた歳月が、その地獄の日々が、経験と共に余す所無く受け継がれて来る。気高い月光を浴びる程、血液が沸騰した様に全身

を駆け巡る。

「よしなにぃ」

笑みつつ呟いて、幽月は陽炎の様に消えた。だがその気配は確かに掌の【無銘】で感じられる。

グッと脚を引き付け、その勢いを反動に勢い良く立ち上がる。背に付いた土埃を払い、脇目も振らず校舎の死角に走り出す。非常用の通用口がある、そこへと。

廊下に走り込んだ空は、内部にも既に幾つかミニオンの気配がある事に気付く。幾ら沙月が押し止めているとは言え、数が数だ。防ぎきれるモノでは無いだろう。

見付かっても面倒だと、足を止めた。

「ーーッ!!?」

刹那、倒れ込みそうになる脚を踏ん張って壁に手をつく。

『ーー目覚めた、奴が目覚めた!殺せ、殺せ殺せッ!!』

全身を苦痛にも似た激情が駆け巡る。怨敵が目覚めたと、彼の中の神の名が沸騰しているのだ。

「…煩い、黙れッ!解っている…解っているさ…」

その手を胸に当てる。ペンダントと…同じチェーンに通したお守り。

それを感じて、彼は少しだけ冷静さを取り戻す。

その歩みは牛歩。だが、歩みは止めない。もとより彼にはその選択

肢はない。歩み続けると約束したのだから。

【旦那はん！】

「ちッ！」

漸く階段に差し掛かり、その一段目に脚を掛けた時、幽月の鋭い声が響いた。窓を突き破り飛び込んで来る赤と緑のミニオンと鉢合わせてしまう。

苦痛に意識を取られ過ぎていたらしい。

「一一丁度いい。『神銃』、お前のチカラを試すとするか」

二体のミニオンに薄く哂いかけながら、彼は左手の親指で『撃鉄』を熾(お)こす。その銃口をミニオンに向ける。その武器が何かは知らずとも、二体は身構えた。

「さぁ一一征くぞ【無銘】！！開幕の音を響かせろッ！！」

神世以来となるその力の昂ぶり。掛け声と共に、『引鉄』を引いた一一！！

一一カキン

「「「……」」」

静まり返った廊下に響く、乾いた音。撃鉄が墜ちる音だ。随分ショボい開幕の音。

一一カキン、カキン

それだけが連続で響く。
衝き付けた姿勢のまま、彼は何度も撃鉄を熾して引鉄を引いた。

――カキンカキンカキンカキンカキン……
――チャキ!!

「待った!ちょっと待った!今責任者喚びますから!!」

揃って神剣を構えたミニオンに向かい、両手を上げて制止の言葉を掛ける。
彼女らはそれに目を見合わせて、何か視線で語らい…剣を降ろした。
話の解るミニオンらしい。

(オイィィ!どういう事だテメェェェェッ!!)
【…はい?どういう事ってどういう事どすのん?】

必死の形相で拳銃を睨みつけ、彼は血管が切れんばかりに思考した。
だがそれに対する声は、何ともあっけらかんとしている。

(フッザけんな!?何だコレ!!)
【……旦那はん、何を言うてはりますのん。【無銘】は拳銃どすぇ?】
(見りゃ解るわ!!!俺が言ってんのは弾丸だよダ・ン・ガ・ン!!!!弾はどうした弾は?!アン!?出せ!今すぐ出せ!!)

その鬼気迫る呼び掛けにも関わらず、少し間を置いてから幽月は――『Ｈｕｍｍ…』とわざとらしい溜息を落とした。空の脳裏には、フランクに肩を竦める幽月の姿がイメージとして流し込まれている事だろう。

【旦那はん…聞いとりましたん？『拳銃』や言うとりますんえ？】

その一言に、彼は思考をフル回転させる。そして導き出した答えに…目眩がした。

（…詰まりはあれか。あくまでも『拳銃』なだけで、『銃弾』じゃねぇッて事か？）

【御明察ぅ、さっすが旦那はん♪いやぁ、御理解が早ぅて助かりますぅ♪】

プルプルと彼の両手と頬が震えている。その凄まじい怒りに。

「ーーフザけやがれこのカラ銃ゥゥゥッ！！なんて使えねェ奴だ！！クーリングオフさせろォォッ！！」

その激情に任せ、ガツーーンと床に叩き付ける。それは一度バウンドして床を滑り、壁にぶつかって止まった。

【うわーーん、旦那はんが暴力振るったー！！しゃあないやありんせんのーー！！わっちは弾丸創るんに他の神剣が必要なんどすからぁ！！】

それがスコーーンと物凄い勢いで返ってきた。空の顔面に。

「先に言えよテメェェッ！！！俺が何度カチカチやったと思ってんだ！！ライターじゃねェんだぞ！！もしかして銃口から火が出たらどうしようかと思ったって言うかむしろ俺の顔から火が出そうになったわ！！！」

【火ぃなら幾らでも出したりますわいな！！なんせ『燧石式』どす

からぁ〜〜！！】

「煩せェェェッ！！！誰が上手い事言えッつったんーー」

顔面に圧し付いて来るそれを掴み直し、少し顔から離して口論の構えをとった。その時だったーー

ーービシュオオオッ！！

「【ーー！！？」】

その僅かな隙間を、針の穴を通す正確さで何かが駆け抜けていく。壁を砕いて突き刺さったソレは壱本の槍。

そしてーー目が合った。この世界では有り得ない程に鮮やかな緑色の髪と瞳を持った…神剣を振る為だけの存在、『神剣の使徒（ミニオン）』と。

緑のミニオンは投擲した自身の神剣である槍の柄を掴むと、壁を引き裂きながら空の顔面に向けて振るう。

それを尻餅を衝きながら屈んで避け、こけつまろびつ距離をとる。粉塵が舞い掛かり、それを吸い込んで咳込んだ。

「ち、堪え性の無いこって…」

「ゲホ、ここまで待ってくれただけで奇跡だっての！！」

と、そこにぶすくれた幽月が現れる。その手には弐本の小太刀。先程彼女が遣ったあの小太刀だ。

視線の先には槍を構えた緑と双剣を構えた赤がいる。

「糞、仕様がねぇ…俺は赤、お前は緑ーー」

【無銘】をベルトの背側に挿して差し出した左手。そこに重みが乗

る。

「……おい」

重みが二つ。弐本とも彼の掌に置かれている。それを二度見した後、彼は幽月に目を向ける。
その少年の両肩に、彼女の手が置かれた。

「ガンバ、旦那はん♪弾の為に命(たま)とってきてくんなまし～♪」

「……」

ぽんぽんと二回程叩き、ビシッと親指を立てながらウィンク。その笑顔のままで掻き消えた。後に残るは弐本の小太刀を持ったまま立ち尽くす空と、じりじりと歩み寄る赤と緑のミニオン。

「……クッ、ククク……ははははッ！！！！」

と、空は笑い始めた。笑いながら、右手で弐本を引き抜く。

「…殺す……！この窮地を潜り抜けたら先ず、テメェの脳天に風穴開けてやらァァァッ！！！！！！」

漆黒の鞘から解き放たれた刃は、闇晦ましの昏い刃と銀燐の鏡の刃。その鞘をポケットに押し込み、空は自棄糞で弐刀を構えた。

ーーブン、ビュン、シュッ！！ビュッ！！ブォン！！

「クォオォォッ！！？！！」

突風の様に繰り出される刺突と、合間に薙がれる双剣。
空はそれを、受ける事すら出来ずにただただ躱す。どこに逃げてもミニオンしか居ないというのに、じりじりと何の展望も無い後退を繰り返す。

（――畜生め、速い、速過ぎる。俺の眼じゃ軌道を見極めるだけで精一杯だ！だってのに手に入れたチカラがコレ！？フザけやがって、第一ちっとも身体強化が感じられねェ！！どうなってんだ！）

時深の訓練で鍛えられてはいる躯と前世の記憶から身の熟し方を引き出す事で、何とか死線を行ったり来たりしながら呼び掛ける。

「……無視かい！！虚仮にしやがってあの女ァ！」

だがそれに返るモノはない。神剣の剣撃を辛うじて避けつつ、彼は己の不甲斐無さを呪う。

――俺はこんな人形どもに殺される為にこのチカラを掴んだのか？違う！俺は俺の悲願の成就の為にこれを取った！だとすれば…俺に足りないのは俺自身、この異空自身の強さだ！！

「上等、なら遣ってやる…！俺自身のチカラで、テメェらを踏み越える！！」

決意を固める。そう、今の彼は曲がりなりにも『神を殺すチカラ』を有する遣い手。

――ならば、俺はコイツらに太刀向かえる。勝つ事なんて考えなくていい。負けない事に全力を尽くせ！生き残る事、それが俺の戦いだ！！

左の銀鏡の小太刀を振るう。緑の風の障壁に威力は軽く潰え、槍に止められてしまう。

そこに連撃、右の闇昏の小太刀が叩き込まれる。一本しか無い槍ではそれを止められず、緑は飛びのいて昏い剣閃を逃れた。だが、僅かに…その腕に刀創を負った。

「紅蓮よ、その力を示せ……」

紡がれる神言と共に、赤の足元に広がる魔法陣。それこそ、神剣の行使する奇跡である『神剣魔法（ディバインフォース）』。

「――『ファイアボルト』」

現れ出る三つの火炎弾。

――心配無い。これこそ、この『神喰らい』の本領を発揮する機会――！！

「――喰らえェェェッ！！！」

彼は、彼の額、右肩、心臓を狙うその炎の弾丸に向けて――その昏い小太刀を振り抜いた――！！

The 6th Name…"戦乙女"

凍てつく風の後、赤のミニオンが目を見開く。その瞬間、彼女らの背後から光が走った。

「――ガ……あ…」

突き立った光の槍に苦悶の断末魔を漏らす赤ミニオン。それに気を取られ、一瞬緑ミニオンが視線を逸らした。

逸らしたその目前に光る剣――!!

消滅していくミニオンを、僅かに得た命素（マナ）を感じつつ、幽月は満足げに主の火照った体温を感じていた。

――運の良い男だ。何せ今のこの男は脆弱。実力も経験も不足しており、正面きっての戦いではミニオンにすら敵うまい。もし今相手にしなければならなかったのが直接戦闘に優れる青や黒のミニオンだったならば、どうなっていただろう。本当に運の良い男だ。

だが――それも強者の条件。自らが生き残る状況を引き寄せる、強い因果律を持つ事。それもまた実力の内だ。

その点では合格。弱者たる己を否定し、新たな因果を引き寄せた。

まぁどのみち、この程度で死ぬ様な契約者ならば相応しくない。

この――【無銘】には。

二体のミニオンを纏めて消滅させ、彼女はその少年に眼を向けた。
た。紅い髪を靡かせる白い装束の少女。斑鳩沙月だ。その手には光
る剣が握られていたが、すぐに解けて消える。

「一一あ…斑鳩、会長……」

空は小太刀を構えた姿勢のままでそれに答えた。迫っていた炎の弾
丸は、目の前の少女の紡いだ対抗魔法『エナジーリーク』によって
打ち消されている。

「……沙月殿。急がれた方が」

その背後に立つ巨漢。人馬の騎士が提言する。それに彼女は頷いた。

「そうね、急ぎましょう。望くんの覚醒が進んでるし…それに、裏
切り者が居るみたいだしね」

鋭い眼を天井に向ける沙月。その眼が一一空に落ちた。その時には
もう、笑顔を浮かべていた。
底冷えのするような笑顔を。

「だから取り敢えず一一問答無用で気絶して貰うわね。『光をもた
らすもの』の尖兵さん？」
「一一はい？」

聞いた事の無い単語に首を傾げたその空間を、光が薙いだ。髪が数
本舞い落ちる。

「貴方達のもたらす、まやかしの光…『光輝のサツキ』の輝きが掻
き消してあげるわ！！」

再び戦闘態勢を整えた輝ける少女――神剣士『光輝のサツキ』は、その光の剣の切っ先を眼前で呆気に取られる空へと向けた。

振り抜かれた光の剣を、彼はすんでのところで回避した。だが続き、二ノ太刀三ノ太刀が繰り出される。

「…って、ちょ、ちょっと?!何すんですかァァッ!危なッ!」
「なかなか素早いじゃないッ!流石に鍛えられてるわねッ!」

時深からよく竹刀を持たされていた彼は、殊『剣』に対しては見切りが鍛えられている。

とは言え、相手は本物の『永遠神剣』を持つ神剣士。しかも何度も実戦をくぐり抜けてきた猛者。
所詮は道場剣の付け焼き刃である彼には、太刀向かうだけで精一杯だ。

――ギィィィン!

「――いい加減に…しろォォォッ!!」
「……やるわね。やっぱりミニオンみたいにはいかない、か」

咄嗟に交差させた小太刀に挟まれる形で、沙月の剣が止められた。口で言えばそれだけだが、先述の通り彼には身体補助が無い。華奢な沙月とは言え神剣士。その腕力は、片手で空を圧倒している。

「……ッ!俺はその、『光をもたらすもの』とか言うのじゃないですよッ!」

「はいはい、容疑者は皆そう言うのよっ！」

刹那、彼女の左腕が閃いた。その魔法陣の如き盾が、彼の身を打つ。
逆らわず吹き飛んで、空は距離を一一

「止めよっ！！ケイロンっ！」
「承知ッ！！」

と、彼女の光の剣と盾が解けた。そしてその従者である人馬の騎士、
『ケンタウルス＝ケイロン』の持つ神槍『ハイデアの槍』に青い精霊光（オーラフォトン）が纏わり付く。

「一一『マーシレススパイク』！！」

その槍が衝き出された。青い精霊光の槍撃は、距離を取る為に跳んだ空中では最早躱せない一一！！

「一一ッ！！？」

一一躱せないのなら、躱わさなければいい。そう、今度こそ一一

「一一『喰らえ』、【誰彼（たそがれ）】エェェッ！！」

今度こそ空は、その右手の昏い小太刀を振り抜いた一一……

ケイロンは眼を見開いた。それは彼の持つ最高の槍技。チカラを沈静する青マナを纏い、あらゆる術を術者ごと撃ち抜く荒業。今まで幾多の敵をそうして屠ってきた一撃。
それが一一掻き消えた。

「何…だと」

そして気付く。呆気に取られている内に階段を駆け登って行った二人に。そして槍の穂先に立つ、一人の女に。

「貴様は一一！！」

最後に、その手に握られた銀鏡の小太刀に。

「くふふ…お初にお目にかかりやすぅ。わっちは幽月…『幽かな月』と書いてユヅキと詠みますぅ」

「……あの男の『神獣』か」

「『神獣』？…ぷっ…くふふ…、確かに『神銃』どすけどなぁ…」

全く発音は同じ。だから、ケイロンは気付かなかった。彼女が持っているのなら、元々の持ち主は今左手が空いている。それがどういう事か一一

階段を三歩で上りきり、空は振り返る。刹那、目が合った。紅い髪を靡かせる、戦乙女と。

「一一がフッ！？」

その脚が腹に減り込む。余りの威力に、彼は残りの段をすっ飛ばして滑り出た。

「ド派手な登場だな。誰かと思えば、巽か？」

「グ、おォォォ……？」

腹を押さえてくの字に折れ曲がる空の目に、人影が映る。初め彼はそれが沙月だと思った。

だが、それは黒衣の少年。銀色の髪を持つその少年は――暁絶。

そして、双子剣を携えた望と、そのすぐ側に居る希美。床に倒れた信助と美里。

「……やっぱり貴方だったのね、暁君……いいえ、『暁天のゼツ』っ！！」

勢い良く飛び出た沙月は、たった今蹴り飛ばした空など眼中に無く銀髪の少年を殺意の篭った眼差しで捉えた。

「遅かったな、斑鳩？まぁそういう事だ。という訳で望――」

そんな事などお構い無し。彼は彼の親友であるはずの望に笑い掛けながら、腰の刀を抜き放つ。

「悪いんだが――死んでもらえるか、『黎明のノゾム』？」

「絶――なんで、なんでだよ…」

「止めて、もう止めてよ暁くんっ！どうして暁くんが…！」

冷たい一言。望と希美はそれに、信じられないといった風に答えた。それもそのはず、彼らは仲良しとして知られていたのだ。その彼らが、ここで今、互いに武器を構えているのだ。あまつさえ殺気すら発して。

最早一触即発。それぞれの持つ『永遠神剣』に力が篭められる。

そこに――

「動くなァァッ！！！！」

「「「「――――っ！？？？！」」」」

怒声が響き渡る。何時しか起き上がった空の声。左手でビシリと、睨み合う三人を指差す。

「…あ、空…？」

「……ほぅ、そんな神剣が在るとは…」

その左手に番えられた壱挺の拳銃。指差す人差し指はそのままで、横倒した引鉄に中指を掛ける。

「あれって……拳銃…？」

「拳銃って…貴方の神剣は小太刀じゃ…」

眼を円くする望達になどお構い無し。すっかり頭に血が上った彼は激情に任せて叫ぶ。その眼は鋭く見開かれ、周囲を圧倒せんばかりの威圧を放つ。

「…さんざっぱら人を無視してくれやがって……こうなりゃ自棄だ！」

カキリと撃鉄を熾こす。その姿勢のまま、彼は叫んだ。

「永遠神銃【無銘】が射手、巽空…『無銘のタツミ』！――撃ち貫くッ！！！」

引鉄が引かれる。それは先程と同じく、弾丸など篭められてはいな

い。
だが、その銃口に青い光が満ちる。それは――確かにケイロンの『マーシレススパイク』――！！
――ダァァァァン！！！！！！！
――それが彼の物語の始まり。これより始まる『無銘の唄』の開幕を告げる鐘の音だった――
「……ック…！」
反動で尻餅を衝いていた空は、軋む左腕を庇って呻く。
――これこそ『神喰らい』たるこの『神銃』の本領の一つ。神剣魔法の吸収と放出。
「――チッ…まさかこんな伏兵が居たとはな…俺もまだまだ甘いって事か」
狙われていた絶は、その弾丸…いや、最早『砲弾』を事も無げに避けた。替わり撃ち抜かれたのは、廊下の端。円形に大きく穴が空いている。
刀を納めて忌々しげに呟く。と――またも銃口が向けられている事に気付いた。
「随分と用意がいいじゃないか、斑鳩？俺にまで内緒で『旅団』から呼び寄せていたのか？」

それに警戒しつつ、彼は誰何する。

「へ？何言ってるのよ、コイツは貴方が呼び寄せた光をもたらすものの尖兵じゃ…」

「だから違うって言ってんでしょうがッ！！俺は間違いなくこの世界出身の人間ですよッ」

額に『怒』のマークを浮かべつつ、空が叫ぶ。その間も衝き付けた銃と視線は動かさない。

「フ、悪いがそこまで仕込む時間は無くてね…というより斑鳩、初対面じゃ無いはずだろ？」

納刀したままで、腰を低く落とす。居合の構え。

「おっと、動くな暁。威力は見たはずだよな？」

「ああ、よく見せて貰ったよ巽。直線にしか飛ばないのをな」

「ーーチッ」

今度忌々しげに舌打ったのは、空。早速弱点を看破された事に。

「絶！もう止めてくれ！なんで俺達が戦わなきゃならないんだよ！」

「理由が欲しいか？ならそうだな…『俺がお前を殺そうとするから』でいいだろ」

「絶ッ！！」

望の悲痛な叫び。そして一一

「……ない」

「……希美……？」

俯き、呟く希美。そして――

「甘いなッ！！」

「なッ、グゥッ！？！」

「しまっ――かは……！」

それに気を取られた空と沙月の一瞬の隙を衝いて刀を鞘疾(さやばし)らせた絶が、一ノ太刀で【無銘】を弾き飛ばし、鞘でその胸を打った。強制的に息を吐かされ、彼は呼吸法さえも思い出せずに失神する。それとほぼ同時に、二ノ太刀が沙月に向けて振り下ろされた。その威力を受け切れず、彼女は盾ごと吹き飛ばされて壁に打ちつけられる。そのままずるずると崩れ落ちた。

その速さはまるで光だった。

そして――真横に振り抜かれる三ノ太刀が、望へと迫った。

「させない…！」

――ギィィィン！！！

「――な…！」

「――希、美……！」

それを受け止めたのは、希美。その手に握られた、鎌状の刃が付いた槍。

「望ちゃんを――殺させない！！！うぁぁぁぁっ！！！」

その叫びと共に、激震が走る。地を揺るがすそれに、絶は仕上げが終わった事を悟った。
一気に数十mを跳び退がり、空の放った砲弾で空けられた大穴に身を寄せる。

「では――よい旅を」

一度望を見遣り、意味深な言葉を発して。彼はその穴から消えていった。

The Other Name…"悠久の少女"

――虚空に浮かぶその巨大な樹の前で、青銀の長髪と瞳を持つ少女は呟く。
いや、少女と呼ぶ事すら早いかもしれないその幼い容姿。

「――時間樹エト＝カ＝リファ…。此処がパパの生まれた場所なんだね……。」

髪留めの羽飾り…の様なそれが、一度羽ばたく様に動いた。まるで彼女の身体の一部の様に。

「…よーーーっし!!頑張ろうね、ゆーくん!!」

ぐっと拳を握り、声高に叫ぶ。手に持つ鎗の様な剣に向かって話し掛けると、その瞬間彼女の心の内に声が響いた。

【元気一杯だね。…でもあんまり無茶はしない様にしないと、父さんと母さんが心配するよ?】

たしなめる様な声色。それに彼女はぶぅ、と頬を膨らませた。
それもその筈。リーダーからの勅命でこの任務に就く際にも、彼女の両親は『この子にはまだ早い』と諌め続けたのだ。それを突っぱねて彼女は此処に立っている。
だから、相方のその物言いが気に喰わない。同い年なのに自分を子供扱いするのが、どうしても。

「ゆーくんノリ悪すぎ。これはあたしの初任務なんだよっ!もっと『頑張ろー!』とか言ってくれてもいいのにっ!!」

【君は気合入れすぎ。これが初任務なんだから、もっと落ち着いていこうとは思わないのかい？】

ぶつくさと文句を垂れる少女に、ゆーくんと呼ばれた彼（？）は大人な対応を見せた。

そうして彼女らはその樹に向き直る。

未だ遠く、朧げに光る幹を持つその大樹。その内部では幾つもの世界が生まれ、栄枯盛衰の果てに消えている。今こうしている間にも、無数の命が生まれては消えている事だろう。

…時間の頸木（くびき）を逃れる彼女には知る由も無いが。

目を閉じて呼吸を整え、決意を新たにする。そう、此処が始まりとなるのだ。彼女のこれからの物語の。

「一一さぁ、往くよゆーくんっ！！」

目を開く。そこには不安、そして一一希望。それに呼応し、彼もまた声を大にする。

【一一ああ、往こう一一！！？！】

「一一あら、何処に往くの？折角見付けた美味しそうなお嬢さん？」

刹那、二人は身を強張らせた。その声に、その声の主が纏う気配に。無い筈の空気が凍り付いた様に、まるで悪夢の内にもがいている様に、その身を縛する威圧。

それを何とか振り切り、振り向いた。その先に居たのは一一女。

「一一あ、貴女は…！！」

白いヴェールを身に纏う女性……いや、白いヴェール『しか』身に纏っていない、露出過多な真紅の長髪の女性。少女とは対照的な、成熟した大人の女。

【――『最後の聖母』…！！】

彼の声は震えていた。その存在がまさか此処に現れるとは、何と言う不運だろうか。

超越者たる自分達の、遥か先を歩む超越者…それが今、目の前にいる。

「あら、私の事を知ってるの？私はあなたの事は知らないけど」

「あぅ、どうせあたしは無名ですよーだ…」

いじける様な言い方をした少女。だが、その緊張は失われてはいない。むしろ強まった。

先程から相方は黙り込んでいる。自身の有する力を余さず発揮する為に、精神を統一しているのだ。つまり、最初からそうしなければ太刀向かう事も出来ない相手だという事――！！

「ふふ…エト＝カ＝リファを食べる為に来たんだけど…思いがけない所に前菜が居てくれて嬉しいわ。ねぇ、食べちゃってもいい？」

「あ、あたしそういう趣味は無いから遠慮しますっ！」

対して落ち着いた、しかし熱の篭ったその物言いに少女は身を震わせた。色んな意味で身の危険を感じた。

「釣れないわね…でもいいの。――勝手に食べちゃうから」

チャキ、と。女の右手に短刀が握られた。
そう、多寡が短刀。少女の持つ鎗剣とは比べるまでも無く脆弱な外見。

【――来るよッ！準備は良いかいッ！？】
「――もちろんっ！！！」

その多寡が短刀に、彼女らは目に見えて戦慄した。
その短刀が、自分達がどう足掻いても太刀打ち出来る物では無いと、この一瞬で思い知ったからだ。

「――いただきます」

ブン、と女の姿がブレて消える。一瞬の内にその姿を見失う。だが――

「――っ！！」
【間に合えッ！！】

少女は瞬時に踵を返す。理由は単純、『勝てない相手からは逃げる』。ただそれだけの事。
手に持つ鎗剣を投げ出し、それに向かって飛び掛かる。

その足が柄に触れる――直前。空間を引き裂きながらその短刀が振るわれた――！！

そうして『最後の聖母』は、時間樹に飛び込んでいった少女を見送った。不快そうに眉をひそめて、自分の振り下ろしかけた短刀の……『空間を切り裂く』短刀の刃を『握り止めた』その拳を見詰めて

いた。

「…いつも見ているだけの貴方が、どうして今回は『手』を出すのかしら…？」

そして、自分の背後に立っているであろうその男に語りかける。

拳を遡った先には、一人の大男。伸ばし放題の、獅子の如き金髪を持つ大男の――『背中』がある。

「ねぇ――『輪廻の観測者』？」

「……」

大男は首だけを向け、『組んだまま』の左手で丸縁のサングラスを押し上げた。その双眸はサングラスで隠されたままだが――ギョロリと。額の第三の目が、彼女を睨みつけた。

そして『背中より生えた第三の腕』に掴んだ『聖母』の短刀を解放する。その巨大な剛腕には傷一つ無い。

「また、だんまり？貴方も変わらないわね……」

それに『聖母』は慈愛に満ちた笑顔を向ける。

再会を喜んでいる様にも見えるが、それはただ単に『逃した小魚の代わりに鯨が食いついてきた』という歓喜からだ。

「――貴様には貴様の目的が有るのではないか、『最後の聖母』。この時間樹と、その根幹に眠る『虚無』を喰らうという目的が」

と、重厚な声が響いた。それこそが『輪廻の観測者』と呼ばれた彼の言葉。その真意を衝く言葉に、彼女は笑顔を吹き消した。

「……あら、知ってたの？まぁ知ってるわよね…今まで何度も『結末を見てきた』貴方だものね」
「……行くのならば早く行け。もうじき此処には『法皇』が現れるぞ」

『法皇』の名が出た瞬間、『聖母』が眉をひそめる。その刹那、彼女は彼を喰う事を諦めた。その時間は無いと判断した。

「…あの子は嫌いよ。だって、食べさせてくれないんだもの」

その表情には、子供染みた『気に入らない者』への嫌悪が滲んでいた。
手に持つ短刀が消える。と、彼女の背後に巨大な影が現れた。

「最後に聞かせてくれるかしら、『輪廻の観測者』？どうしてあの娘を助けたの？」

その影は『聖母』の直ぐ後ろで動きを止め、彼女の指示を待つ。その僅かな間隙に、彼女の問いが紡がれた。影が動き出すまでの僅かな間に、もう一つ言葉が捩込まれる。

「一一見てみたいだけだ。真なる終焉を。幾星霜輪廻を重ねても納得出来ぬ……この世の終焉を」

それに答える声はない。既に遠く、時間樹に向けて影は進み行く。
主を背に乗せて、目的の地一一時間樹エト＝カ＝リファへと……

そして彼が眼を開いた時、そこは斜陽に包まれた屋上だった。

「あ、旦那はん。お加減はいかがどすかぁ?」

真横から響くその声に、彼は間髪入れず一一ガッと幽月のこめかみにアイアンクローを決めた。

「いだだだっ?!!頭の形変わるうぅぅっ!?」

「テメーよくもぬけぬけと顔出せたな?あ?契約者何度窮地に陥らせりゃ気が済むんだコラァァッ!!?」

バタバタと袖を振る幽月に、空は更に力を篭める。ミシミシと嫌な音がした。

「お、落ち着いてくんなまし旦那はん!せやから此処で旦那はん質問に答えたろ思うて出て来たんどすてぇっ!?」

「…じゃあまず此処は何処だ?本当の物部学園の屋上じゃねェんだろ?」

「御明察、此処は旦那はんのユメの中どすから手を離してくださいだだだ〜〜っ!!?」

彼はようやく手を離した。だが不審げに眉をひそめている。全幅に信頼を置いていないようだ。

「…ユメだぁ?感覚あるぞ。こんなにはっきりとした意識も」

「いちち…それもこの『永遠神銃』【無銘】のチカラのお陰どすわぁ」

頭をさすりつつ、袖口からその拳銃を取り出す。漆黒の梨地に金の装調がなされた、フリントロック。

「…へぇ。まあそのくらいの取り柄がなきゃやってらんねェしな」

「うわ非道ー、大事な大事な【無銘】をそないな風に言うて～！」

バタバタと袖を振り回す幽月を無視して、彼は辺りを見回した。以前と同じ空、空気。物部学園の屋上だった。

「…なるほど、便利だな。此処なら誰からも干渉されずに密談や特訓も出来るな…」

「あ、後者は無理どす」

「……あん？どういう事だ？」

再び繰り出された左手をひらりと避け、彼女は三歩分距離を置いた。

「どうもこうも、旦那はん。ユメの中であのお嬢はんに告白した事有りますぅ？」

「…なるほど、ユメはユメか。ところで、『永遠神銃』っていうあれはどういう事だ？」

ころころと笑い、右手に【無銘】、左手に扇子を持った幽月は自慢げに胸を反らす。

「聞いたとおりどす。この【無銘】はこの宇宙にただ一つきりの『永遠神銃』どすえ？旦那はんはほんまに果報モンどすなぁ」

「はいはい」

返しはコンマ一秒だった。どうせそううそぶいているだけだと彼は断じた。
それに幽月は袖をバタバタと振り回す。

「反応薄っ!?旦那はん、なんどすかその冷ややかな眼はっ!この世に一つどすえっ!ぷれみあむでなんばーわん、元々特別なおんりーわんどすえっ!!」
「はいはい」
「むきーーーっ!!」

と、頭から湯気を吹きそうな程に激昂した幽月が【無銘】を向けた。だが空は動じない。それがまたカラ銃に戻っていると知っているからだ――。

――ドォォォォォン!!!!!

そのすぐ脇の壁に、大穴が空いた。本当にすれすれの位置を、黒い弾丸が駆け抜けていった。

「……おい、いつ弾取り込んだ?あのケイロンとか言うのの奴か?」

パラパラと破片が降る中で、蒼白になった空は問い掛けた。

「入っとりませんわいな!わっちは自分で使うた精霊光を撃ち出しただけぇ!ふつー【無銘】の主は先ずこうやって戦うんどすっ!」
「…なるほどね…ッて、だから先に言えよッ!!それ知ってりゃあんな戦い方しなくても――」

チャキ、と銃口を向けられる。彼は両手を上げて押し黙った。

「あの使い方はあくまでも相手の意表を突く為で、正しい使い方やあらしませんわ。ところが旦那はんときたら…」

「……？俺が何だよ？」

いきなり頭を抱えだした幽月に、怪訝な顔を向ける。と、びしっと彼女はそんな空に指を突き付けた。先程空がとったロックオンポーズの右手版。

「旦那はん、一つお聞きしますぅ。旦那はんてマナ操作できませんやろ？

「はぁ？何言って…あれ？」

一一そう言われて見れば、出来ない。感じる事なら出来たが、操れなかった。前世では問題無く使えたというのに。

「…はぁ。マナの薄い世界にいらしたからか元から素養が無いのかは解りんせんけども、ほんまに仕様の無い…」

呆れ果てた視線を向ける幽月にバツの悪そうな顔を見せる。だがすぐに反撃を試みた。

「いや待てよ、それより何で身体強化が無いんだ？」

「そないなモン、銃の意味を考えたら分かりますやろ？」

【無銘】を降ろして、掛けた中指を基点にくるくる回転させて彼女は告げた。それに空は、左の親指を眉間に宛てて思考する。

「…弱者が、強者を撃ち倒す為のモノだから…か？」

そこでようやく、幽月の表情が和らいだ。どうやら正解らしい。

――だが、だからといって納得出来ないだろう。

厄介なモノと契約したものだ、と。彼はこっそり溜息を落とした。

彼女は【無銘】を下ろして何か呟きながら、パンッと一つ柏手を叩く。すると、撃ち抜かれていた壁が復元された。

「…おい、もしかして…そのチカラの応用で弾丸を創る訳か？」

「逆どすわぁ。弾を創るチカラの応用で、破片から壁を『再製』したんどすぅ」

その言い方にムッとした空だが、この状況では逆らえない。

と、幽月はちらりと何処かに視線を向けて…頬を綻ばせた。

「どないして神剣集めるかしっかり考えといてくださいなっ！宿題どすえっ！」

「おい待てッ！その前にどうやって弾丸創るんだよッ！？やり方教えろォォッ！！」

【無銘】を投げ渡すと、問い掛けに答える事も無く彼女はフェンスを飛び越えて屋上から消えて行った。仕方なく彼は言われた通りにどうやって神剣を集めるか思考し――

「つーかこの世界からはどうやって出りゃいいんだァァッ！！」

一度叫んで、結果…ふて腐れて寝る事にした。

物部学園の中庭、鎮座するトネリコの木。北欧神話においては世界を支えるとされる木。その根本に、女は駆け寄った。まるで恋人との待ち侘びた逢瀬に急ぐかの様に。

「…いやはや、お待たせしましたぁ～」

そして、気軽に声をかける。その根本にドシリと坐った、龍の如き甲冑を纏ったその存在に。

「……」

龍の騎士は、ガントレットに包まれた左手を差し出した。幽月はそれに向けて袖から取り出した何かの破片を差し出す。
それを受け取った彼は、一言だけ呟いた。

「…奴は強かったか？」

低く、巌の如く峻烈な声。バイザーの隙間から覗く鋭い金の瞳。それに心を砕かれないばかりか射竦められもしない彼女は、やはり傑物。

「そりゃもう、このわっちの全力で仕留め損ねましたわぁ」
「…そうか」

対し軽い幽月の声。
それに、龍の騎士は声無く笑う。笑い、左手を差し出した。左手に握られていた一一【無銘】を。

「あの小僧を鍛え上げろ。この我(オレ)に相応しい…『刃』にな」
「あ～い、わっちにど～んとお任せあれ～。『刃皇(はおう)』はん♪」

受け取り、袖に仕舞う。それを見届けた彼は立ち上がる。女性にしては背の高い幽月よりも、頭一つ高い偉丈夫。
そしてふと、黄昏の狭間に在る紅い月を見上げた。

「…さあ、どう出る…『一一』？」

その呟きと共に彼は、懐から一つの『鍵』を取り出した。十五？程の、銀色の鍵。空が持つモノと全く同じソレ。ソレを虚空に衝き立てる。
刹那、その虚空に出現した豪奢な『門』。錆び付いた音を立てるそれを片手で押し開き、中に消えていく。
再度錆びた音を立てて閉じられた『門』は…虚空に溶けていった。

それを見届けて。彼女はにたりと笑う。

「任しときぃや、牢獄の帝皇様…？くふふふふ……！」

その眼は、消えたその騎士を嘲る様に睥睨していた。

The Other Name ?・・・"月下の獅子"

――闇の底に身を沈めていた少女は、ふと天を見上げた。虚空より視線を感じた気がしたのだ。

緑の天蓋に空隙が穿たれ、夜空が覗いている。恐らくは自分が今腰掛けている倒木がそこを覆っていたのだろう。その先に在るのは満月。凛としたその威光は、遠く離れた地上に在って尚圧倒される。

「…佳い月ですね…」

だが、その威光を持ってしても彼女の雰囲気を脅かす事は出来ない。梢の間を抜けて届いた夜風が、彼女の髪を揺らす。金色の、あの月と同じ煌めきを放つ美しい髪。そしてその身に纏う、気高き若獅子の如き凛々しい気配。言うなれば、地上の月だった。

僅かに乱れた髪を手櫛で撫で付け、再び手元のソレを磨く。不織布で磨き上げられるソレは、少女が持つには余りに不釣り合いな黒い大刀。

いや、不釣り合いといえば、総じて不釣り合い。黒い鎧に身を包み、まるで竜巻がのたうち回った後の様に薙ぎ倒された木々に、えぐり取られた地面と砕かれた巨石が骸の様に曝されている場所で平然と剣の手入れを行うなど。常人では有り得ない。

「……」

その背後に、影が立った。その手には鋭い鎌が――いや、腕自体が鎌だ。異形の、闇の獣。

月光を照り返すそれを、獣は少女に向けて突き出し――膝の上に乗

せた。

「あら、貴方も磨いて欲しいのですか？」

驚きもせず、彼女はそれを受け入れた。あまつさえ、その表情には喜色すらある。

「……」

何も言わない闇の獣は、少しだけ照れた様に身を震わした。その様子は主人に擦り寄る仔犬に似ている。余りに似合わないが、故に少女は微笑んだ。健気だ、と。

この影の獣がこんなに甘えるのも珍しい事。誰も居ない今を好機と見たのだろう。

「ふふ、分かりました。次は貴方ですね、アイ――」

刹那、少女が天を見遣る。影の獣もまた、主に倣う。強烈な力の流れを直感で感じ取ったのだろう、厳しい表情だった。

「あれは――」

吹き荒ぶ猛烈な風に、枝葉が鳴いている。そして、見た。呆然と見上げていた。その突風を起こした巨大な――

「天…使……？」

それが、彼女の物語の始まり――

所は生徒会室。そこで空は沙月の詰問を受けていた。
椅子に座った沙月に対し、空は床に正座させられている。そのすぐ脇には彼女の神剣【光輝】の神獣『ケイロン』が槍を突き付けている。

「…なるほどね…つまりはこの襲撃がきっかけで前世に覚醒しちゃった、と」
「はい…ミニオンの攻撃が引き金で…」

包み隠さずに知る全て――あくまで『知る』全て――を告げた空。
一方の沙月は難しい顔をしていた。にわかには信じがたいその話に。

「大体は理解したわ。そうね、そういう事があっても不思議ではないわね…。いきなり襲い掛かったりしてごめんなさい、拓海くん」
「『巽』です。……いえ、お気になさらず」

取り敢えず訂正して、彼は顔を…上げない。この位置関係で顔を上げれば、ケイロンに『問答無用で刺し殺（マーシレススパイク）』される事だろう。
因みに望と希美はまだ保健室だ。額と頬の傷を保健室で希美に治療してもらって夢見心地だった空は、急転直下で地獄に叩き込まれた。

「でも腑に落ちないわね。【無銘】だったっけ？『永遠神銃』なんて聞いた事無いわ。それが本当なら、君は『神剣士』じゃなくて『神銃士』って事？」
「その辺はその、自分も聞いたばかりで何とも…別にこだわりはしませんけど」

額に包帯を巻かれた空は、これまた絆創膏の貼られた右頬を掻きながら茶を濁した。糸目の眉を困った様に八の字にして。
『使い方を知らない』再製のチカラについては話していない。

「…『黒の小太刀で斬った神剣魔法を取り込んで、取り込んだ神剣魔法を自身の銃弾として撃ち出す』ねぇ…。便利といえば便利だけど、それって普通に神剣魔法使うのと何が違うの？むしろワンクッション置いて隙にならない？」

と、ふと彼女はジト目を向けた。

「それを言っちゃおしまいですよ…仕方ないじゃないですか、どうも自分には……マナ操作の才能が皆無らしくて…」
「「はぁ？」」

ケイロンとダブルで呆れられてしまう。流石に空も申し訳ない気持ちになった。

「ところであの小太刀は何？永遠神剣？」
「いえ、違うと思います。会長の神獣が持ってる槍と同じ様な物じゃないですかね」

言いつつ、突き付けらたケイロンの神槍を見る。力強い馬上槍（オクスタン）を。

「なるほどね…。でもまぁ、あの状況でよくハッタリなんて使えたわね？暁くんに一発撃った後はもう、カラだったんでしょう？」
「あはは、御明察です。我ながら冷や汗物でしたよ。……で、どうでしょう？考えてもらえましたか？」

その一言に、彼女は笑っている…様に見える少年の顔を見た。そこには、微かな嫌悪が滲んでいる。

――『自分はこのチカラを自分の為に使います。ですから会長、自分のチカラが御入り用なら是非、雇ってくださいませんか？』

この少年はそう言った。ただでは働かない。ギブアンドテイクで、と。

真意を探る視線を向ける沙月に、彼は溜息を落とした。

「…いいわ、『雇ってあげる』――高谷くん」

そこで、彼は顔を上げた。その眼を開き、己の胸に軽く握った左の掌を当てる。

「契約完了ですね…『無銘のタ・ツ・ミ』！…確かに雇われました。このチカラ、学園の平和の為に役立てます」

その鋭い鳶色の瞳。まるでカラスだ、と。沙月は思った。

「…そう願いたいものね。じゃあ多賀谷くん、詳細は追って通達するから。取り敢えず体育館の皆にもう危機は去ったって伝えてきてちょうだい」

「了解雇用主（イエスマスター）……もうそれでも良いです…」

意趣返しにひとしきり落ち込ませられた少年が去り、静寂に包まれた生徒会室。沙月とケイロンは難しい顔をしていた。

「沙月殿、自分は反対です。あの様な得体の知れぬ者を味方に迎え

入れるなど…」

ケイロンは何も空に限った事を言っているのでは無い。自分と対峙したあの『幽月』という者についても、だ。
交戦まではいかなかったが、その立ち居振る舞いだけでも彼の卓越した戦士の勘はあれが尋常ならざる者だと察している。

「そりゃあ私だってそうよ。でも仕方ないじゃない…」

はぁ、と溜息を落とし、彼女はここに居ない話題の人物を思い出した。

「…見てない所で問題を起こされるよりはマシでしょ？」

あの『銃』という外見は、見た目だけでも攻撃手段となる。ならば手元に置いておくべきだろう。

――『悪用』されては面倒だ。

「『団長』の判断を仰いでは如何でしょうか」
「…そうね、その方が良いわね……ハァ、また小言言われちゃうわ…」

本当に嫌そうに、彼女は忠臣の金言を受け入れたのだった。

（おい、カラ銃）
【……】

体育館の中、早苗に事の次第を説明し終えた空は、自分の相方に向けて語りかけた。

（オイこら、何無視してやがるカラ銃）

【…旦那はん…、もしかしてと思いますけどぉ、その『カラ銃』ってぇのはわっちの事に有りんすか？】

（お前以外の何処にカラ銃が有るってんだ？）

ジト目でその拳銃を見遣りながら、空は鼻を鳴らした。

【何言うとりますねん！カラなんは旦那はんのマナ操作の才能やありんせんかぁ！】

「ああ！？弾が入ってねェ役立たずに言われたくねェんだよ！！」

【キーッ！！神剣があればええんどすっ！そしたらわっちのホンマのチカラ見したりますぅ！土下座して感謝させたりますわいなっ！！】

「持ってんだろうがよッ！黒の一本喰ったろ！」

【あれはわっちのモンどす～だ！旦那はんなんかには使わせたりませ～ん！】

「テメーホンッとムカつくなッ！！」

「……な、なぁ巽…お前、大丈夫か？」

と、そこに信助が語りかけて来る。心配げな表情で、美里も隣にいる。

「ん？ああ、大丈夫だ。ちょっと頭を割っただけだからな」

「…そっか、頭を…」

「そうね、それなら仕方ないわよね…」

包帯を巻いた頭を軽く摩りながら答えると、二人は優しく笑いかけ

る。

「……？」

結局彼は、自分が拳銃に向けて怒鳴り付けている危ない人物になっていた事に気付かなかった……

その後開かれた集会で、生徒達へと説明がなされた。最初は戸惑っているようだったが、次第に置かれている状況を理解したのだろう。何よりもそれには、沙月のカリスマに依るところが大きいだろう。もし彼女の居ない状態でこの状況に陥っていれば、どうなっていた事か。

ちなみにそこで、神剣士達の紹介もされた。一般生徒にとっては異常としか言えないチカラを持つ者達。

だが、彼らはそれを受け入れた。いや、受け入れざるをえない情況では有るのだが。

――楽観的な者ばかり揃ってんのか？

そんな感想を持つ程、会はあっさりと全校一致を見たのだった…

【――おい、『オレ』】

（…何だよ、『俺』？）

少し前の事を思い返していた彼は、呼び掛けられて自分の内面に意

識を向けた。深い緋色の深層意識。そこに感じる、自分と同じモノに。

【いつまで奴を放っておきやがるつもりだ？力は手に入れただろうが。早く、早く奴を……！！】

中華風の武術服を身に纏う青年が、空を剣呑な視線で見遣る。その烈しい感情が血液に流し込まれたかの様に、全身を巡る熱。その余りの不快さに、彼は眉をひそめた。

（落ち着けよ、『俺』？判るだろ、今の状態じゃ敵わない。まだまだ仕込みが必要だ）

【何を間怠っこしい！！寝首でも何でも掻けるだろうが！！その為に屈辱を堪えてわざわざ奴の近くに――！】

激昂して掴み掛かった青年。それに空は逆らわない。襟首を捕まれた状態で。

（――黙れ、妄念風情が。それを受け持ったのはお前じゃねェ、俺だ！！）

斬り捨てる様に鋭い言葉を投げ掛ける。青年の猛禽の眼差しと全く同じ眼差しを。

（死人は死人らしく、記憶だけ遺してろ。後は要らん）

【――貴様…『オレ達』を裏切る気か！！】

（まさか…。ただ待てと言ってるだけだ。『急いては事をし損じる』ってな）

腕を払いのけ、空はニヤリと笑いかける。その眼は再び、微笑して

いる様に見える糸目。
それに青年は酷薄な眼差しを向けたままで。

【『時は金なり』…精々後悔しねェようにするんだな！】

踵を返すと、青年は緋い闇に溶けていく。

（一一言われる迄も無い）

それを見送ると、空は意味ありげに哂(わら)った一一

「いててててッ！？！？？」

深層意識の底にたゆたっていた空は、突然の耳の痛みに一気に覚醒した。
その痛みに耐え切れず片眼を開いた彼は一一

「うぉっとッ！？」

まず揺れたその身を固定する。
危うく枝の上から落ちそうになってしまった。何とか体勢を立て直すと、彼は痛む耳の側に顔を向けた。

「ジャリ天！いきなり何しやがる！危ねェだろ！」

そこに居るのは、金髪を短いお下げに結い上げた碧の瞳の少女。
だが一一人間ではない。宙に浮かんだ、子猫程度の大きさしかない

その姿は、まるで『妖精』。

「吾（われ）には『レーメ』という立派な名前があると言っておろうが！まったく、仕事中に居眠りとはいい度胸ではないか、天パ！」

「寝てねェよ。奇遇だなジャリ天、俺にも『巽空』って名前があるんだ」

「ふん、吾はお主が吾を正しい名で呼ぶまでお主の名など呼んでやらんわ」

「そうかよ。じゃあきっと永遠に来ないな。…後、次に俺の髪の事に触れたらお前自身が食卓に列ぶ事になるぞ」

ベレー帽の様な帽子を被る、世刻望の永遠神剣【黎明】の守護神獣『天使レーメ』は、彼に責める視線を向ける。負けじと彼も、あまり迫力の無い糸目で睨み返した。

「そもそも、お主のその糸みたいな眼は起きているか寝ているかまるで解らん！もっと眼を見開かんかっ！」

「なんでお前に眼の開け方まで指導されなきゃいけないんだよ。そういう節介は主人の望にだけ焼いとけ……」

ビッと鼻面に指を突き付けられ、それに不快そうな呟きを返して彼は一一拳銃を構えた。

彼の居る木は、周囲を圧倒する高さ。そのかなり上部の枝に腰掛ける彼の眼下に広がるは、美しさすら漂う森林。

それはまるで、人がまだ森の外輪に寄り添って生活していた頃の、独逸は『黒い森（シュバルツバルト）』。

「大きなお世話だっての一一！」

空はその細い眼のままで呟いた。呟いて、引鉄を引いたのだった――

乾いた音に続き、遠くを飛翔していた鳥が一羽墜落した。

「命中（ワンダウン）。随分と当たるようになってきたな…」

成果にほくそ笑む空。煙を吐く銃口にフッと息を吐きかけ、【無銘】を眺める――

「このたわけぇぇぇっ！撃つなら撃つと言ってから撃たんかぁぁっ！」

その耳に、眼をぐるぐると回したレーメががなる。どうやら発射音に驚いたらしい。

「ッ煩せェな、撃鉄が落ちるの見てなかったのか」

「あんな一瞬で対応できるわけがないだろうが！……うぅ、耳がぁぁ…」

ふらふらのレーメに頭の上に座られ、小指で耳をコリコリやっていた空は物凄く嫌そうに頭を振る。

だが髪にしがみつかれてやり過ごされてしまった。逆に自分が痛い思いをしてしまう。

「いてて…とにかく、さっさと望に鳥が墜ちた位置を伝えろ。ゼロポイントから東南東百mだ」

「もうとっくにやったわ。回収も完了しておる」

詰まり彼女は、通信機代わりだ。空が中心点に据えた位置から鳥を撃ち、運動能力に優れる神剣士の望がそれを回収する。

「ああそうかよ…」

呟きつつ、ベルトに提げた細長いホルスター二つ。鉄球…すなわち弾の入ったホルスターと、小指の先程の炸薬を固めたモノを入れたホルスターからそれぞれを取り出す。

「…しかし、よく当てられるものだな。吾には胡麻粒くらいにしか見えぬ」

「一週間近くもやってりゃ慣れるさ。それに俺はこれが仕事だ」

カチャカチャと、装弾作業を行う空。その合間、この数日の事に思いを馳せる。

――あの一件から既に一週間が過ぎている。正体不明の敵の襲撃を受けた物部学園は、希美の永遠神剣【清浄】の守護神獣『次元くじら　ものべー』の背に乗せられて『元々の世界』からこの『剣の世界』にやって来ている。此処は則ち『異世界』という奴だ。

そう、物部学園はただ今『異世界を漂流中』なのだ。詰まりこれは、食料を得る為の狩り。

――カチャカチャ

装薬した後に弾丸を篭める。丸い『ただの』鉄球を。

これらは幽月の『再製』によって作られたもの。弾丸はもはや無用

の長物の硬貨から、炸薬は理科室で拝借した原料を使って作り上げている。

装填し終えた彼は、また【無銘】を構えた。遠くへ向けて手頃な鳥が通り掛かるのを待つ。

「初日は惨憺たる有様だったが、最近は一定の獲物が捕れる様になってきたな」

「古傷をえぐるな。あの罰ゲームは思い出したくない」

空はぶるりと震えた。自分で望んだ事なので文句は言えないが、彼はあくまで学園生徒会に使役される身。なので坊主だった事に沙月は激怒し、彼に罰を課した。

ヒンズースクワットと腕立て伏せを百回。しかも二秒以上休憩したらやり直しというシビアなモノ。

二日目の彼が限界以上に努力したのは言うまでもない。

「ふむ、今日は焼鳥らしいぞ。ノゾミがタレを作ってくれているそうだ」

「そうか。そりゃ楽しみだ」

「……」

「……」

風が吹いた。枝葉が擦れ、ざわざわと木々が合唱する。そのまま二分ほど過ぎた。

「……おい、少しくらい何かしゃべらんか。息が詰まりそうだ」

「…そんなに喋りたいなら一人で喋ってろ」

その沈黙に耐え兼ねたのか、レーメは空に語りかけた。だが素気な

く彼は話を切り上げる。

「…詰まらん男だのう。お主、モテないだろう?」

――パァァァン!!

引鉄が引かれ、【無銘】が火を噴く。遠くで鳥が慌てて飛び去っていく。

「チッ。外したか」

「お、おにょれ天パぁぁ……!今のは絶対、吾を脅かす為に撃っただろ~~っ!!」

ガシガシと髪を引っ張るレーメに反応を返す事無く。彼は再装填に移った。

――パシャッ!!

「おーーい、巽ーー!!!今日の採集終了だってよーー!!」

と、シャッターが切られる。同時に木の根元から声が掛かった。それに空は手を振って応え、【無銘】を背中側の専用ホルスターに戻した。

「いい具合に撮れてるわよ、巽くん。のぞみんも見る?」

「わあ、ホントによく撮れてるね。さすが美里ちゃん」

「…阿川。前に撮らないでくれって言わなかったか?俺写真に撮られるのは苦手なんだよ」

「何だよ、魂取られるとか？」
「思うか。いつの時代の人間だ俺は…」

和気藹々とまではいかないものの、空と信助、希美と美里の四人を先頭に数名の生徒達が隊伍を組んで歩いていた。

因みにレーメは希美の肩の上で不精している。その希美は彼女の神剣【清浄】を持ち、黒いゴシックドレスの様な衣装…神剣士としての装束に身を包んでいる。
リュックを背負う空以外は鍋や篭等の入れ物を持っており、その中には当然、収集した食材がぎっしり入っている。

と、ガサガサと草むらが揺れる。身を固くしたのは、以前猪に轢き殺されそうになった経験のある信助と美里。

「ノゾム～～！」

だが、そこから現れたのは神剣士としての装束に身を包んだ望。両腰に一対の剣【黎明】を挿し、金色のガントレットに包まれた右腕と、制服が変化した様なその姿。
それにレーメは喜んで飛び付いた。

「ぅわ、レーメ。どうしたんだよ？」

右手でレーメを抱き留める望。左手で抱えた鍋には数羽の鳥。

「…なんでもない。ただ、やはり吾にはノゾムが一番だと分かっただけだ」
「？」

少し涙目のレーメに抱き着かれ、意味の解らない望はただ不思議そうに首を捻るだけ。そんな望の頭にレーメは鎮座した。

「ふぅ、やっぱりノゾムの髪が一番だ。あやつの髪は天パ過ぎてどうも性に合わん」

「おい望、昔みたいにウィリアム・テルごっこやろうぜ。そのまま動かないでくれりゃいいから」

「嫌だっての。そう言ってお前、昔よく銀玉鉄砲俺の頭に当ててくれただろ?【無銘】は洒落にならないって」

「銀玉と変わらないだろ、神剣士にはよ…」

薄く眼を開き【無銘】を構えた空に、周囲は苦笑を差し向けるだけだった。

The 8th Name…"結晶妖精［クリスト］"

廊下を走る四人。学園の神剣（十銃）士達だ。この面子が揃って行動するのは、そう、敵襲の時だ。
それ以外では滅多に全員が揃う事は無い。各々割り当てられた仕事が有る。

「総数は三。青青赤の攻撃的編成ですね。後衛がいる可能性が高いですから、早目に始末するに越した事は無いでしょう」

口を開いたのは、空。ベルトには【無銘】のホルスターと、二振りの小太刀を通している。
そんな彼を横目に見ながら、沙月は呟く。

「…編成まで把握してるわけ？君の感知能力って随分広い上に鋭敏よね」
「どうも…」

――その形状故だろうか、【無銘】は妙に索敵能力に優れている。広さはものべー程ではないが、属性まで見抜くのだから彼自身驚いた。
それにより普段はレーダー要員を任されている。戦時は役に立ちにくい彼の、唯一の取り柄らしい取り柄だ。

駆け込んだ昇降口にて、四人は円陣を組んだ。そして各々の得物を手にし、高く掲げる。

「作戦内容は単純、学園の絶対死守。私達の初陣…全身全霊を掛け

て、学園の平和を護るわよ！」
「「「一一一応ッ！！」」」

一際大きな声に、一同は声を揃え、各々の神のチカラを手に天に鬨（とき）の声を上げた。

ミニオン達は進攻速度を上げた。感じるのは三つの強力な神剣の気配。それはどれもが自分達を遥かに凌駕している。
だが、彼女らは気にも掛けない。そんな事はどうでもいい。いや、気にする意識すらない。その心は始めから空虚だ。神剣を振る事以外に気を割く必要は無い。

だから、感知していた気配が突如消え、目の前に現れたとしても感じる事はない――

「――ハァァァッ！」

まず飛び込んだのは、望。
その両手に握られている双子剣【黎明】を互い違いに一閃させる。
剣を打ち下ろされて防御手段を無くした青ミニオンは、成す術も無く両断された。

「――砕く。この剣の一撃で…」

その望を狙い、もう一体の青ミニオンが跳ぶ。鈍く煌めく西洋剣に、薄く青いマナが纏わり付く。

「させないっ！」

――ギィン！！

それを希美の【清浄】が、彼女の身を護る大気の盾によって受け止めた。勢い良く【清浄】が引かれ、その穂先の鎌状の刃がミニオンの腕を刈り取る。

その勢いのまま刺突が繰り出され、胸部を深々と貫かれたミニオンは動きを止めた。

「紅蓮よ、その力を示せ…」

今度は希美が狙われる。赤ミニオンの神剣魔法。

「させッかよ！！！」

そこに、【無銘】を番えた空が立ちはだかる。立ちはだかりつつ、右手で小太刀を抜き放つ。昏い刀身のそれを。

「――『ファイアボール』」

発動した火球に向けて振りかぶった――

場に三つの燐光が舞い散る。青と青、そして赤。

「……」

その内の赤い燐光の前に、銃を番えた彼は佇んでいた。

…左手に銃を持ち、右手に昏い小太刀を持って、振り上げた姿勢で。

「いつまでそうしてるのよ。もう帰るわよ、巽くん」

ーー結論から言おう。今回も…彼は役立たずだった。確かに他人の気配まで消す能力は使い道もあったが、戦闘はからきし。
そしてやっと赤ミニオンが神剣魔法を発動し、勇んでその小太刀を振り上げたところで、沙月に対抗魔法で打ち消されてしまった。

「しかし良いコンビネーションだったわね、望くん、希美ちゃん。まさに三位一体だったわ！」
「せ、先輩……ほら、空だってちゃんと気配を隠したり役に立ってーー」
「それだけでしょう？真正面から当たったって負けなかったわよ、私達さ・ん・に・んならねーー」

望がフォローを入れるが、彼女は敢えて空をこき下ろす。輪を乱す恐れのある彼に、協調性を促すというのが表の理由。
だがなにより、やはり意趣返しという理由の方が強かった。

「さ、それじゃあ皆。帰還すーー」

くるりと振り返り、彼女は歩きだしーー

「ーー黙って聞いてりゃ好き放題言いやがってェェェッ！！一度ばかりか二度も人の目の前で神剣魔法打ち消したのはアンタだろうがァァァッ！！」
【ぷぎゃーー？！！何しはりますのん旦那～～っ！！】

その後頭部に、空の投げた【無銘】が直撃した。見事なオーバースロー。

「「「「……」」」」

呆気に取られた望と希美、レーメ。静まり返る森。風のそよぐ音、どこか遠くでカラスっぽい鳥の声がした。

「ーーふふ…そう、それはごめんなさいね、巽くん…」

そして、ぶちりと。何かがキレる音がした。

再度振り返る沙月。その手には剣状の【光輝】。

「……今度はアンタごと打ち消してあげるわよっっ!!」

間髪入れずに飛び掛かろうとする沙月。迎え撃とうとする空。

「わーー!!希美、先輩を抑えろーー!!」

「せ、先輩〜!!落ち着いてください〜!」

だが、斬り結ぶ事は無かった。二人はそれぞれに羽交い締めにされて止められた。

「離せ望ゥゥ!!これは俺の壱志(いじ)を賭けた戦いなんだァァ!!!」

「離して希美ちゃん!!アイツ一回シメるからぁっ!!」

それでも前進を止めない。元々意地になると際限が無い性格の二人だ。

「希美っ!このまま引っ張ってくぞっ!」

「う、うんっ!」

「望っ、ちょ、本当に離せ…!腕が折れるどころじゃなくて背骨イ

キそうだ…！！」

【皆は～ん、わっちを忘れとりますぅぅぅっ！！】

結局、空と沙月はそのまま引きずられてものべーに帰還した……

所変わり生徒会室。既に先程の襲撃から数時間が経過している。外は既に夜の闇に覆われていた。

「…すみませんでした、会長。取り乱してしまって」

「…良いのよ、巽くん。私も大人気なかったわ」

互いに薄く笑いながら、二人は握手を交わした。堅く、堅く…それはもう堅く。メキメキと。

「一一と、いう訳で見回りの時間を決めるぞ。まったく、ミニオン共も決めてから来てほしかったものだな」

掌を抑えてうずくまる空を尻目に、ボールペンを抱きしめて裏紙に区分けを記入していたレーメ。

先程はこれを決めようとした時に襲撃を受けた。

「ああ、レーメちゃん。それならもう私が考えて来たから大丈夫よ」

と、未だに不機嫌そうな沙月がホワイトボードに一枚の紙を張り出した。

「わ、わあ、さすが先輩！仕事が速いですね！」

「まあ生徒会長だからね～」

希美の引き攣った笑顔と誉めそやし。それに少しだけ、彼女は気を良くした。

「いいから早くしてくださいますか、斑鳩会長？俺も暇じゃ無いんで」

だがすぐに、床に正座させられている空と視線がスパークする。どうやら決定的な溝が出来ているらしく、おかげで室内は妙にピリピリしている。

「そうね、とっとと終わらせましょう。先ずこれは四時間区切りよ。早朝朝四時から八時、巽くん」

「はいはい…」

早速嫌がらせかと、彼は肩を竦めた。

「八時から十二時、希美ちゃん。十二時から十六時、私。十六時から二十時、望くん」

これで全員一通り呼ばれた。後は二枠。後は誰が呼ばれるというのだろうか。

「二十時から零時、零時から四時、共に空（あき）」

「ちょっと待ってください会長。何ですかその悪意が滲み出てる最後の部分？」

本当に何でもない口調で言ったその言葉。一見すればその欄は『まだ決まっていない』とも取れるが…。

空が反応した瞬間、沙月はにんまりと笑った。それに彼は青ざめる。

まずい。術中に嵌まった、と。

「あら立候補？助かるわ～♪書き直す手間も省けるし」

「いやいやいや、いくらなんでも十二時間ぶっ続けは無理ですって！！いつ寝りゃいいんですか俺ッ！！」

「生徒会規則に則り、会長が必要性を認め、かつ迅速な対応を求められる規律に関しては生徒会会長の専決処分が認められるのよ。という訳で決定～♪」

「鬼ーーーーッ！！」

そんな言葉などどこ吹く風。生徒会長の強権を発動した彼女を止められる者など居なかった……

廊下を早歩きする少年が一人。空だ。その手には盆が乗っている。それを持って空は、ある教室の扉を叩く。中から『どうぞ』と声が掛かった。

「失礼します、食事をお持ちしました…」

入口脇の机に置いていた盆を再度持ち上げ、扉をくぐる。

「おお、待ち侘びたぞタツミ。どこで油を売っていたんだ？」

まず反応したのは、腰まで届く水色の髪の娘一一『クリスト・ルゥ』。笑ってはいるが、大分焦れていたらしい。理知的な眉をひそめている。

「すいません、ルゥさん。ちょっと野暮用で…」
「…ふん。仕事より優先する野暮用なんて、アンタに有るわけ？」
慌てて頭を下げようとした彼は、その言葉にピクリと眉を反応させてそちらを見遣った。
「そりゃ悪かったな、ゼゥ？次からはお前の分だけ先に持ってきてやるよ」
「…アンタ、本当にムカつくわね…」
そこでは黒髪を二つに結い分けた気の強そうな娘――『クリスト・ゼゥ』が、腕を組んで鋭い眼差しを向けている。それに空も薄く眼を開いて睨み返し、バチバチと視線がスパークする。
「こらゼゥ。いつもご迷惑をおかけします、タツミ様」
「ミゥ姉様…」
「あっと、すみませんミゥさん…」
その間に割って入り頭を下げた、プラチナの様に煌めく長髪の娘――『クリスト・ミゥ』。落ち着いた印象通りに礼儀正しい。
それに二人は毒気を抜かれて視線を離した。
代わり飛び出すのは、赤いおかっぱ頭に角を持つ快活そうな少女――『クリスト・ワゥ』。
「も～、いつまでそうしてるのさー！ボクもうお腹ぺこぺこだよアッキー！！」
「…ワゥ、アッキー言うなって言ってんだろ…」
そういう空だが、もうほとんど諦めムードだ。この数日で言うだけ

無駄だと分かっている。

さっさと仕事を済まそうと、彼は机に食事を置いた。

「あ、お早うございます、タツミさん…」

「ん？ああ、お早う、ポゥ」

と、挨拶を向けられて応える。大人しそうな外見そのままの、俯き加減の小麦色の肌の少女は――『クリスト・ポゥ』。

机の上に置かれた盆には、麦芽パンに葉野菜と薫製肉。挟めば質素なサンドイッチになるだろうが、どう見積もっても三人前しかない。だがそれで十分だ。なぜなら彼女達は――

「それじゃあ、いただきましょうか」

全員が盆と同じ机に乗れる妖精サイズなのだから――

食事が終わった事を確認し、彼は話を切り出す事にした。『野暮用』の内容である。

「なるほど、村の視察か…」

ルゥは髪を掻き上げる様な仕種を見せた。彼女が考え事をする時の癖。

「つまり、ケイロン様の見つけたという村の様子を見てくる任務と

いう訳ですね？」
「はい、そうなります。とは言え接触する訳じゃなくてあくまでも様子見なんですけど」

彼女達は沙月の直属。神剣士『光輝のサツキ』が、彼女の属する組織『旅団』から連れて来ていた者達。
当然、全員が神剣士だ。神剣を持つ『傭兵』。

「何で直接なのよ？この次元くじらには遠くを見れる『眼』が有るはずじゃない」
「音は聴こえないんだとよ。現地民の言葉が解るかどうかも調べて来てほしいんだと」

その縁でか、自分から傭兵を買って出た彼はその世話役に任じられている。

「ま、おっ仕事ならやるしか無いじゃん？」
「そうだな。では用意するとしようか、皆？」
「はい、じゃあ十分後に校門に集合でお願いします」
「了解しました、タツミ様」

話を終え、彼は一度頭を下げて部屋を後にした……

昇降口に空が現れた時、そこには既に五つの影があった。

《タツミ様、お待ちしておりました》

色とりどりの飛翔物体が五基。先ず、ダイヤモンドに白い鳥の翼が

縒り合わさりったようなそれが語りかけた。

「遅くなりました、ミゥさん。用意は良いですか？」
《はい。『皓白(こうはく)のミゥ』、準備完了です》
《『夢氷(むひょう)のルゥ』、出撃可能だ》
《…『夜魄(やはく)のゼゥ』、往ける》
《『嵐翠(らんすい)のポゥ』、出れます…》
《『剣花(けんか)のワゥ』、いつでもいけるよーー！！》

問いに、彼女らは答えた。正八面体の青いクリスタルが機械に保持されている様なそれ、黒瑪瑙の結晶体に剃刀の様な翼を持つそれ。そして、幾つかの六角柱を従えた折れた翡翠の剣先の様なそれ、最後に角を持つ竜の頭骨にルビーが詰められた様なそれ。

それこそ、沙月が連れていた『援軍』。彼女の属する組織『旅団』の擁する神剣士。
彼女らは特殊なマナの充たされた場所でしか活動出来ず、長時間それから離れた場合は死亡してしまうらしい。
よって、そのマナを貯めた特殊な機器が無ければ外出すらままならない。

「了解です。それじゃあ、往きましょうか」
その神剣士達と共に、彼は歩みだした。
後に彼に多大な影響を与える事になる者の待つ、その地へと。

The 9th Name…"『永遠神銃』"

――その異様な風体の男に、門を守っていた三人の男達は身構えた。

「何者だ、止まれ！！」

それぞれが持つ槍や剣を突き付けての恫喝。しかしその男は一切意に介さず――

「――邪魔だ」

低く、地を揺るがす遠雷の如き声で門番達を圧倒した。

「な、何を…！」

その手には黒い…黒く鋭い、巨大な片刃の大剣――

森のさやけた空気の中、六人は歩いて…いや、歩いているのは一人。他の五人は翔んでいる。

あっちに行ったりこっちに行ったりと落ち着きの無いワゥを押さえるのに苦労しながら、彼等は村まであと半分という所までたどり着いた。そこは木が倒れ、蒼穹が覗いている。

《一休みしましょうか、タツミ様？》

「そうですね…地図を書き込みたいんで、有り難いです」

その倒木に腰を下ろし、彼は手帳を開く。それに大まかな道程と目印を記入していく。

《へぇ、なかなか上手だね～》

《あ、本当…デフォルメがお上手なんですね》

「どうも…」

肩の後ろから覗き込むワゥとポゥの言葉に、彼は少し面映ゆさを感じた。元々他人に褒められる事に慣れていない。たったそれだけの言葉でも、彼には赤面しそうな程の効果が有る。

《こないだサツキの絵を見たんだけどさ～、もうすごいの何のって。笑っちゃったよ～！》

思い出し笑いに興じる彼女の台詞を聞きつつ、シャープペンシルを走らせる。

《こらワゥ、そんな事言っちゃ駄目でしょう?》

《だって面白かったんだも～ん。ミゥ姉だってそうでしょ～?》

《まぁ、あれは確かに有る種の才能だな》

《ルゥ姉さんまで…》

女三人寄ればかしましいと言うが、四人も居れば輪を掛けて喧しい。

《……》

そんな中、一同から少し離れた位置に、その姿が有る。その黒い機影は、クリスト・ゼゥだ。

彼女だけは会話に加わらず、ただ周囲に警戒している。

「…敵なんて居ねェよ。居るのは動物くらいだ」
《一一っ！》

書き込みを続けながら、目線を上げる事も無く空が呟く。その時、ウサギの様な生き物が草むらから踊り出て彼女を驚かせた。

途端に彼女は不快そうに彼を見る。その索敵能力の高さは話には聞いていたが、自分が感知できなかったそれを平然と感知していた事に、何とも言えぬムカつきを感じた。

そこで彼は手帳を閉じる。記入が終わったのだ。

「終わりました。お待たせして済みません」
《いえ、それでは行きましょう》

背に鋭い視線を感じながら、彼は懐に手帳を仕舞い込んだ。

後少しで村、そこでようやく六人は気付く。その焦げ臭い空気に。

《…タツミ様》
「……」

呼び掛けられる前に、彼は【無銘】を番えた。こうする事で更に索敵範囲が上がるからだ。

「…神剣の反応が有ります。かなりの数、しかも村の方から…」

それに、彼女らは息を呑んだ。だがすぐに気を取り直し一一

《…ここで取れる選択肢は二つ。引き返すか、進むか…》
《迷う必要が有るか、ミゥ？》

怜悧なルゥの声。それに、他の三人も頷く。
彼は空気が変わった事を感じた。先程までの彼女達とは違う、別人の様に漲る…決意を。

《タツミ様、我々は村へ向かいます。タツミ様は学園に戻ってください》
「一一な、何言ってるんですかッ！相手は間違いなくミニオン、しかも数はこっちの三倍強ですよ！ここは逃げるしかないじゃないですか！」

翻意を求める空の言葉に、ミゥは優しく微笑む。

《だからといって、見捨てる事は出来ません。私達はもう、二度と…後悔する選択はしないと誓いました》
《そーいう事。アッキーは危ないから付いて来なくていーよ》
《むしろ邪魔だから来ないで》
《まあ、要するにゼゥはイカルガ達を連れて来てくれ、と言っているんだ》
《お願いしますね、タツミさん》
「ちょっ…！！」

それ以上の言葉を待たず、彼女達は翔ける。何の迷いも見せず、紛れも無い死地へと。

「……何だよ、それ…！」

彼女らに何があったのか。それを彼は知らない。彼女らが歩んできた道程など、何一つ。

『――だったらどうした。死にたい奴らは死なせておけ。オレ達には、生きて成し遂げる願いが有る。そうだろうが？！』

――ああ、そうだ。その通りだよ、『俺』！！

そう、死ねない。俺の願いを達するまでは。

『…ですが、諦めないでください。例え独りきりの独りよがりでも、貴方が信じる貴方の道を、ただ一筋貫き通してください。吹き抜ける一陣の風の様に、天つ風の様にただ真っ直ぐに…』

――だが解る。ここで言われたとおりに反転すれば、俺は――ただの腰抜けだ！！

それだけは出来ない。誰よりも、俺自信がそう願っている。

『――何を寝ぼけてやがる、テメェの今の力で何が――！！』

スゥ、と。空は息を吸い込んだ。肺一杯に空気を吸い込み――

「――煩ッせェんだよ腰抜け野郎がッ！！！俺は俺だァ！！テメェの指図は受けねェェェッ！！！」

その壱志を張る。脚は震え、心臓は逆流せんばかりに脈打っている。

それを、力ずくで押さえ付けた。

『…ああそうかい！じゃあ勝手に死にやがれ…！！どうせお前が死んでも、『オレ達』には次が有るんだからな！！』

身を縛っていた強制力が消える。間を置かず彼は懐を漁る。

「…さぁて、巽空、一世一代の大博打だ――！！」

懐から取り出したそれを開き、耳に当てた――

村は、燃えていた。門番らしい男達は頭から唐竹割りに両断され、血の海に沈んでいる。

――ギィィィィン！！

「ギャアアアッ！！」

金斬り音と共に悲鳴がこだまする。もはやそこは悲鳴の坩堝だが、その中でも一際大きな悲鳴だった。打ち上げられた剣が墜落し、それを掴んだままだった二本の腕が力無く落ちる。

「ま、待ってくれ、助けて…！」

尻餅を付き、目の前の青と赤の少女達に命乞いする青年。その身は鎧に包まれているが、両腕はその鎧ごと断ち切られている。

青い少女が持つ、冷気を纏う両刃の西洋剣。そこにはベトリと血が凍り付いていた。

この青年の腕を断ち切っただけでこうはならない。既に無数の命を薙ぎ払っている。

「――ギ、ふ…！？」

トス、と。実に軽い音を立てて、青年の胸に赤い少女の持つ双刃剣が突き立てられた。鉄の鎧など紙と同じ。これが『神』の一字を戴く剣の力だ。

「――燃えろ……」

その神の剣（ツルギ）が、赤熱した。青年の身体が炎上する。

「……どうせ、全て……灰に還る…」

炎が消えれば、そこにはもう何も無い。虚ろな瞳の赤い少女は誰にとも無く呟いた。

その出現を感知したミニオン達が、散開して応戦する。

《――皆、作戦通り往くわよっ！！》

《《《《――応っ！！！》》》》

ミゥの指示に、五基は頷いた。相手は三体、対するクリスト達は五。数としては優勢だ。

空間を渡り、眼前に現れたゼゥに反応して刀を構えた黒ミニオン。だがゼゥはすぐにもう一度消える。『居合の太刀』は狙いを外し、ミニオンの体勢が崩れた。

《――『フォトントーピード』っ！！》

それに向けて一条の閃光が放たれた。ミゥの撃ち出した閃光に肩口を撃ち抜かれ、ミニオンが刀を手放す。

《遅いっ！》

その背後に、ゼゥは現れた。その鋭利な翼を広げて懐を翔け抜ける。三本の刀創を負ったミニオンは、紫の霧に変わり消滅した。

《一一炎よ、敵を撃てっ！》

ワゥの掛け声に答え、三つの炎弾が現出する。狙われた緑のミニオンが身構える間も無く一一

「一一凍てつく風よ、凪げ…」

青ミニオンの対抗魔法が、それを打ち消す一一

《悪いが、それは通せないな。一一『アイシクルアロー』！！》

前に、ルゥの対抗魔法への対抗魔法が青ミニオンを貫く。三本の氷の矢に術式ごと身を貫かれ、青ミニオンが動きを止める。

《一一『ファイアボルト』っ！！》

三発の炎弾が翔け、緑ミニオンの身を焼き砕く。

《とどめです！一一『ブラストビート』！！》

その二体を、暴風が薙ぎ払った。

森の中を駆けながら、周囲に意識を配る。敵の気配は一一

「一一剣よ、此処に」

「一一ッ!?!」

間髪入れずに、彼は寄り掛かっていた木を蹴り撥ね跳ぶ。

刹那に両断された木が、軋む音を立てて倒れる。その向こうに赤と青。二体のミニオン。

一一莫迦な、何で俺の存在がバレてる!?

【無銘】を番えて解った。隠蔽が剥がされている。

『一一ククッ…ハハハハッ!!』

「……!?テメェ…思い通りに行くと思うなよッ!!!」

一一畜生め、我が前世ながらなんて野郎だ!思い通りにならないと判った途端に足を引っ張り始めやがった!!

「……紅蓮よ、その力を示せ…」

神剣魔法が発動し、赤ミニオンの頭上に業火の球が現出する。

「一一『ファイアボール』」

「ハァァァッ!!!」

撃ち出されたその砲弾を、昏い小太刀で斬る。刀身と同じ色の霧に包まれて炎球が消えた。

「熱いだろうがよッ！！」

火傷しかねない熱風を浴びながら、左手に番える【無銘】の引鉄を引く。

銃口下部の宝玉が魔法陣を発する。それは瞬く間に赤く染まり――業火の球を吐き出した。

「――『アイスバニッシャー』」

だが、それは凍てついた。彼の左腕ごと。

――沙月の危惧した通り、この技には決定的な隙が有る。一度取り込むという動作に時間が掛かりすぎ、また撃ち出す際にも時間を要する。

【無銘】は無傷だが遣い手である彼はそうもいかない。

凍てついたのは一瞬。それでも、ただの人間と同じ身体を持つ空には十分だ。十分痛撃になる。

「――が、アアアッ！！？！」

苦痛に腕を抱え込めば、曲げた肘がギシリと鳴った。

皮膚が裂け、溢れた血が凍り付き傷跡を拡げる。

「敵性殲滅……」

彼が呻く間に、青いミニオンが跳躍した。その血塗れの剣が凍気を纏い、蒼く煌めく。

「これで、とどめ……」

朱い氷晶を撒き散らしながら、風を斬る剣が袈裟掛けに振り下ろされた――!!

その頃、物部学園は整然とした避難を行っていた。その指揮を取っているのは沙月と希美。

この学園に危機が迫っている事は分かっている。それに気付くのが早かった事、そして一定数をクリスト達が引き付けた事で、ミニオンの足並みが乱れている。時間には余裕が有る。

「希美ちゃん、大丈夫？」

「――――え？あ、ハイ、大丈夫です。急ぎましょう、先輩」

だが彼女には気になっている事が有った。そう、希美の様子だ。始めはあの虐殺を見せられた影響かと思った。だが、どうも違う。一体何だと言うのだろうか、この――

「……」

冷たい瞳は――

その一撃を受け止めた六角柱が砕けた。

剣を弾き返され、同時に斬撃を受けた青いミニオンが跳び下がる。

《大丈夫ですか、タツミさん！》

《ちょっとアンタ！何のこのこ出て来てんのよっ！》
「…ポゥ、ゼゥ……」
張り付いた指がようやく動くようになり、彼は【無銘】から手を離す。
《闘う力も無しに戦場に出てどうすんのよっ！死ぬ気！？》
まくし立てるゼゥ。その剣幕に彼は一一
「ああ、どうせ俺は弱いさ！！でもな、弱いからって逃げ続けて、それで俺は何処まで逃げりゃ良いんだよ！！」
凍傷を負った左手に、裂いた袖を巻き付けながら噛み付く。
「俺は闘える！確かにお前らと較べれば微々たるチカラだろうけどな！それでも太刀向かえる可能性が有る！」
《なにバカ言ってんのよ！たった今、そのチカラが通用しなかったばっかじゃない！絶対に敵わないわよ！》
「一一煩せェ……！この世に一一……」
その左手で彼女を押し退けて。彼は二人の前に歩み出た。
《な、アンタ…！》
《何をしてるんですかっ！》
構えをとる。負傷した左腕に銀鏡の小太刀を逆手に持ち、下段に衝き下げた右手に刃を天に向けた構え。
「この世に、『絶対』なんざ在るもんかァァッ！！！」

何時しかミニオンは青と赤だけで無く、緑と黒も現れている。その前に、神との対峙にしては余りにも無防備な身を曝す。

「――羽虫が、喚くな……」

そこから、赤が飛び出した。双刃剣を紅く染めて、目の前の命を刈り取る為に。

《タツミさん！！》

《タツミっ！下がりなさいよっ！》

――叫び声は聞こえている。だが、下がらない。下がれる訳が無い。

そうだ。何を甘えていたのか。闘うチカラ？『永遠神銃』？

――それが何だ！！そんなモン、結局は『闘う』チカラじゃなくて『闘える』チカラだろうが！

タン、と目の前に降り立つ赤いミニオン。その燃え盛る炎の様な長い髪が陽炎の如く揺らめく。

――そうだ。安全な場所から何が出来る？

この世に絶対なんて無い。勝利をもぎ取りたければ、何かを賭けろ。

無償の奇跡は無い。解っているはずだ。

だから――命を賭けろ。俺自身の命を賭けろ！俺には始めから、その一発の『弾丸』しか無いだろうが！！

俺には足りなかった。覚悟が、決意が！！

「消えろ――」

振りかぶられた右腕が、左から襲い掛かってくる。炎熱纏う、神の剣が。それに『振らさせられている』神の手先の剣が。

――――――！！！！

血が舞う。空の左頬に鮮血が染みる。

「――ぐ……が……！」

肘に、彼の銀鏡の小太刀をえぐり込まれたミニオンの血が。基点となる肘を破壊され、斬撃が止まる。

「アアアアッ！！！」

ミニオンが咆哮する。壊れた右腕から左手に自身の剣を持ち替える――その腕が掴まれた。

勢い良く腕を引かれて体勢が崩れる。彼女が見たのは、少年の背中と――黒く煙る青い空。

「――ぐ、う…！」

背中から地面に打ち付けられて、彼女は血を吐いた。

――いや、その程度でミニオンはどうにもならない。
血を吐いたのは、その少年の右手に握られていた昏い小太刀が胸を貫いていたから――

「――ハァ、ハァっ…！！」

荒い息をつく。心臓が破裂しそうに脈打っている。紙一重にまで近付いていた死が離れていく足音の様だ。

「――クッ！？」

襟首を掴まれて引き寄せられる。すぐ間近に、虚ろな赤い瞳。

「……どうせ、全て……灰に還る……」

それは、確かに語っていた。
『何を意固地になっているのか』と。『そこまで努力しても、最期には全て無意味だ』と。

「解ってる…」

――解ってる。そんな事は当の昔に気付いている。それでも。

「それでも俺は、前に進むだけだ……！」

赤く濁る瞳を睨み返して告げる。その決意に満ちた彼の躯を、赤い燐光が撫でていった。

『――やりやがった……！』

紅と蒼、その夢幻めいた誰彼の空の下で。中華風の武術服を纏う青年は呟いた。

『たかが、人間が……ミニオンを！！』

「何を驚いとりますねん」

呆然と呟けば、背後に気配。ゆっくりと幽月が歩み出る。

余裕に満ちたその様子は、同じモノを見ていると言うのに正反対。

「旦那はんはやりゃあ出来る御人なんどすぅ～」

流れ込む純粋な赤のマナ。それに、彼女は身震いした。

歓喜が沸き上がる。ようやく腹を決めたのだ、あの粋がっているだけの糞餓鬼な主人が。

ようやく『男』の顔をした。

「くふふ…旦那はんも頑張っとりますなぁ…わっちも頑張らんとぉ」

やっと、スタートラインに立った。此処からだ。此処から――始まる！！

すっと袖口から、彼女は拳銃を取り出した。

銃を番える右手を衝き出し、左手を虚空にかざす。

そこに、その『剣』が現れた。それに呼応して、彼女の黒髪が深紅に染まりゆく。

「愛想尽かされへんよぉにぃ……くふふ…！」

開かれた瞳は、髪と同じ深紅――

「【――『華焔の魂魄（スピリット・オブ・ファイア）』――】」

衝き付けられたその拳銃に、青いミニオンは身構えた。先程の様に、そこから撃ち出されるであろう神剣魔法を打ち消そうと――

「凍てつく――」

引かれた引鉄が撃鉄を打ち下ろす。

刹那、彼女の真横に居た緑のミニオンが『吹き飛んだ』。

よろよろと下半身のみが後退り、ドサリと倒れて消える。

「かぜ、よ……？」

爆風は少し後に。何が起きたのかも、彼女には解らなかった。

その合間に装填し終えた銃口が、ミニオンに向けられた。今度の狙いは黒ミニオン。既にそれは、後三歩の距離。

察して、三度対抗魔法を紡ぎ始める青――

『それがテメェのチカラか、『永遠神銃』？神剣を喰らい、喰らっ

た神剣を用いる事で、神剣を砕く『弾丸』を得る……神威の簒奪者……！』

「くふふ…さぁて、どないどすやろ？」

何処か遠くに向けていた銃口を天に向けて。彼女は再装填に移る。

「マナよ、赫き龍の息吹へと変わり、万象を撃ち砕け……」

足元に突き立てられた双刃剣が魔法陣を発する。赤いマナが結集し、形を成して装填される。

「ーー『ドラグーンブレイザー』ァァッ」

その引鉄が引かれ、撃鉄が落ちたーー

空中で迎え撃たれ、吹き飛んだ黒のミニオンが脇を掠めていった。対抗魔法が紡がれ終わる前に、火竜の息吹が黒ミニオンを撃ったのだ。

「ーー……ク、アアアッ！！！」

歯噛みした青ミニオンが飛び出す。西洋剣が蒼く煌めき、先程の一撃を、装填中の空に叩き込むーー

「ーーな」

その突撃に空は【無銘】を投げ付けた。正しく予想の範囲外の行動。ミニオンはそれを、頚を振って躱して。

「かはッ！？」

衝き出された小太刀に、胸を貫かれた――

何が起きたのか解らない。それは、彼の後ろからそれを眺めていた少女達も同じ。

《何…今の……？》

《わからない……見えなかった……》

消滅していく青ミニオンから小太刀を引き抜き、【無銘】を回収する。すかさず弾丸を装填しながら、彼は振り向いた。

鋭い眼差しに二人は少し戦く。だがそれが自分達に向けられたモノではなく、その後ろからやって来た三人に向けられていると気付く。

《皆、大丈夫！？》

《助けに来たよ～～っ！！》

ミゥとワゥ、そしてルゥ。その三人に。

《何を考えているんですか、タツミ様っ！！あれほど戻ってくださいと申し上げたじゃありませんかっ！！》

《全く…君はもう少し利口だと思っていたんだがな……》

「…すいません、自分でも莫迦やろうとしてるってのは分かってたんですけどね…」

申し訳無さそうな空に、彼女達年長組はこれみよがしな溜息を落とす。

《全く…私達が知り合う男性って、どうしてこう無鉄砲な人が多いのかしら…》
《そうだな、評価を改めよう。少なくとも私は、こういう馬鹿は嫌いじゃない》

落として、笑いかけた。今まで見せていた様な愛想笑いでは無く、屈託の無い本当の笑顔で。
それに釣られ、彼は苦笑した。

「…あれ?それってつまり、俺嫌われてました?」
《おや、あれで好かれているとでも思っていたのかな?》

苦笑して、珍しく軽口を叩いて――

「ハハ…まさか――ッ!」
「――ほう、中々にやるではないか、乱波(らっぱ)ども?」

それは、すぐに凍り付いた。背後から響いた、遠雷の如き男の声に――

The 10th Name…"飛将"

ザッ、と地を踏む音。その圧倒的な存在感が、背中越しにでも感じられる。

――今自分が息を吸っているのか、吐いているのか。この心臓がきちんと拍動しているのか。それすらも解らない。

「随分と多くの鉾を壊してくれたものだ。特に男、貴様のその神剣は随分と珍しいチカラが有るようだな」

なんて冷たい空気。反して首筋にちりちりと焼けるような感覚。その根源の一つ、周囲の森の中に、数十単位のミニオンの気配。だが、背後のその存在に全身の筋が固まってしまっている。指先一つ動かせない。

――背を向けている俺でこれだ。向き合っている彼女達は、一体どんな威圧に曝されている事だろうか。

前方の彼女らは、ただ一点を見詰めている。恐らくは声の主。その目にはただ、絶望のみが見えている。

「――さて、答えよ乱波。貴様らは何処の手の者だ?」

――死んだ。

振り向かなくても解る。この声は、知っている。俺ではなく、かつての俺が。

「『――』ヤハラギ＝ヤクシ…」

――死んだ！

神世の古に『南天の剣神』として名を馳せた神性。俺が振り向く一瞬の間に、コイツは俺を五回は殺せる。

「……フム、何語だ？聞いた事が無い言葉だ。だが――」

――だがそれでも！！

死ねない。こんな所で死ねない！まだ何の目的も達していない！！

決意を身に宿す。先程と同じく、『可能性』を掴み取る為に。

――そう、絶対は無い。

どんなに不可能の理屈を積み上げようが、付け込む空隙は存在する。

積み重ねれば積み重ねる程に、綻びが生まれる可能性が生まれる。

「だが、不思議なモノだ。何と懐かしい響きよ！！」

「――――ッ！？！！」

殺気は無かった。彼にとっては、石ころを蹴飛ばす様に自然な行為。

ただ……風を斬るその音だけが聞こえた――！！

校庭を走る影。双振りの剣を腰に提げた少年のモノ。

「どうだ、レーメ！何か感じるか？！」

「うむ、どうやらかなり接近されているらしいな。…しかし、迎え撃つには好都合っ！！」

閉じられた校門を飛び越える。望はそこから、一瞬で森の中に着地した。ものべーが転送したのだろう。

「……！！」

目前まで迫る四体のミニオン。その気配がありありと感じられる。だが彼に怖れの類はない。なぜなら――

「…空達が作ってくれたチャンスだ。何としても…学園を守り抜くぞ、レーメ！！！」

その決意が有る。自ら危険を買って出た友人達。その気概に、どうしてこの正義感の塊の様な少年が遅れを取ろうか。

――本当は今すぐにでも助けに行きたい。だが、それをやってはこの学園が守れない。空とクリストの皆が、己の身を危険に曝してまでミニオンを引き付けたのは何故か？

そう、それは命を守る為だ。そして自分達に体勢を整える時間を与える為だ。

（だから、無事に帰ってきてくれ…皆！）

歯を食いしばり、望はただ前を睨みつける。

「おう！！それでこそ吾が主だ、ノゾム！！」

それを誇り、相好を崩すレーメ。自分の主が自分の意志でこの場に立った事が、彼女はこの上なく嬉しい。

その誇るべき主が、双子剣を抜き放つ。片方が『昼』、片方が『夜』

を示すという、対の双振り。

「来い…俺達が相手だッ！！」

その闘志を察し、望に狙いを定めたミニオン達が森より飛び出した

――

地を転がる青いモノ。それは紛れも無く、物部学園の制服を纏った空だった。

「グ、あ…カハッ…！」

俯せに血を吐く。その背には裂傷。骨こそ無事だが、右脇腹から左の肩口まで走るその傷。――それはただ、風圧にて入った傷痕。

流れ出る血は少ない。それもそのはず、傷口は肉が硬化する程に焼けている。だからこそその痛みは文字通り骨身に染みた。

「…躱したか。流石に舐め過ぎた様だな」

言葉とは裏腹に満足そうな男にも、痙攣を繰り返す空は反応できない。背の苦痛は、今まで彼が感じたどの痛みをも凌駕している。

今し意識が途切れそうなその痛みになんとか彼が自我を保っていられるのも、彼が師と呼ぶ人物との鍛練で見に付いた苦痛への耐性によるモノだった。

その空の襟首に、男の剛腕が掛かる。指先までをガントレットに包

まれた、牙の如き指。

「〜〜〜〜!!?!」

引き揚げられ、もはや苦痛の呻きを漏らす事すら出来ない。霞みつつある目を開くと、その眼前には浅黒い肌の偉丈夫。右目に大きな傷痕を持つ、猛虎の如き偉容の男が在った。

「…フム。どれ程の男よと思うてみれば…まだ小僧ではないか。いや、その若さにてこれだけの陽動を熟した技量と胆力こそ、称賛すべきか…?」

しげしげと空の顔を眺め、ふと彼は眉をひそめた。だがそれも一瞬。

「まあ良いわ。答えよ小僧、貴様らを雇ったのは何処の組織だ?反乱分子か、或いは共和国か?」

「ア……か…」

片腕で空を掴み揚げたままで。

だが空は答えられない。言葉自体ではなく、政治的な話をされても、異邦人の空にはさっぱりと。

「どうした、吐けと言うておる。事と次第によっては生かしておいてやっても良いぞ?貴様ら程の手練、そうはおらぬ」

何より襟に掛かった手に気道を圧迫されているし、そもそもその意識は既に飛びかけている。だから何も言えない。

「フ…成る程、余程調教されておる様だな」

それを吐かぬ意志と勘違いしたのだろう、虎の男は諦めた様に笑い
――その大剣の切っ先を空の水月に当てた。

「案ずるな。すぐに仲間も送ってやる。此処に居る者も、あの神獣の背に乗る者共もな」

「――――ッ！！！」

その一言に。彼の『撃鉄』が落ちた。

脳裏に浮かぶのは――

「――さらばだ、名も知らぬ小僧。なかなかに面白い余興であったぞ」

当てられていた大剣に、グッと力が篭められた。その切っ先が胸にえぐり込まれる――その瞬間。

「――――？」

空の左腕が上がった。上がったとは言っても、それは虎の目の位置までだ。

だがそれに、彼は意識を奪われた。その手に握られた、黒い――何か。

「――疾（はし）れェェェェッ！！！！」

響く空の声に、彼女らはようやく我に返る。我に返り、互いに視線を交わしあい――散開して藪の中に飛び込む。

その刹那、引鉄が引かれた。

「【――『ドラグーンブレイザー』ァァッ！！！」】
「――――――！！？！？！」

――火龍の息吹に例えられる、神速の熱閃。対抗魔法など振り切り、ただ射線上に在る対象を劫火で焼き尽くす『永遠神銃』の持つ『魔弾』の一つ。

それが至近距離から、彼の眉間に叩き込まれた。

焔に包まれた上半身。威力にのけ反る男の胸を、反動で推力を得た空が蹴り、緩んだ握力を振り切った。

「――――小僧ォォォォォッ！！！！」

――瞬間に、空間が息も出来ない程に濃密な闘気で塗り潰された。
咆哮と共に、大剣が一閃する。

焔が薙ぎ払われ、現れ出る男は無傷。
そしてその一撃は――

「――グァッ！？！」

空中では躱せもしないその一撃に、二刀を構えその剣圧を受け流さずに。

「――ヌゥッ！！？」

小太刀を粉砕されて。その胸を、掠めた切っ先で横一文字に割かれ

て。その身は矢の様に森へと突っ込んで行く――

――しまった。

虎の威圧を持つ彼は、そう舌打つ。怒りに任せて振り抜いた剣により体勢を崩し、追撃に移るまでの間隙を作ってしまった。

「――おのれ…」

そこで、彼は剣を納めた。周囲の気配を探るも、感じられるのはただ手下達の持つ神剣の気配のみ。

己の左手を見遣る。そこには、掴んでいた少年の衣服の一部と…鍵の様な意匠を持つ首飾りが引っ掛かっていた。

「ふ、ふふふ…ふはーッははははは…！！」

そして、笑った。本当に久々に、心よりの笑いを上げる。

そこに、遠巻きに見守っていた手下どもが近付いて来る。一体、緑のそれが歩み出て癒しの神言を呟き――纏めて五体、一撃の下に消滅させられた。

「役立たずな人形共が…！」

――決められた行動しか起こさないその人形共は、『使役者』を守る事を最優先とされている。それ故に、敵を見逃した。

対して、あの神剣士達の弾性に富む行動。最早この近辺には一人として居まい。あの者達は、しっかりと自分達の役目を果たした。斥候、そして足止めを。

その鍵を握り締めて、彼は俯く。唇に鉄の味が拡がる。眉間の、僅かな傷より流れ出たモノ。

「――誇れ小僧!!この『【夜燭】のダラバ』を嵌め、傷を負わせてのけるとは!!返す返す口惜しいモノよな、小僧ォォォッ!!!」

猛然と上がった虎の咆哮に、木々がざわめく。周囲の手下共はただ、彼――ダラバ＝ウーザと彼の持つ永遠神剣【夜燭】の放つ気に圧倒されるばかりだった。

「もし、聞こえますか?酷い傷です、一体何があったのですか?」

「…ウ、ア……」

掛けられるその涼やかな声にも、口が開かない。だが言わなければならない。今伝えてしまわなければ、間に合わない。

「何ですか?もう一度…」

「水です。これで唇を湿らせなさい」

低く精悍な声。その声の後、唇に湿った布が押し当てられる感覚。それを啜り、ようやく焼け付いていた喉が癒える。

「…どうやら落ち着いたようですね」

「……ミニオン…、襲われ……北西……ダラ、バ…」

「――ダラバ、だと…!」

安心した声の後に、空はゆっくりと口を開いた。途切れ途切れの言葉。しかし最後の単語に、何者かが息を呑む。

「貴方！それは確かにダラバと名乗ったのですか！！」

揺さぶられ、背中と胸の苦痛に目を開く。その目に入ったのは、ブロンドの美しい髪。晴れ渡った蒼窮の様に深い蒼の瞳。

一一見覚えのある、美しい顔容は。

「一一”アルニーネ＝アケロ”…？」

「……え？」

呟いた瞬間、彼の意識は暗い闇の底へと。何かを呼び掛け続けている少女の顔も、段々と昏み懸かっていった。

The 11th Name…"燭火［ともしび］"

――その風景を彼は知っていた。遠き日、忘却した筈の日々。

「――たぁぁっ！！」

開けた丘の上の一本の大樹。そこで十歳前後の少年は木剣を振るう。振り下ろす袈裟斬り。それを、木人形に向けて。

「――イタッ！？」

その打ち当てた剣により、木人形の腕が振れた。それに頬を殴られて、少年はうずくまった。

「…ハハハ、相変わらずだな…」

「一生懸命やってるのに笑わないでよーー！！！」

響いた笑い声。陽光を背に立つ、背の高い男性。その男性に向けた少年の憮然とした声。

「そう言われてもな～、なんせ木人形にやられちまう駄目剣士を見せられちゃ笑わずにはいられないだろ？」

「ううー兄さんの馬鹿ヤローー！！」

――どうせ、自分には兄ほどの器量も才覚も無い。両親も彼には大した期待を抱いていないと知っている。

その悔しさ紛れに少年は兄を罵倒し、遮二無二木剣を振るう。そして――またも木人形の右ストレートを受けた。

「――アイタッ!??」
「アハハハハ……そんなんじゃ、家の秘伝は修得できないぞ?」
「う～～～!もういいよっ!!」

ふて腐れた少年は、木剣を投げ出してしまう。それに青年は、厳しい視線を向けた。

「良いのか、諦めても。それでお前は本当に良いのか?」
「いいんだよっ!僕にはどうせ、兄さんみたいな才能は無いんだっ!!父さんも母さんも見てくれてない…僕なんてもうどうでもいいんだっ!!」

そんな少年に青年は掌を――差し出した。その手に乗っていたのは、少年の大好物である格子状の焼菓子。

「…これはな、母上がお前の為に焼いたモノだ。そしてその木人形はな、父上がお前の為に作ったモノだ。二人とも口には出さないけど、お前の事を本当に大切に思ってる。俺だってそうだ。お前は…俺なんかよりよっぽど才能が有るんだよ」
「…う、嘘だ!僕みたいに…何度やっても型の一つもできないようなのに、父さん達が――」

ぽむ、と。その頭に青年の掌が被る。そのまましばらく優しく撫でて。

「強くなれる。お前はな、努力し続けられるって才能を持ってる。俺にだって真似できるもんじゃ無いぞ?俺は飽き性だからな」

そう言って、優しく撫で続ける青年。

だが少年は知っている。そう言う兄こそが、その才能を持っている事を。だから追い付きたくて、ずっと努力し続けているだけなのだ、彼は。その偉大な背中に、一歩でも近付きたくて。

「…じゃあ兄さんはさ、何日で出来るようになったのさ？あの型」

「ん？俺は……三ヶ月だ」

少し間を置いて答えた青年。本当はもっと短かったのだが、此処は弟を立てようと思ったのだ。

「…僕は三年経っても出来ないんだけど」

「……ガンバ」

それに青年は渋い顔をした後、取って付けた様な励ましを口にした。

「一一兄さんの馬鹿ヤローーー！！！！」

そうして夕暮れに、少年の怒声が響き渡ったのだった。

「ん……？」

目を覚ませば、そこは……角灯（カンテラ）に照らされた薄暗い室内。その油の燃える、少し鼻に付く臭い。

少しして、自分がベッドに寝かされている事に気付く。

「…目が覚めましたか？」

「え……？」

突如声をかけられて、そちらに視線を向ける。霞んだ目にはすぐに情報が入って来ないがそれは、椅子に座り、黒い鎧を纏った、長い髪を持つ――おっさん。失敬、お兄さん。

「しかし良く助かったものです。あれだけの傷、普通ならば失血死していてもなんら不思議ではありませんよ」

「……はぁ」

思わず気の無い返事をしてしまった。

「――あ、っガァッ！！」

――瞬間、正しく思い出したように背中と胸に焼け付く痛みが走り回る。ミイラの様に巻かれた包帯の上から、己の身体を抱きしめる。

「動いてはいけません。折角塞がった傷が開いてしまいますよ」

「…はい……」

「それでは皆様をお呼びしてまいりますので、タツミ殿はそのままお休み下さい」

男性は噛んで含める様にそう言うと、椅子から立ち上がる。鎧と剣が擦れて音を立てた。

「あ、はい…すみません、えっと…」

「これは失礼。私はクロムウェイと申します」

「あ、これはどうも。巽空です」

つむじを見せない挨拶をするクロムウェイ。その威風堂々たる様は、正しく『騎士』と呼ぶに相応しい。

彼は踵を返すと、扉を開けて部屋を後にした。

そのままベッドに身を預けていると、どたどたとけたたましい足音が聞こえてきた。総数は――

「七人……」

何と無く口にして、居住まいを正して身を起こす――と、そこで扉が開いた。

「空!!」
「ぶわ!!」

途端に縋り付いて来る少年。がっしりと空に抱き着いた彼は。

「な、おま…ちょ、望!!?!」
「良かった、本当に良かった…!」

そう、世刻望。戦闘装束のままの少年が、思い切り抱き着いた。

「待て、分かったから望、離せ!傷に沁みる…!!また傷が開くッ!!!」

頚元で囁く声に若干鳥肌を立たせつつも、彼には神剣士の力に抗いようも無い。為すがままである。

「お、落ち着いて望ちゃん!空くんの傷が開いちゃうよ!!」

流石にマズイと希美が止めに入る。が、その間もメキメキと力は篭

り続けている。

「シャッターチャ～ンス♪」
「撮るなぁぁぁッ！！！」

パシャリとシャッターが切られる。その様子を遠巻きに眺めていた残りの面子、沙月と信助、そしてクロムウェイと金髪の鎧少女は、苦笑を浮かべるばかりだった。

そして一通り状況の説明を終えて、現状を知る。そしてその働いた無謀を物部学園勢にこってりと絞られた。

今彼等が居る此処は『ヨトハ村』という所で、空を助けた者達の村らしい。
やっと思い出し、ポンと手を打つ。続き思い出す、虎の如く猛々しいその風貌と威圧感。それらを思い出し、心臓が握り締められた様にたどたどしく拍動する。

「それが…ダラバ＝ウーザだったのですね？」
「ダラバ？…ああ、そういえばそう名乗りました。確か…『【夜燭】のダラバ』だと……って」
「……？」

一応は反応して、彼はその声の主に向けて不思議そうな顔をした。
それを受けて、鎧の少女も不思議そうに見詰め返した。

「「……」」

しばし絡み合う視線。円く開かれた少女の瞳と、糸の様に細い空の

視線。その静かな時間は。

「……誰、ですか？」

空の一声に破られたのだった。

「カティマ＝アイギアスと申します。以後御見知り置きを」

「あ、どうも御丁寧に。巽です。巽空と申します」

カティマとの自己紹介を終え、空は頭を下げた。その人が命の恩人だった事も思い出して。

「本当に有難うございます、アイギアスさん。貴女達に助けて貰えなかったら今頃どうなってた事か…」

「そんな、お気になさらず巽殿。困っている方を見れば助ける。当然の事をしたまでですから」

先ず『巽です』と名乗った為に、苗字で呼ばれる事になってしまったらしい。互いにペコペコと頭を下げ合う姿は、何と無く部屋の空気を弛緩させた。

「それに、巽殿のお陰で私はあの場所へとたどり着く事が出来たのですから。感謝してもしきれません」

「感謝……？」

その不思議な物言いに、彼は疑問を抱く。感謝すべきは自分の方なのに。そして、妙に下手に出られているのは何故だろうか、と。

「はい、お陰で他の天使様方とも出逢う事が出来ました。巽殿は我々の導きの天使なのです」

それはその言葉で確実なモノとなった。

「…『天使』って何の事フッ!?!!」

突然息を詰まらせる空。沙月の、【光輝】を纏う一撃が入ったのだ。

「…良いから黙って話を合わせておきなさい。分かったわね…」

「了解、雇用主……」

恫喝の様な…否、正真正銘の恫喝に空は頷いた。頷かざるを得なかった。

「あ、あの…どうなさったのですか?見事な手刀が延髄に入った様に見えましたが…」

流石は戦いを旨とする剣士、その文字通り閃光の様な一撃もきちんと目撃していた。何事かと驚きに目を大きくして。

「ああ、なんでもないわ。ちょっと記憶が混乱してたみたいだから叩いて直そうと思ったのよ」

「俺は昭和のテレビですか?ってか、どっちかといえばそのお陰で記憶飛びそうになったんですけど」

しれっと言う沙月に、間髪容れず空のツッコミが繰り出される。

そこに望の苦言が入った。

「先輩…空は怪我人ですよ」

「望…お前が言うな」

薄く開いた眼がギラリと光り、当然その天然ボケも撃墜する。望はバツが悪そうに、ナハハと笑った。

「あ、そうです。忘れていました」

と、カティマが何かを思い出した。少し離れた衣装棚から、包みを差し出す。

開いて見れば、それは彼が見に付けていた一式。破け、血と泥に塗れた上着。砕けた小太刀弐本とその鞘。弾薬類と、ホルスターに収まった【無銘】。そして一一お守り。

「…アイギアスさん、他に…有りませんでしたか？」

低く呟く空。その顔面は蒼白。いつもの細目をも忘れ、切れ長に開いている。

「…申し訳ありません、その…証明になれば、とお借りしました」

その様子に慌てたカティマが、何かを差し出す。その掌に載っていたのは、彼の携帯電話。この世界に来てからは時計機能くらいしか使えなかったモノ。…『つい最近までは』。

だがそれではない。彼が探しているのは、別のモノだ。

「…鍵は、在りませんでしたか？このくらいのサイズの」

「鍵…ですか？いえ、巽殿がお持ちだった物はそれで全てですが…」

「…そう、ですか」

一度深く息を吸い込み、大きな溜息を落とした。

その後、怪我人の空以外は村で催されているという宴…とは言ってもささやかなモノだが…に戻っていく。

「一一巽くん」
「一一はい？」

最後に扉をくぐろうとした沙月が、立ち止まり呼びかける。何事かと、空は若干身構えた。

「私はね、君が苦手。何を考えているか解らないし、スタンドプレーばかりだしね」
「…はぁ…それはすいません」
「だけどね一一」

がん、と。戸を叩く音。握られた沙月の拳が立てた音だ。振り向かないまま、後ろ姿のままで彼女は言い放った。

「あなただって物部学園の一員、護るって言った皆の一人よ。…次に自分の命を軽視した行動を取ってみなさい、その時は一一私があなたのチカラを打ち砕いてあげる。…覚えておきなさい」
「……了解、雇用主」

残るは空ただ一人。一人彼は苦笑して、枕に頭を沈めた。

思考を深みに落とす。感じるのは、紅い闇。

「…よぅ、『俺』？」
『……』
「散々邪魔してくれたな。いい根性してんじゃねェか？」
答えは返らない。だがそれでもいい。こっちから一方的に告げるのみだ、今回は。
「今回きりだ、許してやるのは。今はすこぶる気分が良いからな。ようやく戦える様になった。ある意味じゃお前のお陰か」
『……』
「そう、次は無いぞ『蕃神』？同じ事をもう一度遣ってみろ、俺の手で貴様を撃つ。…解ったな！」
有りったけの殺意を篭めて叩き付ける。脅しなどではない、もう、それが出来る。
『…解った。これよりオレは裏方に徹する。必要とした時以外は出て来ない、それで良いんだろう？』
「殊勝だな。だが、それで良い」
話を終え、拍子抜けする程にあっさり引き下がったソレに応えて。彼は意識を浮上させる。
『一一だがな、一つ言っておく。もし貴様に隙が有れば…オレは容赦無く貴様を殺す。その心を打ち砕いてな！』
「やれやれ…構わないさ」
遠ざかる気配に、彼はそう…苦笑しながら呟いた。

The 12th Name…"決意"

部屋の壁には、涼やかな夜気を流し込む窓。大きな満月が覗き込んでいる。

「……」

一人、彼はベッドに寝そべり天井を見詰める。その胸に手を当てれば、ギシリと確かに、傷が痛んだ。

希美がかけた治癒魔法も、人間と変わらない彼の身体には大した効果を及ぼしてはいない。自然治癒に任せる以外は無いようだ。

「――ッ……！」

遅れてやってくる震え。

思い出す、圧倒的過ぎるその強さ。経験と実力に裏打ちされた、虎の如く獰猛な刃金の体躯。

思い出す、神のチカラの結晶。その黒刃、永遠神剣【夜燭】の煌めき。

――あれが、本物だ。本物の強さだ。純然たるチカラ。何もかもを、善悪も道理も不条理も、全てを捩じ伏せるだけの神のチカラ。

感じたのは畏怖。そして魂の奥底から沸き上がる――久しく忘れていた感情。

「――勝ちたい……！」

――渇望。あの存在に勝ちたい。あのチカラを撃ち倒したい。その

渇望が。
俺のチカラでは一切敵わなかった。だが、それは『今の俺』。今は敵わないが、それでも俺はあの絶望的な状況から生き残った。死ぬと覚悟したあの状況から。

――だから、まだ太刀向かえる。俺自身が持つ『可能性』を信じて――！！

「…ッく…！」

身を起こす。ベッドから降りる。

――ならば、こんなところでのうのうと休息など取っていられない。今すぐ始めなければ。少しでも実力差を埋める為に。人間が神に対抗するには――血を流すしかない。

【…無茶しますなぁ。傷が開いても知りませんえ？】

番えた【無銘】から、幽月の思念が流れ込む。それに何一つ答える事無く、彼は扉を開いた。

一方その頃。静まり返った階下では、カティマとクロムウェイが向き合っていた。

流れる空気は重い。それもそうだろう、ようやくダラバ率いる『軍事国家グルン＝ドラス』に対抗できるかもしれないと期待していた『天使』から、『結論は待ってほしい』と告げられたのだから。

「…色良い返事が頂ければ良いのだが…」
「…仕方ありません。彼等とて彼等の事情があります。それに…彼等の助力が得られなかったとしても、今までと変わらないというだけの事です」
カティマは己の胸に拳を当てる。当てたままで、決意を新たにするように、そう呟いた。

床の軋む音が響いたのは、そんな折。二人は機敏な動作で、音源を見た。
「…あ、どうも…」
「巽殿…！まだ動かれては…！」
「大丈夫ですよ、これでも一応神の武器の遣い手ですから」
慌ててクロムウェイが駆け寄ろうとするが、空はそれを押し止める。
「…あの、すみません。水を頂いても良いですか？残り物でも良いんで、出来れば食事も」
「ええ、問題は在りませんが…」
『本当に大丈夫か？』という疑問を顔に張り付けたまま、クロムウェイは奥の部屋に消えて行った。

慣れない右手で食事を摂り終え、宴での話を聞き。その内容に考え込む。腕を組み、包帯に包まれた左手の親指を眉間に当てた。

「望殿達はお帰りになられました。巽殿は…動くのは危険ですので、今日はここでゆっくりしていかれた方が良いかと私が具申致しました。差し出がましい真似をしてしまい、申し訳ありません」

部屋に居るのは空とカティマのみ。クロムウェイはカティマの指示で部屋を出ていった。

「そんな、御迷惑を掛けているのはこちらですよ。厄介者の為に手を煩わせてしまって、本当に申し訳ありません」

またもペコペコと頭を下げ合ってしまう。元より気を遣う性分の二人である、止める者が居ないと際限が無い。

空は自ら水を注ぎ、一気に飲み干した。何かを振り切る様に。

「…クロムウェイの話では、巽殿の傷は二週間程で塞がるだろうとの事です。【夜燭】の切れ味は凄まじいの一言に尽きますから」

「…二週間ですか…。長いな」

深くは無いが、広い傷。背と胸に走る刀傷。縫合してあるそうだが、包帯で見る事は出来ない。

今は治癒魔法に治癒を促進されたお陰で瘡蓋（かさぶた）が張っている状態で、激しい動きをすればまた割けるだろう。

「……巽殿は、あの暴君ダラバ＝ウーザと戦って…生き残ったのですよね？」

「…生き残ったと言うか…逃げ延びた、ですけどね…」

一一全く、少し戦えるようになったかと思えばこれだ。相も変わらず、よくよく運が無いな。

「十分に凄い事です。あれは、目に映る全てを殺戮し尽くす悪鬼。あの場には鉾も多数いたのでしょう？」
「俺だけの力じゃ、まずあそこで死んでましたよ。クリストの皆がいてくれたからです」

――彼女らも、上手く逃げ延びたらしい。斑鳩の話では随分と心配してくれていたそうだ。後で詫びを入れないと。
…しかし、つくづく因果な話だ。南北の剣神の転生体が争う世界、か。未だに争う宿命に在ったとは。

記憶に残る情景。かつて、自身も『神』として参戦したその神世を弐天に分かつ騒乱『南北天戦争』の一幕。もはや、セピア色に褪せきった活動写真の様にしか思い出せないその記憶。それを、水を飲みながら漁っていた彼は――

――ガタッ！

「――え？」

突如として立ち上がり、その場にひざまづいた彼女の行動に面食らった。

「――巽殿！平にお願い申し上げます！！どうか、どうか我々に御協力いただけませんか！！」
「あ、アイギアスさん！？頭を上げてください！！」
「お願いします！圧倒的な実力を持つダラバ、尽きる事無い鉾…もう、我々の力だけでは限界なのです！！どうか…皆様の御力をお貸しいただきたいのです！！」

切羽詰まった様な早口。それに空は悟る。宴の席で、彼女らは物部

学園の一行が彼女らの期待していた『天使』でない事は解っているはず。協力を申し出たが、色良い返事が貰えなかった事も聞いた。

「…お願いします、巽殿。巽殿からのお口添えを頂けませんか…？どのような条件でも…構いませんから…」

だから、追い詰められてしまったのだろう。もとより責任感の強い彼女は。

「…貴女が、そこまでする理由は何ですか？」

その問い掛けに、カティマはしばし逡巡する。だが、意を決したらしく顔を上げる。

「私は――ダラバに亡ぼされたアイギア国の王位を継ぐ資格を持つ者…カティマ＝アイギアスです。グルン＝ドラス軍事国家の圧政に苦しむ国民達を救う為に、全てを以って答える義務があるのです…」

ある種想像通りの答えに、彼は再び左手を眉間に当てた。どう考えてもその美質、物腰は戦場のモノではない。どこぞの貴族か、あるいは、と。

そしてその眼を開き、彼女を見遣る。鋭い三白眼。彼女また、瞳を逸らす事無く彼を見詰めていた。

――気丈な人だ。恐らくは一番、知り合って間もない者同士だろうに。

水を、飲み干す。そして――決意を固める。その決意に応えて、一向に冷えない頭で答えを出した。

「…アイギアスさん、そうやって御自分を犠牲にして、本当に国は平和になれますか？」
「そんな事、国を救う為に上に立つ者が犠牲となるは必定！それが間違ったモノだと誰が言えますか！！」
空の質問に、カティマは初めて語気を荒げた。それに彼は更なる言葉を紡ぐ。
「質問を替えます。ここで俺が応えたとして、そうやって成し得た平和の果てに、貴女に何が残りますか？」
「私に…残るもの…？」
「ええ、そうです。貴女に残るものは何ですか？」
その問いに、はたと黙り込む。薄紅色の唇が開いたり閉じられたり。言葉が出たのは、余程してから。
「…平和…平和と勝利、国民の安寧が…」
「違う。それは貴女のものじゃない。国のものだ。俺が聞いているのは貴女に残るもの。それを聞かせて欲しいと言った」
それを一刀の元に斬り伏せる。彼女の瞳が揺れ、ついに視線を逸らした。
「…何も、無いでしょう？始めからコレは取引にならない。俺ばっかりが得してしまうんですから」
「…巽殿」
彼女が彼に視線を戻した時、既にその眼は微笑んでいる様に見える糸目。その頼りなげな様子で、彼は己の鼻の頭を掻いた。

「…駄目なんですよ俺、そういうの。得しようとしてる奴を出し抜いて一人勝ちするのは大好きなんですけど。…他人が自分から損しようとしてるの見ると、どうしても我慢出来ないんです」

目線を離して窓の外を見遣る。…彼には、満月が笑いを堪えている様に見えた。

「良いじゃないですか、もっと欲張っても。何かを犠牲にしなきゃ何かを得られないってのは当然ですけど、だからって犠牲を強いる必要なんて無い…」

――恥ずかしい。物凄く恥ずかしい。あの窓から飛び出して、夜の森に躍り込んで逃げ出してしまいたい。

その衝動を堪えて目線を戻す。不安げな眼差しに、苦笑を送る。

「…良いじゃないですか、今回は一人勝ちしたって。相手は悪逆非道の殺人鬼。どんな理由であれ、人を殺したからには殺されるのを覚悟してないなんて言わせない。一方的に奪い取っていった奴から一方的に奪い返す。それこそ痛快、それでこそ王者ってもんですよ」

「…言っている事が、前後で目茶苦茶ではありませんか？」

そのある意味破綻した論理に、彼女はクスリと。ようやく愁眉を開く。

待ち望んでいた台詞を聞けた事に空の表情も和らいだ。

「だと思えるなら、ちゃんと判断出来ますよね。貴女がどうするべきか」

彼女はゆっくりと瞼を閉じた。そのままゆっくりと思案して。

「…はい、無礼を働きました。お許し下さい…巽殿」

やっとその、晴れやかな一一気高い満月の様な笑顔を見せたのだった。

「ハハ、第一俺に取り入ったって良い事無いですよ。何の影響力も無い三下ですし…」

その笑顔を受け、彼もまた苦笑いを以って答える。あまり上半身に負担をかけない様に立ち上がった。

「…それに、何も言われなくたって俺は貴女方に協力させてもらう心算(つもり)でしたから」

「一一え？」

カティマの笑顔が驚きに変わる。空は水差しの水を全てコップに注ぐと、それを飲み干した。

「なんせ、この命は皆さんに救って頂きました。更には食事まで頂きましたし、これでハイサヨウナラなんて真似は俺の矜持が許しません」

「巽殿、では一一」

思わず立ち上がる彼女の眼には、希望が灯っている。そんな彼女とは対称的に、今度は彼がひざまづいた。

「他の皆がどんな結論を出すかは解りません。ですが、少なくとも俺は一一この『【無銘】のタツミ』は、協力させていただきたい。恩顧に報いる為に、そしてこの身に受けた屈辱を返す為に。俺を傘

下に加えてやってください…『姫君』」

その手に【無銘】を持ち、頭を垂れる。
それは、数時間前に彼女が望達に行った行為に良く似ていた。

「…私は、姫ではありません。ここに在るは神剣士『【心神】のカティマ』です」
「いいえ、貴女は立派な王者だ。そんな貴女だからこそ、助けとなりたいんです」

眼を閉じ、反芻する。その時間は刹那。

――そうだ、それで良い。これが俺が望む事。貫き通すべき俺の一一壱志(いじ)だ。

「…ありがとうございます、巽殿。本当に、本当にありがとうございます…」

安堵したのだろうか、うっすらと涙すら浮かべて。彼女はそう呟いたのだった――……

夜風が枝葉を擦り、さらさらと音色を奏でている。その静かな夜の森を、三人が歩いていた。一番前に、角灯を持つ少女の影。その後ろに付いて歩く大柄な影が二つ。

やがて、影達が立ち止まる。その前には小高い山…次元くじら『ものべー』だ。

「では、これで失礼します。お休みなさいませ…巽」

先頭に立ち、角灯を提げていたカティマが振り返る。

巽、と呼んだカティマ。先程の誓いによって、僅かな間になるだろうとは言え臣下の礼を取った空が、自ら『呼び捨てにしてほしい』と願った為だ。

「ええ、それでは…姫君、クロムウェイさん」

それに応え、彼は頭を下げた。クロムウェイに借りた黒い外套を纏う空。

そして当然、カティマは『自分だけが呼び捨てにするのは心苦しい。自分の名も呼び捨てにしてほしい』と告げたが、それは空に断られてしまった。『臣下がそんな事では周囲に示しがつかない』と。

手を鳴らすと、彼は光へと変わり、やがて消えていった。

空を見送った後、彼女達はヨトハ村の神木の下へとやって来た。そこには、月光に照らされる一つの岩が在る。自然石ではなく、意味があってそこに据えられたものだ。手入れの行き届いているその岩には、苔すら生えていない。

彼女は一つ溜息を落とした。そして胸に手を当てる。

感じたのは、心を圧迫していた澱が溶け始めている事。今だにその責任という名の膿は流れ出してはいない。

しかし…確かに、彼の言葉に動かされた心があった。

「…クロムウェイ。私は信じます、あの方々を。きっとこの出逢い

は偶然などではない、天が遣わせてくださった『運命』なのだ、と」
「…思う通りにしなさい。それが貴女の導べとなるでしょう」
「はい。…両親より受け継いだこの命で、必ず一一この大地に安寧をもたらして見せます。御照覧下さい、母上…」

その清々しい顔。先程までの追い詰められた気配の消えた笑顔に。
クロムウェイは満足げに笑い返した。

昇降口から彼は、自室に戻らずある部屋を目指す。
その扉を叩いて名乗り、開けば一一

「アッキーのバカーー一っ!!!」
「ぶふーーーっ!」

顔面に赤いモノがぶつかった。

「まったくもーっ!心配かけてーっ!」
「だからってお前…飛翔ユニットぶつけてくる事ねェだろ…」

椅子に座一一らせて貰えずに、床に正座させられる。少女達は机の上から、そんな空を見下ろしていた。

「まぁ、今回ばかりは自業自得だ。随分と気を揉まされたんだからな、我々は」
「……」
「うぐ…すみません…」

ルゥとポゥの責める視線に、彼は殊勝な態度で俯く。

「でも、あれしか無いと思ったんです。気配を断ち切れる俺が最後に離脱しなきゃ、ミニオン…この世界では鉾って言うらしいですけど、あれを振り切れませんでしたから」

「…その為にタツミ様が命を落としかけても、ですか？」

「…はい。それでも、です」

しっかりと五人を見つめて。そう断言した空。

…鼻にティッシュが詰まっていなければ様になったかもしれない。

「…それは、身勝手です。そうして命懸けで誰かを守ったとして、遺された者が喜ぶと思うんですか！」

珍しく語気を荒げたミゥ。気圧され、彼は目を開いた。

「タツミ様、こんな事はこれきりにして下さい。もう二度と、自身を盾になどしないで下さい。…お願いします」

「…ミゥさん」

沈痛な物言いに、他の皆の表情に、空は悟る。恐らくは彼女の過去に何かがあったのだ、と。

「……すみません、約束は出来ません。俺には自分の命しか賭けるモノがありませんから」

「――あなたね…！」

その返事に、ゼゥが眦を吊り上げる。だが、彼はミゥを見据えたままで。

「――でも、死ぬ気はありませんから。必ず生き残る、その意志の元に命を賭けてます。だから、それで勘弁してください」

はっきりと、その決意を告げる。己の意志を。

「……」

しばらくそうして見詰め合う。やがて――

「…何を言っても、曲げられはしないんですね…」

「すみません…真っすぐしか取り柄が無いもので」

やがて、諦めた様に呟かれた言葉。曲がらないモノ同士がぶつかったのなら、どちらかが曲がるしかない。彼女が、折れたのだ。

それに苦笑を返して、空は頬を掻いた。

「ですが、それならこちらにも考えが在ります。ねぇ、皆？」

「はい？」

と、ミゥが周囲を見渡す。並ぶ少女達が頷き返す。

「タツミ様、サツキ様の言葉はお聞きになっていますよね？」

「…は、い…」

段々と彼の顔色が悪くなってくる。青ざめている。

――ヤバい、殺られる！あの人はやる、必ずやる！喜々としてやる、絶対！

「…もしこの場でタツミ様がそういった言葉を口にしたなら、好きにして良いと。サツキ様は申されました。なので私達の好きにさせて貰います」

「あの、命だけは！」

土下座しかけた空。その少年に――

「私達が、タツミ様をお守りしましょう。そして思い知ってください、私達がどんな思いをしたかを」

彼女は、意地悪く笑いながら告げたのだった。

The 13th Name…"鴉［カラス］"

森の中を歩く一団。学園所属の遣い手達。

その最後尾をゆっくりと歩く、黒い外套の少年。その背には身長よりも長い和傘。

昨日クロムウェイから借りた袖付きの外套。それを袖を通さず肩に掛け、紅い襟巻きをした空だ。

そんな彼の心を占めているのは、今朝の集会で沙月が口にした、『この世界から出られない』という事に関してだった。

――プロテクトが掛かっている、か。だとすればそれがダラバの仕業と考えるのは当然の流れだろう。

【あれまぁ、どういう事ですのん？まるで他に黒幕がおる様な物言いどすなぁ？】

（ああ、当たり前だろう？普通は姫さんが戦争の助けを得る為に留め置こうとしているんじゃないか――そう考えると思うんだが、まぁ確かにあんな高潔な人物がそこまでするとは思えないからな）

そこで一旦言葉を切り、彼は前を歩く八人を見る。中列のクリスト達はいつも通りの飛翔ユニット、最前列の三人は全員が神剣士としての装束。何か話し合っている。

――ただ、あいつらは姫さんじゃ無いならダラバだろうと言った。だがそれを言うなら、ダラバにだって俺達を閉じ込めておく必要なんて無いだろう。むしろ出ていって欲しいはず。

その考えに至り、彼は一つの『光明』を得たのだ。

（――『光をもたらすもの』、か）

あの日、闇天から降り注いできたミニオン達。彼らが漂流を始める原因となった出来事。

――それが、実は此処に繋がっているとしたら？

ミニオンはあくまで駒。駒だけで戦いは出来ない。必ず遣う人間――神剣士が居るはずだ。

そいつがこの世界に来ているとしたら？更に言うなら、ダラバと協力関係に有るとしたら？俺達を閉じ込めておく理由が出来上がる訳だ。

まだ確証はない。しかし論理的に考えて最も納得出来る。勿論、姫さんが遣っている可能性、ダラバが気まぐれで遣っている可能性もゼロじゃない。窮めて低いとはいえ、可能性が有るならそれも有りだ。

（それにしても、斑鳩はこの事を望達に話してないのか？）

その紅い髪の少女をちらりと見遣る。異世界出身のその少女を。

――さてさて、『旅団』と言うのもなかなかにきな臭い組織らしいな。気を付けておいた方がいいだろう。

「…空くん、大丈夫？肩貸そうか？」

「え！いや、大丈夫大丈夫！もう平気だって！」

突然間近に迫った希美に話し掛けられ、深い思考の海に沈んでいた

彼はおののいた。考え込んでいる表情が痛みを堪えている様に見えたのだろう、気遣わしげな様子で。
そして注目を浴びている事に気付き、眉間に当てていた左手を少し下ろして咳ばらう。

口元に添えた左手は、黒い篭手。指先までを鋭い鈎爪のガントレットに包まれている。足元は靴ではなく脚甲（グリーヴ）。
腕を出した為に割り開かれた外套から覗くのは、その身を包む黒い麻の単衣物と同色の袴。
その腰に下げられた、三つのホルスターと二つの小太刀。

その出で立ちは、先の戦いでやはり制服は動きづらいと覚った為だ。何より、制服は貴重品。簡単に破いたり汚したりしては厳しいものが在る。

着物は、彼の部屋として割り当てられた倉庫の片付け中に見付けたもの。以前の学園祭ででも使われたのだろう、それを拝借した。安物だからだろうか、軽くて動きやすい。

――怪我も癒えぬ内にこの装備で歩くのは辛い。だが、それも自身を打ち鍛える為。ならば、苦になどならない。望むところだ。

「さて、急ごう。ひ…アイギアスさん達が待ってるだろうから」

ただ、その格好の恥ずかしさには慣れない。彼は外套のフードを目深に被り口許まで襟巻きを引き上げ、更には鋭角な面兜（バイザー）を取り付けて顔を完全に隠すと、先を急ぐように促した。

その黒尽くめの少年を見ながら、望は浮かない顔をした。先程の会での事からだ。生徒の意志の一致を見た背景には、彼が徹底的な主戦論を展開した事が有る。普段のそういう場では昼行灯を決め込む彼が、沙月すら圧倒する程に強硬な姿勢を見せた。…その後無理難題を押し付けられていたが。

「なぁ、空…お前はさ…どうして闘うんだ？」

だから、問う。未だに『殺す為に闘う』という事に躊躇を持つ彼は。

「…簡単だな、それが俺の壱志だからだ」

「壱志…？」

それに応える少年…最早見た目ではカラスのような彼は、バイザーの奥の三白眼を向けた。そして事もなげに、ただそれだけを言い放つ。

「俺はアイギアスさん達に命を救われたし、ダラバに屈辱を受けた。それを返す、必ず。俺は俺自身の壱志を貫くだけだ」

「それだけ、か？」

「ああ、それだけだ」

迷いなど微塵も無い。そんな彼の真っ直ぐな態度が、望には解らない。

「……」

陽射しの中でも影の様な少年。その姿を見詰めながら、望は一一己の闘う理由を問う。だがやはり、それを掴む事は未だ出来なかった。

ヨトハ村に着き、早朝の全校集会で決まった『協力する』という決定を告げる。
途端に感極まったカティマが、望に抱き着いた。それに希美と沙月が表情を硬くしている。

【感激屋さんどすなぁ。しっかし、旦那はんやのうて世刻のボンどすかぁ…】

『…元々アルニーネはジルオルに惚れていた節が有るからな。それが受け継がれていれば一目惚れしていても不思議じゃねェだろうよ』
（…お前らどんだけ下世話な話してんだ。人の色恋に首突っ込んでんなよ…）

【へーん、女っ気皆無の旦那はんには関係ない話どすわいな！】

『情けねェ話だぜ…』
（お前ら纏めてマナの霧に還れ）

精神会話でツッコミを入れつつ、周囲を見渡す。
外野は盛り上がっている、それもそうだろう。今までカティマ一人で絶望的な戦いを繰り広げていた所に、鉾に対抗できる九人もの援軍が現れたのだ。

「喜ぶのはまだ早い。我々はこれでようやく対抗できる戦力を得たに過ぎない。ダラバの手に【夜燭】が有る以上は油断できない。…それで無くとも、奴はかつて『アイギアの飛将』として勇名を馳せた実力者なのですから」
「…あの男は、やはりとんでもない奴なんですね」

そんな中で、やはりクロムウェイは冷静。

「…ええ。大陸無双の武だけで無く、用兵においても神出鬼没にして大胆不敵。彼の進む道を妨げる事は、鉾が無い頃から既に不可能といっても過言では無かった」

語るクロムウェイは、苦い顔。その物言いは、まるで――

「伝令ーーー！！！」

だがそれは、もたらされた火急の知らせに破られた。

森の中を走る、三つの飛影。

《どうですか、タツミさん？何か感じますか？》

「ああ、街道沿いに鉾の気配が有る。アズライールまでの道は両方押さえられてるな」

《…ふん、やってくれるわね。確かに神出鬼没だわ》

ポゥ、ゼゥ、空の三人だ。彼らは斥候として、アズライールという街までに布陣した鉾の様子を探る役目に就いている。

遊撃戦闘に長けるポゥ、隠密性の高いゼゥ、自分やその周囲の気配を断ちつつ、広大な範囲を索敵できる空。正にうってつけというべき役割。

《タツミさん、傷は…》

「大丈夫だ、心配しなくていい。…有難うな、ポゥ」

懐から取り出した地図――クロムウェイから借り、学園で主要メンバー分コピーしたもの――に、その布陣を記入していく。

一一急襲を受けたアズライールは、反乱軍の補給拠点。隣国クシャトとを結ぶ要衝。ここが陥落すれば、反乱軍は一週間と体制を維持出来ない。

記入が終わり、彼は更に懐から何かを取り出す。

「一一こちら巽。聞こえますか、会長？」

耳に当てるのは、携帯電話。中継局の無いこの世界では使えないはずのもの。

『こちら斑鳩、聞こえてるわ。首尾はどう？』

それに答える声が有った。沙月だ。

一一形こそ携帯電話だが、その実はトランシーバーだ。ものべーを中継局として半径４０Ｋｍをカバーする性能が有る。神剣を使う交信が出来ない彼が、遠方の友軍と交信する為に用意したモノ。当然、【無銘】のチカラで作り上げたモノだ。

その得た情報を余さずに伝えた。今頃はそれを基に編成が組まれているだろう。

携帯を懐に戻す。地図を確認し、脇の二人に目を向ける。

「…アズライールまでは半日は掛かるな。マナはもつか？」

《心配しなくても、節約すれば二日はもつわよ》

鬱陶しそうに答えたゼゥ。だがもう慣れた空は特に気に留めない。

「そりゃ結構。往くぞ！」
《はい！》
《命令するんじゃないわよっ！》
「いちいち噛み付くな真っ黒チビ助！」
《あんただって真っ黒でしょっ！この真っ黒デクノボウ！！》
《ふ、二人とも静かにしてください～…》

少し喧しい斥候達は、深い森の中に紛れていった。

一方、湖畔の都市シーズーを抜ける道を選択した望とカティマ、そしてルゥ。

「これで、シーズーは解放ですね…」
「ああ、今頃は希美と先輩、それにワゥがラダを解放してくれているはずだ」

消滅していく鉾を見下ろしながら呟くカティマ。それに【黎明】を鞘に戻しながら望が答える。

偵察部隊によって得た情報により、彼らの進軍ペースは速い。リアルタイムで送られてくる鉾の進攻状況に合わせて纏まった作戦行動を行う事により、散発的な波状攻撃を仕掛けてきた鉾達は各個撃破された。その後各街を防衛線に篭城戦の構えを取った所を捻り潰された。

一一各街を解放し、最終的にアズライール直前の街道で合流。足並みを揃えて進軍する事で、この戦闘を終結させる。それが反乱軍の

立てた筋書だ。

周囲の気配を探ったカティマが【心神】を下ろす。情報通りの数だった。

「グルン＝ドラス軍の兵士達も降伏を始めたらしい。後は反乱軍の兵士達に任せ、吾らはアズライールに向かって進軍するぞ。森の中にも鉾が待ち受けているのだから、十分に気を付けるのだ！！」

「頭の上で騒ぐなって。それと地図を広げるのも止めろよ」

「あ、こら！！何をするかぁ！」

頭の上で騒いでいたレーメから地図を取り上げ、望はそれを眺めた。シーズーとアズライールを結ぶ街道は、パルター湖に沿った一本道。そこに横たわる森の中には、二個小隊分の鉾が息を詰めているとの事。

「行きましょう、望。一刻も早くアズライールを解放しなければ…！」

「カティマ」

「――はい？」

早くも門をくぐろうとした彼女の肩を、望が引き止めた。それに驚き振り返った彼女の目に、優しげな微笑みが映る。

「少し休もう。俺達が突出しても、後続がいないんじゃ足踏みだ」

「何を言っているのです！こうしている間にもアズライールの民が…！」

その手を振り払おうとして――気付く。自分がまた、追い詰められていた事に。

「……駄目ですね、私。また心配を掛けてしまいました」
「…『また』？」
「ええ。巽にも心配を掛けてしまったというのに、更に望にまで…」
その名が出た事に、彼は少し驚いた。
「恥ずかしながら、私は焦っていました。それ故に彼に無礼を働き…それでも彼は、私達に協力すると申し出てくださいました。その言葉にどれ程救われた事か…」
その友人の気持ちが判らなくなっていた望には、それは。
「彼は、強い人です。強い信念を持っている。どのように横槍を入れようと、決して曲がらぬ意志が有る。まだ知り合って間もありませんが、それだけはひしひしと感じられました」
「…決して曲がらない意志、か」
望は、噛み締めるように呟く。その心には、少なからず猜疑心を抱いた事に対する後悔。そして――
「…負けてられない、な」
「え？」
「俺もカティマの助けになりたい。俺は、空みたいに迷わず貫く事は出来ないかも知れないけど…。それでも、自分の決意を信じたいんだ。カティマを信じたいっていうこの決意を」
その友の決意に続こうという決意。そして新たな友を信じるという決意。ただ、友達を信じ抜くと。彼はその決意を口にした。

――それが、空と望の差。空があくまで『恩返し』なのに対して、望は進んで『協力』を申し出た。その思いの差。

「え、えぇ…!?えっと、その…あ、あの…望にはとても助けられました!私達に協力すると申し出て頂いた時の感激は、それはもう筆舌に尽くし難く!!」

「そうかな。だと良いんだけど」

「ええ、そうですとも!!」

その突然の言葉に、カティマはポッと頬を染めた。しどろもどろになりながら、自分でもよく判らない言葉を紡ぐ。

ぐっと望の手を握り、カティマは勢い込んで口にした。

「オホン!そろそろ休憩は終わりだ!!それ、キリキリ歩け!!」

と、不機嫌さ全開のレーメが望の耳を引っ張った。

「いでで!なにすんだよ!」

「うるさいわ!歩けったら歩けったら歩けーーーっ!!!!!!」

その怒声は、街の中で反乱軍の兵士に指示をだしていたルゥにも聞こえたという……

The 14th Name・・・"月夜の道"

――斜陽に照らされ、深紅に染まったその街に。彼らは立っていた。

【黎明】を鞘に収める事も無く、ただ呆然と立ち尽くす望。

――アズライールは反乱軍によって奪還された。既にそこを守っていた鉾も、彼らの手により討ち滅ぼされている。

【清浄】を支えにしたままで、うなだれる希美。

――先のラダ、シーズーに移動していたらしく、アズライールにグルン＝ドラス兵の姿は無かった。

沈痛な面持ちでその有様を見遣る沙月。その周囲には、クリスト達がやはり沈んだ表情で集っている。

――それはそうだろう、何故なら…

半壊した教会の石段に腰掛け、面相を曝した状態で虚空の月を見上げる空。

――そこはもう、『街』ではなかったから。

「…何故だ、ダラバ＝ウーザ？何故このような子供まで…！！」

血と死と煤の臭いが充満するその廃墟の中で、カティマは歯を噛み締めた。【心神】を地に刺すと、膝を折り、その足元に転がっていた黒焦げの子供の死体を抱え上げる。未だ燻り続けるその死体を。

それは、ボロリと崩れて地に落ちていった。

「私のせいなのでしょうか？彼らをこんな風にしてしまったのは…私がいたからなのでしょうか？」

「…それは違う」

「どうして…」

両の拳を地に打ち付け、ただ彼女は自傷する。自分の心を刈る。望の声も耳には入らない。

一一自分達が、反乱軍がこの街を経由した補給路さえ持たなければ。こんな事にはならなかったのではないかと。そんな、どうしようもない事を。

兵士達の中からも、啜り泣く声が聞こえ始める。この中にも、もしかしたらアズライール出身の者も居たかもしれない。

「一一ッ！！」

その時、本当に突然に。カティマは頭を地面に打ち付けた。驚き、誰しもがその姿を見つめる。

「…今此処で一番してはならない事…。それは安っぽい涙を流す事です。それだけは…許されません。泣いてはいけないのです…。我々には、そのような資格は、無い」

何度も何度も叩き付け、血が流れようとも止めようとはしない。泣き声が止む。その姿は、ただ自分を打擲しているというよりも、この地に無念の内に果てた者達に懺悔しているように見える。

「私達に出来るのは、この怒りを更にたぎらせ…ダラバにぶつける事のみです。それしか、私達には……」

尻すぼみの声、その悲壮な決意を秘めた顔。そして――

「アアアアアアァァァァーーーーーッ！！！！！！！！！！」

その、悲鳴とも雄叫びとも取れる叫びが、彼女の口からほとばしった。そのままふらりと身体を傾げ…地に倒れ伏したのだった。

その葬送に立ち会っているのは、学園関係者ではただ一人。反乱軍の一人に名を連ねる空のみだ。

望達はカティマの看護に就いている。

燃え盛る葬火に照らされ、居並ぶ兵士達は沈んだ顔を闇に浮かび上がらせていた。

「…巽殿。もう、お休みになられては如何ですか？後は我々だけで十分ですから」

「…すみません。間に合わす事が出来無くて」

物部学園の制服に身を包んだ空は、焔を見つめたままで呟く。クロムウェイはただ、首を横に振った。

――彼らがアズライールに到着した時、そこはもうこの有様だった。

それは彼らのせいではない。恐らくは、制圧直後に虐殺は行われたはず。

…だが、散々期待を持たせておいてこれは無いだろう、と。空は自嘲する。

「…皆、御苦労様です」

そこに、彼女が現れた。一眠りして落ち着きを取り戻したのであろう、いつもの優雅さ。

「カティマ、具合は？」

「……」

顔を伏せるその仕種に、クロムウェイは悟る。やはりまだ、この頑なな少女の心は溶けきってはいないのだと。

「今日はもう、休みなさい。巽殿も」

「ですが…。いえ、分かりました。民達の供養…宜しくお願いします」

「では俺も、これで…」

その言葉をしおに、カティマは反乱軍の野営地に。空は物部学園へと帰っていった。

翌日。物部学園の門を、クロムウェイと数人の兵士がくぐった。揃って蒼白の顔色には余裕が見受けられない。

「沙月殿！沙月殿は居られますか！！」

その誰何は校舎全体に響き渡る。何事かと、起き抜けの一般学生達

が物影から覗いている。

「クロムウェイさん、どうしたんですか！」

「こちらに、カティマはお邪魔していませんか！？」

挨拶も無く本題を切り出す。普段の彼ならば考えられない事。それだけ緊迫した状況なのだ。

「いえ、こちらには来てませんが…まさか！」

沙月も、その可能性に思い至る。彼がそこまで切迫する理由など、そうは無いだろう。

「…はい。カティマが…居なくなりました…！」

「サツキ様ー！！ワゥを知りませんかー！タツミ様にお聞きしようと思っても見当たらないのですがー！」

クロムウェイの言葉が終わると同時にその声が響く。頭を抱えた沙月の耳に、更なる頭痛の種が舞い込んだ。

「ふ、ふふふ…いい度胸じゃない…？」

彼女は笑う。それはもう、壮絶な笑顔だった。

～時を戻して、前夜～

クロムウェイに見送られたその足で、彼女は野営地を潜り抜けた。幾らかの金銭と、旅人の纏う簡素な外套を拝借した事。そして後事

を沙月達に托すと書き置きを残し、アズラサーセへ続く街道に立っていた。

「…お待ちしてました」
「ッ！？」

街道に出たその直ぐ先に、その人物は立っていた。一瞬身構えるが、その正体に気付く。黒い外套に身を包み、フードを目深に被った長身のカラス。

「一一巽…？どうして貴方が…？」

問い掛けるカティマに、彼は一つ溜息を落とす。バイザーの奥で、呆れ返る顔が見無くても解る程に盛大な溜息を。

「俺の感知能力は他の連中より広くて鋭敏ですから。幾ら気配を消して行動しても、空気の流れまでは止められませんよ」
「貴方はそんなモノまで感知できるんですか…？」

月光の下、闇に溶けてしまいそうなその出で立ち。声を掛けられなければ気付かなかったかもしれない。

「…どうするつもりです？」

カティマの声は、低かった。それは、自らの目的を定めた者の声。

「…どうもこうも、このまま行かせはしませんよ」

対する空の声も、やはり低い。だがこちらは、男性として備わった低さ。

「ならば――」

剣士は構える。左側面を前に、その黒い大刀【心神】を。上段に構えた刃を天に向けて地と水平に突き出したその構えは、彼女の最も得意とする構え。

「――押し通るのみ…！」

剣気を漲らせた彼女に、空は篭手に包まれた両手を突き出し――

「――待った！最後まで話を聞いてください、姫さん！」

上擦った声でそう叫んだ。単純に気圧されたのだ。かつて、神世の古に『北天の剣神』とまで呼ばれたその剣士に。

「…『姫さん』…？」

その呼び掛けにカティマは気勢を削がれた。急速に弛緩する場に、空はホッと息をつく。

「ッと、失礼。姫君、俺は別にお邪魔をするつもりは有りません。ただ、一人で行くのは効率が悪いと申し上げたかったんですよ」

「効率…ですか？」

何を言っているのだろうと、彼女は首を傾げた。

「簡単に言えば、俺も付いて行きます。いえ、お供させて貰います」

「…え？えっと、巽？」

「駄目とは言わせません。もし断ったら、今すぐ会長に連絡します。

少なくとも斬られるよりは早く、掛けられますよ」

言いつつ、彼は懐から携帯電話を取り出した。それを見て青い顔をするカティマ。その装置の用途を思い出したからだ。

「た、巽！それは卑怯です！」

「卑怯で結構。さぁどうします？」

「うぅ…」

彼女は呻き声を漏らし、考え込む。考え込んで、どうして自分は独りにこだわろうとしたのだろうかが解らなくなった。

そして心配げに、空を見詰める。

「…良いのですか、巽。沙月殿に背く事になるのでは…？」

「あぁ、構いやしませんよ。むしろ裏切る方向で…おお、寒気が」

それに軽口を叩こうとした空だったが、自分の吐いた言葉に感じた悪寒に苦笑いしてしまった。下っ端根性が染み付きかけている事に。

「巽…？」

「いえ、何でも。話も纏まりましたし、それでは行きましょうか」

話を切り上げると、空は背負ったリュックサックから角灯と地図を取り出すべく手を突っ込み――

「……何してんだテメーは？」

《あ、みっかっちゃった～》

…角灯ではなく、取り出したのはワゥ。

「みっかっちゃった～、じゃねェだろ！何してやがんだ！さっさと帰れ！…ッてか、どうやって俺の探知をくぐり抜けやがった！？」
《やだっ、ボクもついてくっ！その為にユッキーに頼んでごまかしてもらったんだもん！》
その一言に、彼は腰の【無銘】をホルスターの上から握り締めた。メキメキと音が出る程に。
「…ほぅ、ユッキーねぇ…随分と仲が宜しいみてェだなカラ銃ゥ…？」
【しぃ～～！！言うたらあかんて言うたやないの～～！いだだだだっ！！】
その空の目の前に、ワゥは飛翔する。そしてビシリと言い放つ。
《もし断ったりしたら、クリスト族のチカラで他の皆に伝えちゃうよ～？》
「一一なッ！？テメ…」
その能力を、彼はアズライール奪還作戦中に知った。ポゥに教えてもらった、クリスト特有の能力。
自分がやった事と同じ事をやられ、彼は左手をバイザーの上から眉間に当てた。そして一一またもや溜息を。
「…勝手にしろ……。ただし、マナは節約しろよ」
《オッケー！！》
天高く昇った金色の月。その煌めきに照らされる三つの影。そこには、緊張感も悲壮感も持ち合わせてはいなかった。

The 15th Name…"道中"

生徒会室の窓から、沙月は茜色の空を眺めていた。

「…ふぅ、全く…冗談じゃないわよ。人を悪者扱いしちゃってさ…」

一一午前中、生徒会室は喧々諤々の論舌戦が繰り広げられた。
安易にカティマ達を追う事に反対した沙月と、今すぐに捜索に行くべきだと主張した一一望を始めとする学園生徒一同である。

結局折れたのは彼女。今、ものべーはアズラサーセに向かって飛んでいる。

…だが、彼女は嬉しかった。皆が一致団結し、人命を救う為に自ら行動した事が。

「…サツキ殿」

その傍らに騎士が立つ。彼女の腹心たる、人馬の騎士。

「…ケイロン。私、守ろうとばかり思ってた。皆には力が無いんだから、力を持つ私達が守らなきゃ、って…」
「…間違いではありません。サツキ殿は、あの日よりずっとそう在ろうとして来たではありませんか。…彼女らの世界を救えなかったあの日から……」

震える唇で泣き言を紡いだ彼女に、ケイロンは冷静な声色のままで、しかし決然たる思いで告げる。
それは、彼女の進み方を決めた理由の一つ。同じ後悔をしない為に、

と。

「他の誰がどう言おうと、自分は貴女の味方です。何があろうと、どんなモノからでも、貴女を守り抜いて見せます。この槍に誓って…」

「…ありがとう、ケイロン…」

ひざまづき、槍を掲げる騎士に沙月は苦笑する。嬉しさから。

そしてやおら、彼女は頬を叩いた。晴れやかな顔をした彼女は、もう迷っていない。

「さってと、それじゃ気合い入れて行きますか！」

「――承知！」

その声は高らかに、夕暮れに響き渡った。

夜を越え、朝まで走り通しで。空達は門前に立っていた。アズライールからアズラサーセまでの道程に横たわる、『アズラ大平原』南端の街の名はフィルスル。

朝靄の底に沈む街の門には簡単な門番しかおらず、カティマの持っていた通行手形だけであっさりと通してくれた。

その街を歩いていると、香ばしい匂いが。思わず空きっ腹を鳴らしてしまう。

《ねえアッキー、お腹すいたよ～…》

「…我慢しろ。第一俺はこの世界の通貨なんて持ってねェ」

《役立たず～！！》
「出ろ。今すぐ俺のリュックから出て自力で翔べ」
背中のワゥとやんやん騒いでいた空。フードとバイザーは外され、今は糸目の顔を曝している。
「お待たせしました。朝餉にしましょう」
そこに、バスケットを持ったカティマが現れた。その内には、五つ程の一一
「一一ワッフルだ…」
「《一一『わっふる』？」》
内容物を見て思わず口走る彼に、同時に二つのおうむ返し。
「ああ、すいません。俺達の世界に似たような焼菓子が在りまして」
「そうなのですか？不思議なものですね」
「ええ、全く。それじゃ、落ち着いて食べられる所を探しましょうか」
二人は、人目を避けるように歩きはじめた。

その頃。望達ものべー一行は敵襲を受けていた。
鳴り響く非常警報。その中で、彼等は慌ただしく迎撃体制を整えていた。
（空の神剣探知が有ったら…！）

もっと優勢に迎撃を進められるだろうに。その能力の便利さが、こうなって身に染みる。

【ええい！何を情けない事を考えておるか、ノゾム！】

（…悪い。今は目の前の的に集中、だな！）

「望！鉾ってのは北東からやって来る！！」

「発見できたのは二十体くらいよ！他にも居るかもしれないから、来を付けてね！」

廊下を駆ける望と沙月の目の前に、双眼鏡を手に屋上から物見をしていた信助達が駆け寄る。

「解った、ありがとう！二人は安全な場所に下がっててくれ！」

「任せたからな！」

手を打ち鳴らし、望は駆けていく。その後ろ姿を、彼等は真摯な眼差しで見詰めていた。

今、物部学園の生徒達は各々割り当てを決めて行動している。まるで軍隊の様に。

だが、そこに迷いは無い。元々彼等は若い。若さとは、無茶を許容する数少ない、時間制限のある才能だ。今出来る事を遣る、出来る事を探して遣り遂げる。彼等は、ともに戦う事を選んだのだから。

約一日を懸けて、彼等はアズラ大平原の中程に位置する街、カーズへと到着していた。

しかも、街道ではなく平原を突っ切って、だ。お陰で街道に沿って

布陣していた鉾を避ける必要も無かったが、未開地をハーフマラソン並の距離、しかも神剣士の脚力に付いて走る。それがどれ程の苦行かは察してやってほしい。

「巽、大丈夫ですか？」
「だ、大丈夫…ですよ？」
「聞かれても困るのですが…顔が紫色ですよ？」

奢って貰った礼に【心神】を背負ったのが運の尽き。もう、空はヘロヘロだった。

「…らっしゃい」

酒場の扉を開けると、亭主らしき初老の男が低くしわがれた声で歓迎の意を示した。
やはり夕方、それなりに客らしい姿もある。

一一ワゥにはリュックの中で食ってもらうとするか…

前払い制との事で、カティマは先に銀貨を一枚出した。それに亭主が幾らか釣りを返し、二人は一番端の卓へと進んだ。

テーブルの上に所せましと列んでいた食事を平らげ、空は満足げな溜息を落とす。一方のカティマはと言うと、持参したナプキンで口許を拭っている。育ちの差だろう。

「さて、では行くとしましょう」
「…アズラサーセですよね。やっぱり夜駆けですか…」

立ち上がる二人。その背に――

「――待ちな。もう門は閉まってるぜ？周囲は鉾が固めてるし、南方からは反乱軍だ。夜警に見つかりゃ殺されても文句は言えねぇぞ？」

「「……」」

無骨な声が掛かる。亭主だ。目をつむってグラスを磨いている。

――ダンディだ。俺も歳食ったらあんな風に成りたいもんだ……じゃなくて、こんな所で鰹寄せが来たか。ちゃんと追いついては来てるみたいだから安心したが…

と、突然亭主の鼻がひくつく。そしてジトリと二人を見遣った。

「…今日はもう、泊まって行け。うちは安宿もやってる。あんたら…大分臭うぞ？」

「「臭う！？！！？」」

彼等は各々自分の臭いを改める。そして、揃って渋い顔をした。そもそもこの二人、アズライール奪還作戦時から風呂どころか湯すら浴びていない。

「…あの、亭主殿。近くに湯屋はありますか？」

恥ずかしげに身を抱き、カティマは若干空から距離を取る。一方の空も頬を掻きながら、やはり少しカティマから距離を取った。

「風呂なら此処にも在る」

「…お借りします。ひ…ウンン！アイ…あ～…えと、先にどうぞ」

彼は危うく『姫君』と呼びそうになり、慌てて言い直そうとして『アイギアスさん』も十分まずい事に気付く。なんせ国名が入っている。だからといって名を呼ぶ事が無いのがこの少年だ。

「そ、そうですか？では…失礼して先に頂きます」

「ほらよ、風呂は部屋ごとに備えて在る」

鍵が渡される。一つだけ。

「悪いが一番奥の一部屋しか空いてなくてな。…まぁ、問題は無いだろう？」

「ええ、問題ありません」

顔色から察して、亭主は微塵も申し訳なさそうに呟いた。カティマも何でもなさそうに答える。

【…旦那はん、完っ璧に男として見られとりませんなぁ…】

（あん？何か問題があんのかよ？）

【…駄目やこの人……こっちに関しては向上心の欠片もありんせんわ…】

呆れ果てたような幽月の呟きに、彼は微塵も注意を払わずに。

――案外文化は進んでいるのかもしれない。各部屋ごとに風呂が在る旅人用の宿泊施設なんて、元々の世界のモーテルみたいだ。

「では行きましょうか、巽」

「ええ」

カティマが先を歩き、奥に続く扉に消える。空もその扉をくぐろうとして一一自分を見る周囲の視線に気付いた。

「……？」

何故だかそれらは一一『頑張れよ』と。そう告げているような気がした。

だが一一亭主の視線。それだけは読めなかった。

角灯に照らされた室内。そこで外套と篭手、脚甲を外して着物だけの姿になった空は、ワゥと会話していた。因みにカティマは湯を浴びている。

主にさっきの食事の割合が少なかった事について文句を言われていたのだが。

「坊主、居るか？ちょっと話がある」

「…ええ、どうぞ」

ドアの向こうからの声に、ワゥが慌てて傘と【心神】と共に壁にもたせかけられているリュックの中に戻る。

ほぼ同時に亭主は扉を開け、そして不思議そうな顔をする。

「…今、誰かと話してなかったか？」

「誰も居ないじゃないですか」

「ふむ…？」

亭主は椅子に座った空を一瞥すると、対面の椅子に自らも腰掛けた。

隙の無い所作、その瞳には、一般人では有り得ない覇気が充ちている。先程までの気怠い空気を纏った酒場の亭主と同一人物とは思えない程に。
空が気を引き締めたのは当然だった。

「…坊主、単刀直入に聞くぞ。お前…反乱軍の関係者か？」
「一一だったら？」

身を乗り出して聞いた亭主に対し、彼は背もたれに背を預けて腕を組んだ。袖の内側に手を突き入れて。

「だったらあのお嬢さんは何者か聞かせて貰いてぇ」
「……」

沈黙を以って答える空。嘘はつかない、それも彼の矜持の一つ。

「…もういい、十分に判った。やっぱりあのお嬢さんはアイギアの血族かい」

溜息を落として背もたれに身を預けた亭主。空は、両脚に力を篭めた。

「おっと、別に憲兵に告げ口しようって訳じゃねェよ。だから懐に忍ばせてるモンから手を離せ」
「…チ、気付かれてたとは。貴方こそ何者です？」

片手を上げて制した亭主に苦笑しながら、台の上に小太刀を置いた。それを見詰めた後、亭主は大きく息を吸い込んだ。意を決する様に。

「…ワシは、かつてアイギア国の騎士だった。これでも近衛騎士団

所属だったんだ」
「アイギア国の近衛騎士、ね…。だったらどうして、他の連中と袂を分かったんです？」
そこで亭主は、右腕の袖を捲る。そこに走る刀傷。おそらくは筋も腱も断ち切られているだろう。細かく震えていた。
「これだけじゃねェ。あの悪鬼、ダラバを騎士団に招き入れたのはワシだ。奴の台頭を許したのもワシだ。…どんな顔をしてアイギアの忠臣達と共に戦えようか」
その顔には後悔、悔恨…。そういったモノ。
――この男は、己に罰を課したのだ。かつて栄光に充ちた人生を歩んでいた騎士が、場末の酒場の亭主として…一生を不名誉に過ごす事を。
だが、問題はそこではない。興味があるのは、そんな亭主が此処に来た理由。俺の勘が正しければ――
「…探しておるのだろう、『プロジア文書』を」
思わずガッツポーズをしそうになったのを堪え、空は真面目に耳を傾ける。その単語自体は知らなかったが、アイギア国の継承者として名乗り出るには永遠神剣【心神】ともう一つ『証』が必要だと道々カティマに聞いている。その為に、彼女はこの暴挙に出たのだから。
「【心神】はそこの剣。だとすれば後はあの証を手に入れれば正当な後継者として名乗り出る事が出来る。それは大いに反乱軍の士気を上げ勢力を伸ばそう」

「心当たりが有ると？」
「…有る。ミストルテの街に行け」

――ミストルテ…脳裡の地図と照らし合わせてみる。アズラサーセの更に向こうか。

「あの街に手掛かりが有ると聞いている。坊主、いや…『天使殿』」
「……ちょ！？」

思考を切り上げてみれば、床に頭を擦り付けた亭主の姿。面食らって目を開いてしまう。

「面汚しのワシが言えた義理ではないが、姫様を頼む。どうかあの御方の…道標となってくれ…」

呆気に取られている空を尻目に、亭主は頭を上げて。さっさと部屋を出て行った。

爽やかな朝の陽射しが、瞼を通して覚醒を促す。欠伸を噛み殺しながら、空は筋肉痛の脚に鞭打ちながら歩く。

「では、今度こそ出発させて頂きます。亭主殿、この御恩は忘れません」
「おかしな事を仰らんでくだせぇ、ワシは商売人として当たり前の事をしただけでさぁ」
「いえ、何より感謝したいのはあの情報です。正直な所、何の手掛かりも無くて困っていましたから」

律儀に頭を下げたカティマに、亭主はバツが悪そうに頬を掻いた。

――あの話は、今朝告げた。もし夜間に告げてしまえば、恐らく姫さんは鉾の包囲網なんて関係無しに突っ走って行っただろうから。…お陰で大分、宥めるのに時間が掛かってしまったが。

「それより、坊主。くれぐれもお嬢さんの事は…！」

「分かってます…俺の全力を以って事に当たります。そもそも俺も、恩と仇が有りますから」

話を逸らしたいのだろう、亭主が空に話を振る。それに応える空だったが、亭主は怪訝な顔をしたままで。

「…そう願いてェもんだな」

何処かで誰かが言ったような台詞を吐く。

――俺ってそんなに不真面目そうに見えるんだろうか…？

「…では、これにて。行きましょう、巽」

一礼し、金色の髪を靡かせて歩き行くカティマ。希望に満ちた表情で。

「…ところで、亭主さん。どうしてあの人を一目で見抜けたんですか？」

空は、その疑問をぶつける。反乱軍だと見抜いたとしても、あの時【心神】を持っていたのは彼。見た目はともかく、彼がアイギアの血族だと思う方が自然ではないかと。

「フ…そんなもの、ワシくらいの世代なら誰でも出来るとも」

それに、亭主は事もなげに答えた。目線をカティマに向けたままで。

その表情は――

「――クルウィン様はワシら、当時の若者の憧れの的だった。それこそ、国中の男どもが恋い焦がれ、だが見上げる事しか叶わない…神々しき月の様だった……」

笑っていた。悲しげに、昔日の残照に目を細めて――……

The 16th Name・・・"死線"

通り抜けるはずだったその街は、混沌の様相を呈していた。
その街の名はアズラサーセ。始めにカティマ達が目的地と定めていたその街は、門前に集結する無数の鉾によって脅かされている。

「おい、街の外を見たか？」
「ああ、王城の方から物凄い数の鉾が遣ってきたぞ」
「まだ街の外までしか来てないけど、そのうち入ってくるんじゃ無いのか？」

その喧騒に耳を傾ける、路地裏に潜む影が三つ。陽射しを浴びながら木箱に腰掛けているのは、茶の外套を身に纏う煌めく金髪の女。その膝の上に乗る、竜の頭骨の様な物体。そして、そのすぐ脇。庇の影が落ちる空間に控えて壁に背を預ける、黒い外套を纏った長身の男。

――死にたくない、と。誰かが言った。自分達が何をしたのか、と。
今この街は風前の灯。これだけの鉾が在れば、この街の住人を皆殺しにするのに四半刻と掛かるまい。

――救いたい。もう、アズライールの様な悲劇は沢山だ。

だが、同時に。彼女は自分が此処まで来た理由を思い出す。この先にあるミストルテの街に、捜し求めた物が有るかもしれないのだ。
それを手に入れる事が出来れば――この戦に大義が出来る。同士達に呼び掛け、反グルン＝ドラスの連合を作り上げる事が出来るのだ。

「巽…私は、どうするべきでしょうか」
「…貴女の心のままに」

煮詰まったその考えを打開して欲しくて。かつて明快な答えをくれたその人物に縋る。だが、その男の口から漏れたのはそれだけ。

「……私の心のまま、ですか。今回は助言を与えてはくれないのですね…」
「…俺の言葉は、薄っぺらくて安っぽいですから。貴女が安易に口にしていいものじゃ有りません」

寂しげに目を閉じた彼女に投げ掛けられた言葉は、やはり無味乾燥。その言葉を噛み締め、カティマは強く、強く口を結んだ。

「一一巽、私は心に決めました」

言葉と共に、瞼を開く。その蒼穹色の瞳にはただ決意があった。

「…分かってます。そうじゃなきゃ、ついて来た意味が有りません」

その瞳が捉えた男もまた珍しく瞼を開き、鳶色の瞳を覗かせている。炯々と輝く三白眼は、猛禽の獰猛さを備えていた。

「…そうですか。どうやらやはり、私には王たる資格は無いようです」

立ち上がり、外套を捨てる。黒い鎧に身を包んだ、勇ましき姫騎士の姿が現れる。壁に立て掛けていたその『相方』を握り締めれば、黒い大刀は嬉しげに煌めいた。

「――いえ、アイギアスさん。貴女はやはり…紛れも無い王者だ」
《そーだよー！皆を守る為に頑張ってるんだもん！ボクも手伝うっ！！いっくぞ～！！》
息巻くワゥに苦笑した空に、やはりカティマも苦笑する。こんなにも不利な戦いに、たった三人で挑もうとは。
――だが、不思議と不安は無い。むしろこの戦いで果てるなら本望だと言える。民草の為に死するならば、何も悔いる事など無い。
…だが、一つだけ。心残りがあった。
目の前に浮遊する竜の頭骨に収まった、赤いおかっぱの少女。
黒い外套を翻し、バイザーを身に付けながら、口許を歪める空。その口許を紅い襟巻きで覆った姿は正に鴉（カラス）。
「……！」
――震えている。どちらも辛うじて見て取れる程だが、確かに震えている。
それを見て気付いた。この二人もまた、ただ決意にて恐怖を抑え付けているだけなのだと。
「……ありがとう、二人とも…」
その姿を目に焼き付ける。その、心強い仲間達を――
――門扉が両断された。先ず飛び込んだのは青い鉾。

「ひっ、ひぃぃぃっ！」
「鉾だあぁぁぁっ！」

雪崩込む鉾に逃げ惑う民衆。それに襲い掛かる先頭の青が一一縦一閃に両断され消滅した。

「一一退いてください。鉾は我々が防ぎます」

腰を抜かした兵士に、カティマは語りかけた。凛とした威風に、兵らは呆気に取られるしかない。
その間にも、鉾の侵攻は止まない。右翼から飛び出した黒い鉾の刀を、【心神】が受け止めた。

「皆さんは…住民の避難を優先して下さいっ！！」

せめぎ合う剣が、耳障りな音を立てる。その二人の向こうから、緑と青の鉾が己が得物を振りかざして飛び掛かった。

「「一一ガハッ！！？！」」

その二体が、同時に爆炎に包まれて噴き飛んだ。
それに追従し、【心神】が高速で振動し始める。それに耐えられずに砕ける黒の刀ごと、カティマは鉾を圧し斬った。

それを呆然と眺めていた兵士の脇を、二つの影が通り過ぎる。

「…早くしろ、そう長くは持たない。衛士なら役目を果たせ！」

一つは長身黒尽くめの男。爆風に紅い襟巻きと通されていない袖がが風に翻りたなびく。

篭手に包まれた手元では、燧石式拳銃型の永遠神銃【無銘】に弾丸を装填していた。

《そうそう。戦うのはボク達の仕事だよ！》

もう一つは人間の頭ほどの、竜の頭骨を思わせる浮遊物。それに詰められた紅い宝石のような物の中には、小さな赤髪に角を持つ少女。両手には円形の鋸刃を持つバズソウ型の永遠神剣【剣花】をそれぞれ構えている。

「あ、あんたら…何者……？」

「おい、もしかして…シルフィルとラダ、カーズを救った『天使』じゃないのか！！？」

三人の異容に兵士達が口走る。既にその噂は、アズライールの悲劇と共に国中に知れ渡っている。

「…行けと言っている。お前達にはお前達の役目が有るだろう！」

その遠雷の様に低い声に、兵らは畏怖を覚えた。それによって冷静さを取り戻し、彼等は走り出す。避難する民衆を誘導する為に。

見届けて、三人は背を庇い合う。その周囲には、神剣士の存在を感じ取り取り囲んだ青、緑、赤、黒。色とりどりの鉾一一十体以上！！

「…ようやく行ったか。さて、尖陣だけで十四。残りは十一。後詰めは二十二。…どうしたモンか」

【無銘】をホルスターに戻し、背負っていた傘を槍の様に構えた空が呆れ声で呟く。

「一体ずつではいずれ抜かれます。纏めて始末できれば良いのですが…」

【心神】を構えるカティマ。刃を天に向けたその構えは、『天破の型』と呼ばれるアイギア国伝統の剣術の型。

《だったらボクにお任せだよ！でも詠唱に時間が掛かるんだ！！十五秒…ううん、十秒稼いでっ！》

「簡単に言いやがる…この数相手に生き残りながら、それも青の対抗魔法を防ぎながらかよ？」

「しかし、遣るしかない…でしょうね。それしか道はない！」

「了解……来い、人形どもッ！！！」

叫んだその瞬間、四方八方から神剣が繰り出される。斬り掛かる中、ワゥが神言を紡ぎ始める。

《一一火よ、集いて炎と成り…炎よ、集いて業火と成れ…》

一一その祝詞とも呪詛とも取れる美しい韻律の詠唱。煌めく紅い魔法陣。

「一一ぐっ！！」

「一一おォッ！！」

ワゥを護る為にそれぞれの得物で複数の神剣を受け止める。

一一そう、神剣を受け止めた。【心神】はともかく、空の持つ傘も神剣を。

「…ッよし…！！」

満足げに呟き、傘の柄を引く。当然展開された傘は、鉾の剣を受け流した。

それを今度は閉じながら突き出す。その穂先が真っ直ぐに赤い鉾を捉え、貫く。

「一一ハァァッ！！」

そのまま間髪容れず、今度は剣の様に振るう。青の剣に受け止められたが、またも開いた傘に視界を遮られて鉾は上手く剣を振るえず一一貫かれて消滅していく。

「良い出来だ…【繚乱】！！」

それは、神剣。以前彼が倒した緑の鉾の神剣を、【無銘】の持つチカラで『再製』したモノだ。

「一一ハッ！！」

【繚乱】を払い緑の鉾の槍を打ち払うも、次いで繰り出された赤の双刃剣。体重を載せて振り抜かれた、紅蓮の炎を纏うその刃。

それを、右の篭手で受ける。黒い鉾の神剣から鍛えられた、闇の加護を受けるその篭手の名は【上弦】。

「一一ッらァァッ！！！」

赤い鉾を蹴り飛ばす。篭手が神剣ならば、揃いの脚甲もやはり神剣。その名を【下弦】。

一一まだ、五秒。これだけの死線をくぐって尚、折り返し地点。
…勘弁してくれ、右肩外れそうになったんだ。これが赤以外なら確実に脱臼してた一一！

「一一紅蓮よ、その力を示せ…」

吹き飛びながらも、空中で神言を紡ぐ鉾。その頭上に火球が現出し、放たれる一一！！

爆ぜる。直撃した炎の砲弾が、彼を焼き尽くす一一事は無かった。
ただ、開かれた傘は焼かれて骨だけになった。
風の加護を受け、開けば大気の盾。閉じれば真空の槍と化す。それが【繚乱】の銘を刻まれたこの贋物の本領だ。

一一意志を持たず、神獣も無く。ただ道具として振るわれるだけの、零落した『神の剣』。忌むべきその名は『贋物神剣（グラムフェイク）』。
支払った代償に見合うチカラを返す等価交換。それこそが【無銘】という『神喰らい』の神髄一一！！

反対側ではカティマが奮戦している。こちらは危なげがない。繰り返し続けた研鑽に裏打ちされた確実な強さ。一体一体確実に対応し、その弱点を突く。
予想外によって虚を突く、空の姑息な戦法とは対極に在るモノ。

《一一二人ともお待たせっ！！ボクの側に寄って！巻き込んじゃうから！！！》

残り六体、遂に術式が起動する。すかさず後方に跳び、密集する三

人。
魔法陣が一際煌めくや、天空に舞い上がる。

「――凍てつく風よ、凪げ」

それを察知した青い鉾が、対抗魔法を紡ぐ。場のマナを凍結し鎮静する極北の風が、ワゥへと迫る。

「させるかよッ！」

その風が、断ち切られた。空の右手に握られた、昏い小太刀によって。
前回の戦闘で砕かれたモノを復元したその小太刀もまた、【誰彼（たそがれ）】の名を持つモノ。
彼はそのチカラの理屈を知らない。これは幽月の創り上げた『神宝』に比するモノ。彼が概念を提供した【繚乱】等とは比べ物にならない程の、神域に至る完成度。

そして残る内、最後の青い鉾が対抗魔法を紡ぎ始める。それに向けて空は、銃口に蒼い魔法陣を発生させた【無銘】の引鉄を引いた。

「凍てつく風よ――」

腕を突き出した体勢のまま、鉾は対抗魔法に対抗魔法をぶつけられて凍てつく。その隙だらけの眉間を、【無銘】から放たれた弾丸が貫いた。
その弾丸は、マナを結晶化した弾丸。故に鉾でも殺傷できる。

《いっけぇぇっ！『メテオフレア』ぁぁっ！！！》

天空を覆った魔法陣から、隕石が降り注ぐ。街中という事も有り範囲こそ抑えられているが、その威力は赤い鉾の高度な魔法防御すらも打ち砕く。
門前の広場は、焦熱と粉塵に包まれた。

それが晴れた時、既に立っているのは三人だけ。此処に尖陣の鉾十四体は潰滅した。

…だが、その後方にはまだ接近する鉾の軍団。その総数は今の倍近い。門によって一度に侵入して来る数が抑えられていなければ、彼等はもう数の暴力で押し潰されている事だろう。

「さて、また来ますよ…次は本隊ですかね…！」

荒い息を吐きながら【誰彼】を鞘に戻して【無銘】に弾丸を装填すると、空は再び【繚乱】を構えた。
対し、疲労こそあれ呼吸を落ち着けているカティマ。神剣を使ってその総数を読んだのだろう、表情が曇る。
まるでそれは、鉾の津波。

「…巽。今更ですが、私は充分に恩を返していただきました。ワゥを連れて逃げてくださいませんか？」

その津波が押し寄せるまでの僅かな間隙。その静寂の中で、カティマはその言葉を口にした。

「……姫さん、この戦いが終わったら…一緒に酒でも呑みませんか？」
「――はい？」

悲壮な顔が、一瞬にして崩れる。空を見遣った彼女だったが、その面容はバイザーと襟巻きで全く読めない。

「いえ、恩がもういいなら代わりに褒美が欲しいと思いまして。この戦いを乗り越えた後は、姫君に酌をしてもらう栄誉を下賜賜りたく」

仰々しい物言いに、苦笑が漏れる。この男にしては珍しい軽口。その意味を、彼女は理解した。

「――ええ、そのくらいで良ければ喜んでお付き合い致します！」

《ボクもボクもー！》

「テメーはオレンジジュースだ」

《なんでさー！？》

――絶対に生き残る。そう告げる代わりなのだと。

少し前方で、場の雰囲気を無視してワゥとじゃれるその背中。風に靡く袖は正に、羽ばたかんとする大鴉。

「…やはり貴方は、私達の導きの天使でしたね……巽…」

旧アイギア王国の近衛兵のみに着用が許されたという、式典用の外套。

それに身を包む騎士と、紅い結晶妖精に。彼女は微笑んだ。

The 16th Name ?・・・"死線?"

そんな三人の持つ得物が、それぞれ最大級の警告を発した。正にその刹那。

「「《一一一ッ!!?!」」》

門が吹き飛んだ。それは『門扉』という意味ではない。先程斬られた門扉も含め、『門』が壁ごと粉砕された。

弾け飛んで来る砕片にも構わず、三人は同じ場所を見詰める。その粉塵の向こうに、整然と並んだ赤い鉾五体。その前方を固める緑の鉾五体、前衛の黒六、中衛の青五。

「…成る程ね。戦闘陣形（ファランクス）まで遣ってくるか」

そして、中央に立つ白い鉾。その展開する魔法陣は一一『パッション』。

底上げされた理力により、赤の鉾が紡いだ神剣魔法の破壊力は上昇している。それが纏めて放たれれば、壁ごと門を吹き飛ばす事も容易だろう。

「一一さっきと同じ方法で往けるか、ワゥ?」

《…もちろんっ…!!!》

一瞬表情を歪めたワゥ。先程の神剣魔法の消耗は甚大。

「…マナが足りないんだな?」

《だ、大丈夫だってば一一あぅ!?!》

「…そら、リュックに入って休んでろ。……無理してんじゃねェよ

…」

墜落しそうになったその身を受け止められ、流石に観念してしまう。

《…えへへ、アッキー優しーんだ♪》

「…黙ってろ。舌噛むぞ莫迦…」

ぶっきらぼうに答えてリュックを背負うと、彼は己の相方に語り掛ける為に精神を統一する。

【…いやぁ、壮絶に絶対絶命どすなぁ。三十六計逃げるに如かず～】

（ふざけろ、この世に絶対は無い。…数で圧すのは良い手だがな、それだけで勝負は決まらねェ…！）

【くふふ、その通りぃ。理屈を積み重ねれば積み重ねる程にその綻ぶ可能性も高まる…世の中ってぇのは上手く出来とりやすぅ】

「…ああ、諦めない限り…どんなに不可能に近かろうが、勝つ可能性は在る！」

骨組だけになった傘を背に戻し、彼は両手を自由にした。篭手に包まれた双手を外套の中に戻し、ただ眼前の鉾を睨みつける。カティマもまた、微動だにせず敵軍の動向を伺っていた。

そんな二人に向け、白い鉾がその神剣――木の枝が捻れた様なスタッフ型の永遠神剣を向ける。

「――薙ぎ払え」

冷淡な一言に、一斉に赤の神剣魔法が紡がれた――

門前の鉾を薙ぎ払い、神剣を携えて走り行く三人。望と希美、沙月だ。その耳に壮絶な爆音が届き、嫌が応にも不安が募る。

「貴方方は、反乱軍の方ですか？！」

そこに駆け寄ってきた住人が数人。一様に不安げな表情だ。

彼等は安心させるように南門の鉾を消滅させた事を知らせ、そちらに避難してほしいと伝える。

だが、その言葉にも住民らは追い縋ったままで、北門に留まる二人の騎士を助けてほしいと言い募った。

「「二人の騎士って…もしかして！！」」

望と希美が考えた事は同じ。他に鉾の侵入を抑えられる者など知らない。あの日出奔した二人を除いて。

「解りました。騎士様達は俺達が助けます！」

力強く答えた彼等に、住民達はようやく安心した顔を見せた。一方で、沙月は表情を曇らせる。

（もしかして…あの二人じゃないでしょうね…？）

思案顔の沙月は、確信が持てずに悩んだ。せめて彼等がワゥを確認してくれていれば判別出来たのだが、やはり知らなければあれの中に人が入っているとは思えないだろう。

――その二人組は本当にカティマと空なのか、それとも……

「どうしたんですか、先輩？早く行きましょう！！」
「――ええ、そうね！！」
だがそれも僅かな間。どっちにしろ問題はない。ただ、どうせなら前者が良いと思った。
「…たっぷりと絞ってやらないとねっ！！」
闘志を漲らせ、沙月は先頭を走る――
杖を振り、指令を出した白。神剣魔法によってかたを付けるつもりなのだろうその陣形。例え対抗魔法を持ったとしても、それは中衛の青によって打ち消されるだろう。接近は黒と青が許さず、赤を始末したくても緑が通さない。そして四方から圧し包まれる事になるだろう。
「マナよ、真の恐怖となりて滅びを齎(もたら)せ…」
カティマの【心神】から闇が漏れる。それは結集し、やがて――鋭い刃の腕を持つ黒い獰猛な獣と化した。その名を『ホラーエレメンタル　アイギアス』。彼女の持つ永遠神剣第六位【心神】の守護神獣である。
「――闇よ、貫け！」
対抗魔法をものともせずに獣が駆け、進路上の鉾を薙ぎ払う。まるで黒い竜巻のように。
止めようとした緑の鉾の槍を、影に潜り躱すと、そのまま赤い鉾に

襲い掛かった。一体、また一体と詠唱中の鉾を薙ぎ払う。同時に彼女も、前衛の一団に斬り込んだ。

だが――多過ぎる。

「業火よ、地を染めろ…」

一体が術式を完成させた。しかもそれは、今まで彼等が体験してきた火の玉などとは違う。

「――『フレイムシャワー』！！」

天より降り注ぐは、灼熱と硫黄の雨。先程とは立場が逆転していた。

――だが、動じない。その可能性は考えていた。予想していたのなら、慌てる必要など無い――！！

「【――『淵水の魂魄（スピリット・オブ・アクア）』！！！！」】

彼の背後に展開された蒼い魔法陣が空間に解けて場の青マナ濃度を急激に上昇させる。

そして彼は、左手に番えた【無銘】を衝き出した。装填された弾丸は――青。

「――征くぞ、カラ銃！！」

【うぃっすぅ～～！！マナよ、蒼き龍の息吹へと変わり、万象を撃ち砕け……！！】

――それが、元より対抗魔法に耐性を持つ黒属性のカティマや、対抗魔法を振り切る『永遠神銃』の持ち主である空を相手にしたモノ

でなければ。

「【――『フローズンバイト』ッ！！！」】

撃鉄が落ちる。撃ち出されるのは――絶対零度の極風。

天が凍てつき、炎すら凍結した。降り注ぐ氷の欠片は地表に届く前に砕けてダイヤモンドダストに変わる。

その足で、彼は駆け出した。【無銘】をホルスターに戻し、両手を外套に納めたまま。

即応した黒と青の鉾、合計七体が殺到する。右からは刀が、左からは西洋剣が襲い掛かる――！！

――それを見た鉾は、どんな事を思っただろうか。青い鉾には紅、黒い鉾には蒼。

引鉄が引かれ、撃鉄が落ちる。先ず一番近くに居た二体が、額を撃ち抜かれた。空の両手には、弐挺の拳銃。

――右手には紅。紅地に金の装調が施されたそれは、『デザートイーグル・５０ＡＥ』をモチーフとした贋物神剣…『砂漠の紅金鷲』【比翼】。

――左手には蒼。蒼地に金の装調が施されたそれは、『コルトパイソン６インチモデル』をモチーフとした贋物神剣…『樹冠の蒼錦蛇』【連理】。

これが彼の両腰のホルスターに納められたモノの正体。どちらも実

包の形に加工されたマナ結晶弾を装填された連発銃で、多数を相手にする為に用意されたモノ。弐挺合わせて十三発。七体ならば十分！

「――オォォッ！！！」

引鉄を引く。近寄る者から撃ち倒す。更に三体を片付けた所で、五体の緑が肉薄する。三発放つも、厚い大気の障壁に阻まれた。

瞬間、空と緑の壁の間に飛び込んだ影。カティマだ。

「――退きなさいっ！！」

その勢いのまま、彼女は【心神】を振り抜く。黒い精霊光を纏うその太刀は『星火燎原の太刀』。緑を二体、障壁ごと両断する。

「――巽！！」

「姫さん、此処は任せますっ！！」

穿たれた穴を、空が駆け抜ける。妨害しようとした緑をカティマが斬り伏せ、引き付ける。

「気圧されはしません…ハッ！！」

地に衝き立てられた【心神】より、烈震が発せられる。体勢を崩した鉾達は歩みを止めるが、既に跳ね飛んでいた空だけは歩みを止めない。

苦し紛れに振り抜かれた二本の槍を前転で躱した空の眼前には、赤二体…そして白。鴉の嘴が敵陣の奥深くまで刈り込まれた。

――馬鹿な。この優位が崩れた?!

白い鉾は、ようやく悟る。この神剣士どもにまんまとしてやられた。既に半数が討たれた状態で、まだ一撃たりとも痛撃を与えられていない。

この二匹だけに、尖陣を含めて二十を越す鉾が消された。

――その一人が、来る。もうすぐそこまで来ている。

「――撃て!!」

だが、彼女に恐怖はない。そもそもそんなモノを感じる心が無い。

落ち着いた声色のまま、彼女は杖を向けた。

「「紅蓮よ、その力を示せ…!――『ファイアボール』!!」」

赤二体が、同時に神剣魔法を発動した。

【無銘】に弾丸は装填していない。弐挺拳銃に装填された弾丸では打ち消せない。【誰彼】ならばいけるが、同時に二発は彼にとって未体験。

だが、彼はそのまま走り抜ける。紅蓮の炎へと、突っ込む。

――恐怖が無い訳ではない。出来るのなら躱したい。だが――それでは付け入る隙が生まれる!!

――――!!!!

炎が弾け、爆炎の幕が彼を覆う。

――やった。

そう思っただろうか、額を撃ち抜かれた彼女ら二人は。

炎の中から、無傷の空が走り出る。その身の周囲を覆う赤いマナは、ワゥの発動した『マインドシールド』。彼女の高い理力に編まれた理法防御により、神剣魔法から彼は護られた。

【比翼】から放たれた弾丸が白い鉾の光の盾に防がれ、ひしゃげて墜ちる。

「光よ――！」

振られた杖から、雷光が迸しる。

それを、今度こそ彼は左手に握ったい【誰彼】で斬り崩した。そして返す刃が、光の盾を喰い潰す。

「――あばよ！」

言葉と共に衝き入れられた【比翼】の銃口が、寸分の狂いも無く鉾の眉間を捉えた――

黒い鉾の剣戟を受け、カティマは眉をひそめた。限界を超えて力を引きだし続けた事により、肉体は内部からボロボロになっている。もはや、限界を越えていた。

力尽くで刀を押し返し、背から襲い来る青の剣を受け止める。

「闇よ、恐怖にて縛れ――『テラー』」

「しまっ……！？」

そこに、黒の神剣魔法が発動する。彼女と対峙していた鉾が跳び下がり、続いて足に力を篭めたカティマだったが――遅かった。その両足を、闇の腕が掴んでいる。ただでさえ連戦で消耗しきった彼女にはもう、脚でそれを振り払う余力は無い。【心神】で掃えば簡単だが、その隙は致命的。

神剣を構え直し、その刀身に冷たい殺気を燈した青い鉾が――跳ぶ。

白い鉾の消滅を確認して振り返れば、既にその状況は出来上がっていた。

「姫さん――ッ！？！」

駆け出そうとした足が、縺れる。疲労が限界まで蓄積しているのだ、目まで霞む程に。

邪魔になるバイザーをフードごと後ろに流すと、掌で目を擦り青い鉾に狙いを付け――【比翼】の引鉄を引いた。

――カキン

「――な！？？」

だが、弾丸は出ない。既に遣い切っている。

――しまった、こんな初歩的な…！！

彼は瞬時に思考を廻らせる。

――どうすれば良い？【比翼】も【連理】も【無銘】もカラ。先程取り込んだ雷光なら放てる――いや、持ち替えている暇は無い！！

「畜生…！」

――諦めるのか？そんな事は出来ない！姫さんの力になると約束した。全力を尽くすと、あの亭主とも約束した。だが、何も出来ない。どうして――何一つ浮かばない！！

だから彼は、昏い【誰彼】を振りかぶる。防御は必要無い。彼にとって約束を破る事は死と同義。

――ならば身を守る方法など要らない。そのまま小太刀を投げようとして――目前まで迫った槍を見た。一体だけ残った緑の鉾が投擲した槍を。

「――あ」

大気を斬り裂きながら飛翔するそれは、投擲の構えをとった彼には躱せない――

――ギィィン！！

不快な金属音と共に、カティマに迫っていた剣が受け止められた。交差した双振りの剣によって。

その剣を構えた両腕に力が篭められた。反発力をそのまま純粋な破

壊力に換えて繰り出されるその剣戟。

「【――『クロスディバイダー』ァッ！！！」】

それはそのまま、剣ごと鉾を両断した。消滅していく鉾を尻目に、少年は振り向く。

「…大丈夫か、カティマ？！」

「…望…？」

茶色の髪に、碧の瞳の彼は――世刻望。

「――ハァァァッ！！」

そこに飛び掛かる黒い鉾。決定的な隙と見て襲い掛かったその鉾は。

「やぁぁっ！！」

衝き出された槍に貫かれ、消滅した。

「…ふぅ。カティマさん、今治癒魔法を掛けますから！」

「希美…」

翠の黒髪の少女は、永峰希美。その二人の登場に、緊張の糸が切れたのだろうか。

「カティマ！？」

「カティマさん！？」

ふらりとその身が揺らいだかと思うと、意識を手放し――倒れた彼

女を、望が抱き留めた。

――ガッ！ガキン！ギィィン！！

三度響いた金属音と共に、彼に迫っていた槍が撃ち落とされた。同時に、隙だらけの鉾の身に剣が振り抜かれた。光にて形作られた剣が。

「…あら巽くん、奇遇ね？こんな所で会うなんて」

「…はは、どうも…雇用主…」

紅い長髪の少女は、斑鳩沙月。その嫌味たっぷりの口調に反応する事も無く、彼はカティマの方を見た。

「…遅いっすよ…もう少しで、約束…破っちまうトコだったじゃないですか…」

そして無事を確認すると、安堵して溜息を落とした――…

アズラサーセの中央広場にある噴水。近くを流れる川を水源とするその噴水に、空は【比翼】と【連理】、そして篭手を外した自らの両腕を浸していた。

連射した事で発熱した弐挺を冷やす為、そして連射した事で絶大な負荷が掛かった腕を冷やす為だ。

「…痛てて」

少しでも肘や手首を動かせば、関節に無数の針を刺したような痛みが走る。

――流石は５０口径…。【上弦】が無かったら疲労骨折くらいしてたかもな…

「…どう、具合は？」

その背に掛かる声。沙月だ。彼は努めて表情を変えないように、細い眼差しを向けた。

「大丈夫ですよ、冷やせばなんとか――ぐぇっ！！」

――のも束の間、沙月に襟首を掴まれて無理矢理に立たされる。

「…やっぱり」

「いやぁ、あはは…」

着物の前を開けられれば、血に染まった包帯。【夜燭】に付けられた傷が完全に開いていた。

「…言ったはずよね、巽くん？次に命を粗末にしたらどうなるか？」

「…ええ、聞きました」

「なら、覚悟は出来てるわね？」

すっと細まる彼女の目。それを鳶色の瞳で真正面から見下ろした彼に――

「一気に打ち払うっ！！」

――バチコーーン！！！

「あいたーーー！？？！あ、あにふんれすかーー！？！」

一閃、強烈な平手が振るわれた。心なしか【光輝】を纏って。

二メートルほど吹き飛ばされた彼は、カッカと熱を持つ左頬を押さえた。

「カティマさんが目を覚ましたらお礼を言いなさい。カティマさんたっての嘆願で処分は保留してあげる。それに君が同行してカティマさんの移動速度を落としてくれたお陰で、追い付く事が出来たんだしね」

「…あちゃあ、もしかして姫さんも気付いてましたか…」

「ええ、気付いてたみたいよ。それに、やっぱり君は彼女がアイギア国の王女だって知ってたのね」

語るに落ちた空にジト目を向けつつ、沙月は溜息を吐いた。

「今回だけよ。次の裏切りは許さないわ」

「裏切っては無いはずですけど？」

「物部学園を裏切るのは、って意味よ」

――どっちがだよ。

そう思ったが、口にはしない。今は状況が悪すぎる。

「…了解」

それだけ答えて、彼は再度腕を噴水の水に浸した。

「ああ、それと――」
「――はい？」
まだ話が有るのかと、彼は不承不承振り返る。その目に――
「…お疲れ様。よくカティマさんを守ったわね…」
「……！」
恐らく、彼に向けられた物としては始めであろう微笑み。
「…守れてなんか、無いですよ。俺じゃ、無理でした…俺の力なんかじゃ――」
自嘲し吐き捨てる。結局、神剣士が到着せねばどうなっていた事か。背負っていたワゥのマナも限界に近く、今は迎えに来たルゥ達が連れ帰って介抱している。
気絶してしまったカティマも、望に背負われて学園へ運ばれていった。希美はそれに付いて看病している。空が、自分は良いからと頼んだ為だ。
――『力になる』などと勢い込んでおいて、このていたらく。全く、どうしてこうも役に立たないのか、俺は――
その少年の頭に、ポンと掌が乗った。その温度が染み入る。
「いじけてるんじゃないわよ。君はしっかり君の役割を果たしたの。胸を張りなさい」
「……」
そのまま二度、ポンポンと軽く叩いて。沙月は学園に戻っていく。

「…餓鬼扱いしやがって……」

一一思わず見惚れてしまった。

それに気付き彼は、真っ赤にした顔を噴水に突っ込んだ。

その後、物部学園に帰った彼を笑顔で待っていたのは一一

《…お待ちしてましたよ、タツミ様。お話が有りますので体育館裏まで逝きましょうか。ワゥも先に逝って待っていますよ?》

「字が…字が違いますいえ直ぐ逝きますからストラグルレイは勘弁してください…」

全身から強烈な精霊光を立ち上らせるミゥだった。

結局この日一一物部学園の保健室には二人の昏睡者が並んだという。

The 17th Name・・・"白虹姫"

ーーー美しい庭園。その中央部に位置する、壮麗な白大理石製の大噴水。その縁石に腰掛け、少年は溜息を落とした。

「…兄さんと父さん、何を話してるのかな…？僕ばっかりのけ者にしてさ…」

ふて腐れていた。彼は今、この国の王都に在る王城の庭園に居る。騎士の息子である彼は、国王に拝謁を済ませたのだ。…とは言え、まだ僅かに十歳。まともに国王の顔など見れる訳も無く。気付いたら終わっていたという状態だった。

その後、当の昔に騎士としての拝謁を済ませている兄と、一家の長たる彼の父は何か内密の話を受ける事となった。それに彼は参加させて貰えなかった。

それに対する反抗心と自己嫌悪も有り、彼は何処か一人になれる所を探して此処に足を踏み入れたのだ。

「…はぁ……」

もう一度、溜息を落とした。そして天を見上げーー木剣が目に映る。

「ーーへ？」

「くらえーーっ！！！」

声を聞いた。それと同時にーーぱこーーん！！と額に凄まじい痛みが走った。

「アイタァァァッ！！？な、何するんだよお前ーー！！誰だーー！！」

額を押さえつつ、涙目になった少年が誰何（すいか）する。

「ふふん、あくはほろびた……」

その背後、二段程高くなった縁石に木剣を持ち立っているのは、少年よりも更に更に幼い――金髪の少女。

少年などお構い無し。彼女は得意げに呟いた。

「滅びるかっ！！」

「なんだとーー！！まだかいしんしないのかーー！！」

木剣をブンブン振り回し、少女は怒り出す。始末の悪い事にそれなりに心得が有るらしく、なかなかに鋭い剣戟。

「ちょ、危ないだろっ！」

「あー！かえせー！あたしのだぞーー！！」

何とか白刃取りで受け止めて取り上げ、高く掲げた。

少女はぴょんぴょん飛び上がってそれを取り戻そうとするが、同年代と比べても頭一つ背の高い少年。届くべくも無いのに、少女はもがく。

「危ないだろっ！女の子がこんなモノ振り回すんじゃないっ！！」

「うるさーーいっ！！らっぱはこのクルウィンがせいばいしてくれるーー！！」

終いには両手を振り回してポカポカと叩いてくる。しかし、ある程度鍛えられている彼にはほとんど効かない。

「……くるりん？ゴフッ！？」

「くーるーうぃーんーーー！！！」

その時、見事な右ストレートが彼の水月に叩き込まれた。腰の入った一撃は流石に効く。思わず腰を折った。

「とったーー！！」

ーーぱかーーん！！

「イッタァァァッ！？！！」

その期に乗じて、少女は木剣を取り戻した。そして再度振り下ろされた一撃を受け損ね、彼はまたも一撃を加えられたのだった。

庭園の噴水の縁石。清涼な空気の充ちるそこに、闊達な声が響いた。

「わーーい♪」

少女ーークルウィンはご機嫌だった。少年の奢ってくれたその、格子状の焼菓子を食べて。

「ううー、母さんが持たせてくれたお小遣が…全部……」

訂正、『奢らせた』だ。その傍らには、バスケットにこれでもかと

詰められた焼菓子が置かれている。

少年は消沈していた。初めての都で、母への土産を買う為に遣おうと思っていた金。それを全て遣わされてしまった。

「おいし～♪あたしずっと、これがたべたかったんだ～♪」

タンコブを摩りながら、彼は溜息を落とした。何せこの少女、いきなり店先の菓子を手にとって食べだしたのだ。

それを散々叱られたのは、少年。しかも反論したならば『兄貴なら妹の面倒くらい見ろ！』と拳骨まで落とされた。違うというのに。

満足げに菓子を頬張る少女を見遣る。村では見た事が無い程に可愛い女の子。…可愛いのだが、先程までもう、その本性は分かっている。

三つのタンコブを摩りながら、彼は四度溜息を落とした。今日は厄日だ、と。

「ねぇねぇ、あんたいいひとだね。そういえばなまえきいてなかったけど、なんていうの？」

「…え、僕？僕は…？」

と、くいくいと袖を引かれて。簡単にお菓子に釣られそうな少女に、少年は自分が名乗っていなかった事を思い出した。そしてもう一つ、自分が騎士の子であった事を。

――彼女の様な民草を護る事こそ騎士道だと。彼の敬愛する兄はいつも言っていた。だから――彼は。その少女に向けて、少し気取った所作でその名を述べた。その少女の前では、なぜだか格好付けておきたかったから。

「僕は――ディスバーファ。ディスバーファ＝レストアス」

――…遥かな過去に、『私』が捨て去ったその名を。

「でぃすばーふぁ？へんななまえーー！」

「な、何をーー！！お前だってくるりんじゃないかーー！！」

「くーるーうぃーんーーー！！！！」

またもポカポカと胸を叩こうとする少女――クルウィンの頭に手を置いて距離を取り、彼は――ディスバーファは苦笑いした。

夕暮れ。その朱の目に沁みる事。それが、別れの合図だと知っているから。ディスバーファは、自分の膝の上で眠る少女を見た。その金紗の髪が、山から吹きおろす風にさらさらと靡いている。

沢山遊んだ。彼女に誘われるままに、庭園の中で遊び回った。昼過ぎ三つの鐘が鳴った頃には、菓子を分け合って食べた。その配分でまた喧嘩して、また叩かれて。そして、遊び疲れた彼女に膝を貸している。

彼は天を見上げた。飛び去る鳥が一羽。その物悲しい鳴き声に、ふと寂涼感が胸を占める。もうすぐ、クルウィンともお別れなのだ、と。

「…ん…？でぃすばーふぁ…？」

と、彼女が目を覚ました。それに彼は笑顔を向ける。

「おひさまがしずんじゃう…。もう、おわかれなの？」

彼女もまた、寂しそうに告げた。その悲しげな表情に、彼は胸を締め付けられた。もう、会えないかもしれない事は彼自身が一番良く知っている。彼の父の領地は、此処より随分と離れている。だが――

「――そんな事無い。太陽は沈んだって、また昇る。だから僕らもまた会おうよ」

「――え？」

「僕は騎士の子なんだ。この国の民を護るのが僕の未来の仕事なんだ。だから…僕が君を護れる様な強い男になった時に、また会おう。約束する！！」

それでも彼は、そう言った。生まれて初めて、そんな事を口にした。顔を真っ赤にして。

「…ほんとう？ほんとうにつよくなって、あたしをまもってくれるの？」

「うん。僕が護るよ、クルウィンを！」

問い掛けに彼は、力強く頷いた。それに彼女も、嬉しそうに顔を綻ばせる。

「…うん、またあおうね！やくそくだよ、でぃすばーふぁ！！」

まるで花の蕾が綻んだような。そんな可憐な笑顔だった。

「――クルウィン、そこに居たのかい？」

「あ、おとーさま！きいてきいて、でぃすばーふぁがね、あたしを

まもってくれるんだよ！」

その時掛かった声。壮年の男性の声。彼女の父親らしいその男性の足元に、起き上がった彼女は駆け寄り抱き着いた。
その嬉しげな声に、男性は驚きを隠さずに少年を見た。その眼差しには、少年の真意を探ろうとする深い色がある。

「…ディスバーファ、本当に…クルウィンを護ってくれるのかい？」
「はい！僕は騎士の子ですから、この国の民を護るのが仕事です！」

その返答に男性は少し困った顔をして…相好を崩した。その目には優しい光。

「…そうか。頼むよ、ディスバーファ。この子は少しやんちゃが過ぎるが、本当は良い子だ。君の力で、護ってやってくれ」
「――はい、頑張ります！！」

彼は、胸を張った。大人に認められた事など無かったからだ。その喜びを胸に、彼は――故郷への帰途についた……

朝の静謐な空気が満ちる廊下のリノリウムの床に、六人分の影が落ちる。そのどれもが荷物を抱えていた。

「…あ～だっる～…朝っぱらからコレはきっついよな…」
「文句垂れてんじゃ無いの。巽くんを見習いなさいよ。あんたの三倍は持ってるわよ？」

「無理矢理持たせたんだろ！こっちは腱鞘炎なんだけど！！全身筋肉痛なんだけど！！」

信助と美里、空を筆頭にした六人。信助と空を除けば、美里も含めて『物部学園調理部隊』の主力という、現在この学園にいる生徒でも指折りの料理名人達。

両手に抱えた食材を食堂の保管庫に運び込むと、空以外は『カティマさんの様子を見てくる』と去って行った。

「…面倒くせぇなぁ……」

言いつつ空は、頭を掻きながら近くの棚に乗っていた大学ノートを開く。帳簿として使われているそれは、食品管理を受け持たされた彼が几帳面を通り越して病的な迄にこだわっているモノ。

――アズラサーセ救出戦から二日。ようやく落ち着きを取り戻した街は、活気に充ち溢れていた。そこに荷物持ちの信助も含めた六人で買い出しに出掛けたのだ。

道々、通行人から有り難がられた彼等。居心地が悪い事この上なかった。

「……」

黒のボールペンで記入していた空が、溜息を落とした。それを仕舞うと赤いボールペンを取り出し、『▼』と数字を記入していく。

「足りねェ……誰だ、ちょろまかしてんのは…！！」

地獄から響くような声の後、ギリリと歯を鳴らす。それもそのはず、それは失態以外の何物でも無い。

――足りない。どう見ても足りない。昨日の夜に締めとして記帳しておいた量と合わない。その意味するところは一つ――『鼠』が出たのだ。

「…クク、俺の領域（テリトリー）に鼠か。良い度胸じゃねェか…！！」

邪悪な笑みを漏らしながら、彼は心中で当たりを付けていった。

気怠げな昼下がりのアズラサーセ、そこを空は一人で歩いていた。

制服は『天使様の付き人の衣』としてアズラサーセ住民に知られているので、着物を着て【比翼】と【連理】、そして【無銘】を腰に提げている。

――朝方の仕事を終え、今日は休日を貰っている。未だに眠り続けている姫さんが目覚めるまで、ものべーは動かさないらしい。

【…旦那はん、誰か誘う懇意の女子（おなご）とかおらへんのぉどすか？一人で観光て…こういう時こそ希美はんを誘ったりしませんとどないしますのん…？】

（……）

――ポソリと、そんな呟きが心に響く。だが俺は明鏡止水の精神を以って受け流した。

【…もうこの際贅沢は言いまへん。男子（おのこ）でもええどすから、せめて連れ合える友達とかおらへんのぉどすか？】

（……）

【…ぐすっ、なんや急に泣けてきましたわ…】

――…と…ともかく、あの防衛戦で分かった事。やはり俺の手札は脆弱だ。

包帯が巻かれた腕を組み、眉間に拳を当てる。彼が考え事をするときの癖。

そのまま歩いても器用に人を避けている辺り、戦士としての素養は着実に磨かれているのかもしれない。

（…魔弾を連射する為に【比翼】と【連理】を創ったってのに、結局撃てるのは【無銘】だけ、か。何でなんだよ、カラ銃？）

【何でて言われても、そらぁどう足掻いても神剣は神剣。魔弾を撃てるんは『永遠神銃』だけどすってぇ。せやから言いましたやありんせんの、旦那はんは果報者やてぇ】

言われてみればそうだろう。その位のスペシャリティが無ければやっていられない。だが――

（…むしろ役に立たねェ。あの結晶弾じゃ、緑に太刀打ち出来ねェだろうよ）

【非道っ！？！旦那はんの意志を尊重したったのにぃ～～！！】

――思い出すのは、緑や白の障壁に阻まれた弾丸。あれも魔弾と言えば魔弾なのだが、効果は発現しなかった。要するに、ただのマナ結晶の弾丸だ。それでは強固な物理防壁を突破出来ない。

…更に言えば至近弾で、余程急所にでも当てなきゃ効果も薄い。どんなに酷い傷でも、神剣を持つ者は治癒魔法で即座に傷が塞がる。なので頭に撃ち込むなり心臓に撃ち込むなり、一撃で絶命させる必

要が有る。…ッたく、どこぞのゾンビみたいな奴らだな…。

【その事どすけどぉ、白の神剣のお陰で解決できそうどすわぁ。あれの持っとる『炸裂』の精霊光を炸薬にすれば、威力は少なく見積もっても二倍強～～！！】

（俺の腕の方がもたねェよ！！！５０口径マグナム弾より強力な弾なんてそうそう撃てるか！！）

【軟弱どすなぁ……でもまぁ、今回は大戦果。『契約』通りた～っぷり喰わせて貰いあんした。…くふふ、ご馳走さんどすぅ】

（……）

『契約』。その単語に、彼は彼自身の存在そのものに刻み込まれた条項を思い返す。『契約以降、【無銘】の遣い手が奪った神剣は全て【無銘】の所有物となる』という条項を。

一一確かに、チカラを増している。合計十五体分の神剣を喰ったその『神喰らい』には、今までは感じられなかった『重み』が生まれている。

……禍々しく不吉で、冷たい闇一一いや、それよりも性質（たち）の悪い『何か』が凝り固まった様な重みが。

（……永遠神銃、か…）

一一俺が手にしたソレは、そう名乗った。それがどんなモノかは知らない。『俺』の記憶にもそれに類する単語は無い。

…ただ一つ、解っている事が有る。コレは、コイツは間違いなく『神』すら越え行く『可能性』を持っている。代償を支払えばその片鱗を体現出来る。

（だが…それじゃあ駄目なんだ。俺は、俺のチカラで奴を越え無け

れば…）

思い出すその姿。それに彼はギリリと歯を食いしばる。

――胸と背の傷が疼く。流石にもう開かれては困るので、包帯でがんじがらめだ。それを押さえる腕も痛む。軽度なモノとはいえ腱鞘炎。峠は越えたが未だ全身筋肉痛。

…ッたく、本当に軟弱なモンだ。情けねェ…！！

【――『躯（からだ）はただ遣い手、心はただ鞘。魂こそが我が刃』…】

（…あ？なんだそりゃ？）

どうやって己の体を鍛えるか。そに悩み始めたところで、幽月が呟いたその台詞。

【一つで支えりゃへし折れる。二つで支えりゃ共倒れ。三つで支えてやっと立つ。心技体揃って初めて、戦うチカラに為る…わっちの初めての持ち主はんのお言葉どすぅ。なかなかにええ言葉どすやろぉ？世の中は鼎立（ていりつ）が一番どすねん】

（…始めての持ち主、ねぇ…）

得意そうに答えた幽月。それに、空は眉根を寄せた。

【…おやぁ？旦那はんもしかして…ヤキモチどすか？かぁいいどすなぁ～もぉ～】

（…苦労したんだろうな、その人…こんな得体の知れないモノ持って…）

【って同情！？旦那はんのいけずぅ～～っ！！】

――さて、今日辺りから試してみるか。図書室で見付けた『アレ』

を。俺が【比翼】と【連理】を創る時に参考にした本、『世界の名銃百選～詳細図解付き～』と共に図書室で借りたあの本を。

その思案に沈みながら、幽月の声を聞き流しつつ。人の疎らな通りを何と無しに歩いていった。

一通り商店を冷やかした後、大通りから少し奥まった所で。軒先に積まれた刃毀れだらけの剣や斧、槍といった武具類。ソレは――

「……これは…鍛冶屋か？」

興味を引かれたのは、現代では既に廃れてしまっていたから。そして、自身の持つ『神銃』の特性から。

「…どれ」

そうして彼は少し期待に胸を膨らませて……扉を開く。

――そこで彼が見たのは、想像を絶する光景だった。

「――うふふ、さぁ～て良い感じにとろとろにぃ…」

「……」

…いや、確かにそこは鍛冶屋。その手の機具が揃っていて、奥には赤熱する釜が在る。

問題なのは、その釜を使ってチーズをとろとろに溶かしている場違

いにも程が有る少女がいる事だ。

訪問者にも気付かず、溶けたチーズが滴るのにも構わずに。彼女は脇の卓から平たいパンを取る。

そして火箸に刺していたチーズをパンの上に置くと、その熱々チーズパンをうっとりと見詰めた。

「いっただきま～～す！！ハグハグ……ハッ！？！」

「……」

そこでようやく、目が合った。しばし絡んだ視線は――ゆっくりと閉じられる扉にて切られた。

空はそのまま踵を返し、裏通りを歩き去る――

「ちょちょちょ、待ってくださいお客さーーん！！！」

バタバタと騒がしい音を立てて、少女が飛び出してきた。その勢いで彼の腰に抱き着き引き止める。

「いらっしゃいませーー！！いやぁ、実に三日ぶりのお客さんですよー！」

「いや、間違えたんだ。俺はレストランじゃなくて鍛冶屋に行きたかったんだ」

「ご心配無くお兄さん！大正解で鍛冶屋ですよ！私の『工房』によううこそ～～！」

体格差は大人と子供。なので彼女はずるずると曳きずられてしまう。それでも引き下がらない。髪留めと髪飾りを兼ねている鈴が、しゃんしゃんと鳴る。

「…嘘だ。鈩でチーズ溶かしてたじゃないか。本物ならあんな真似はしないだろ」
「いやぁ、生活に密着した鍛冶屋なんですよ～」
「密着どころか癒着してるだろ。鈩にチーズが」
「お兄さん上手いっ！！という訳で座布団の用意が有る家にどうぞ～！」
「いやいい。俺そろそろ帰らないと今日の夕飯に間に合わなくなるから――」
と、負荷が消えた。ようやく開放されたと胸を撫で下ろしたのもつかの間。腰の重みも消えている事に気付く。腰のホルスターを拳銃ごと抜き取られていた。
「――へぇ～、お兄さん珍しいモノ持ってますね？」
「――オイッ！！！」
それに反応し左手を閃かせるが、少女はその手をするりと躱して距離をとった。その手には【比翼】と【連理】が番えられている。
「外観は中々良い出来ですけど…粗いですね。これ射軸ブレれてますよ？…何処で買ったんですか、これ。こんな粗悪品の拳銃は始めて見ました」
「――…？！」
そして言い切ったその台詞。それに彼は、心臓を握り潰された様な衝撃を受けた。
――今、何て言ったんだコイツは…？

「あ、こっちは凄い！！こんなに綺麗で、しかも精密な銃は始めて見ましたよ！！余程名のある銃匠（ガンスミス）の作と見ましたっ！！」

着物に似た衣服を纏う少女は何の迷いも無く撃鉄を起こし、引鉄を引いた。

――カキン

【無銘】に弾丸は篭められていない。それを知っての行動だ。そんな事を知っているのは――

「…何モンだ、お前…！！」

目の前で笑う、赤み掛かった紫色の瞳の少女。
それを、彼は鉾と対峙した時と同じ眼差しで見遣る。

――『光をもたらすもの』。先ずそれが思い浮かぶ。
…だとしたらマズい。抵抗する手段が無い。俺の手札の大半は奴に握られている――！！

「そんなに睨みつけないでくださいよぅ、私は世界を渡り歩く行商人。同じ異世界人じゃないですかぁ」

「…同じ、ね」

笑い掛けた少女にも、彼は表情を変えない。表面的には睨みつけているが、その実思考はフル回転。この局面を脱する策を捻り出す為に。

「…そうだ、少しお話しませんか？『最低の銃』と『最高の銃』を見せてくれたお兄さんにお礼がしたいです」

言うや、少女は踵を返す。その髪留めの鈴が、涼しげな音色を奏でる。

――畜生、行くしかねェな。何せ俺の『銃』は全部アイツの手の中。何としても取り返す必要が有る。

その背を注意深く眺めながら、彼は少女に続いた。

The 18th Name…"落陽の鈴音"

少し熱っぽい室内。だがソレはからりと乾いており、不快なモノではない。

小さな卓を挟んで対峙する空と少女。その前にはそれぞれ、湯気を立てる茶が置かれている。因みに不醗酵茶。緑茶だ。
出された手前、彼は唇を湿らせる。だが飲みはしない。

「この無駄の無い造形、夜の闇を溶かし込んだような漆黒、銃底まで続く美しい曲線…はぁ…本当に良い出来ですね…」

その視線の先では、まだ【無銘】を愛でる少女。卓に置かれている【比翼】と【連理】には見向きもしない。
若干淋しい気分になりながら、彼は本題を切り出す事にした。

「……取り敢えず、返して貰えるか？」
「もう少しだけ良いじゃないですか～。ていうかお兄さん、むしろ売ってくださいコレ」
「嫌だ」
「じゃあ作は？何処の銃匠が手掛けた作なんですか？」
「知らん」

素っ気ない空の答えに、少女は『むー』と唇を尖らせた。まだ幼さの抜け切らない容貌には良く似合う。

「でも不思議です。こんな業物を持ってるかと思えば、こーんな三品（さんぴん）も持ってるんですから」
「三品て…いくら何でも言って良い事と悪い事がだな…」

「はっきり言ってゴミ以下ですよ。リサイクルに出して釘にでも変えた方がよっぽど有意義ですね。もし遣った事があるなら、よく暴発しなかったモノです」

「……」

卓の上を滑らされ、彼の手元に戻ってきた弐挺。ぞんざいな扱いを受けた初めての我が子を、彼は慈愛に充ちた仕種で取り上げる。涙目で。

――確かに素人の俺が創ったモノとは言え、そこまでボロクソに言われてしまうと凹む。

威力不足の為に至近弾しか撃たなかったから解らなかったが、そういえば試し撃ちでは遠くからはあまり当たらかった。そうか、あれは腕の問題だけじゃなかったのか…

「という訳で、その弐挺を鍛え直してあげますよ。鍛冶士として、見てしまったからには見過ごせません」

「いいや、結構だ。コレには触れないでくれ」

当然に断る。あれだけ言われたのも有るが、これは神剣を加工したモノ。余人の手には余るモノだ。

「…ああ、大丈夫ですよ。私、神剣鍛冶も出来るんです」

驚きは、表に出さない。出してはいけないモノ。

「……神剣だと、気付いてたのか？」

「仕事ですからね。でも不思議なのは、どれも一本の神剣じゃない…そう、幾つものパーツがそれぞれ神剣で、それを組み合わせてあるところですかね？」

背にじっとりと汗をかきながら、彼は薄く瞼を開いた。その絡繰を見抜かれた事に内心で舌打ちながら。

「…どうします？そのままだと、遣いモノにならないと思いますけど」

――ああ、そうだろうよ。結局餅は餅屋。それが良いに決まってる。だが――

「…いや、『こいつら』は他の誰にも触れさせない。俺の大事な『子』だ」

――だが、これは俺の『壱志（いじ）』だ。この弐挺の素となった剣は、俺が自らで勝ち取ったモノ。だから他者の指図も手も入れさせない。絶対なんてないが、それでも絶対に。

「……そうですか」

仕方ない、といった具合に溜息を吐く。意志を曲げるつもりが無いのを悟ったのだろう。

と、少女は奥の棚…素材棚らしいそこから何かを掴みだした。

「…これは…？」

卓の上に置かれた石らしきモノが二つ。どちらも掌に収まる程の、深みのあるコバルトブルーの石とクリムゾンレッドの石。

「それを耳に当ててみてください」

「……」

言われた通り耳に当てるべく、何となしに左に在った蒼い石を手に取る。意外とずっしりした重量感。
それをゆっくりと当てて――

【…ウバ…オ…セ…【チカイ】ヲ…クダケ……】

一秒で離した。
男のモノとも女のモノとも取れない、地獄の底から響くようなおどろおどろしい声色だった。今さらだがもう一方も、底冷えのする様な悪意じみた波動をガンガン垂れ流している。

「……何だよコレ」
「面白いでしょう？夏場もこの二つがあれば涼しい気分に、しかも何と！枕の下に入れて眠れば素敵な夢の世界へと連れていってくれるという優れモノなんですよ！！」
「…だから？」
「交換しましょう、この二つと黒い銃を♪」

再び眼を細めた空が、石を右手に持ち替えてクイクイと手招きする。
彼女はそれに答え、仔犬の様に歩み寄る。

――ガッ！！と。その額が鷲掴まれた。

「いだだだだっ！？！！！頭の形変わるぅぅぅっ！！！な、何するんですかお兄さぁぁぁん！！」
「何するじゃねーだろ！！何で俺の神銃とこの呪われた石ころを交換しなきゃいけねーんだ！！どう見ても大損だろ！！」

ギリギリと締め上げつつ、彼は【無銘】を取り返す。そしてようや

く一一気付いた。

「…神剣の反応…?!何だこの石…!!」

「あいたたた…ただの石じゃ無いですよ、それ。『永遠神剣の凍結片』です」

「『永遠神剣の凍結片』…?」

解放された少女は己の額を摩りながら、その正体を告げる。

一一『永遠神剣の凍結片』、ソレは則ち、過去に砕けた神剣が何らかの作用で消滅せずにこの世に留まっているモノとの事。

「そんなものが有るなんてな…」

「すっごい貴重品ですよ?一生に一度出会えれば奇跡に近いくらいに」

一一尤もだ。最近は感覚が麻痺してたが、よくよく考えてみれば『永遠神剣』に出会う事自体が本来は天文学的な確率なんだから。

「どっちもかなり高位の神剣のカケラなんですよ」

「……で?」

「だから、お兄さんの…いえ、何でも無いですハイ」

左手に力を篭めた彼に、彼女はプルプルと首を振って見せた。

「はぁ…解りました。諦めますよ。諦めれば良いんでしょっ!!」

「何で逆ギレしてんだよ!?」

世の中は広いものだ、と記憶に刻み付けて。目的も果たしたしそろそろ帰ろうと腰を上げる。何にしても長居は無用だろう。

「ところでお兄さん、何かをご入り用の物って有りませんか？」
「何とも交換しないって言ってるだろ」
「ち～が～い～ま～す～！！純粋に商売としてですっ！なんせ一週間ぶりのお客さんなんですから、ただじゃ帰せませんよ～」
「三日じゃなかったのかよ…入り用のモノ、ねぇ……」

食料衣服に寝具、生活雑貨その他諸々。足りないモノなら幾らでも有るが、よくよく考えてみれば彼は無一文。

「……悪いな、期待には添えそうにない。俺は無一文なんだ」
「えぇ～、そんなぁ～……」

がっくりと肩を落とす少女。流石に悪い事をした気になる空だが、無い袖は振れない。

「まぁ、知り合いに聞いといてやる。もしかしたら買ってくれる奴がいるかもしれないしな」
「う～ん…そうですね……」

今度は少女の方が物思いに沈む。だがからりと、すぐにその愁眉を解いた。

「お兄さん、実は一つお願いが有るんですが…」
「…お願い…？何だ？」
「はい、実はそろそろ店を畳んでしまおうと思ってるんで、その片付けを手伝ってくださいませんか？」
「…そこまで切迫してたとは…」
「初めからそろそろ店じまいしようと思ってたんですよっ！だいたい、私は世界を渡り歩く行商人。鍛冶はあくまで副業ですから」

――そうか、そういえばそう言っていたな。…ッてか、いつの間にか警戒解いちまってた。まだ正体も判らないのに、気ィ抜くなよ異空。

本来なら断るべき。だが、茶を口にしている。ならば手伝うべきだろう。

「解った…それで良いならな」

「助かります！それじゃあ手始めに表の――……」

そうして空は彼女の指示の下、筋肉痛の抜け切らない身体に鞭打ち片付けを手伝ったのだった。

アズラサーセの街に斜陽が注ぐ頃。

ようやく片付けを終えた空は、程よく冷たくなった茶を一気に飲み干した。その湯呑みを洗い、箱に詰めて。これで完成だ。

「さてと…これで終わりだな」

「助かりました、お兄さん。本当にありがとうございます」

「いや、このくらいしか役に立てないしな…」

襷掛けていた紐を外し、彼は片付いた室内を見渡した。ぐるりと肩を回して解すと、溜息を一つ。

「そうだお兄さん、ちょっと動かないでくださいね」

「ん…？」

と、少女は彼の正面に立つ。そしてその手に持ったモノを差し掛けた。

「やっぱり。ピッタリですよ！」

――服だ。黒っぽい…中華風の武道着の上下。衣紋掛けに掛けられた状態で俺に向けて差し掛けられている。

「いや、だから俺は無一文だって…」
「お金はいいですよ。お礼代わりです」
「いや、でも…良いのか？」
「どうぞ。この世界に来る前に買ったモノなんですけど、コレがまた売れないんです…まあ、買い叩いたモノなんでそんなに損した訳でもないですけどね」

――本音から言えば、俺の趣味のど真ん中だ。前世の影響も有るのかもしれないが、喉から手が出る程欲しい。

「私達商人は、一期一会を大切にする種族なんです。お兄さんとの出逢いもきっと、神様が与えてくれたモノ。ですから、どうぞ納めてください」
「……分かった。有難う…」
「良かったぁ。それじゃあ包みますね」

いそいそと紙袋に服を詰めて、彼女はそれを差し出す。その勢いで、髪飾りの鈴が鳴る。
天真爛漫な笑みを浮かべる少女に彼は苦笑しながらそれを受け取った。

「ところで、どうやって別の世界に行くつもりだ？今この世界には

プロテクトが掛かってるぞ？」
「あ～…そうでした。こないだ出られなくて参ってたんですよ…。
とりあえず隣国のクシャトに行こうかと」

――クシャト。反乱軍の側面支援を行っている国か。ならば危険も少ないだろう。

「そうか。じゃあ、元気でな」
「はい、お兄さんもお元気で…って、そういえばお互いに名乗ってませんでしたね」
「ああ…そうだったな……」

既に二時間近く共に居たというのに、確かに彼等は名乗り合っていない。まぁ、空は警戒して名乗らなかったというのも有るが。

「……巽だ。巽空」

――まだ『光をもたらすもの』だという可能性は捨てられないが…俺を殺る機会なら幾らでも有っただろう。

「巽さん、ですか。良いお名前ですね」
「……」

『良い名前』。そこに彼は少しだけ、眉をひそめた。
それに気付いたのか、少女は取り繕うように笑った。その笑顔のままで。

「私は――鈴鳴［すずなり］って言います。鈴が鳴るって書いて、鈴鳴です」
「鈴鳴、ね…」

――偽名くさいな。まずそう思った。だが、この年齢で独り立ちしているからにはそういうモノも必要かもしれない。

……もしも、彼がもっと社交的な人物だったのならば。もっと他人の内に歩み寄れる人物だったのならば。その名を『彼女達』から聞いていたかもしれない。忌むべき名と共に。

「じゃあな」

「はい、じゃあまた…あ、巽さん。『弾丸を放つのは銃の何処か』、それを良く考えてみてくださいね」

「…ああ……？」

貰った包みを小脇に抱え、空は歩み去る。手を振る鈴鳴に少しだけ手を振って応え、後ろ手に扉を閉めた。

物部学園に戻り、食事を摂って部屋に戻った空。その脇には、現界した幽月の姿も有る。食事を娯楽と考えている彼女は、三食をきっちりと摂る主義らしい。

本来は持ち主により供給されるマナが無い為に彼女が現界するのはかなり消耗するとの事なのだが、普段は壁どころか結界封印すら摺り抜ける幽星体（アストラル）の肉体を食事時だけは完全に物質化させている。

かつて職員の休憩室として使われていたその部屋。一段高くなった畳の敷かれた部位に、ゴロリと横になる。もう起き上がりたくなくなり、枕になるモノを探して――その包みを引き寄せた。

「……弾丸を放つのは銃の何処か…」

彼女が最後に言った台詞が、魚の小骨の様に引っ掛かって取れない。

もう少し。もう少しで掴めそうなその答え。

「……ふぅ」

頭を置くと、丁度良い高さ。コレなら安眠できるなと考えたその耳に。

【…ウバエ……カセ……【チカイ】……クダケ……】

地獄から響くような声と、底冷えする冷気。

「……あの野郎ォォォッ!!余計なオプション憑けやがったァァァッ!!!」

包みを投げ出し、叫ぶ空。壁に辺り、ずるずると落ちたソレ。

【まぁまぁ、ええやないどすか。貴重なモンなんどすやろ?】

「そりゃそうだが……ハァ…」

マナ節約の為に意識体に戻った幽月に言われ、確かにそうだとは納得する。だが不吉さは拭い去れない。

一一まぁ、いいか。そういえば枕の下に入れて寝ると素敵な夢の世界に、とか言ってたな……

興味を引かれた彼は、モノは試しとソレを引き寄せた。

もう一度頭を乗せると、やはり響く声と首筋を冷やす霊気が。

――これで寝るだけで一苦労だろ……

そう思いつつも、筋肉痛と疲労で消耗していた彼はすぐさま眠りの世界へと落ちていった。

翌日。朝の清々しい空気に満ちた廊下。そこを。

「……違う……俺はそんな人間じゃない……誰でも良い訳じゃない……でもまさか、意識してないだけで俺にはそんな願望が有るのか……！！」

人魂を背負いそうなくらいに憔悴した空が、ふらふらと歩いていた。

…彼が見たのは、確かに『いい夢』だった。それはもう、とにかく『いい夢』。今日が洗濯日和で良かった。

その内容思い出してしまい、赤面する。次いで自己嫌悪する。

「あ。空くん、おはよう」

「の、希美！！？！」

と、掛けられた声。それに彼は心臓が飛び出そうになった。

「あ…ああ…」

「…空くん…？」

一気に顔を真っ赤にし、彼はへどもどと口を開いては閉じ、唐突に
――

「……許してくれ、希美ーーーーー！！！！」

頭を抱えると、一目散に走り去った。

「……？」

後に残された希美は、ただ首を傾げるのみ。

廊下を走る空。ようやくその速度を落とした頃。

「お、巽。オハヨ～あふ…」

「あ、巽くんおはよう。丁度良かった～、補充したい物が有るんだけど巽くんは…」

教室から出て来た、盛大な欠伸を噛ます信助とそれを呆れ顔で見ていた美里。学生達の間で出た、生活雑貨の補給申請の取り纏めについて意見を聞こうとした美里に――

「済まないーーーッ！！！！」

またもや、走り去って行った。

「…なんだあれ？」

「…さぁ？」

「ハァ、ハァ、ハァ……」

しばらくして、疲れて壁に手を付き休んでいた空。だがやはり。

「あ、巽。良い所に。…先日は迷惑を掛けました。貴方の助けが無ければ今頃……」

現れ出たのは、三日ぶりに目を覚ましたカティマ。甲冑ではなく、一世代前の学園指定制服。

シックな黒いセーラー服にロングスカートを身に付けた、落ち着いた風情がある。

そんな彼女に――

「返す返すすいませーーーん!!!!」

三度走り出す空。

「…はあ…？」

目を円くして、彼女はそれを見送った。

「ゲホッ！ガホッ！…オェ！？」

起きぬけで全力疾走を三度も行い、既に彼は限界ギリギリ。

額から脂汗と冷汗を垂らして、昇降口をくぐる――

「あら、巽くんじゃないの？こんな朝早くにどうした訳？顔真っ青だけど…」

その昇降口を外からくぐってきた沙月と出くわす。軽い運動でもしてきたのだろう、うっすらと上気していた。

「俺は畜生以下ですーーーーッ！！！！」

その脇を摺り抜け、彼は走り抜ける。校門に差し掛かると拍手を鳴らして跳んで行った。

「…何？少し働かせ過ぎたのかしら…？」

【元より行動に不審のある輩です。一々気にせぬ事が肝要かと】

「それもそうね。さて、望くんは何処かしら～」

違う意味で心配した沙月だったが、ケイロンの言葉に納得した。そしてそんな心配などあっさりと捨て、意中の少年を探しに歩きだした。

肺が破裂しようと構わんとばかりに走りに走り、彼はその扉を破壊しそうな勢いで押し開く。

「一一鈴鳴ィィィィッ！！！！！テメッ、何とんでもねぇ代物押し付けてくれてんだァァッ！？！！」

だがそこはもぬけの殻。虚しく声だけが響く。

と、足元に一通の封筒を見付ける。蝋で封までされたそれは、恐らく扉に挟んであったのだろう。

拾い上げる。そこには流暢な日本語で『巽さんへ』と宛てられていた。

袖に潜ませていた小太刀を引き抜き、封を切る。出て来たのは一枚の便箋。

『拝啓　巽さん

巽さんがコレを読んでいるという事は、私はもう此処には居ないのでしょうね…』

「死んだみてェな言い方してんじゃねェよ!?あんにゃろ、やっぱ確信犯かァァッ！」

『まぁまぁ、そう滾(たぎ)らずに。血圧上がっちゃいますよ?』

「読みながら読まれた?!つーか文面で会話すんなッ！」

ツッコミに、隣を歩いていた通行人がびくつく。

『とにかく、お世話になった巽さんに改めてお礼を申し上げようと筆をとった次第です。

お客さんはあまり来ないし、突然この世界を出られなくなるしで意外と途方に暮れてたんですよ、私。

ですけど、そんな私よりももっと大変な境遇で頑張ってらっしゃる巽さんとお話して気が楽になりました』

――そうか、やっぱり知ってたのかアイツ……。俺が反乱軍の関係者だって事を。

歩きながら手紙を読んでいた空は、川に掛けられた橋の欄干にもたれ掛かった。

『そしてもっと頑張ろうと思えたんです。こんな事でへこたれてられない、もっともっと、って。巽さん、本当にありがとうございました。

ところで、同封した羽飾りにはお気付き頂けたでしょうか？』

言われて見れば、封筒の中には羽の根付けが同封されていた。鳳凰の尾羽を思わせるソレ。

『その羽飾りは縁起物で、大事な人との再会を願って贈る物だそうです。巽さんと再会できる事を願ってお贈りしますね。
書面にて失礼しましたが、これでお別れの言葉とさせていただきます。またいつの日か、貴方とお会い出来る事を夢見て。
鈴鳴より　かしこ』

「……」

ハァ、と溜息を落とす空。こんな言われ方をしては怒りも醒めようというもの。
羽飾りを握り締める。それなら貰っておこうと。次いで胸元、かつて貰ったお守り…二度と千切れぬ様に、神剣で創った鎖で頸に掛けているソレを。

一一貰ってばっかじゃねェかよ、情けねェな畜生…。

今度出会う事が有ったのなら、その時は商品を買えるように。

「……ん？追伸…？」

文面の最後に、ただ数文字。それは記されていた。

『追伸　いい夢が見られたでしょう？』

ぐしゃぐしゃと丸められた手紙は、川に投げ捨てられた。

頭をボリボリと掻きながら歩き去る少年を、彼女は見詰めていた。物見櫓の庇に腰掛け、脚を組んで。優に八百メートルは離れた場所から、じっと。

「…ふふ…楽しみにしてますよ、巽さん。貴方が辿り着く極致、足掻き続けた先に手にするモノが何か…」

その笑顔は、昨夕空に見せた天真爛漫なモノとは違う。

「…だから――見せてください、私に。運命に抗う人の足掻き…神に挑む人のチカラ……不可能を乗り越えようとする……貴方の『可能性』を…ね」

妖艶な――幼い外見に似合わぬ、大人びた笑みで彼女は呟く。

澄み渡る、雲一つ無い天空から濯ぐ朝の陽射し。それに照らされた彼女の背に、まるで天女の様な翼が見えたのは――幻だったのだろうか……

ものべーから転送され、望達は平原に降り立った。鉾の反応を感じ取った為である。

一同の表情は硬い。前日に、グルン＝ドラスによって旧アイギアの友好国だったパズライダ共和国が攻め滅ぼされたとの報が入ったのだ。数百年にも及ぶ友好国だったその国は、鉾の侵攻によって僅か四日で陥落したという。連綿たる歴史に裏打ちされた軍事力ですらも、鉾の前には無力だった。

「皆さん…本当に、宜しいのですか？」

カティマは問う。コレが最後の確認。

「何言ってるんだよ、カティマ。俺達はもう仲間なんだ。だから…一緒に戦おう」

「望…」

望の力強い言葉。彼を見つめる彼女の蒼穹色の瞳に喜色が充ちていく。

「そうですよ、もう一蓮托生ですっ！『わ・た・し・た・ち』っ！！」

「ええそうね。もう一人でなんて行かせないわよ？『わ・た・し・た・ち』が一緒なんだからね？」

そんな彼女の様子に不穏なモノを感じ、希美と沙月は二人の間に身を滑り込ませた。

「希美…沙月殿……。本当に、本当にありがとうございます…」

そんな彼女らの内心など露知らず、カティマは感極まった様子で言葉を紡ぐ。

「我々が貴方方に出会えたのは、まさに天命だったのでしょうね…」

ほぼ同時に頭を下げるカティマとクロムウェイ。その背後には陣形を整えた反乱軍主力部隊が待機していた。後は号令を待つのみ。

そこに、何処から現れたのか黒尽めの男。

その周囲にはクリスト一同。

「…会長、周囲に鉾の反応は有りませんでした。それとこっちは悪い知らせですけど、周囲の街はもうグルン＝ドラスの制圧下です」

眠たげな細目のままで懐から取り出した地図には、『×』の字と青緑赤黒白で色分けされた数字。制圧されている街と鉾の編成だ。

「そう、まぁ仕方ないでしょうね。それで総数は？」

「周囲の街しか確認できてないんではっきりとは言えませんけど…最低でも十八以上。この後ろに居る本隊の事を考えると気が重いですね…」

溜息をそのまま欠伸に代えて、彼は篭手に包まれた左手を口許に寄せる。

割り開かれた外套の奥には、黒い中華風の武道着。その腰には一一『六つ』のホルスター。

「…また増えてる。あのね、好い加減にしておきなさいよ?君の『銃』は普通の人間にだって使える危険なモノなんだから」
「仕方ないじゃないですか。必要なモノ揃えたらこんなになったんですよ。…それに、ある手順を踏まないと暴発するように細工して有りますから」
「やめなさいっ!その方が危険でしょうがっ!」
「俺は自分の持ち物に触れられるのが一番嫌いですから。そのくらいやりますよ…」

言い合いに発展しそうになるが、そこに望達が集まって来た。先ず割って入ったのはカティマ。

「巽。戻っていたのですか?」
「ええ。只今戻りました、姫さん」
「昨日から姿が見えませんでしたが、やはり諜報に行っていたのですね?しかしいつの間に…」

どうやら大っぴらに『姫さん』と呼ぶ事に決めたらしい。
特に気に留めた様子も無い彼女は、そんな疑問を口にした。なぜなら、昨日からたった今までものべーは着陸していない。いつ出発したのかが疑問だった。

「ええ、何せ二日前から戻ってませんから」

つまりは先日朝早くに出会ってから、文句を言いに行ったその後で連絡が入った。『そのまま諜報をやりなさい。命令よ』と。

ジト目で見遣る空に構う事も無く地図を見る沙月。全く気に留めていない。
因みにクリスト達は望達より先にものべーから降り、彼を迎えに行

ったただけだ。外套の類はその時に貰った。

「君とカティマさん、ワゥちゃんで倒した三十以上の鉾は、パズライダ共和国に攻め入った鉾の別動隊だった訳だし…一体どれだけの兵力を蓄えてるのかしらね…」

「ですね。後から後から…ゴキブリかッて感じですよ」

記された敵兵力に、沙月は辟易した様子で呟く。それは空も同じ。記しながら、その層の厚さに呆れたモノだ。

「あれは一体どういうモノなのか、何処から来るモノなのか…私達にも解りません」

正体不明の鉾、その総数も何処から補填されているのかも全くの不明。それこそが鉾の最大の強み。

重苦しい空気に拍車が掛かる。そこに、彼の声が掛かった。

「……ともかくやるっきゃない、だろ?先輩、空、カティマ!」

グッと拳を握り、サムズアップを見せる。かつて戦う意味を見出だせずに戸惑っていた少年が、だ。

だが、今は違う。今の彼には明確な意志、決意が有る。それこそが『仲間を守る』という意志。物部学園の皆を、反乱軍の兵を。押し寄せるグルン＝ドラスの鉾から守り抜く。だからもう、彼に迷いは無い。

「「「……」」」

それに、沙月と空、カティマは顔を見合わせた。そして苦笑してしまう。

一一情けない話だ。いつの間にか、自分達が鼓舞されてしまっていた。先に戦う意志を定めていたはずの自分達が、敵の数如きに気圧されて。

「…そうだな。グチグチ考えるよりも先ずは行動か。減らさなきゃ減らない」

「…ふふ、腕が鳴るってもんよね！」

「はい、参りましょう…ミストルテへ！！」

一一一一応ッ！！！！！！

カティマの掛け声に、彼等だけでなくクリスト達や反乱軍までもが応えて一一一様に天へと拳を突き上げたのだった。

「ええ！？もう出発したってぇ！！？」

アズラサーセの街角に素っ頓狂な声が響く。その主は、妙な恰好をした少年。

鍛え上げられた肉体を誇示するかのような薄着。彼を一言で表すのならば『野生児』だろう。紫色の髪の、前髪の一部分だけを赤く染めている。

「はあ、あのおっきい鯨のお化けが北に向かって飛んでいくのを見ました」

道行く男性はそれだけ言うと、とっとと離れていく。余り係わり合いに成りたくないと判断したからだ。

「やっと追い付いたと思ったのに…また入れ違いか。ツイてないわね」
「今度ばかりは俺の所為じゃねーぞ」
少年の脇には、二房の三つ編の少女。和風な軽戦装束のような恰好。ぶー垂れる男に目もくれず、少女は一つ溜息を落として思案に暮れる。元々切れ長の目が更に細く絞られた。
「全く…何時になったら追い付けるのかしら。『あの方』の命令を遂行しなきゃいけないってのに…」
「…チッ！まぁた『アイツ』かよ…」
『あの方』。その単語が出た瞬間、少女の目が優しい色を帯びた。それを見て不機嫌になったのは、少年の方。吐き捨てる言葉に、少女は眉をひそめる。
「何よ。文句でも有るわけ？」
「別に～…。あ～あ、何時までこんなのが続くんだろうな。腕が鈍っちまうぜ」
すっと歩き出し、彼は正面の壁に向かって二度拳を突き出した。右と左の正拳。
「こう、ガツンと来るようなガッツな奴と闘りてぇぜ！！」
パン、と自分の掌で拳を受ける。まるで旋風の如き速度と威力は、紛れも無く厳しい修練を積んだ者の証。
それを少女に見せ付けるようにしたのだが――

「おっそーい、何してるのよ！誰が歩くって言ったー？ダッシュダーッシュ！！！」
「……ハァ」

だが少女は一瞥もくれず既に二十メートル程先を走っていた。
本当に置いて行かれる事を知っている彼は、盛大に溜息を落としながら駆け出した。

――彼が走り去って数秒。壁が軋む。メキメキと亀裂を拡げると、間を置かずに崩壊した……

――鉾が門を突破し、駆け込んで来る。散開して戦闘姿勢をとった三体は、青緑白。

「「「――ッ！！！」」」

その陣形の丁度真ん中に、『鴉』が着地した。全く気配無く降り立ったそれに気付いた時には、既に銃口が青緑を捉えている。

「――征くぞ【比翼】、【連理】！！」

交差した腕に握られた拳銃が、それぞれ銃弾を吐く。どちらも二発撃ち出され、迷わず照星に捉えた獲物へと襲い掛かった。

――――！！！

耳障りな金斬り音。氷の障壁と大気の障壁に阻まれ、弾丸は潰えた。
距離を取る青緑。そこに――

《ーー捉えた！『コールドチェイサー』っ！》
《ーーいっけぇぇっ！『スレッジハンマー』っ！》

ルゥとワゥの一撃が、更に引き離すべく放たれた。地を走る凍気の刃と、光熱の閃光。
それに圧され、フォーメーションが崩れる。間髪容れずに青へとポゥが、緑へとゼゥが直接攻撃を仕掛けた。
これで陣形の破綻は決定的。後はーー

《ーー皆、生き残るわよ！！『インスパイア』っ！！》
《《《《ーーー応っ！！！》》》》

ミゥの足元に拡がる魔法陣が空間に解けていく。その持つ意味、『鼓舞』の精霊光は、彼女らの闘志を沸き立たせる。

「ーー精霊光結界発動。『コンセントレーション』」
「させるかよッ！！」

杖を振り上げようとした鉾に向けて、空は【比翼】と【連理】を衝き付ける。だが一足遅く、完成した光の陣が鉾の防壁となって弾丸を弾き返した。

「ーー光へ還れ…『オーラシュート』」
「ーーッ！！」

杖が振り下ろされたのと引鉄が引かれたのは、ほぼ同時。空間から現出する無形のチカラが凝集し、煌めく刃へと換わる。

「貰ったァァッ！！」

その刃を、弾丸が狙い撃った。三つの刃が空中で粉砕され、鉾の攻勢を挫く。

懐へと潜り込んだその勢いのままで蹴りを見舞う。だが、光の盾に阻まれ接近できない。

「出番だ、気張りやがれカラ銃！！」

【合点承知之助～っ！！！】

「古いんだよッ！！」

左に番えられ、鉾に衝き付けられた黒い銃口。

その下部に嵌められた爬虫類の眼を思わせる小さな宝玉が妖しく虹色に煌めき――黒い魔法陣を発生させる。

「【――『月影の魂魄（スピリット・オブ・ダーク）』ッ！！」】

場のマナの濃度が変わる。急速に充ちゆく黒のマナに、周囲のマナが対消滅して消えていく。

「――カ、は…！！」

それに白の鉾が苦しみ出す。ただの人間である空や、特殊な生存ユニットに収まっているクリスト達に大した効果は無いが、純粋なマナ存在である鉾にとっては息が出来ない事と同義だろう。

【――マナよ、黒き龍の息吹へと変わり、万象を撃ち砕け……】

「あばよ…！」

「【――『ナイトレイド』ッ！！！」】

そんな鉾にも容赦は無い。空はただ、引鉄を引く。
暴力としか形容のしようの無い、澱んだ陰の塊。その奔流が白い鉾を呑み込み一一撃ち砕いた。

その完全消滅を確認して、【無銘】をホルスターへと戻す。そこに、鉾を片付けたクリスト達が集まって来た。

《お疲れ様です、タツミ様》
《まぁ、この程度では相手にもならんな》
《へへ～ん、どって事無いよね～》
《…ふん、お調子者…》

続々と集結して来るクリスト達。そんな中で。

《あ、タツミさん、怪我してますよ…？》
「ん…？ああ、本当だ…」

ポゥの言葉に頬を触れば、右の下顎に裂傷が有る。跳弾が掠りでもしたのか、うっすらと血も流れていた。

《大丈夫ですか？今癒しの術を…》
「ああいや、いいよポゥ。この程度、唾でも付けてりゃ治るさ」

断りを入れて己の懐から傷絆創膏を取り出す。それを、篭手を嵌めたままで器用に張り付けた。

――第一、俺には治癒魔法も精霊光も余り効き目は無い。ミゥさんの『インスパイア』もやっぱ効き目は皆無だったし。余程強力なものでないと自然治癒と変わらないんだから、貴重な治癒要員にマナを無駄遣いさせる訳にもいかない。節約して貰わないと。

《でも…》

「何、こんなモノ怪我の内にも入らないさ。本当に大丈夫だ…有難うな」

それでも心配げに空を見遣るポゥに、彼は苦笑してバイザーに覆われた額をコンコンと叩く。そこにはかつてミニオンに割られた傷痕が有る。

それに結晶妖精達は寄り集まってひそひそと言葉を交わし始めた。

《…アッキーってさ、ポゥ姉には妙に優しくない？》

《あれだな、きっとタツミは緑属性…つまりは癒し系に弱いんだと思うぞ？》

《ああ、なるほど。そう言えばノゾミ様にお熱だと聞いたわ。でもそのノゾミ様はノゾム様しか見えてないから…》

《心配要りません、ミゥ姉様。あのデクの棒が必要以上にポゥに近付く事が有れば、私が喜んで斬ります》

「…全部聞こえてますけどォォ！それと黒チビ、後で便所の裏に来い！」

と、彼等の前に走り込み土下座した初老の男。この村の村長である。

「おおぉぉ！悪名高き鉾どもを物ともしない！流石は天使様方ですじゃ！」

始めに挨拶した時には胡散臭そうにしていた訳だが、鉾を倒してみ

ればこの変わり様だ。

（…ふん、変わり身が早いもんだ）

【まあまあ旦那はん、『長いモノには巻かれろ』、『寄らば大樹の影』て言いますやありんせんかぁ】

（フ、それもそうだな。御陰で――）

【あ～い、お陰でぇ…】

（【――扱い易い事この上無い）】

――少し得になる条件を提示してやれば喜んで飛び付きやがるんだからな…まぁ、わざわざ潜んでいた鉾を見逃しておいた甲斐が有ったってか。

「気に病む事はない、我等の風体では怪しまれる事など先刻承知。寧ろ貴方の冷静な判断こそ称賛に値する」

「おお、何という寛大なお言葉…この老、心洗われましたぞ！」

だがそんな内心は噫にも出さず、大人の男――クロムウェイを参考にした振る舞いを見せる。一種の才能という奴だろうか。彼は人の心を忖度する才能に長けている。事実、彼を見る村長の目は尊敬の眼差し。

――さて、そろそろどうしてこんな事になったのかの説明しよう――……

鬨（とき）の声を上げ、心を一つにした後で。

「あ、そうだ巽くん。別行動してちょうだい」
「……あの、どうしてそう俺のモチベーションを下げようとするんですか？そこまで俺の事嫌いですか？」
「そりゃあ嫌いだけどそれとコレとは話は…あれ？同じね。まぁとにかくここ、『ジェダ＝アイギア国境ミズラ村』に行ってもらえる？」
「了解雇用主、地獄に堕ちてください」

――これだけ。そう、これだけで俺は主力部隊から外されて辺境を探索に駆り出された。なんでも――『宝』が有るとかで。

村長が何かを捧げ持つ。袱紗に包まれた小さな箱。

「どうぞ天使様、これが我が村に伝わる神宝『命の雫』ですじゃ！」
《《《《《――！！？》》》》》

『命の雫』という言葉に、クリスト達が息を呑む。それに気付くが、空は敢えて無視した。

「左様か。では、確認させて頂く」

包みを解けば、中には二本の小瓶。澄んだ朱い液体と碧の液体を充たしたその小瓶に――

《…村長殿。無理を承知でお頼みする。これを我々に譲って頂けな

いだろうか》

ルゥが、珍しく切羽詰まった表情で進み出た。他の面々もそうだ。

「はぁ、我々としても何の為に使うモノかは解りませんので…天使様方が遣うのならば、それも本望でしょう」

《済まない…感謝を。ポゥ、ワゥ》

呼ばれて歩み寄る二人。それに反応してか、空の手元の小瓶が燐光を放ち始める。

――引き合っているのか？

本能的に感じ取り、彼は二人にそれを差し向ける。果たして煌めきは強まった。

《御免なさい…もう、『煌玉の世界』は無くなってしまったんです帰る事はもう…出来ないんです》

《でもね、ボク達は生きてる。生きて、此処に居るんだよ。だから…一緒に生きよう。ボク達と一緒に…》

懺悔の様なその言葉。その言葉を紡ぐと、二人はそれぞれ対応した色の小瓶を割る。輝く雫は――ポゥとワゥの入った結晶に吸い込まれていった。

《…終わりました》

「…終わった、ッて？」

《漸く還る事が出来た訳だよ…タツミ》

その疑問に答えたのは、ルゥだった。その悲しい笑顔。

――解らない。一体どういう意味だったのか。ただ――…いつも脳天気なワゥまでもがその表情を引き締めている。

「…ミズラ国境村の長よ。貴君の献身、確かに承った。これより我等は同胞達の元へと戻り、グルン＝ドラスの首魁たる暴君ダラバ＝ウーザを討つ！！」

天高く【無銘】を衝き上げ、彼は声高に宣言する。黒い銃は黒耀石の様な鈍い煌めきを放ち、幻想のベールを纏う。

――おぉぉ……！！

それに村民達も声を一つに、神の名を讃え始める。酒精に酔ったかの様な、熱の篭った賛辞。

――だったら、俺は役目に徹しよう。彼女らの問題は、彼女らが解決するしか無いのだから…

それを背に、彼等はミズラ国境村を後にしたのだった。

The 20th Name・・・"鴉と狼"

ミズラ国境村を後にした一行は、ラスーラの村に入っていた。そこはミズラ村への道程にあり、鉾に制圧されてかけていた所を救出した村だ。
因みに食事の際は物見に集まった村民達によって、まるで動物園の動物になった気分での食事だった。

そんな村民達も流石に夜半過ぎには居なくなり、角灯の明かりに揺らめく室内には空とクリスト達だけが集まっている。

「…ひぃ、ふぅ、みぃ、よ、いつ、むぅ…フフフ…」
《…ちょっとアンタ。何銭勘定しながら悦に入ってるのよ気持ち悪い》

他のクリスト達がベッドの上に集まって歓談している脇。備え付けの卓に貨幣を並べて勘定している中華服姿の空とそれを呆れ顔で眺めるゼゥの珍しい二人組が居た。

「うるせーよ黒チビ助。金はこの世で一番信用できるコミュニケーションなんだよ。金さえ有りゃ信頼も愛情も買えるんだよ！金さえ貰えりゃ俺はヘドロだって愛せるねッ！！」
《…アンタどんだけ根性ひん曲がってる訳？そんなに金が好きならなんでこの宿タダで借りなかったのよ》
「ハァ？そんなの決まってんだろうがよ…」

『タダで結構です天使様方！！』との村長の言葉を断り、彼等はきちんと料金を払い領収書を切って旅籠を借りる事にした。
後で『天使を騙る者』が現れた時の為の対策だ。『天使は金を払う』

事を徹底しておく。それだけの事だ。

「…しかし、本当に良かったんですかミゥさん？クロムウェイさんから頂いた資金はまだ余裕ありますよ？別の部屋をとった方が…」

《構いません、タツミ様。節約は美徳です》

《それにさ～、今更だよ。前は三人で一部屋だったじゃん？》

「あの時とは状況が違うだろうが…」

――羞恥心とかは…感じないんだろうな。どうやら男とは思われてないみたいだし…

【『男っぽい』言うより『おっちょこちょい』どすからなぁーーーっ！？！？】

《…タツミ。自分の武器を投げ捨てるのはどうかと思うぞ？》

「ちょっと夜風を感じさせてやろうと思いまして」

窓の外に飛び出して行った【無銘】に構わず、彼は貨幣を袱紗に包んで懐に戻す。替わりに【比翼】と【連理】、そしてメンテナンスキットと銃弾の詰まったウェストホルダーを取り出した。

《しかし、君の武器は手間が掛かるな。弾は自らで装填する必要が有り、戦闘後には必ず手入れしなければ動作不良すら有る、か…》

「まぁ、もう慣れましたけどね。それに悪い事ばかりでも無いですよ？」

《ほぅ、それは？》

興味深そうに様子を見るルゥ。空は銃口内を磨き、カラの状態の【比翼】の照星に角灯を捉えて引鉄を引く。

「…愛着が湧きますから」

――カキン、と。焚火が爆ぜる様な音を立てて、その撃鉄が墜ちた。

朝霧に包まれたミストルテの街。その前哨の森の中で、彼等はその報を待っていた。

望と沙月の二人は、双眼鏡を手にミストルテの街の門を守る鉾を観察している。既にアズラミンウとルクルカンは奪還済みだ。後は後続の空とクリスト達が別ルートのリスタラの街を奪還してくれれば、ミストルテの街に入るのみとなる。

「空達…遅いですね」

焦れるのだろう、双眼鏡から目を離した望が呟く。

「心配無いわ。何せ彼が同行しているのは、かつて『煌玉の世界』を救おうと『神』に反逆した、『剣の巫女』達だもの」

対して沙月は落ち着いたもの。望に水筒から注いだ麦茶を差し出すと、それを飲むように勧める。

一息ついて冷静になったのか、彼はその疑問を口にした。

「前から気になってたんですけど、その…ミゥ達って何者なんですか？どうして『旅団』に？」

「…慌てないの。その時が来れば彼女達の方から話してくれるわ」

だが、沙月は鉾を見据えたままで諭す。

「…そうですね」

彼も、それに理解を示した。彼とて人に言えぬ…それこそ秘めたる陰惨な『神世の記憶』が、断片的とは言え受け継がれている。

――…！

と、望の懐の携帯無線機が震えた。それを取り出し、急ぎ耳に当て――

「巽くんから？」

「…いえ、希美です。そろそろリスタラ側の交代時間ですから引き上げましょう、先輩」

少しだけ、落胆した顔をした…

後一歩でリスタラの街という所で。彼は慣れない手綱捌きで馬を停めた。

《どしたのさ、アッキー？》

その様子にワゥが問い掛けた。だが答えない。ただ一点、リスタラ近郊の森に視線を向けている。

《ちょっと、いつまでそうしてる気よ！本当にデクの棒にでも成る気？》

ゼゥのその台詞にも、いつもの様な返しは無い。

「…ミゥさん、ルゥさん。リスタラの奪還は任せてもいいですか？」

《え？タツミ様、それは一体…？》

《どういう事か説明して貰えないか、タツミ。突然それでは、納得しろと言う方が無理だろう？》

ミゥとルゥの当然の返事。だが空はそれ以上何も言わない。

ルゥは一つ溜息をつき、真摯な顔で問うた。

《…一つ聞いておこう、タツミ。それは一一『誰の為の行動』だ？》

「一一俺自身の為です」

間髪容れずに返った言葉。鋭い青と鳶色の瞳がじっと見詰め合い一一

《…そうか。分かった、気を付けるんだぞ》

《あ、ちょっとルゥ！！？》

それだけを言い残して、リスタラへ向かうルゥ。彼女を追い掛けていく残りの四人。それらが振り向かない内に、空は馬を降りて駆け出す。

フードを被り、バイザーと襟巻きで顔を隠して。足音も無く見据えていた森の中へと消えて行ったのだった。

《ルゥ！ルゥったら！どういうつもりなの！？》

《そうです、ルゥ姉様！アイツ一人では危険過ぎます！我々の内の誰かが付いて一一》

先頭を翔けるルゥに、追い縋るミゥとゼゥ。

《…ミゥ、ゼゥ…少しはタツミを信用してやれ。彼とて戦士だ》

《《う…》》

その二人に、ルゥは落ち着き払った声色で諭す。ミゥとゼゥはバツの悪そうな顔をした。

…最初の頃の印象からだろうか、どうしても頼りなく感じてしまうのだ。有り体に言えば、危なっかしくてしょうがない。いつもギリギリのラインを行ったり来たりしているのだから――……

梢に背をもたせ掛けて、彼は人を待っていた。

「…おっせーなぁ、街一つ偵察すんのにどれだけ時間掛けてんだッつーの…」

それはかつて、アズラサーセで望達を追っていた二人組の片割れ。野生児の方だ。

「ハァ、ッたく。力が有り余って仕方ねぇってのによ…」

コキコキと頚を鳴らし、彼は暇そうに呟く。事実暇だったし、連れの言動によって鬱憤が溜まっている。後は何か火種が有れば、彼は爆発してしまうだろう。

――だから、丁度いいと。彼は笑った。

「来いッ！！」

黒い、蝙蝠めいた翼を持つ狼の神獣を出現させると共に、その力を引き出す。彼の周囲に濃密な黒のマナが結集して右の拳に闇の爪を成した。

「ーーー『シャドウインパクト』ッ！！」

それを振り飛ばす。三本の影爪は真っ直ぐーー数十メートル離れた木の枝を斬り砕いた。

満足げにそれを見詰めると、彼は飛び掛かろうとした脇の黒狼を押し止めながら。

「躱したか。やるじゃねぇかよ？まぁーー」

呟き、構えを取る彼の目に。黒い外套の袖と紅い襟巻きを棚引かせて着地したその『鴉』が映る。

「ーーそうじゃねェと、コッチが楽しめねェんだがなァ！！！」

不敵に笑って言い切ったその両拳にーー三本の『鈎爪』が現れた。

薄紫色の逆立った髪、前髪に赤いメッシュの入った男が拳を突き出す。その両拳には、それぞれ三本の鈎爪。
そこから感じられる気配はーー紛れも無い『永遠神剣』。

（…ダラバ以外の神剣士、か。しかもまた結構な力だ）

――さて、状況から考えられるコイツの正体は何か。最も高いのは、ダラバの協力者の可能性。そしてもう一つ、出来ればコッチで有って欲しいが――『光をもたらすもの』の可能性だ。

彼は男を見遣る。隙の無い構え。間違いなく、弛まぬ鍛練を積んだ者の証だ。

ザワリと風が二人を撫でる。葉が擦れる音が、やけに大きい。互いに微動だにしない構えで、互いを観察しあう。

「…それが、貴様の神剣か？」

首筋に感じる威圧を振り切るように、空は問い掛けた。

「おうよ！これが俺の永遠神剣【荒神（あらがみ）】だ！」

「……」

その問い掛けに、返事が返った。しかも御丁寧に自信の神剣の名を告げて。

「いや、お前…何て言うか…」

簡単に答えすぎだろう、と。彼は思わずフードの上から頭を掻く。そして、もう一度。

「…何故俺の存在に気付いた？」

「へっ！昔から勘と鼻は鋭いんだよ！」

得意満面答え、鼻を親指で擦って見せる。その様子に、いよいよ空

は――口角を吊り上げた。

――勘と、『鼻』？…そんなモノに俺の隠蔽が破られたのか…！！

緊張と驚きが去ってみれば、段々と愉快になってくる。そう、愉快にだ。

――これで俺は、更に隠蔽を強固なモノに出来る。まぁ――生き残れればだがな。

身体が軽い。よし、これなら戦える。

「じゃあそれが神獣だな」

「ああ、コイツは『黒い牙』…『クロ』だ」

またも気前良く暴露する。その瞬間、狼が主人を見遣った。

「主よ…初対面の相手にまでその不愉快な仇名を植え付けるのは止めて欲しい」

「喋った！？」

「喋ってはいかぬのか？」

その魅惑的なロートーンボイス。それが今度は、思わずツッコんでしまった空に向けられる。

「あ…いえ、すいません…。非常識の中で常識的な判断してました」

「解れば宜しい。狼を見た目で判断してはいかぬぞ」

素直な謝罪に気を良くしたらしく、『黒い牙』…クロは燻し銀な声で噛んで含めるように告げた。

――マジかっけぇッす、クロ先輩…！

「さっきから何ゴチャゴチャ言ってやがんだ?テメェもとっとと神剣出しやがれ！」

焦れた男の声に、空は頭を掻く手を止めた。そしてバイザーの上から額を抑える。リアルな頭痛を感じた為に。

「…はいはい」

腰元から引き抜かれたのは――【無銘】。それを見た途端、男は歯を剥いて笑う。

「手ェ出すなよ、クロ。コイツは俺の獲物だからな」

「了解した。好きにすればいい」

「おうよ。よォ！俺の名はソルラスカ！『【荒神】のソルラスカ』だ！テメェの名は！？」

その名乗りは、森中に響く大音声。

――ッたく、鬱陶しい奴だ！！もういい、後はふん縛って聞かせて貰うとしよう。

既に魔弾を装填済みの【無銘】、その銃口を向ける。少し腰を落として直ぐに動ける体勢を作る。その姿勢のままで。

「――巽。『【無銘】のタツミ』だ！！」

空もまた、大音声を以って答えた――！！

The 20th Name ?・・・"鴉と狼?"

空の【無銘】の銃口から発せられた碧(みどり)の魔法陣が拡がる。

「【ーー『薫風の魂魄(スピリット・オブ・ガイア)』」】

それは刹那にて空間に熔け、場の緑のマナ濃度を激増させた。

「せいやァァーーー!!」

「ーーッ!!」

それに一切構わずに繰り出された、穿つ槍の如き拳打を体を反らす事で避ける。その先端には鋭い爪。

「まだまだァ!!でやァァァッ!!」

「クッ!??」

続き繰り出される左腕。猛打を右腕で受け流すが、信じられない剛力に躯ごと後方に吹き飛ばされた。

「ーーくは、ハァ…!」

「どうしたぁ?そんなもんかよ?」

息を吐き、ソルラスカを見遣る空。

ーー流石じゃねェか、『闘争の神』”サジタール=ゼヒル”!!

思い出したのは、かつて同じ北天の側として轡を並べたその神性。

『闘争』を象徴する北天の一柱。眼前の少年の、前世である。

構えを直し、更に腰を低く落とす。既に間合いは見切っているが――相手は神剣士だ。気を抜くなど出来る筈が無い。

――それに、コイツがサジタールなら…『奴』が近辺に居る可能性も有る。

【無銘】の索敵に意識を割く。感じ取られた無量大数の生物の気配から、神剣士の反応だけを選び取る。

――リスタラに五、クリストの皆か…既にリスタラに感じられていた鉾の気配は無い。
もう奪還に成功し、今頃は無線で報告を入れているのだろうか。

「…！」

と、その直ぐ近くに潜む気配。少なくとも『今生』で感じた事の無いその気配は。

――居たか。ヤハラギとアルニーネの因縁通り、コイツらも因縁って訳だ。
さて、これで決定的となった。奴が来る前にケリを付ける必要がある――

「――オイ、気ィ逸らしてんじゃねェぞ！！」

「ッ！」

蹴った勢いで地を砕きながら、その右腕が弓に番えられた矢の様に引き絞られる。
この一撃を受ければ、今度こそ腕が圧し折れるだろう。

「疾ッ！！」

牽制の為に、右手一本で銀昏二本の【誰彼】を投擲する。ソルラスカは迷わずに一一

「征ィッ！！『崩山槍拳』！！」

掛け声と共に拳を繰り出す。その一撃で、【誰彼】を纏めて弾き飛ばした。精霊光を纏う右腕一本で、纏めて。

（一一オイオイ、あれは曲がりなりにも神剣だぞ！！）

【ひゃあー、こらマズイどすなぁ…】

一一見ろ、これが神剣士との差だ。ミニオンを何十体屠ろうと、俺と本物の神剣士の間にはこれだけの差が有る一一！！！

側転し、なんとか一撃を掻い潜る空。そのまま二転三転して距離を一一

「遅いぜッ！！『猛襲激爪』！！」

「なッ！糞ッ！！」

一一取れない。その俊足たるや、まるで突風。追い縋り続け様に爪が振り下ろされ、地面を削り取っていく。

「逃げてばっかかよ！！ちったァ掛かって来やがれ！！」

地面を転がり逃げの一手に尽きる空に業を煮やして、ソルラスカが激昂し叫ぶ。

「うォ！？」

それが、僅かな隙となった。空は地面を掻き、握った土をソルラスカの顔面に向けて投げ付ける。

「ッつァ、テメェ…汚ねェぞ！！」

目を擦りながら、ソルラスカは周囲の気配に気を配る。普通の者ならば動転するだけだろうが、彼は熟達の闘士。このような状況を経験したのも一度や二度ではない。対策は心得ている。

幸いにも目には入っていなかったらしく、瞼が開く。しかしそこに映ったのは一一黒い脚甲。

「なァッ！？？」

腰を落として旋風の様な後ろ回し蹴りをそれを躱す。次いで反撃しようと右腕に力を篭めて。

「チィ！」

後ろに跳び跳ねて頭上から墜ちてきた小太刀を回避する。何と優れた野性の勘だろうか。

「フッ！」

だが、それも彼の予想の範疇。空は墜ちてきた小太刀の柄を掴むと、反時計周りに一回転して投擲した。

「なんのッ！！」

それを空中で、下段から刷り上げる右の爪で叩き砕く。更にもう一本、投擲した後引き戻す腕から放たれた小太刀を左の刷り上げで砕いた。

「一一貰ったァァッ！」

【一一マナよ、碧き龍の息吹へと換わり、万象を撃ち砕け…】

だから、最後の一撃に対応が遅れる。引き戻した勢いに衝き出した【無銘】の撃鉄が熾こされる。装填されている魔弾を放つ為に。

「【一一『ゲイルストライク』ッ！！」】

一一撃ち出されたのは、真空。万物を穿ち貫く風龍の息吹だ。

それを空中では躱せず、引き戻したままの両腕ではどうしようもないだろう。

「『裂空一一』」

……『常識的』には。

交差した両拳に力が篭る。目前まで迫った不可視の弾丸に、ソルラスカは反応していた。感覚を研ぎ澄ます事で常識を越えた速度を得る、黒特有のその技の名は、『ファイナルベロシティ』。そして一一

「一一衝破』ァァァッ！！！」

裂帛の気合いと共に、両の裏拳が放たれる。交点にて真空の息吹を

捉え、猛烈な衝撃を叩き込んだ。

【んな、阿呆な……】

引鉄を引いた姿勢のままで、彼らは呆気に取られていた。

一一有り得ない。そんな芸当が出来るなんて、俺の理解の範疇を越えている。これは本物の魔弾だぞ一一!!!

「一一貰ったァァァッ!!」

「ッくァ!?」

繰り出された上段からの爪撃が空のバイザーを弾き飛ばした。白日の下にその面相が曝される。

「…へッ。ちっとやり過ぎちまったか?ま、大人しく降参しやがれ!」

「…んな……に…」

構えを解き、腕を組んだソルラスカ。対して空は、血の滴る額を抑えながらうずくまり何かを呟いている。

「何だよ、隠してっからどんな好い男か二目と見られねェ顔かと思ってみれば、普通じゃ一一ぐォッ!?」

軽口を叩こうとしたその瞬間に、ソルラスカの頸筋を昏い閃きが襲った。彼がそれに反応したのは、日中ではその昏さが殊更目に付いたからだ。

「…オイオイ、テメッ！！」

更にもう一撃。今度は銀色の一閃。

二撃、三撃と連続で振るわれる剣閃に、ソルラスカは後退し続ける。

下がりつつ叫んだ。

「何本神剣持ってんだッ！！」

――そう、先程から何度神剣を持ち替えたのか、ソルラスカは捉えあぐねていた。最初に弾き飛ばした二本、続く二本、拳銃型の一挺と――

「――こんな莫迦に、いい様にやられるなんてな！！」

空の両手に握られた――弐挺の『銃剣付拳銃（ベイアニット）』。

――右手には純白地に金の装調が施され、銀鏡の【誰彼】が取り付けられた拳銃。『ＣＺ－７５』をモチーフとしたその贋物神剣の銘は――【天涯（てんがい）】。

――左手には深紫地に金の装調が施され、昏闇の【誰彼】が取り付けられた拳銃。『ベレッタＭ９２ＦＳ』をモチーフとしたその贋物神剣の銘は――【地角（ちかく）】。

つまりはこれで九本。一般的な神剣士には信じられない数だろう。

その問いに答える事も無く、彼は引鉄を引く。

――！――！――！――！

弐挺から二発ずつ。計四発。初弾だけでそれだ。続けざまに放たれ続ける銃弾は留まる事を知らない。
それを躱しながら、ソルラスカは舌打つ。

「――チックショウがァッ！！」

そのまま前転、銃弾を躱しながら空の懐に潜り込む。
それに向けて蹴りが見舞われる。前腕で受けたソルラスカ。額に向けられる弐挺の銃口。

「破ァァァッ！！！」
「羅ァァァッ！！！」

打ち合い、撃ち合う。技巧ではなく、ただ勢いのみで二人は死合う。
戦術と呼べる様なモノは何一つ無い。どちらも捨て身だ。

「――チィッ！ハッ！へへッ！！」

その昏い一太刀を左の【荒神】で受け止め、ソルラスカは笑った。
そう、これこそが彼が求めていた闘争だ。打算も計略も無く、ただ眼前の敵を凌駕する為だけに全身全霊を尽くす。ただそれだけ。それこそが、彼が望んでいたモノだ――！！！

火花を散らす事八合。右の爪を繰り出した腕ごと、左の【地角】が押さえ込む。間合いが詰まり過ぎている為、繰り出される爪撃の威力は先程ではない。

――当然それを見越していたソルラスカは即座に蹴りを見舞う。
それを空の脚が潜り込んで逸らす。その勢いを逆手に取られ、ソル

ラスカは大きく体勢を崩した。崩した所で、落雷の速度を以ってその踵が墜ちる――!!

地を砕いた足に変調が無い事を確認し、彼は満足げに呟く。

「…やるじゃねェか」

次いで蹴られた胸元を払い、数歩先に跳びのいた空を見遣る。その三白眼を睨み返しながら。

…密着した状態で威力を発揮するのは、どちらかと言えば空の持つ弐挺剣付銃。打突にも剣戟にも対応出来、更に射撃まで熟す万能武器。

だが――その経験と力量の差は一朝一夕の、小手先の技術や得物の性能程度ではいかんともしがたい決定的な差だ。簡単に覆せれば、ルーキーとベテラン等という言葉は生まれない。

空が彼との戦いに対応できているのも、他でも無い。十年来続けさせられていた体術の基礎が有った為だ。

「どうしたぁ？むっつり黙りこくったまんまでよォ？もっとテンション上げろッてんだ!!」

「何でテメェにテンションの駄目出しまでされなきゃならねェんだッつぅの。…騒がしい奴だ…」

その見下した、冷笑を浮かべた表情に。ソルラスカは眉をひそめた。

「…気にいらねェ…」

空は意識した訳ではない。だが、その態度表情が。彼の相方が執心の男と被って見えた。

「オイ、巽…だったよな」

「…ああ」

その口角が吊り上がる。笑顔ではない。明確な敵意だ。

彼にはもう、目前の相手を捕らえよう等という気は無くなっている。生きていればそうしようと、その程度。

「…終わりにしようぜ？一一全力で打ち込む！！」

右の拳を腰溜めに構え、気を集中させる。その闘気の昂りを如実に示す、精霊光の煌めき。

「一一良いぜ…来い！！」

空も構えを取る。左手に番える【地角】で上半身を、右手に番える【天涯】で下半身を守る、完全な『護り』の型。

「一一征くぜェェェッ！！『爆砕跳天噴』！！」

凄まじい速度でソルラスカは距離を詰める。僅かに五歩分の距離を半歩も無く詰め一一

「一一？！」

一一見た。天に放られた弐挺の剣付銃。換わり番えられた弐挺の拳銃。衝き出された左の黒い拳銃。

「――なッ！！！」

そこから迸しった閃光を――！！

「――クソッ！目が…！！」

かつてアズラサーセで取り込んだままだった、白い鉾の雷光。それにソルラスカは飲み込まれた。飲み込まれてなお、軽傷。

だが、直視した目はそうもいかない。常人ならば失明しかねない閃光は、一時的に彼の視力を奪い取り決定的な隙を作り上げた。

それを逃す空ではない。右手に番えた翡翠色の拳銃…最早拳銃の域を越えた大型の回転式拳銃を構え、疾駆する。

「――！？」

その空の目に入ったモノ。両の手を前後に大きく開き、腰を落としたソルラスカのその構えは――前後左右上下の全てに対応する攻撃範囲。その名を『地牙』。

前述した通り、彼は歴戦の闘士。視界を鎖されたとしても闘う事は出来る――！

ソルラスカはそれを的確に感じ取った。乾いた破裂音に、風斬り音。迫り来るそれに向かい、【荒神】を振り抜く。

――ギィン！！

「――グッ！！」

打ち落とした腕に、相当な衝撃が走る。次いで二度目。彼は銃弾を弾いた。驚くべき事だ。人間では考えられない芸当。

四度そうして弾いた。それもこれも、彼の詰んだ研鑽と神剣【荒神】によるモノ。

そして半回転し、裏拳にて何かを弾き飛ばす。軽い、それは――小太刀。

「――あばよ」

ソルラスカの背に向けて、翡翠色の拳銃が衝き出された。

――翡翠地に金の装調が施されたその回転式拳銃。これもやはり贋物。『トーラス＝レイジングブル』をモチーフとしたその銘は【海内(だい)】。相手の守りを貫く為だけに創られた、破壊力特化型の大型拳銃。それが翡翠［カワセミ］の嘴の如く、ソルラスカの後頭部を狙う。

「――そっちこそなァァッ！！！」

それに、彼の『鼻』が反応した。それこそがソルラスカの狙い。この男はただの勘と鼻によって空の隠密を見破った男なのだから。空が敵の虚を衝く暗殺術じみた戦術の遣い手だと気付いている。

ならば――その虚を予め作ってやれば、コイツはそこに飛び込んで来る！！

目を開く。辛うじて見える。――逃しはしない！！

「――『獣牙断』ッ！！！」

右の爪が唸りをあげる。それは間違いなく、今までで最大の威力。
二つの『必殺』が交錯する――刹那！！

――ガキィィィン！！！

「――は？」
「――い？」

その『必殺』が、同時に弾かれた。【海内】は『光の弾丸』で、【荒神】は『旋風』によって。
殺傷能力は失った。だが、飛び掛かった勢いと迎え撃つ勢いは止まらない。

「「――ちょ、待っ！！？」」

互いの顔が近付き、近づき――……

地面に正座させられている空とソルラスカ。その二人の前に、和風な肩当てと胸当てを身に付けた三つ編みの少女。
その背に担がれた薙刀。やはり、『永遠神剣』だ。

「私はタリア。『【疾風（はやて）】のタリア』よ。アンタは？」
「…巽。『【無銘】のタツミ』です…」
「巽、ね。で？どうしてソルと闘ってた訳？」

その怜悧な視線。かなり警戒しているらしい。まあ当然といえば当然だろうが。

――てか何で？何で俺はいつもいつも正座させられるんだ？運命？

「どうもこうも…正体不明の相手と出くわして、その正体探ってる最中にいきなり攻撃されたらそりゃあ闘うでしょう？」

――まあ、それ以外にも理由は有ったけど…

「…本当なの、ソル？」

「…ああ、そうだよ。そりゃあ、木の上から様子窺ってる奴が居たら怪しいと思うだろ？しかも見てみりゃ完全に悪人の格好だし」

――『テメェこそ悪人面だろうが』と言いたいところをぐっと我慢する。

「アンタ達ね…少しはモノを考えたら？」

「「……うぅ…」」

取り付く島も無い物言いに、空とソルラスカは顔を見合わせ――

「「うぅ……」」

気まずくなって目を逸らした。

――俺の…ファースト…いや、なんでもない。なんでもないって…

そんな事…俺は男だしさ…そんな小さい事で…

【まぁ、犬にでも噛まれたと思うて一つ】
（煩せェェェッ！誰が上手い事言えッつったァァァッ！！腹立つんだよテメェに言われると！！）

今すぐ【無銘】を投げ飛ばしたかったが、流石にこの状況では出来ない。後で意趣返ししてやろうと誓う空だった。

「…ふぅ、まあ良いわ。ようやく斑鳩に繋がる手がかりを手に入れた訳だしね」
「斑鳩って…会長ですか？と言うより貴方達は何者なんです？」
「何者って…斑鳩に何も聞いてないの？」

腕を組み思案し始めたタリアに、空は問う。それに彼女はキョトンと無防備な表情を見せた。余程意外だったのだろう。

「…いえ、さっぱり」
「アンタ…本当に斑鳩の仲間？」

だがすぐに訝しげに睨む。

一一大きなお世話だわ。一番自信が無いのは誰だと思ってるんだ。

《タリア様、タツミ様の素性でしたら私達が保証致します》

そこに入るミゥのフォロー、ポゥも頷いている。

「ミゥがそう言うなら問題は無いでしょうね」

それで納得したのだろう。ようやくタリアは空に向けていた不審の眼差しを止めたのだった。

取り敢えずリスタラの街に戻る事を決め、空とミゥとポゥ、ソルラスカとタリアは森の中を歩いていた。下草を踏みながら、タリアがソルラスカに小声で話し掛ける。

「…ソル。アンタ、覚醒したばかりの学生相手に引き分けるなんて弛んでるんじゃないの？」

「あぁ！？仕方ねェだろ、すげぇやりづれぇ相手だったんだから！」

大声で返したソルラスカに、タリアは咄嗟に前方を歩く三人に目を向ける。だが向こうは向こうで会話に集中しているらしく、気に留めず歩いていた。

「『遣りづらい』…？どういう意味よ？」

『静かにしなさい』の意を篭めた冷徹な視線を以ってソルラスカを圧倒しながら彼女は続ける。

…認めるのは癪だが、ソルラスカの実力は知っている。紛れも無い実力者なのだ。その男が覚醒間もない神剣士に引き分けたなど、俄には信じられない。

「どうって、気配が無いわ足音が無いわ、呼吸音が無いわ…おまけに神剣を何本も持ってやがる。それを使い捨てにして来るんだからな」

「気配云々はともかく、神剣を…！？そんな神剣士が居る訳が…！」

その信じられない情報に、タリアは思わず前方の少年を眺める。ソ

ルラスカも同じく。

「居るんだよ、あそこにな。しかもありゃあ戦いに疑問を持たねータイプだぜ？」

黒い外套によって、全くと言っていい程体格は判らないし、武器も窺えない。
判るのは背の高さと、こちらを窺う中庸な面相。

「…ッたく、随分汚ねぇ戦い方しやがる。勝ちゃあ良いって感じだったな」
「…そうね。どうも一一」

だが、彼女にとってはそれだけで充分だった。充分一一

「どうも、気に入らない目をしてたわ」

その存在が気に喰わない理由になった。見ているだけで嫌悪が湧き出てくる。

「…タリア？」
「なんでもないわ。さぁ、リスタラに急ぐわよ」

剣呑な気配を察し、ソルラスカは語りかける。
一つ溜息を落として、タリアはまた歩く事に集中し始めたのだった。

草叢を踏みながら歩く空達。…踏んでいるのは空だけだが。
ひとしきりミゥに叱責された後、彼は口を開いた。

「しかし驚きましたよ。まさかあの連中が、会長やミゥさん達の所属してる組織が寄越した補充要員だったなんて」
《私も驚きました。まさかソルラスカ様やタリア様がいらしていたとは露知らず…》

ふと後ろから視線を感じて、彼は振り返る。ぶすっと歩いている二人組が居るだけだ。つまりはどっちか、或いはどっちも。

並び立つその姿に、空のものではない記憶の情景が混ざる。

「…ハハ」
《…タツミさん?》

込み上げてきた笑いを抑え切れずに漏らしてしまい、ミゥとポゥに怪訝な顔をされてしまった。

懐を漁り、箱を取り出す。そこから取り出した絆創膏を額の傷に貼付ける。

一一またサジタールのお守りか?…本当に因果だな、『成長の神』”シェミン＝プルト”…

神世の古と変わらない情景に、彼は笑いを堪えるのに必死だった…

The 21th Name・・・"夜天"

リスタラの宿を借りた一行。今度は二室。男部屋と女部屋だ。

空は窓からの夜風を浴びながら、使用した拳銃の手入れを行っていた。

【旦那は～ん、わっちもお願いしますってば～！！…てか取りに来てくだしゃんせ～～！！】

何処かその辺に放り投げられた【無銘】を除いて…。

【旦那は～～ん！聞こえとるんどすかぁ～！！ちょっ、さっきから蟲が！蟲がわっちの孔(あな)に入ろうとぉぉっ！！（※『銃”孔”』です。念の為…）　このっこのっ！！よっしゃ撃退ぃぃ！燧石式舐めんなやぁっ…ヒイ、火花に釣られてもっと来たぁぁっ！！】

完全無視を決め込んで、彼は最後の一挺を整備し終えた。息をつくと、隣でガン見している男に視線を向ける。

「…なんだよ」

「いや、その…『永遠神銃』だっけ？あれ取りに行かねーのか？」

「気にすんなよ。明日辺り取りに行く」

【旦那はんの鬼～！悪魔～！！ドS～！！いつか暴発してケツに火ぃ着けたる～！！】

「明後日でもいっか」

【旦那はんんんん！！！わっちが悪ぅござんしたぁぁぁっ！！】

悠々とベッドに寝そべり大判の本を読み始めた空に、ソルラスカは

ジト目を向けた。

「……」

「……」

そのまま、数分が経過する。

「…オイ、なんか喋れよ」

「…独り言でも言ってりゃ良いだろ。俺は読書中だ」

「間が持たねーっつってんだよ。根暗な奴だな、お前…」

「煩せェよ、放っとけ」

どこかで聞いた台詞を吐かれ、空は糸目を薄く開けて睨み付ける。

「しっかしお前、中々良い動きしてたな。格闘技の心得でもあんのかよ？」

「…多少はな。まあ、嫌々遣ってたモンだ。お前の世界とは違って、俺の世界じゃ格闘技は娯楽に成り下がってたからな」

夕食時の自己紹介で知った情報だ。ソルラスカの出身世界は『争いの世界』。その名の通りに争乱の絶えない、戦国時代のような世界らしい。

「へぇ…俺は自分のチカラを試す為だ。それに、守らなきゃならねぇ『家族』も居たからな」

ソルラスカのその一言。それに空は反応した。

「…『家族』…か」

「おぅよ。…まぁ、恥ずかしくて本人らには言えねぇけどな」

…僅かに、羨望の色を含めて。

「お前もよ、『家族』を守るくらいのチカラは貰ったんだろ？師匠には感謝しろよ？」

「…いねぇよ、『家族』なんて」

諭すようにウンウンと頷いていたソルラスカだったが、ボソリと呟いた空の一言に気まずそうな顔をした。薮蛇だったかと。

「…止せよ、気にされる方がムカつく。第一、こっちは生まれた時から天涯孤独なんだ。もう慣れてる」

本に目を向けたままの空。それを見ながら、ソルラスカは一つ頷いた。

「…オッケ、仕切り直しだ。で、何読んでんだよ？」

「ポゥから借りた本だ。何でも、『旅団』の書架で見て気に入ったモノを持ってきたとか」

「本か…苦手な部類だ…」

ソルラスカは若干の頭痛を覚えた。彼は何でも、本アレルギーなるモノを抱えているとの事。

――てか、本アレルギーって何？聞いた事無いんだけど？

「かい摘まんで説明してくれ」

「…何で無理してまで話し掛けるんだよお前…題名は『ファンタズマゴリア』。女騎士ユーフォリアが王子を守って冒険する話だ」

「…面白いのか？」

「少なくとも暇潰しにはなる」
「どれどれ…頭イテェ」
「ほとんど絵本だぞコレ?!」

そうして、騒がしくならない夜は更けていく……

ミストルテが奪還されたその日の夜。満天の星空の下にその少女は立っていた。…いや、立ち尽くしていると言うべきか。

「……」

物部学園の校庭には、黒い鎧に身を包んだ彼女。その胸中には大きな乱れ。受け止め様の無い事実が荒れ狂っていた。

「カティマ…?」

ゆっくりと星を見上げる彼女に呼び掛けたのは、茶髪碧眼の少年。

「望…」

その驚いた様な少年の顔に、彼女は安堵したように相好を崩す。

「今日は早く休むんじゃなかったのか?」
「少し、考え事をしていまして」

だが、拭い切れぬ憂いがその目には有る。彼はそれを見逃さなかった。

「…カティマ、俺さ、この世界に来て思った事が有るんだ」
「…思った事？」
突然の言葉に彼女は面食らった。鸚鵡返しに聞き返すと、彼は苦笑しながら口を開いた。
「ああ。人ってさ、本当に不思議だよな。もう全部知ってると思ってたのに、この世界に来て…非現実の中に落とされて。全然知らなかった一面が見えてきたんだ」
ふと後ろを見遣る。女子生徒達が根城としている学生寮。そこに居るであろう二人の少女の姿を思い浮かべる。
「…希美は本当に優しい奴で、虫も殺せない女の子だって思ってた。でもこの世界に来て、神剣を持って敵と闘ってる…。沙月先輩もさ、優しくて頼り甲斐の有る人だと思ってた。この世界に来て、頼り甲斐が有るなんてもんじゃ無いって判った。先輩が居なきゃ、きっと俺達はバラバラに崩れてた筈だ」
…本当に判らないモノだ、と。彼が抱いていたのは全て幻想だったのではないかと思う程に。だがそれは彼女らにしてもそうだろう。世刻望という人物について持っていた印象も変わったのではないかと。
そして、一番印象が変わった人物の姿を思い浮かべた。
「それに…空」
「巽…ですか」

…普段は教室の机に座って本ばかり読んでいたその少年。たまに自分や信助に話し掛けられて、無愛想ながらも律儀に応対していた仏頂面の男。

「うん…。空はさ、いつもぶすっとしてるけど…根っこは良い奴だ。…そう思ってた。だけど、この戦いに参加する前の生徒総会でよく判らなくなったんだ」

望は星を見上げる。見上げながら、その心情を吐露していく。

「でも、判らないのはあいつだって同じなんじゃないかと思うんだ。いつも自分を隠し込んで……ああもう、なんて言ったら良いのかな…」

だがすぐに言い淀み、くしゃくしゃと髪を掻き毟る。

「…そうですね。巽は…自らを幻の様に揺らがせているように思えます。まるで昼間の月の様に本質そのものを消してしまおうとしているような…」

その望に助け舟を出すカティマ。だがそれは彼女も抱いていた感想。

「…うん。だから、悔しいんだ」

「悔しい…ですか？」

彼は髪を掻き毟っていた手で頬を掻く。掻きながら、本心から悔しそうに呟く。

「空はさ、幼馴染みなんだ。誰が何と言おうと、大事な俺の友達だ。この世界に来てからは寝食だって共にしてる…『家族』なんだ。だ

から…その『家族』が頼ってくれないのは…一人で何かを抱え込んでるのは、悔しい」

「……あ…」

その一言。それが彼女の胸に堪える。堅く鎖されていた心に。

「なぁ、カティマ。俺達は確かに出会って間もない。だけど、俺にとってはカティマももう『家族』なんだ。だから一人で抱え込まないで欲しいんだ。俺で駄目ならそれでも良い。希美に先輩、空…皆きっと、いや、絶対にカティマの事を心配してる」

その心の『錠』に刺さっていた一一……かつて空が差し込んだ『鍵』を回したのだ。

真摯に彼女を見詰め、言い募る。その真っ直ぐな眼差しと温かな言葉が。彼女の心に在った、重責が流れ出ぬように押し止めていた『門』を開いた。

「……やはり、望に隠し事は出来ませんね」

カティマの眦には、煌めく物が有る。もう、押し止める事は出来ない。それを見せぬよう、彼女は天を見上げ一一

「お話します。私に受け継がれた王家の遺志…『プロジア文書』に記されていた…アイギアの血に宿る『罪』を……」

新たな『決意』と共に、そう告げたのだった。

漆黒が紫、そして蒼へと移り行く朝のリスタラの空。まだ朝陽は昇っていない。街はまだ眠りの底、神剣士達とて例外ではない。

「一一ヒュン！ヒュウッ！！ブン！！！

「一一ッ！！クッ！！フッ！！」

宿泊施設の裏手、雑木林の中のその男を除いて。

舞う武術服の袖と裾。左利きを前提とする、通常形態を鏡写しにした変形套路。後方に重心を懸けた状態から、踏み出しと共に足の踵にもう片方の脚を引き寄せるその歩法は。

「一一破ァッ！！」

反転蹴りを放ち、停止する。その脚を降ろして一息吐く。

ゆっくりと構えを解くと、傍に置いてあるリュックからペットボトルを取り出した。澄んだ水が充填されたそれの螺子を開け、少量含む。火照った体が冷却されて、心地良さ気に頭を振った。

そして目を落とす。その先に有るのは三冊の書物。図書室で借りたそれの表題は『猿でも出来る拳法！～太極拳編～』『猿でも出来る拳法！～形意拳編～』『猿でも出来る拳法！～八卦掌編～』。…因みに貸出カードの一番上は一様に『巽空』。

「…『力は骨に由り、肩背に没して四肢に達する事が出来る。勁は筋に由り、能く発して四肢に達する事が出来る』…」

朗読し始めたのは、彼が今修得しようと鍛錬を続けている技法。マナ操作に通じるかもしれない技法の概要を。

「『力は有形であり、勁は無形である。力は方であり、勁は円である。力は滞り、勁は暢(のび)やかである。力は遅く、勁は速い。力は散じ、勁は集まる。力は浮き、勁は沈む。力は鈍く、勁は鋭い』――…『発勁(はっけい)』か…」

思い出すのは、紫髪の少年。その拳打。今まで放てば確実に狙った対象を撃ち砕いてきた『魔弾』を粉砕した、理不尽にも程が有るソイツ。

「…弱いな…俺…」

――何を良い気分になっていたのか、と。たかが十数体の鉾を屠ったくらいで神剣士に比肩したつもりだったのだろうか。だから図に乗り、リスタラの奪還をクリスト達に任せ、自分は強力な神剣の気配に釣られた。

…莫迦莫迦しい、己の分を見失い、敵う筈の無い相手に勝とうとした。俺が必死こいて修得しようと足掻くその技法を、あいつらは神剣を手にした瞬間から使えるのだから…。

「…チッ！」

その差は果てしない。一体どれだけの断層が横たわっているのか。それは努力如きで埋められるモノなのだろうか――

――しかし、この中国拳法はよく躯に馴染む…ッてか、師匠が俺に叩き込んでたのは『八極拳』だった。しかも相当な秘門。

本当にあの人は判らない。俺が必要とする事が判っていた様な……

一体、彼女は何者なのだろうか。そう考えて、そう言えば身の上を尋ねた事など無かった事に気付く。巫女さんだろうと勝手に断じたから。

――迂闊だな。『可能性』を無視して判断するなんて……

そう苦笑しながら。空は明けに染まり始めた天を見上げた。

リスタラの宿の食堂に集まり食事を摂る一行。因みに人払いされている為、他の客は居ない。

「会長、もういいじゃないですか…もう二十分説教喰らってるんですよ？――ああ、すいません、すいませんって……」

空は窓際に立ち、携帯無線機片手にしきりと謝罪を繰り返している。それを見ながら、クリスト五姉妹とソルラスカ、タリアは朝食を摂っていた。というか、摂り終わっていた。

「…なぁおい、アイツ何時もああなのか？」

《え、えっと…割と…》

《いっつも誰かに謝ってる気がするよね～》

答えたのはポゥとワゥ。そのユニットの中には――マナ結晶。空の【無銘】のチカラにより結晶化させられた『クリスト室』のマナである。つまりは予備タンクだ。全員がそれを二つずつユニットに搭載している。

「腰の低い男ね。プライドとか無いのかしら」

冷たい眼差しを向けるタリア。そしてその声色も氷点下。蒼属性の象徴の様だ。

《あの男にそんなモノが有る訳無いわよ》

《こらこら…》

それに負けず劣らぬ冷たさのゼゥ。嗜めるルゥもまた、強く否定出来ないという風合い。

…因みに、他の皆が軽いサンドイッチ敵なモノだったのに対して、ソルとルゥだけはガッツリと肉類中心の、とても朝食とは思えないカロリーを摂取していた。

「はい、はい…ええ、確かにソルラスカ、タリアという名前の男女二人組です。…え？篭手剣型（パタ）と戦斧型（ハルバード）の神剣？爪と薙刀の間違いでしょう…ッて、試すの止めてくださいよ！どんだけ疑われてるんですか俺！！」

頭をボリボリと掻き、苛々を発散させている空。大分焦れているのだろう、窓の傍を行ったり来たりしている。鬱陶しそうにそれを眺めた後で、タリアがミゥに尋ねる。

「…ねぇミゥ、もう一度聞くけど、アイツは本当に斑鳩達の仲間なのよね？」

《は、はい…間違いは…無いのですが。どうもその、サツキ様との折り合いが悪いようでして…》

「なんだそりゃ…」

ソルとタリアは、揃って盛大な溜息を吐いたのだった。

The 22th Name・・・"契約"

斜陽に夜の息遣いを感じ取り、ミストルテの門番達は門扉を閉め始める。その表情の晴れやかさたるや。

久方振りのその仕事、以前は面倒でしか無かったその作業がこんなにも心踊るものだなどと。このミストルテが反乱軍によって奪還されなければ気付く事も無かっただろう。

「「「待ったァァッ!!ちょっと待ったァァッ!!!」」」

その時、締まる寸前の扉を潜り抜けようと、こけつまろびつ三人分の人影が転がり込んだ。

「あ、アンタね…、門の閉まる時間くらい、把握…ハァハァ、しときなさいよ…」

「仕方エホッ!!…無いじゃないですか、陽の沈み具合で判断するんですから、日毎違いも、出ますって…」

「そもそもアンタの所為(せい)で速度が落ちたのよ!これで斑鳩に合流出来なかったらどうする気よ!?」

「はいはい俺の所為ですよっ!!俺が馬を逃がした所為ですよー!!」

ゼイゼイと息を吐きながら、空とタリアは口争を繰り広げる。とは言え悪いのは全般的に空の方なのだが。

「あら…随分仲良しみたいじゃない、タリア?」

そんな二人に近付く影が一つ。夕陽よりも紅い長髪を靡かせるその人物は。

「…斑鳩！やっと追い付いた…あのね、アンタ達もっと速度を落としなさいよ！」

「ゴメンゴメン。次元くじらっていう規格外の足を手に入れちゃったモンだから、ついはしゃいじゃったのよ」

「まったくもう…」

眉を吊り上げていたのは前半だけ。後半は二人とも、再開の喜びを噛み締める様に微笑んでいる。

「あはは…、ところで巽くん？」

「ハァ、ハァ……はい？」

一一と、沙月の目が空を捉える。肩で息をし続ける少年を見、そして一一

「一一ソルラスカは？」

「「一一え？」」

その背後の門を見る。同時に、今まで騒いでいた為に気付かなかった声を聞いた。

「開けろーー！開けてくれーーー！！」

時刻は宵の口。ミストルテの領主の館にて、その儀はしめやかに執り行われていた。

「皆様、本日はお集まり戴き誠に有り難うございます」

大広間の中二階、半円系の階段の中程に立つのは、華美だが豪奢ではないドレスに身を包んだカティマ。その背後には『天使』として喧伝される少年少女達。

見下ろす階下には、地方から軍を引き連れてやって来た豪族や領主、貴族。傭兵団の頭や、下手をすれば盗賊としか思え無いような者達まで。

「私、カティマ＝アイギアスは、今日を以って旧アイギア王家の正当な後継者として名乗り出ると共に、アイギア国の復興を宣言します！！」

【心神】を掲げ、凛とした声を張るその姿は正に王者の風格。

「我がアイギアに伝わる神剣が、アイギア王家継承の証です。私はこの剣に誓って、王女としての役目を最後まで全うする所存です」

その【心神】が、月光を照り返して煌めく。この瞬間彼女は『アイギア王国女王カティマ＝アイギアス』と成り、その配下たる軍勢は『アイギア王国正規兵団』と成った。

一一一一オオオォォォォォォ！！！

聴衆も歓声を以って答える。口々にカティマを讃えている。

一一一体、この内のどれだけが尻馬に乗った奴だろうか。さて、少しでも多くそういう輩が『居れば』良いが。
内心がどうあれ人の事を利用しようとしているのだから、コッチとしても利用するだけしてやろう、使い潰すまで。

「このままグルン＝ドレアス城塞都市まで攻め入ろうぞ！！」
「そうだ！このままグルン＝ドレアスを奪い、ダラバめの頚を獲ろう！！」

思案していた空の耳にそんな声が入る。それに賛同する声まで上がりはじめ、場が急に騒がしくなる。

（莫迦どもめ。そう簡単に事が運ぶかよ。テメェ等じゃダラバの覇気だけで圧死するのが関の山だ）
【くふふ、全く…無知は罪どすなぁ…】

その有様に、彼はバイザーの下で杞憂だったかとほくそ笑んだ。
正しく烏合の衆だ。空の隣では沙月が溜息を落として頚を振り、その更に隣では望が不満げに顔をしかめている。

（一枚岩じゃ無いのが気に入らない、ってか？）

一一そう、烏合の衆だからこそ、尻馬に乗って来たからこそ。そいつらは俺達の示す指針以外の道筋を見出だせない。実に、利用し易い。

「一一鎮まりなさい！！」

ダン！、と【心神】が床を打つ。水を打ったかの様に静まり返る一

同。

「皆様の気持ちは良く分かりました。しかし、このままグルン＝ドレアスに攻め入れば互いに大きな犠牲を払う事になるでしょう。武力を行使する前に、先ずは話し合いによってこの戦争を終わらせる事が出来ないでしょうか？」

その言葉に、思わず息を呑む。そして相方に意識を集中する。

（どういう事だ…！）

【……ふ～む、こらぁ何か有りましたなぁ？】

「私は、グルン＝ドラスとの和儀を結ぶ事がこの戦争を最も早く終わらせる道ではないかと考えています」

その問答の間にも、彼女の弁は止まらない。思考しながら聞く、高度な作業を行いつつ。

（何か、だと？一体何が……）

【そないに思い悩まんでも、お姫はんが影響受ける人物なんざ限られとるやありんせんかぁ】

空の視線が、一人の少年を捉える。カティマの発言を見守る、世刻望を。

「我がアイギア軍は暫くこの地に留まり、グルン＝ドラスのダラバ＝ウーザ将軍と話し合うべく交渉を試みます。故に、御助力戴いている領主、貴族の皆様に於かれましては、今後勝手な行動は慎んで戴きます。行動を起こす場合は私に是非を問うて下さい。…くれぐれも勝手に軍を動かす事の無きように」

言い切った言葉に、反論は出なかった。

宣言式が終わり、『先に帰る』と沙月に断りを入れて。空はただ一人で夜道を歩く。
最近は良く夜目が効くように成り、星明かり程度在れば森の中でも危なげなく走るくらいは出来る。

【旦那はんがまごついとった所為で何や面倒臭い事に…。どないしはるんどすかぁ?】
(……どうもこうも、後は結果を待つだけだ)

言い切った言葉は落ち着き払っている。それもそのはず、彼には自信が有った。

一一あの男が、そんなに生易しいもんか。対峙した俺だからこそ判る。奴は虎だ。苛政よりも猛き虎。情けなど一一無い。

(心配は無い。果報は寝て待て、ってな)
【くふふ、そうやないとコッチが困りやすぅ…『契約通り』に喰わしてもらいませんとぉ】

一一『契約』。その持つ意味は大きい。もし此処でコイツの機嫌を損なえば俺は只の人間に逆戻りだ。その上で『喰い』殺されるだろう。地獄すら生温いと感じる方法で。

(…解ってるさ。『契約以降、【無銘】及び【無銘】を遣って創り出した武器防具その他道具を遣って倒した相手の神剣及びマナは全て【無銘】のモノとなる』だろう?)

【解っとるならええんどすぅ。あぁ、【夜燭】の味が愉しみどすわぁ……くふふふふ…】

（フン…ククク）

――信頼ではなく利害。それが俺達が結び付いた理由だ。この解り易さは心地良い。契約に身も心も縛る他の神剣士達とは違う。それが俺達だ。

互いに腹を探り合う様な忍び笑いを漏らして。空は巨大な神の船――ものべーの前で拍手を打った。

The 23th Name…"鴉［カラス］?"

香しい匂いが満ちるそこで、彼は【誰彼】を振るっていた。

――トントントントン…

キャベツの様な葉野菜を刻む。手つきは意外と鮮やかだ。

「いやー、やっぱり巽くんのナイフって切れ味抜群ね。さっすが元永遠神剣！」

「うん、使い易いサイズだし助かるよ」

同様に美里と希美も【誰彼】――の刃を用いた包丁を遣って魚や肉を捌いている。

「そうか？まぁ、役に立てて光栄だよ」

「何が『光栄だよ』やねーーん！！わっちは心底不愉快どすわいなっ！！！」

希美に笑み掛けられて、空は照れ隠しに頬を掻く。そんな主に幽月の罵声が浴びせ掛けられた。

一方、別の場所では望がその鏡の刃を見詰めながら呟く。

「切れ味良いよなコレ…指くらいなら落ちるんじゃないか？」

「だろうな。まぁこの吾、【黎明】程ではないがなっ！」

「何を張り合ってんだよ何を…」

周囲には給食用の寸胴鍋が幾つも並べられている。そう、食事準備中だ。調理部隊と共に……。

太陽が南中高度に達した頃、ようやく人波が落ち着いてきた。後の用意は解放軍の兵糧係に任せて、物部学園調理部隊は食堂に帰還、賄い（残飯とも）を頂いていた。

「しっかし、大変だったわね～…」

「うん…最近は兵士さんの数が爆発的に増えたし、食事の準備を手伝うのも大変になってきたよね」

のへーっと台に突っ伏し、美里は宣う。口にはスプーンをくわえたままだ。非常に行儀が悪い。

希美は苦笑しながらも相槌を打った。

「だから俺や空に先輩、信助にまで非常招集が掛かった訳か」

「まぁまぁ、いいじゃない望くん。それに巽くんはほとんど調理部隊の一員な訳だし」

「いつの間にっすか会長……全く記憶に在りませんけど」

「俺なんて本格的な料理は大分やってなかったから指ザクザク切っちまったぜ…」

既に食後の番茶を啜っていた望に沙月、空、信助。急遽兵隊達の食事準備を手伝わされた面々、そして定位置――望の頭の上に座るレーメと物質化した幽月。現在の髪の色は白。その髪を結い上げ、豪華な簪（かんざし）二本で留めている。

望と空は実質の一人暮らしで調理スキルはそれなりに持ち合わせているし、沙月は元より料理上手。…変なアレンジさえ加え無ければ、

だが。

「まぁ、落ちなかっただけマシだろ。何せ本性は人斬り包丁だからな」

「オイオイ、巽が冗句（ジョーク）言ったぞ？明日は槍の雨が降るぜ…」

皮肉るように笑いながら信助が空の背を叩く。その所為でお茶が零れる。空は眉をひそめて指折り何かを数えて。

「カラ銃、今保有する神剣三十六振りを全部出せ。コイツを針の筵にしてやる」

「あ～い旦那はん、別料金どすえ？――『袖の下の財宝』～♪」

「どんな英雄王！！？」

袖口に手を突っ込んで次々と神剣を取り出す幽月に、信助のツッコミが入った。

――あの宣言式から、既に二週間目。現在彼等はラハーシアの街に入っている。

あの後使節を派遣し、一週間後にその使節の頸が送り届けられて。

軍事国家グルン＝ドラスとアイギア解放軍は激突した。

緒戦は正に地獄の様相を呈した。ミストルテに攻め入る多数の鉾に、無数のグルン＝ドラス兵士。その先鋒だけでも解放軍の倍以上だった。拮抗しえたのは、やはり――二人もの『歴戦の神剣士』が加わった事が大きい。

豪快に全てを殴り伏せる『【荒神】のソルラスカ』と、流麗に全てを斬り伏せる『【疾風】のタリア』が。

その突破力を活かし、返す刃でラハーシアを解放した。現在はネルパーに篭ったグルン＝ドラス軍と睨み合いの膠着状態に陥っている。

「おーっす。俺達にも飯貰えるか？」
「あ、ソルラスカさんにタリアさん。ちょっと待ってて下さいね」
「悪いわね、永峰。お願いするわ」

そこにそのソルラスカとタリアが現れた。訓練でもしていたのだろう。タリアは沙月の隣に、ソルは空の隣に腰を降ろした。

「よぉ、今日の夕方辺りどうだ？」

断りも無く隣に腰を降ろされ、更にはそんな訳の判らない誘いを受けて空は物凄く露骨に厭そうな顔をした。

「…どうだって何がだよ。俺はお前と何か連れ立つ話なんざひとっかけらもした覚えはないんだが」

そこに、器用に両手で盆を持った希美が現れて二人の前に置く。ホワイトシチューと雑穀パン、トマト（っぽい野菜）サラダ。時間を掛けずに食せ、尚且つ腹持ちが良い。栄養価についても及第点だろう。
それをモリモリと食いながら、ソルは。

「だから、そろそろ決着付けようぜ？あん時は手打になっちまったけどよ、やっぱしきっちりケリ着けねェと寝覚めが悪りぃんだ」
「……またそれか…もうお前の勝ちで良いッつってんだろ」

「それじゃ俺の気が収まんねーんだよッ！！」

茶を啜りながら適当に相槌を打つ空を、ソルは卓を殴って怒鳴り付けた。盛大に口の中身が飛ぶ。

「…よし、やる。今すぐ殺る。――表に出ろォォッ！！！」

「マジか！？よっし、そんじゃいくぜッ！！」

当然それは全て空に降り懸かった。制服の袖で汚れを払い、青筋を見せながら空は言う。それに応じてソルは飯を掻っ込んだ。

「あーもう鬱陶しいわねー…タリア、止めてよ」

「嫌よ面倒臭い。斑鳩、アンタに任せるわ」

そんな喧噪もどこ吹く風。沙月とタリアは年長としてどちらが止めるかを押し付け合っている。

「私だって嫌よ面倒臭い。それに挑発したのはソルの方、つまりは貴女の担当よ？」

「一纏めにしないで頂戴。…ハァ、判ったわよ」

と、彼女は自身の永遠神剣【疾風】を喚んだ。そして瞑想でもするように目を閉じて何かを呟く。

「神剣は使わねぇ。同じ条件でテメーをぶっ飛ばさなきゃ『【荒神】のソルラスカ』の名が廃るからな！」

「勝手にしろよ。その余裕を後悔させてやらぁ！！」

ソルと空はほぼ同時に入口をくぐる。その暖簾を掻き分け、廊下に一一

「「…ん？暖簾？」」

出る足を止めて、無数に垂れ下がる糸を掻き分ける姿勢のままで上を見上げた。そんなモノ有ったっけ、と。

そこには、海月（くらげ）。鰹の烏帽子のようなその一一

「おまっ、『漂うゲェッ！？！」

「あん？一一んグアッ！？」

その姿を見て何か言いかけたソル、それに不審げな視線を向けた空が、奇声を上げた。

「「一一ぐあがびたかびれれ！？！！！？！？！？！？！」」

逆しる電流に撃たれて一一…

「…お疲れ様、『漂う泡』」

こんがり焼き上がった二人を尻目に、タリアはその海月に声を掛けた。それに答え海月、タリアの持つ永遠神剣第六位【疾風】の守護神獣『漂う泡』はゆらゆらと空中を漂いながら彼女の元に寄っていくと、そのまま消えて行った。

周囲は呆気に取られている。流石に此処までやるとは思っていなかったのだろう、差し向けた張本人の沙月すらも。

「大丈夫よ、加減しておいたわ。死ぬような威力じゃ無いわよ」
「だからってお前、コレはやり過ぎだろうが……」

言葉通り、確かにソルは起き上がった。目はグルグルと回り、髪は実験に失敗した博士のようになっている。
だがもう一人は、何時まで立っても倒れ伏したままだ。

「…タリア、言ってなかったけど…巽くんは体の構造は人間なの。神剣士なら加減された状態でしょうけど、彼には致命傷になるわ」

あちゃー、といった具合に口許に手を寄せて沙月はそれを告げた。
タリアの顔から血の気がサーッと引く。

「……ちょ、ちょっと斑鳩！そういう事は早く言いなさいよっ！！保健室に運ぶわよ、ソル！」
「ええ!?俺も結構ギリギリなんだけど……」
「は・こ・ぶ・の・よっ！！永峰、悪いんだけど貴女の癒しで…ああ、もしかしてそれも効き目無いのコイツ?!」
「あ、はい…ほとんど無いみたいですっ！」

ソルが頭、タリアが足を持ち、希美がその後を追い。バタバタと空は搬送されて行った。

残ったのは望とレーメに沙月、信助…幽月。望は困ったような視線を幽月に向ける。

「…幽月さん、空の所に行かなくていいんですか?」
「旦那はんは放っといてもこないな事で死ぬタマやありんせんわぁ。それより今は食事食事ぃ♪」

「随分な信頼関係な事だな…」

自分の主が危機に陥っているというのに平然と食事を続ける彼女に、呆れた視線を向けたレーメはそう呟いた。

「…その、ごめんなさい」

「…いえ、もういいですから…」

ひたすらに詫び続けるタリアに、空は苦笑を向けた。幸いだったのは、調理の邪魔になるとカラの【無銘】以外の全ての装備・火薬類を持っていなかった事だろう。

――もしいつも通りに拳銃類を携帯していたのなら一体どうなっていたんだろうか。…止めよう、生きてて良かった俺…。

「しっかし軟弱だよなぁ…あの程度の電撃で死にかけるなんてよ」

「お前ら神剣士と一緒にすんな。規格外なのはお前らだ」

ベッドから降りると、一つ大きく伸びをする。肩や足首を回して不調が無い事を確かめて、最後に頭を掻いて適当に髪型を調えて時計を見る。現在五時半。天地は朱く斜陽に染められ、やがて藍色に沈んでいくだろう。

「さて、と…そろそろ時間か」

「おう、待ち侘びたぜ」

「血斗（けっとう）じゃねェよ。俺の仕事の時間だッつってんだ」

ソルに糸目を向けて、彼は保健室を後にした。

「――夜は、な」

意味深に、そんな台詞を残して。

天頂に架かる望月。仄かに金色に煌めくその涼しげな光を浴びて。
鴉は爪を研いでいた。

「……佳い月だな」
【ホンマに…ええ月どすわぁ…】

木の枝に腰掛けた一つの影。全身黒尽くめのそれは、巽空。手元には【誰彼】と懐紙。その刀身に付着した血脂を拭っているのだ。

その足元、暗がりの森の中には血の海が広がっていた。その中央には一つの死骸。背後から【誰彼】に頚を真一文字に裂かれて絶命している。
そう、『人斬り包丁』としての本分だ。流石に調理用とは別の一本だが。

――俺の夜間営業は、『鼠獲り』だ。何せ【無銘】を使えば斥候を炙り出すなんて造作も無い。しかも相手はその役割柄単独行動で警戒にはどうしても穴がある。
その上でコチラは気付かれないのだから暗殺するのは拍子抜けするくらいに簡単。むしろ刃応(はごた)えが無い。
…今更だが本当に悪質な神器だ。

今日掛かった獲物は鉾ではなく人間の兵士。その死体が背負っていた荷物の中から地図と食料を頂いてある。いわゆる偸盗戦術、ゲリラ戦術だ。

「…お？これは…敵さんの配置図か？」

【誰彼】を鞘に納めて乾肉をかじりつつ、月明かりでその内容を確認していた空が色めき立つ。その懐から携帯を取り出すと、直ぐにコールした。

「もしもし、こちら巽一一」

『お掛けになった電話番号はただ今使われていません。もう一度お確かめになって…ふぁ…二度と眠ってる間に掛けてくるんじゃないわよ？』

「フザケてる場合じゃ有りません、会長。敵の配置情報を記入した地図を手に入れました。取り敢えず今日は帰還していいですか？」

ようやく手に入った、敵の虚を衝けるかもしれない情報。正直ただ攻め込むだけならいつでも出来た。それをやらなかったのは、ネルパーに篭る敵兵が追い詰められて民に手を出すのを避ける為。

『ＯＫ、皆を起こして待ってるわ。十分以内に帰ってきなさい』

「了解、雇用主…」

一一鍛錬ばかり繰り返すのも悪くないが、流石に気が急く。やはり一番の鍛錬と成るのは実戦だ。

まぁ、その暇な時間も終わる。また忙しくなりそうだ……

携帯を閉じると彼は一度月を見上げて一一躊躇い無く闇の底に飛び降りて行った。

The 24th Name…"星影"

門前に立つ帯剣した二名の兵士。緑を基調とした装束に飾り気など皆無な鉄色の胸鎧と兜を身に纏うグルン＝ドラス兵士だ。

「次！出ろ！」

無表情に検査していた荷車を進ませる。そして高圧的にそう告げた。

「――どぅもどぅも、お疲れ様でございます兵士の皆様方～」

その門前に、長身の男が歩み出た。糸の様に細まった目でにこやかに笑い、へこへこと頭を赤べこの様に揺らして揉み手を擦りながら空が歩み出た。

「…行商人か？コチラは戦争の真っ最中だというのに大層な事じゃないか」

身に纏う装束と背に負う挟箱から想像したのだろう、兵士は勝手に納得する。

「いやぁ、そういう時こそオイラ達にとっちゃ儲け時でさぁ。クシャトの方から参りましたんですがね、しっかし長い旅でしたよ～！！」

一一人当たりの好い、人懐こい商人。則ち『鈴鳴』をイメージした人格を演じる。

そしてその物言い。確かに方角的に『クシャトの方』からきたのは事実。あれだ、『消防署の方から来ました』と消火器を売り付ける

詐欺と同じだ。嘘はついてない。誤解する方が悪い。

「クシャトだと!?反乱軍の支援国家ではないか!!」

「お、落ち着いてくださいよ兵士様方!!オイラは反乱軍になんて肩入れしませんって!」

――顔面を蒼白にし、諸手を突き出して否定する。コレも嘘ではない。もう『反乱軍』は無いのだから。

「あんな一文の得にも成らない様な所より偉大なるダラバ＝ウーザ将軍の御膝元、このグルン＝ドレアス城塞都市で商売したいと思いやしてね。どうせ反乱軍は鉾って奴に潰されちまうんでしょう?」

「…へぇ、中々目端の効く商人じゃねぇか。そうとも、誰であろうと将軍閣下と鉾に敵うもんか」

気を良くしたらしく、兵士は腕を組んだ。おべっかに弱い性格らしい。

――呆れたもんだ。今頃はネルパーを解放した解放軍がレジアシス攻略の準備中だというのに。

「鉾ってのはそんなに強いんですかい?」

「強いなんてモンじゃない!あの化け物ども、一個大隊を投入したところで掠り傷一つ付けられやしないぜ!」

「――おい、いつまで時間掛けてるつもりだ!後が支えてるんだぞ!!」

話に華が咲き始めたところで、別の兵士が割って入る。上官なのだろう、焦れた声色に空と会話していた兵士達が蒼褪めた。

「そりゃあ心強い！！どうです兵士様方、武器に医薬品、何でも揃えておりますぜ！？御入り用のモノは有りませんかい？」
「そういうのは本陣に掛け合え！行って良し！」
食い下がる言葉に兵士達は面倒そうな顔をした。
「どぅもどぅも、それではこの辺で～！」
へらへらと能面のような笑いを貼り付けたまま門をくぐる。その瞬間――彼はその面を外した。
（くだらねぇなぁ…）
いつもの仏頂面に戻り、日頃使わない為に緊張した表情筋を揉み解しながら。空はグルン＝ドレアスの大通りを歩くのだった。

そんな空を見つめる者が居た。路地の一角、石造りの壁にもたれ掛かったその女。薄暮にはまだそぐわない、露出過多なその出で立ち。道行く男どもが振り返る。それもそのはず、その美しさは精魂篭めて磨き上げられた極上の翡翠細工のよう。
その翠の女の前を、長身の商人が横切った。擦れ違う時に一度欠伸を落として、そのまま歩き去る。
「……ふふ……」
女が笑う。口許に手を遣り、妖艶な笑みを零す。

一一シャラン、とその腕輪が鳴る。金色の、輪が二つ組み合わされたソレ。
両腕に嵌められたそれを鳴らして彼女は、ゆっくりと物陰へ消えて行った。

安宿を借り、荷物を置いて。空は夜の街を歩く。
今更ながら、まるで中世ヨーロッパに迷い込んだ錯覚を起こしそうなその風景を愉しむ。

「…と、感慨に耽ってる場合じゃないな」

彼がここに潜入したのは単純。グルン＝ドレアス城塞都市の道順や敵兵の配置情報を探る為。

「う～む……」

一一とは言ってもこの文明レベルだ。そうそう高い建物なんて無いな。
当たり前と言えば当たり前、街を囲む外壁からなら良く見えるだろうが歩哨が居るので落ち着いて見れない。コレは最後の手段としよう…

「もし、そこ行く格好好いお兄さん♪」
「う～む……」

腕組して唸る空。そんな彼に声が掛かった。
だが彼は考え事に意識を割きすぎ、それを無視する。

「ねぇ、聞いてる？」
「うむむ～～……」

一一一番高い建物、一番高い建物……あ、なんか浮かびそうなんだけど…。喉元まで出て来てるんだけどなぁ、後一押しが出ない。

「おーい、そこの貴方ー」
「あァァもう、煩ッせぇなぁ！！少し静かにしてろ！！」

遂に爆発した。考え事をしている最中だった事、そして一一幽月に雰囲気が似ていた為に。

「……ちょっと。初対面の相手にそれは無いんじゃない？」
「……あ、すいません」

頭を下げ、その姿を見た空は一一直ぐに目を逸らした。

腕を組み、不快そうな顔をしている女性。翡翠色のショートヘアに、揃いの色をした瞳。だが何より目を引いたのがその格好。非常に露出の多い、まるでアラビア圏の踊り娘のような。目のやり場に困る衣装。

「まぁいいわ。どうする？」
「…はい？」

一一いきなり何だこの人…。凄い美人だけど…？

呆けた顔をする空に、彼女は笑み掛けた。

「惚けちゃって。夜道で女が声掛けるのなんて、他にそうそう意味

が有るのかしら？」
「……ッ」

身を寄せて科を作り、流し目を向ける。加えて華の様に甘やかな香気。自然、彼の心拍数は跳ね上がった。

それは正に傾城（けいせい）の微笑み。男ならば抗い難い、種としての本能に訴えかける眼差し。

心臓を鷲づかみにされたような衝撃を受けた。それ程の色香。最早妖魅と言っていい程だ。

「――すいません、これでも待たせてる女が居るもので」
「――…！」

――もし、幽月で慣れていなければ耐え切れなかっただろう。

そしてやはりコレも嘘じゃない。今頃斑鳩達が報告を待って頚を長くしている事だろうから。

「……そう、それじゃあ仕方ないわね。女性を待たせるモノじゃ無いわ、早く行っておあげなさいな」
「ええ、それじゃあ――」

少なからず気分を害した様で、彼女はそう促した。逆らわず歩を進める空は――

「ああ、そうだ。この街で一番高い建物って何処ですかね？」
「――はい？」

少し歩いて立ち止まり、そう尋ねた。女は鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔をしていたが――やがて呆れた笑いを漏らす。

「そうね…グルン＝ドレアス城じゃない？」

皮肉げにそう告げ、両掌を夜天に向けて歩き去る。月光を照り返した印象的な腕輪を見詰めていた空は。

「…だよなぁ、やっぱり」

一言呟くと、目抜き通りを歩くのだった。

「…全く、あたしの誘いを蹴るなんて…何様のつもりかしら」

彼女は歩き行くその男の姿を物陰から確認し、忌ま忌ましげに漏らした。

女の沽券を傷付けられ、彼女は相当に不愉快だ。秀麗な眉をひそめ、その背中を睨み続けている。

（しかし、中々隙の無い男ね。付け入るのは難しそうだわ）

腕を組み、天を見上げる。満天の星空。その美しさすらもこの女の前では霞んでしまう。

（…まぁいいわ。この世界での目的は『旅団』に接近する事じゃないし）

吹っ切ったのだろう、愁眉を解くと薄く笑顔を浮かべる。

「…さてと。お仕事お仕事…」

そして一一更に深い闇に紛れていった。

深夜。グルン＝ドレアス城を囲む城壁に。

ヒュウ一一一カッ！

影が這っていた。影は器用に城壁の取っ掛かりへと鎖らしきモノを掛け、堀を飛び越えて少しずつ登っていく。

やがて城壁を乗り越えてその上端に立った。平時は見回り、戦時は弓兵が使用するその回廊に。

「……」

闇に溶けるソレ、月明かりに僅かに浮かび上がったその姿は、黒尽くめの鴉。動き易さを重視している為、外套は纏っていない。

手に持つは鎖。贋物神剣、銘は【篭絡】。その両端には碇のような形状の鈎爪。コレを城壁に掛けて登攀（とうはん）を行ったのだ。

ソレを一度二つ折にして横投げに腰に巻き付け、鈎爪の部分を受け止めて固定する。続けて後腰から【無銘】を取り出した。

「一一フゥ…」

銃口を天に向け、バイザーの上から額に撃鉄を当てて気を落ち着けながら周囲の様子を探っている。と、前方に衝き出して引鉄を引い

た。

――カキン

その瞬間、周囲に充ちていた索敵の糸が綻んだ。だが消えてはいない。

この男の周囲だけまるで空隙の様に。いや、その空間に触れている索敵の網が偽造されて紡がれている。これでは索敵など無意味。

【くふふ…無駄無駄無駄ぁ～！わっちはこない粗末な網に掛かる蝶やありんせん～だぁ】

「だったらソルラスカの鼻に捕まんじゃねェよ蛾女」

最早声を出す事も厭わない。どの道、この鴉を見付け出すには目視しかない。

背負っていたリュックから、彼の愛用拳銃五挺を取り出す。鎖の下部、太股の部分にホルスターを巻き付けて固定した。

最後に漆黒の外套を纏い、顔を覆い隠して。彼は城壁に沿って上端を走り出す。

――先ずは敵兵の配置情報。次に城の見取り図。夜間とはいえもう解放軍がレジアシスに入っている。篝火を焚いて不寝番が哨戒しているだろう。

両腕を後ろに靡かせ、前傾した走法。それは低く地を飛ぶ夜鴉のようにも見えた。

The Other Name ?・・・"【夜燭】"

――その夜は風が強かった。朔の日、月は出ていない。

「…国王陛下。火急の知らせです。クシャトで活動中の密偵が捕らえられました」

玉座に腰掛ける国王…深い英知を湛えたその顔容には、苦渋の色がありありと窺える。

「…そうか。して、向こうは何と?」

「は。自国に諜報を行っていた事を認め謝罪せよと」

「何を馬鹿な事を!!きゃつらとて同じ事をやっていように!国王陛下、そんな事を認めてしまえば周辺諸国との関係に軋轢が生じますぞ!」

「判っておる…」

息巻く側近の一人を目線だけで制し、沈思する。どうするべきか、どうしたいのか――

「――何を迷っておられるのですかな、陛下。無視してしまえば良いのです」

そこに、一人。老齢の男性が歩み出た。高位の修道士の様なローブを身に纏う男性。一見温厚そうな、しかしその老獪な知性を蓄えた蝋人形の如き濁りきった眼差しは、並の存在感ではない。

「……ガバナ卿か。そういう訳にもいくまい……」

「あれはクシャトの自作自演。そうしてしまえば宜しい。誰も文句

など言えはしますまい？証拠など無いのですからな」

ガバナと呼ばれた老修道士の言葉に、口々に賛同の声が上がる。後は、国王の決断を待つのみだった。

思い出す青年の姿と、その父親――共に因果を乗り越えようと誓い合った友――の姿。そして、少年の姿。

――すまぬ。

ただ、そう懺悔した。

「アアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

――何故だ。

ただ、その思いに任せて。彼は木剣を振るう。もうほとんど原形など留めていない木人形を殴り付ける。

その一撃を打ち込んで、へたり込むように腰を落とした。

『見ろ、ディスバーファ。これが…成れの果てだ』

――その胸に去来するのは、ただ虚無感。

『どれだけ忠義を尽くしたとしても、所詮我々など使い捨ての駒だ――！！』

――その胸に去来するのは、ただ哀しみ。

『どうしてなの…どうしてこの子がこんな目に……どうしてですかアナタ！！どうして…この子がこんな目に……』

台の上に置かれた、一つの壺。その中に入っているモノを見たくない――

『――目を逸らすんじゃない！！お前の兄は――アイギアの血族に殺されたのだ！！アイギアの王族に見捨てられて！』

その壺の中に漬けられているモノは――彼の敬愛する兄の頚――！

『許すな…絶対に許すな…！我らを使い捨てにしたあの豚どもを…！！難事を総て我らに押し付け、自分らはただ肥え太るだけの豚どもを、絶対に――！！』

その声に背を押された様に。彼はユラリと立ち上がった。

そして構えをとる。顎を引き、木剣を僅かに右に傾斜させ、腰を落とす――

「アアアアアアァァァッ！！！！！！！！」

一太刀目は袈裟斬り。続き、間髪容れぬ跳躍の後の全霊の一撃――！！！！

「……ん…」

目を覚ましたのは、頬に当たった雨粒のせい。それで彼は、自分が気絶していた事に気付いた。木剣が折れ、己の眉間をしたたかに打った為だ。

「…兄さん……」

『ハハハ、相変わらずだなぁ…』

呟くと、その幻聴が聞こえた。そして頬に、冷たい感触。雨などではない、涙だ。

「う……ウァァァァァァッ！！！ひっく、うぐ…あああああ……！」

そうして彼は、初めて泣いた。

一一大好きだった兄、その兄が死んだ。

『少し長い旅に出る。すぐ帰ってくるから、稽古を欠かすんじゃないぞ？』

そう言って自分の頭を撫でて、一度も振り返らずに歩いて行った兄が一一頸だけになって帰ってきた。

両親は嘆き悲しんだ。もちろん自分も。

王の命令で出た任務で、しかも王によって見捨てられたのだ。両親の怒りは王家に向けられていた。だが彼には、そんな事はどうでもよかった。

ただ、大好きな兄が死んでしまった。もう二度と会えない。その哀しみと虚無感だけが、彼の心を充たしていた。憧れ続けた一子相伝の剣を見せられても、その思いは変わらない。もうそんなモノに興味は無かった。ただ――

「兄さん…兄さん…！！」

降りしきる雨の中、それだけを…ずっと、ずっと彼は呟き続けた……

夜の帳が降り初めた頃、彼は丘を下った。帰らなければ、両親が心配してしまう。兄を喪ってから病的なまでに自分に期待を寄せ始めた両親が。

「……？」

その丘を下って、彼は気付く。その明るさに。

「……なんで、村があんなに紅く…？」

その紅い煌めき。それが火だと、すぐに気付いた。慌てて駆け降り、茂る木立を抜けた――その先にその男達は居た。

「――お？なんだ…餓鬼じゃねえかよ。まだ生き残りが居やがったか」

黒い甲冑に身を包んだ騎士達。その物々しい装備に、彼は恐れ戦いた。

実に百に及ぶ騎士団。それらは、腰を抜かした少年を笑いながら取り囲み…笑いを向けた。

「おい、こいつもレストアス一族じゃねえのか？」
「どうする、誰が殺る？」
「オーイ、立候補は居るかぁ？」
「けけ、男の餓鬼じゃなきゃ喜んで行ったトコだけどよぉ」
「変態ヤローめ。おい、お前殺れ」

黒い外套を纏う騎士団長らしき男が、一人の青年に促す。それに逆らわず青年は剣を抜いた。

「そういう訳だ。恨むんなら自分の生まれを恨みな…」

ごとりと、その青年が二つの丸いモノを転がした。松明の火に照らされ、判別したソレは。

「ーーーー！！？！？」
「心配すんな…すぐに、お前も俺が両親の下に送ってやるからよ？ハハハ…」

ソレは、彼の父と母の一一頚。

ごろごろと地を転がるモノ。血反吐を吐くソレは一一ディスバーファ。

「あが…！？あ、あぁぁっ！！？」

右目に刀創を負い、下呂と小便、泥と苦痛に塗れている。
囲まれて逃げ場を無くし、それでも逃げ出そうとする彼に向けて、剣や槍を突き出して威圧する騎士達は笑って囃し立てる。

――曰く、それでも騎士の子か。それでも悪魔の血筋か。それでも男か。

這いつくばった彼の目の前には、一本の大剣。黒く鋭いその片刃の剣は彼の血族――レストアスの血筋の一子相伝たる『神剣』。この私刑の開始と共に、騎士団長の指令で衝き立てられたモノ。雨に濡れ、ぬらめいた光沢を放つその大剣の銘は――…

「そら、どうした悪魔の仔？さっさと剣を取らないと、本当に殺しちまうぞ？」

青年は笑いつつ歩み寄る。その手に在るのは一本の剣。何でもない、何処にでも在る数鍛ちの一振り。

流れ出る血に視界を染められつつ、少年は腰を抜かしたままで後ずさる。

――どうしてこんな目に遭わなければならないのか。どうしてこんな目に遭っているのか。

思い出すのは、父の言葉。

『許すな、アイギアの血族を絶対に許すな…！！』
「俺の親父はなぁ…テメェの父親に殺されたんだよ。たかが公金の使い込みで、だ！テメェらが遣ってきた事に比べりゃなんでもねぇ事だろうが！」

悪鬼の如き形相で呟き、剣を構える青年。そしてそのまま、少年に剣を抜くよう迫る。

「最後の一撃だ…これでお前を殺す。…さぁ、剣を抜きな！！」

叩きつけられる殺気にも、ディスバーファは応えない。ただ――裏切られた、と。その思いだけが在った。これが騎士か。これが王族の成す事か。これが…騎士道か。

少年はゆらりと立ち上がり、大剣を手に取る。

…その重い事。地に衝き刺さっているその剣は、先程屈強な騎士が二人掛かりで運んでいたモノ。

――そうだ、この男達は知っているのだ。自分がこの剣を使う事など出来ないと。その上でさも自分らは王道だとほざいているのだ、この豚どもは――！！

『許すな――』

その言葉が繰り返し響く。

【許すな、許すな、許すな――！！！】

――ああ、解っているさ。…絶対に許さない。コイツらも、コイツらに命令を下したアイギアの血族も、そのアイギアの血族に従う民ども…豚どもを――誰一人！！！

「――だから、チカラを貸せ……【夜燭】ウゥゥゥッ！！！！！！！」

稲妻が光る。刹那、青年は見た。その少年の瞳、そこに宿る壮絶な憎悪を――！！

「――は？」

そしてもう一つ。その剣戟に反応しようとした時に、己の両手が…構えていた剣ごと、少年の一撃の下に粉砕されていた事に。

跳び上がったその少年。その、今し血の渇望に目覚めた虎の如き眼差し。

その剣に黒い光が纏わり付き、落雷が墜ちた。それに応えて水溜まりから起き上がった、蒼く煌めく雷獣が――！！

「――ッハハハハハ……」

笑う。ただ笑う。少年は、焼け焦げた骸の山の中で。天を衝く程に高く昇った雷刃は、厚い雨雲すらも切り裂いた。

周りに集まっていた騎士達は、その剣の纏った雷によって炭化するまでに焼き尽くされ死んでいる。生き残っ『てしまった』僅かな者達は、雨によって通電した両脚を焼かれて呻くしかない。

「ま、待ってくれぇ！！俺はこんな事反対だったんだ！ただ任務で…助け…助けてエエエエエッ！！！？！！」

その蛆虫の様な騎士達の頚を、一人また一人とディスバーファは刈

り取る。悲鳴を上げて命乞う騎士達に、一片の慈悲も無く断頭の剣を振り下ろす。
そして最後の一人――騎士団長らしき男の前に、彼は立った。

「…呪われろ…悪魔の血筋……！我らはここで果てても、この憎しみは必ず、アイギアの血族が晴らして――！」

ヒュウ、と喉が鳴った。もう繋がっていない。斬り落とされ、地獄の苦しみに無声慟哭する頚に向かって彼は吐き捨てた。

「――囁くんだよ、【夜燭】が。全てを斬り伏せろって。……だから、その憎しみも全て斬り伏せてやる……」

天を見上げる。雲の切れ間から覗く月は紅い繊魄（せんぱく）。その煌めきは彼が握る血塗れの【夜燭】のモノとよく似ている。

「…この『俺』が！！」

――それが、彼の始まり。後に『剣の世界』最大の反逆者として歴史に名を刻んだ彼の――始まりの夜だった……

――グルン＝ドレアス城玉座の間。暁はいまだ遠く、しかし白み始めた明け空に燭灯は吹き消されている。
室内は僅かな近衛兵と鉾が控えるだけのその一室で、微睡（まどろ）みから目醒めた玉座の主は腰掛けたままでソレを眺めていた。

「……」

懐かしき夢。己の生き方を決定付けた過去。この『鍵』を手に入れて以来見続ける忌まわしき夢の残滓。
細かな鎖によって繋がれた首飾り。鍵の意匠を持つソレを見る度、屈辱を思い出す。口腔に拡がった錆鉄の味を。

「…フ、フフ……！」

――そして、何と昂ぶる事か。小童と舐めきっていたとは言え、殺すと定めて仕損じた事など彼が殺戮者として歩んで来た生涯に於いては一度しか無かった。更に言えば、永遠神剣【夜燭】を手にして以来手傷を負ったのも一度きり。
その鍵を握り締める。砕けてしまわんばかりの力だったが、思いの外頑丈なのか。歪む事すら無い。

「――レジアシスまで陥落したそうですわね」

響いた声に、彼は鬱陶しそうに顔を上げた。
そこには女。異国の踊り娘のような、露出の多い衣裳。翡翠細工のように美しい立ち姿。

「エヴォリアか。何用で参った？」

ギロリと。虎が睨み上げる。普通の人間ならば良くて失禁。悪くすればショック死しそうな程の威圧感。

「この所、随分と苦戦していらっしゃるようなので。手勢が欲しいのではないかと思いまして」

そのダラバ＝ウーザを前にして、エヴォリアと呼ばれた女は全く緊

張を見せない。それどころか、余裕すらも窺える。

（――女狐め…！）

彼はそう、心の中で反吐を吐いた。

「…フン、貴様等『光をもたらすもの』のチカラなど始めから当てにしておらん。総てはカティマの神剣を目覚めさせる為の当て馬…だったのだがな」

クツクツと喉に詰まった笑いを漏らす。そして再び、掌中のソレに目を落とした。

「…予想外の原石を掘り当てたモノだ――ウグッ、ゴホッ！ガハッ！」

だがそこで突如胸を掻き毟ると、苦しげに咳込む。手を貸そうとした兵を一喝し、呼吸を落ち着ける。

「…そうですか。では、私達のチカラはもう必要無いと？」

「くどい！私には【夜燭】が在ればいいのだ！」

ブン、と風を斬り【夜燭】の鋭い黒刃が彼女の首筋に衝き付けられた。だがやはり彼女は動じない。

「…そう…【夜燭】さえ在れば…！！」

ダラバは口許を押さえつつ、己の神剣を手に呟く。その目には深い、深い――狂気。

――それは正に、神剣に…『力』に魂を奪われた者の末路。神剣のチカラに頼り続け、その身に余るチカラを求めた者が行き着いた成れの果て。

その姿を冷やかに見ながら、エヴォリアは口を開く。

「なるほど…詰まりは私達は用済みという事ですね？」

冷たい声。続き右手を挙げる。

（――ダラバはもう長くは無い。放っておいても死ぬ。マスターが死ねば神剣も消える。消える神剣に興味は無いわ…）

そう、彼女は神剣に興味は無い。必要なのは――

そこで、事態を静観していた兵達は気付いた。いつの間にか、将軍を守護する為に配置されていた鉾どもが自分達の背後に回り込んでいる事に。

――パチン！

エヴォリアの指が鳴る。同時に、鉾達が神剣を振るった。

The 25th Name・・・"決戦"

夜明け前の平地に陣取ったアイギア解放軍。数千に膨れ上がったその先頭、尖陣となるは大陸に希望をもたらした『天使』。それに続くは、ヨトハ村より常に最前線を掛けぬけ続けるクロムウェイ率いる近衛兵団。
その最先(いやさき)にて風を浴び、金色の髪を靡かせるは姫騎士カティマ。

「……」

地に突き立てた【心神】の柄尻に両手を乗せ、瞑想するかのように静かに呼吸している。
脇に立つ影の獣。彼女の忠臣である『ホラーエレメンタル＝アイギアス』。

「…遂に、此処まで来た…」

呟きと共に目を開く。蒼穹色の視線の先には、同じく平地に犇めくグルン＝ドラスの主力兵団。
その先頭、尖陣となるは大陸に恐怖と死、絶望を撒き散らした『鉾』。
そして――その背後に堅牢な城壁にて全周を覆われた都市が見える。
今だ遠く、しかし絶対的な存在感を持つグルン＝ドラスの王都『グルン＝ドレアス城塞都市』が、その威容を誇示している。

「…これで終わりとします。此処が我々の最後の戦場……」

雲が流れていく。やがてそれは、瑠璃色の空に解けて消える。

【心神】を引き抜き、天に衝き上げる。続き背後の『天使』が各々の神剣を掲げ、更に解放軍が剣や槍を突き上げた。

「…この一戦を、この大地の平和と安寧の礎とする……全軍ーー」

衝き上げていた剣の切っ先を、敵陣に向ける。そして、全軍に向けて檄を飛ばした。

「ーー前進!!!」

ーーーオオオオォォォォ!!!!

上がる鬨(とき)の声と打ち鳴らされる剣や槍の刃鳴りを聞きながら、『神剣士』達は先陣を駆けるーーー!!!

濃密な血の臭いが満ちる。十数名分の首が転がる室内は血の海。

「……フ、本性を表しよったな。ーー『神』の差し金か?」

「あら。やはり承知の上だったのですね、将軍閣下?我々の目的が何かを」

「気付かぬ方がおかしかろう。私にこの運命を与えた者どもが、何を目的としてこのような事を謀るのか…」

ゆらりと立ち上がり、エヴォリアとーー数十にまで増えた鉾達に相対する虎は悠然と鍵の首飾りを己の頸に掛け、仕舞い込む。

「ーー舐められたモノだ。この『【夜燭】のダラバ』を、小娘と雑

兵で仕留めようとはな…！！」

絶体絶命の危地に在って尚、その威厳は揺るがない。その目が見開かれ、一点を見据えた。

持ち主の闘気に反応し、【夜燭】が鈍く煌めきを放つ。熱を産むのでは無く、奪い去る氷点下の闘気。

「――それこそ舐めていらっしゃいますわ、将軍閣下。この私を――」

鉾達がそれに気圧される中で。彼女はやはり微動だにしない。ただ、その腕を差し出した。両腕に嵌められている腕輪が揺れ、音を鳴らす。

「――『光をもたらすもの』がリーダー、永遠神剣第六位【雷火】が主…『【雷火】のエヴォリア』を！！」

そう、それこそが彼女の名。この世界にて暗躍する『世界の敵』。

「…ク、ククク……！フハハハハッ！！」

その名乗りに、彼は笑う。さぞや可笑しそうなその哄笑。

「――何が可笑しいのかしら？」

当然ソレを受けたエヴォリアは不快に眉根を寄せる。

「待ち侘びた。この時をな。やはり私は運が良い……」

「……ッ！？！」

その視線が自分を捉えていない事に気付くとほぼ同時に、彼女は背後を振り返る。

「……」

いつの間にか開け放たれていた扉。そこに立つ、壱羽の鴉。朱い和傘を背負った長身のソレが面相を隠していたバイザーを外し、フードを流す。

「――やはり生きておったな、乱波…」

呆気に取られるエヴォリアを尻目に、満足げに呟くダラバ。鴉の眼差し、糸のように細い眼差しがそんな虎に向けられた。

門前に布陣していた鉾に、弓兵の放った矢が降り注ぐ。その矢が突き立った事にグルン＝ドラス兵達は驚愕した。
ソレもその筈、その鏃（やじり）は空の創った贋物。

「今だッ！！」

そこに神剣士達が斬り込む。浮足立った所に本隊を送り込まれ、十二の鉾は瞬く間に消滅した。

「ひ、ヒィィィッ！！！」

圧倒的な神剣士の突破力にグルン＝ドラスの兵達が恐慌をきたす。無敵と信じて疑わなかった鉾が、目の前で一掃されたのだから。

「退け、退けェェェ！！！」

我先にと逃げ出す将校。最早守備隊は瓦解している。閉じられた門迄の道は、既に開いていた。

「続けぇぇぇっ！」

先頭のカティマが、【心神】を構えて突撃する。その脇を固める五人の神剣士。

クリスト達は後続の解放軍主力部隊の護衛、加えて周囲から集まって来る鉾や討ち漏らした鉾の掃討を担当している。

門を打ち砕き、一団は城塞都市に雪崩込む。

待ち受けるは中隊規模の鉾。その一団に一一。

「クロムウェイ！矢の方はどれくらい残っていますか！」

「もう十本有りません！節約してきましたが、出し惜しみは最早無意味！」

クロムウェイが指示を出す。鍛え上げられた弓兵達はすかさず矢を放つ。

放物線を描く矢は、前方に布陣していた鉾を捉えた。

「此処は任せろ望ッ！往くぜタリア！」

「何命令してんのよっ！」

矢に気を取られた鉾は、その二人の接近を許した。そこで命運は決した。

「うらぁぁぁっ！！『猛襲激爪』！！」

「【疾風】……往くわよっ！『チリングアッパー』！！」

ソルラスカの剛拳が、タリアの薙刀が。次々に鉾を屠る。

「へっ！手応えねェな！」

血煙の中に立つ、荒々しき悪鬼の如き男。その身には大量の返り血。

「…手慣らしにも成らないわね」

舞い散る紅い氷晶が煌めきを放つ中に佇む女。その身には、一滴の返り血すら浴びていない――

睨み合う二匹。上座である玉座の高みから見下ろす虎と、下座である入口から見上げる鴉。

「……く…！」

歯を鳴らしたのはエヴォリア。その男の接近に全く気付けなかった事に対してのモノだ。

もし、この男にその気が有れば。自分を背後から撃つ事も可能だったのだから。

「――先日は御挨拶も出来ずに無礼を働きました。グルン＝ドラス軍事国家が元首、ダラバ＝ウーザ将軍とお見受けする。我はアイギア解放軍の擁する『天使』が一人…」

踵を付け、利き手の左を前胸部。右手を後腰へと当てると、恭しくお辞儀する。と、上げられた目は鋭く開かれた猛禽の如き三白眼。

「永遠神銃【無銘】が射手ー一『【無銘】のタツミ』だ！！！」

そのまま左手一本で外套を外し、中華風の武道着を纏う躯を曝す。黒い篭手と脚甲、腹に巻かれた鎖、腰元に幾つも釣られたホルスターと弾倉の詰められた両太股のボディバッグ。その頸元には細かなチェーンで吊られたお守り。腰帯に結わえ付けられた、鳳凰の尾羽の如き根付。

「…クク、見違えるようだな。あの時、何も出来ずに震えておった貴様がよもや此処まで単身来ようとは…思いもせなんだ…」

その、数週前とは全くの別人と言っても良い覇気。吹き付ける心地好い殺気に虎は口角を歪める。

そんな王虎の圧力にももう動じはしない。鴉の眼差しは真っ直ぐにその覇者を捉えている。

「『男子三日逢わざれば刮目して待つべし』ッてな。それに三倍で返すのが俺の礼儀だ。あの時付けられた傷の礼と首飾りを返して貰うのは当たり前……そして貴様の【夜燭】を頂く！！」

「遣ってみるがよい。出来るのならば、だがな…」

互いに睨み合い、だが薄く笑う。その異様な静寂を破ったのは一一

「一一貴方達、この状況が見えてない訳？此処で二人、雁首揃えて死ぬのよ。貴方達はね」

エヴォリア。自身を無視された不愉快さも露に、手勢を誇示する。四十を越す鉾一一いや、もうミニオンで良いだろう一一の軍勢。謁見式や観隊式の為の大広間であるそこで無ければ入り切らなかったであろう。

「…遣るさ。その為に来た。此処まで努力して来たんだからな！」

「フ、尚良い。ソレを打ち砕いてこそ愉しみが有るというモノだ」

「……」

一一だが、二人は歯牙にも掛けない。まるでそんなモノは目に入らんと言わんばかりの盛大な無視。

「前口上はもう要るまい？…さぁ、構えよ！」

凄惨な笑顔と共に繰り出される凍てつく風。ダラバの闘気だ。

「ああ…死力を尽くす！姫さんには悪いが一一この命を賭けて俺が貴様を撃つ！！『【夜燭】のダラバ』ァァッ！！！」

左手に番えた【無銘】を衝き付け、鴉が啼く。その闘志に反応し、【無銘】の銃口に精霊光の魔法陣が展開される。

右手には【繚乱】。低く下半身を守るその構えは、『行雲流水の型』と銘打たれた彼の最も得意とする構え。

一一天を行く雲の如く、或いは地を流れる水の如く。防御に主観を置きながらも素早く攻撃に対応する、日進月歩の努力で鍛え上げた『付け焼き刃』。未だ進歩の途上に有る彼の、今の限界。

「そうだ！それで良い！一一互いに命の続く限り、存分に死逢おうではないか！！『【無銘】のタツミ』ィィッ！！！」

ダラバもまた、構える。顎を引き、腰溜めに構えた【夜燭】を僅かに右に傾斜させる。脚を開き、腰を落とす。虎が獲物を見据え、今し襲い掛からんとするような八双の構え。

――単純明快、故の難攻不落。神世の古に『南天の剣神』とまで称されたその前世に恥じぬ、隙の無い構え。以前の闘い…否、屠殺では見せなかった『戦闘姿勢』。彼が歩んできた人生の集大成。

「…そう、アンタ達本当に…アタシを虚仮にしてる訳ね……アハハハハ……」

それに、彼女も笑った。額に手を当て、実に可笑しそうに笑う。

「――殺しなさい、ミニオンども。千の肉片まで引き裂いて!!」

出された指示に、ミニオン達は神剣を構える。以前の主に、招かれざる客に向けて――踊り掛かる!

――――ギィィィン!!!

耳障りな金斬り音が木霊した。

「――な…!」

エヴォリアの、目の前で――!

「ーーグゥゥッ！！！！！」
「ーーヌゥゥッ！！！！！」

その二匹は斬り結んだ。朱い和傘【繚乱】と巨大な黒刃を持つ【夜燭】が。迫ったミニオンを薙ぎ払い、一號打ち合わされた。

それでーー大勢は決している。疵一つ無い【夜燭】に対し、ズタ襤褸（ボロ）に破壊された【繚乱】。

「フンッ！！」

反す太刀が繰り出された。床を踏み砕きながらグルリと身を半回転させて、大上段から走り抜けた相手に追い縋る袈裟斬りを振り下ろすダラバ。
空の背、左肩を狙うその壱太刀はーー

「ーークッ！？」

ダラバが跳び退いた事で、辛うじて外れる。その頸が在った空間を昏刃が薙いだ。
【繚乱】の柄より抜き放たれた忍者刀、その銘は【宵】。【誰彼】同様に鍔と反りが無く、屋内戦闘用に短く切り詰められた黒塗りの刀。それが半回転しながら見舞われたのだ。
跳び退いたダラバに代わり、ミニオンが一体斬られる事となる。

「ーー疾ッ！！」

更に追い縋る。繰り出されるは刺突。連続で四撃。
間詰まりを起こした上に、盾代わりに遣われる【夜燭】は思うよう

に振るえなくなる。

…本来ならば、この程度の刺突に対応出来ないダラバではない。
もしそれがただの神剣ならば、彼の剣によって力ずくで薙ぎ払われていた事だろう。

だが、その昏刃が目を眩ます。薄闇に溶ける眩みの刃が間隔を掴ませない。
故に必要以上に慎重に――

「――小賢しいわァァッ!!」
「――フグッ!?ア、ガハッ――!!」

――成らない。その剛拳が空の腹を打ち据える。
盾とした【宵】が砕ける程の正拳。余りの威力に胃の腑が裏返った。
もし朝飯なんぞを食っていれば、盛大に嘔吐していただろう。何も食っていない今ですらも、無いなりに胃液と血を吐いてしまう。

「――その程度ではあるまい!!見せてみろ、全霊を!!私も手加減などせぬぞ!!全力を以って打ち砕く!!」

後方に跳ばされてうずくまった空を見据えたままで、神剣を握る手に力が篭められた。
呼応した【夜燭】の刃に蒼い雷が纏わり付く。それで前準備は終わり。

「喰らえ――『電光の剣』!!」

跳躍し、一瞬で空を完全に断ち切る事の出来る間合いにまで跳び込

む。その巨躯からは想像も出来ぬ俊敏さ。
その勢いに載せた袈裟斬りが見舞われる。蒼雷を纏う一撃は、昂電圧を以って総てを焼き切るだろう。

――畜生、詰めを謝った！
コイツは生に執着するようなタマじゃない！満足出来るなら、どんな死でも受け入れる奴だ！！

受けず――受けられる筈も無く、避ける。剣戟が石畳を砕く。巻き込まれた二体が消滅する。

…そう、ソレこそが暗殺者［アサシン］の弱点。死に恐怖や忌避を覚えない相手は、彼と戦術を同じくする者にとっては一番闘い難い相手だ。

右に転がった空は、間髪容れずに【比翼】を放つ。追撃の芽を摘む為に――いや、狙いはダラバではない。ダラバの目前に投げ置かれた、掌大の物体。

「――ヌゥッ！？」

ソレが撃ち抜かれ、爆ぜる。白の『炸裂』の精霊光を結晶化させたモノと、贋物を創った後に出る端切れを詰めて殺傷能力を高めた手榴弾。通常は時間差で炸裂するソレを撃ち抜く事で強制的に炸裂させた。

閃光と爆風に呑み込まれ、ダラバの姿を確認出来なくなる。だが空もソレだけでダラバにダメージが与えられる等とは思っていない。

「ハアァァッ！！！！！！」

だからこそ、放つ。放ち続ける。【比翼】と【連理】の、計十三発。

――隙を作るな、全力で撃ち尽くせ！機会なんてそうそう無い！！

続いて【天涯】と【地角】の計三十二発。これで合計四十五発。

弾の尽きた弐挺から弾倉［マガジン］を排除する。スルリと抜けたマガジンが地に落ちバウンドする。

その音が響くまでに、彼は再装填［リロード］を完了させた。

「――子供地味た手など、私には通用せん……」

「……！！？」

虎の、重低音の声が響く。次いで身を斬るような凍気。鋭く高い、しかし美しい音色の風斬り音。

「呪いの刃よ、我が身を守れ――！！」

粉塵を斬り裂き、その無傷の身が現れる。腕を組んだダラバと地に刺された【夜燭】、そこから発せられた魔法陣。

その術式から導き出された神威、銃弾全てを斬り伏せた飛翔する十五の氷刃も偉容を現す――！！

――糞ったれ…！だからお前達神剣士は嫌いなんだ。ダラバと言いソルラスカと言い、人が無い知恵とチカラを振り絞った策戦を臆面も無くチートで凌駕しやがって……！！

ある種の神々しさまで感じるその神剣魔法に心中で毒吐く間にも、

状況は悪化する。その氷刃の切っ先が、己に向けられた事を悟る。

「――『クロウルスパイク』――！」

「糞ッ――！」

全周に氷の盾の如き魔法障壁が現れ、空の逃げ場を封じる。檻と化した魔法障壁の中心、空に向けて総ての氷刃が踊り掛かった。

「征くぞ、カラ銃――！」

【くふふ、何時でもぉ――！】

衝き出された銃は【無銘】。展開される魔法陣は白。

「【――『陽光の魂魄（スピリット・オブ・シャイン）』――！】」

それが空間に溶ける。刹那に引き上げられた場の白マナ濃度に、視覚的な閃光が伴う。

――――――！！！！！！

硝子の砕けるような音を発し、空気が震える。激突した氷刃は魔法障壁ごと獲物を撃ち抜く。

浮遊する白いマナの燐光。その清廉な気の充ちる室内に、一点。暗闇の凍炎が燃える。【夜燭】の刀身を暗く染める、漆黒の精霊光。

「……フ、逃げぬとは見上げたもの。褒美だ…我が剣、受けてみよ！！！」

――ダラバの構えは、しっかりとその敵を見据えたもの。アレは生きていると、彼の経験が語りかける。

【――マナよ。白き龍の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け……】

「……！！？」

粉塵と氷片による緞帳の先より発せられる凄まじい圧力。ダラバが【夜燭】を構え直したのは、その威力を剣士の勘で悟った為。

「【――『シャイニングフォース』ッ！！！！！！」】

粉塵を撃ち貫き閃光が疾る。『炸裂』の精霊光の純粋結晶たる魔弾。輝龍の息吹は文字通りの『光速度』――！！

「――南天の禍(まが)つ刃よ、打ち砕けェェッ！！！！！」

――打ち合った！

光の速度、それにダラバは追従した。閃光の弾頭に真っ直ぐその一撃――南天の剣神と呼ばれた過去の象徴たる一撃、『南天星の剣』を。

持ち主の生命を代価に、限界すら凌駕するチカラを与えるその剣【夜燭】。そして弛まず積み重ねられた剣士としての研鑽が有ってこその、その反応速度。

「――オオオォォォ！！！！！」

剣は閃光を両断して左右に流す。流れ弾はやはり、ミニオンを撃った。

光条に撃たれたミニオンはプラズマ化した光によって粉砕され、焼滅する――！！

The 25th Name ?・・・"決戦?"

――【朔】を着け、踊り掛かる氷刃を【天涯】と【地角】の同時射撃で撃ち砕き、或いは避けて虎口を脱していた空。マガジンはそれだけでカラ。

そしてその放った『白龍の息吹』を力尽くで斬り伏せたダラバが向き合う。

状況は圧倒的に空が劣勢。

彼の左太股には氷刃が掠った際に出来た大きな裂傷。右肩に到っては氷刃自体が衝き立っている。更に言えば『剣』も『銃』も、決殺の一撃をもこうも簡単に打ち砕かれたのだから。

しかし、空の闘志は萎えていない。むしろ烈しく燃え上がった。

――承知の上!足りないのは当たり前だ。この男が積み上げて来たモノに簡単に追い付けるなどと思い上がりはしない。

だからこそ勝ちたい!何故かは解らないが、コイツには勝ちたい!

俺の壱志［いじ］に懸けて太刀向かわなければ!!

決意と共に肩から氷刃を引き抜き、投げ捨てる。澄んだ音色を起てて石畳に衝き刺さったソレは、やがてマナへと還っていった。

精霊光の盾により己の身を庇っていたエヴォリアは、その闘いに魅入られていた。

「――なんて闘いをしてるのよ、コイツら……！」

余りに圧倒的過ぎる。ダラバのソレに対して、太刀向かう空のチカラのなんと脆弱な事か。

だが、潰えない。何度でも死線を斬り抜ける。死を恐れぬ――いや、死の概念を持たないミニオンですら付け入る隙を見出だせないその死の舞踏。

バイザーを外したその男は、一歩でも間違えば即ち死に繋がるその綱渡りを熟している。

「……っく…！！」

刹那、地に【夜燭】を衝き立てたダラバの闘気が膨れ上がる。その神剣から漏れだす凍気もまた、数倍にまで。

白い息を吐き、震え始めた身体を抱く。離れた位置に居る自分がコレだ。

ならば――真正面に位置する彼にはどれ程の凍えた風が吹き付けている事だろうか――

【夜燭】から漏れだす凍気は、やがて結集し蒼い獣となった。

「――『レストアス』よ、我らが業の深さを見せ付けてやるのだ！」

「――丁上土乚工！！！」

意味を成さない、まるで雷鳴の様な唸りを上げた蒼い獣。

それこそが、永遠神剣【夜燭】の『永久機関［パーマネントエンジン］』である『エレメンタル＝レストアス』。永遠神剣【心神】の『ホラーエレメンタル＝アイギアス』と対となる神獣らしく、不定型と言っても過言ではないソレ。水のような躯を持つ、意志を持った電気の集合体。

空は身構える。ともすれば弱点と成りうる自身の神獣をわざわざ出現させる理由。

詰まりは――

「タツミよ。この程度で死なれては困るぞ…」

帯電を強めて眩ゆく輝くレストアスを後光に、虎は笑う。多分に期待を篭めた眼差しで。

対する鴉は右手で装填を終えた。蒼い対抗魔法の魔弾を篭めた【無銘】を衝き出し、引鉄を引く――

「凍て付く風よ、凪げ――『アイスバニッシャー』」

――よりも早く、青ミニオン達が反応した。いくら下位とは言え神剣の輩という事か。

口々に紡がれた対抗魔法の凍風がレストアスを包み込み凍て付かせ――――られない！

元より相手の神剣魔法を打ち消す事を得意とする青属性。その青の象徴とも言える水。つまり、帯電した水の躯を持つレストアスはその申し子と言えよう。

始めから『その存在自体が対抗魔法』――！！

「「――チィッ！？」」

舌打ったのは二人。空は瞬時に【無銘】を振り魔弾を排出し、換わり取り出した銀の弾丸を装填する。
その間にエヴォリアはその身を光に換えて消えた。

「――『ライトニングボルト』！！」

同時に、臨界を迎えたレストアスが周囲に稲妻を放出する。幾条もの雷槍が地を砕き走りながら、ミニオン達を巻き込み焼き貫いていく――！！！

【――マナよ、森羅万象の根源たる命素［マナ］よ。覇たる龍帝の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け……】
「大博打だ……征くぞカラ銃！！『五源素結晶［フィフスエレメント］』――」

一方、撃鉄を熾こした【無銘】の銃口から発せられた五重冠の魔法陣。
青、赤、緑、黒、白。全ての属性色を象徴する色が重なり、銀色の陣へと変わった。

「【――『オーラフォトンブラスター』ァァァッ！！！！」】

撃鉄が墜ち、精霊光の砲炎が迸しる。撃ち出される高密度のマナ全てが銀龍の息吹へと換えられてゆく。弾丸はそのまま銀の暴風と成り、ミニオン達を撃ち砕きながらレストアスの雷槍と撃ち合った――！！！

飛び掛かって来た赤い鉾。その赤熱する双刃剣。

「同時に往くぞ、レーメッ！」

「おぅ！」

意表を衝いたつもりだろうが、既に望の構えは整っている。交差させた両腕、それを振り抜く。

「「一一『クロスディバイダー』ァァッ！！」」

鋏のように振り斬られた双子剣に、鉾は神剣ごとその身を断たれて消滅した。

それを眺めながら荒い息を吐く。周囲には同じように鉾を倒した仲間の姿。

「……っ！！？」

と、望と同じ方向を見ていたレーメが視線を変える。未だ遠い城へと。

「どうした、レーメ？」

「…ノゾム。今何か、途轍も無く強烈なマナ同士の激突が有ったぞ」

「……ッ！！空とダラバか！」

「恐らくそうだ。…まったくあの天パめ！柄にも無く先走りよってからにっ！！」

目前の鉾に集中していた彼は気付かなかったが、彼の相方は気付いたらしい。見れば確かに、城の一角から煙が上がっている。

グッと、彼は身を起こした。休んでなどいられない。急がねば、友…いや、『家族』に危険が及んでいる。

「――よし、行こう皆！」

仲間達に呼び掛けた彼は、城に続く道に溢れた鉾を見据えた。

――白亜の庭園で、一人の女性が華を愛でていた。しかしその女性の前では華の方が恥じらうだろう。それ程の美質、気品に溢れた物腰。

背後にはかしづく男が二人。どちらもが自身の愛剣を地に衝き立て、弐心無き事の証明としている。

『…その者が先の戦で武名を挙げた傭兵団の将ですか、将軍？』

腰まである金紗の髪を靡かせ、女性は振り向く。その瞳は蒼穹を思わせる蒼。

『はっ！私めが辺境の鎮圧任務に赴いた際に登用致しました男にございます！名は――』

凛と空気を震わせる声に、片方の豪奢な鎧を着た男がつらつらと応えた。その上でもう一人を小突く。さっさと名を言え、と。

『…お初にお目に掛かります、殿下。私の名は――』

将軍と呼ばれた騎士に急かされた、使い込まれたプレートメイルを纏う青年が口を開いた。

『――よい。饒舌な男は嫌いです。将軍、私は彼と二人で話がしたい』

金の髪を靡かせた女性は、たった今愛でている薔薇の華のように微かな棘を含んだ言葉を紡ぐ。

それに気付き、平凡な鎧を身に付けている青年は薄く笑みを浮かべてしまう。隣の道化に気付かれぬよう、それを手で隠した。

『…は？いやしかし…』

『将軍？』

渋った将軍に、金色の女性は焦れた――それでも凛とした声を掛ける。

『はっ、はい！どうぞごゆっくり！』

忌ま忌ましげに彼は青年を睨み付ける。と、徐に顔を寄せて呟いた。

『……いいか、絶対に粗相を働くんじゃないぞ！もし俺の評価を下げるような真似をしてみろ、ただじゃすまさんからな…！』

そう小声で吐き捨てて庭園から去っていく。それを確認して、女性は青年に歩み寄った。

『…さて、貴公の勇名は聞き及んでいますよ『飛将ダラバ』？貴方の剣の腕、同じく剣を嗜む者として実に興味が有ります』

『殿下の剣名こそ、辺境にまで響いております。『アイギアの姫騎士』と』

『そうですか、それは光栄ですね。ずっと、貴方と手合わせするこの日を待ち侘びていましたから』

頭を下げたまま、返答する。そして地に衝き立てている片刃の大剣、服従の証を立てる為の行為に遣われる『相棒』に目を遣った。

――ああ、俺もだ。ずっとこの日を待っていた。貴様らアイギアの血族に、この【夜燭】を衝き付ける機会を。

その為に俺は此処まで来た。やっと此処まで来た！殺す…全て殺す。

それが例えお前でもだ――

『――そう、ずっと…この日を待ってた……』

『――…！？！』

思考の海に沈んでいた彼は、自分の頭を抱え込んだ温かさにそれを断たれた。

『約束…護ってくれたね…』

砕けた城の壁。その大穴からは濛々と黒煙が吹き出している。

「――……ッ、カは……」

そこから続く庭園。植わっていた華々は枯れ果て、流麗な白大理石造りの噴水は干上がってしまっている、白亜の庭園。

その渇いた地面に横たわる男は、弐挺の拳銃を持つ空。『ライトニングボルト』と『オーラフォトンブラスター』の相殺により発生した衝撃波によって此処まで吹き飛ばされたのだ。
左手にはダラバを狙った【無銘】、右手には激突する前に壁を撃ち砕いた【海内】。

――…糞、躯が痺れて……！

傷は負っていない。だが、レストアスの放った雷槍は空中放電により空の躯の自由を奪った。
今ダラバに斬り掛かられれば、成す術など何一つ無く斬られてしまうだろう。

「――ククク……ハハハハハッ！！」

藍色の天を見上げていた彼の耳に、その哄笑が届いた。

「佳い…佳いぞタツミ！これ程の昂ぶりは何時以来か！！」

何とか目線を向けた先。壁に開いた穴の縁に、篭手に包まれた掌と脚甲に包まれた足が掛かる。

「――だが、この程度で我が剣は折れぬ！もっとだ、もっとチカラを見せてみろ！！」

現れ出でたダラバ。その身に纏わり付いていたレストアスが【夜燭】へと還っていく。

――他者ならば触れるだけで致命傷を与えるレストアスだが、主で

あるダラバだけは例外。
その魔抗の躯を加護としてダラバを護った。かつて、至近から放たれた紅の魔弾を防いだのもコレだ。

だがそれでも無傷とはいかない。打ち消す事の出来ぬ精霊光の暴風に撃たれた。それによってプレートメイルの上半身部分は粉々に砕かれ、最早用を為していない。

苛立たしげにそれをマントごとむしり取る。露になる空の頸飾りと、同性でも思わず見惚れてしまう程に筋骨隆々の肉体。その躯には左脇腹から右肩に向けて刷り上げられた刀痕が走っていた。

「…クッ…は…！」

ふらつきながらも何とか立ち上がる。横たわったままでは太刀向かえない。

運が良かったのは、麻痺に対する策を練っていた事。タリアの『フローズンステイシス』を受けて気付かされた、状態異常への対抗策を。
それこそが【篭絡】。巻き付いたモノに対する神剣効果の排除能力を持つ贋物。本来的な用途は敵に巻き付ける事だが、端から強化などを受けていない空にとっては防具と同じ。
クロムウェイから聞き及んだダラバの能力を考慮しての先読みが幸を奏した。

既に撃ち尽くした【海内】をホルスターへ戻す。その右手で取り出したのは、金の弾丸。

【使い切らはるんどすか？…まぁこの状況。しゃあないか…】

――これがラストワン、鼬の最後屁だ。この、通常の魔弾五発分…【無銘】以外に装填する低マナコスト弾に到っては二十五発分ものマナコストで精製される、現在たった二発だけの『五源素結晶』。

【――マナよ、森羅万象の根源たる命素よ。賢たる龍皇の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け……】

装填し撃鉄を熾こす。現れ出でた五重冠の魔法陣が重なり、圧縮されて金色に染まる。

「…来い！この私の呪われた運命を断ち斬れると言うのならば！この私を打ち倒してみせよ！！」

その様を見遣りながら、ダラバは構えた。その戦意に応え、【夜燭】が妖しく煌めく。

「この残り僅かな命の燭火［ともしび］が燃え尽きるまで…マナの霧と成り夜闇に散るまで…私は誰にも、何にも屈さぬ……！！」

不動の巌、それは正に『剣神』の面目躍如。いや――それすらも超え行く者。

――或る神話では、命は一本の蝋燭に例えられる。その長さが人の一生の長さなのだと。

「神剣の剣戟……【夜燭】に宿るチカラの全てを――」

――その蝋燭を削る燭火。それこそが神剣【夜燭】の冷え切った煌めき。

ダラバの身に、そのチカラが充ちる。命を代価に限界を超えるチカラを与える神の剣［ツルギ］の威力が発揮される。

『僕は騎士の子なんだ。この国の民を護るのが僕の未来の仕事なんだ。だから…僕が君を護れる様な強い男になった時に、また会おう。約束する！！』

『…ほんとう？ほんとうにつよくなって、あたしをまもってくれるの？』

――全てを…自身の命も他人の命も、生まれ故郷も騎士の誓いも――

『うん。僕が護るよ、クルウィンを！』

『…うん、またあおうね！やくそくだよ、でぃすばーふぁ！！』

――幼き日の約束も、その想いさえも……全てを【夜燭】の凍える燭火に焼べた。私に残るのはこの躯と心、魂……そして――【夜燭】のみ。

「――受けきってみせよォォォォォッ！！！」

【夜燭】の刀身に紅黒い精霊光が纏わり、同時に彼の忠臣『レストアス』の蒼雷が混ざる。光と闇の輪舞。これが彼の辿り着いた極致。精霊光と神獣のチカラを練り合わせ、ただ破壊のみに特化したその剣戟の名は――

「――『光芒一閃の剣』！！！！」

――最早私に『限界』など無い。そんなモノは全て斬り伏せて来た。

……何もかも全て、この【夜燭】と共に！！

「【――『オーラフォトンクラスター』ァァッ！！！」】

引鉄が引かれ、【無銘】の撃鉄が墜ちた。砲炎は金色。暴風に指向性を持たせたその一閃は金龍の息吹、高密度に圧縮された精霊光の烈風――！！

「「オオォォォォッ！！！！！！！」」

二つの意地が、空間すら揺らしてぶつかり合った――……

街中は混乱の坩堝だった。至る所に兵士と鉾、民間人が入り混じり、統率も何も有ったモノではない。電撃的な解放軍の進攻速度に対応出来なかっただけではなく、王城から立て続けに二度立ち上った爆煙に『城が陥落した』という流言まで流れている。

グルン＝ドラス兵は完全に烏合の衆と成り果て、同士討ちまで起こっている中で。希美はそれを見付けてしまった。

「望ちゃん、あそこに逃げ遅れた人がいるよ！」

「なんだって！？」

都市部を駆け抜けていた彼等。その視線の先には、逃げ遅れて戦闘に巻き込まれてしまった一般人の姿が映っている。

それを助けようと思わず立ち止まってしまった望と希美。それを沙月が叱責する。

「立ち止まっている暇はないわ！今は一刻も早くダラバを討つの！それが一番早くこの戦争を終決させる手段なんだから！！」

「…でも！」

そんな事は、望達にだって解っている。だが、だからと言って目の前で消え逝く命を見捨てる理由になるのか。

「救助活動は後から来る解放軍の兵士に任せるしかねぇだろ！それとも異を見捨てるか？」

「一一ッ！そんな訳無いだろ！空は大事な『家族』なんだ！！」

小莫迦にしたようなソルの物言いに、望は珍しく怒りを露にした。

「だったら迷うこたァねェだろうが！！目の前の他人より大事な奴が居るなら、ソイツをきっちり護り抜いてから泣き言言いやがれ！！」

そんな望の頸根っこを掴み、彼は怒鳴り付けた。その剣幕に望の頭も冷える。

「……ごめん。ソルラスカ、ありがとう」

「…へっ、いいさ。行くぜ！」

それでも名残惜しそうに、望は一度だけそこに目を遣った。そこには…崩れ落ちた瓦礫の山。

「……クッ！」

力尽くで視線を剥がすと、望は前方のソルラスカ達に追い付くべく駆け出す。
途中、同じように立ち止まっていた希美の手を引いて――

一方、アイギア解放軍の尖陣であるヨトハ村以来の騎士達は城門へと到達していた。
神剣士達は、城内に突入していった。跳ね橋を飛び越えていく運動能力には、流石に苦笑しか漏れなかったが。

「左翼！守りを固めろ！第五、第二小隊は前衛の後退を支援しろ！」

鋭く指令を飛ばすクロムウェイ。鉾はクリスト達が受け持ってくれているが、一般兵士は彼等が相手している。鉾とでは戦いに為らない彼等の矜持だ。

「クロムウェイ様！中央が突破され――グハァッ！？」
「――ッ！」

そこに、敵兵が斬り込んで来た。切り結ぶクロムウェイと騎兵。

「――誰かと思えば…クロムウェイの小坊主か？噂には聞いてたが、随分と立派な将振りじゃねぇか！！」

槍を振るう髭面の、壮年の兵士。その顔に彼は目を見開いた。

「貴方は…アルドル殿か！？では、遂に……！」

その人物は、かつて己が騎馬戦闘の基礎を学んだ男。
続くは騎乗した兵を中心とし、一糸乱れぬ統率を見せる一個中隊。
司令官で有る筈の騎兵が先頭となり敵陣深くを斬り裂いている。その傷を、大剣やクロスボウで武装した猟兵が拡げていく。

「…遂に来たか…！」
「――さぁて、一丁揉んでやるぜ？クロムウェイよぉ！」

その一団こそが、ダラバ＝ウーザの覇業を支えたグルン＝ドラスの中核。かつて『飛将』と呼ばれた彼の率いた傭兵団――！！

――鮮紅が舞い散る。右肩から袈裟掛けに割かれた空の胸から。

「――あ……」

目の前には王虎。その振り下ろした黒い爪。切っ先が掠めた部分は焼き斬られている。
だがそれは牽制。まだ、牙が残っている――！

【夜燭】を振り上げ、ダラバは空の身長よりも高く跳んだ。
初太刀で相手の武器防具を打ち砕き、弐の太刀を決殺とする。その勢いは最早、隕石を思わせる圧力。

「――あ、あああァァァッ！！？」

遮二無二取り出した昏い【誰彼】、そして弾丸など篭められていな

い【無銘】を掲げる。

「――オオオォォォォッ！！！！」

裂帛の気合いと共に振り下ろされた【夜燭】。黒光と蒼雷を纏う一撃。

――ギィィィィン！！！

それは苦も無く【誰彼】も【無銘】も斬り――

「――……」

左肩から真っ直ぐ、弐太刀目を空の躯に刻んだ――……

切断された【篭絡】が地に落ちる。フラリと空が前に傾ぐ。胴が繋がっている事がそもそも奇蹟。

剣という武器の間合いを骨の髄まで仕込まれていたからこそ。切っ先を受けるだけで済んだ。

「……良く遣った方だろう。『人間』にしてはな…」

剣気を納めたダラバは呟く。この一戦を以って、彼は悟ったのだ。

この少年は人間と何ら変わらぬと。その脆弱な身を持って、自分と相対したのだと。

そんな無謀とも言える男に敬意を払おうと、彼は顔を上げた。

「眠れ…貴様の名、しかと我が記憶に刻んー―ッ!!?」

刹那、彼の頬を掠めた一撃。空の手に握られた銀鏡の【誰彼】。

「……何を勝った気で居やがる……俺はまだ生きてる……この命はまだ…燃え尽きてねェぞ…!!!」

そして、踏み止まった。

これ程の傷を負い、失血して。まだ闘気を納めない。

その眼に燈る気炎に。

「ー―見事!!!」

ダラバは【夜燭】を振り下ろした。

ー―死の間際には走馬灯が過ぎるとか、総てがスローモーションに見えるらしい。

因みに俺は後者だったようだ。振り下ろされる【夜燭】が、黒い落雷のように見えていた。

（……ああ、熱いな…）

ー―胸部に感じられる灼熱。焔に焼かれているようだ。

（まあ、懐かしいとも言えるか…）

――そう言えば、前世でも胸を斬られたんだったな。そう――

目の前が真っ暗に染まる。死の暗闇とは違う。

そして――金色の波。それが漆黒の落雷を受け止めた。

背中に感じる温かさ。倒れかけた躯を支える温度。顔を上げた先には――茶髪碧眼の少年。

――そう、お前にな……望――……

The 25th Name ?・・・"決戦?"

息を咳切らせた少年が走り抜ける。曲がり角でぶつかりかけた髭面の騎士が、苦笑混じりに『あの人ならいつもの所に居ると思うぜ。毎度毎度大変だなぁ、小坊主?』と労をねぎらった。

黒い鎧と剣を纏い、年若いながらも近衛騎士の証たる黒い外套に袖を通した少年。金色の短髪、溌剌とした印象の彼は、庭園に走り込むなり声高に叫んだ。

『姫殿下ーーっ!!将軍殿が此処にいらっしゃるのは判ってますよーーっ!!早く帰してくださいーーっ!!軍議の時間が押してるんですーーっ!!』

『しぃーーっ!静かにしなさいクロムウェイ!』

少年の叫び掛けた先。小声で返すは、噴水に腰掛け人差し指を立てた女性。

心配げに見遣る先には、その膝の上で眠る青年の姿。

『ーー将軍!?一体何が!!?まさか敵襲!?』

…しかしそれは、少なくとも安らかな寝顔では無かった。どちらかと言えば気絶したような…。

敬愛する人物のあまり見たくない表情に、彼はそのすぐ側に走り寄った。

『違います!乱波如きに将軍が負ける筈が無いでしょう?』

『…詰まりは姫殿下の仕業だという事ですね?』

少年はジトリと眼差しを細める。目に映ったモノとその一言で、もうほとんど状況を理解したからだ。

『……あはは』

『全く……』

背側、噴水の中に隠していた木剣を見咎められた事に気付いた女性は、笑って誤魔化すだけだった。

『う…ん……』

そこで、青年が目を覚ます。それに気付いた女性は、正しく花の蕾が綻ぶような笑顔を見せた――

城門の開けた空間で、指揮官同士の一騎討ちが始まっていた。槍騎兵は地に降り立ち槍を構え、騎士は西洋剣を得物に対峙している。

連続で繰り出される槍撃。剣の鎬を使いそれを逸らすクロムウェイ。

「そぉらッ！！」

「…くッ！」

巻き込む穂先に剣を搦め捕られそうになり、タタラを踏む。そこに石打が振り上げられ、左の肩口に痛打を浴びた。

「まだまだァッ！」

「おっとォ！」

右腕一本で繰り出した水平の半月斬り。受け切れず飛びのいた槍騎兵の胸鎧に、横一線の疵が走った。

「…遣るようになったな。前はあれで顎打ち上げて、よく気絶させてやったもんだよなぁ？」

「……そうでしたね。貴方にも、将軍にも…指一本出はしなかった」

石打が掠めた頬から血が滴り落ちる。それにも構わず、彼はただ己の剣にのみ意思を集中した。

「しかし、因果だな。幕引きは俺ら、かつての近衛同士か……鉾なんぞ糞の頼りにも成りゃしねェ…」

「では、何故鉾など用いた！何故あんな悪魔どもを…！」

「将軍の御決めになった事だ。俺如きに口出しする権利はねェよ。…俺個人の意志がどうあれ、な…」

フッ、と槍騎兵は口角を歪めた。それは一一自嘲だ。

「一一往くぞ、アイギアのクロムウェイ！！」

槍騎兵は軽口を納めた。表情を引き締め、餓えた狼のような眼差しで彼を見据える。構えは低く、穂先を斜め下方に向けている。

「一一来い、グルン＝ドラスのアルドル！！」

痛む腕で無理矢理に柄を握り、騎士も構える。腰溜めに、刃を僅かに傾斜させたその構えは。

「「ーーハァァァッ！！！」」

下方から捩曲がるように打ち上がる穂先。それを、彼は避ける事無く迎え討った――！！！

【夜燭】を【心神】で受け止めたのはカティマ。倒れ込もうとした空の躯を抱き留めたのは望。
すんでの処で、彼等は間に合った。

「ダラバ＝ウーザ…ようやくこの時が来ましたね」
「ああ、待ち望んでいたぞ。カティマ＝アイギアス」

鍔競り合いながら睨み合う二人の騎士。対たる双振りも互いを認め合う。そこから流れ込む壮絶な破壊の意志。

――砕け、あの剣を砕け。それが出来ぬなら主を砕く――！！

そう言わんばかりの、許容量など一切無視した神剣の強化。
宿命の相手を前に、最早言葉など要らない。後は――

「「ーーハァァァァッ！！！！」」

――斬り結ぶのみ！！！

「空！おい、空！！」
「巽くん、しっかりしなさい！！」
「畜生！死ぬんじゃねェよ！！まだケリ付けてねェだろ、巽！！」
横たえられた空を取り囲み、口々に叫ぶ神剣士達。希美はとにかく治癒魔法を唱え続けている。
効き目などほとんど無いそれを。
「血が止まらない…どうしよう…どうしたら……！！」
涙さえ零しながら、ずっと。
「…はあ、クッ…望…耳を貸せ…！」
「空！？何だ…！」
その空が、死力を尽くして望に耳打つ。望はその内容に声を荒げた。
「そんな事、出来るのか…！お前、今にも死にそうだろ！」
「…『とにかくやるっきゃない』…じゃ無かったのかよ、望…？」
「……！」
返された言葉は、かつて自分で言った言葉。その言葉が持っていた意味の重さに、彼は息を呑む。
「…いいな、俺が合図をしたら――」
凄まじい金斬り音を立てて、カティマとダラバは距離をとる。そし

て同時に膝を折った。
互いに満身創痍。ダラバは空との戦いで、カティマは此処に到るまでに斬り伏せて来た鉾との戦いで。

地に【心神】を衝き立てて立ち上がるカティマ。その眼差しが、神剣士達を見遣る。その中心に臥した血塗れの空を。

「…互いに、余力は無いようだな」

ダラバもまた、同様に【夜燭】を支えに立ち上がった。それに彼女が視線を向け直す。

「…ダラバ将軍…いえ、ディスバーファ＝レストアス。最後に言っておく事が有ります」
「…なんだ」

ダラバを見遣るカティマの眼差しには、怒りも憎しみも無い。ただ一一

「一一私は、ただ貴方に復讐する為だけに生きて来ました。それだけが生き甲斐でした。そうして剣を振るって生きて来ました……」
「……」
「ですが、ようやく気付いたのです。彼等と行動を共にし、その心に触れる事で。…プロジア文書に記された真実を知り、我が身に流れる血の闇に向き合う事で…」
「だから、どうしたと？」

目を閉じて紡がれる言葉。先程まで充ち溢れていた闘気すら押し隠した静かな物言いに、彼は何が言いたいのか判じかねる。
その時、彼女は瞼を開いた。

「貴方も――同じだったのでしょう？私と同じ…ただ、復讐の為だけに生き、全てに決着を付ける…死に場所を求め続けた。生きる為では無く死ぬ為に生きた――」

ただ、哀しみを湛えている。それに気付いたダラバが眉をひそめた。

『私は――貴方とならこの『運命』も乗り越えられると…そう信じていました…』

…その眼差しが、かつて殺し損ない、かつ己の身に傷を刻んだ相手と同じだったから。

「――…何を言うかと思えば…下らん！実に下らん！！私は――私はこの下らぬ『運命』に決着を付けるだけだ！倒すべき貴様とその神剣を砕くのみ！！」

老い、病み。狂える王虎が吠えた。その古傷に触れた、若く気高き獅子の女王に向けて歯を剥き、【夜燭】から流れ込むチカラを更に引き出す。

最早堪えられるべくも無いというのに、それを止めない。神剣を振っているのか、神剣に振らされているのか。それすらもう定かではない。それ程に彼と【夜燭】の境界は曖昧になっていた。

「虚しいですね。一体、私達は何の為に生まれたのでしょうか？私から全てを奪っていった貴方、貴方から全てを奪っていった我が血族……もう、そのどちらもこの世界には必要無い」

再度ダラバを睨みつけるカティマ。
その手に在る【心神】は、彼女の身の丈に見合ったチカラのみを送り続ける。それは、神剣と『共に』歩む者の姿。

「此処で――我等の血の因果を清算しましょう…！！」
「望む処よ！私を…殺してみせろォォォォォッ！！」

同時に二匹は、地を蹴った。

――キィン、ガッ、ギィィン！！

「っく……！？」

圧し飛ばされ、構えを崩したカティマ。そんな彼女を睨みつけるダラバ。

「そんなチカラを残していたとは…流石ですね…！」
『いたた…！少しくらい手加減してよ！』

その霞んだ目に、聾しつつある耳に。今ではない情景、誰のモノか判らない声が届いた。

「我が神剣に宿るチカラは無限！この程度、どうと言う事は無い！」
『手を抜いたら抜いたで怒る癖に…』

傲岸に応えた言葉、それに被るようにもう一つの声。若い青年の声。

「その言葉、そっくりそのままお返しします。この世界に、我が神

剣に勝る剣は無い！」

『もう怒ったわよ！来なさい、『アイギアの飛将』なんて呼ばれていい気に成ってるその鼻っ柱を圧し折ってあげるわ！』

その言葉に彼女は食らい付く。彼女もまた王者。その分身たる神剣が、この世で最高のモノだと自負している。

「よくぞ言った！次の一撃でどちらの神剣が最強か証明してみせようぞ！」

『やれやれ…また泣いても知らないからな！』

「望む処です！」

『返り討ちよっ！』

ダラバの腕にチカラが篭る。合わせて、カティマが眼光鋭くその動きを見詰める。

「最後の一合だ……往くぞッ！」

『じゃあ全力だ……往くぞッ！』

怒号と共に踏み出したダラバの速度たるや、空の時の比ではない。

「ふー……」

『ふーっ！！』

対して、静寂の構え。漣［さざなみ］すらない湖面の如く、乱れぬ心にてカティマは待ち構える。

「我等二人に絡まった因果の糸……貴様の手で絶ち斬ってみせよォォォッ！！」

「言われなくても……」

全てを打ち砕くべく迫る一気呵成の王虎を迎えるのは、明鏡止水の意志を持って剣を振るう獅子。

――その静かな意志が、虎の僅かな瑕疵を見抜く。

「『ハアァァァァッ！！！』」

「『っ……！！』」

――弐本が閃いたのは同時。真横に振り抜かれた【夜燭】に対し、【心神】は――

全てが止まっていた。カティマもダラバも。息詰まる瞬間、それを破ったのは――ダラバ。

「…おのれ…この私が……！」

その背からは、胸を貫いた【心神】が衝き出している。

「…勝負…ありましたね…！」

一方のカティマは、頬に傷を負ったに留まる。刺突によってその距離を詰められた【夜燭】は、本来の威力を発揮出来なかった。

「フグッ！！…ふ…ふふ…」

喀血する。だがその血が胸元の少女に掛からぬように、彼は飲み下

した。
…『彼女』に良く似たその少女を自分の血で穢す訳にはいかない。

「…何が可笑しいのです」

死に逝く虎が笑う。それはあの狂笑ではない。確かな理性と――諦めを湛えた瞳。

――いつの事だっただろう。思い出せないが、その僅かに焼け残った記憶。

『ふふん、悪は滅びた…』
『滅びるかッ！ゲホ…お前な、衝きは無いだろ、衝きは…カハッ…』
『…あれ？？ちょっと、大丈夫？……ど、どうしよ～！？！』

――寸分の狂いも無く鳩尾にえぐり込まれた木剣。それに青年は意識を手放してしまった――

「やはり、定められた運命からは逃れられなかったか…」

そして彼は勝者へとその言葉を送る。

「私の苦しみは此処で終わるが…私が背負った苦しみは全て貴殿に受け継がれる……これから先、永遠に…その血に宿った呪いに苦しめられるがいい……！」

賛辞ではなく、呪詛を。事実として遺り続ける、その忌まわしき呪

いを。

「心配は要りません…私はそれを、背負い切って見せます。何度歩みを止めたとしても、必ず…！」

真摯な眼差しと共に返る言葉。そこには迷いなど無い。

満足げに微笑んだダラバ。そして己が身を貫く【心神】を掴み、自ら引き抜いた。

「…さらばだ、我が…『宿敵』…カティマ＝アイギアス……」

――巨駆が、倒れた。最期まで前に進んで。その手に神剣【夜燭】を握り締めたまま。

それが、アイギア国を滅ぼした王虎の最期。グルン＝ドラスの暴君ダラバ＝ウーザの最期だった。

全てが終わったその戦場に立つのは、ただ一人。呆然と立ち尽くすカティマ。

「…大丈夫、カティマさん？貴女が勝ったのよ？」

「ええ…そうですね…我々の勝利です…」

何とか答えた彼女は、ダラバから目を逸らさない。いや、逸らせない。最期に投げ掛けられた言葉に。

「油断するのは早いわ。神剣はまだ消えていない、息が有る証拠よ！」

「ちゃんとダラバに止めを刺しておいた方がいいんじゃないのか？」

タリアとソルの言葉は適切。何故ならば――

「――そうはいかないわ。その躯は、今から私が遣うんだから」

彼女の狙いは始めからそれだったのだから。

気配無くダラバの横に立ったエヴォリア。その登場に、カティマを除き『旅団』の神剣士達は身構える。

「…随分と捜したぜ、エヴォリア！！」

「『旅団』がこの世界に干渉して来るなんてね…お陰で予定が狂っちゃったわ」

だが、意に介さない。そんなモノは慣れっこだとでも言わんばかりの余裕。翳した手から光が溢れ、周囲を染める。

「ダラバ将軍。本当に解放されるのはこれからよ」

誰が止める暇も無かった。光は、ダラバの身に全て吸い込まれていく。

「――何をした！」

先ず口を開いたのはカティマ。当然だろう、つい今まで戦っていた相手に得体の知れない術を施されたのだから。

「何って？直ぐに判るわよ…ふふ」

激昂する彼女の気勢を受け流し、エヴォリアは薄く笑いはぐらかすのみ。

刹那、ダラバが起き上がった。まるで操り人形のように。それを確認したエヴォリアは、残酷な提案を告げた。

「此処まで頑張った御褒美に、コイツに勝てたらこの世界に掛けたプロテクトを解いてあげるわ！さぁ、殺し逢いなさいな――！！」

剣を構え、ダラバが駆けた。先程までの比ではない禍々しい殺気。それは一番にカティマに向けられる。

「――っぐ！！」

刷り上げる一撃に、【心神】が跳ね飛ばされた。そして返す太刀が降る――よりも早く、速く。合間に滑り込んだ望の【黎明】が、その一撃を受け止めた。

「――破ァァッ！！！」

「――……！？！」

そして一閃。彼の躯に走る刀痕に沿って首飾りの鎖、そして彼の魂を搦め捕った『神名［オリハルコンネーム］』の糸ごと――空の握った銀鏡の【誰彼】がダラバを斬った。

そして、跳ね上げられた【夜燭】が――

「――なっ！？！」

エヴォリアに向けて振るわれた――！！

辛うじて躱しはしたが、驚きの余りに彼女は支配を手放してしまう。

「…馬鹿な……そんな躯で、どうやって……！」

それは二つの意味で紡がれた。弐太刀も【夜燭】を受けてなお動ける空、支配されていた筈なのに操士に剣を振るったダラバに向けて。だが答えが返る事は無い。続くダラバの太刀に、彼女は舌打ちしながら更に飛びのいた。

「……このあたしが、読み損じた…！よくも…！」

憎悪を篭めた瞳が空を捉える。三度も自分に屈辱を与えた男を目に焼き付ける。

「…覚えてなさい、『【無銘】のタツミ』…！！」

言葉が紡がれたのと同時に、彼女を【夜燭】が捉えた。

その刀身を光が撫でて行く。消滅したのではない。逃げたのだ。剣を降ろし、ダラバは天を仰ぐ。一同には、血塗れの背中しか見えなくなった。

「…確かに、返して貰ったぞ……ダラバ……！」

呟く空。掌には受け止められた首飾りの鍵。傷から盛大に血が流れ出、彼は膝を折る。
望とカティマが受け止め、治癒を行う為に希美が駆け寄った。

「…フン、喰えぬ小僧よ。貴様よもや、始めからこうなる事を予測して私に斬られたのではあるまいな？」
「まさか…偶然だ。そんな高度な真似が出来る程達者じゃない…」

そんな空に視線を向けたダラバ。烈しい敵意と共に。

「本来ならば、縊り殺して億の肉片と成るまで斬り刻んでやりたい処。だが…」

…エヴォリアにより強制的に真の神名に目覚めさせられた彼は、その少年の『前世』を思い出した。その成したる卑劣も。

「…だが、お陰で『再び』我が矜持を失わずに済んだ。どうやら今生の貴様は…『奴』とは違うらしい」
「……さてね」

ニタリと笑い合う。通じる者同士にしか判らぬその意味。

一一夜が明ける。藍色の空を太陽の光が照らす。もう…『燭火』は必要無い。

【夜燭】が地に衝き立てられた。その黒刃の煌めきに彼は目を奪われる。

「…女狐の策を破った褒美だ…【夜燭】はくれてやる。しかし気性の荒い剣だ。貴様に遣い熟せるか？」

支えてくれている三人を制して、ゆっくりと空が前に出る。燭火に誘われたかのように、ダラバの目前まで。

――ああ、認めよう。初めて見た時から心奪われていたさ。正に一目惚れだ。

両腕が【夜燭】の柄に伸び、番える。地から引き抜き、肩に担いだ。

…幾ら致命傷を避けたとは言えその出血量。加えて契約などしていない者にとって神剣の重量を持ち上げるのは途轍も無い大仕事だ。つまり、それを可能としたのは――

「…悪いけど、俺は神剣と契約する気は無い。……俺は『巽空』だ……何処まで行こうと、何があろうと……俺は俺の壱志［いじ］を貫き通すだけだ……」

ただ、壱志。此処まで、『己の可能性』を信じて努力してきたが故。

――俺は『巽空』だ。それだけは変えない。神剣の強化など要らない。俺は俺の壱志に懸けて、『巽空』という全力で生きるのみ――！！

「…クク、どこまでも私の予想を上回る奴よ。……その『壱志』とやらを最期まで迷わず貫き通すがよい。それが貴様の導べと成るであろう」

背を見せたダラバに、そう強がって答えた空。その、『かつての自分』を重ねた少年に向けて、彼は言葉を贈る。

「…復讐の先になど…何も無い。永劫の空莫が拡がるのみだ。お前はこうは成るな…タツミ＝アキ…」

「……ダラバ＝ウーザ…」

そこで、やっと彼は理解した。『巽空』が『ダラバ＝ウーザ』に心惹かれた理由を。

――コイツは、俺だ。復讐という道に進み、成し遂げた果てに居る俺。

進む事は最早無く、かといって、引き返す道など始めから無い。展望など無く、帰結も無い。永遠を立ち尽くすだけの凍てついた焔。

ゆっくりと空は【夜燭】を地に刺す。視線はそのまま、霞み始めた目で、ダラバの背中を見据えたまま。

――もし、自分の『可能性』を信じ抜く事が出来なかったのなら。今頃こうして立っている事も無かったんだろうな…

「…心せよ…『神』は無慈悲だ。いや、貴様になら判るであろう。『欲望の神』……奴こそが、この下らぬ劇の狂言廻し――」

その少年に彼は、自身を復讐に駆り立てた『黒幕』の正体を告げようと口を開き――背後で響いた、何かが地に倒れ伏した音で苦笑した。

「…重き荷を背負い来たが、幕切れは存外に呆気ないモノよ…」

苦笑を漏らしながら、彼は噴水の一番下の縁石に腰を下ろす。その隣に一人、影が立った。

「…クロムウェイか…見違えたぞ。お前が此処に来たという事は、我が軍が…アルドルが敗れたという事か…」

「…時は移ろうモノ。形有るモノは必ず壊れる。不滅なるモノなど何一つ有りはしないのです、将軍…」

肩口に衝き刺さった槍の穂先。鞘に剣は収まっていない。槍を圧し折る際に欠け、曲がった為だ。

「フフ…後世恐るべし、という奴か。時代は確かに流れて行くのだな」

倒れた少年が仲間に介抱される姿を横目に、仰向けに天を仰ぐダラバ＝＝ディスバーファ。

「ならば…これでもう……想い遺した事も無い……」

朝陽の煌めきに庭園が照らされる。眩しい白光に染められた庭園に彼は＝＝幻を見た。

＝＝膝枕された自分の髪を撫でる指先。眼差しの先には、心配げな涙目をした金髪の女性。

「……泣くなよ…『俺』はもう…大丈夫だからさ……」

その小さな呟きはを聞き届けたのは、クロムウェイただ一人。だが彼は確かに『彼女』と話していた。

…神剣の燭火などよりも眩しく輝いた、暖かい記憶の陽射し。凍てつく焔に焼き尽くされた彼の生涯に於き、復讐すらも忘れかけさせたその陽射しの彼方に見える女性。

自分の無事に安堵して極上の笑顔を見せてくれた彼女に、あの日以来の無垢な笑顔を浮かべて。その穏やかな朝陽を浴びて――

「――…クルウィン…漸く……君の御許［もと］へ――――……」

ディスバーファ＝レストアスは最期を迎えた――……

The 26th Name…"夜想曲"

静寂に充ちた夕暮れの境内、その社の裏手。一本の古木の前で彼女は懐古の情に足を止めていた。

「…アレからもう、十年にもなったんですね…」

時深は木の幹を撫でる。ザラザラでゴツゴツの、彼女五人分でようやく幹に手が回るその古木。

あの時石がぶつかった事など何の事は無い、傷痕は『時間』という止めど無い流れの彼方に消えている。

――元気でやっているんでしょうかあの子は……あの性格だし、周りと衝突したり孤立したりしていなければ良いのだけれど…

慎ましい胸に手を当てて彼女は、はぁ、と溜息を落とした。

「――時深さーーん!!」

「あら…もう具合は良いんですか?」

その耳に届く少女の呼び声。振り返った先には、自分と同じ白衣に緋袴の――

「はい、ご心配おかけしましたけど、もう動くくらいなら大丈夫です。…ところでこんな所でどうしたんですか?」

――青銀の髪と瞳の少女。天使の翼のような髪飾り…と思われるものを付けた長い髪を靡かせながら駆けて来る。

不釣り合いな程に大きな蒼の鎗剣を手にして走るその愛らしさに、彼女は抱いた心配すらも忘れてしまった。

「ええ、少し…昔の事を…」

視線を木の幹に戻し遠い目をして、時深は昔語りを始めた……

あれはそう、暑い夏の日だった。

シネシネシネシネシネ……

都会のオアシスとでも言うべきか、緑の溢れるソコ。生命の楽園と思えるくらいに多様な生き物が居た。

シネシネシネシネシネ……

『「……うるせーな』」

梢で鳴くアブラゼミ。その挑戦的な鳴き声に応えた苛立たしげな声。随分と若い…いや、幼い。

シネシネシネシネシネ……

一一手は…届かないな。背も低いし。そりゃそうだ。まだ小学生なんだから。

シネシネシネシネシネ……

『…石でも投げてみようか』

――おいおいヤな餓鬼だな…止めとけ『俺』、命は大事だぜ？…てか、どうせ当たんねェからよ。

小さな左手が石を拾い上げる様子を、俺はソイツの視線と一緒に見ていた。齟齬が生じたとしても『俺』を観測する側には回れないらしい。夢の癖に融通が効かねェ…。

『――えいっ！えいっ！えいっ！』

三つ四つと続けざまに投げられる石は、どれも全く見当違いの場所に飛ぶ。

――…しかし、我ながら哀しくなる位のノーコンだな。そういやナイフスローも的に当たるようになるまで三日掛かったっけか…

シネシネシネシネ……

『――このぉっ！』

最大限にチカラを込めた一発。それがアブラゼミの止まっていた木に当たる。当たる直前に飛んだアブラゼミから外れたソレは木の幹に傷を刻んで跳ね返り――

――スコーン！

その人に、当たったんだったな……

『……僕？随分と楽しそうねぇ？お姉ちゃんも一緒に遊んでいいか

しら…！！』

額に青筋を浮かべながら笑う、白と朱の女の人。当時は何の恰好なのか解らなかった。

――…ヤベェ、夢だって解ってるのに小便チビりそうだ…

『あ…ご、ごめんなさい！反省してます！本当です！』

そんな女性に向かって、餓鬼が謝罪する。子供とは思えない位に堂に入った謝り方だ。そして――

『…え…えへへ……』

――笑う。笑いやがる。腹が立つ位に媚びへつらった笑顔で。

そう、この笑顔をすれば、大体の大人は赦してくれた。仕方なさそうな顔をしていつだって赦してくれたんだ。だから、いつだって怒られる前に笑った。

『……』

すると女性は笑顔を吹き消した。何か沈痛な表情をして――

――スコーン！！

『いだぁぁっ！！？！！』

――俺の頭に拳固を。そしてもう一つ…

『……子供が愛想笑いなんてするんじゃないわよ。子供はね…』

頭を抱えて痛みにうずくまる『俺』、そんな俺に女性は一一『俺』の意識を変える言葉をくれたんだった。

『一一子供はね、莫迦みたいに笑ってればいいのよ。どうせ大人になったら泣きたくなるような事ばかり。心からなんてもう、数えるくらいにしか笑えなくなるんだから…』

一番最初に目に入ったのは、天井の白いタイル。そして蛍光灯の白い光。

「……ぐ、あ……！！」

身を起こす。それだけで死にそうな程の苦痛が彼の全身を襲った。

「…上手く……死に損なったみたいだな、俺……」

胸に手を当てる。焼けるように熱を持っているそこは、包帯でがんじがらめにしてある。また特大の継ぎ接ぎが増えた事だろう。

「…ぬ？目を覚ましたか、天パ」

頭の横から声。ベッド脇の棚に座り、剥かれた林檎をかじっているレーメだ。

「ジャリ天…あれからどれくらい経った？」

「…五日だ。ノゾミとポゥに感謝するのだぞ？ほとんど寝ずに、ずっと治癒魔法を掛け続けていたのだからな…この鉄砲弾めが」

モソモソと動きながら問う空に、レーメは多分に怒りを載せた調子で応えた。

「……そうか」

足元の椅子に座り寝息を立てている少女達が目に入る。ショートの黒髪の彼女は永峰希美。その希美の膝の上で眠るのは、緑色の飛翔ユニットに収まったクリスト＝ポゥ。

一一やれやれ、これは本当にもう死ぬまで頭が上がらないな…

「…有難う、二人とも…」

心からそう呟き、彼は手を伸ばす。

「一一あ、こら天パ！返すのだっ！！」

「静かにしろよ、二人が目ェ覚ますだろ。第一これは俺んだ」

ベッド脇に置かれた皿、さっきからレーメがかじっている林檎の置かれた皿に。

林檎に刺してある爪楊枝を摘むと、それを口に運ぶ。

「相変わらずムカつく奴め…おっと、忘れるところだった…」

そこでレーメは、思い出したように背後の箱を開いた。

「…ん？一一……！」

そこに入れられている残骸。ダラバによって綺麗に両断された――【無銘】。

取り上げた林檎をかじっていた空は、皿を置いてソレを受け取った。

「まあ、なんだ…あまり気を落とすでないぞ。あの女とてお主を護れて本望だったで――」

慰めるレーメの声を聞きながら、箱の中から銃把と撃鉄が遺る部分をつまみ上げて額に当てる。そのまま目を閉じた彼は俯き――

「――ったく、勝手に『再製』しとけよ面倒臭い…」

「――は？」

――ジト目を、ソレに向けた。

【……ぶ～～！ちったぁ心配してくれてもええやありんせんかぁ！旦那はんのいけず～！！】

箱の中の銃口部が細分化された。やがてソレは空の握る残骸に纏わり付き――容［かたち］を成す。

「…再生した、だと……！！両断されて……！」

「勝手に神剣と一緒だと思うなよ。俺のは『神銃』なんだからな」

「信じられん…持ち主といい神器といい、規格外にも程が有る……」

黒地に金の装調が施された、燧石式拳銃を。

レーメはと言えば、あんぐりと口を開けているのみ。

「俺の何処が規格外だって言うんだよ。紛う事無き一般ピープルだろうが」
「運び込んだ時は腸がはみ出ておったぞ」
「…凄げェ俺。生きてて良かった。ホンット、生きてて良かった俺…！」

空は戦慄を覚えつつも器用にソレを空中で受け止め、クルクル回転させて腰に挿す。

「…と。そういや【夜燭】はどうしたんだ？」
「ああ…あれなら庭園に刺したままだ」
「そうか…っと」

眠る少女達を起こさぬようにベッドから出ると、多少ふらつきながらも立ち上がる。
ここまで鍛えてきたからか、前回よりも酷い傷にも関わらず結構しっかりとした足取りだ。

「どこに行こうと言うのだ怪我人っ！！大人しく寝ておれっ！」
「痛てッ！髪を引っ張んな！これ以上パーマ掛かったらどうしてくれんだよ！」

掛布を希美に掛け、ポゥをクリスト部屋に帰す為に小脇に抱えた空。
そんな空を止めるべく髪を引っ張ったレーメだったが、そこは体格差。止められる筈も無かった。

「行かせはせん、行かせはせんぞ～～！！」

「痛てて、もう着いたわ！！」

ポゥを帰しにクリスト部屋の前までやって来た空。その頭には、まだ髪を引っ張るレーメ。

「失礼しま一一ずがぶはッ！！？！」

「ぬわぁぁ！！？」

ソレを引きずったままで扉を開いた空の顔面に、ポゥ以外の四人の飛翔ユニットがぶつけられた……。

「…その、ご心配をお掛けして本当にすいませんでした」

いつぞやと同じく正座させられた空。その目の前の机の上には四人の少女。そして、巻き添えでユニットの直撃を受けたレーメが目を回して横たわっていた。

「全く…タツミ様は一体何度死線を彷徨えば気が済むんですか！そんなにダイ・〇ードしたいんですか？ジ〇ン・マクレーンを目指してるんですかっ！！」

「今回などはもう少し出血していれば確実に死んでいたんだぞ、タツミ？この世界では輸血なんて受けられないんだからな」

「ホントだよっ！アッキーのバーカっ！」

「……今のユニット投げの方がよっぽど危険」

「「「何か？」」」

「いえなんでもないです神剣は仕舞いましょう…」

ミゥとルゥ、ワゥにと続けざまにえらい剣幕で叱咤される。返す言

葉も無いとはこの事、ぐうの音も出ない。

「―うグッ!?!」

と、頬を描いていた空の首に何か細いモノが巻き付く。それを勢いよく引かれた為、彼は前につんのめってしまった。

「…アンタの死にたがりは今に始まった事じゃないから、別に私は咎めたりはしないわ……」

それは、今まで黙りこくっていたゼゥの神剣【夜魄】の柄尻から延びる鎖鉄球。

小さなナリでも神剣士は神剣士、それを使い空を引き寄せて眉間に刀を衝き付けたゼゥは、キッと鋭く睨んだ。

「だけどね…此処に居る皆はアンタにだって生きてて欲しいお人よしばっかりなのよ。…ミゥ姉様が、ルゥ姉様が、ポゥが、ワゥが…神剣士の皆が、学園の皆が……どれだけアンタを心配したか…」

それは、何となしに戯れている雰囲気の有った、今まで見せていたようなモノではない本物の怒りの表情。

「死にたいなら勝手に死ねばいいわ。でもね、そうなったら私は絶対にアンタを許さない。皆を裏切ったアンタを、絶対に…!!」

「……悪かった…だから……ゼゥ…」

珍しく空は心底からの謝罪を口にした。

「――…泣くな。そんな経験無いから、泣かれたら…どうしていいのか解らない…」

…ゼゥのその切れ長の強気な眦［まなじり］に、うっすらと涙すら浮かんでいたから。

――畜生、汚ねェ……目の前で女の子に泣かれたら…男が負けるしか無いだろ……

「――泣いてなんかないっ！アンタの見間違いよっ！」

ついっと顔を背けたゼゥ。鉄球が解け、解放される。

「だったらそれでいい…後な…」

「……っ」

空は背を向けたままのゼゥの頭にポンと左手を置き、ゆっくりと諭すように語りかけた。

「…今ので…鞭打ち起こした……二度とやるなよ…」

「「「「……」」」」

涙目を隠す為に上を向き、痛む首を摩りながら。

――自分自身が情け無ェのも頼り無ェのも当の昔に承知の上だったけど…コイツにまで心配かけちまう程だったとは。本当、どうしようも無いな、巽空って糞餓鬼は…

「……るな…」

俯くゼゥ、頬を染め、某か呟き――

「…まあ、なんだ。次からはそう心配掛けねェように鍛え直す。それで勘弁してくれ――」

――ザスッザスッ！

何か肉質のモノが裂かれる音が、二度響いた。

話しを終え、静謐に戻る境内。

「そんな事があったんですか……もしかしてその男の子が、時深さんの『今回の任務』の？」

「…ええ…」

青い少女の呟きに時深は静かに頷いた。フッと、陰りを帯びた笑顔で。

その表情に何か考える事があったのか、少女は手元の鎗剣に意識を集中する。

（…ねぇ、ゆーくん…時深さんの今の任務って何なのかな？）

【僕に聞かれても、ね…本人に聞くのが一番だろうけど…】

（…でも時深さん…何だか…）

憚った彼女が話題を変えようと口を開きかけた。その時だった。

「…ただでさえ厄介な任務だって言うのに…その上『最後の聖母』が侵入したなんてね。『私と一つに成りましょう、私のお腹の中で』って、アンタ一昔前の食事バトル参加者？『俺の○は宇宙だ』みた

いな？ハァ、嫌いなのよね、あの腹ペコ裸族…」
「【……」】
その、今までの雰囲気をぶち壊した台詞にもう一度言葉を失った。
「うん、どうしました？」
「い、いえ……何も」
――『哀しそう』。そう感じたのは幻だったのか、と。顔を伏せた。
「ところであの、その、あたしの任務の事なんですけど…」
「ええ、分かっていますよ。では行きましょうか、姉さん」
視線が向けられたそこに居たのは倉橋環。だが、妙に驚いた顔をしている。
「…時深が約束した時間を違えないなんて…何か有ったのですか？」
「…ご挨拶ですね、姉さん…私は『【時詠】のトキミ』ですよ？時間程度幾らでも巻き戻……こほん、それはいいとして…『あの方』には知らせるんですか？」
何か重大な事を口走りそうに成った時深はわざとらしく話しを逸らした。
「馬鹿な事を言うんじゃありません、時深。そんな事をしてみなさい、『アタシの家に土足で上がり込むなんて良い度胸してんじゃないぎゃらっしゃーー！！』と単身突っ込んでいくに決まっているでしょう？」
「それもそうですね」

それに、冷静ながらも妙に熱の篭った口調で答えた環。

（【……姉妹だ）】

少女と鎗剣は全く同一の思考を行った。

言葉の後に時深が歩み出る。その袖を少女が引いた。振り向けば、申し訳無さ気に俯いた姿が在る。

「…ごめんなさい。あたしもお手伝い出来たら良かったんですけど…」

「始めてこの『エト＝カ＝リファ』に入って来た者は誰でもそうなります。それがこの時間樹の絶対律［ルール］『神名』ですから。それに、貴女のくれた情報であの女が来ている事が分かったんですよ？むしろ感謝しています」

「でも、あたしに…『最後の聖母』と戦えるだけのチカラが有れば…」

そんな彼女の頭に、ポン、と時深の右手が置かれた。その指が優しく青銀の髪を梳く。

「…よく立ち向かわずに逃げてきましたね。本当に…貴女に何も無くて良かった…しばらくは此処で養生しなさい」

「あ……えへへ…」

屈託の無い笑顔。先程話した少年とは正反対。育ちの差だろうと、時深は理解した。

――そうね。それも…良いのかもしれない…。

一体どんな化学反応を起こすのだろうか。想像して少し楽しみに、そして恐ろしくなった。

ズキリと。あの『傷痕』が疼く。未だ癒えぬ――いや、魂に刻まれたのだから二度と癒えぬ傷痕が。

――この傷を受けて、未来視は完全に潰された。今は何一つ見えない。かく言うこの少女も、事前に見た限りではもう少し遅い登場であり此処で私とは出逢わない筈だった。突然倒れそうな状態で現れた時は胆を冷やしたモノだ。

狂い回った轍［わだち］。そう、未来が分からないという『普通』に成った。

……恐らくは『奴』の思惑通りに。

…それは今より千年の昔、『倉橋時深』と言う戦巫女の少女が何より望んだ平穏だった。

しかし今、それは完全な弱体化。失ってはならないモノだったのに。誰かを、護りたいなら――

「…『門』を開きます。離れていなさい、『【悠久】のユーフォリア』」

思いを振り切り、毅然と言い放つ時深。そこに在るのは、少女の最も良く知る『先達』としての顔をした『永遠者［エターナル］』の姿。

「――はい！」

その元気の良い返事に微笑み返して、彼女は腰下の密教法具を思わせる短剣…永遠神剣【時詠】を抜き放った――…

「……テメ黒チビ助ェェッ！！人の掌に人工の神秘十字刻むなんざどういう了見だァァッ！！幽霊とかオーラが見える様に成ったらどうしてくれんだよ！？霊能力者と俺に謝れ！！っつーか結構傷が深い！！」

「煩い煩い煩ーーいっ！誰がアンタみたいなデクの棒の心配なんかするかっ！勝手に誤解するな人を子供扱いするな気安く私の髪に触るなぁーーっ！！」

ぱぴゅーと血が吹き出す掌を抑える空。それに向けて【夜魄】の鉄球を振り回すゼゥ。

…眉間、人中、鳩尾、丹田、○的。それは飛び掛かる蛇の鎌首のように、空の急所ばかりを狙う。

「こ、こらゼゥ！止めなさいっ！！」

止めに入ったミゥの制止も聞かない。だが奇襲でなければ当たりはしないとばかりに素早い回避を見せる空に尚一層躍起になって振り回し続ける。

羽交い締めされていると言うのに、手首のスナップだけで見事な操作だ。

「…やれやれ、だな」

「だねー」

ルゥの呟きにワゥが笑う。室内は殺伐としながらほんわかと。何と

も言えぬ空気に包まれた……

The 27th Name…"宵風"

宵の街。グルン＝ドレアス制圧からもう六日経っているが、未だに解放の興奮は覚めやらぬらしく街は活気に溢れている。
壊れた施設の修復等は後回し。篝火の焚かれた通りに溢れた人々は酒を浴びながら口々に新たな王の名を讃える。『カティマ＝アイギアス女王陛下万歳』と。
後二日はこの祭じみた祭宴は続くのではないだろうか。

その人波の中を、黒の外套を纏う少年が歩いている。猫毛の天然パーマに糸目。そう、巽空その人。彼は他の『天使』とは違い、顔を知られていない。故にこうして大通りを堂々と歩いても気に留められる事も無い。

「くふふ、まるで花電車みたいな街並みどすなぁ。これはこれで死出の旅路の手向けのようでぇ…」

と、空の真横に幽月が顕現した。この日の髪色は薄墨を流した様に艶やかな濡れ羽烏色。空の腕に気安く抱き着きながら周囲を見遣る。

「…何だ、今日は最初から物質化してんのかよ」
「ああ、その事でお伝えする事がありんす」

と、パッと手を離すと数歩先に歩み出る。高下駄がカラコロと鳴り、着物の袖と裾が舞う。

「旦那はんは今回で記念すべき五十本目の神剣を収めあんした。御蔭さんでわっちのチカラも元の一割程には回復！これからは実体化してお手伝いさせて頂きますえ～！」

余程嬉しいのかクルクルと回る幽月。振り回す袖は時折通行人に当たり、迷惑そうな顔をされている。
空は一一

「そうか」
「って一言?!旦那はんの一一ひゃふ!?」

道端で大声を出しかけた幽月を、空は路地の暗がりに引き込む。目立つ事を避ける、最早習性と成りつつ有る行為だ。

「やぁん、旦那はんだ・い・た・ん♪」
「ほざけ。ッたく…コッチは今からの事考えると胃が引き攣れそうだってのに…」

ふざける相方に片目を開いて威嚇を向ける。しかし全く悪びれないその姿にハァ、と溜息を落として天を見遣る少年。

「一一貰ったは良いが、アイツが従うかが問題だな。そして俺にアレが出来るかも…」
「へぇ?迷う必要なんざ有らしませんやないの旦那はん。どのみちわっちの腹の中に収まるんどすからぁ」

コロコロと笑う幽月。月影を浴びて煌めく髪と瞳。
その眼差しには待ち侘びた獲物を食い荒らす事への歓喜が見て取れる。嗜虐に充ちた視線は毒々しいまでの虹色。

「一一はぁ?トチ狂ってんじゃねェよカラ銃。アレは俺のモンだ。テメェに喰わせてやる義理は無ェよ」

事もなげに言い放たれたその言葉。それに幽月の眼差しが細められる。

「…旦那はん、『契約』を忘れあんしたかぁ？この【無銘】及び【無銘】の創り出した贋物によって得た神剣その他は全部この【無銘】のモンどすぇ？それとも…『契約』を破るお積りで？」

物分かりの悪い子供に諭すかのような一一それでいて氷点を下回る温度の無い声色。

それに空は一一口角を吊り上げて嗤う。

「そりゃあそうだ。だが、【夜燭】は【無銘】やその創った贋物で倒して奪ったモンじゃねェよな？『姫さんが倒して、俺がダラバから譲られたモノ』だろ？」

「一一……！！」

同時に彼の米噛に【無銘】が衝き付けられた。撃鉄は既に熾されている。弾丸が装填されていれば、空は脳漿を撒き散らして死ぬ事と成ろう。

一一幽月の身から立ち上る漆黒の霧。空間すら喰らう悪逆の翳［かげり］。

遍［あまね］く幻実［げんじつ］を貪る『穢れ』そのもの。命を弄び肉体を乗り換える事で、不実ながらも『永遠』を体現する彼女の本質だ。

「…どうした？撃たねェのかよ？」

「……」

「撃つなら一撃で決めろよ？殺す時は一撃で殺さなきゃ反撃が来るぜ？追い詰められりゃ、鼠だって猫を噛むんだからな…」

ギリ、と幽月の歯が鳴る。全く動じないその少年の不遜な態度に。
猛禽の眼をした少年の外套の下で番えられ、己の鳩尾に衝き付けられた【無銘】の感覚に。

そして二人は同時に一一引き鉄を引いた。

一一一カキン

結果はどちらもカラ。それもそうだろう。事は契約解除云々の話ではない。
幽月にとって此処で撃つ事は理屈での敗北を自ら認めた事になり、空はそもそも幽月が不滅だという事くらい解っている。相撃ちすら出来ない事を。

「……く、くふふ……よござんしょ…今回はわっちの負けで我慢したりますぅ……けどぉ……」

おどけた物言いで彼女は【無銘】を袖内に納めた。その袖で口許を隠して笑う。

「一一覚えときなんし…二度目は有らしませんえ?」

ただ、その呪い殺さんばかりに憎悪を篭めた視線。性悪な爬虫類を思わせるそれを隠さず空にぶつける。

「…失望させんなよ。俺の傘下なら安い捨て台詞なんざ吐くな」

それにすら不遜な視線と軽口を返した空に舌打ち、幽月は夜闇に霞んでいった。

「……さて、本番はこれからか…」

呟き見上げる城郭。彼は外套のフードを被ると、手元の鎖を構えた。

深遠に沈んだ庭園の真ん中。夜風に吹かれ、望月の白虹を浴びて【夜燭】は黒耀石めいた煌めきを返している。

「…よぉ、【夜燭】」

その剣に向けて軽く声を掛け、空はその剣に迷う事無く歩み寄る。

――刹那、雷の獣が顕現した。

「…よぉ、『レストアス』」

その獣に向けても、空は軽く声を掛けた。

「――━┓┗├┗┘┴╋╋┣━┐┳┫!!!」

それに判別不能な、雷音に似た鳴き声と稲妻を持って威嚇するレストアス。

――認めない。お前が主だとは認めない。そう叫ぶ様に。

確かに【夜燭】は譲られた。だが、『レストアス』は譲られていない。コイツもそれは理解しているらしい。

「お前のチカラはダラバとの戦いで身に染みてる。俺の求める事は

単純、そんなお前を俺の傘下に加えたい。ただし、それは『魂の誓約』じゃなくて『利益の追求』だ」

「……？」

「俺の求めを受け入れる換わりにお前の求めも受け入れる。詰まりは等価交換ーー」

スッと差し出された、包帯の巻かれた左手。それを見詰め不思議そうに頚…と思われる部位を捻るレストアス。三対の金眼が戸惑っているようにも見えた。

そんなレストアスに、空は呼び掛ける。

「ーー共に来い、レストアス。俺の目的の為にお前のチカラを遣わせろ。換わりに、お前の目的の為に俺のチカラを遣わせてやる」

「ーー…！！」

月下に炯々と煌めく猛禽の三白眼、その傲慢とも言える物言い。だが、それにレストアスは安堵を覚えた。

…確かな寄る辺。何があっても揺るがない意志。『確たる自我』を持たないレストアスは、その側に居る事で始めて安寧を感じる。持ち主を失った今、その心は際限の無い不安に苛まれ続けていたのだろう。

ゆっくりと掌が伸ばされる。蒼く帯電する雷獣の抱く剣に向けて。レストアスもまた、その掌を見詰める。その男は知っているはずだ、もし認められざる者が自分に触れればどうなるかなど。それを知った上で、この剣を掴み取る事が出来るのかと。

そしてそれはーーー何一つ迷わずにレストアスの躯に触れた。

冷たい水の感触、しかしサラリとした粘性の無いスライムの様にも思えるレストアスの躯。掌が水分に濡れる事は無い。

遂に掌が【夜燭】を番える。次いで右手が掛かり、地から引き抜き肩に担ぐ。

――なんて重い刃。契約していないからというだけでは無い。この刃にはあの男の人生が詰まっている。

その刃を引き継いだ。責任は重い。その重さが、この重さ。

「――『盟約』は成立。歓迎しよう、レストアス。立ち塞がる総てを斬り伏せて……共に往［ゆ］こう」

「……┫━┣┫━┛ ┳┓」

月下にて交わされたその盟約。白虹に、夜闇に祝福されて。彼は『剣神の刃』と手を携えた。

噴水の縁石に彼は腰を降ろす。【夜燭】を隣に立て掛けて真円の月を眺めながら、安堵の溜息を吐いた。

「……お見事」

「――あ…姫さん。どうも…失礼してます」

そんな彼に声を掛けたのは、カティマ。その手には【心神】。

だが、いつもの鎧姿ではなく落ち着いた色合いの服を着ている。

「何やら【心神】が騒ぐので遣って来てみたのですが…佳いモノを

見れました」
「…あ～……」

空はバツが悪そうに頭を掻いた。あんな小っ恥かしい台詞を吐いたのを人に見られていたのかと。

「しかし巽、どうやって城内に?見張りを通せば我々に話が来てもいい筈ですが…?」
「ハハ、暗殺者［アサシン］舐めちゃいけませんよ。あのくらいなら手負いでも潜り抜けられます」
「そうですか…警備体制を見直す必要が有りますね。次は捕らえて見せましょう」

他愛もない（?）会話。だがそれももう少しのモノかと、彼は少しだけ感傷を覚えた。

ダラバが討たれ、黒幕のエヴォリアが去った今、この世界に彼らが留まる必要は無い。
本来ならばもう去っていても良い筈。物部学園一同がそれを先伸ばしにしたのは、ものべーのマスターである希美に空の傷の治療に専念して貰う為だった。

その手が腰元のホルダーを漁る。取り出したのは、琥珀色の飴玉。
この世界のモノではなく、元々の世界の品だ。

「これは…飴玉ですか?…綺麗…まるで宝石のよう…」
「好物なんです。どうぞ」

それを自分の分ともう一つ、カティマに差し出す。
包みを解いて含み、頬張る。しばらくそうして沈黙が続いたが、不

意に。

「…傷はもう良いのですか？」
「はい、希美とポゥのお陰で…」
「皆心配していたのですよ？少しは自愛してください」

夜風がそよぐ。月煌を浴びて美しく靡く金の髪。既視感を感じつつ、空は口を開く。

「はは…いやもう懲罰なら受けました。望とソルラスカにミゥさんルゥさん。ゼゥとワゥには一発ずつぶん殴られましたし、会長とタリアさんと椿先生にはネチネチネチネチ合計４時間小言聞かされましたし希美は一言も口聞いてくれませんし身の回りのモノは何の前触れも無くイミネントウォーヘッドしてきますしもう反省しきりですよははは…」
「そ、そうですか…」

一呼吸の間に全て言い切って、ひゅーひゅーと鳴らない口笛を吹きながら乾いた笑いを漏らす。淀んだ瞳は随分と憔悴しているようだった。

沈黙が場を支配する。月に群雲が掛かり、大地に深遠が降る。

「…巽。貴方が目覚めたという事は…行かれてしまうのですね？」
「…はい。明日準備して、明後日の朝に発ちます」
「では、最後の機会ですね。無理を承知でお願いします。巽、この世界の未来の為…この世界に残って頂けませんか？」

その下で、静かに言葉が交わされた。片膝を衝いて地に【夜燭】を衝き立てた空は、深く頭を垂れて言葉を紡ぐ。

「元々我々は局外者。この世界に干渉するのはルール違反です。ですから…暇乞［いとまご］いに参りました、アイギアス女王陛下」
「……」
『アイギアス女王陛下』。その言葉に彼女は少し、悲痛な顔をした。今まで彼が使っていた『姫さん』とは違い、それに情などは篭っていない。紛う事無き家臣としての物言い。
――だが、彼女は王者。臣下が王に謁見したいと申し出たのならば応えぬ訳にはいかない。毅然とその正面に立ち、【心神】を臣の片口に当て――斬心を示した。
「――柵［しがらみ］は断ち斬った。これにてそなたの翼は自由。……この様な不甲斐無い私によく仕えてくれましたね。大義であった…」
「…いえ、私こそ…貴女のような真の王者に仕える事が出来た事を今生の誉れとします」
更に深く、空は頭を下げた。最後に【無銘】を抜き、撃鉄を額に当てて仁義を通した。
「風の如き貴方には、自由こそが良く似合う。……迷わずに、その壱志［いじ］を貫き通しなさい。それが一時の主よりの、最後の下知です、『【無銘】のタツミ』」
「承りました、陛下……」
『――貴方は何故、戦うのですか『ξμδιβγδξλαδ
『それは…まぁその、恥ずかしながら『εικξμβγδξλαδ

λ』から…です。アケロ様』
『そうですか、お互い道は果てしなく遠いようですね……私も、何れは……あの方に……』

――刹那、幻視した過去の風景。
神代の古に交わした言葉。しかしそれは擦り切れた映画のように肝心な部分だけノイズが走り、思い出せない。俺は…『オレ』は何て答えたんだったか……

「…では、これにて。良い夜を…」

携帯の時計機能で時間を確認し、立ち上がる。傍らの【夜燭】を担ぎ上げ――

「……礼と言っては何ですが…手伝いましょうか、巽？」
「……すみません……気合い入れてる時はイケたんですけど…まだ俺病み上がりでした…」

――られずに。結局カティマに運んで貰う事になったのだった。

The Nameless ?・・・"ムメイノウタ?"

荘厳な『銀の門』が開く。歩み出、金の目を開いた彼は天を見上げた。

紅と蒼の狭間の空の下。久方振りに龍鎧の黒騎士が訪れたそこには――

「おんやぁ～、『刃皇』はんやありんせんかぁ～♪」

先客が居た。まるで它［へび］の様にしどけなく寝そべった、和装の女。雅な漆塗りの杯を片手に、手酌で酒を呑［や］っている。

――世界樹の根元には木の根をかじる它がいて、枝に泊まる禽［とり］と、栗鼠［りす］を通じて悪口雑言を吐き合っているという。

文字通りの『ウワバミ』かと。騎士は苦笑した。

「随分と御機嫌な様だな」

「ええ～、そりゃもう～！」

笑い、手にしている杯を煽る。なみなみと注がれていた甘露は、瞬く間に彼女の腹の内へと収まった。

「くっふふ～！第一段階は終了。やっとこ数打ち程度の切れ味は出てきあんしたぁ…」

徳利から酒を注ぎ、更に一献。

「あの世界でぇ、わっちの助けも最小限に戦い貫き生き残りぃ…」

目を閉じ、くつくつと喉で笑い始める。傾けた徳利から酒が流れないのが、実に愉快そうに。

「一一調子こきやがってあの糞餓鬼ャあ、このわっちを嵌めよったんどすわぁ！！！」

吠える。蛇眼を虹色に煌めかせながら、木の幹に叩き付けられた徳利が砕け散った。

「…クク……」

「…何が可笑しいんどすか！」

笑い声を上げた『刃皇』。厳しい視線を向ける幽月。憎しみに充たされた眼差し。その身より沸き立つ不浄の翳［かげり］。

「…可笑しいとも。人間の身で、智慧で。『神』を欺いたのだからな…」

「……」

「神縛の裏を掻く機転…その斬れ味…まずまずの『刃』に仕上がっている様ではないか。ただ使われるだけの刃ではこちらとしても詰まらぬからな…」

腰に提げた鍵束。一つ一つが違う形状の『刃』を持つ鍵。

「…ええまぁ。ようやっと、あのウザったらしい負け犬根性が抜けて来あんしたからぁ。ホンマ、何遍死なせかけたか判らしませんわ」

幽月は新たな徳利から酒を注ぐ。既に怒りは無い。一度発散してス

ッキリしたようだ。

――それが、彼女の目的。全くと言っていい程手を貸さなかったのはただその為。

「…しっかしぃ、そないに執着する程の遣い手どすかぁ？戦闘技術は未だ未熟、マナ操作も出来ひん。人望も皆無、男ぶりも中の下くらい。叶う事なら誰か他に変えたいくらいどすわぁ」

「フ…三千世界の何処を捜しても、アレと代替可能なモノなど無い。アレを見出す為に我［オレ］が一体どれだけの蠱毒［こどく］を重ねたと思っている？」

天を仰ぎ、愉しげにフルフェイスの洋兜の口許に手を遣る。尖った爪先が、ソレに喰い込み――掻き砕いた。

「――忌ま忌ましい【弥縫】の封神［ほうしん］を施されて幾星霜……奴のチカラのみは対たる【破綻】には破れん。封の隙間から漏れ出すチカラしか振るえぬ不様に堪えながら、漸く可能性の大海より引き当てた『鍵』だ……失敗など許しはせぬ」

――僅かに覗いたその顔容［かんばせ］。研ぎ澄まされた大業物の刀剣の様に怜悧な、白皙の青年。幽月など霞む程の怒りと憎しみに充たされた、くすみきった金色の眼差し。

だがそれも直ぐに覆い隠された。砕けた兜は瞬く間に再生し、また青年を包み込む。

この鎧は、身を護る為のモノ等ではない。包み込んだ相手が、外界に影響する事を防ぐ為の対神封印。

それを確認し、騎士は幽月へと向き直る。視線はいつもの沈着を取

り戻していた。

「引き続き完璧に仕上げろ。良いな、どちらでも無いモノを創り上げろ。…この『刃皇』に相応しい…刃にな」

語りかけ開かれたままだった門の内に消えていく『刃皇』。その背に応える声が一一。

「くふふ、合点一一」

「一一面白そうじゃねェか。『オレ』にも一枚噛ませてくんねェかい、『刃皇』さんとやら?」

二つ、掛かった一一……

The 28th Name・・・"旅立ち"

昼下がりの郊外の森の中。普段は静かなその森だが、今は巨大な神の舟『ものべー』が鎮座している。
そのものべーに向かって人の列。物資の搬入を行う学生達だ。

「別にー。わたしは望ちゃんが居なくたって困らないし」
「俺は希美が居なくなったらむしろ楽になるかな。鬱陶しく付き纏われる事も無いし」
「何をー！誰が望ちゃんなんかを付け回すかー！」

そんな列の直ぐ近くでは、望と希美が何やら口論している。だがそれは不仲からではなく戯れ合いだ。
『家でやれ家で！』と、通りすがった生徒達は思いを一つにした。

「さっさと荷物を積み込まないと出発出来ないってのにあの二人は……びしっと言っちゃってよ巽くん」
「…なぁ巽、お前いつもあんなの見せ付けられてたのか？」

呆れ果てたように美里と信助が、『再製』した中華風の武道着に身を包んだ空に向けて呟く。三人手には各々木箱が載っている。

「莫迦言ってんじゃねェよ…」

その問い掛けに、空は遠い目をした。それはそう、所謂一つのトラウマスイッチ。

「一一小学生の頃は、あの程度じゃ無かったぜ……あの五倍強、いや、六倍…」

「……分かった、悪かったよ巽…」
「大丈夫、いつかきっと良い事あるわよ…」
気配を察した二人に慰められながら、働き蟻の列は続いて行った。

空が単独で荷物を取りに向かった後、望達の前にカティマとクロムウェイが現れた。
多忙な筈の女王の登場に面食らった一同だったが、それが別れの挨拶だという事は直ぐに理解した。
途中で沙月も合流し、共に戦った仲間との別れを皆で惜しむ。神剣士も、一般の生徒である信助や美里も。

「それでは皆さん、お元気で」
「絶対遊びに来るからね！」
「さようなら、カティマさん！」

立ち去るカティマ達に声が掛かる。ソレに応えて彼女らは手を振り、カティマとクロムウェイ、そして彼女に『途中まで見送ってほしい』と告げられた望が歩き出した。

森の拓けた所、その小さな広場に積まれた荷物の山。大分総量を減らしたが、まだ結構な数が残っていた。

「一一巽殿ですか？」

「一一はい？あ、クロムウェイさん…」

特に重い食糧品を運ぼうとしていた所を呼び掛けられ、空は間の抜けた返事を返した。

「何故貴方が荷運びを…？怪我の方は良いのですか？」

「…ア、アハハ……仕様です…」

尤［もっと］もなクロムウェイの言葉に、空は苦笑して茶を濁す。

それで大体を察したのだろう、クロムウェイも苦笑を見せた。

「ちゃんと働いてないと上司にイビられるもので。そう思うと、いっそこの世界に永住しようかなんて思いますよ」

「では、陛下の申し出を蹴ったのは惜しい事をしましたね」

「まったくですね」

これが恐らく、この人物と交わす今生で最後の言葉となる。空もクロムウェイもそれが判っていた。

だから、今までしなかった様な軽口で話す。

「あぁ…そういえば、外套を借りたままでした」

「構いません、お持ちください。大した価値など有りませんが、私からのせめてもの御礼です」

それが、同じ主に仕えて共に戦った戦友同士の在り方だと感じたからだ。

「…解りました。有り難く、頂戴します…」

頭を下げる空。本当に頭の下がる思いだった。彼はこの後のこの世

界でも、きっと立派な将になるだろう。

「大事に使わせて頂きます、クロムウェイさん…」

――俺には到底真似できない。本当に凄い人だ……。

そうして尽きない名残を振り払い、別れた。その暫く先で、空の目の前にカティマが現れた。

「…あ、巽…」

「姫さ…陛下。どうして…」

『こんな所に居るんですか?』と聞く前に気付く。クロムウェイと逢った時点で気付くべきだったのだろうが、皆に別れを言った後の帰り道がかち合う方向だったのだ。

だが、様子がおかしい。随分思い悩んでいるようだ。

「――巽。一つ宜しいでしょうか」

決意を篭めた視線に、自然彼は背筋を伸ばした。カティマの両手が空の肩に掛かり――

「……難攻不落の城が有ります」

そう、告げた。

「……はぁ、難攻不落ですか……？」
「はい、難攻不落です。今までに経験したどんな城塞よりも。その攻略法で巽の知恵を借りたいのですが…」
あまりと言えばあまりに突拍子の無い台詞に、空は面食らう。
――さて、どうしたものか。そりゃあまだ北部にはグルン＝ドラスに与していた諸侯の勢力が在るというが、その事だろうか――
組んだ腕、その左手の親指を眉間に当てて思考する。
「…それじゃあ、これは俺の世界の昔話なんですけど――……」
静かに提案する空。彼は知らない。これが、大変な事態を齎［もたら］す事を――
「成る程…参考に成りました。有難うございます」
「いえ、こんな事でしか役に立てない駄目人間ですから…」
「またそんな事を…巽は充分に立派です。…まあ、向こう見ずな点と仲間を頼らない点を除けば、ですが」
「…耳が痛いです」
ポリポリと耳の後ろを掻いて苦笑する。それに応え、彼女も微笑んだのだった。
「…巽。それでは……また」
『また』。その言葉に、再度感傷を呼び起こされる。もう二度と逢

う事も無いだろう、だからそれは嘘になる。

「…陛下…『それでは』…」

だから、彼はそう告げた。彼の矜持が、ソレを許さなかった。

――静かに離れてゆく二人。これが、異空の『剣の世界』での物語の幕引きだった

ものべーが浮上していく。始めは途方にくれたその風景も、こうなれば名残となる。

皆同じ事を考えているのだろう、窓という窓から幾つもの瞳が、朝陽の昇る世界を見詰めていた。

神剣士達とて同じ、生徒会室に集結した一同は全員学生服姿だ。望に希美、沙月、空…そしてソルラスカとタリアも。

「なんか騒がしくないか？あ。あれ…アイギアの人達か…？」

望の呟きに、全員がそちらに目を向けた。そこには確かに、ものべーに向かって駆けて来る人影。

大勢の騎士、街の者達。

「どれどれ…そうみたいね。馬に乗って追い掛けて来てる…」

かっちりと制服を着た優等生然としたタリアの言う通り、手を振り何かを叫びながらものべーに向かって馬を駆けさせている先頭の騎士達。
見間違えようも無い、それはヨトハ村から共に戦い続けた姫君の忠臣達だった。

「私達にお別れしてくれてるのかな？」
「こっちに向かって叫んでるし、そうじゃないかしら」
「へへ、なんかこそばゆいぜ」

詰め襟の制服を第二釦［ボタン］まで寛げた、不良くさい恰好のソルラスカが鼻を掻いた。
口々に照れと、万感の思いを込めた言葉を紡ぐ一同。追い縋る者達はまだ叫び続けているようだが、どんどん遠くなり、やがて――

「…ああ、もう見えなくなっちゃった」

希美が漏らした言葉に、全員が何とも言えぬ溜息を漏らす。恐らくは永遠となるその別れに。

「…アレは本当に、見送りだったのかな」
「…俺もそう思う。何て言うか、この世界に来て培った第六感が『悪い事が起きる』って告げてる気がする…」

ただ、望と空は納得していないようだったが。

その時、扉が開く。そこから現れたのは、レーメに率いられたクリスト達。

「さて、連れて来たぞ天パ。吾に小間使いの様な真似をさせおって、一体なんだと言うのだ？」

部屋の中央に在るテーブルのうえにならぶ。先ずレーメが不服そうに吠えた。

「ああ、ちょっと此処ではっきりさせとかなきゃならない事があってな」

それに糸目を向け、空は棚に置かれていたノートを取った。その題名は『食糧帳簿』。それを沙月に渡す。

不審げにそれを受け取った沙月だったが、中身を確かめるや眉をひそめた。

「…ちょっと巽くん、何よこれ？今回の補給が無かったら真っ赤じゃない。ちゃんと節約しなさいって言ってるでしょ？」

「してますよ。してましたよ、今までも。ですけどどうやら『鼠』が居るようでしてね」

「「「「「…鼠？」」」」」

理不尽な怒りを受け、空は不快そうに頭を掻きながらレーメに視線を戻した。それに彼女は、そっぽを向いてぴーぴーと口笛を吹く。

「えっと、まさかとは思うけど空…それって…」

「ああ、そのまさかだよ持ち主［のぞむ］」

「な、何を言うか！吾がそんな事をするかっ！」

途端に憤慨する。だが望は胡散臭そうに見詰めるだけ。随分良好な信頼関係のようだ。

「ならば証拠を見せてみよ！吾がやったという、動かしようの無い証拠をな！」

ビシリと空を指差して強気に出る。それを受けた空は、ポケットからスッと携帯電話を取り出した。

『…ふっふっふ、潜入完了。天パめ、まさか換気口を通って侵入できるとは夢にも思っておらんかったようだな…』

「《ー ー！！！？！？」》

それを弄ると、流れ始めた声。刹那に顔色を変えたレーメと一一

『さてと、それでは何から頂くか…よしワゥ、手を貸すのだ！』

『オッケー！！食っべるぞーー！！』

《《《《《……》》》》》

クリスト＝ワゥ。ルゥが頭を抑え、ポゥが慌て、ゼゥが無視し、ミゥがゆっくりとワゥの方を向いた。表情は窺えないが、その身からはオーラフォトンの煌めきが漏れている。ワゥは震えて泣きそうな顔をしていた。

『うーむ、この薫製肉の味わいは堪らんなー…何か飲み物はないか？』

『お菓子甘ーい！美味しー！』

その間にもスピーカーからは彼女らの犯行が委細漏らさずに伝えられる。これではぐぅの音も出まい。

「携帯には録音機能も付いてんだよ。で、この鼠共にどうやって罰

くれてやろうかと思ったんですが」
「…キツイのくれてやってください沙月先輩」
「な、ノゾム?!この鬼畜めー！」
『お、何だこのどでかい木箱は。何が入っておるのだろうな』
『きっとおっきなお肉だよー！』

流れ続けるスピーカーから、ゴンゴンと叩く音。この携帯が置かれていた木箱だからだ。続き――

『後少しの辛抱、せめてものべー殿が飛び立つ迄は隠れていなければ…』

……場を、静寂が包んだ。

――ピッ。ピッピッ……

その静寂の中では、操作音がやけに大きく響く。

『お、何だこのどでかい木箱は。何が入っておるのだろうな』
『きっとおっきなお肉だよー！』
『後少しの辛抱、せめてものべー殿が飛び立つ迄は隠れていなければ…』

――ピッ。ピッピッ……

『お、何だこのどでかい木箱は。何が入って――』
「もう止めて巽くん。十分聞いたからそれ以上巻き戻さないで」

そこで押し止められる。沙月だった。疲れ果てた顔で。

「いやッ俺ッどうも耳遠くなったみたいでッ！」

だが認めたくないのは彼も一緒。何かの間違いであれと。可能性に賭ける。

「止めなさい！これ以上現実を衝き付けないでッ！」

沙月は頭を抑えている。他の神剣士も、皆苦笑いを浮かべていた……。

食糧庫に集まった一同。その中央には――現アイギア国女王カティマ＝アイギアスの姿があった。

「――で、後事はクロムウェイさん達に任せて此処に来たと…そういう事なのね？」

「…はい…」

叱られた子供のようにうなだれ――事実叱られている訳だが――彼女はその経緯を説明した。

クロムウェイに悩みを打ち明けた事、彼は『この広い世界を見て、その心のままに、力を貸すのも良いでしょう』と告げたという。結果彼女は、この道を選択したのだ。

「一人でじっくり考えたのです。望達は見ず知らずの私達の為にチカラを貸してくれた。それなのに私ときたら、何もその恩に報いていない……だから、報いる方法は無いかと考えました」

そこまで言うと彼女は木箱の中から【心神】を取り出した。それを抱え、宣言する。

「私は…恩を返したいのです！どうかこの剣のチカラを望達の為に振るわせて下さいっ！」

強い意志を燈した瞳…それを望に向け、カティマは許しを待つ。

「カティマさんっ！」

「カティマ…ありがとう。行こう、俺達と一緒に！」

誰も、異論など無い。皆静かに頷くのみ。

抱き着いてきた希美を抱き留め、カティマは嬉しそうに。

「皆さん…これからも宜しくお願いします！！」

極上の笑顔で、そう告げたのだった。

カティマに専用の部屋を宛がい、そこに向かう途中で。徐［おもむろ］に沙月が問うた。

「…ところでカティマさん。どうして食糧に紛れ込んでたの？」

至極真っ当な疑問。彼女はこういう搦手は苦手そうに思えるからだ。

「はい、『トロイの木馬』策戦です」

それに胸を張って答えたカティマ。

「…へぇ、『トロイの木馬』策戦ねぇ…」

ジロリと沙月が振り返る。その視線の先には、離れて行こうとしていた空の姿。

「ちょっと、どこ行くの巽くん。私、君に尋ねたい事が有るんだけど?」

「いやちょっと…用事を思い出しまして」

そこをケイロンのラリアットでブン戻されて、吊られたままで彼は会話する。

「あ〜ら凄い汗ね。それに顔真っ青よ?」

…それは確かに、自分の策で潜入を許したという事も有る。だが実際一番の理由は絞まり続ける剛腕の所為だ。これを機に止めを差す気なのかも知れない。

「…な、何でもないですケロ?」

「何でもあるでしょう?噛むくらい焦ってるじゃない。蛙に成るくらいテンパってるじゃない?」

沙月の目が三日月状に歪む。嗜虐に充ちた眼差し。ケイロンの腕に更に力が篭る。遂には気道を圧迫し始めた。

よかれと思って授けた策が文字通り自分の頚を絞める結果となり、何だか彼はもう総てがどうでも良くなってきた。

――もう二度と、人に策なんて預けるもんか……

薄れゆく意識の中、そう誓った空だった。

米粒よりも小さな神の舟が、朝陽の空［うみ］を泳いでいく。ヨトハ村の神木の元に置かれた無名の碑。二つ並んだその碑は旅立つ少年少女達を祝福するように――燦々と濯ぐ木漏れ日を浴びていた――……

The Other Name ?・・・"精霊の娘"

ギャアギャアと不可思議な鳥の鳴き声が木霊する夜の密林。
そこで一一一本の大木が倒れた。

「で、出たぁぁぁっ！！！」

続き、男性の声。その緊迫した声色に総てを察し、男達は武器を構えた。

数多くの篝火に照らされたその視線の先に居るのは一一火影により面容の見えない枝上の少女。
見える衣服は白妙に緋袴。だがその袴はあくまで腰布のように着崩されており、巫女ではない事を如実に表す。彼女は一一

「…性懲りもなくまた来たなぁっ！今日という今日は許さないぞっ！」

ビシリと指差し宣言すると跳躍し、ビル三階分は有ろうかという高みから迷わず飛び降りながら空中で印を結ぶ。
現れる青い、清澄なる水を思わせる精霊光の魔法陣。
詰まりは彼女もまた、間違いなく『神剣』の遣い手だ。

「押し包め、いくら奴でもこの人数なら一一」

武器を衝き出しながら、着地点を狙う数十人もの男達。
だが、物の数ではない。彼女の足には、青い煌めきを纏う靴。それを蹴り出した。

「いくよっ！！じっちゃーーん！！」
「オオオオォォォォォッッ！！」

そしてその背後に、巨大な――否、長大な大蛇［おろち］。

――どぉぉぉーーーん……

爆音が轟き、男達はほうほうの体で逃げ出していく。

「ふふーん、正義は必ず勝つんだい！」

それを見ながら、彼女は満足げに呟く。
衝撃波と氷晶により篝火は消えており、彼女の姿は判然としない。
ただ、その代わりに月光が彼女を闇夜に照らし出した。

長い黒髪を赤い布で一つに結わえたその姿を。

「…ん？これは…あいつらが落としてった荷物かな？――あっ、食べ物！お団子だぁ！」

漁っていた荷物の中から油紙に包まれたそれを見付け、破顔する。
まだあどけないとすら言える程に幼い笑顔。

「じっちゃ～ん、食べる～？」

その内の一本を掴み、ぶんぶんと振り回す。タレの掛かっているモノだったのならば大変な事になっていただろう。

「…ふふ、ワシにはちと小さ過ぎる。全部お前がお食べ…」

深い慈愛に充ちた瞳でそれを見詰めながら、彼は天を見上げる。真円の月を真っ二つに割った片割れの如き半月は、下弦。透き通った煌めきの中、大蛇は身をくねらせた。

「佳き月よ…今日は静かな月見が出来そうだのう…酒が欲しゅうなる」

「ボクはお団子が有ればいいや」

モグモグと団子を頬張りながら、少女はいつの間にかその直ぐ近くの枝に腰掛けていた。残りは膝の上に置かれている。

「酒の味は子供には解らんさ」

「何さー！ボクはもう大人だよー！」

不満そうに唇を尖らせ、少女は食べ終えた串をぽいっと投げ捨てる。そして新たな団子を頬張り――

「――やれやれ、この聞かん坊め。まぁた騒ぎを起こしよってからに」

「長老んグッ！？！！！」

突然現れた一つ目の小人に驚いて喉に詰めてしまった。苦しげに喉を押さえ、バタバタと脚を振るわせる。

「『ング』ではない、『ンギ』じゃ。それにンギ様と呼べと言うておるじゃろうが」

少女の三分の二程度鹿内その矮躯。その三分の二を占める頭部に、

これまた大きな単眼。

「ゲホッ！？けほけほ…分かってるよぉ！ハァ、あ～あ…で、どうしたのさ長老？」

「…ああ、お前に伝えておかねばならん事があってな…」

団子を何とか飲み下した少女の怨みがましい視線を受けながら、『分かっていないではないか』と言いたいところをぐっと堪え、小人は大きな瞳でふと天を見上げた。

「…佳き月かな。『海神［わだつみ］』の言いたい事も解らんでも無い。どうじゃ海神、今度酒でも一一」

「も～！勿体付けてないで早く言ってよー！」

焦れた声色に長老はしばし逡巡を見せた。そして、遂に口を開く。

「一一『災いをもたらす者』が近付いておる。神世の古に、数多の神を殺戮した破壊神一一『ジルオル＝セドカ』がな…」

The 29th Name…"綻び"

多数の浮島に囲まれた、華咲き乱れるその真中の社。社とは言っても、高く積まれた幾何学模様の石箱に天地を貫く巨大な木の幹が在るだけの空間。
だがそれでも空中の庭園とでも言うべき壮麗さを誇るそこは、或る種の楽土を思わせる。

「――ふむ…これはこれは…面妖な事も起きるモノだのう」

その裡に響くしわがれた声。その主は、高位の修道師めいた衣裳の老人。胸の辺りで組まれた掌には、単眼の嵌め込まれた魔法具のような金属球が握られている。

「――何か不都合が起きたか？」

老人の呟きに答える野太い声。老人の背後の空間が歪み、その歪みの彼方より魔導師を思わせる衣裳、そして錫杖を持つ壮年の男性が歩み出た。

「いや、問題らしい問題は起きておらん。故に問題なのだ」
「…相も変わらず持って回った言い回しをする。詰まりはどういう事だ？」

苛立ちを含んだ男の声に、老人は喉に詰まった笑いを漏らす。小莫迦にされたと感じ取り、なお男は不愉快そうな顔をした。

「何、理由と結果のバランスが狂っている部分が多々見受けられるのだ。例を挙げるとすれば、ヤハラギの死などが顕著だの」

「ふむ、確か『予定』ではそこで『亡霊』どもが出ばって来る筈だったな？」

顎髭を撫で付けながら、男性は記憶を探る。老人は何やら手元を操作しながら言葉を紡ぎ続ける。

「左様。だがヤハラギは死んだ。…どうも『記録［ログ］』に残らぬ不確定因子［イレギュラー］』が存在しておるようだの」

「…では、『計画』はどうなるのだ？修正は早い方がよかろうて」

「まぁ待て。これがどういう理由で動いておるのか…それを確かめぬ事にはな。遣いようによっては、エヴォリアなどよりも余程当てになる」

一一ニタリと。老人の口角が釣り上がる。

『ログに残らない』。簡単に言ったがこれは、この時間樹の根幹すら揺るがす能力なのだ。だから見付けられたと言ってもいい。それは彼が求め続けた得難い能力なのだから。

「一一理解した。では、これも誤差の範囲だな」

「当たり前の事を言うで無い。我々に間違いなど有りはしない一一」

交わした視線に焦りの色など見受けられない。真実彼等は『その可能性』すら予見していたのだから。

「我等、『理想幹神』にはな…くくくくく……」

所は空の自室。その静かな空気。

「「……」」

部屋の主は黙々と武器類の手入れを行っており、その相方は折り紙に興じている。

【海内】の手入れを終え、空は一つ伸びをした。随分長い間曲げていた背中が急に伸ばされ、ボキボキ音を鳴らす。静かな分それは良く響いた。

そのまま目線を窓の外に向ける。陽光の燦々と降り注ぐ校庭へと。

…今ものべーが航行しているのは、世界と世界の狭間――『分枝世界間』だ。外は星と闇に包まれ、果てない大樹の偉容を見せ付けていた。…つい先程までは。

マスターである希美の願いを受けて、ものべーはなんと『太陽と月』を生み出したのだ。規格外にも程が有ろう。

始めて数時間、既に越冬しに来たのかという数の鶴で机を埋めていた幽月が顔を上げる。

「……旦那はん。もっとこう…有意義な時間の使い方は出来へんのぉどすか？男友達と親睦を深めるとか、意中のあの娘にお近づき～♪…とか？」

「お前何言ってんの？…まぁ、確かに時間は節約しないとな…鍛錬鍛れ――…ん？」

言うや幽月の向こうに立て掛けられた【夜燭】に手を伸ばし――ガッ、と。空の腕が掴まれた。

ーーーガシャーーーン！！！

投げっ離しの一本背負いで窓硝子を突き破った空が中庭に飛び出した。ゴロゴロ転がり木にぶつかり止まる。癖で受け身はとったようだ。

「…テメェはマジで……契約者何だと思ってんだホッ！！？」

中庭中央のトネリコの木の根本。そこに天地を逆さまに背を預けた恰好の空に向けて幽月は【無銘】を投げ付けた。

「会話は人間関係を円滑に進ませる上で重要。誰かと会話弾ましてからや無いと部屋には入れたりませーん。【無銘】通して見とりますからズルは通用しませんえー」

言い放つや鼻唄混じりに手を打ち鳴らし、窓硝子を再製したのだった。

「…で、今に至ると？」

「…はい。お手数掛けます椿先生」

事の成り行き聞き終え早苗は呆れ果てた溜息を落としながら、擦り傷の出来た背中に脱脂綿を押し当てた。じくじくと染み入る消毒液に背筋が引き攣った。

保険医の居ない現状、怪我人の手当は希美や早苗が担当している。とは言え勿論付け焼き刃、専門的な事になれば恐らく何も出来ないだろう。それも現在の物部学園が抱える問題だ。

「全く…君は生傷ばっかりね」

「幽月［あん畜生］に言ってやってくださいよ…」

「今回の事だけじゃ無いでしょう？いつもいつも君は戦いに出る度に大なり小なり怪我して帰ってくるわ…」

静かな、しかし確かな口調。壁時計の秒針の音がやたらと響く。早苗はその少年の疵だらけの背に走る、特に目を引く斜めの刀疵を視線でなぞった。

元より土建や引越の日払いのバイトを中心に熟し、更には十年来続けさせられた鍛錬によって筋肉質な、しかししなやかな肉体。大柄で頑健な体つきはまだ、発展の可能性を宿している。

「正直、この辺が潮時だと私は思うわ。君はただの人間と変わらないチカラしか無いんでしょう？諦めてもいい筈よ…守られる側に回ってもいいの」

「……」

「そりゃあ、今まで君達のチカラに守られてた私が言うのも変な話だけど…このままじゃまず間違いなく取り返しの付かない事になる。そうなってからじゃ遅いのよ。死んでしまったら…そこまでなんだから」

ベルトに挿された【無銘】を見詰めながらの翻意を願う言葉。それに空は黙り込む。黙り込んで一一頭を掻いた。

「…先生。死ぬってどういう事か解りますか？」

「え？それは――」

そこで気付く。彼女の良く知る二人、世刻望と永峰希美を。その二人から聞いた、『転生体』と言う言葉の意味を。

「…もしかして君は……『死んだ時』の記憶が有るの？」

「……ええ、まぁ。他の皆がどうかは解りませんけど…少なくとも俺に限った話なら、有ります」

早苗は息を呑んだ。軽い気持ちだった訳ではない。だが、自分が推論でしか言えない事を彼は知っている。釈迦に説法という訳だ。

「…死ぬ事自体は、そう辛くは…いや、痛いし苦しいんですけど、そう辛くは無いんです。ただ――何よりも悔しかった」

「悔しい…？」

「ええ、自分のチカラの及ばない総てが。今よりずっと強かったんですよ？多分今あの時のチカラを出せれば、学園の神剣士全員を同時に相手したって勝てる筈です。『神』なんて仰々しい呼び名は伊達なんかじゃ無いんですよ。……それでも駄目だった。だからこそ諦められないんです、総てを」

――勿論それは俺に限った話じゃない。他の連中も今とは比べモノにならないチカラを持っていた。当然だろう、『神名』を完全に呼び起こしていたのだから。

と、そこまで考えて。ふとした疑問が沸いた。その『可能性』に思わず、頸から下げた鍵のペンダントとお守りを握り締める。

それは『あってはならない事』だ。それは有り得ない。有り得ては――ならない筈だった。

「君が、そこまでして願ったモノって――」
「心配して下さって有難うございます……ですが、今はただ自分の可能性を信じさせて下さい。お願いします、先生」
話し過ぎた事を感じ取り、唐突に会話を断ち切ると上着を羽織って立ち上がる。
「――あ、それと……『チカラ』はただ壊すだけ。何かを守るのは『ココロ』だと思ってるんです、俺。【無銘】は壊す事しか能が無い『チカラ』、だから俺に関しては恩なんて感じる必要有りませんから」
照れ隠しだろうか、顔も向けないままそうぶっきらぼうに告げて。頭を掻きながら、空は一礼して保健室を後にした。
「…駄目ね、私……生徒に気を遣わせるなんて」
溜息を落とした早苗は――
「……さて、頑張らなきゃね」
己の無力を恥じる事を止めて。そう決意した。
陽射しの差し込む廊下を歩きつつ、欠伸を噛み殺す。
【旦那はんてもしかして…年上好き?】
(あぁ?訳の解らん事を言ってんじゃねェよ。また投げられたいの

か？）

と、【無銘】からの念話。幽月はどうやら内部で聞いていたようだ。

【じゃあ綺麗なお姉さんは嫌いなんどすかぁ？ていうか希美はんに惚れてはるところから鑑みるに、落ち着いた包容力の有る大人の女性が好みと見受けあんした！】

（そりゃあ…どちらかと言えば餓鬼よりは大人の魅力……ッて）

グワシと空の手が【無銘】を掴み、勢いよく――

「飛べェェェカラ銃ゥゥゥ！！！」

【銃は飛ぶモンやありんせん、飛ばすモンどすぅぅぅ～～～～…あべし！？】

開いていた窓から横投げに投げ飛ばした。【無銘】はクルクルとブーメラン宜しく回転しながら、校庭隅の走り幅跳び用の砂場に衝き刺さるのだった……。

――ピンポンパンポーン……

『神剣士は至急生徒会室に集まってください。繰り返します…』

校内放送により呼出しがかかり、神剣士達は各々生徒会室を目指す。

そんな中彼は疑問を抱いた。

「……毎度思うけど、この呼ばれ方で俺が行くのは間違ってるんじ

ゃないか？自重した方がいいんだろーか？」
「いや、間違っては無いだろうけどな…っていうか、サボりたいだけだろお前は…」
「顔出すだけで嫌な顔されりゃお前だって同じ気分になるっての」
途中一緒になった望に問うた空。『永遠神銃』の射手であり『神銃士』を自負する彼としては、妙に不本意ではあった。

生徒会室に二人が辿り着いた時、中には既に三人が居た。放送した本人である沙月、遅刻などしそうに無い優等生のタリア。そして、いつぞやの旧制服に身を包んだカティマの三人だ。

「「「一一あ……」」」

空とカティマの視線が交差したその時、同時に顔を赤くした。それを目敏く見付けた沙月が冷やかすように口を開く。

「ん～～？ちょっとどうしたのよ、怪しい反応じゃない？」
「そんなんじゃ無いですよ。その…剣の世界を出る前に全力で今生の別れ的なノリの会話したんで、いざ落ち着いて鼻面付き合わせると顔から火が出そうなだけです」
「そ、そうですね…穴が在ったら入りたい」
…旅の恥は掻き捨てのつもりだっただけに、今更ながら思い出すだけで赤面してしまう。その場の勢いとは恐ろしいモノだ。
「取り敢えず…あの一件は、お互いの心の平穏を保つ為に忘れる方

向でどうでしょうか？」
「え、えぇ。それがいいでしょうね」

ポリポリと頭を掻く空、咳ばらいで茶を濁すカティマ。同時にハァーと長い溜息を落とした二人に、沙月達は何とも言えない眼差しを向ける。

「ですけど、轡を並べて闘えるのは嬉しいです。また宜しくお願いします、姫さん」
「それは私も同じですよ、巽。こちらこそ、また宜しくお願いします」

だが最後にそう告げ合い、いつぞやのように頭を下げ合ったのだった。

最後の一人であるソルラスカの到着は遅れに遅れ、到着したのは放送から三十分後。それに制裁を加えた後、生徒会室ではこの世界の成り立ち…『時間樹エト＝カ＝リファ』についての説明が行われた。この広大な分枝空間で『元々の世界』を見つけ出すのは、砂漠に落ちた砂金の粒を見つけ出すよりも難しいという事も。
そして、それを解決する手段が『旅団』の本拠地に行けば有るという事が説明された。

一一…さて、何だかな…？

望や希美がその説明に聴き入る中、空は別の思案に暮れる。

――まるでレクリエーションみたいだな。『旅団』の新入団員育成コースッてか？

…望と希美の神剣士としての実力は高い。確かに実戦の回数は他と比べれば見劣りするだろうが……前世が前世だ。その潜在能力は未知数。更には『北天の剣神』までセットだ。

旅団とやらがどんな組織かは知らないが、それが『正義』を唄うのならば。その三人は容易に手を貸してしまうだろう。そういう二人だと彼は幼い頃から思い知っているし、そういう人だと一月も掛ければ理解出来る。

――…俺みたいな奴にまで手を差し延べたお人よしなんだからな…

と、そこで説明が終わった。希美が立ち上がり、皆に珈琲を配る。望や沙月は究めて自然にそれを飲んだ。

「…ふむ、香りは良いのですが色合いが何とも…」

「そうね、この色はどうも美味しそうには見えないわね…」

「まぁ、望もグイッと飲んでんだから毒ッて訳じゃねぇだろ。頂くぜ」

だがソルラスカとタリア、カティマはその黒色の液体を簡単には口に入れようとしなかった。始めて飲む液体に期待と不安を寄せる。

「座標軸についての解説はあれで良かったかしら？」

「ちんぷんかんぷんです…分かった、望ちゃん？」

「…何と無くは。空はどうだ？」

講師役の沙月が周囲を見渡した。答える声は頼り無い。まあ、いきなりこんな難解な式を理解しろという方が無理なのだが。

呼び掛けに口許まで寄せていたカップを止め、空が口を開く。

「理解はしてる。でも改めて知りたい事が有る。『旅団』の――」

「「ングッ!!?」」

と、そこにくぐもった声が響く。いかにも『苦いっ!』と口を真一文字に結んだカティマとタリアの呻きだ。

だがそれはまだいい。未知の液体に警戒して少量しか口にしなかった為に我慢が効いた。

問題は、負けず嫌いの彼――

「ぶふーーーーッ!!」

「熱ッちゃあぁぁぁぁっっ!!?!!?目が、目がァァァッ!!?」

一気に半分近く口に含んだソルは、案の定その全てを噴き出した。

隣に座っている空に向けて。

「オィィィッ!!何してくれんだ!!俺まだ一口も飲んでねェんだぞォォォッ!!!何週間振りの珈琲だったと思ってんだ!!」

今し飲もうとしていた珈琲に彼の噴き出した飛沫が入ってしまい、空はもう手が付けられない。折角希美が淹［い］れてくれた珈琲を無駄にされてしまい、憤慨する。

「悪かったな、俺の遣るよ」

「厄介払いだろうがよ!そして何より張本人のテメーから施しは受けねェェッ!!!」

「希美ちゃん、砂糖とミルクは?」

「あ、砂糖は二つ入れましたけど…ミルクは…」

「始めてでそれはキツいかもな」

申し訳なさそうな顔をする希美、それを慰める望。口をシバシバさせるカティマとタリア、騒ぐ空とソル。暫し会議は遅延する事となる…。

結局、会議は『出たとこ勝負』で決着した。希美の『出た所が一面の海とかは嫌ですよ』という言葉にも、沙月の弁に因れば『ものべーには優秀なソナーというか世界探知器が搭載されてるから、いきなり土の壁とか海の中ってのは無いと思う』との事。

そんなこんなでものべーに座標を教える為に、沙月と希美は別の部屋に向かって行った。途中沙月やタリアが顔を赤くしていた理由は……空には判らなかった。

暫くすると、その二人を付けて行ったレーメが何故かふらふらになって帰還した。

【無銘】を砂場に放置したままの空には現状『精密索敵』も無いので、何が起きたのかは解らない。持って来ておくべきだったと本心から後悔した。

「さぁ、分枝世界にレッツゴー！！」

「…わたしの…わたしのファーストキス……始めては絶対に望ちゃんにって決めてたのに……」

戻って来た沙月は妙に艶々と、希美は妙に鬱々としていた。何を言っているのかは誰にも聞き取れなかったが、望が声を掛けても反応

が薄い。

一一と。唐突に顔を上げて希美は叫んだ。

「沙月先輩のバカーーーー！！！！」

「「「「「「うわぁぁぁっ！！？！」」」」」」

途端に学園を烈震が襲い、周囲が真っ暗になる。持ち主の激情に反応したものべーが凄まじい勢いで前進して起こした過重力に耐えられず、望達はゴロゴロと部屋の中を転がった。そして一点に集められると全員で身を寄せ合い、嵐が過ぎ去るのを待つばかり……。

閃光が視界を覆い轟音が響き、ものべーは世界の境界を抜けた。まさに一変した世界。

まるで水の中に居るような空、浮かぶ無数の太陽は幻灯のように揺らめいている。

「一一またか……」

恐らくは一番最初にそれを確認した空は、頭を抱えた。

「どうしたのですか、巽…っ！？これは……」

続き窓の外を眺めたカティマも絶句する。

それもそうだ、何故なら一一

「どうしたんだ、空、カティマ……うっ！！」

そして望も、その光景に目を瞬かせた。眼下一面に広がる、剣の世界を上回る密林…いや、最早ジャングルに一一

The 30th Name…"或る日"

水面を通ったかのように揺らめく陽射しが注ぐ昼下がりの教室の中、早々と昼食を済ませているその四人は一つの机を囲んでいた。

「しっかし、行けども行けども森また森……一週間目を皿みたいにして探してみたけど、ほんとにこの世界は人間がいんのかよ？」

愚痴りながら、ソルは牌を一つ河［ホウ］に捨てた。手元には一列に並ぶ同様の牌、いわゆる麻雀だ。

「それが判らないから見張ってるんだろ。…それにお前は何時も寝てんだろうがソルラスカ…地上だけかお前まで見張らされるこっちの身にもなってみろよ……」

「全く…あんまり不真面目だとタリアが怒るぞ、ソル？」

「な、なんでタリアを引き合いに出すんだよ…！」

牌を自模［ツモ］った後で、同じく空も牌を切る。次いで望も同様に済ませ一一空と信助の二人と意味ありげに視線を交えた。

「まあ、それも兄貴の良いとこだって」

「さっすがは信助！これぞ弟分の鑑だよな」

最後に信助。これで一巡、またソルに移る。

…因みに『兄貴』とは、少し前のサバイバル実習で矍鑠［かくしゃく］たる活躍を見せたソルラスカに惚れ込んだ男子生徒の一部が彼を讃えてそう呼んでいる敬称だ。

「『兄貴』ねぇ…俺は勘弁だな、どんなに頼りになっても莫迦な兄貴なんざ…立置［リーチ］」
「…珍しく意見が合ったな天パ…吾もこの馬鹿イノシシが兄貴分など耐えられん」
「あぁ？馬鹿って言う奴が馬鹿なんだぞッ！」
「「こういう所が特にな」」

気分良く牌を捨てたソルだったが、空が置いた横向の牌と点棒に眉をひそめつつ反駁した。
そして望の頭の上のレーメのふて腐れ具合から見るに、望も既に交わしているのだろう。

「そうだぞ空、レーメ。思うだけにしといてやれって…リーチ」
「お前も何気に酷いな、望…リーチ」

三人連続でリーチを決める。一気に追い詰められた形になったソルだったが――

「…ハッ、そう何度も負けられっかよ！俺もリーチだぜ！！」

この数時間で始めての事、勢い込んでリーチする。
膝の上に置かれている解説書［ルールブック］が無ければ格好良かっただろう。

「「「――栄［ロン］、満貫［マンガン］」」」
「初心者相手に一切手加減無しか元々の世界三人組ィッ！！」
「フ、また貴様の負けだなイノシシ。これで六万点の負債…六万回腕立て伏せだな」

それがこの麻雀の賭け金だ。というかむしろ賭け筋だ。賭ける金品

が無い為の措置である。

「マジかよ!?他のにしようぜ…」

「マジだよ。てか他のって何すんだ。まさか男だけで脱衣麻雀でもやりたい勇者か、お前は?」

「勘弁。でも六万回は…」

見計らったかのような三家和「サンチャンホー」で局が終わり、ソルラスカ以外はくつろぎ始める。

「だったら俺の勝ち点で肩代わりしてもいいぞ?…トイチでな」

「おお、そりゃ助かるぜ!」

「騙されるな兄貴!その蜘蛛の糸は粘ついてる方だ!獲物を搦め捕る時に使う方だ!」

「信助ぇ…俺もう…それでいい気がするんだ…」

ソルラスカの諦めたような言葉が漏れたのとほぼ同時に、教室の扉が開き――

「あ、居た居た。皆、これ食べてみて」

「中々美味ですよ」

香ばしい香りを放つ焼きお握りが幾つも積まれた盆を持った、希美とカティマが現れた。

「うんめぇ～。焼き味噌も中々良いよな…」

「保存食としても優秀だしな…量産し易いし腹持ちも良い。費用対

効果［コストパフォーマンス］が良いところも評価できる」
「…空くん、そんな事を考えながらご飯食べて美味しい…？」
「…骨の髄まで貧乏性なんだ、俺…」
「和気藹々とっ！楽しそうだしっ！美味そうだなっ！チクショー！！」

教室の片隅で負けた点数分の腕立て伏せを行うソルラスカを尻目に、六人は焼きお握りに舌鼓を打つ。希美とカティマは麻雀が珍しいのか、しきりと道具類を玩んでいる。

「ねぇ、望ちゃん。麻雀ってわたしにも出来るかなぁ？」
「うん？そりゃあルール覚えれば出来るだろうな」

目線を合わせずにもじもじと口を開く希美に望が答える。この機会を利用しようとしているのだ。
流石は緑属性、堅実さでは他の追随を許さない。

「そ、そっか。じゃああの、教え――」
「面白そうだし教えてくれる、望くん？」
「――って先輩！？いつの間に…」

そこに割り込んだ、青の真骨頂であるインタラプトの名手斑鳩沙月生徒会長。
きっとケイロンの目を以ってタイミングを計っていたのだろう、扉の磨り硝子に有角の影が映っている。

「そうですね、覚えておいて損は無いでしょうね。是非私に教えてください、望」
「「――な、カティマさん！？」」

それを黒の速度が抜き去った。
ちゃっかり望の隣に座ったカティマはもうセット一式の準備を済ませている。

「くっ…やるわね……望くん、私も準備ＯＫよ！」
「わっ、わたしだってっ！！望ちゃん、いつでもいいよ！」
「い、いやちょっ…」
「「「さあ、勝負！！」」」

突如ギスギスし始めた空気に、望は助けを求め先程まで卓を囲んでいた『友人達』に目を向ける――

「「「御馳走さーん」」」

そして見た。お握りを平らげ一列に並び手を合わせて――辟易した表情を浮かべた『友人達』を。

「…ったくやってらんねー。俺部屋に帰って寝るけど兄貴と巽はどうすんだ？」
「俺は見張りに戻るわ。木を眺めてた方がまだ盛り上がるぜ」
「テメーは腕立て残ってんだろーが…俺は鍛錬でもすっかな……」

男三人が歩み去っていく。ピシャンと勢い良く閉められた、その扉越しに響いた声が一つ。

「まっ、待った三人とも！見捨てないでくれぇぇぇっ！！」

声に振り返る者はいない。結局、その日の夕方まで望の麻雀教室は続いたという。

一度自室に寄り必要なモノを持ち、校庭の片隅で空は鍛錬を行う。
それはいつもの事。だが、今日は度合いが違っていた。

「ーー征［セイ］ッ！！」

ーーブン！

横薙ぎに振るわれた【夜燭】が風を斬る。踏み締めた足を基点に躯が流れる。

「ーー覇ァァッ！！」

歯を食い縛りながらそれを力尽くで制し、続いて大上段から振り下ろされた剣撃。重力を味方に付けた【夜燭】は勢い良く地を砕いた。

「…ッハ…糞…ハァ…何て重さだよ…マトモに振るえもしない…」

そのまま手を離すと、空はくず折れるように尻餅を付く。後ろに体重を懸けようと腕を伸ばしーー染み入る痛みに顔をしかめた。背中から倒れ込むと、両掌をかざす。

ーーたった数十分の訓練、たった二撃全力で打ち込んだだけでこれか。話にならないな…。

小刻みに震える、潰れた豆だらけの掌。腕はパンクせんばかりに張り、筋肉は乳酸塗れ。手首、肘、肩、背中はギシギシと軋みを上げている。

今更ながらに思い知る。『神剣士』というモノの規格外さを。
そして、ダラバ＝ウーザがどれだけの剣士で在ったかも。こんなに長大な剣を寸分の狂い無く目的の場所に叩き込む……それだけでもどれ程困難な事か。

「――上等…！遣って遣れない事は無いってな……可能性は零「ゼロ」じゃない！！」

脚を上半身に引き寄せて勢いを付け、伸ばす反動で立ち上がる。そのまま【夜燭】の柄――彼の持ちモノである証明に、柄尻に朱い飾り紐が結わえられた柄を握り締めた。

――途端に走る痛苦。だがこれは理想の為の痛みだ。
ならば心地好い。この痛みを踏み越えた先に、掴むべきユメがあるのだから。その為の努力ならば湯水のように注ぎ込んでやろう。

「――覇ァァッ！！」

【夜燭】を引き抜き、肩に担ぐ。そうして再度、度を越えた鍛錬が始まった。

――ガララ…

保健室に寄り荒行の傷を治療した後で、空は水を飲もうと食堂の扉に入った。
…そして直ぐに止めておけば良かった、と後悔する。

「――巽くん？どうしたの」
「阿川か…水飲みに来ただけだよ。そっちこそどうしたんだ、女子で寄り集まって…」
「井戸端会議よ、女子限定の」
「そうか、邪魔して悪いな…」

何せ室内には女子ばかり四人。そこに一人男子が進み入るには結構な胆力を必要とした。
下手なディフェンススキルよりも余程強力な守りを根性で突破し、グラスに注いだ水をあおる。

「――ッハァ……」

疲れきり熱を持った五臓六腑に、冷たく清澄な水が染み入っていく。心地好さにもう一度グラスに水を注ぎ――ふと感じた視線に目を向けた。

「……何か…用か？」

好奇に煌めく八つの瞳に気圧される。そこでやっと、女子生徒は皆調理部隊の面々だった事に気付いた。

――確か井之上に白崎、九条だったか…

「ううん、大した用じゃ無いんだけど――どうせなら巽君、お茶飲んでいかない？」

シャギーの入ったセミロング…井之上の言葉に三人が軽く頷く。それに空は、包帯の巻かれた右手をひらりと交わした。

「…あー…いや、悪いけど用があってな」
「そう…じゃあ単刀直入に」

――無理。この空気には耐えられない。免疫皆無だもん俺。

そのままグラスの水をあおり――

「巽君て永峰さんの事好きなんでしょ？」
「ンブはーーーーッ！！？」

…虹を掛けた。

「うわ、巽君わっかりやすーい」
「典型的ね」
「後掃除しときなよー」
「ゲホッ、エホッ！？…な、何の事だか解りませんが何をおっしゃるのかサッパリ」

クスクスと四人分の忍び笑いが漏れ出す。咳き込みつつ、空はしどろもどろに『変』答した。

「誤魔化そうとしても駄目よ、巽くん判り安すぎるもん」
「そうそう、よく手伝いに来てくれるのも永峰さんに会いたいからでしょ？」
「うちらが頼み事した時と希美ちゃんが頼み事した時じゃ相当な差が有るし」
「うぐっ…」

四対一、圧倒的に不利だ。瞬く間に追い詰められていく。

「ま、本人には通じてないみたいだけどねぇ…？」
「だ、だから誤解…」
「はいはい、顔真っ赤よ巽」

腰まであるロングヘアーに眼鏡の九条の言葉に、空は戦時並に周囲の状況を素早く確認する。
脱出口は彼女らの後ろ。突っ切らない限り脱出不能。そしてまさか彼女らを倒す訳にもいかない。

――くそ…どうする巽空…今の状況と較べればアズラサーセなんて天国だったぞ！！

「…な、何が望みだ…」

空は生唾を飲み込み、震える唇を開く。

「やだな～、それじゃあたし達が脅迫してるみたいじゃない」
「そ～よそ～よ、私達は応援しようと思ってるんだからさ」

対してあっけらかんと答えた美里とポニーテールの白崎。その言葉は彼にとっては到底理解出来ないモノ。
此処に居るのはほとんど面識も無い相手ばかり。美里以外は下の名前すら思い出せない程度の付き合いだ。

「…応援？何で？」

眉をひそめて怪訝そうに問う。彼は他人をおいそれとは信用しない。
『何処かのお人よし』と違い、来るモノは拒むタイプだ。

「うっわ～、おもっきり疑いの眼差し！」

「まぁ仕方ないけど。折角のぞみんの気を惹く作戦考えてたのに」
「無理強いしても仕方ないし、諦める？」
「巽が嫌なら仕方ないよ。ただ私見だけど、現状維持で世刻を上回るのは無理だと思うわね」
「……ッ！随分な言いようだな。そこまで言うからには確実なんだろうな」

だが、負け通しの噛ませ狗とて一匹の男［オス］。そこまで言われておめおめ尻尾は巻けない。

「勿論よ。これを見なさい」

徐に美里が取り出したモノ。一冊の本だ。厚くは無いその本の題は――

「……これは…『初心者でも出来る！お手軽スイーツ百選』…？」

元々の世界では良く有る情報誌だ。勿論彼はそんなモノ買った事はおろか、手に取った事すら無かったが。

「そう、甘味よ巽くん！甘いモノが嫌いな女の子なんてこの世に居ないわよ！」
「望くんはそういうの不得手らしいから、これでアドバンテージ取るしかないってば！」

勢い込む美里と白崎の声が聞こえているのかいないのか、空はその雑誌を眺め続ける。

「……」
「「「「……」」」」

その様子を、固唾を飲んで見守る少女達。その耳に溜息が聞こえ――

「…な、成る程……その手が有ったかーー！！！」

――そうだ、確か師匠も似たような事言ってた！『意中の相手を射止めたいなら、先ず胃袋を掴みなさい』って！んでおはぎ食わせて貰って気ィ遣って『三食これでもオッケーです！』っつッたら暫く本当におはぎ生活になった！

それ以来俺は甘いモノ苦手だけど、女の子がそう言うんだからそうなんだろう！

バッとそれを証明にかざした空に、少女達は表情を綻ばせる。

「後は巽くんの頑張り次第。あたし達も応援するから頑張ってね」

「く…すまん……恩に着るッ！！」

四人に一礼し、脱兎の如く走り去る。恐らく自室で研究でもする気なのだろう。

そしてその足音が聞こえなくなった頃。

「「「「掛かったーっ！！」」」」

食堂には、ガッツポーズを繰り出す少女達の姿が在った。

「流石は美里！伊達に一番長く巽くんと付き合ってないわね！」

「まぁね～、のぞみんの名前を出せばきっと上手くいくって思ってたのよ」

そう、彼女らには強かな計略が在った。確かに応援も嘘ではない。
他人の恋路ほど面白いモノも無いし、何より一一手軽に甘い菓子が
食べたかったのだ。

…だが。彼女らの計画は早速遅延の憂き目を見る。翌日発見された
『大樹』の為に……。

The 31th Name…"紅い闇"

その日、物部学園一行はようやく人の棲む場所を見付けた。大きな港を持ち、結構栄えている。『港』ではない、此処は森のど真ん中。言うなれば『空港』。
だがそこはなんと木の上。周囲の木などは較べモノにならない程に巨大で広大な、まるで『世界樹［ユグドラシル］』だ。

「凄いな、とても木の上だなんて思えない」
「だよねぇ…地面も有るし」

木造家屋しかないその町を歩きながら、望と希美は物珍しさに辺りを見回している。
そんな二人を背後から監視しつつ周囲の様子に気を配る空が続く。

現在彼らはこの世界の情報を集めるべく行動している。そして、空は剣の世界での実績から情報収集の監督を任されたのだ。
『いい、二人が良い雰囲気になったら邪魔しなさい。情報収集なんて二の次で良いから！』と。

「空？どうしたんだ、がっくりと肩を落として？」
「…いや、なんかこう…世の無常を感じてな…頑張れ俺、負けるな俺……」

自身の存在意義を問い自身を鼓舞しながら木の幹や枝に渡された板の橋を渡る、うなだれた外套のうらぶれた背中。その背に一一

「何をごちゃごちゃと言ってるのよ。さっさと行くわよ、暇じゃないんだから」

タリアの氷点下の声が掛かった。

「……というか、俺だけでも良かったでしょうに。なんで貴女まで？」

「貴方が頼りないからでしょう？」

眉根を寄せ、鋭い視線を向けているタリア。それに負けず劣らぬ仏頂面で見返す空。

因みに、『怪し過ぎる』という理由でバイザーは着けていないしフードも被っていない。武器は【無銘】壱挺と【誰彼】を銀昏二本のみ。ガントレットとグリーヴも外してあり、外套と紅い襟巻きを取れば中華風服に包帯の負かれた腕と革靴という、変わった出で立ちだ。

「……ムッかつくわー……」

「何か言った？」

「いえ何も…」

歩調を速め、四人は歩み行く。気まずそうに寄り添い先頭を歩く望と希美、中程で面倒臭そうに頭を掻きながら周囲に気を配る空、それらを監視するタリア。

実に纏まりの悪い組み合わせ。だが正直なところを言えば、空とタリアは良く似ている。どちらも理詰めで物事を考え行動するタイプ。だからだろうか、理解出来ない事柄に関しては徹底的に排除しようという感情が起こる。故の同族嫌悪。

「「「「……」」」」

こうして、静かな一行は町の偵察を行っていく……

喧騒に包まれた酒場、その角扉を空とタリアは押し開けた。
情報収集と言えば酒場、そこに間違いは無い。無いのだが。

「…昼日中から来るトコじゃないでしょう、しかも俺らみたいな若輩が。舐められるだけだと思うんですけど？」
「五月蝿いわね…」

睨みつけるタリアを横目に、取り敢えずカウンターを見遣る。そこでは給仕らしい青髪の少女がいそいそと働いていた。
どうやら昼は食事処として営業しているようだ。

「で、何処にします？俺としてはあの隅が良いんですけど」
「言われなくてもそこにするわよ…って、世刻と永峰は？」

言われて振り返るが、そこに二人の姿は無かった。この酒場に入る際、行き過ぎた為に先にこの二人が酒場に入る形になったのだ。

一一しまった、入るのを見届けてから入れば良かったな…

「ちょっと巽！なんで目を離したのよ！」
「ッてなんで間髪容れずに俺ェ？！貴女だって気を抜いてたじゃないですか！」

いきなり理不尽に叱られ反論する。そこにまたも気まずそうに、望達が入って来た。

「あ、悪い。待たせたか？」
「ごめんなさい、ちょっと怖じ気づいちゃって…」
申し訳なさそうに謝る二人。ただでさえ空とタリアの口論で注目を集めていたところ、嫌でも視線が集まる。
「「「「……」」」」
それを避けるように、四人はそそくさと一番隅の席に着いたのだった。

席を離れて行ったタリアと希美を見送り、彼は取り敢えず前を向く。と、望とバッチリ目が合った。

「そういえば空、お前剣の世界でも酒場に入ったんだっけ？」
「ん？ああ…まぁ、行き当たりばったりで、だけどな」
「酒呑めるのか？」
「嗜むくらいなら。お前は？」
「俺もだ」
「つってもこの世界の金は無いから、今日は我慢しとけ」
「始めから呑む気無いっての」

頬杖を衝いた望、外套を掛けた背もたれに寄り掛かり足と腕を組んだ空。
二人は何とも言えない空気で会話する。実に他愛の無い事ばかりだ。
望の頭の上のレーメが退屈そうに欠伸した。

「いらっしゃいませ。注文取りに来るのが遅くなってごめんなさい」
そんな二人に掛かる声。先程見た給仕らしい少女。青い髪の、まだ年端もいかない雰囲気だ。
「…あれ？もしかしてお客さん達、別の世界から来たんじゃありません？」
「え？何で解るんだあイテテ！？」
「…どうしてそう思うんです？」
その問いに馬鹿正直に答えてしまった望はレーメの制裁を受ける。
代わり、空が引き継いだ。
――つーかコイツに交渉事は任せておけない。
「あたし、レチェレと言います。こう見えても一度来たお客さんの顔はしっかり覚えられるんですよ」
「へぇ、それで俺達の顔には見覚えが無いから別世界の人間だろう、と」
「はい、そういう事です。このお店に始めて来る人って、大抵異世界の人ですから」
朗らかに笑うレチェレに愛想笑いを見せながら、空は思考を回す。
――そうか、つまりこの世界では異世界人だという事は隠す必要が無い。加えて世界間の交流は結構頻繁そうだ。
「という訳で、何を注文しますか？サービスしておきますよ？」

最高の営業スマイルが振る舞われる。これなら普通は無理してでも注文したいと思うだろう。だが。

「…すいません、俺達この世界に来たばかりで通貨の持ち合わせが無いんですよ。換金できる場所に行ければ良いんですけど…何処かに在りますかね？」

そう、金が無い。無い袖はどうしたって振れはしない。
それに彼女は得心がいった表情を見せた。

「それじゃあ、この店の一番の料理をご馳走しますよ」
「え？いや、でも…」
「気にしないで下さい。異世界から来る人は最初にとても苦労するから、あたし達で助けてあげる事にしてるんです。それがこの酒場の主義なんですよ」

優しく笑み、若干得意げに胸を反らす。何と無く年相応の愛嬌有る仕種に、彼は思わず苦笑してしまった。

「少し時間を頂きますね。…いらっしゃいませー！！何名様ですかー！！」

新たな客の応対に行ってしまったレチェレを見送り、空は視線を前ー一望に戻す。と、望は別の席に着く何だか露出過多な紅髪の女性と言葉を交わしていた。

（おいおい、また引っ掛けたのかアイツ……）
【くふふ、モテるオトコは違いますなぁ？】

『何してんだスケコマシ』と言おうとしたところで話を切り上げら

れた。
注意するタイミングを逸して黙り込んだ空の耳に、その言葉が聴こえた。背後の席に座っている冒険者風の男達の話だ。

「おい、聞いたか？また『精霊』が出たってよ……」

その会話内容に耳を澄ます。望も気付いたらしく、黙ってそれを窺っていた。

戻ってきた女性二人が席につく。同時に運ばれてきた食事を見て眉根を寄せたが、余りにも美味しそうなその誘惑には勝てずに皆で平らげた。

「御馳走様でした、何から何まですいません」
「いえ、お口に合って良かったです。またいらして下さいね」

食事を終え、彼らは酒場『パスティル亭』を後にした。それなりに収穫が有ったので、報告に戻ろうと。

収穫とは則ち、先程の話の裏付け。『この世界の人間と精霊の仲は険悪』という事、『付近の分枝世界間を行き来できる群世界』だという事だ。
そしてこの街が『ウルティルバディア』という名前で、市長は『ロドヴィゴ』という人物。木の下は『下界』と呼ばれており、精霊の勢力圏下である事。

ついでに換金場所も教えて貰い、それに空は単独で向かう事にした。

「…くっくっ……やっぱり金属の価値は全世界共通だな。いやー、財布が厚いのはやっぱり良い」

左手にこの世界の貨幣が詰まった財布を持って歩く空が、ほくそ笑みながら独りごちる――

「凄い交換レートだったな。俺も今度は小銭持ってくるかな…」

「でも、勝手に元々の世界の硬貨を換金してもいいのかなぁ？」

「緊急避難って事で勘弁して貰うしかないな。実際コッチは漂流中なんだし」

と、隣から声。独りで行こうとする空を心配して付いてきた望と希美。つまりは幼馴染み三人が並んで歩いている形だ。来るまでに気になった地点をそれぞれ出し合い、そこに行ってみている。

「いらっしゃい、どれも天然石製だよ！」

「わぁ、綺麗…」

時は昼下がり、鄙［ひな］びた陽光が降り注ぐ。今彼らは露店街を冷やかしながら歩いている。既に用は済んだ、本来ならば真っ直ぐ帰るべきところ。

…だが、言っては悪いが、タリアの監視付きで羽を伸ばせなかった。やはり異世界に来ているのだから、少しくらい観光がしたかったのだ。故に気のおけない幼馴染み三人で口裏を合わせた。

装飾品店でアクセサリーを眺めたり手に取ったりしていた希美。そ

の目と手が先程から同じモノを捉えていた。

「……それにするか、希美？」

「え？」

それに気付いた空の意を決した言葉に、希美はポカンと口を開く。

それ程にこの少年が金を使うところは珍しいのだ。

「いやその、希美には随分文字通り助けて貰ったから……その御礼にと思って」

「そんなの気にしなくていいよ、空くん。私達は仲間…ううん、『家族』なんだから」

「一一…『家族』……？」

と、希美は微笑みながら意味ありげな視線を望に送る。その言葉に空は呆けたように無防備な声を漏らした。

「あー…うん、そうだな。『家族』なんだし、助けるのは当たり前だろ」

いつぞや自分が使った言葉を遣われ、望は赤くなった頬を掻きながらそっぽを向く。

それに何か、沈思に沈む空。

「……いや、贈らせてくれ。それなら『家族』に、誕生日プレゼントをさ」

顔を上げた空。望に負けず劣らず頬を染めての一言、次いで希美も頬を染めた。

「一一空くん……覚えててくれたんだ」
「ああ、当然…ッて、結構前だったけど。剣の世界じゃそういう雰囲気じゃ無かったから自重したんだけど……まだ、間に合うかな？」
周囲から様子を窺う視線。装飾品店の前に頬を染めた年頃の男女三人が並んでいるのだ、店主はどうしていいか判らずただただ様子を窺っているだけだ。
だが外野からは『面白いモノが見られるんじゃないか』と視線が集まっている。
「…ホントにいいの？」
「勿論！俺は確かにケチだけど、吝嗇［りんしょく］じゃない！」
うーん、と悩む様子を見せた希美だったが、勢いこんだ空のその言葉に。
「ありがとう、空くん…大事にするね」
小さな、本当に小さな、翡翠のあしらわれたフィビュラを選び取った。
【…むむ。何やらノゾミと天パがいい雰囲気だぞ、ノゾム？】
（…何で俺に言う？幼馴染みなんだから、贈り物くらいするだろ…俺だって買って置いて有るし…）
【…はぁ。一応言っておくが、無くしてからでは遅いぞ。永遠に続くモノなど、何処にも無いのだからな】
レーメの念話に、少し憮然と答えた望。
その視線の先には、贈り物にはにかむように笑う希美とその笑顔に照れて頭を掻く空。

「あ、そうだ。わたしに贈り物したならポゥちゃんにも贈り物しないとダメだよ？」
「あー…確かに。でも何がいいんだろ、ポゥの趣味といえば本だけど…」
「心を篭めて選んだモノなら、きっと喜んでくれるよ」
それは一一取り戻したかった日常の一コマだった筈だった。幼き日、まだ沙月や絶と知り合う以前の日々と同じ…だというのに。
（…あれ？）
何故だろうか、彼にはそれが一一遠く霞んで見えた。

夕食が終わり、自室に戻る道すがら。腹ごなしに少し散歩してみる事にしていた空は、中庭のトネリコの木に背を持たせかけた。
夕焼けに染まる天、夕闇の迫る地。見事なコントラストの天地を涼やかな風が吹き抜けていく。
「……」
目を閉じ、それを肌で感じる。瞼を透して染み入る朱一一
『…温［ぬり］ィな。温過ぎるぜ、テメェは…！！』
「…なんだ、久し振りじゃねェか『オレ』？引き篭るのにはもう飽き一一ッ！？」

その朱が、毒々しいまでの『紅』に換わる。
それは、そう一一久しく出て来なかった『自分』。

『楽しかったか、トモダチゴッコは？忘れたか、あの憎しみを？許すのか、奴を…！！』
「一一ッ！一一ッ！？」

ギリギリと脳髄を直接握り絞られるかのような激痛。呼吸すらままならず、ただ詰めた息を繰り返すだけ。

『殺せ…奴を殺せ！破壊神を、ジルオル＝セドカを！！あの世界ではテメェの好きにさせてやった、次は俺の番…等価交換だ！』

押し寄せる『紅い闇』。質量を持つ、可視の『憎悪』。
馴染みの有るそれは、神世の古に彼の有していた『異能』一一

一一莫迦な…！コイツ…いつの間に…！！

『もう一度言ってみろよ『俺』？『俺の手で貴様を撃つ』ッてよォ！！』
「……カッ、は……！」

神剣や神名の持つ強制力は、味わった者にしか解るまい。それは努力でどうこう出来る苦痛ではない。”ココロ”を蹂躙される、その痛苦は。

一一コイツなら、遣る。俺を喰い潰す。どんな方法を使ったかは解らないが、コイツは『神名［オリハルコンネーム］』を取り戻したんだ…！なら、もう殺せる。『俺』を…！

『くく…クハハハハッ！！』

哄笑が響く。彼の耳にのみ。耳障りな、鴉の鳴き声に似たソレ。

――消える…のか？

『紅い闇』に染まりつつある己自身を感じながら。

――消える…？

徐々に『過去』に浸蝕されていく己自身を感じながら。

――消え…て

「たまるか…！消えてたまるかァァッ！！！」

”ココロ”に作用する『強制力』を断ち切るなど、ただの人間には出来ない。そんな事が出来るとすれば、『選ばれたヒーロー』か何かだろう。

少なくとも空は前者、その才覚は無い。ならば強制力を止めるには、『強制力を送る存在』がそれを止めるに足る理由を提示しなければならない。

だから――己のコメカミに【無銘】を衝き付けた。

ピタリと浸蝕が止まる。ようやく息をつく。

『…撃てよ。そして幕を引け、テメェの人生によォ？』

そして嘲笑う。『紅い闇』の向こうから、無数の鴉の鳴き声。

『出来る訳ねェよなァ？『オレ』を否定したお前はこれきりだ。だったら死ねる訳がねェ。違うか、アァ！？』

「……」

――ああ、そうだな。その通りだよ『オレ』。お前の言う事は一々俺の本心だ。

『そんなの気にしなくていいよ、空くん。私達は仲間…ううん、『家族』なんだから』

『あー…うん、そうだな。『家族』なんだし、助けるのは当たり前だろ』

「……は」

――確かに、温い。温い言葉だ。

つい先程の光景。日盛りの中で交わした言葉。その、温かな――

「終わりなのは『俺』だけじゃねェだろ『オレ』？【無銘】は…カラ銃の奴は俺が死ねば間違い無く食い尽くすぜ？俺もお前もな」

『……』

黙り込んだ『自分』に、ニタリと口角を吊り上げる。

「選べよ。何を成す事も無く此処で消え去るか、少し堪えて『願い』を成就するか…さぁ！」

攻守が入れ替わる。『前世の自分』とて解っているのだ、『永遠神銃』がどんなモノか。

かつて『神威の簒奪者』と唾棄したそれが、『神』であっても立ち

向かう事は困難なモノである事を。

『……くく…流石に『オレ』の転生体だな。良く口が廻りやがるぜクソッタレ』

「好き好んで成ったんじゃねェよクソッタレ」

互いに毒を吐く。互いに、混じり気無しの憎しみを篭めて。

『解った…今は主導権を預けておいてやる。精々見限られないように気をつけるんだな』

圧力が、『紅い闇』が薄れて消える。”ココロ”を圧迫する苦痛も。

『『ソレ』を手放した時…それがテメェの終わりだ。愉しみだなぁ、エぇおい？ハハハハハ…』

全てが終わり、目を開ける。周囲は色濃い暗闇に包まれている。これ程に安らぐ闇を、彼は初めて感じた。

「……ハ、全く」

苦笑が漏れる。漏らさなければやっていられない。

一一内には『前世』、外には『永遠神銃』。正しく内憂外患か。手札は最悪の道化一組［ジョーカーワンペア］。やってらんねぇ…

気怠げに立ち上がると、視線を上げた。視線の先には見事な半月。その穢れ無き煌めきを浴びながら、空は自室を目指した。

The 32th Name…"遭遇戦"

翌日、ぞろぞろと早苗の先導の下に学生達が校舎を後にしていく。

これから、第一陣として選ばれた一般生徒達がウルティルバディアで羽を伸ばして来る事になっている。生徒達のストレスを発散する為だ。

しかし、その為には先立つモノが要る。では、どうやって通貨を得るか。

確実なモノとしては『換金』。前回空がそうした様に、身を削って対価を得る方式だ。だがそれは等価の交換、有り体に言ってしまえば儲けはまず無い。

ならば、と。彼ら神剣士はその特権を使う事にした。『永遠神剣』だ。

このチカラを使い――『傭兵』として、報酬を得ようという事になった。

その為に先ず下見として、生徒会一行は『大樹』の根元に降りてきていた。因みにクリスト達は物部学園の警備に残っており、来ていない。

「……望くん。『鬱蒼』って漢字で書ける？」

「…今なら書ける気がします」

そんな悪口も出よう、正に原生林。アマゾンも真っ青と言った具合の大木と下草ばかり。獣道すら見つかるかどうかだ。皆迷わぬように、注意深く周囲に気を配っている。

「ーーハァ、ハァ……」

そんな一行の最後尾に、空の姿が在った。今回は六挺と外装フル装備の空。更に肩には【夜燭】が担がれている。

「……巽、やはり【夜燭】は置いてきた方が良かったのでは？」

「…ハフ、いえ、このくらい何でも…ゼェ、ハァ…」

またも強がる。しかし、誰がどう見てもそれは死重量「デッドウェイト」以外の何モノでも無い。

…本来の彼の持ち味は、気配が無い事を利用した神出鬼没の奇襲。だというのに動く事すらままならない武器を持っていては素も子も無いだろう。

「全く…契約すれば一発解決じゃないの。戦力の補強にも成って一石二鳥だっていうのに、何を考えてるんだか」

「ほ、放っといてください…俺の…勝手でしょうが！」

「まぁまぁ…」

わざわざ隣に移動して来てまで厭味を言う沙月。望は苦笑いしながら並び歩む。

「これじゃ迷ったら命取りだなーー」

そのまま巨大な木を見上げた視界の端に何かが動いたのを、彼は見

逃さなかった。

「――見つけたぞっ！！」

「うわっ！？」

飛び出したその影に、望は反応した。鋭い蹴りをスレスレで躱わす。

その勢いが次に狙うのは、その先の空。

だが、【無銘】の探知は生命の反応を漏らしはしない。それは予見していた。だから――驚愕に目を見開いた。

「んごフェあぁぁーー――ッ！？！」

避けられなかった。沙月と口争を繰り広げていた空は、その沙月に肉の盾代わりにされて。

独特な形状の靴が空の顔面に減り込む。蹴り飛ばされた際にバイザーやら弾倉やら懐刀やら【夜燭】やら色々落としながら、空は草叢に突っ込んでいった。

「――ちぃっ！外したか…」

「いや、おもくそ命中してね？」

吐き捨てるように言ったその娘。白妙に、緋袴を腰布のように巻き黒髪を一つに結わえた、彼ら一行と歳の頃はそう変わらない少女。

「感じる。ボクには分かるぞ！お前が『災いをもたらすもの』だなっ！」

ソルラスカの呟きなど耳にも入っていない。彼女はただ、視線の合っている――沙月を睨みつけている。

「わ、私…？」

呆気に取られている沙月だったが、少女の方はお構い無し。その豊満な胸を反らして得意げに語る。

「ふっふーん、誤魔化したって無駄だね。ボクには感じる事が出来るんだ。危険なチカラを持つのが誰かをね」

「先輩！下がって下さい！」

沙月を護るべく望が進み出る。少女はそれを見て身構え――跳び退いた。

「あ、あれ…何この感じ…？ハッ！！そ、そうか分かったぞ！そっちは子分だな！まさかこれ程のチカラを持ってたなんて…」

「…なぁタリア？アイツは何を言ってるんだ？」

「私が知る訳無いじゃない」

一人で納得し、一人で盛り上がる。急に目標を変えた少女に周囲から不審な目が向けられた。そんな中、その声は響く。

「――ボクの名はルプトナ！精霊の娘、ルプトナだっ！！ジルオル、覚悟しろっ！！」

ビシリと指差し、彼女――ルプトナは、望に向けて突撃した――！！

――ギィン！ギィン！ギィン！！

ルプトナの繰り出した三度の後ろ回し蹴りを【黎明】が受け止めた。

最後の一撃と競り合い、ギリギリと刃鳴る。

「――この靴…永遠神剣だぞ、ノゾム！」

「分かってる…！」

その靴底には水の精霊光［オーラフォトン］、破壊力を増す水流の刃が纏われている。

受け止めた望と睨み合うルプトナ。その顔が、キッと絞られた。

「ちっ！ボクのランサーを凌ぐなんて…やるなジルオルっ！」

「――ジルオル？俺は望、世刻望だッ！」

跳ね飛ばすと同時に踏み込む。その一瞬の間に、ルプトナは木々の間隙を縦横無尽に跳ね回っていた。

「ああもうっ、ちょこまかとっ！」

不定型の神剣【光輝】を短刀に変えて投擲していた沙月だったが、未だ命中弾は無い。それ以外の神剣士に至っては、速度と変則的な動きに翻弄されて目で追う事すらやっとである。

「この闘い方…流石に土地勘が有るらしいな！」

「当然でしょう、アッチにとってはホームグラウンドなんだからッ！！」

【疾風】から旋風を飛ばすタリア。だがそれは、木の枝を斬っただけだ。

「遅いっ！いくぞ、ルプトナァァァ……」

ダンッと枝から跳ね跳ぶ。そして――

「――キィィィッック！！！！」

水流は氷に変じ、鏃［やじり］となった。その必殺の一閃は寸分の狂いも無く望に向かっていく――！

「レーメ！」
「おうっ！」

だが、それこそ望む処。追えば捉えきれないが、向かって来るなら捉えられる。
金色のガントレットに包まれた右の拳、双子剣の一方に濃密な精霊光が纏わり付く。更にその場で一回転し、遠心力すら味方に付けた。

「真っ直ぐに貫く――『オーバードライブ』ッ！！」

衝き出された破壊の剣と氷山の槍が激突する――！！

――澄んだ音を立てて氷片が舞い散る。

「――くッ！」
「――っあ！」

後方に飛ばされつつも踏ん張る望、間一髪で貫かれた氷の中から脱出したルプトナ。その周囲を神剣士達が取り囲んだ。

「くっ！流石は『災いをもたらすもの』ジルオル改めセトキノゾム！だが次だ、次こそは倒してみせる！」

だが彼女は驚くべき跳躍力でその囲みを脱した。近場の木の枝に乗ると――

「覚えてろーーーっ！！！」

ビシリと指差し捨て台詞を吐いて。枝のしなりを利用して勢いに乗ると、そのまま木々の合間に姿を消していった。

それを見送り、神剣士達は構えを解いた。

「…身軽な奴だな。そういやぁ、巽の奴も最初は木から降ってきたんだっけ」

「どこの毒蛇よ…って」

「「「「「ああっ！」」」」」

そして思い出した。モノの見事に吹っ飛ばされたその少年の存在を。

「…心配しなくても大丈夫でしょ」

「先輩、幾らなんでも…！」

それは無いだろう、と反駁しようとした望。

だが機先を制した沙月の指先が、少年が突っ込んだ草叢を指す。そこには――無い。彼の落とした様々なモノは有るが、空自身は居ない。

「…追跡しているようですね」

「まぁ、こういう抜け目の無い処は流石としか言えないわ…」

近くの苔むしていた地面に足跡が残っている。それは一直線に、ルプトナが去って行った方角へ向いていた。

「――ハァ、ハァ…！」

枝の上を翔けて行くその後ろ姿を、彼は知っている。

「――ハァ、ハァ、ハァッ！！」

――見間違える筈も無い。見間違えてなるものか、奴は――！！

「――見付けた。遂に見付けたぞ…！」

思わず叫びだしそうになるのを堪え、彼は追跡に専念する。ただでさえ彼我の移動能力の差は自転車と戦闘機の開きが有る。自分の役目は本拠地の探り出しだ。

『――殺せ…！』

そんな事は判っている。だが、その姿が呼び起こすのだ。

望――ジルオル＝セドカを前にした時よりも、或いは強烈な敵意。

『――判ってる筈だ。奴は敵、ジルオルとは違う。何の問題も無く殺せる……さぁ、アイツを殺せ、殺せ…！』

神世の記憶、深紅の憎悪を。

【旦那はん、落ち着きなんし】

鋭い言葉に、紅い闇に包まれつつあった思考が鮮明となる。
そして気付いた。自身が既に【無銘】を番えていた事に。

（……チッ。テメェに落ち着けなんて言われるのはこの上なく癪だな）

【うわー、差別どすわ差別～】

どうにか憎悪を抑え込む。容易な事ではなかったが、この程度の感情如きは今まで彼が堪えてきた屈辱と比べればどうという事はない。

「……ッ！？」

一一と。ルプトナが立ち止まる。同時に空も止まり、木の影に身を隠した。

スクッと立ち上がるルプトナ。その足元、彼女の永遠神剣が青く煌めき一一

「一一じっちゃぁぁぁんっ！！」
「一一オォォォォォッ！！！」

一一守護神獣『海神』を、現出させた。

まるで天の蓋が抜けたかのような豪雨の中、樹上からルプトナは見

渡す。その雨は海神が頭上に向けて撃ち上げた水塊が空中で解けたモノだ。
一瞬で止んだが、それで十分。濡れて張り付く前髪を流すと、その視線は一点を捉えた。

「……ふふん、ボクの後を付けようなんて一億年早いっ！！」

一本の木。その木に向けて指差し叫ぶ。

「…成る程、少しは考えが廻るみたいだな」

木の陰から歩み出る、黒い外套の男。黒羅紗［くろらしゃ］の外套は撥水性が有るらしく、水を弾いている。

「くふふ、マナを添わした雨で形状感知どすかぁ？しっかしそれも確信無しには出来んせん…どこで確信を得たんか教えてんかぁ、お嬢はん？」

その隣。柄の長い朱の和傘を差して雨を凌ぐ、緑髪紫瞳の和装の女。まるで道でも尋ねるかのような気軽さだ。

「ボクの勘が言ってる！お前達はジルオルの仲間だ！悪人に教えてやる事は無ーいっ！」

返った言葉。それに揃って沈黙する空と幽月。
糸のようだった空の目が薄く開かれ、鳶色の三白眼を現す。それに幽月は『あちゃあ』と口許に袖を当てた。

「…『ジルオルの仲間』だと……？」

冷徹な声。冷徹ながら、地獄の業火を思わせるそれは。
今まで彼が抑え続けてきた、ジルオルに対する感情。望を前にする度に感じ続け、それでも必死に抑え付けてきた感情だった。
…だがもう、抑えが利かない。望だけではない。目の前にいるその少女は、彼にとってもう一人の一一絶対に赦すべからざる者。

「ルプトナ、気を付けろ！こやつ…！」

先に気付いたのは海神。彼の眼差しは、最早明確な『殺意』

「何言ってるのさ、じっちゃん。人間くらい一発で一一」

だがルプトナはまだ気付かない。彼女は、彼がただの人間でありながら『神』の一字を戴く剣に対抗出来るモノを持つ事に、そして一一かつては『神』と呼ばれていた事にも。

「…そうだな。だったら悪人は悪人らしく振る舞おう。御望み通り一一撃ち抜く！」

腰のホルスターから抜き放つは漆黒、永遠神銃【無銘】。
即応し、幽月が翳りと化して【無銘】に融ける。目を醒ましたかのように、その銃口下部の宝玉が輝きを放つ。

一一装備確認。【無銘】に『紅の魔弾』の装填済。【比翼】【連理】【天涯】【地角】【海内】の銃弾の蓄えは十分。装填してあるマガジンの他にも後四つずつ。【誰彼】七本、【篭絡】一巻。【上弦】【下弦】一一これで、撃つ！

「一一撃鉄を熾［お］こす。気が済むまで銃声［ウタ］唄え【無銘】

…！」

撃鉄が熾こされた。【無銘】に宿る幽月が精霊光［オーラ］を発する。

場の他のマナを喰い純粋な赤マナとして『再製』する、深紅の魔法陣――『スピリット＝オブ＝ファイア』を。

煌めきに照らされながら向けた銃口。中指を引鉄に掛けて人差し指を伸ばした形で、その先に立つルプトナに向けて――彼は怨み募るその名を吐き捨てた。

「…征くぞ、『ナルカナ』ァァァッ！！」

The 32th Name ?・・・"遭遇戦?"

「ーーッたく、世話掛けやがるぜッ！」

密林の中を疾走しながら毒づくソル。その脇を彼の神獣『黒い牙』が並走している。

「主よ、サツキ殿の判断は正しい。この密林で彼らの捜索が出来るのは我々くらいだ」

「そりゃそうだが…アンの野郎、ドンパチ始めやがってるじゃねェか！本拠地を見付けるのが目的じゃなかったのかってのッ！！」

会話の間にも轟く銃撃音に眉をひそめつつ、ハードルの要領で揃って倒木を飛び越える。

それは恐らく先程空が撃ち倒したモノ。その傷痕を見た黒い牙が一人ごちる。

「…しかし、また威力を上げたか。何処まで進化していくのだろうな、彼の銃は…」

その破壊力。出会ったばかりの彼らが繰り広げた戦闘の時よりも、遥かに高まっている。

ーー神剣を取り込む度に強力化していく『永遠神銃』。まるで内燃機関か熔鉱炉だ。焼べれば焼べる程に機関が廻る。地獄の炎と共に、その供物を増やす為の道具を生み出しながら。

「あ？何ぶつくさ言ってんだよクロ？」

「…主、その仇名は止めろと一一！？」

その思考が、隣を走る阿呆に阻害された。そしてそれが、彼がその思考を行う意思を奪い取った。
同時に左右に跳ね飛ぶソルとクロ。その中点に傘を差した和装の女が着地した。

「あれまぁ、ソルはんにクロはんやありんせんかぁ？こないなトコにどうしはりましたん？」
「幽月か！巽の奴は――」

ようやく痕跡を見付け出し、その主の行方を問おうとしたソルだったが――

「すんまへんなぁ、ソルはんクロはん…後はお任せしますぅ～♪」
「「は？」」

呟き傘を袖の中に仕舞うと、幽月は愛想よく彼の手をしっかと握り、クロの頭を撫ぜてからフッと掻き消えた。

「――待てェェェい、小娘ェェェッ！！」

そしてそれは、大音声と共に木々を薙ぎ倒しながら現れた。

「「――は…？」」

木々を薙ぎ倒した巨大な蛇。その偉容に圧倒され、ソルとクロはあんぐりと口を開けていた。

森の中に雷音が轟く。その度に木が傾ぎ、倒れる。

「ーーくぅっ！おいお前、止めろよっ！！」

最後に倒れた木。その木から別の木に跳び移ったルプトナは、追い縋り翠の銃を衝き付ける鴉に向けて叫んだ。

だがその言葉は続く雷音に掻き消される。空の放つ、【海内】の銃撃音にて。

「うぁっ！？」

辛うじてその射線を避ける。木の幹が弾け跳び、またも一本が倒れた。

「止めろってばっ！木を倒すなぁっ！！」

「ーーハッ！だったらテメェ自身で受け止めろよッ！！！」

右のトーラス＝レイジングブル…【海内】の引鉄を引く。かつては一発撃つだけで捻挫しかけていたそれを、連射した。

掠めただけで幹を大きく削り取る銃弾。二つ空いた半円の穴に、自重に堪えられなくなった木が倒れた。

「また…お前ぇっ！許さないからなっ！！」

跳ね跳んで回避していた樹上の彼女は繰り出す。地表の空に向けて、望に放ったモノと同じ技を。

「くらえ、ルプトナキーーック！！」

――『クラウドトランスフィクサー』。それがこの技の正式名称。
その威圧感たるや、まるで崩落する氷山。

「征くぞ――【無銘】！！」

だが彼は動じない。それに向けて未だ撃っていなかった左の【無銘】を衝き出し――引鉄を引いた。

――――！！！

纏っていた氷の鏃を灼熱の龍の息吹によって相殺され、ルプトナは地に降り立った。

「…お前、ホントに嫌な奴だ。ジルオル…ノゾムよりずっと、ずっと厭な感じがする……！」

そして空を睨みつける。強い敵意の篭った瞳で。そう――空が向けるモノと同じ眼差しで。

「…そりゃどうも。テメェにそう言われると嬉しくて堪らねェ……何より――」

撃ち尽くした【海内】をホルスターに戻し、【無銘】に魔弾を籠め、やはり戻した。

「テメェのドタマに風穴空けられるかと思うとな、ナルカナァァッ！！！」

「だからさっきから、誰が『なるかな』だぁっ！ボクの名前はルプトナ、『【揺籃】のルプトナ』だいっ！」

その動向に警戒しつつ声を上げ、ルプトナはまるで修験者のように印を結ぶ。術式が完成し、三本の氷の矢が現れた。

「そっちが飛び道具ならこっちも飛び道具だ！いっけぇーー！！」

指差した先に佇む鴉を、矢が弾道に捉える。そして――

「――アローっ！！」

飛翔する氷矢『アイシクルアロー』。真っ直ぐに空の右腿、左胸、眉間を狙う――

――パリィィン！！

「へ…？」

刹那にして響いた音に、指差したままでぽけっと固まるルプトナ。それもその筈、三本の矢は全て空中で迎撃されて粉砕された。

「……詰まらねェ小細工だな。そもそも射撃が本分の俺に、こんなモノが通じる訳がねェって判らねェのか？」

三度澄んだ金属音が響く。地に墜ちた薬莢だ。

見事なインターセプトを決めた空は、傲然とルプトナを見遣った。

「く、くっそー！！さっきから遠くからばっかりで汚いぞー！真面

目に闘えー！！」
「戦場に綺麗も汚いも無ェ。得物を見て予想してない方が悪いに決まってんだろ…」
ゆるりと右腕を衝き出す。デザートイーグル５０ＡＥ【比翼】。
引鉄に掛けられた指が一一引かれた。

先程ソルとクロが駆け抜けてきた獣道。
「「たーーすけてーー！！！」」
そこを逆走しているソルとクロ。
「待てェェェッ！先程の小娘を何処に遣ったァァッ！！」
木々を薙ぎ倒しながら追い縋る海神から、何とか逃げ続けているのだ。
「「なんで幽月にこだわってるんですかーーッ！？」」
「聞きたいかァァッ！」
「「聞きたいですゥーー！！」」
海神はその言葉に、更に目を血走らせる。そして吠えた。
「ならば聞かせてやろう、あの小娘の犯した罪をなァァッ！！」

少し時を戻して。【無銘】を構えた空がルプトナと睨み合っている時。

「いやぁ～、旦那はん殺［や］る気満々どすなぁ～めっずらしぃ～♪」

その様子に嬉しそうな眼差しを向けた幽月。刹那、鴉が駆け出した。

「オォォォォッ！！」

先ず反応したのは海神。打ち払うべく身を捩り――

「邪魔せんといてぇな、折角旦那はんが殺る気出しとるんどすからぁ」

「――ヌウゥッ？！」

止まる。眼前に現れた――否、『染み出した』その女に。そして――身を縛する有機質な闇色の蔦に搦め捕られて。

「――くふふ、動けませんやろ？わっちの『アイアンメイデン』は？」

スラリと、僅かに鯉口を斬る。傘の柄から覗く黒塗りの忍者刀、黒の神剣を再製した贋物【宵】だ。マナ操作能力の無い空には出来ないが、幽月には出来る。贋物で『神剣魔法』を行使する事が。

捉えた獲物を、嗜虐に満ちた眼で見遣る。袖を口許にやり、漏れる哂［わら］いを押し殺している。

「ーー蒲焼き。せや、やっぱし鰻は蒲焼きが良いわぁ」

そして、ポンと手を打った。その言葉に、海神の目が細まった。

「ーーおい、小娘。今何と言った？」

「鰻の蒲焼き言うたんどすぅ。後で旦那はんにタレ作って貰わへんと～」

それを気にも留めず、あっさり言ってのけた。それで一一キレた。

「小娘…その言葉の代償は高くつくぞォォォッ！！！！！」

「ーーという訳だァァッ！！」

「「しょうもなッ！！？」」

走りつつ聞いていたソルとクロは、声を一つに叫んだ……

死に物狂いでの後宙転を決め、腕で跳ね跳んで距離を稼ぐ。

「くッ……！！」

ギリ、と歯を鳴らした空。そこに。

「へへーん、遠くにいたからって安心してたんだろー！」

ルプトナの脚が一閃する。その軌道から青い『刃』が形成された。

それが先程空の放った【比翼】の銃弾を斬り、更に空本人まで狙ったのだ。

「糞ッ！」

迎撃を斬り捨て、即座に回避行動に移る。その速さは迎撃不可。同じく迎撃不可の銃弾を遣う空だからこその判断だった。
黒色の鎖が少し離れた木の枝に巻き付く。それを引き絞ったのと同時に――

「くらえ、ブレードッ！！」

撃ち出された青刃、横薙ぎの一撃は『ブレードフラッド』。ルプトナの持つ技の中で、『遠距離』に対応したモノ。
一閃は神速を持ち――【篭絡】の端を切断しただけだった。

「へぇ、やるじゃん。ボクのブレードを躱せるなんてさ。随分と驚いているみたいだけどまぁ、『予想してない方が悪い』んだもんねぇ～？」
「……んな…に…」

両手を腰に当て、勝ち誇ったように告げるルプトナ。対し、優に二十メートルは離れて片膝を衝いた空は、何事かを口内で呟くのみ。

「くふふ、なんや旦那はん、苦戦しとりますなぁ？」
「あっ！お前、じっちゃんはどうしたっ！」
「十チャン？どの局でしたっけぇ旦那はん？くふふ…」

その真横に幽月が染み出し軽口を叩く。そして哂った、その瞬間――

「ーー莫迦に…莫迦に莫迦にされたァァァァッ！！！！！！！」

耐え切れなくなった空が叫んだ。隣にいた幽月は迷惑そうに耳を塞ぎ、当のルプトナは呆気に取られている。

「いきなし何言うてますのん旦那はん…ってちょ！何してはりますねーん！！！」

「離せェェェッ！今すぐこの怒りを発散させろォォォッ！」

幽月が、空の左腕に取り縋る。その手に握られているのは【無銘】、それを何処かにブン投げようとしていた彼を止める為に。

取り縋ったままの幽月を振り切らんばかりに振り回す。怒りの力、則ち火事場の馬鹿力である。

「な…な、何だとぉぉっ！今ボクをバカにしたなぁぁっ！」

ようやく思考停止していたルプトナが追い付いてきた。よって、矛先が変わる。

「煩せェェッ！莫迦に莫迦っつッて何が悪いッてんだ莫ーー迦！！」

「また言ったぁぁぁっ！！バカって言う方がバカなんだぞバーカバーーカ！！！」

指差した腕を振りながら怒りを露にするルプトナ。対する空も同じく指差しながら罵る。

「つゥ事はテメェが莫迦だッて事を露見してんだよ莫迦がァ！テメェの言葉くらいきちんと考えて喋れっての莫ー迦！！」

「だったらお前だってバカじゃんかバカバカバーーーーカっ！！」

…最早、収集不能。違う意味で緊迫する元戦場。

「うわーん、じっちゃんに言いつけてやるー！！」

涙目のルプトナが印を結ぶ。刹那、大気が震えるように鳴動した。
すると幽月は急きを切って【無銘】に還る。

「オオォォ…お？ルプトナか…！？」

召喚された海神はルプトナを確認して冷静さを取り戻す。
しかし彼女の様子を確認するや、憤怒の形相で空を睨みつけた。

「…貴様ァァ…よくも、ワシの可愛いルプトナを泣かせたなァァッ！」

咆哮と共に海神は水塊を吐き出す。その狙いは――地面。
水塊はあっさりと解け、森の水捌けの悪さと相まって瞬く間に浅瀬のように変わる。

「凍てつくマナよ…全ての動きを遅くしちゃってっ！」

そこに紡がれた詠唱。ルプトナの靴は青い煌めきを発し、凍てつく電撃へと変わった。

「――勝負はこれからっ！ステイシスっ！！」

放たれた一撃に空は【篭絡】を使い脱出を試みる。上手く枝に巻き付き、離脱する――。

「――なッ！？」

盛大に転ぶ。それもその筈、地面は凍り付き【下弦】に包まれた足を縛す。

そう、先程の電撃は『地面を凍らせる為の一撃』――！！

全てを理解し、空はルプトナへと視線を向ける。映るのは、水流の刃を発生させた靴で氷上を滑る少女。

すかさず【天涯】と【地角】を抜き、その三十二発の弾幕を展開する。

だが――止まらない。

白妙の袖と緋袴をはためかせながら銃弾を躱す。華麗に舞う姿は正にアイススケート、氷上の舞姫だ。

「――くっ…【無銘】！！」

思わず見惚れかけるも、直ぐに正気を取り戻す。撃ち尽くした弐挺拳銃をホルスターに戻し、彼の切り札【無銘】を構えた――瞬間。

「――ランサーっ！！」

目前まで迫ったルプトナの回し蹴りが【無銘】を捉えた。空の手を離れて吹き飛んだ【無銘】は破損し、発射機構が潰されている。

更に二撃、三撃と回し蹴りが放たれた。

「糞…！！」

水流を纏う三回転半［トリプルアクセル］に左腕、右腕と払われた

空。最早防御手段は無い。後は躱すしかないが――足が動かない状態でそれは無理というモノ。

ルプトナの脚に力が篭り、足元の氷を踏み砕く。真っ直ぐ、空とルプトナの視線が交錯した――

「――ジョルトっ！！」

そして繰り出された一撃…にしか見えなかった三撃『グラシアルジョルト』。空の眉間、鳩尾、丹田の三箇所を同時に蹴りが刈った。

威力に、氷が割れた。吹き飛んだ空は不様に地に倒れ伏す。

「畜生……」

――負けられないのに…負けたくないのに……何でだ……何で……

「俺は…こんなに弱い……！！」

そう毒づくのが精一杯。血に霞む目でルプトナを睨みながら、彼の意識は暗い淵へと沈んでいった……

The 33th Name・・・"【揺籃】"

……色褪せたセピア色の情景に、彼はそれが己の過去であった事を悟る。

『ちょっとー、聞いてんの『ξμδι』?ジルオルは何処よ?』

『…痛いです…ナルカナ様…』

墨を流したような黒髪の白いワンピースの少女が、地に倒れ伏した男の頬をぺちぺち叩きながら問い掛けている。心配している風は微塵も無い。

『セドカ様ならオイラ…『オレ』に特訓をつけて下さった後に、アケロ様に連れられて何処かへ…』

『はぁ!?アルニーネの奴、抜け駆けを~!』

柳眉を怒らせ、少女は立ち上がる。そして間髪容れずに走り出し一一戻ってきた。

『で、どっちに行ったのよ?』

早く言えとばかりに責っ付く少女。それに男は倒れたままに揉み手をしながら、御機嫌窺いのように遜［へりくだ］った笑顔を向けた。

『…いえその、ナルカナ様がいらっしゃるまで気絶していたもので…わかりません』

『……そう。気が変わったわ『ξμδι』…』

少女の冷たい笑顔に糸目の男は覚悟を決める。ここが己の死地だと。

『――神剣を持ちなさい。ジルオルに代わってあたしが特訓をつけてあげる』

『――ッ大気よ、集いて鎧と成れ…『ウィンドウィスパー』！！』

手元の『紅い月』を握り締めて、条件反射で立ち上がる。流し込むマナに反応して、それは強固な大気の障壁［アキュレイトブロック］を生み出した。更には駄目押しの、颶風［つむじかぜ］による防御力強化。

『『エクス――』』

…だが、少女の手元に生み出された不可視の刃。そのマナ密度は明らかに、彼の全身全霊を籠めた大気の障壁などモノともせまい。

――ああ…どうせ死ぬなら…ファイムの膝の上で死にたかった……

『『――カリバー』ーー！！！』

振り抜かれた『騎士王の聖剣』の名を冠する輝煌の剣撃に防御ごと打ち倒され、再度彼は地面と抱擁を交わした――……

「……ん…？」

頬に当たる何かが当たる感覚に、空は気怠い瞼を上げる。

「…目、醒めた？」

小さな掌に白い袖、黒い髪――

「…『ナルカナ様』…痛ェェ！？」

朦朧とする頭が記憶しているその名を呟いた瞬間、ぺちぺちと叩かれていた頬が抓られた。

「だから、ボクは『なるかな』じゃない！『ルプトナ』だって言ってんだろ！」

「わ、わきゃっら、わきゃっらはらひゃめろ！」

「ふん…！」

憮然と立ち上がるルプトナ。空は抓り上げられた頬を摩ろうとして、後ろ手に拘束されている事に気付いた。加えて身包み剥がされており、装備は一ツ足りとも無い。服と掛布代わりにされていた外套を残して、完全にただの人間と変わらない状態。手足などは緩衝用の包帯が巻かれているのみだ。

「…おい、俺の装備は？」

――参ったな…よくゲームで捕虜になると装備が外されるけど…リアルにやられるとここまで堪えるのか……

空が常に過剰とも言える武装を持つ理由は単純。『選択肢』に幅を持たせる為だ。基本が『人間』と変わらず、あくまで太刀向かえる『可能性』しか持たぬが故に。

「モグモグ…重かったから棄ててきた」

「…とか言いつつ何で俺の非常食喰ってやがんだァァ？！いざやら

れると腹立つなコノヤロー、死ねよ同じ事してた剣の世界の俺ッ！！」

罵倒しつつも冷静に周囲を見渡して見れば、そこは倒された森の中ではない。清澄な清水の湧き出る、何処かの洞穴のようだった。

結構中程のようだが、焼きお握りを頬張るルプトナの姿ははっきりと見えている。ヒカリゴケでも有るのか、薄明かりの中では目を細める必要も無い。

そのまま鋭くルプトナを睨みつけ、彼は問い掛けた。

「……で、俺を捕らえてどうしようッてんだ？身代金でもせしめるか？」

「はぁ？そんな事のためにわざわざこんな面倒な事するもんか」

――だろうな。もし森の中で生活してるんなら金が要る訳が無い。

理解してしまえば単純。空はあの蹴りを受けて、間違いなく『死んだ』と思ったのだ。

だが生きている。そしてそれが自分を捕らえる為に『手加減』されたのだと悟り、更なる屈辱が湧き出た。

「決まってるだろ、お前を餌にノゾム達をおびき寄せるんだよ！ふっふーん、ボクって天才！！」

「……は？」

指に付いた米粒を含みながら自信たっぷり言い切ったルプトナに、その憎悪すら霧散させてポカンと口を開けた空。

「…あのな、幾ら何でも罠だと判りきってる状況に飛び込んで来る

訳無いだろうが…頭数は俺らの方が上なんだからな」
「な、なにをー！」

鼻白みながらの一言にルプトナは眉を吊り上げ――

「フ、それに何より餌が悪かったな。他のメンバーなら兎も角、俺の救助になら容赦無く救出を切り捨てて搦手を使う事を提案する人物が三人居るぞ」
「……お前…自分で言ってて虚しくないの？」

勝ち誇るような空の物言いにジト目を返した。

場所を移し、物部学園の生徒会室。重く沈黙した室内。中央の長机の上には、空の装備一式が置かれていた。

「…すまねぇ、俺がもっと早く辿り着いてりゃあ…」

悔しそうに呟くソル。握り締めた拳は今にも血が流れそうになっている。

「…落ち着きなさい、巽くんならまだ大丈夫よ。巽くんは…私達と違って『人間』だもの」
「「……」」

『――私達と違って』。則ち、彼ら神剣士と違いただの人間である空は、死ねば骸［むくろ］が残るのだ。
だからまだ生きているだろう、という見解を示した沙月だったが。

「…そうなんですね…私達はもう、『普通の人間』じゃないんですね…」

「希美…」

希美の漏らした呟き。つい数ヶ月前までは『普通の人間』だった望と希美にとって、やはりそれは堪える事実だった。

今の自分達は、もう『普通の人間』ではない。死ねば一一自分達が倒してきたミニオンのように跡形も無く消え去るだろう。

《……捜索の件ですが、ルプトナなる神剣士はこの地を知り尽くしている筈です。無闇に動けば各個撃破、ミイラ取りがミイラになるでしょう…》

話の腰を戻したミゥの言葉に、一行は再度思案に移る。

「…皆で一カ所を探すのは安全ですが時間が掛かり過ぎ、かといって単独では余りに危険…戦力を割り振れば襲撃に備え易くなる半面、こちらの見付かり易さも上昇してしまう…ですか。参りましたね…」

《…無い物ねだりになるが、こんな時こそタツミの出番なのだがな…》

《だよね～。失せ物尋ね人迅速解決～♪》

一一シーン……

《…アハハ…ハハ…ハ……》

場を和ませようとするも、盛大に空振りするワゥ。暫く引き攣った笑顔を浮かべていたが、やがて部屋の隅に移動して行った。

「…ともかく、二人一組での行動を基本原則、組み合わせは情報の共有を高速化する為に神剣士とクリスト族ね」
《それがいいでしょう。後は組み合わせですが……》
こうして、捜索隊の組み合わせが練られていた頃――

――ピチョーン……

「「……」」

静まり返った洞穴内に水滴の音だけが響く。
後ろ手に縛られたまま胡座をかいて、瞑想でもするようにどっしりと座った空。神剣でもある靴を脱いで、清水に足を浸すルプトナ。

――さて、考えてみようか。どうやって脱出するかを。
まず第一に、寝静まった所を脱出。足音を立てないように注意して、よしんば脱出に成功したとして。現在位置が何処かも解らない森の中でルプトナの追撃……今度こそ死ぬなコレ。却下。

「……ねぇ」

――第二案、協力するフリをして脱出。『よし、望達を上手くおびき出せるように協力しあおう』『お前バカ？』……無いな、コレは無い。却下却下。

「ねぇってば、聞いてんの？」
「……あ？」

思考の袋小路に迷いつつあった空を現実に引き戻したのは、少女の声。背中越しに話し掛けるルプトナだ。

「……お前はボクの事を『なるかな』って呼んだ…ボクの事、何か知ってるの？」

肩越しに睨むような問い掛け。それに彼は、一ツの結論を出した。

――コイツは他の神剣士達と同じなんだろう。神世の記憶は無い、則ち――『オレ』が何者か知らない。なら、付け入る隙が有る…か…

「…聞けば、答えが返るとでも？甘えんな、この世は等価交換だ。俺から情報が欲しけりゃ誠意を見せてみろ」

「むっ…！」

胡座のまま器用に半回転して向き直り、ハフンと鼻で笑い蔑む空になお視線を強めるルプトナ。

バシャッと水を蹴り上げた脚に――彼女は顔をひそめた。

押さえたのは足首。捻挫でもしたのか、動かすだけでも辛そうにしている。

――魔弾と撃ち合った方か…

「くっそー、流石は破壊神の転生体ノゾム…！」

「…ッて望かよ！」

「ん？そーだよ、あいつの神剣と打ち合った時に捻ったんだ。それ以外に無いじゃないか」

少し気を良くした空だったが、結局糠喜び。訪れた虚無感にギリリ

と歯を鳴らした。
だがここで得られる情報を逃す手はない。黙して続きを促す。
――ていうかアレか？俺は手負いの相手に全力を尽くした挙句、手加減されて負けたってのか…？畜生、鍛えが足りねェ……
「……ボクには、記憶が無い。生まれてからとか、両親家族とか一切ね」
「――……」
そうして彼女の生い立ちを聞き流そうとしていた空の意識が――『紅い闇』から剥離した。
「気付いた時にはこの森の中に居てさ。文字通りに立ち尽くしてた。どうしようか途方に暮れてた所を長老達精霊の皆に拾われたんだ…」
ただ黙して聴き続ける。告解を聞き届ける神父の様に、ただ静かに。
「長老は記憶喪失か何かだろうって言ってた。時間が解決してくれるって。精霊の皆も良くしてくれる……でもボクは少しでも早く知りたい。ボクが何者で、何処から来たのか、何の為に居るのかを」
……それが全て。この少女、ウルティルバディアの住人達から恐れられる『魔女』の全てだった。
「そこに聞き覚えの無い名前で呼ぶ俺が現れたッて訳か…」
「…そういう事」
フゥと溜息を吐いて、空は岩肌剥き出しの洞窟の天井を見上げる。
…そしていかにも面倒臭そうに、髪を掻いた。

ーーあー…聞くんじゃ無かったなクソッタレ……
言い訳をする事になるが、別に俺はコイツに同情はしていない。だって敵だ、コイツは。敵に同情する程甘ちゃんじゃ無いし、そういうのはどこか別の物好きに任せる。
ただ、そうーー敵だからこそ、己と違う思想の敵だからこそ、言い負かしたくなっただけだと。先に断っておくぜ、『俺』。

「ーーまぁ、詰まりはアレだ。お前は今現在、現状何か不満でもあんのか？」
「は？何だよ急に…」
「良いから答えろ。お前には不満が有るのかッて聞いてんだ」

真面目腐った物言い。今までとは少し違う空気を纏い始めたその雰囲気に、彼女は面食らう。

「…別に不満なんて無いよ。さっきも言った通り精霊の皆は良くしてくれるし…人間達はムカつくけどさ…」
「だったらそれで良いじゃねェか。別に過去なんて知らなくても」
「それとこれとは違うんだよっ！…お前には解らないだろうけど、不安なんだよ…過去が、思い出が無いのは…」

パシャパシャと蹴乱される水面。その波紋に幾人もの彼女が映っては消えていく。

「ああ、解んねェな。そんな感傷なんざ抱いてる暇の無い生活送らせて貰ったからよ」
「…え？」

波紋が治まり、やがて小刻みに消えていく。鏡の水面に映るルプト

ナは独り。
その顔には多分に、驚きが含まれている。

「経験則から言わせて貰えば、要するにその感情は『今の自分に満足』して無いから出て来るモンだ。お前は自身の在り方に『不満が出来る生き方』しかしてないッて事だろ?」
「だ、だから不満なんて一一!」
「一一俺は現状『満足出来る生き方』をしてきた。…まァある人の扱き[教え]の賜物だが、兎に角満足してる」

一一そう、もしあの日、あの時、あの場所であの人に出逢わなかったのなら。『俺』は一一一体どうなっていたのか。

一々癇に障る空の言葉に語気を荒げたルプトナ。しかしそれも彼の策略の一つ。それを抑える声量に切り替えて、更なる言葉を紡ぎ出す。

「まァ、なんにしろ俺は俺だ。過去がどうあれ現在がどうあれ未来がどうあれ、俺は俺だ。そこは誰にも否定出来やしない。ただ在りのままに、在るがままに、己らしく在る事を貫くなら一一そこだけはカミサマにだって否定出来るもんか」
「…お前…」

それが彼の数少ない寄る辺の一ツ、『自己正当化』だ。
なんたる卑屈、どうしようも無く矮小な強がり。そうやって自分を肯定する事でしか、生きる意味を見出だせなかった負け狗の遠吠え。

…だがそれで。ただそれだけで。彼はこの世の全てを肯定する事すら遣ってのけるだろう。

「お前は違うのか？お前はお前じゃないのかよ？過去が違う生きモンだったら、今此処に居るお前は幻か？」

「……」

思案するように顔を伏せたルプトナ。懊悩している様子がありありと伺える。

「…ま、そういう考えの人間も居るッて訳だ。俺はそう考えてるッてだけで、押し付ける心算［つもり］はねェよ。つーか、どうでも良い…」

ルプトナに背を向けて、空はゴロリと横になる。座っていようが寝転がっていようが、剥き出しの岩肌から受ける痛みは変わらない。

――莫迦言ってやがる。その過去に一番こだわってたのは俺自身じゃねェか。呑まれたフリまでして、大層なこった……

それが自身への戒め。安易に憎しみに縋り、過去の所為にして。前世に喰われる恐怖から逃れる為に、軽はずみに勝算すら棄てた勝負に挑んだ愚か者の精神［ジブン］への。

「…お前の言ってる事は良く解んない。ボクは頭良くないし…」

そんな背に懸けられた声。小さく、だが――

「でも、解った事が一つ有る」

だが、己の意志が篭められた言葉。それに怠そうに顔を向けた空に向け、溌剌とした表情のルプトナは何かを投げ渡した。

「ーー確かにボクはボクだ。過去がどうでも、ボクは間違いなく精霊の娘ルプトナだ。それだけは間違いない！」
「……あっそ。良かったな」

気の無い返事を返しつつ受け止めた掌には、林檎に似た果実らしきモノ。水の中で冷やしていたのだろう、しっとりと濡れている。

「…お前って、ちょっぴり良い奴だね。ほんのちょっぴりだけど」
「ああ？少し会話しただけで何図に乗ってやがる…」
「勘違いすんなよな、ちょっぴりだ。後は纏めて嫌な奴のまんま」
「……クク。そうだ、それで良い。俺達はとどのつまりが敵同士なんだからなーー」

少し緩んだ警戒心を諫めて、渡されたモノをかじる。シャクリと瑞々しい音を立てた果実は見た目に反して梨のような歯ごたえ。そしてーー

「ーー酸っぱァァァッ！？！？！」

鮮烈な檸檬の酸味に咳込む。色々紛らわしい果物だった。

「ーーぷっ！くくく…やーい、引っ掛かってやんのー！！」
「ゲホゲホッ！！へ、へめぇぇっ！やりやらっはらぁぁっ！！」
「へーんだ、勝手に縄を解いた仕返しだいっ！」
「よっしゃ構えろォォ！俺が修得した肆［よん］の拳法を賞味させてやらァァッ！！」

……捕虜生活一日目（夜）。少年は徒手空拳で神剣士に挑みーー無惨にもハイキック一発で敗北を喫する事となった……。

The 34th Name…"協同戦"

ぽっかりと口を開けた洞窟から歩み出る少年。その姿は一一……何と言うか、野趣溢れていた。

昨夜は気付かなかったが、割れた額から流れた血が付いていた服を洗濯し、ついでに水浴びを済ませたままで外に出た為に上半身は裸。洗髪した頭にはバンダナ代わりに腰帯、下半身には外套を腰布のように巻いている。

「…あーイテ…特に頚が」

石の上で一夜を明かした体はギシギシと軋みを上げており、一発貰った頚を摩りながら歩く度にお守りと首飾り、頭の鳳凰の尾羽の根付けが揺れる。

朝露の降りたジャングルの地面は柔らかいが、それでも包帯を巻いただけで裸足に近い彼はとても歩き辛そうだ。小石や草叢を避けながら歩き、近くの乾いた木の枝や木の葉を集めている。

「……ふぅ。どれもこれも湿気てやがる。使えそうなモノは少ないな」

たまに見付ける硬い枝を小刀のように逆手で構えてみるが、気に入らないらしい。小脇に抱えると別の枝を掴み上げた。

ある程度集めると入口まで取って返し、地面に木の枝を組み合わせて枯れ葉を置く。

そして巾着…ルプトナが空の持ち物から唯一持って来ていた遭難用

装備、この漂流に関係していない煙草好きの教員から拝借した年代物のオイルライターでもって火を燈した。

「――火が出た！なにそれ？」

「うおっ！？…おい、壊すなよ」

いきなり真横から出て来たルプトナに話し掛けられ、ライターを取り落としかけた。彼女はそれを手にとると興味深げに開閉している。代わりに空が手に取ったのは、ルプトナが採ってきた川魚だった。

パチパチと爆ぜる焚火。何となしに顔を上げ見れば、視線の先にはまだライターを玩ぶルプトナ。

「……そろそろか」

木の枝に刺されて焼かれている魚。その焼け具合を確かめていた空は一本を投げ渡す。

「おっとっと…」

それを器用に受けとり、ライターを投げ返す。既に魚にかぶりついている空もまた器用に受け止めると、巾着の中に突っ込んだ。

「…ング…おい、この魚本当に食っていい魚か？パッサパサで味無いし、やたら小骨多いぞ」

「五月蝿いなぁ全く、お前が食べたいって言ったんだろ。捕虜の癖に生意気だぞ」

「捕虜にも人権有んだぞバカヤロー、ジュネーブ条約読み上げてやろうか」

言いつつ巾着を漁り、取り出したのは味噌。遭難セットに常備している調味料のひとつだ。

なお、肝心の非常食［希美謹製焼きお握り］は既にルプトナが平らげている。

「うわっ！お前なんてモノ食ってんだよっ！それってウン…」

「味・噌・だ！日本の心の一ツだッ！！」

味噌を塗った焼き魚を頬張りながら、歪［いびつ］な会食は続いていく……

土を被せて火を消し、空は天を仰いだ。蒼穹に昇っていく白煙、幽鬼の如き白月。

「…いいのかよ、水を掛けなくて？その方が煙が出るぞ？」

そこに呼び掛けたルプトナ。彼女とて解って空に食わせたのだ。

「構わねーよ。家［うち］にはすこぶる鼻の良い奴が居るからな…充分だ」

「鼻？犬でも飼ってんの？」

「クク…確かに犬ッちゃ犬か一一熱ッ！！」

薄く笑いながら焚火跡を踏み躙る。何気なく遣ったその行為、殆ど

裸足だという事を忘れていた。

「……んで、どうする？まだ発見されるまでは時間有るだろ」

「お前に教える義理は無いねっ。ボクはボクのやり方でノゾムを倒す！」

「どーぞご自由に…それじゃ俺も御暇するかな」

ケンケン跳びしながら足に息を吹き掛ける。

…因みに下は非装備ではない、運動選手がよく穿くアレを穿いている。

「勝手にしろよ。餌にはなったし、解放してやる。…ニンゲンの街はアッチの方だ」

恐らくは森の中の気を探って神剣士に気付いているのだろう。

指差す先は南西、厚い木の壁に阻まれている。

「どーも。ま、俺は服が乾いてから出立するから…寝るわ」

それを確認して、空は柔らかい草の上に仰向けになった。軽く火傷した右足を左足に組み、バンダナを下げてアイマスクにする。

「……」

その様子をしばらくじっと見詰めていたルプトナ。五分程もそうしていただろうか、唐突に溜息を吐く。

一一刹那、風が吹いた。

「……呆れた、ホントに寝てら」

首筋まで迫った、水刃纏う【揺籃】。にも関わらず空は一定のリズムで呼吸を繰り返している。

穏やかに上下する、鍛え上げられた剥き出しの上半身。大きな疵が横縦斜めと三本走り、その他にも小さいモノを挙げればキリが無い。

…『敵同士だ』と。この少年は言った。その言葉を吐いた本人が、その敵にこんな無防備を曝して良いのか。

【…試したのさ、この小僧は…】

（じっちゃん?…『試す』って、何を?）

心の裡に響く海神の声に、彼女は疑問を返す。

【本当にお前が『破壊神を倒したい』のなら――情報を持っている自分を殺すだろう、と。それを試したのだろうて】

（――……!!）

息を呑む。心の繋がっている海神は『ソレ』を証拠に語った。

【ルプトナ…お前は迷っているのだろう?始めからその思いはあった。この小僧と話してそれは確信に変わった筈だ。彼等と手を取り合えるのではないか、と…】

（……でも、もう遅いよ。ボクは戦う事を選んだ。戦って守るって決めたんだ、あいつらと――）

【……そうか、ではもう何も言うまい。ただ…ワシはいつでもお前の味方だ】

（…うん、アリガトじっちゃん）

最後にもう一度、少年を眺める。やはり変わらないリズムの寝息。

「…変なヤツ。ホント変なヤツだ、お前は…」

そう、微笑み掛けて。ルプトナは森の中に消えて行った。

森中を駆ける影が二つ。望とゼゥだ。

「……ゼゥ、他の皆の位置は判るか？」

《…ええ》

結構なピリピリムード。それもその筈、この二人は実のところ組むのは初めてだ。

余り会話も無く、森の中を探索し続ける。そんな中、望は壱挺の拳銃を握り締めた。

ほぼ黒に見える深い紫地に金の装調が施されたそれは、ベレッタＭ９２Ｆをモチーフとした【地角】。

「…早く見つけ出さないとな」

各班がそれぞれ一ツずつ持つ、空の装備。それを握り締めて決意を新たにする。

《…そうね。とっとと見つけ出してあの馬鹿男にまたお灸を据えてやらないと》

「はは、そうだな――ッ！？」

その瞬間望に向けて、黒い髪の少女が飛び掛かった――！

目を覚ました時、先ず彼が感じたのは『生きていた事』に対する安堵だった。賭けに勝った達成感に包まれながら周囲を見渡すが、己以外の存在は無い。起き上がり伸びをして――

「……おお、蛭［ヒル］が…」

二の腕の内側に食らい付いていた蛭のような生き物を、ライターで炙って落とした。

その後しばし全身を確認するも、他には居ないらしい。

「さてと、んじゃあ行くか――」

と、洞窟に取って返そうとした瞬間。森の中に爆音が轟いた。鋭く見遣れば、遠く木が倒れる音と鳥の羽音。

「……始まったな。間に合えば良いけどよッ！！」

土埃の柱が立つその地点を目掛けて。空は裸足に近い足に食い込む小石や小枝、その他諸々の痛みすら踏み潰しながら走り出す――！！

土煙の中から飛び出つつ、黒髪の少女は回し蹴りを放つ。二度振るわれたローリングソバットを受け切れずにその神剣は粉砕され、最早守りは無い。

「――ランサーっ！！」

そして、文字通り『ケリ』が付いた。三発目の蹴りに頚を打たれ――

「……」

”緑の女”が消滅した。だがまだまだ。森閑より涌きい出る色とりどりの女また女――

「くそっ…キリが無い…」

ルプトナが毒づくのも無理はない。
視線の先には三体。赤、黒、青。

「紅蓮よ、その力を示せ…」

「――そうそう好きにはさせないってのっ！アローっ！」

赤の詠唱に反応し、彼女もまた印を結ぶ。刹那に現れた三本の氷の矢が、赤いミニオンを狙って放たれ――

「沈め、氷の柩――『アイシクルアロー』」

「また…っ！！」

青が紡いだ同じ氷の矢により、撃ち落とされた。砕け、破片が地面に降り注ぐ。これで四度、同じ方法で妨害されたのだ。

そこに術式を完成させた赤が双刃剣の切っ先を向けた。

「――『ファイア――ッガ!?」

その側頭部に、何かが激突した。

切り伏せた黒髪の少女が消滅していく。これで彼等を狙った黒と緑二体の、計三体のミニオンは全滅した。

「ゼゥ、他の皆は!?」

《やっぱり襲撃を受けたらしいわ。こいつらが市長の言ってた『ヒトモドキ』でしょうね》

「……だとしたら、マズい。今の空には闘う術なんて無い…!」

そう、その少年には今、何も無い筈だ。装備など何一つ持たず、もし今ミニオンに遭遇すれば成す術も無く殺されるだろう。

ミニオンはルプトナとは違う。打算など無く、ただ目の前のモノを殺戮するだけだ。

《…安全を考慮するなら、皆と合流するべきだわ》

「そんなヒマはないだろッ!俺はこのまま行く――!」

一方、落ち着いたゼゥ。そこに有るのは――

《――あの男は少なくとも馬鹿じゃない。どんな状況でも自分を冷静に見詰めて、必ず生き残ってきたわ……アイツ自身の『壱志「いじ」』でね…》

「ゼゥ…」

『確信』。信用している訳では無いし、信頼してもいない。だが、そこだけは間違いないと。彼女は知っている。

「…解った。皆と合流しよう」

《ええ…》

踵を返し、合流するべく駆け出す。そんな、少し前を飛ぶ小さな黒い少女に向けて望は要らない言葉を呟く。

「…ゼゥは、空をよく見てるんだな」

《一一ば、馬鹿言わないでっ！誰があんなヤツっ！急がないと置いてくわよ！！》

速度を上げ、二人は翔ける。

履行された幻想の方程式が齎［もたら］す、命素［マナ］を燃やしながら虚空より現出した奇跡の炎を行使した赤ミニオン。

「一一んだよ、随分苦労してんじゃねェか？」

だが、その頭部を襲った衝撃に狙いが逸れた。炎の砲弾はルプトナではなくその横の大木を撃ち砕く。

「……なんで、お前が…」

そのルプトナの視線は側頭部を押さえる赤ミニオンではなく、それ

を成した少年に向けられていた。
バンダナを外して左手に持ち、右手では何か石つぶてのようなモノをジャグリングしている少年に。

「『なんで』？…ハッ！虚仮にされたまま引き下がるのは趣味じゃねェんだよッ！」

と、駆け出した。反応し跳び下がり、距離を取りながら闖入者を観察するミニオン達。
空は構わず、何かを拾いながらルプトナのすぐ近くまで走り寄る。
その手に握られていたのは、氷片。ルプトナと青ミニオンの撃ち合ったアイシクルアローの破片だった。

「…お前、ボクが憎いんじゃなかったのかよ」
「テメェの名前はなんだ？」

背中越しの言葉。冷や汗に濡れているその背中に、ルプトナはぽけっと視線を向けて。

「…ルプトナだよ。精霊の娘、ルプトナだ！」

不敵な笑顔と共に、再度その言葉を返す。

「なら問題ねェな。俺が憎いのは『ナルカナ』だ。『ルプトナ』じゃねェよ。それに一一マズかったし、この下無い最悪さだったけど……飯と寝床の恩は返さなきゃならねェだろ！」

背中でそれを感じたのか、空もまた嗤［わら］う。強い衝動を抑え込むように狂暴な、牙を剥くケモノのような嗤い顔。

「…それで来たっての？やっぱりバカじゃんお前」
「望と闘［や］り合ってるかと思ってたんだよ俺ァ。第一、自分自身吃嘆［びっくり］だぜ…」
呆れ返った言葉に呆れ返った言葉を返す。彼自身、己の阿呆さ加減に呆れているのだから。

一一まさか俺が此処まで、勝ち目の無い闘いが好きな莫迦野郎だったなんてよ…！！

「武器無しで闘う気？それで無くても弱い癖にさ」
「ハ、武器なんざ『可能性』の傷口を拡げる為だけの道具だ。大事なのは闘う気概、ヤル気が在るかどうかだろ。それでも要るッてんなら三ツ、飛び切りの装備が在るぜ？」
「何だよ、ソレって？」

更に森の中からミニオンが歩み出る。青と緑、白の三体。これでこの戦域に居るミニオンは、青二緑赤黒白各一体の計六体。

「一一遣い手たる躯［カラダ］に鞘たる心［ココロ］、刃たる魂［タマシイ］がな！」

言い、三度剥き出しの己が胸を叩く。
その開き直りに、低く構えた戦闘姿勢ままで彼女は。

「そんなもん、ボクだって持ってんじゃんばーか」
「煩せェ、持ってねェ奴らが目の前にいんじゃねーかよ。心も魂もねェのがよ」

各々前方にミニオンを捉え構える。そこに響く第三者の声。

『…決定だな、『俺』。もう間違いない……お前は『オレ達』と敵対した……！！』

（初っ端喧嘩吹っ掛けてきたのはテメェだろうがよ？俺ぁ受けた恩も、屈辱も忘れねェ…！邪魔するなら勝手にしろよ）

『クク…邪魔するまでもねェだろ？今回は永遠神銃の助けは無いぜ。…此処で死ね…『失敗作』！！』

『紅い闇』からの啼き声、無数の鴉の哄笑。

（――悪りィな、その期待には応えられねェ…）

それに口角を吊り上げて。バンダナに氷片を乗せる。両端を掴み――出来上がりだ。

――さぁ、覚悟を決めろ。積み上げてきた鍛錬と研鑽を総て出し切れ。運でも何でも使えるモンは出し惜しむな…！

生き残る。何としたって、生き延びろ！！

「名前…」

「あ？」

決意を固め、身を熱し心を冷やし。魂をニュートラルに。

その最中、声が懸けられた。

「お前の、名前は？」

背中越しの声に、張り詰めた緊張を解けぬまま。そういえば己がまだ名乗っていなかった事を思い出す。

「――巽。巽空……〝ニンゲン〟だッ！！」

そして高らかに、誇りに充ちた声で。そう唄い上げた――……

The 35th Name…"三騎"

「精霊光結界…展開。――『コンセントレーション』」

掲げられた白の杖より魔法陣が発せられ、加護が展開された。
味方の防御力を底上げする精霊光［オーラフォトン］。そして――

「命を削る、閃き…」
「――ッ!?」

それを目眩ましに、一瞬の内に空の懐に飛び込んだ黒。薄ら笑いを浮かべ、既に刀は鯉口が切られている。

「――極限まで、いくよ…?」

『飛燕の太刀』。鞘走る刀は先ず横薙ぎの壱の太刀を繰り出し、続き袈裟掛けの弐の太刀。最後に、駆け抜け反転した勢いに載せた参の太刀が振るわれる――ハズだった。

「――グ、ふッ!!」

その少年が初太刀を見舞うまでに突進し、柄尻に打たれながらも腕にしがみつかなければ。

――クソッタレ…肋［アバラ］とか折れてないだろうな…?

「――てやぁぁっ!!」

隙だらけの黒に向けて蹴りを見舞うルプトナ。

しかし緑の展開する広域物理防御［ディバインブロック］の厚い大気の守りに包まれており、大したダメージは無い。

「おいタツミっ！お前何しに来たんだよ、全っ然役に立たないじゃんかっ！」

「誰の所為だ莫迦ヤロォ！テメェが俺の装備全部棄てやがったからこんな事する羽目になってんだろうがッ！！」

「なんだとー！さっきは散々カッコつけた事言ってた癖にー！大体服くらい着て来いよっ！あの服、ボクの蹴りで破けないくらい頑丈じゃんか！」

「心構えだッつーの！だから俺ァ望と闘［ヤ］り合ってるかと思って息急き切らして来たんだよッ！それに本気の神剣相手にはあんなモンじゃ意味無ェ！」

転がり、隊列に戻った黒を尻目に喧々諤々と口論しながら、彼は巾着に詰めている氷片を取り出す。

先に包んでいた方は、先程の一撃で落としてしまっていた。

その間にも包囲は徐々に狭まり、致命の一撃を与えるべくミニオンはジリジリと漸進して来る。

「凍えるマナよ――」

その漸進を止める為にルプトナは印を結ぶ。凍てつく電撃によって、ミニオン達のチカラを奪うその術式を。

「凍てつく風よ、凪げ……」

そこに風は吹く。青ミニオンが紡いだ奇跡、純粋な青いマナの凍える風はマナの振動すら凍結させる――！！

「――来たな！」

対抗魔法に反応し、空は氷片を乗せている左腕のバンダナをグルグルと回転させる。

――ヒュンヒュン…

ソレは風斬り音を立てながら回転して――

「――『アイスバニッ――…！」

「ッらァァッ！！！」

掛け声と共に振り抜かれた。

――『投石紐［スリング］』。

それは、恐らく『武器』というカテゴリーの中で最も原始的な部類に入るモノ。近場に落ちている石などの、手頃な重さの小片を遠心力で勢い良く投擲する為の射出武器。

人差し指に結ばれた片方の端を基点に、弾丸とされたアイシクルアローの欠片が巻き込まれた腰帯が翻る。

回転を加えられながら『撃ち出された』氷片は、空気抵抗により鋭利な部分を弾道に向けながら飛翔し――詠唱中の青の額に直撃した。

「うッし！」

その手応えに空は会心のガッツポーズをカマし…

「……損傷皆無。戦闘続行」

「……オイオイ」

僅かに額を赤くしただけの、青く濁った瞳とバッチリ視線を合わせてしまう。

――予想はしてたけどマジで効かねぇ…勘弁しろよ、これ以上の手は思いつかねぇんだ!!

マナの結晶である為、ミニオンに対しても効果が有る氷片。
しかし撃ち出す巽空［カタパルト］が悪い。ただのニンゲンに過ぎない彼の腕力では悲しいかな、命中したところで痛いくらいだ。

…因みに、緑が空の氷片を防御しなかったのは単純。眼中に無いだけだ、マナを持たない存在など。

「――ステイシスっ!!」

ルプトナの術式が完成し、電撃が放たれる。包囲を狭めつつあったミニオン達は巻き込まれ――

「……無駄」
「ちっ!!」

赤ミニオンの展開した広域魔法防御［イミニティー］に、完全に無効化された。

「糞、統率とれてやがんな…」
「攻撃がちっとも通じない…」

愚痴りながら空は氷片を取り出し、ルプトナは【揺籃】に意識を沿

わす。
ミニオン達はチラリと視線を交わし合った。それで意志を疎通したらしく、濁った十二の視線が邪魔者を捉える。

多寡がニンゲンの癖に、神の手を煩わす命知らずを。

「一体ずつ潰すしかない！往くよタツミっ！援護しろ！」
「命令すんな！けど遣ってやらァ！来いデク人形ども、ニンゲン舐めんなよッ！！」

水刃を発する【揺籃】、唸りを上げるスリング。
突き出される西洋剣、槍、双刃剣、刀、杖。ミニオン達もまた、各々神剣を構え――

「「「「「「「「来たれ」」」」」」」」

その神剣が、各属性色に輝いた。

森の中を疾駆する影。目で追う事も困難な程の速度で走る、大きな何かを背負った影。
その行く先に、青赤赤緑四体のミニオンが踊り出た。

森林が激震する。木々が薙ぎ倒され、その合間から二人が転げ出た。
開けた小高い岡の上には、環状列柱［ストーンヘンジ］のような建

造物が聳［そび］えている。

空とルプトナはどちらも上手く受け身を取り、止まらず駆け一一ようとして。丁度その二人の間を、土埃の柱が分断した。

「クソッタレ…ッ！？」

土埃に咳込みつつ、視線を上げた。目の前には一一たった今隆起した土塊の列柱。

「タツミー！大丈夫！？」
「こっちは何ともねェ一一？！！」

一一それに気付いたのは、今まで積み重ねてきた研鑽の賜物。背後から飛び掛かって来た赤い影に。

「一└┼┼└ ┐十工！！」

後転で自身をかい潜ったニンゲンに、その可聴域を越えた金切り声を上げたソレは一一炎を纏う真紅の蜥蜴。

一一『火炎のガンカ』。下位永遠神剣から現出した赤属性の、使役される者の神獣。火蜥蜴と呼ばれるエレメンタルの一種で、数千度の炎を纏い敵を焼き尽くす。

「ぐアッ！？」

更に上空より降ってきた嚢鰻［フクロウナギ］。後ろに跳んで巨大な咬牙を回避した空だったが一一触角に打たれて転がった。

――『獰猛なアギト』。青属性の、同じく使役される者の神獣。深海に潜み住み、電撃により敵を弱らせて強靭な顎で獲物を噛み砕く狩猟者。

「次から次に……！」

直ぐさま立ち上がり駆け出すも、激震し続ける地に足を取られて屈む。その頚が合った地点を、黒い一閃が薙いだ。
爪の生えた羽を持つ、吸血鬼の一撃が。

――『闇のウツツ』。黒属性の神獣。狙った獲物の断末魔を無上の悦びとする外道。

偶然だろうと何だろうと、運も実力の内。しかし状況は依然として最悪だった。
揺れていた地面が割れ、震源が姿を現す。緑色の、三股に分かれた顎を持つ巨大なガラガラ蛇。

――『地嵐のオロ』。威容に反して温厚な、地震や地割れを自在に操る緑属性の神獣。

「┼┐┌┳┫┤├┼┻━┃！！！」

戦場に響く雄々しき咆哮。土煙の向こうから歩み出る、白い百獣の王。

――『白のタテガミ』。その外見に相応しい誇り高い気性を持つ白属性の神獣。咆哮には仲間に意志と勇気を与え、敵の戦意や希望を挫くという。

「…壮観だな、幻獣動物園ッてか？」

吐き捨てながら立ち上がる。土柱の向こうからは剣戟音が繰り返し響いて来ている。

ミニオン達はルプトナを狙い、神獣達が空を狙う。

現出した神獣は、ともすれば弱点となる。しかしそれは『神剣と闘えるチカラ』が有る相手の場合だ。

空にそのチカラは無い。それをミニオン達は見抜いた。

故に分断し、神剣士を自分達で相手取り、ニンゲンを神獣に任せたのだ。『確実』を期す為に。

――クソッタレ…！ミニオンの癖に知恵が廻りやがる！

眼前に並ぶ、いずれも己の手に余る神威の顕現。だが、数が合わない。後一体、青の神獣が居るハズだと注意深く視線を巡らす。

しかし――それが陥穽。注意を散じるべきでは無かった。その注意を別の方向――例えば。

「――ガハッ！！？」

――地面に潜ったままの、オロの尾部に向けるべきだった。

斜めに突き出した土柱に打突され、後方に数メートル飛ばされた。

列柱に叩き付けられ、地に落ちるや嘔吐する。

「カ、ハッ…！」

吐瀉物に紅い血が混じる。内臓をやられたのかもしれないが、死んでいないだけマシだ。
しかし、無力化された。ただのニンゲンがこんな理不尽な技に耐えられる訳が無い。

……後は捻り潰すだけ。
そんな獲物に、五体の神獣はにじり寄る――

「――たぁぁっ！！！」

そんな空の背後の土柱が蹴り砕かれ、ルプトナが飛び出した。

「ハァ、ハァ……タツミっ！？」

だが、助けに来た訳ではない。彼女も彼女で満身創痍。ただ単に状況を打破しようと、その意見を求めて来ただけだ。

そこに、地に倒れ臥した空が目に映った。慌てて肩を貸せば、弱々しく呻き声が返るだけ。
眼前には五体の神獣、後方からは六体のミニオン。

「…くそっ…どうしたら…！」
「…んだよ…もう…諦めたのか、ルプトナ？」
「タツミ…！…でも、こんな状況でどうしたら良いんだよっ」

青ミニオンが歩み出る。神獣を現出させていない方だ。

「…諦めんな…まだ、死んでねェだろ…！死ぬまでは、死んでねェんだからなァッ！」

ルプトナの肩から離れ、己が二脚で立つ。腰帯を額に巻き、打ち付けて割れた額から流れる血を止めて。空は構えを取った。

…視界は歪み、霞んで見える。元より一撃でも受ければ死ぬ脆弱なニンゲン、今生きているだけで奇跡。

「…敵性殲滅……」

その奇跡を砕くべく疾駆するミニオン。神剣には凍気が纏わり付き、殺傷力を上げている。その名は『ヘヴンズスウォード』。奇しくも『天国』の名を持つ剣戟。

「一一っ！」

対応して冷霧の防護膜『チルバリア』を展開したルプトナだったが一一薄い。一撃すら耐え切れまい。

「…これで、終わり……」

例え止められたとして、数の暴力の前に立ち向かい様が無い一一！

”一一ナナナナナナ！！”

凄まじい圧力を持った黒狼の咆哮に気圧され、青の剣が止まる。それに気を取られ防御を疎かにしたミニオンの顔面に一一

「一一征ヤァッ！！！『崩山槍拳』！！！」

「一一ガハッ！？」

黒い精霊光を纏った爪、【荒神】が打［ブ］ち込まれた。
見事な迄のクロスカウンター、完全に勢いを逆手に取られたミニオンは蒼い燐光に変わり消滅していく。
「先ずは一丁上がり…ッと」
「「……」」
つい先程まで場を充たしていた悲壮感やら何やらを完膚無き迄に打ち砕いて。
かつて、神世の古に”闘争の神”と呼ばれた男が。
「…俺、参上！！」
『【荒神】のソルラスカ』が、大見栄を切りながら現れ出た——！！
「タツミ…あれ…お前の仲間？」
「…仲間じゃねーよ、あんな恥ずかしい奴…」
「…スマンな、少年少女。アレが主なりの決め方なのだ…」
向けられた視線は、いずれも冷たい。ミニオン達も空達も、神獣である黒い牙も。
「よぉ、無事…じゃねーみたいだな。こいつら片してからしっかり理由を聞かせて貰うぜ…」
そんな事はどこ吹く風。ソルは一度ルプトナを見遣ってから黒い牙を神剣に戻すと、その背に負っていた黒い包みを解き地面に衝き立てた。

「そら、テメーの得物だろ巽?それともギブアップか?」

衝き立てられた片刃の大剣。柄尻に結わえられている朱い飾り紐が、風に靡く。

「…吐[ぬ]かせ…やっとツキが廻ってきたんだ、こっからが本番だ!!」

痛む全身を鼓舞しながら柄を握り締める。刹那にして帯電し始める【夜燭】、『盟約の獣』レストアスの煌めき。

「何だか解らないけど、とにかくやるって訳だ…」

その二人の様子を見ていたルプトナ。彼女もまた、強く漲る眼差しのままに。

「――往くよ、じっちゃん!!」

【おうとも!見せつけてやろうではないか、ワシらのチカラを!!】

【揺籃】を蒼く煌めかせて、構えを取った。

三人を囲む包囲は、六と五、そこにソルラスカを追跡してきた四体が合流した計十五。

「┐┬┬┬┬┐!!」

白のタテガミが吠える。展開されるは『パッション』。漲るチカラに後押しされて、一斉に身構えるミニオン達とその守護神獣達。

「おい巽、競争しようぜ？どっちがミニオンをより多く倒すか。負けた方は勝った方の言う事一つ、何でも聞くって事で」
「下らねェな。つーか、限りなくテメーに有利な条件だろ神剣士…
…乗った、目にモノ見やがれ！」
「何だよ、ボクは蚊帳の外かよ」

だが、三人には不思議と恐れはない。何を隠そう、似た者三人なのだ。

考える事の嫌いなソルラスカ、行動第一のルプトナ、理屈っぽい癖に直情傾向の空。
元より、どいつもこいつも後先など考えない阿呆。彼我の戦力差など一一眼中に無い！

三人は、ゆっくりと後ろに向けて腕を伸ばす。予定してはいなかったが、同じ動作で拳を一度打ち合わせる。

「「「一一スタート！！」」」

それが一一三騎の開幕の狼煙だった。

The 35th Name ?・・・"三騎?"

繰り出され続ける緑ミニオンの槍戟を握り止め、その男は腕力で捩じ伏せた。

「一一だらァァッ!!」

剛腕一閃、弾き飛ばされるミニオン。

しかし浅い。まだ立ち上がり一一眼前に迫ったソルラスカの拳を見た。

「まだまだァァッ!一一『猛襲激爪』!!!」

引き裂かれて消滅していくミニオン、それを貫いての槍戟が彼を襲う。

「雷光の一撃……」

「うおッ!?良いもん持ってやがるな!どんどん来やがれ!!」

別の緑が振るう槍、穂先と石打を遣う苛烈な『ライトニングストライク』を受け流すは『流舞爪』。捌ききり、隙を見せるミニオン。

好機に、【荒神】に精霊光の煌めきが灯った。

「天の果てまでぶっ飛びやがれ!!『爆砕跳天噴』!!」

「この程度…」

それを地に叩き付け、周囲に衝撃を放つ。だが、ミニオンの『デボデッドブロック』が巻き起こす竜巻に防がれた一一

紅に染まった双刃剣が閃く。巻き込みからの斬り払いを屈伸運動で回避し、ルプトナは宙を舞う。

そこを狙い、赤と青は同時に仕掛けた。

「その活力、燃やし尽くす――」

「薄氷の如く、散れ――」

死すら厭わぬ突撃、赤く熱する『ヒートパラライザ』と青く凍える『インパルスブロウ』が交錯する。

「全方位に死角無し！流水の蹴り、受けてみろ！」

――刹那、【揺籃】から水流が迸しった。

「大回転っ！！！」

空中で繰り出された垂直半月蹴り『サイクルオブウォーター』。その水刃はしなやかに、しかし鋭く青を両断し――赤の『ファイアクローク』に阻まれ蒸発した。

「疾く駆けろ、灼熱のマナ――『ライトニングファイア』」

「うわっ！いきなり？！バニーッシュ！」

着地点を狙った炎の槍を打ち消し、着地する。赤は再度双刃剣を赤熱させ、ルプトナを狙う――！

低く地を擦りながら【夜燭】を刷り上げるも、あっさりと空中を泳ぐアギトに避けられてしまう。
触角による攻撃を避ける為に跳びすさるが、予想に反して飛び掛かってきたアギトの牙を【夜燭】を盾に受け止めた。

「～～～～ッ！！！」

力を殺し切れずに押される。更には電撃を纏った触角が鞭のように振るわれ、掠るだけでも文字通り焼けるような激痛が走る。

瞬間、感じる殺気。背後より迫る青く濁った瞳、凍気纏う西洋剣。
先程スリングによる一撃を受けたミニオンだった。

「そんなに電気とか氷が好きなら気が済むまでくれてやる…遠慮は要らねェ…レストアス、最大出力！！」

呼び掛けに応え、帯電し蒼く煌めく【夜燭】。脅威を感じたかアギトは一旦退くべく身をよじり――レストアスの昂電圧に思考の自由すら奪われる。純粋な神格の差が勝敗を分けた。

「『電光の［エレクトロン］――」

アギトと対峙する空は、八双の構え。かつてこの剣の主が得意としたモノ。
久しいその感覚に、レストアスはいつもより昂［たかぶ］った。

「――剣［ブレード］』ォォッ！！」

反転しながら振り抜いた凍える雷刃の一撃。レストアスの躯の一部が融合した、ほとんど一本背負いの如き大上段からの袈裟斬りは一一

「…重っ…傷…ここまで……」

噛み付いたまま離れられなかったアギトの顎と、その主であるミニオンを神剣ごと纏めて両断した。

「一一ハァ、ハァ…」

やっと一体を片付け、同じく闘う二人を見遣る。そして思い知った、自分が一番苦戦している。

力任せながらミニオンを圧倒しているソルラスカ、華麗に舞い踊りミニオンを寄せ付けないルプトナ。対して己は。

一一結局、足引っ張ってるだけか俺は……！

ギシリと握る手に力を籠める。まだだ、まだ遣れると己を叱咤する

一一

『一一クク、掛かったなマヌケェェッ！！』

「一一ガ！？！」

その心に『紅い闇』が殺到する。押し潰し、奪い去る為に。

『待った…待ち侘びたぞ！【夜燭】を手にする時を！永遠神銃が無く、契約者の無い永遠神剣を手にするこの時をなァ！』

「あ、ぐァァァッ！！？」

流れ込む膨大な『聖なる神名［オリハルコンネーム］』。その情報量は生き物が許容する範囲を逸脱している。

『奪う…お前を砕いて『オレ』がお前に成り代わる！！そして今度こそ南北天戦争のケリをつける！！【夜燭】のチカラを持ってな！』

哄笑が響く。無数の鴉の啼き声に、次第に空の意識は紅く塗り潰され――

”…復讐の先になど…何も無い。永劫の空莫が拡がるのみだ。お前はこうは成るなよ…タツミ＝アキ…”

「――ッ！」

耳に残るその声、眼に焼き付いたその背中は――…

――余計な世話だ。俺は…俺の願いは、神世の古から何一つ変わっちゃいない……！！

握り締めた拳が裂ける。滴る深紅の血、そこから――

「来い、レストアス――『エレクトリック』……！」

『グァァァッ！！貴様ァァッ！！』

蒼い稲妻が紅い闇を祓う。空の全身に纏わり付いたレストアスが血液にすら溶け込み、その身の内の神名を焼く。

「対抗策なら考えてあんだよマヌケ……それに、剣の世界でも言ったろ…テメェの指図は受けねェ、俺は俺だァァッ！！」

更に電圧が上がる。それはレストアスが認める空には影響を及ぼさない。しかし、神名の『躰［かたち］』を持って現出した『神』には本来の威力を持った。

『クソッ…タレ…！』

「ありがとよ…じゃ、失せろ！！」

『神』を追い落とし、眼前の敵を見据える。未だ健在の敵軍。

一一躯はただ、遣い手……

【夜燭】を構え直し、電気の塊であるレストアスに『思考』という電気信号を読み取らせる。

一一心はただ、鞘……

大気を熱と冷気、相反する二極を以って揺らめかせながら。レストアスの電圧によってその身に掛かる『制限』を取り払った。

一一魂こそが、我が刃……！！！

躯は灼熱し、心は氷点下。魂はその中点、零［ゼロ］一一！！

地を蹴り、駆ける。その速度は先程の比ではない。

だが、それは未だ人間の領域…いや、『巽空』というニンゲンの実力内。

あくまで彼は『彼自身の限界』しか出していない。人間が生理機能として持つ制限を解き放ち、火事場の馬鹿力を引き出しているだけだ。

「┫╋┳┻┓┃┏┓┫━┳！！」

咆哮しながら飛び掛かるオロ。三股の顎を開き、ケモノと化したニンゲンを食らい込む――！

「――覇ァァァァッ！！！！」

オロの下顎、二股に分かれたその部位に『エレクトロンブレード』が叩き込まれる。

空は飛び掛かるオロの下を駆け抜けながら――その長躯を捌き斬った。

…研ぎ澄まされた神経は目に映るモノの動きを遅く見せる。危機に陥った時にスローモーションに見える現象と同じだ。そして今の空は、それに躯が付いていける。

「┘┳┫┻┓┗┌┓├└！！」

その時、燃え盛るガンカの抱擁を受ける。しかし驚愕したのはガンカ。己の纏っていた焔がレストアスの稲妻に打ち消され、己が身が凍てついていく――！

彼が身に纏うは凍てつく雷神の法衣『ハイパートラスケード』。物理的な防御は見込めないが、殊対魔法に関しては絶大な防御を誇る。更にその凍気と雷は、触れた敵の身を焼き凍らせる反撃効果を持つ。

完全に凍結したガンカに躊躇い無く、【夜燭】の剣が衝き立てられた。

「ーーッグ…！！」
「ーーカハッ！！」

対峙していたミニオンの変調を悟り、ソルラスカとルプトナは空を見遣る。

轟音とともに地に墜ちたオロ、剣に両断されたガンカが消滅する。『永久機関［パーマネントエンジン］』を破壊された緑と赤のミニオンの神剣が消えた。『奇跡を行使する神の剣』が無くなれば、『ミニオン』という『奇跡』も成り立たない。

その二体は静かに、素材と成ったマナに還って逝った。

「ひゅー、やるじゃんタツミ！」
「ヘッ、そう来なくっちゃな！」
「…元気だな、テメーら…！」
「業火よ、地を染めろーー」

合流し、三人で陣形を組む。刹那紡がれた赤の神言がーー

「へっへーん！その程度、ボクには通用しなーいっ！」
「ーーグッ…ああ…何故だ……」

三つの氷の矢により止められる。そして止めの一閃『ブレードフラッド』が疾り、胴を両断した。

「負けてらんねェな！残り四体、突破するぜッ！！」

吠えるソルラスカ。白と黒、その守護神獣。形勢は此処に拮抗した。

「……」

「…狙ってあげる…息の根、止めるからね」

白がマナを練り上げ、黒のミニオンが納刀した状態で腰を落とす。

その構えの危険性を嗅ぎ分け、消滅しかけている赤を踏み越えてソルラスカが突撃する。

「ぐァッ！！」

だが呪怨空間『カースリフレックス』に阻まれ力を散じられ、無数の蝙蝠［こうもり］と化したウツツの攻撃を受けて彼は藪の中に跳ね返された。

「一一狙いは良いか、レストアス…！」

その黒に向けて衝き出された空の左腕。

蒼い稲妻を纏った彼の『拳銃』。『照星』代わりの人差指で狙い、『引鉄』代わりの中指が引かれ、『撃鉄』代わりの親指を鳴らす一一

「『ライトニングブラスト』！！」

「…きゃはっ…最高……」

撃ち出された凍雷の弾丸、圧縮されプラズマと化したレストアスの一部だ。防御しようと集合したウツツごと撃ち貫かれ、黒が消滅していく。

「…見晒せクソッタレ…！」
その一撃の後、空は【夜燭】を杖代わりに地に衝き立てる。”遣い切った”のだ、『弾丸』を全て。

…文字通り身を削りながらの攻撃だ、レストアスにも限界がある。
一度に大量に使えば最悪消滅する可能性すら有る。
だがもし、【夜燭】の守護神獣がレストアスでなければ。自在に自身を分割できる、このレストアスで無かったのならば。マナ操作能力も何も持たず、契約者でも無い彼は、この一戦で死んでいた事だろう。

「┳━┗　┓╋！！」
「くぅっ！！」
その空に止めを刺すべく飛び掛かったタテガミの爪牙を、ルプトナの『フローズンアーマー』が受け止める。
レストアスの助力を失った空はまたも脆弱なニンゲンに戻っている。更に言えばその能力解放の反動［リコイル］により全身が軋みを上げていた。
躯を熱していた素が去り、やがて冷える。心を氷点下まで冷やしれていた素が去り、やがて熱される――
「タツミ！避けてっ！」
「――ッは…？！」
と、胸部に衝撃が疾［はし］った。傷は斜めの十文字。

「これは…苦悶の声を運ぶ風……痛い？苦しい…？あは、あはは…きゃはははははは……」

響く狂笑。消滅しながらも納刀していた刀を閃めかせた黒の一一『真空剣』だ。

一一オイオイ…マジか…風圧とかマジで……勘弁してくれ……

膝からチカラが抜け、そんな事を考えつつ地に膝を突くとそのまま前に倒れた。

「『ライトバースト』……」

刹那、白の神剣魔法［ディバインフォース］の術式が成り立つ。対抗魔法の通じぬ、練り上げられた炸裂の精霊光がルプトナに向けて解き放たれる一一！！

「一一よそ見してんじゃねェッ！！テメェの相手は俺だァァッ！！」

飛び出したソルのその神速は『ファイナルベロシティ』。神剣魔法の術式履行までの一瞬、その僅かな空隙に決死の爪を刈り込む一一！！

「防御する……」

一一だが阻まれた。白の展開する『オーラフォトンバリア』に。

「隙間無く、くれてやる！！」

それでも止まらない。切り下げ、ストレート、フック……乱打に、光の盾に亀裂が生じる。

「┼┼┼！！」

「――てやぁぁっ！一撃必殺！！」

主の危機に反応したタテガミが意識を逸らした。その隙に跳び、衝き出した脚に蒼氷を纏うルプトナ。タテガミは跳び下がろうとして――

「――覇ァァァッ！」

地に臥せたまま薙がれた【夜燭】に四肢を断たれ、身動きが取れずに『クラウドトランスフィクサー』に貫かれて。

「耐えてみろ――『獣牙断』！！」

「……光よ…」

砕かれた盾ごと完膚無き迄に打たれ、止めのアッパーカットで打ち上げられたミニオンと同時に消滅した。

発動前に神剣が消えた事で、幻想の術式は不履行となり消えた。

「…よぉ、やったな…」

「…煩せェ…話し掛けんな…死にそうだ……」

「右に…同じ……疲れたぁぁ…」

残ったのは立ち昇る色とりどりの燐光と、満身創痍の戦士達だけだ。

「てか巽、お前一発貰ってたけど大丈夫なのかよ？」

ソルラスカに問われ、空は不承不承身を起こす。胸には一一僅かに朱く血が滲んだ十文字傷。

「先に神獣が消滅したし、ほとんど消滅してたからな…コレだけで済んだ。つっても、充分意識吹っ飛ばされたけど……」

「運だけは良いよね、コイツ…えっと？」

「ソルラスカだ。『【荒神】のソルラスカ』」

共に窮地を潜り抜けた者同士の連帯感。ソルは空に肩を貸そうとして屈み込む一一

「一一灼熱のマナよ、死の鉄槌を振り下ろせ…」

残っていた満身創痍の戦士［ミニオン］の死に物狂いの一撃、蒸発しながらの『バーンスマッシュ』が繰り出された。

「「しまッ…！！」」

「え…？！」

炎上する双刃剣は回転しながら、屈んだソル、腰の上がらない空一一ではなく、背を向けていたルプトナに向けて飛翔する一一！

「破壊神の力、舐めるなよッ！」

そこに少年は、樹間を跳躍して踊り出た。手には合体させて大剣型にした【黎明】を携え、ルプトナを庇い立つ。

「『カタストロフィ』！！」

その【黎明】を振り下ろし、双刃剣を粉砕しながら地に叩き付ける。
強力な破壊のチカラは大地を衝撃波として疾りながら隆起させ――

「どうせ、全て……灰に還る…」

赤ミニオンを呑み込み砕いた。

「…大丈夫か？」
「えっ、あ……」

【黎明】を地面から引き抜いて望は振り返る。視線の先には、尻餅をついて彼を見上げるルプトナ。

「……うん……」
「…そうか、良かった」

眼差しに一瞬怯えた彼女だったが、目の前に差し出された掌と優しい笑顔。
それに伏し目がちに、僅かに頬を染めて。そっと手を重ねた。

「……なぁ巽、俺と望の違いって何だと思う？」
「…何だ薮から棒に」

それを見ながら、蚊帳の外に追いやられている二人は言葉を交わす。

「いやだってよ、俺だってあんな感じで現れたじゃん。颯爽と駆け付けて危機救ったじゃん？でも俺に向けられたのは白い眼差しだけ。あんな感じにならなかったじゃねーかよ」
「…気にすんなよ、俺も似たようなモンだった。詰まりアレだ…」
「何だよ？」

空は両手を左右に開き、掌を天に向けて軽く揺する。『やれやれ』のジェスチャーだ。

「俺達は何をやっても格好がつかない……『カマセの星』の下に生まれたのさ」
「そんな宿星要らねェェッ！！」

カマセ鴉の呟きとカマセ狼の叫びは森閑に染み渡っていった。

そしてその後、合流した神剣士達は口々に……

「また、ライバルが…」
「増えてしまったようですね…」
「望くんったら……！」
「「俺らの心配一切無し！？！」」
「…自業自得でしょう」

捕虜となっていた空や飛び出したまま戻って来なかったソルなど眼中に無く、望とルプトナの雰囲気に口々に不満げな声を漏らしたのだった。

「……フン」

座禅を組み瞑想している男は鼻白む。朱いマントと覆面を纏った、武士を思わせる筋骨隆々の偉丈夫。

四方の開けた石造りの室内には、彼と数体のミニオンが存在するのみ。

「やはり練度が足りぬか…手駒とて質は重要だな。だが――」

ミニオンの使役者である彼には判る、けしかけた数十体のミニオンどもがマナに還された事が。

「…だがまさか、本拠から連れて来た『ハイミニオン』が五体も破壊されるとはな……」

しかしまさか。この世界で製造したモノならともかく、『彼等』の本拠地から連れて来た強化ミニオンまで敗れたのは意外だった。

アレは下手な神剣士よりもよほど強力な存在だ。そして、更に言えば。

「……ニンゲンがミニオンを討つか…エヴォリアがムキになるのも頷ける…」

立ち上がり、側に衝き立てていた長柄を握る。刹那に膨れ上がる『闘気』。

開かれた眼は竜の威圧。引き抜いたは長大な薙刀。

凄まじい存在圧を持つソレは紛れも無い『永遠神剣』。

「愉しみだ――久方ぶりに本気が出せる……！！」

この世界に来て以来初めての『戦』の気配に、彼は武者震いを覚えた――……。

The 36th Name…"久遠に響く旋律"

森の中、木々の合間を歩く少年。諸肌を剥き出し、腰に黒い外套を巻いたバンダナの少年はまたもや巽空。
違いと言えば、肩に【夜燭】を担ぎ腰に五挺の拳銃を提げている事くらいだ。

…因みに【無銘】は損傷が激し過ぎた為に彼の部屋に保管して在るとの事。

《やー、しかしアッキーが無事で良かったよねゼゥー?》
《五月蝿い!私に振るなっ!》

その周囲を飛翔する五つの宝石、クリスト達だ。特に先頭の赤黒二人はやんやん五月蝿い。

「…イテテ」

包帯を巻いただけの足ではやはり歩きづらいらしい。更には先の闘いで木の根や石を散々踏み、大変な状態になっていた。

一一闘ってる間は脳内麻薬[アドレナリン]垂れ流してるから麻痺して気付かなかったけど、こりゃひでぇ。爪イッてんじゃん…

見遣れば、惨憺たる有様。見ているだけでじくじくと痛みが走った。

《…タツミさん、大丈夫ですか?やっぱり治癒を…》
「いいよポゥ、見た目ほど辛い訳じゃ無いからさ」
《……》

「うっ！？いや、別に嫌な訳じゃ無いんだ！ただそこまで大した怪我じゃ無いだけで…」

心配そうに眉をひそめたポゥの提案を断る。それに悲しげな顔をされてしまい、彼は慌てて両掌をわたつかせた。

《《…ぷっ、くすくす…》》

「……」

そんな姿をミゥとルゥに笑われてしまい、ムスッとジト目を向ける。

一行は歩み続ける。目指すは例の洞窟、服が干してある洞窟に向かって。

「……」

その道々、思い出す。先程の一一人間と精霊の話し合いを。

握手していた手が解かれる。

一方は人間、七三分けの眼鏡の男性『ロドヴィゴ』。ウルティルバディアの市長であり人間の代表。この捜索に道案内として参加してくれていた青年団を率いていた人物。

もう一方は精霊、大きな頭部に大きな単眼の小人『ンギ』。精霊達の長である。

まだぎこちなかったが、彼等は一歩を踏み出した。

不幸な擦れ違いを認め合い、和解にはまだ時間が掛かるだろうが、

歩み始めたのなら何らかの解決を見よう。

「……じゃあ、ボクはこれで」

断りを入れ、ルプトナは一団から距離を取る。そしてンギの側に立った。

「一緒に来ないのか？」

「……ボクは精霊の娘。ニンゲン達と協力するからってニンゲンの街に行く必要は無いだろ」

「そんな事無いわ、ルプトナ。貴女にはお礼もしなきゃいけないしね」

「『お礼』？」

皆一一空を除いた皆が、ルプトナに微笑み掛ける。それは優しい、温かな笑顔だった。

「貴女のお陰で人と精霊が手を取り合えたんだもの。そのお礼よ」

「……っ！？」

一瞬で顔を真っ赤に染める。そう、この話し合いは最初、どう見ても決裂の様相を呈していたのだ。

『精霊の領域を侵した開拓団は彼等精霊に殺されたに違いない』と憎悪を向ける人間、そんな人間達を『野蛮で残虐』と卑下している精霊達は、互いに互いの言い分を聞く耳など持たなかったのだから。

それを纏めたのがルプトナの言葉だった。

『そうやって見たくないモノから目を反らして、知りたくない事に耳を塞いでどうするんだよ！ニンゲンも精霊も手を取り合わなきゃ

あのヒトモドキに勝てないんだ！…変わらなきゃいけないって、何でそんな簡単な事もわかんないのさっ！』

その一言。子供の、余りにも子供じみた物言い。

だがその言葉に。子供じみた理由でいがみ合っていた大人達は前を向かされたのだ。

「あれは…その……そう思ったから言っただけだし…」

そこで彼女は、ちらりと仏頂面の少年…空を見た。

「…どんな出会い方でも、言葉を尽くせばきっと解り合えるんだよ。それを教えてくれたやな奴がいるだけ」

「……ハッ」

更に苦い顔をする空。そのまま付き合ってられないとばかりに荒々しく地に衝き立てていた【夜燭】を担ぎ上げると、踵を反した。

「…忘れ物取って来る。先行っててくれ」

「一人でか？危ないだろ？」

「ああ、独りでだ。それに今は『装備』も在るし、お前らの手は煩わす必要も無いしな」

『ついて来るな』と背中で語り、彼は一団から離れて行く。

《我々クリスト族が護衛します。ノゾム様達はロドヴィゴ様達の護衛をお願いしますね》

そんな空の後を追って、クリスト達が飛翔していった。

岩肌に穿たれた洞穴に辿り着いた一行。空は入口脇に【夜燭】を衝き立てた。

「それじゃあ、此処で待ってて貰えますか？」

《さっさと着替えて戻ってきなさいよ。見苦しくてかなわないんだから》

《え、そうですかゼゥ姉さん？動き易そうで私は好きですけど…》

《貴女だけよ、ポゥ…》

「はは…」

苦笑して歩み入る。仄暗い洞窟内を暫く進み、空は一一壁に手を衝きながら漸く歩む。

一一…クソッタレ、レストアスを体内に容れた影響か……渇いて堪らねェ……

雷のエレメントであるレストアスは水分を奪う。今の彼は、血液が流れているのが奇跡に近い程に渇ききっていた。

視界に入るのは、清澄な水。しかし生水には違いないし、異世界の細菌に抵抗力が勝てるとも限らない。ただでさえ疲労しきっているのだから。

「……くそ」

思考時間零秒、結論は『飲め』。全会一致で可決された致命的な結論。明日はトイレの虜だな、と苦笑する。

四ツ足で、ほとんど這いながら湧水に手を伸ばすヒトという名のケモノ。霞む目にはただ、水が――

「――飲まない方がいいと思いますが」

「……ぐえ…？」

凛と響いた声。同時に首飾りのチェーンを引っ張られて、潰れる蛙のような声が漏れた。

不快さに振り返る。白銀の篭手に包まれた細い腕、同色の胸鎧に脚甲、腰まである長い髪。円形の――……霞んだ目と焼き切れた脳味噌で判るのは、そこまで。朦朧とする意識では意味を成した思考が出来ない。

そんな彼を膝枕し、女性は首飾りを外して脇に置く。

次いで背に負う、彼女の全身が隠れるほどに大きな、美しい装飾のなされた銀の円盾［ラウンドシールド］を向けて紅い唇を開いた。

「……”久遠に響く旋律”の名に於いて『銘ず』。刻よ、『矛盾の盾』たる【弥縫】に集い、刹那の門を開け――……」

「……」

清らかな唄［ウタ］に昵［さそ］われ、意識が揺らぐ。抵抗する必要も無い、眠りのような安息。

そのまま、深遠よりも深い無間へと墜ちていった……

Die Fraulein Aeonenmeer…"胡蝶の夢"

「～～♪～～～♪」
「…ん…？」

一一…目を開く。霞んではいるが、長く続かないだろう。それだけは判っていた。

夜明か黄昏か、黒金の太陽と白銀の望月が同時に眺める狭間の、幽明たる薄紫の境界［せかい］。
切り取られたように虚空［ソラ］と虚海［ウミ］の境界線に浮かぶ孤島、その外周を緩やかに周回する七本の石柱。

天には白い雲が風と共に棚引き、遥か高く天空に白凰が飛ぶ。地には葵い草が水と共に流れ、遥か深い海淵には黒龍が泳ぐ。

「ッ…」

魂を軋ませる渇きと、不可思議な既視感に軽い眩暈を覚える。背を預けるは樹の幹、捻れ逢い一ツとなった連理［メビウス］の大樹。
右の枝には片翼の、紅い瞳の鷲。左の根には隻眼の、蒼い瞳の蛇。
眼前の百華咲き乱れる草原には、翠の瞳の幽角獣［ユニコーン］が休む。

捻れ逢う前の樹の根元に抱かれて、宛たっている頭にその幹の裡を流れる水を感じた。

「～～♪～～～♪」

二度聴こえて確信する。この樹を挟んで、誰か居る。

「…誰だ」

何とか搾り出した声に、硝子を思わせるソプラノのハミングが止む。
訪れた静寂が耳に痛い。
一斉に向けられた視線。この世界に生きる五柱の幻想種が、無粋な茶々を容れたその存在を睨み付けた。

「…貴方は、誰？」

ふと、視界の左端に青色が映る。そちらに視線を向ければ一一木の幹の向こうから覗く群青の髪、怯えた銀の片目と見詰め逢った。

「一一っ！」

サッと引っ込んでしまう。臆病な小動物のようだった。

「…どうして、此処に居るんですか？此処には誰も来れないのに」

今度は右端に青。詰まり幹の反対側に移動したのだ。

「一ツ、聞きたい事が有るんだ。良いかな？」

早速だが、彼は学習した。あの娘は余程小心なのだろう、また視線を向けば再度逃げるに違いない。
返事は無いが、待つような息遣いを感じる。それを確認して彼は静かに口を開く。

「…此処は何処だ？どうして俺は此処に居るんだ？」

問われて気付いた。思い出せない全て。それは何故かと問い返す。
暫し静寂。言葉を選んでいるのだろうか、迷うような息遣い。

「…ごめんなさい、私には判りません…」
「…そうか。なら、いいんだ…」

一一別に良いか。大した事じゃ無いさ、忘れる程度の事なんて。

「そっちを向くからな。逃げないでくれ…」

ゆっくりと、脅かさないように。子猫でも相手にするように視線を向ける。

「……あ」

その先には、群青色の髪の娘。覗く片目は怯えた金。
微かな違和感を覚えたが、確かめる術はない。またもその少女は樹の幹に隠れてしまった。

一一やれやれ…

苦笑しながら正面を向く。遥かな虚空に白銀の望月。その煌めきに終わりを悟る。

「…あの…苦しいんですか？」
「…まあ、それなりに」

気遣う言葉は遠い。薄い壁の向こうから響く旋律に感じられる。
溜息を零しながら応えれば一一ゆっくりと。差し出された杯と、群

青の娘が目に映る。

「どう、ぞ……詰まらないモノですけど、良ければ召し上がってください…」

差し出されている七宝を散りばめた、豪奢だが厭味を感じない聖杯［グラール］は澄み切った水を湛え、捻れた双樹を映している。受け取ろうともがくが一一手は伸びない。

そんな事情を察したのか、少女は竦み上がりながらも彼の前にひざまづき、杯の縁を差し向けた。

「一一ングッ、ング…！」

ゆっくりと傾けられた杯から零れる水を遮二無二飲み下す。もはや浴びているのと変わらない。

まるで伝承（サーガ）に歌われる神酒（ネクタル）か霊酒（ソーマ）、甘露（アムリタ）の如く。余りの甘［うま］さに、呼吸すら忘れて飲み続ける。

「一一ぷはっ、ハァ……」

漸く人心地付き、深く息を吐く。そして一一息を詰めた。

一一左の瞳は神聖の銀、右の瞳は魔性の金。膝下まで有る豊かな髪は深い深い群青［うみ］の蒼。その頭上に戴くは繚乱の花冠［カローラ］。

雪の白さの肌に纏うは、夜闇を溶かし込んだ丈のやけに長い法衣［キャソック］と暁晃を切り取った外衣［リャサ］。胸元の、凝結した緋焔のあしらわれた被服留［フィビュラ］でそれらを留める。

遍く幻想の粋を集めたように、非現実的な存在に。

「あ、あの……？」

未だ幼さの抜け切らない容貌。だが確かに、そこにはつい最近、何処かで見た人物の面影があった。

「…有難う、美味かった。躯が言う事聞かないくらい喉が渇いてたんだ」

「いえ、その…」

微かに震え始めた少女から視線を外す。そして目に入る、捻れた双樹の狭間から衝き出た…折れ曲がった畸形の柄［つか］。

「一一……『柄』？いや、アレは『柄』なんかじゃなくて一一

「…なんて在りません……」

カラの聖杯を抱き締めながら、少女は俯きぽそりと、某かを呟く。

「ん？御免、聴こえなかった…」

聞き返せば、少女は『何でもない』とばかりにフルフルと頸を振る。群青の髪が波濤のようにさざめいた。

「一一アキだ。俺の名前はタツミ＝アキ」

「え…？」

突然の名乗りに面食らったのだろう、少女の戸惑う声。そんな彼女に真摯な眼差しを向ける。笑顔は彼の、最も苦手とするモノだから。

「君の、名前は？」

真っ直ぐ向けられた視線に、聖銀と魔金の異色瞳［オッドアイ］が揺れ、沈黙が返る。

時間は後少し。迫る終わりに瞼を閉じた。躯が軽く、軽く――

「……私は…ネア…」

掠れた意識を繋ぎ止める。後一瞬でも持てば御の字の抵抗を試みて、祝福を待つように少女の言葉を待つ。

「――私の名前は、アイオネア――…」

『『『『『┥╋工┤┗┬┐━┃！！！』』』』』

…それは邪魔をしたのか、そういう習わしなのか。

その《聖句［なまえ］》が唱えられた刹那、五柱の幻想種が一斉に鳴いた。更には強い風が吹き、大樹がさながら風琴のように音色を奏でる。

…だからその《神銘［なまえ］》は、彼の耳のみに意味を成した。

「…そうか……佳い…名前だな……」

――そんな、優しく穏やかな虹色の平穏の中で。

始まりの終わるユメを観た――……

少女は萌える下草にぺたりと座り込みその名残を抱く。カラの聖杯、それを呑み乾した存在に想いを馳せて。
思い出すのはただ、へつらいなどせずに真っ直ぐ己を見詰めた一一。

『…ふん、随分茫洋とした小僧っ子だったな。あの程度、ヒトの世には掃いて棄てる程居るだろう。俺っちらの”媛様［ひめさま］”には相応しく無いぜ…』

口を開いた隻眼の蒼い錦蛇。忌ま忌ましげに鎌首を擡［もた］げ、二股に分かれた舌を鳴らす。

『あら、ヤキモチなんて惨めな爬虫類ね？アタイ達がどうこう言う事じゃ無いでしょう。大事なのは”媛様”のお気に召したかどうか…それが総てさね』

それに応えた片翼の紅い鷲。そんな蛇を嘲笑い嘴を鳴らす。獰猛な蛇の眼光がそんな鳥を捉えた。

『鳴いたな禽［とり］…！そこを動くな、今すぐ凍り漬けにして一呑みしてやるわ！』
『やってみな它［へび］！灰燼に還して啄んでやるよ！』
『あーもう、静かにしてよ…僕眠くて仕方ないんだからさ…感電死したいの？』

凍てつく息を吐く錦蛇に対し、鷲は劫火を纏う翼を広げた。喧しい禽と它に、角に翠色の雷を弾けさせた幽角獣は鬣［たてがみ］を靡かせながら恫喝する。

『全く貴方達は…”媛様”の御前で何を騒いでいますの！？節度を持ちなさいとワタクシが常々……』

『まぁ良いではないか。騒ぎもしようて、何せこの世界に初めてニンゲンが訪れたのだぞ…儂［ワシ］も期待に胸が躍っとるわ』

そこに閃光を放つ白凰と闇黒を放つ黒龍が舞い降りる。刹那にしてあらゆる喧しさに満たされた浮島。

いずれも高い知性と霊格を有する五柱の『神従』、”媛の忠臣達”。好き勝手に喋る彼等に一一

「……ねぇ皆。私…あんな魂を見たの、初めて……」

呟きながら聖杯を連理の樹の根本、二ツの樹の根本に空いた空間……『祭壇』に納める。

『タマシイ…ですかい？』

「うん。果てしなく広くて、澄んでて。まるでそう…海原を撫でる風か、星を抱く優しい空みたいな魂だった…」

捻れて一ツに成った幹に挟まれ、半ば埋もれたその『畸形の柄』に触れてカタチを確かめながら。にこりと屈託なく笑う。

それに列なり突き出したダマスカス刀剣を思わせる、雨粒の落ちた水面のように美しい波紋状の刃紋を持った、蒼みがかった銀の幅広の刃。そこを伝う煌めく雫。

カラの霊器を充たすべく滴ったその雫…彼女のチカラの顕現である霊質［エーテル］は無色透明。

『くっくく…さっすがアタイらの”媛様”。見る処が違うよ』

『どうでもいいよそんなの…”媛様”～、膝枕して～』

欠伸しながら地面についた少女の膝に顎を置こうとした幽角獣が地

面に顎をぶつけた。彼女がやおら立ち上がった為だ。

「一一もしかして、あの方なのかな？だって【調律】様が言ってたもの。私が初めて逢う相手が、私の運命のヒトなんだって…」

そのまま駆け出し、ハミングしながら楽しげに舞う少女の袖や裾が翻る。裸足の足でも柔らかな草地は彼女を傷付けない。

『”媛様”、即決などお止め下さい！”媛様”にはもっと見合う相手がきっと……』

『馬鹿者。”媛様”が御決めになられたのだ、例え間違いだろうと正解になるわ…』

いや、どんなモノであれ彼女を害する意志など持てず、仇為す行動を起こす事など出来はしないだろう。

「…だから、また逢えるかな？あの方に…」

生まれる事で背負う『原罪』も、生きる事で塗れゆく『穢れ』も、死という避けられぬ『贖罪』すらも知らぬ輝かしき神姫に応えて。

『『『『『逢えますとも、”媛様”が望むのならば必ずや。不可能など在りません、何故なら”媛様”は有限世界に唯［ただ］一人…遍く可能性を斬り拓く”刃［やいば］”なのですから一一……』』』』』

片翼の紅鷲と煌めく白凰が囀りながら周りを飛び回り、隻眼の蒼錦蛇と昏［くら］ます黒龍が足元を這い、翠の幽角獣が角で風を斬って拍子を取る。

彼女の影が揃い舞い、連理の大樹が枝葉を鳴らして喝采する。

少女は嬉しげに天を行く群雲に手を伸ばし、地を流れるせせらぎを踏む。風を切る袖が翻り、撥ねた水に裾が濡れる。

「――うん、また逢いたい……あの方に…アキ様に…！」

此処は架空の楽園。誰も辿り着く事など出来ぬ未踏の桃源郷。

”――世界は高く天に張り　刻は深く地に根差す

幽世［かくりよ］にユメは生まれ
現世［うつしよ］にユメは果てる

比翼の鳥は天の涯［はて］に飛び
連理の枝は地の角［はて］に伸び
無銘の唄は海の内［はて］に響く

虚［うつ］し世にユメは生まれ
確［かく］り世にユメは果てる

かつて――”

その”鎖されたユメ”の中で。
あらゆる生命が見果てぬユメ――”安寧の浄土［アタラクシア］”
の深奥で。

”かつて未だ、天地が一つだった頃――……”

”劫媛［フロイライン＝アイオネア］”はただ願い、”ムメイノウタ”を唄い舞う――……

The 37th Name・・・"無間に果てぬ韻律"

「時流よ、刹那の門を鎖［とざ］せ――『施錠［ロック］』。…今はこれまで。縁［よすが］が交われば再び出逢う事も在るでしょう…」

うっすらと目を開けば、聖銀の女性。左手に掲げた『盾』を背に戻しながら、彼に銀の眼差しを注ぐ。

「……あ……貴女、は…？」

「私の事などより、貴方には覚えておかなければならない名が在ります。しかと『あの娘』の名を留めておきなさい…貴方の運命を斬り拓く”刃［やいば］の銘［な］”を」

その人物に呼び掛ける。皎［しろ］く煌めく、まるで北欧の死の女神を思わせるその女性に。

「【破綻】の尖兵が居ない今が好機だったのです…多少強引でしたが、これもあの娘の為…」

「…【破綻】……？」

「後二度です。後二度、あの娘に逢うまでに覚悟を決めなさい。総てを喪い刹那の安寧を得るか、総てを得て永劫の闘争を得るか…」

耳に届く言葉を、彼は理論づけて組み立てられない。ただ聞こえた言葉を鸚鵡返しに口にするのみで、再度眠りに堕ちた。

「…成る程。”アレ”が目を付けただけは有る…この子なら、あの娘を『箱庭［フラスコ］』の外に連れ出す事も出来るかもしれない…」

呟きながら、猫毛の癖毛を撫でる。その手つきはこの上無く優しい。

「…しかし、命素［マナ］を操れない存在に”鍵”は廻せない…”錠”を開けられはしない…どうする心算［つもり］なのかしら…」

眼を移したは、銀の鍵。それは視線に反応してか、やけに生物じみた煌めきを発した。

「…それにしても、本当に厄介なモノにばかり魅入られる子。…まぁそれは私も含めてですか…」

慈しむように、労るように。ただ、心から――

「…”主よ、この魂を憐れみ賜え　［キリエ＝エレイソン］”……」

その聖言を唱えて。

近付いてくる複数の『永遠神剣』の気配を察し、銀の光と化し世界に融けていった。

【――…所有者［オーナー］、そろそろ気付いて頂きたい】

（……ん…？）

果てしのない光に抱かれ、安息にたゆたう空の頭の中に響いた声。

凛と張り詰めた氷を思わせるそれは。

（……誰だ、お前…？）

【…ああ、失敬。こうして言葉を交わすのは初めてでした。私です、レストアスです】
（――!?）

姿などは見えないが、その一言はそれなりの衝撃を持って彼の脳味噌を揺らした。
それもその筈、契約した覚えは無い。それなのに何故――と。

【心配には及ばない。契約を結んだのではなく、ただ単にオーナーの脳内に残してある『我が一部』を介して、ユメを操っているだけです】
（……それって、副作用とか無いだろうな?）
【……さぁ、こんな事をしたのは今回が初めてですし。電圧を間違えば頭部が弾けるくらいでは?】
（どっかで聞いた事有るぞその技…なんか命握られてるだけの気がしてきたんだがな、俺は）
【オーナーが私との盟約を破らねばそんな事はしません。それと、その盟約について交渉したい】

――命を握っての交渉ね…さて、どんな難題を吹っ掛ける気だ?

（…何だ?言ってみろよ）
【――まず第一、私の『願い』についてです。私がオーナーにチカラを貸す代わりに求めるモノは……復讐】

ぴくりと、空の精神が反応する。余りに聞き慣れた言葉に。

【相手は二人。我が主君の宿命を弄んだ二人の神…”欲望の神”と”伝承の神”を討ち果たす事…!】

覚醒前の脳髄まで冷え切る殺意。怒りの余りチカラを抑え切れなくなっているのかも知れない。

（…その『主君』の最期の言葉を聞いてなかったのか？）

【――余計な台詞は聞きたくない。貴方は是か非か返答だけすれば良い】

――さて、これ以上煽って脳味噌パーンは流石に嫌だ。だが、そうか…

（――オーケー、丁度良い。俺も”欲望の神”と”伝承の神”には借りが有る…！）

――そうだ、あの狒々爺［ヒヒジジイ］どもには神世で嵌められた。その借りを返してやらなきゃ気が済まねェ！！

【交渉は成立。オーナー、感謝する】

（利害の一致だ、礼なんざ要らねェよ…）

【では、続いて第二】

（――ッて、まだ有るのかよ…）

【有りますとも。第二条件は単純、【夜燭】の定期的な手入れを義務付けます】

（…何？手入れ？）

【ええ、手入れを。最低でも一日一度。更に戦闘一回毎にも手入れを要求します】

――何だそれ？いきなりリーズナブルに成ったな……まぁ俺の装備は大体手入れが必要だから、今更剣一本くらい増えても良いけど。

（オーケー、お安い御用だ）

【感謝を。良い取引でした】

声が去っていく。同時に安堵した空は――苦笑した。

――それにしたって畜生…妬けるぜ、神剣士と神獣の『絆』には。死んだ主君［ダラバ］に操を立ててレストアスは復讐の道を選んだんだ。主の遺志に背いてまでも。

そう考えてみりゃあ俺の持ってるモノは総て二番煎じだ。【夜燭】は言わずもがな、【無銘】にも『以前の主』が居て、贋物は元々ミニオンの。俺だけのモノなんて何一つ無いし、それらとの間に『絆』も無い。望とジャリ天、希美とものべー、会長とケイロン…そんな、『絆』は。

（……ハ）

――そういう趣味は無いと思ってたんだが…どうやら俺にも『相手の初めてに成りたい、オンリーワンに成りたい』なんていう月並みな虚栄心くらい在ったらしい。恥ずかしいね、全く。

【そうだ、忘れていました。オーナー、最後に一つ聞きたい】

（あん？何だよ）

何と無く恥ずかしい思考を行った為か、ぶっきらぼうに答える。だがレストアスは歯牙にも掛けず――

【オーナーはやけに驚かれていましたが、遣り方こそ違えどあの幽月という神獣も私のようにオーナーと会話しているでは有りませんか？】

（――は？）

…その決定的な『破綻』を告げた。

（…待て。莫迦言うな、カラ銃とは契約してるんだぞ？それじゃあまるで――……）

【…契約も何も、オーナーの魂は真っさらの無銘ですが？】

もし覚醒して聞いていたのならサッと血の気が引いていただろう、その『可能性』に気付いて。

…いや、本当は目を逸らしていただけだ。その『可能性』から。

【……そうですか。いや、私の勘違いでしょう。失礼】

（レストアス、それは俺が許すまで心奥に仕舞え。絶対にアイツには悟られるな）

有無を言わさぬ強い口調。だがその声は震えていた。怒りか、それとも――

【…了解オーナー。佳いユメを】

そう断りを入れ、今度こそ『剣神の義臣』は去って行った。そして再び、空の意識は光に熔けていく――

――紅と蒼の境界［ソラ］。その幻実のソラの下には、物部学園の校舎。人気など死に絶えたように無く、ただ――うつろわぬ虚［ウツロ］に沈んでいる。

「～～……～～～……」

天高く枝葉を伸ばす造花の大樹の根本。地に縫い付けられた根に背を預けて、黥［くろ］い龍の騎士は唄う。

「～～……～～～……」

単調な音色を繰り返し繰り返し刻む。まるで鍛冶師が鎚を振り下ろすように飾り気のない鼻唄。

だが彼はそれを慈しむように、それだけが己のただ一ツの愉しみだと言わんばかりに一一繰り返し同じ『韻律［リズム］』を唄う。

『一一よしよし、おお…元気に泣くモノだな。ほーれ、高かろう高かろう！』

『…落としたりしないでよ『一一』。それでなくてもアンタは無器用なんだから…』

『ふん、喧しい……どうした、やけに沈んでいるじゃないか『一一』？』

『……少しね、思うところがあるのよ…』

『思うところ？何だ、『俺』に関係する事か？』

脳裡に去来するは一一追憶。輝ける日々の残骸。

『…ねぇ『一一』、『私』達は…赦されるのかな？』

『……さてな…同族殺しに親不孝……互いに、罪なら雪ぎきれぬ程重ねている』

『一一じゃあ、この子は？『罪』から生じたこの子は……赦される

の？』
『……さてな…』
『……』
『…そう不安そうな顔をするな。なに、心配する必要は無い。この”一一”と”久遠に響く旋律”、天地［あめつち］を斬り裂いた我等［おれたち］の子だぞ？』

交じり合う『黒金［くろがね］と白銀［しろがね］』。それは一一

『一一それでも心配だと言うなら、我等が祝福しよう。他の何がこの子を否定しようと、それを乗り越え歩み行く『可能性』…『冀望［きぼう］』を唄おうではないか』
『…『冀望』…？』
『ああ…そうだ、佳き名を思い付いたぞ。正しく『冀望』に相応しい名だ』

一一この『無色の永遠』と引き換えに失った『虹色の瞬間』一一

『この子の、名は一一……』

掲げた掌には一本の『鍵』。腰に提げた鍵束に在るモノとは違う。
黒金の、飾り気など全くない一一刃皇の『鍵［ケン］』だ。

「…撰んだか、”久遠に響く旋律”。ならば次は我［オレ］の番か…」

それを振り翳す。刃先が空間に直接挿し込まれ、廻された。

「……”無間に果てぬ韻律”の名に於いて『銘ず』。世界よ、『矛盾の剣』たる【破綻】に集い、永劫の門を開け――……」

――ベリリと。世界が乖離する。刈り込まれた刃先、その空隙より新たな『世界』が刈り込まれた。

「……さあ、廻れ……」

その先に安置された『砂時計』、目も眩むほどに巨大な質量を誇る――『メビウスの鐶［わ］』――……

The 38th Name…"シノブモノ"

宵の口に入ったばかりの大樹を包む薄暗がり。家路を急ぐ人々がその存在に気を止める事は無い。

「…どうやら動き出すようですね。それなら私も動かないと」

茜色に染まる天を見上げて愉しそうに独りごちる、小柄な黒髪の少女。その結わえた髪には――

「さあ、小休符は終わり。楽譜に則って”演奏”再開ですよ、巽さん…ふふふ…」

――シャン……

鈴の、髪飾り――……

「ん……？」

「…お、馬鹿者が目を覚ましたぞ、ノゾム」

揺り篭のように心地好い温もりと振動に、空は微睡［まどろ］みより覚醒する。開いた目に映るのは茶色の髪の後頭部とその上に不機嫌そうに鎮座する小天使。そして――

「目、醒めたか…空？」

「……望…お前…」

振り向いた碧の瞳。自分を背負いながら優しく微笑んだその少年に、空は一一

「一一何をさらしとんじゃあァァァッ！」

「ぬわぁぁっ！？」

がつーーん、と猛烈な勢いの頭突きをカマした。因みにレーメは上手く空中に避難して無事だ。

「イッタ！？何すんだよ空ッ！」

「こっちの台詞だッつか降ろせ恥ずかしい！男なんて負ぶって何が楽しいんだテメーは！」

バタバタと暴れる空に、体格で劣りつつも神剣士である望は不動。腰に挿した二刀、【黎明】は伊達ではない。

「駄目だよ、空くん。これは罰なんだから」

「…罰ッて？」

「決まっています。皆の気を揉ませた罰ですよ、巽」

「う…」

見渡せば周囲は他の神剣士や青年団。一様に怒りや苦笑といった表情を浮かべている。

一一というか、一部の……いや、ほぼ全部の女性から羨ましげな視線を向けられてる。そんな目されてもな……

「ミゥ達からお前が倒れたって連絡が有って迎えに行ったんだ。手間ばっか掛けさせんな、お前はよ…」

「全くね…調子悪いならどうして誰にも言わないのよ。痩せ我慢した挙句倒れるなんて、格好悪いにも程があるじゃない」
「うぐ…」
話し掛けてきたのは【夜燭】を担ぎ武術服を小脇に抱えたソルラスカとタリア。負ぶされたままの空は眉をひそめながら罵倒に甘んじる。
――そうか、そういえばそうだったっけか……あれ？
はっきりしない記憶を漁るも、どうしても要領を得ない。クシャリとくせ毛の髪を掻いてみたが、結果は勿論変わらなかった。
（……レストアス、俺が洞窟に入った後の事…観てたか？）
【…申し訳ない、オーナー。私もついさっき休眠から目覚めたたばかりです。それからオーナーに語りかけたので……それ以前の事は承知しかねる】
大分身体を擦り減らしていたのだろう、休眠して回復したらしい。
まるで錠でもされたように鎖された記憶。そんな事を考えた為か、何気なく胸元に手を遣り――鍵のペンダントに触れた。
『――私の名前は”　　”、　　…』
「ッ――……！？」
刹那に幻視したステンドグラスの一枚絵のような風景。
薄紫に霞む狭間［セカイ］、捻れた双樹［メビウス］、酒月［サカヅキ］を充たす澪水、畸形の柄、虹色の――”蝶”……？

――忘れてる…？俺は何か、大事な事を……忘れてるんじゃないのか…？

「……空。頼むから、もっと俺達を頼ってくれ」

「…『頼る』？」

現状すら忘れて思考の大海に沈み込もうとした空。だがそれを、望の言葉が引き戻す。

「ああ、頼ってくれ。俺達は一人でも欠けちゃいけないんだ。戦いに勝ったところで、一人でも『家族』が欠けたら……それは負けたのと同じなんだ」

「……」

「分かるよな。『家族』には役割は在ったって上下貴賤なんて無い。『家族』が手を取り合うのは『組織』みたいに『上手く廻る』為にじゃない、『支え合い、共に乗り越える』為なんだ」

茶色の髪の後頭部を見詰める。脚を支える腕に篭るチカラが増したのを感じ取る。

「――信じられないなら、周りを見渡してみろよ。お前を助ける為に、此処に居るだけでもこれだけの人達が必死になるんだ……！」

視線を巡らす。すぐ横の希美とカティマ、浮遊するレーメ。右後方にソルラスカとタリア、前方からこちらを伺う沙月とルプトナ。左側にはミゥ、ルゥ、ゼゥ、ポゥ、ワゥに青年団を率いるロドヴィゴ。

「――…判ってる…これからは…迷惑掛けないように善処する…済まない…本当に――」

『頼んでねぇよ』。そう言う為に口を開いた筈だったのに。まるで苦虫でも噛み潰したように、奥歯を噛み締めて切々と。
脆弱なニンゲンである劣等感…何をやっても最終的には誰か、神剣士に尻拭いされている劣等感からだ。

「本当に済まなイデェあ！！？！」
「一一馬鹿ね。本当に馬鹿。ちっとも判ってないじゃない」

そんな彼に裏拳をカマし、ぽつりと呟いたのは沙月。

「あが……か、かいちょ…？」
「あのね、当の昔に迷惑なんて掛けられてるのよ、こっちは」

心底呆れたように、腕を組んで。はぁ、と一つ溜息を落として。

「…だから今更、迷惑が一つや二つ増えたところで構わないわよ。むしろこうやって迷惑の種を増やされる方が迷惑。……遠慮なんて、『家族』同士でしないでちょうだい…いいわね？」
「……すみません…」

『雇用主』だった筈の彼女が、そう告げた。
それに空は、バンダナ代わりの腰帯を赤くなった鼻面まで下げて。

「…ごめん、皆……有難う…」

……口をついたのは、いつもひた隠している心奥から湧き出た『本心』だった。
一同は…特にこの世界の出身である者達以外はゆっくりと微笑む。
珍しく本音を漏らした、意地っ張りで跳ねっ返りの少年に向けて。

「……ふふっ。何だかそうしてると……昔を思い出すね」
微笑みながら希美が口を開く。懐かしそうに目を細めて。遠い昔日を偲ぶ。

「望ちゃんとクーちゃんが仲良くなった、あの日みたい」
《《「「クーちゃん？」」》》
「ーーッ！！？ちょ、希美…勘弁してくれ！」

希美の一言に、一瞬で赤く沸騰した空。先程より余程暴れ始めるも、やはり望は不動だった。

「望、『クーちゃん』って何？」
「あぁ、空を昔そう呼んでたんだ。俺達の世界の言葉では『空』って『くう』とも読めるから」
「止めろォォッ！解説すんな！！」
「うわ、似合わない…」
「『クーちゃん』ですかーーぷっ…クスクス」

意味を尋ねるルプトナ、実に的を得た感想を述べたタリア、堪え切れず笑い始めたカティマ他数名。
空は遂にグーパンチを連続で繰り出すも、レーメが展開した『オーラシールド』に全て防がれた。

「あ、先輩。わたし、今回の罰はこれからしばらく空くんをクーちゃんって呼ぶ事にします」
「ホント勘弁してくれ、この歳でちゃん付けなんて死ぬ程恥ずかしい！」
「…空。それってつまり、今尚ちゃん付けされてる俺が死ぬ程恥ずかしい奴だって言ってるのか？」

「……フッ」
「…希美、俺もそうする」
「お、そりゃいい。俺もそうするか」
「何でテメーにまでクーちゃん呼ばわりされなきゃいけねーんだよ！絶対呼ぶなよ、呼んだら差し違えてでも魔弾撃ち込む！！」
「じゃあ希美ちゃん達はそれで決定ね…私は一一」

沙月はニヤリと、底意地の悪い笑顔を浮かべた一一

ウルティルバディアの港、漸く帰り着いた一行。そこに、待ち侘びていた三人が走り寄る。

「おぉ巽、捕まってしまうとは情けないゴッ？！」
「……」

開口一番どこぞの爺さんのような台詞を吐いた信助。そこに空は黙って掌底を打ち込んだ。

「その人がルプトナさん？っていうか巽くんさ、その恰好は何？恥ずかしくないの？」
「うわわっ、何！？コイツ何してんの？！」
「……」

パシャパシャとルプトナにシャッターを切りながら問う美里。盾代わりにされた空はやはり無言でカメラ小娘にジト目を向ける。

「巽君！全くもう君は……前の世界でも一番最初に行方不明になっ

たでしょう！自重しなさい！」
「…ッ…すみません、先生……皆も、本当に申し訳無い――」
珍しく静かに謝意を示して彼は。何度も唇を震わせ、何度も歯噛みして。
「……で、ござる」
「「「……は？」」」
何か、致命的に間違った語尾を吐いた。
「――ぷふっ！くくく……！」
同時に爆笑を始めた斑鳩沙月生徒会長。神剣士達も一様に忍び笑いを漏らしている。
「巽君…ふざけてる？」
「先生…拙者、こんな悪巫戯化しないでござる…これは罰則なのでござる」
「くくく…ズッコケ忍者には相応しい言葉遣いでしょ？」
背中越しに笑われ、早苗達からは呆れた視線を向けられて。
「――何時何処で！拙者がズッコケたでござるかッ！！？」
「ズッコケてるじゃない。たった今此処で、現在進行形でね…『クーちゃん』？」
「一思いに殺せでござるゥゥゥッ！！！」
暮れなずむ街に、悲哀に満ちた鴉の鳴き声が響いたのだった……

「…まぁ、元気出せって。生きてりゃ良い事あるさ」

一行から少し離れた港の端っこに、体育座りで『の』の字を書いていじける空の肩に手を置いて慰めるソル。

『何かイメージ通りかもズッコケ忍者』

『だよなぁズッコケ忍者。ピッタリだ』

『ちょっと二人とも、あんまりズッコケ忍者ズッコケ忍者言わないの……ぷっ！』

……等と言われた結果だ。もしダンボールが有ったら被っていたかもしれない。いや、被っていただろう。

「そーだ巽、酒いけるか？こういうのは呑んで忘れるのが一番だ」

「…剣の世界でクロムウェイさんに貰った銘酒があるでござる」

「お、いいねぇ！そんじゃ今晩お前の部屋に行くぜ」

ソルのその言葉に、普段の空ならば『来るな暑苦しい』と返っただろう。

「…好きにすれば良いでござる……拙者もう、疲れたでござる…」

だが今の空にそんな余力は残されていなかった……

「一一今晩と言わずに今すぐ呑［や］りましょうよ～。異世界の銘酒なんて聞いたら黙ってらんないわ～♪」

「うぐわッ！？何するでござるッていうか誰でござるか御主！？」

と、そんな彼の背に覆い被さった者がいた。二つの『核弾頭』がたゆんと押し付けられ、思わず空は真っ赤になって悲鳴を上げる。
振り返った視線の先には何と言うか露出の多い、紅いショートカットの美女。

「「「ヤツィータ?!!」」」

その人物に向けて沙月とタリア、ソルが揃って声を上げた。

The 39th Name…"再演"

幻灯の太陽達が地平線から顔を出した頃。揺らぐ天の下に座する物部学園の中庭、トネリコの木の下に少年は立っていた。

「……」

黒い武術着に身を包み目を閉じて自然と一体化した明鏡止水の極致、草いきれや呼吸音すら騒音と取れる程に張り詰めた空気。

低く腰を落としたその構え、上半身を庇う左の逆手に銀、下半身を庇う右の順手に昏の【誰彼】。彼の最も得意とする『行雲流水の型』。手に握られた弐刀の小太刀の届く範囲は余す所無く殺界。

一一天を行く雲の如く、或いは地を流れる水の如く、防御に主観を置きながらも素早く攻撃に対応する。剣の世界から更に鍛え上げた『反撃の刃陣［じん］』。

刹那に吹いた風が、トネリコの枝を揺らす。それにより葉が落ち一一

「一一ッ！！」

風斬り音は六度。振るわれた小太刀には一一三枚ずつ、葉が差されていた。

「…ふぅ…」

小太刀を振って葉を落とすと鞘に納め、懐に仕舞う。木の根本に置かれたペットボトルのネジを切り水を含む。大して甘［うま］くもないミネラルウォーター。

【……くふふ、大分様になってきあんしたなぁ。昔は落葉の一枚すら斬れへんかったのにぃ】

と、脳内に響く軽い声。道化のようにおちゃらけた物言いは、腰に挿した『永遠神銃』【無銘】から。

（煩せェな、放っとけ）

どっしりと座り込むと、背を木の幹に預ける。脇に置いてある本は――武術の教本、そして地に衝き立てた【夜燭】。

【いやしかしぃ、旦那はんも段々と強うならはりました。元々の世界で『契約』した時は大丈夫なんか心配で堪らへんかったんどすぇ？】

――『契約』ね……

一瞬抱いた殺意を押し隠す。まだ悟られる訳にはいかない。その為に、レストアスにもあの会話は暫くしないように告げてある。

【――ところでぇ…何や腹に一物抱えて帰って来はりましたからなぁ、旦那はん…？】

（――…何の話だ？）

【惚けはってぇ……決まっとるやありんせんかぁ】

水を飲む手が止まる。ジロリと、三白眼が天を見据える。

【……旦那はんの魂を充たしとるそのチカラ…訳の解らん『マナ』の事どすわ】

（…『訳の解らんマナ』…？）

安堵と猜疑は等量。企みが露顕していない事と、新たな謎が増えた事に。

【はいな、訳が解りんせん。確かに『そこに在る』のにチカラには変わらへん、まるで『存在してへん』みたいに……。『抗マナ』と似とるけども違う…なんどすの、ソレ？】

（俺が知るか…こっちが聞きてェよ…）

【ん～？隠し事はあきませんぇ？わっちらは一心同体やありんせんかぁ】

――クソッタレが…一々癪に障る…！

【まぁ、これといって害が在る訳でもありんせんしぃ…放っといてもええどすやろ】

（…なぁカラ銃、俺とお前の関係は何だ？）

【へぇ？何て、そないなモン…】

主君の問いに、【無銘】から流れ込む声はいつも通り。飄々と軽く、巫戯化て戯れるように。まるで『愛してる』とでも囁くように軽く――

【――引鉄を引けば神をも殺す『銃』と、ソレを引く為の『指』どすやろ。それ以外に何がありますのん？】

…『裏切ったら殺してやる［アイシテル］』と『偽臣』は嗤った。

「――ク、ハハ…！そうだ、そうだよなぁ、それでいい…」

――全く、何を感傷的になっていたのか。俺達は利害の一致で結び付いたんだ、だったら……これが本来在るべき姿だろうに！

それに彼も嗤う。口角を吊り上げ、さぞ愉快そうに痛快そうに。

【ところで旦那はん、そろそろ旦那はんにも『必殺技』が欲しいところや思いませんかぁ？】

（はぁ？『必殺技』？）

【そう、必殺技！古来より苦境を突破するための切り札！旦那はんに足りへんのはソレどすわ！】

――必殺技ねぇ…まぁ確かに【無銘】の魔弾や精霊光［オーラフォトン］、【夜燭】の『エレクトロンブレード』とか『ハイパートラスケード』、『エレクトリック』なんかはカラ銃やレストアスの助けが無いと使えないどころか成り立ちさえしない。そんなモンは『技』ですら無いだろうな…。

ペットボトルのネジを締め、立ち上がる。ゆっくりと目を閉じると、徒手のままで構えを取った。

――そう、『必殺技』と言えば――……

…遡り、数年前。

――シネシネシネシネ……

アブラゼミが盛夏を唄う、厭味なまでに晴れ渡った暑い夏の天木神

社の境内。
そこに、夏だというのにかっちりと巫女装束を着た女性と、宮司の装束を着せられた少年の姿が在った。

『よく此処まで頑張りましたね、空さん。これで基礎は完成しました』
『…わ、わーい、やったー』

白々しく喜んだ少年……日盛りの中で竹刀片手に石畳に倒れ込んでいるのは、少し若い頃の巽空その人。もはや汗だく、熱中症一歩手前だ。意識などさっきから数度飛んでいる。

『それを祝して、貴方に『必殺技』を授けましょう』
『……は、必殺技ですか？』

対する倉橋時深はアイスキャンディーを舐めながら日蔭で涼んでいる。同じ運動量を熟してこの余裕。
しかし今日はマシな方。昨日は木刀、その前など薙刀だった。勿論彼女の独壇場。

『ええ。倉橋家の秘伝…本来は門外不出、一子相伝ですが……貴方になら良いでしょう』
『ーーあ、ありがとうございますっ！』

何時に無く真面目な物言いに、巽少年は何とか起き上がる。まぁ、なんだかんだで彼は時深をこの上なく尊敬しているのだ。

食べ終わったアイスキャンディーの棒を置き、ゆっくりと立ち上がる時深。
時深は両手を天地に向けて衝き出し、しばし瞑想して――

『往きますよ、空さん――これこそ――』

その手をゆっくりと、太極拳のように円を描いて動かし――

『――ゴクッ!!』

期待に満ちた目で彼女を見遣る空。その期待に応え、彼女は腕を――交差させた!!

『――これこそが倉橋家の秘伝……『スーパーアマテラス光線』!!びびびーー!!!』

「――アンタの教えなんざ真面目に思い出そうとした俺が莫迦だったわァァァッ!!!」

【何がどすの～～～ん!!あべし!ひでぶー!!】

怒りを乗せて【無銘】を全力投球した空。以前のようにブーメランよろしく回転しながら飛んだ【無銘】は、砂場の上に設置されている競技用鉄棒に当たり『くわーん』と良い音を立てて逆回転、砂場に衝き刺さったのだった。

「ハァ、ハァ……あー、すっきりした」

一先ず意趣返しに成功した彼は、その手で【夜燭】の柄を握る。途端に電流が流れ込み、脳との回路を繋げた。

【……しかし、オーナーも大変な事だ。あんな厄介な存在に疑念を抱かれぬように策戦行動とは…】

くくく、と笑い声じみた意志を流し込むレストアス。

そんな彼（彼女？）に不快を示す意識を送り一一八双の構えを取る。

一一単純明快、故の難攻不落。神世の古に『南天の剣神』とまで称された『その男』の構え。『その男』の歩んで来た人生の集大成。それこそが異空の知る内で最も優れた『必殺の剣戟』。

【一一……】

レストアスが息を詰める。最も身近でそれを見続けてきた存在は何を思うのか。

「一一ッ！！」

一一一閃。逆袈裟斬りの壱ノ太刀は彼の顔面を狙った初弾を斬り砕き一一

「チッ！」

続く二撃目に弐ノ太刀を繰り出せず左手が一一投石を受け止めた。

「おぉ～、凄いじゃないクー君」

「……クー呼ばわりは止めてくださいよ…姐［アネ］さん」

校舎脇からの投石、それを為した紅い髪の白衣の女性が拍手しながら歩み寄る。出会い始めに皆して『クーちゃん』呼ばわりしてくれた為にそう呼ばれる事になった。

「あら、じゃあなんて呼べば良いの？」
「『巽』って呼んでくださいって言ってるじゃないですか」

――ヤツィータ。永遠神剣【癒合［ゆごう］】の担い手にして『旅団』の実質的Ｎｏ．２。どうにも帰還の遅い会長達を迎えに来たとの事だ。
神剣士という事はまず『転生体』である可能性が高いのだが……俺は知らない。少なくとも、こんな神とは会った事が無い。

【…気高く神聖な焔の気配を感じる。恐らくは赤属性の神剣かと存じ上げる、オーナー】
（……そうか、もしかして新幹計画の”誘惑の神”『ヤジェンダ＝ダルゾ』…噂しか知らないが…）

神世の古に、この世の真理を解き明かした神の一柱だと記憶しているその神性。しかし――目の前の人物は。

「『麗しのヤツィータお姉様』って呼んでくれたらそう呼んであげるわね」
「絶対呼ばねっすよ」
「じゃ、お姉さんも呼ばなーい」
「【……】」

実に蓮っ葉な物言いに呆れ返る空とレストアス。
ついさっき投げた奴と会話させてみたかった、と。二人は瞬間、想い重ねた。

――これがＮｏ．２で大丈夫なのか、旅団……？
てか俺、この人苦手だ。何かアレ…有効成分出過ぎッつーか…過ぎ

たるは尚及ばざるが如し?

「何か用ですか?足の傷も筋肉痛も、五日在ればしっかり治ってますよ?」

「それが素人の浅はかさ。治ったかどうかは医者が判断するのよ」

道理を述べられては黙るしかない。というか、医者っぽい発言にびっくりして。

実に意外だが彼女は医療に精通しており、今や保健室の主と化している。今や保健室を指して『ヤツィータ部屋』と囁かれるほどに。

「という訳でパスティル亭に行きましょうか」

「うぃっす…」

空は【夜燭】を窓から己の部屋に入れると、先を歩くヤツィータに追い付くべく歩調を速めた――

「――ッて、騙されるかッ!!何を『保健室行きましょうか』的なノリで言ってんですか!アンタまた俺に奢らせる気でしょう!」

そして仕事「ツッコミ」を熟す。

というのも初治療の日に『近くに食事が出来るところ、知らない?』と言われ、案内がてら付いて行った彼は酷い目に遭った。

その帰途、呑み潰れたヤツィータを背負いながらカラの財布を片手に、彼は月を見上げて世の無常を嘆いた。

「何よ~、こんないい女とお酒が呑めるんだから安いもんじゃない?」

「安いかどうかは奢る俺が判断しますよッ!!」

…物部学園は、朝から騒がしかった……

「……ふぅ、厚みが帰ってきた」

再度換金して太らせた財布を投げ、クルクルと回転させて受け止める。因みに換金した小銭は、学生達の色んな依頼［パシリ］を熟して稼いだモノだ。

――さてと。先立つモノも手に入ったし、パスティル亭で少し豪華な昼飯でも食うかな…

【…オーナー、誰か誘う友人くらい居ないのですか？】

「……」

レストアスの呟きを、先程の訓練の時のような明鏡止水の心を以って受け流す。

前世が緑属性だった彼にとって、耐え忍ぶ事は苦ではない。

【…情けない…それでも男ですか。セトキノゾムのように成れなどと無茶は言いません、しかし誰か一人くらい懇意の相手を作らなくてどうするのですか！】

（お前に迷惑掛けたか？放っとけっての――）

意外に口煩いレストアスと思考で会話しつつ歩けば、枝間に架け渡された板橋に差し掛かる。その不安定な足場を渡る、黒い外套の背中に――

「一一巽さーーん！！！」

黒髪の小柄な少女が飛び付いた。

「一一ッつぁ？！？お、お前ェッ！」

幾ら大兵の空といえど、勢いに乗った人一人を揺らぎもせずに受け止めるのは至難の技。

「見覚え有る天然パーマだったからもしかしてって思ってみたら、やっぱり巽さんだ！！お久しぶりです！」

「髪は放っとけ！…久しぶりだな…鈴鳴」

一一シャン……

地に降り立った少女の、髪飾りの鈴が鳴った……

The 39th Name ?・・・"再演?"

「いらっしゃいませー、パスティル亭にようこそ……って、何だ異かよ。張り切って損した」
「何だとは何だテメー、俺はお客様だぞ。神様だぞ」

パスティル亭の扉を潜るなり掛けられた声。ルプトナだ。
他の客にはにこやかに対応していたのが一転、空を見るやジト目タメ口に変わる。

「面倒だから、適当に奥から座ってよ。注文があるなら大声で叫びな」
「すんませーん！レチェレさんにチェンジお願いしまーす！！」

――精霊側の代表としてこの街に滞在しているルプトナは今、このパスティル亭で給仕の真似事をしている。
何でも、かつて下界で生活していたレチェレさん達の集落がミニオンに襲われ滅ぼされた時、彼女を救ったのがルプトナだったとの事。
世間ってのは狭いもんだ…

「『ムラクモ』の…」
「ん、どうした鈴鳴？」

歩き去って行ったルプトナから横に立つ少女に目線を移せば――表情を強張らせて某かを呟いていた。

「あ、いえ…巽さん、あんな綺麗な人とお知り合いなんですか？女性との縁なんて無さそうなのに」
「放っとけ畜生、それにあれは中身がすこぶる残念な奴だ」

気を取り直した鈴鳴と軽口を交わしながら席につく。昼飯時なので人は結構多い。

「でもまさか、こんなに早くお前に再開するなんて思わなかった。偶然ってあるもんだな」

「えー、酷いですよ巽さん！私はずっと逢いたいなーって想い続けてたのに…」

外套を脱ぎ、背凭れに掛ける。その武術着を見た鈴鳴がクスリと笑った。

「それ、効果有ったでしょう？持っててくれて嬉しいです」

「あ？ッ…偶然だ、莫迦…」

同じ部分に目をやれば腰帯に結わえてある、鳳凰の尾羽に似た根付けが揺れていた。

「ふふ。それにしても巽さん、筋肉質になりましたよね。以前は本当に戦士なのか疑問でしたけど、今は…いかにも『戦士』って感じで素敵ですよ」

「…ふん…」

照れ隠しにそっぽを向く。少し顔を赤らめて。

「あ、ところで以前の問いを覚えてますか？」

「…『弾丸を放つのは銃の何処か』だろ？そうだな…」

続いた言葉を紡ぐ鈴鳴は、鍛治士の顔。同じく真面目な顔を返して

ずっと考え抜いてきた、その文言。それに対して出した答は――

「――『撃鉄［ハンマーコック］』だろ？此処に何か細工出来れば…或いは魔弾を撃てるようになるかもしれない」

…そう、そもそも彼が代償を支払ってまで【比翼】や【連理】、【天涯】に【地角】、そして【海内】を創り出したのは、彼の切り札である『魔弾』を連射する為だった。その為に前世の記憶から『マナゴーレム』の機構を応用したのである。

しかし結果は惨憺たるモノ。今でもまだ、ただマナ結晶の銃弾を撃ち出すだけに過ぎない。【無銘】のように決殺の『兵葬［へいそう］』となるには性能が圧倒的に不足している。

「その改善案は…無いみたいですね」

「…正直煮詰まってる。どうすれば良いのか皆目検討もつかない」

腕を組み天井を仰ぐ。腰の伍挺が重力に引かれる。

――前世みたいに神剣持ちならやりようも有ったんだろうけどな。…ただの人間にはこれが限界なんだろうか…

思わず腐りそうになり、苦笑する。『自分らしくない』と。

――諦めて済むなら此処まで来てないか。後は己の壱志［いじ］に懸けて…例え一歩ずつでも、牛歩だと笑われても漸進［ぜんしん］するだけだ…！

「…余計なお世話かも知れませんけど、私に考えが有ります」

「…何？本当か」

鈴鳴に視線を戻せば、何か難しい顔をして思考しているようだった。
そして顔を上げ――

「取り敢えず腹拵えを。『下手な考え休むに似たり』、同じ休むなら食事しながらの方が効率的ですよね？」

菜譜［メニュー］を眺めていた彼女は、手早くルプトナを呼び注文を告げたのだった。

「どうぞ巽さん、ここが私の新しい工房です。お好きな所に座ってください」

昼食の後に案内されたのは街外れの一軒家、その扉を潜れば乱雑ながら何処か片付いた雰囲気の室内。

【…汚いですね。まぁオーナーの部屋よりは幾分マシですが】
（…今更だけどお前…もしかして潔癖症とか？）

適当な場所に腰掛けつつ、妙なトーンで文句を述べたレストアスに素朴な疑問をぶつける。

【誰しも汚いより綺麗な方が良いに決まっています。そうだオーナー、条項に整理整頓を加えて欲しい。貴方の部屋は些か汚い】

しかし薮蛇だった。要らない所に噛み付かれ、空は――

「鈴鳴ー、茶はまだかー？」

…『青属性の言魂を無視［ワードオブブルー］』した。

【…オーナー、私の話を聞いていましたか？部屋の掃除…】

「出涸らしで良いですよねー？」

「こだわりはねーよ。タダなんだし有り難く頂くー」

【オーナー、話を聞い…】

「お茶請けはお煎餅ですけど、要りますー？」

「貰うー」

【……】

湯気を立てる湯呑みが置かれる。やはり緑茶、こだわりが有るらしい。

不貞腐れたレストアス。取り敢えず茶で唇を湿らせた空は早速話を切り出す事にした。

「で、『考え』ってのは何だ？」

「せっかちなんですからもう…、えーと、有った…これです」

素材棚から取り出されたのは一一六つの石のようなモノ。

「…『永遠神剣の凍結片』か？」

「かなり近いですけど、惜しい。右から『東天のサタルニア結晶』に『西天のエルファン結晶』、『南天のルビカン結晶』、『北天のオールワ結晶』、『下天のモスクダ石』、そして『上天のクバルカ大結晶』と呼ばれるモノです。凍結片並に貴重な品ですよ」

それぞれ名が有るようだが、違いは色形程度しか解らない。だがレストアスには感じるモノが有ったらしい。

【……オーナー、これは恐らく『聖なる神名”オリハルコンネーム”の結晶』…詰まりは『神のチカラの結晶』ではないでしょうか？】

（『神名』！？あれって結晶するものなのか…）

――いや、よく考えてみろ。”欲望の神”は研究の末に『神名』を制御する事に成功している……有り得ない事じゃない。

かつての記憶、その深淵に。己に『詐［いつわ］りの神名』を与えたのもその神だった事を思い出す。

「不思議な力を持ってる石で、何でも『奇跡』を起こすとか。使ってみる価値は有ると思いませんか？」

「確かにな…でも、金はそう無いぞ」

確かに使ってみる価値は有る。しかしそんな貴重なものなら値が張る筈。幾ら換金したばかりとは言え、所詮は彼は学生。

「そうですね…それじゃあ、物々交換でどうでしょうか？」

「つまり、俺が持ってる『パーマネントウィル』と交換か？」

「はい。巽さんなら珍しいモノ持ってるかも知れませんし」

――コイツめ、吹っ掛ける気だな…

「今欲しいのは『月光が注ぐ笠』、『マルツの松脂』、『構築者ユウの欠片』…」

「悪いけど一つも無いなそんなもん…つーか『構築者ユウ』って誰だよ？人間の欠片て何だよ？猟奇的な香りしかしねーよ」

何にしろ彼は集めたパーマネントウィルを二ツの『兵葬』…神獣が

存在する【無銘】と【夜燭】に、マナ補充の為に『喰わせて』いたのだから無理だ。

「じゃあ、私の『お願い』を聞いていただければプレゼントしますよ？」

――成る程、それが本当の望みか。やっぱり商人だな、目端が効きやがる…

「オーケー。何をすれば良い？」

「そうですね、それじゃあ、このお店の宣伝をお願いしますよ」

「宣伝…？」

言葉に、空は部屋の中に在る武器に視線を巡らせた。

――一般的なブロードソードやスピアー、ショートボウにウッドシールド、軽鎧…サーベルにタルワール、ファルシオンにグラディウス、ツヴァイハンダーにポールアクス、レイピアにカトラス、クレイモアにバスタードソード、柳葉刀に青龍偃月刀。

珍しいモノになればダークにジャンビーヤ、ズー・アル・フィカールにモルゲンステルン、ゴーテンタックにパルチザン、日本刀にシャシュカ、ミセリコルデにマン・ゴーシュ、ククリにソードブレイカー、スクラマサクス…ありゃヤタガンか？まるで武器の博物館だな…

以前剣の世界で開いていた店より随分と大量の武器がある事に気付く。

「えへへ、どうですか？」

武器に注目している事に気付いたのだろう、彼女はにんまりと笑う。
それで何となく察した彼は、口を開いた。

「…なぁ鈴鳴。こんなに大量の武器、どうするつもりだ？」
「どうするって、決まってるじゃないですか。この世界の人と精霊の中は最悪らしくて、近く討伐があるかもしれないそうなんですよ～」

――やっぱりか…このすっとこ死の商人…

「無理して仕入れた鋼材で造ったんです！これでがっぽり儲けて前の損失を補填ですよ！」
「…あー、そりゃあご愁傷様。早く釘にした方がいいぞ」
「へ？」

ぴーんと指を立てて語る鈴鳴。そこに空はあっさりと、無味乾燥の言葉を投げ掛ける。

「戦争は無い。和解したからな、人間と精霊」

得意満面が一転、米神をヒクヒクさせながら冷や汗を流し始める。

「…ア、アハハ…もう～、巽さんたら冗談が下手ですよね～…」
「俺、関係者だし」

そんな彼女に止めの一撃が放たれた。

「――巽さぁぁん！お願いします、何か一つで良いから買って行って下さいぃ！！利率トイチなんですよ～！！」
「知るか、そんなトコから金を借りるお前が悪い。果てしなく自業

自得だろ」

ガバリと泣き付かれ、危うく茶を零しそうになる。
しかし巽空は、殊更金に関しては鬼神ですらも避けて通る男だった…！

「私には巽さんしか頼れる人が居ないんです、お願いします～。…とっても良い『おまけ』も付けますから～」

「…む…」

さしもの金の亡者も呻きを漏らす。潤んだ上目遣いでの哀願に男心と吝嗇心をくすぐる一言。
何を隠そうこの男、人に頼られた経験が皆無。更に言うなら、それが半玉とはいえ女性ならば尚更に無い。

「…ちっ…仕方ねェな」

「やった！ありがとうございまーす！」

――コイツ、末は悪女か？

コロリと笑顔を浮かべた鈴鳴に、彼は溜息を禁じ得なかった。

斜陽に染まる大樹。その道のりを歩む二つの影法師。

「お昼もご馳走になってたのに、ホントにすみません…」

「ハァ…良いさ、お前には恩も在るしな…」

結局昼を奢っていた上に武器まで買ってしまったる空の財布は、岡に揚げられたくらげのように萎んでしまった。暫くは節約せねばなるまい。

「でも、随分買い叩いてくれましたよね…怨みますよー」
「返品しても良いんだぞ」
「感謝感激雨霰ですよー」

白々しく返した彼女に、空は背を向けて歩き去る。ガチャガチャと刀剣の束ねられた包みが鳴った。

「じゃあな。また機会が有ったら来るわ」
「はい。お待ちしてます巽さん」

スッと左手を挙げて別れの挨拶とする。そのまま彼は一度も振り返らずに見えなくなった。

「…さて、次の相手はまた『神の剣の担い手』ですか…勝ち目の無い闘いばかりですね、貴方は…」

そんな彼が見えなくなるまで手を振り続けていた鈴鳴が呟いた言葉。

「『不可能』に立ち向かう貴方が、その僅かな『手札』で一体どんな『可能性』を紡ぐのか…愉しみにしていますよ……」

そのまま腕を組み彼女は、いつかと同じく酷く熱の篭る…しかし冷淡な迄に妖艶な笑顔を浮かべた……

「一一あぁ、本当に貴方は興味深い…タツミ＝アキ……」

The 40th Name…"連携"

鬱蒼と茂る樹間を駆ける鴉。その黒い外套［ツバサ］の内から覗いた銃口［ツメ］が一一彼に飛び掛かった青ミニオンを捉えた。

【マナよ、碧き龍の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け一一『ゲイルストライク』ッ！】

「一一あばよッ！」

黒い篭手に包まれた左手の、人差指で安定と照準を高めた【無銘】。中指で引かれた引鉄［トリガー］、墜ちた撃鉄［ハンマーコック］の熾こした闇色の焔により撃ち出された真空は不可視の槍。

一点に集約された風龍の息吹が青ミニオンを穿ち貫いて消滅させ、青い燐光が横殴りの雨のように彼を撫でていった。

「……」

【無銘】を番えたままで周囲の気配を探る。残っている神剣の気配は一一二ツ。

「片付いたな」

「口ほどにも無いや」

「……」

【荒神】と【揺籃】の、二ツだけだ。敵の一部隊は完全に消滅した。

「ん、どうしたよ巽？拳なんぞ震わせて」

「一一いい加減にしとけよ莫迦共がァァッ！これで何度目の交戦だ

と思ってんだよ！俺達がやってんのは『偵察』だろうが！」

かんらかんらと笑いながら鴉の肩に手を置く狼。それに向けて彼は激怒した。

さもありなん、この二人とくるや、ミニオンを見つける度に自分から突撃して行くのだから。

「うるっさいなー、良いじゃん勝ったんだから」

「それに偵察だってやってんだ、その上でミニオンの数も減らして一石二鳥じゃねーか」

同時に小指で耳をコリコリし始めた二人に空は頭を抱える。この二人は判っていない。確かに彼は…いや、彼の持つ【無銘】には己や己の周囲の気配を絶つ事が出来、隠蔽や索敵にこの上ない威力を持っている。

「ああもう、とっとと退くぞ！ミニオンが集まって来る前にな！」

しかし、それはあくまでも『隠密行動』に徹した場合。敵を倒してしまえば、消えたミニオンの存在から居場所が割れる。散在しているミニオンなどただのピケットバリアだ。

倒される事が前提の索敵配置、敵将はかなりの切れ者だというのに連れ二人は。

「ええ？！もうかぁ？暴れ足りねーなぁ…」

「そーだよ。こんな奴ら、ボク達でみんなやっつけちゃえば良いのにさ」

渋る二人を引き連れ、空は撤退する。

一一まだやってるのか、オー○事…

某人材派遣会社に電話しようかな、などと割と本気で考えながら。

「一一という訳で、チーム替えをお願いします会長！」

「何よいきなり…」

物部学園の食堂は一瞬、静寂に包まれた。思い詰めた顔の空がいきなり沙月に詰め寄ったのだから。

「あの二人と偵察なんて無理です会長！もう三日目なのに、未だに敵の第一警戒線すら越えられてないんですよ！」

「何言ってるのよ。気配遮断に精密索敵の君、サバイバルのスペシャリストソルラスカ、精霊の森を知り尽くしてるルプトナ。これ以上のチームなんて無いじゃない」

「ホントだァァ！字面だけ見たら最適のチームじゃん！」

デザートの杏仁豆腐片手に身構えた彼女。因みにその杏仁は空の手によるもの。彼は着実に料理スキルを伸ばしつつあった。

「でも駄目なんですよ！あいつらと来たら勝手に敵陣中央にセンタリング上げやがって、勝手にオフサイドトラップに引っ掛かってるんですよ！！」

「それを監督するのが君の役目でしょう、タツミ監督？」

「そっちのタツミじゃねーよ！字が違うわ！」

バン！と卓を叩く空を尻目に、皿に出された杏仁を掬う沙月。

「と・に・か・く！チーム替えをお願いします！このままじゃ何時まで経っても『精霊回廊』を抑えてる『光をもたらすもの』の拠点偵察が出来ません！駄目なら独りでやります！」

「うーん……仕方ないわね、流石にこれ以上の足踏みは勘弁だし」

…『精霊回廊』とは、精霊達の移動手段兼エネルギー源のようなモノだ。そこを、長老ンギは『破壊神から世界を救うため』と唆されて『光をもたらすもの』に明け渡してしまったという。

結果、そこをミニオンの製造工場［プラント］にされてしまった。

「後、独りは不許可。君は独りだと歯止めが効かないでしょ？」

「……あの二人と組ませたの、もしかしてそれが理由ですか」

スプーンに乗る杏仁を見詰めて唸った彼女。そんな沙月にジト目を向ける空。

「…さて、取り敢えず明日の再偵察までにはメンバーを選んでおくから、君も準備しておきなさい」

「頼みますよ、ホントに…」

胡散臭そうな眼差しを向けて彼は厨房へと歩み、盆に載せた食事を持つ。クリスト部屋に持って行く分だった。

「あ、そうだ。一つ頼まれてくれる？借りてた下界の地図をロドヴィゴさんに返して来て貰えるかしら」

「拒否権は無いんでしょう？…ハァ、別に構いませんけど」

廊下に出て行った少年の背中を見送って。

「……上手く行くと思ったんだけどね、あの三人組…」

ぽつりと呟く沙月。その脳裡に三人組の姿を描く。

先ず最初に思い浮かんだのは紫の髪に前髪の一部だけ赤いメッシュの入った、野生味溢れる少年。その両拳に装着された鉤爪は黒属性の、永遠神剣第六位【荒神】。

――ソルラスカ。彼の事はよく知ってる。豪放磊落の単細胞と評するのが一番。
その実力は旅団でも随一。特に近接、黒属性の特徴とも言える総合的な攻撃力や防御力に関しては右に出る者は居ない近距離要撃要員。

続いて思い浮かんだのは黒髪を後ろで一つに束ねた、巫女のような格好をした少女。履く靴は青属性の、永遠神剣第六位【揺籃】。

――ルプトナ。彼女の事は全く知らない。明朗快活な単細胞と言ったところかしら。
実力は中々ね。スピードと運動能力、青の対抗魔法で敵を翻弄する中距離遊撃要員。

最後に思い浮かんだのは天然パーマ、黒い中華風の武術服に身を包んだ少年。その左手に番えられた小型の拳銃は…正体不明の『永遠神銃』。その銘［な］を【無銘】という。

――異空。彼は…よく知っているような全然知らないような。複雑怪奇な単細胞…って、自分で言っといて何？
実力は測定不能。こう書くと何だかカッコイイけど、彼の場合残念な方に測定不能。力もスピードも鍛えた人間の域を越えていない。
…でも、その戦略構成技術はピカイチ。弱いからこそ、敵味方のチ

カラを見誤る事無く『生き残る』戦略を組み上げる才覚を持っている遠距離射撃要員。

「…何より、あの『永遠神銃』よね…」

その【無銘】という、全根源力［マルチカラー］の銃だ。その性能は非常識にも程が有る。論うのも面倒だ。

だが、それには『永遠神剣』を撃ち倒す『可能性』が潜んでいる。

「『遣い熟せれば、ニンゲンにでも神剣士を倒せるかもしれない銃』か…全く…始めはそういう永遠神剣だと思ってたんだけど」

――『身体強化が無い』とか『マナ操作が出来ない』とか、そういう訳の判らない部分も有るけど。

…なんにせよ、完璧に役割分担が出来ている筈だったんだけどね。

それに彼には手綱取りの才能も有ると思ってたんだけど…いくら暗殺拳銃［デリンジャー］のツッコミでも、ボケのガトリングガン二門の弾幕には勝てなかった、という訳か。

「見当違いだったかしら…」

思考を切り上げ、掬ったままだった杏仁を口に運んで。

「――あら、なかなか美味しいじゃない」

その甘味に、愁眉を解いたのだった。

「――おや、タツミ君。わざわざ御苦労様です」
「いえ、こちらが無理を言って貸して頂いた物ですから。本当に有難うございます」

頭を下げ、彼は巻いた地図を両手で差し出す。それを受け取ったロドヴィゴは中身を改めて、卓の上の印刷された地図と見較べた。

「しかし、貴方がたの技術は凄いですな。『こぴーき』と言いましたかな、公文書を偽造し放題になってしまう」

やはり為政者、そういう所は気になってしまうらしい。

「まあ、そうですが。大体の場合はあれで印刷した物に公的なチカラは有りませんから」
「ふむ、法整備も整っている訳ですな。益々好感が持てる世界だ」

頷いて地図を丸め、棚に仕舞う。
その男性に向けて。

「…ところで、ロドヴィゴさん。一つ面白い話が」
「…？」

彼は、『ある話』を持ち掛けた――…

The 41th Name…"敵陣潜巧"

洞窟内に集結していた神剣士一同。彼等は既に、敵の拠点施設である『セフィリカ＝ルクソ』まで残り三分の一の距離まで迫っている。

此処に至るまでに交戦した十数部隊のミニオンは、全てマナの霧へと還った。残すは拠点防衛に置かれているであろう精鋭部隊と一一『光をもたらすもの』の将のみ。

「…遅いわね」

ぽつりと呟いたのは沙月。他の神剣士達が食事や休憩を取る中、熱帯らしくスコールの降り始めたジャングルを見据えた。

《心配ですか？》

「そりゃあまぁ、ね」

その沙月の横に浮遊する白い結晶妖精、クリスト＝ミゥ。同じく、叩き付けるような雨に土煙を発てる密林を見遣った。

《…敵が『光をもたらすもの』である以上、通信機は傍受されている可能性が有りますから…クリスト族同士の精神感応を利用する方式しか有りません》

…剣の世界では、相手がその世界の軍隊である『グルン＝ドラス軍』だった為に上手くいった。しかし今回は、分枝世界を股にかける殺戮者達、それに見合う科学力を有する『光をもたらすもの』。

「…ええ、お陰で捜索の時は大変だったものね」

あの捜索の時も二人一組で広範囲をクリスト族の感応を利用していた。しかし、数の問題でクリスト族と組む事が出来なかった一組は通信機を利用した。
それを傍受されたのだろう、ミニオンの襲撃を受けたのだった。

《大丈夫です、サツキ様。タツミ様もポゥも隠密行動に適した人物ですよ》

言い切ったミゥ、その顔に迷いは無い。その信頼に満ちた少女に、沙月は問う。

「…じゃあさ、ミゥ…『あの人』は大丈夫だと思う？」
《…だ、大丈夫ですよ。『あの方』もああ見えて責任感が…強い…方で…》

尻窄まりに弱くなる口調。表情も、眉尻の下がった情けないモノになった。

「《一一っ！！？」》

一一瞬間、煙る森の中から人影が歩み出た。

《…皆さん、只今戻りました…》

先ず先頭に…疲れた顔のポゥ。そしてその背後に、和傘型の贋物【繚乱】を差して雨を凌ぎ一一

「沙月、ミゥー！戻ったわよー！」
「……」

…ヤツィータを背負って歩く空が続いた。

「……何その状況」

「いやー、ミュール履きとか嘗めて掛かっちゃ駄目ねぇジャングル。クー君みたいにしっかり装備整えとかないと」

年甲斐も無く『てへっ☆』とばかりに舌を出した彼女。そんな女性を背負ったままで。

「会長…俺…もう文句言いませんから、お願いしますからこの人以外と組ませてください…」

「…うん、今回ばかりはごめんね…上司が」

空は何か悟りきったように…まるで解脱したかのように清々しい顔をしていた…

簡単なブリーフィングを終え、一同は一斉に思い悩む。斥候部隊が確認してきた『セフィリカ＝ルクソ』の防備の堅さに。

「…『マナ嵐』とはまた…とんでもないモノを持ち出してきたわね、『光をもたらすもの』の奴ら」

…『マナ嵐』。マナ存在にとって、それは『攻勢防壁［ブラックアイス］』。触れれば確実な死を齎す致命の罠だ。

《…それを外周に展開して敵の侵入を防ぎつつミニオンを増産し、

体制を整えては送り出す…鬱陶しいったらありゃしない、ヤドカリみたいな奴ね》

「こういう戦術って本当に苛つくわ…敵を迎え撃つ度量も無いのかしらね」

ゼゥとタリアの毒舌組が口を開く。実に容赦が無かった。

「でもまぁ、効果的ね。実際あたし達にはどうしようもないわ…」

「入るだけでも即消滅だからな…厄介な話だぜ」

「そんなに凄いモノなんだ、それ…」

ヤツィータの言葉に頭を捻るソルとルプトナ。しかし解決策など出ようも無い。

「一一なら、俺が行けばいい。俺なら問題無く通れるんですし」

静まり返った洞窟内に響いた言葉。その主は、驟雨に濡れた漆黒の天鵞絨［ヴェルヴェット］の外套を干していた空。

「却下」

「早ッ!?ってかそれしか無いでしょ!ただのニンゲンの俺なら問題無しじゃないですか!」

「だからでしょ?中にはミニオン、下手をすれば『光をもたらすもの』の神剣士が居る事だって考えられるんだから」

沙月の言葉も尤もだ。虎穴に裸で飛び込むようなもの、危険過ぎる。正気の沙汰ではない。

「会長、俺はミニオンとか神剣士と戦う為に行くんじゃ有りませんよ。マナ嵐の発生装置を破壊する為です」

「…発生装置ね。その場所は？」「確認するまでも無く、あのピラミッドの脇でしょう。じゃなきゃ防御の穴になる」
「判んないって事じゃない。それにどうやって破壊する気よ？」
素気なく断ろうと掌を天井に向けた彼女。その掌に、細長い筒が置かれた。

「ダイナマイトです。後十五本は有ります」
「……君、何処からこんなモノ仕入れたのよ」
「ロドヴィゴさんから借りました。それと、俺が行かなくて誰が行けるんです？ロドヴィゴさん達にでも頼みますか？剣の世界で戦争を潜り抜けた俺を行かせられない場所に、精々ミニオンと戦ったのが関の山の青年団を送り込んで無駄死にでもさせるんですか？」
「む…」
ジッと見詰める空の眼差しに、沙月は唸る。確かに他の策など無いのだ。

拠点構築のためについて来てもらっている青年団はあくまで雇い入れの一般人。中には数人程度傭兵も居るが、ミニオンとの戦いでは役に立つような事は先ず無い。
当たり前だ、彼等は『神に刃向かうチカラ』など持っていない…真の意味でニンゲンなのだ。
今この場でマナ嵐を越える事が出来、尚且つ生き残る可能性が一番高いのは確かに巽空を置いて他には居まい。

「…やらせてあげなさい、沙月」
「ヤツィータ、何を――」

悩む少女の肩に手を置いたヤツィータ。その言葉に沙月は反論しようと振り向き――何時に無く真剣な眼差しの彼女に気圧された。

「言ったからには勝算は有るんでしょう？勝ち目無しで言うほど馬鹿な子でもないし、やらせて見れば判るわ。もし出まかせだったとしても死ぬのは君自身だけなんだしね？」

そこに在ったのは、先程までのちゃらんぽらんな保健医『ヤツィータ』ではない。反論を許さない冷静な大人の顔…『旅団』の副団長『【癒合】のヤツィータ』の顔だった。

「勿論、言ったからには覚悟の上です。期待掛けられれば応えて見せますよ」

「ふふ…宜しい、あたしが許可するわ。好きにやってみなさいな」

「…恩に着ます、姐さん」

呟き、頭を下げる。その姿に――

「なんでちょっとVシネテイストなのよ…ああもう、勝手にしなさい！」

呆れ果てた声色で沙月は許可を出したのだった。

それは、まさに光の嵐だった。乱舞するマナ光は次第に密度を増し、マナ存在の保有する高い密度のマナを削っていく。

「…ここいらが限界みたいだな」

「気をつけろよ、空…」

ソルラスカと望は息苦しそうに呟いた。マナ存在ではない空には解らないが、大分マナ嵐は強力化しているようだ。

「…解ってる。んじゃあ一丁ブッ壊して来るわ」

ぐっと背を伸ばした空。その格好はいつぞやと同じ、武術服を脱ぎ腰巻きにした外套と両手両足に巻いた包帯。

違いといえばウェストバッグを付けている事にバンダナ代わりに巻いていた腰帯が無い事、後は現地で調達した湾刀『シャシュカ』に小刀『ヤタガン』を後ろ腰にクロスさせて挿して草履を履いている事と、【無銘】を番えている事だ。

因みに贋物は総て外している。あれもマナ存在には違いない。そしてレストアスにも脳内から御退場願った。

「本当に気をつけてね、空くん。無茶しちゃ駄目だよ」

「あー……あ、ああ…」

希美の言葉に、空は茶を濁した。なんせこれからその『無茶』をしに行くのだから。

「ま、お前は殺したって死にそうにないけどさ。寿命以外じゃ死ななそう」

「ヒトをクマムシ扱いかよテメー、チッ…精々引き付けろよ」

続くルプトナにジト目を返して。更なる煌めきの空間に歩み入る一一

「一一っと、危ねぇ…消し飛ぶとこだった」

「ん？なにさ――おっとっと」

少しでも周囲のミニオンを引き付ける為に行動を開始した神剣士達の最後尾。詰まりは最後に会話していたルプトナが振り返った。その彼女に――彼の首飾りと【無銘】が投げ渡される。

「預かっといてくれ。マナ嵐が解除されたら真っ先に届けろよ」

「はぁ？ちょっ…」

聞き返そうとしたルプトナだったが、もう空はマナ嵐の彼方に走り去って行った。

「…何だろ、これ」

彼女は掌の上のそれらを確かめる。【無銘】はともかくもう一方。チェーンで一纏めにされた、銀色をした鍵と若草色のお守り。そして――夜空を閉じ込めたような星々の煌めきを宿して、下方には鳳凰の尾羽根の根付けが結わえられた宝玉。不可思議な魅力を放つそれに、彼女は魅入られる。

「ルプトナー！置いてくわよー！」

「あ、すぐ行くー！」

沙月の呼びかけに、気には成ったがそれを胸元にしまい込んで。彼女は一行の後を追う。

The 42th Name…"鬼神"

確認したマナ嵐発生装置は二基、その四隅に爆弾を取り付ける。

「これでよし…ッと」

――前世の記憶に有る『神造物［アーティファクト］』に、『嵐の干渉器』というモノが有る。用途と規模は違うが、それの機構と似たモノだろう。

そして二基有る為、片方が破壊されればもう片方に敵が集中して発見される危険性が増す。準備時間は二倍になるが、効率よく纏めて破壊させて貰おう。

…その判断が彼を救う。この装置には『同時に破壊されないと壊れない』という特性が在った。

二股に分かれた導火線を延ばし、遠く離れる。爆風に巻き込まれたら死んでしまうただのニンゲンの彼。

一定距離離れてライターを取り出し火を点ければ、シュウウ…と小気味よい音を発てて火花が走り――

「――余計な真似をするな」

衝き立てられた肉厚な刃に、地面ごと導火線を断ち斬られて燃え尽きた。

「……ハァ。後一息だったのに」

――出たか…しかもこれは想定してた中でも最悪の部類だな…

眼前に立つ偉丈夫。紅い覆面に様々な武具の入った広口の鞘を担ぐ、薙刀を持つ武士然とした男。
解りやすく例えるならば『武蔵坊弁慶』、だとすればその得物は彼の愛用したという大薙刀『岩融［いわとおし］』というべきか。
放つ覇気は常軌を逸している。平和ボケしたニンゲンならばそれだけでも圧死しかねない存在感を持つ。

「どのような手段を持ったかは知らぬが、まさか単身飛び込んで来るとはな。しかし『飛んで火に入る夏の蟲』という奴だ…」

覆面の奥の獰猛な眼差しと睨み合う。殺気に充ち溢れたそれに、魂の奥底から恐怖が湧く。

「…『光をもたらすもの』の将、だな？」

それを決意という縛鎖で抑え付け一一口を開いた。

「如何にも。我が名はベルバルザード、『光をもたらすもの』が一ツ……」

地面から薙刀が引き抜かれ、片手で持ち直す。それだけで、ブォンと風斬り音が起きた。刹那に男…ベルバルザードの四肢に力が充ちる。

「一一永遠神剣第六位【重圧】が主［ヌシ］、『【重圧】のベルバルザード』！！」

地に向けて構えた薙刀型の永遠神剣【重圧】が鈍く煌めく。マナ感

知能力が無くても見ただけでも解る、その密度は桁外れ。
少なくとも、巽空はこれ程の存在マナを有した神剣を見た事は無い。
冷や汗の伝う頬を一度拭い、空は刀を抜いて『構え』る。鍔の無い刀、かつて帝政時代の露西亜軍で採用されていたという長刀『シャシュカ』に似た刀。ベルバルザードの持つ神剣に対して、何と心許ない武器か。
…いや、武器どころか障害にすらなりはしない。彼の命は正しく風前の灯。

「どうも御丁寧に。俺の名は巽空…」

だからこそ、彼は奮い立つ。敵わぬからと諦める事も、自棄になる事も無い。
何故なら彼には一一決して退けぬ理由が有る。

「見ての通り一一ニンゲンだ！！」

『期待に応える』という理由。ただその『壱志［いじ］』と言う名の、貫くべき”魂の刃”があるのだから…！

「意気や良し…」

その闘志にベルバルザードは、『期待』の篭った視線と共に笑みを漏らす。
そして一一余りに一方的な蹂躙劇の幕は上がる。

「一一徂［ゆ］くぞ【重圧】！その全てを圧［へ］し砕け！」

朱き鬼神の豪刃が大気を震わせる大音声と共に振り上げられ――全てを捩斬るべく、裂帛の気合いと共に振り下ろされた――！！

地を割った一撃は、懐に潜り込んだ空には当たらなかった。だが――

「…小僧。貴様それは、何の心算［つもり］だ……」

ベルバルザードはギシリと歯を鳴らす。力量と技量を測るべく小手調べとして振るったその剣戟を躱わされたのは構わない、いや、寧ろ良い反応だったとすら言えよう。

だが…その後の行動が彼の逆鱗に触れた。

「その『剣』は何の心算だッ！」

咆哮する鬼。その彼の心の臓の位置に向けて、逆手に突き出された長刀。

「…チ、やっぱ駄目かよ」

それは、彼の『鉄の皮膚［アイアンスキン］』の前に無残にもひしゃげている。ただの剣だ、当たり前の事。

――解りきってはいたけどよ、まさかただの一度でとはな――ッ！？

と、轟音が空の耳を突いた。間髪容れずにしゃがみ込めば、一瞬前にその頭部が存在した空間を【重圧】の柄が薙ぐ。

もし当たっていれば西瓜のように粉砕され、脳漿を撒き散らしていただろう。

躱しきった後には立ち上がらず、そのまま前宙転で離脱した。刹那、そこに向けて返す刃が落ちる。

「逃げ足だけは速いようだな…。だが、このような下らん得物では我に傷一ツ付けられはしない」

両断した長刀を見遣りながら、長柄を握り潰さんばかりに力を籠める。それ程に彼の怒りは強い。
それは虚仮にされたからではなく――失望から来るモノ。『期待』を裏切られた事に対する憤怒。

「…いやいや。それが俺、手癖も結構悪くてね。にしても流石に神剣士は持ってるモノが違うな、握っただけで判る」

対して、向き直った空も長柄を構えた。片方にだけ月牙産の取り付けられた矛…三国志演義随一の猛将『呂布』が遣ったと謂われている『方天画戟』に似た武器を。

それを見るや、ベルバルザードは己の武具籠を改め――更なる怒りを瞳に燈した。

「我が武具を……！何処まで…何処まで我を虚仮にすれば気が済むのだ、貴様はッ！」

地面を蹴り砕き巨躯が疾駆する。【重圧】が唸りと共に、目の前の簒奪者を打ち砕くべく天より降る。

――ギィィン！！

それを、真っ向から受け止めた。勿論、斬れ味鋭い刃には敵うべくも無い。

ならば耐え抜くには一ツだけ。両の腕と肩、脚を踏み締めて、画戟全体を盾に【重圧】の柄を受け止める。

「――ぐ…おおおォッ！！！？」

眼を見開き、砕けんばかりに歯を喰い縛り、脂汗を流しながら。それでも空はベルバルザードの一撃を受け止めてのけた。

――逃げる訳にはいかない、太刀［たち］向かう可能性を得たのならば。真正面からぶつからねば己が…此処まで努力してきた『異空』が廃るだろうが――！

「――ほう」

己の一撃を耐え忍んだ少年に、彼は少し意外な顔をした。確かにその武具は彼の蒐収品の中でも最上級の業物。かつて己の世界を守ろうと彼に立ち向かった英雄の遺った武具だ。

血沸き肉踊る闘いを繰り広げた相手の『遺品』。神剣ではないが、それに比するモノ。

…だが、幾ら武器が良かろうと。研鑽無しに彼の一撃を受け止められる訳が無い。この少年は少なくとも、『ヒトの身で』それを成せる程の鍛練を積んでいるのだ。

「だが…それだけだ！その程度では我が神剣【重圧】の相手足り得ぬ！！」

主の気迫に応え【重圧】が煌めく。ミシミシと圧力が増し、空は遂に片膝を衝いた。
そのまま押し潰されるのではないかと焦燥すら感じられる。

――しかし、良い武器だ畜生。神剣の一撃に耐えやがった。世界ってのは広い、どんな鍛え方をすればそんな事が出来るのか、この武器を造った鍛冶師に会いたいもんだ！

「――そろそろ本気で相手をしてやる…」
「…！？」

宣言は執行の合図。ベルバルザードの身に充ちていく高純度の朱い精霊光［オーラフォトン］の名は『ウォームス』。

「処刑台の前に立つ気分はどうだ？」

…この瞬間より此処は、彼の永遠神剣【重圧】の支配する領域と化す。

ただでさえ筋骨隆々の肉体が、二回りは巨大化したような圧迫感。凄まじい熱と共に、精霊光が爆風のように周囲を踏み躙った。途方も無いマナ圧に当てられ、胃の腑が裏返りそうになるのを何とか飲み下す。

「何であろうと…叩き潰すのみ」

そう、今まではただの小手調べ。今から漸く本番、今からが本当の

――蹂躙だ。

――おいおい、もう泣きそうだぜ。勘弁してくれよ…更に力が……強…く……ッ！！！

軋みを上げ、輝入る画戟の柄。全身を遣って【重圧】を受け止めたまま、空は何とか腰元のバッグを漁る。こういう時の為の備え、それを手に取った。

「――ヌゥン！」

一息に圧力を増し、遂に鬼神は画戟を砕く。朱く染まった刃、『バッシュダウン』が大地を刈り――顔面に向けて投げつけられた、三つの『何か』を横の壱薙ぎで粉砕した。

神剣の一撃に粉砕された『それら』は、周囲に白い霧を撒き散らす。

「眼眩ましだと…小賢しい！！そうまでして命を繋ぎたいかッ！！」

携帯用のスプレー型消火器。使用期限切れで倉庫に積まれていたの『それら』が撒いた煙幕に視界を覆われるが、この程度で気を乱すベルバルザードではない。

…恐らくは森の外に逃げる気だと、彼は断じた。今あの少年が窮地を脱するには、『マナ嵐』を利用するしか無いと。あれにはベルバルザード自身も触れられはしないのだから。

どの方角に逃げたかは判らない。判らないが――何処に逃げようとも逃がしはしない。

「――ならば、眼前に在るモノ全てを……断つ！！」

握り締められた右拳にマナが纏わり付く。朱く激昂したマナが。

「滅べェェェェェェッ！！！！」

地に叩き付けられた拳により巻き起こった衝撃波が周囲に拡散する。
『狂乱する軍馬車［バーサークチャリオット］』の名に恥じぬ波動の一撃は、煙を吹き飛ばしながら周囲に在る全てを粉砕した。

「…ッは」

少し離れた場所でその煽りを受けて吹き飛ばされ、後転の形で転がった空。

やがて仰向けに、曇天を見上げる姿勢で止まる。

「ーーガハッ！！」

その少年の頚に、鬼神の豪腕が掛かった。
天を覆ったと錯覚しそうな巨体にのしかかられ、最早動く事どころか呼吸すらままならない。

「…終わりだ、ニンゲン。全力も出し切らずに死ぬ己の慢心を呪うがいい……蟲ケラめ！」

侮蔑の視線を投げ掛けた眼が閉じられ、ベルバルザードは精神を集中させた。その躯を対魔法の鎧『スーパーアーマー』が堅める。

「マナよ、万物を従わせるチカラに変われ…」

更に、空の身を通して地面に【重圧】の神力［チカラ］が流し込まれた。

「地に這い泣き叫べ！弱者には相応しい姿だ！！」

「……ッぐァ！？」

二人を中心に朱の魔法陣が拡がる。導力を得た術式が履行され――

「――『グラビトン』！！」

現実を…正しき『理法』を浸食し改竄する『魔法』と化した――…

森の中をタリアとポゥにヤツィータのチームが歩む。

反対方向には望と希美に沙月、奥にはゼゥとカティマにワゥのチームが回り込んでいる。因みにミゥとルゥ、ソルラスカとルプトナは敵陣真正面の拠点防衛だ。

「しっかし何て言うか、文字通りの『鉄砲弾』よね、クー君は」

「判ってて行かせたんでしょうに、全く…」

《そうですよ…タツミさんは傷も簡単には治らないんですよ？》

数十分前に見せた副団長の顔はなりを潜め、今は脳天気そうな保健医ヤツィータ。

「…ところで、あの『永遠神銃』だっけ？あれ、どういうモノ？」

「どういうって…厄介な代物よ。あれが敵だったらと思うとゾッとするわね。特に私や斑鳩なんかの青属性としては」

《あ、それルゥ姉さんも言ってました。タツミさんは『青殺しだ』って》

「へぇ、どうして？」

興味深そうにタリアに言葉を返した彼女。忌ま忌ましげに腕を組み、タリアは言い放つ。

「どうもこうも、あの尋常じゃない速度よ。指一本引くだけで赤の神剣魔法並の一撃を撃ち出して、文字通りの『神速』で迫って来る弾丸を放つんだから対抗魔法なんて追い付かないのよ」

「ふんふん」

「…そのくせ、思わせぶりに衝き付けて見せるもんだからつい反応して対抗魔法を使いたくなる。そうやって判断ミスをして撃ち抜かれる青ミニオンを何体も見て来たわ」

聴き入るヤツィータ。口許こそ笑っているが、目は真剣そのもの。

「『手間を省く為になら幾らでも手間を掛ける』。撃破優先度の高い目標から確実に始末するのが巽…神銃士『【無銘】のタツミ』の闘い方よ」

「成る程ねぇ、だから表情や次の行動を読ませないようにあんな恰好してるのかしら…弾数は？」

《一度に一発です。でも元々距離を取ってるし、右手に他の武器を持って牽制しながら器用に片手で装填するから隙はあんまり…》

「居なくても問題は無いけど居たら便利な奴よ……にしても、何だかやけにアイツを気にしてるじゃない、ヤツィータ？」

流石にタリアは気付いた。ヤツィータが妙にその少年に…いや、『永遠神銃』に探りをいれている事に。

「やぁねぇ。別に他の子もそうよ？望君も希美ちゃんも知らない子はみーんな。それに彼、可愛いじゃない？ちょっとからかうと全力でリアクションしてくれるし、弄り甲斐の塊だもの～」
「呆れた趣味の悪さね…で、それはサレス様の指令？」
誤魔化そうと軽口を叩いたヤツィータに、ピシャリと問うた。

――ドォォォォン！！

その瞬間だった。大気を揺らす爆音が轟いたのは――

The 42th Name ?・・・"鬼神?"

爆音に、ベルバルザードは顔を上げた。爆炎に包まれ、破砕されたマナ嵐の発生装置を。

「馬鹿な、火は消した筈…」

「…ゲホッ…何驚いてやがる…最初の目的を果たしただけだぜ、俺はよ…」

強力に喉を圧されて咳を零す少年。そこでやっと、ベルバルザードはそれを視認した。

先程己が導火線を断ち切った地点、この少年が『バーサークチャリオット』で吹き飛ばされたそこに落ちている――ライターを。

「まさか、あの目眩ましは始めから…この為に…！」

「へ、残念だったな……俺が生き残る可能性が最大になるのは『逃げる事』じゃねぇ…『マナ嵐を解除する事』だ…！」

依然絶体絶命ながら、ニタリと見下すように笑った少年。その少年はたった一瞬のあの隙に最大の危地を脱していた。

ベルバルザードが地を叩き砕くまで、ほんの三秒と無かった筈だ。その僅かな隙に逃げる事など切り捨てて…空は本来の己の責務を果たしたのだ。

「読み誤っただと…この我が…」

有り得ない事だった。たかが蟲ケラが、蟻の一衝きがこのプラントの鉄壁の守りを崩した。ミニオンなどに任せておけぬと自ら防衛を

行っていたその装置が砕かれた。

「だが…だが貴様は此処で終わりだァァッ！！」

頚に掛かった拳に、更なる力が篭められる。このまま過重力により圧死させるべく、抑えていた神剣魔法［ディバインフォース］を解き放つ――

「――アローっ！」

その魔法陣に、三本の氷の矢が突き立った。矢は瞬く間に陣を構成する導力を凍てつかせ、その式を『不履行』と改竄する。

「――『猛襲激爪』ッ！！」

更に、ベルバルザードに向けて黒い旋風が襲い掛かった。左右から連続で振るわれる爪が。

だが彼は【重圧】で…左腕一本で受け止め、捌ききる。

「まだだ、ぶっ飛びやがれ――『爆砕跳天噴』ッ！！」

「ぬぅッ！？」

しかし続き繰り出される裂帛の衝撃に、堪らず右手も薙刀に戻し一一跳びのいた。

「――ゲホッゴホッ！テメ、そういう技は状況見て使いやがれ…」

「堅てぇ事言うなッての……よォ兄弟、無事か？」

「誰が兄弟だ誰が…」

同じく跳び下がったソルに引っつかまれ、死地を脱した空。毒づく言葉に苦笑する彼に軽口を返した。

「ほら見ろ、やっぱ寿命以外じゃ死にそうに無いじゃん」

「…煩せェな、放っとけ」

その直ぐ脇に、『アイシクルアロー』で『グラビトン』を無効化したルプトナが着地する。

「…にしても、ベルバルザードとはな。トンでもねぇ奴と闘［ヤ］り合ってんじゃねぇかよ」

「…そういう貴様は『【荒神】のソルラスカ』か…」

睨み合う狼と鬼。ソルが冷や汗を流しながら牽制するその後ろで、ルプトナは胸元から空の頸飾りと【無銘】を取り出した。

「ほらよ、確かに返したからな」

「チッ…有難うよ」

左手で【無銘】、右手で頸飾りを受け取り、空は一度目を閉じる。

「…一ツ聞いとくぞお前ら」

「あん、何だよ？」

「何さ？」

目を閉じたまま一一二人に決意を問う。悲壮な決意を匂わせる空気を身に纏って。

「俺に命預けるか、勝負棄てるか…どっちだ？」

低く唸るような問い掛け。二人は眼前に立つ鬼神を睨みつけたまま、全く迷う事無く――

「「――勝負棄てる！！」」

同時に吐き捨てた。空は目を閉じ、片膝を立てた姿勢のままで。

「――『乖城［かいじょう］』！！」

咥内で呟き――星屑を宿す宝玉から大剣【夜燭】を地面に衝き立てた。続いて篭手【上弦】と脚甲【下弦】、ホルスターに納められた各贋物拳銃を取り出して装着していく。

――これが、鈴鳴から貰った『とっても良いおまけ』だ。内部に切り取られた世界を持つ宝玉、その名を『透徹城』というらしい。俺はそれを『武器庫』として利用する事にした。持ち運びに不便な【夜燭】や【篭絡】に【繚乱】、数が有る【誰彼】や予備弾倉などを必要な時まで収納しておく訳だ。

「――くっ……くくく…！！判ってんじゃねぇか、テメェら…『命預ける』なんて言われたらケツ捲って逃げるトコだったぜ」

開かれた鳶色の瞳。空は悪辣な笑いを漏らしながら用意を整え終え、衝き立てた【夜燭】の柄を握り立ち上がる。呼応して【無銘】より青い精霊光が洩れ出、周囲のマナに熔け込んでいく。

【くふふ、残念どしたなぁ……まぁ諦めて、わっちにあの永遠神剣を喰わしたってくだしゃんせ――『スピリット＝オブ＝アクア』】

空間を充たす寒々しい青の精霊光。【重圧】の領域が彼の神銃【無

銘】に浸食されて『無銘』に戻る。そして傲慢にも、己の領域と塗り潰した。
当然ベルバルザードは気付いている。しかし、そんな事よりも。

「うおッ!?」
「うわっ!?な、何すんだよっ!」
「騒ぐな、聞け。いいか一一…」

前方の二人の頭抱え込むようにガバリと抱き抱え、何かを耳打つ空に注意を向けた。

最初こそ驚き慌てていたソルとルプトナだったが、次第に顔を引き締めていき…最終的に。

「…うへぇ。よく思い付くよね、そんな事」
「ホント、厭味に懸けちゃ天才的だよなお前」

ニィッと、空と同じく悪どい笑みを浮かべる。

「褒め言葉として受け取っとく。んじゃ一丁、まぁ増援が駆け付けるまでだけどよ…」

両手を柄尻に載せられた【夜燭】にソルが【荒神】を、ルプトナが【揺籃】を当てた。
刹那、大剣が蒼く帯電する。

「一一精々死に物狂いで生き足掻くとしようぜ!!」
「「一一応ッ!!」」

分割されたレストアスがソルラスカとルプトナにも宿り、凍える蒼

雷の加護『エレクトリック』を成す。
身を包むチカラを感じながら、三人は同時に駆け出した。

「悪いが、餓鬼共とは言え一匹たりとも見逃してはやれん…」

真っ直ぐ向かうソルとは対象的に、空とルプトナは大きく両翼に迂回する。

「一一蟲ケラは叩き潰すのみよォッ!!」

対して再度、空間が赤熱した。【無銘】からまたも、支配権が【重圧】へと移ろうとしている。

【ちっ、馬鹿の一ツ覚えが…脳みそまで筋肉なんと違いますのん、あれ?】
「知るか阿呆!それより!」

己のチカラを塗り潰され、幽月は忌ま忌ましげに呟く。そんな銃を、右肩に【夜燭】を担ぎながら左翼に走った空はベルバルザードへと向けた。

一方、右翼に迂回したルプトナは水の刃を現出させた【揺籃】で地を滑る。

「気合、一閃!ブレードっ!!」

滑りながら右足を一閃させ、その水刃を飛ばす。それは過たずベルバルザードを襲い一一

「一一ヌゥン!!」

彼の神剣に叩き斬られ、潰えた。

「やるじゃん…でもっ！」

「俺の存在を忘れんなッ！」

走り込んだソルの剛腕が唸る。

――ギィン、ガッ、キィン！！

繰り出される爪撃、両腕に装着された【荒神】は次第に【重圧】の防御を速度を持って上回り始める。

加えてその爪に宿る蒼い雷、打ち合わせる毎にそれに感電し、ベルバルザードの指先から徐々に正確さを奪い取っていく。

「フンッ！！」

「おッと！せいやァァッ！！」

突き出された薙刀の石打をすんでの所で避けたソルは、勢いそのままカウンターを叩き込んだ。

「――笑止！話にならん！…行くぞ！！」

しかし、ベルバルザードの鉄の護りの前には通用しない。【荒神】は１ｍｍたりとも傷を負わせてはいなかった。

今度は刃に朱いマナを纏わせた【重圧】が振り下ろされる。

「…へっ、遣るじゃねぇか…だがよ！」

「――俺は無視かよ…征くぞカラ銃！！」

【…マナよ、蒼き龍の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け――『フローズンバイト』っ！！】

「ック、小賢しい！」

衝き付けられた銃口から迸しった極風。その魔法の弾丸は――【重圧】の刃を撃ち止めた。

その決定的な隙、曝されたそこに狼は喰らい付く。

「狙いは外さねぇ…喰らいやがれ――『崩山槍拳』！！」

衝き出した腕、それをベルバルザードの鳩尾に向けて――まさに『槍』として踏み込む！

「グッ！…未熟者と侮ってばかりはいられぬか…」

更なる雷神の加護を得た一撃に、魔力抵抗へと防御を変更していたベルバルザードは堪らず後退した。

「ランサーっ！！」

そこに一撃、二撃、三撃と回り込んだルプトナの回し蹴りが見舞われる。

「喰らえェェいッ！」

それら全ては【重圧】にて防がれたが、三度目の蹴りの反動を利用して後宙返りにて、横殴りの一撃を躱わす。

着地すると、ベルバルザードの出方を伺いながら再度地を滑る。それを追おうとした彼に、【比翼】の銃弾三発が見舞われた。

「鬱陶しい奴らめ！！ならば、纏めて全身の骨を砕いてくれる！」

激昂し、ひしゃげた銃弾が地に墜ちるまでに。ベルバルザードは再び理法を侵食する魔法を紡ぐ。

「ーー『グラビトン』！！」

展開される朱の魔法陣。だがーーやはりそれは、氷の矢により打ち消された。

…押せば引き、引けば押す。暖簾に腕押し、柳に風。かと思えば一気呵成に、燎原を焼く火のように苛烈な攻め。まるで波のような戦術。

「……ク、ククク…」

笑う。ベルバルザードは笑った。漸く判った、この三人は『勝とうとしていない』事が。

確かに、この三人は相性が良かった。特にこういった、『生き残る』事に懸けては他の誰よりも。この闘いもーー真実『生き延びる』為だけに行っているのだ、ミニオン達に足止めされている増援が駆け付けるまで。

「ーーマナよ。灼熱の炎に換わり、敵を薙ぎ払え……」

それは堪え難い屈辱。心行くまでの闘争を待ち望んでいた彼にはーー最早怒り以外は浮いて来なかった。

「何度やっても無駄！アローっ！」

紡がれる魔法に、一周して空とソルに合流したルプトナは三度氷矢を撃ち込む。

「あ、あれっ！？」

…しかし消えない。それどころか矢の方が溶け、蒸発する。

「御する事など出来ぬ…諦めろ」

ベルバルザードの怒りに呼応したかのように、今までよりも更に強力な炎の気配が充ちる。

そして、爆炎と共に現れた彼の守護神獣。

「――行け、ガリオパルサ！！」

「」「エ」」丄十ト十！！！」

大気を揺らす咆哮を上げる朱いティラノサウルスに似たその竜は、『暴君ガリオパルサ』。

その巨大な口腔に炎が凝集する。『ハイドラ』の名を持つそのブレスはまさに地獄の業火、勝負を決めるには充分。

「……苦しみにのた打ち回り……死ね！！」

主の許しを得て、今し解き放たれんとする炎。その竜と鬼を――蒼い煌めきが覆う。

「何…！何だ、これは…！？」

ベルバルザード達の周囲を包むように、蒼雷の檻が築かれた。その

起源となっているのは、ルプトナの滑った軌跡ーー！

「ーー闇の雷よ、我が敵を狙う槍と成れ…！」

…ソルに預けた分が『直接攻撃分』なら、ルプトナに預けた分は『間接攻撃分』。その為の用意として、彼女はわざわざあのような戦闘を行ったのだ。

【夜燭】を衝き立てれば、右手に現れた一発の『魔弾』。レストアスそのものを精製した弾丸だ。
それを【無銘】に装填し、ルプトナが描いた歪［いびつ］な魔法陣の一部に当てーー引鉄を引いた。

「捉えたーー『ライトニングボルト』ォッ！！！」
「ーーッ！？」

全周囲に立ち上ったプラズマの槍は三人に向けて撃ち出されたガリオパルサの炎と激突し、更にその内部に在る全てを焼き貫き蒸発させるーー！！

轟音が轟き、稲妻の嵐を確認した物部学園の神剣士達。そしてーー息を呑む、その他の二人。

「…まさか、これ程とはな」

嵐が潰える様を見詰めて、銀髪蒼眼の少年は呟いた。その纏う黒い装束が風に靡く。

「…はい、まさかこれ程とは…」

それに答えるか細い声。少年の肩に腰掛けた銀髪緋眼の堕天使は、酷く消沈した様子でそれだけ呟く。以前『ミニオン並に低位』と断じた、その相手の力量に畏怖を感じた為に。

「あのベルバルザードに一矢報いて見せたか。しかし、あの時とは比べモノにならないな…」

「も、申し訳ありませんマスター！私の慢心です――あ…」

平伏さんばかりの声色に、彼は苦笑した。そしてその小さな堕天使の髪を指先ですっと撫でる。

それに驚き、彼女は目を円くした。円くして――心地良さそうに目を細めた。

「余り近付き過ぎないようにしよう、アレの索敵範囲は判るか？」

「はい、このセフィリカ＝ルクソ周辺の全域です。隠蔽や索敵する力そのものを感知する能力を有しているようで、これでは…」

「『決して近付けない』、か。成る程、敵にすると厄介な能力だな…」

少年はもう一度遺跡を見遣り、苦笑した。どうやら自分の出番は無さそうだと。

そして――ある人物、今この森の何処かで闘っているだろう少年の姿を思い浮かべた。

「――望……」

呟きが森閑に融けて消えるより早く、佩刀した黒衣の少年は姿を消した……

立ち上る土埃の柱を眺める外側、そこに三人は一一吹き飛ばされていた。
元居た場所には大きな窪み。相当に威力を削ぎ落とされながらも、『ハイドラ』は三人を撃ったのだった。

「一一かはッ……！」

木に叩き付けられた空は、ズルリと地に這う。その手には防御に遣われ燃え尽きて骨組みだけになり、圧し折れた【繚乱】。

しかし彼はまだ軽い。彼を守ろうと盾になったソルとルプトナは、より甚大なダメージを受けている。ルプトナの『チルバリア』により熱は効果を失ったが、衝撃波だけで。

一一……クソッタレ、何を血迷ってんだコイツら…！

「…莫迦共が…！俺が何時『守ってくれ』なんて言ったァァッ！」

地に倒れ伏した二人に向け、空は吐き捨てる。心底の怒りを。

「『勝負棄てる』ッつったろうが！何を俺なんて庇ってやがる…！テメェらはテメェらの命だけ守ってりゃいいだろ！」

ぴくりとも動かない二人。その二人に悲痛なまでの怒りを、地に拳を打ち付けて吠える。

一一畜生…！一番嫌なんだ、こういうのが！俺自信の命なら幾らで

も、何遍でも賭けてやる。でもな、俺は――！

「――他人の命を賭金にするのなんざ、真っ平御免なんだよ畜生がァァ！！」

…その怒り。二人に向け、止めに自分に向けて。何度も何度も拳を打ち付ける。

その叫びに呼応したように。

「――下らん。実に下らん仲間意識だ」

煙の緞帳の奥から、ベルバルザードが歩み出た。

「仲間の為に命を賭ける愚か者の戦士も、仲間の命を賭ける事も出来ぬ腰抜けの策士も…実に下らんな」

ジロリと三人を確認し――鼻で笑った。

「……テメェ――」

その鬼を睨みつけ、歯を喰い縛りながら立ち上がる空。

――――！！

その空を、横殴りに【重圧】が薙ぎ払った。

「――あ、か……ハッ……」

「言った筈だ。地に這い泣き叫ぶ姿こそ、弱者には相応しいとな」

大質量の薙刀による一撃、その鎬による迫撃を受けて。一撃で【繚乱】の柄に仕込んだ【宵】をへし折られ、彼はまたも地に這う。今度はもう、立ち上がれはしないだろう。

「悔しいか？だが、それも全ては貴様の弱さが招いた事よ…」

「ぐッガ…あ…！」

大兵のベルバルザードに背を踏み付けられ、屈辱と共に苦痛が増す。

「…悔しければチカラを持て。己の理想を貫けるだけのチカラを持ち、それから理想をほざくのだな…！」

「い、ギ…ヒッ！！」

ギシギシと力が篭り、背骨が砕けんばかりに曲がる。それでも圧力は緩まない。緩む訳が無い。

「ーーチカラ無き理想など、偽善にすら成らんわァァァッ！！！」

…何故ならば、その魂に刻まれた『銘』は【重圧】。全てを捻り潰す暴虐の権化。

『永遠神剣』という暴力装置に於いても、純粋に『力により屈服させる』事に特化した一ツ。

「ーー…下らねぇ…！」

「……何？」

…だが。その暴力に踏み付けられ、捻り潰されて血を吐きながら。

「『理想』だぁ？ハッ、知った事かよクソッタレ……確かに俺は雑

魚だ。何のチカラも持ってねェただのニンゲンだよ…」

それでも――『弱者［ニンゲン］』は呟いた。

「…それでもな、俺ァ俺の壱志［いじ］を貫く。敵う敵わないじゃねェ、それが俺の『願い』だし…何より――ッ！」

「……ぬッ！」

呟いて、折れるかも知れない背骨になど構わずに反転した。

反転しながら右の【上弦】による肘打ちで発生させた闇の衝撃でその足を跳ね退けて、『透徹城』から取り出した【篭絡】によりベルバルザードと【重圧】を拘束した。

「これは…神剣のチカラを…？！」

タタラを踏んで持ち直したベルバルザードだったが、【篭絡】にチカラを奪われ神剣効果すら受けられない。それを破るには【篭絡】を破戒するしかないが、それもまた神剣だ。

単体でこの状態から抜け出す事は――先ず不可能。

――そうだ、俺の願いなんざその程度のモノ。神世の古から…変わらない矮小な『願い』が有る。そのチンケな『願い』為ならば！

その合間に、【無銘】に弾丸を装填する。金の魔弾、彼の持つ内で最大の威力を持つソレを。

「――我が力…我が【重圧】を侮るな！ハァァァッ！！」

鬼神の、ガリオパルサもかくやという咆哮と共に【重圧】が壮絶なチカラを流し込む。

…【篭絡】は確かに強力だ。神剣士を『神』たらしめる神剣効果を無効化し、正に『篭絡』してしまうのだが――それも絶対ではない。そこには当然『キャパシティ』がある。無効に出来る限度が。

「アアアアアアアッッ！！」

【篭絡】が軋む。抑え込める限界を迎えて。その原典となった、北欧神話の鎖と同じく砕け散った。

そこで漸く装填が終わる。そして折れている肋になど一切構わずに左の【無銘】を衝き出す。

「――確率なんかの計算ずくで語れる程に、御大層な理想なんて持ってねェんだよォォォッ！！」

しかし、一足早く拘束から脱したベルバルザードは既に、【重圧】を振り下ろすだけでそれ諸とも打ち砕く事が出来る――

「ッ！？」

右腕にチカラを籠めたベルバルザードだが、その薙刀の柄を闇の腕が、その身を冷気の電撃が搦め捕っていた。

「…カッコつけすぎなんだよ、テメー…！」

「全くだね…恥ずかしいヤツ！」

ソルの『テラー』とルプトナの『フローズンステイシス』だ。満身創痍で使用したその神剣魔法は直ぐさま効力を失った。

だが――充分だ。『引鉄を引く』のには充分過ぎる。

「「一一撃［ブ］ちカマせ、『空』ィィィッ！！」」

引かれた引鉄に熾こされていた撃鉄が墜ち、刹那にして風が巻き起こる。

金龍皇の息吹、全色のマナを一ツに結晶させた金色の魔弾。圧縮されたマナ嵐による滅びの烈風一一『オーラフォトンクラスター』。

至近より放たれたその神威をベルバルザードは一一

「一一此処で…斃れる訳にはいかぬ……ヌォォォォォォォッ！！！」

その神威［チカラ］、【重圧】によって『右腕一本で』打ち伏せて。更に【重圧】の灼熱を纏う刃は烈しい唸りを上げながら、空を両断しようと迫る一一！！

衝撃に巻き上がった土埃。しばし濛々と辺りを覆っていたその土埃の晴れた先には一一深紅の竜、西洋で謳われる『ドラゴン』が着地していた。

「…こんなところでお目にかかれるなんてね、ベルバルザード？」

その足元には空とソル、ルプトナの三人が転がっている。ベルバルザードはその突進を受け、数十m吹き飛ばされて着地した。

「…ヤツィータか…」

声の主は赤い髪の女――数有る神獣の中でも特に希少とされる竜属種、幻獣の頂点に立つというドラゴン属である『炎翼バラスターダ』の主ヤツィータ。

更にバラスターダの背からポゥとタリアが降り、別方向からは望と希美、沙月。カティマとワゥ、ゼゥが現れた。

「…多勢に無勢か。よかろう、この勝負預けておくぞ、小僧共」

「逃がさないわ、バラスターダ！――『アークフレア』！！」

『┼┴┴┬┴┼┌！』

主に応え、バラスターダがブレスを撃ち出す。あらゆる存在を根幹まで焼き尽くすという『神炎』を。

『施設は自爆するようにセットしてある。どの道プラントは他にも有り、ミニオンも充分製造した。我等の計画に支障は無い…また逢おう、戦場でな！』

全てが焼き尽くされた空間に響く声が、その存在が健在である事を証明して。

『…ニンゲン。決着はいずれ付けてやろう。それまでに精々チカラを付け、腕を磨いておくがいい…”龍装兵［ストレレッツ］”』

バラスターダの腹を見上げる少年の耳にのみ、その賛辞が響いた。

ピラミッド『セフィリカ＝ルクソ』の天辺［てっぺん］に在った巨大マナ結晶が砕け散る。あれだけのモノが砕けたのだ、小規模なが

ら強烈なマナ嵐が吹き荒れる。

《…ルゥ、確か…正しい方式を取ればマナ嵐は…》
《ああ、起きない筈なのだが》
《誰か先走って壊したんじゃないの？血の気の多いのとか》
《《《……》》》

三人が思い浮かべたのは、二人。傷が癒えるやピラミッドに突入して周囲の機械を手当たり次第破壊して回っていた爪遣いと蹴り業師。

「……」

一方空は、ポゥの治癒魔法受けながら厳しい顔をしていた。

『――チカラ無き理想など、偽善にすら成らんわァァァッ！！！』

――畜生が、言われなくても判ってんだよ神剣士。なんせ俺が弱者なんだからな…！

ギリリと歯を軋ませ、その鬼を幻視した。

《…タツミさん…》
《放っときなさい、ポゥ…》

何か言葉を掛けようとしたポゥをゼゥが止める。その表情の意味を悟って。

…今は優しい言葉など掛けるべきではないと悟って。

――上等だ『【重圧】のベルバルザード』、感謝する……俺に目標

をくれて。

久方振りに彼の身に充ちる『決意』。ダラバが消えて、越えたかった目標を失った事で燃え残っていた焼けぼっくいに火が点いた。

「…遣ってやる、今の俺より一歩でも先に進む。そしてテメェを必ず…俺の壱志で撃ち倒す…！」

…ウジウジと悩むくらいなら、倒れ込んででも前に進む。それが一一『巽空』という男。魂の在り方だ。

だからそれを見て、ゼゥは一言も掛ける事は無く。

《……ふん》

嬉しくなった事を不愉快に感じ、そっぽを向いたのだった。

…そんな所に他の神剣士達が戻ってくる。しかし、望とルプトナの姿が見えない事で一騒動巻き起こった。

希美やカティマが無謀にもマナ嵐の中に探しに行こうとした時、その二人は現れた。望がルプトナを所謂『お姫様抱っこ』した状態で。

それで更に一悶着起きて結局。

「うわぁぁぁん、望ちゃん！！無事で良かったよぉ…！」

「の、希美！？何だよいきなりっ」

安堵のあまり泣きながら望に抱き着いた希美、ソレを見て。

「…チッ」
「…ちぇっ」

空とルプトナが同時に舌打った。

「…何だよ、真似すんなよな」
「訳の解らん事をほざくな。俺の方が．３２秒早かったわ」

バチバチと火花を散らして睨み合う。互いにムカッ腹立っている者同士、後は口戦有るのみ。

「まぁまぁ落ち着けって。しかしあれだな、俺らって中々良いチームワークだったよな」

そこに割って入ったソル。先程不用意な発言をした為にタリアの鉄拳制裁を受けた頬を撫でながら。

「…ふん。まぁ、そこは認めてやるよ。ボクじゃあんなヤツと真正面からぶつかるなんて無理だったし」
「そういうお前も良い動きだったぜ。俺は力任せだし、学も無ェからな…」
「言ってくれるじゃねェかよ贅沢者共、俺なんざチカラも速度も無ェぞコラ」
「「空には悪知恵と厭味が有るだろ」」
「お前ら今日から枕高くして眠れると思うなよ…」

三者三様の弱点、それがぴたりと嵌まり合う。有る種の三位一体。

「へへっ、まぁ兎に角ボクらの勝利！！」

「おうよ、次は完膚無きまでに打っ倒す！！」

拳をスッと差し出したソル、そこにルプトナも掌を差し出して重ねた。

そしてジッと、空［アキ］を見る。

「…当たり前だろうが」

それに応え、空も左手を差し出して――

「――莫迦共に足さえ引っ張られなきゃこんなモンだ」

どこぞの似非［えせ］神父のような仕種で傲岸不遜、傍若無人にそう告げた。

「「――こんの超絶厭味鴉がァァッ！！」」

その両腿に、二人は同時にパーンと蹴りを見舞ったのだった。

「ぐぉぉ…！テメェらァァ…神剣効果使ったままダブルで腿パーンとか何考えてやがんだ特にルプトナァァ…！！」

「行くか、ルプトナ」

「そーだね」

倒れ伏してゴロゴロと藻掻く空を尻目に、二人は歩み出す。何時しか一行はウルティルバディアへ戻る為に移動を開始していた。

「おい待てソル、ルプトナ！ちょっ、立てねェんだけどこれ…骨折れてね？！」

…暗雲は最後のマナ嵐によって振り払われ、黄昏の森に降り注ぐマナの飛沫。虹色に煌めく雪のようなそれに抱かれた一行。その最後尾に喧しい三人組。

「……ふふ、やっぱり私の見る目に狂いは無かったわ」

それを見て、沙月は優しげな笑顔を見せたのだった。

The 44th Name…"祝勝会"

「それじゃあ、勝利を祝って～…かんぱーい！！」
「「「「かんぱーい！！！」」」」

パスティル亭に調子の良い音頭が響く。それに応えた囃しと、グラスをかちあわせる音色。店を貸し切っての宴会。この世界から脅威が去った事と、それを成した者達を讃える宴会だ。
とは言え既に二次会。ウルティルバディアの民衆が居た一次会では肩が凝ったというヤツィータの鶴の一声で、気の置けない連中…即ち物部学園の一同で集まっている慰労会が行われている。

皆から少し離れたテーブルに着いている空。因みに空は武術服姿に戻っている。興味なんて無いだろうけども。
未だ痛む包帯だらけの全身、折れた肋骨を摩りながらちびりちびりと茶をシバく。

…早くも室内は混沌の様相を呈している。タリアに『最弱』呼ばわりされて望に因縁を吹っ掛けているソルラスカ、酔って暴れる沙月と希美。カティマから奪い取った酒を喇叭［ラッパ］呑みするヤツィータ、レチェレにマナーを叩き込まれているルプトナ。
そして生徒を教え導く立場の早苗は飲酒した一同に雷を落とす――事無く、自分も酒盛りに加わっていた。

「教員がそんな事で良いのかね」
「ま、たまにゃあ憂さを晴らしたい時くらい有るだろ」

呟きに答え、ソルが勝手に同じテーブルに着く。その手には酒と氷、そして炭酸水とグラスが。

「そりゃそうだがよ。ところでなんだよ?俺に話か?」
「おう、そういやお前とはまだ盃交わしてなかったからな」

言い、ソルは空の飲んでいたグラスを見遣る。既にそれはカラ、因みに酒は一滴も呑んでいない。

「全力で拒絶する」
「あん?忘れたのかテメェ、あの勝負をよ」
「勝負だぁ?」

暫く頭を捻るも、思い当たる節は無かった様だ。その間に彼は、手ずからグラスに酒を注ぐ。

「『どっちがミニオンをより多く倒すか。負けた方は勝った方の言う事一つ、何でも聞く』だ」
「ーーグッ!?」

注ぎながらの言葉に空は、一気に冷や汗をかく。漸く思い出したのだ。あの捜索戦闘でハイになって、イキッた冗句［ジョーク］をオーケーした事を。

「ッて待て!確か俺は四体で一番だったろうが!」

手元に、充たされたグラスが置かれた。小さな杯に透明な甘露。

「オイオイ、『倒したミニオンの数』を競ったんだぜ?お前が倒してたのは殆ど神獣じゃんかよ」
「ハァ!?結果は同じだろ!」
「違う違う、ミニオンだけだ。それ以外は認めん。因みに俺は最初

の青も含めて三体だ」

ソルが差し出した盃を見て、仕方なさそうに空も杯を手に取る。

「…チッ、仕方ねぇか。テメェには何度か助けられたしな…この借りは必ず返してやるギギギ」

「何で歯軋り?!別な意味にしか聞こえねーよ!」

互いに、やけにしゃちほこばって一気にそれを飲み干して。

「「ゲホゲホッ!!効くーッ!」」

同時に咳込み合ったのだった。

『転送』により分枝世界間の狭間にたゆたうベルバルザード。大柄なその影は、左肩を押さえて呻く。

「…我に傷を付けるとは…侮っていたか…」

雷の槍に撃ち貫かれた左肩。血は流れず焼け付き、神経も麻痺して動かない。予想以上に酷い状態になっていた。

しかし防御を棄ててでも即座に地を砕かなければ。『バーサークチャリオット』の衝撃波にて、彼を捕えていた雷陣を地面ごと破砕しなければこれだけでは済まなかっただろう。

…ソルラスカの爪の攻撃を受けてベルバルザードは、最初に空が細工をしたのは破壊力の底上げと併用して精度を削る為だと思った。

しかし、それはルプトナにあの罠を仕掛けさせる事を悟らせない為の『意識誘導』。更にそれを最善のタイミングで発動する為にわざわざ怒りを煽り【重圧】の神獣『暴君ガリオパルサ』を呼び出させたのだ。

そして、最後の一撃。もしあの時、後少しでも余力を残していなければ…或いは。

「――ニンゲン、如きに……！」

敗北していたかもしれないと。己の慢心を恥じる。

「何と言う胆力と策謀……いや、蛮勇と無謀か…しかし…クッ、底知れぬ男よ…」

――だが、手応えはあった。あれならば奴ら、『理想幹神』どもに……

覆面の奥の瞳。それに初めてニンゲンらしさが灯り、閉じられる。彼が思うはある人物。

「…エヴォリア…必ずお前の『戒め』を解いてみせる…」

あの少年の吐いた言葉に潜む、耳から染み込む浅い毒に中［あ］てられでもしたのか。柄にも無く、届かぬ言葉を紡ぐ。瞼の裏に焼き付いた、彼が忠誠を誓う存在へと――。

梟［ふくろう］の様な鳴き声が響く夜半過ぎ、しかしパスティル亭は未だ煌々と明かりが燈っている。

「望～、グラスがカラじゃん。ボクが注いであげる～！」
「うあっつ！？い、いや、俺は今呑んだばっかりで…」

望のグラスが空いた途端、ルプトナの軽快さを活かした迎撃不可の一撃。抱き着かんばかりの勢いで身を寄せて持っていた酒瓶から酒を注ぐ。

「だ～め～！望ちゃんにはわたしが注ぐの～！」
「くっ、希美…！？」

だが、それは始めから警戒を怠っていなかった希美の鉄壁のディフェンスに押し止められた。グラスには小皿で蓋をされて一滴も注がれていない。

「そ～よ、次は私の番なの」
「ま、また先輩に……！！」

しかし、やはり虎視眈々と機会を狙っていた沙月のインタラプトによりグラスが奪われた。カラのグラスに彼女は酒を注ぐ――

「さぁ望くん、グイッと呑んじゃって…って」

…いや、既にグラスは波々と甘露を湛えていた。無論それを成したのは――やはり打ち消す事も出来ない黒の速度だった。

「押し付けはいけませんよ皆さん、望が困っているでは有りませんか…という訳で望、代表して私が注いでおきました」

「「な、なんだってー！！」」

両手どころか両足にも花。四人の眉目麗しい女性に囲まれチヤホヤされながらの酒盛りと、まさにハーレム状態。

端から見ればもう殺意以外の何一つ湧いてこない状況に陥っている望。

「ハ、ハハ…ハ……うぷっ！」

既に二十杯以上呑まされてテーブルに突っ伏し、最早色んな意味で笑うしかない様だ。

「にしても、望君ってモテモテよね～。因果律とか狂ってんのかしら？」

「あれが世界の選択なんでしょ」

「お姉ちゃん、望をあんな子に育てた覚えは無いわ！」

「早苗ちゃん落ち着いて、キャラ違いよ。はいお水」

別のテーブルに着いてそんな様子を眺めていたヤツィータにタリア、早苗と美里。酔いが回って言動が怪しくなっている早苗に水を渡し、美里は目の前のハーレムを見ながら溜息を零す。

「うちのモテ比率って極端に偏ってるのよね。神剣士人気ランキングでは圧倒的な女子票でやっぱり世刻が一位だったもの」

「っていうか選択肢なんて殆ど無いじゃない。要するに男は世刻か巽かソルって事でしょう？」

「あー、成る程…」

そこで三人は、ある一方に目を向けた。そこには――

「ブハー！酒だ酒ー！！もっと持って来ーい！」
「おおー！良い呑みっぷりだぜ空ー！ささ、兄貴も一献！」
「すまねぇな信助！頂くぜ！！」
「ヤッベェェ超テンション上がって来たァァッ！！頼んでいいかソル、信助！『サイドメニュー全品』って頼んでいいかァァ！？夢だったんだよ俺ェェェ！」
「何を小せェ言ってんだよ空……どーせタダなんだからよ、男なら『メニューの右から左まで全部』だろうがァァッ！！」
「兄貴超カッケェッす！！」

野郎三人で、まるで対抗するかのように異常な盛り上がりを見せているソルと空と信助……。

「…放っておいてあげましょうよ。だって、あんなに愉しそうじゃないですか…」
「…ええ、私も鬼じゃ無いわ…」

優しげな眼差しと声色で告げる。まるで春の陽射しのような温かさだ。

「生まれて始めてみたわ…あれが混じり気無し、純度１００％の…『どうしようもない本物の絶望』ってやつなのね」
「「「放っとけェェッ！！俺達だって…俺達だって幸せになる為に生まれてきたんだァァッ！！！」」」

その哀れみの視線に、互いの傷を舐め合う負け犬三人は揃って遠吠えた。

「チッキショォォ何でアイツばっかりィィィ！」

「ハハハ、同じ幼馴染みでこの差!!俺の事嫌いなんだろ神様ァァ!俺だってお前なんか大ッ嫌いだぜバーーーカ!」

テーブルに突っ伏して全く同じ仕種でバンバン叩く信助と空。既に二升瓶が六本以上転がっている。

「落ち着けテメーら。俺達にゃあ酒っていう忘却［救い］が有るじゃねぇか」

そこに、窓の外を眺めながら二升瓶を直接喇叭呑みするソルが語りかけた。

「一一全力で突っ走るぞ…付いて来れるか?」

「「兄貴ィィィ!!!」」

背中［せな］で語るソルに酔いどれ二人が抱き着いた。

「…あほくさ」

タリアの呟きなど、最早届いてはいないだろう。

夜宴はこうして、混迷の度を深めながら夜が更けるまで続いた……

昼下がりの物部学園、その廊下を望の足取りは重い。

「全く、宿酔［ふつかよい］如きで情けないぞノゾム。ほれほれ」

「うあ、やめろって…うぷ」

昨日飲み過ぎた為に大分酷い宿酔に成っているらしく、レーメが頭の上で跳ねるだけで吐きそうになっている。

…しかし、望の足取りが重いのはそれだけが原因ではない。

「望ちゃん、大丈夫？」

「気分悪いなら保健室に行く、望くん？」

「それが良いでしょう、何かあってからでは遅いですから」

「はいはい！じゃあボクが送ってく！」

「……いや、行かないから……」

未だ続く争奪戦の所為でもあった。

「オイオイ、またかよもううんざりだ…世刻呪われろ」

「相変わらずのハーレム、羨ましいぜ…世刻呪われろ」

「ていうか増えてるじゃねーか。あの巫女さんみたいな黒髪の娘誰だよ…世刻呪われろ」

「……」

穏やかな昼下がりの廊下は何時しか、男子学生達の呟く呪詛に『カースリフレックス』もかくやという呪怨の渦巻く空間と成りつつ在る。心なしか気温も下がっているようだ。

しかし、その正しき怒りは望争奪戦に夢中で気付かない彼女達により展開された春色オーラで通用していない。

掌に汗をかきつつ、望は食堂の扉を開く。もう昼飯時は終わっている、恐らくこの中なら安全だろう――

「両手足に花での重役出勤ご苦労さん。俺なんざ、朝気付いたら両

手にウ○コ付いた状態で寝てたんだぜ…世刻呪われろ」

「「呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ……ってかその『ウ○コ』ってのは俺達のことか」」

「空、ソル、信助…お前らもか」

だが、もう既にそこは呪いの坩堝だった……

「…えっと、何してるんだ？」

見れば彼は何か鍋を掻き回している。緑色の液体が溜まったそれは、見様によってはまるで魔女の釜。

「酔い醒ましだよ。宿酔が酷くてな…俺もあいつらも」

「うあー…だりー…」

「もう頭割りてぇ…」

しかめっ面のままクイクイと親指で指し示された方を向けば、机に突っ伏したまま動かないソルと信助の姿が在る。

「果物中心の野菜ジュースだ。どうせお前も飲むだろうと思って多めに作っといた」

「…助かる。一杯くれ」

「┏┳┳┳┳［呪われろ］」

「…って空。何か今、神代の言葉的なモノで呪わなかったか？」

望は適当に取り出したコップを空に差し出す。しかし、その少年の手からそのコップがさっと奪われた。

「それじゃあわたしが注いで」

「いやいや、ここは生徒会長の私が注いで」

「今それは関係無いだろっ！ボクが注いで」
「押し付けはいけませんよ皆さん、望が困って」
「「「二回も同じ手が通用するか〜っ！」」」

目まぐるしく移動するコップ。その様に、男達は揃って呟いた。

「「「┻━┻┻━┻┻━┻┻━┻┻━┻┻━┻……」」」
「…アウェーだ…」

こうしてしょうも無い火種を撒きつつ、彼らの『精霊の世界』での戦いは幕を閉じたのであった……

The 45th Name・・・"出立の朝に"

――精霊の世界に滞在して一ヶ月が過ぎた。この世界では剣の世界のように戦争をした訳ではないので皆が羽を伸ばす事が出来、様々な鬱憤の解消にもなったようだ。

（中には有志を募って歓楽街に繰り出そうとした莫迦［ソルラスカ］も居たけどな）

【旦那はん…急にどうしはったんどすかぁ？】

明け方の清涼な空気に包まれた校庭を掃除しながら、武術服姿の空は回顧を始める。暇なのだ。

――後、浴場が出来た。総檜（っぽい木）造りの一度に八人は湯浴みできる大浴場だ。『お礼がしたい』と申し出て下さったロドヴィゴさんの言葉に甘えた結果で。それに『日本人としては一日一度は湯舟に浸かりたい』とずっと女生徒から要望が出ていたのだ、渡りに船というもの。

…んでもって、俺を狙い撃ちにする『生徒会特例：気配遮断禁止令』が採択された。お陰で俺は学園の敷地内では気配を遮断していてはならない。実に失敬な話だ。

（早速、完成初日に覗き現行犯として莫迦ども［ソルラスカと信助］が見せしめとして中庭のトネリコに吊られたりしたけどな）

【もうツッコミませんぇ】

（甲斐性無しめ）

「おーい、待たせたな空」

タッタッと軽快な足音を立ててソルが現れる。そして朝の校庭で、

その試合は繰り広げられた。

「破ァァッ」
「ッとォ！甘ェぜ！」

繰り出された拳打を避け、ソルは反撃として蹴りを見舞う。それを篭手【上弦】で受け止めて、反撃に転じる。

「ーー征ッ！」

初撃は右の拳撃。【上弦】を遣った零距離のーー『崩山槍拳』。本家のモノとは違い、下方から打ち上げる軌道。

「チッ！」

それを軽々といなしたソルの頚筋を狙い、流れるように脚甲【下弦】を遣った左の後廻し蹴り『レインランサー』が見舞われる。これもやはり本家のモノとは違い、上方から振り下ろす斧を思わせるモノだ。

一撃、二撃、三撃。左踵、右脛、左踵で繰り出された斧刃を後退して躱し、反撃に転じようとしたソルにーー

「ーー貰ったァァッ！」

止めの一閃。『透徹城』から取り出した【夜燭】の刃、その深く湾曲した刃先に左手を沿えて圧し斬るように衝き出す。
その剣戟はアイギア式剣術の基礎の一ツである『無体』。間詰まりを起こす程近接する事で、相手の攻撃のタイミングを一方的に潰す技だ。

…一連の套路は以前までの、ただがむしゃらに武器を振り廻していたモノより遥かに洗練されている。この一月、正確には骨折が癒えて以降の二週間で教えを請い、日に夜を継ぎ死に物狂いで特訓した結果だ。

「カティマの剣筋か…流石だな、だがよッ！」

「なっ――ガハッ！」

剣を握る腕を掴まれ、くるりと背を向けた上で更に深く懐に潜り込まれて。そのまま――天地が逆転した。

「どれもこれも粗削り、まだまだだな…この辺にしとこうぜ」

フウ、と息を吐いて構えを解くと、永遠神剣【荒神】を消してタオルで汗を拭うソル。

「――クソッタレ…」

完璧な一本背負いを決められて、最早空には毒づく事しか出来なかった。

「いらっしゃいませー、パスティル亭へようこそ…って、なんだまたお前たちかよ」

「毎回言うが何だとは何だコラ。俺らは客だぞ」

「毎回言うけどいっつもツケの奴らなんて客じゃ無いねっ」

場所を移し、パスティル亭。席に着いた男二人の所に、昨今すっかり看板娘扱いされ始めたルプトナが歩み寄る。
精霊回廊の解放後、精霊達は今まで消耗した分を取り戻すために休息に入ってしまった。故に彼女はこれからもウルティルバディアで生活する事となったのである。

「男だけで連れ立って来るなんて、ホント泣けるよお前たち」
「うるせーやい。良いからいつものくれ」

一言二言憎まれ口を交わして引っ込む。その間に本来の目的である話を始めた。

「なんつーかなぁ、お前は筋は良いんだよ。完璧に套路を熟してるし呼吸法や歩法、果ては撥勁までマスターしてるし、教えを堅実に守ってるしな」

ポリポリと頭を掻きながらソルは言う。空はそれを真摯に聞いていた。
あの屈辱的な勝利以降、彼らはよくこうしてつるんでいる。

「けど、『それだけ』なのがお前だ。型に嵌まりすぎなんだよ、柔軟性が無い」
「柔軟性か…確かにな」

――どんなに頑張っても俺は所詮素人だ、目の前にいる達人達に教えを請わない理由はない。『百聞は一見に如かず』、教本を見て百回特訓するよりも実際に神剣士と一度組み手した方が余程為になる。詰まらない自尊心なんて意味が無い、強くなる為なら――あらゆる手を尽くそう。

「『オリジナリティ』ってのか？他人の真似事ばっかじゃなくて『自分らしさ』を出せれば、お前はもっと強く成れると思うぜ」

――『自分らしさ』か……一番苦手な部類だ。だが、ベルバルザードに勝つにはやはり、鍛練［下地］だけで無く意表を衝く工夫［ワザ］も必要だろう。

空が思案にくれだした時、実に面倒そうにルプトナが食事を持って現れた。

「タダ飯おまちどー」
「「言ってくれんじゃねーか」」
「悔しかったら金払いなー」

ふふん、と勝ち誇ったように告げるルプトナ。

「――ほらよ、迷惑料も含めて一括払いだ」

その時、空はテーブルに袋を置いた。以前は非常食入れにしていた巾着袋、それに詰められた貨幣。

「お前ら…遂にやっちゃったのかよっ！」
「「犯罪になんて手ェ出して無ェよッ！どんだけ金持ってないと思われてんだ！」」

予定調和のような問答、周囲の客やレチェレも苦笑いを漏らした。

『レチェレに昼休憩貰ったから』と勝手に自分の昼飯も持って来てランチを摂り始めたルプトナを加えて、食事を終えた三人組。

「しっかしおっどろいたなー、どういう風の吹き回し？今まで鐚「びた」一文払わなかったくせに」

「どうもこうも、後腐れ残していく訳にもいかねーだろうがよ」

「…へっ？」

ソルの言葉に、ルプトナは呆けたような顔をした。だが直ぐにその意味を悟る。

「…そっか、行くんだ」

「ああ、出発は明日だ。世話んなったな」

「へんっ、清々するねっ！あ、そうだ空、お前あの娘には挨拶したのかよ？」

瞬間、寂しそうな顔をしたルプトナ。しかし瞬く間にそれを吹き消して憎まれ口を叩く。

「空にオンナ！？聞いてねーぞ！」

「言う必要もねーけどな！ッてか『あの娘』ッて誰だよ、認めるのも癪だがそんな色っぽい経験した覚えはない！」

「前に一回連れてきてたじゃんか、こーんなちっこいの」

「…あれはそんなんじゃねーよ」

本当に判らないようだったが、ルプトナの台詞に何となく思い出す。鈴鳴を。

「聞いてよソル。コイツ、モテないからって年下に手出してんだよ情けない。ご飯奢っていいカッコしてやんの」

「オイオイ空よぉ…希美に相手されないからって諦めんなよ。何時かは気の迷いかなんかで相手してくれっかもしれねーだろ」
「どうやらお前らとはもう一度、徹底的に拳で語り合う必要があるらしいな」

パキポキと拳を鳴らした空だったが、ふと視界に入ったその人物に気付く。

「ハハ、相変わらずですね、皆さん」
「ロドヴィゴさん、こいつはお見苦しいところを…」
「ああいや、楽にしてください。貴方がたは我々の恩人なのですから」

立って挨拶しようとしたソルと空を押し止め、逆にロドヴィゴが頭を下げる。

「この世界を救って下さり、誠に有難うございました。代表者としてもう一度、厚く御礼申し上げます」

揃ってバツの悪そうな顔をした三人。確かに戦闘には勝った。しかし彼らにとっては、『勝負には負けた』戦いだったのだから。

「それとタツミ君、君の話通りでした。どうも有難う」
「いえ、お役に立てたのなら光栄です」

二人にしか判らない言葉を交わし、空は席を立つ。

「野暮用を思い出しました。それではロドヴィゴさん、これで」
「ええ、それでは」

そのまま一礼して外套を纏うと、ソルと共にレチェレにも礼を告げて扉をくぐって行った。

「…あいつらが行くって事は…望も行っちゃうんだ…」

「…どうするの、ルプトナ？」

いつの間にか隣に立っていたレチェレが問い掛ける。それに彼女は一一強く逡巡した。

ソルと別れ一一というか付いて来ようとしたので気配遮断で巻き、鈴鳴の工房の前に立った空。徐［おもむろ］に戸をノックしようとして一一

「あ、巽さんじゃないですか」

背後から掛けられた鈴のような声に、ゆっくりと振り返った。

「お久しぶりですね、何か入り用ですか？今お勧めは一一」

「なんだ、ご機嫌じゃないか」

「そりゃもう！なんたって、私がお金借りてた闇金が摘発を受けたんですよ！悪い事は出来ませんよねー」

「お前はもっと痛い目見た方がいいだろうにな。残念だ」

両手を天に向けて『やれやれ』と薄く笑う。

「ところで、どうしたんですか本当に」

「ああ、この世界を発つ日取りが決まったからな。挨拶に来た」

「ああ、成る程…」

そこで彼女は、空に身を寄せる。そして小声で囁いた。

「旅団の本拠地に行くなら、気を付けてくださいね。『透徹城』を持ってる事がバレないように」

「判ってるよ。ッたく…規制品なら持たすな」

「酷いですよ巽さーん、私は少しでも巽さんの役に立てればと…」

「本音は？」

「やっぱー、巽さんが居るって事は旅団も居るって事じゃんどうしよー。あ、そうだ『木を隠すなら森の中』って言うし巽さんに持たせとけば在庫も掃除できて一石二鳥さっすが私！…あれ、巽さーん！冗談ですってばー！」

『よよよ…』と泣き真似をしていた鈴鳴だったが、あっさりと本音を漏らす。背を向けて歩き始めた空、その背に向かって呼び掛ける鈴鳴。

「また、会いましょーねー！」

応えて左手を上げ、サムズアップを見せた姿勢のままに、彼は一度も振り返らずに歩いて行った。

「…次は、軍場［いくさば］で」

冷やかな笑顔と共に見送る彼女に気付く事無く。

一一別れの朝。視界の端では、手作り弁当を渡しながら泣き出してしまったレチェレさんが望に撫でられている……アイツはどれだけモテれば気が済むんだろうか。

【旦那はんも見習った方がええんと違います？】

（大きなお世話だバカヤロー、俺は根っからの純愛派なんだよ）

【はっ…見向きもされとらへん分際でェェァァ～～～……ッ！】

「空くん、どうしたのいきなり投げて？」

「いや、別に」

話も一段落して、一同はものべーに戻っていく。そんな中で、ソルと空は呟き合った。

「…来なかったな、アイツ」

「ま、こんな別れも有りっちゃ有りだろ」

遂に現れなかった、その少女の事を。

「…そうだな。アイツにはアイツの生き方が有るしな」

「そういう事だな、俺らが口出しする筋合いなんて無ェ…」

ふっと、少し寂しそうに呟く二人。いや、二人だけではない。望も希美も、カティマもタリアも。

「一一なーに辛気臭い顔してんのさ、お前ら」

「「「「「「一一一！？」」」」」」

その一行の前に、朝日を浴びて涼しげな空気を纏う彼女は立っていた。

「…ああそうそう、紹介するわね。我らが物部学園に新しい『家族』が加わったわ」

呆気に取られる面々に、してやったりとばかりに笑う沙月とヤツィータ。謀られた事に気付き、一行…特にソルと空は苦笑を漏らした。

「おっす、ルプトナです。今後とも宜しくお願いします！！」

巫女装束に似た服を纏う黒髪の少女。精霊の娘ルプトナは皆に向かってそう元気良く、『家族』として最初の挨拶を述べたのだった――……

The Other Name ?・・・"朔望［さくぼう］の夜"

夜の底に沈む街。未来的を通り越して幻想的な佇まいの、巨大な塔の一角に在る部屋。

大きな椅子に腰掛けた、紫の髪を二ツに別けた少女は仕事机の上に山と積まれた書類に目を通していた。
まだ幼いと言ってもいい容姿には余りに不釣り合いな仕事。何より目を引くのは一一大きな、猫のような耳。

一一コンコンコン…

「…開いておる。入れ」

律儀に三度鳴らされたノックにそのままで答える。間髪容れずにノブが回った。

「ご政務中に失礼する、大統領。少々お時間宜しいかな?」

扉を開いて歩み入った長身は、精悍で怜悧な眼鏡の青年。暗緑の髪を一ツに束ねたマントの男。

「構わんさ、団長殿。用件だけを手短に言うのならばな」
「これは手厳しい。ではあまり邪魔をするのも心苦しい故、一言で済ませるとしよう」

判りやすい厭味に彼は冷笑する。そして本当に手短に。

「待ち人来たりて」

「一一誠か！遂に…って、待て待て！！何処に行くのじゃ！」

その言葉に、手にしていた書類を投げ出しつつ立ち上がり男を見遣った少女。先程までの張り詰めた空気など消え去っている。しかし男は既に扉を開きかけていた。

「『手短にしろ』と言ったのはお前だろう？」

「馬鹿者！本当に一言で帰る奴があるか！いつじゃ、いつ『あやつ』は来るのじゃ！」

フッと厭味ったらしい笑みを浮かべた男をジト目で見遣り、年相応の表情になった少女は一一期待に充ちた声で問う。それに彼女の脇に控えていた鮮やかな翠髪と青瞳の侍女が答えた。

「落ち着いてくださいませ。どの道、御政務を終わらせなければ会いには行けませんよ」

「ぬぅ、そうであったな…全く、兄上も少しは政務に力を入れて欲しいものじゃ」

「アレが政務？天地がひっくり返ろうと有り得んな」

「反論出来ぬところが情けない」

はぁと悩ましげな溜息を零して椅子にどすんと腰を落とす。頬杖を突くと忌ま忌ましそうに、書類へ髪と同じ紫色の眼差しを向けた。

「…まぁ、君にとってはいい事ばかりでも無いだろうがな。なにせ、『奴』も居る」

そんな彼女に投げ掛けられた一言。それにニヤリと。不敵な笑顔が返る。

「『奴』の事を言っておるのなら、細工は隆々。『歓迎』の準備は整っておるさ」

それは、間違っても友好的な笑顔ではない。そう…猫科の猛獣が獲物を捕らえる時に見せるような。そんな『笑顔』。

「ならばいい…いや、油断はするな。『奴』の二ツ名は――」

「言われずとも気など抜かんさ。わらわはもう、二度とな」

眼鏡の奥の鋭い褐色の瞳を炯々と輝かせた男。この場にて始めて真面目に語り始めた男にそう言い切ると、少女はカーテンの引かれていない窓を眺めた。

その先には――

「…いっそ朔夜の方が有り難い。不快な月じゃ、『奴』の神剣を思い出す…」

鎌刃のように鋭く、深く湾曲した……まるで血に塗れたように紅い三日月――……

The 46th Name…"邂逅"

「あー、いい運動したな」
「完全勝利って気持ちいーよね」
「…面倒くせ」

体育館を後にしたソルにルプトナ、空。運動後らしく少し火照ったようにしている。しかし何と言うか、第二釦［ボタン］まで詰め襟の上着を広げ袖を捲り上げたたソルと、やはり胸元を寛げているルプトナ、黒のTシャツに制服の上着を肩に掛けているだけの空と、見様によっては最早不良学生の一団だった。

それにしてもルプトナの制服姿は目のやり場に困る恰好だ。ヤツィータに次ぐ程の破壊力を有する、大きく開いた胸元が。

…ルプトナの親睦を図る為に催されたバスケの試合以降、彼女はそれに嵌まったらしく『またやりたい』と常々言っていた。その要望に応えたメンバーで物部学園のバスケ部と闘い――

「って、三人とも手加減しなよ…バスケ部のメンバー、大会でも無いのに泣いてたじゃん」
「そうだぜ、0対700はやり過ぎだろ。第二クォーターあたりから皆ずっと黄昏れてたぜ…」

美里と信助の言葉通り、圧勝したのだ。ヒートアップしてポイント争いに興じたソルとルプトナは神剣効果を使ったのだから当たり前といえば当たり前。

「んなもん、サラリと五人抜きレイアップ決めるソルの所為だろ」

「何言ってんのさ。そう言う空こそ、どの位置から撃ってもスリーポイント外さないじゃん」
「ジャンプボールからそのままダンク決めるお前が言うんじゃねーよ、ルプトナ」
「「三人とも同罪」」

やいやい騒ぎながら廊下を歩いていると、霧が掛かったように変わった風景。旅団の本拠地である世界に入った為だ。

「へぇ、これは…」
「…すげぇな」
「「…綺麗…」」
「へへ、だろ？此処が俺達旅団の本拠地…『魔法の世界』だぜ」

一瞬だけ突き抜けた雲間から覗いたのは、果てしない雲海。その美しい情景に嘆息を漏らす面々。
それに、ソルは誇らしげに告げたのだった。

湯を浴び汗を流した後、空は中庭のトネリコの木の根本に寝そべり本を眺めていた。今世界は再び雲の中に入っている為に霧がかかったようになっている。

レジャーシートの上に寝そべり、手元には雑誌とミネラルウォーター。この旅が始まって直ぐ、自室として与えられた倉庫を整理した時に見付けた舶来の『銃専門誌』。英語なので意訳しながらだが、大分役にたった。贋物神銃もこれからパクっ…インスパイアしたのだ。

色々な頁に開き癖の付いたその本を適当に流し見ていたが――あるページでピタリと止まる。

それは、彼が今まで造った物とは全く違う代物。全長は何れも８０ｃｍ以上、軽快さより命中率や射程を取ったそれらは『旋条［ライフル］銃』。その中でも更に、彼の目を釘付けにしたソレ。

黒い銃床［ストック］に滑らかな銃把［グリップ］、トリガーガードと一体化した銀の用心鉄［ループレバー］を持ったシックな装いのレバーアクションライフル銃の銘は。

「『ＭａｒｌｉｎＭｏｄｅｌ　３３６ＸＬＲ』か…」

見惚れるような、そんな眼差しを向けて呟いた彼。左手で背表紙を持っている為に自由な右手で、大して甘［うま］くも無いミネラルウォーターを口に運ぶ。

――何故かはよく判らないが、妙に惹かれるんだ…この銃には。まるで恋い焦がれでもするように。

【…旦那はん、今度はこれを造らはるんどすか？確かに射程は大事どすなぁ】

（…別に要らねぇよ。そもそもライフル銃の射程程度じゃ、神剣士には三歩の距離も無いだろうに）

それを悟られるのも癪だと、彼は努めてぶっきらぼうに念話すると視線を外し――

（…なぁカラ銃。お前の『願い』って何だ？）

誠に呆れた事だが、本当に今更。彼は『初めて』相方である『永遠神銃』に、そんな事を聞いた。

【はい？なんどすのん、急に…】
（気になっただけだ。で、何なんだ？）
【えーと、そうどすなぁ…】

しばし、ウンウン唸って。幽月は答えた。

【一一『カエリタイ』んどすわ、わっち。他の何より強く強く…】

妙に静かな声色、まるで冬を越す為に遣って来た渡り鳥のように。
『カエリタイ』と囀った。

（『帰りたい』？故郷か何かか？）
【くふふ…どうどすやろなぁ】
（…まぁ、どうでもいいけどな）

いつものようにはぐらかす調子を取り戻した声色に、これ以上の追求の無駄を覚る。それが判らない程に短い付き合いではない。仕方無しに本ではなくトネリコの木を眺めて。

「一一……」

幻視した極彩色の風景。こうして過ごす度に見る白昼夢［ユメ］を見た。

薄明か黄昏か、黒金の太陽と白銀の望月が望む、薄紫に微睡む境界［セカイ］。虚空［ソラ］と虚海［ウミ］の狭間、視界の全てに拡がる劫莫たる水平線［ホライゾン］。

『――私の名前は”　　”、『　位』の【
】――…』

風の刻む枝葉の韻律［リズム］に、波の奏でる砂浜の旋律［メロディ］…聖盃に充ちる靈氣［アイテール］の水鏡を揺らす雫、波紋と音色は水晶硝子の和声［ハーモニー］。

――それはきっと…生命が遍く抱く、無辜［むこ］なる濫觴のユメ。何処までも広がる、平穏と安寧を湛えた終わり無き滄［あお］。

「～～…～～～…」

ふと記憶の深淵より溢れ出たその『無銘の唄』をハミングすれば幻想が湧き出づる。

虹と輝くステンドグラスのような絢翅［ハネ］の”蝶”に――…捻れた双世樹［メビウス］の幹に巻き込まれている『畸形の柄［ツカ］』。

――いや、『柄』じゃない。アレは…やはり…

【――その『ウタ』…何処で聞きましたん?】
「っあ、何だ?」
【その鼻唄どすわ…旦那はん、その『ウタ』を何処で聞きはったんどすか…】

気を逸らしていた事に気付き若干慌てる。幽月はといえばただ真面

目な声で問うのみ。まるで親の敵か蛇蝎にでも対するように、彼女には珍しく真面目に言い募った。

（…さぁな、覚えてねェよ。餓鬼の時分にでも聞いたモンじゃねェのか？）

【…へぇ。その『ウタ』といい『妙なマナ』といい…全く、最近の旦那はんは妙にわっちに隠し事をしますなぁ】

（何だ、文句有るのかよ。どうせ俺とお前は『銃と引鉄を引く指の関係』なんだろ？）

【くふふ、そりゃそうどすなぁ】

意趣返しに哂［わら］いを返し、それきり黙り込んだ幽月との念話を切り上げ雑誌に目を移すと一一不意に雲を抜けた。

『旅団の本拠地『ザルツヴァイ』に入港します、生徒は今すぐ校庭に集まってください。繰り返します…』

校内放送を告げる鐘の音色、そして早苗の放送が入る。立ち上がり進行方向に目を遣れば、宙に浮く荘厳な建築物。未来的を通り越して最早幻想的なまでのその姿、中心には天を衝く程の高さの塔。

ふと見上げたソラの端には幽［かす］かな月一一白い三日月が見えた。

少し強い揺れ。恐らくは接岸したのだろう。生徒会室に行くべく歩いていると、空の目の前を凄い勢いでタリアが横切って行った。

「な」

余りの剣幕に問い掛けた『何かあったんですか?』の『な』しか発音出来なかったのだから、その速度たるや推して知るべし。神剣効果でも使っていたのかもしれない。

その後に不愉快げなソルが続き、更に後に歩いてきた望達と共に、空はものべーから下船した。

万有引力など知らぬとばかりに宙に浮く無数の浮島や水晶らしきモノだらけの、寒々しい白の街。思いの他寒いその都市を歩く物部学園一行。信助などは盛大なくしゃみをしている。

空は何気なく神剣士の最後尾を歩きつつ、周囲に気を配っていた。

【無銘】の索敵を遣い気配を探り――気付く。

前方には四人、ぶすくれた表情の…浅黄色の髪の猫耳男と翠の髪の侍女。そして――

(…なんてこった)

【…ほんまどすなぁ、あないなモンが男に付いとっても。あの隣の美人はんの方にこそああいうんは相応しいのにぃ】

(そこじゃねーだろカラ銃…だが激しく同意する。珍しく意見が合ったな)

前述の二人は、ただのニンゲン。問題はもう一組の方だ。

知的そうな長身の、怜悧な表情をした眼鏡の男。その男の半分程度しかなさそうな、瀟洒な朱い服の猫耳少女。

それに空は、思わず額を掌で押さえて溜息を落とした。

【ん～？どないしはりましたん、旦那はん。まさかあのネコミミはんにやられたんどすかぁ？】
（…ある意味じゃな）
【くふふ、そうどすかぁ。旦那はんに獣耳属性が有ったとは盲点どしたわ】

下らない会話の最中でも気は抜かない。感じ取れるのは風と地脈に命溢れる大樹、そして業火と油に焼けた鋼鐵［こうてつ］。相当な熟達を経た神剣の気配――

「――ッ！？」

刹那、探知を断ち切る。しかしもう遅い。視線を向ければ交差する、長身の男の眼差し。眼鏡の男は一ツ鼻で笑い…視線を逸らした。

【…旦那はん。あの男、わっちの索敵に感づいとりますわ】
（解ってる…いやはや、流石だな）

腕を組み、心を落ち着ける。久方ぶりの、『策戦』による戦闘の気配に昂ぶる心を鎮めて。

（――年貢の納め時かね…だが抵抗はさせてもらうぜ…必死でな）

決意にて、魂を不動に縛り上げたのだった。

…物部学園一行が合流した魔法の世界の重鎮。この世界の領主とでも言うべき、猫の特徴を持つ『トトカ一族』の現当主ニーヤァ＝ト

トカ・ヴェラー。その妹にして大統領のナーヤ＝トトカ・ナナフィ。
そして、『旅団長』サレス＝クウォークス。

因みに、自己紹介よりも早く望に抱き着いたナーヤによって一行に…いや、沙月と希美、カティマとルプトナを中心に騒動が巻き起こった。どうも彼女は望が来る事を待ち侘びていたらしく、ようやく逢えた感激の余り抱き着いてしまったとの事。寒さから望の胸元に隠れていたレーメは、危うく押し花になるところだった。
更に望が彼女を撫でてしまったりしたものだからさぁ大変。

引きはがされて自己紹介を済ませ、先ずはヤツィータがサレスに報告を上げ、次いで沙月が親しげに彼と会話した。そんな様子を不愉快そうに眺めていた望とタリア。そんなタリアをやはり不愉快そうに眺めていたソル。

「さて、自己紹介はこれくらいでいいじゃろ。フィラ、のぞむの連れ達を都市部に案内してやってくれ。せっかく来たのだから楽しんでもらおうではないか」

その言葉に跳び上がる学生達。それを引き連れ、引率の早苗とフィラ…ナーヤ附きの侍女フィロメーラが進み行く。その中の一人に、サレスは声を掛けた。

「君はこちらだ。観光は話の後にして貰えるかな、巽空君…いや、『【無銘】のタツミ』君？」
「…了解」

紛れて逃げようと試みた空に声を掛けた。必死の抵抗…失敗。
一行を見送れば、残る一般人はニーヤァのみ。

「ああ、五月蝿いな田舎者どもは…！ナーヤ、私はこれで戻る。後は任せたぞ」
「お任せを、兄上」

忌ま忌ましそうに口元を歪ませて吐き捨て、場を後にしたニーヤァを見送った後でナーヤは。

「のぞむ、すまんな。不快な思いをさせてしまった」

眉尻を下げて、彼女は望に詫びを入れる。気にしていないと手を振る望にとびきりの笑顔で笑いかけて…その笑顔を。

「さて、では本題に入ろうかのう…皆、付いて参れ。話は『支えの塔』の、わらわの執務室にて行うとしよう」

それを一瞬だけ、空へと向けた。

――うへぇ、恐えぇ。あの塔が俺の墓標に成らなきゃいいけど…

その笑顔は『にっこり』というよりは『にっごり』。そう…大嫌いな相手に喧嘩を吹っ掛ける時の為の、『とびきりの穢顔［えがお］』』だった……

The 47th Name…"蕃神"

多くの書物に囲まれた室内。早速ソルが本アレルギーを出したりする中、一行は思い思いの場所に腰を落ち着ける。そして話が始まった。

――内容は情報整理。この世界の統治者がヴェラーら『トトカ一族』であり、クウォークスが旅団のトップでナナフィや会長の教育係だったと言う事。会長が教え甲斐の無い生徒だったという話…はどうでもいいか。

因みに空は入口の直ぐ脇の壁に背を預けて腕を組んでいた。無駄だとは判りつつも、いつでも離脱できるように。

「…しかし、此処には過去に因縁の有る神が何人もおる。よくぞ、集まったというべきかの？」

「そうだな……彼女が此処に居る事は、特にな」

転生体についての話になった刹那、ナーヤが呟く。そして――サレスは希美を、ナーヤは空を見遣る。

「え？わ、わたし……ですか？」

「……」

急に目を向けられて焦る希美をよそに、不穏な程空は落ち着き払っている。

「どういう意味だ？」

二人に代わって口を開く望。まるで二人を守ると言わんばかりに。

「深い意味など無いさ、今はな」

サレスはただそうはぐらかす。それに望は不審げな視線を向けたのだった。

――…結局、話は手短に終わった。元の世界に帰る為の座標も、また起きた『次元振動』により判らなくなっているとの事だ。…まぁ、信用はしていないが。

「さて、詳しい話は追々していくとして。今日のところはこのぐらいにしよう。そなた達も街の観光を楽しんで来るといい」

ナーヤの言葉に、一行は一度ものべーに戻る事になった。

そして、位置関係で一番手に執務室を後に使用とした空に、またもや。

「…おっと、そうだ巽空君。君にはもう少し聞きたい事が有る。時間を取って貰えれば有り難いのだが？」

サレスの声が掛かった…。

他のメンバーが去り、三人だけとなった室内。

静寂が耳に痛いという代名詞になりそうな程に静かな室内に息を詰める三人。

「…さてと。それでは本題に移るとするかのう…」

ソレを破ったのは、先程まで望にニコニコと笑いかけていた少女とは思えない程に怜悧な声色のナーヤ。

「よくもまぁ、ぬけぬけと顔を出せたものじゃ。随分と命が惜しくないらしいの…『蕃神［ばんしん］』？」

笑顔でありながら凄まじいまでの威圧。大統領という肩書に相応しいそれを受け、空は。

「お忘れでしょうかね、厚顔なのは生れつきですよ。『五穀の神』”ヒメオラ＝オーリ”様？」

誤魔化すのは寧ろ逆効果だろうと、糸のように細めた目で薄く笑って。実に横柄な態度で答えた。

「脳天を砕かれたいか？忘れる訳が無かろう、神世の古にわらわを…ヒメオラを殺し南北天戦争激化の引鉄を引いた貴様を、どうして忘れられると？」

対するナーヤは、先程までと変わらない。自然と笑い合う形になるが、その根底に流れるのは烈しい敵意。何か弾みが有れば弾けてしまいそうな程に。

「やはり前世の記憶が有ったか…相変わらずだな、君の周到さは」

「お褒め頂き光栄にございます、『真理の神』”サルバル＝パトル”様。まさか南北を象徴する御二柱にお会い出来るとは、思いもよりませんでしたよ」

眼鏡を直す動作に紛れたサレスの冷たい眼差し、並の人間ならば震え上がりかねないその酷薄な眼差しに晒されても、それは変わらない。いや、それを愉しんでいる雰囲気すら有る。

「…もう解っておるだろうが、我々は貴様を認めぬ。本来ならば塵にしてやりたいくらいじゃが…見逃してやる。チカラを手放し大人しく元の世界に戻るのならばな」

「お断りですね。私にも貫くべき壱志［いじ］が有りますので」

苛立ちを抑えるように目をつむり、静かな口調で語りかけたナーヤ。それに即答した空。

溜息の後に開かれたナーヤの目は烈火の如き怒りを湛えていた。

「これが最後通牒じゃ蕃神…！大人しく永遠神銃とやらを手放して去るのなら命までは奪わん。だが、拒否するというのなら――！」

翳した掌の先に、空間を裂き杖…先端に棘鉄球の装着されたメイス、『モーニングスター』が現れた。

「わらわの手で…この【無垢】にて、貴様を煉獄へと叩き込んでやろう！」

――永遠神剣第六位【無垢】。神世の古に於いては『破壊と殺戮の神』”ジルオル＝セドカ”と対等のチカラを持っていた…いや、圧倒すらしたという『南天最強の神』が振るった永遠神剣。とてもではないが、神世のチカラを散じた『今の俺』には敵わない。

「落ち着いて話し合いたかったんですけど――面倒くせェ、止めだ止め…やってみろよ、やれるもんならな」

それに反応し、空の口調も変わる。切れ長の鳶色の目を開き、慇懃無礼な物言いを止めていつも通りの三下口調へと戻る。

ーーだが、ソレがどうした。あの頃無かったチカラを『今の俺』は持っている。ならば、遣ってみなきゃ結果は解らない！

「この状況で俺が死ねば間違いなくアンタらが疑われる。例え誤魔化せたとして、どうあっても遺恨は残る。何より、アンタ達の本当の目的は望…いや、ジルオルの確保だろ？アイツに疑心を抱かせたくは無い…違うかよ」

「ここで貴様を始末出来るのならば安いもの。のぞむに憎まれようと、貴様を野放しにしておくよりはマシじゃ」

「嫌われたもんだ。ま、気持ちは解るけどな。我が前世ながら嫌な奴だもんな、あのクソッタレは」

睨みつけるナーヤに鼻白んで見せる。そして腕を組み、告げる。

「ーーよし、じゃあ一発いいぜ」

「…は？」

正面に向き直り、居住まいを正して。無防備に神剣士の前に身を曝す。本当に、何の防備も無しに。

「俺も『蕃神』は嫌いなんでね。一発くらいなら打ち噛ましてくれても結構だ」

その意想外の行動にぽかんと口を開き絶句するナーヤ。対して、サレスは興味深そうに見詰めながら眼鏡を直しただけだ。

「…正気か？神剣の一撃じゃ、ニンゲンと変わらぬ貴様はーー」

「口にしたからには覚悟の上だ、死のうと一向に構わねェ。でもそれで、遺恨も何もかも綺麗さっぱり手打にするのが絶対条件…これでどうだ？」

漸く気を取り直した彼女の言葉にも、まるで『デコピンしてくれ』とでも言うかのように致命の一撃を受け入れると彼は告げた。

その言葉通りにゆらりと力無く立ち、目をつむって判断を待っている。

「…ふっ、成る程な…さて、どうするナーヤ。試されているのはお前の方だぞ？」

面白そうに、外野に徹していたサレスが声を掛けた。しかし未だ、遠巻きに二人の同行を窺うのみ。

「ーーくっ…！」

それに彼女は、悔しそうに歯噛みする。今なら造作も無く始末できる。此処で討てば後顧の憂いを断てるのだ。

「……せろ…」

…しかしそれは、『彼の罪を許す』という意味だ。そして人として言うならーーそれは『己の憎しみに屈する』という事でもある。

「わらわの目の前から…とっとと消え失せろっ！」

【無垢】を仕舞った彼女に燃え盛る怒りを向けられ、空は肩を竦めて踵を返す。

一一そこまで嫌いかよ。まぁ当然だろうけどな。

さっさと扉をくぐろうとしたその脇に、長身の影が並び立った。

「送ろう。此処は広いからな、一人では迷いかねない」

「それはそれは。監視御苦労様です」

二人が出て行けば、執務室に残ったのはナーヤ一人。

「……」

…その心中に沸き上がる、旧い活動写真のように色褪せ、音飛びした情景。その中で、癖毛の黒髪の男…『紅い三日月』を腰帯に挿した青年が、大きな深紅の機械人形を見上げていた。

その装甲にペタペタと触れコツコツと叩き、仕組みに感嘆の声を漏らす。

『一一もう気は済んだか、『ξμδι』。そろそろクロウランスを戻してもよいか』

『もうちょっとだけ、もうちょっとだけお願いしますオーリ様！』

背後に体育座りで座っていた彼女がそう声をかけると、男は慌ててそう答えた。

その後で更に念入りな視線を機械人形一一『彼女』の神獣である『クロウランス』に向け始める。

『…お主を始め、ジルオルにナルカナ、ファイムにアルニーネ、サジタールにシェミン、サルバルにヤジェンダ、エトルにエデガ、レ

オーラ…全く、どうしてこう北の側には奇神変神［きじんへんじん］が多いのか…』

『向上こそ北の本質。寧ろオイラ達からすれば、現状に胡坐かいてる南の暇神［ひまじん］様達の方が異常ですよ』

『暇神はナルカナの事だろう。大体いきなりやって来て薮から棒に『クロウランスを見せてくれ』などと何がしたい？イスベルにでも見付かってみろ、即刻処刑されるぞ』

彼女の呆れたような言葉に、振り返らず答えた男。相変わらずペタペタとその装甲や関節部を改めている。そんな後ろ姿を、彼女はジトッと睨みつけた。

『いやぁ、実は『自律機動式戦闘機械兵士』ってモノを起草したんですけど、これがちっとも上手くいかなくて。それで同じ機械人形のクロウランスを参考にしたいなと…そうか！わざと重心を高くしてバランスを崩す事で機動性を底上げしているのか、凄い！』

呟くや、男はクロウランスに称賛の言葉を送る。それに、女性の表情も若干綻ぶ。

『む、そうか？褒められて悪い気はせんな』

『いやはや興味深い…ちょっと関節の動きを確認させてもらっていいですか？』

『ふふん、仕方ない奴め…クロウランス』

気をよくした彼女の指示に従い、クロウランスは肘や肩、足腰を動かして見せる。

『素晴らしい！ソレじゃあ次は分解を！』

『良いとも良いとも。クロウランス一一分解してやれ』

『アダダダッ！すいません調子こきましたマジすんまっせん！！』
『…ふふっ』

人形に腕をひしがれて悶え苦しむ男、それを見ながら朗らかに笑った女性。

…そんな昔日も…何処かには在ったのかもしれない。

しかし、ナーヤは知っている。それが『彼』の『策戦』だった事、その結果何が起きたか。そのユメを観る度に、刻まれた怒りも。

「ーーわかっておる、ヒメオラ…わらわは信じはせん…もう二度と…！」

椅子に腰を落として呟いた。神世の古とは余りに『違う』、その男に向けて…。

The 47th Name ?・・・"蕃神?"

支えの塔の正面玄関に立つ二人の男。時間としては昼過ぎ、太陽は蒼天の南中に座す。
とは言え、そこは雲の上。時折吹き抜ける風は身を切るように冷たい。

「迷惑をかけたな、アレも普段はああではないのだが」
「仕方ないでしょう、目の前に自分を殺した相手がいたんじゃ」
フ、と溜息を漏らしたサレスに一礼して空は歩み出す。その背に向けて投げ掛けられた、サレスの一言。
「最後に一つ聞いて良いかな、巽空君。君は誰だ?」
それに一一端から聞いていれば一切訳の解らない問い掛けに、空の足がピタリと止まった。
「一一……誰って、俺は巽空ですけど?」
白々しく答えた背後では、執務室でのナーヤと同じく右手を翳して空間から一冊の本を取り出したサレスの姿がある。
「知っているだろうが、私の永遠神剣【慧眼［えげん］】は所謂『アカシックレコード』という奴でね、『時間樹エト＝カ＝リファ』でかつて起こり、今起き、やがて起こる事象が遍く記されているんだ…私にしか読めはしないがね」
パラリと第五位【慧眼】の頁［ページ］をめくりながら語る彼。恐

らくソコに記されているのは、神世の争乱についてであろう。

「そこに興味深い事が記されていた。どうも君の前世は――」

それを見る事も無く、空は背を向けたままで口を開く。

「――『永遠神剣を砕かれた上で”浄戒”を受け、神名を破壊されて死んだ。”転生”は不可能なはず』…でしょう？」

その『綻び』…決定的な『破綻』を迷う事無く、口にした。

「如何にも。そんな理不尽なイレギュラーなら、例え害が無くても始末しておく方が賢明だとは思わないかな？」

何時しか、【慧眼】を中心に旋風が巻き起こっている。それは多量のマナを含んだ、嵐帝の一撃。

「その上で、もう一度聞こう…」

冴えきった高層圏の空気が唸りを上げる。静かながらそれに掻き消される事の無い、良く通る明瞭な声で、『真理』を見詰める神の転生体は改めて問う。

「――君は、誰だ？」

「……」

普段から通されていない外套の袖を風が靡かせる。鴉の翼のように見えるソレを靡かせたまま――

「…何度聞かれようと変わるかよ。俺は巽空、ただソレだけだ」

あの日…精霊の世界で気付きかけ、見て見ぬ振りをしていたソレに面と向かって。
そして、自らにずっと言い聞かせ続けてきた言葉を紡ぎ出して。

「かつて『蕃神』と呼ばれた神であろうと、この先どうなろうと、ニンゲンは『現在［イマ］』しか生きられないんだから…俺は何処まで行っても『異空』以外では有り得ないし、そうでなきゃいけないんだ…」

『過去』という自己確立…アイデンティティの喪失による恐怖。
それにしっかと脚を踏み締めて震えかける膝を黙らせ、拳を握り締めて歯を喰い縛り。詰めた息を無理矢理吐き出して、声を搾り出し。
ただただ、必死にそう強がって見せた。

「…成る程、理解したよ。足止めしてしまって済まなかった」
「いえ…生意気言いました。それでは」

呆れ果てた溜息に続き、良い音を立て閉じられた【慧眼】。旋風もまた止む。振り返る事無く歩き行く少年の背を眺めながら、サレスは。

「…やれやれ、子供の理屈だな。神世に『奸計の神』とまで呼ばれた悪神が、あの程度の屁理屈をこねるとは」

そう評価する。だが、辛辣な言葉とは裏腹にそれは決して『否定』ではない。それは寧ろ、『肯定』だった。

…少しでも『神世の己』を擁護する発言をしたなら、迷わず手を下

すつもりだった。しかしその口から紡がれた言葉は何の事はない、空虚な台詞。

要約すれば、『有るがままに在る』と述べただけ。確たるモノのなど何も無い、正に名の示す通りの『空［くう］』。それを肯定してのけたというだけだ。

「済まないな、ナーヤ。どうやら私は彼に興味を抱いてしまったようだ」

だが、だからこそ。彼は少年に興味を抱いた。何故ならば『慧眼』とは仏教における五眼の一ツ。この世の空［くう］である『真理を悟る能力』を持つ眼の事だ。

奇しくもその『銘』を持つ永遠神剣と、その『名』を持ち存在する事となった男と少年の二人。詩的に謂えば、『出逢うべくして出逢った宿命の相手』とでも言うべき間柄。

「彼…『巽空』の行く末にな」

面白そうに目を細め、彼は上階からその姿を見ているだろう彼女に向けて呟いたのだった。

……夜空には星と紅い三日月。地には燃え盛る業火と一一…

『脆い…！ジルオルをも寄せ付けない神すら今の『オレ』には敵わない…ハハハッ！アンタ天才だよ欲望の神、この”神名”は正にカ

ミの領域だ！』

やはり――…『紅い三日月』。

その刎首鎌のように湾曲した刃は、本来の紅に加え――さらに鮮烈な『紅［くれない］』に染まっている。

『何故…裏切った…『ξμδι』…お主はジルオル達の仲間ではなかったのか…！』

膝を付き、支えとするモーニングスター型の神剣を握り締める彼女。周囲には夥しい数の光源――色とりどりの『機械兵士』。その数は正に無数。何せ『未だに増殖』し続けている。

『…『仲間』だと？何を言うかと思えば詰まらねェ…オレはアイツらにとっちゃ、殺す価値も無い渣［カス］なんだとよ！ハハハハッ！』

背中に受けた傷、そこから染み入った『猛毒』に呻きながらその存在に問うた彼女。それに『悪神』は吐き捨てるように言い…自棄を起こしたような哄笑を漏らす。

『馬鹿者め…エトルに唆されて神名を刻んだな…！自我が変容する程に穢れた神名を！』

『ククッ…だったらどうした、今のオレにはチカラが有る。もう判ってんだろ五穀の神ィ！』

笑いながら衝き出されたその指先。彼の指示に合わせ、機甲兵団が『銃口』を一斉に彼女へ向ける。

青い機体と黒い機体は右腕を迫撃砲へ、緑の機体は両腕を機械式小銃へ変化させ。赤い機体は両腕と両足の装甲をスライドさせて複数の小型集光レンズを露出させ、白い機体は左胸部の大型集光レンズを一一それぞれ向けた。

『一一これからの戦いを制するのは突出した『チカラ』じゃねェ。深謀遠大な『知略』と、相手を絶対的に上回る『数』だ！永遠神剣の引き起こす『奇跡』なんて不確かなモンに頼ってる時点で、現実をただ客観的に見詰め、勝利を確率で弾き出す『科学』を越える事は出来ねェのさ！』

人差し指が銃身で親指が撃鉄、中指が一一引鉄。向けられた彼の指先もまた、銃だった。

『…まぁ安心しろ。アンタの仇はジルオルやナルカナがとってくれるさ…オレを使ってる気になってる、アンタの『お仲間』の頚を取って、な』

と、ふと。静かな声で悪神は真相を『騙る』。『真実』はそうであろうが、主観が違う『真相』を。

『…そうか、この筋書を書いたのは…やはりイスベル達か…愚か者どもめ』

『一一その通り！『南天神の総意なのです。上手く熟せば貴方を南天の座に名を連ねてあげましょう』だとよクソ下らねェ！つっても南天の剣神殿と慈愛の女神様はハナッから乗り気じゃ無かったようだがなァ』

…有り得ない事だが、もし南天の神々が真実を語ったとして。この男に『破壊と殺戮の神』と比肩する『五穀の神』を殺すチカラが有

るなどと誰が思おう。

それ程脆弱、それ程無能…それを装う――『奸計の神』に。

『全く…『蕃神』如きに後れを取る事になるとは…』

俯き、屈辱に震えた彼女のその一言。それに、目に見えて『悪神』は顔色を変えた。

『――…オレを…オレをその名で呼んで良いのはこの世にただ一人……あの『月』だけだァァッ！』

迷い無く、指が鳴る。全ての銃口から各々の属性による弾丸が撃ち出され――

『すまぬ、皆…後は…任せる…』

最早防御すら出来ぬ彼女ごと、地を撃ち砕いた――…。

「もしもし、大丈夫ですか？」

「…あ……はい」

女性の声で目を覚ませば、そこはザルツヴァイの端に有る展望公園のベンチの上。

どうしてもそのまま学園に帰る気分にはなれず、ブラブラと歩いて辿り着いた公園で雲海を眺め――そのまま寝てしまったらしい。

「こんな所で寝ていると風邪を引きますよ？ザルツヴァイは夕方からめっきり冷えますから」
「これはどうも、すみません。有難うございました」

燃えるような紅い髪と瞳の、露出の多い服装の女性。既視感と『貴女の方が寒そうだ』と言いたいところをグッと堪えて礼を告げた。

「…貴方、美味しそうね」
「はい？」
「――あら、私ったら何を…ごめんなさいね、それじゃあ」

一瞬妙な雰囲気を纏ったがすぐにそれを吹き消し、彼女は歩き去って行った。一言…『お腹すいた』と漏らして。

「…しっかし緊張したぜ、此処まで緊張したのは物部学園の入学面接の時以来だったな」

それを見送ってしばらく夕陽を眺めていた彼は、紅く染まりゆく世界の中で忌ま忌ましそうに呟く。

「…業の深い野郎だ、テメェのお陰でまた死にかけただろうがよ…『オレ』」

精霊の世界での一件以来、無気味な沈黙を続けるその『悪心』に向けて。

――『蕃神』、則ち異教の神。
自己の興味を突き詰めるという目的を至上とした北天に在りて尚、『異端』とされた神性。

その『異端』こそが『機械技術』。『奇跡』により成り立っていた神世に於いては蔑ろにされていた、『科学』という名の異教を究めた神だ。

南北天戦争では権謀術数や兵器を持ち他の神性を篭絡し破滅させ、『奸計の神』の二ツ名で唾棄された。それに足る行為を、何度も行った。

「…生きてるってのは良いね、誰が『罰』なんて受けるかよ…」

脚を組み、背もたれに寄り掛かって厭味ったらしく笑いながら思い返す紫色の瞳。憎しみの焔が煌々と燃え盛るその眼差し。

一一だってそうだろ。『罰』を受けたら許さなきゃならないんだぜ、あんな屑野郎［オレ］を。

死して罪が許されるのはその先が無いからだ。…だから、転生を果たした俺に『赦し』なんて要らない。あの『光をもたらすもの』の襲撃の日に、【無銘】と共に神世の記憶を受け入れた『俺』には。だったら…そんな『俺』が『赦し』を求める事。それ自体が新たな『罪』となるだろう。

そしてその『悪神』の末路は”浄戒”を受けての死。最早転生の輪から零れ堕ち、『存在する可能性すらも無い』筈だというのに。

未だに罪は、醒めぬ悪夢のように詐［いつわ］りの輪廻を繰り返す。何処まで行こうと何処にも行けぬメビウスの鐶のように、出る筈も無い答えを探して堂々巡り。

故に、その思考は今まで封じていたモノ。

「…俺は誰か、か…」

何一つ返らない応え。黄昏の天穹［ソラ］を見上げれば三日月と一一…名も知らぬ耀星。

一一この世界は天に近い。手を伸ばせば届いてしまうんじゃないかと、そんな漠然とした恐怖を感じる程に。

「…んなもん、俺が一番教えて欲しいぜ…ッたくよ……」

白い息と共に鬱屈した気分を吐きながらの本音は、誰に届く事も無く高空の風に融けていった……

The 48th Name…"戦備え"

朝方のザルツヴァイの、魔法陣のような紋様の流れる道。武術着に外套を纏った姿の空は、そこを独り歩く。

「あー…ホントこの世界、冷えるよな…」

呟くだけでも白い息。その露出していた口許に、紅い襟巻き…精霊の世界は暑かったので使わなかった襟巻きを引き上げる。その手には使い捨て懐炉［カイロ］が握られていた。

到着したのは支えの塔。朝陽に煌めく白亜の塔を眩しげに見上げ、その入口に立つ警備員に声を掛けた。物部学園の関係者である事を告げれば、警備員は慌ててインカムを操作する。

耳に掛けるタイプの近未来的なデザイン、新米らしい彼は少しまごつきながらも指で操作した。

それに伴い揺れる、肩に提げた独特な形状の『ＦＮ－Ｐ９０』似の自動小銃…ＰＤＷ［パーソナルディフェンスウェポン］の部類に入るであろう銃器。空はそれらを、実に興味深そうな眼差しで見詰めた――…

それから数分後。空はヤツィータに先導されサレスの私室に通されていた。

「…アポも無しにいきなり尋ねて来るのはどうかと思うがね」

「すみません、クウォークス代表。しかしどうしても、自分の探究心を抑え切れない性分なもので」
「死して尚北天神の性［サガ］は抜けず、か。それで用件は何かな」
やれやれと溜息を零して促す。それに、彼はポリポリと頬を掻きながら。
「旅団の書架の閲覧許可を頂きたく、参上しました」
実に簡潔に用向きを述べた。
「旅団員でも無い君に、か？」
「それはそうですがね。こちらとしても、光をもたらすものが攻めてくる前にきっちり準備を整えたいんですよ。この世界の『進みすぎて魔法と区別が付か無くなった科学技術』を得る事は、俺にとっては願ってもないチャンスですから」
包み隠さず理由を告げる。じっくり吟味するようにサレスはその言葉を、机に両肘を衝いて目を閉じて聞いていた。
「…前提が間違っているな。君達はもうすぐ元居た世界に帰る筈だろう？」
「それは他の皆でしょう。少なくとも俺は、これから先も分枝世界間を旅しますよ。果たさなきゃいけない盟約があるもので」
「ほぅ、盟約。それは何かな」
「これ以上知りたいのなら、対価を頂きませんとね。禁書も含めた閲覧許可とか」
バチバチとスパークする、策略家同士の腹の探り合い。隣に居るヤツィータなどは『うへぇ』という顔をしている。

「…まあ良いだろう。断って、お得意の侵入でもされては迷惑だ。場所は此処、それと――」
「有難うございます。それでは」
行き先を記した紙を受け取れば、さっさと踵を返して歩き去る。落ち着いた言葉で語った割には、その足取りはスキップせんばかりにはしゃいでいた。

「…それと、この時間帯はよくナーヤが居るから注意しろ…と言いたかったんだがな。聞いていなかったのなら仕方あるまい」
「うわぁ、悪質ねぇ…でも面白そうだわ、見て来ようかしら」
「お前の方が悪質だ。前世からの因縁に満ちた、目眩く逢瀬を邪魔してやるな」
その姿に苦笑しながら二人は、にたりと笑みを浮かべたのだった。

少し埃っぽい書架。背の高い本棚にはぎっしりと蔵書が詰められていた。ソルならきっとショック死してしまうだろう。
その僅かな通路を、キョロキョロと辺りを見回してタイトルを確かめながら歩く。
――しかし凄いな…色んな世界の書籍が納められてて寧ろ統一されていない。この中から目的のモノを探すのは骨だな…
何冊かは既に当たりを付けて小脇に抱えている。今の彼が探してい

るのは、科学技術に関する書籍。

「ーーお…」

目線の一段下、そこに収められている書籍のタイトルは『ザルツヴァイ式科学大系』。

尚、異邦人の彼が魔法の世界の本を探せているのはサレスが予めメモ紙にタイトルと訳を列記してくれていたお陰である。

漸く探していたタイトルを見付けて手を伸ばすーーと。大きく傷だらけの無骨な手と、小さく柔らかな手が触れ合った。

「あ、すいません…」

「あ、すまぬ…」

思わず、二人は見詰め合う。ベタな恋愛漫画のような一瞬の後ーーナーヤはまるで路上の汚物でも見るような目付きに変わった。

「…ニンゲン相手にそれ止めません？いくら俺でも傷付きますよ」

「こんな所で何をしておる。また策略の糸でも繰っておるのか？事と次第によっては…」

「クウォークス代表の許可は取ってあります。悪しからず」

先手を打ち、サレスのメモ紙を見せる。流石にその字には見覚えがあるらしく、彼女は悔しそうに舌打ちした。

ーーこンのネコ娘、耳摘んで泣かしたろか…その後火葬「インシネレート」は免れねぇけどな！

「…上手くサレスには取り入ったようだが、わらわはそうはいかん

ぞ。貴様だけは認めぬ、蕃神」
「良いですよ別に。逃げも隠れもしませんからどうぞ、何時でも憎しみをぶつけて下さって結構」
「ああ、少しでも不審な動きをすれば一一脳天を砕いてやるわ」
身長差から見下すように三白眼を向ける空、見上げるように睨みつけるナーヤ。危うい綱渡りのように張り詰める空気。
「一一で、貴様…」
ジトリと見詰め合って数秒。彼女は、静かな口調で。
「…いつまでわらわの手を握っておるつもりじゃ。いい加減にせい、鳥肌が立つ」
「仕方ないでしょう、俺はこの本が読みたいんですから。大統領が離してくださいよ」
本を取り合って重なったままの手を退けろと告げた。しかし空にとっては漸く見付けた理想的なタイトル、離す訳にはいかない。
「断る。何故わらわが貴様に譲ってやらねばならんのだ、貴様こそレディーファーストという言葉を知らんのか」
「はぁ?誰がレディイダダダッ!そっちに指が曲がるのは十年くらい前に卒業しましたッ!」
「ナーヤ様、如何なさいました…あら、貴方様は…」
そこに翠色の髪の侍女、フィロメーラが現れる。ナーヤと手分けして探していたらしく、その手には数冊の本が抱かれていた。
「…何、ちょっと本に付く悪い虫を見付けたものでな」

「…精霊の世界ではクマムシ、今度は紙魚［シミ］扱いか…つーか、あれだけ読むんだからこの一冊は先に読ましてくれたって良いでしょう」

「嫌じゃ。決めたぞ、何としても貴様にこれは読ませません。わらわはこれを死守する」

「大統領ってのはそんっっなに暇な職業なんですかい？」

「そんな訳がなかろう、貴重な余暇を有意義に過ごす為に来たのじゃ。貴様のお陰で最悪の余暇になりそうだがの」

ミシミシと本棚を鳴らしながら、二人は攻防戦を繰り広げる。それにフィラは、懐から取り出した手帳を眺め始めた。

「ナーヤ様、午後は世刻様とお会いするご予定では？時間が無くなりますよ」

「……むぅ、そうであったな…」

心底悔しそうに漏らすと、彼女は本から手を離した。結果的に勝利を収めた空は、勝ち誇るようにゆっくりとした動作でそれを小脇に抱えた。

「…どうぞ巽様、珈琲でございます」

「あ、どうも…うん、旨い…これは…キリマンジャロ？」

「貴様…わらわを虚仮にしておるのか」

「いや、そういう『じゃろ』じゃなくて」

書庫に設置された机は一つ。それはナーヤに占領されている為、空は出窓に腰掛ける形で本を読んでいた。丁度ナーヤに背を向ける形

で。

勿論、先程既に『早く出て行け』『持ち出し許可は貰ってません』の応酬は済ませてある。

「「「……」」」

…コチコチコチコチ、と。殺伐とした書架に規則正しいリズムを刻む、妙に古めかしい壁掛け時計。静かな部屋の中でその音はやけに耳につく。

「…んー…」

「……」

そんな中響く間抜けた声は、空の唸り声。軽く握った左手の親指を眉間に当てる、彼が何かを考えている時のお決まりのポーズ。

――しかし、やっぱり文字は訳判らん。図解が多いのがせめてもの救いか…

ボリボリと、最近伸び気味の髪を掻く。切らなければいけないとは常々思っているが、彼は散髪に千円以上使うのは馬鹿らしいと感じる人種だった。

――結局、贋物神銃に施した『結晶』とやらでの改良は上手くいかなかった。魔弾はやはり発動せず、ただカラ銃にパーマネントウィルを補給させただけの結果に終わった。

苦し紛れに以前貰った『凍結片』も一ツ遣ったのだが…これもやはり無意味。八方塞がりとはこの事だ、ッたくよ…。

「…んんーー……」

「……」

再度、更に長い唸り。それにナーヤはイライラと己の本の頁をめくる。

――俺の考えは間違ってたのか？でも、どう考えてもやっぱり弾丸を放つのは撃鉄だろうに。それ以外なんてあるのか？バレルとか？

「…んんんーーーんべぇし！？！」

三度唸りを上げた空、その後頭部に直撃したのはナーヤの読んでいた本。

「喧しいわーっ！！大人しく本も読めんのか貴様はっ！ウンウンウンウン唸りおって、耳障りで仕方ない！」

「痛ッて、ちょ、何もこんな広辞苑クラスの本打つけなくても！」

涙目で批難を向けながら頭を摩る。因みに、投げられた本は確かに辞書だった。

「つー…仕方ないでしょう、どうしても解らない事が有るんですから」

「解らん事じゃと？」

「ええ、『弾丸を放つのは銃の何処か』…です」

その探究に行き詰まっていた空は、最早藁にも縋る気持ちで口を開く。散々に悩み尽くした命題だ、溜息くらい出よう。

「――そんなモノ、茨［さや］に装薬された火薬に決まっておろう」

…それに『何を言っておる馬鹿者』とでも言わんばかりに、彼女は事もなげに呟いた。

「何言ってんですかい、そりゃあ実包で……」

反駁しようと口を開いた空だったが、直ぐに口を閉じる。そして再度眉間に親指を当て――

「…そうか、そうだよ…例えてみれば【無銘】は、”銃自体を薬莢にした『実包』”じゃないか…形が変われば仕様が変わるのは当然…別にこだわる必要は無い……見えた、見えたぞ『魔弾』…！！」

「お、おい…何をぶつぶつ言うておるのじゃ――ひにゃ！？」

モソモソと右手で懐を漁りつつ独りごちる姿に流石にナーヤも案じ始め、彼の目の前で手をヒラヒラさせてみた刹那、その手をガッシリと掴まれた。

「――有難うございますネコさん、お陰で今日は良い日になりそうです！あーもう、つーかなんでこんな簡単な事に気付かなかったんだ、莫迦か俺はッ！何ヶ月無駄にしてんだッつーの！」

空はブンブンと握手した手を振り、一通り感謝を述べた後で解放する。そのままの勢いで窓を開けて、桟に【篭絡】を引っ掛けた。

「この借りは必ず返しますから！後ソレ、詰まんないモンですけどどうぞ！」

言い残すや窓から飛び出し、どこぞの特殊部隊のように壁を蹴りながら降りていく。しばし『天啓が降りてきたーーッ！』という声が響いていたが、やがて鎖と共に下の方に消えていった。

「…なんじゃ、あやつは…」
「さ、さぁ…？」

長らく呆気に取られていたナーヤとフィラだったが、漸く気を取り直して呆れる。握り締められていた手を開くナーヤ。そこには、包装された琥珀色の玉、一粒の甘露飴。

「……というか……」
「はい？」

それをもう一度ギュッと、握り潰さんばかりに彼女は握り締めた。凄まじい怒気と共に。

「誰が…誰が『ネコさん』じゃ、あの無礼者めがーーーっっ！！！！」

塔を揺るがさんばかりの大音声に、サレスとヤツィータは『やれやれ』と肩を竦め合った。

荷物の運び込まれる物部学園。ナーヤの指示に因るモノらしく、搬入は専門業者が行っている。

「次は野菜の搬入っと…」

沙月の呟きの通り、運び込まれているモノは食材だ。それを確認しながらウンウン唸っている。

「先輩、それ空くんの帳簿ですか?どうして先輩が?」
「ええ、彼がいきなり職務放棄したのよ。何でも『天啓が降りてきたーーーっ!!』とかで」
「…最近エキセントリックさに磨きが掛かってきたわね、巽。天啓って何なんですか、斑鳩先輩?」
「本人に聞いてちょうだい」

希美と美里の問い掛けに苛立たしげに答えた彼女。大分イラついているらしい。というか、彼女がイラついているのは望がナーヤに呼ばれて『二人きりで』何処かにいるからでもある。
故に、世刻ハーレムの面々は浮足立っている。カティマとルプトナなど意味も無く廊下を行ったり来たりしていた。

「たまに有るよな、空がいきなりそう言うこと。そんで大急ぎで自分の部屋に篭ってんだよ」
「何考えてんのか大体判ってるけど、鍵掛けやがるから何をやってるかは解んねーんだよな」

近くでババ抜きをやっている信助とソル。そして深読みしすぎたソルが信助の二枚の手札の内、飛び出していたジョーカーを引こうとした時ー校庭から爆音が木霊した。

「何!敵襲?!」
「こ、校庭から煙が出てるよ!」
「まさか、光をもたらすもの!?」

断続的に響く爆音と振動に、席を外していたタリアと共に即座に飛び込んできたルプトナとカティマ。三人ともう神剣を装備している。流石の判断速度と言ったところだろう。

窓から覗く七人、その視線の先には濛々と立ち上る土煙と爆弾でも炸裂したような窪みが幾つも。
そして一一大分離れた所にしゃがみ込む空が映った。

「出来た…これなら充分ベルバルザードに太刀［たち］向かえる！」

尻餅をついた空は天を仰ぎながら、撃ち尽くした贋物銃【海内】を持つ左腕でガッツポーズを繰り出す。同時に右手で【下弦】を装備した脚を撫で摩る。痺れきったその脚は、未だ動かない。

「問題は副次的な被害…これを解決出来りゃ即戦力一一」
「この間合いなら、いけるっ！」
「え？」

と、目の前に紅い髪を靡かせた白い戦闘服の少女が躍り込んだ。キラキラと煌めくその戦乙女は一一

「一一『インパルスブロゥ』！」
「あべェェシッ！？！！！」

すぽぽーーん！！とそれはもう見事な音を立て、彼に【光輝】を纏うハリセンを見舞った。
因みにハリセンを手渡したのは美里、この漂流生活が始まる以前に拾っていたアレだ。

「担当業務サボってまで何やってるのかと思えば何、テロ？私に対する宣戦布告と見做して良いのよね？」
「違いますすいません実験は成功しましたから戻ります『マーシレススパイク』だけは勘弁してください…」

ハイデアの槍を構えて槍撃の姿勢をとるケイロンに先手を打ち、頬を真っ赤に腫らした空はヘロヘロと立ち上がって。日頃の業務に戻っていったのだった……

腫れた頬を濡れ手拭いで冷やしながら、空は帳簿をつけている。

「～～…～～～…」

「ど、どうしたんだよ空…？」

「やけにご機嫌ね、何かあったの巽？」

御機嫌に鼻唄など唄う彼に、信助と美里が話しかける。若干無気味に感じながら。引き気味の二人もなんのその、空は上機嫌のままだ。

「んん？ああ、まァな…～～…～～～…」

パタンと帳簿を閉じて背を伸ばす。整理を終えた彼は、満足げに鼻を鳴らした。

「…にしても長かったよなぁ、空。もうすぐ俺達、元々の世界に帰れるんだよな」

「ホントよね～、やっと帰れる…家に帰れるのよね。もうちょっと続けたい気もするけど…なーんてね」

と、信助と美里が呟いた。その声には微かな寂寥…そして隠し切れぬ喜びがあった。

「帰ったら何するよ？俺はジャンクフード食いまくるね」

「あたしは勿論お菓子に甘味。巽は？」

「俺か？そうだな－－」

その喜びを、口にする事で表す二人。それに空も。

「俺、元々の世界に帰ったら……先ず滞納してる家賃三ヶ月分を払うんだ…その後アレ…三ヶ月間無断欠勤してるバイト先に謝るんだぜ…やる事一杯だろ…へへへ…」

…その、切迫した実情を語った。

「…ッてかもう無理だろうがよォォッ!!絶対クビになってるよ!絶対部屋引き払われてるよ!俺に帰るべき場所なんて、ホントにあんのかァァッ?!!」

先程までの上機嫌から一転、机に突っ伏して喚き始める。実際に帰れる状況になって、忘れていた問題点を思い出したのだった。

「何の為に高い学費払ってまで物部学園に通ってると思ってんだ、俺の就きたい職は公務員なんだよ!給料安定してクビが無い公務員になってさ、三十代くらいまでに結婚して四十代くらいまでに一軒家を二十年ローンで買ってさ、子供は男女二人で仕事場では部長くらいまで昇進して定年退職してさ、老後は奥さんと縁側で茶を啜りながら昔話とかして最期は子や孫に囲まれて老衰で奥さんより早く往生するっていう俺の人生設計が無茶苦茶になっちまうじゃねェかァァッ!!」

「「どんだけ綿密な未来予想図!?上手く行くかそんなのっ!!」」

暮れなずむ教室に木霊したその悲痛な叫びにすかさず入ったツッコミ。

「「「……ぷっ、くくく」」」

そして、揃って忍び笑う。

「しかしなぁ、まさか空とこんな馬鹿話するようになるなんてよ」
「まったくよ、取っ付き辛い奴くらいにしか思ってなかったのに」
「こっちこそ、鬱陶しい奴らくらいにしか思ってなかったけどな」

繰り返される日常では一向に近づく事の無かった、その距離。もしこの漂流が無ければ、有り得なかったであろう関係性。実に居心地のいい雰囲気。

「…そういえば学園祭はどうなったんだろうな。元々俺達、その為に集まってたんだしよ」
「言われてみれば…後で斑鳩先輩に聞いてみようかしら」
「いざとなりゃ強行開催だぜ」
「巽なら…一人ホラーハウスが出来るわね。前使ってたあのお面を着けて剣持てばジェ○ソンっぽいムキムキさ加減だし、幽月さんはリアルにゾンビだし、レストアスで人魂も出来るし」
「今晩そのオールキャストで枕元に立ってやるから請うご期待な…っと、そういや校庭均さねぇとな。行くか」

椅子から立ち上がって爽やかに告げた空、それに二人は揃ってサムズアップし一一クルリと親指を下に向けた。

「「ふざけんな、ガンバれ！」」
「友達甲斐の無い奴らだ畜生」

…だからこそ、こんなにもこの時間を惜しむのだろう。もうすぐ終わりを告げる…『家族』としての時間を…。

同じ頃、学園の校長室で望は打ちひしがれていた。そんな彼を見下ろす冷たい眼差しは、旅団長サレス＝クウォークス。
今から数分前、彼は少年に元々の世界の座標を教えた。そして、告げたのだ。

『お前は自分の力に、自分が何でも出来ると錯覚している』と。『お前は我々に必要無い。邪魔になるだけだ、元の世界に帰れ』とも。

「キサマはノゾムが弱いと言うのか！確かにまだ未熟だがそれでも、ノゾムの力は飛び抜けている！ノゾムと吾の力を甘く見るな！」

主を無下に扱われ、レーメは激怒した。勇ましく啖呵を切ってのけた天使にサレスは苦笑する。

「では、言い方を変えよう。――お前が戦いたいのは何故だ？」
「――俺はッ…俺は、困っている人が居るから…俺の力でそれを助けたくて…」

問い掛けに、彼は途切れ途切れの言葉を紡ぐ。その言葉は、以前ナーヤによっても否定された言葉だった。
『守るものがあり、やるべき事があるのなら、他の事に目を取られてはならないとわらわは思うぞ』と。

「『人の為』に戦うのか？ならば、お前はやはり戦うな。さっさと帰れ」

その返答に更に呆れを強めたサレスは、氷点下の言葉をたたき付ける。微かに、残念そうな色を篭めた声で。

「その意志はお前の心から生まれたものではない。お前の手に入れた絶大な力から齎されたものだ。そうだろう、『破壊と殺戮の神』”ジルオル＝セドカ”の転生体……世刻望？」

睨みつける望を『口が付いているなら言葉で文句を言え』と一蹴し、彼は少年の知りたくなかった事実を全てぶつけた。

己の力の正体が、殺戮者の力である事。その力によって、物部学園が漂流する事になったのだという事。更に一一いつ、その力に望自身が乗っ取られるかも判らないという事を。

「話は以上だ。座標位置の転送はヤツィータにして貰え」

呆然と俯く少年に冷たく締めの言葉が投げ掛けられた。それを最後に彼は、望に背を向けて威圧を与える。

そして窓の外を眺め一一人で校庭を均している空を視界に収めたのだった。

…その暫く後、生徒会室で。望はルプトナ、カティマと言葉を交わしていた。二人に…いや、彼が教室に戻った時に居た、ほとんど皆に心配されてしまった結果だ。

「…俺は、元々皆を元の世界に帰す為に戦っていた。それでも、目の前で困っている人が居れば助けたい。俺にはチカラがある。だから、そのチカラを使って出来る限りの事をしたいと思ったんだ」

二人の励ましに少し元気を取り戻した望は、先程までの経緯を話した後で己の気持ちを語る。

「でも、サレスに言われた。それは俺の心から生まれたモノじゃない、俺が持つチカラから生まれたモノなんだ、って…」

悔しそうに、事実、その言葉に反論出来なかった自分を恥じて、彼は声を搾り出す。『守りたい』という気持ちを否定され、どうしていいか判らずに。

「…望。無礼を承知で言わせて頂きます…」

それに、そう前置きしてカティマが口を開いた。

「チカラには必ず『責任』が付き纏います。無責任なチカラなど無い、もし有ったとすれば…それは徒［いたずら］な暴力であり唾棄すべきモノでしょう」

「…責任、か」

「はい。失礼ながら今の望は……その『責任』から逃れようとしているようにしか見えません。『守りたいもの』を盾に、自身のチカラを正当化しようとしているようにしか見えません」

「――そんなッ！…こと、は…」

尻窄まりになる声、またも俯いてしまう望。

「望…良いではありませんか、それでも」

「…え？」

その刹那、彼女の口から発せられたのは驚くべき言葉だった。

「ある人物が、私にそう言いました。もっと欲張ってもいいのだ、と。国を救う為、民を救う為と視野を狭めていた私に…」

胸元に手を宛て、大切な思い出を呼び覚ますような仕種。

「確かに、チカラを手にしたからには権利を振りかざす前に義務を果たすべきです。しかし、それに気を取られる余り他者しか省みなくなっては本末転倒でしょう？それこそ、傲慢というモノです」

…紡がれた言葉は、限りなく優しい。それを語る彼女の脳裡には、恥ずかしげに語る『或る少年』の姿が浮かんでいた。

「そうそう。だから望はさ、望らしく有ればいいんだよ」

「俺らしく…？」

カティマに続けたルプトナ。彼女もまた、大事な記憶を揺り起こすように。優しい眼差しで彼を見詰めた。

「うん、そう。此処に居る望は、望以外の誰でも無いよ。その望が在りのままに、在るがままに、自分らしさを貫くなら…カミサマにだってそれを否定出来ないんだってさ」

「……」

「…ノゾム…」

黙り込んでしまった主に気遣わしげな声を掛けたレーメ。

「…『俺は俺自身の壱志［いじ］を貫くだけ』…か。そうか、そういう事だったんだな…」

…その時、唐突に理解した。あの日、剣の世界で問うた言葉に返った『応え』を。

『理由』を『題目』にしてはならない、と。自分自身がそう思った

なら、自分自身の責任で事に当たれと。彼はあの頃から、己が手にしたチカラの意味を悟っていたのだろう、と。

…それは、仕方の無い事だった。何故なら、望は『望んでチカラを手にした』訳では無かったのだ。対して『彼』は『望んでチカラを手にした』のだから、その価値や意義について望よりは深く考えていたというだけの事。

「…ありがとう、二人とも。俺…決めたよ」

上げた顔に、迷いは無い。進むべき道を、その目標を定めた彼にはもう。

「一一俺は…『守りたい』！一緒に生きる皆を…例え傲慢だと罵られても…大事な『家族』を、世界を！それが、俺の偽りの無い気持ち。そして『壱志』なんだ！」

はっきりと、望の瞳の輝きが変わった。胡乱げな薄曇りの穹［そら］の病んだ陽では無く、晴れ渡った晴天の日輪のように。

「勿論、私達も手伝います。私達は『家族』なのですから」

「うんっ！困った時はお互い様だよ！」

…その輝きに、皆は惹き付けられて止まないのだ。外ならぬ『或る少年』もまた、望のそれに惹き付けられる者の一人。

でなければ、あのドライな少年が付き合いなど交わす筈が無い。

「…ところで、ルプトナ。先程の言葉はもしや…」

「あれ、やっぱりカティマも？どうりでなんか腹立つと思った」

「…はは…」

三人は一斉に、その少年の姿を思い浮かべ――苦笑したのだった。

…その頃、空の私室では。

「――ふえッくし！いーッきし！あーッ糞ィ！」

【んひゃ～～っ！？何しはりますのん旦那はん、きったなぁぁっ！】

「あー…ズズッ…湯冷めでもしたか…？早く寝よっと」

【旦那はんん！せめて拭いてからぁぁっ！】

幽月の悲鳴が（空の頭の中に）木霊していた…

…早めに床に就いた為に放送を聞き逃し、ソルに文字通り叩き起こされた空が体育館に着いた時には既に全校集会は始まっていた。

取り急ぎ何も持たず制服で駆け付けた彼は、ソルと共にルプトナの隣に割り込んだ。

「何してたんだよ？もう始まってるってのにさ、弛んでんじゃないの？」

「うっせ…っつーか、待っててくれてもいいだろうに」

そうしてしょうもなさそうに神剣士一同から見遣られたのだった。

「…俺はもうすぐ起こる戦いに勝利して、後顧の憂いを断って堂々と帰りたいんだ。でも、皆がもう帰りたいと言うなら、すぐにこの

世界を発とうと思ってる……皆に決めてもらいたい。戦うのか、帰るのかを」

壇上では、望が全校生徒に向けて演説…というには余りに疎い弁舌を行っていた。生徒達は一様に不安そうな顔をして、ひそひそと隣り合う者同士で言葉を交わしている。

漣［さざなみ］のように伝播したそれが落ち着いた頃、壇上から沙月は問うた。

「さてみんな、決を採るわよ。声だけ聞いてても決まらないからね、戦う事に賛成の人は挙手っ！」

響いた声、それに応えて挙げられた手は一一一つ。

「一つ聞きたいんだけど、答えてもらえるか？俺達には会長やお前みたいな力は無いぞ。それでも、戦いの役に立てるのか？」

しかも、賛成の為ではなく質問の為に挙げられたものだ。

「勿論戦いの前なら避難誘導をしたり、戦いが終わった後なら復旧の手伝いが出来る。小さな事からでも、助けになる事はあるさ。それを皆は、今までの経験から学んでいるじゃないか」

だが、それに望は全く動揺する事無く答えを返す。その真摯な言葉と眼差しに、学生は安堵したような息を漏らした。

「…そっか。なら、俺は戦う事に賛成だ」

それを皮切りに、次々に賛成の声が上がり始める。それは静かな湖

面を揺らす漣に、そして一一まるで波濤のように体育館中…いや、校舎にまで響かんばかりの喝采となった。

「それでは、我々物部学園有志一同は……この世界のみならず、今まで出逢った全ての人を守り、栄光を胸に堂々と帰還する為一一この世界に押し寄せる脅威と戦いましょう!!」

沙月の檄により締め括られた全校集会は…今だ歓声の坩堝。

一一もし、講釈を垂れたのが俺だったなら…こうはいかなかったんだろうな。

ふと、空はそう思う。これは偏に、『世刻望』の人望が有った為の結果だ。その太陽のような、人を引き付けて止まない魅力が。有り得ない事だが、もし、同じ事を自分が言ったとして…誰がそれを受け入れるものだろうか、と。そう自嘲した。

「さてさて…明日から忙しくなりそうだな…ッたく、俺も生徒側に入りてぇ」

「馬鹿言ってやがる。お前がそんなタマかよ」

面倒臭そうに呟いた空、その隣では機嫌良さそうに笑うソル。結団の夜は、そうして更けていく…

その翌日。執務室の窓の外、晴れ空の…そもそも雲の上に在るザルツヴァイに晴天の日以外は無いのだが…道路を歩く望の姿を見ながら、ナーヤは溜息を落とした。

つい先程、望本人から彼等の出した結論を聞かされて。

そして、じとっと睨みつける。ついこの前まではその参戦に反対していたくせに、たった今掌を返した裏切り者を思い浮かべて。サレスが世刻望の参戦に賛成した理由。『チカラの方向性を見出だした彼なら、共に戦う戦力になる』との言葉と共に。

「…全く、ジルオルとは違いすぎるぞ。あやつは……」

その刹那、彼女は…前世に引きずられている自分が馬鹿らしくなった。自分ばかりが過ぎ去った世界の中に取り残されている、と。望だけではない、他の全ての転生体は前世など関係なく今を生きているというのに。

「…何故、わらわを置いていく…どいつもこいつも…わらわばかり、阿呆みたいではないか…」

過去の残照、忘れ得ぬ記憶。今まで支えにして来た『ソレ』に生まれた疑念に独り呟いた……

The Last Name ?・・・"錯綜"

斜陽に染め上げられた物部学園。そこには誰の姿も、何の音も無い。
ただ、死を思わせる静寂の底。

…いや、そもそも『この世界』に『生命』など始めから存在しない。
木も草も文字通りの『造花』、管理し尽くされたキレイなキレイな箱庭。

詐りだけの一一『虚構の庭園』。

突如、廊下に響く下駄の音。カラコロと軽やかな音色を奏で、黒い髪と瞳の女一一幽月は、かつて自身が『ユメ』と称したその世界を闊歩する。
屋上に繋がる扉を開けば一一夕陽の朱。

「…あれまぁ。随分喰い散らかしはってぇ、行儀の悪い…」

一面に打ち撒けられた血の紅に眉を顰め、その視線を『ソレ』に向けた。

「一一クク…木偶人形［ミニオン］や”無銘”の数鍛ち神剣如きを幾ら『喰って』も、この餓えと渇きは癒えやしねぇんだよ…」

そのただ中に佇み無機質な声で呟いた『ソレ』は、『紅い石』を握り締めていた。
いつか『誰かから誰かが貰い、何かの為に遣った』その紅い石を。

「そうそう、旦那はんが『魔弾』の仕組みに気付いたようどすわ」

「ハッ…オレからして見りゃ何をチンタラ悩んでやがったのか謎だな。”不出来な転生体”だぜ」

朱一色の黄昏、その架空の穹［ソラ］に一一真紅の三日月。

「だが…後少し、後少しだ。もうすぐ…『オレ』の”牢”が開く…」

それを掴もうと手を延ばして、紅く膿む夜霧めいた『悪心』を纏う『悪神』は嗤う一一

果てしない闇に包まれたその空間で、男はその存在と対峙していた。

「…では、あの小僧の『永遠神銃』とやらが有れば…」

響く低い声、朱い覆面。隙無く構えた大薙刀【重圧】。その切っ先が一一僅かに震えている。

「ええ…先程伝えた『その言葉』を彼の前で呟く。それだけで貴方の願いは叶いますよ…【重圧】のベルバルザード」

対して、その相手の声は至って高い少女のモノ。姿は一一

「…承知した、貴様の甘言に乗ってやろう。しかし助力は要らん。これは我々、光をもたらすものの戦いだ」

「判っていますよ。主人想いの番犬さん？ふふふ…」

ベルバルザードの眼差しには、確かな『恐怖』がある。この鬼神が、

脅えているのだ。
目の前の、彼の半分ほどの身長しか無い黒髪の娘に。

「…貴様の…目的は何だ？」
「目的？…そうですねぇ…」

小首を傾げ、妖艶とも言える眼差しを投げ掛ける。その時――

「…希望に向かって努力し続ける生命［イノチ］が、その愛らしい努力が。堪らなく好きだというだけですよ…」

微かに、鈴の音が響いた――…

The 50th Name…"Cross Sword"

何も無い、ただ果てしなく青い穹［そら］。雲はまるで海のようにその天空都市の足下を流れる。

その蒼穹に一一『光』が溢れた。それが結集し、『永遠神剣』を携えた『神剣士』達が躰［カタチ］を現す。

「一一さぁ、始めましょうか……旅団の皆さん」

アラビア圏の踊り子のようにエキゾチックな衣裳の、翡翠細工のように美しい女。
その直ぐ脇に控えるは、紅いマントと覆面を纏う鬼神の如き武士。
既に抜刀してある大薙刀【重圧】を構え、四肢にチカラを漲らせている。

その時、女の両腕に嵌められている腕輪…それぞれ大小合わせて三つの輪が連なったそれが涼しげな音を鳴らす。そう、これこそが彼女の永遠神剣第六位【雷火】。

「光をもたらす者、六位【雷火】のエヴォリアの名に於いて命ずる…」

エヴォリアは右腕を衝き出し支えの塔を指差す。発せられた精霊光が空中に複雑な魔法陣を描き一一刹那、その周囲を光が埋めた。

「一一芽吹いた樹の枝葉が枯れ、土へ還り、次なる命を育むように……全てを『光［マナ］』へと…この『時間樹エト＝カ＝リファ』を巡る、大いなる輪廻の流れへと還しなさい…」

無数の光源はやがて一つ一つ確たる躰を取り、都市に向けて降り注ぐ。
一つ一つが彼女らの軍勢としての躰を取り、各々の『永遠神剣』を携える剣の眷属…ミニオンへと。

「「……」」

目配せと同時に、脇に控えていたベルバルザードが滑降していく。
この二人の間に多くの言葉は要らない。
それだけでも、十分に言葉を交わした。例え、これが最期だとしても悔いなど無いだろう。

その雄々しき背を見詰めながら、彼女は呟いた。

「私達が…私達こそが、この世に『光をもたらすもの』…」

まるでそう己に言い聞かせるように、彼女は呟いた――…

支えの塔の執務室に集結していた戦士達。その中で一人、窓から穹［そら］を眺めていた空。身に纏うは漆黒の外套に武術服、そして篭手に脚甲。

「……」

胸元の鍵やお守りといったモノを握り締めた刹那、室内に警報が鳴り響く。当然それは敵襲を知らせるモノだ。一斉に皆の表情が引き

締まる。

「…来たな。我々も行動開始といこうか、諸君」
「飛んで火に入る何とやら…腕が鳴るぜッ！」
「うん、ぶちのめしまくろうっ」
「はぁ…男の馬鹿と女の馬鹿が揃うと暑苦しくなるわね…」

サレスの言葉に続き、ソルやルプトナが気勢を上げる。それをタリアが冷徹に斬って捨てた。

「これくらい意気込みが有った方がいいわよ。あたしも【癒合】も久々に燃えてるわ～」
「巽、パス」
「スルーしてーけどうぃーす……【癒合】はいつでも燃えてるでしょうー」
「やっつけで突っ込むのはやめてちょうだいよ～…」

そこに茶々を入れたヤツィータすらバニッシュしてのけ、後始末を空に託す。話を伺っていたカティマも苦笑している。
どうやら一人たりとも気負っている者は居ないらしい。

「…蕃神。貴様はわらわ、サレスと行動を共にして貰う。永遠神銃【無銘】とやらのチカラを把握しておきたいのでな」

…訂正。この少女だけは、ピリピリと気を張り続けている。ただ一人に向けて。

「…了解しました。俺も友軍誤射［フレンドリーファイア］で戦死なんて嫌ですからね、指示に従いますよ、大統領」

厭味を返せば、ナーヤは睨みを利かせる。肩を竦めて見せ、彼は苦笑した。

――まぁ仕方ないか。手間は増えるが、背中にも気を付ければいいだけだ。つーか俺、中々上手い事言った。

室内は軽い緊張に包まれている。しかし、誰一人として臆してはいない。望も希美も沙月もカティマも、勿論クリスト達も。

「…我々の目標はただ一つ、この『ザルツヴァイ』の絶対防衛だ。全霊を賭して…守り抜くぞ」

「「《《――応っ！！！！」」》》

旅団長の檄に、一同は声を揃えて応えた。

出発地点ミスルテ・プラントからエナジージャンプクライアントを抜けた――刹那、眼前に走る一条の銀閃。

「――チッ！！」

それを屈伸で間一髪で避け――前方に跳び出しながら、擦れ違い様に透徹城から【夜燭】を掴み出し、その勢いのままで刷り上げるように振り抜いた。

ゴキリと骨を砕く厭な感触、物打ちから切っ先までを遣って魚のように捌かれた青ミニオンが消滅していく。

「待ち伏せかよ、危ねェな！」

既に転送されていた他の数人は交戦状態に入っている。というか、敵味方入り乱れた混戦状態だ。

――敵さん、上手くエナジージャンプシステムを罠に使ってやがる。防御重視の都市設計が裏目に出たな…先に制圧された地点を取り戻す戦いは厳しいモンが有る…

「ッとォ！？！」

場も弁えず思案に暮れようとした空に、緑ミニオンが踊り掛かった。薙ぎ払う槍の一撃に、【夜燭】を構えて受け止めようとしたが、槍撃は強力な風の障壁に受け止められた。

「煉獄のマナよ、渦巻く炎となり敵を討ち払え…」

「――ッ！」

詠唱にすかさず跳ね退き、距離を取る。それとほとんど同時に。

「――『インフェルノ』っ！！」

そこに一一間を置かず『地獄』が現出した。その有様は正しく煉獄。繰り返し繰り返し、遍く罪業を焼き尽くす『浄罪界の炎』がミニオンを焦がす。

――うわ、エゲツねェなぁ。骨も遺らねェぜアレ…。

悲鳴すらも焼き尽くして逆巻く炎自身すら燃え尽きた焼け跡には、最早影も形も遺っていない。

「…あまり手間を掛けさせないで欲しいものだがな、巽空君」
「助けてくれとも言ってませんけどね。助けられたのは事実、取り敢えず有難うございます」
「そうか。では次からは放っておくとしようか、ナーヤ」
「……」

背後から掛かった厭味な声に、振り向かずに厭味を返す。そんな少年と、その少年を睨む少女に肩を竦めたサレス。

――ッつーかマジでこンのネコ娘、尻尾握り締めて泣かしたろか…その前に点火［イグニッション］は免れねェけどな！

そうこうしている内に片が付いたらしく、神剣士達が集結する。皆怪我の類は無い。

「…さて、ヴァリアスハリオを落とされる訳にはいかない。急ぎリゼリア・プラントの敵布陣を突破、セレスタイン・プラントまで奴らを押し返すぞ」

短くブリーフィングを済ませ、サレスは先陣を斬る。知らずその背に頼りたくなるのは、彼のカリスマ故か。
タリアなどはまるで忠犬のようにそれに付き従っており、ソルは大層不機嫌そうにその後を歩いている。

そして呆気なくリゼリア・プラントを奪還、続くセレスタイン・プラント突入に至っては待ち伏せすら無かった。

「望…妙に散発的だと思わないか。正直、敵の数はもっと多いかと思ってたんだが」

「む、お前もか天パ。吾もどうにも釈然としないのだ」
「足場が悪いせいじゃないか？ここは大丈夫だけど、さっきはこう、どうも勝手が違ったんだ」
「そうなのか？俺はいつもと変わらなかったけど」

セレスタイン中央島に布陣していたミニオンがマナに返ると、残っていたミニオン達はあっさりと撤退していった。一行はそのあまりの呆気なさに拍子抜けしたのか、各々言葉を交わしている。

「通路に対マナ存在用の攻勢防壁を仕掛けてあるのじゃ。とはいっても、即死クラスの物では無い…精々が体力を削る程度だがの」
「空…今お前が無性に羨ましい」
「俺はいつもお前らが羨ましいからドッコイだ」
「おぬしら、詰まらん会話はここまでじゃ。引き揚げるぞ」

セレスタインの中央島から引き揚げ、一旦ミレステ・プラントに戻る為にエナジージャンプを潜るべく歩を進める。

――何だ、この感じ…？胸騒ぎがする…

何の気無しに【無銘】を額に当てて周囲を探ってみるが、やはり気配は感じられなかった。

「巽、どうしました？敵ですか？」
「あ、いえ…敵がいないか探ってみたんですけどね、居ませんでした」
「空の探知で見付からないなら居ないんだろ」
「…では、皆と合流しようぞ」

気を取り直して見れば、残っているのは空と望とカティマ、ナーヤ

の四人のみ。

「へいへい――…ッ！？」

そうして並んでエナジージャンプクライアントに歩み入ろうとした――刹那、烈しい殺気が大気を圧した。

『⊢ ┤ ┐ ┌ ┴ ┼ ┴ ┴ ！！』

見上げる事も無く、四人は跳び下がる。後一歩でも先に踏み出していたなら、間違いなく『ソレ』に施設ごと踏み砕かれていただろう。

「――少しは躯を鍛えたようだな、龍装兵［ストレレッツ］……？」

クライアントを踏み砕き、更には獄炎のブレスにより焼き払って完全に破壊し、咆哮を上げた暴君ガリオパルサ。

「……試してみるか、【重圧】のベルバルザードッ！！」

そして――その前に仁王立ちして大薙刀【重圧】を構え、背後に控える『暴君』すらも霞む程に濃密な闘気と殺気を向ける『鬼神』…光をもたらす者ベルバルザード。

「…成る程。どうやら完全に罠に掛かってしまったようですね。目的は戦力の分断による各個撃破、或いは――ナーヤ殿ですか？」

「如何にも。その小娘さえ始末してしまえば、我々の計画は誰にも止められぬ…」

「何だって！？…まさか、もうヴァリアスハリオに！」

「加えて言うなら、既にヴァリアスハリオへの転送鍵もこちらの手中。頼みの『仲間』は大きく回り込まねば辿り着く事も出来ん…」

「なんじゃと…一体どうやってそこまで鮮やかに…！」

背後からは無数のミニオンが押し寄せ、彼等をぐるりと取り囲む。
恐らくはリゼリア・プラント側の反対に位置するエファリア・プラント側に温存してあった軍勢だろう。

「ふん、間抜けな『家族』を持つと苦労が多いな」
「兄上…？！兄上に何をした！」

青褪め、悔しそうに歯噛みするナーヤ。そんな彼女に嘲笑とも哀れみとも取れる視線を向けたベルバルザード。

「…諦めろ。せめて苦しまぬように引導を渡してやる――」
「――有難てぇ話だ……こんなにも早く借りを返すチャンスが来やがった！！」

ベルバルザードの言葉を掻き消すほどの声と共にナーヤの左前に進み出た空。
片手で外套を勢いよく外すと透徹城に仕舞い、そのまま引き出した【夜燭】を構える。低く腰を落し、右足を踏み出して左後方に刀身を流した独特な構え。

「おぬし――」
「ナーヤ殿、気をしっかりと。我々は生き延びねばならないのです…この世界を守る為に！」

それに対してカティマは彼女の右前を護る。上段で構えた【心神】を横に倒して衝き出す、彼女の基本の構え『天破の型』。

「姫さんの言う通りですよ、ネコさん。第一アンタ、敵から情報貰

ってソレを鵜呑みにしてどうすんですかい」
「ぬっ…わ、判っておるわ無礼者っ！今直ぐにその減らず口を閉じぬと、貴様も灰にするぞ！」

皮肉げに告げた空に噛み付くナーヤ、先程までの焦燥は無くなっている。【無垢】を振り、くるりと回して構えをとった。

「いくぞ、三人とも…何としても護り抜く！世界も、家族も！！」
「「「一一応っ！！！」」」

最後に、ナーヤの後方で【黎明】を携える望の精霊光［オーラフォトン］が煌めく。鼓舞のオーラ『インスパイア』が。

圧倒的寡兵、数の暴力に曝される四人。しかし、誰の目にも諦めは無い。

「刃向かうのなら、何であろうと叩き潰すのみ…」

その兵［つわもの］達に一種の敬意すら抱き、ベルバルザードはチカラを解放する。周囲を埋める【重圧】の、紅き精霊光の煌めき。

「我こそは光をもたらすものが将、六位【重圧】のベルバルザード…いざ、尋常に一一…参るッ！！」

一気に高まった彼のチカラに空間が軋み、『光』が溢れた一一

初撃は青の西洋剣。力任せに振り下ろされた一撃、氷点下の凍気を纏う一撃が齎す残滓はそれだけで彼の肌を斬るよう。

「一一くッ……そだらァァッ！」

【夜燭】で受け止め、辛うじて押し返す。だが、続く斬り払いと斬り上げにより遂に【夜燭】を打ち上げられてしまい、完全な無防備を晒す。しかし神格の差故か、無傷の【夜燭】に対してミニオンの神剣には輝［ヒビ］が走っていた。

攻撃を終えて跳ね退いた青は群に紛れ、判別がつかなくなる。先程から連続で一撃離脱戦法を繰り返されており、彼等はことごとく主導権を握られ続けている。

今度襲い来るミニオンは赤と緑、赤熱した双刃剣と帯電した槍。

「第三期改良版［サードモデル］…往くぞ【比翼】、【連理】！！」

対応して、高く宙を舞う【夜燭】に代わり空は腰の弐挺を番える。利き手の左には紅金の【比翼】、右手には蒼金の【連理】を。

先ず引かれた引鉄［トリガー］は、右。蒼の贋物銃から放たれた二発の弾丸は一一高密度の水塊。

高い表面張力により大量の水を圧縮した砲弾に撃たれ、神剣を包んでいた炎ごと赤ミニオンが粉砕された。

「雷光の一撃…当たって」

そんな事になど一切構わず、緑ミニオンは空に肉薄する。最早、彼女の神剣を振るう最適距離には後一歩ーー！

「ーーっあ…」

その視線の先に、紅い銃口。射線から逃れようと踏み込むよりも速く引かれた引鉄が映ったーー瞬間、二条の紅い閃光が疾る。

展開された空気の障壁『アキュレイトブロック』では焔の弾頭を受け止められず、二本の熱閃は彼女をも易々と焼き貫いた。

同胞の消滅に気付き、更に数体のミニオンが彼に殺到する。黒青赤緑の四体が四方を囲み、一斉に彼を狙う。

「次ーー【天涯】、【地角】！！」

僅かな暇に、拳銃を持ち替える。銃剣の替わりに制動機［コンペンセイター］を取り付けた拳銃…左を暗紫金の【地角】、右を純白金の【天涯】へと。

今度は弐挺を纏めて、それぞれ別の対象に向けて同期しながら連射する。

右は光、対象の分子結合を崩壊させる光子砲。左は闇、対象を特異点へと換えて崩壊させる重力砲。

直接攻撃を掛けようとした青は光に、緑は闇に。神剣魔法の詠唱を行っていた赤は闇に、黒は光に撃たれて。それでも銃撃は終わらず、絶え間無く閃光と暗闇を入り混じらせて、繰り返し撃ち貫く。

相反する性質を持つ光と闇の砲弾合計十六発に防御を掻い潜られ、

四体は完膚無きまでに撃ちのめされて消滅した。

「ラスト、【海内】！」

そして彼の眼前に立っていた白ミニオンに、空は右手に番えた翡翠金の【海内】を突き付けて引鉄を引いた。

「防御す――…」

すかさず展開された精霊光の防盾『オーラフォトンバリア』。強固なその盾の中心に、強い風圧で音速以上に加速されたマナ結晶の貫徹弾頭は――苦も無くミニオンと神剣ごと、真円の大穴を穿ち砕いた。

「敵性殲滅…」

その時、背後から飛び掛かった青ミニオン。その蒼く煌めく神剣には――輝が在る。

一番最初に彼に剣戟を見舞ったあのミニオンだった。

「薄氷の如く、散れ――」

「――テメェがなァァッ！！」

振り下ろされる『ヘヴンズスウォード』。それと同時に、落下してきた【夜燭】の柄を掴んだ空は反転しながらの斬戟を繰り出す。

蒼い凍雷を纏った、『電光の剣』［エレクトロンブレード］を。

カウンターの一撃に対応出来なかったミニオンが、青いマナへと還っていく。それを取り込んだか、【夜燭】の黒刃は冷たい炎のように煌めいて見えた。

――よし、予定以上だこの野郎！苦労した甲斐が有ったぜ…つっても、気付いていなかっただけで既に”鍵”は持っていたんだけどな。

（本当にお前が居て良かったぜ…レストアス！！）

そう、火薬として装薬されたのはレストアスの一部。雷のエレメンタルであるレストアスを炸薬としたのだ。

その結果――こうして【無銘】とは違うが、確かに神威が発現したのである。

【あっれー、旦那はん？そもそもその贋物を創ったったわっちには礼ありんせんのぉどすかぁ？】

（ども）

【二文字で表現された？！】

心を経由しての会話の最中、身を震わす悪寒。すかさず【夜燭】を構えれば。

「我が力…侮るな――ヌゥん！！」

目の前に着地したベルバルザード、朱黒いマナを纏う薙刀の一撃が振り下ろされる。その一撃はミニオンなどの比ではない、空には…ただのニンゲンと変わらぬ肉体しか持たない彼には、どう足掻いても受け切れるモノではない。

――ギィィィン！！！

凄まじい金斬り音、そしてそれを受け止めた大刀は――

「――っやるな…でも、耐えられない程じゃない！」

…【黎明】だ。弐刀を一つに纏めた状態の、望の永遠神剣。

「ほぅ、出来るな小僧…流石は破壊神の転生体と言ったところか」

「それがどうした…間違えるな、此処でお前が戦っているのは――世刻望だッ！」

ベルバルザードの感嘆も納得出来よう、華奢とも言えるその体躯の何処に彼の鬼神と鍔競り合う膂力が有ると思えようか。

すうっと息を吸った、その次の瞬間。彼は空に視線を向けた。

『此処は任せて、お前はナーヤを護ってくれ』と。

「合わせろ、レーメ――よし、これでッ！」

【いっけーーっ！！】

「受けて立つ！来い！」

昼と夜、反発するチカラを纏った【黎明】が力尽くで斬り上げられた。

【重圧】を跳ね上げた望は、その場で一回転し路面を割り砕きつつ『オーラフォトンブレード』を繰り出す。

その一撃を受け、ベルバルザードは堪らず跳びすさる。それを追って望が駆け出した。

迷い無く振るわれる剣の一閃一閃が、凄まじい威力を持っている。

神世に『破壊神』と呼ばれた、その再現のように。

――凄げぇ…あのベルバルザードと互角かよ…

神格の差は、確かに有る。第五位の【黎明】は第六位【重圧】よりも強力な力を持つ。たった一階位の差だが、神剣の位の差とは覆すことの出来ない絶望の開きだ。

しかし、それを凌駕するのが『持ち主』の差である。片やただの学生だった少年、片や幾つもの分枝世界を亡ぼしてきた殺戮者。そこには神格の差以上の絶望が在ろう。

そして――それすら凌駕してのけるモノこそが『覚悟』の差だ。もし望が、この戦い以前のままにベルバルザードに挑んでいれば、文字通り手も足も出なかった事だろう。

だが、今の彼には確たる意志が有る。『全てを護り抜く』という覚悟が。

――野郎、負けて堪るかよ！こちとらにだって、壱志も気概も有らァ！！

ならば――この少年もまた立つ。そもそも本質として負けず嫌い。それになにより、彼はその少年にだけは負けたくないと突っ走って来たのだから――迷うはずが無いだろう。

再度現れたミニオンに、迷わず後退する。着地した背後にはナーヤ、そして彼女を挟んでカティマの姿が在る。

「無事でしたか、巽」

「何とか。そちらも無事なようで何よりです」

等と、肩で息をしながら言葉を交わす。幾らカティマが守勢に優れた騎士であろうと限度というモノが有る。

と、三体のミニオンが翔けた。青緑黒の内、カティマを狙う納刀した構えのまま振るわれるべき黒の剣戟は――『月輪の太刀』。

「退きなさい…退かぬなら――…薙ぎ払います！！」

振るわれた横一閃の『星火燎原の太刀』。飛び掛かってきた黒のミニオンをカウンターで神剣ごと断ち切るも、続く青に肉薄され――

「しまっ――」

『威霊の錬成具』にて守られたカティマの守りを巻き込みで躱し、青と緑は後方にて神剣魔法の詠唱を行っていたナーヤに肉薄し――

「――やらせる訳…ねェだろうがよッ！」

【夜燭】にて、阻まれた。レストアスを刀身に纏わせ、氷と換えた『フローズンアーマー』。斬り結んだ刃を払い、回転させて敵の攻勢を挫きながら。

「一点を――貫く！！」

逆手に番えて背中に回した【夜燭】の剣先、深く湾曲したその部位をまるでメリケンサックのように使い――

「――『崩山槍拳』！！」

「ガハッ！？…ここまで…」

水月に叩き込まれた掌底にて絶命した青ミニオンがマナに還って逝く。

「紅蓮のマナよ、雷の如く敵を討て――『ライトニングファイア』っ！！」

そして最後の緑ミニオンもまた、炎の槍にて穿たれ消えた。

「くっ…じり貧か。このままではいずれ数に圧されて――…」

もう既に八小隊分はミニオンを屠ったというのに、部隊が壊滅する度に奥のクライアントから無傷の部隊が次々と補充されるのだから始末が悪い。

「――っ…！」

瞬間、ナーヤの記憶が甦る。彼の『悪神』との最期の記憶が。その時も、やはり数に圧されたのだ。

「…巽、ナーヤ殿。こうなれば奥の手を使います。しかしながら、この技は味方にも害が及ぶ両刃の剣…」

カティマの声に気を取り直したナーヤの目に映る、周囲を囲む神剣の槍襖。

「…アレですか、了解。考えは有りますから――構わずにどうぞ」

「ふふ、そうですか。そう言えば覚えていますか、巽？貴方と始めて轡を並べた戦いも…こうして無勢でしたね」

「はは、言われてみれば」

それはたったの数ヶ月前。しかし、密度の高いこの数ヶ月ではもう数年前と言われても気付かない位に遥かな過去に思える戦いだった。

「一一来ます!!」

掛かった声、その数瞬早くミニオンがチカラを篭めた事が解る。

「気圧されはしません…はっ!!」

と、【心神】が路面に突き立てられた。高速振動を始めた【心神】、そこから黒マナを帯びた激震が周囲のミニオンを討つべく拡散する。多対一の戦いに於いて活路を見出だす為の技『紫晶國裂斬』。

当然それは地に在る全てを飲み込む。故に、空やナーヤとて例外では無い。それどころか、先ずそれに飲み込まれるのがその二人一一

「一一しっかり掴まっててくださいよ、ネコさん!」

「はぁ?貴様、何を言っておるの一一にゃあ?!」

その波動に飲み込まれる刹那、空はナーヤを抱き寄せて一一レストアスを纏い、路面を踏み砕く程の威力で『跳んだ』。

「〜〜〜ッは…ハハハッ!!もう破れかぶれだぜ畜生がァッ!!!」

「こ、このっ!離せ馬鹿者っ!!」

穹[そら]高く舞い上がった、少年と少女。掛かった慣性に歓声を返し空は、ナーヤを落とさないように更に強く抱き締めた。

【下弦】に包まれているからこそ耐えられる、レストアスのプラズマによる爆発を加速として利用する移動手段。自らを魔弾の弾頭に見立てた技だ…とは言っても、これもまた沙月の『エアリアルアサルト』の模倣だが。

「何してんだネコさん、早く神剣魔法をカマしてくれ！姫さんを見殺しにする訳にはいかねェ！」

空は右手に【夜燭】を持ち、ナーヤを小脇に抱く恰好のままで左手で【無銘】を抜く。

装填されている弾丸は銀。銃口に顕れた魔法陣からもまた、空間を軋ませる同色の風が迸しった。

「くっ…解っておると…言っておろうがぁぁぁっ！！」

そしてその苛々が限界に達したのか、ナーヤは大声で叫んだ後に空中で魔法陣を展開した。

背後に現れた真紅の機械巨兵『クロウランス』の肩に配置された砲に赤マナが溢れ、無数の榴弾と化して広範囲に降り注ぐ。

「ーーー『オーラフォトンブラスター』ァァッ！！」

「ーーー『フレイムシャワー』！！」

地を揺るがす黒い烈震、吹き荒れる銀の暴風、硫黄と焔の雨。さながら天変地異の様相を呈したセレスタイン・プラント、墜落しなかったのが奇跡だろう。

全てが止んだ後、そこに立っていたのはただ一人。

「…全く…少しは私の事も危惧して欲しいものです」

風の中心、僅かな無風の領域に立っていたカティマのみだった。

「っし！一掃ォ！！」

グッとガッツポーズを決めた空。そんな彼に向けて、ナーヤは問う。

「…何故じゃ…おぬしは何故わらわを護ったのじゃ。別に放っておいても問題は無かったであろう」

言われてみればそうだ。ナーヤは神剣士、空のように巻き込まれたからと言って即死するような脆弱な存在ではない。
そんな事は、今まで神剣士と戦い続けてきた空本人がよく知っているはずだ。なのに何故だ、と。

「言ったでしょう、『借りは必ず返す』ッてね。言った事は守る主義だとも伝えたでしょうに」

それに何一つ思案すらせず明快に、『莫迦言ってんじゃないですよ』とばかりに彼は答えた。

「…それだけ、か？」

「ええ、それだけですよ。つーか、それ以外に何があるッてんですかい？」

魔弾の反動で頭を下にした状態で、空はやれやれと左掌を地に向けた。そんな彼にナーヤは真意を探るような眼差しを向けたが。

「…馬鹿じゃな、こやつは。ただの馬鹿じゃ…」

ポツリと、そう呟く。

「はい？何ですか」

「何でもないわ、それより――」

そして最後に――ジト目を向けた。

「…それより、どうやって着地するつもりじゃ？まさかとは思うがノープランでは有るまいな」
「ああ、それなんですけど――」
と、【夜燭】を左手に持ち替えた空はやおらその頚根っこを掴まえ――ポイッとばかりにナーヤを後方に放り投げた。
「着地はご自分でお願いします、俺まだやる事有るんで！！」
「…お…覚えておれぇぇぇっ！」
落下しながら――空はその二人を見据える。斬り結ぶ望とベルバルザードを。
――さあ、腹括れ巽空…！機会はこの一瞬のみ、またミニオンが溢れたらもうベルバルザードを討つのは…不可能！！
鍔競り合っていた弐本が弾き合い、距離を取る。そして間を置かず――『オーラフォトンブレード』と『バッシュダウン』が斬り結び直した。
「…しまった！？」
そこでベルバルザードの技巧が真価を発揮する。力の方向が変わり、望は隙を作ってしまった。
「――喰らえェェェい！！」
その隙に向けてベルバルザードは拳を繰り出した。強烈な衝撃波を直接叩き込まれた望の体が宙を舞う。

「くはっ…レーメ！！」
【おうっ！いつでもいけるぞ、ノゾム！】
その体勢のままで、右腕の篭手に嵌められた宝玉が煌めく。
追撃を掛ける為に【重圧】を構え直したベルバルザード。その眼前に、練り上げられた炸裂のマナが溢れた。
「【喰らえ――『ライトバースト』っ！！」】
「グヌゥゥッ！！？」
強烈な閃光に視界と身を焼かれ、さしもの鬼も呻きをあげる。その閃光を切り裂いて。
「――ベルバルザードォォッ！！」
遥か上空から降る声、見上げれば――重力加速度を得て、【夜燭】の湾曲に足を掛けての蹴りが。
レストアスの加護により氷を纏ったそれは、紛れも無い『クラウドトランスフィクサー』。
「フンッ！！」
それを視力を失いつつもあっさりと【重圧】にて受け止めた。だが――空は更に、それを足場に高く跳んだ。先程よりも更に高く、高く。
「征くぞレストアス――加減は無しだ、最大出力！！」
【了解、オーナー！！…斬り割いてご覧にいれます、我等の障害となる――全てを！！】

そして、大上段に構えた【夜燭】に加護を棄ててレストアスを沿わせる。
密度の高まりに、本来は青いその雷が漆黒に染まる。その剣の名は、かつて――…

「【南天の禍つ刃よ――打ち砕けェェッ!!」】

かつて『南天の剣神』と呼ばれた神と、その転生体が振るった剣戟――!!

「――我が【重圧】を…踏み台にしただと!!」

一方、屈辱に打ち震えるベルバルザードの怒りに呼応してガリオパルサが召喚された。

【重圧】の象徴である彼もまた、顔を踏まれた事と同義。暴君の眼は憤怒一色に塗り潰されている。その巨大な顎［アギト］を開き、躯す事の出来ない空に向かいブレスを吐くべく構える。

その顔面に――

「クロウランスの勇姿…その目に焼き付けるがよい!!」

クロウランスの拳が減り込んだ。暴発した『ハイドラ』が、すんでのところで空を逸れて行く。
その煌々たる炎に照らされてなお、【夜燭】の燭［ともしび］は昏く冷たい。

「剣神の一撃…黄泉路の手土産となさい――一刀両断!!」

一瞬の隙に、カティマがベルバルザードの懐に潜り込んだ。
後に流すように構えた【心神】に黒いオーラが纏わり付くそれはやはり、かつて『北天の剣神』と呼ばれた神の振るった剣戟――！！

「――『南天星の剣』！！」
「――『北天星の太刀』！！」

…天頂より降り堕つ南天の極星、天底より翔け昇る北天の極星。
示し合わせたように交差した弐天の剣神の剣戟、それに――

「ガハッ！？…ここで…斃れる訳には…グウゥッ…！」

それに、主の手を離れた【重圧】が、セレスタイン・プラントの路面に突き立った。

跳び下がり膝を突いたベルバルザード。右腕はへし折れたのか力無く垂れ下がり、胸には浅いが…確かに二ツの刀創を負っている。

「…此処までだ、【重圧】のベルバルザード。降伏しろ」

その鬼神の前で庇い合うように各々の神剣を構えた望とカティマ、空。

「最早、神世での因縁など意味はないか…はは、漸く理解できたぞ…ヒメオラ」

北天の【黎明】と【心神】、南天の【無垢】と【夜燭】。本来並び立つ筈の無いその神剣の揃い踏みに、ポツリと呟いたナーヤ。その

瞳は――

「…おぬしがあの記憶を伝えたのは憎しみを募らせる為ではなく…哀しみを繰り返すなという戒めの為であったのだな…」

何かを吹っ切ったように、清々しいモノだった――…

The 51th Name…"白の雷光"

「…ッ…まさか…これ程とは…」

片膝を衝き、ベルバルザードは荒い息の合間に呻きを漏らす。
視線の先には両手で【黎明】を構える望、天破の型で【心神】を構えるカティマ、今度はダラバと同じく【夜燭】を僅かに左に傾斜させた青眼の構えをとる空。

…侮っていた訳ではない。神剣士の外見と実力は比例しないのだから、慢心は無かった。今回の闘いでも実力を鑑みて戦力を整え、『勝てる戦力』と『勝てる作戦』にて挑んだのだ。しかし結果は――

「もう一度言う、降伏しろ」

大剣状態の【黎明】を衝き付けたまま、望は再度声を上げる。それに【心神】や【夜燭】にも力が篭め直された。

「フ…『予定』以上だが貴様ら…忘れた訳では有るまいな、この闘いの本質を！」

それに全く動じず、鬼神は――四人の後方に目を移した。そこに在るのは、エナジージャンプクライアント。

「ッ…！」

そこが――起動した。同時に空は、現れるだろうミニオンに先手を打ち【比翼】の引鉄を引く――

「――どわぁぁっ!?あぶねッ!!何しやがんだ空!」
「っあ、悪りィソル」
「軽っ!?ったく、苦労してミニオンどもを蹴散らしてきたってのに…もうケリ付いてんじゃねぇか」
その一閃を避けたソル。その後ろからルプトナ、沙月と希美、タリアとヤツィータ、そしてサレスが次々に現れた。
「間に合ったようだな。さて、どうするベルバルザード?こちらは既に転送鍵も奪還しているぞ」
形勢が完全に旅団側に傾いた事を悟り、ベルバルザードは近くに衝き刺さっていた【重圧】を支えに立ち上がり、その姿を揺らがす。
「忘れるな、この闘いは――まだ続いているのだからな」
転送されていったベルバルザードの残した言葉に、一同は表情を引き締めた。いくら『旅団』が敵兵を殲滅しようが、敵将を退けようが、この世界が崩壊すれば彼等『光をもたらすもの』の勝ちとなるのだから。
「…各プラントにはクリスト達が詰めている。簡単には抜かれまい、我々は我々の役目を果たすぞ」
不気味な静寂を保つ支えの塔ヴァリアスハリオ、そこに向けて彼等はエナジージャンプクライアントを潜る――

塔に入るや飛び掛かってきたミニオンを蹴り飛ばしたルプトナ。だが一体ではない、次から次に溢れて来る。

「うーっ、キリが無いよ」

「ベルバルザードの野郎、余裕の正体はコレかッ！！」

最前列で闘うソルとルプトナ。その少し後方にはタリアと沙月が続き左右を守る。

「ホント、面倒よね。クー君の感知で何体居るか、判らない？」

「俺達の世界の言葉では、『一匹見たら四十匹』が基本で」

「お前達、口ばかりではなく手も動かしてくれないか」

サレスとヤツィータ、空は遠距離重視で少し後方に位置し、前衛が討ち漏らした敵の接近を阻む。望と希美、カティマはナーヤを守備するように傘型の突撃陣型中心に収まっている。

「一一見えた、管制室じゃ！」

声と共に視界に飛び込んできた大きな扉。しかしそこに辿り着くまでの道程は険しい。

「…コレを突破するの？気が遠くなるわね」

「でも、やらないと！」

【光輝】を右手に剣、左手に盾として展開している沙月のボヤキももっともだ、相当数のミニオンが道を埋めている。それに希美は己を鼓舞するように答え、【清浄】を構え直す。

「んじゃ行くぞソル、ルプトナ！一番槍は貰ったッ！！」

「んだあの野郎、マジで鉄砲玉に成っちまいやがった」
「今更じゃんさ、そんなの！」
「それもそうだな――行くぜ！」

呼び掛けた二人が駆け出すより先に、空は駆け出した。脆弱なその身を省みる事も無く、ただ、それが己の成すべき事だと言わんばかりに。

初撃は【無銘】。銃口に展開された魔法陣は深紅、撃ち出されるは赫龍の息吹『ドラグーンブレイザー』。…灼熱凍気真空閃光暗闇。暴風に烈風。【無銘】の魔弾は目に見えない、見えたとしても手遅れなモノばかりだ。そういう意味では、回避や割り込みを許すレストアス入りの魔弾はやはり不完全と言える。

ミニオンが焼き尽くされ消滅した、僅かに開いた隙間をえぐり込み更に【比翼】と【連理】、【天涯】と【地角】に【海内】を撃ち尽くして陣を完全に乱した空。
ルプトナは集団の隙間を縫うように滑り、衝き出される神剣を跳ね『クラウドトランスフィクサー』、或いは伏せて『グラシアルジョルト』と変則的な動きで翻弄しつつ【揺籃】で遊撃する。
そこにソルが『崩山槍拳』にて殴り込み、【荒神】の突出した打撃力で陣形の軽傷を致命傷とした。

その一連の隙にマガジンを交換し終えた空が、ソルやルプトナの死角を守る。そんな空の死角をどちらかがカバーし、最後の一人は更にそのカバー。それを空がカバーする事で始まりに戻る。
弾数という制約こそ有るが、一応は完成された無限円環［ループ］の戦術。

「「「まだまだァっ！！！」」」

襲い来る敵に合わせてくるくると立ち位置を替え、時に引き合い押し合い仲間の背中の上を転がったりしながら。同時に二方向へと対応できる武器を持つ三人故の、一糸乱れぬ連携連鎖。
これを一一”打ち合わせ無し”で、やってのけているのだ。

「あの三人にばかり良い格好はさせてらんないわね…オッケー、行くわよ希美ちゃん！光の輝きよ、槍となって敵を…！」
「はい！ものべー、力を貸して！」

瞬間に【光輝】が光へと還り短剣のような形で沙月の両手…その指の間に複数握られ、地面と水平に構えられた【清浄】の穂先が二ツに分離し一一その間の発射孔にマナの煌めきが充ち、電流を帯びる。

「「貫け！！」」

それを確認し、敵陣に飛び込んでいた三人組が一斉に離脱した。

「一一『ヘヴンズジャベリナー』っ！！」
「一一『ペネトレート』っ！」

投擲された複数の光槍による射撃と撃ち出された単発のマナ塊による光線は、その射線上に居たミニオン達を巻き込んで消滅させる。

そうして一一『道』が拓かれた。

「さぁ行ってください望、ナーヤ殿！」
「後は任せたわよ、世刻！」
「判った、行こうナーヤ！」
「おう！任せるのじゃ」

カティマとタリアの助けにより突破した望とナーヤが扉を開き、管制室に消える。ミニオンが侵入出来ないように扉が閉じられた。

「…さて、それでは我々は時間が来るまで歓迎会の続きだな」
「歓迎した覚えもされた覚えも無いけどね～…ああもう、軽くイラッときたわ」

心底面倒そうに口を開いたサレスとヤツィータ。【慧眼】からは異界の風が噴き出し、【癒合】からは勢いを増して燃え盛る焔が迸しる…いや、何を隠そうこの焔こそが【癒合】の本体だ。

「――『ページ：ハリケーン』」
「――『フレアカラドリウス』っ！」

【慧眼】より戒めを解かれた風は竜巻と化して地を疾り、【癒合】は穹を飛ぶ猛禽の形を取ってミニオンに襲い掛かる――!!

…いつから、そうしていたのだろうか。

目の前には荘厳とも言える光の乱流。部屋を覆い尽くす機械また機械、それははまるで鉄の檻。

…だとすれば彼女は籠に入れられた、カワイソウな翡翠色の金糸雀［カナリア］か――

「……」

そんな鉄の檻を鍵盤を叩くように操作していた彼女だったが、近付く足音に溜息を漏らす。
そして、全ての作業を終えて振り向いた――

「…というか、なんでおぬしまでおるのじゃ」

自動扉を抜け、閉めた後で。ナーヤは心の底から迷惑そうに口を開いた。

「いやぁ、どうせこの奥に居るのは一人だと判ってましたから。挨拶しとかないと、と思いましてね。顔見知りとしては」

言いつつ、装填を終えた【無銘】をホルスターに戻す空。因みに色は金。

「…そうか…じゃあ、あそこに居るのは…」
「…ああ」

三人の目線の先、そこに立っていたのは――

「あら、皆様お揃いで如何なさいました？」

翠の髪の侍女――フィロメーラ。

「お久しぶりです。剣の世界以来ですね」

だが、空はそんな彼女に全く動揺すら見せずに言い募る。
掛けられた言葉に、彼女はニコリと微笑んだ。しかしそれは、本来の清楚な彼女からは程遠い程に妖艶。

「――光をもたらすもののリーダー…【雷火】のエヴォリアさん」
「…ふふ、やっぱり貴方が一番厄介ね…【無銘】のタツミ＝アキ」

すっと手が振られる。それを合図にフィロメーラの姿は踊り娘のような装束を身に纏う女…則ち――その神剣士へと移ろう。

「フィロメーラさんをどうした、エヴォリア！！」
「心配は要らないわ。私、あんまり部外者を巻き込むやり方は好きじゃないの。スマートじゃないでしょ？」
「そこまで巻き込んでおきながらどの口がほざくのじゃ貴様っ！」
「あらあら、女の子が牙を剥いたりしちゃ駄目じゃない？その子達に嫌われちゃうわよ」

くすくすと笑いながら、睨みつける二人をあっさりとあしらう。歯牙にも掛けないとはこの事か。

――刹那、塔に激震が走る。瞬時に三人は、張本人に目を向けた。

「塔に流し込んだ破壊の思念が効果を発揮し始めたのよ…つまりは、チェックメイト。今からじゃもうアクセスも出来ない」
「貴様――！！」

再度食ってかかろうとしたナーヤ。その声を、金属を斬る鋭い音が邪魔する。

「ゴチャゴチャ煩せェな。面倒だ、ネコさん連れて別の端末に行け

望」

そこで漸く、エヴォリアは【夜燭】を床に衝き立てた空へと注意を向けた。

「…判った。行こうナーヤ」

「何を言うておるのぞむ！あやつは【雷火】のエヴォリア、光をもたらすもののリーダーじゃ！」

踵を返した望に、ナーヤは心底驚いた。それもその筈、残していく二人の実力差は歴然。

「あの【重圧】のベルバルザードを差し置いてこの女がその座に就いておる理由は単純…こやつが、ベルバルザードよりも優れた神剣士であるからじゃぞ！！」

軍勢が有ったとはいえ、四人を同時に相手したベルバルザードを上回る実力者、それこそがエヴォリア。それへと如何に『無力ではない』とは言えただのニンゲンを当てるなど、正気の沙汰ではない。

「大丈夫だ…空なら」

信頼しきった望の言葉に――空は無言でサムズアップを見せ、そのままシッシッと手を払う。

同じくサムズアップを見せた望はナーヤの手を引き扉へと向かう。

「にしても、ベルバが二度も仕挫［しくじ］るなんて驚きね。剣の世界では可愛らしいヒヨッコだったのに」

「『男子三日会わざれば刮目して待つべし』。三ヶ月も経ちゃあ、ヒヨコも立派にトサカが生えらァ…そして何より、盟友［トモ］が

アンタに怨みが有るらしくてね…さっきからバチバチバチバチ、持ってられやしねぇ」

見れば、【夜燭】は刀身はおろか柄にまで電光を纏っている。一応の所有者である空が痛みを感じる程だ、加減を忘れた出力。

「…死んだ主の仇を討つ為に都落ちって事？あはは、神剣がねぇ」

茶化す言葉に、電光は遂に形を見せる。のたうつ蛇のような蒼い雷の集合体『エレメンタル＝レストアス』が。

「笑えよ。笑えるのは生きてる間だけだ…常世じゃもう笑えねぇ」

…それすら意に介さず、空は柄を握り締めた。細胞の一つ一つにレストアスが染み活性化する。疲労すら忘れ、闘争心が際限無く湧き出る。

「――来いよ、光をもたらすもの…俺の夜闇は深けェぞ」

「――それは楽しみね。だけど、貴方程度でこの【雷火】の灼光に耐えられるかしらね？」

シャリン、と。エヴォリアの【雷火】が鳴る。それに向けて、隙無く空は【夜燭】を構えた――

The 51th Name ?・・・"白の雷光?"

一一肩、腿、頭!!

【夜燭】を肩に担ぎ壁際スレスレを走りながら、飛来する『光』の弾道を完璧に読み回避する。
駆け抜けた光弾はそのまま壁に当たり、明らかに口径を上回る破砕力を示した。

そして、どうしても躱せない一発を黒禍の剣にて迎え打つ一一!!

「ハァァッ!」

聾せんばかりの爆音、盲いんばかりの煌めき。へし折れそうになる腕に鞭打ち振り抜けば、闇色の刃が光の弾を打ち砕いた。

「あら、意外に元気じゃない?如何かしら、私の十八番［おはこ］の味は?」

突き出していた右腕を下げ、悠然と『オーラショット』の構えを解いたエヴォリア。空も立ち止まったままで息を整える。

「中々のお点前で。後は茶請けの羊羹［ヨウカン］でも有れば完璧ですよ」
「それはごめんなさいね、気が利かなくて」

軽口に返るは軽口。パン、とエヴォリアが拍手を打ち鳴らされた。
その背後の空間に、まるで金色の光背のように精霊光［オーラフォトン］の魔法陣が画かれる。

「替わりと言っちゃ何だけど――コレをあげるわね。遠慮しないで貰ってちょうだいな」
「ッく！？」
と同時に、空の眼前に『光』が生まれた。白い、練りに練られた高密度の――炸裂のマナ。
「心行くまで、たんと召し上がれ――『ライトバースト』！！」
『オーラショット』が『点制圧用』ならば、『ライトバースト』は『面制圧用』。先程までとは比べものにならない攻撃範囲を『光』が埋める。
更に言うならエヴォリアは術士型、戦士型である望が使ったモノよりも威力は遥かに上。
「…すばしこいわね、正直驚きだわ。水周りのあの黒い奴みたいよ、貴方」
「否定はしませんけど――…」
呆れたように呟き見上げた先。壁に『着地』している空の姿が在る。壁に【夜燭】を衝き立て、それを取っ掛かりにして。壁に当てていた両足の【下弦】に、力と共にレストアスが篭められた。
「――ねッ！！」
そのまま壁を蹴り砕き、反動を速度に、速度を威力に替えて。
「ハァァッ！！」

全身全霊を持ち、『エレクトロンブレード』を叩き込む。

――ギィィィン！！

「チィッ！！」

「あはっ、これっぽっちのチカラしか無いの？憐れよね…ニンゲンって！」

それを実に造作も無く、展開された『オーラフォトンバリア』にて無力化された。その強度と正確さはミニオンなどの比ではない、鉄壁の一言に尽きる。

「…ッ…」

瞬間、ビキリと肘や肩が痛んだ。それもその筈、ベルバルザードとの闘いで遣った『南天星の剣』の反動は全て腕に反っている。折れていないだけで奇跡だ。

「確か…貴方の夜闇は深いんだったわね。でも安心なさいな、すぐに光で照らしてあげる…」

その時、彼女は腕を交差させ両手にマナの輝きを集めた。これもやはり先程までとは雲泥の差、彼女自身が持つマナを十分に籠めた為だ。

「『ギムス』よ、聖なる光により浄化を――『ライトブリンガー』！！」

交差されていた腕が天に向けて翳されると、光が昇っていく。確かに天井は高いが、ここは室内。限度が有る。

光は天井近くで停止し分裂、今度は勢い良く――まるで艦砲射撃のように降り注ぐ。

「次から次にッ！手数の多いッ！」

光の盾を踏み台に跳ね退く。対面の壁に着地すれば、そこを狙って光が雪崩込んでくる。正しくそれは、言葉通り『ライトブリンガー［光をもたらすもの］』。

躱せばその先へと光は追い縋る。壁から壁に跳び移り遮二無二命を繋ぐ。

――神剣魔法ならまだいい。この『ハイパートラスケード』は対魔法の加護、致命傷は避けられる。だが、あの『光』は別だ。実体攻撃も兼ねる【雷火】の光は、間違いなくこの雷神の法衣を貫く！

間一髪で至近弾を避けた着地点。いや、そここそ――

「虚ろなマナの輝きよ、惑わしの霧となれ…」

「しまっ…グ！」

そここそ陥穽。青い霧のような、霞む虚光の充ちる場。跳ね退こうと脚に力を篭めるが、その瞬間に今度は膝が悲鳴を上げた。

【夜燭】を衝き立て、膝を折り地に屈する。当たり前だ、こんな無茶な動きが長持ちする筈が無い。その跳躍や着地の衝撃は全て膝などの関節に懸かり、骨肉を擦り減らす。焼け付くような熱を持った膝は間違いなく脱臼、下手をすれば骨折しているかもしれない。

そんな、苦痛を噛み殺す男の耳朶に。

「ーー『ハルシネイション』」

慈悲深き安らぎとそれに伴う生命の停滞を齎す、『慈愛の女神』の囁きが触れた。

「ーーカハッ……！！倒れ…られるかよ…！！」

虚ろの光に打たれ、生命［イノチ］を大きく削ぎ落とされて。それでも彼は倒れはしない。身に纏う加護は大きく減じ、もう一度神剣魔法を浴びればもたないだろう。

【夜燭】を支えに再度腰を立たせる空、そのしぶとさにさしものエヴォリアも呆れるしかない。

「全く、諦めが悪いのもここまで来るともう才能ね…」

「…悪いかよ、必死こいて太刀［たち］向かって…こちとら多寡がニンゲンだ、出来る事なんざーー！！」

震える膝を殴り付けて踏ん張り、引き抜かれた黒刃が構えられる。真っ向向けられた剣に、エヴォリアは眉を顰めた。

「ーー初端［ハナ］っから、前に向かって歩く事だけしか出来ねェんだよ！！」

肩で息をしながら、ただただ強がる言葉。あと一撃でも受ければ崩れる、だと言うのに。

エヴォリアは笑う。可笑しいからではない、『憎い』からだ。

「…そう、それが貴方の『夜闇』という訳ね」

光はある意味では無慈悲だ。どんなに隠したい『罪』も、白日の下には全て曝される。一方、闇はどんな『罪』も覆い隠す。ある意味では慈愛…いや、『自愛』に充ちている。

刹那、拍手が一ツ打ち鳴らされた。音は空間を、彼女の静かな怒りと共に揺らす。

「ーーアンタだけを楽になんて…させるもんですか。皆誰しもが背負いたくも無い『罪』を背負って生きてるのに…アンタだけを！！」

エヴォリアの背後に浮かぶオーラフォトン。先程よりも巨大にして緻密、明らかに強力な神剣魔法。

「ーー闇の氷柱よ、我が敵の骨肉を砕け…」

それに対抗して、空の左手が向けられた。その指を『銃』として。

「何をーー…ッ？！」

向けられたエヴォリアが訝しんだのもつかの間、その全周を青氷の檻が包んだ。

「…悪いね、俺は無駄ってモンが嫌いでさ。どんな行動も必ず自分なりの意味を定義しなきゃ嫌なんだ」

時計のようなその檻の中から、彼女は気付く。彼が跳ね回っていたその跡、その全てに霜で貼り付けられた『銃弾』が在る事に。そしてその全てがーー己の立つその位置に向けられている事に。

「呪いの刃よ、我が身を守れ――『クロウルスパイク』！！」

鳴らされた指。それはレストアスの意志により発火、起爆して――『氷弾』と化して全方位から彼女を穿つ。

「……」

息をつきながら、濛々と立ち込める粉塵を睨む。確かに手応えはあった、全弾命中したとレストアスが告げているが――

「今のは正直、まずかったわ…ただ相手が悪かったわね」

その幕が上がる前にエヴォリアは告げる。煙の緞帳が上がった先には――彼女を護る『城壁』が聳えていた。

「――あたしの『ギムス』は、その程度の火力じゃ墜ちないわ！」

堅牢の権化、白く怜悧な鋼と氷の重装巨兵。エヴォリアを覆い隠すように護る機械巨兵は、その名を『ゴーレム＝ギムス』。【雷火】の守護神獣だ。

――マジかよ…ベルバルザードの『暴君』より凄げぇ。

その装甲は不届きにも彼女を狙った呪いの氷刃を全て防ぎ、あまつさえ疵一ツ無い。備えを完璧に凌駕された。

「…じゃあ、今度はこっちの番ね。ギムスよ、凍てつく輝きにより敵を薙ぎ払え…」

呼びかけに応え鳴動する巨躯、向けられた巨兵の左腕と一体化した雷磁砲［レールガン］。そして巨兵の全身に配置されている無数の砲身が現れた。

「…遊びは終わり。コレで最後よ――『アイスクラスター』ッ！！」

迸しる白く凍えた絶対零度の雷光は過たずその眼前の弱者を捉え、情け容赦など無く粉砕する。文字通り、『光』に還るまで。

その光の渦の中心で、弱者は。

――死ねない…まだ、俺は何も成してない…このまま消えれば…居ても居なくても変わらない無意味になる。そんなのは…御免だ！

レストアスの加護、既に消えかけているそれに護られている一瞬に勝機を見出だす。何故なら相手は――狙わなくても真正面！！

「征くぞ、カラ銃…！」

【くふふ、やっぱし最後に頼りになるんはわっちどすなぁ…】

利き手に握られたは【無銘】。その暗殺拳銃を番えた人差し指が、迷い無く引かれる。盾のように銃口で展開された三重冠の精霊光、その金色の煌めき。

迸しる龍皇の息吹は金色の烈風。

「【――『オーラフォトンクラスター』ッ！！」】

滅びを齎すマナ嵐が、凍える白の雷光と鬩ぎ合う――！！

「げほっ…やってくれるわ、あたしもまだまだ甘いわね」

瓦礫の散乱した室内。特に大きな天井の残骸を右腕一本で受け止めたギムスの足元で、エヴォリアは苛立たしげに呟いた。

「…ベルバが手こずる訳だわ、判ってはいたけど本当に予想外な奴…使う気は無かったけど、いざとなれば――」

「まだ出し惜しみか？ナメてくれるよな、本当」

チャキリと、エヴォリアの右米神に【無銘】が衝き付けられた。思わずギムスが反応するが、ここまで近接されては成す術が無い。

「…そういえば、貴方の本分は暗殺だったわね。こういう状況が一番得意よね」

答えず、空は睨みつけながら息を吐く。それは単純に、もう声を出すのも辛いというだけ。

「でもいいのかしら？私を殺せば…フィロメーラ、だったっけ？私が借りてる彼女の心も死ぬわよ」

「…ハッ。やっぱりあの二人を行かせて良かった…情に流されるのは吝［やぶさ］かじゃねェけど――場合に因るんだよ、俺はさ」

僅かに色めき立った空の瞳。しかし、一瞬だけ目を閉じた後に再度開かれた眼差しは冷厳な三白眼。

最早何の情動も無く、空は引鉄に掛けた指に力を篭める。

「…時と場合で冷酷にもなれる。本当、貴方みたいなタイプが一番厄介よね……仕方ないか」

ふぅ、と溜息を落とした彼女。そして――

「――【空隙】が呼んでるわよ、【幽冥】。私達の軍門に降りなさいな、貴方の主人…『奸計の神』”クォジェ＝クラギ”と共にね」

「…ッな、に?!」

放たれた言葉に、空は息を呑む。

【空隙】、【幽冥】とは何なのか。何より何故――その”名”を知っているのか。彼の記憶に有る限りでは、彼女の前世とは明確な接点が無い。

【…あれまぁ、本当に『遊びは終わり』なんどすなぁ…くふふ】

「…カラ銃…!?」

と、【無銘】から無明の翳［かげり］が溢れ出す。

【すんまへんなぁ、旦那はん。まぁまぁ愉しめましたぇ。贋物はその代金にくれたりますわ】

訳が判らず引鉄を引けずに戸惑う空、その背後に翳が結集する。

《まぁ、ここまでたんまり貢いでくれて有難うッて事だよ『俺』》

「――ッ!!?」

その翳を裂いて、その無機質な声と共に。

《礼代わりだ、楽に――死ねや》

『紅い三日月』の刃が、振るわれた――……

空の背中に向けて横殴りに閃いた『紅い三日月』…エチオピア等で見られた特殊な刀剣、極端に剣身が湾曲した鎌刃剣［ショテル］型の永遠神剣。
今まで潜り抜いてきた闘いや日々の特訓で培われた勘か、空はそれを辛うじて、痛みに感覚の薄い右の逆手に構える【夜燭】で受け止めた。

「ッあ一一」

『しまった』と思った時にはもう遅い。既にその真紅の刃を『受け止めてしまった』のだから。
培われた経験と勘。それらが今回は完全に裏目となっていた。

「一一ガハッ!?」

片口に刺さった切っ先、苦痛に声を漏らせば一一触れてもいない筈の背中から左脇腹にかけて、刷り上げられたような刀創が走る。
咄嗟に身を捩った為に背骨を断ち切られ即死する事は回避できたが、紛れも無い重傷。

「莫迦、な…」

血飛沫と共に脚から力が抜け、俯せで沈み込む。その目は驚愕と共に、眼前の一人…否一一『一機』を捉えていた。

《莫迦はテメェだろ、『俺』？》

無機質な声、面相は一一かつて自身が遣っていた面兜［バイザー］、そのスリットの奥に紅く光る単眼［モノアイ］。左胸部に反応炉［リアクター］を持つスマートなフォルム、ホバリングするように浮遊する質量。刃金［ハガネ］色の無骨な外観ながら、機能美とも言える無駄の無い造形。

…以前よりも更に洗練されている『ソレ』。最も大きな外観の差異は頭部に角が有る事と、指先までを鋭い鈎爪に包まれた【上弦】、脛と爪先に打撃用の刃を持つ【下弦】を模した強靭なアームとレッグに変更されている点くらいだ。

《幽月の口車に乗って、しこたま神剣を集めてくれて有難うよ！お蔭で反魂［カエ］って来れたぜ！》

それは機械的な外見にそぐわぬ程に、やけに人間くさい仕種で歓喜した”機械の神性”。そう、かつて彼の前世が造り上げた…『一機』のマナゴーレムが立っていた。

その隣に別の翳が集まる。凝縮していくそれはやがて、黒髪の女と偽［な］った。

「どういうつもりだ…カラ銃…！何でソイツの側に居やがる！！」

「『何で』てぇ、賢い旦那はんならもう判っとりますやろ？目ぇ逸らしとるだけぇ…くふふ」

濡れ羽烏色の髪の女一一幽月に。空は詰問する。実に珍しく、取り乱して。それに幽月は、いつもと変わらぬ小馬鹿にしたような口調で答えた幽月。見下すように笑いながら、彼女は隣の”機神”にしな垂れかかった。

大して気にも留めず、各関節の動作を確認した機神は忌ま忌ましげ

に呟く。

《…チッ、しかし随分みすぼらしい姿になっちまった》

「あん、酷いお人…折角わっちのチカラで新しい躯を造って、砕けた【逆月】も『凍結片』から再製したったのにぃ」

組まれた腕、左のマニュピュレーターに握られる機神の以前の永遠神剣第七位【逆月［さかづき］】の刃を撫でる幽月。

するとそれは、解けるように翳に換わり彼女に染み込んでいった。

やはり贋物神剣、彼女の一部であるソレには特殊な効果こそ有れど意志や守護神獣は存在しない虚構［イツワリ］の剣だ。

「…成る程ね、そういう訳か……やたらテメェが神剣を必要としてたのは…『オレ』を蘇生させる為かよ…『永遠神銃』…！！」

衝いた膝に腕、目の前に転がるデリンジャー銃【無銘】。憑き物が落ちたように、全くチカラの感じられなくなったソレ。

「『永遠神銃』？…くふふ、旦那はん旦那はん…そんなもん在る筈有りませんやろ？わっちは旦那はんと違ってウソツキどすからぁ」

食らい付くように鋭い眼差しを向けるも、所詮は敗者の遠吠え。軽くあしらわれ、一層惨めさを引き立てる。耳を打つ言葉に歯を食いしばり、空は俯いた。

「わっちの”銘”は【幽冥】…永遠神剣第五位【幽冥】。他の神剣を浸蝕する『夜』の剣［ツルギ］…」

《そしてオレは、その”契約者”…『【幽冥】のクォジェ』って訳だよマヌケェ！！》

名乗りと共に、機神の胸部にあるリアクターが輝く…いや、翳る。
周囲の光とマナを、翳が浸蝕して呑み込んでいく。

《一一この日をどれだけ待ち侘びたか！マナゴーレムの制御の為に転写していた『触穢［そくえ］』を再結集させて”転生”だけは可能とし、替わりになる神剣を得るまで展望無き輪廻を繰り返す…！！》

機神の”神名”『触穢』と【幽冥】そのものである『翳』の入り混じった、凝り固まった紅黒い忌血のようなその『呪詛』。

ニンゲンへの転生の度に、無力を噛み締めながら終焉を迎える度に降り積もった無量大数の悪意。
それと混じるは幾つもの”同属”を蝕み続けた、やはり無量大数の害意。

正しく読んで字の如く、文字通りの『害悪の結晶』たる神造機械の”祟神［タタリガミ］”。

《永［なが］かった……本当に永い、永い輪廻だった！！！》

展開された立体的な精霊光はまるで彼岸華の花冠のように。美しくも毒々しい夜の徒花［あだばな］。

「…何でだ、カラ銃…俺との契約は…贋物［ニセモノ］か？こちとら破った覚えはねェぞ…！」
「そう、それどすわ。旦那はんはわっちに『好きなだけ喰わしてやる』っつったのに、喰わしてくれたんはミニオンの屑神剣だけぇ。近くにあんな旨そうな神剣がわんさかおるのに」

どくどくと、己の傷口から流れ出て行く命を感じつつ。搾り出すように問う。それにへらへらと、命を蝕む翳の女は事もなげに。

「わっちのホンマの『旦那様』は、親交の有った他のカミサマすら平気のへいざでその毒牙に掛けはった傑物どすから――…『アンタはん』の御家族全員の神剣をわっちに喰わしてくれはる甲斐性が有るんどすわぁ」

彼の『家族』を『喰らう』と宣言した――刹那、空の顔が跳ね上がる。

「――貴様ァァッ!!!」

激昂して苦痛も忘れ、腰から引き抜いた血塗れの拳銃を番えて連射する。伍挺全てを撃ち尽くし、立ち込めた煙が晴れた先。

今まで喰った神剣で鍛え上げてある機神の装甲はあっさりと魔弾を弾き返している。加えて周囲には先程の精霊光の残滓を利用した防御機構、翳の膜『オーラバリア』が張られて総ての事象を拒絶していた。

一方の幽月は――身構える事も無く魔弾に身を曝した幽月は。

『わっちが不死身な事くらい、ご存知どすやろ?わっちの『正体』を知らへん莫迦にはわっちは砕けへん…折角の弾ぁ、無駄遣いはやめなんし』

「……ッ!?」

十数発の魔弾を受けて、被っていた『ミニオンの屍』は消滅している。ただ――…のっぺりと、人の形をした黒い翳が立ち昇っているのみ。

それこそ彼女…【幽冥】の本体だ。弾丸など通用しない。喩えるならそれは、確たる形を持った『影［シャドウ］』ではなく空間にかかる不可視の『翳［シェイド］』。
意志が固着しているその神剣に神獣は存在しない。そう見えたのはミニオンの死体を操っていただけのダミー。ひとしきり笑った翳はニンゲンのカタチを保つ事を止め、すっと機神に融合する。

《第一、幽月が契約したのはオレとだ。間男はテメェだよボケが》

肩を竦めた後で機神はエヴォリアの隣にテレポートで現れた。黙ってギムスを送還した彼女は空に向き直り――姿を揺らがせる。同じく機神も転送の構えに入り、姿を霞ませた。

「…不様ね。でも、貴方にはそれがお似合いよ。命の続く限り、己の無力を噛み締め続けなさいな」
「……クッ…！」

そう嘲笑う。僅かに、本当に僅かに――残念そうな声色で。

《じゃあな、『俺』…いや、カラッポの『空［アキ］』君？ククク…ハッハハハハハハ……》

全てが消え去れば、残るは重傷を負ったその少年のみ。その拳が、瓦礫を叩く。

「……クソ…」

――判ってたさ、アイツが何か隠してた事くらい。気付いてたさ、神剣である可能性くらい。

静寂に包まれた管制室にその音はよく響く。既に塔の鳴動も収まっている、ナーヤが破壊の思念の無効化に成功したのだ。
だが、そんな事にも気付かない。例え気付いたとしても、歓喜など無いだろうが。

「…クソッ…クソッ……！」

――でも、それでも…信じていたかった。もしかすれば解り合えるんじゃないかって。有り得ないとしても、アイツとも『家族』になれる…どんなに小さくても、その『可能性』を……信じたかった！

塔が正常な機能を取り戻した事によりシステムが復旧したか、スプリンクラーが作動した。冷たい消火用水が敗残者を容赦無く打つ。

「――クッソォォォォォッ！！！！」

その水音に紛れて響いた慟哭は、誰の耳に届く事も無かった――…

The 53th Name・・・"リ・ネイション"

一一…唐突だが、好きだった言葉が有る。今までずっと忘れていたけど。

『空さん、これを読めますか？』

霞んだ情景。彼は辛うじてソレが、思い出深い甘木神社の境内だと解った。

そこで巫女が地面に書いた文字を、八歳くらいの少年に読ませている。『空元気』という漢字を。

『えっと……”そらげんき”？』

『ふぅ…文弱の徒は格好悪いですが、武骨も大概ですよ。文武両道こそが一番、もっと勉強なさい。これはですね…』

それに巫女は、自信満々に一一

『これはですね、”あきげんき”と読むんですよ』

『あき…僕の名前？』

子供相手に、物凄い嘘を教え込んだ。

『ええ、そうです。どんなに辛い事が有ってもへこたれず諦めない…ただ元気なだけよりもっと意味のある元気の事なんです。貴方は、そんな意味にもなる素敵な名前を持っているんですよ』

『そうなんだ！』

一一んで、学校でマジそう読んで赤っ恥をかかされたんだっけか…

だから二度と思い出したくなくて記憶の奥底に封じた言葉だ。

『…そう、だから…過去がどうあれ未来がどうあれ…決して貴方は”空虚［カラ］”なんかじゃない。何が有っても挫けず、真っ直ぐに…貴方らしさを貫いてくださいね』

『ときみさん…？』

ふと、声を沈ませて。くせっ毛の少年の頭を撫でながら、巫女は天を仰ぐ。

釣られて少年も仰ぎ見れば。

一一でも…それはきっと。この命が生まれて以来聞いた、他の誰のどんな言葉よりも。

何処までも蒼一色の大空に悠揚と棚引く、一筋の白い飛行機雲に吹き抜ける一陣の風。それを翼に受け、物悲しく鳴きながら高く飛び去っていく孤高の鳶［とんび］。

その姿は、日の光を浴びて金色に煌めいて見えた。

そして、踊る髪をそっと抑えながら。虚空に溶けてしまう程に小さな声が鼓膜を震わす。

『遮るものなんて何も無い…あの悠［はる］かな”空”を駆け抜ける、”天つ風”のように一一…』

一一この”巽空”という莫迦野郎の、どうしようもなく莫迦らしい生き方を決定付けた…本当に本当に、大好きな言葉だったんだ……

「――い…おい、起きぬか」
「……ん…？」

呼び声に、眠りの壁の向こうに拡散していた自我が再結集する。左腕をアイマスク代わりにしていた為に、声の主の姿は霞んで見えているが――こんな時代がかった喋り方をする者はそうはいない。

「ああ…ネコさん痛い痛い足踏んでますすいません大統領…」

物部学園の中庭、トネリコの樹の根元にはレジャーシートの上に散乱する各種装備に整備機器、樹の脇の地面には衝き立てられている【夜燭】。
分解した銃のパーツや篭手脚甲短刀鎖などが所狭しと散らかったシートから起き上がるべく脚を立てる空を、ナーヤは手で制した。

「…具合はどうじゃ」
「ええ、もう大丈夫です。治療費用の件は本当にお世話になりました」

腰を降ろしたままで言い、何気なく体を捻る。少し引き攣れたような感覚こそあれ、最早回復したといってもいい。

――しかし再生治療とかマジで魔法の世界さまさまだ。たった二日で古傷みたいになっちまった。
あれだな、やっぱ科学は魔法すら越えるんだよ、うん。

「気にするでない、ただの礼じゃ。兄上やフィラを助けてくれた事へのな」

言って、一度頭を下げるナーヤに少し鼻白む。何せ彼は、切羽詰まっていたから気付いていなかった。ニーヤァは管制室前の通路に倒れていたらしく、望とナーヤが出ていく時に一緒に引きずり出して、後を他の皆に託したのだ。

――因みに後で皆に聞いた話では『しめじだったな』『もやしだよ』『カイワレ大根でしょ』とかなんとかソルやルプトナ、姐さんが散々に言っていた。どうやら色んな意味で色んな場所が再起不能なようだ。南無三。

しかしあのスケベ猫のおかげであの危機的状況が生まれたのだから自業自得。これを期に心を入れ替えて欲しいもんだ。

「…感謝される言われなんざ無いっすよ。エヴォリアを相手に生き残る策戦考えるのに手一杯で昏倒してたヴェラー卿を、エヴォリアに囚われてたフィロメーラさんの心を…俺はどっちも結果的に見捨ててる」

「自身を卑下するでないわ、見苦しい。結果的に全員助かっておろうが。ぬしの判断は正しかった、ただそれだけじゃ」

まるで、というか正に慰めの言葉。驚いたのは空の方だ、木っ端微塵に打った斬られる事を覚悟していたのだから。物理的に【無垢】の鋭利な一部分とか使って。

「……」

「……」

沈黙。元より接点の少ない異世界人同士、何も話す事が無い。取り敢えず――

「…座ります？」

「…うむ」

レジャーシートを譲り、空は少し離れた位置に胡座をかく。都合ナーヤはその後ろ姿を眺める形になった。

カチャカチャと金属質な音。中座していた、装備の手入れを再開した音だ。

「…辛くは、無いのか」

その背に掛けられた気遣わしげな呟き。

「…辛くなかったらカッコイイんでしょうけどね。わりかし堪えてますよ、流石に――」

『キツイっすね』と続く筈の言葉は、【無銘】の撃鉄が熾された音で掻き消される程小さかった。

「――でも、反って楽になった気もしますよ」

「楽に、じゃと？」

「ええ、何て言うか…漸く『生きてるんだ』って気になって」

引鉄を引き、撃鉄を墜とす。火蓋を押し開けて薬室に減り込んだ燧石が、赤い火花を散らせる。

「今までの俺は、そう…『生かされてた』んだと思います。色んな好意に、色んな悪意に上手い事バランス取って」

その姿に己自身を重ねる。弾丸も火薬も入っていない、役立たずな『空［カラ］銃』。

空虚な己に装填されていた弾丸は『蕃神』、弱者だった己にチカラを与えてくれた火薬は【幽冥】。その二ツを一斉に失えば、後に残るのは役立たず。『銃』はソレだけでは役に立たない。本当に意味が有るのは『弾丸』なのだから。

「一一…でも、今からは違う。もう庇護は無い。だから、限りなく何処までも広がるカラッポな『可能性』が有る。だから俺ァきっと、此処から始まる。『巽空』は、此処から『生きてる』んだ」

ぐっと【無銘】を握り、真摯な眼差しで蒼穹を見上げる。高い天空には一一何も無い。果てしない蒼が広がるのみ。無窮の…『冀望』が。

「…楽天的な奴じゃな、お前は」

「いやいや、根暗で引っ込み思案ですよ、オイラはね。心配してもらう価値なんて無し」

クルクルと指先だけで回転させ己の米神に銃口を突き付けて、多少お道化て引鉄を引く。撃鉄の墜ちる音を聞きながら、ナーヤは溜息を零した。

「”初対面の相手”を心配などするか、たわけ」

「…はい？」

再度呆気に取られた空。その呆け顔に、ナーヤはぷっと吹き出しかけてなんとか堪える。

「わらわの名はナーヤ・トトカ＝ナナフィじゃ。これからは宜しく頼むぞ…『たつみ』」

「…若年性健忘症ッすか『ナナフィ』さん？」

「茶化すでないわ、全く…」

つまり、『此処が始まり』だと。前世など関係なく、一個の人間同士として。今漸くこの二人は挨拶した事になる。

「さて、わらわはもう行く。元々のぞむに用があるのでな」

「あー、急いだ方がいいっすよ。競争率高いですから。スタート前で混戦状態のレースみたいになってますよ」

「言われんでも解っておる。ではな」

すっと立ち上がり校舎に消える彼女を見送る。それが見えなくなってから、改めて空は樹の幹に寄り掛かった。

――参ったな、許されちまった…

朝の優しい、さざめく木漏れ日のシャワーを浴びて。鼻孔をくすぐる草の香りを孕む清涼な風を斬る【夜燭】。その黒刃が一瞬、蒼く煌めく。

【…オーナー、申し訳ございません。私にもっとチカラが有れば――あぅ!?】

脳に直接流し込まれる思考は、恐縮しきったレストアスだ。休眠から覚めてずっとこの調子、責任感が強いにしても程というモノが有ろう。

それに空は――【無銘】を打つけた。

(阿呆、お前は良くやった。足りなかったのは俺のチカラ、覚悟、意気地だ)

【…オーナー…】

寝そべった姿勢を正し、まるで平伏するような形で頭を下げる。

【頭を上げてくださいオーナー、貴方はいつも通りに『チカラを貸せ』と命じてくれればいい】

（…悪りぃ、これからも苦労掛ける。済まねェ）

苦笑して、三度寝そべる。そんな、彼に――

【…もしも、宜しければなのですが…オーナー…】

（…ん？）

またも躊躇するようなレストアスの意思。

それは本当に、何度も何度も、繰り返し繰り返し逡巡して。

【もし宜しければ、この【夜燭】と〝契約〟を――】

遂にその決定的な言葉を口にしかけた、その刹那――

「【――ッ！？！】」

『光』が天を裂いた。

（今のは…何だ？！支えの塔から走った！莫迦な、あそこは今修理の為にサスペンド中だぞ！）

【解りません…私には、【幽冥】のような索敵能力は有りませんので…】

――っ糞…悔しいが、俺は大分アイツにおんぶに抱っこだったらし

い。これからの戦いでも、俺は隠蔽も索敵も無しで闘わなきゃならないってか。

支えの塔から放出された光は、世界の壁を越えて分枝世界間に飛び出して行った。それに取り敢えず、空は安堵する。

「チッ、支えの塔に行ってみるか――？」

――何が有るか解らない。ならば装備を整えていくべきだ。しかし時悪く整備中、フィールドストリップなんてしてないでマガジンだけを交換しておけば…！

【――オーナー！光が！】

「な、にっ！」

レストアスの悲鳴じみた声に反応し、振り返れば。分枝世界間に抜けた筈の光が――こちらに向かって飛来している。

――何が出来る？何も出来ない。俺には何のチカラも無い。

「…畜生…！」

――何でだ。何故、こんなにも俺は無力なんだろう。願いは有っても、ソレを叶えるだけのチカラが無い。

「――チカラが…有れば…！」

無力感と共に見上げる光。せめて――逃げる事無くソレを迎える。せめてもの抵抗に、睨みつける眼差しだけは逸らさない。

「……アレ、は…？」

その眼差しの先に、光との狭間に何かが映る。だが、それは空には、人間の視力には蒼い米粒にしか見えなかった――…

The 54th Name…"悠久［とわ］の絆"

…極彩色の閃光が駆け抜けた後の、雲も白んだ月すらも無い虚空がヒビ割れる。

それは”門”。隣り合わぬ次元同士を繋ぐ軌跡。中でもコレは、或る永遠神剣によって『閉じた世界』とすら繋いだ”奇跡の軌跡”。

その門からまるで、何も存在しない筈の真空から”揺らぎ”によって電子と陽電子のペアが突然現れるように――

「――到着っ…とと」

【いきなり穹［ソラ］の上か…】

穹に溶け込む蒼穹色の髪の少女と、鎗とも杖とも剣ともとれる形状の『永遠神剣』が現れ出た。

「此処に…居るんだね」

【…気になるかい？】

「初任務だもん、当たり前じゃない」

見下ろした白亜の天空都市。陽射しを浴びて煌めく市街の端に、妙な形の舟…ものべーが停泊している。

その次元くじらを眺める眼差しは、少しの愁いを帯びていた。

「ところで、どうやって出逢ったら不自然にならないのかな…」

『うーん』と、少女は唐突に思案顔となる。根が素直なのだろう、打算的な行動は不得手らしい。

【時深さんに貰った『アレ』が有るじゃないか】
「あ、そうだったね…えーっと」
ごそごそと取り出したそれは、一通の封筒。文字通りの『筒』であるそれは、さしずめ巻物。
その宛名は――
「た…た…何だったっけ？」
漢字で書かれており、彼女には読めない。記憶を漁るも、一度しか聞いていない名を思い出すには至らなかった。
【確か…『タツミアキ』だよ】
「あ、そうそう。タツミアキさんだ」
ぽむ、と手を打つ彼女に都合抱き抱えられた永遠神剣は、溜息のような思念を送った。
「『これを見せたらすぐ仲良しになってくれる』って言ってたけど…どういう事なんだろうね」
【『遺伝子レベルできちんと調教［きょういく］済み』とも言ってたね…】
ぷるぷると、少女は身を震わせる。確かに寒い世界だが、気温の問題ではない。確かにいきなり風が吹いてきたが、それも違う。
思い出すのは巫女の姿、書き付けを渡す時の彼女は――妙に楽しげだった。どす黒いオーラを纏って笑っていて。

【……不安、かい？】

そこに送られた神剣の意思は、少し不愉快そうな響きが混じっている。

正直彼は、今回の任務には疑問を感じていた。彼らの『親』がそうであったように。

「うん、初めて人と知り合う時はいつでも怖いけど……いつだってとっても楽しみ」

だが、彼女は気付く事無く。更々と蒼い天鵞絨［ヴェルヴェット］のように美しく靡く髪を抑える。

そして明らかに風に靡いたのではない、白い翼の髪飾り（？）をパタパタと振るわせて屈託の無い笑顔を見せた。

「一一どんな人達と出逢うのかな。皆と仲良くなれるといいよね」

…『出逢い』が有れば『別れ』が有る。この世を構築する全てが、矛盾する『対』にて成り立つ以上、例外は有り得無い。

その”宿命”を知って、それでも尚。その果てが誰も避けられぬ永遠の訣別［わかれ］であると知っても尚、生命は孤独では在れない。

【大丈夫、自然体でいけばいい。君を嫌う人なんて居る訳ないさ】

…ならば、せめて。永遠なる時の流れの中で切り取られた、僅かな一時だけでも。

せめてこの幼［いとけな］い心魂に『より多くの幸福が訪れん事』を、『悠［はるか］な刻』を象徴する”銘［な］”を戴く神剣は切

に願う。

その先行きを祝福するかのように、虹色の光が照らした。まるで、もう一つ太陽が現れたようだ――

「…あれって、何だろ？」

【…どうやら、この世界は僕らを歓迎してないみたいだね】

「ふえぇぇぇぇっ！？！」

それは――意念の光。支えの塔を損傷させつつ放出された『対象を滅ぼす』という意思の結晶。

しかもそれは『破壊と殺戮の神』の意思、並の破壊力ではない。それが『何か』に鏡面反射されて、真っ直ぐに跳ね返ってきたのだ。

当然、その軌道上に居る少女は巻き込まれてしまうだろう。

「…怒られる前に謝っておくね」

だが、彼女に回避の考えは毛頭無い。そんな事をすれば、眼下の都市があの光に撃たれてしまう。

【解ってるさ、ユーフィがそういう性格だって事くらい……全く、困った妹だ】

「えへへ…ありがと、ゆーくん」

仕方なさそうな口ぶりだが、彼も端から都市を見捨てるつもりなど無い。神剣と少女は真実”双子”。

悠久［とわ］に変わる事の無い絆で結ばれているのだから――例え、この世界の理［ことわり］にチカラを削ぎ落とされていたとしても。

【――護って見せる。兄が妹を護るのは当前だ、何があろうと必ず…この三位【悠久】が護る！！】

同意を得、少女はにこりと笑う。そして神剣をしっかりと握り締め、大きく息を吸い込んだ。

「――【悠久】のユーフォリアの名に於いて命ず…」

永遠神剣第三位【悠久】と、その担い手であるユーフォリア。時間樹エト＝カ＝リファの外から訪れし、上位の永遠神剣を携えた”永遠者［エターナル］”の翳す右手に巨大な魔法陣が展開された。

「塵は塵に、灰は灰に…」

呼び掛けに応じて現れる【悠久】の守護神獣は、絡み合う東洋風の双龍。氷晶の青龍『青の存在』、輝閃の白龍『光の求め』。

「声は…事象の地平に消えて――『ダストトゥダスト』っ！！」

二頭に護られるように【悠久】を構えたユーフォリアが示せば――その弐龍がブレスを吐く。

「【――てやぁぁぁぁぁっ！！」】

青白の煌めきは周囲のマナを巻き込んで対消滅させながら。滅びの光と撃ち合った――…

The 55th Name・・・"永劫回帰"

一際鮮烈な光を放ち、天が鳴動した。全てが終息し、代わり…静寂が訪れた。

耳に痛い程の静寂、目に沁みる程に濃い穹［ソラ］の蒼。左手を翳し、陰を作って見上げる蒼穹。その一点に一一見出だした。

「……ッアレは！」

遥か高空から、失墜するイカロスのようにソレは墜ちてくる。遠すぎて良く見えない。しかし、間違いようはない。間違いなく一一

「一一ヒトじゃねぇか、畜生！」

思わず周囲を見回した。そして、そんな行動を取った”不様な己”に悪態を吐く。

一一莫迦野郎！何を神剣士なんて探してやがる！今此処に居るのは俺一人だろうが！

理解してしまえば、後は思考するのみ。どうすればニンゲンの脆弱なチカラで受け止められるのか。

一一安牌は、レストアスをゲル化させて緩衝材にする方法。やれば出来ない事じゃないな…せめて、エヴォリア戦の消耗が無きゃ。

今のレストアスにはその規模で実体化する程のマナは無い。脳内電流で会話をするだけで厳しい状況だ。一瞬の思考の間にも、人影は

地表……物部学園のグラウンドに向けて速度を増している。

「…迷ってる暇なんて、ねぇよな…！」

パン、と一度己の両頬を張って。空は【夜燭】の柄からレストアスを己の躯に移す。

【オーナー、何をするつもりですか？！】

その常軌を逸した『決心』を読み取るや、レストアスは己が所有者に詰問する。だが、彼は苦笑いしただけ。

「…悪りィな、ちっとばかし一一莫迦やらかして来るわ」

瞬時に駆け出した躯には強化など無い。そもそもレストアスの加護『エレクトリック』は、頑健さ強靭さではなく瞬発力や知覚速度を増すモノ。『攻撃を受ける』事の役には一切立たないのだから。

一一なら、腹を括るしか無いだろ。唯一の救いは此処が医療も進歩した世界な事。多少の怪我で死なないのは実証済みだ、神の采配に感謝感激雨霰だぜクソッタレ！！

…つまり、この後に襲い来る痛苦から逃れる為。電気信号で脳内麻薬を無理矢理引き出す為に、だ。

中庭からグラウンドに走り出る。直上十数メートルには小さな蒼い粒。それが髪の長い、女性で有る事を漸く理解する。

一一速ェな。ああ糞、逃げたい。逃げたいけど…あんなに恥ずかしい事言っただろ？

一瞬の内に思い出すのは、ほんの少し前の会話。ナーヤと交わした多分に気障ったらしい台詞。その後茶化した程のソレ。

『――…でも、今からは違う。もう庇護は無い。だから、限りなく何処までも広がるカラッポな『可能性』が有る。だから俺ァきっと、此処から始まる。『巽空』は、此処から『生きてる』んだ』

そう、口にした。そんな”空元気”を精一杯口にした。もし自分で決意しただけなら、もっと愚図めいていた筈。

だが、他者にあんな恥ずかしい事を言ったのなら――やるしか無いだろう。『巽空』らしい生き方を貫く事を――諦めない事を!!

――だから、やってみるさ。俺の『可能性』を信じて、どんな艱難辛苦でも踏み越える。

そうさ、ニンゲンに想像出来る事なんてモンは全て――実現可能な範囲内だ!!

「――ってオイ!?!」

受け止める姿勢を整えた刹那、娘が落下軌道を変えた。いや、風に流されたのだ。僅かなズレ、しかしソレは落下地点を大きく逸らす。銃士の空は、狙撃の観点からソレを身に染みて知っていた。

「レストアス!」

【正気とは思えない、オーナー!今アレをやれば、痛覚をシャットアウトする事など不可能になる!それどころか…】

その呼び掛けに迷いは無かった。しかし盟友の返事は芳しくない。

もう間もなく、気絶しているらしい蒼の娘は中庭にぶつかる。

だから――『切り札』を切った。

「つべこべ言ってないで――俺にチカラを…貸せ！」

【――…貴方というヒトは…！どうなっても知りませんよっ！！】

瞬時に、足の裏に稲妻が集束し炸裂する。それを加速に、一瞬で今来た道を逆走した。

…篭手も脚甲も身に纏ってはいないただの学生服、ただの革靴。それで反動加速を行えば――脚が生理的に嫌な音を発てたのも、当然の帰結。

「――届けェェェッ！！！」

それでも、そんなモノには気を裂く余裕など無い。ただただ、目の前の相手を受け止めるべく。届く筈の無い手を延ばした――！！

ゴロゴロと転がり、勢いを何とか殺し。最後に後頭部をトネリコの樹の幹にしたたかに打ち付けて。

「～～っは…ゲホッ…！！」

仰向けに樹の枝葉を見上げながら、やっと空は息をする方法を思い出した。

――脚と腕…付いてる。躯…そこかしこ痛てぇ。頭…正常。

【一一な訳が無いでしょう、この鉄砲弾ーーーっ！！！！】

「イデデデ！？！止め、脳みそ電気で焼ける！！冷気で凍るぅぅ！！」

怒りに任せたレストアスの脳内拷問に、空は身をよじる。よじりながら、苦笑した。

（…仕方ねぇだろ、俺はニンゲンだ。何の事はねぇ、他の皆と同じなんだよ）

【だったら何故です！この者は神剣士、放って置いても問題など無かった筈だ！貴方が命を賭けずとも、造作も無く助かった筈だ！！なのに、何故！！】

レストアスは冷酷さからそんな事を言っているのでは無い。身を案じればこそ。だからこそ、己の腕の中に感じる予想以上に軽い重みに安堵を覚える。

盟友［トモ］の助けに応えられた事に。

（『普通』なら、な。だけど、俺は『異空』なんだよ。どうしようもない莫迦さだけが取り柄の一一神に刃向かえる『可能性』を持つアウトサイダー…『神銃士』だ）

一一だから、その壱志［イジ］が俺を支える限り。こんなチビスケに命張らせて、テメェはのうのうと指くわえてられる訳が無いだろうが。そんなのは『俺』じゃねぇ。

…それは只の決意表明だ。『斯く在りたいと願う』と、そう告げただけ。

【…それが、貴方の『壱志』ならば。私も我が主君の『遺志』に遵［したが］いましょう】
（レストアス…？）

…だが、それで充分。少なくともその神獣にとっては、己の壱志を定めるのに充分だった。

【――貴方のような向こう見ずを放っておく訳にはいきません。これからもチカラを貸して差し上げます…〟所有者［オーナー］〟…】

妙な反応をして休眠に入ったレストアスに首を捻り、頑張ってもどうにも恰好の付かない己に自嘲しつつ。

――しかし情けねぇよな。神銃士じゃなくて神剣士ならクールに、スタイリッシュに助けられてただろうに。お前もよくよく運が無かったな、チビスケ…

先程から抱えっぱなしで放置していたその人物に目を向ければ――目を奪う、長く蒼穹［あお］い髪。

「――…！」

…刹那、まるで『錠』に『鍵』が差し込まれたように。忘れていた最後のピースが、極彩色のユメの最後の欠片が――嵌まった。

…薄明か黄昏か、黒金の太陽と白銀の望月が望む、薄紫に微睡む境界［セカイ］。虚空［ソラ］と虚海［ウミ］の狭間、視界の全てに拡がる劫莫たる水平線［ホライゾン］。

風の刻む枝葉の韻律［リズム］に、波の奏でる砂浜の旋律［メロディ］…聖盃に充ちる靈氣［アイテール］の水鏡を揺らす雫、波紋と音色は水晶硝子の和声［ハーモニー］。

捻れた双世樹［メビウス］の幹に巻き込まれている『銃把［ツカ］』。虹と輝くステンドグラスのような絢翅［ハネ］の”蝶”――

『――私の名前は…』

――いや…違う。アレは…彼女は…そう…滄海［あお］い髪の…

充ちた聖盃から零れた一滴が渇いた地を潤すように。悠［はる］かな刻を経て回帰した濫觴の記憶。

「アイオネ――…」

その名を――…腕の中の少女に良く似た”記憶”の名を呟くべく開かれた空の唇が最後の音を発しようとした、その刹那。

――ガィィィィィィン!!!!

…と物凄い音を発てて。剣とも杖とも、槍ともつかない神剣が。

「…あべ……し……」

遥かな高空より、狙い済ましたかのように空の頭に直撃した。

――…ホント俺ッて奴ァ……何処までいっても恰好つかないカマセだよなァ……

決定的な一撃を受けた空はただ、役目は果たした満足感に包まれて。
意識の手綱を早々に、手放したのだった……

…幽明の薄紫に霞む境界、漣痕を刻まれた砂浜を踏み、清らかな波に裸足の足を浸して千鳥のように波間を遊んでいた少女。

丈の長い法衣の裾を持ち上げた姿のまま、彼女は――

「――あ…」

くるりと、幹に『銃把［ツカ］』を挟み込んだ双世樹に向き直る。
それに伴い、虚海より滄海い彼女の髪が波のようにさざめいた。

『…如何なさいました、媛様？』

そのすぐ傍らに虚空の彼方より舞い降りた白鳳、虚海の深淵から這い上がった黒龍がかしづき問う。

「…今ね、月下界にいらっしゃるアキ様と”繋がった”気がしたの」
『…ほう、あの者とですかのう？それは面妖な』
「それに一瞬だけだったけど……とっても懐かしい感じもしたわ」

微かに上気した金銀の色違いの眼差しが見詰めた先には、双世樹の枝に留まる紅い比翼の禽［トリ］と根に巻き付く蒼い比目の它［ヘビ］に、繚乱たる草原で寝そべる翠の幽角獣［ユニコーン］。

そして双世樹の僅かな空隙［ウロ］の”聖櫃［アーク］”に納めら

れた、”七宝聖盃［セブンスヘヴン］”。

「一瞬だったけど、アキ様が私を一一…この『空位神剣』を思い出して下さった…」

駆け寄って、指先で銃把を優しくなぞり聖盃を納めた聖櫃を覗く。

「一一だからね、もし…もう一度あの御方に出逢えたら……お願いしてみようと思うの」

『媛様…』

幹の『銃把』に連なって衝き出る蒼滄［あお］いダマスカス刃から、その内へ靈氣が滴ったのだろう。水鏡には未だに、反響する波紋が拡がり続けている。

「私……”カエリ”たい。アキ様のいらっしゃる、月下界に…」

その台座たる地面には一滴、溢れて零れた『可能性の雫』が滲みていた……

The 56th Name…"空際"

「一一…さん…お兄さん、大丈夫ですか?」

ゆさゆさと揺さ振られる感覚と、腰辺りに感じる温かな重み。
そしてそのやや幼く舌っ足らずな、心配げな呼び声。

「う…うぅん…?」

失神の闇にたゆたっていた、ズキズキと…いや、ガンガンと猛烈に痛む頭が、急速に覚醒の光へと向かい包まれていく。

不承不承瞼を開けば一一目の前には蒼穹の娘。

「…大丈夫ですか、お兄さん?」
「あ?あ、あぁ…」

跨がるようにして覗き込んでいたくりくりと黒目(蒼いが)がちな瞳と都合、見詰め合う。
その蒼い髪と瞳を見た時、何かを思い出した事を思い出した。

一一あれ?何か思い出した気がしたんだが…何だったっけか……

先程とは違い、空の琴線に触れるモノは無い。何を思い出したか、それを失した彼は首を捻った。

一一とても重要な、重大な事だった筈なんだが…ああ畜生、全然思い出せねぇ。

「あのぅ、本当に大丈夫ですか？その…前代未聞のたんこぶが出来てますけど」
「こら、触るなって…」
ぺたぺたと、神剣に直撃された後のコブに触る少女の手を押し止めた。流石に痛みが酷い。
熱を持つ頭頂部、それを為した蒼い鎗のような剣のような神剣は二人の脇に転がっている。
「気が付いたら、気絶してるお兄さんの上で寝てて…でも、無事でよかったぁ」
最初は不安そうに様子を伺っていたが、大事無いと解って安心したのだろう。
純白の翼の髪飾り（？）をパタパタさせながら、にっこりと。向日葵［ひまわり］を連想させる笑顔を見せた。
「……はぁ」
苦痛に悪態でもついてやろうと考えていた空だったが、至近でそんな無垢な笑顔を見せられては流石に毒気を抜かれてしまう。
――…つーか、俺が心配されてどうすんだ。しっかりしろ巽空。
「…俺は、大丈夫だ。お前は？」
だから、溜息混じりに口を衝いて出たのはそんな。ぐわんぐわんと軸のぶれた回転をする脳みそが紡ぎ出したのは――何処にでもある在り来りな台詞だった。

「――あたし、ユーフォリアって言います。この子はゆーくんです。よろしくお願いしますね、ダイ＝ジョーブさん」
「誰が『ダイ＝ジョーブ』だ誰が…そんなエキセントリックな名前持った覚えはねェよ」
それに少女――ユーフォリアは勘違いで答え、傍に転がっていた神剣まで紹介した。空はふぅ、と溜息を落として。
「俺はアキ、タツミ＝アキだ。怪我とか痛い所とか無いかって聞いてんだよ、ユーフォリア」
「え、はい。あたしは元気ですよ、アキさん…ところでそれって、どういう意味ですか？」
それに、ぽかんと。彼女は心底、不思議そうな声を漏らす。『何を言っているのか解らない』という具合に小首を傾げる。
「……はぁ？」
ここで漸く空は、話が別方向に噛み合っていない事に気が付いた。あんな事が有った後だというのに、彼女は妙にあっけらかんとしている。
まるで――覚えていないかのように。
「何って…いや、さっき光を…」
「光…？」
空が指差す先を見遣り、眉尻を下げる。暫くうんうん唸っていたが――

「…その前に、聞いてもいいですか？」
「…何をだよ？」
「えっと…あの」
嫌な予感がしたらしく、空はユーフォリアにジト目を向けた。それが怒っているように見えたのか、少し怯えて口ごもりつつ。
「あたしは……何の為に、此処に居るんでしょう…？」
「……はぁ」
今現在直面している状況を、至極単純に告げた。
所変わって保健室。ギシリとキャスター付きの椅子を鳴らして、白衣を着たヤツィータは溜息を漏らす。
「記憶喪失、ねぇ…一番古い記憶は？」
「はい、気が付いたらアキさんの上に寝てて…その前の事はちっとも」
その対面に置かれた椅子にちょこんと腰掛けたユーフォリア。傍らにはその永遠神剣。
「……クー君、駄目じゃない。一体この子に何したの？流石に、条例違反よ」
「俺は何もやってませんーだ。ったく…」

そして少し離れた窓際に椅子を運び、ふて腐れながらコブをビニール袋に入れた氷水で冷やしている空の姿が有る。因みに既に、全身の擦り傷を治療済みだ。

「まぁ、流石にこればかりは医術じゃどうしようもないわね。記憶ばっかりは気長に待つ事しかできないわ」

「あう、えへへ…」

言って、慰めるように彼女はユーフォリアの頭を撫でた。少し驚いたようだが、すぐに少女は破顔する。

「ところで、貴女のそれは永遠神剣よね？それの事は覚えてる？」

「確か…【有勲［ゆうくん］】とか言ってたような」

何となしに聞いたヤツィータ。それに本人より先に、土で汚れた制服を着替えた空が口を挟んだ。ユーフォリアは苦笑いして、真銘を告げる。

「あ…えっと、ゆーくんは愛称で…本当は【悠久】です」

そこで、ヤツィータの表情が引き締まった。いや、むしろ驚愕している。

「この神剣、あたしの【癒合】より上…ううん、下手をすれば【黎明】や【慧眼】よりも高位よ…」

「…五位以上、マジですか」

…永遠神剣。その持つ神格とは純粋な実力の証。人間はおろか下位の神剣はより上位の神剣に、身の自由や意識すらも支配される事がある。

かつて持ち手すら無しに別時間樹世界の、人間一人の『死の運命』を捩曲げた第四位神剣や、一つの大陸全土の『人間の意志』を己が意のままに運営した第五位神剣が存在した程に永遠神剣のチカラ…『運命介入』は強大なモノだ。

そして何より一一第三位以上の神剣は文字通り『神の座』を侵す。持ち主を『永遠に続く戦い』に導く為に、その『生命』を自分らと同じく『永遠』とするのだ。
その結果、世界からすら弾かれる存在と化す。

勿論、彼等がそれを知っている訳ではない。だが神の転生体として持つ智彗［ちえ］に刻まれている。より上位の永遠神剣に対する畏怖が。故に難しい顔をした、その刹那。

「…はぁ、また巽くん？」

保健室の扉が開き、支えの塔まで状況の確認に行っていた神剣士達が戻ってきた。

「会長、その言い方は止めてください。何だか凹みます」
「溜息くらい出るわよ！望くんの事だけでも手一杯なのに厄介事を増やして！」

やけにぷりぷりと怒り狂っている沙月を先頭にして。
後に続いていた面々もその剣幕に何も言えなくなっているらしい。
目を反らして助け舟を出す気など無いらしい。一っカケラも。

「…クウォークス代表、一体何があったんです？会長凄い怒ってますけど」
「まあ、なんというか…な」

ふっ、と力無い笑いを零したサレスに首を捻る。その後ろに続いていた望とその肩に乗っているレーメは、しきりに己のふくらはぎを叩いていた。

「…なるほど、あれは暁の策略に嵌まった望の力を利用した意念の光だったんですか…道理で強力だった訳だ」

「有り体に言えば、そうなるな」

起こった出来事の顛末を聞き終えた空は、腕を組み沈思に沈む。

――暁絶、かつて物部学園に在籍していた学生にして、この旅の原因となった男…永遠神剣第五位、【暁天】のゼツか…。

『復讐の神』”ルツルジ＝ソゾア”の転生体、神世の古では『対峙して、一度でも目を閉じれば二度と光を見る事は無い』とまで評された神速の剣士。両天でも数少ない、ジルオルと比肩した一柱。

「…厄介な話ですね…光をもたらすものとの戦いだけでも手一杯だってのに」

独りごちる、その目線の先ではユーフォリアが神剣士達に自己紹介している。

「厄介なのはそれだけではないがな。君の前世の事についても、対策を練らねばならんのだから」

「……」

痛い所を突かれ、空は表情を歪めた。確かにそうだ、敵にあんな厄介なチカラを持つ神剣が与したのだ。そしてその原因は、自分。

「…代表、ケジメは付けます」

「…君を、信じろと？正に身から出た錆だろう」

他の誰も聞いていない、二人だけの会話。その眼差しは交わる事も無く、ただ静かな声が互いの耳朶を震わせるだけ。

「テメェ自身の不始末だからこそ、無理を承知で言います。俺に…ケツ拭く機会を下さい」

「…言うは易し。君のチカラ如きで何が出来る？」

「…出来る事が、出来ます。俺が出来ると思う…全てが」

今はレーメをいたく気に入ったユーフォリアが望ごとレーメに抱き着き、優しく微笑みながらその蒼い髪を撫でる望、それに眉をヒクつかせる世刻ハーレムの面々を捉えている。

「…言質［げんち］はとったぞ、巽空。その言葉、努々忘れるな」

「…了解、有難うございます」

そうして交渉が決着を見た時、ルプトナの声が上がった。

「なら、〝家族〟にしちゃえばいいんじゃないの？」

それはユーフォリアに向けられた言葉、行き場の無い彼女に向けた言葉だ。

それに最初は皆、『記憶の無い少女を戦いに巻き込むのはどうか』と難色を示したが、ユーフォリア本人がそれを望めば後はリーダーの裁断を仰ぐのみ。皆がサレスを見遣る。

「ん？私は別に構わないが？」
「ホントですか！？えっと、じゃあ、駄目でしょうか？」
やけにあっさりと認められ、彼女は皆を見詰める。無論リーダーが良いと言ったのだ、反論など出ようも無い。
「まぁ反対する理由も無いわね」
「へへ、新入りが増えんのは大歓迎だぜ」
「置いてっちゃうのも、可哀相だし…」
「楽観的かも知れぬが、何とかなるように思えるのぅ」
それに元々この一団、底抜けのお人よし集団だ。記憶喪失の、年端もいかない女の子を放っておく事など出来る筈が無かった。
「一一という訳で、決まりだね！ユーフォリアは今日からボクらの家族！」
「あ…は、はいっ！宜しくお願いしますっ！」
ルプトナの宣言に、保健室は熱烈な歓迎ムードに包まれる。ユーフォリアは皆と握手したり、頭を撫でられたり大忙し。
「……」
そんな様子を、サレスは一一鋭い眼差しで。何かを思案するように、見詰めていた。

そして次の日、ものべーはザルツヴァイを発った。ユーフォリアとナーヤを一行に加えた行き先は、支えの塔でレーメが絶の永遠神剣【暁天】の守護神獣『堕天使ナナシ』からインストールされた先。

旅団にとっても未知の世界に…。

The Other Name ?・・・"鳥篭"

…色とりどりのネオンサインに満ち溢れる近代的なビル群。天高く迫り出したそれらは、正に摩天楼と呼ぶに相応しい。

「……」

最も高いビルの屋上の端に腰掛け夜の町並みを見下ろした、神経質そうな風貌のオールバックの青年は深い溜息を落とす。

高層の風は青年の一つに纏めた黒髪と、この風景に似つかわしくない戦国時代のような衣裳の肩当てを揺らした。

見上げれば乱雑に散りばめられた、スモッグに霞む天上の星々。

見下ろせば整然と整えられた、市街の輝きは地上の星々。

…その全てが『虚構［うつろ］』。

憧れ手を伸ばしてみたところで、努力し掴み取ろうとしたところで余りにも空［むな］しい希望の光。

だから――まるでここは鳥篭のようだ、と。青年は作り物の世界を睥睨する。

【――何を、考えている？】

背に負う弓と矢束、そこから響いた声にも応えない。ただ、永劫に変わらぬ町並みを見下ろして忌ま忌ましげに眉をひそめたのみ。

【美しい夜だ、主の望んだままの世界はかくも美しい】

業を煮やしたそれが黒い光を放ち、翼の内側に数多の銀河を瞬かせる巨大な蝙蝠が姿を現した。
慇懃な口調、しかしその根底に流れるのは一一悪意。

「一一煩い…」

それを一切意にも介さず、青年は恫喝するような声を掛けた。
『もう喋るな』と、言外に意を込めて。

【…主よ、迷う必要など無かろう。己が望むのなら、その道を突き進むべきだ】
「煩いんだよ、黙れと言っているだろう!!」

それでも紡がれた言葉に、青年は激昂した。背後で羽ばたいていた守護神獣を一喝すると、勢い良く立ち上がった。
怒りのままに青年は己の神獣を殴り付ける。威力には一切、手加減を見出だせない程。

「貴様に言われなくても、俺は俺の望むままに生きている!俺は…俺だ!!」

叫び、真っ直ぐ見詰めたその先には神獣の紅い瞳。怒りも悔しさも映す事無い紅は、既に諦観の域。

この神獣は既に、主に対して何の期待も抱いていないのだ。

【…ならば、よい。そのままに己が道を貫かれよ】
「当たり前だ、この世界の在り方こそ俺の望む世界、ならば迷いなど一一」

青年の言葉が終わる前に、世界が”終わった”。一瞬の静寂の後、自らもそれに巻き込まれる事を自覚しながら――

【…ああ、好きなだけ繰り返せばいいとも。この錆びきった歯車を気の済むまで……この鳥篭が朽ち果て崩れ落ちるまで幾らでも廻し続けろ……】

その怨嗟の呟きを最後に、また。

【――…小物が】

…また、『夜』が始まった――…

The 57 th Name.・・・"合縁奇縁"

朝早い…とは言っても、分枝世界間を航行中のものべーの作り出す擬似太陽が昇って間もないだけの物部学園の廊下を一人歩く空。

（平和だな）

【平和ですね】

脳内に電圧として潜むレストアスとの会話も弾まないくらいに平和だ。

――なんせ、目的地まで後一週間は有るらしい。暇で躯が鈍りそうだ…

欠伸を噛み殺し肩を廻しながら通り抜ける教室からは、何の音も聞こえない。いや、学園全体から感じられる人の気配が余りに希薄。

――そりゃそうだ、何せ学生や教員は誰一人居ない。ものべーに乗っているのは旅団の、更に神剣士のみ。物部学園関係者は皆、魔法の世界で待っている。

【……お言葉ですが、オーナーは神剣士では在りません】

「……」

氷点下の突っ込みを久々発動の『ワードオブブルー』で無視し、空は人気の無い廊下を歩き続ける。

――俺達が向かうのは間違いなく敵の策の中だ。暁が世界ごと物部学園を破壊しても構わないと言わんばかりの行動をした事を考えれ

ば、無理してでも置いて来る事こそ正解だったと言えるだろう。

【火中の栗を拾うのは、それが出来る者だけで良いですからね…】

（ああ…でも、妙にあっさり受け入れられたよな）

思い出す学生達の姿、もっとぶー垂れられると思っていたのだが、拍子抜けするくらいあっさりと学生達はそれを受け入れたのだ。

【流石に危険だと解ったからでしょう。先の闘いで戦闘に加わっていなかったとはいえ、避難誘導などは行ったのですから】

（そうだな…それにまぁ、俺達が帰れなかったとしても、魔法の世界に残ってるあいつらは支えの塔の機能さえ戻れば帰れる）

コツコツと、足音は何処までも遠く響き、自分以外の存在が消失したような不安感を想起させる。

【…オーナー、情けない事を言わないで欲しい。闘う前からそんな事でどうするのですか】

（…もしもだよ、もしも。俺だって死にたかないさ……闘うとも、全力で一一生き延びる）

叱咤に強がりを返す。今まで通り、いつも通りに。

【…それなら良いのです。貴方は貴方の道を貫いてください。私は…そんな貴方の道を切り開く為の剣ですから】

（ああ、有難うよ…）

神造の朝陽が注ぐ廊下、そこはかとない充実感を感じながら。角を曲がれば一一出くわしたのは望と希美。

「あ、おはよう空」
「おはよう空くん、朝早くからご苦労さま」
「当番だしな…ところでオーダー有るか？出来る限り適えるぞ」
と、そこでもう一人の影。小さなそれはレーメだ。制服姿の三人と天使は自然と並び歩く。

「とか言って、本当はメニューを考えるのが面倒なだけだろう」
「ジャリ天お前…いつから俺の心まで読めるように」
「なるかっ！！」

そんな、どうしようもなく他愛無い会話を交わしながら。三人は食堂の扉をくぐったのだった。

食事当番だった空はかなり遅めの食事を、寝坊して遅く起きて来たソルと相席で摂っていた。因みに火を使った為、空は上着を脱いで黒のTシャツ姿。

「…空ィ、コレやるわ」
「何だ、お前納豆嫌いなのか？」
「このネバネバしたのが何ともな…代わりに茹で玉子くれよ」
「ざけんな、浅漬けだ。それ以外はリリースする」

因みに今日のメニューは味噌汁に白いご飯、納豆と生ｏｒ茹で玉子、焼鮭と胡瓜の浅漬け。修学旅行の朝ご飯みたいに純和風だ。
空は鮭の身を崩して醤油を掛け鮭ご飯に、ソルは玉子掛けご飯にしている。

「おーっす、ソル、空！今日も雁首揃えて女っ気無しのシケた面してんじゃん、カッワイソー」

そこに、制服姿のルプトナが現れた。手に持つ盆の上には朝食メニュー、違いはただ一つ、女性限定メニューの餡蜜が有る事。

「そーなんだよ、俺ら三人に足りないのは女っ気なんだよなぁ」
「三人も揃ってカッサカサ、ピーカン照りの女っ気無しだぜ」
「そうそう、ボクらってば三人揃って女っ気無しの不毛な砂漠みたい…」

淋しげに呟く二人。それにルプトナはソルの隣席に座りながらウンウンと頷き、直ぐにジトッと二人を睨みつける。

「…っておい、お前らそれどういう意味だよ。ボクは紛れも無く女だろ。女が女っ気無いってどーいう事だよ！」

それにソルと空はキョロキョロ周りを見渡した。

「「え、女？何処何処？」」
「ガッデム！お前ら後で覚えてろよ！」

プンスカと頭から湯気を出しそうな勢いで、ルプトナはご飯を味噌汁にぶち込んで猫まんまにした。

殆ど日常茶飯事だ、この三人のこういう会話は。だから気にする者は殆ど居ない。じゃれあっていると、皆が知っているから。

「一一あ、あのっ！」

「「「えっ？」」」

…だが、一人。少し前に加わったばかりの彼女はそれを知らない。

「け、喧嘩はいけないと思いますっ！！」

キョトンとする三人と違って着崩す事無くきっちりと、卸したての制服に袖を通した…朝食の載る盆を抱えた蒼い髪の少女は。

「あー…いや、今のは要するにだなユーフォリア…」

ちらりと目配せする空、それに応え、ルプトナとソルが口を開く。

「おはよー、昨今どう？」
「ぼちぼちだな、今日もいい天気だぜ」
「…くらいの意味の会話でよ、別に喧嘩してた訳じゃなくて」
「うう、ホントですか…？」
「「「ホントホント」」」

まだ知り合って間もない相手、しかも年上三人に向かって注意を喚起したのだ、よっぽど勇気を使ったらしく微かに涙を浮かべていた彼女だったが。

「…それなら、良かったです」

直ぐに、屈託の無い笑顔を見せたのだった。

「あの、はやとちりしてごめんなさい…」
「いいってば、ボクらが紛らわしい事言ったのがいけないんだし…ほら、そこ座って」

ルプトナに勧められてその正面、則ち空の隣の席に腰を下ろすユーフォリア。ご飯には何処で貰ったのか、ふりかけが掛かっていた。

「んで、どう？何処に何が在るか解った？」

「あ、はい！ちゃんと覚えました。ルプトナさんが解りやすく教えてくれたお陰です」

「そっか、ならいいんだ」

随分と話が弾んでいるルプトナとユーフォリア。どうやら食事の時間が遅れたのはユーフォリアに施設案内をしていたからのようだ。

「…ルプトナの奴、妙に面倒見いいな？」

不思議そうに呟くソル、しかし空には何と無く彼女がユーフォリアを気に掛けている理由が解った。

一一…同じような境遇のこの娘を、放っとけないんだろうな…

しかし、気付いたからといって口にはしない。それは無粋が過ぎるというもの。

「…言い出しっぺだからだろ」

「ああ、そういや」

だから、そう言っておく。ソルはそれで納得したらしく、玉子掛けご飯を掻っ込んでいた。

「何か困ったら直ぐに言いなよ。”家族”なんだから、遠慮なんてしないでさ」

「はい、ありがとうございます」

猫まんまをスプーンで食べながら、豊満な胸を反らして言うルプトナ。それに、器用に箸を使ってご飯を口に運んでいたユーフォリアは笑顔を見せる。

「へぇ…箸、使った事有るみたいだな」

「え？あ、これですか？」

突然横から話し掛けられ、彼女は頭の翼をビクンと動かす。

――あれって…やっぱ…生えてんのか？

まるでびっくりした猫が毛を逆立てるような反応に、逆に空の方がびっくりした。

「何と無く出来たんです。それに、アキさんの使い方を見てこういう具合かなって」

「見ただけで真似できるのかよ、凄ぇなお前…俺とルプトナなんざ今だにスプーンかフォークだぜ」

言うとおり、ソルとルプトナはスプーンで食事を摂っている。現在、箸はマイノリティだ。

「ってか、空は左利きだから参考にならないしぃだたたっ…」

「おめーらは努力が足りねーんだよ。ちっとは見習え…そして俺にどれだけイソフラボン摂らせる気だ。あいつらは女性の味方だぞ」

さりげに納豆を押し付けて玉子を奪おうとしてくるルプトナの手を箸で抓り、撃退する空。

「ネバネバしてます…あの、これってホントに食べられるものなんですか？」

そこで興味を抱いたのか、ユーフォリアは自分の分の納豆に箸を伸ばした。一粒つまみ上げ、細い糸を引くソレをおっかなびっくり見ている。

「まぁ待て。食べ方が有るんだよ…先ずは醤油を加えて、掻き混ぜてみな」

「は、はい…」

実際にやって見せながら、空は納豆をグリグリ掻き混ぜる。真似して続くユーフォリア。

「後は好みで薬味を入れてもいいぞ、因みに俺は刻み葱派だ」

パラパラと葱をふり、空はより粘つく納豆を口に運んだ。やはり同じように葱をふり、ユーフォリアも納豆を口に運ぶ。

「……」

そして、シュンと頭の翼を垂らしたのだった。

「駄目だったか……解った、俺が始末するさ」

「あぅ、でももう箸をつけて…」

「食事はただのエネルギー補給じゃない、旨いモン食って英気を養うもんだ。無理してまで食うな」

「「あーっ！！」」

すっと取り上げて、代わり茹で玉子を渡す。それにルプトナとソルが声を上げた。

「ボクにはくれなかった癖にーっ！」

「俺にもくれなかった癖にー！」

「テメーらは押し付けてきただけだろ。これは詫びだ、俺が薦めて駄目だった訳だからな…あとソル、気色悪いから止めろッての」

四人分の納豆を一つの椀に纏めて掻き混ぜる。これではもう取り戻しようも無い、茹で玉子を受け取るしかないだろう。

「…ごめんなさい、好き嫌いして…あたし、悪い子ですよね」

「…ソレもだ、止めろ」

「えっ？」

落ち込んだ彼女に、納豆を掻き混ぜつつ空は静かに言った。僅かに照れ臭そうに。

「”家族”相手に変にしゃちほこばるな。もっと我を出していい。それでなくてもココの連中はお節介だからな」

「そうだよ、ユーフォリアはボクらの妹なんだから。我が儘くらい言いなよ」

「気ィなんざ使わなくてもいいぜ、自然体でこいよ。俺には実際にハキュレタって妹がいてな、だからか放っとけねぇんだ」

仏頂面を崩さない空に続き、その言葉足らずをルプトナとソルが、からりと笑いながら優しい言葉を以って続けた。

出身世界も育ちもてんでバラバラ、しかし確かな絆を以って繋がる”家族”。

そんな三人を順繰り見詰めて。

「……うん！」

ユーフォリアは、恐らく今日一番になるであろう笑顔で応えた……

The 58th Name…"夜の【蒼穹】【疑氷】せし思い

…ものべーの鳴き声が響く。分枝世界間を抜け、目的地に到着したのだ。生徒会室に集結している一行は、ブリーフィングの真っ最中だった。

「では先ず、この世界の様子を見るとしよう。志願者はいるか？」

サレスの言葉に、幾つか手が挙がった。望、希美、沙月、カティマ、ルプトナ、ナーヤ、空、ソル、ワゥ、ユーフォリアの計十人。

「…流石に多過ぎるな。余り大所帯ではいざという時に機動力が落ちる、最大七人に絞ってくれ」

『え～』という声を無視し、無情にリーダーは告げる。そこで開催されたジャンケン大会の挙句――

「これは…素晴らしい技術力じゃな！」

思わずナーヤがそう叫んだのも納得出来よう。一行降り立った世界は摩天楼。魔法の世界とは違い、元々の直系で進化したような世界だった。

舗装された道路を道なりに歩き、望、希美、沙月、カティマ、ルプトナ、ナーヤ、空は頻りに周囲を見渡している。

「そのうち、全く同じ世界とか在るんじゃないすか？」

「並行世界［パラレルワールド］って奴ね。ふふ、どうかしら」

空の呟きに、意味深な言葉を返す沙月。そんな中、望とカティマが身構えた――刹那。

「――――――――――！！！！！」

耳を聾せんばかりの咆哮と共に、地を揺るがして現れた巨躯は……白い竜。黄色く膿み淀んだ眼差しと強靭な四肢を持つ西洋的なソレ。蜥蜴を巨大化させて翼を持たせた、いわゆるドラゴンだ。

「っ皆、戦闘――」

その敵意を感じ取った望の叫びと共に、全員が神剣を召喚しようとする。空も透徹城から【夜燭】を引き抜こうとした――その間隙を縫って、光が竜を撃った。

「…ッ何だ？」

両脇を駆け抜けていった青白い閃光と紫色の閃光。拡がる衝撃波。

「――下がっていてください！」
「――退け、邪魔だッ！」

そして左側からは落ち着いた、冷静そうながらも温厚な声。対して右側からは荒々しく粗暴そうな、対照的な声が響く。
一行を護り竜と対峙した二人分の影。優しい雰囲気の、茶髪に赤い鉢巻きを巻く左の青年。荒々しく攻撃的な雰囲気の、黒髪を一ツに纏めた右の青年。

「こちらです、早く！！」

そしてもう一人。脇道からこちらを手招きする男の姿が在った。

「今のうちに逃げるんだっ！ガーディアンは僕達が引き付けておくっ！」

「グズグズするなよ?早く塀の向こうの安全な場所に行けッ！」

そのどちらもが、東洋めいた戦国風の装束に身を包み、型の違う和弓を所持している。

一一あれは…神剣か。

「……ショウ、油断するなよ?」

「へへ……お前こそしくじるなよスバル?ドジった方が後で一杯奢るんだぜ?」

「了解、じゃあ行こうっ！」

短く言葉を交わし、青年二人…スバルとショウは、ガーディアンと呼んだ竜の攻撃を躱した。猛烈な爪の一薙ぎ、もしも当たれば一瞬で切り身の上に挽き肉だろう。

だが、こういった闘いに慣れているらしい二人は全く危なげが無い。その連携たるや、竜は翻弄され通しだ。

「…って、見取れてる場合じゃねェな、撤退だ望！」

「ああ、希美、ものべーをあの塀の向こうに移動させてくれ！」

「あ、うん！」

一行は、脇道の男の先導に従って走る…。

申し訳程度に装飾された、簡素な酒場。場末のバーを連想させるそこに、一行は集まっていた。

「初めまして、僕の名はスバル＝セラフカ。このスラムの自警団の纏め役をさせて貰っています」
「あ、有難う。俺は世刻望と言います」

そこでは先程の青年…自警団のリーダーのスバルと一行の代表である望が握手を交わしている。

「…俺はショウ＝エピルマ。此処では誰もが自由だが、面倒は起こさないでくれよ」
「こら、ショウ…すみません、僕が甘い分彼は厳しくて…」

もう一人の青年…ショウの言葉をスバルが嗜める。性格的に釣り合いの取れた、中々良いコンビのようだ。それを見る望の目には、懐かしさを押し殺したような色が有る。恐らくは己と絶の姿を重ねたのだろう。

「異世界からの旅人、ですか…良いなぁ、僕も何時かは別の世界に行ってみたいです」
「俺もまさか、自分がこんな立場になるとは思ってもみませんでしたよ」

会話が弾んでいるスバルと望。他に異世界人は見なかったかと聞いてみるが、絶と彼らは関係ないようだ。眺めながら思案に耽っていた空。その肩を叩く、篭手に包まれた掌。

「…よう、お前ら一体どんな旅してんだ?随分いい女ばっか連れてるけどよ」

ショウだ。状況説明し合っている望とスバルから離れて、同じ男の空と会話しに来たのだろう。

「でしょう?まぁ、全員あっちのにホの字ですけど」

皮肉げに肩を竦めて望を顎でしゃくって見せる。それにショウは。

「ハハハッ、そうなんだよなぁ。女って奴ァあ、ああいう現実を見てない理想を語るのに靡きやがる。やってらんねーよな、実際」

妙に実感の篭った言葉を零した。それに、空は一瞬キョトンとした顔をして。

「…アンタも、苦労してんだな」

「…お前もな」

同時に溜息を落とした。

「ショウさん、だっけ?どうもアンタが他人とは思えない」

「ショウでいい、俺もだぜ…えっと?」

「巽だ、巽空。空でいい」

「よし、空!今晩は俺が持つ。呑もうぜ!おおい、酒持ってきてくれ!」

カウンターに向かって呼び掛ければ紅い髪と瞳に露出の多い服を着た、魔法の世界でも見た事のあるような女性が答える。

一一まぁ、一つの世界でも三人同じ顔の人間が居るんだ…分枝まで入れたらどんだけ居るか解ったもんじゃない。遺伝子の組み合わせにも限界は有る、偶然に偶然が重なっただけだろう。

運ばれてきた酒を一気に呑み干し、ダンダンと。二つのグラスが勢いよくテーブルを叩く。それを充たしていた小麦色の穀物酒は、もうカラだ。

「ったくよぉ、こっちだって好きでこんな釣り目に生まれた訳じゃねーんだよ。それを『怖い』だの『ガラ悪い』だの好き勝手言いやがって…俺はスバルの引立て役かっての！」

「そうだそうだ、好きで天パに生まれたんじゃねーよ！俺だって、俺だって風に靡くくらいサラサラヘアーに生まれたかったわ！」

ショウと空は愚痴を零し合う。そこに更なる酒が届き、二人はまたもグラスを打ち鳴らしてイッキ呑みした。

「あ、あの…二人とも、もうその辺にしといた方が」

「「うるせーっ！呑まずにやってられっかー！！」」

スバルの言葉も届かないらしい。

「おーい、空？俺達は帰るけど」

「俺はもう少し呑んで帰るから、心配しないで帰ってくれー」

「程々にしときなさいよー！」

そうして空を残し、物部学園の一行は帰って行った。

夜気の底を泳ぐようにフラフラと。千鳥足の空はものべーに転送されて、生徒会室へと歩いていた。

「うーん…気分良いぜ…」

ーーどのくらい呑んでたかは覚えてねーけど…そろそろ帰らねーとな。会長の制裁も怖ェし。

見上げた先には、霞む星々。都市部からは見えなかったが、まるでプラネタリウムのようだ。

ーーしっかしショウの奴、酒に強かったな…ずっと顔色変わらなかったぞ。

手洗い場で水を飲み、一息ついて。なるべく酔いを醒まして生徒会室の扉を開く。

「ーーあ」
「ーーお？」

しかしそこに居たのは、沙月でもサレスでも無く。

「すぅすぅ…」

椅子に腰掛けた望と、望にもたれ掛かるように眠るユーフォリアだった。そして望はユーフォリアの頭をずっと撫でている。

「…お前、守備範囲マジ広いな」
「ばっ、誤解すんなよ空！これはユーフィーがだな…」

「ほほー、聞きましたか姐さん。ユーフィーと来ましたぜ？」
「本当ねぇ、ちょっと目を離した隙に…望君の狼さん」
「ってヤツィータさんまで！？」

二人掛かりの弄りに、流石に望も立ち上がって誤解を解こうとする。
しかし――

「…う～ん…もっとしてください～…」

それをむずがるように、ユーフォリアがしがみついてぐりぐり頭を寄せる。もっと撫でろと言う事だろうが。

「「……」」
「……待っ！」

空とヤツィータは目配せをすると、何も言わずに扉を閉じたのだった。

翌日、明けない夜の底を歩き出して暫く。それが果たして日常なのかを探る為にスラムの町並みを眺めるソルにタリア、ヤツィータにユーフォリア、クリスト五姉妹。

「んじゃあ先ずは酒場に…ウプッ気持ち悪…」
《だ、大丈夫ですかタツミ様？》

気遣ってくれたミゥに手振りで謝意を表し、先導役の空は見知った顔を見掛ける。

「どうもスバルさん、ショウ」

そこに居たのは、丁度店に入ろうとしていたスバルとショウ。スバルの後に続いて入ろうとしていたショウに、空は気軽に声を掛けた。

「…ん？ああ、空――…」

振り向いたショウは答えようと口を開き――まるで幽霊でも見たかのように目を見開いた。

「えっと…済みません、どちら様でしたか？」

「はい…？」

そして同じく振り向いたスバルは、初対面の相手に向ける眼差しを見せた。

「えっと、スバルさんとショウでしょう？昨日ガーディアンから助けて下さった…」

「そうだったかい、ショウ？」

シラを切っている風ではない、そもそもそんな必要が無い。スバルは完全に困った顔になり、親友であるショウに言葉を向けた。

「…知らねェな。記憶違いだろ」

そのショウは、一行を睨みつけるような…圧迫感すら感じられる視線を向けていた。

「いや、そんな筈は…昨日一緒に酒まで――」
「――知らねェって言ってんだろうが！ゴチャゴチャ訳の解らねェ事言ってんじゃねェよ！！」

食い下がる空、それにショウは苛立たしげに舌打ちする。くしゃりと頭を掻き、隠す事無く敵意――彼の永遠神剣を向けた。

「てめぇら、さてはシティの廻しモンか?！俺達を探る為にスラムに潜入したスパイだな！！だったら教えてやるよ、その命と引き換えにこの【疑氷】のチカラをな！！」

引き絞られる弓、第六位【疑氷】の弦がミシミシと軋む音。突き付けられた鏃には、紫色の精霊光が纏わり付く。

「止めないか、ショウ！」
「ッ…！」

その矢を掴んだスバル、これで射［う］ち出される事は無い。ショウはそれを振り払うと荒々しく酒場に入って行った。

「済みません、いつもはあんな事をする奴じゃ無いんですが…」
「…いえ、良いんです。こちらこそお騒がせしました。どうも人違いだったみたいで」

言って頭を下げると、空は呆気に取られっぱなしの神剣士達を置き去りにせんばかりの速足で歩き出す。慌てて後を追う九人。

「空、何だったんだありゃあ」
「アンタ一体何したのよ、あのショウとか言う奴凄い怒ってたじゃない」

「って言うか、何なんですかあの乱暴な人…いきなりあんな危ない事して」
「……」
ソルとタリア、ユーフォリアの言葉にも応えずに。空はただ物部学園に向けて歩き続ける。
一一何だ、この世界は…夜が明けないどころの騒ぎじゃない。まるで……
「…まるで昨日が無かったみたい、ね」
そのヤツィータの呟きを、空は暗澹たる気持ちで聞く。いつしか、二日酔いなど醒めていた。
「何故だ…何故、記憶が…」
酒場の窓から、それを眺めていたショウ。口角を歪めると、反吐を吐くように。
「セントラルめ…何をやっていやがるんだ…！」
まるで呪うように、シティでも一番高いビルを見詰めた。
定時の報告を受けたサレスは、校長室の皮張りの椅子に沈み込む。ふう、と溜息まじりで。

「時間がループする世界、か。全く…次から次に問題が出て来る」

…それが、この世界の正体。ある時間を境に同じ時間を永遠に繰り返す、まるでテレビゲームのような世界。

「…ふ、我ながら言い得て妙だな。オープニングからエンディングまでを繰り返し、また同じ内容を演じる舞台劇…」

現在、神剣士はクリスト達を除いて情報収集に出ている。しかし未だに解決策は見当たらず、加えてものべーの不調が追い撃ちを掛ける。

そしてそれは本題ではない、この世界に来た理由は別に有る。

「暁絶…何を考えている…？」

苛立ちがこの世界に向かわせた張本人に向くのも、仕方ない事だろう…。

…その頃、シティの摩天楼。その最も高いセントラルタワーの屋上に。

《一一いやぁしかし、良い世界だねぇ此処は》

「そうかしら？陰気臭くてマナが薄くて…不快でしょうがないわ」

「機械の貴様には関係の無い話だろうがな」

闇から漏れ出るように現れた三人。朱い覆面の偉丈夫に翡翠色の踊り娘一一刃金の機神。

《ククッ、違いねぇ…何せオレの【幽冥】は則ち『光が弱く薄暗いさま』を象徴してんだからねぇ》

その隠蔽能力に、地上を徘徊するガーディアンは気付く様子すらも無い。

「さて、それじゃあ『理想幹神』達の指令通りにやるとしましょうか」

不快そうな表情のままのエヴォリアの呟きに、ベルバルザードは表情を隠す覆面の奥で舌打つ。
どちらも、本意ではないと言うかのように。

《…お二人さん、お二人さん。そんな生き方して楽しいかい?》

それを茶化すように、機神はヘラヘラと呼び掛けた。当然、それに返るのは怒意に満ちた視線のみ。

《クク、生きてる内に楽しまなきゃあ損ですぜ?死んでからじゃあ悔しがる事も出来ねぇ》

が、機神はあっさりそれを受け流す。屁でも無いと。

「死人が言うと一味違うわね。でもお生憎様、私達は未来を見据えて生きてるのよ」

だから、彼女はそう言葉にした。この怨霊めいた神に反駁して。

《一一『未来』ばっか見てると、『今』に足元掬われてすっ転びま

すぜ姐御？『今』が有るからこそ『未来』がある。ちゃんと石橋は叩いて渡らねぇと》

「っ…！」

それすら、嗤［わら］って。機神は両腕を大きく拡げて夜天を仰いだ。顔の無い、夜鬼めいたその姿の背に翳…彼の永遠神剣【幽冥】が悪魔めいた翼として吹き出す。

《とにかく、此処がオレの試験場…しっかりお役に立ちますよ…》

胸部の大型リアクター内部、紅黒い忌血の精霊光が輝き――徒花のオーラフォトンが展開された。

《――光をもたらすものが一ツ、【幽冥】のクォジェがね！！》

その祟り神の『洫夜［きょくや］』が、『極夜』を浸蝕する――…

The 59th Name・・・"守護者"

青白い街灯に照らされながら舗装された道を歩む二人。くたびれたマオカラースーツにこれまた安物の焦茶色のトレンチコートを肩に掛けた男と、高級ブランドらしいワンピースにやはり高級ブランドらしい濃紺色のダッフルコートを羽織る少女。

「潜入任務、上手くいくといいですね、空さん」

「あのな、本当に上手くいかせたいならそういう発言は止めてくれ、ユーフォリア…」

今彼らが行っているのは情報収集。スラムは望達が担当し、警戒の強いシティにはこういった任務に慣れている空が担当する事になったのだが…。

「望さんが入ってみた時は直ぐにガーディアンが襲って来たそうですけど…今のところ静かですね」

…何故かユーフォリアと組む事になった。なったと言うか、されたのである。というのも数時間前、望がユーフォリアの頭を撫でていた件が、ヤツィータが口を滑らせたかで知れ渡った後に。

『ねぇ巽くん?あの娘は君が連れて来た娘でしょう?君が責任持って面倒見るのが筋じゃない?』

『いや会長、別に俺が連れて来た訳じゃあイタタタタ!足踏んでる、小指がへし折れるッ!』

『解らぬなら教えてやる、たつみよ…もうこれ以上のぞむダービーの出走馬はいらぬのじゃ』

『グァァッ!ネコさん…マジ、小指が砕けて死ぬ…!』

…と、生徒会室の隅に押しやられ私刑執行［リンチ］を受けたという訳だ。希美やカティマ、ルプトナも同意見らしく四面楚歌。

「空さん？聞いてますか？」
「ああ、効いてる。まだフラフラする」
「？」

ステップを踏み、嬉しそうに歩む少女に溜息を零した。物珍しげに周囲を見渡しているユーフォリアに対し、空は注意深く辺りを観察する。見様によっては歳の離れた兄妹……は無理が有るだろう。

――やっぱり女の子か、新しい服に袖を通すのが嬉しいんだろう。潜入の為に服を買いに行った辺りからこの調子だったからな…。

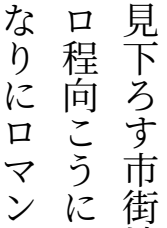
（…此処まで喜んで貰えたなら、良しとするか。はっはっはっ…）
【そうですね。買った後にカラの財布を握り締めて号泣しなかったら格好良かったですよオーナー】
（――『ワードオブブルー』）

――レストアスが気付いたんだが、この世界の人間は管理チップでも埋め込んでるのか、特定の電波を出している。それをレストアスで代用している訳だが…実際に目視されたらどうなるか判らない。…それにしても妙な世界だ。人が少な過ぎる上に、すれ違う人間も何処か虚ろな眼差しだ。まるで硝子玉のように作り物めいた瞳。

「空さん、何だかこの世界…気持ち悪いです」
「…同感、早くおさらばしたいもんだ」

そうこうしている内に高いビルに辿り着いた。全景を確認しようと

自動扉の前に立てば――

「…  」

…いつの間にか二人の背後に立っていた、緑の鱗のガーディアン。
『守護者プロリムタ』の黄濁した竜眼と、硝子製の自動扉を介して見詰め合った。

［バレた…んですか？］
［解らねぇ…取り敢えず動くな］

小声で囁きあう間にプロリムタは鼻を鳴らして、まるで臭いを嗅ぐように空とユーフォリアを検査している。巨大な牙がすぐ脇でギチギチと、剣が鍔ぜり合う時の音を鳴らした。

そして――満足したのか、空の三倍、ユーフォリアに至っては五倍近い巨躯を揺らして。のしのしと何処かに歩み去って行く。

「「……はぁ～…」」

思わず同時に溜息を落とす。正直、生きた心地などしていなかった。一体でもあの威圧感だと言うのに、これがまだ他にも居るというのだから恐ろしい。

自動扉を開き、最上階まで階段で移動する。屋上の扉を開けば、眼下に見下ろす市街地。
一キロ程向こうには更に高いビルが在るので百万$とはいかないが、それなりにロマンチックな夜景ではあった。

「あ、あれ…さっきのガーディアンですよ」

ユーフォリアの指差す先には緑の竜。相変わらずのしのしと道路を我が物顔で闊歩している。通行の邪魔な事、山の如しだろう。

「…あそこには白、あっちには黒、青、赤…何体居るんだよ」

「それぞれが属性色を表してるんでしょうか？」

望遠鏡で確認した限りで全五体。青の竜『守護者ジルパース』に、赤の竜『守護者レクーレド』。

緑の竜『守護者プロリムタ』と、黒の竜『守護者ゼム』。そして、白の竜『守護者エクルトア』だ。

空は溜息混じりでメモ帳を取り出し、六色ボールペンで通りの見取り図と守護者の特徴を記入していく。

「…さて、今日はこの辺にして退却といこうか。引き際を誤っちゃ素も子も無いからな」

「はい、判りまー」

ボールペンとメモ帳をポケットに入れて切り出した空に向き直るユーフォリアの目に映ったモノ。

このシティで最も高いタワービルの屋上に四基在る、赤く点滅するライトシェードの一番近い一基の真下からー

「ー危ないっ！！」

「ーーッ！！」

…『光』が、撃ち込まれた。

「ッ…何だ、今のは…」

「いたた…大丈夫ですか」

ユーフォリアの声に、辛うじて難を逃れた空。その二人が最初に立っていた箇所は――迫撃砲でも着弾したみたいに吹き飛んでいる。

「┣┳┃┻┳┫╋!!」

「╋┫┳┃┫╋┻!!」

そして、そんな事態になれば当然ガーディアンが反応する。地上からは複数の咆哮が上がっているが――やはりそのガーディアンが、一番乗り。

「╋┻┳╋┫┃┣!!!」

強靭な爪が屋上の手摺りを握り潰し、腐食させて。緑の竜、守護者プロリムタが現れた……。

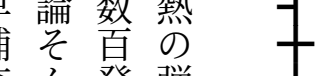
市街地を翔ける一条の蒼い閃光。ビルの間を縦横無尽に飛び抜けて看板や信号機、電線に高架をかい潜るそれは――

「振り落とされないようにしっかり掴まってて下さい!!」

…ユーフォリアだ。サーフボードのような形状に変型し後端からマナを噴出して加速する【悠久】に乗っている。その背後に、全身にレストアスを冷気と電撃の入り混じる青の法衣『ハイパートラスケード』として纏う空。

「――来るぞッ！！」

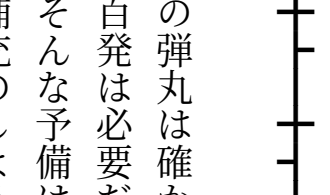
角を曲がった刹那、背後に注意を向け続けていた彼が声を張り上げた。同時に窓硝子を砕きながら。

「  ！！」

巨大な竜翼を羽撃［はばた］かせてプロリムタが追い縋り、鋼鉄すら紙のように斬り裂く剛腕を一閃させて空間を『薙ぎ払う』。辛くもそれを躱したユーフォリアだったが、烈風に煽られてビルに衝突しそうになった。

「流石はドラゴンだな、穹［ソラ］もテリトリーかよ！」

そうして、腰から拳銃を引き抜く。フォース重視の銃弾が装填されている【比翼】の引鉄［トリガー］を引く。

「  ！」

灼熱の弾丸は確かにプロリムタに痛みを感じさせたが、焼石に水。後数百発は必要だろう。

無論そんな予備は無い、何故なら【幽冥】の『再製能力』が無い今、最早補充のしようが無いのだ。

――クソッタレ…！！予備弾倉は【比翼】五本に【天涯】と【地角】が合計九本。【連理】六つと【海内】四つだけだぞ…！！

「なら…やるぞレストアス！」

【了解、オーナー！】

三度取り出した拳銃は回転式、コルトパイソン型の【連理】。凍えた雷の集合体である【夜燭】の神獣エレメンタル＝レストアスが最も親和性を持つ蒼の魔弾が装填されている拳銃に――防御に回していた青の雷が纏わり、稲妻が増幅されていく。

――まだだ、まだまだ…！！

巡航速度と旋回性能は【悠久】の方が上だが、一撃の破壊力と防御力、ここ一番の加速性能はプロリムタの方が上だ。勿論、【悠久】には空が乗った為の重量増加も有るが。

ならば小細工は通じない。大威力の一射を叩き込み、隙を作る。

「┴┼┬┴┼！！！」

咆哮の後に羽撃き、緑の爪が風を斬る。戦闘開始よりその身には、あらゆる生物を死滅させる猛毒のフィールドが展開されている。もし爪先でも掠れば――神剣士はともかく、ニンゲン如きは即死だろう。

「――ユーフォリア！上だ！！」

「はいっ！！」

再び爪を躱し、今度は上空に翔け昇る。その先に在ろう満天の星々は、真実『プラネタリウム』だ。繰り返すこの世界で見える星の光は、全て紛いモノ。

「┴┴┬┴！！」

咆哮に気を取り直せば直下に飛び上がって来る竜。その口腔に高密度のマナが充填される。竜の息吹［ブレス］を放つつもりなのだ。

「黛藍［タイラン］の凍てつく雷刃よ――『サンダーストーム』！！」

だが、先に空の充填が終わった。撃鉄［ハンマー］が墜ち、青い三重環の魔法陣が展開された銃口から『ライトニングボルト』を増幅した極低温の雷の嵐が放射される。

「┻┳┳┳┳┳!?!」

羽撃いたばかりだった上にマナのチャージ中であったプロリムタはそれに対応出来ず、左腕を犠牲に『受け止める』。

毒性のフィールドすら焼き貫いた雷の嵐、しかしまだだ。竜という種の持つ驚異的な生命力、それがまだ潰えない。

腕一本を焼き尽くされようとも、ただ眼前の敵を滅ぼす事。それだけが彼らが『守護者』と呼ばれる由縁――！！

「――┣┳┳┳!!!!!」

吐き出されたのは、猛毒の霧にて対象を腐敗させて付随する電撃で完全に分解する息吹。プロリムタの『ネイチャーブレス』。

「――今だッ！！！」

「はいっ、いきます！！」

空の声にユーフォリアが反応する。【悠久】を軽く蹴り軌道を――１８０度変えた。

「悠久の光よ、あの敵さんを貫いて――『ライトバースト』！！」

「┼┼┼┼!?!」

ユーフォリアの放った閃光にプロリムタは視力を奪われ、あまつさえ右目を潰されて。飛び掛かって来る二人を捉え損ねる。

ー ー ー ー!!!!!

その二人の間をブレスが貫く。何処までも高く昇って行くそれを見送り、空は透徹城から【夜燭】を抜いてユーフォリアは【悠久】を光の刃を持つ大剣型に換える。

「ー ー『エレクトロンブレード』ッ!!」
「ー ー『プチニティリムーバー』っ!!」

そして降下する加速度、上昇してくる加速度を利用したクロスカウンターを ー ーそれぞれプロリムタの両翼に叩き込んだ。
高空で左翼の骨を砕かれ右翼は切断されれば、後は墜落するのみ。

「┼┼┼┼┼┼┼┼!!」

隻眼の竜はまた高く昇って行く侵入者に憎悪の篭った視線を向けて、届かない右の毒腕を伸ばして。輝ける『地上の星々［シティ］』に向けて墜落して行き、見えなくなった。

「はぁ…はぁ…二体目が来る前に、逃げるぞユーフォリア」
「はふ、はふ…はいぃ…」

荒い息を吐く二人はそれを尻目に、ものべーに向けて飛び去るのだった…

「……やりやがる。まさかガーディアンを撃退しやがるとはな」

タワーの屋上、頭上で光るライトシェードの真下で青年は呟いた。

「……ガードナーも撃退された。やはり奴らは神剣の使い手…」

ものべーに差し向けた尖兵も全て消滅させられている。あまつさえ、自身も傷を負ったのだ。

その瞬間、タワーの下のサーチライトが青年を照らす。戦国風の衣装に身を包む黒髪の、弓を番えた青年――ショウ＝エピルマを。

「…セントラル。スバルの調律は済んだか？」

『ええ、起動可能です。それよりショウ、貴方の修復を…』

「不要だ。俺はまだ戦える…」

響く女性の声に逆らい右腕を握る。そこには剣による傷痕、この為に先程の一射が外れたのだ。その傷痕から覗く――金属の骨格。

「異分子どもを排除し尽くして…この箱庭の平穏を保つ為に…！！」

そこで、全ての住人達が切り替わった。無機質な瞳、まるでロボットのように。それこそがこの世界の実相。永遠に回帰する、機械の

『理想卿［ユートピア］』――…

The 60th Name・・・"明けない夜を越えて"

明けない夜の街中、スラムの東端にある廃ビル『ジェイルハウス』。
そこに旅団の神剣士は集結し、腹拵えしていた。
内容は塩握りが三つに沢庵［たくあん］三枚、スキットルに充たされたミネラルウォーター。

全員が神剣を召喚したままドラム缶の篝火に照らされている。
瓦礫に腰掛けて食べる望と希美に沙月、ソルとヤツィータ、ユーフォリア。地面から突き出た鉄骨等に背をもたせ掛けて食べている空にルプトナとカティマ、タリア。空中に浮遊するユニット内で食べるクリスト五姉妹。

「――作戦は単純だ、この世界の中枢たる『セントラル』を落とす事と…」
「『浄戒』の神名を、セントラルより奪還する事じゃ」

そんな一行の中央に立つサレスとナーヤ。そしてその存在に向けて空は、沢庵を噛みながら疑わしげな眼差しを向けた。

――命からがらものべーに帰還して先ず知ったのは、ほぼ同時刻にものべーがミニオンの襲撃を受けたという事。そして…【蒼穹】のスバルと【疑氷】のショウが敵、しかもガーディアンの筆頭格だったという事。その二人が『浄戒』の神名の一部を持つアンドロイドで、この世界は『セントラル』という演算機械によって制御されているとの事だ。

そして、その情報を齎したのが…彼女。銀色の髪を頭頂で一つに纏めた赤い瞳、黒い衣装の――

「その為の手引きを、私が勤めましょう」

レーメと同サイズの黒い天使……暁絶の第五位【暁天】の守護神獣である『堕天使ナナシ』は、怜悧な声で言い放った。

「いきなり出て来てハイそうですかと従えると思ってんですかい、『敵さん』？」

故に空は、鳶色の瞳に篝火の煌めきを映してその言葉を口にする。間違いなく”家族”ではないのだ、彼が信頼する要素は一切無い。

「信じて頂かなくても結構ですが、この世界を出る為には必要な事。私は指令を全うしたい、貴方がたはこの世界を出たい。利害は一致している筈です」

それに答えて、ナナシも赤い瞳に篝火の煌めき映して答えた。動揺も不服の色も無い、ただそこには決意の色だけしか無い。

「…じゃあ最後に聞かせろ。それは一一暁の為か？」

「……私の為です」

迷いの無い言葉と眼差しに、先に目線を外したのは空。スキットルから水を煽ると、後は腕を組み眼を閉じて言葉を発する事は無かった。

走り抜けるドブの戸板が鳴る。進行ルートとしては南の道を選んだ

空とソル、ルプトナ、ナーヤ、タリア、ミゥ、ポゥ、ワゥ、ユーフォリアの九人。
北の道には望と希美、沙月、カティマ、サレス、ヤツィータ、ゼゥ、ルゥの九人だ。

「ソル、ルプトナ！フォーメーション往くぞッ！！」
「「応！！」」

遥か眼前で神剣魔法を発動する赤。対抗［バニッシュ］しようと【連理】を突き出しながら駆け抜けようとした十字路の小路から、黒が飛び出した。
既に刀の柄に手が掛かり、後は抜き放つだけ。

「黒い月…見せてあげるよ」
「クソッタレ…ッ！」

繰り出された横一閃の月の弧を描く居合『月輪の太刀』を、辛くも【夜燭】で防ぐ。そしてその刃先をソードブレイカーのように使って黒の神剣を搦め捕り、動きを押さえ込んだ。

「邪魔するんじゃねェ！せいやっ――『猛襲激爪』ッ！！」
「あはっ…あはは…きゃははは……」

その隙へと、ソルが爪撃を見舞う。紫色の霧に変わり消滅する黒、しかし当初の目的であった赤の妨害に失敗した。

「…疾く駆けろ、灼熱のマナ――『ライトニングファイア』」
「させないっ、バニーッシュ！！」

撃ち出された焔の槍。その神剣魔法に対抗して紡がれたルプトナの

『アイスバニッシャー』。

「根源力を分かつ――『エナジーリーク』」
「へにゃ？ボクに何したのさっ！」

その対抗魔法に向けて、青の対抗魔法が紡がれた。青マナを急速に拡散され、ルプトナの神剣魔法は無力化させられてしまう。

「レストアス！！」
【了解、オーナー！】

圧縮されたレストアスの一部を纏う【夜燭】を、焔槍を打ち砕きながら振り抜けば――舗装の剥げた路面に勢い良く絶対零度の波が放たれた。

「【夜燭】の凍炎、耐えて見せろ――『アイスウェーブ』！！」

実態化したレストアスはそのプラズマの躯を持ち二体を包み、凍り腐らせて焼き尽くした。

「うわーん、ボクちっとも良いトコ無かったじゃんさー！」
「日々精進です、ルプトナさん」

そこに他のメンバーが戻ってきた。他も他で交戦、撃破している。空は凍気で痺れる両手を揉み解しながら口を開いた。

「ッたく…この世界のミニオンはやたらと統率がとれてやがる」
「全くだぜ…牛歩は趣味じゃねーんだがな」

毒づくのも仕方が無い。高速道路『アッパーレイヤー』へ登るここ、

『ヘヴンスステア』まで進軍するのにも一苦労という程に敵の層は厚い。しかもどれもが高度な防御陣形を使って来るのだ。
中間地点であるシティ唯一の入口『サーヴィランス＝ゲート』までこの厚みが延々と続くかと思えば気が遠くもなろう。

「あれはミニオンではありません。正確には『ガードナー』、ガーディアンの下位種です」

そんな空に声を掛けたのは、少し離れた位置から戦闘の推移を見守っていたナナシ。彼の目前まで移動すると、レーメとは違い優雅に浮遊している。

「別にどうでもいいけどアンタさ、望の方に居なくて良いのか？」
「私はレーメに嫌われていますので。近くに居て気を逸らしてしまうよりはマシです」
「なるほど。喧嘩っ早い性格だからな、ジャリ天の奴は」
「『ジャリ天』？…ああ、レーメですか。中々的を得ていますね」

思わず納得した堕天使は物憂げに眼を細めて遠くシティとスラムを隔てる壁、そこに頭を出して見えるセントラルタワーを眺めた。

「浄戒を奪取しない限りこの世界からの脱出は叶いません。そして世刻が浄戒を手にする事は貴方にとっても有益でしょう、巽」
「……」

ナナシの呟きに空は答えない。答えないが、怒りの篭った眼差しを向ける。

「奸計の神が振るった神名を貶る神名、対処出来るのは神名を破壊する神名のみ。それを可能とするのは――」

「…んで、暁の『滅び』は近いのか？」
「……」

意に介さず続けようとしたナナシ、だがしかしその言葉に、今度は彼女が怒りの篭った眼差しを向けた。

「復讐の神が囚われる滅びの未来、神名に命を――」
「…判りました、お互いに無用な詮索は止める方が懸命なようです。このままでは貴方を消したくなりますので」

意趣返しにそれを意に介さず続けようとした空を遮り、ナナシは一方的に話を打ち切る。

「自分から喧嘩吹っ掛けて来といてよく言う。…けどまぁ、そんな場合でも無いか」

視線の先には北のルートを選択した仲間達。これより彼等はアッパーレイヤーに乗り――途中、汚水の流れる川『タールコースト』で立体交差するもう一本の高速道路『ミドルレイヤー』へとショートカットを行う事になっている。

「揃ったな、では行くぞ…第一目標は、これに乗れば一本道だ」

打ち砕かれた転落防止用の外壁を背にするサレスの言葉に、一行は歩を進める。

――しかし順調だな。今のところ交戦したのはガードナーのみ、望達の方も同じらしい。ガーディアンやスバルさん、ショウに警戒してた分拍子抜けだ。

見下ろす先にはミドルレイヤー、その先には黒いタールの川。

「というより巽、普通に着地して大丈夫なのですか？」

「大丈夫だよ、黒ジャリ天。レストアスを凝集してクッションにするから」

「…念の為に聞いておきますが、その『黒ジャリ天』というのは私の事でしょうか？」

「ああ、お前はジャリ天と対なんだろ？だったらあっちは白、お前は黒だ」

と、隣に浮遊していたナナシが話し掛けてきた。それに返した言葉に、ナナシはジトッと不愉快そうな眼をする。

「そうですか、巽とレストアスは切っても切れない縁に結ばれているのですね……そういった関係を『ヒモ』と言うのだと聞いた事があります」

「悔しい…反論出来ないッ…」

そうこうしている内に皆の準備が整う。一斉に飛び降りる皆に合わせて、空はレストアスを纏った。

「ーーー巽、下に…っ！？」

「ッうお！！」

ナナシが叫んだ瞬間、柱の真上の筈の足場が崩れ落ちた。体制を崩し跳躍出来なかった空はミドルレイヤーから逸れ、タールコーストに向け落下する。

ーーしまった、川に落ちたらかなりのタイムロスに…つーかアレに落ちるのは嫌だ、人間として！

廃液の川を見遣り、空は遮二無二ミドルレイヤーに向けて左手を伸ばす。しかし虚しく空［くう］を斬ったその手を――ソルとルプトナ、ユーフォリアに掴まれた。

掴まれた瞬間――脳裡に浮かんだ滄［あお］の波紋。同時に、世界が〝歪〟んだ。

汚濁した川面を見下ろして、空は汗を拭う。篭手を装備していたのも忘れて痛い思いをした。

「間一髪、でしたね」

「本当にな…」

転落する空に右で鷲掴みにされたナナシの不服そうな眼差しが間近にある。バツが悪そうに手を離せば、彼女は浮遊しながら昇っていった。

空も三人に引き上げて貰い、ミドルレイヤーに復帰する。

「えっと…黒…じゃなくて、ナナシさん。いや、さっきは本当にすんません…」

黙り込む堕天使に彼は、流石に謝っておこうと言葉を向ける。しかし、帰ってきたのは。

「…どういう事、ですか？」

「…はい？」

返ってきた言葉は困惑。それもそのはず、今ミドルレイヤーには彼ら五人しか居ないのだ。

「…先程確かに、浄戒を利用した時間流の操作が行われました。ですが私達には何の影響も無い…」

そこに有ったのは怒っているのではなく、彼女にしては珍しい当惑しているナナシの顔だった。

「時間流の操作って…それなら皆は!?」

「別の場所に巻き戻された筈です。規模から測定するに、恐らくは『クロスロード』の辺りまで…」

「…マジかよ。でも、何で俺達は影響を受けなかったんだ?」

「判りません…効果範囲内であったのも確かなのですが…」

同じく困惑しているルプトナとソルの言葉に、ナナシは思案しながらそう返す。

「…なんですか、四人とも?」

そこで四人はユーフォリアを見た。小首を傾げて頭の上に『?』マークを飛ばす、この中で最も神剣の位が高いだろう少女を。

一一だって、そうとしか思えないだろ。コイツの【悠久】の抵抗力が浄戒の強制力に打ち克った、それくらいしか思い付かない。

「…仕方ねぇ、一旦戻るか」

空は頭を掻きながら、情けなさを振り払う。何度この娘に助けられ

ているのかと。

「それが賢明でしょう…こいつらを抜く事が出来ればの話ですが」

ナナシの緊迫した声。振り向けばいつの間にか、前後に立っていたガーディアン”達”。

「┼┼┼┼…」

サーヴィランスゲートから歩み出て進路を塞ぐ、炎熱のフィールドに身を包む守護者レクーレド。

その真正面、アッパーレイヤーの影から歩み出たのは――

「空さん、あたし…あのガーディアンに物凄く見覚えあります」

「寄寓だな、俺もだ……ッたく、これだから爬虫類は…」

再生したばかりの瑞々しい左腕、翼。猛毒のフィールドを纏い、周囲の大気すら死滅させる緑の躯。そして、烈しい憎悪を映す陰湿な黄色い隻眼を見開き、巨大な剣歯［けんし］の無数に並ぶ顎［アギト］を拡げて。

「…┼┼┼┼┼┼┼┼!!!!!」

足場を支える柱を砕いた張本人、退路を塞ぐように立ちはだかった守護者プロリムタが咆哮した。

クロスロードまで巻き戻された一行は、再度ヘヴンステアを目指

して進行していた。その最中、望はサレスに問い掛ける。

「どうなってるんだ、これは…」

「恐らく浄戒による時間流の操作だ。だが何故ソルラスカと巽、ルプトナとユーフォリア、ナナシはその影響を受けなかったのか…」

しかし、サレスの答えも要領を得ない。巻き戻しについては理解できている、だが何故あの五人だけがそれを逃れられたのかは理解出来なかった。

「ナナシが何かしたのではないのか？もしくはユーフォリアが、以前意念の光を打ち消したようにな。或いはイノシシやボクッ娘か？あの二人なら神名の強制くらい、気合いで何とかしそうだ」

「あのな、レーメ…幾ら何でも気合いは無いだろ…」

「では天パが何かしたとでも言うのか？それこそ有り得んだろう」

思案に暮れるサレス。その眼は遠く、見えないモノを見るような眼差し。

「――サレス様っ！！」

タリアの叫びに眼を上げた先。目的地のヘヴンスステアには、この世界の住人達…数百人規模の武装したアンドロイド達で構成される軍隊とガーディアン…青の守護者ジルパースと黒の守護者ゼム、白の守護者エクルトア。そして――

「待ち侘びたぞ、異分子ども！！」

「……」

それらを指揮統率し引き連れる神剣士…第六位【疑氷】のショウと

意志の見えない無機質な瞳をした、第六位【蒼穹】のスバルが立ちはだかった。

繰り出される猛烈な勢いの竜爪。灼熱を纏った爪は風を斬りながらユーフォリアを狙い、割り込んだソルに止められる。彼の世界で信奉される神が持つという牙を象徴した防御、『神牙』によって。

「ッのヤロウ、俺をマジにさせたな!!」

それで”爪自体”は無力化された。だが更に、レクーレドが身に纏う超高温フィールドの余波…焔風が二人に襲い掛かる――!!

「――んっく…チカラを貸して、ゆーくん!!」

それを、ユーフォリアが展開した光の盾『オーラフォトンバリア』が相殺する。もし彼らが永遠神剣の契約者でなければどうなっていた事か。

「┼┼┼┼┼!!」

「――クソッタレ!!」

プロリムタの毒爪を受ける事も出来ず、見躱しで回避するしかないこの男のように――。

「――勝つ事を考えている場合ではありませんね。ただ生き残るだけ…」

冷気と雷の法衣である『ハイパートラスケード』の上位スキル。受けた攻撃に対して炸裂する事で反撃するリアクティブアーマー、氷塊とプラズマの複合装甲である戦鎧『スパークレシーブ』により、

吹き付ける毒風は焼かれて無力化されている。
だが、もし当たってしまえばその雷氷の鎧も、剛腕と爪に砕かれてしまうだろう。

「加えて、即死モノの猛毒です。しかもこちらの攻撃は一一」

そこで突き出された腕をかい潜り、カウンターで【夜燭】の黒刃を一番柔らかい腹部に叩き込む。
耳障りな音を立て、数枚の鱗を断ち切って一一表皮に切り傷一つ。
寧ろ、剣を打ち込んだ空の腕の方がダメージを受けたくらいだ。

「一一ほぼ無効。そもそも神剣士でも精一杯の相手にニンゲンが立ち向かえる訳が無い…」
「ああもう、耳元でゴチャゴチャ煩せェッ!!滅入る事言うくらいなら『頑張れ』とでも言っとけ!!」

耳元で冷静に彼我の分析していたナナシにツッコんだ瞬間、振り下ろされようとした毒爪に三本の氷の矢が突き刺さる。

「あっぶな!揉めてる場合じゃないだろっ!!」

ルプトナの『アイシクルアロー』に怯んだ僅かな隙に前転で離脱して一旦距離を取れば、猟犬に追い詰められた羊のように四つの背中が合わさった。

「うう、このままじゃ駄目です…どうしましょう…」
「ヤベェぞ…とんでもねぇ強さだ、コイツら」
「って言っても、これじゃあ逃げられもしないじゃんか」
「……」

二体のガーディアンに挟撃され、ミドルレイヤーが更に狭く感じられる。ジリジリとにじり寄って来る猛毒の竜と灼熱の竜に、思考が追い立てられる。

――考えろ……この窮地を脱するにはどうすればいい？前は一体のガーディアンから逃げるだけで精一杯だったところを、二体が同時だぞ…！！

弱気に押し潰されそうになる背中に感じられた温かみ。息づくその存在達…”家族達”に、『諦める』選択肢などあっさり切り捨てた。

――…決まってる。相手が竜でも神でも、俺の敵なら全霊を持って太刀［たち］向かうだけだ。

たった一歩ずつでも、弛まずただ真っ直ぐに空［そら］を吹き抜ける――俺は…天［あま］つ風だ！！

強く頬を叩く。虚勢でも構わない、覚悟さえ決めれば後は――彼の壱志［イジ］を貫くだけ。

『不撓不屈』、それだけだ。この男の取り柄など。

その鳶色の瞳に燃え立つ気炎を見詰め、諦めない意志を汲み取り。

ナナシは溜息を落とした。

「…仕方ありませんね。時間を稼ぎなさい、私が援護します」

「…出来るのかよ」

「不可能ではありません、貴方達の頑張り次第ですが」

ナナシの瞳を見詰める。赤い瞳はどこまでも深く、その真意を読ませない。

「…どの道このままじゃ嬲り殺し。オーケー、”利用”させて貰う」
「…一々癪に触る言い方をする人ですね」
「お前が言うな黒ジャリ天…テメェら、往けるな？」
「…へッ、誰にモノ聞いてんだ？俺は旅団の特攻隊長ソルラスカ様だぜ！」
「むむっ、だったらボクは特攻総隊長ルプトナ様だいっ！！」
「勿論です、空さん！さぁ、ゆーくん…ここが正念場だよ…」

クルクルと器用に槍型の【悠久】を回転させながら、天高く掲げたユーフォリア。その中心部に嵌められた紅い宝珠が煌めく。

「――あたしたちの全力、見せてやるんです！！」

五人の足元に展開された魔法陣、精霊光［オーラフォトン］は聖なる輝き『ホーリー』。その清浄な光は、この繰り越す夜の倦怠を斬り裂く暁光か。普段は感じられない精霊光の加護を視覚で感じて。

「…まぁ、俺に精霊光は効果無いけどな…！」
「もう、空さんの意地悪っ！」
「じゃれている場合ですか、全く…」

こんな状況でもぷーっと膨れるユーフォリアに安堵を感じながら、レストアスを他の皆にも染み渡らせていく。雷の加護『エレクトリック』の上位スキル、神雷の加護『ボルトチャージ』だ。
感覚強化と共に雷の属性付加、空にはあまり実感が得られないが、マナチャージの増加を与える。

「「┼┼┼┼！！！」」

同時に咆哮し、二体は一斉に竜爪を振るう。空とソルとルプトナはプロリムタ、ユーフォリアはレクーレドを相手取り一閃を躱した。

勢い余って互いに一撃を加え会ったプロリムタとレクーレド。緑と赤、守護者中最大の物理攻撃力と魔法攻撃力。属性が相反するだけに効果は互いに抜群。

しかしそれでも大した怪我にはならない。一瞬睨み合った竜二頭だったが、すぐに気を取り直してそれぞれの獲物を追う。

ミドルレイヤーを走る空とソル、ルプトナは背後から繰り出されるプロリムタの猛毒の爪を避け、雷のような軌道でジグサグに移動する。

対してアッパーレイヤーの支柱の隙間を縫うユーフォリア、その支柱を拳で粉砕しながら追っていたレクーレドの口腔に、純粋な赤のマナが充ちた。

「一一╋╋!!」

撃ち出された竜の息吹。熱波により線上に存在するありとあらゆるものを焼き尽くす、レクーレドの『ファイアブレス』。

「一一っ!?!」

それは一直線にアッパーレイヤーの支柱を悉［ことごと］く薙ぎ倒し、ユーフォリアを巻き込んで崩落させた。

「「一一ごふッ!!?」」

気を取られて反応が遅れ、毒爪を躱しきれなかったソルと竜尾の鞭

のような一撃を躱しきれなかった空は、跳ね飛ばされ両方それぞれの外壁に衝突する。

尾部の尖端の、蠍［サソリ］の尾のような鈎爪に薄皮一枚、腹を斬られていた。それでも僥倖だ、もし『ハイパートラスケード』だったなら全身骨折の上に胴を両断されていただろう。

反撃効果を受け、プロリムタの尾は氷の破片に引き裂かれ高電圧に焼かれてズタズタになっている。

【――オーナー、先に謝っておきます！！】

「ッぐ！！！」

意志が意味を成す前にレストアスが腹の傷ごと毒を焼いた。重ねられた痛みに呻くも、すぐにそんな場合ではない事に気付いて立ち上がり身を躱す。

追撃…否、決殺の爪を躱す為に。

外壁を砕いたプロリムタの濁った隻眼の眼差しには、己に苦痛を与えた存在に対する怒りと…その存在を痛ぶる事への喜びを、色濃く映している。

――コイツ…ワザと一撃で終わらせないように加減してやがるな…

腹の傷を撫でる。若干痺れた感じは有るが、動く事に支障はない。

「――巽、準備完了です。合図は貴方が出してください」

「…オーケー、そんじゃあ……」

雷神の戦鎧『スパークレシーブ』を解除した空は、低く腰を落して【夜燭】を日本刀による居合のように、右の腰溜めに構えた。

その構えに、ナナシがピクリと眉を動かす。実に不快そうに。

「征くぞレストアス――加減は無しだ、最大出力！！」

【了解、オーナー！！…斬り割いてご覧にいれます、我等の障害となる――全てを！！】

黒刃に集束していく青いプラズマ塊が、眩ゆく光り輝く。チカラの昴ぶりに、さしものプロリムタも本気で殺す為に――口腔にマナを集束させた。

「そうそう動き易いようにはさせないね――ステイシスッ！！」

そこに、距離を取ったルプトナの冷電波『フローズンステイシス』が放たれ『ネイチャーブレス』のマナチャージが阻害される。たった一瞬の隙、それが致命となるのが実戦闘だ。

「――今だ、ナナシッ！！」

「勝手に名前で呼ばないで下さい――『無限回廊』！！」

プロリムタの周囲の空間が歪み、無限の回廊と化した。空間ごと捩切る一撃だ、普通なら耐え切れる筈も無い。〝普通〟なら。

「くっ…！なんて馬鹿力…！！」

それをプロリムタは腕力で防いだ。もとより『浄戒』で強化されているガーディアン、抵抗力は尋常ではない。

そのガラ空きの胴に、反動加速によって雷光の速度で肉薄した空が繰り出す水平の一太刀――！！

「常世への道を照らしてやる――『シャイニングブレイカー』！！」

それすら右腕一本で止めた。だが、無事ではない。掌の中程まで刃が裂いている。その煌めく刃の切先に、『ファイナルベロシティ』で加速したソルの連打が打ち込まれる――！！

「隙間無く、くれてやる！堪えてみろ――『獣牙断』！！」

プロリムタは堪らず左腕も使い、押し止めた。隻眼に映るのは軋む空間と両掌を割く雷煌刃…そして――

「食らえーっ！！」

十分に距離を取っていた分だけ、充分に加速し勢い良く蹴り込んで来るルプトナ――！！

味方の危機を察し、レクーレドはユーフォリアの生死を確認せずにそちらに羽撃く。先にも述べたが、一瞬の隙こそ致命となるのが実戦闘。

「――源初より終焉まで、悠久の刻の全てを貫きます！！」

…瞬間、星天を横一文字に割いた青い光を見る。目で追う事すら出来ぬ速度で、それは――真っ直ぐレクーレドに迫る蒼い流星と化した。

「全速前進、突っ切れぇーっ！！」

それが、この守護者の見た最後の光だった。

左足で繰り出した三連発の前蹴り『グラシアルジョルト』。反動を利用して再度繰り出す三連の後ろ回し蹴り『レインランサー』。

「┼┼エーー┬┬!!!!」

プロリムタはそれに――【夜燭】の刃を噛み堪えきった。剣歯は全て折れ、後一撃も耐え切れまい。

その瞳が見詰めた結末。

「往くよじっちゃん――ルプトナキーーック!!」

バク宙で跳ね退いたルプトナが、右足に蒼氷の鏃を形成し放つのは『クラウドトランスフィクサー』、彼女の最大の必殺技。

「「「――ハァァァッ!!!」」」

それに空とソルが、ルプトナと同時に最大のチカラを篭めた。

――――!!!!

”家族”の助けに、勢いを取り戻して振り抜かれた【夜燭】。のけ反ったプロリムタには、掌の上半分と顎から上が無い。

だが、それも刹那。抵抗を止めた体躯は『無限回廊』により、原形すら留めない程に捻り潰された。

反転し、真横に衝き出す左の逆手で【夜燭】を衝き立てる。柄を握る拳に打ち合わされた【荒神】の握り拳。器用に柄尻に片足で着地した【揺籃】と、しゃがみ込んで合わされた握り拳。

「「「「一一しゃあっ！！！」」」」

歓声を上げて一斉に親指を立てた瞬間、猛烈な勢いでレクーレドがシティとスラムを隔てる壁に激突する。

「…ㅗㅏ…┣……」

レクーレドは助けを求めるように虚空へと手を伸ばし一一ガクリと力尽きた。

「やりましたね皆さん、大逆転ですよ！！」

限度無視の加速を得た【悠久】の一撃『ドゥームジャッジメント』。それを成した少女、ユーフォリアが帰還する。そして少し背伸びして、【悠久】を携えた右手でのサムズアップを重ねた……

The 61th Name…"遠い夜明け"

カティマの『北天星の太刀』とタリアの『スノーパルチザン』、サレスの『ページ：レイジ』とポゥの『イミネントウォーヘッド』、ルゥの『フリーズアキューター』により致命的な刀傷を受け、断末魔の咆哮と共に倒れ込んだ守護者ジルパース。

これによって守護者は残り二頭、アンドロイド達も大半が破壊されもう三分の一も残っていない。

「――糞ッ！何故だ、何故…！」

忌ま忌ましげに吐き捨てたショウ、彼自身も神剣士達との戦闘により負傷している。その脇に立った、やはり戦闘で負傷したスバルが――ショウの肩を掴んだ。

「…ショウ…もう止めよう…彼らは敵じゃない」

「スバル、お前…セントラルの調律が…！！」

その瞳は、澄みきった意志の光を燈したモノ。そして、友の憐れな姿に悲しみを映している。

「…何故だ、俺達は今まで上手くやって来たじゃないか…この世界が滅びたあの日から、ずっと！この世界を救う為に…シティとスラムの調和の為に！！」

「でも、それは夢なんだよショウ…この世界はもう…終わっているんだ！在ってはならない世界なんだよ！！」

再び上がった断末魔。今度打ち倒されたのは、守護者エクルトア。

ヤツィータの『ライトニングファイア』とナーヤの『インフェルノ』、ワゥの『ナパームグラインド』とゼゥの『シャドウストーカー』を一斉に受けて黒焦げと成り、果てる。

「違う、まだだ…！まだ、俺達の可能性は死んでいない！！」

スバルに突き付けられた”現実”に目を背けて。ショウは表情を歪めて叫ぶ。手負いの獣のように、歯を剥いて。

「ショウ…！？！」

その手刀が、スバルの胸に刳り込まれた。金属骨格をも貫き、そこから一一『光』を掴み出す。

「…そうだ、二つに分けているからいけない…コレを…『浄戒』を一つにすれば、もっと強大なチカラで…異分子どもを…！！」

「…ショ…ウ……」

友に預けられていたチカラすらも奪い取ったその瞳に映るのは一一濁りきった狂気。

「…スバル？おい、スバル！誰だ、誰がこんな事を…？！」

それが薄らぐ。僅かに正気を取り戻したショウの目に映ったのは、無惨に横たわるスバルの姿。

ショウは取り乱して抱き起こす。それを成したのが己だとは覚えていない。

「待っていろ、直ぐにセントラルに連れていってやる…大丈夫だ、この程度の損傷なら修復出来る…『血の渇き』！！」

最早指揮すらも投げ出したショウはスバルを肩に担いで、召喚した第六位【疑氷】の守護神獣『血の渇き』の足に掴まってシティへと撤退して行く。

それに気を取られた守護者ゼム。見捨てられた事に気付き、自身も撤退しようと翼を開いて一一望の『カタストロフィ』と希美の『ショットブレイカー』、沙月の『ヘヴンズジャベリナー』とミゥの『ストラグルレイ』を受けて、粉砕された。

その他の神剣士によりアンドロイド達も一掃されている。元々神剣士には脅威となり得ない存在だ、アンドロイドは。

「手間取ったが、今なら『浄戒』の巻き戻しも使えまい…行くぞ、サーヴィランスゲートへ!!」

サレスの指示に、一行は休む事無くヘヴンステアを後にした。

サーヴィランスゲートの前で傷の応急処置を終え、空は取り敢えず黒の外套を羽織った。武術服はまたもや破れたので、上着は脱いでいる。つまり、諸肌脱いだ状態で直に着ているのだが…。

「…空さん、何だかその恰好は嫌な感じがします…眼鏡だけは止めてくださいね」

「あん?視力は2．0だけど?」

ユーフォリアが妙に嫌そうな顔をしていたが、空はあまり気にしない事にした。

一一ッて言うか、コイツはマジで未知数だな……俺達が四人掛かりで仕留めたガーディアンを一人で倒しやがった。…て事はあれか？もしかして緑のガーディアンも足を引っ張ってた俺が居なきゃあ倒せてたのか？

「…空さん？どうしたんですか、急に遠くを眺めて？」

「別に…軽く欝入っただけだから…にしても『浄戒』の巻き戻しを無効にするとは恐れ入ったぜ」

軽く落ち込んで礼を述べた空だったが、返ってきたのは一一

「あの、あたし…そんな事してませんよ？ゆーくんも『知らない』って言ってます」

ただ、当惑した答え。そんな事は知らないと、彼女は本心から言ってのけた。

…幾ら高位の神剣とはいえ時間樹エト＝カ＝リファに入った時点で四位以上の実力になる事は無い。『神名』の強制力は絶対。それは弱者に対しては強化だが、元来の強者に対しては”足枷”となる。

「…は？いや、でも…」

「よーぅ、怪我の手当ては終わったかよ兄弟ィ！！」

『それ以外考えられないだろう』と言いかけた時、周囲を警戒していたソルとルプトナが戻ってきた。実に楽しく、清々しい表情をしている。

「…御機嫌だな、お前ら」

「ふっふーん、そういう空だってニヤついてんじゃん気持ち悪ー」

「放っとけってのバカヤロー」

――ニヤつきもするって、あんなに上手くいくとは思わなかった。自軍のマナチャージを強化しつつ敵のマナチャージを減少させ、隙を見出だせば全力を叩き込む作戦が。

…幾ら強力な技を持とうとそれを行う為のマナが無ければ、意味を無しはしない。戦車が強力な兵器でも、燃料も砲弾も無ければただの硬い箱。神剣士も同じだ、マナが無ければただの硬い人。本来は対ベルバルザード用に考案した戦術だったけど、大分応用の幅は広そうだな。

「…っと、そうだ…丁度五つか」

ベルトの後ろ側に付けたバッグを漁って、空は皆の前に掌を差し出す。そこに載っていたのは五つの甘露飴。因みに、最後の五つだ。

「これって…飴玉ですか？」

「お、なんだ？くれんのかよ」

「うわぁ、空が食べてるのは見た事あるけど、貰うのは初めてだ」

早速三人が頬張る。そして、自分の分と――

「そら、遠慮せずに貰ってくれ」

「…嫌がらせのつもりですか？」

ナナシの分を差し出した。飴玉とは言え、彼女にとってはサイズ比率的にバスケットボールくらいはあるだろう。不愉快そうに、眉を潜めたままで――飴を圧縮して口に含んだ。

「…ところで巽。先程の剣戟ですが、零点です。二度と使わないで

下さい」
「あー……やっぱり本家にはバレちまったか…」
「当たり前です。マスターの太刀筋はもっと鋭く、もっと正確ですから」

ポリポリと頭を掻き、苦笑いする。『シャイニングブレイカー』の基となった技を見抜かれた事、パクってまで三流だった事に。

――『攻撃の意を感じ取れない為、防御しようという気が起こらず、必ず受けてしまう』と謳われた『復讐の神』の『無常の太刀』。神世で一度だけ見た事のある技だったが、やっぱり猿真似は猿真似か…

「つーか、目の前で惚気［ノロケ］られちまったぜ…コレだからデキてる奴らは…」
「だっ…！誰がデキてる奴らですか誰がっ！！」

そこで気を取り直して、咳ばらいしてナナシはいつもの澄ました顔に戻る。思いの外に防御が薄かった事に苦笑いして空は、己の分を口に含む。

――しかし、望と言い暁と言い…なんでこうすぐ近くの幸福の青い鳥に気付かないモンかねぇ？
あそこまで思われたら気付くだろ、普通…

【…オーナーにそれを言う資格は無いかと】
（何故？つーか聞いてたのかよ恥ずかしい！休眠してるのかと思ってたぜ）
【あのガーディアンから大量にマナを得る事が出来ましたので。もう一戦くらい全力でいけますよ】

言うだけ有り、【夜燭】から蒼雷が立ち昇っている。だが妙に、その色が薄らいでいる気がする。

――…気のせい、か？

声を掛けようと思ったが、そうこうしている内に一行が合流した。

治療と休憩を行う事に決まった為、先に治療を終わらせていた空も手伝いに回る。何せ合計五体もの竜を討ち、数百ものアンドロイド兵を亡ぼしたのだ。皆が疲労困憊。しかし、長い休憩は敵にも態勢を整える時間を与える事になる。直ぐさま、一行は進軍する……

セントラルタワーの屋上に降り立ったショウは、直ぐさまスバルを調整室に運び込んだ。カプセルの中に彼を押し込むと、憎々しげに叫ぶ。

「――セントラル…これはどういう事だ！スバルの調律が解け、おまけにガーディアンどもは全滅、ガードナーも残り僅か、このままじゃ世界が立ち行かなくなる！！」

その怒声だけで機器を壊さんばかりの勢い。それに無機質な、女性の声が答えた。

『…ショウ。残念ですが、此処までのようです。この世界の滅びを回避する為の解は、始めから無かった…』

「セントラル…何を言ってる？」

青ざめるショウ。その声が言っている意味が理解出来る故にショウは俯き、拳を握り締めた。

既に、この機械は無限に等しい演算を繰り返して来た。繰り返す世界の中で、何度も何度も。

『この世界が滅びる瞬間に流れ着いた『浄戒』を使い、何とか滅びを先伸ばしにして来ましたが……これがこの世界の”定命［さだめ］”だったのです』

世界の滅びを回避する為にセントラルが演算を繰り返し、その間繰り越す世界の異物を彼等が排除する。気が触れる程に繰り返してきた事だ。この世界が滅びを迎えた日から。終わりを否定する為に。機械の声は、そぐわない程に優しい声で彼を諭す。

「…けるな」

『ショウ…もう、これで終わりにしま――』

瞬間、ショウのチカラが膨れ上がる。スバルから奪い取り二人分となった『浄戒』のチカラが溢れ出した。

「――ふざけるなァァァッ！！！」

振り払われた腕。そこから迸ったチカラがセントラルのシステムを破壊した。

「例えこの世界が偽りの夢でも、終わらせなどするものかァァッ！スバルは…アイツは俺にとって光そのものだった！決して失いたくないモノだ！！諦めるならもうお前は要らない、消えろォォォッ！！」

それだけに飽きたらずショウは狂ったように…否、狂って【疑氷】の矢を放ち続ける。神剣に機械如きが耐えられる筈も無く、室内は瓦礫の山と化した。

『何と言う…ショウ……貴方は……』

「ハハッ…そうだ、俺達の”願い”を否定するなら…何だろうと…」

ショウは部屋を後にする。その足が向かう先は、己にも判らない。既に理論づけた行動はしていないのだから。

『…スバ…ル……ごめんなさい…私は…駄目な…母で……』

最後に点灯していた機器から漏れた声――慈愛に満ちた母の声を最後に。

部屋は無音の闇に閉ざされた……

光溢れるシティのメインストリート。透徹城から抜き出した贋物、和傘【繚乱】を開き前方に構えて突進する。

「――チッ！」

乾いた砲声と共に腕に感じる衝撃。前方に展開した、セキュリティガード風のアンドロイド兵士部隊が掃射する『ＦＮ－Ｐ９０』系のＰＤＷが着弾しているのだ。更に『ＦＮ－Ｆ２０００』系アサルトライフルから放たれたグレネードに腕が痺れて、流石にヤバいかと

思い始めた刹那。

足元に転がってきた三つの手榴弾に、ビルとビルの隙間まで跳ね跳べば一一更に多数のアンドロイド兵士。掛け声と共にレーザーポインターが傘に集中し、衝撃が走った。

一一どの世界でも、人間工学に基づくとああなるのかねッ！！神剣士なら豆鉄砲。だが俺にとっては、危険過ぎて神剣と大差ない。しかもこの圧倒的多数だ、本当にウザってェ！！

「仕方ねェな、切り札だったんだが…レストアス！」

【了解、オーナー！】

その身を包む蒼い炎のような獣、レストアスが氷結する。氷結して一一消えた。

困惑する事も無く、兵士達は周囲を見渡しながら進攻する。しかし空の姿は無い一一と、一番最後の兵士が【夜燭】のフックのような切っ先に首を引っ掛けられて、横道に引き込まれる。

だがそこは、リンク可能なアンドロイド。合流したメインストリートの部隊と共にその角に銃口を向けて一一飛び出してきた影に火線を集中させた。

そうして蜂の巣になったアンドロイド兵士をも巻き込んで。

「一一『アイスウェーブ』！！」

一隊が絶対零度の風に飲み込まれた。氷で出来たピコサイズの鏡による光学迷彩を解除し、凍結して動けなくなったアンドロイド兵士

達を破壊してまだ使えそうな銃器を吟味する。

――サーヴィランスゲートに突入した俺達を待ち受けていたのは、ガードナーとアンドロイドの特攻だった。損傷や死を恐れる事の無い死兵に数で押し切られ、散開してセントラルタワーまで進攻する事になったんだが…そこでも更に、数で圧された。世界一つを敵に回してんだ、この位の兵力は予想しとくべきだったな……

そこで空は、遠くサーチライトに照らされるセントラルタワーを見遣った。色んな場所から煙が立ち上っている、他の皆も闘っているのだろう。

「…ちっとも進めねェな。もう皆辿り着いてたりして」

【可能性は大きいですね、オーナーと違って彼等はアンドロイドに構いませんから】

「凹むだろ、やめろ」

若干凹みながら幾つかを透徹城に納めて、ショルダースリングで肩から掛けていた始めの壱挺を掃射する。柱の影に隠れていた部隊が一斉に姿を見せたのだ。

【繚乱】で銃弾を防ぎつつＰＤＷで応戦し、使い切れば棄て透徹城から新たに引き出す。そうして少しずつ敵兵を破壊していくが――やはり多過ぎる。

「チッ…！あんまし目立ちたくは無かったけど仕方ない。”跳んで”行くか」

高周波ブレードを振り上げた兵を【宵】で返り討ちにし、グリーヴに包まれた足の裏でレストアスを炸裂させた。着地点はビルの壁面、

そこを足場に更に跳ねる。

…勿論目立つ。既に十数体に捕捉されて銃撃されているが、構わず蜘蛛男ばりにビル街を跳躍する。黒い外套をたなびかせ宙を翔ける姿は、正しく”鴉”。

「一一ッ!?!」

が壁面に着地した瞬間、光の矢が躍り込んだ。【繚乱】で防ぐも、あっさりと貫かれて太股に掠る。砕けた和傘が街路に墜ちていくがそれでも跳躍、ビルの屋上に着地した。

「選りにも選って…コイツと出くわすかよ…」

PDWのショルダースリングを外し、止血帯代わりに巻き付けて見遣る。屋上中央に待ち受けていたその男。

「一一…貴様らさえ…貴様らさえ現れければ…俺達は!!」

夜風に靡く一房に纏められた黒髪、戦国時代のような肩当てと背に負う矢籠。深い憎しみを映した瞳、風を斬る【疑氷】の弦。

「…ショウ＝エピルマ…!!」

狂気に染まった、その男を一一…

The 62th Name・・・"電影［ユメ］の後先"

夜空を翔ける一条の蒼い光、飛行形態の【悠久】だ。乗っているのはユーフォリアと望、その肩にはレーメとナナシが乗っていた。

「望さん、あれがセントラルタワーですよ」

「ああ、あそこに……『浄戒』が在るんだな、ナナシ」

『浄戒』の本来の持ち主である望がセントラルタワーに到達する事がこの作戦の第一目標、他の皆に送り出されたのだ。

「その筈です、しかしあくまでも一部。『浄戒』は分割されているようですね」

「面倒な話だな…」

ユーフォリアとタワーに一番乗りで辿り着いた望。入口には衛兵が数体いたが、【黎明】と【悠久】が一閃すれば衛兵達は造作も無く両断されて機能停止する。

だが敵襲に気付いた…ガードナーが集まって来た。

「望さんは先に行ってください、入口はあたしが守ります。きっと皆さんもすぐに来る筈ですから」

「ユーフィー…ゴメン、気を付けるんだぞ」

「一一あ…うぅ…」

流石の望も、自分が為すべき事は判っている。ユーフォリアの髪を撫でると彼女は一瞬、ポッと頬を赤らめた。

「…はいっ！元気百倍ですよ！！」

これまで見せた事が無い程の笑顔を見せた彼女に入口の守備を任せ、タワー内部を走り去る望。

「撫でるだけで『インスパイア』とは恐れ入りました…貴女のマスターは、天然の女タラシですね」

「う、うるさいっ…ノゾムはただ誰にでも優しいだけなのだっ！！」

「それをタラシというのです。誰にでも優しいなど、単に不誠実で優柔不断の窮みでしょう」

「言わせておけば貴様～～！」

その後ろを飛びながら、相反する天使二人は火花を散らしていたのだった。

夜の屋上で対峙する二人。青眼に【夜燭】を構えた空、対してショウは背負う矢に指を掛けた姿勢のままだ。

「…ふ、くくく……」

そのショウが、唐突に笑い始めた。低く響く、無気味な笑い声。

「判っている……判っているぞ、お前は神剣士じゃない…だから、だからこそ先ずお前から始末してやろうと思ったんだ…」

「…そうかよ。で？」

口角を吊り上げた表情のままで、ショウは矢を引き抜いた。それを【疑氷】に番え一一ずに。

「――何のチカラも持たない癖にウロチョロと目障りなゴミ虫から踏み潰してやりたかったのさ！」

矢…精霊光の矢を媒介にした神剣魔法『サドンインパクト』を発動した。

「どうした、逃げて見せな！」

「言われッ！なくてもッ！！」

次々と足元から噴き出す黒マナを躱し、レストアスを利用した接近を試みる――

「…胸糞悪い…貴様らさえ居なければ、俺は…ッ！！」

しかし、その時には既にショウの射撃体勢が整っている。番えた矢を引き絞り、紫色のオーラを纏う一射は”猛毒の歯牙”との名を持つ『ポイズントゥース』。今までの『ドーンペイン』とは篭められた意念の桁が違う。

「邪魔だァッ！」

射［う］ち出された紫色の矢を、空は【夜燭】を盾に受け止めた。

「クッ…ソッタレ……！！」

…だが止まらない。軋みを上げる【夜燭】の黒い刃。浄戒のチカラだけでは無い、負の情を凝縮した【疑氷】の矢は歪みきったショウの精神に呼応して、破壊力を更に上げている。

【くっ…あ！！】
「グゥッ！！！」

その矢が、【夜燭】の黒い刃を鍔［ヒルト］に近い部位で貫通した。貫通する際に軌道が逸れた事で命を拾う。

――誤解されてる場合が多いが、射撃武器とは装甲や盾に対して優位に立つ。防具は剣等の『線』の攻撃には強いが、『点』の攻撃には弱い。

「それでこの【疑氷】から逃れたつもりか？甘いんだよ、俺の矢は獲物に射［ブ］ち込まれるまで止まらない！！」
「何っ！？」

ショウの言葉に反応して、逸れた矢が軌道を捩曲げて戻って来た。【疑氷】の神獣が、主が狙う相手に追い縋る。完全に意表を突かれ、迎え打つしかなかった。

――追尾式だと！？だから神剣ッて奴は…！

『エレクトロンブレード』で矢を粉砕して、息つく暇も無くショウに――

【オーナー、まだです！】

レストアスの警告、それにショウから意識を戻せば――粉砕した矢の破片に、宿ったままの精霊光。全方位を押し包まれて身動きも取れない、そんな空を指差して勝ち誇りながらショウは告げた。

「…言ったよな？【疑氷】の矢は獲物に射ち込まれるまで止まらな

いッてよ!!」

鳴らされた指に破片が、一斉に空へと殺到する――！

セントラルタワー内部に走り込んだ望は、その光景に息を呑んだ。
無茶苦茶に破壊された廊下や部屋は竜巻に襲われたかのようだ。

「何が起きたのでしょうか…」
「尋常な様子ではないな」

時折外の様子すら覗ける廊下を走りつつ、望は精神を集中させる。
だが、何も感じられない。

「…気配は感じられない、此処に本当に『浄戒』が在るのか…？」
「――望…くん…」

呟き、通り過ぎようとした部屋。そこから――壁に手を衝いて漸く歩いているスバルの声が響いた。

「スバル…何があったんだ？」

身構える望だったが、その瞳に確かな意志の光が在る事に気付き、そう呼び掛ける。スバルは損傷の癒え切らぬ躯を壁に預けてそれに答えた。

「ショウの…仕業だ……アイツは僕の為に…いや、僕らの”願い”の為に…この世界の理を書き換えようとしているんだ…」

「スバル達の…”願い”？」
「僕らは…シティとスラムの調和…世界から格差を無くそうという…夢を追い求めていたんだ…この世界が滅びた、その瞬間まで…」
はぁ、と息を吐いて。まるで、遥かな昔日を懐古する老人のような笑顔を見せた……
腕を向けた姿勢のまま、残心など示す筈も無くショウは舌打つ。
「しつこい奴だ…諦めてとっととくたばった方が楽だろうによォ」
眼差しの先には大剣を構えたニンゲン。氷の鎧に護られ、その身はほぼ無傷だが…衝撃だけでも人は死ねる。自動車とでも正面衝突したような衝撃に、空は咥内に溜まった血を吐き捨てた。
「ショウ、聞かせろ…この世界は一体いつから繰り返している？」
赤い血を零した口許を拭いながらの問い掛けに、ふとショウの瞳に浮かんだ憧憬の色。
「…この世界のマナが、枯れた日からさ。あの日から俺達はずっと繰り返してきた…滅びを回避する為に、ずっとな…」
だが、その色も…一瞬の内に狂気に塗り潰された。
「そうだ…お前達さえ来なければ、俺達はずっとこの”電影［ユメ］”を見ていられたのに…！」

『異分子を排除する』という役目の為にただ一人正気で在り続け、”同じエンディング”を何度も見てきた彼は…受け入れられない滅びを数億回も見てきたショウは一一もう限界など、とうに越えてしまっていたのだろう。

「消し去ってやる…全て…俺達の”願い”を否定するなら…この世界だって要らない！！」

…余りに近過ぎたのだ、希望が。見えるだけで手に入れられない希望など…付き纏う絶望よりも遥かに性質が悪い。

「そうさ…『浄戒』のチカラを手に入れた俺は無敵だ！俺こそが、この世界になる！そして一一永久に”現在［イマ］”が続く”理想郷”を作り上げるのさ！！」

ショウの躯から発される強大なチカラの奔流。『破壊神』の神名、それを浴びながら感じたのは一一ただ。

「…虚しいな、本当に」

「…何？」

ピクリ、と。押し殺すように空が呟いた言葉にショウは反応した。

「ああ、判るさ。お前は”俺”と…”オレ”と同じだ」

一一ただ…大事なモノを護りたくて。でも、それを貫くには余りに弱過ぎて。チカラの持つ『意味』と『責任』を考えずに、手に入る全てを得て狂ってしまった。自我も願いも何もかも、どす黒い妄念に塗り潰して一一

「…ふざけるな…判る筈が無い。昨日今日来たような奴に俺の”願い”を理解できるものかァッ！！」

ショウの【疑氷】にチカラが篭った事を悟って、【夜燭】を握る拳に力が篭る。召喚された大蝙蝠、その悍ましい顎が開き——

〔〔〔┬┤├┐┼┘└┤〕〕〕

「【——く、あぁぁぁ！！？」】

放たれた凄まじい高周波と猛烈な羽撃［はばた］きは『血の渇き』の『イリテイト』。辛うじて戦鎧に救われるが、音は防ぎようが無かった。脳を攪拌されるような苦痛に、意識が薄らいでいく。

地鳴りと共に、大気が鳴動する。激震に幾多のビルが軋み、硝子が砕け散り、次々と倒壊する。

「チカラ…そうだ、このチカラが有れば俺は…」

そのチカラは、圧倒的。ただでさえニンゲンにはどうしようもない神剣士が——『破壊神』の神名を得たのだ。スバルの分だけでなく、この世界が繰り返す為に必要な『浄戒』までも。

「ハハッ…ハハハハ——…」

全ての『浄戒』を得、強化されたショウの機械の躯は——ギシリと動きを止めた。

「——あ…？」

霧散していくチカラ。何が起きたか判らないショウは、ただ茫然と立ち尽くすのみ。

「…堪えられる訳が、無いだろ。”名前”は”起源”…後から植え付けられるモノじゃない。ましてや、その神名はジルオル以外の誰にも使い熟す事は出来ない」

「なん…だと…？」

加護を使い切り、【夜燭】をアンカーとして耐え忍んだ空。ショウを見詰めるその表情は暗い。

前世の己と同じ破滅への道を辿りつつあるその男を見詰めながら。

「ショウ…もう終わりだ。頼む、俺は――」

『お前に同じ思いをして欲しくない』、その言葉が発せられる前に――ショウの【疑氷】からチカラが噴き出した。

「――終わらせるものか…！終わらせて堪るか…！大事なトモダチの居る、この世界を…！！」

番えた矢を引き絞る。壮絶なまでの精霊光が【疑氷】と矢を覆い、憎しみと害意の権化たる黒翼の矢『ディアボリックエディクト』と化した。

「教えてくれよ…一体どうしたら滅びを回避できるんだ…破綻するまで繰り返す事以外どうしたら、大事なトモダチの居るこの”現在”を救えるんだ！！！」

怨嗟を吐きながらショウは狙いを付ける。恐らくそれこそ、彼の純然たる願いの”起源［オリジン］”。

だが、空に返す言葉など無い。在る筈が無い。無に帰してでも己の”壱志［イジ］”を貫こうとしているその男に掛けるべき翻意の言葉など、彼には考え付かない。

どれ程の思いを込めようと、所詮言葉は言葉でしかない。言葉では、実際に振るわれる暴力は止まらない。

――だから言葉では無く行動で示す。チカラを止める為にはチカラを振るうしかない。言葉はその後で充分だ…！

構えた【夜燭】を握り締め、屋根を踏み締める。レストアスの加護は無い、十中八九死ぬだろう。

――だが、零［ゼロ］じゃない。限りなく零に近くても、”可能性”は必ず在る。砂漠に落とされた砂粒一ツ分だろうが、在るモンは在る。俺はただ…それを引き寄せる事が出来ればいい！！

「教えて…みせろォォォッ！！！」

射ち出された黒翼、大気すらも殺傷して迫り来る”反逆者の一矢”。それに――

「――ハァァァッ！！」

迷いも無く、空は袈裟掛けの一太刀を見舞った。断末魔の悲鳴を思わせる刃鳴り、既に損傷している【夜燭】には余りに強過ぎる衝撃が持ち手の空に直接伝播する。

「いい加減諦めろ！！ニンゲン如きに何が出来る?！貴様のチカラ

など…どれ程のものかッ！！」

ショウと血の渇きの意思を宿した矢は、その叫びに呼応し更に勢いを増す。対し、減衰する一方の空の腕力。

「ああ、そうだよ…！確かに俺ァゴミ虫に違いねェさ…！テメェら神剣士からすりゃあ、取るに足らねぇだろうよ…！それでもッ！！」

ーー青臭いのなんざ百も千も万も億も承知の上だ！！それでも、俺は諦めない…俺にだって、〝壱志〟がある！！！

「〝家族〟の為なら、俺の何を代価にしたってーー『奇跡』如き起こして見せてやらァァッ！！！！」

「な、にィ！？！」

振り抜いた黒刃に砕け散る魔矢、間を置かずに駆け出した空。無数の破片に狙われる前にーーショウを【夜燭】の射程に捉えた。

「馬鹿な…ニンゲンの力で、俺の【疑氷】に抗し切っただと…ただ、家族の為だけに……！？」

踏み込まれ、最早新たな矢は放てない。破片も間に合わない、閃く刃に抗し得ない。

「貰ったァァッ！！」

技巧など一切無い、ただ精一杯の横一閃。疵だらけの【夜燭】の鈍煌は夜の海の水平線を思わせる。

「…だが、此処までだ。後はもう、罠を閉じるだけーー」

「――…？！！」

…瞬間、周囲の闇が凝集して動きを強制的に止められた。この屋上は最初からショウの狩猟場、準備は万端。

「――『インスネアリングブリッジ』…！」

そして――音も無く背後から忍び寄り首筋に迫った鈍くも鋭い輝き…血の渇きの『牙』を見た。

全てが終わり、静寂に包まれた屋上。立っているのはただ一人、黒髪の青年だけ。

「…ニンゲンの力で、神剣士に後一歩まで迫るとはな…」

ショウは俯せに倒れ込んだ空を見下ろし――斬られてスパークする胸部を見た。後数瞬でも発動が遅れていれば、コアまで達していただろう。

「大した奴だよ、お前は…」

踵を返しセントラルタワーに向かおうとするその足を、空が掴む。

「…待て…ショウ…行くな…」

致命傷寸前まで血の渇きに血液を吸われ、意識は混濁し自分が何をしているのか、何を言っているのかすら判るまい。

「…まだ、諦めるには早い…俺の家族達なら…神剣士なら、本物の『奇跡』を起こしてくれる…だから…」

彼はそれを振り払おうとしない。その掌は、身躯［カラダ］ではなく精神［ココロ］を掴んでいる。

そっくりだが正反対――鏡写しの”心魂［タマシイ］”を持つ二人の、最後の交わり。

「…有難うよ。もしあの日、あの時、あの瞬間にお前達が居てくれたのなら…俺達の”現在”も変わっていたのかもしれねェな…」

振り返ったショウの眼差しは――この世界で初めて会ったあの時と同じ。ぶっきらぼうながら、深い知性を感じさせる三白眼。

「…ショウ…頼む…俺は…」

フッと、手から力が抜けた。今度こそ失神したのだ。

「…だが、遅い…この機械仕掛けの躯は…もう朽ち果てた」

呟き、歩き出す。終わりに向けて一歩ずつ、最後の”現在”を刻む。

『――何を、考えている？』

問い掛けるのは、屋上のアンテナにぶら下がる血の渇き。血のようにその赤い瞳は、真っ直ぐショウを見詰めている。

「…何、飽きちまった。詰まらねぇからこの茶番…終わりにしよう

と思ってな」

その決意を固めた瞬間から世界が輝きを増した。今まで鳥篭にしか見えなかった世界が急に光溢れ、『終わるには早い』と必死に呼び掛けている。

…だが、ショウの考えは動かない。”言葉”では、もう止まらない。

『…壊すのだな、主のユメを。欺瞞の希望に充ちた夜は終わり、救い無き絶望の朝が始まる訳か…』

「ああ、嫌なら失せろ。止めやしねぇよ」

『まさか。漸く面白くなってきたのだぞ?この詰まらん世界の中でやっと、変化が起きたのだ』

歩みを止めぬ反逆者。並び立って羽撃くは、やはり反逆者。

「…テメェも随分、厭味な奴だな。今まで気付かなかったぜ」

『お前の神獣だ、ろくな性格の筈が無いだろうに』

「ハハッ…違いない」

互いに笑い合う。覚醒から一度も無かった事だ。その足に掴まり、ショウは宙を舞う。物語を終わらせる為、ピリオドを打ちに。

…色とりどりのネオンサインに満ち溢れる近代的なビル群。天高く迫り出した摩天楼。

「俺は貫くぜ、”トモダチを護る”って俺のポリシーをよ…」

見上げれば乱雑に散りばめられた、スモッグに霞む天上の星々。

見下ろせば整然と整えられた、市街の輝きは地上の星々。

「だからお前も…貫けよ。”家族を護る”って、お前のポリシーを。なぁ…空……」

屋上に横たわる空に向けた声は、吹き抜ける夜風に溶けていった。

その足音が響いたのはその直後。金属質な足音は悠然と倒れ伏した空に歩み寄り――蹴り転がした。

「…不様だな、小僧。それでこの『刃皇』の”刃”に相応しいと思っておるのか、空［うつけ］めが」

「あ…ぐ…？」

胸を踏み付けられ、苦痛に目を開けば――夜空よりも更に黒い鎧の龍騎士。その腰許には無数の鍵束、右手には黒い『鍵剣［ケン］』。

「まぁ良いさ、今回は及第点をくれてやる…！」

「――ガ、ハッ！？」

精霊光を纏って巨大化した鍵剣を逆手に構え、衝き立てる。躯ではなく心に刋り込まれたそれを――捻り込んだ。

「……”無間に果てぬ韻律”の名に於いて『銘ず』。世界よ、『矛盾の剣』たる【破綻】に集い、永劫の門を開け――……」

死など生温い苦痛の中、薄れ行く意識で見たのは――どこかで見た覚えのある魔金の眼差しだった…

Die Fraulein Aeonenmeer zwei・・・"

「～～♪～～～♪」

風が頬を撫でる。匂い立つ華の香を含む甘い春の野の風。その風に乗り耳朶を震わせるハミング。

刧莫と拡がる水平線、黒金の太陽と白銀の望月を同時に望む、薄紫の虚空［ソラ］と虚海［ウミ］の境界に浮かぶ孤島。その外周を緩やかに周回する七本の石柱。

「……此処は」

背を預ける樹の幹、捻れ逢い一ツとなった連理［メビウス］の大樹。右の枝には片翼の、紅い瞳の鷲。左の根には隻眼の、蒼い瞳の蛇。目前の華園には翠の一角獣が躯を横たえて休む。

天には雲が棚引き、白凰が飛ぶ。地には草が流れ、深い海淵に黒龍が泳ぐ。果てし無く吹き渡る風にそよぐ、葵い草木。それを育むは何処に源泉が在るのか、地を潤す湧水の流れ。

天を向けば一一幹に挟まれた柄。流線型の拡がりを見せる、黒檀に似た碧黒の銃床に、藍銀の用心鉄［トリガーガード］を備える旋条銃の『銃把［ツカ］』を望んだ。

「……あ」

と、息を詰める声。ゆっくりと右に顔を向ければ見詰め合う、魔金の瞳。刹那、まるで袱紗を解いたように綻び、溢れ出す記憶。滄海

［あお］い髪の少女との邂逅が。

「…アイオネア…？」

今度は逃げ出さずに微笑みかけた彼女。右瞳は魔金、左瞳は聖銀。膝下まで有る髪は滄海［あお］く、その頭上に戴く花冠。青磁の肌に纏うは、夜闇の融ける法衣と暁晃を切り取った外衣。胸元には緋焔をあしらう被服留。

「はい…はいっ…あふっ！？」

”刧媛［フロイライン＝アイオネア］”は呼び掛けに応え、慌てて出て来ようとして一一大樹の根っこにつまずき、顔から『ずべしっ！』と倒れ込んだ。

余りの勢いに戴いた花冠が外れ、髪の間に尖り気味の耳朶と二股の小さな龍の角が覗いた。『火』と『破壊』を象徴する西洋の”竜”とは違い、『水』と『誕生』を象徴する東洋の”龍”の角だ。

「いたた…よかったぁ…あ…」

だが何とか、両の手で支えていた靈氣［アイテール］を充たす聖杯は落とさぬように守り抜いていた。安堵して溜息を零すが、彼の視線に気付いて真っ赤に茹で上がる。

慌てて身なりを調えてから彼女は、その盃を捧げた。

「お、お待ちしておりました……アキ様…宜しければ…どうぞ」

水鏡が映すは、双世樹に穿たれた虚［ウロ］。聖盃の納められていた聖櫃。樹の合間より衝き出す一一限り無く透明にも濁っても見え

る、波紋の刃紋の蒼滄［あお］い刃。

瑠璃［ラピス＝ラズリ］の海へと、永遠に寄せては返す波のように。波跡を刻み続けるその幻想の刃は”水紋剱［ダマスカスブレード］”。

「ああ……っく」

受け取ろうと試みるが、やはり躯は動かない。媛君は以前と同じく彼の前に膝を付き――盃を口許へ傾ける。

「――…ん…ンク…ンク……」

喉を滑り落ちる澪水［みず］。その甘［うま］さは以前より更に磨きが掛かっているように感じられる。

――そうだ、他の水じゃちっとも癒されなかった。俺の渇きは……この水じゃなきゃ潤わなかった。

「ふぅ……有難う、アイオネア…甘かった」

「あ、有り難うございます…」

全て飲み干された聖盃は、彼女の慎ましやかな胸元に抱かれた。渇きが癒えクリアになった意識、周囲を見渡せば…気のせいか以前よりも霊獣達との距離が近い。

「久しぶり、か。何でだろうな…今までずっと忘れてたよ」

ぎこちなく笑って見せる。少なくとも、本心からではなく。それがいけなかった。

「…何かおありになったんですか?今のアキ様は、とても辛そうなお顔をなされています…」
「う……」
…あっさりと看破され、心配されてしまう。そもそも、笑顔は苦手なのだから。
「…俺は…無力だからさ」
そして、口を開いた。普段ならば強がってごまかして終わる場面で本心を。それだけ、彼の心は追い詰められていた。
「……救いたかったんだ。でも、俺にだけは無理だった。俺と同じだったアイツを…」
「アキ様…」
一一確かに、行き過ぎてた。でもアイツはただ…守りたかっただけなんだ。自分の大事なモノを…!
「当然だよな、多寡がニンゲンが神剣士「バケモノ」と闘って、生き残るだけで精一杯の癖して『救いたい』なんて…そんな大それた事が出来る訳無かったんだ…!」
血を吐くような吐露。負った傷の痛みを忘れないように、その傷を刻るような言葉の奔流。
「…きっと、救われました。その方は…」
「…そんな筈は無い、俺は何一ツ出来なかった……死んだら終わりなんだよ。救いなんて、何処にも無いんだ!」

媛君はその言葉を全て聞き終え、静かな声を掛ける。しかし彼は、その慈愛の言葉を拒絶する。

――神名で転生しても、ショウが生まれる事はもうない。アレは、『神』という役職を存続させる為だけの仕組み。何度でも何度でも…この俺の『前世』のように！！

繰り返し繰り返し絶望を刻む神名に翻弄された挙句に、成れの果てが機械の躯。何から何まで、同じだった。

「――何が…何が、『聖なる神名［オリハルコンネーム］』だよ…あんなモノ、命を冒涜するただの『呪詛［ノロイ］』だろうが…！！」

それは一体、誰へと手向けられたモノか。地に墜ちた聖杯が弔鐘のように物悲しい旋律を奏でた。

「きっと救われました、その方の魂は。アキ様の何処までも果てしなく拡がる優しい『蒼穹［そら］』のような魂に…きっと」

そっと抱き締められる。甘やかな、それでいて爽やかな白檀に似た香気。小さな身体らしく、高めの体温。

「お辛いのなら、”月下界”に戻らなくたって良いじゃありませんか…アキ様さえ宜しければ、この”天上海”にご逗留下さいませ…」

流れる髪は、太洋［オケアノス］のように。眼差しは水面に燦ざめく燐光のように。その声はまるで砂浜を濡らす波音のように…穏やかで柔らかく、温かい。

「この私と…『空位神剣』と契約して頂けるのなら、永遠に変わる事の無い安寧をお約束致します。いいえ、私に出来る事はそれだけしか無いんです…」

まるで――陽光［ヒカリ］射す海に抱かれて揺蕩［たゆた］うように。永久［とこしえ］に変わる事の無い”魂の浄土［アタラクシア］”。

「…私の、神剣としての形状は…”生命［イノチ］”ですから――…」

…それこそ、彼女が『空位神剣』たる由縁。生きとし生ける全てが知覚しながら誰もが忘れ去った、普遍ながら唯一実在する『奇跡』。遍く”可能性”を宿した唯一の…『冀望［キボウ］』だ。

則ち、彼女の契約者は――永遠に尽きぬ命を得る。そしてこの楽園にて、久遠に続く安らぎを得るのだろう。

「有難うアイオネア…嬉しいよ」

今度浮かべたのは…またも不器用な微笑み。だがそれは間違いなく、本心から出たモノ。

――優しいのは、お前の方だろ。こんな惨めな俺が『蒼穹』なら…お前は何処までも遙かに拡がる、鏡の如く凪いだ『滄海［ウミ］』のように優しい。

「でも……それは出来ない。それだけは出来ない」

目前の救いに手を伸ばしかけた、その時――思い浮かんだのは……壱振りの黒い大剣。

「俺は『巽空』だから…どんなに無力でも、自分の可能性を信じて”在るがままで己らしく在る”……『神銃士』だからな…」

ずっと、そんな弱者である巽空を信じチカラを貸してくれた神獣…【夜燭】の凍えた焔”レストアス”の姿だった。

――その俺が”永遠の生命”なんかに縋って、何もかもを投げ出して楽になって良い訳が無い。アイツの信頼に応える為にも…アイツが信じてくれる『巽空』を貫く為に…！

だから今更、強がりのその言葉を口にしたのかどうかは判らないが、彼女はそれが彼の本心である事を悟る。

”生命”の元型［アーキタイプ］たる『刧初の媛』アイオネアはそっと腕を解き、転がっていた盃を抱き上げる。

「困らせてしまってごめんなさい…そうですよね、私は…無価値な空っぽですから…」

滄い睫毛を伏せて悲しげに俯き、抱き締める聖盃に力を篭めるが、それで壊れるモノでも無い。

「…そんな事無い、アイオネアは二回も俺に水をくれただろ」

「でも、そんな事は……誰にでも出来ます。私だけに出来る事じゃ無いです…」

…普遍の”生命”であるからこそ、それは同じ”生命”にすらも壊す事適う唯一の『奇跡』。永遠神剣に在るまじき、脆弱な事この下

無き唯一の『冀望』なのである。

己の言葉に打ちひしがれたように、櫻色の唇を結ぶ深滄の媛君。
その言葉通り、この無力な媛君に出来る事は一一”未だ”何も無い。

と、周囲の霊獣達の色とりどりの眼差しが一斉に注がれている事に気付く。ジッと値踏みでもするように彼の全身を見回すその九つの眼差しは『続きを言え』と、そう言っているように感じられた。

しかしそれは、自らの手で解いた”縁［よすが］”だ。その上で慰めるなどと、阿呆のする事だろう。

一時、逡巡した空だったが一一

「…いいや、満たしてくれたさ。アイオネアが空っぽだっていうなら俺だってカラだ。水を飲むくらい、誰にでも出来るんだからな」
「でも私には…他の”皆”みたいに、特別な『異能［チカラ］』なんて無いから…”位階”も貰えなくて…アキ様にも選んで頂けなくて…」

だが彼女は”殻［カラ］”に閉じ篭る鳥の雛のように。『自分に出来る事なんて何も無い』と、庇護たる楽園［カラ］に震えた声を響かせる。そんな彼女に向け、彼は静かに告げた。

「…何も無いんじゃない。カラにはカラが満たされてるんだ。今の、その盃みたいに」
「カラに…カラが満ちて？」

彼の言葉を理解出来たのか出来なかったのか、媛君は不思議そうに抱く聖盃を見詰める。聖盃を満たしていた靈氣は、一滴すら残って

はいない。

「ああ、”空［カラ］”と”無”は違う…カラは何も無いんじゃなくて、”全”を受け入れられる唯一ツだ。全てを否定する虚無とは違って、全てを肯定する…だから、全てと一緒なんだよ、カラは」

「…カラが、全て……」

「そうだ、そのカラッポの盃には一一その外に拡がる世界の全てが満ちてるんだ」

文字通りのカラ、カラを満たした”空器［ウツワ］”。だからそれは、その空っぽのままで満タンだなんだと。そんな事を言ってのけた。

一一とんでもない詭弁だな。いや…そう在ってほしいだけか。俺と同じで、自分が『空虚』だと感じているこの娘に。そう有りたいと、願う事を……

自嘲して大樹を見上げた目に映る銃把、レバーアクションの基幹部の下面にあしらわれた『鍵穴』の意匠［レリーフ］に目を奪われる。

一一あの『鍵穴』のサイズ…俺の『鍵』と同じじゃあ…

「じゃあ…」

「…ん？」

気を取られてしまっていた彼は、彼女の呼び声に応えて視線を戻す。戻してみれば、縋るような金銀の瞳と見詰め逢う。

「もしも私が空っぽのまま奇跡を起こせたのなら…飲み干した後の終わりの盃に水を注げば始まりに戻るように…”終わりから始まる

”事が出来たのなら…私と契約して下さいますか…?」

…それは間違い無く、誤った言葉だった。安易な慰めなどを掛けなければ、彼女は諦めていた筈だ。なにせ彼が彼女に掛けた言葉は、”空っぽのままでも可能性が在る”と信じさせる言葉だった故に彼女は、『冀望』を抱いてしまった。

「アイオネア…御免、俺は神剣とは契約出来ない――…」

瞬間、意識が揺らぐ。彼方で瞬く黒金の太陽に終わりを悟った。だがそれは彼女に伝わる事は無い。己の存在が霞んでいく最中でも、言葉は続けて投げ掛けられる。

「じゃあ、私が『神剣』じゃなく『神銃』だったのなら…アキ様は私と、縁［えにし］を結んで下さいますか…?」

薄らぐ心魂では意味を成す思考が出来ない。ただ、今にも泪を流しそうなその娘を突き放す事だけはどうしても言えなかった。

「…そう…だな……『永遠神剣』じゃなくて『永遠神銃』なら俺は…『神銃士』だから…」

「はい…はいっ…!」

不可能と知りつつ発した、そんな朦朧とした言葉すらも真に受けて嬉しそうに微笑んだ彼女。

『『『『『――┣┳┣┻┫┻┫┳┣┳┣┻……!!!┳』』』』』

刹那、五柱の霊獣が福音の咆哮と共に空間に波紋を残して消える。彼女の”意志”が定まった事により『根源力』…根源たるマナを司

る象徴の臣下達が、空器［セカイ］の一切を満たしていく。

…結論から言えば、彼はまた言葉を間違えた。何故ならば彼女は、”生命”だ。その歩みを止めぬ限り、如何なる『奇跡』であろうとも諦めなければ起こしてのけるモノ――”普遍の可能性”そのものなのだから。

「お待ち致します、ずっと…」

性海［しょうかい］を埋める緻密な虹色。五つの属性を象徴する円を結ぶ五芒星、それを中心軸として放射状に拡がった真円の魔法陣。薔薇窓のステンドグラスに似た、精霊光［オーラ］に照らされて。

”未定義の源初動”であった彼女が見出だした方向性…この”世界卵”に渦巻くあらゆる可能性が結実し、唯一無二の『冀望』として――『永遠神銃』として、孵［カエ］るべきその刻を待つ。

「幾度の刧簸［カルパ］を閲［けみ］しようとずっと…私を必要として下さる事を…」

「――アイオネア…」

伽藍洞の真世界の深奥、その秘績［サクラメント］の媛君は…心月の寵愛である月光［ヒカリ］を浴びて恥じらい俯く、夜露に濡れながら咲いた清楚で無垢な白百合の華のように。

「久遠の刻も…無間の世すらも、超えて――…」

美しくも健気に、儚くも艶やかな笑顔を見せた――…

The 63th Name…"永訣の朝［あした］"

…勝負は一瞬だった。閃いたのは二射、同時に放たれた白と紫の矢はぶつかり合い――砕け散った紫は消滅し、白は相対する射手を射抜く。

ショウはセントラルタワーの屋上に仰向けに倒れ伏す。その目に映る――…久しく見ていなかった、夜明け前の瑠璃色の穹［ソラ］。

強大過ぎる浄戒の神名を無理矢理詰め込んだ代償として彼の躯と心、魂は既に壊れていた。どんなに足掻いても助かる道は在るまい。

だが――彼はそれで満足だった。

「…ショウ…ごめんよ、僕は…」

…無意味な死ではなく、友の手に掛かって破壊されたのだから。

――馬鹿野郎…なんて顔してやがる…お前がそんな顔してちゃ、安心して逝けねェだろ…

「いいぜ…行けよ、スバル…この狭苦しい”鳥篭”を抜けて…お前が憧れ続けた…広い…世界に…」

…だから、彼は友人を鼓舞する。この余りに優し過ぎる人生最高の親友［トモダチ］を――送り出す。

――俺はその光の中には行けない。俺は…この闇の底で充分だ。だってそうだろ…闇の中からじゃなきゃ、光は見えない…

「スバル…俺は…これからもお前のトモダチで…居られるか…？」
「当たり前だろう、ショウ…僕らは…いつまでも……」

伸ばした手を、スバルは迷わずに握り締めた。チカラは――弱い。
スバルももう、動いているのが限界の状態だった。

「……ああ……ずっと……」

――永遠に、俺達は……

「「……トモダチだ……」」

…その朝に希望など無く。ただ、変わらない絶望が彩る。始まりが有れば、必ず終わりが有る。
しかし、終わるからこそ…始まりが有る。それこそが、”輪廻”だ。
最期の瞬間にまた心から笑い合えた二人の”絆”は――まだ、終わりなど迎えてはいないのだろう……

暗く鎖されていた視界。それを、ゆっくり開けば――見慣れたくない保健室の天井が目に映る。

「あら、目が覚めた？気持ち悪いところとか無い？」
「…姐さん…俺は…」
「血液を1リットルも抜かれてたのよ…よく生きてたわね。皆心配してたんだから」

白衣姿のヤツィータを一度見遣り、軽い眩暈を覚えながら上半身を起こす。と一一隣から生理食塩水が渡された。

「…どうぞ、巽くん」

「セラフカ…さん…？」

学園の制服に身を包んだスバル、トレードマークの赤い鉢巻きは着けたまま。彼はそれまでの経緯を説明する。旅団に加わった事、繰り返す世界の滅亡…ショウの死。既に、それから三日が過ぎている事を。

「…そう…ですか」

全てを聞き終えた空の目に映る、壁に立て掛けられた【夜燭】。

【…ご無事ですか、オーナー…】

（ああ…ッてか、お前こそな）

黒い剣は【疑氷】の矢により穴が穿たれ、あちこち無惨に傷付いている。消滅していないのが不思議なくらいの損傷度合いだ。

一一結局何も為せず、何者にも成れやしない…俺は何の為に、他者を傷つけてまで壱志［イジ］を張り続けているんだろうか。

「……ッ！！」

込み上げてきた吐き気ごと生理食塩水を飲み下し、大きく息を吐く。そんな空の手に、スバルの手が重なった。

「…有り難う、巽くん。ショウの魂を救ってくれて。ショウの奴…

最期の瞬間に笑ってました。きっとそれは、希望が実在する事を知ったからだと思うんです」

「…それは、俺じゃないですよ。ショウにとっての希望はセラフカさんだ」

「だとしたら、僕の希望は君だ」

突然の言葉に面食らう空。しかしスバルは構わずに続ける。

「僕の大事なトモダチの魂を救ってくれた君が、僕の希望だ。だから、やっぱりショウにとっても君は希望だった。それで…いいじゃないか」

そう、笑顔を見せた。トモダチの死からたった三日しか経っていないのに。

――なんて強い人なんだろうな。お前が惚れ込んだのも理解できるぜ、ショウ…

その笑顔は、よく似ている。何処かのお人よしな幼馴染みに。

「…有り難う、もう大丈夫だ……『スバル』さん」

「…お大事に、『空』くん」

そうしてファーストネームで呼び合って、スバルは席を立つ。空も立ち上がろうとしたが、そこはヤツィータに抑えられてしまった。

仕方無しに寝転び、窓の外に目をやれば――ものべーの擬似天幕に投影された夜空。

「姐さん、そういえば今は…どうなってるんです？」

「うん？言ってなかった？」
「聞いてねっすよ…」

『ゴメンあそばせ～』と言わんばかりの仕種に溜息を落としつつ、耳を傾ける。下手な事を言うとどれだけ脱線するか、判ったモノではない。

「…浄戒を奪取して、暁絶の待つ世界に向かっているところよ」
「……ッ！！？」
「あ、ちょっとクーくん！？待ちなさい…！」

そこで跳び起きた。思い出したのだ、今がどれ程危うい状況かを。ヤツィータの止める声すら聞かず、空は保健室を走り出る。

――しまった…！何呑気［ノンキ］曝してやがる阿保んだら！！今此処には…あの二ツの神名が揃ってるんだぞ！！

縺れそうになる足、それに鞭打ち二人を探す。世刻望と永峰希美を探して、望の部屋に辿り着き――

「はい、望くん。あーん♪」
「駄目です先輩、それはわたしの役目です！！望ちゃん、あーん！」
「いや、自分で食うから…」

沙月と希美にちやほやされながら夜食にスナック菓子を食べている最中の色男モテ地獄を目の当たりにして、扉を打［ぶ］ち破りながら『ザシャアアッ！！』とおもっきり顔面スライディングをかました。

擦りむいた鼻に貼った絆創膏を摩りながら、空は暗い廊下を歩んでいた。

「…ったく。シリアスかましてた自分が恥ずかしくなったぜ…」

あの後、二三質問と厭味を言って保健室に引き返し治療して貰い、装備を取って自分の部屋に帰る事にしたのだ。ついでに食堂で勝手に肉類中心のこってりした食事を平らげ、道々食後の番茶がわりに数本の缶珈琲を手に入れて。

しかし直ぐに表情は引き締まる。『何か変わった事は無いか？』というその問い掛けに、望と希美の二人が表情を曇らせたのを見逃さなかった。

――やっぱりそうだ。浄戒を取り戻した事で、望はより強く前世を感じるようになった筈。

そして希美は…浄戒が側に在ると相剋が目覚めるかもしれない。

…『相剋』の神名。それは所謂、『ワクチン』のようなものだ。神という『プログラム』に対して、絶対的優位を持つ『ウィルス』の『浄戒』を狙い撃ちにした神名。故に他の神名に対しては特に作用しないが、『浄戒』にだけは絶対的優位を持つ。

ボヤきながら、缶の蓋を開ける。神を弑す神の『破壊と殺戮の神』”ジルオル＝セドカ”を確実に弑す為に在る…『断罪と救世の女神』”ファイム＝ナルス”に刻まれた、『浄戒』に対する『相剋』。

――でも俺は…どんな状況でその『相剋』が目覚めるのか知らない。それが発現する前に南北天戦争を脱落してしまった。今はまだ、二

人はあくまで今まで通りの関係のままだが…神名が目覚めれば、あの二人は……

「…ったく。世の中って奴はどうしてこう上手く出来てるのかね。クソッタレなカミサマはよっぽど悲恋モノが好きらしいな」

反吐を吐きながら何気なく視線を向けた先に少女は居た。暗がりの底から星空を見上げている小さな黒い影。

「…黒ジャリ天か…」

「……生きていたのですか。巽は手先が器用でゴリラ並の筋力に、ゴキブリ並の生命力なのですね。ギャンブルも好きなようですし」

「断じて眉毛は繋がってねーぞ」

窓の桟に腰を下ろしていた堕天使ナナシ。ともすれば闇に溶けてしまいそうに感じる。何となく沈んでいるようだ。

「…何か？」

「いや、別に」

暫く続いた沈黙、動く物の何も無い学園の静寂の中、黙って珈琲を含み続ける。

「…お願いが、有ります」

「一一…何が？」

鼓膜を揺らした声に、一拍分間を置いて応える。その声に逼迫したモノを感じた為に。

「一一…今からでも世刻達が元々の世界に帰るように、説得して貰

いたいのです」

それにナナシも一拍分間を置いて応えた。心を落ち着かせる為に。

「…あのな、無茶言うな。俺達が此処まで来たのは、お前の主人の暁の方が招き寄せたからだろ？」

「…だからこそです。貴方になら判る筈でしょう、己の神名に命を蝕まれる…苦痛と恐怖が」

夜風が吹き渡れば、微かに聞こえる枝葉の擦れる音。静かな夜想曲［ノクターン］が世界を彩る。

それをひとしきり聞いた後で。

「判んねーよ…巽空［オレ］には、暁絶の気持ちなんて」

「…敵だから、ですか」

此処に来て、初めてナナシは本心からの情動を見せた。キッと空を睨みつけ、低く恫喝するように。静かな、しかし激しい怒りの感情を見せる。

「そういう訳じゃない。判るさ、死ぬのが恐いのは。でも…それは他の誰でも同じだろ？『滅び』の神名なんて持ってなくたって、生まれたら死ぬのは当たり前だ」

「そんな事が言えるのは『触穢』から解放されたからでしょう…！マスターは今も苦しんでいます、目の前に迫った『滅び』に！！」

空は缶珈琲を一口含むと、顔を向ける事も無く宣った。流石に怒りを爆発させたナナシ、だがやはり空は意に介さずに一気に飲み干し一一心底悔しそうに。

「…なんて、お前と議論したって仕方無いよな。暁の奴に言わなきゃよ。けど、俺じゃあ姿を見る前に唐竹割りが関の山だ」

実力差は嫌と言う程に理解している。何せ神獣だけでもあの強さの永遠神剣の持ち主だ、旅の始まりの時の交戦など遊ばれていただけだろう。

「…当たり前です。マスターは誰よりも強い方ですから」

「またしても惚気［ノロケ］かよ…コレだからデキてる奴らは…」

「だからっ…！誰がデキてる奴らですかっ！！」

またもそこで気を取り直して、咳ばらいしてナナシはいつもの澄ました顔に戻る。扱いに慣れてきた優越感からニヤついていた顔を、空も引き締めた。

「…だからよ、望を信じてやってくれ。アイツは本心から暁を救おうとしてる。それを諦めてないんだ。『トモダチ』ってだけで」

「…そんなもの…」

「ああ、綺麗事の上に絵空事さ。夢見てると俺だって思う。全てが上手くいく訳が無い、誰かが利を得たなら誰かが損をするのが現実だ。それでも…もし全部が上手くいくのなら。努力が報われるなら、諦めたくないんだよ」

近くの屑籠に空き缶を投げる。缶は屑籠の縁に当たり、クルクルと縦に高速回転して見事に入った。

「一一何せオイラは鼻タレ小僧。物語はハッピーエンドで終わらなきゃ嫌な性質［たち］なもんでね」

最後の最後で恥ずかしさを隠し切れずに、茶化して。ナナシの脇に封を切っていない缶珈琲を置いて、バリバリと髪を掻きながら歩み去る背中。そこに――

「マスターを…助けて…」

そこに投げ掛けられた微かな、搾り出すような…震える声。

「…約束は出来ない。けど、努力はする。それで…勘弁してくれ」

振り返りはしない。たった今、自分で『夢を見ろ』と言ったのだ。沸き上がるのは怒り。此処まで自分を思ってくれる存在を一人にしておく絶に。何より――頼られても応えられもしない無力な己……

『巽空』に。

だが、それに甦る笑顔があった。夢か現かは今だに判別が付かないが…滄海［あお］の髪と金銀の瞳、儚い笑顔。

自分も同じ事をやったのだ。差し延べられた手をとらなかったのだ、いつも通り意固地になって。

――本当…やってらんねーんだよ…クソッタレ…

足音は少女の声から、情けなくも逃げるように。決戦の世界へと、逃れる術も無く進んで行った。

The Other Name ?・・・"黄昏"

…砂塵の巻き上がる砂漠。黄昏に染まる天は血を流したように紅く、かつての青空を見る事は二度と無い。緑溢れた姿などもう遠い過去、幼き日に遊んだ山野は岩肌を剥き出す骸と化し、生まれ育った街は砂の海に呑まれ沈んだ。

水などはとうの昔に枯れ果てたというのに、未だ雲は有る。しかし、雨となったところで地まで届く事無く蒸発し、乾ききった大地は砂となり枯れた分枝世界と宿命を共にするだけ。

…この『枯れた世界』でまだ形を保っているのは、遠くに突き出た一ツの『塔』のみ。

「……」

耳を済ませば今でも鮮烈に蘇る、あの忌まわしい声。傲慢なる神の終末宣告と、絶望に狂った人々の怨嗟が響く…最期の日が。

「…まだか…まだ、来ないのか」

砂を孕む風に吹かれながら、砂丘の頂に立つ黒衣に身を包んだ銀髪青瞳の青年は呟く。その焼けつく風を斬り、腰の佩刀が哭いた。彼の運命を決定づけた祝福と呪詛を共に齎した一一神剣が。

…何も動くモノの無い世界。生命［マナ］の消え失せた世界に、何処までも木霊するその物悲しい響きはまるで、嘆きの精［バンシー］の唄う鎮魂歌［レクイエム］。

「俺の『滅び』は近い…この機会を逃せばもう復讐は叶わない…」

握り締めた拳、それを開けば砂が零れ落ちる。だが、拾い上げた訳ではない。

彼自身が砂になりつつ有るのだ、その”魂”に刻まれた『神名』に。

逃げ場の無い滅びを宿命づけられたその身は、この世界と同じ。

ふと孤独感に包まれる。あの世界での、二度と戻れない日々。始めこそ利用する為だったが、何時しか――掛け替えが無いモノになっていたその関係に。そして、いつも傍に居てくれたその存在が居ない事に。

しかし彼はただ、苦笑するに止まった。己の決意の甘さに。

判っているのだ、諦めてしまっては――神への復讐を託して逝ったこの世界の住人達に…この復讐劇に巻き込んでしまった”彼女”に、申し訳が立たない。

だから、その命が潰える刹那まで…成功したところで救いなど無く砂となり消え果てるとしても、彼は決して諦めはしない。

そしてその”復讐”の為に幾多の命を吸ってきた彼の刀に手が掛かり、低く腰を落とした抜刀の構えを取った。

踏み締めたその足場たる砂地には――鮮やか過ぎる手並みに死した事にすら気付かない哀れな犠牲者どもが、半ば埋もれた骸を曝す。

それこそが彼の在り方だ。復讐に生きて、復讐に死ぬ事こそが――神世の古に『復讐の神』の二ツ名で畏れられた神性の『聖なる神名［オリハルコンネーム］』を継ぐ、彼の在り方なのだ。

「早く…早く来い、望…！神弑の『浄戒』を持って…俺の元に！」

…瞬間、世界に『光』が溢れる。開いた〝門〟を通って新たな犠牲者、ミニオン達が現れた――…

The 64th Name…"決戦を前に"

学園の校庭、次の世界まではまだもう少し時間がある。その合間に空はソルとの套路に励んでいた。彼は体操服で李小龍の開いた拳法［みち］…截拳道［ジークンドー］を遣っている。源流となった『詠春拳』の守りを主軸として徒手空拳で敵を無力化する、千変万化のこの拳法は思想的にも彼の戦闘スタイルにこの上無く合致する。

「うっし、一先ず終わりにしようぜクロ、空」

「左様、流石に四時間続け通しは疲れたであろう。根の詰め過ぎは悪影響を及ぼそう」

「そう…だな。訓練で躯壊すのも莫迦らしいし」

ソルの【荒神】の守護神獣の黒狼『黒い牙』…クロの忠告に従って切り上げる。校舎と校庭を繋ぐ階段に腰を下ろす二人と一匹。途中、空の懐から落ちた物をクロが拾い上げた。

「巽よ、落としモノだ」

くわえられていたモノは一一骨。肉が付いていれば、某原始的な肉になるだろう。しかし似合う姿だ、心なしか尻尾が揺れている気がする。

「うん？……『トーの聖骨』か…ミニオンが落としたやつだな…」

受け取り、空は…ウズウズと身を震わせて。足を踏ん張り、大きく振りかぶって。

「ーー取ってこーーいッ!!!」「ーーアオーーーン!!」

思いっ切り、聖骨を遠くへと投げ飛ばす。クロはそれに向けて疾風のように走り、戻ってきた。

「よーしよしよし…」

「…さて、そろそろよいかな?」

ム〇ゴロウさんのようにかいぐる空を暫く好きにさせーークロは、戦闘の際に見せる鋭い眼差しを向けた。

「うっす、クロ先輩…思い残した事はもうねっす」

「ふむ、その意気に免じて今回は不問に付そう。二度とやるな」

「何やってんだ…おお、『地牙』のインスピレーションが…」

聖骨を噛み砕き、クロは噛んで含めるように告げる。ソルは呆れ返った声を向けるだけだった。

「そういやぁ、俺もパーマネントウィル持ってるぜ。そらコレ」

言うや懐から何かを取り出したソル。それはーー口を縛っただけのビニール袋。

「…フッ、莫迦なりに頭使ったじゃねぇか。でも甘いな、俺は恥をかくのなんて何とも思わないからな。見えないぞ、何も見えない」

それを、『裸の王様』的な試しだと思った空は見たまんまを答えた。

ソルはまたも呆れ顔を見せる。

「あん?当たり前だろ。『コバタの森の風』が見える訳ねーだろ」

「紛らわしいわ！つーか何を保管してんだテメーは！空気の缶詰か！そしてミニオンがどうやって持ってたか教えろ！」
「雁首揃えて何騒いでんのさー」

問い詰めている最中、校舎の方からルプトナが現れた。制服姿なところを見ると、暇を持て余しているらしい。

「…あれ、ソル、それコバタの森の風じゃん」
「何で？！何で判るんだよ！」
「あ、ボクも持ってるよ、パーマネントウィル。ほらコレ」

そうしてポケットから取り出したのは一一土の入ったビニール袋。

「…って、見た事ねーよそんなん持ち歩いてる奴！！お前は夢敗れた高校球児か！！」
「なんだよぉ、ただの『十六夜の平原』じゃんか」
「だからミニオンがどうやって持ってたか教えろォォォ！！」
「ちょっと、何騒いでるのよ～…こっちは二日酔いで辛いんだからね～…あらぁ、コバタの森の風と十六夜の平原じゃない」
「だから何で判るんだァァッ！！」

そこにフラフラと、頭を抑えたまま現れたヤツィータ。昨日も深酒したのか、顔色が悪い。

「あたしも持ってるわよ、パーマネントウィル。はいコレ」

そして、懐から取り出された一一少量の水が入ったビニール袋。

「オイィィ！保険医が何持ち歩いてんだよ！コレッ…確実に使い方一つしか思い浮かばねーよ！！」

「なによぉ、ただの『冥界の地下水脈』じゃないのよ」
「だから何で頑なにビニール袋に入れて来るんだよ！ビニール袋の中に世界でも創る気か！！」
「あら、良いわねそれ。どんなスキルを覚えられるのかしら」
「俺が一から十まで全部ツッコむと思うなよォォッ！！」

コバタの森の風と十六夜の平原、冥界の地下水脈を一つのビニール袋に纏めて泥水を作った三人と、ゼイゼイと肩で息をしながらツッコみ続ける空。

「…貴方達は、いつもあんな風に騒いでいるのですか？」
「あの四人が特別おめでたい性格なだけだ。一緒にしないで欲しいものだな」
「まったくじゃ」

それを生徒会室から眺めていたナナシは、冷たい眼差しをサレスとナーヤと共に彼等へ向けた。

訓練を切り上げ、ミネラルウォーターを手に入れて自室に戻る道々、思い出した事があった。

――そう言えば綺羅の奴、元気にしてるのか…？時深さんがいるんだから狂犬病とかの心配はないと思うけどよ…

クロを見て思い出した、旅が始まる前に黒狗に襲われた時に助けてくれた凛々しい銀狗。礼に首輪でも買ってやるかと決心した。

「――巽、丁度良いところに」
「はい？」
振り返れば屋上で干していた物を取り込んで来たらしい、畳まれた服の入った洗濯籠を持つカティマとタリア、ユーフォリア。
「暗殺者［アサシン］が背後を取られるとは…俺も腕が落ちたな」
「ボケはあんたが校庭で相手してた連中だけで十分よ」
ジト目で睨まれて『黙れこの野郎［サイレントフィールド］』を唱えられて仕方なく水を含んで黙る。差し出された武術服は洗濯済みの上、破れも繕ってある。広げて見ても傷はほとんど判らない。
「毎度すみません。礼はいずれ、精神的に」
「期待しないで待ってるわよ。じゃあ、急ぐから」
――面倒見も良くてしっかり意見も言う良妻賢母タイプ、ソルの奴も中々見る目があるよな…まぁ、十中八九尻に敷かれてカカア天下だろうけどアイツにはそういう方が似合うか。
スッと手を挙げてさっさと帰っていくタリアを見送る。
「…ッてか、見てたんなら助けてくださいよ。あのボケの三連星、一人で捌くの大変だったんすよ」
「何を言うかと思えば。だからこそ関わりたくなかったのですよ」
「ごもっとも……ところで姫さん、ボケに対してエグいですよね？具体的に言うと生で嚙った蕗の薹くらい。なあユーフォリア？」
そう、何気なく話を振った。さっきから一言も発していない少女に。
すると――

「……（ぷいっ）」

…とばかりにそっぽを向かれてしまった。いかにも『怒ってます』といった感じで。

「ユーフォリア？おーい…」

「……（つーん）」

回り込んでみても同じ、蒼い髪を靡かせて逆方向を向いただけだ。

「怒っているのですよ、巽に」

「俺ですか？なんかしたっけ…」

頭の白い羽根も、彼を拒絶するように逆立っている。思い悩むも、心当たりはまるで無い。

「…言い方は悪くなりますが、私達は巽の無茶にもう慣れていますから。ですが…」

膨れっ面のユーフォリアに、苦笑を漏らしながら問うた。すると、カティマも苦笑を漏らす。

「ユーフォリア殿は…泣いていましたよ。貴方を心配して」

「……」

二人とも結構なサイズの籠を抱えている。目線を戻して見れば。

「……きらい。無茶ばっかりする空さんなんて…きらいだもん…」

タオルを詰めた籠に顔半分を埋めて、上目遣いに睨みつける彼女。
その真摯な怒りを臆面も無く――

『久遠の刻も…無間の世すらも、超えて――…』

…あの時と同じく、純粋な感情を真っ直ぐに向けられて。逃げる事など出来はしない。

「…悪いな、無茶は止められねぇ。何せ俺は――…弱いからな…」

思わず出てしまう左手…感謝から彼女の頭に置こうとした左手は、暫く宙を彷徨い――心配を掛けた張本人に、そんな資格が有る訳が無いと。己の癖っ毛を掻いた。

「俺自身さ、泥臭くてダサいのは判ってるんだ。それならせめて、『チカラが無いから敵う訳無い』とか物分かりがいいのを気取って諦めてる、糞ダセぇ最低な奴には成りたくないんだよ…」

「でも…それで死ぬかもしれないじゃない。もしかしたら空さんが死んじゃうんじゃないかって……本当にあたし…心配で…」

その時の気持ちを思い出したのか、曇り空の向日葵のように項垂れ…雨に降られたようにうっすらと涙ぐむ。

――情けないのは今に始まった事じゃないが、久々に心底情けない。こんなガキんちょを泣かせる程、心配掛けるなんてよ…

「――死なねぇよ…死ぬもんか。まだ何もやり遂げてない今のまま死んだら、何の為に生まれたのか判らなくなるだろ。だから…死んで堪るか、死んでもな」

「…じゃあ、約束して…死なないって、約束…」

ぐすぐす鼻を鳴らしながら、右の小指を差し出した彼女。指切りを…正に『不可能』の代名詞を約束して欲しいと。

「判った…約束するさ。俺は絶対に死なない。少なくとも、俺から負けは認めない。相手が何者でも…俺は、必ず生き抜いてみせる」

…そうして、壱志［イジ］を張る。元より『善悪』ではなく『仁義』を最優先の行動理念とする、他人の命が懸からずに自分が苦労するだけなら平気で無茶する男。その不可能にまで挑み『安いものだ』と。小指を絡めて上下に揺する。

「…約束したよ。あたし…空さんを信じてるから…」

…その『約束』がどれ程の意味を成すか、知る由も無く――…

「…ああ。これでも”侠［おとこ］”を目指してるからな。一回結んだ約束は…壱志にかけて、守るさ」

ただ、彼女が指を解き見せた――晴天の太陽を仰いで溌剌と咲いた、大輪の向日葵の華へと返り咲く笑顔に安堵した。

「巽は相変わらず、無茶な約束をしますね。戦いに出るというのに『死なない』とは…」

「はは、何を言ってるんですか、姫さん？」

カティマの差し出した黒い外套、元式典用の外套は…この数ヶ月で随分と傷んでいる。

「無茶・無謀・無様の三段オチが巽空の得意技です。知りませんで

したか？」

受け取り、お道化た調子で冗句を口走った空に彼女は少し呆れた風に破顔した。

「ふふ、これは一本取られました。私との手合わせの時にも、これくらい見事に一本取って欲しいものですね」

「うく、見事な返しの刃で…」

外套を左肩に掛けながら理解した事。自分の『家族達』は、こうも優しい。…皆が皆、元気づけようとしてくれていたのだから。

「…そういえば今日の食事当番って誰でしたっけ？ど忘れしちまいました」

恥ずかしい言葉で表すのならば、”家族の絆”とでも言うのだろう。胸中に溢れる温かな気分を軽口で隠して。

「えーっと…確か」

「沙月殿だった筈ですよ」

そのまま並び歩き、角に差し掛かった時。その悲劇は起きた。

「えっマジすか？ヤベー、当たり外れ大きいから念の為に胃薬用意しとかないといけナバヒッ！？」

空の喉元に凄まじい勢いで突き刺さった貫手［ぬきて］、鋭く正確な”地獄突き［マーシレススパイク］”。一撃で無力化され廊下に転がる彼を笑顔で見下ろす斑鳩沙月。その手は【光輝】でコーティングされて輝いている。

「あ～～ら、それじゃあ巽くんに味見して貰う事にしましょうか。じゃあ、借りてくわね」
「え、ええ…ごゆっくり…」
「……（ぶるぶる）」

虫の息の空に冷たい声で告げての威圧に、カティマとユーフォリアは戦［おのの］くのみ。

「行くわよケイロン、久しぶりに創作料理に挑戦しましょうか」
「了解。しかし、御申し付け下されば槍をお貸ししましたのに…」
「…た、たしゅ…け…」

ケイロンに首を掴まれていった彼を救ったのは、偶然にも食堂に居合わせた望と希美、スバルの必死の擁護だったという……

The 65th Name…"幽冥［ヤミ］"

…黄昏の世界に『翳』が溢れた。それは”門”、分枝世界を繋ぐ現象。そこを通過して三ツの影が砂漠に降り立った。

崩壊した繰り返す世界から離脱した光をもたらすものの神剣士達。しかし、既に味方の展開は終わっている筈なのに集結地点には影も形も無い。

「…それにしても、見逃してよかったのかしら?坊やも、【破綻】とかいう鍵も」

エヴォリアは問い掛ける。隣のベルバルザードにではなく、背後。岩場の陰、斜陽の当たらない陰に潜む機械の神に向けて。

「――クク…オレ達の目的はね、”パンドラの箱の最後の中身”でさ。だからあんな雑魚どもに興味は無いんですよォ」

歩み出た機械神、しかし雰囲気が変わっている。具体的に言えば、装甲の類はそのままなのだが声が妙に有機的になり、取り付けられている面兜［バイザー］から覗くのが――二ツの瞳となっている事。

「それにしても大漁大漁。漁夫の利ってのは最高ですよねェ?」

彼の永遠神剣である翳、その中に見え隠れする…。

「次なる戦いに備えての増強か…貴様らしい姑息な作戦だ」

「誉め過ぎですよ先輩。嬉しくてアンタも浸蝕したくなりまさァ」

「さぁさぁ、無駄口叩いてないで目的を果たしましょう――」

パンパンと手を叩き、話を切り上げる。余程気が合わないのか一時が万事この調子の部下達に向けて、エヴォリアは疲れた表情を見せた。

「にしても、機械の見続けた儚い夢か…貴方にもそれくらいの器量が有ればね」

「何言ってんですか姐御、オイラこう見えてもピー〇ー・パン機能満載ですぜ？なんせ、羽無しで飛べますし。ねえ、フ〇ク船長」

「捻り潰されたいのか貴様ー！」

そこで、三人は気付いた。足元の砂に埋もれる味方の骸と、それを成した者の存在に。

「…あの小僧め…たった一人で我等の軍勢を此処まで…」

「ま、これが関の山でしょうが。本物の神剣士にかかりゃあね」

そんな言葉にも、残るエヴォリアは反応しない。ただ、彼女の差し出した指先から放たれた光がその骸を焼き尽くしていく。

『慈愛の女神』たる前世の名に恥じぬ、慈しみに充ちた光にて。

「ー！遅かったな、光をもたらすものども……！」

その葬火に照らされながら、黒衣の剣士は砂丘の頂きに立つ！！…

物部学園一行が降り立つ砂の海。紅く染まる世界は見渡す限りに砂、砂、砂！！

「この世界はもう枯れてしまっているらしいな。いつ分枝が崩壊するかも分からない、急ぐぞ」

サレスに促され、一行は遠く霞んで見える塔を目指す。その最後尾で、望と希美、沙月は少し思い詰めたような表情を見せている。既に透徹城内から引き出していた…小太刀【誰彼】を全てなまくらにして綺麗に研き上げた、刀身の持ち手に近い位置に穴を穿たれたままの【夜燭】を担ぎ、砂地でもお構い無しに歩く空。

【…オーナーも随分と逞しくなられましたね】

（ん、なんだよ、いきなし…）

その途中で、レストアスは語りかける。伍挺の銃に外套篭手脚甲、右肩には前の世界で手に入れたＰＤＷを吊す。因みに装填されているのは、火薬を抜きレストアスの一部を充填した特製品の銃弾。完全に武装を整え、襟巻きを防塵マスクの替わりに遣いながら砂地を走る彼の足取りは、全くブレていない。

【以前は私を担ぐだけでも精一杯だったでしょう？あの頃からは、考えられない進歩です】

（ああ…精霊の世界の事か。そういえば、そんな事も有ったな…）

【ええ、本当に…まだほんの数ヶ月前だというのに…】

最初下界に降りた時の事を言っているのだろう、偲ぶような言葉。その質に、何故か不安を感じて。

（お前のお陰だって。これからも宜しく頼む）

確かめるように問うた、その問いに。

【一一…ええ、そうですね…そうできたら、素敵なこと…】

そんな答えが返った、刹那に。

「「「一一ッ！！？」」」

色とりどりのミニオンの大部隊が一斉に現れた一一！

機械神が両腕を変型させた機械銃［マシンガン］から放たれ続ける、鋭利なマナ結晶。秒間１０００発の弾幕を怯む事無くかい潜り、砂を巻き上げて踏み込んだ一歩。

「ハァッ！」

縦に巻き込む『回山倒海の太刀』で銃を切断し、更に突き出された【暁天】が一一耳障りな金切り音を立ててその胸部を貫き、背後の岩に縫い付けた。

「流石だ…ルツルジ…ソゾア…」

機械神は、『臥薪嘗胆の太刀』を受けて致命傷を負った。貫かれたのはマナゴーレムの心臓部だ。

「一一でもな？」

「くッ！？！」

その瞬間、機神の躯が翳に変わり――絶の背後に結集した。両腕は復元されてマニュピュレーターに戻っており、握られた紅い鎌刃剣【逆月】を間髪容れずに絶へ振り下ろす。

「――ガ、ハッ?!」

それを【暁天】で受け止めた絶…否、『受け止めてしまった』絶。その持つ能力によって鏡映しに、彼の背に刀傷が走る。

「この【幽冥】の正体にも気付けねェボンクラに、オレを討てやしねェよ…」

傲然と見下ろし、鎌刃剣の湾曲した切先を彼の首筋に当てた。

「持ち主を不死身にする剣、神名を汚染する神名…ここまで厄介な神性だったとはな。巽め、やはりあの時…殺しておくべきだった」

「クク、違いねぇ。あの時分なら太刀打ち出来なかったしなぁ」

悪態にあっけらかんと笑い、機械神は無造作な刃を引いた――

「――ガ、ギ!?!」

刹那、足元より迫り出した複数の闇の刺に貫かれた。

「――マスターっ!」

「――ナ、ナシ…ッ!」

虚空より現れた堕天使の『アイアンメイデン』に縫い付けられ、その隙に『雲散霧消の太刀』を打ち込まれて。

「……チィ、これだからデキてる奴らは…」

機械の神が再製した際には、既にその姿は消え失せていた。

全てのミニオンを打ち倒し、一行は一一それを率いていた二人組を睨みつける。

「…光をもたらすものに先を越されていたとはな。一体、何が狙いだ?」

「ふん、わざわざ答えると思っているのか、サレス?」

岩の上から一行を見下ろす、鈍く光る腕輪と大薙刀を持った一一

「一ツ忠告しに来たのよ。これより先に進むのなら、私達は…全力で貴方達を滅ぼすわ」

エヴォリアとベルバルザード、光をもたらすものの神剣士を。

「…知った事か、俺達は歩みを止めない…お前達を斬り臥せてでも、絶対に!!」

それに【黎明】を突き付けた望が宣言する。紛れも無い総意、一斉に神剣にチカラを込める旅団勢。

「…いいわ、掛かってきなさい。最終決戦［ラストダンス］と洒落込みましょう」

「どちらかが滅びるまで、存分に死合うとしようぞ…」

二人の姿が陽炎の如く揺らぎ、やがて焦点を外れたように霞んでいく。その最後の刹那――

「でも――急いだ方がいいわよ？誰かさんの前世は【暁天】を”喰う”つもりらしいから」

「――テメェ…！」

望や、歯噛みする空にそう笑いかけて。朱い世界に溶けていった。

「…おい、ノゾム！ナナシの姿が見当たらぬぞ！」

残された一行、その中でレーメが声を上げた。確かに、何処を見ても堕天使の姿は無い。

「…絶のところに行ったんだろうな。案内して貰えるかと思ってたんだけど…甘かったらしい」

「仕方ねェだろ、今は…行くしかない」

拳を震わせながらも、落ち着いた声を発する。烈しい感情を押し殺して。

「空くん…大丈夫？」

そんな彼を心配し、希美が声を掛けた。彼女とて絶の事で頭は一杯だろうと気付けば、頭くらいは冷える。

「…大丈夫、全部にケリを付ける時なんだ…頑張る」

「……駄目だよ、無理したら。空くんは無茶はしても無理はしないって、信じてるからね」

優しい笑顔。向けられる月光のようなその優しさが、今は身を焦がすのみ。

――言うべきなのか…相剋の事を。もしかしたら、浄戒との作用で目覚めるかもしれないって。

「希美、もし――」

「――敵襲ー！！」

僅かに逡巡して、決意する。その瞬間に再度現れた”敵兵達”に話は断ち切られた。

「コイツら、はッ！？！」

刀傷だらけの青い竜、焼け焦げた白い竜、無数の穴が開いた黒い竜、背骨のへし折れた赤い竜、上顎から上が無く捻り潰された緑の竜、ズタボロのアンドロイド兵達。その、悪夢めいた”軍勢”に――…

機械の神と合流したエヴォリアとベルバルザード。光をもたらすものの軍勢は既に、先程の戦闘で半数を消耗した。絶に大多数を消滅させられた為に。

「反吐が出る能力だが…我等には貴様の予備に頼る以外無い…」

背を向けたままで腕を組んでいる、その神剣士。未来の世界で影に徹して、旅団が打ち倒した残骸を取り込み不壊の軍勢を作り上げた

張本人の影。【幽冥】の翳［カゲ］より溢れ出たそれらは…真っ直ぐに旅団の居るべき方角へと向かって行った。

「…ちょっと。聞いてるの、クォジェ？」

「ーーん、ああ…聞いてますよ、姐御。ちょっと気を抜いてただけでさぁ」

「気を抜いてる暇が有るのかしら？相手は神剣士十数名。正直、戦力差は壮絶よ。貴方の軍勢を加えたってね」

今更その存在に気付いたような機械神を窘める。…そう、追い詰められているのは彼女らの方だ。依り所である上位存在…理想幹神からも、【空隙】からも何の音沙汰も無いのだから。

「しっかり役目を果たしてちょうだい、何のために貴方を喚んだと思ってるのよーー」

「ああ、そうですねェ。仕事は、きっちりしないと」

そこで機械神は徐［おもむろ］に口を開く。その影が瞬く間に拡がり、一面を覆い尽くした。

「クォジェ、何をーー」

「いやぁ、仕事を熟すにはマナが足りないんで一一貴女達のマナを頂こうと思いましてね…イスベル卿、ゴルトゥン卿、ロコ卿、ウル卿？」

…その『名』を唱えた瞬間、エヴォリアとベルバルザードの眼の色が変わった。正確には、エヴォリアの雰囲気が。

「『…ほう、やはり気付いていましたかクォジェ＝クラギ』」

「『厚顔にも程があろう、よくその面を我等の前に出せたな、奸計

の神…！』」

「『幾千の肉片に変えたところで飽きたらん、よくも我等を裏切ってくれたな！』」

「『落ち着いて下さいな、皆さん。頭に血を昇らせたままでは奴の思う壺でしょう』」

虚ろな眼差しと共に、今までとは違う口調で語り出す彼女。鼻に付く高飛車な女、続き老獪な老人のような、更に卑屈な男、最後に怜悧な女の口調を響かせて。

エヴォリアの中に巣くっていた、四体の『南天神』の亡霊が姿を見せた。

「最早［いやはや］、お懐かしい。皆さん無様な姿で何より」

『黙れ、蕃神めが！貴様のせいで我々はこのような姿に身を落としたのだ、神たる我々が！』

…浄戒を受けて神名も神剣も失い、妄念のみで動く哀れな神。それが彼等、南天神イスベルにゴルトゥン、ロコ、ウルだ。

だがそれ故に、彼等は他者の思念に取り憑く事が出来る。

「んなもん、自業自得でしょうが。大体オレは議論がしたかったんじゃ無い」

『『『『『ー！？』』』』』

冷たく言い放つ刹那、『影』が紅黒く蠢いた。【幽冥】の無明の翳が、南天神の亡霊を喰らうべく。

「【アンタ等を食っちまいたくて、食っちまいたくてしょうがないのさー！】」

…エヴォリアも、ベルバルザードも、纏めて――！！

The 65th Name ?・・・"幽冥［ヤミ］?"

背の傷を押して歩き、絶は彼の誕生したこの世界に残る、今も動いている最後の人工物である『支えの塔』に辿り着いた。

「一一はぁ、はぁ…くっ…！」

「大丈夫ですか、マスター…」

背を預けたこの塔は魔法の世界に在るモノの複製であり、他にも同様に存在する世界が在るという。

「ああ…皮肉だな、奴の神名が流し込まれた御蔭で…滅びの神名自体は弱まっている…」

思わず、苦笑した。『毒と薬は紙一重』を、神名で経験する事になるとは思ってもみなかったのだから。

「俺はこのままでは、死ねない…理想幹神に復讐するまでは…なんとしても！」

「マスター…」

意志は固い。それだけが彼が今まで生きてきた意味だった。神の宣言に滅びを宿命とされ、それを良しとしない両親により神は紛いモノだと知らされ、絶望に狂った人々に目の前で両親を殺されて。その際に目覚めた永遠神剣に神への復讐を託され、この世界の命の総てを背負った彼の。

「…思えば、お前には迷惑を掛けてばかりだったな。せめて名前くらい付けてやれば良かった」

目を閉じて皮肉げに笑いながら、絶はナナシに語り掛ける。最後の懺悔を、滅びを目前にして尚、彼の神剣【暁天】の刃を思わせる冷めた声色で。

「…不必要です、マスター。私はマスターと共に在れただけで十分に、幸福でしたから…」

それを、彼女は哀しい笑顔で受け止める。彼女自身、神剣【暁天】の鞘を思わせるしとやかさで、彼の総てを受け入れた。

…その血に塗れた生涯でも、絆は結ばれた。最早、何者も介在する余地の無い”絆”、他の刃や鞘には納まらず、納めない…刀の絆を。

「そうか…では、行くかナナシ」

「イエス、マスター・ゼツ。幕を…降ろしに」

開かれた眼差しには、ただ諦観。総てを諦めた青い輝き。

「ー ー絶ッ!!」

それを以って彼は、その『旧友達』を迎えた……

「ー ー…グァァァァッ!!」

咆哮を上げたのは ー ー機械の神。まるで何かに抗うように、必死の叫びだった。

『ッ此処は、貴方に勝ちを譲りましょう。しかし覚えておきなさい、最後に笑うのは我々…南天の神だと！』

その瞬間、緩んだ浸蝕の翳から逃れた南天神達が何処かへと消える。追う暇も無い程に鮮やかな引き際で転送されていった。

「…逃がしちまったな、テメェのせいだぜ【幽冥】…」

「クォジェ、貴方…まさか、神剣に…！」

呟く声に、思い至ったエヴォリアは声を震わせた。この時間樹では先ず有り得ない現象に。

「ククク…なんて顔してんだ姐御。折角の別嬪が台無しだぜ？ほら、スマイルスマイル。笑う門には福来たるってね」

「茶化すんじゃないわよ！神剣に喰われてまで何がしたいのよ！」

腕を組んで、砂孕む風に身を曝し。装甲が奏でる葬送曲に耳を傾け、消えかけていた意識を呼び覚ます。その間にも、その魂は次第に朽ち果てていく。

一一薄らいでいく自我。我が魂は端から曖昧に解け、昏い奈落へと堕ちていく。全く、我ながらとんでもないモノに手を出しちまったもんだ。

その叫びは、果たして。今も尚喰われていくその神に届いたのか。

「何か考え違いしてるみてェだが、元々人間と神剣の関係なんて食うか食われるかだ。この時間樹の仕組みこそ異常、オレと【幽冥】こそ、本来在るべき姿さ」

ただ、神は肩を震わせて嗤う。

【旦那ァ、早うそいつらも喰いなんし。さもないと、もっともっと、旦那の魂を喰らいますぇ？】

その神に呼び掛ける蠱毒の剣。

さながら、無数の…石の下にでも居るような陰気な蟲共が、一斉に断末魔の声を上げたように。

――この神剣の加護は『不死』等ではない。限りなく『死に難い』だけだ。その代償はその『欲』を充たす事。

なされぬ場合、神剣は魂を蝕む。抜け殻と化した肉体はこの剣そのモノとなる訳だ。どう転んだって剣は損しない。

そして身を翳に変え、一瞬の間にエヴォリアの目前に現れた。

「ただね、一ツ覚えてる。オレは護りたかった。そう…ただ一人、蕃神なんて呼ばれて唾棄されてたオレに、慈悲を注いでくれたあの月を…」

「…月…？」

その双眸に、懐古の光が燈る。この神が、まだ正気を保っていた頃の眼差し。

「そ、月。闇の底のヘドロ沼から見上げた月に惚れちまった身の程知らずの鼈［スッポン］がオレさ」

クククといつもと変わらない陰険な笑い。だがそこに狂気は無い。

「前に言った台詞なんですけど、『未来ばっか見てると今に足元掬

われてすっ転ぶ』ってあれ、訂正しますよ。『今』ばっか見てると、先が見えないから取り返しの付かない壁に打ち当たっちまうみたいでさぁ」

まるで悪戯が上手くいって喜ぶ、少年のように純粋な笑いだった。

「だから――人は隣に、共に歩む誰かを求めるのさ」

「っどういう意味…」

そこで彼は彼女をトンと押した。よろめいたエヴォリアは、後ろに控えていたベルバルザードに支えられる。

「エヴォリア、お前が”未来”を見ているのなら…ベルバルザード、お前が”今”を見ればいい…それで何もかも上手くいく」

「クォジェ＝クラギ…貴様…」

真摯な声に、ベルバルザードすら身を硬くする。斜陽を後光として煌めく姿はそれ程に神々しい。

「命が紡ぐ『奇跡』は神にすら不可侵。だから決して歩みを止めるな。それがオレの壱志［イジ］…」

その存在は確かに、かつて『神』だったのだと。本能的に理解する程に。

そしてもう『神』ではないのだと。異教の神のように貶られたのだと。

「――何せオイラは鼻タレ小僧。物語はハッピーエンドで終わらなきゃ嫌な性質［たち］なもんでね」

最後の最後に、そんな軽口を叩いて…転生体である少年と全く同じ軽口を叩いて。機械神は、最後の戦場へ赴く。

――どの道、オレは消える。滅びは何者にも平等に訪れる。何しろカミサマにすら滅びは在るんだ。誰からも信奉されない神なんざ、滅んでるも同然なんだからな…。

「…光をもたらすもの、【幽冥】のクォジェの名において命ず…」

声高に宣言し、紅黒い翳の精霊光を展開した。その左右に、二人の神剣士が並び立つ。

「…あら。悪いけど、アンタには『光をもたらすもの』を名乗る権利は無いわよ」

「左様、勝手な事を申すでない」

…エヴォリアとベルバルザード、その二人が。

「…物好きなモンだ、もう自由だろうに」

「自由だからこそ、やりたいように生きるのよ。私達は”未来”を見詰め、”今”を生きながら…”過去”を抱くの」

「我等は図らずもその総て。ならば…共に滅ぶが必定だろう」

「…成る程、確かにねェ…んじゃ、訂正訂正」

ククク、と。三人は纏めて悪辣な笑いを浮かべる。

共に在った期間など僅かなもの、だが時間など問題ではない。問題は如何に『絆を結んだか』だ。

「「「我等こそ、光をもたらすもの――…！！」」」

そう、宣言し直して。三人は同じ滅びの地平を望む――…

押し寄せた数百単位のアンドロイド兵、それを指揮するように動く五体の屍竜達。
闘っているのは望、希美、沙月を除いた神剣士。彼等は塔らしき建造物に、絶と逢うべく先行させられている。

「クソッタレ、マジでしつけぇなコイツらッ！」

反吐を吐きながら、空はＰＤＷを乱射する。しかし効果は殆ど無い、何せ『始めから壊れている』のだから。

――この能力［チカラ］…【幽冥】の『再製』か！厄介な真似しやがって！！

その傀儡兵が、中心の空に向けて銃を撃つ。仲間を巻き込もうとお構い無し、寧ろ矢楯のように利用して。

「…闇の雷よ、我が敵を狙う槍と成れ…」

それを『スパークレシーブ』を纏い受け止め、乱射したように見せ掛けて陣を敷いた銃弾に宿るレストアスに呼び掛ける――

「捉えた――『ライトニングボルト』！！」

立ち上る雷の檻、降り注ぐ雷の槍が内部の傀儡を貫き焼き滅ぼす。
これでは再製のしようも無い。

…だが、問題は数。元々、回数にシビアな制限が在る彼の闘い方はこういう乱戦に向かない。

一瞬の空白は新たな雑兵に瞬く間に埋め尽くされ押し潰される――前に、雨の如く降ったオーラフォトンの矢『ストレイフ』が総てを灰燼に還した。

「空くん、無事かい？」

「スバルさん！いやぁ、助かりますよッ！」

と、気を抜いた空の背後から一体の傀儡が高周波ブレードを閃かせて躍りかかり――

「――最大の威力を、最高の速度で…最善のタイミングッ！！」

ユーフォリアの『プチコネクティドウィル』に砕かれ、それでも潰えぬ身をＰＤＷに撃たれた兵が、宿るレストアスに焼き尽くされて燃え尽きる。

「この敵は…僕の世界の…」

「…俺の前世の仕業です」

「うー、あたしこういうホラーっぽいの苦手です…」

背を合わせたまま、彼等は語り合う。一人は弓矢、一人は剣、一人は銃を構えて。

「――見ィっけたぜ、『俺』？」

「「「――ッ！？！」」」

そんな傀儡を巻き込んで、一射が放たれた。もし先に声が届かねば、

スバルの『オーラバリア』と、ユーフォリアの『オーラフォトンバリア』の展開も遅れていた事だろう。

「…おやぁ？『俺』以外はオレが抜けた後の新参か。どっちもあんまり知らねェな」

命中したのは、無数の不可視の熱閃、総てを焼き尽くす赫竜の息吹。射撃地点には、全身からレーザーを放ったレンズを装甲の内側に仕舞う…機械神。

「まぁいいや…オレの【幽冥】の翳に溺れな」

声高に宣言し、紅黒い翳の精霊光を展開した。その左右から二人の神剣士が飛び出す。

「…悪いけど、貴女の相手は私よ、お嬢ちゃん？」
「っ…いくよゆーくん！」
「貴様の相手は我だ、弓士！！」
「くっ…負けるもんか！」

…エヴォリアとベルバルザード。が、【雷火】と【重圧】を構えてそれぞれユーフォリアとスバルに襲い掛かる。

「…という訳だ、オレ達は俺達でケリを付けようぜ？」
「…望むところだクソッタレ！」

残ったＰＤＷの弾丸から分割したレストアス総てを乖離させて身に纏い、本体を透徹城に戻しながら構え直す【夜燭】。

「チカラを貸せ、レストアス……俺にアイツを倒す”可能性”を！

！」

【…了解、オーナー。斬り裂いて御覧に入れます！】

その気魄に答えて刀身に…いや、空自身に燈るレストアスの凍焔。限界すら越えて、彼の知覚は強化された。そのチカラの昴りは、彼自身を滅ぼしかねない程。

「クク、そう来ないと張り合いがねェよなァ…【幽冥】！」

【くふふ、そうどすなぁ……あの生意気なボンの目の前で【夜燭】を浸蝕［くう］のも一興どすわぁ】

同様に、己自身に喰い潰しかねない翳を身に纏うその神。だが最大の違いは一一介在するモノが悪意以外の何物でも無い事だろう。

「物部学園所属、神銃士巽空…」

「光をもたらすもの、【幽冥】のクォジェ…」

…前世と現世。本来ならば交わる筈の無いその壱志と壱志。

神世の古から連綿と続く妄念と、刹那ながらも今を生きる信念。

「「一一撃ち貫く！！！」」

決して曲がらぬその壱志を賭けて、雌雄を決するべく。二ツの魂がぶつかり合う一一！！

The 66th Name・・・"魔弾の射手"

足踏みに砂塵が舞う。『砂漠』という地形は、空にとってはハンデ以外の何物でもない。レストアスの反動加速を利用しても砂を舞い上げるだけだ。

「翼をもがれた鴉ッてかい！憐れだねぇ！！」

「ガ、ハッ！！」

跳躍に仕挫り、宙空に無防備を晒してしまった彼に――強靭なレッグが踵落しの要領で背中に振るわれた。更に瞬間移動し、拳で腹を打つ。この機神は『宙を渡る』。地形など大した問題ではない。

「…おや、厄介な防御だな」

だが、それも策の一ツだ。砂地に叩き付けられてもダメージは少ない空、対し『スパークレシーブ』へと直接打撃を加えたクォジェのアームとレッグは半壊していた。

「だが…直せば良いだけの事」

即座にそこを翳が被い、凝集して新品同然に再製される……相手がこの神剣士で無ければ、効果的な策戦だっただろう。

「――ハァァッ！！」

その隙に右腕を軸に跳躍、左手で【比翼】、右手で【連理】を乱射する。後宙で着地して、遂に銃弾を使い切った弐挺を戻し【天涯】と【地角】を抜き、再度乱射。

これも使い切り、最後に【海内】を撃ち尽くした空は立ち昇る砂煙の中に『エレクトロンブレード』を振るう一一！

「チッ！！」

だが、それを自ら止めた。機神が防御の為に向けた鎌刃剣【逆月】と打ち合うのを避ける為に。

「…よしよし、良く覚えてたな。防御でも効果を発揮するってよ」

一旦距離を取って、向かい合う。蒼雷と蒼氷の戦鎧を纏う少年と、紅黒い翳の屍衣を纏うゴーレム。互いに傷は殆ど無い。

「もう、諦めたらどうだ？ククッ…【幽冥】の正体に気付かない奴にゃあオレは討てないぜ」

大剣【夜燭】を向けられたままで飄々と語る機械神。感じられるのは絶対の自信。

「例えジルオルが相手でも、今のオレは負けない！そのオレが一一神剣士でも無い多寡がニンゲンに負ける可能性なんざ零なんだよ！！ハッハハハ…」

何者にもこの仕組みは破られないと。己は何者にも敗れないと。神は高笑う。何故なら彼等は、浸蝕する神剣と汚染する神。最低最悪の組合せだ。

「一一『音』だろ、【幽冥】？」

「ハ一一…？！」

ピタリと、哄笑が止まる。その双眸が、驚きをもって少年に向けられた。

「正確には『波動』か。【幽冥】が物質を浸蝕する方法を思い出して判った…」

一一一番始め、黒のミニオンの神剣を喰らった時。【幽冥】は刀の刃を『なぞった』、つまり奴は…『振動させた』んだ。

「共鳴現象だよな。モノには総て固有の振動数が在る。例えば音叉は、その域に在れば離れていても同じ音を鳴らし出す……再製も、振動による分子結合の操作か？」

「…クク、流石は『俺』だな」

砂地に鎌刃剣を突き立て、パンと。機神の両掌が打ち鳴らされる。呼応してその翳、神剣【幽冥】の精霊光が空間に撒き散らされた。薄暮を喰い潰していく翳、まるで深夜の闇のように。対象が気付く間もなく安逸な滅びを齎すモノ。

「一一だが、判ったから何だよ。お前にはどうしようもないままだ…神剣士でも無いお前には！」

あらゆる癒しや補助を【幽冥】で侵し、『触穢』で反転させる一一『安楽死”ユータナジア”』の翳。

「…そうかい、理解したよ。やっぱり俺はお前には負けない…」

「あぁ？トチ狂ったかテメェ…」

その不浄の翳のただ中に在りて、男は笑った。確かに看破したからと言って、策など無い。

「俺は諦めねェ。例え零に近いとしても可能性を諦めない…零からでも、足掻いて足掻いて…！」

それでも、だ。ダラバの構えと同じ八双に大剣を構え直した彼は、己が貫く壱志を張る。呼応して、その刃に黒い雷が這った。

――俺は巽空、神銃士だ！どんなに弱かろうが、永遠神剣［トラ］の威を借る神剣士［キツネ］を討つ、鼬の最期屁…その俺が！！

（だから頼む。俺にチカラを貸せ、レストアス！！）

【了解、オーナー……我が全てを懸けて…往きます！！】

能力に頼るのではなく、あくまで『共に在る』その戦い方。それを誇りとする彼は防御を棄てる。

「神剣にオンブにダッコの惰弱な神如きに、負ける道理がねェだろうがァァッ！！！」

刀身を黒く染めていた雷、それに防御用の青い雷が交じり――光芒入り乱れた神威の刃…彼が最高と見る剣士ダラバ＝ウーザの奥義を成した。

「…ほざけ、ゴミ屑がァァッ！！」

対して、紅黒く胎動する翳を吸う刀身。不浄の権化、触れる総てを腐食させて啜り喰らう神喰らいの刃。

「「――ハァァッ！！！」」

袈裟掛けの蒼黒と逆袈裟の紅黒、その二ツの光芒が鬩ぎ合う――！！

宙を翔ける青閃。サーフボードのように変型した【悠久】に乗り、ユーフォリアは光弾を回避した。

「頑張って、ゆーくん！」

更に『ライトブリンガー』を振り切ると、それを放ったエヴォリアに肉薄して剣に戻した【悠久】を下段に構え、振り上げる。

「――氷晶の青、輝閃の白…その完全なる調律よ！」

彼女の神獣のチカラを借り振るわれた完全律の一撃『パーフェクトハーモニック』を――エヴォリアは。

「残念、私には届かないわね」

周囲に充ちる、星屑を掬うのみで。星の煌めきを宿す女神の羽衣、『スターヴェール』にて止めた。

…彼女の前世、『慈愛の女神』は味方を守る者だった。その神名を受け継ぐエヴォリアは、殊更守りに於いては他の追随を許さない。

「…どうして、ですか」

「何がかしら、お嬢ちゃん？」

跳ね退き俯いて、【悠久】を構え直したユーフォリアの震える声。

それに問い返すエヴォリアの声は不敵。

「――そんなに綺麗なチカラを、どうして貴女は命を奪う事に使うんですかっ！！」

顔を上げて放たれた、その叫び。涙すら浮かべての言葉に、エヴォリアは奥歯を噛み締めた。

「お子ちゃまには判んないでしょうけどね…世の中、綺麗汚いじゃ生きていけないのよ。苦しくても辛くても泥を啜り、砂を噛んで、…堪えて堪えて…それでも、人は生きるのよ」

…その姿に、南天の神々に人質として取られた故郷…幽玄の世界に残してきた妹の姿が重なり――

「……光の霧となり消えなさい。貴女も、世界も…！」

それを認めないと。腰の前で交差した両腕に自身の内包するマナ全てと周囲のマナを練り合わせて。澄んだ【雷火】の音色と共に……膨大な光塊を天へと撃ち上げた。

「光明よ、降り注げ――『オーラレイン』！！！」

それは瞬時に拡散して無数の光の雨となり、隙間無く注ぐ絨毯爆撃とを、針の穴を抜く正確さで――

「このまま、次元ごと断ち切って見せます――『ルインドユニバース』っ！！」

もう一度サーフボード型に変型させた【悠久】にて、ユーフォリア

が翔け抜ける――！！

三本纏めて放たれた白い矢の一射。ベルバルザードは、【重圧】の一薙ぎで全て打ち払う。

「たぁぁっ！！」

間を置かずスバルは『フラッシュアロー』を、二射三射と射かけ続ける。常に距離を置き、【重圧】の射程には決して入らない堅実な攻め。

「ヌゥゥン！！」

それを受けて、ベルバルザードは矢を打ち払いながら前進する。小細工など要らないと、ただ前進圧殺有るのみと、前進する――！

「止まらない…なんて奴だ！！」

「…笑止！！この程度で我が歩みを止めようなど…この我を…」

一歩、また一歩。確実に近付いて来る鬼神。気圧されるように後ずさっていたスバルだったが遂に、岩に退路を塞がれ――射程に納まってしまった。

「光をもたらすもの、【重圧】のベルバルザードを舐めるなッ！！」

「――ッ！！」

振り下ろされる一撃、『バッシュダウン』がスバルの鼻先を掠める。

辛うじて身を躱した彼だったがそれにより鉢巻きを斬られ、額を押さえてうずくまる。

「…貴様らのように、ただ流れに身を任せて生きてきた惰弱と一緒にして貰っては困る。我は貴様のように…滅びを先伸ばしにするだけの温い生き方はしていない！」

…その身を突き動かすのは、怒り。あの心優しき娘に殺戮者の役割を強いた理想幹神に、南天神に…それを肩代わりする事しか出来なかった、無力な己に。

「ー ー取り消せ…」

「…何？」

「今の言葉を…取り消せと言ったんだ！！」

返る言葉は、酷く冷たい。普段のスバルからは想像も出来ない程、怒りに充ちた声色。

そして ー ー一瞬で高く跳び上がり、外れた鉢巻きの下に覗く額に埋め込まれた結晶を晒し、ベルバルザードを見下ろして矢を番えた。

「僕の最高の友達を……ショウの生き様を笑った今の言葉を、取り消せェェッ！！」

「ヌッ…グオォォッ！！？」

乱射される高密度オーラフォトンの矢、一撃一撃が先程までの数倍近いそれは『オブリテレイト』。その余りの破壊力に、鬼神すら後方に圧されてタタラを踏んだ ー ーいや、違う。跳び上がったスバルを捉える為の動きだ。

「…抵抗など、無意味…思い知るがいい！オオオオォォォォォォォ

ォォッ！！！！！」

浮いたその足を前方の岩が砕ける程に強く、強く踏み込んで。刃を上方に傾け【重圧】を突き出す、『ライアットスタンピード』が繰り出された――

闇が光を蝕み光が闇を焼き尽くす。いつ果てるともないその攻防。

「カハッ…！！」

先に傷を負ったのは空、打ち合う【夜燭】の刀身の鏡写しに胸部に疵が疾［はし］る。だが勢いは増す、気魄にレストアスが応えて。

「テメェ…相討つ気か？！」

「…相討ちだ？俺は…勝つ！勝って生きる！！決して歩みを止めない…天つ風になる！！！」

「――…！！」

【逆月】の刀身にヒビが走る。五位神剣の加護を受けている神剣と神剣士を圧して。それこそ、生命の煌めき。歩みを止めない、今尚苦痛という足止めを乗り越えて行くもの。そう結論を出したのは己自身。

…そして、その最も遠くに居た己。対して、最も近くに居たのは…

やはり『己』だった。

「お前だって、そうだっただろう『オレ』…俺達の、願いは！」

壮絶な断末魔を上げながら砕けた【逆月】、同時に胸部と左アームを断たれたクォジェ。そのアームが落ちるよりも早く、【夜燭】を振り上げた空が跳んだ。

「――ただ…自分を救ってくれた大切な人に、笑っていて欲しかっただけだろうがァァッ！」

神剣に呑まれ、意識を咀嚼されて闇に堕ちつつ有るその機械の神は――その光芒の剣に。

「――…ファイム…」

始まりのあの日見た、救いの光を見出だした…

片口に減り込んだ【夜燭】の黒刃。そこから流れ込むプラズマに、神の剣も名も須らく焼き尽くされていく。
…伝導率の高さからか、瞬く間に塵芥へと代わり逝く躯。

「テメェはマジで配下に恵まれてやがるぜ…出来るなら今からでも交換してェくらいだ」
「配下じゃねェ、盟友［トモ］だ」

【夜燭】の峰を右のマニュピュレーターで掴み握り締める。選ぶ方を間違えた、と。
…そもそも、【幽冥】を選ばねば躯は手に入らなかったし、レストアスは彼と手を結ぶ筈も無いが。

【一一くふふ、困った御人…こないに使えへんなんて思いもよりませんで】

そして、響く最後通帳。もう抵抗する体力も気力も無い。

「気ィ付けな『俺』…このヤロウは、俺なんかより遥かにヤベェんだからな…」

「……」

割れた面兜が落ちて、覗いた顔は一一ショウの顔。それが燃え尽き消え果てるよりも早く、速く。

【それじゃあ、契約通りにアンタはんの魂一一貰いますわぁ!!】

「一一ッ!?」

空の纏っていた篭手脚甲拳銃類、果ては透徹城に仕舞っていた物…かつて、【幽冥】にて作り上げた贋物全てが翳へと替わり機械神を押し包んだ……。

空はチェーンが無くなって落ちた銀色の鍵と透徹城、お守りを懐に仕舞った。

黒い竜巻が過ぎ去った後に残っていたのは一人の女。見間違う筈も無い、少し前まで『共に在った』その存在。

「…久しぶりだな”カラ銃”…」

「…くふふ、お久しゅうございますなぁ”旦那はん”」

…黒い、喪服のような小袖を纏う濡れ羽烏色の長髪の女…【幽冥】

そのものである、幽月。主の魂を喰らい改変した彼女は、破顔した。願いを叶える資格と権利を得た喜悦に。

「…容器は得た。後は封じられたアレを手に入れれば…【聖威】が封じるしかなかった”死源［ナル］”を手に入れれば、新たな『刹那の代行者』になるんも夢や無い…」

それこそが、この永遠神剣が主を求めた理由。自らの悲願の成就の為に。全ては――

「…これでわっちは、『始まりの一振り』に一歩近付いた…！！」

…確かに、外部宇宙から来た神剣としては位は低い方だろう。だが位が五位という上位と下位の中間だからこそ、この剣は理性よりも本能に忠実で、他の剣を浸蝕する能力故に回帰願望が強い。その”願い”を叶える為だけにこの時間樹に浸入して、機会を待ち、漸く手に入れた最大のチャンス。震えさえ起こる躯を抱き、歓喜を全身で表す。

「くふふっ、くふふふ――ッ！？」

…その首筋を、黒刃が薙いだ。

「…いつまでもヘラヘラヘラヘラ、笑ってんじゃねェよ…」

当然、それを為したのは空。首を獲るべく振るわれた刃は――

「相変わらず、せっかちどすなぁ…そないやから、女子にモテへんのどすぇ？」

「テメェこそ、相変わらず泥棒猫じゃねェかよ。やっぱりパクって

やがったか」
「浸蝕こそ我が本分どす。それにどうせ壊れたゴミ屑、再利用したっただけどすわいな」
第六位【疑氷】にて止められた。手首のスナップだけで数メートルは跳ね飛ばし、神経を逆撫でする嘲笑。瞬時に彼の血は沸騰した。
「――ああ、そうかい。だったら次は、分別不可能な工場廃棄物のテメェを…二度と再製しないよう完全焼却してやらァァッ!!!」
迷わず立ち上がり、激昂し叫ぶ。だがレストアスは応えない。先程の『光芒一閃の剣』の消耗で休眠に入ってしまったのだから。
「そらぁ、ほんに愉しみどすなぁ。男子の全力にはこの【幽冥】、全力で応えたりますわ」
剣の柄を握り締めて盛大な啖呵を切るニンゲンを嘲笑い――その弓に緑ミニオンの神剣…槍を番えて引き絞り、その含有するマナ全てを砲弾と換えて指を放した。
「マナよ、碧き竜の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け――『ゲイルストライク』」
放たれた、不可視の砲弾。音速を遥かに上回る真空の戦槍［ランス］は空間を貫きながら――何の抵抗も無く。
「――カ、は……？」
彼の『心臓』を、射貫いた――…

膝を折り砂に倒れ込む。その目の前に撃ち抜かれた時に飛ばされたのか、懐に仕舞っていた筈の鍵と透徹城が落ちている。

――何だよクソッタレ…手も足も…出ねぇじゃねェか…

…かつて己が拳銃【無銘】で撃ち出していた弾に、身構える事すら出来ずに即死でも不思議ではない傷を受けた。

「ア……さ…キさ……！」

霞む視界、遠ざかる音。そもそも陽炎の昇るこの世界は朦朧としているし、死に絶えたこの世界には静寂しかないが。

「――空さん！！」

その胡乱な瞳に、この茜色の世界の中で…青空が見えた気がした。

満身創痍を押して辿り着いた瞬間に、その全ては『終わって』いた。前のめりに倒れた彼には小石程の大きさの穴が穿たれている。

「――空さんっ！！しっかりして、空さんっ！！！」

駆け寄り呼び掛けるユーフォリアにも簡単に判る、判り易過ぎる程に致命傷。

「時の流れから弾かれとる、この感じ…まさか、エターナル？」

幽月は、空に呼び掛け続けている少女に目を向ける。意外そうに、だが一瞬で瞳を嗜虐に染めた。

「純潔な光と水の気配……成る程、アンタが”法皇”の鼻をあかした”聖賢者”と”永遠”の娘…」

思い掛けず現れた上質の獲物に舌なめずりして。白ミニオンの神剣である杖を番え、引き絞った――

…ゆさゆさと揺らされる感覚に、倦怠感にまどろむ意識を起こす。払い退けようにも躯は動かない。

「……！……！」

何処か高いところから、何かが聞こえている気がした。

――ああ、何だよ……眠くて仕方ないんだよ俺は…頼むから眠らせてくれ。

だが、眠気には逆らえない。遥か高空から落下するのに逆らえないように。意識は無間の空［くう］に拡散していく…

【――情けない…それでも貴方は巽空ですか】

と、クリアに脳に響いたそれ。

――レストアス…？お前…休眠に入ったんじゃ…

【…貴方が余りに情けないので、おちおち寝てもいられなくなったのです。何でです、そのザマは？】

――煩せェな、仕方ねェだろ！俺にはチカラなんざねェんだ！自分からその権利を捨てた、この死は…因果応報なんだよ！

冷たい口調に反感を禁じ得ない、空は思わず口調を荒げた。

【言い訳などどうでもいい。私は貴方の目を覚ましに来ただけだ】

「――ッは…！？！」

だが、怜悧。どこまでも平淡な、その印象。同時に脳内を走る電荷が彼の五感全てを取り戻させた。

「空さん、空さんっ！死なないで…嘘つきに、ならないで…！！」

その瞬間、見えた世界。涙を流し呼び掛けるユーフォリアの姿。

――約束…したんだったな…死なないなんて…とんでもなく莫迦な約束を…

【貴方には果たすべき約束がある。少なくとも、二ツの】

――二ツ…？

言われて、思い出したもの。あの真世界で交わした…口約束。

【貴方に力は在る。何度も貴方を奮い立たせてきた壱志［イジ］が。もう忘れましたか、その壱志だけで一一貴方は神すら、討ち倒して見せたではありませんか…】

一一止めろレストアス…俺はお前に何も報いてない…消えるな…！

段々と薄れていく、雷獣の電圧。本来休眠しなければいけない消耗を押した結果だ。

【…始まりは復讐だった。しかし、いつからか…それ以外の目的が生まれた。ですが、やはり私は…〝レストアス〟なのです】

『神獣［パーマネントエンジン］』とは、神剣に付随するモノではない。持ち主の深層心理の現れだ。故に神獣であるレストアスが持ち主無しにその姿を留めているのは…異常だった。

それ程、強い復讐心だった。

【その私が…復讐にて自我を保ち続けた私がそれ以外の目的を持ったのなら…消えるのも仕方が無い事です】

一一レス…トアス…済まない…俺は莫迦だ…

全霊を持ち、空はその左手を動かした。今のうち、レストアスの加護が在るうちに。

「空さん…！大丈夫ですか一一」

「ユーフォリア……透徹城…を」

血の巡らない躯はまるで鉛のように固く、たったそれだけでも地獄の労苦。

中々辿り着かないその手、意味を理解したユーフォリアが近くに転がっていた透徹城を差し出す。空は漸く銀の鍵を収めて必死に片膝を衝き、銀鍵を――透徹城に衝き立てた。

【…次に結んだ手は決して離さぬように。貴方を慕ってくれる者なんて、もう二度と現れはしないでしょうから…】

――解った…だから信じてくれ。お前が信じてくれる俺なら、俺は永遠にでも俺を信じていられる…『神銃士』、巽空を…！

…全てを理解して空は、もう一度無力を痛感する。結局、この壱志は最後まで他者を不幸にした。

【何を言うかと、思えば…】

それは不意に。急に優しく変わった口調。兄か、姉のように。

【…私はいつでも…いつまでも…貴方を信じています…我が、若き主よ――……】

それを最後に、全てが消え去った。その神獣が最期に残したモノ…彼の魂に燈った、決して消えぬ…蒼滄［あお］い焔。

「――今、俺は…チカラが欲しい…身勝手なのは充分解ってるけど、頼むアイオネア……俺と、契約してくれ…！！」

その温もりを抱き、空は鍵を廻す。真世界への唯一の通行証、銀鍵

は波紋へと融けて檻のような型枠に嵌められた宝玉…星屑を溶かす夜闇の贋世界を、夜明の真世界へ換えて。

「…アキ様…本当に私で、宜しいのですか？」

果てしない青、夜明け前の群青色に染まる宝玉。型枠を摺り抜けて宙に浮かび、やがて空間を揺らす波紋と共に修道女のような少女の姿を持つ化身となった。

「お前だからだ、アイオネア……お前こそ、俺でもいいのか？世の中にはもっといい男もいるぞ」

「いいえ――」

その問い掛けに、彼女は勢い良く頭を振る。考えるのも嫌だ、と。

「アキ様でなければ、嫌です…」

鍵を廻したままに差し出されていた空の左掌。それに彼女はそっと手を重ねた。

「…巽空は望む。この果てし無き空と海…無限すら超え行く、劫莫たる可能性の水平線を――……」

「…アイオネアは応えます。我が象徴は〝空［カラ］〟。故に我が前に道は無く、我が後に道は無し…」

そのまま、騎士が媛君へと忠誠を誓うように。不断の誓約の調べと共に、掌上に置かれた聖盃に満つ靈氣［アイテール］を飲み干して。

「構うか、風は自由に渡るモノ。先にも後にも、道は要らない…」

「ならば〝刃〟を……遍く可能性を斬り拓く〝冀望の刃〟を――…」

その無銘の唄を交わし、爆風の中で『巽空』の名を持っていた少年は、その人生に幕を引いた――…

壮絶な爆音が枯れた世界に轟く。砂が熔けて硝子化する程に高熱のプラズマへ変換された白の魔弾。その手応えに、幽月は口角を吊り上げた。

「刃皇が隠し込んどった程の神剣…どれ程かと思えば」

確かに捉えた、射撃した地点には気配一つ感じられない。隠蔽でも無い。そう、完全に消えている。

「――…？」

…そこで、おかしい事に気付く。『何も無い』のはおかしいと。消滅させたのならマナが手に入る筈、しかし…それすら無い。

「……っ！？！」

土埃の薄幕［ベール］が晴れれば、飾り気の無い黛藍の篭手と脚甲。今まで彼が身に付けていたモノとほぼ同じ、肘までと膝までを覆うモノ。しかし、篭手は指先を露出しており完全に銃を握る事を目的としたモノになっている。

黒を基調とする中華風の武術服に錦糸で刺繍された鵄［トビ］と銀糸で刺繍された参本脚の鴉…勝利を運ぶという金鵄［キンシ］と八咫鴉［ヤタガラス］の意匠を持つ外套を纏う青年。

「――往［い］くぞ、アイオネア。俺と…共に…！！」

その左手が掴むは――雨粒が落ち波紋が拡がる水面のように美しい刃紋の刃。柄や鍔すら持たない、文字通り鍛たれたばかりの水紋刀［ダマスカスブレード］。

【――はい…アキ様となら私は…何処までも…！】

冀望を宿した蒼滄［あお］の聖刃…彼女の生まれたままの姿。

――流れ込むチカラは無い。だがそれがアイオネアだ。カラだからこそ、全てを肯定する不断の刃。

「……あれ…？」

そこで、傷の塞がった彼の胸元に左腕で抱かれるように護られた…頭を庇っていた、ユーフォリアが見たモノ。

「…濫觴より、終焉を刻むモノ…永劫を超え歩む空風［カゼ］よ…」

【…終焉より、濫觴を刻むモノ…刹那を超え歩む滿澪［ミオ］よ…】

…衝き出された右手から発された真円の魔法陣、ステンドグラスのような…あらゆる”生命”を護る、『精霊光の聖衣』。

その加護によって、悪逆の灼光は全て防がれ掻き消された。

「【…絶える事無き聖命の輝きを――『ラストエリクシア』！！」】

その魔法陣が、握り締める右掌の動きに凝縮され…純然たる生命の結晶、遍く可能性を宿した一滴の靈氣［アイテール］と化す。

「凄い…こんな高密度の精霊光…まるでママの…『ポゼッション』みたい…」

そんなユーフォリアの呟きを余所に聖なる雫は【夜燭】に穿たれた風穴へと注ぎ――巨大な薔薇窓の精緻なステンドグラスを思わせる”生命の精霊光［オーラ］”を展開し…辺り一面の砂漠すらも潤し癒しながら、波紋の揺らぎと共にそのカタチを創り換えていく。

――迷いは無い。自らが望んで、掴み取ったチカラだ。ただ一ツ、悔いが在るとすれば…こうなる前に時深さんに礼が言いたかった。

核たる神獣のレストアスを失って空［カラ］になっていた【夜燭】は彼の魂の形を表す”永遠神銃”へ…『マーリンモデル３３６ＸＬＲ』型のレバーアクションライフル銃へと換わった。

「……俺の名は、アキ……空位の永遠者［エターナル］…」

ゆっくりと、彼は握っていた左の聖刃と手元に”召喚”した右の神銃を――融合させて。銃身［バレル］の下部…弾倉に蒼滄の刃を持ったライフル銃とする。

「――永遠神銃【真如】と歩む者…神銃士、【真如】のアキだ！！」

…それが、異空という少年が手にした永遠。彼の魂に刻まれた銘は――永遠神銃【真如】。その示す意味は『在るがままで在る事』、彼の壱志そのものである。

そしてその神銃が象徴する本質は”空”。万物万象の根源事象にして、その全てで有り得ないモノ。

…”無”も、”存在の是非”ですらも揺らぎの一ツに過ぎない『無限の可能性』の顕現。故に、彼は遍く可能性を掴む事も出来るだろう。

「……離れてろ、ユーフォリア…始めて使うチカラだ。お前を巻き込むかもしれない」

オーラに傷を癒された彼女に離脱を促すと同時に、左手一本だけで用心鉄を操作する。銃自体を回転させながらの装填とコッキング…スピンローディングを行った。

「えっ…あ…はわわ、はいっ！！」

そこで漸く、男に抱かれている事に思い至ったユーフォリアが顔を真っ赤にして跳ね退く。

一瞬苦笑した顔を引き締め、彼はに立ち尽くす妖［あやかし］の華…幽月に向け一一左手で構えた剣銃を衝き付けた。

「一一往くぞ【幽冥】。これが、お前が嘲笑うモノ…”生命”の持つ煌めきだ！！！」

”空”という可能性を宿す銃弾を、カラの聖刃から装填された剣銃を…永遠を歩む決意と共に一一！！

Ｄａｓ Ｎａｍｅｎｌｏｓｅ Ｌｉｅｄ．．．&ｑｕｏｔ；無銘の唄&ｑｕｏｔ；

絢爛たるオーラより生まれ、吹き抜けた清涼な風と地を潤した清廉な水。淀みを祓った、その深奥の男が持つ剣銃の発する精霊光。

「ーーくっ…ふふふ…『”生命”の煌めき』…？あっははははは…強がりも大概にして下さいな、旦那はん？まぁた、とんでもないバッタもんを掴みましたなぁ…」

真っ直ぐに衝き付けられた聖刃の先で、妖華は笑う。心底の嘲りを籠めて。

「カスほどのチカラも在りんせんやないですの、その神剣。確かに、マナを操る事に掛けてはわっちどころかエターナル級どすけど…含有するマナは零！！」

番えるは、虚空より引き抜かれた青の神剣。彼女に浸蝕され、その因果律を思うがままに操られている哀れな骸が含有するマナを全て砲弾に換えるべく。

「本物のチカラってぇのは、こういうーーッ！？！」

刹那、彼女の懐に踏み込んでいたアキ。両手で握られた蒼滄の剣銃は青い残光を棚曳かせながら袈裟掛けに振り下ろされーー弾から盾に目的を替えた西洋剣に。

「ーーな」

…止められない。打ち合うのでも斬り裂くのでも無く、ただ当たり

前のように透り抜け――『空』を斬った。

「……何を…何をした…」

遮二無二、幽月は後方に跳ね退く。必死に、己の本能が喚くままに。
この男が振るう、鼻先を掠めたあの刃に『触れるな』と。
そしてそれが、正しい判断だった事を悟る。彼女が持つ西洋剣が、
マナの霧へと還っていくのだ。

「――どんな小細工を使ったァァッ!!!!」

激昂して叫ぶ。有り得ない事だ、彼女が浸蝕したモノが彼女の意志
を離れて勝手に消滅するなど一度たりとも無かった事。
怒りのままに、彼女は再度弓を引く。今度番えられたのは黒の刀。

「…なるほど、そういう仕組みか。お前らしいな…優し過ぎる」

それを全く意に介さず、彼は剣銃に微笑み掛けた。
…奪う事の出来ない、連綿と続く生命を象徴する『不断の刃』に。

「マナよ、黒き龍の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け――『ナイト
レイド』!!」

放たれた大質量の闇に、【真如】の引鉄を引く。一瞬の内にオーラ
フォトンを纏った刀身が閃き――清廉無垢な浄化の光に、汚濁の闇
が斬り裂かれて消滅した。

――だからこそ、俺が居る。この優しい秘蹟を紡ぐアイオネアを、
あらゆる悪意から護る…俺が!!

その聖刃が彼女ならこの神銃は彼。互助の関係にあるその剣銃。

「……は…はは…ハハハハ！！！！」

見開いた目を憎悪に染め切って、幽月は更に神剣を番える。弦は、赤ミニオンの双刃剣を引いても傷付く様子すら無い。

「調子こいとくなよ、糞餓鬼ィ！！わっちが…この【幽冥】が！！生まれたばかりのヒヨッコに負けるかァァァァァッ！！！」

更に白、緑、黒、青と乱射に次ぐ乱射。それをアキは、銃に右手を添えて用心鉄を操作しながら魔弾を次々に撃ち落としていく。

幽月は『取り出し、引き、放つ』という三行程で行う射撃。だが、アキは『操作、撃つ』の二行程。三射の段階で既に上回られ、逆に守勢に廻り一一遂に十五射目で。

「フグッ！？」

…『心臓』を撃ち抜かれた。だがその命の予備は未だに無数。直ぐに再製してしまう。

「…何でどすねん……マナなんざ一切感じへんのに…何でわっちの浸蝕が効かへんねん…！！」

「浸蝕した俺の時間感覚を、目茶苦茶に操作した事か？悪いけど、俺にはもう通じない…」

「……ッ！！？」

排莢された薬莢…根源力の残滓が砂に墜ち消える。端から銃弾など空［カラ］、だがそれこそ【真如】の銃弾ならば一一…弾数は無限。

終わりを始まりに。無を否定し、永劫回帰の『０［零］』を捩曲げて無限輪廻の『∞［無限］』と換えた……究極の一ツ。

「【真如】は不変不改の絶対律…異能効果の対象にすらならない。俺の歩む道を決められるのは一一この俺だけ」

”空”を起源とする銃弾の、装填とコッキングを一挙に終えた剣銃をアキは無造作に肩に乗せた。

「…それが、アンタはんの異能どすか…」

一方の幽月は、片膝を衝いて肩で息をしながら…屈辱に震える。”零”だったのではなく、始めから何も見えていなかったのだ。その存在は、”異能”をもって捉える事が出来ないその存在は。

「…莫迦かテメェは。この程度、異能なんかじゃねェ…今を生きる生命［イノチ］なら、全てが平等に持ってる権利［チカラ］だ！！」

「生命…そんなものが一一神剣の異能に勝てる訳があらしませんやないの！！」

かつて、大剣【夜燭】でそうしていたように。肩に担ぎ、相対する敵を睨みつける。

「勝てないと…思ってるのか？」

何処までも生命を卑下する存在に、憐れみすら覚えながら。

「当たり前どすやろ！全能の神に、劣等種［イノチ］如きが！！」

吠えた幽月が、一度に五つの神剣を【疑氷】に番えた。出来る出来ないの問題ではない、彼女が浸蝕したモノならば、それは全て彼女に従う。

「…そうか。だったらお前に俺は負けない…可能性を信じられない奴に、俺は決して負けない…」

衝き出したその銃口に、精霊光が展開される。極彩色のオーラの、その瞬きが集束されていく――

「…マナよ、森羅万象の根源たる命源［マナ］よ…賢たる龍皇の息吹へと換わり、万障を撃ち砕け――『オーラフォトンクラスター』ァァァッ！！！！」

先に放たれたのは五色を統一した、マナ嵐。極限まで昂ぶった破壊の意念を集束した一射は、音速を遥かに越えてアキを襲い――

「…マナよ、我が求めに応じよ…浄化の輝光へと換わり、遍く穢れを撃ち祓え――『オーラフォトンクェーサー』ァァァッ！！！！！」

引かれたトリガー、聖刃と同じ色の、真世界に満ちるマナ光の奔流に全てが浄められて。

「――……」

光速を遥かに上回る一撃に幽月は、命中してから己の躯が消滅した事に気付いた――…

…死した筈の意識が覚醒したのは、痛覚が蘇ったから。烈しい痛みに身をよじり――躯が動いた事に、ベルバルザードは驚愕した。

「我は――」

「…気が付いた、ベルバ？」

目を開けば、翡翠細工の女。その膝を枕として、彼は湿った砂の上に倒れていた。

「…エヴォリア、我は……死んだ筈では…？」

「…神様が、助けて下さったのよ…本物の、神様が……」

エヴォリアは、あどけなく笑う。そして…彼方の、虹を見遣った。

…岩塊の上に倒れ、機能停止していたスバル。その瞳に光が返る。

「――カハッ！ゲホッ！」

同時に咳込んだ。死の向こうからの帰還、その程度は甘んじるべき。だが彼は、歓喜から涙を流した。押さえた胸に感じる、鼓動に。

「……神よ…！」

遥か昔に失った、その『人体』の反応に――。

黒金の龍騎士が歩くは、枯渇した世界。楽園の対たる”黄泉［ニヴルヘイム］”。割れた大地、林立する永遠神剣の抜け殻、死骨のような大樹ーー

「…久しぶりですね、【破綻】」

その細い枝に腰掛け、円盾の内側に弦を張った即席の竪琴［ハープ］を奏でる白銀の戦女神。盾の内側に覗いた鍵穴、美しい旋律。声は天上の音色。

「…ああ、久しいな、【弥縫】」

答えた声は、地下の韻律。巨大化した鍵剣に弦を張り即席の洋琵琶［リュート］を作り上げると、樹の根本に腰を下ろしそれを爪弾く。

無為の世界に響く、旋律と韻律。後は歌声が在れば全てが揃う。

「…あの娘は……幸福になれるのかしら」

「なれるとも。あの男とならな」

…だが、それは二度と無い。いや、一度すら有り得なかった。

「認めてるのね。その割には随分厳しかったじゃない？」

「一人娘をくれてやるんだ、あの位の苦労は当たり前だ」

その穴を埋めるように、鍵の化身と錠の化身は唄い逢う。

「…【調律】殿に頂いたチカラは使い切った。もう我々に遺ったのは…この世で永遠を刻む事のみ」

「…でも、それも悪くは無い……あの時、あの娘を”門”の彼方よ

り授かって…冀望を知り、繋いだ。私達は”親”の役目を果たした…」

全てが正反対だったその鍵と錠。天と地の開きがありながら、故に惹かれ逢ったその二振りは。

「「…だから唄い続けよう。この永遠よりも長い瞬間を、この……刹那よりも短い永劫を——…」」

漸く、永遠の安寧を得た——…

蒼滄の輝光が去り、後には弾道の全てが消し飛ばされた溝以外には塵一ツ残っていない。
それ程の一撃、それを為したのは…排莢された莢に籠められていた、たった一射。それが砂や幽月、その護りの加護ごと、岩山すらも刈り飛ばしたのだ。

「————————！！！！」

刹那、砂の中から飛び出した翳の塊。左腕とおぼしき部位に、斬り落とされた機械神の腕を持つソレは、音速の貫手をアキの背中から心臓目掛けて振るい——

「——『空我』」

巻き込みながら左手で振るわれた蒼滄の聖刃による居合…空と海の境界線、人が望みながらも永遠に辿り着く事適わぬ、水平線の軌跡

を残す一閃に…『空』と共に斬られて。

「……くふッ…くふふふふ……旦那はん、まぁた…とんでもない代物に魅入られましたなぁ？」

その身を、今度こそ滅ぼされた。再製する端から躯は崩れ落ち、次々と入れ替わっては消えていく。

「その剣は、他者が否定したモノを否定する…例えばわっちの異能、再製出来る限り消滅しない能力を…死を否定する能力を否定した！御蔭さんでこの通り…その否定を否定出来ずに消滅するのみ…」

…正確に言えば違うが、惜しい。ただ彼女は確定しただけだ。永劫回帰の『０』…無を否定し、完全終極の『Φ［空］』へと、輪を閉じた。

「何が…何が冀望どすねん、この女魔［アマ］…！！お前こそ本物の、どうしようもない…絶望……や…ありんせん…か……」

始まりを終わりへと、それは一一…どちらも、同じだとして。

「くふふ…でも、これでもわっちは…還れる……不本意なカタチでは有りますけども…これでわっちは…『始まりの一振り』に…」

そうしてその言葉を最期に。僅かに生命の息吹を孕んだ風に、不浄の翳は跡形も残す事無く。静謐に押し流されて消え果てた。

「……あばよ、カラ銃」

一言、彼は言葉を送った。裏切り者とは言え、その剣が居なければ

…彼は遥か昔に死んでいた筈なのだから。

「……」

黙って、アキは腰元を漁る。身に付けていたウエストバッグからは、以前止血帯として使ったＰＤＷのショルダースリングが取り出された。

それを【真如】の銃身部と銃床部の二点に取り付けて左肩に担ぐと、ゆっくりと。尻餅を衝いているユーフォリアの前まで歩いた。

「あ…」

一瞬怯えて彼女は身を固くする。見上げる眼差しには、多分に畏怖が在った。今までの彼には、一切感じていなかったモノ。そして『今』は一一最早、恐怖しか無かった。

僅かに湿る砂を踏み、足が止まる。その目の前にそっと右掌が差し出された。

「帰ろう、ユーフォリア…俺達の…〝家族〟のところに」

同時に、ぶきっちょな笑顔。生まれて初めて笑ったと言っても信じられる程に。

「…空さん……うん！」

それに、彼女の畏怖は消えた。彼が間違いなく彼女の知る彼のままだと、理解出来た。

チカラに呑まれず、驕らず。ただ『在るがままで在る』…そのまま

なのだ、と。

「帰りましょう。皆さん、きっとびっくりしますよ……」

朗らかに微笑みながら重ねられた右手を、アキは引き起こした……

The 67th Name…"空隙の剣"

…望が二刀流で押すのなら、絶は速度でそれを上回る。一進一退の攻防、だが片方は生かす為に全力を振るえず、もう片方は殺す為に全力を振るう。その歴然とした差は、決定的だった。

「…終わりだ、望…【暁天】よ、我が敵を屠り力と成せ――色即、是空！」

跳ね飛ばした望を鋭く見遣り、腰を落とした抜刀の構え――神世に畏れられた彼の前世『復讐の神』の、神速の居合『無常の太刀』。

――まだだ…諦めない、俺はッ！！

『…ならば、我のチカラを使うがいい』

「――ッ！！」

そこで望の頭の中に響く前世の声に、思い至った。己が得た浄戒のチカラ、それを振るえば…目の前の彼を捕える滅びを断ち切れる事を。

「違うぞ、絶…此処からが始まりだ……浄戒の一撃で、決める――『ネームブレイカー』ァァッ！！」

二刀を一本の大剣に合体させ、望は構える。最早それしか道が無いと、決意して。

「ノゾムぅぅっ！！！」

「マスタぁぁっ！！！」

天使達の声を聞きながら、光纏う【黎明】を下段から刷り上げる一太刀で、横一閃の【暁天】を迎え打った。

「一一あ…」

希美の、その小さな呻き声を掻き消して。

光をもたらすものの幹部との戦いで、アキ達はいつしか遠く離れてしまっていた。一行と合流する為、アキとユーフォリアはまだ戦闘が続いている方角へと走る。

（アイオネア…）

【はい、アキ様…如何なさいましたか？】

（取り敢えず、『アイ』って略していいか？）

【ふぇ？は、はい…有難うございます】

その道々、アキは左肩に担いでいる【真如】に語り掛けた。

（礼はおかしいと思うけどな…で、本題だ。周囲の状況を感知出来るか？）

【はい、出来ます。天と地の狭間に於いて空［くう］に接さないモノなんて在りませんから…】

瞬間、周囲の空間に心が融けたように波紋が拡がった。感覚が極限まで研ぎ澄まされ、幾つかの神剣を捉える。

――背後に一ツ…ユーフォリア、遥か彼方に旅団員やミニオンの。
前方に三ツ……ッ！！？

瞬間、見当違いの方角を見遣る。何も無い虚空、そこから感じられた…悪意に満ち溢れた視線を。

「――この…気配は！？」

そしてそれは……前世の己が知る存在のモノだった。

仰向けに寝そべって見上げた茜色の空。その視界に顔を出す、銀髪の堕天使。

「ご無事ですか、マスター…？」
「ナナシ……俺、は…」

『負けた筈では』。そう問おうとした彼の首っ玉に、堕天使が抱き着く。

「マスター…マスター……」
「…ナナシ」

肩を濡らす涙、声を震わせて己を呼ぶ掛け替えの無い存在。その名を呼び、彼は…己の身を蝕んでいた滅びが消え去っている事に気が付いた。

「…なんて馬鹿な事をしたんだ、望…！お前は何も判っていない！」

「何、どういう意味だ、絶?!」
「クソッ、もう遅い…!希美から離れろ!」
絶の叫びに、望と沙月は希美を見遣る。
「……」
人形のように無表情な、希美を。そしてその瞬間――枯れた世界が、歪んだ。
「望くん、危ない!!」
「――ッ!!?」
頭上から降り注いだ光、それを何とか回避した望達。
立ち上る砂煙の向こうから――
「――予定通りであるか……」
「――そのようだ。まぁ、至極当然の事であろうが……」
しわがれた、しかし低く地を揺るがすような…圧倒的な威圧感の声が木霊した……!
宙を翔ける【悠久】、それに乗るユーフォリアとアキ。進路を変えて先行しており、丁度塔と旅団員達の中間に差し掛かった。
…自分には、役目が在った。とても大事な役目、だというのに――忘れてしまっていた。そして、この人の事も。

少女は思案に沈む。己の後ろに乗った黒の外套の男、剣銃を担いだ『神銃士［ドラグーン］』。
正体不明の『永遠神銃』を振るう異端者［アウトサイダー］。
…最早、人としてなど歩けない。そんな事は、この神剣宇宙が許さない。

「……」

一一こうなる事を、予め教えられていたのに。そうならないように、お手伝いする筈だったのに…

ユーフォリアは俯く。その小さな胸に疼くような痛みが走る。
…自分の不甲斐無さがこの結末を招いたのだ、と。彼女の所属する組織の…未来［トキ］を詠む永遠者が見た未来を変えられなかった。

「ユーフォリア、もっと速度出ないのか!?」
「一一ひあっ!?あうぅ、もう限界ですよ～っ!空さんの分だけ、やっぱり遅くなっちゃうんです」

と、突然彼に声を掛けられて彼女は大いに慌てた。いきなり『塔に急げ』と言われてここまで来たのだ、その上に急げと言われて彼女は一計を案じる。

「一一そうだ、これならいけるかもっ!」
「は?いきなり何だ一一?」

突然声を上げたユーフォリアに、アキは訝しげな声を掛けた。その彼に彼女は肩越しの笑顔を見せて、右手同士を絡み合わせる。

「空さんのチカラ、借りちゃいますね――『マナリンク』っ！！」
「…ッておいユーフォリア、俺はそういう魔法の対象には――」
展開された光、個人の持つマナを共有する神剣魔法。それで二人分の出力を得ようというのだろう。
だが、そういった効果はアキには意味を為さない。彼は『空』なのだから対象に『なれない』のだ。
【【――あっ！？】】
…と、【悠久】と【真如】の驚くような声が同時に響いた刹那に、『ポスンッ！』と。
「「――えっ？」」
間の抜けた音を立てて、【悠久】の後端から噴き出していたマナが止まった。
「…これこれ、何で止めるんだねユーフォリアさんや？」
「えへへ、あの…好きで止めたんじゃないです…ゆーくん、どうしたの？」
【いや……何と言うか…いきなりマナが尽きて】
【はう、ごめんなさい……あの…私は空っぽだから…きっとその所為です…】
慣性で前進しながら、四ツの意思は言葉を交わす。次第にその速度は落ち、やがて――

「「【【ーーわぁァッ!?」」】】

突如として凄まじい勢いで再噴出したマナに、振り落とされそうな超加速を得る。

「ななな何だこれ、ユーフォリアァァッ!!?」

「すすす好きで飛ばしたんじゃないです～っ!ゆーくん、どうしたの～っ!!」

【いや、何と言うかいきなりマナが満ちて抑えがァァッ!?】

【はうぅっ、ごめんなさい!私が空っぽを満たしたからきっとその所為ですぅっ!!】

…【真如】の特質は空を満とするモノ。しかし、その恩恵を受けられるのは本来はアキのみの筈だ。『対象にならない』能力なのだ、無効の対象にすらも、ならないというのに。

ーー全く…このガキんちょは本当に、何者なんだよ…!!

だが、その超加速のお陰で一挙に距離を稼ぐ。残る距離は五分の二程度ーー

「「ーーッっ!?!」」

…と、その進路に炎球が現れる。危うく回避した二人だが、体勢が崩れた為に砂漠への着地を余儀なくされた。

「ーー随分急いでますけど、どこに行くんですかお二人さん?」

そして、顔を上げた先…砂の海に浮かぶ岩に腰掛けた少女が首を傾げーーシャン…と。

「……鈴、鳴…？」

黒髪に飾られた、鈴の音が世界に響いた……

「空さんの、知り合いですか…」

「ああ…」

「精霊の居た世界以来ですね、お元気そうで何よりですよ」

クスッと笑い、鈴鳴は岩から飛び降りる。本当に何でもなく、旧知の人物と再会を喜ぶ顔で。

「…流石に今回ばかりは『行商』じゃあ誤魔化されねェぞ鈴鳴……テメェ何者だッ！！」

「非道いなぁ、巽さんは。私はただ、買い付けの回収に来ただけですよ」

ユーフォリアを庇うように立ち、アキは叫ぶ。そんな彼に鈴鳴は、やれやれと肩を竦めた。

「…【幽冥】が敗れたのは、正直意外でした。中々使える手駒だと思ったんですけど、所詮【聖威】の使い走りに甘んじていた小物。野心まで小物でしたね」

そして一一底冷えのするような、妖艶と言っても良い眼差しで彼を見詰める。

「ああ、そうそう…私が何者か、でしたっけ」

その姿が、壮絶な神気と共に移ろう。古代の軍装のような…羽衣を

纏う天女を思わせる姿。

「ーー我が名はスールード…永遠神剣第四位【空隙】のスールードですよ、神銃士【真如】のアキ」

そしてその手にーー尋常の存在のままで手に出来る最高位。紅い剣身に文字の刻まれた幅広な片手剣…第四位神剣【空隙】を無造作に持った。

「空さん…」

「気を付けろ…アイツはヤバい」

【真如】にスピンローディングで装填して構える……だが、剣先は震えている。

寧ろ神銃を持つようになったからこそ、神剣の強大さが身に染みて判るようになってしまった為だ。

「…大丈夫ですよ空さん。あたし達は、絶対に負けませんから…」

そこで気が付いた。未だに繋いだままだった右手、そこから伝わる体温と……微かな震え。

「…行け、ユーフォリア。望達の所に…此処には後続が来るけど、あっちは孤立してる」

「…えっ？でも…っ！？」

「ーーどうッせオイラはヤクザな兄貴、解っちゃいるんだ妹よ！！」

と、反論を封じ込めるように大声を上げたアキ。その口ずさんだ訳の判らない文言に、ユーフォリアどころか鈴鳴…いや、スールードまでもが驚いた顔を見せる。

そして、解かれた掌。右手はそのまま――サムズアップを行う。

「…格好くらいは付けさせろよ。今まで散々、迷惑掛けた分はな」

「…ばか、空さんのばーか…」

その、強がりを口にする。皮肉るような物言いに、ユーフォリアは漸く笑顔を見せた。

「…先に行ってます。追い付いてくれなきゃ、嫌ですよ？」

そしてビシリと、頼もしいサムズアップを返す。

「オーケー、皆を連れて必ず行く…だからアイツらを助けてやってくれよ」

解っているのだ、今のアキには。この世界に居る他の誰よりも――ユーフォリアが最高位の神剣士である事が。

「――相変わらず、愉快な方だ」

…割り込んだ声に、二人は一斉に行動を開始した。

アキはスールードの懐へと飛び込んで『オーラフォトンブレード』を見舞い、ユーフォリアはその一瞬の隙を衝いて離脱する。

「残念、判断は良いのですけど…こんな仕掛けもしてあります」

「…ック……！！」

造作も無く受け止められたオーラの刃。スールードの【空隙】が光を放ち――ユーフォリアの目の前の空間を『裂い』た。

「ーーあ…！！」
「ーーユーフォリア！！」

それは門、分枝の外へ繋がる軌跡。全速力故に彼女は避ける事が出来ず、そこに突入してしまう。

「駄目でしょう、戦闘中に他人の心配なんかしては」

そうして気を逸らした彼の背後でも、空間が裂ける。そこに力ずくで弾かれ、アキもまた分枝世界間に弾き出されてしまった。

「クソッ…！？！」
「今この世界に居られては迷惑になりますからね。では、次の世界でお会いしましょう…若く、幼いエターナル達？」

必死に手を伸ばす。しかし巨大な木の枝が無数に入り乱れ、無限に拡がる狭間の回廊に足場は無い。ただ、落下して行くーー

「大丈夫ですか、空さんっ！！」
「チッ、ユーフォリア！早く戻るぞ！！」

先に飛び出していたユーフォリアに掴まれて裂け目を探すが、既に閉じてしまっているらしく見当たらない。

「ど、どうしましょう…？」
「どうもこうも、とにかく戻らねェとーーうおッ！？！」

…刹那、分枝世界間が激震した。次元震に枝が異常な動きを見せ、空間が乱気流のように襲い掛かりーー一本の枝が。

「「ーーッっ！！！」」

二人を呑み込んだーー……

The Other Name ?・・・"盈月"

新月の静かな神社の境内の内側。深夜の闇に抱かれたそこで、巫女…倉橋時深は溜息を衝いた。

「…短い安息でしたね。やはり、こうなりましたか」

己の中から消えた、彼女のチカラを抑えていた枷。その翳が消えた事で彼女のチカラ…未来視の能力は戻って来た。

「…では…やはり、彼は契約してしまったのですね…時深様」

「ええ、残念ですけど…未来は、変わりませんでした」

その時、闇の向こうから現れたのは…提灯を持った銀髪に緋瞳の、小柄な巫女姿の少女。

…その姿は、夜闇に飲み込まれる一方の弱々しい灯［ともしび］では判然としない。

「…そうですか。では、皆様にもその旨をお伝えしなければなりませんね」

「私の失敗ですからね、リーダーには私が報告しますよ」

少女は怜悧な声でそう告げたが、一向にその場から動こうとしない。何かを案じるように、ソワソワとした雰囲気だけは伝わって来るが。

「良かったですね。私の言い付けを破ってまでミニオンから助けた、愛しの『ご主人様』にもうすぐ逢えますよ？」

そんな彼女に、時深はにっこりと一一彼女の人と成りを知る者なら、

一目散に逃げ出すだろう笑顔を見せた。

「一一…っどういう意味なのか、判りかねます。彼を助けたのは、偶然ですから。偶然にも散歩コースに居ただけですから」

「あら、そうなんですか？へぇー、別の分枝世界まで散歩に行っていたなんて知りませんでした」

「そんな時も有ります。第一、私の主人は時深様ですから、時深様が邪推なされるような事は何一つ在りません」

だが、少女は毅然と立ち向かう。一歩も引かずに、彼女を凌駕しようと。

「ふぅん…じゃあ、いつも懐に忍ばせてるそのハンカチは何かしらね？」

「なっ…!?と、時深様!!どうしてそれをっ!!?」

そして直ぐに、それが無謀だったと思い知る事となった。ポーカーフェイスを破られ、彼女は一気に顔を赤らめる。

「あの日からずっと大事にとっていますものねぇ？でも、洗濯くらいしてもいいんじゃないかしら」

「うっ…ううぅ～…！」

だが時深は一切容赦しない。反逆者は、完膚無きまでに叩き潰すと言わんばかりの苛烈な攻め。

それに、反論する言葉を持たない少女は仔犬が唸るような呻き声を響かせた。

「私は何でも知っているんですよ。貴女が夜な夜なそのハンカチを抱きながら眠っ」

「一一失・礼・し・ま・すっ！！」

不機嫌そうに肩を怒らせて、ずんずん歩き去る少女に苦笑した時深。
そして、先程まで見上げていた星空を見上げて…

「真っ直ぐ生きろとは言いましたけど……損な道を選びましたね、空さん…貴方にとっても、私にとっても……」

悲壮な決意と共に、今は見えないが後は満ちて円くなっていくだけの盈月［えいげつ］と…その向こうに在る、分枝世界間を見通すかのような鋭い瞳を見せた……

The 68th Name…"帰還"

突如現れた二人組を目にした絶は、驚愕を持ってその名を唱える。

「馬鹿な…自ら出て来ただと…理想幹神…エトル、エデガ！！」

「ルツルジか、相剋を目覚めさせた事…大儀であったぞ」

「貴様はよく我々の思惑通りに動いてくれた。感謝してもしきれぬぞ…」

「何だと…ッ！！」

高位の神官のような法衣を纏い、躯の前で組んだ掌の辺りに浮かぶ真球に単眼を持つ魔法具を携えた老人『エトル＝ガバナ』に、西洋の魔術師のような…だが東洋の修験者のようにも見える奇抜な出で立ちの、左右に三つずつ鐶を持つ錫杖を携えた壮年の男性『エデガ＝エンプル』。

「…希美……」

「……」

そして、やはり人形のように立ち尽くす希美に望は向かって歩く。

「…駄目…来ないで…わたしは…もうすぐわたしじゃなくなっちゃうから…」

「…嫌だ…お前は、俺の幼なじみの希美だ…永峰希美だ…！」

…その時、希美の瞳に理性の光が戻った。相剋の神名に精神を侵されながらも、強固な意志でそれに抗っているのだ。

「…ぬ？ほほぅ、これは驚いた。まさか相剋に抗ってみせるとは」

それを横目に見ながら、エトルはニタリと笑う。それが僅かな間の事だと知っているが故に。

「はあぁぁぁっ！！」

それに、完全に隙を衝いて斬り掛かった絶ーー

「ーー全く、狼の如き執念よ」

「ーーくうっ！？！」

…だが、エデガは見向きもせずに弾き飛ばした。予め空間に仕込まれでもしていたのか、某かの障壁に阻まれた絶が昏倒する。

「…来ないで、望ちゃん…わたしはもう消えちゃう…」

「そんな事無い…諦めるな…皆で帰るんだろ…？」

その間にも望は歩み寄り、二人は寄り添う。神世での己らの関係…全てを破壊した後の破壊神を破壊する、世界終焉の引金を引く役目を思い出し合って…涙すら、流しながら。

「…希美を消させやしない…俺が絶対に守る…希美が泣いてるところなんて、見たくないんだ…だからっ！」

「ありがとう…すごく怖いし、苦しいよ…でも、望ちゃんが心配してくれたって分かったから…これはその分の嬉し涙」

だがーー行き違っていた。諦めない望の言葉に対し、希美のそれは諦めの言葉。それでも、笑おうとして。

「ごめんね、望ちゃん……そして、ありがとう…だから、一つだけ

お願い…最後に…」

ゆっくりと望の頬に触れ、希美は身を寄せる。そして少し背伸びをしながら、口付けを交わし――

「――バイバイ……」

その言葉を最後に。彼女の意志は醒める事の無い眠りに就いた……

「退け、小僧」

その瞬間、望を衝撃が襲う。跳ね飛ばされ、地に転がされる。

「……この依り代、予想の最大限まで自我を保っていたな」

「ほう、ではその分秘められておる力も期待できるもの」

それを為したのはエトル、ただ腕を一振りしただけで。希美を手中に納めたエデガの言葉にエトルは満足げに頷く。

そこに、漸く旅団が到着した。

「騒がしくなってきたわい。さぁ、エデガよ。とっとファイムを回収するぞ」

青白い光が希美の体を包む。そのまま、彼等は時空の裂け目を生み出した。

「――させるかよッ!!」

【黎明】に力を篭めて斬りかかろうとした望だが、希美を盾に取られた状態となり手が出せない。

「これからが楽しみよのう…」

その捨て台詞を残して、理想幹神達は枯れた世界から消えた。

「……うあぁぁぁぁっ！！！！！」

そして、その茜色の世界に…望の慟哭が響いた。

…闇色の空間に蠢くモノ達。定型を持たず、その四つの異形はただ憤怒していた。

『こうなれば、最早悠長な事は言っておれぬぞ！今すぐに打って出ねば、この時間樹は管理神の思い通りになってしまう！』

『とは言え、ジルオルが居る以上下手な真似は出来ません……次に浄戒を受ければ、我々に待つのは完全なる死…』

『奴らに、ノル＝マーターや抗体兵器だけで敵うのでしょうか？』

『…口惜しや…せめてエヴォリアやベルバルザードの躯が有れば！！我々南天の神が、蕃神如きに追い落とされるなど！！』

…南天の神々は理想幹神や旅団の神剣士に嫉妬じみた視線を向けた。

そんな彼等の、心の『空隙』に付け込んだ――

「――では、こんな可能性は如何でしょうか？」

…悪魔が、囁き掛けたのだった。

吹き抜ける風に、彼は目を覚ます。何かに寄り掛かり座り込む彼は土の匂いと夜気…両手に心に染み入る温もりを感じた。

「…アキ様…御目覚めですか？」

目を開けば、左側には花冠を戴く滄髪。右側には白い羽根の生えた蒼髪の少女が寄り添っていた。

「よかったね、アイちゃん」

「うん…助けてくれてありがとう、ゆーちゃん」

まるで、風雨を耐え忍ぶ小動物が身を寄せ合って互いの身体を温め合うように。テディベアよろしく両手足を投げ出す形で大木の幹にもたれ掛かったアキの太股に座り、彼の外套の内に収まった二人の姿が。

「一一ッて、何だこの状況ォォォッ！！？」

「きゃあっ！もう、暴れないで下さい空さんっ！！」

慌てて跳ね退こうとしたアキだったが、左右に加えて後方まで木に防がれており不発に終わる。強かに頭を打ち付けただけだった。

「あの…ゆーちゃんはすぐに目を覚ましたんですけど……アキ様は中々目を覚まされなくて…」

「この世界って少し寒かったから、温めないといけないと思ったんです。それであたしとアイちゃんでサンドイッチに」

「するなよ！もっと自分を大事にしろっての！！第一、こういうの

は望の仕事なの！俺はこういうのに耐性が無いから、どうしていいか判らなくてテンパるの！！」

二人を正座させて、湯気を噴かんばかりに怒ったアキにアイオネアとユーフォリアは『むー』と唇を尖らせ合った。案外気が合う二人組らしい。

溜息を一ツ落として、アキは左の親指を眉間に当てた。現状を確認する為に。

「確か、俺達は…」

周囲を見渡してみるが、砂漠でも無ければ黄昏の空でも無い。木立に藍色に染まる朝へと移ろう中途の空。吹き渡る風も僅かな水気を帯びており、枯れ果てた世界ではない。

「覚えてないんですか、あたし達…別の分枝に飛ばされちゃったんですよ」

「そういえば…あのヤロウ…！！」

思い出せば、怒りが沸き上がる。黒髪に鈴の髪飾りを着けた少女…かつて『行商人・鈴鳴』と名乗り、透徹城等の様々なモノを与えて一一今度は敵として現れた神剣士…第四位【空隙】のスールード。

「…そうだ、とにかく旅団と合流しないと！アイツ以外にも強力な神剣の反応が在ったんだ、あれは『欲望の神』と『伝承の神』！！」

「でも、空さん…」

思わず駆け出したアキ、その背中に掛かった言葉に。

「…どうやって、ですか？」

「……」

アキは固まって、やがてゆっくりとうなだれたのだった。

神銃に戻ったアイを担いで、アキは先を歩んで藪を掻き分け歩む。
結構鋭い葉もあり、アキは後ろに続くユーフォリアが怪我をしないように道を選びながら。

――草木は元々の世界によく似ている。気温は明け方らしく肌寒いくらい、マナは…

「この世界、マナが薄いですね」
「ああ…ッつっても、前の世界からすれば潤沢だけどな――」

そうして、一際背の高い藪を掻き分けた時。いきなり視界が開けた。
森を抜けたのだ。

「……マジ、かよ」
「…此処は…」

…その目に映ったモノ。建ち並ぶ見慣れたビルに見慣れた市街、見慣れた住宅街…それらの明かり。

――…見間違う筈が無い。確かに長らく離れていたが、時折夢に見たその風景は。

アキとユーフォリアは同時に口を開く。そして――全く同時に。

「元々の世界…！？」
「ハイ・ペリア！？」
全く別の名を唱えた――……

慌てて駆け入った、明け方の閑静な市街。道路を通る車は殆ど無く人通りはまだ、ジョギングや犬の散歩をしている者がちらほら居るくらいだ。

「帰ってきた…マジかよ！」

「あ、空さーん！待って下さい、どこ行くんですかーっ！？」

その僅かな人も、息を急き切って歩道を駆け抜けるアキとユーフォリアに驚いて道を開ける。

「見覚えがある…あのビル、この曲がり角…！」

角を曲がれば、数ヶ月前にミニオンが化けた狗に襲われて…綺羅に救われた地点。

その風景を確かめるべく、アキは殆どタックルの勢いでコーナーを曲がった。

「ーーきゃあ！！」

「ーーッつぁ！すんませんっ！！」

…そこで前方不注意のツケが回る。視界の下端にすら入らなかったが、どうやら誰かが居たらしい。すかさず、倒れそうになる人物の手を引き止めた。

「あ、ごめんなさ…い…」

「もう、小鳥ったら…ちゃんと前を見てないと駄目じゃない」

「ごめんごめん佳織…」

強く手を引かれ驚いた顔をした…青み掛かった髪を束ねて通学途中らしい鞄を持つ、ユーフォリアと同年代の少女。
その後ろから大きな箱を持った、赤み掛かったセミロングの少女が、青髪の少女をたしなめるように追い付いた。

「もう、空さんったら…ちゃんと前を見てないと駄目じゃないですか」
「う…悪いユーフォリア…」

同じくユーフォリアに追い付かれてたしなめられるアキ。
そんな二人を見て小鳥と呼ばれた少女と佳織と呼ばれた少女は。

「あのー、お兄さん…」
「ん？ああ…何か？」
「いえ、その…」

彼を見遣り、片方は期待に満ちた目、もう片方は気まずそうに。

「随分気合い入ったコスプレですねー、もしかして大河ドラマか何かの撮影ですか？」
「……」

そこで漸く、アキは自分の姿を省みた。中華風の武術服に篭手脚甲、刺繍のなされた漆黒の外套に…ライフル剣銃を背負った男。その隣には北欧の戦乙女みたいな服装に槍だか剣だかを持っている蒼い髪の少女。

――しまったァァッ！？異世界の水に長く浸かり過ぎちまった！！
今の自分の恰好に全然疑問抱いてなかったぞ俺！！

「えっと、どこか変なのかな――きゃふ?!」
「お、お嬢さん達!急がないと、学校遅れるぜ!?」
驚愕した表情で思考停止したアキに代わって、その場でクルクルと廻りながら己の恰好を改めるユーフォリア。
その頭の天辺に、空手チョップを墜としてサムズアップしながら、アキはキラリと歯を光らせて二人に声を掛けた。もう大分ギリギリなようだ。
「ああっ、いっけなーい!!佳織、急がないと練習遅れちゃうよ!!」
「あ、待ってよ小鳥~!!し、失礼しました」
だが、そんなギリギリな様子にも気付く事無くさっさと駆けていく青髪の少女に対し、赤髪の少女は一度ぺこりとお辞儀をして去って行った。
「…つーか、おもクソ銃刀法違反じゃねェかァァッ!!そりゃあ、こんな不審人物が真面目な顔して走って来たら道くらい開けるだろうよ!!」
「だったら、アイちゃんに人の形になってもらえばいいのに」
そこで、周囲の空間をさざめかせながらアイが人型となった。現れ出る、花冠を頂いた金銀の双眸にキャソックにリャサを羽織った滄い髪の裸足の少女……。
「これじゃあ銃刀法は免れても、不審者の点でまだ引っ掛かるの!お前らはまだ補導で済むけど、俺は逮捕なの!前科が付くの!!」
「……(がびーん)!?!」

「ぶー…」

『不審者』という単語にショックを受けるアイや、叩かれた頭頂を押さえるユーフォリアに非難の目を向けられ、アキは安堵しながらがくりと膝を衝き頭を抱えた。

――すぐに人通りが増える時間帯だ…警官に見付かりでもしたら、即アウトだぞ……そうだ、あそこなら!!

そこで、彼は思い出した。人が少なく、また、頼れる人物が居る場所が在った事を…。

「アキ様…重くありませんか?」
「ん?軽いくらいだよ。ちゃんと飯を食え」
「はぅ…」

…ユーフォリアと、裸足のアイをアスファルトの上を歩かせる訳にはいかないと背負ったアキは長く続く石段を登る。
だが何故か、ユーフォリアは渋るような様子を見せた。

「空さん…どうしても行くんですか?」
「行くしかねぇんだよ。頼れるのはあの人くらいだからな」
「……」

彼女にしては珍しく、ぐずるように遅々として足を進めない。アキとて本当はあまり行きたくない場所だ、この――『神社』は。

「居るといいんだけどな…」

そうして、アキは境内の入口……『神木神社』の銘を眺めて違和感を覚えた。

――あれ、『神木』…？『天木』じゃなかったか…？

「――お待ちしてましたよ、二人とも」

「「――っ!?!」」

…突然掛けられた、凛と通る声。同時に感じる圧倒的な存在感。玉砂利を踏み、神の通り道である真ん中を避けて通るその巫女は。

「…お、お久しぶりです…師匠。その…最近はとにかく忙しくて、来れなくてその…済みません!!」

顔も見ずに、アキは遮二無二頭を下げた。それが彼女との付き合い方の基本だと知っているから。

「いやあの、本当に済みま――」

「――いいんですよ、そんな事」

掛けられたのは、優しい声色。彼はそれに安堵の溜息を吐き出して頭を上げ――凍り付いた。

「…師…匠？」

眼前に突き付けられた、古代の銅剣のような…圧倒的な存在感の剣に意識を奪われて。

――何だ…何で、俺は……

「待っ…お願いします、待ってください、時深さん！！」

その視界を、蒼い髪が遮る。両手を広げて、アキを庇うように立ち塞がったユーフォリアに。時深の永遠神剣である第三位、【時詠】から遮った。

――何で俺は…師匠から永遠神剣と死の気配を感じてるんだよ…？！

「…『悠久のユーフォリア』よ、混沌側［カオス＝サイド］が一翼、『時詠のトキミ』として問います。その男は…殺すに足る者か？」

「確かに…空さんは強いチカラを持ってます…生まれたばかりなのに、並のエターナルを凌駕するくらいの可能性を…でも、この人は秩序側［ロウ＝サイド］に下ったりしません！そんな人じゃないの！」

まるで、自分に言い聞かせるように。彼女は悲痛な声を上げる。

「…貴女くらいの年代では、そうやって『可能性』とか言う不確定なモノを信じたくなってしまうのです…悲しいですけど」

「そんなっ…そんな事無いもんっ！！時深さんの方こそ、空さんの事を甘く見過ぎなんだもんっ！！」

それに、時深は深い溜息を吐いた。哀れみを込めて。

反駁するユーフォリアだが、次第に語勢が弱まってしまう。

「――へぇ、貴女なんかよりも、ずっと昔からその人に目を掛けていた私が、ですか…？」

「…時間なんて…関係無いもん！あたしは、空さんを信じてるから

っ！！」

…瞬時に、一触即発の気配を纏う世界。そのただ中に在って、アキは指一本動かす事も出来ない。
情けない事に、全く異次元の二人の攻めぎ合いに、口を差し挟む事さえ出来ない。

どちらも自分が何か言っただけでも屠れる程に、強力な永遠神剣の持ち主だと気付いてしまっているから。口を開かない事だけが己の命を繋ぐ事だと悟り、その屈辱に必死で耐えながら。
ただユーフォリアを守護［まも］る事に意識を繋ぐ。せめて、時深が放つかもしれない壱太刀を防げるように…”生命”に替えてでも。
神銃に戻ったアイの柄を握って、石畳を踏み付ける。

「……ふぅ」
「一一あ、かはっ！？？」

そこで、戦意が霧散する。途端に静謐を取り戻す境内。一気に流れ出す冷汗に、アキは膝を衝いた。

「…解りました、今は貴女の言葉を信じましょう。付いて来なさい、若き永遠者達」

ただ、その言葉に。命を救われた事だけを感じて一一…

The 70th Name…"天つ空風"

…時深の創った”門”を潜り抜け、拓けた視界。森閑の中の鳥居と、その先に拡がる静謐なる湖の上に浮かぶ――古代日本式の様式美を見せつける神の社。

その湖上の社に続く橋の入口に青、緑、赤、黒、白、銀の髪をした六人の巫女が立っていた。

「お待ちしておりました、皆様。時深様、御当主様がお待ちです」

「ええ、二人を案内しなさい」

その内で最も小柄な…銀髪緋瞳に――犬耳と尻尾を持った巫女が、一瞬アキを見て時深に申し出る。それに答えて、時深と犬耳の巫女はさっさと歩み去って行った。

代わりに、【真如】を担ぐアキと【悠久】を持ったユーフォリアをピッタリとガードするように五人の巫女が列ぶ。

「では、お二人はこちらへ」

その最年長らしい、水引で黒髪を纏めた巫女が促した。楚々と歩き行く巫女達に、護衛…いや、連行されながら。

「「……」」

その間もずっと、二人は目線すら合わせる事は無かった。

通された堂の板張りの床に腰を下ろしたアキと人型に戻ったアイ、ユーフォリアは黙って時深の訪れを待つ。
その間に、正座したユーフォリアは気まずそうに彼を見遣った。

「…怒らないんですか？」
「何をだよ」
「…分かってるくせに」

片膝立てに胡座を掻く猫背の彼は、左手の小指で耳をほじりながらぶっきらぼうに答える。
その反応にさしもの彼女も苛立つ様子を見せ、アキの隣に寄り添うアイが慌てた風に交互に見遣る。

「…良かったじゃねェか、記憶が戻ったんだからよ。一体何処に、後ろめたい事が有るってんだ？」
「……だって」

暫し続く無音。清澄な湖面にさざ波を刻む風は、何処までも爽やかだ。

「だって…あたしは、エターナルだから…任務の為に皆に近付いて、忘れて仲良くなったのに…でもあたし…」

…己の中で言葉を整理出来ないのだろう、今にも泣き出しそうな顔で支離滅裂な物言いを繰り返す。そんな少女にアキは右手を伸ばし
――

「それ」
「――あいたっ！？う～っ、空さんの乱暴者～っ」

それなりの勢いのデコぴんで叩く。中指で打たれて赤くなった額を抑え、彼女は恨めしげな眼差しをアキへと向けた。

「慰めて欲しいんなら優しい奴…望あたりに泣き付け。俺はどっちかといえばそういうのは突き放す方だ」

おろおろと慌てるアイを尻目に、アキは明かり取りから差し込む光を見上げた。空は雲一つ無い快晴、黄金色の陽射しに高く舞う鳶。

「それに言った筈だよな。”家族”相手にしゃちほこばるな、もっと我を出せって。お前はお前らしくぶつかって来りゃあいいんだよ」

「…でも…あたしは…その”家族”を騙して…」

「あん？もう一発欲しいって？」

再度突き付けられた右手に、ユーフォリアはぷるぷると頭を振る。流石に、神銃士として強化されたデコぴんは堪えるらしい。

…これが、『世刻望』と『巽空』の決定的な違いだ。例えるならば『光』と『風』の違い。

光は前から照らせば目標と成り、後ろから照らせば行く先を照らす。だが風は後ろから吹けば追風と成るが…前から吹けば障害としか成り得ない。故にアキは手を引きはしない。

「空さんは、寂しいと思わないんですか？空さんももう…時間樹を離れたら、”家族”の皆との”絆”も途切れちゃうんですよ？」

「…別に。まだ経験した事無いし、もしそうなったとしても――」

ただ、誰に感謝されずとも憎まれようとも…無理矢理に後ろから、その背を押して突き放すだけ。

その相手が、ほんの少しでも前を見てくれる事を祈り。背後の己を見ようものならば、容赦無く吹き飛ばすとばかりに。

「…俺は、俺自身の思いは途切れない。何せ【真如】は無くなってからが本領発揮。だから……もう一度結び繋ぐだけだ」

左腕にしがみつき止めさせようとするアイに苦笑しながら強がる。

一一……その経験が無い俺には、こいつが味わった喪失感を理解なんて出来ない。安い台詞で慰めるのは、返って傷付けるだけだろうから。

…だったら俺は『嘘つき』になるよりは『理想論者』や『冷血漢』の方がまだいい。

それこそが、『巽空』という男が倉橋時深やクロムウェイ、ダラバ＝ウーザやレストアス…そして、己の前世であるクォジェ＝クラギという人生の先達から学び取った生き様だった。

「…お待たせ致しました」

と、そこに障子が開き二人の巫女が現れた。片方は先程見た銀髪の犬耳巫女だが、もう片方は見た事の無い…何処か時深に似た黒髪の美女。巫女というには少し不思議な服装だが。

その女性が堂に歩み入ると、犬耳の巫女は会釈して戸を閉めた。

「始めまして巽空殿、私は倉橋環と申します。『出雲』までご足労頂き恐悦至極にございます」

「いえ、こちらこそお招き頂き有難うございます環様」

慇懃な口調で恭しい挨拶を述べた環に、アキは取り敢えず姿勢を正

して頭を下げる。如何に不機嫌とはいえ、渡世の仁義を通さないのは彼にとっては名折れだ。

「恐れながら、我が師である倉橋時深に誘われました。その本人が現れないのは、私としては不本意です」

なので、やはり最後に毒づいた。

「申し訳ございません、あの者は我々の中でも特別で…ある程度の自由が許されているのです」

――『特別』、ね…この人も相当に特別な感じがするけどな。

（アイ…どう見る？）

【えっと、あの…不思議なチカラを感じます。神剣士じゃない筈なのに、エターナルみたいな永遠性を感じます…】

不審な眼差しを感じ取ったのか、環は柳眉を寄せて困り顔を見せた。そんな表情まで美しいのだから思わずアキは照れて目を逸らしてしまう。

それに少しだけ、アイが不服そうな顔をした。

「…愚妹がお世話を掛けまして…誠に申し訳ありません。アレは、この社の更に奥…『奥の岩戸』にて待っております。貴方一人だけで来てほしいとの事です」

「一人って…あの、あたしは？」

「ユーフォリア殿は此処でお待ち下さい。これは、時深と巽殿だけの問題ですから」

立ち上がるアキに続き立ち上がろうとしたユーフォリアを環が遮り、

彼はそんな心遣いに感謝する。アイはすかさず神銃形態となり、アキはすかさず左肩に担いだ。

「奥の岩戸まで続く道には出雲の、『防衛人形［マモリヒトガタ］』と呼ぶ戦力が待ち構えています。どうかお気を付けて」

「…どうも」

『…だったら退けといてくれ』の言葉を飲み込んで、アキは左手をヒラリと振った。もう片方の右手で障子を開くと、そのまま障子を閉じ――

「――空さんっ！！」

…かけて、止める。振り返らずに立ち止まった、金鵄と銀鴉の外套を肩で羽織った背中。

「生きて帰って…来ますよね？」

「……ハァ…」

掛けられる切実な問い。それに彼は、深く深く溜息を落とした。

――ッたく…自覚が無い分、性質［たち］が悪い。コイツは何回俺の生き方を変えりゃあ気が済むんだよ…

左肩の、空［カラ］故に無重量である【真如】。この神銃と契約する切片［キッカケ］も、思い返せば彼女の言葉が一因だった。

「――たりめーだろ、なんせ俺は無や無限をも踏み越える可能性を持つ空［アカシャ］を渡るただ独りの『空位永遠者”アイオーン”』…”天つ空風［カゼ］のアキ”だ」

だから閉じ際に右でサムズアップして、そんな見栄…空元気を張る。
彼がかつて憧れた言葉、それを二ツ名として名乗る。

かつて異空としてそれなりに平凡に生き、【無銘】のタツミとして波乱の旅をして、【真如】のアキとして新たな”生命”を得た彼が名乗るその名。
…それこそ、この後に彼が永劫を闘い貫く際の名前。蒙昧なヒトが思い描くような華々しさなど何処にも無い、ただただ救い無き絶望に充ちる永遠を歩む彼が名乗る事となる…最後の名前だった。

その持つ重圧は未だに、ただ一一二人しか知らない。赤銅色の髪の巫女と…今も尚観測し続けている、”輪廻の観測者”以外は。

「…うん」

戸が閉まる最後の一瞬、アキにはユーフォリアは一一微笑んでいたように見えた……。

The 71th Name・・・"来訪者達"

…一人、岩戸へと続く洞穴を歩くアキ。ふて腐れたような表情の彼を照らすヒカリゴケ。
大きく開けたホールのようになっている箇所に歩み入った時、目前に五体の影が立つ。そこから黒のミニオンが歩み出た。

「…お待ちしておりました」
「あんたらが防衛人形か？確かに神剣の気配は有るけど…」
「如何にも。私共は、出雲により生み出された兵士にございます」

…身に纏う装束や、それぞれが手に持つ西洋剣に双刃剣、槍に刀、杖などの得物［神剣］はミニオンに違いない。
だが確かにそれらは、先程彼等を案内した巫女達だった。

「時深様の待つ場所に辿り着く道は此処以外に在りません。則ち、我々を倒して行くより他に無し」

言い放つや、凄まじい迄の殺気を見せる巫女達。一斉に隙の無い戦闘姿勢を取った。
青と黒、白は神剣にチカラを。赤と緑は詠唱を開始する。

――しかも、どの神剣もかなりの熟達を経てる。神剣の格も結構上、七位とか六位辺り…強敵だな。

【はい……ですが、この狭さだと相手も動き難い筈ですよ。どれだけ完璧な理屈を持っても、理屈を重ねれば重ねるだけその理屈は破綻し易くなるものですから…】
（…はは、そうだな…そうだった）

…かつて、神剣【幽冥】も言ったその台詞。しかしそれはアイ――『永久不変の真理』を体言する、永遠神銃【真如】にとっては文字通りの真理だ。

その神銃【真如】を左手に番えてスピンローディングで装填する。洞穴の暗闇の中でも、その聖刃は蒼滄［あお］く煌めき、揺らめく。その波紋の刃紋は、何処までも限りなく拡がり続ける可能性。敗因すら乗り越える無窮の因子だ。

「…俺はフェミニストじゃないし、ドSなモンでね――容赦無く、叩きのめさせて貰う！！」

根源力を集めて、足元に薔薇窓のステンドグラスの精霊光の煌めきとして展開する。それを確認して、アキは岩盤を蹴った――！！

先ず繰り出されたのは、速度にて追随を許さない黒の『無走剣』。圧縮された暗黒の刃がアキの首筋を狙って飛翔し――

【…静かなる、眠りし子らを抱く優しき闇よ。我は御名を唄う――『ワードオブブラック』】

アイオネアの詠唱後に展開された夜色の波紋に防がれ、威力を失い消滅する。そこに閃光が走った。

【…壮麗たる、醒めし子らを導く優しき光よ。我は御名は唄う――『ワードオブホワイト』】

白の放つ雷光『ディクリーズ』が彼を撃つ――瞬間、朝日色の波紋がそれを受け止めた。だが既に、次が迫っている。

【…清廉なる、生きし子らを育む優しき水よ。我は御名を唄う――『ワードオブブルー』】

更に、地を這い死角から迫った青の『フューリー』を水色の波紋が掻き消す。同時に、詠唱を終えた赤の魔法『インフェルノ』が襲い掛かり――

【…猛々しき、死にし子らを還す優しき火よ。我は御名を唄う――『ワードオブレッド』】

火色の波紋がそれを飲み込めば、局所的な竜巻…緑唯一の攻撃魔法『エレメンタルブラスト』が彼を撃つ――

【…大いなる、還りし子らを生む優しき地よ。我は御名を唄う――『ワードオブグリーン』】

…よりも早く、碧色の波紋が大気の流れを正しく戻す。

例えるならそれは『不壊の盾』。五対一の圧倒的な暴力に、各属性を完全に無効とする『神の聖句』［ホーリーワード］を恩寵たる媛君は続けざまに唄い紡ぐ。
その篤き加護を受け、アキは無傷で敵陣に肉薄した。

「…一閃、斬り拓く――『オーラフォトンブレード』ッ！！」

杖を振り抜いた白へと斬り掛かるが、緑の展開する大気の広域防御

『ディバインブロック』に防がれ、止められ――

「――っ！？」

…ない。あっさりとその盾を擦り抜けた。

それは、『全てを斬る剣』。彼の担う聖なる刃は何も斬れない代わりに、何を持ってしても止める事は出来ない。

その防御を擦り抜けた直後、引鉄を引き聖刃に纏う高密度のオーラフォトンにて、白を打ち払った。

「――次だッ！！」

…排莢と装填は同時に。トリガーレバーを引いて次弾を装填すると、同じく硬直している青を狙って――引鉄を引いた。

「…一閃、撃ち貫く――『オーラフォトンショット』ッ！！」

銃口から迸しったオーラフォトンに撃たれ、青は岩壁に叩き付けられる。

更にアキは、左脚に根源力による装甲――カティマの防御技である『威霊の錬成具』を物質化させて纏って、ルプトナの後ろ廻し蹴り『レインランサー』にて赤を打ち払った。

更に右腕にも装甲を纏い、緑に向けて突き出し――当たる直前で手を開いて、圧縮した”氣”…ソルの『裂空衝破』を放ち吹き飛ばす。

最後に残った黒が肉薄して放った『飛燕の太刀』。それをアキは…右手で掴み止め、【真如】の銃床で鳩尾を打った。

「…何故、殺さなかったのです？貴方なら可能だった筈ですが」

岩壁に背を預けた黒の巫女が問い掛ける。その脇には気絶している他の四人の巫女達の姿もあった。

「…んなもん、決まってんだろ」

アキは乱れた外套を羽織り直すと、左肩に【真如】を担ぎ直す。

「汚れ役は俺だけで充分だっての。コイツを…アイを血になんて、穢せられるかよ」

ふっと右掌を振り、奥へと続く道を歩み始める。その背中を見詰めたまま、黒髪の巫女はクスリと笑った。

「…とんだ、ドMのフェミニストね…」

そして視界から消え去った彼から視線を外すと、彼女は溜息を漏らす。

「時深様…私には…彼はとても、ロウに与するような人物には思えません…」

そして、薄闇に溶けて消える意識の中でそう呟いたのだった。

…神聖窮まる空間、息をするだけでも今まで染み付いた全ての穢れが払われていくような感覚に捕われる。その空間の果て、締め縄の

なされた巨石を背後に、その巫女は優雅に立っていた。

「彼女達では相手になりませんでしたか。少しだけショックですね、あの娘達は私自身が生み出した『エターナルアバター』だったんですけど」

「そんな事が聞きたくて来たんじゃないですよ師匠。俺が聞きたいのは、あんたらが何者かッて事だ。師匠や…ユーフォリアが」

閉じた扇…神宝の『時遡の扇』を口許に当て、柔らかく微笑んだ。

「私とユーフォリアは、『混沌の永遠者［カオス＝エターナル］』…一位【運命】のローガスを頂点とする、この世を不確定のまま存続させる事を目的とした組織の一員です」

いつか見た、諦めたような笑顔。彼に未来の事を語る度に、彼女が見せていたもの。

「その私が与えられた任務は――遠くない将来に、『秩序の永遠者［ロウ＝エターナル］』として立つ存在を抹殺する事。そう、貴方の事ですよ…『天つ空風のアキ』」

「……はは」

釣られたようにアキも笑う。何かを諦めたような笑顔で。

「…だから、貴方には普通の人で在り続けて欲しかった。しかし、こうなったからには…せめて私の手で引導を渡します」

――…ある程度、覚悟はしていた。だが、此処までハッキリ言われると流石に堪えるな。

喉元を競り上がってくる吐き気を、笑い出した膝をごまかす為に。
ただ、くせっ毛を掻きながら苦笑した。

そんな彼に追い撃ちを掛けるように、彼女は右手に第三位永遠神剣【時詠】と一一左の袖口から抜き出した、長い和剣を構えた。その刃は水に濡れたように、美しい。

「一一さぁ、往きますよ【時詠】…【時果「ときはて」】」

第三位神剣【時果】。倉橋時深が持つ三本の神剣の二振りが構えられた。彼女は複数の神剣に認められた、かなり稀有な存在なのだ。

「…構えなさい、天つ空風のアキ。さもなくば一一殺しますよ」

低く、恫喝する声。何度も聞いたが、殺気まで向けられた事は一度たりとも無かった。だというのに今は一一…

「…師匠、俺は一一」

まるで、泣き出す前の子供のように震える声で答えながら。アキは…【真如】を構えた。
瞬時に彼女の本気が伝わったから。例え敵わないと解っていても、諦める事は彼には出来ない。

…ただ、前に歩み続ける事。それが彼の選んだ道だから。どんな壁でも、全身全霊を持って乗り越え続けると。

「俺はずっと、貴女を一一」

トチりそうになりながら、スピンローディングで装填する。衝き出

した神銃のトリガーに指を掛けた――刹那、激震が洞穴を襲う。

「これは…?!」

「大変です、時深様!!」

アキはおろか、時深すらも驚いた顔をする。同時に彼が来た道から、先程の巫女達が現れた。

「出雲が何者かの襲撃を受けています!至急お戻り下さい――」

言葉が終わる前に、侵入してきた複数の影。スリムなフォルムに、装甲を持った人型の機動兵器――マナゴーレム『ノル＝マーター』。青、緑、赤、黒、白…全属性が現れた。

「――フシュウウウ……」

…そしてその背後から朱く煌めく双眸。無機質で重厚な装甲を持ち、右手は巨大で肉厚な鉈のように、左手は銃口のようになっている巨大な人型機動兵器。

「『…ククク、見付けたぞ蕃神!貴様はこの、南天神ゴルトゥンの獲物よォ!!」』

響き渡る声は間違いなく、かつてエヴォリアに取り付いていた怨霊…『眠ラズノ守リ神』に憑依した南天神ゴルトゥンが現れた――

変型した【悠久】に乗り天翔けるユーフォリア。その視線の先には、

メスで斬られたようにパックリと裂けた空間。

「あれは…”門”？」

そしてそこから、雲霞の如く溢れ出るノル＝マーター達。それらは空中で次々に戦闘体制を整え、腕などから各々の弾丸を撃ち出してユーフォリアを狙う。

彼女はそれを、弾丸の荒波に乗るサーファーのように躱していく。

「ーーてやぁぁぁっ！！」

そのまま、軍勢に突っ込み数体を粉砕して離脱する。しかし焼石に水、機械兵達は無数に地上に降り注いでいく。

「うぅ、どうしようゆーくん」

【どうもこうも…この数じゃ対応出来ないさ…せめて、旅団の皆が居れば…】

地上でも、そこかしこから爆音が響く。普段は巫女として働くミニオン達…防衛人形が、ノル＝マーターとの戦闘を開始したのだ。

だが、やはり多勢に無勢。おまけにこの奇襲を受け、巫女達は数に圧されて劣勢に立たされていく。既に『出雲開門』と『清水の社』、『渓流の守』。『樹林の守』と『深緑の参道』、『萌葱の社』、『山麓の社』、『緑の守』の拠点…つまりは『奥の院』以外は敵に占拠されてしまっている。

「『…貴女…確かエターナルの小娘ですね』」

「えっ…？」

「『丁度良い、貴女は早めに始末しておくとしましょう』」

気を抜いていたその一瞬に、目の前に女神が居た。半透明の白い翼に、羽飾りの付いた兜。ローブと黒い鎧を纏い、斧と鎌に似た剣と盾を携えた『誘イ惑ワス使イ』に憑依した南天神イスベルが――…

The 72th Name・・・"人形遣い"

強烈な一撃を躱してアキは岩肌を転がる。地を割った剣は、炎すら巻き起こした。
今まで通ってきた道を巨兵の追撃を受けながら逆走する。

「『相も変わらず…ちょこまかと五月蝿い蠅だ、蕃神！」』

岩戸内ではノル＝マーターと交戦している巫女達や時深。単体では相手にも成らないが、その圧倒的多数で機械兵士達は永遠者とその眷属の動きを封じている。

アキは前からのノル＝マーターを可能な限り打ち砕き、指揮官であるゴルトゥンを引き付けながら、遂に青空の下に帰還した――

「『――死ねェェェ、蕃神！！この南天神ロコの前に朽ちよ！！」』

その眼前に現れたのは巨大な目玉の怪物、『影喰ライ』に憑依した南天神ロコ。

「――後から後からッ！！しつこいんだよ、亡霊野郎ども！！」

その目から放たれた光線を、後ろに倒れ込む形のスライディングで躱してロコの足元を潜る。
そこから起き上がりつつ『オーラフォトンブレード』を叩き付けるも、それよりも早くロコは空高く舞い上がった。

「『――フンヌォォォッ！！！」』
「――チィッ…クソッタレが！？」

そして天高くより振り落とされたゴルトゥンの鉈剣を『威霊の錬成具』で受け止める。余りの威力に、踏ん張った足が地に埋まった。

「「『『一一貰ったァァァッ！！！」」』』

その隙に向けロコが空中から光弾を連射し、更にゴルトゥンが炎を噴き出す左手の銃口を向けた一一

イスベルの斬戟を辛うじて躱したユーフォリアだったが、その為に体勢を崩して墜落してしまう。

「いたたた…」

森の中に突っ込んで事なきを得るも、そこは既に南天神達の勢力圏下。周囲から、断続的に無気味な駆動音と生木を圧し折る耳障りな音が木霊する。

それに対応して、彼女は大剣に戻した【悠久】を構えて後退り一一

「一一きゃああっ！？！」

踏み付けた植物の蔓に足首を搦め捕られ、逆さ釣りにされてしまった。

「『捕まえましたよ、可愛らしい娘。さて、この南天神ウルの滋養とさせて頂きましょう」』

「っな、南天神…？」

重力に引かれてめくれる服の裾を押さえながらユーフォリアが見たモノ。

巨大な樹の中央から美女の上半身が生え出た怪物『アルラウネ』に憑依した南天神ウルの姿。その指先は艶かしく、ユーフォリアの頬をなぞる。

「『おや、ウル。先を越されてしまいましたか』」

「『イスベル殿、こちらは捕縛致しました。首尾は一一』」

一一刹那、銀閃が走る。ユーフォリアの足を捕らえていた蔓を切断して解放する。

「…貴女がたをお呼びした覚えは在りません、立ち去りなさい」

それを成したのは、銀髪の巫女。犬耳と尻尾を持つ、小刀を逆手に構えた彼女は一一

降り注いだ光弾と火炎放射のただ中に在って、アキは無傷。それもその筈、彼は時空を隔絶する強固な守護『タイムトリップファン』に護られているのだから。

「…全く、エターナルになっても世話の焼ける…」

「師匠…」

二ツの攻撃を軽くいなし、時深は時朔の扇を閉じる。岩戸内に侵入

したノル＝マーターは、既に全滅させられている。

「…今は、出雲を護る事に専念します。チカラを貸しなさい、天つ空風のアキ」

これ以上の侵入を防ぐ為に入口の守護を巫女達に任せて、彼の下に辿り着いたのだった。

「『…コイツが、奴の言っていたエターナルとやらか…」』

「『確かに強力なチカラを持っているようですな…策を弄さねば、勝ち目は薄いかと」』

「『ふん、その時の為に用意した軍勢と躯よ！！やれ、ロコ！」』

ゴルトゥンとロコは口々にそう呟くと何かの信号を送るゴルトゥン。同時に、ロコが単眼を見開いて時深を凝視し始めた。

「何を――ッ！？」

と、身構えていたアキや時深が天を見上げた。その先に在る空間の裂け目、そこから――巨大な土隅を思わせる、袈裟を纏った…光背に、腰から触手を生やした醜悪な機動兵器が姿を見せた。

「…なんて」

――ノル＝マーターじゃない別の機動兵器。だが…少なくとも、俺はあんなモノ知らない。あんな…

「なんてゴテゴテゴテダセェ機械だ。あんなモン、設計した奴の気が知れねぇ」

「…そこですか？」

「俺は機能美派なモンで」

降り立った土隅は、瞬時に周囲の空間を『涅槃ノ邂逅』にて変質させて二人に見る。無機質な、命を感じさせない機械の目。

「…あれは『抗体兵器』。遥か昔に造られた、”ナル”を回収する為の――」

瞬間、抗体兵器が地面に腕をアンカーのように突き立てて口腔内の砲門を覗かせ、そこから放つ一条の極太の赤い閃光で『天ヲ穿ツ』。貫通［ペネトレート］するそれは【真如】の加護［プロテクション］系では防げない。アキは根源力を練り上げて両脚に錬成具を纏い、空高く飛び上がる。

…元々、彼は何かを『創造』する事と『流れ』を見極める事を得意としている。【幽冥】の『再製』で培った構造や空間の把握に加え、気の鍛錬やレストアスを体躯に流していた事で、窮めてマナ操作に無駄が無く効率が良いのだ。
その展開速度はただ、脅威としか言えまい。

「『貴様の相手はこちらだ!!」』

「――チッ！」

そんな彼を狙って、横殴りに振るわれたゴルトゥンの鉈。それを、空中に展開したオーラを蹴ってのバックステップで回避して着地する。

「『どうした、あの神剣を屠ったように我等を滅ぼして見せろ」』

「…余計な心配すんなよデカブツ。直ぐ輪廻の鐶［マナ＝サイクル］に戻してやる」

一一クソッタレが、莫迦力を相手にするのは向かねェんだ俺ァよ！

…心の中で毒づきながら、アキは時深を探す。だが、直ぐに無意味だった事を知った。

「幾ら速く動いても無駄。時間ごと早くなる私には敵いません一一『タイムアクセラレイト』」

「…ガ、シュウウ……」

時深と、式紙が変化した彼女の分身に挟まれた抗体兵器。その両方から同時に【時詠】の斬撃を受け続けた事で、『峻厳タル障壁』にヒビが走り砕け散る。そして最後に式紙が炸裂し、抗体兵器を破砕した。

「これで終わりですか、南天神？これくらいの相手に落とされる程、出雲は脆弱ではありませんよ」

そのままユラリと、ロコを見遣る。単眼はソレを見詰めた後、不意に笑った。

「『…ククク、解っているとも。所詮は一一ただの様子見だ…」』

…そして、姿が変わる。目玉から紫色の人影…倉橋時深の影へと。

「『貴様の姿と力を写し取る為の、な！！」』

「……」

哄笑するロコ。その袖とおぼしき部位から、濁りきった影の塊である剣を抜き払う。

「『行くぞエターナル、我がチカラを見せて――』」
「…姿形が問題では無いのですよ。問題は――魂なのですから」
その背後では涼しい顔で【時果】を袖に納める時深。ロコは影剣を構えたまま、驚愕に目を見開いていた。影色の瞳を血走らせて。
「――私には解るんです。何時、何処に攻撃すれば良いか」
…瞬間、ロコの正中線に光の筋が走った。縦一線に真っ直ぐ。
「――『クリティカルワン』」
そのまま、ロコは両断されて消滅する。何一つ為せぬまま、圧倒的なチカラに討ち滅ぼされた。
これこそ、本物のエターナルだ。アキならば、少なくとも二十発の弾を必要とするであろう相手二体を赤子の手を捻るようにあっさりと打ち砕いた。
「『――クッ…!?何と言うグォォッ?!!」』
「――テメェの相手は…こっちだろうがァァッ!!」
それに気を取られたゴルトゥンにアキは錬成具を纏った拳打を見舞う。その威力にゴルトゥンの角がへし折れた。
「『えぇい、鬱陶しいわッ!!矮小な駄神の分際で、この我に傷を付けるなどォォォッ!!」』
巨兵は火炎放射機を突き出して追撃を試みるが、アキは【真如】の

斬戟でソレを破砕する。爆発に姿を見失い、一瞬気を抜いたゴルトゥンは素早い追撃に移れない。
アキは着地すると更に高く、高く跳び上がって大上段に振り上げた【真如】に二発分のオーラを纏わせた。

「…マナの霧となり、夜闇に散れ――『光芒一閃の剣』！！！」

ゴルトゥンは鉈を構え、ソレを受け止めるべくチカラを篭めて――

「『――バ、カなぁぁっ！？！』」

圧倒的な高密度の精霊光に鉈ごと、巨体を二分割されてマナの霧へと還っていった。

天を翔けながら、ユーフォリアはイスベルに肉薄した。イスベルは舌打つと盾を使っていなしたが、耐え切れずに砕けた盾が地に降り注ぐ。
その地上では奇襲から立ち直った出雲の巫女達によって戦線が持ち直していた。設定されたプログラムを履行するだけのノル＝マーターでは、鍛え上げられた連携を誇る防衛人形に対抗出来ない。

「『――イスベル殿！どうやら、ロコとゴルトゥンが滅んだようです…ここが引き際では」』
「『っ何処へ引けというのです！？これだけ戦力を整えておきながら失敗したとなれば、我々に待つのは…っ！？」』

近寄ったウルが進言するも返ったのは苛立ちを含んだ答。その一瞬

の隙に、ユーフォリアは【悠久】をトップスピードへと乗せた。

「全速前進、突っ切れぇぇっ！！」

「『一一ちぃっ！』」

「『な、イスベル殿、何を一一がはっ！？！』」

躱しきれないと見たイスベルは、ウルの後に回り込み盾とする。余りに意外な行動を取られたウルは、『ドゥームジャッジメント』に宙に浮かされ、貫かれて消滅していった。

「『こうなれば、後はノル＝マーターや抗体兵器を使って時間稼ぎを一一』」

その間隙に、イスベルは空に浮く〝門〟へと撤退していく。

「…やれやれ、本当に役に立たない従業員［手駒］だ」

「『一一ガハッ！？ま、待て…まだ私は戦える…！！』」

そこに響いた、鈴のような声。そして一一イスベルが潜ろうとした門から山のように巨大な剣が現れ、彼女を貫く。

その莫大な質量を持ち剣は地上に向けて落下していく。当然、その切っ先に貫かれているイスベルに待つ運命は一一…

「取り敢えず、掛金は返して貰いますよ。その躯と…魂を、ね」

「『おのれ…おのれ、スールードぉぉぉぉぉぉっ！！！！！』」

地を割り砕いて衝き立った剣で、南天神達は完全に滅び去った。

それを確認して、一斉に視線を受けた巨大な剣の柄尻に立っていた鈴の髪飾りの少女は。

「――さぁさぁ皆さん、此処からがメインイベントですよ」

【空隙】のスールードは、妖艶な笑顔を持って答えた――

The 73th Name・・・"空隙を埋めるモノ"

出雲の大地に、地殻すらも貫かんばかりに深々と衝き刺さった大剣。その頂に立つ天女は無造作に、空間から融け出すように現れた紅い剣を左手に番えた。

「あの人は、確か…」

アキと時深の下に到着し、降り立ったユーフォリアと犬耳の巫女。その時、アキが己の外套を毟り取るように脱いで動き易い武術服姿となる。

「…精霊光の風よ、歩みを止めぬ者達の背を押す追い風となれ――『トラスケード』!!」

と同時に、煌めく【真如】の聖刄から溢れた風がアキの身を包む。展開された激励のオーラ、追風の加護を受けた躯にチカラが漲っていく。

「――アイツとは俺一人でケリを付ける。手ェ出すな」

「あ、ちょっと空さん!!?」

その外套をユーフォリアに投げ渡した彼は、脚に纏ったままの錬成具で『空間』を踏み跳躍した――

剣の現れた”門”が閉じると同時に、地上に展開していたノル=マーターの一部が一斉にスールードの下に集結を開始する。

「――先ずは、廃品回収といきましょうか」

それを、彼女はプレッシャーだけで粉砕した。スールードから迸しる圧倒的な神性の圧力に、耐え切れずノル＝マーター達は次々爆散していく。

「――鈴鳴ィィィッ！！！！」

その爆風を潜り抜けて斬り込んだアキ。だが、当然と言わんばかりにスールードは『オーラフォトンブレード』を剣で受け止めた。

「…『空［くう］』自体をを踏んで来た訳ですか。芸達者ですよね、出来ない事って無いんですか？」

「煩せェよ…テメェの正体、今度こそ聞かせて貰う。打ちのめしてでもな！！」

「ふふ、怖い怖い…ですがまぁ、備え在れば憂い無し。弾数無限の貴方に対抗するには――やっぱりコッチもそれなりに整えなければいけませんし」

そしてその残骸内の僅かなマナを吸収された。塵も積もればなんとやら、その総量は莫大。

【気を付けて下さい、アキ様…！その方の神剣は…【幽冥】よりも強大なマナを有しています！】

左手に携えた紅い剣、大地に衝き刺さった物と同じ第四位【空隙】が脈動するのが解る。余りに巨大なそのチカラに、アイが今までで最大級の警告を発した。

「…それじゃあ、ラストダンスと洒落込みましょうか。男性らしくエスコートをお願いしますね――巽さん？」

「上等…征くぜッ！！」

振り抜かれた【空隙】の一閃に、極彩色のオーラが粉砕されて破片を撒き散らす。それにスールードは、ともすれば見惚れそうな程に艶やかな微笑みを見せた。

斬り結び、まるで輪舞曲［ワルツ］でも踊っているような二人の姿を眺めながら、三人の永遠者は目を見合わせた。

「…彼は相変わらず、血が昇ると猪突猛進ですね」

「あはは…空さんって視野狭窄で一本気な人だから…余裕が無くて気が付かなかっただけですよ」

「言われなくても判ってます」

犬耳の巫女が少し呆れたような、いじけたような視線を向けて呟く。ユーフォリアはそれに、外套を手早くたたみながら苦笑した。

「…貴女達。喋っている暇が有るなら、早く姉さん達の救援に向かって下さいな。まだまだあの戦闘機械達はいるのですから」

そこに苦言を呈した時深。巫女とユーフォリアはその発したオーラに慌てて行動を開始する。大半がスールードに吸収されたとはいえ、未だノル＝マーターや抗体兵器は無数。

環が指揮を執っているだろう、奥の院に向けて、炎により発生した上昇気流で生まれた黒い雲の下を飛んで行く。

それを見送って、時深は四方に式紙を投げて木に貼付ける。そして

刀字を斬れば一一周囲の世界が隔絶されて『結界』を作り上げた。

「悪いんですけど、今は取り込み中なんです。手早く終わらせたいので、勿体つけてないで出て来なさいな…”最後の聖母”イャガ！！」

「一一それよそれ、”最後の聖母”イャガ。私の名前って、それだったわね…この時間樹に入る為に躯を小さく分け過ぎちゃって、よく思い出せないの」

呼び掛けたのは、大樹の陰。その陰から湧き出るように、一人の女が現れた。

「ふふ、有難うお嬢さん。ところで貴女一一とっても美味しそう。ねぇ、私と一ツにならない？」

…白い薄布［ヴェール］だけを身に纏った、深紅の長髪と瞳。百人に問えば百人が『美女』と答えるだろう。しかし一一直ぐに気付く筈だ。その女が有する、生命としてあからさまな『違和感』に。

「真っ平御免ですよ。私は貴女も、貴女の言う『赦し』も大嫌い。私は私、私だけが私なのだから…貴女の押し付けがましい『救済』なんて要らない」

「あら、哀しいわ…でも良いの」

不敵に笑いながら痛罵した時深、しかし最後の聖母は僅かに愁眉を寄せただけで一一ニコリと。

「一一勝手に食べちゃうから」

「一一っ！？！」

瞬時に『空間跳躍』で姿を消したイャガ。それに反応して、時深は【時詠】と【時果】を交差させて背後に現れたイャガの振るう短刀を受け止めた。
余りに強大なマナ圧に軋む空間、暴風すら巻き起こす剣戟だった。

「普段なら貴女の第二位【赦し】と真正面から打ち合うなんて出来ないけど、今の私には【時果】が在ります。遅れは取りません」
「あら、そう？うふふ、楽しみね…私、食事するのもお話するのも大好きよ」

その隔絶された世界の中で。二人の超越者同士が激突する――

虚空を踊る二ツの影。一ツは天女、もう一ツは一一鴉。片方は優美に空を舞い踊り、もう片方は獰猛な機動を見せる。

「――さあ、見せて下さい巽さん。今までずっと待っていた。何の混じり気も無い、ただただ人の子の努力が掴み取ったチカラを！」

スールードは笑顔のまま、純粋な人のチカラとの戦いに歓喜する。
歓喜しながら、その胸の内に眠る感情を吐き出す。

「私の正体なんて単純、彼女［私］の分体…だから許せないんです。この『私』以外に、『本物の私』が存在しているなんて！」

他者の意など存在しない、純粋な願いと祈りの産物。その”生命”の煌めきを宿した『永遠神銃』に。その魂に刻まれた銘…彼の起源と同じ『空』の一字…『空っぽ』の意味を持つ神剣と、その担い手

の一撃が見舞われた。

「貴方だけだ、私の『願い』を叶えられる権利を持つのは。貴方だけだ、私の『願い』を踏みにじる権利を持つのは！貴方だけだ――私を、この『宿命』から解き放てるのは！！」

振り抜かれる左の【空隙】を回避し、空いた右から連続放射されている圧力［プレッシャー］を『威霊の錬成具』で堪える。

「治癒や蘇生…他の雑多な神剣が嘘吹く、マナを利用しての『無』から『有』を生み出すなんて言うチンケな奇跡とは違う……最早、『転生』の域にすら達した神律の紡ぎ手。真実の『無』から『有』を生み出す事の出来る窮境の秘蹟［サクラメント］の担い手たる貴方だけだ！！」

その錬成具の防御が、右手に番えた『二本目の』【空隙】によって粉砕された。

根源力で編まれた装甲が砕け散り胸に傷が疾る。鮮血が迸しるも、戦意は萎えるどころか沸き立つ。

【命育む水よ、傷付きし者を癒し給え――『エーテルヒール』】

「――ハッ、腑に落ちねェんだよ！！俺から【真如】を奪った所で、このチカラは”生命”を共有する俺にしか扱えやしねェ！！」

瞬時に傷を癒しての返しの刃に、スールードは防御――せずに飛びのいた。

しかし、引かれたトリガーにより放たれた銃口から飛翔した斬撃…『ブレードフラッド』に撃たれて、湖に向けて落下し――湖底から幾つも衝き出している石柱の天辺［てっぺん］に着地する。

アキもまた同様に落下し、湖面に波紋を揺らしながら着水した。

「…まぁ、そうでしょうね。今の貴方は、まだその神剣の『本来の姿』すら見れてはいない。勿論、『本来のチカラ』も引き出し切れてはいないのですから」

「何…？！」

水面に映る二人。その一時、水面は鏡のように凪いだ。

「まだ解りませんか？貴方は今、『無限』のチカラを携えている。まだまだ一一多寡が『無限』程度でしかない、そのチカラを」

彼女はは二本の【空隙】を携えたまま、腕を組んで彼を見下ろす。その瞳はただ、真摯にアキの神銃を見詰めるのみ。

「『空［カラ］の力』と『空［カラ］の器』…その二ツの『０［無］』が結び付いてこその『００［無限］』。ですが、まだ先は在る…見せて下さい。この神剣宇宙でただ一ツ…『無限』すらも越えて行く一一蒼滄［あお］き『光』を」

…言葉を紡ぐと同時に【空隙】が炎上して、先程までを凌ぐ圧倒的な気配を放つその背から翼が現出した。鳳凰を思わせる荘厳な翼と尾羽。

「訳の判らねェ事をつらつらと…ゴチャゴチャ言ってねェで、とっとと来やがれ！」

気圧されそうになる心を、虚勢で叱咤する。これが彼女の全力だ。

「ええ、全力で征きます。だから、早く巽さんも全力を出さないと一一消滅させますよ？」

この時間樹においては、神名の影響で下手なエターナルは通常の神剣士と変わり無い。
だからこそ、エターナルとならない内で最高位である第四位神剣の持ち主は――この時間樹エト＝カ＝リファにおいてはエターナルに比肩する。

飛翔したスールードに合わせて、アキは湖面に波紋を立てながら走る。そして精霊光を纏う【真如】と炎を纏う【空隙】が、大気すら四散させながら打ち逢った――！！

The 74th Name…"無限光"

アキとスールードがぶつかり合う奥の院手前の湖は、さながら台風の最中に在るように荒れ狂う。
アキが【真如】の銃撃を連射すればスールードは二刀を以てそれを全て打ち払い、そのスールードが【空隙】を掲げれば天空より光が降り注ぎ、アキが【真如】と錬成具にて弾く。

「――ッ!?」

その勢いのまま斬り込もうとしたアキだったが、空中でくるりと一回転しながら振るわれた【空隙】の…『遥か彼方』の斬撃に悪寒を感じ横っ跳びに回避した――瞬間、【空隙】の振られた先に在った『空間』が切断された。

「――良い判断ですよ、巽さん。幾ら貴方でも両断されてしまえば…先程のようにエーテル塊で損傷部位を補填する間も無く即死するでしょう?」
「…ハッ、確かにな!」

辛うじて回避したアキは、着水の間際にもう一度踏み込んで即座に走る。その背中を掠めるように、スールードの光が追い縋った。
サイドステップを織り交ぜての高速移動でなんとか回避し続ける。

「…早く本気を出して下さいよ、最後の『0［カラ］』を。その時、貴方は無限をも超越する光を得て…その不格好な剣も真の姿となる。その時――私は否定光の大海に還り、単一の存在を為せる」
「――だから…テメェの言ってる意味が判らねェんだよ、畜生!!」

アキは水中に銃口を衝き入れて、トリガーを引いた。着弾の衝撃波で巨大な水柱が立ち上り、それに紛れて消えたアキを見失ったスールードだったが一一直ぐに上空を見遣って微笑む。
そして、天頂より降り墜ちる極星の一撃『南天星の剣』を、二本の【空隙】で受け止めた。

「筋は良いんですけど…その程度では、私と【空隙】には遠く及びませんよ」

弾き返され、距離を取る。向かい合い真正面から視線をぶつけ合いながら…アキは思考を巡らせた。

（アイ…奴の言う意味、判るか？）
【いいえ…判りません。私の真のチカラと姿……それって一体…】

気を抜かずに魂を通して会話するも、解は出ない。そもそも、己の事を己以上に知られているという不快感から、まともな思考など出来なかった。

一一不格好、か…確かにな。何せ【真如】はただ、本来弾倉の在る部位に刃を突っ込んだだけだ…

かつて、仏蘭西［フランス］の農民達の戦争で偶然に生まれたというその武器。原型は銃口にナイフを突っ込んでいたらしい。不格好と言えば不格好、そして一一余りに不安定だろう。
そこで頭を振って、雑念を払う。一瞬の判断が生死を分ける戦場で、戦意以外を抱くのは余りに幼稚な行為だ。少なくとも、神の助力を得た者達にヒトと変わらぬ身のままで太刀向かっていた彼はそれを身に染みて知っている。

――落ち着け…敵の術中に嵌まるな。言葉に耳を貸さず、ただ撃ち破る事だけを考えろ！！

低く腰を落し、獲物に襲い掛かる間際の獣のような…ダラバの八双の構えを取る。かつて【夜燭】でそうしていたように。

対して、スールードは余裕の構えを崩さない。美しい翼をはためかせながら、天女を思わせる姿そのままに優雅に空を舞う。

「次は私の番です。我が【空隙】の刃を躱せますか？！」

そして、回転しながらの空間切断を連続で振るう。まるで駒のように世界を斬り裂いていく。

一撃で二分割、二撃で四分割。一振りごとに身を躱す範囲を次々に削られ、遂には三撃目で回避する空間を完全に鎖された。

「――…最後の一撃です。さぁ、越えてみせなさい！！」

放たれた四撃目。不可視の斬撃が、アキの躯を両断すべく迫る。

「…マナよ、我が求めに応じよ…浄化の輝光へと換わり、遍く穢れを撃ち祓え――『オーラフォトンクェーサー』ァァァッ！！！！！！」

――俺は…こんな所で立ち止まっちゃいられないんだよ！！

それに彼は銃口を向けて、自身の根源力で増幅した最大出力の一撃『オーラフォトンクェーサー』の蒼茫の光を以て迎え撃った――！！

一方、ノル＝マーターや抗体兵器の掃討に移った巫女達に協力していたユーフォリア。既に数百にも及ぶノル＝マーターを破壊する、大立ち回りを見せていた。

「――やぁっ、たあぁぁっ！！」

彼女の父の剣筋である『プチコネクティドウィル』で、抗体兵器の頭部を弾き飛ばし叩き割る。
更に接近してきた機を、彼女の母の剣筋『プチニティリムーバー』で両断した。

「助かりました、ユーフォリア殿。流石に抗体兵器は、防衛人形には荷が重過ぎるので」
「いえ、お安い御用ですよ」

あらかた片付いた事を確認して、環は礼を述べる。それに粗い息を吐きながらもユーフォリアは律儀に返事をして――湖からの衝撃波に身構えた。

「…拠点を奥の院から清水の社に遷しておいて正解でした。あの戦いに巻き込まれては敵いません」
「……」
「心配…ですか？」

…一瞬、彼女は表情を曇らせた。しかし直ぐにそれを振り払うと、真摯な笑顔を見せる。

「――心配なんて、してませんよ。だって空さんは死にませんから、

絶対に。そう約束したから…」

その青い瞳から伺えるのは、ただ純粋な信頼。何一ツ確証も無いというのに、真に無垢な全幅の信頼だけだ。

本来ならば、歳経れば失ってしまうモノ。人を疑う事を覚えてしまえば、二度と手に入らないモノ。

「『鰯の頭も信心から』ですか。全く…この歳で年下に諭されてしまうとは思いませんでした」

颯爽と駆け出して残敵を掃討するユーフォリアに、環は思わず苦笑してしまった。そして自分の妹を思う。

「彼を信じるか、信じないか……後は時深、貴女次第ですよ」

呟くと彼女は防衛人形達に指令を出して、ユーフォリアに続いた。

地を貫く巨大な【空隙】の剣近くまで吹き飛ばされ、樹木に背中を預けたアキが呻く。衝撃に武術服の上半身部は破れ飛び、諸肌を曝している。

「アレを打ち消したのは流石ですけど…まだまだ全力では無いみたいですね。やれやれ、まだ自分が『ニンゲン』だと思っているのですか？」

「…何…！？！」

足元に降り立ったスールードが、その躯に刻まれた無数の傷を見遣

る。異空の生きてきた証明であり、消えない過程［モノ］。

「だってそうでしょう？今の貴方は、傷を負えばその剣のチカラにより即座に癒える。例え腕や脚を斬り飛ばされたところで、結果は同じでしょう…そんな存在が一一『神剣のカタチとして』の不変の”生命”で生きる貴方が、ニンゲンとして振る舞っているなんてね。笑えるじゃありませんか」

「一一テ、メェ…！！」

【真如】を振るい、スールードを後退させる。その間に、軋む躯に鞭打ち立ち上がる。

【アキ様…このままでは…】

（泣き言は止めろ、アイ…俺達は勝つしか無いんだ…！！）

アイの不安げな声に、彼は自身諸とも叱咤する。

一一そう、勝つしか無い。例え…それがどれ程大事なモノを犠牲にするとしても。

そう決めて、俺は…エターナルになったんだ。

如何に躯や心を痛め付けられようが、彼の魂は決して折れない。

…何が在ろうと、ただ前に進む。ただ弛む事無く、ありのままで。

『…私はいつでも…いつまでも…貴方を信じています…我が、若き主よ一一……』

思い返すのは、あの言葉。彼の魂に燈る蒼茫の煌めき。

一一ニンゲンを捨てて繋いだ掌。その癖に、俺は…まだニンゲンの

つもりだったんだ。

（…考えてみれば、お前にも無理させたよな…アイ…無理して神銃にしてよ）

【そんな事、ありません…どの道私は――永遠神剣としては失敗作ですから…そんな私を受け入れて下さったアキ様の為なら、どんな罪にでも塗れます】

己の内に眠る最後の『０』、それに気付く。精神を統一して、魂に埋没する。

（有難うな、アイ…頼む、俺と…）

――『空［カラ］のチカラ』の体言であるアイオネア、そのチカラを受け入れる『空［カラ］のウツワ』である【真如】。そして…それを振るう『空［カラ］の壱志［イジ］』である、この俺［アキ］。どれ一ツ欠けても成り立たない。この三身一体こそが…エターナル”天つ空風のアキ”を構成する起源なんだ。

「俺と共に…神を超えてくれ！！」

【はい、アキ様……その道を斬り拓く為の【真如】ですから！！】

…瞬間、【真如】の聖刃が蒼茫の煌めきを纏う。それはまるで、彼がかつて信頼した――レストアスのように。

「――来た、遂に来た！そうです、そのチカラを期待していた！！」

その様に、スールードは歓喜した。炎でもなく、水でもない。風でもなければ、光でも闇でもない。この世の如何なる事物でも無い、世の外に座す『０００』――…

「遍く全て…無限の可能性すらも超克する『無限光”アイン＝ソフ＝アウル”』！！！」

同時に、剣銃【真如】がカタチを『還［カエ］』る。永遠神銃としてではなく、有り得なかった可能性…『永遠神剣として契約した』、彼女の姿に。

そもそも、本来の彼女は”生命”。定められたカタチなど無く、器に沿って併存する遍くカタチが彼女なのだ。

…微かに【夜燭】の面影を残した、蒼滄［あお］き片刃の直刀。華美ではないが美しい装飾の施された、１ｍ５０ｃｍ程の揺らめく波紋の刃紋の刃。

その聖刃の中央下部に嵌められた夜明の宝珠からは、尽きる事無く蒼茫の光が溢れ出る。

その大太刀を、腰溜めに構える。対応したスールードも再度空間を切断するべく【空隙】を構える。

「――この一撃、躱せまい！！」

先に動いたのはスールード、至近で二本をクロスさせて放つ。

世界を割り切る斬撃の鋭い風斬り音はさながら、神剣の異能により無理矢理に剥離させられた空間の悲鳴の如く。

「躱す必要はねェ……超えて往くだけだ、全てを」

横一閃に振り抜かれた、水平線の剣撃。空間を断ち切る神の刃すら超え往く生命の煌めきが。

「一一これが…ヒトの子のチカラ……」

二本の【空隙】と、彼女の背後の大剣諸とも全てを両断した一一…

その瞬間、勝敗は決した。二刀流の時深に対してイャガは一刀。【時詠】にて【赦し】を押さえ込まれた刹那に加速した【時果】を深々とその身に衝き立てられて、彼女は死を避けられぬ程の致命傷を負った。

「「一一っ!!?」」

その時だ、結界が…壮絶なチカラにより破壊されたのは。

「これは…一体」

「……うふふ…見付けた…」

呟き、駆け出した時深になど目もくれず。イャガは、そのチカラの残滓を喰らう。

「遂に見付けた…私の『〝空〟腹』を満たしてくれるモノ…」

そしてその身は空間に融けていく。まるで始めから存在していなかったかのように……

崩れ落ちる二本の【空隙】が、掌から零れ落ちるさまを眺めてから。スールードはアキへと、穏やかに笑いかけた。

「…参りましたね、まさかたった一撃で敗れるとは……本当に強くなりました。最初に見た時なんか、本当にこんな脆弱な存在が私の希望になるのか不安だったんですけどね」

「……生き抜いてりゃあ、チカラくらい付くさ。お前にも…何度も助けられたしな」

ほぼぶつかったような至近距離。その距離で、胸に大きな十字傷を負ったアキも皮肉げに笑った。

「…ふふ。しかし爽快な気分だ。貴方の剣に討たれたモノは全ての因果から弾かれる。私は、これで……スールードとしての宿命から解き放たれて…私のままで死ねる…ざまぁみろってなもんです」

あっけらかんと自身の消滅を受け入れて。彼女はくすくすと笑う。それは、かつて剣の世界や精霊の世界で逢ったあの少女…『鈴鳴』としての顔だった。

「…莫迦だよ、お前は。何で一言、『助けてくれ』って言ってくれなかった…」

「……さぁて、何故でしょうか。それは貴方の残りの永遠で説き明かして下さい。永遠の時があるんですから、解けない謎くらい有った方が退屈しなくて済みますよ」

…続いて、背後の【空隙】が崩れ落ち始める。それが本体だったのだろう、スールード…いや…鈴鳴の躯がマナとして解け、空に融けていく。

その冷たい掌がアキの頬に触れた。その形の佳い唇が、言葉に成ら

ない声を発した。

「一一…」

そして最後に、一瞬だけ触れ合う。まるで風が触れたように、空蝉のように実体の希薄なモノ。

だが、確かに存在した一一…鈴鳴という少女の温もりだった。

「…本当に、莫迦だよ…お前は」

握り締めた【真如】は、いつもの剣銃に戻っていた。だがその聖刃に煌めき無くなっている。まるで、空に掛かっている雨雲を映したように。

「空さん…」

全ての敵を片付けたユーフォリアと時深が駆け付けた時、丁度雨が降り始めた。二人が現れた事にも気付かず、アキはただただ涙雨にうたれながら立ち尽くすのみ。

「……クソッタレ…」

その搾り出すような声に、ただ…二人はその背を見詰めるしか無かった……

The 75th Name・・・"妖精の護り唄"

…夜半過ぎまで降り続いた慈雨が上がり、人工の光が無い出雲の空は宝石箱をひっくり返したように美しい星天を見せている。

「……」

その夜闇の底、奥の院の屋根に腰を下ろしたアキは天を眺めていた。天の川の煙るように細密な星の集まりと、襲撃で時間流が乱れた為に現れ出た黄金色の満月を肴に御神酒を煽る。

冷えた湿気を孕む夜風は心地好く、寛げた宮司装束の衿元から覗く包帯を巻いた躯を撫でた。

「こんな所に居た…もう、空さん。病み上がりなのに無理しないで…って、あー!!お酒なんて呑んでっ!!」

「俺は何て事ねェよ。後、細かい事言うな。もう歳なんて取れないんだからな…」

そこに、巫女装束のユーフォリアが屋根へと登って来る。そして彼を見咎めるや、ぷりぷりと怒り始めた。それもその筈だ、数十分前までこの男、生死の境を彷徨っていたのである。

『無限光の聖剣”アイン＝ソフ＝アウル”』を振るった為にチカラを著しく消耗したアイオネアが意識を失い、同じ生命を共有する彼もまた倒れたのだ。

幸い彼は直ぐに目を覚ましたが、アイは今もまだ眠っている。少し前までは彼が看病していたが、環の気遣いで今は犬耳の巫女が看ている。

「アイちゃんはまだ目を覚まさないのに…心配じゃないの？」
「してねェよ、心配なんて。アイは強い子だ、必ず目を覚ますって判ってるからな」

右隣に腰を下ろした彼女を見る事無く、彼は杯の澄んだ清酒が映す酒月を見遣る。

一一それに、心配し続けたなんて知ったらひたすらに恐縮しちまう。そんな娘だ、アイは。

ゆらゆらと揺れる満月は、当たり前だがその遥か下の湖に映るそれと全く同じ。
期待した言葉を聞けなかった為か、ユーフォリアは少し悲しそうな顔をした。そして、アキの顔色を窺うように唇を開く。

「あの…話したくなかったら良いんだけど…あの人と空さんって、どういう知り合いだったの？」
「……」

…ユーフォリアの問い掛けにも、アキは暫く黙り込むのみ。
湖上の楼閣を再度、涼やかな風が吹き渡る。湖と杯の水面を揺らし、風はどこへとも無く消えていく。それはまるで”生命”のようだと、ふと思った。

「一一…ッはぁ…ハハッ……」

一息に飲み干して息を吐き、同時に一一笑った。口の端を皮肉げに吊り上げて。傾け酒を注いだ徳利、カラになったそれを適当に転がした。

「…前、俺が持ってた伍挺拳銃が在っただろ?アレを創る時に色々世話になったんだよ」

そして、右手に持っていたモノを見せる。鳳凰の尾羽のような羽があしらわれた根付け。
この戦いで完全に使えなくなった、武術服の腰帯に結わえてあったモノだ。

「これは、最初会った時に貰ったモンだ。『また出逢えるお呪い』らしい…どこまで本当か判らないけど…確かに何度も引き合わせてくれたな」

消えずに遺ったそれは、恐らくは鈴鳴の羽。今まで気付かなかったが、ほんの少しだけマナの残滓を感じる。
とは言え、『空［くう］』に因って因果を断ち切られた以上、どんな意味を持っていたとしてもただのマナで出来た物体でしかない。

「…まぁ、目的の為に利用されただけなんだろうけどな…それでも、俺にとっちゃ恩人だった。護りたい世界の一部だったんだ…」

根付けを懐に戻し、もう一度アキは静かに笑う。行き場を無くした想いを弔うように、静かな笑み。

「俺ァ、自分の大事なモノを自分自身でぶち壊しにした…超弩級の大莫迦野郎さ。結局のところは、『変わってない』んじゃあ無くて『変われてない』んだ…ショウの時と同じ、何にも出来なかった」
「…空さん…」

…だからこそ、彼女は気付いた。この男が自分から笑うのは――…嬉しい時でも楽しい時でも無く、堪え難い程に悲しい時や苦しい時

なのだと。
あの時の……【幽冥】との戦いを終えて見せた笑顔もそうだったのだろう、と。

「…神を超えるチカラなんて下らねェもんより、命を救えるチカラが欲しかったんだけどなぁ…全く、陳腐な台詞だけどよ…八百萬の神を殺すより人一人を救う方が、よっっっぽど難しいぜ」

痛みも、苦しみも。何一つ誰にも押し付けずに、ただ己を磨く為に噛み砕き飲み干し滋養とする。
どれだけ『救い』が無いとしても、それが…アキが『成長』と呼ぶモノだった。

「…ていっ」

ペシリと手を叩かれ、アキは杯を取り落とす。
勿論酒は打ち撒けられ、コロコロ転がった杯が湖に落ちて浮かぶ。

「っつぁ、オイオイ何て事すんだ勿体ねーな…杯も返さなきゃならねーのによー！オイィィィ!?!」

それを追いかけて身を乗り出したアキだったが、そこを更に彼女に押されてユーフォリアごと湖へと落ちてしまう。

「ぶはッ!?お前、何を－－」
「いいから、動かないで」

…思いの外浅い湖は、直立すれば太股位の水深しか無い。
水底は砂なので怪我こそ無いが、尻餅を付く姿勢でのしかかられて身動きを封じられ、背けて捩った顔も両手で向かい合わされて－－

蒼い虹彩［アイリス］に映る、自分の表情まで見える距離に。

「ユー…フォリア？」

酔いなど一気に醒め、別種の熱が身を包む。鼻先が触れる程の至近距離にユーフォリアの顔が近付き…額同士がくっつけられた。

そして祈りを捧げるように、彼の両手を包み込み胸の前で手を組む。目を閉じると、彼女はすうっと息を吸い込んだ。

”――暖かく、清らかな…母なる再生の光…”

「――…」

…紡がれるは唄声。美しい調べに乗せられた賛美歌。

”すべては剣より生まれ、マナへと帰る。どんな暗い道を歩むとしても、精霊光が私たちの足元を照らす”

『歩み続ける事を諦めるな』と。夜に怯える子への子守唄、生きる事を肯定する祈り詠［ウタ］。

”清らかな水、暖かな大地、命の炎、闇夜を照らす月…すべてが私たちを導きますよう”

頭ではなく、心に染み入る韻律。耳ではなく、魂を震わせる旋律。雑音など消え果てた、ただ清音。

風すら止み、鏡の如く凪いだ湖に映る星天は、まるで星の海。その中に在って詠［ウタ］唄うは、水の妖精のような少女。

”すべては再生の剣より生まれ、マナへと帰る。マナが私たちを導きますよう…”

唄い終え、閉じられた唇の代わりに瞼が開く。静謐のように深い、深い瞳の色。

「…佳い唄だな。何て唄だ?」

「題名は判らないけど、ママの生まれた世界の唄。よくパパとママに、子守唄で唄ってもらったから覚えてるの」

アキが浮かべたのは…笑顔。それを彼女はしっかりと見詰め、もう一度口を開く。

「…諦めないで歩き続けて。まだ途中じゃない。今はどれだけ辛くても、きっと…希望の光は見えるから」

「……」

…いつもより、幾分大人びた笑顔。普段が快活な大輪の向日葵なら、今は静謐の月夜に咲いた待宵草［マツヨイグサ］の華。

「…生意気言いやがって…」

「『家族相手にしゃちほこばるな、もっと我を出せ』って言ったのは空さんだもん」

「違いねぇな、ッたく」

ずぶ濡れのまま、アキは仏頂面に戻る。それを見て、彼女もいつもの向日葵の笑顔を見せた。

互いに『いつも通り』に戻った、その二人。

「…お二人とも、そんな所で何をしておられるのですか?」

「「……」」

何時からそこに居たのか、二人に向けて奥の院の縁側に立つ犬耳の巫女が、ジト目を向けながら問い掛けた。

「いや、ちょっと一泳ぎしようかな～と！」

「そうそう、ちょっぴり水浴びでもしようかなって思って！」

一瞬で離れたアキとユーフォリアは、それぞれ背泳ぎと平泳ぎして誤魔化そうとする。しかし、巫女の視線は冷たいままだ。

「そうですね、私には関係の無い事です。ご当主様がお呼びですが、どうぞお二人でしっぽりとお楽しみ下さいませ」

「「しっぽり！？！」」

そのまま、ずんずんと歩いていく犬耳巫女。アキとユーフォリアは、急いで縁側に上がり彼女を追い掛けたのだった……。

障子を開くと、正座して上座に座る環と時深の姿。

伏せていた顔を上げ、三人を改め…困ったような顔を見せる。

「…遅かったですね…と言うか、何でずぶ濡れなんです？」

「水練をなさっていたそうです」

濡れ鼠の二人が一緒に下座に正座する。巫女は一礼し、部屋に入らないまま障子を閉めた。

残された四人の間に沈黙が流れる。黙って瞑想でもしているかのよ

うな環と時深に、そんな二人の深意を探ろうとするアキとユーフォリア。

「――ックショイ！」
「――っくしゅん！」

…が、同時に盛大なくしゃみを放つ。身を震わせるところまで同時だった。

「…仲が良いですね。まるで本当に姉弟［きょうだい］のよう」
「まぁ…確かに妹みたいなモノですけどね」
「妹？姉ではなくて？」

ズビッと鼻水を啜り、何となしに言った言葉。だが環は、不思議そうに聞き返す。

「その娘は、別の時間樹で育った存在な上にエターナルですから。貴方より年上ですよ？」
「……」

環の言葉に、アキは右隣りの少女を見遣る。彼女はバツの悪そうな表情を見せた。
その瞬間、パンと乾いた音を立て時深の時遡の扇が閉じられた。

「そんな事より、天つ空風のアキ…貴方に問います。貴方の剣は…誰が為のモノか」

それが試す為の言葉だと言う事は、直ぐに判る。だからこそ、アキは…ありのままを答える。

「ーー俺の為です。俺が手に入れたのは、俺の『願い』を叶える為…それだけのモノです」

…再度、沈黙が部屋を支配した。驚いた顔をした環とユーフォリア、鋭く睨み合う時深とアキ。

今この状況で戦闘に発展すれば、彼には闘い様が無いというのに。

「ーーあー、良く寝たわ～。環、御飯用意してよ～…っていうか、やけに騒がしかったじゃないの。安眠妨害よ全く…寝不足は美容の大敵なんだから」

「「「「……」」」」

その時、奥の襖が開き一人の少女が現れた。場の空気を完膚無きまでにぶち壊して。

長い黒髪と袖を靡かせて、着物を改造した露出の多い服を身に纏う娘。寝起きらしく不機嫌そうな、横柄な物言い。

「ーー莫迦な…何で…お前が…！何でお前がこんな所に居るんだよ、ナルカナァァァッ！？！」

それに、一番反応したのはアキだった。ザッと立ち上がると、それはもう『前世はザリガニだった』と言っても信じられる後ろ跳びで距離を取り、ビシリと指差す。

最初は胡乱げな目で彼を見ていた少女だったが、やがて何かを考え込むように目を閉じた。

「…あんた……」

…余りにも烈しいアキの反応に、残り三人は呆気に取られている。

だからその一言は、とてもクリアに響いたのだった。

「……誰だっけ?」

…その、心底からの問い掛けが。

「あー、あと…汝、磔刑に処す。原罪の裁きを受けなさい」

そして少女は気を取り直したように直立すると一一くるりと一回転しながら腕を振った。

「一一あべぇぇし!?!」

瞬間、熾天使の扇『フラベルム』がアキの躯を弾き飛ばして障子を突き破り、彼は再度湖の中に叩き込まれた。

「…『ナルカナ”様”』でしょう?多寡が宮司の分際であたしを呼び捨てるなんて良い度胸じゃない」

薄れ行く意識の中で、彼が最後に見たモノ。仁王立ちしてアキを見下ろす、彼の前世が最も恐れた神『ナルカナ』の姿だった一一…

The 76th Name…"出逢うモノ"

森閑に響く、鎚や鋸の音。複数の場所から聞こえるその音は、破壊された社を修復している音色だ。

「材木上がりましたー！！今持って行きまーす！」

呼び掛けた先には、屋根瓦や壁の漆喰を塗り直している最中の防衛人形［マモリヒトガタ］達の姿。今アキは山麓の社の修繕を手伝っている。

借り物である宮司の装束の上着を開けて未だ包帯の巻かれた筋肉質の躯を曝して頭に手拭いを巻いた姿で、鉋掛けを終えた木材を数本纏めて肩に担ぎ上げた。

そんな彼に防衛人形の一人…以前戦った黒髪の巫女が応対する。

「申し訳ありません。客人の上に怪我人の巽様の御手を煩わせてしまって…」

「構いませんよ。というか、この状況じゃ手伝わなきゃ気が済みませんって」

昔取った、何とやら。払いの良い土建のバイトを中心に熟していた経験からか、妙に似合う姿だ。

「やはり、殿方がいらっしゃると違いますね。他の社や守はまだ五分の二程度しか進んでいないそうですよ」

「役に立てたなら嬉しいですね、元々…俺が招いた災厄ですから」

――あの戦いから既に三日過ぎた。戦いの傷は著しく、美しい景観

だった出雲は復興までに数ヵ月はかかるとの事。
それに、人的被害の方が甚大だ。巫女も三分の一が死亡したとの事。
供養する骸すら無い、ただ華を手向けるだけの葬儀が昨日行われたばかりだ。

「…それは、違います。生命には、それぞれ為すべき役目と滅び…定命［さだめ］が有ります。彼女達はあの日あの時滅びる事が、この神剣宇宙の原初から定められていたのです」

…その時、背後から声が掛かる。歩みを止めて振り返れば――銀髪の犬耳巫女。怜悧な印象そのままの冷たい台詞…しかし、根底には不思議な温度を感じた。

「巽様、お連れ様が意識を取り戻されました。至急お戻り下さい」
「あ、おい、ちょっ…」

そして、アキが口を開こうとした瞬間に彼女は踵を返してずんずん歩いて行く。
彼女が言った『連れ』とは勿論、戦いの後に昏睡したアイオネアだ。
彼が修繕を手伝っている間は、ユーフォリアが付きっ切りで看病してくれていた。

「うふふ、巽様。早く追い掛けてあげて下さいな。後は私共だけで大丈夫ですから」
「…了解。でも、それならあの娘の名前くらい教えて下さいよ」

――何度か顔を合わせはしたが、彼女は何故か俺に対してやたらと冷たい。俺は何か、彼女を怒らせるような事でもしたんだろうか？
…でも、どっかで見た事有る気もするんだよなぁ…

左の親指を眉間に当てて思い悩むも、笊で水を掬うように取り留めも無い。知り合いの中には、猫耳の大統領しか居なかった筈だと。

「殿方なら、御自分の魅力で聞き出すべきでしょう？」

「うっへぇ、俺に一番足りてないモンですよソレ」

材木を受け取り、巫女は頭の天辺から爪先までを改めて意味ありげに笑う。

居心地が悪くなった彼は足速に、ふさふさと尻尾を揺らし歩き行く犬耳巫女を追ったのだった。

…追い付いて隣を歩く。会話など無く、ただ黙々と。まるで葬列のようだ。

「…アイの具合、良さそうでしたか？」

「芳しくはありませんが、安定はしています」

「そうですか…」

なんとか声を掛ける。しかし続かない。とつとつと歩き続けるだけだ。

一一…やべぇ、心が折れそうだ。頑張れ俺、負けるなファイト。

「すみませんね、お手数掛けて。えーっと？」

そこで、上手く名前を聞き出そうとする。ナンパでもしているような変な気分になり、頭を掻き毟り鬱蒼とした森の中に消えてしまいたくなりながら。

「あ、此処に居た…ちょっとー、このあたしを歩かせるなんてどう

いう了見してるのよ」

…結局、森の中から出て来たナルカナに邪魔された。

「何かご用でしょうか、ナルカナ様。今私は忙しいのですが」

「ああ、用が有るのはコイツの方よ。あんたは行って良し」

ピッと指差したのは、壮絶に嫌な予感を感じて鳥肌を立たせたアキ。

彼女と再会［であ］ってから既に二日、神世の再演のように理不尽な小間使いの数々をさせられた。

…しかも、少しでも粗相をすれば問答無用で彼女の名に列なる全てを持っての仕置きが待っている。

「いえ、巽様をお連れするのが私の仕事なのですが」

巫女は表情こそ出していないが、困ったような声を出した。

「あっそう、じゃあすぐに済ますから待ってなさい」

「…はぁ、またオーラですか」

そう諦めたように呟いて、巫女は『待つ』姿勢を決め込んだ。

そしてナルカナは、ちょっとしたお使いでも頼むように気軽に口を開く。

「望達をこの世界に呼び寄せたから、迎えに行ってちょうだい」

「……は？」

「だからー、望達『旅団』をこの世界に呼んだから、疑われにくい仲間のアンタが迎えに行ってよ」

余りにあっさりと言われてしまい、彼は聞き返す。ナルカナは説明

するのが面倒臭いらしく、溜息を付いた。

「――無事か、あいつらは…無事なんだな！」

「ちょっ…痛いじゃない！」

詰め寄ってその華奢な肩を掴み、アキは語勢を強めて問うた。一瞬驚いたナルカナだったが、直ぐに不愉快そうにその手を払い退けて腕を組んだ。

「ええ、理想幹に突入したけど…少なくとも、誰も『死んで』ないわね」

そして、僅かに愁いの篭った言葉を漏らした。だがアキはただ、家族が無事だった事に安堵してその深意に気付かない。

「はぁ、そりゃあ別に良いけど」

普段ならば必ず突っ込むであろう『理想幹』のキーワードも、聞き逃していた。

「よしよし、聞き分けが良いわね。御褒美にナルカナステッカーをあげよう」

「要らねーよ、そんなモン…いえ、超嬉しいなぁ受け取りますから『エクスカリバー』は勘弁してください」

手渡されたステッカーを受け取り、げんなりと懐に納める――と、ステッカーの下に折り畳まれた紙が有る事に気付いた。

開いて見れば――

「…ポテトチップにポップコーン、コーラ…何だよ、このメモ帳の

切れ端は」
「ん？どうせ街に降りるんだから、買って来て欲しいものよ」
平然と、さも当然のように。彼女は腰に手を当ててからりと笑う。
逆らうだけ時間の無駄だと、彼はそれも懐に納めた。
「判った、買ってくるから。ん」
「…何よ、この手は？」
そして、手の平を差し出す。それを見て、ナルカナは不思議そうに首を傾げた。
「金だ、金くれよ」
そう言った瞬間、ナルカナは一一彼にずいっと近寄り。ニッコリと笑顔を見せた。
暫し見つめ合う二人。片方はこの上無い笑顔で、もう片方はこの下無いジト目で。
「あんたは果報者よ。超絶美少女ナルカナ様の笑顔を一瞬、この世で独り占め出来たんだから。じゃ、浄財に励みなさい」
そして、笑顔を止めたナルカナが口を開く。
「浄財は仏教だろ堕神が」
「…あんたの意識、生命、世界…全部終わるわ。今この瞬間にね！終末の剣一一『レーヴァテイン』！」
一振りで地平線までを焼き尽くすと言う、巨人の王の炎の魔剣。
それが森閑に響く、鎚や鋸の音。破壊された社を修復している音色

を掻き消す程の破砕音を轟かせ、枝で囀っていた小鳥達が驚き飛び去って行った……

障子を開くと、巫女服姿のユーフォリアが振り返った。そして彼の姿を見て不審げに眉根を寄せる。

「んもう、遅いよ空さん…って、どうしてボロボロなの？」

「…災害に巻き込まれてな」

その向こうの蒲団の中で起きて、聖盃の澄んだ靈氣［アイテール］を口に含んでいる肌襦袢姿のアイ。目が覚めたばかりだからかどうかは解らないが、血色は良くない。心なしか花冠も萎れているような気もする。

「アイ…具合は良いか？」

「アキ様…はい、もう大丈夫です。御迷惑を掛けてしまって…」

「…莫迦、迷惑な訳が有るかよ。お前と俺は一蓮托生なんだから」

恐縮する彼女の脇に胡坐をかくと、その滄い髪に手櫛を通すように優しく撫でる。

引っ掛かる事無く、まるで流水に触れているように更々流れる髪。心なしか冷たく、力仕事と理不尽な暴力で傷付き汗をかいた彼には心地好い。

「はい…あっ、んんぅ…アキ様…くすぐったいです」

「ああ、悪い悪い…」

ごく小さな龍角を根元からなぞり上げたのが余程くすぐったかったのか、ほんのりと頬や首筋に朱が差したアイは躯をよじる。
そんな姿に、似合わない事をしたとアキは苦笑して手を引っ込めた——と同時に、右側から蒼い髪の頭がずいっと突き出された。

「…えっと、何？」
「むー、あたしだって頑張ったのに褒められてないもん。アイちゃんばっかりずるい」

心底訳の判らなそうな彼に、ピコピコと頭の白い羽根を揺らしながら、彼女はカタチの整った丸い頭を突き出す。
苦笑いしながらアキはその頭に手を伸ばして——

「それ」
「あいたっ！？またぶった～！パパにも打たれた事無いのに～っ」

またもやデコぴんで叩く。中指で打たれて赤くなった額を抑えて、彼女は恨めしげな眼差しをアキへと向けた。

「それより朗報だ。皆がこの世界に来てるらしい」
「えっ…皆が！無事なの！？」

今度は己が肩を掴まれる番だった。その掌をぽんぽんと叩いて安心させる。

「無事らしい。てか、あいつらが簡単にくたばる訳ねェだろ？」
「よかったぁ…」
「俺は迎えに行って来る、お前達はどうする？」

安堵からの溜息と共に、うっすらと涙ぐむユーフォリア。その手を

優しく解いてアキは立ち上がる。

「はい、行きたいです…アキ様とゆーちゃんの大切な方々なら、私にとっても大切な方々ですから」

「勿論、あたしも行くけど…アイちゃん、無理してない？」

「うん、大丈夫…心配しないで、ゆーちゃん」

立ち上がろうとするアイオネアを支えるユーフォリア。似た髪色と相俟って、仲の良い双子のように見える。

微笑ましくそれを見ていたアキだったが、ユーフォリアにジト目で見られている事に気付く。

「…空さん。あたし達、お着替えしたいんだけど…」

「…そうだな、俺も着替えてぇ。じゃあ、着替えたら出雲開門で」

…自分の黒焦げた服装を改めて、別の服を貸して貰う為に部屋を後にしたのだった。

The 76th Name ?・・・"出逢うモノ?"

出雲開門の大鳥居に背を預けて、新たに貸して貰った宮司の装束に下駄を履き、袖内で手を組むアキ。既に二十分近く、こうして待ち呆けを食らわされている。

「遅っせーな…着替えるだけに、どんだけ時間掛けてんだよ」

苛々と癖毛の頭を掻いて、袖内の厚い封筒を玩ぶ。取り出して封を切れば、中には十万円。

――環さんに装束を借りた時に、この三日で働いた分の報酬＋ナルカナ保険の支払い金だ。初日に加入していたので今日の奴で降りたんだぜ…

今だに焦げ臭い身体の疼くような痛みを感じながら、アキは情報を反芻する。

――…この世界は、元々の世界の近似世界らしい。見た目は殆ど変わり無いが、細部…代替など無い『人間』だけは完全に別人で構成されているという。
最初に感じた違和感…神社の名称が『天木』と『神木』と、違っていたように。

「空さーん」
「お、お待たせしました…」
「いや、マジで大分待っ…」

と、そこに二人が到着した。物部学園の指定制服と制靴に身を包ん

だ二人が。

「ユーフォリア、お前…制服二着なんて何処に持ってたんだ？」
「え？ああ、これはアイちゃんの根源力で創った物なの。空さんも創ればいいのに」
「…俺も物部学園の制服に着替えて来る。少し待っててくれな」

…言われて気付く。今の自分は、根源力で錬成具を創れる。ならばこの世の万物を生み出す事が可能だ、制服を作る程度はたやすい事だろうと。

「…ああ、あとお前ら…やっぱり羽根と花冠は目立ちすぎるぞ」
「「ううっ」」

そうして、制服姿の三人は開門の側に穿たれている回廊…神木神社まで繋がる門に足を踏み入れた。

『ありがとうございましたー』の言葉と好奇の視線を背に受けて、コンビニエンスストアを後にする。これでナルカナに頼まれた仕事の半分は熟した。

「甘かったな…」

先ずアキはそれを口にした。そう、そもそも前提が間違っていた。幾らこの世界に来ているとはいえ、世界は広い。当たり前だが。その時、菓子を買って貰い上機嫌で前を歩くユーフォリアが振り向いた。

「何でも売ってる『こんにび』って便利だよね、アイちゃん」
「うん、『こんにび』…」
「『コンビニ』な…」

彼等が歩くのは市街、時刻は十時過ぎなので人通りはそこまでは無い。
しかし、この時間帯に制服姿でうろつき回るのは危険だった。補導されかねない。

「……」

しかも、擦れ違う相手は男女関係なく振り返る。それはそうだ、青い髪の美少女二人が好奇心丸出しにして周囲を観察しているのだから。

――やべェな、目立ちまくってる。さっさとものべーを見付けないと精神的疲労［フォースダメージ］が限界…つーか出無精［ナルカナ］め、何処に居るかくらい教えとけ&教えろッてんだ。

本人に聞かれたら速攻でマナへと還されそうな悪態を心の中で吐く。
それにやはり疲れるのかポテチ等が入った袋を持つアキと左手を繋いだアイが、慌てたような顔を見せた。

――…ナルカナ、か。俺は今までずっとルプトナがナルカナの転生体だと思ってた。しかしナルカナは神世からずっと生き続けているらしい。
…だとしたら、ルプトナは何者だ?それにナルカナは何者なんだよ?全然判らねェ…

「空さん、どうしたの？」
「ん？ああ…いや、何でも無い。皆を探そうぜ」
クイッと右腕を引かれて気を取り直し、不思議そうに見上げる彼女に告げる。まだ日は高い、一日は一一始まったばかりだった。

午後三時過ぎ、市内を随分と歩き回ったが一向に見付からない。三人は街角の、小さくも小洒落た喫茶店で今後の方針について検討していた。

「やっぱり、目印も無しに探すのは無理だな。流石ものべー、隠蔽性能も半端じゃねェぜ…敵の苦労をこんな形で実感できるとは」
「ゆーくんも何も感じないって。神剣は発動しないと感知出来ないから…」
「ごめんなさい…私が本調子なら探し出せたかもしれないのに…」
…テーブルの上にはアイス珈琲とカフェオーレとミルクティーに、ベーコンとレタスに鶏のササミとチーズを挟むクラブハウスサンドが置かれている。
だが、手を付けているのはアキとユーフォリアだけ。

「アイ、遠慮しないで食え。歩き回って腹空いたろ？」
「そうだよ、アイちゃん。しっかり食べないと元気が出ないんだから」
「お腹…？」
不思議そうに呟き、掌の中程まである袖に通した掌で、彼女は自分

の腹部を撫でる。
そしてその意味を悟って、困った顔で笑った。

「…いえ、私はお腹が空いた事はありません。『空』が私の『満』ですから」

そこで、アキは自分の口に運ぼうとしていたサンドを見遣る。
言われて気付いたが、彼とて腹が減って食おうと思った訳ではない。
喫茶店に入ったから、休憩がてら何と無くだ。思い返せば朝食も昼食も摂っていない。
それでも平然と働いていたのだ、空腹など感じずに。ずっとずっと、恐らくは一一永遠にでも。

一一そんなところまで、ニンゲンじゃ無くなったか…

苦笑して、口に放り込む。最早、ただ味を楽しむだけになった食事を。
いつしか、それすらも気にならなくなるのだろうと。まだ色付いている世界を噛み締めるように。

「一一あらあら、お腹が空かないなんて羨ましいわ」

そこに、話し掛けてきた一人の女。隣の席で、信じられない量の食事を摂っている紅い髪の美女。

「一一…っ!?」
「あ、すいません。大声出して、ご迷惑でしたか」
「ごめんなさい…」

それを見た瞬間に、ユーフォリアの表情が凍り付く。しかしアキと

アイは、横を向いている為に気が付かない。

「いいえ、怒っている訳じゃないのよ。ただ本当に羨ましいだけ。私なんて、どんなに食べてもお腹が満たされないんのよ？本当に、羨ましいわ」

…くすりと妖艶な笑顔を見せる、露出が多めな服装のその女。アキは前にも彼女を見たような、不可思議なデジャヴュに頚を捻る。

「一一空さんっ！休憩は終わり、もう出ましょう！」

「っつぁ、ちょっと待てユーフォリア！無銭飲食になるッ！！店員さーん、お勘定ー！！」

ぐいぐい引っ張るユーフォリアに逆らえず、アキとアイは店を出て行った。

「おい、どうしたユーフォリア？何かあったのか？」

ほとんど走る勢いで引っ張る彼女に問い掛ける。ユーフォリアは、周囲を念入りに確認して漸く立ち止まった。

「…もしかして…ううん、きっとそう。イャガはロウ＝エターナル…あの人が空さんをロウに…」

「ゆーちゃん…？」

「そんな事させない…絶対に！」

…不安そうに、思い詰めるようにそんな事を呟く。そして、繋いでいる二つの手をぎゅっと強く握り締めた……

一方、三人が残したクラブハウスサンドと飲み物。それを見詰めて

…紅髪の女『最後の聖母イャガ』の分体の一ツは。

「残しちゃうなんて勿体ないわ、私が食べちゃうわね」

そう呟き、何も入っていない口を動かす。まるで何かを噛むような動作。

「うふふ、美味しかったわ。でも一一ちっとも足りない」

…その瞬間、テーブルに残されていた全ての食事が『消え』失せた。まるで一一時深と戦って敗れたイャガの分体のように。

…結局、何の成果も無くアキ達は神木神社へと戻ってきた。途中のあの喫茶店からユーフォリアが妙に落ち込んでしまい、捜索どころの騒ぎで無くなったのもあるが。

「コーラ、すっかり温くなっちまった。こりゃ『クラウ・ソラス』くらいは覚悟しとかないといけねェな」

石段の途中で二リットルのペットボトルが入った袋を揺らしておどける。だが、ユーフォリアは相変わらず沈んだ表情のまま。

「空さん…私は空さんにカオス＝エターナルの一一」

「一一空、ユーフィー!!?」

…漸く決然と顔を上げた、その背後から聞こえた声。駆け寄る音と、目に映る茶髪碧瞳の少年は。

「一一望うぉっ！！」
「一一望さんひゃっ！！」

石段を数段飛ばしで駆け上がってきた望が、二人を纏めて抱き寄せた。

「良かった…無事だったんだな。心配させるなよ…」
「…悪い。此方も立て込んでな」
「あう、ごめんなさい望さん…」

最初こそ驚き真っ赤になった二人だったが、すぐ表情を綻ばせる。
そして、石段を上って来た三人がそんな彼らを見遣る。

「…あれ？ねぇ佳織、もしかしてあの時のコスプレイヤーのお兄さん達じゃない？」
「ちょ、小鳥…その言い方は失礼だよぅ」
「……」

アキ達がこの世界に来た時に出会った二人の少女、そして希美だ。
因みに、完全に置いてきぼりを喰らっているアイは終始困り続けていた。

「そうだ、望。お前…ナルカナに呼ばれたんだろ？奴さん頚を長くしてお待ちだぜ」
「そっか、知ってたのか…で、何処に行けば会えるんだ？」

溜息混じりに告げた彼に、望は驚いた顔をした。しかしナルカナの読み通りに不審を抱かない。

「取り敢えず、詳しい話は明日な。俺達が戻ってお膳立てをしとくから、旅団の皆と用意を整えて来てくれ」
「判った、じゃあまた。あ、あと…ソルとルプトナには気を付けろよ、空？」

意味深な言葉を残して去っていく四人の姿を見送った。そんな中、ふとユーフォリアが呟く。

「空さん…希美ちゃん、なんだか様子がおかしくなかった？」
「え？ああ…妙に静かだったな」

アキはそれだけを返す。そして、何となしに不安を感じる。

――まさか、な…望が付いてたんだ、そんな筈は無い。

見詰めた先に在る、無機質な表情の希美。その思い当たる表情に、彼が抱く不安を押し隠すように。

「――さてさて、戻ろうぜ。これ以上時間を掛けたら、ナルカナに消し飛ばされちまう」

二ツの袋を担ぎ上げて、門までの道程を歩き始めた……

The 77th Name…"追憶"

まだ朝陽が地平の上に向けてしか射していない明け方の出雲。アキは湖畔のトネリコの根本で日課の鍛錬を行っていた。

――方法は単純、瞑想だ。事象を想像して創造するだけ。この世に満ちる生命の根源『マナ』を己が意に沿うカタチに改変し――…

「――我が喚び声に応え、来い！【比翼】ッ！！【連理】ッ！！」

クロスした両手から虚空に波紋を刻み、彼の創造した幻想…紅金のデザートイーグルと蒼金のコルトパイソンが具象化する――！！！

…パァァンと、森に響く破裂音。またも驚かされた鳥が飛び去って行った。

「…痛ッてェェェッ！？！」

霜焼けただけの左腕はともかく、火傷した右腕を湖に浸してアキは溜息を吐く。暫く水中で掌を開閉しようと力を篭めてみたが、完全に痺れてしまっている手は言う事を聞かなかった。

結局は失敗してしまい、具象化が暴走した。加速度的に進む物質化に現実世界が耐え切れなかったのだろう、現実を侵すモノを壊す事で世界が均衡を保ったのだ。世界の自浄作用という奴だ。

…因みに、この前に創ろうとしたＣＺ－７５の【天涯】とベレッタＭ９２Ｆの【地角】にトーラス＝レイジングブルの【海内】、難関であるＰＤＷのＦＮ－Ｐ９０も、再現に失敗して爆発した。

「クソッタレ、しっかし頑丈だねマナの躯は…人間の躯のままなら腕くらい吹き飛んでたぜ…」

彼の契約した存在は『生命』だ。詰まりは、常時発動している事になる。故にどんな状況下でも彼は加護を得ているのだが…やはり、チカラの本体であるアイオネアが居なければ再生までは出来ない。

――『威霊の錬成具』は、意外と簡単に出来たんだけど…やっぱり武器は難しい……いや、剣とか刀なんかの単純なモノなら幾らでも出来るんだが…結局ソレは紛い物、本物の永遠神剣とは比べモノにならない。直接打ち合えば負けるだろう。

…だからやはり、神銃士は神銃士らしく遣うべきは銃。打ち合って負けるなら、撃ち合って勝つ。

周囲にはミニオンの西洋剣や槍、双刃剣に刀、杖…他には斧やハルバード、メイスにグルカナイフ、シャムシールやカイトシールド、果てはフルプレートの鎧までもが無造作に転がされている。

機構を持たないモノなら、創る事は苦にもならない。

アキは左手に意識を集中させて、虚空に波紋を刻む。現れ出たのは超小型の、リンカーン大統領暗殺に使用されたと言われている物…フィラデルフィア＝デリンジャーだ。【無銘】は機構が単純な為か、案外あっさりと成功した。

「…不可能じゃない。部品も機構も全て記憶してる…後は、如何に精密に寸分の狂い無く再現出来るかだ。努力に勝る才能無し、さぁ特訓特訓！」

コンシールメントウェポンらしく【無銘】を懐に戻して、水中から引き抜いた掌は随分と感覚を取り戻している…と、破片で切ったの

か前腕に傷が合った。
しかし、後でアイに治して貰えば良いかと思い、無視して続ける。
樹の根本に置いてある銃の専門誌…昨日の捜索中に買ったモノに目を移した。

「朝からご精が出ますね、巽様」
「あ、こりゃどうも…」

そこにまたも、いつから居たのか犬耳の巫女が語りかけた。
因みにアイとユーフォリアは同室なので、起こす事も無いだろうと彼は声を掛けないままで出て来ている。

「明け方に騒がしくするのは余り感心しません。ナルカナ様が目を覚まされてしまいます」
「了解…静かにします」

…朝から『ストームブリンガー』でも食らわされては堪ったモノではないと、仕方なく套路に励む事にする。錬成具のガントレットやグリーヴを纏って、大気を揺らす程に強烈な拳打や蹴りを放つ。
これも根源力操作の応用だ。命中した対象の空間に在るマナを加速させて空間にヒビを入れ、オーラフォトンで破壊力を増す技。

「……」
「えっと…何か用事ですか?また環さんか時深さんか、ナルカナが呼んでるとか」

それを、何をするでも無く巫女はただ見詰めている。視線を感じ、集中が乱された事を理解して止め、巫女に問い掛けた。

「いえ、別に用事はございません。ただ…」

巫女はすっと彼の側に寄ると、腕を取る。怪我している右掌を。血は止まっているが、動かせばピリピリと傷口が疼く。

「こういうものを見過ごすのが、性に合わないだけです」

そして懐から二枚貝に入った軟膏を塗り込んでいく。更に油紙を傷に宛てると、清潔な布を巻いた。

「…どんなに小さな傷でも、甘く見ないで下さい。強い回復能力を持つ神剣士は己の躯を盾にしようとしますが…それは、ただの独善ですよ。御自愛下さいませ」

…慣れた手つきで治療を終えて、巫女はいつも通りにクールな言葉を投げ掛ける。
そんな犬耳が揺れる頭に一一ぽん、と。アキは左手を置いた。

「…有難うな、綺羅…」
「一一…」

そこで、巫女の…綺羅のポーカーフェイスが破られた。上げられた顔は驚き、そして直ぐに。

「…もう、気付いてくださらないものだとばかり…」

優しく頭を撫でる彼の掌を感じ、目を細めて嬉しそうに鼻を鳴らす綺羅。彼女らしく、控え目にふさふさとした尻尾を振る。

「まぁ、俺もたった今気付いた所だけど…教えてくれても良いだろ、最後まで気付かなかったらどうするんだよ」

「そのまま何も。そこまでだったのだと…永遠に黙っているつもりでした。時深様の言い付けを破り貴方を…この一連の出来事に巻き込んでしまったのは私の独善でしたから…」

…強い責任を感じているらしく、俯きながら呟く。この旅が始まる直前、彼を助けた彼女。もしそれがなければ彼は大怪我していたか死んでいたか、どちらにせよ学園祭の準備には参加出来なかった。この旅には加われなかった筈だ。

それを彼女の主君は望んでいた。彼が永遠神剣の契約者とならない事を。

「…いや、感謝してるさ。綺羅が助けてくれなきゃ、俺は…ただの糞餓鬼のまんまだったしな」

大きな犬耳の間から耳の後ろを、くすぐるように撫でる。彼にしては珍しく、撫でる事への抵抗は薄い。狗の姿をしていた頃の名残だろうか。

「もう一度言う。有難うな、綺羅…俺に…掛け替えの無い可能性をくれて…」

「巽様…」

うっすらと涙ぐみ見上げてくる、ルビーのように煌めく深紅の瞳。それにありったけの感謝を篭めて、頭を撫でた。

――そういえば、昔は…狗の綺羅よりも背が低かったんだよな…

幼少の砌［みぎり］、時深の特訓で扱かれていた時も彼女…狗の綺羅は、あんな風に見ていた事を思い出しながら。

一一時深さんに綺羅、望に希美、会長に暁、信助に美里に椿先生。
ミゥさんにルゥさん、ゼゥにワゥにポゥ。
姫さんにクロムウェイさん、ソルにタリアさん、ダラバ＝ウーザにレストアス。ルプトナに姐さん、ネコさんにクウォークス代表に、ユーフォリア。
スバルさんにショウ、環さん……カラ銃と鈴鳴、アイオネア。
…独りのチカラでは、間違いなく辿り着けなかった。俺は大勢の人に助けられて漸く、此処に立っていられるんだな…

己の思い出に面映ゆくなり、ふとトネリコの樹の方を見れば。

「「「……（じー）」」」

…トネリコの樹の影から見詰める瞳を見た。

「何だか良い雰囲気になっちゃってて出て行きにくいです…それにしたって空さんったら、あたしは撫でてくれないのに…」
「綺羅を懐柔するなんて、巽の奴やるわね…あれが時深が言ってた光源氏作戦?!（※違います）」
「…あの、ゆーちゃん、ナルカナさん…アキ様とキラさんがこっちを睨んでます…」

一番上には黒髪と黒い瞳、真中は蒼髪と蒼い瞳、一番下は滄い髪と金銀の異色瞳と……

…巨大な影が出雲を覆う。敵ではない、たった数日ぶりだが物凄く

久しぶりな気がするものべーだ。

「大きい…下から見てると、空が墜ちてくるみたい」
「うん…もし潰されたらって思うと怖くなっちゃうよね」

その威容に圧倒されるアイオネアと、それに応えるユーフォリア。
アキ達はその到着に際し、応対に綺羅と共に出ている。
勿論、ナルカナは居ない。四人に旅団を迎えに行くように告げて、
『或る事』を説明してさっさと奥の院に戻って行った。

「…ハァ……」
「どうなされましたか、巽様？」
「いや…何でもない」

いきなり溜息を落としたアキに、綺羅が問うた。とは言え、彼女も
事情は理解している為に労るような声。

――ナルカナから聞いた限りでは、望達は枯れた世界で暁を仲間に
加えたそうだ。しかし、その後に現れた『理想幹神』を名乗る二柱
の神性…神世では俺も嵌められた『欲望の神』”エトル＝ガバナ”、
『伝承の神』”エデガ＝エンプル”によって希美の『相剋の神名』
が覚醒させられた。それにより『救世と断罪の女神』”ファイム＝
ナルス”が目覚めて、彼らの手中に堕ちた。

…それから、希美を取り戻す為に中心世界『理想幹』に突入して、
到達までは上手く運んだ。だが、『ログ領域』という時間樹全体の
情報を記録する空間に逃げ込まれ、そこから希美を奪還する為に斑
鳩会長が行方不明に。
そして理想幹脱出の際に『ナル』…マナを浸蝕する『楯のチカラ』
とか言うモノが漏れだして、それを抑える為にクウォークス代表も

行方不明になったとの事。

「…ナルカナ様も意地の悪い事をお考えになられます。このような状況で異様と彼らを……」

「…こら、聞かれたら大事だぞ…それにな、俺にとってもマイナスばかりじゃない、やるだけの価値はある」

「くぅーん…」

苦笑しながら、アキは彼女の頭に手を置いた。眉を潜めていた綺羅だったが、それにより条件反射で尻尾を揺らしてしまう。

その時、強い地鳴りと風が吹く。ものべーが着陸したのだ。その後転送により旅団の神剣士達が現れ、その中から二人が飛び出した。

「「空ーーーーッっ!!」」

「ソル…ルプトナ…」

…先程も述べた通り、たった数日ぶりの再会。しかし彼には随分と久しぶりに感じられる。思わず、彼も駆け出してしまった。

そして一一ソルの前を滑っていたルプトナが低く姿勢を落として、『めくり』の要領でアキの背後に回り込む。

「…へっ?」

それに気を取られたアキは、眼前でL字に曲げられたソルの右腕を見逃した。

「「一一天誅ーーーー!!」」

繰り出されたのは、ラリアットとローリングソバット。寸分の狂いも無く、挟みこむようにアキの頸を打った。

「で、でめェら何処のエージビーだ！ぞじで俺ば尾の無い尾獣が！」
「ふーんだ、ボクらに心配かけた罰だいっ」
「全くだぜ、何も言わずに居なくなりやがってよぉ…そういえば、もう一人居たな」

片膝立てでえづきながら粗い息を吐くアキを見下ろしていたソルとルプトナは、直ぐに別の人物へとターゲットを変える。

「「ユーフィー…」」
「はうぅっ！？！」

その惨状を見て震え上がるユーフォリア。そのユーフォリアに二人は。

「…ッたく、心配かけやがって」
「本当だよ、全く…」
「あ…あぅ」

わしわしと荒っぽく頭を撫でられて、彼女は恐縮したような表情を見せた。

「…この扱いの差は何だよ畜生」

望が言っていたのはこの事かと、アキは悪態を吐く。その彼に。

「貴方達って、いつもこんな風に騒がしいのかしら？」
「全くだ…」

「ほっとけ……ッてエヴォリア、ベルバルザード?!何でお前ら!?」

気安く話し掛けた二人組。それに気安く応えたアキ。しかし直ぐに声の主に気付いて驚愕した……

The 78th Name…"老つの志"

『旅団』の管理神達との戦いと、『出雲』の南天神達とスールードとの戦いの経緯の説明が終わり、静まり返った奥の院。

和風で統一されている出雲の面々に対して、旅団員の恰好は各々の戦闘装束なのでいつも通り統率が取れていない。

…だが、その中に在って尚。特に目立つ二人組が居る。

「それでエヴォリア…あんたらの助けが有って理想幹の障壁を突破出来た、と」

「ええ、そうよ。ぶっつけ本番になったけど、内側と外側から全力の一撃をぶつけ合ってね」

アキの訝しむ視線を軽く受け流し、アラビア圏の踊り娘風の装束を纏う女…エヴォリアは腕輪型神剣【雷火】を鳴らしながら髪をかき上げた。

その隣では、紅い覆面とマントの偉丈夫…ベルバルザードが胡座をかいて、大薙刀型神剣【重圧】を磨いている。

「…助けられた手前、今は共闘って事になってるわ。理想幹神達を倒すまでの期限付きでね」

「仕方あるまい、わらわ達は寡兵。戦力は喉から手が出る程欲しいのじゃからな」

そんな二人に、絶対零度の視線を投げ掛けるタリアが口を開く。

それを、現旅団団長代理のナーヤが窘めた。

――確かにな…俺とユーフォリアが居なくなって会長と代表が行方

不明。そりゃあ藁にも縋るだろう…いや、あの頃の俺が戦力として扱われてたかは判んないけど。
しかし…今更だがすごい面子だな。正にイロモノ集団だ。

そんな不毛な考えを繰り広げた時、ふと目に映る一人の少女。硝子玉のような目をして、ただ人形のようにそこに『在る』だけの一一永峰希美が。

「……」

…その瞬間、神世の記憶が甦る。前世に焦がれた『浄慧の三日月』、ファイム＝ナルスの姿に。
ただ、現世の彼の胸に去来するのは虚しさ。空虚な風が吹き抜けるだけだった。

「ところで、巽…」
「…え？あ、何ですか姫さん？」

と、カティマの問い掛けに現実に引き戻される。彼女の瞳が見詰めていたのは…彼の左腕側に控えている滄の媛君。
因みに説明では『永遠神銃という神器を手に入れた』としか言っていない。

「見た事の無い方ですが、その娘は一体どなたでしょうか？」
「あ、それボクも聞こうと思ってたんだよねー」
「ずーっと寄り添ってるんだもんね？生半可なごまかしは効かないわよ、クー君？」

それに、ルプトナとヤツィータが興味津々に呼応する。残りのメンバーも同意見らしく彼らを見た。

一斉に自分に視線が集まった事を感じた彼女は決意したように立ち上がり、長い法衣の裾をちょんと摘んで少し持ち上げた良家の令嬢のようなお辞儀を行う。

「皆様におかれましては、御機嫌麗しゅう。私は天つ空風のアキと共に往きる者…永遠神銃【真如】が化身、アイオネアと申します。若輩者ですが、何卒宜しくお願い致します」

涼やかで透明な、風鈴の音色の様に良く通るソプラノの言霊。普段のオドオドした感じが消え、静謐の優雅さと清廉な気品を纏う。

『劫媛』の渾名に違わぬ、実に堂に入った所作。心なしか、部屋にマイナスイオンが発生した気すらする。

「昨日はアイちゃん、夜遅くまで練習してたんだよ。あたしたちの大切な家族だから、粗相があっちゃいけないって」

「そうか…全く、そんな事を気にする奴らでも無いのにな」

「そういうのとは違うの。空さん、女心を解ってないんだから…」

そんな様子を見ながら、アキヘとユーフォリアは種明かしをする。随分と頑張っているのだろう、品の佳い所作とは対照的に、頭から湯気を吹きそうな程に赤かった。

「これはどうも、ご丁寧に。私はカティマ＝アイギアス。永遠神剣第六位【心神】のカティマと申します」

「うむ、礼を尽くされたのならば礼を以って応えねばな。わらわはナーヤ＝トトカ・ナナフィ。永遠神剣第六位【無垢】のナーヤじゃ。宜しくのぅ」

…そしてこちらも、流石は姫君と大統領。他の皆が呆気に取られる中で、あっさりとお辞儀を返す。それに続き、すっと差し出された

カティマの掌。アイは直ぐに握手を求められている事に気付いて手を伸ばし――

「――あ」
「まぁ…」
「うぬっ？」

するっと、その掌が摺り抜けた。それには流石にカティマとナーヤも驚いたらしく、声を上げる。

「ご、ごめんなさいカティマさん…私は『空』そのものなので…」
「これはまた面妖な…まるでホログラムのようじゃな」

ナーヤが触れようとするも、結果は同じ。するっと空を掴むように摺り抜けてしまう。

「へぇ、なんだか面白そうだね。次はボク！ボクはルプトナ、永遠神剣第六位【揺籃】のルプトナっていうんだ」

次に手を伸ばしたのはルプトナ、その手は――

「あ…」
「あれ？なんだ、触れるじゃん」

…がっしりと、握手した。アイもルプトナも驚いて見詰め合った。今までの二人が触れられなかったその手と握り合う。

「じゃあ次、俺は世刻望だ。永遠神剣は第五位【黎明】、宜しくなアイオネア」
「そして吾は【黎明】が守護神獣レーメだ、宜しく頼むぞ」

「はい、こちらこそお願いしますノゾムさん、レーメさん」

続く望、その手は一一しっかりと触れ合った。

…そうして全員との挨拶を終えてみれば、彼女に触れる事が出来たのは今のところ望と絶、その守護神獣レーメとナナシ、ルプトナ。後は世話をしていた綺羅とユーフォリアと持ち主のアキ。アイ本人によれば、環とナルカナも触れるとの事。

「ふむ…一体どういう繋がりなのじゃろうな?うむむ…」

科学者として知識欲が疼くのか、ナーヤが頬りに頚を捻る。だが、それは持ち主であるアキ自身にも解らない事だった。

「…にしても、永遠神銃って実在してたんだね。ボクってばずっとアキの妄想の産物だとばかり思ってたよ」

「放っとけ莫迦野郎、しかも案外的を得てる。ある意味じゃ妄想の産物だしな…」

「ところで、『化身』とはなんでしょうか?我々の神獣とは違うのですか?」

「『化身』については、私が説明致しましょう。化身とは神剣そのものが別のカタチをとるモノの事です。因みに、ナルカナ様も化身にあらせられます…」

カティマの言葉に、環が応える。その声は、溢れんばかりの畏怖を湛えたもの。人知を越えた存在に対する驚異を唄う。

「神代に謳われる伝承…素戔嗚尊［スサノオノミコト］が討ちし八岐大蛇［ヤマタノオロチ］から現れ、倭建命［ヤマトタケルノミコト］が振るいし神剣『天叢雲剣［アメノムラクモノツルギ］』…そ

れこそ第一位永遠神剣【叢雲】にして、ナルカナ様なのです」

驚いたのは皆同じ。しかし、特に驚いたのは元々の世界…日本出身の者達だろう。まさか、自分達の国の伝承にそんな真実が隠されていたとは思いも寄るまい。

「…そのナルカナなら、希美を元に戻す方法を知ってるのかも知れないんですよね。どうしたら会えるんですか」

決然と声を上げたのは、望。環を見詰めて応えを待つ。

「…そのナルカナから、お前らに試練が課されてるんだよ」

「試練って…？」

「弱い奴らに興味は無いんだとよ。あの自己中［ナル］神剣」

だが、応えたのはアキ。心底面倒臭そうに耳をほじりながら、正座していた脚を崩し片膝を立てる。尚、自分が上手い事を言っていた事を知るのは、もう少し後の事。

「解った…それで、試練の内容は何なんだ？」

「なに、簡単な事だよ。お前が、ナルカナが指定した相手に勝てばそれで良い」

案外あっさりとした内容に、旅団は拍子抜けしたような顔を見せた。だからこそ、何でもないと言わんばかりに。アキもあっさりと告げる。

「用意しろ望、相手は俺だ。殺す気で行くからよ、お前らも殺す気で掛かって来い」

「……は？何言ってんだよ空！どうして”家族”同士で戦わなきゃ

いけないんだよ！」

『意味が解らない』と、望はアキに詰め寄ろうとする。
その望が彼に辿り着くよりも早く空間に波紋を刻み、神銃形態へと回帰したライフル剣銃【真如】をスピンローディングして一一その澄み渡る瑠璃［ラピス＝ラズリ］の波紋の刃紋が刻まれ続ける聖刃と、旋条［ライフリング］の刻まれた銃口を衝き付けた。

「…こんな機会はもう二度と無いだろうから、だ。望…俺はな…」

立ち止まった望と…その彼の背後の旅団員達に向けて、彼は高らかに宣言する。
自分が本気だという証明の為に、心の底から『笑顔』を浮かべて。

「…俺はずっと…ずっと、お前と闘ってみたかった。何も考えずに、真剣勝負でな！」

それは、純粋な侠［オトコ］としての壱志［イジ］だ。情けない話だが、自分の想い人に想われている男への当て擦り。
今までは決して敵わなかったその相手へと太刀［たち］向かえるだけのチカラを得たのならば一一己を試したくなるのは必然だろう。

「…安心しろ、どっちが勝っても希美は助けてくれるんだってよ。刻限は正午、場所はあの桟橋だ。待ってるぜ」

言うだけ言って、【真如】を肩に担いで歩き出す。準備の為に動き出した出雲の面々に取り残されたように、望や旅団は立ち尽くしていた……

…時は午前十時過ぎ。物部学園の屋上で、望は出雲の山並みを眺めていた。
当然、悩んでいるのだ。これから待つ戦闘に。枯れた世界では親友の絶と闘って何とか取り戻した。そして今回は幼馴染みか、と。

「…ノゾム、あと二時間で刻限だぞ…どうするのだ？」
「……」

少し高くなった朝日が、彼と彼の傍らから離れない希美…ファイムを照らしている。
彼とて、解っている。希美を救う為にはそれしか無いと。それに、今回は絶の時とは違う。アキが手を抜く事も考えられる……

「…それは、無いだろう。ノゾムとて解ってるだろう、あの天パは自分の言葉は絶対に守る奴だぞ。間違いなく、本気で来る」
「…だよな、やっぱり」

そして直ぐに、そんな甘い考えを捨てた。レーメの言う通り、彼が知っているその男は有言実行型。口にした事は壱志に掛けて守る。
…ならば、自分が手を抜いて負ければ良いのだろうか、と。そんな事を考え、深い溜息を落として。望が頭を掻き毟る。その時、屋上の扉が開いた。

「はふぅ…望さんに希美ちゃん。こんなところに居たんですか」
「ユーフィー、どうしたんだ？」

出て来たのは戦闘装束のユーフォリア。随分と捜していたらしく、肩で息をしている。

「お願いします、望さん！空さんと本気で闘ってください！！」

だが、息を整えるのもそこそこに彼女は望の前まで行くと一一ばっと頭を下げた。

「空さんは、きっと…自分が許せないんです。皆が大変な時に何も出来なかったから…」

「そんなの…空もユーフィーも、この世界で大変だったんだろ？」

望の言葉に彼女はふるふると頸を振る。顔を上げれば一一泣き出しそうになっていた。

「…それは問題じゃないんです。空さんは、”家族”が全てだから…その家族に危害が加えられたのに、何も出来なかった…居合わせる事も出来なかった自分が悔しくて…だから空さん…また笑って…」

先程、アキが見せた挑戦的な笑顔。その真意を、恐らくただ一人。読み違えずに解した為に。

そうでなければ、彼が笑いながら行動をする事はない。

「…だから、全力で倒してあげてください。空さんがあんな悲しい笑顔をしないで良いように。全力の空さんを、全力で…！」

「…いい子だな、ユーフィーは」

…そんな少女の頭を撫でながら、望は希美を見る。そして一一両手で己の頬をパシンと張った。

「一一任せろ、ユーフィー。俺は…空と全力で闘う！」

「ぐすっ…はい！！」

そしてビシリと向けられたサムズアップ。それに、ユーフォリアもサムズアップを返した……

奥の院側の桟橋の欄干に腰掛け、街に降りた際に買い溜めして湖で冷やした缶珈琲を啜りながらアキはその男を待っていた。
外套は既に脱ぎ去り、露になっている装備は今まで通り篭手と脚甲に黒い武術服。そして腰帯には、鳳凰の羽の根付け。

【…アキ様…本当に宜しいのですか？】
（良いも悪いも、もう引き返せやしないさ。一度決めたら真っ直ぐ貫く、それが俺だろう？）

肩に掛けられた【真如】は、風に漣［さざめ］き燦ざめく湖面と同じ。蒼滄き波紋の刃紋を刻みながら、穏やかに陽射しを照り返す。

（それに、嬉しいのさ。この状況で不謹慎だけど…俺は）

アキは飲み終えた缶を握り潰す。因みにスチール缶、補助は受けずに握力で。そしてそれを、根源素にまで分解した。

「…待たせたな、空」
「いや、待つのは得意技だ」

橋の向こう側、そこに旅団の皆と共に立つ望を見据えて降り立つ。
橋の両端に立つ望とアキ。手にはそれぞれ、双子剣を纏めた大剣の【黎明】とライフル剣銃【真如】が握られている。

「…もしかしたら、来ないかもしれないと思ってたぜ。お前はこういうの迷うからな」
「…迷ったさ。俺はお前みたいに割り切るのは得意じゃ無いからな…でも、助けたい”家族”が二人も居る」

ゆっくり歩み寄ると空いた拳同士を打ち合わせ、他の者に聞き取れないくらい小さな声で話し合う。

「勝負は一回こっきり、仕切直しは無しだ。どっちかが倒れるまでの時間無制限デスマッチ…アイツの好きそうな内容だぜ」
「…そんなにとんでもないのか、ナルカナって。いや、確かに俺の夢の中でも結構アレだったけど」
「とんでもないで済みゃあ可愛いもんさ。ああ言うのはな、鬼神って言うんだ」

げんなりしながら告げたアキに、望は苦笑する。軋む橋板に、吹き抜ける涼風と雲一ツ無い、日輪の座す蒼穹。二人は一瞬だけ揃って笑い――

「行くぞ…速攻で、一気に倒す！――『インスパイア』！！」
「…精霊光の風よ、歩みを止めぬ者達の背を押す追い風となれ――『トラスケード』！！」

…鼓舞のオーラと激励のオーラ。進む道標の光と背を押す追風が、空間を埋めて輝く。

「――ハァァァァッ！！！！！」

その大いなる加護を受けて、全く同時に斬り上げと斬り下ろし……

完璧に対称的な『オーラフォトンブレード』で斬り結んだ――！！

The 79th Name…"起源"

橋に掛かる、朱に彩られた二ツの鳥居。その狭間の空間は決闘場。
湖の中に潜る鳥居の四ツの脚には解読不能な文字が描かれた式紙が貼付けられ、周囲に被害が及ばぬように視界以外を隔離している。

攻防は一進一退、【黎明】を二本に分離させて二刀流に戻った望の『デュアルエッジ』を、アキは腕に纏う『威霊の錬成具』で弾く。
そして零距離で『オーラフォトンショット』を連射すれば、精霊光を固定した『オーラシールド』と双子剣を使って望は防ぎ斬った。

「真っ直ぐに、貫く!!」

少し離れたその距離を、【黎明】の片方にチカラを集中させて衝き出す『オーバードライブ』により零にする。
その剣を、錬成具を纏う後ろ回し蹴り『レインランサー』にて迎え打った。刃の側面を蹴られた事で軌道が変わり、望が体勢を崩す。

「マナの一片まで、消し飛べ!!」

それにより無防備になった望へと、アキは錬成具を纏った拳の裂帛の一撃『裂空掌破』を叩き込んだ。吹き飛ばされた望だが、一本に合体させた【黎明】で直撃は防いでいる。
刹那、アキの眼前で練り上げられた炸裂のオーラフォトン『ライトバースト』が炸裂した。

「…マナよ、我が求めに応じよ…浄化の輝光へと換わり、遍く穢れを撃ち祓え…」

それを全身に纏った錬成具により無力化、ステンドグラスの精霊光を展開する。スピンローディングで『空［くう］』の起源弾を再装填された、【真如】の銃口に。

「ええぃ、あの天パは底無しか！次から次に莫大なマナを練り出しおって！」

レーメが悪態をつくのも仕方ない。戦闘開始からずっと、彼は常に精霊光を聖刃に纏わせている上に、錬成具を常に実体化させているのだ。その状態で高コストの神剣魔法を放とうとしている。一つ一つの技や特性は大した事は無い。だが、それらが重なり合う事で、覆す事の困難な状態を作り上げている。単独では脆弱な生命が支え合って、助け合うように。

「破壊神のチカラ、なめるなよ…どうなっても知らねーぞ！！」

望は【黎明】を大きく振り上げ、かつての彼の…破壊神のチカラを纏う。高密度に圧縮された破壊のチカラが解放の時を待つ。

「――『オーラフォトンクェーサー』ァァッ！！」

「――『カタストロフィ』！！！」

螺旋を描き飛翔する蒼茫の光と、地を割り砕きながら走る斬戟。丁度中間点でぶつかったその一撃は、壮絶な衝撃波を発生させ相殺した。

……金斬り音や風斬り音を響かせながら斬り結ぶ望とアキの様子を眺めつつ、時深は憂鬱そうに溜息をつく。隣に控えている綺羅も目を閉じ、彼女を慮り静かに決着を待つ。

「…時深さん、まだ…空さんの事を信じて貰えないんですか？」
「信じる信じないの問題では無いんですよ。私には『視［み］える』んですから…」

その逆隣に位置していたユーフォリアは、時深のそんな様子に悲しげな表情を見せた。

「今でも私の視る未来ではロウ＝エターナルの一翼を担っています。彼自体は、その特性故に見えませんけどね」
「……っ」

…それは、彼女にとっても反論の出来ない証拠だ。この巫女が視る未来は、限りなく真実である。

「ユーフォリア、貴女には解りますか？『無から有を産む』という、彼の剣の恐ろしさが」
「アイちゃんの…恐ろしさ？」

問い返す巫女に、ユーフォリアは頸を傾げる。彼女達の尺度…外のエターナル達は、恐るべき能力を持つ者ばかりだ。

『空間を斬る』や『時間を操る』程度では最早特技とすらも言えず、『触れたモノを分解する』とか『睨むだけで対象を分解する』。『虚空に溶ける』、『生物の気力を奪い去る』、『消滅しても発生した瞬間に戻る』、『願いが叶う別世界を生み出す』。果ては『神剣を抜く事すらなく、ただの武器でそんなエターナル達を返り討ちにする』少年や『ふと思っただけで宇宙一ツを滅ぼす』少女まで居る別次元の尺度だ。

「解らないようですね。では問いを替えましょう…私達エターナル

は、外部宇宙から時間樹に入る時にどうなりますか？」
「その時間樹のマナの総量による制限を受けますよね…でもそれが一体……あ」

そこで漸く思い至る。そう、制限を受けるのだ。彼女達エターナルは時間樹に入る際にマナの総量の制限を受けて実力を削られる。だが、彼は…『無から有を産む』そのチカラを持って消耗を補填し、どんな世界でも無制限で実力を１００％発揮出来る。

「更に言うのなら、もしも仲間にそれを分配出来たら？脅威以外の何者でもないでしょう。そんな彼を、あの”法皇”が放っておく訳もありません」

マナの総量を自在に変える権利を持つ神剣は、今まで一振りだけ。ロウ＝エターナルが回帰しようとするモノ……神剣宇宙が誕生する前から既に存在していたという、始まりの壱振り『原初永遠神剣』のみだった。
それと同義のチカラを有するのだ。ロウ＝サイドにすれば、喉から手が出る程に欲しいだろう。

「でも…でもっ！だったらあたしや時深さんがカオスに導けばいいじゃないですか！！」

衝撃波による大気のうねりを斬り裂いて、彼女は声を上げる。幼いが故に、真っ直ぐな台詞を。

「…幾ら可能性を閉ざそうとしても無駄でした。あの子が手にしたのは、無限を超越する程に莫大な可能性を斬り拓く刃です。己の道を真っ直ぐ…天空を駆け抜ける風のように進むだけなんだから…」
「……」

時深の言葉に【悠久】を握り締め、彼女は俯く。任務の意味を漸く悟り、その余りに重大な責任に。そしてまた、自分が父親の反対を押し切って受けた任務も…重大な責任を有するモノだった事に。

「時深さんが諦めてても、あたしは絶対に諦めません。掛け替えの無い”家族”を…ロウ＝エターナルになんか渡さない…！」

「…ユーフォリア…」

しかし、決然たる意志を持って。迷いなど無くユーフォリアは言い切った。

そんな彼女に、時深は嬉しそうな哀しそうな。両方とも取れる笑顔…あの弔夜の満月の下で、アキが見せたモノと同じ笑顔を見せた。

錬成具の上半身部分を砕かれて、片膝を衝き喀血したアキ。しかし直ぐ立ち上がり、何でも無かったように【真如】を肩に担ぐ。

「…やっぱりお前は強ェな、望」

「お前こそ…本当に強くなってるな。手に入れたのは、最近だって聞いてたのに」

同じく片膝を衝いていた状態から立ち上がり、『裂空掌破』で内臓に受けたダメージから零れた血を拭った望も【黎明】を肩に担ぎ、乱れた息を整えた。

――良く言いやがるぜ、これでも俺は永遠存在だぞ…マジで最弱なエターナルだな、俺って…。

自虐的なな思考に沈む頭を振り、空っぽにする。その雰囲気の変化に周囲も決着の時を悟る。

「さて、それじゃあ…ラストワンと行こうぜ。全力で、な！」

【真如】の聖刃が、蛍火の燐光を纏う。かつて難死の神剣【幽冥】を一撃にて滅ぼした、水平を断つ二重否定の一撃『空我の太刀』の構え。

「解った…全力だ！」

対し、【黎明】も金色のオーラを纏う。かつて絶を蝕んでいた滅びの神名を断ち切った、垂直を断つ浄戒の一撃『ネームブレイカー』の構え。

「「……」」

そのまま睨み合う。構えは鏡写しだが剣閃は横と縦。振るわれればぶつかる事無く、互いを斬り裂くだろう。

静まり返る奥の院。その湖の浅瀬に、番［つがい］だろうか。二羽の鵠鴒［セキレイ］が遊んでいる。
その二羽が飛び立った、瞬間――

「「――ハァァァァッ！！！！」」

二人は橋板を蹴って、滄い煌めきの刃と金色の煌めきの刃…互いの必殺を篭めた、全身全霊の一撃をぶつけ合った――――！！！！

…巨大な樹の幹に貫かれた中央島『ゼファイアス』と複数の浮島を持つ中心世界『理想幹』に彼等は立っていた。
眼下には黒い靄のように拡がる、漆黒の光。流出こそ止めたが、既に漏れ出したモノはどうしようもない。

「…ふむ…エトルよ。奴らを撤退させたのは良いが、漏れた全てのナルを回収するのは骨が折れる」
「確かにのぅ…しかしエデガよ、方法ならば有るとも」

理想幹枝人エデガ＝エンプルは、相方であるエトル＝ガバナへ問い掛ける。マナ存在にはナルは猛毒と言っていい、生半可な方法では回収不可能だ。
…だが、エトルはニタリと笑って指を鳴らす。彼の神剣…魔法具型の【栄耀】が光を放ち、空間に門を開く。

「その為に一一南天の亡霊どもを躍らせておったのだからな」
「成る程…馬鹿と鋏は使いようだな。それにコレはコレで別の使い方も有る…」

その彼方から現れたモノにエデガもこれからの作戦を覚ったらしく、錫杖型神剣【伝承】を鳴らして笑った……

…神剣によって刈られた傷は致命の一撃だった。如何に神と言えど、心の臓を破壊されれば命を留め置く方法は無い。

消え去っていく、彼を間諜として使役していた南天神達の気配。
理由は単純、一部の北天神と或る南天神が共同で推し進めていた、
『新幹計画』という計画を探る事に失敗した粛正だ。北天を裏切り、
南天から裏切られた自業自得の滅び。
命が消えていく。緑属性のくせに治癒能力の無い彼の【逆月】には、
傷口から蒸発していく薄緑色のマナは止めようも無く。

『…消えるのですか』

呼び掛ける、凛とした女声。俯せに倒れた彼には、その主を見る事
が適わない。
だからそれはきっと、死の刹那に訪れる死に神なのだろうと。

――はい、女神様…オイラなりに精一杯生きてきましたけど…もう、
駄目なようです。

答えた声は、届いたのか。しばしの沈黙。『もううんざりだ』と、
奸計を象徴する神は笑った。

『…諦めるのですか』

――はい、女神様…もうオイラは裏切るのも裏切られるのも、飽き
飽きです。

たっぷり間を置いての問い掛け。霞む意識の中、彼は思うままに答
える。死に逝くこの神が究めたのは、剣技や魔法ではない。
神にあるまじき『科学技術』だ。南天神からは『惰弱』と嘲笑われ、
同族の北天神からは『異端』と蔑まれる。

――思えば、何者でも無い生涯でした。他者を騙す為に己を騙り、その己すら騙しました。どれが生まれた頃のオイラだったか、それすらも覚えてません。

自嘲の声に、掠れた笑いが混じる。咳込み、喀血する音も。

『…その生涯に、悔いは無いのですか』

そこで、全ての音が止んだ。

――そんな事、言わないで下さい女神様…悔いが無い訳が無いじゃないですか。

…オイラに消滅を哀しんでくれる相手なんて居ません。オイラは…たった独りで生まれてたった独りで死ぬんだ……！

吐露される心奥、詐らざる彼の本心。神としての恥も外聞も無い、ただ『死にたくない』と…子供のように泣き喚いた。

――……？

その身を、慈愛に充ちた光が照らす。魂を癒す輝きに彼は、やっと動くようになった頭を上げた。

黒いブーツにゴシック調なロングドレス、鎌の刃が付いた槍。短く揃えた碧の黒髪と物静かな瞳。

『…それなら、生きなさい。諦めずに、歩み続ければいい…生き抜いたその先にきっと、生きる意味が在るから…』

――女神、様…

心底からそう感じた。この方は、正に慈悲深い『月』なのだと。身を焦がすだけの、太陽の野蛮な光とは違うと。
だから手を伸ばした。己の破滅の始まりと知りながら、それでも。
――『オレ』はファイムに…オレの命を救ってくれた彼女に笑って欲しかったんだ……

…自分の髪を撫でる優しい指先と、後頭部には柔らかく温かな感覚。
その感覚に彼の意識はゆっくりと、失神の深みから浮上した。
瞼を開くが、視界は真っ暗。額の上に冷たい手拭いが置かれているのだ。

「ファイ…ム…？」

それを己の手で退ければ――逆光にシルエットとして浮かび上がる人物。

「あ、空さんが気付いたよ、アイちゃん」

夢の余韻に霞む意識を醒まして、漸く奥の院の縁側でユーフォリアに膝枕されている事に気付いた。活動的な彼女らしく、張りのある太股。気恥ずかしくなったアキは慌てて身を起こし――激痛に背を折った。

「アキ様、お加減は如何ですか？お辛いならエリクシアを…」
「ああ…有難うな、アイ…」

落とした手拭いを取り身を起こす。心配そうに顔を覗き込んだアイが持つ聖盃には生命の靈氣。
受け取り飲み干せば、疼く痛みが浄化されていく。

「…望達は？」
「皆と一緒にナルカナさんの所に。空さんの看病を頼むって…あと、『お帰り』だって」

『そうか』と溜息をつくと、彼は昼空を見上げた。痛みは有るが、今の顔を二人に見せたくなかった為に。

一一悔しさはない、寧ろすっきりした。けど…やっぱり情けねェ。また、アイツに負けちまったな…しかも今回も完膚無く。

頭を掻く彼の剥き出しの、傷痕の走る背中をユーフォリアは優しく見詰める。まるで手の掛かる弟を慈しむ姉のように。

「…空さんは強いね。心も躯も…何より魂が。あたしだときっと、全力では戦えなかったと思う」
「…そうか？自分じゃあちっとも実感無いけど」
「自覚できる強さなんて幾らでも覆る、紙一重の差だもん。自分で気付けない強さこそ、真実の強さなんだから…」

振り返れば、優しく微笑んでいるユーフォリア。姉のような笑顔に心を見透かされた気がした彼は、仏頂面になり視線をずらす。

「ここ一番で、負けちまう程度の強さだけどな。それにありゃあ、あのハーレム野郎に全世界の男を代表しての当て擦りだ」

穏やかな昼下がりの縁側は絹雲のヴェールを纏った日輪から注ぐ、鄙びた陽射しにまどろんでいる。幸福な幻夢の中、その儚い刹那。色褪せた記憶の劫初、あの月神との出逢いの時のように。

「アキ様…今はお休み下さいませ。心静かに英気をお養い下さい」
「そうそう。次は希美ちゃんを元に戻して、沙月さんとサレスさんを取り返しに行くんだから」

ローテーションでも組まれているのか。今度はアイオネアが、丈の長い法衣に包まれた、ほっそりと柔らかそうな膝枕を形作る。

「…そうだな。じゃあ…ちょっとだけ膝を借してくれ…」

…いつもの強がりすら出ない程、彼は心体魂全てが疲弊していた。遠慮無く彼女の膝を借り、手拭いをアイマスクの代わりとする。眠気は既に最高潮だ、そこに――

「暖かく、清らかな…母なる再生の光…」

…ユーフォリアの子守唄が響く。子供扱いされているような複雑な気分になったが、押し寄せてくる眠気に逆らえない。
くせ毛の良く引っ掛かる彼の髪を梳いた指先の温もりを感じたのを最後に、彼は再びその意識を安寧の光の先へと拡散していった……

The 80th Name…"【真如】"

学園の食堂、アキとユーフォリアにとっては久方振りのそこへと、旅団の一行と光をもたらすものの二人は作戦会議の為に集合した。

「今の理想幹はおそらく、脱出の際に手こずった強固な障壁に囲まれておろう。それは、サレスとの連携で内と外の同時攻撃で破るとして…問題はどうやってエトルとエデガを足止めし、かつログ領域の沙月を助け出すかじゃ」

議長であるナーヤが皆の前に立ち、語る。議題は目前に迫る理想幹突入作戦の計画、その役割分担である。

「あの二人と戦うだけでも一苦労だろうな。なにせ奴らはジルオルすらも利用しきった智慧の権化、南北天戦争の勝者だ。そんな奴らにログなんていう破格の情報源、普通に戦ったらまず勝ち目なんて無い…」

「…確かにな、やる事なす事予測されてんだ。やりづらくて仕方なかったぜ」

アキやソルの言葉に頷きながら腕を組んで、紫の髪を靡かせて忌ま忌ましそうに呟く。その猫目が、期待を篭めて『ある人物』を見詰めた。

「そこで、じゃ！ならばログ領域に記録が少ない、ユーフォリアに指揮を任せようと思うのじゃ！！」

「…ふぇ？えぇぇぇぇぇっ！？！」

ビシッと指差されて注目を浴びたユーフォリア。余りにいきなりの

事に平静を失って、電気に触れたように椅子から立ち上がる。

「そんな事言われても…あたし、経験無いですし…！」

「何、細かい指揮はわらわが執る。おぬしは大局を見極めて指針を示してくれるだけで良い」

「で、でも…」

…余程自信が無いのだろう、わたわたと混乱する彼女。その様子に、ナーヤは暫く考え込んで一一

「あい解った。それならば取って置きの知恵者を、おぬしの補佐に付けようぞ」

「取って置きの知恵者？」

「そうじゃ。神世の古に於いて、幾多の神性を篭絡した神じゃぞ…のう、たつみよ」

「もういっぺん嵌めたろうかい、このネコマタは…」

にんまりと笑う大統領、眼差しの先には一一仏頂面のアキ。

「俺だって、奴らには嵌められたクチだぞ。チカラを求める余りにエトルに唆されて神名を刻んで…結局はジルオルに討たれたんだ。奴らのシナリオ通りに、な」

「それだからこそじゃろ？おぬしの巧妙だが読まれてしまう奸計と、ユーフォリアの稚拙でも既知に囚われぬ意外性…この二ツが組み合わされば、いかに奴らとて予測は困難じゃ」

「それって、ほとんど俺に皺寄せきてんだろ…」

神世、彼等は自らは転生の為に…ジルオルの浄戒を受けぬ為に自ら消滅の道を選んだという。相剋という切り札が、ジルオルを完全に消滅させる事を知りつつ。

アキの前世も結局、彼等には読み負けたのだ。

「なんじゃ、おぬしユーフォリアを見捨てるのか？ほれ、こんなにおぬしを頼りにしておるのに」

「うぅ、空さ～ん…」

ズイッと押し出され、四十センチ近い身長差からうるうると涙目で見上げる形になるユーフォリア。蒼い瞳は、如実に『助けて～』と語り掛けてくる。

普通の男ならば、直ぐに助けたくなる事請け合いだ。

「ん～、面倒くせぇな～」

「うぅ～！空さんの意地悪～っ！」

「どこでサド心に火を点けておるのじゃ、おぬしは…」

だが…ドSのアキに泣き落としは通じなかった。

ハァ、と溜息をつく。そして顔を上げれば――

「…了解了解。まぁ、俺もやられっぱなしは趣味じゃないんで――適当に完膚無く、二度と転生する気も起きないように絶望的な滅びをくれてやらねェと」

口角を吊り上げた酷薄な、かつて『奸計の神』の二ツ名で暗躍した頃の冷笑を見せた。

「ふふ、今回ばかりは頼もしいの。二人とも、理想幹攻略の先鋒は任せるぞ。では、次は沙月の…」

そうして、会議は夕方まで続いたのだった……

…夕焼けに包まれた学園の中庭。世界樹［トネリコ］の樹の根本へとレジャーシートを敷いたアキは、思考の海に沈んでいた。

隣ではアイオネアが聖盃の靈氣をトネリコの樹に与えている。生命の源を受け取り、大樹やその周囲の草花は目に見えて息づく。
それを喜ぶ姿はさながら北欧神話の、神すらも逃れられない運命を紡ぐという女神ノルンのように。

樹の周囲には、根源力で創られた幾つもの武器が散乱する。しかしやはり銃は無い、どうしてもマナ嵐と化してしまうのだ。

――さて、考えろ。エトルは目的を完遂する事を、エデガは自身の主張を通す事を第一とする。
…どちらかと言えば、厄介なのはエトルだ。偶然性を徹底的に排除した、ゲームのように調律された戦術を組む。
弾性に乏しいのが唯一の弱点だが、エデガがカバーする。何よりも、どちらもが第四位の神剣士だ。

大樹に背を預けて星が瞬き始めた夕空を眺めて腕を組みつつ、左手の親指を眉間に当てた姿勢。思い出したのは望に負けた事だ。
それより更にオリハルコンネームと神格、年季の差がある相手なのだ。やはり少しでも多い可能性を予め用意しておく必要が有ると、以前愛用していた五挺拳銃を完成させる決意を固める。

「なぁ、アイ…剣なんかは簡単に出来るんだけどさ、どうにも銃は上手くいかない。どう思う？」
「はい…恐らくは、アキ様の素質の為だと思います。アキ様はマナ

操作能力、燃費効率は他のどなたよりも上です。ですけど、一度に行使できる総量が圧倒的に少ないんです…だから密度が希薄になり過ぎる事で、因果を固定出来ないんだと思います」

要するに、自転車のギアに例えるなら一番小さい奴だ。少し漕げば大分進むが、その分だけ強く力を篭めて漕がなければならない。その分の筋力も有るが、持続するスタミナが無い状態らしい。

「…ですが、アキ様にはそれすら覆す可能性が眠っています。蒼茫の煌めき…エターナルが持つ創造のチカラ、生命昇華の起爆剤たる『生誕の起火［おこしび］』が」

「『生誕の起火』？」

思わず腐り掛けた彼の耳に、彼女の優しい言葉が響く。始めて聞くフレーズに、彼は首を傾げた。

「それは遍く可能性の揺り篭です。時間樹を生み出す事すら可能な、万世万化の源…」

彼女はそのチカラを持つ主を誇るように、静かに詩唄う。

「…アキ様のチカラと私のチカラ、そして『空［くう］』を練れば、一度に莫大なマナを創造して行使出来ます。この世界に新たな因果を生み出せるんです」

「新たな、因果か…」

立ち上がり、徒手の両手を交差し精神を統一する。その背中へと、アイは恥じらいつつも寄り添った。それだけで本当に何でも出来る気になってしまう。

一一部品は全て、記憶している。構造は厭と言う程に熟知してる。
俺達には出来る、俺達に不可能なのは…不可能だけだ。

…それこそ、彼が積み上げてきたモノ。【幽冥】の、再製の能力に因りて創り上げた、贋物の神剣の整備で培った経験。
そして、そんな彼を肯定する彼女。善も悪も認め受け入れながら、ただ『あるがままであれ』と説く刧なる媛君。

神や仏、天使や預言者は『悪』を認めない。それを認めながらその上で、『あるがままであれ』と、『己の願いに忠実であれ』と。名を付けられる前からずっと、世界に説いていた。
その在り方を、未だに幻想が意味を持って生きていた頃の暗愚なる人々は一一聡明にも『真性悪魔』と呼び、何よりも恐れた。

「一一ッく!!!!」

双手に充ちるマナへと、己の深層に燈る蒼茫の煌めきを流し込んだ一一瞬間に壮絶なまでのマナ密度が生じる。
弾け飛びそうになる魂を遮二無二繋ぎ合わせ、イメージを『空』を構成要素として創造する。

「一一我が喚び声に応え、来い!【比翼】ッ!!【連理】ッ!!」

空間に波紋を刻んで召喚された、右の紅金色のデザートイーグルと左の蒼金色のコルトパイソン。
間違えようも無い。彼が、かつて使用していたモノだ。
それを虚空へ向けて投げ上げて、もう一度空拳となる。

「一一続き、来たれ!【天涯】、【地角】…【海内】ッ!!」

更に、左に白金色のＣＺ－７５と右に黒金色のベレッタＭ９２Ｆ。最後にパンッと勢いよく打ち鳴らした両掌から翠金色のトーラス・レイジングブルを召喚した。

…純粋な精霊素により編まれて、確かな神格を持った『それら』。投げられて回転する『永遠神剣』は一一比翼の紅鷲と比目の蒼錦蛇、閃白の白鳳と闇黒の黒龍、翠角の幽角獣…媛君の臣下達へと姿を替えた。

『ふぅ、アタイらも漸く呼ばれたかい』
『チンタラしやがって…無能な主だぜ』
『口を慎みなさい。どんなに無能でも、仮にも媛様が選ばれたお方ですよ』
『ヌシが一番無礼だろう…すまんのう、御館様。悪気は無いのだがどうも見た目が三下なのでな…』
『どうでもいいよー。媛様、膝枕してー』
「……」

口々に罵倒され、成功の喜びなど木っ端微塵に消え失せた。アイも慌てて、臣下を窘める金銀の視線を向けた。

「あ、居た…もう、空さんってば。今日はあたし達二人が食事当番なんだよ…って…」

そこに駆け寄ったユーフォリア、少し怒り気味だったが五体の霊獣達の注目を浴び呆気に取られる。

「…あの、空さん。その神獣さん達は…？」
「ちょっとな…お前ら取り敢えず元に戻ってくれる？」

と言った瞬間、『何でお前に命令されなきゃならないんだ』と魔眼の視線で訴えられ洗礼を受けた。
危うく炎上したり凍結したり光に熔けたり闇に呑まれたり雷に蒸発したりしそうになったところを、【真如】の加護に救われる。

『…媛様、これよりは我々も参戦いたします。どうか、存分にお役立て下さいませ』
「うん…頼りにしてるね」
『なんと、勿体ないお言葉です…我らが存在事由の全てに掛けて、お守りいたします！！』

代表して、白鳳が臣下の礼を取る。同時に全ての霊獣が基の銃へと還った。

「…アイちゃんってお媛様だったんだ」
「ううん、そんな事無いよ。皆が産まれた”真世界［アタラクシア］”の滄海［ウミ］の源流が、私だっただけだから…」
「十分凄いよ、アイちゃん！」

むぎゅーっと抱き合う二人を尻目に、釈然としないモノを感じつつアキはそれらをホルスターに挿し込む。

「あ、空さん。ちゃんと片付けないと駄目だよ。それまで、御飯はお預けなんだから」
「マジか」

そして明らかに部屋に納まらない被造物の数々を前に、アキは途方にくれたのだった……

The 81th Name・・・"時の階［きざはし］&quot

翌日、ものべーが出雲を発つ日がやって来た。奥の院の前で挨拶を済ませたが、ナルカナが何やら気に入らない事でもあったのか随分と揉めていた。

因みに彼女、理想幹攻略にチカラを貸してくれるそうだ。ナルカナ曰く、『がーっと理想幹に行ってだーっと細工すれば希美は元通り。ナルカナ嘘吐かない』だとか。今は相剋の破壊の意志をファイム本人の意志で抑えているらしい。

…なお、『詐欺だ』とツッコんだアキはケルト神話の銀の腕の王が持つという不敗の証たる光剣の銘を冠する一撃『クラウ・ソラス』によって吹き飛ばされている。

「……」

武術服に身を包み、黒い聖外套を羽織り剣銃【真如】を肩に掛けたアキ。いつも通り仏頂面の彼だが、今日は輪を掛けて不機嫌だ。

「……」

目を開いた先には巫女、倉橋時深。彼女も彼と同じく、無表情で目を伏せている。

と、ほぼ同時に開かれた彼女の目としっかりと見詰め――否、睨み合った。

「空、行くぞー」

そんな望の声が掛からなければ、いつまでそうしていた事だろうか。

踵を返して歩き始める。その彼の背中を、呼び止めた声。

「…巽様、御武運をお祈りしております。お体に気を付けて、無理をなさらぬように」

…恐らくは、それが今生の別れと知って。綺羅は幼少より親しんだ、弟のような男に言葉を贈る。

「ああ…有難うな。綺羅こそ元気でやれよ、無理しない範囲で」

返ったのはそんな礼の言葉。互いに当たり障りも飾り気も無い言葉は、それ故に酷く温かく優しい。

「…時深様」

彼とて気付いている。綺羅が自分に声を掛けたのは――彼女の主が、彼に声を掛ける口火を切る為だという事は。
その思惑通り、時深は口を開く。

「――私が贈る言葉などただ一ツ、好きに歩きなさい。次に会う時は、私達は敵同士かもしれませんからね…天つ空風のアキ」

「時深様…」

『それで全てだ』と。巫女は口を閉じる。綺羅も寂しそうに、目を伏せて口をつぐんだ。

「…では、これで」

一ツ頭を下げて、また歩き出す。言われた通り、いや、彼の在り方として立ち止まる事は無く。その二ツ名の通りに。

「空さん…本当に良いの？」

その風を押し止めるように、右の袖を引いたユーフォリア。しかしアキは足を止めない。

…『天』と『地』の狭間、全ての存在を許すこの『空』の中で。納まるべき『鞘』を持たぬ、否、必要としない”生命”なる『刃』を携えた、立ち止まらぬ”風”として進む。

「良いも悪いも、それが『運命』なんだろ。言ったのはお前だぜ、時深さんには未来を視るチカラが有るって」

「…それは、そうだけど…でも…こんなの悲しすぎるよ…」

ほとんど、引きずるような歩き方。痛みから逃げるように、悲しみから目を逸らすように。自分でも卑怯だと解っていながら、彼女に責任を押し付けた。

「…空さんにとって時深さんは、こんな別れ方で良い程にどうでもいい人なの？長い間一緒に居た…大切な人じゃないの？！」

「……っ」

…歩みが、速度を落とす。たった一人の小柄な少女の重みが、彼の一歩を…歩みを止めないと誓った筈の壱志［イジ］を揺らがせる。

「あたし知ってるもん。時深さんがどれだけ、空さんの事を大事に思ってるか。空さんが時深さんの事をどれだけ誇りに思ってるか！そうじゃなきゃ、二人ともあんな顔して相手の事を口にしたりしないもん！！」

…アキの全て、弱さすら肯定して認めているアイオネアが『悪魔』

であれば――彼の弱さを糾弾したユーフォリアは『天使』と言えるだろう。
生きる事で抱く苦痛や懊悩から、優しくも『逃げてもいい』と説くモノが『悪魔』であれば、厳しくも『逃げずに立ち向かえ』と説くモノの総称こそ『神』や『天使』なのだ。

真っ直ぐに見上げられて、アキは失敗を悟る。何時からか…ソルやルプトナと親交を深めた辺りからやらなくなった、目を細める癖のやり方を忘れてしまった事を。

「駄目だよ、逃げちゃ…お願い、太刀［たち］向かって。あたしの…あたしの好きな空さんのままで、居てほしいの…」

蒼く涙に煌めくその目は彼の弱さを責める。本人にその気は無くても、清廉な眼差しは『逃げるな』と如実に語る。

――…ハラワタが煮え繰り返る。好き放題に言いやがって、テメェ一体何様のつもりだ。お前なんかに…俺の何が判るんだ！！

その激情のままに。彼は【真如】を掴み、勢いよく――

「――忘れもんした、先に行ってろよ」

それをユーフォリアに投げ渡して、今来た道を遡り始める。慌てて受けとった彼女…風の行方すらも曲げてみせたユーフォリアは。

「…うん、待ってるね…」
「行けっつってんだ、莫迦…」

【悠久】と【真如】を抱きしめたままで、『巽空』を見送った。

アキが踵を返した事には、直ぐに気が付いた。時深は向かって来る、いずれ敵となるだろう『相手』を迎える。

「…何か？」

目の前で立ち止まった彼に警戒は絶やさない。彼女はアキの神剣が銃ではなく、”生命”だという事を知っている。あの銃はあくまでも、チカラの空器［ウツワ］だと。

「…迷惑だと思います。思い上がるな、って思われても仕方ありません。…でも、言っておかないと…この先の永遠を後悔し続ける事になるから、言います」

「…はい？」

…その雰囲気にそぐわず、柄にも無く頬を真っ赤に染めて。アキは真っ直ぐに彼女を見詰める。

「…俺は貴女を……巽空は、倉橋時深を――」

「待っ、ままま、待ちなさい！！何？！何なんですかっいきなりタ○チみたいな！？！」

その鳶色の眼差しに、流石の彼女も平静を失う。あわあわと胸元に手を当て、少し後ずさった。

そんな彼女の肩に手を置いて逃げられないようにして、彼は――

「母親みたいに、思っています。本物の母親なんて知らないけど…

今までも、そして、これからも…ずっと――…」

ただただ真摯に。生まれて初めての『告白』を行った。

ぽかんと彼を見詰めた時深、少し離れた位置の環と綺羅。

「…はぁ」

溜息を落としたのは時深、スッと右手を持ち上げ――すこーん！と『時朔の扇』で彼の頭を打った。

「イッタ、何すんですか師匠！？」

「『何』はこっちの台詞ですよ。どうして『姉』くらい気の利いた事が言えないんです！！図体ばかり大きくなって、人付き合いの初歩も知らない…そんな事だからモテないんですよっ！！この唐変木！！」

「イテテテ…すみません、師匠。生れついて、そういう才能は無いらしくて…」

がーっと、腕を振り回して怒る。ポカポカと連打され、アキは頭を守りながら。

「それに…負け惜しみになりますけど、そういうのは別に良いです。俺は純愛派ですからね…」

その触れ合いを懐かしむように、噛み締めるように笑う。その笑顔に時深は手を止めた。手を止めて――

「報われなくたって、結ばれなくたって。俺自身が選んで行動した結果で、愛する人が他の男とでも幸福になってくれたなら…そこに意味は在るんですから…」

「…呆れた…本当に変わってないんですね、貴方は…」

…そんな、何処かで見た事のある、諦めた笑顔を浮かべた彼に一一ゴツンとゲンコツを落として。

「…優しい子ね。本当に、哀しいくらい…誰よりも優しい子…」

…幸福も愛も。何も知らない癖に、知ったかぶりで強がった少年を抱き寄せる。

優しく、慈愛に満ちた眼差しで。癖毛の髪を、名残を惜しむように撫でて。

「…ただ、莫迦なだけです。俺ァ、時深さんみたいに強くて優しい大人になりたかった…」

これより永遠を閲［けみ］しても、二度と出来ないであろう…最後の交わりを。

「歩み続けなさい。その優しさが続く限り、貴方は自慢の息子よ」

それが、最後となる。それを口にすれば全てが清算される。それを知りつつ、それでも彼は一一己の歩みを止めない。

「行ってらっしゃい、空…」

それが、最初で最後の親孝行だと判っているから…

「…はい、行ってきます一一…」

卑屈さなど欠片も無い、生まれて初めて子供のように穏やかな笑顔

を浮かべて。

「一一一母さん……」

万感の想いを篭めて…子供時代の自分に別れを告げる、その聖句を唱えた一一……

…振り返る事も無く走り去った、『青年』の背中を見送って。時深は微笑んだ。

「…『蛙の子は蛙』、か。全く、馬鹿みたいに物分かりが良い…」

思い返すのは、この以前の物語。この世界で生まれ、異世界に召喚されて永遠神剣を手に戦った少年…初恋の少年の姿。

彼を彼女は千年の間待ち続けた。千年間待ち続けて、結局…想いは届かなかった。

想い続けた彼は、異世界の少女…『お伽話［ファンタズマゴリア］』の世界の『妖精［スピリット］』と恋に落ちて結ばれ、エターナルとなって一一…子まで成した。

「…怨みますよ、ローガス…私にこんな思いをさせて…」

きつく握り締めた拳から血が滴る。第一位神剣【運命】を携える、『全ての運命を知る少年』の二ツ名を持つ彼がこの結末を知らない訳が無い。

知っていて、自分に役目を与えた。恐らくは…彼を『間違いなく』

ロウ＝エターナルとする為に。

「…時深、頑張りましたね…」

「姉さん…私は…羨ましかったんです…もし、アセリアじゃなくて私が選ばれていたのなら、一体どんな子が生まれていたんだろうって…」

その拳を環が優しく包む。それに…時深は声を震わせた。

「私はあの子を…そんな有り得もしない可能性の身代わりにしたんです。そしてあんなに、辛い運命を強いてしまった…」

「…良いんですよ。それだけ貴方は、あの子を大事に出来たんですから。彼は…立派な男性に育っていたではありませんか」

姉から、子供のようにあやされて。彼女は天を見上げた。

何処までも蒼一色の大空に悠揚と棚引く、一筋の白い飛行機雲に吹き抜ける一陣の風。そして一一…高く飛び去っていく、小さな光。

「…私は…立派じゃなくていい。ただの人として生きて欲しかった。痛みや悲しみから逃げ出す人間に育ってくれれば…あんな運命を背負わずに済んだのに…本当に…変なところばかり、似てしまいました…」

その姿は一一日の光を浴びて金色に煌めいて見えた……

黒い聖外套を翻して、走り抜ける山道。足場は悪いが、戦いにより

鍛え上げられた足腰が揺らぐ事は無い。

やがて、駆け足から競歩、そして歩行になる。ものべーはまだ先、ここで速度を落とす理由はない。だが、ここからでなければ我慢が効きそうになかった。

――行かなきゃ良かった。知らなきゃ良かった…こんな幸福なんて知ったら『満［ミタ］』されちまう。俺は…『空［カラ］』じゃなきゃいけないのに。

…軋む胸を押さえ付ける。今にも壊れそうな心を、泣き喚きそうな魂を宥めすかす。

彼が目指すのは侠客［オトコ］だ、そうそう無様は出来ない。

――だから行けっつったんだよ…お陰で泣く事も出来やしねェ…

「…莫迦野郎、お前が…」

「……っ」

…木陰に隠れているその少女に、泣いている姿など見せられる筈もない。

左手で取り上げるように【真如】を受け取り――背中に抱き着いた温かさ…涙ぐむユーフォリアに、己の頭を掻いた。

「お前が…俺の痛みで泣く必要があるかよ、莫迦野郎…」

恐らく【真如】を通して『見て』いたのだろう。神銃形態のままのアイオネアも、ただ黙している。

「…ごめんなさい…あたし…」

「…煩せぇ…何も言うな。優しい言葉なんて掛けやがったら…絶対に許さねェからな」
「ごめ…なさ……ごめんなさい」
ぐすぐすと鼻を鳴らしながら頚を振る。鮮やかな蒼髪が、夜明前の瑠璃色の空のように煌めく。
「莫迦…感謝してんだ、これでもよ。お陰で…」
外套越しに感じられる、温かさ。彼が壱志［イジ］を張るには、ただそれだけでも充分過ぎる。
「ここから、天つ空風のアキは…もう一度始まったんだからな…」
…そこが、彼の第二の『起源』となる。人間”巽空”はここで終わり一一…空位永遠存在［アイオーン］”天つ空風のアキ”の始まりへと。
「…だから、そら。誕生日の祝福は笑ってやるもんだろうが」
「はふ、うにぃぃ～…?!あ、あにふるろぉ～!!」
振り解き、やおら向き直ると彼女の両頬を引っ張った。無理矢理に笑顔を作らされた彼女は、当然、赤くなった頬を押さえながら彼を睨んで。
「一一行くぞユーフィー、”家族”が待ってる。これ以上遅れたら、また俺達が食事当番だぞ」
いつかと同じく、差し延べられた右掌。いつかと同じ疵だらけの、無骨な男の掌を見詰める。

「…うん」

嬉しそうに掌を重ねた彼女。なぜなら…ただ一ツ、その表情が違う。後ろ姿だけでも判る、心底から気怠そうな面倒臭そうな…いつも通りの仏頂面だ。

「変わり続ける事…それが貴方にとっては変わらない事なんだよね…」

「あん、なにか言ったか？」

それが彼女は嬉しい。哀しい笑顔ではなく、嬉しそうな仏頂面が。自分の手を引いて歩き行く、大柄な青年の大きな背中。今まで一度も、出逢った事の無い人種。真っ直ぐな捻くれ者。

「別に何も言ってないもん。それより急がないと」

「つァ、おい！？！」

その筋肉質な右腕を華奢な両腕で抱き締めてユーフォリアは、天に響けと高らかに唄い上げる。

「【悠久】のユーフォリアの名に於いて求める。いくよゆーくん、全速前進っ！！！」

投げ出し、サーフボードのように変型した【悠久】に乗って。更に『マナリンク』でアキと同調して、無限のプロペラントを得た。

「待て！！今まで黙ってたけど俺、実は案外絶叫マシーンは苦手で…うわぁぁぁぁぁぁっ！？！！？！！」

暴走じみた加速によって、天高く舞い上がる。飛行機雲を棚引かせ、
天を渡る風と共に、碧空を斬り割いた――…

The 82th Name・・・"The Another One"

ものべーの作り出す朝日の眩しさに目を覚まして、身嗜みを整える。
時刻は七時前、物部学園の校舎は相変わらず静かだった。
上履きに履き換えて、リノリウムの廊下を踏み締める。それだけで、まだニンゲンだった頃…学生の巽空に戻った気すらしてくる。

詰まらない感傷を拭い去り、彼は扉を開く。己に課せられた役割を果たす為に――…

「空ィ、朝メシまだかよ～」
「ボクもうお腹ぺこぺこだよ～」
「なら自分で作れやァァァッ！！」

バンバンとテーブルを叩くソルとルプトナに向けて、アキは叫ぶ。
希美がファイム化した上に沙月が行方不明となり、学生も降ろしている為に食事係が激減したのだ。そこに帰ってきた、割とまともな食事係だ。こき使われない道理はない。

エプロンを身に付けて、とにかく一度に大量に作れる調理を行う。
昨日はカレー、勿論、ジャガ芋は入れていない。大鍋の中の二日目のカレーは中々深い味わいだ。
…因みに、好みで辛口にしたのは女性陣に物凄く不評だった。

「遅いぞ、巽。下拵えは済ませてある」
「悪い、暁…後は全部俺が作る」

先に厨房に居た絶…トーストしたパンとカツレツを作っていた貴重な食事係の一人に断りを入れて、アキは包丁を取る。その時に回転

させたのは【真如】を手にする時と同じ、気合いを入れた証拠だ。

「ナナシが世話になったと聞いている。迷惑を掛けた」
「どっちかと言うと、俺の方が面倒見て貰った感じだけどな」
「全くです、もう少しで守護者に捻り潰されるところでした」

キャベツを千切りしつつ、アキは話し掛けて来た絶に視線を移す事無く答えた。それに絶の肩に乗るナナシは、ジト目でアキを睨む。

「事実は小説よりも奇なり、か」
「なんだよ、薮から棒に…」
「殺し合った相手と並んで食事の用意。退屈しないな、生きていると言うのは」
「当たり前だろ。生き続ける限り、驚きと革新の連続だ」

ニヒリスト達の会話は無駄が無い。それで全てを理解し合い、後は特に何も話さず調理に没頭する。

「では、先に食事を取らせて貰うとするか」
「あいよ、朝から胸やけしそうだぜ…」
「マスター、衝撃波の許可を」

『カオスインパクト』を発動しそうなナナシに絶は苦笑して、同じ皿から食事を取るのだろう、完成させたカツサンドを持って歩き去っていく。

「お早う、絶」
「お早う、望。今日も希美ちゃんと同伴出勤とは恐れ入る」
「茶化すなよ…」

そんな絶に食堂に入って来た望が声を掛けた。その後ろには希美…ファイムの姿。相剋の神名が覚醒して以降はずっと、ああして望の傍に控えている。

「…空さん？あーきーさーん！」

…温めなおした残り物のカレーをよそう。彼とて判っているのだ、仕方ない事だと。今までも二人は仲が良かったし、いつも引っ付いていた印象もある。

「……ハァ」

「んもぅ、空さんっ！！」

溜息を落とした彼のお玉を握る手を、小さな手が掴む。

驚き見れば制服姿のユーフォリアと、『やっぱり制服は裾が短くて恥ずかしいです…』という訳で、制服を着る時は黒いタイツを穿くようになったアイオネア。

「っユーフィー、アイ…なんか用か？」

「用っていうか…あの」

なお、この二人は相部屋で生活している。『妙齢の男女が同室なのは戴けない』として、アイオネアは仲の良いユーフォリアと相部屋で生活する事になったのだ。

「アキ様…カレールーが溢れてますよ…」

どばりと掛けられ続けたルーは、皿から溢れてもう一度鍋に戻っている…と言うか。

「ーー熱ァァッ!!?!」

勿論、熱々のカレールーに塗れた右手を即座に冷やす羽目になったのだった。

…食事を用意し直して席に着く。目の前にソルとルプトナ、左側にアイオネアとユーフォリアの五人でテーブルを占拠した形になる。

「…ねぇ空。希美が望にべったりなの、どうにかならない?」

「ーーんグッ!?!」

開口一番、ルプトナはそんな事を言ってのけた。アキは思わず、口を湿らせる為に飲んでいた冷水を噴き出しそうになる。

「しょうがないってのは判ってるよ…けどさ、一人占めは良くないと思わない?」

「いつにも増して仲良しさんですもんね、望さんと希美ちゃん……近付くだけで一苦労ですよ…」

「俺が知るか…悔しいならお前らが積極的に行きゃ良いだろ」

むーっと眉根を寄せてカツサンドを頬張るルプトナ。ユーフォリアも、何処かつまらなさそうに唇を尖らせて呟いた。

ソルは完全に我関せずを決め込みカレーを掻っ込んでいる。アキもまた、同じようにカレーを喰う。

「何だよー、空だって希美が望にべったりなのは嫌だろ?だって空は希美がーー」

「…煩せェよ。テメェに関係ねェだろうが」

そこで、不用意な言葉を紡ぎそうになったルプトナを睨みつけた。
冗談で済む、ギリギリの範囲で。

「…ゴメン」

「…いいさ…どう足掻いても事実だしな」

謝りを入れてカレーを口に運ぶ。舌を焼く痛烈な辛みが、心地好く感じられた。

「え、えっと…レーメさんから、理想幹の地図を借りてきたんです。これで作戦を立てませんか？」

「…ん、サンキュー」

「ぶぅー…空さん、語尾は伸ばしちゃ駄目。『サンキュ』だよ」

「何が違うんだ、何が…」

…場の空気が重くなったのを感じて、アイオネアとユーフォリアは机の上に前回の進攻で得たという地理情報を描いた地図を広げながら言った。

「中央島ゼファイアスを攻略する為に各浮島の祭壇の転送鍵を解除しないといけないんだって。あと、ゼファイアスから中枢部ゼフェリオン・リファに行く為に解除する転送鍵もある二段構えの陣らしいよ」

「全く…そういう所は、神世から変わっちゃいねェ陰湿さだ」

地図を広げて、解説の為に食事を止めたユーフォリア。アキは皿を持ち上げて、相変わらずカレーを掻っ込んでいる。

「やっぱりあたしは、一カ所ずつ占拠するのが安全だと思うけど」
「俺達は寡兵だぜ、一カ所に集中すればそれだけ集中攻撃を受けるだけだ。それに、拠点を制圧した後に纏めて移動したら、あっという間に奪還されちまう」
「それなら、散開して一気に…」
「言っただろ、俺達は寡兵。分散すれば、それだけ戦闘力が減る。あっちからすれば潰しやすくなるだけだ」
「うぅ、だったらどうするの？」

頭ごなしに完全否定されてしまい、落ち込んでしまうユーフォリア。頭の翼もしょんぼりと項垂れてしまっている。

「そこだよ、相手はログ領域って情報源があるんだ。それが一体、どこまで情報を記してるかが肝になる…」
「そっか…幾ら作戦を立てても、ログ領域に記されたら意味が…」

一一圧倒的なチカラ如きで決まる闘いなんざ局地的なモノだ、大局を征するのは結局、情報と数。
俺らが『取り替えの利かない少数精鋭』なのに対して、理想幹神は無制限に殖える捨て駒［ミニオン］や『プレイヤーの視点』とか『神の視点』を持って粋がってやがるクソッタレのチートゲーマー野郎。更に戦場は相手の土俵。
いっそノル＝マーターでも造ってみるか？あんなんでも無いよりはマシだろう…

ふぅ、と考え込んでしまう二人。アイオネアはそんな二人が答えを出すのを、ただ待っている。
残る二人は食事に集中しており、考える気は毛頭無いらしい。

「時深さんがついて来てくれたら、一挙に問題解決だったのに」

「…そんなに凄いのか、時深さんって」
「『凄い』なんてモノじゃないよ。実力はあたし達の遥か上、更に未来を視る力まで有るんだから」
嬉しそうに語る彼女に、何と無くアキも誇らしい気持ちになる。
「…その代わりが、我が儘なお姫［ナルカナ］様だしなブルォ！？！」
「へぇ～、面白そうな話をしてるじゃないのよ。一体誰の話をしてるのかしら～？」
「「ふぎゅぅ～」」
そこに背面から、殺した相手の魂を喰い力を増していくという混沌の剣『ストームブリンガー』の銘を冠す一撃をアキの後頭部に叩き込み、ユーフォリアとアイオネアを抱き寄せたナルカナ。
「い、いつから…そこに…」
「今さっきよ…モグモグ、お腹空いたから来てみたの」
顔面をカレー塗れにしたアキの目に映るのは、他の皆と同じく学園指定の制服を着ているナルカナ。手近な所に在ったカツサンドを、勝手に食べている。
「ナルカナさ～ん、あたし達の頭の上であたしのカツサンドを食べないで下さい～！」
「はう、パン屑が……」
頭の上に落ちてくるパン屑に抱き締められた二人が閉口していた。
因みに彼女、最近望の部屋に入り浸って…というか私物化し始めて、『お陰で希美の機嫌が悪い』と望が愚痴を零しに来た事も在る。

「悩んでいるなら、このナルカナ様が解決してあげようじゃないの青少年諸君。うーん、そうねぇ…『ガンガンいこうぜ』！」
「冗談じゃねェ、そんなドラ○エみてーな策戦に付き合えるか！」
…顔を拭ったアキは最悪の策戦を口走った彼女に間髪容れずに突っ込む。しかし、ナルカナはオーラにより意にも介さない。
「別にあんたに期待してないわ。あたしだけで事足りるし、いざとなればユーフィーを連れてくから。二軍落ちはク○フトとト○ネコとブ○イと一緒に馬車の隅っこで膝を抱えてなさいよ」
「腹立つわーコイツマジで…！」
揃って、ジト目で睨み合う。その背後で龍虎相対する絵が見えそうな程に。
「…まぁ、冗談はここまで。アキには別の重要な仕事が有るのよ」
「はぁ？どんな？」
…いきなり真面目な表情に戻ったナルカナは、ユーフォリアのカツサンドを食べ終えてアイオネアの聖盃を勝手に飲み干した。
流石は八岐大蛇の尾から現れたと伝わる剣、その暴虐さたるや。
「あんたはね、ログに載ってないのよ。生まれた瞬間から死の瞬間まで、以前は載ってた事項の全てが抹消されてるの。この娘と契約した瞬間から、神剣宇宙で唯一の『空［カラ］』な存在…表現方法も記述しら方法も無い存在としてね。しかも、それが在るべき姿ときてるんだからこのー」
「ひゃふうぅぅ…」

『そのせいで、異能じゃあ探知も発見も出来ないじゃないのよ』と、むにゅーっと頬を引っ張られるアイオネア…【真如】と契約した瞬間、彼はエターナルとして神剣宇宙から弾かれたのだ。
取り返しようも無い『空』の現身［うつしみ］として。

「…つまりあんたは、ルールから外れた『別物［アナザーワン］』。ポーカーならジョーカーって訳よ。しっかりと策戦を練って奴らの鼻をあかしてやりなさい」
「…そりゃどうも。俄然ヤル気が出てきたぜ…！」

…テーブルを叩いて立ち上がる。カレー皿は既にカラ、アイオネアから聖盃を受け取ると飲み干す。

「ソル、景気付けに特訓だ！！」
「ハッ、上等だ！元々俺から誘うつもりだったんだからな！」

言うが早いか、さっさと洗い物を厨房に持って行く男二人。それを見送った女四人。

「…まったく、相も変わらず思い立ったら即行動な二人だよね」
「もぅ、策戦を立てなきゃいけないのに…あたし達も行きましょう！アイちゃんも早く！」
「うん、ゆーちゃん。…ナルカナさん、失礼しますね」

『全く、仕方ないなぁ』と溜息を落としたルプトナとユーフォリア。促されたアイオネアが波紋へと変わり、空間転移してナルカナの拘束を逃れ、一礼して二人の後を追っていく。

「なによ、あたしを無視して青春してー！ナルカナ様を敬えー！！」

体よく逃げられてしまい、怒ったナルカナの咆哮が木霊したのだった……。

The 83th Name‥・"継承"

昼下がり、ソルとの特訓を終えたアキは中庭のトネリコの樹の根元で、幹に背をもたせ掛けていた。その左隣りでは同じくソルが幹に背を預け、ペットボトルから水を飲んでいる。

「チッ…まさかこのソルラスカ様がお前を相手にギリギリの勝利をしちまうとはな」

「あァん?だから、テメーの方が先に地面とキスしたっつッてんだろうが」

言いつつ、ペットボトルを奪って喉を潤す。そもそも、このペットボトルを充たす水はアイオネアの靈氣［アイテール］、彼のモノだ。

「だから、引き分けだって言ってるじゃないですか…」

「そうそう、鏡に映ってるみたいに同時だったじゃん」

「えっと…同時でした」

「「……」」

そんな不毛な意地の張り合いを、右隣のユーフォリアとルプトナ、アキの左腕を腕枕にして寄り添うアイオネアが止めさせた。

「…よ、よーし…取り敢えず無効試合だな」

「お、おうともよ…次はきっちりとノックアウトしてやるぜ」

「「男って奴は……」」

因みに、互いに失神してしまう程に見事なクロスカウンターで引き分けており、アキは左頬、ソルは右頬がまだ赤く腫れている。

「…そういや、信助達は元気してんのかね？」
「そうだね。美里、元気してるかなぁ…？」
「心配しねぇでも、色んな分枝で生活してきたあいつらだ。魔法の世界の暮らしは不便がねぇから、寧ろ快適にやってるさ」
「あたしは皆さんとはあんまり一緒に居られなかったから…仲良くなりたいな」

ふと、思い出す学園生達。未来の世界に行く前に無理して降ろした一同の事。
たった三週間だが、随分と会っていないような気がした。

「俺さ…魔法の世界に帰ったら…今度こそ学園祭やろうって会長に進言するんだ…」
「おいおい、縁起でもねぇな」
「そーだよ、なに判りやすい死亡フラグ立ててんのさ」
「一番死ににくいくせにー」
「あははは…」

しょうもない冗句［ジョーク］を口にしたアキに、ツッコミを入れるソル達。
この暫く後には、此処に居る皆が生命を賭けた闘いに臨まなければならない。それまでのごく僅かな間の平穏を、気の置けない者達と過ごすのは当たり前の事だろう。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

言葉も無いまま、ただ時間が流れていく。だが、気まずさはない。寧ろ、その沈黙は信頼の証だ。

大地を撫でる風、青空を流れる雲。深く地に根差す大樹は水を吸い上げ、天高く張った枝葉を抜けて木漏れ日が降り注ぐ。風も青空も光も、ものべーの能力によって作り上げられたモノだが――それが何だというのか。

「…ずっと、こんな時間が続けば良いのに」

…ユーフォリアの呟きに呼応するように、涼やかな風が吹く。五人皆が同じ気持ちでいるのだ、この”魂の安寧［アタラクシア］”こそはヒトが追い求めてやまぬ楽土なのだろう。

永遠者［エターナル］という存在の概念については既に説明してある。その”生命”が時間的には無限に近い事、そして…それ故に安寧を無くした存在である事を。

「続くよ、きっと…いつまでも」

「だな、俺達は全員命が尽きても”家族［ファミリー］”だぜ」

「えへへ…」

…同一でない存在の言葉などは、ただの知ったかぶりか出任せだ。それがどれ程辛いかなど、実際にそうである者にしか判らないし、判ってはいけない。

だが、紡がれたその『絆』は永遠を超えて繋がる。ならば、それは――同じ存在として語って良い筈だ。少なくとも、これだけの時間を共有してきた者達ならば。

隣のルプトナと少し無理をして手を伸ばしたソルに、わしわしと頭を撫でられてはにかむ彼女。
その様子を微笑ましく眺め、燦々と注ぐ木漏れ日を見上げていると…ずいっと。白い翼の付いた蒼い髪の丸っこい頭が突き出された。

「……（じ～）」
「……」

子猫のように『撫でて撫でてー』と、堂に入った上目遣いで訴えてくるユーフォリア。加入して間も無い絶を除けば、この”家族”内で未だに彼女が撫でられた事が無いのはアキのみ。
そしてアキがそういった事が苦手なのを熟知している外縁の二人は、彼が一体どうでるかを面白そうに見守っていた。

「……（じ～～っ）」
「「…ぷっ…クク…」」

パタパタと頭の翼をはためかせてまで促すその姿を見て、遂にソルとルプトナは忍び笑いを漏らしてしまう。

「……ハァ…」

…それに、アキも覚悟を決めた。ゆっくりと右手を彼女の頭に向けて伸ばし――

「そらよ」
「きゃふっ!?!痛～い…またぶった～!」

こうなったらもう絶対に撫でない覚悟を決めて、今まで通りにデコぴんをカマしたのだった。

「なんだよ、違ったのか？ああ、チョップの方が良かったか？」
「うう～っ！空さんなんてだいっきらーーいっ！！」

怒って両手をぐるぐる回しながら叩こうとするユーフォリアだが、アキは彼女の額を右手で抑えて、リーチの差で届かせない。

「……」

そんな気安く戯れ合う二人の様子を眺めながら、アイオネアは表情を曇らせる。実に羨ましそうに、制服にシワが出来てしまいそうな程に強く掌を握り締めた。
右側のユーフォリアを押し止める事に意識を集中していたアキは、それに気付かなかったが。

「…さてと、俺はちょっと野暮用済ませてくるわ。ちゃんと戦備えしとけよテメーら」
「分かってるってーの」
「空こそ、いざって時に足手纏うなよなー」
「べーーーっだ！」

ひらひらと手を振り、アイオネアの手を優しく引き立ち上がらせて共に歩き行く。
理想幹攻略に不可欠な創りかけの”切り札”を完成させる為に…だが、媛君の歩調に合わせてきちんとエスコートする事に注意して。

「…アイちゃんには、いつだって優しいくせに…」

…だから、そんな。ユーフォリアの羨ましそうに唇を尖らせた不満そうな呟きも、彼の耳に届く事は無かった……

作業を終えて自室から出て、溜息を漏らして凝り固まった肩を回しながら廊下を歩く。その右肩には大きな荷物を抱えていた。

「アキ様、具合が悪いのでしたらエリクシアを…」
「いや、いいさ。魔法におんぶに抱っこじゃ侠客［オトコ］じゃない。そういうのは癖になったら大変だからな」

心配そうな彼女に断りを述べて、彼は空元気を見せる。
既に太陽は真っ赤な西日を校舎に投げ掛けていた。集中し過ぎたかと、失敗の許されない重要な策戦の第一段階の準備の為と気晴らしも兼ねて屋上の扉を開く。

「誰かと思えば…神銃士か」
「あらあら、こんなムードのある場所に女の子連れなんて…逢瀬の真っ最中かしら？」
「はぅ……」
「うるせーやい…」

すると、斜陽に照らされて伸びる、二人分の影法師が目に映る。
『逢瀬』の単語に夕陽より真っ赤に茹で上がったアイオネアは神銃形態に戻ってしまい、慌てて受け止めた。

「いい景色ね、贋物［つくりもの］とは思えないわ」

…エヴォリアとベルバルザード、光をもたらすものの二人が夕暮れの風に吹かれていた。

その恰好は今まで通りの戦装束、共闘関係とはいえ馴れ合うつもりは無いという事だろう。

「そういうあんたらこそ、デートですかい？やっぱり相部屋なのはそういう…判ったから【重圧】は仕舞って下さい」

多少軽口を叩き、アキは肩の荷物を降ろす。『空［くう］』から生み出された彼の創造物に重量の概念は無いが、今回は精度重視の為に重量も本物同様に設定してある。

「それは…今回の戦いに使うものかしら？」

「勿論ですよ、じゃなきゃあ何に使うってんですかい？」

【真如】を基幹部に銃架や大型のスコープを取り付ける彼の手元をエヴォリア達が覗き込む。

使い方などは判りきっているが、物珍しさに興味を抱いたらしい。

「此処からならほとんどの部屋が見渡せる…覗きではないか？」

と、呟いたのはベルバルザード。冗句のように聞こえるが、覆面に覆われた彼の表情は窺えない。

「そーそー、此処なら女子更衣室までバッチリ見えるぜへっへっへ…な訳ねーだろ！！ってかアンタ、そんな事言うキャラかよ！！」

アキは匍匐射撃［プローン］姿勢でスコープを覗き込んで校舎の窓を睨［ね］め回してからノリツッコミを繰り出した。

「アハハ…やっぱり貴方、前世にそっくりね。ほら、もっと捨て鉢に三下っぽく喋ってみなさい」

「厭ですーだ…ったく」

そんな莫迦を言っている間に組み立て終わる。【真如】は世界最高クラスの命中精度を誇るという、独逸はワルサー社製の最高級汎用狙撃銃『ワルサーＷＡ２０００』をモチーフとしたライフル銃へと換装された。

「これで完成、っと…試し撃ちといきますか」

「ちょっと、弾は籠めないの？」

「俺には必要無いっすよ、姐御。『空［カラ］』が俺の…”俺達だけ”の銃弾ですから」

狙撃姿勢を取ると、校庭の端っこに捨てられている空き缶へと照準を合わせる。その時、エヴォリアとベルバルザードが意味ありげにアイコンタクトした事には、彼は気付けない。

しっかりと狙いを付けて、引鉄を引けば一一空き缶の手前の地面が吹き飛んだ。

「仰角修正…再装填［リロード］」

スコープの角度を修正し、銃弾を再装填する。再度狙いを付け直し、引鉄に指を掛ける。

今度こそ、空き缶は中央に風穴を空けられ弾け飛んだ一一と、いつ移動したのか、射線の先に立っていたエヴォリアが何かを呟く。

「…はぁ？一一って、オイッ！！？」

…読み取れた唇の動きは『こんなモノより、もっと練習になる良い的が有るわよ』。

その直後、召喚した腕輪型の神剣【雷火】より『オーラショット』

を繰り出した。光弾が真っ直ぐ、アキに向かって飛翔する――！

「――野郎ッ！」

それを、急速に狙いをつけて引鉄を引いた。『空』の銃弾は上手く光弾を捉え撃ち砕き、更に二発目三発目と、放たれた光弾を続け様に撃ち抜いた。

視線を向け直せば、エヴォリアは妖艶に笑いながら判り易いように唇を動かす。『なかなかやるじゃない、ならコレはどうかしら』と。完全にサディストの目だ。

そして更なるマナを神剣に籠めて、彼を狙い『ライトブリンガー』を繰り出した。全五発の光弾が、一斉に彼へ向けて殺到する――！！

――幾ら何でもあの数は捌けない。避けるしか無いか……！

「――――…ッ！！」

退こうとした瞬間、背に凄まじい殺気を浴びせ掛けられる。大薙刀【重圧】を構えたベルバルザードが、見えはしないが闘気によって『退がれば、斬る』と訴え掛けて来た。

――畜生め、やり過ぎだろうがよこいつら！！どうする…どうやればこの状況を斬り抜けられる！？！

思考する間にも、光弾は迫り来る。最早猶予など無い。

【大丈夫です、アキ様…アキ様が諦めない限り、私は…【真如】は応えます】

――…頭の中に響く早鐘の鼓動、まるで脳が心臓になったようだ。
既に解決策なら思い付いている。聞き慣れた『あの言葉』が在る。
思い浮かんでいるのは、彼の師の口癖。『幾ら速く動いても無駄。”時間ごと早くなる”私には敵いません』との、あの台詞だ。
（…そうだな。俺に…いや、俺達に不可能なのは――”不可能だけ”だろ、アイ！！）
【はい、アキ様。この【真如】はアキ様の進む未来の”遍く可能性を斬り拓く刃”ですから…！】
魂の奥底に燈る『生誕の起火』を呼び起こす。起爆剤たるその蒼茫の煌めきにより、己の内部時間を『加速』する。
それこそ、彼が辿り着いた極致だ。かつて神獣により物理的な加速を獲ていた少年は、こうして概念による加速を行う。
「【もっと早く…もっと精確に。枷となる理念を斬り拓いて…】」
天地の狭間の媛君には、時空すらも臣下の礼をとるのか。縮小していく己の時間感覚が周囲の時間と空間との間に断層を生み出し――限りなく『零』とした。
全異能の『対象にすらなれない』からこそ、彼は自分自身の能力の対象から外れる。それこそが自家中毒を覆す、概念の陥穽だ。
「【我が空なる刃［ヤイバ］は矛盾すらも撃穿［うが］つ――『タイムアクセラレイト』！！」】
その収束した世界より射手は――極限まで加速した干渉不能の銃弾によって、極限まで停止した事と同義の的を撃ち抜く――――！！！

一発につき五発、計二十五発もの銃弾を一斉同時に叩き込まれて、『ライトブリンガー』は全て消滅した。
エヴォリアは拍手しながら、神剣能力を使ってあっさりと屋上へと戻ってくる。

「ふふ、凄いじゃない。少し見直したわ」
「煩ッ…ハァ、ハァ…せぇやい…いきなり何しやがる…」

軽やかに着地して軽口を叩く彼女に対し、『生誕の起火』を使ったアキは肩で息をしている。それでも精一杯のジト目を向けた。

「恩を返しただけよ。あたし達は貴方達が居なきゃ死んでたもの」
「恩返しで殺そうとすんな！たく、助け損…っつーか、助けた覚えなんて無いんだけど」

尻餅を突く要領で起き上がって、制服をはたきながら言う。確かに、彼には『助けた』覚えなど無いのだから。

「別に良いわよ、こっちが勝手に恩義を感じてるだけだから。まぁ、これで貸し借り無しだけど」

言うだけ言って、階段へ向かっていくエヴォリアとベルバルザード。その背に向けて。

「有難うよ…今晩は一品増やしてやるから、覚悟しとけ…」
「…『今晩』が在れば、ね」

癖っ毛の頭を掻きむしりながら、そんな憎まれ口が投げ掛けられたのだった……

The 84th Name…"理想世界"

…ものべーが鳴き声を上げ、戦場への到着を告げる。大戦の支度を整えて屋上に集結した一行の進み行く方向には、光の膜に包まれた世界が在った。

「あれが…理想幹か」

呟いた声は屋上の風に融けていく。夜を迎える事無く昼間の照度に再設定された学園に、緊張が走るのが判った。それは彼も同じだ、胸元のお守りと羽の根付けを握り締めて決意を固める。

「んじゃあ…往くぞ、アイ」
「はい、アキ様…」

呼び掛けと共に伸ばした彼の左手に掌を重ね、法衣姿のアイオネアは頚輪状のアミュレット…かつてアキが彼女を召喚する触媒とした『透徹城』が変化した、夜明の空と同じ瑠璃色の宝珠が嵌まり後方からショルダースリングがリードのように伸びるソレを撫で、空間に波紋を刻む。
神銃形態へと換わった彼女を携え、理想幹に向け【真如】を構えた彼は銃弾に『生誕の起火』を練り込む。最近気付いた事なのだが、『オーラフォトンクェーサー』は無意識に『生誕の起火』を銃弾に練り込んで放っていたモノだったらしい。

「よいな、たつみ。初撃はサレスに到着と目標を知らせる為のモノ、重要なのは二撃目じゃぞ」
「諒解、その為の無限弾倉ですよネコさん」

空［カラ］より無制限にマナを生み出す彼の【真如】は、こういった条件で最も威力を発揮する。最大威力を連続で、消耗少なく撃てるのだから。

…『徹甲弾［シェルブリッド］』を装填した後、腕時計のカウントを合わせる。まだ開始はしない。

「一一第一射、発射！！」

放たれた螺旋の蒼茫の輝風。空間を軋ませながら飛翔する光の奔流は理想幹を被う障壁に当たり一一弾かれた瞬間、トリガーレバーを操作して再装填すると共に腕時計のカウントを開始する。

「四、三、二…第二射、発射！」

続けた第二射。虚空を穿つ銃撃が、障壁の全く同じ場所に命中する刹那一一内側からも強大な一撃が同時に撃ち合って、弛む事すらも許されなくなった光の障壁に風穴が穿たれた。
そこをものべーが通り抜け、進入に成功する。

「よし、突破成功じゃ！！」

ガッツポーズをとって、ナーヤが叫ぶ。その瞬間、実に自然な動作で旅団の皆が一一望を見遣った。いつしか精神的支柱となっていた少年を。

「…皆、気を引き締めていこう」

その望が宣言する。突き出された彼の右手に、多少疲れた風のアキを始めとした”家族”が、己の右手を重ねて円陣を作った。

勿論、クリスト達もユニットの内部で同じ姿勢をとっている。

「俺達は今から仲間を救い出して、神を斃［たお］す！誰一人欠ける事無く――帰るぞ！！」

「「「「「――応ッ！！」」」」」

そして掛け声と共に、一斉に手を天に跳ね上げて団結の儀式を行う。

対応して、クリスト達は各属性の技を号砲のように撃ち上げる。

そんな彼等の姿に円陣に加わっていなかったエヴォリアとベルバルザード、そしてナルカナは眩しげに目を細めた――…

雪の積もる『セネト＝フロン』島を守護していた白のハイミニオンは、理想幹を被う障壁に外部から攻撃が加えられた事に気付く。

戦闘姿勢を整えようとしたその時に外と内から同時攻撃で障壁に穴が穿たれて、敵が侵入して来た事にも。だが――…

「――っガハッ！！？！」

天より降った一条の滄光――その銃弾に心臓を撃ち抜かれ、それが何かを知る間も無く消滅した。

電撃作戦で『フロン＝カミィス』を占拠した旅団勢は、奪還の為に集結してきたミニオンを全て消滅させて一息つく。

「…作戦は単純、あれこれ難しく考えずに正面突破。先ずナルカナとユーフィー、エヴォリアとベルバルザード、俺の五人で各浮島を時計周りに進攻し、残りの面子で反時計周りに各浮島を攻略する。背後は気にしないで、前に進め。合流が第一目標だ、殲滅や追撃は無用。相手に隙を見せるなよ！」

「判ってる、そっちこそな！」

「気を抜くでないぞ！」

望とナーヤに作戦を伝え、別動隊のアキは【真如】をスリングで肩に担いで新雪に足跡を刻みながら駆け抜ける。視界に捉える中央島ゼファイアスは、正に百華繚乱。

「…敵地にしては綺麗過ぎよね。観光でもしたくなっちゃうわ」

エヴォリアの漏らした言葉も最もだ。『理想の世界』というだけはあって、実に美しい。

「ハハ、まったくだ。酒が進む事請け合いの極上の景色ですよ」

「あら、いいじゃない。よーし、この世界を攻め落としたら宴会と洒落込むわよ。これ、決定事項」

「フム、雪月花を肴に酒か…風情がある。我らも付き合おう」

「皆さん、戦いの最中になんて話をしてるんですか～っ！！」

…どこまでも管理の行き届いた、吐き気がしそうな程に一分の隙も無い『箱庭』の世界。

外周の浮島でこれでは、中央島に入ったらどうなってしまうのか。

浮島の端に転送装置を見付けて、ナルカナとエヴォリア、ベルバルザードが転送されていく。

その一行を見送り、アキは溜息を吐いた。

「…こういう時、俺らの能力って不便だよな」
【はぅ…すみません、アキ様…】
「んもぅ、アイちゃんを困らせるような事言っちゃダメっ！！」

…一方、転送装置の『対象にすらなれない』アキは、サーフボード状に変形した【悠久】に乗せて貰って浮島間を移動しなければならない。
島の下を見れば、厚い雲が覆っている。更にその雲の海は中枢から伸びる巨大な幹の周りで渦巻き、底の見えない奈落の深みへと呑み込まれていた。

――いや、行こうと思えば走ってでも行けるんだが、如何せん時間が掛かる。だったらユーフィーに乗せて貰ってマナを提供した方が割安だし、何より早く着く。

ナルカナが暴れているのだろう、セネア＝エラジオ島では早速爆炎が立ち昇っている。遠くでも同様に遠雷のような音が響いていた。

「次はあたし達で拠点以外に布陣するミニオンに一撃離脱［ヒットアンドアウェイ］で攻撃…だね」
「そうだ。攻撃が済んだらすぐに離脱して、別の部隊を狙う…」

目指す先は、枯れた果てた砂漠の浮島。アキはユーフォリアと立ち位置を交代して前方に立ち、格闘性能を犠牲にして狙撃性能を上昇させた射撃専用の神銃【真如】を構える。

「…収束する世界、極限の時よ。すべてを見通せ――『コンセントレーション』！！」

ユーフォリアが発動した、集中力を高める事で本来は防御力を上昇させるそのオーラ。
…理由は判らないが、彼女の魔法は【真如】にも効果を発揮する。アイオネアに触る事が出来る面子でも、それはユーフォリアにしか出来ない事だった。

「…先の先、機先を制す――『タイムアクセラレイト』！！」

鋭く研ぎ澄まされた意識の下に、スコープを覗き込んで【真如】を構え、気付いていないミニオンに向けてトリガーを引いた――

中枢ゼフェリオン＝リファに立つ二人分の影。エトルとエデガは、旅団の電撃作戦に感嘆の声を漏らしていた。

「…ほほう、成る程のう…一点を攻め落とし、そこを拠点に両翼へ進攻する…遊撃隊は敵を殲滅するのではなく、あくまで戦力を消耗させるゲリラ戦術を取るか…」
「その遊撃隊により後方の安全も確保している訳か。ログに載らぬ故に先は読めぬが、上手い作戦を考えおる…」
「あのユーフォリアという外部の存在は厄介だが…蕃神の転生体が考えそうな事なら考え付くわ」

…だが、笑っている。その程度は予想済みだとばかりに。
彼等にとってはミニオンなど捨て駒、いくら死のうと次のミニオンを造れば良いだけだ。

「しかし、気は抜けまい。まさかあの方があちらに着くとは…」

「ふん、だが今の我等にはチカラがある。如何に古の神とはいえ、勝てぬ道理は無いわ」

だが、『古の神』…則ちナルカナが旅団に着いた事については苦虫を噛み潰したような顔となる。
予想していなかったのではなく、その対策が極めて限られる為に。

「さあ、行け。奴らを一一”虚無”に塗り潰してやるのだ！！」

エトルの指先が鍵盤を弾くように動く。それに呼応して周囲の空間から、無気味で耳障りな駆動音が響き始めた……

最後に残された拠点の『セファ＝イレイシオ』を挟撃の上で更に頭まで押さえて攻め落とし、外周に浮かぶ六つの浮島は完全に旅団の制圧下に落ちた。
同時に中央島ゼファイアスまでの転送鍵が解除され、一行は一斉に…先回りしたアキ達ともほぼ同時に辿り着く。

「…さて、こっからが本番だな」

久々に安定した地面に下りて安堵の溜息をつき、狂った時間感覚を正常に戻すべく腕時計を覗いて、忙しなく動く秒針を眺める。
だが流石に酷使し過ぎたのだろう、視野の霞みにより今一つ効果が上がらない。横に立っているのがヤツィータだと判別するのにも、少し時間が掛かった。

「…どう思う、クー君？」

「どうもこうも、上手く行き過ぎてます。気に喰わねぇ…」
「…やっぱりそう感じるわよね、罠に誘い込まれたみたいだって」
「それでも、俺達には進む選択肢しか無いでしょう…がッ！！」

目を擦りつつ、腹立ち紛れに背後の転送装置へと四発の銃弾を撃ち込み破壊する。これにより撤退と一一外周の浮島を取り戻されても、敵『から』挟撃を受ける危険性は消えた。

「…相も変わらず、やる事が派手よね。ヤツィータお姉さん、貴方の行く末が心配よ？」
「ご心配無く、もう進路は決めてありますから」

呆れたような、頼もしそうな表情を浮かべたヤツィータ。彼はそううそぶきながら追加装備を外して、【真如】を元のライフル剣銃…『マーリンＭ３３６ＸＬＲ』型へ戻した。
取り外したパーツは波紋を刻んで、空間に融けていく。

「さぁ、鬼が出るか蛇が出るか…第二段階の開始といきますか」

目的地は『アルフェ＝ベリオ』、その転送鍵を解除する為に神殿に辿り着いた旅団一行に向けて一一光弾『ジャスティスレイ』に高圧水塊『メガフォトンバスター』、熱線『ホーミングレーザー』と、結晶弾『デュアルマシンガン』、重力弾『グラビティーホール』が纏めて降り注ぎ、更に六条の紅い光線が『地ヲ祓ウ』。

「一一こいつら、は…ッ！！」

そして、天空から降り立った全色合計数十機のノル＝マーターと…

「「「一一フシュウウウ…」」」

アルフェ＝ベリオ神殿を守護するように、三機もの抗体兵器が立ちはだかった。

「…南天神といい理想幹神といい、著作権料請求すんぞ…！！」
「まったくよ、抗体兵器を勝手に持ち出して…」
「何？抗体兵器がどうしたって？」
「い、いや別に…何でもないわよ。あんなの全然知りませーん」

忌々しそうに呟くアキと、何故かナルカナ。慌てて否定した彼女に疑わしい視線を向けた彼だったが、その真意を図る間もなく機械兵達が襲い掛かる――！！

The 85th Name…"激み し光"

進軍してくる、ノル＝マーターの一団。視認できるだけでも数十機、全体では既に数百機にまで殖えている。
更には抗体兵器も複数現れ、戦場は瞬く間に敵で埋め尽くされた。

「よく分からない相手だが、敵は斬り伏せるのみだ！！」
「今回ばかりはその通りね、行くわよっ！」
「僕が援護します！お二人は近づいてきた奴らを！」

迎え撃つ絶とタリア、スバル。天に向けた【蒼穹】より放たれた矢『ストレイフ』が複数に分裂し、雨の如く降り注ぎノル＝マーターに突き刺さる。掃射を逃れて接近した機体は『雲散霧消の太刀』や『アヴァランチ』に撃破された。

「しかし、なんという数じゃ…」
「うだうだ言っても始まらねぇ、俺達も往くぜ！」
「オッケー、ソル！こうなったらヤケクソでいくよー！！」

一行もそれぞれに応戦を始めて、戦場は直ぐに黒い煙に包まれる。
望と希美、カティマは背中合わせに立つ。

「ちっ、キリが無い…！！」
「拠点も無しにこの数は、流石に辛いですねっ！！」

…幾ら倒しても倒しても、終わりの見えない倍々ゲーム。ただ物量に頼って前進するだけの、単純な運用。だが、数が数だ。それだけでも充分に脅威となる。

「一一空さん、ナルカナさんっ！ノル＝マーター達は皆に任せて、あたし達三人でアルフェ＝ベリオの抗体兵器を倒しましょう！！」
「……そうだな、それがッ！一番の安牌だッ！！」
「仕方ないわね…あんた達、遅れるんじゃないわよ！」

じりじりと迫りながら攻撃を繰り出すノル＝マーターを斬り倒し、或いは撃ち倒して。
それなりに前方に居るナルカナと合流する為、アキとユーフォリアは協力して前進する。

《では、私達が援護します！》
《任せろ、活路は開いて見せる》
《全部ぶっ飛ばすよーっ！！》
《が、頑張りますね》
《……ふん》

目の前に踊り出たクリスト五姉妹の結晶体ユニット、そこから繰り出された光弾『ストラグルレイ』に氷槍『フリーズアキューター』、炎弾『ナパームグラインド』に横殴りの風『ブラストビート』、影の衝撃波『カオスインパクト』。だが、波の如く押し寄せる軍勢は瞬く間に損傷した部隊の替わりを補填する。

「…埒があかねェ…仕方ねェな、『アレ』でいくぞ！！」
「うん、任せてっ！！」

…アキの背後で、ユーフォリアは【悠久】を振り上げる。呼応して、【悠久】が光を放った。

「…塵は塵に、灰は灰に。声は…事象の地平に消えて一一『ダストトゥダスト』！！」

召喚された二頭の龍、青龍『青の存在』と白龍『光の求め』。
絡み合う双龍は、眼前の有象無象に目標を定めて――対消滅の吐息［ブレス］を放った。

それ自体に攻撃力は皆無。だが、それを受けたノル＝マーターどもは次々にマナが運用できなくなり、機能不全に陥っていく。
それは彼女やその周囲の存在とて同じだ――

「途切れぬ無き命の煌めきを此処に――『メビウスリンク』！！」

…ただ一人、『空［カラ］』を起源とした秘蹟［サクラメント］を手にする”神銃士”を除いて。
そしてその秘蹟の担い手はスピンローディングによって再装填した【真如】より産み出したマナを、薔薇窓のオーラへと換えて空っぽのユーフォリアとクリスト姉妹へ分配した。

《これなら…往きますよ【皓白】――『スカイピュリファー』！！》
《往くぞ【夢氷】、凍てつけ――『メガバニッシャー』！！》
《焼き尽くしちゃえ【剣花】――『メテオフレア』！！》
《出番よ【夜魄】、斬り裂け――『シャドウストーカー』！！》

それを糧に放たれた、各クリストの奥義。ミゥの放つ光のオーラは敵を粉砕しつつ味方の傷を癒し、ルゥの氷結結界に捕われた相手は凍てつき動きを止める。
そこにワゥの撃ち出した炎を纏う隕石が降り注ぎ、ゼゥの闇の爪が細切れの屑鉄に換えた。

《お二人共、御武運を…【嵐翠】、癒しを――『ハーベスト』！！》
「有難うポゥちゃん、空さん！」

「応！」

ポゥの癒しの風に活力を与えられながら、そうして漸く拓いた活路を彼等は駆け抜ける。

…その二人が辿り着いた瞬間に、ナルカナは抗体兵器達の光背から撃ち出された『地ヲ祓ウ』光を、『オーラフォトンバリア』を以て弾き返した。

「遅い！あたしを待たせるなんてどんな了見してんの…よっ！？たぁ…美少女をキズモノにする気？！」

「『きずもの』？」

「コラッ！子供の前でなんて事を言いやがんだ、コラッ！！」

だがその三人を巻き込むように、抗体兵器のオーラ『涅槃ノ邂逅』より生じた悪しき風が、彼等三人の急地を作り出す――…

「…精霊光の風よ、歩みを止めぬ者達の背を押す追い風となれ――『トラスケード』！！」

「…マナよ、闘の声となり戦場を駆けよ――『インスパイア』！！」

「震えるわハート！燃え尽きる程ヒート！！唸れ――『ヒートフロア』！！！」

その危地の深奥より、【真如】の聖刃から生じた蒼く澄む聖なる風が彼等を包んだ。激励のオーラは悪しき風を祓い世界を浄め、鼓舞のオーラと赤マナの風が場を活性化させる――が、生命の煌めきを奪うべく、抗体兵器の対治癒迎撃機構『無我ノ知慧』が発動した。

「よくやったわよ、下僕［しもべ］その1とその2！あとでご褒美をあげるわね」

「「誰が下僕！？」」

…だが、ナルカナの『イモータルミラー』により無力化され、能力を底上げされた彼等へと抗体兵器が纏めて口内の砲門を覗かせて、禍々しい光にて『天ヲ穿ツ』。

「…原初より連なるマナよ、無限回帰の刃となれ！これが…第一位神剣のチカラよ！！」

「…原初より終焉まで！悠久の時の全てを貫きます！！」

「…終焉より生じるマナよ、不断を断ち斬る澪風［カゼ］となれ！」

一歩も退かずに相対するナルカナの右手に超巨大な【叢雲】の影が現れ出て構えられ、サーフボード状に変型した【悠久】へと乗ったユーフォリアが真っ直ぐ翔ける。そしてスピンローディングにより、空［カラ］を起源とする無限光の銃弾を装填した【真如】を構えるアキ。

「一一最前［いやさき］より来たれ、始原の剣っ！！！」

「一一全速前進、突っ切れぇぇーーっ！！」

「一一濫觴の一滴へと…還れ！！」

事象の原初たる深紅の華焔の斬撃『プライモディアルワン』と悠久の時の象徴たる青白の閃光の突撃『ドゥームジャッジメント』に、終焉より回帰する蒼風滄水の銃撃『オーラフォトンクェーサー』。

三者三様の必殺の一撃に討たれて、抗体兵器達は『峻厳タル障壁』ごと纏めて粉砕された。

「ふふん、造物主のあたしに逆らおうなんて百周期は早いわ」

「…なるほど、あれを造ったのはおまえかい」

「ワタシ、ニッポンゴワッカリーマセーン」

得意そうに艶やかな黒い髪を掻き上げたナルカナを、ジト目で睨みながらトリガーレバーを操作して排莢するアキ。
一方、抗体兵器の群に突っ込んだユーフォリアはそんな二人を窘めようと残骸を踏みながら歩き――

「…ふぅ、二人とも。そんな事はいいから早く――…っ！？」

頚だけ残った抗体兵器の残骸が、まだその目を点灯させていた事に…機能停止の直前に最後の一撃を放った事に気付けずに。

「「――ユーフィーッ！！？」」

足元から沸き上がった、黒く汚濁した泥のような虚光［きょこう］の竜巻、『虚空ノ胎動』を躱せずに呑み込まれた……。

害毒を孕む竜巻が止んだ時、そこには何も無い――…いや、天高く巻き上げられ力無く失墜してくる彼女の姿。

「ッ！！」
「止めなさい、アキ！あんたまでナル化マナに汚染されるわよ！！」

それを確認するや、矢も楯も無く駆け出したアキをナルカナが押し止める。彼女が落下する先には、どす黒い光がまだ浮遊しているのだから。
そのナルカナをバスケのターンの要領で摺り抜けて、脚部に『威霊の錬成具』を纏う。

『タイムアクセラレイト』により概念的に加速しながら地面を勢いよく蹴り砕き、一直線に落下地点を目指して一一その道のりを塞ぐように現れた新たな抗体兵器が、光背から撃ち出した光の矢により『空ヲ屠ル』。

「一一邪魔だ、退けェェェッ！！」

縦に振り抜いた『光芒一閃の剣』にて光の矢を撃ち落とし、頭から叩き斬られて爆発すら無く屑鉄と化す抗体兵器。

「…クッ！？」

【一一あ、く…これは…何…？】

そこから、更にナル化マナが漏れ出した。ナル化マナに直接触れて、錬成具は腐り落ちるように崩れ瘴滅［しょうめつ］していく。それだけではない、息を吸うだけでも五臓六腑が焼け爛れるような感覚に襲われ、息を吐けばそれらを吐き出してしまいそうになる。

身も心もその苦痛に、ただ『膝を折れ、屈服しろ、逃げろ』と無様に喚き散らしているが一一

「…ソッ…タレがァァァッ！！！！」

それでもただ魂の命ずるままに、足を止めずに駆け抜ける。

ステンドグラスの薔薇窓様の円盾『精霊光の聖衣』を全周囲に展開して、一歩毎一呼吸毎に”生命”が蝕まれる苦痛と恐怖にタマシイが狂い死にそうになりながらも一一…文字通りに己の『生命懸け』で、護るべき大事な”家族”をヘッドスライディングしながら、ど

うにか受け止めた。

「ユーフィー…大丈夫か…？」

「うん…えへへ、また…空さんに…受け止めて貰っちゃった…」

「莫迦…”家族”なら当たり前だ。何回でも、受け止めてやる…」

普段から小さく華奢な躯はいつも以上に軽く感じられ、顔は蒼白で意識も混濁しているのか、夢見るように寝惚［ねぼ］けた虚ろな瞳で彼を見詰める。

「理想幹神の奴ら…『あたし』を好き勝手に使いやがって…！！」

苛立たしげなナルカナの声が響く。平素から瑣末事で不機嫌になる彼女なのだが、今回ばかりは本気で怒りを露わにしていた。

アキはユーフォリアを抱き上げ、何とかナル化マナの無い場所へとこけつまろびつ走り出す。

「おい、どういう事だ…大した傷は無いのに、何でこんなに…！！」

「それが…ナルって奴よ。肉体をマナで構成する…いえ、マナ世界の全てに対して相剋の存在が一一ナルなの」

剣世界の源『マナ』と対を為す、楯世界の源『ナル』に冒された光『ナル化マナ』。『実』に対する『虚』の力。

それは、オゾンに対するフロンのように。ただ一方的にマナを冒す猛毒だ。

「そんなどうでもいい事は聞いてねェ…どうすれば助けられるかを聞いてるんだ！！」

「助けられないって言ってるの！！ナルに冒されたマナ存在はナル化を経て…神剣宇宙から完全に消滅するの！！奇跡は起きない、焼

いた肉が生肉に戻らないのと同じ！！」

…ギリッと、奥歯を噛み締める。今の言葉が正しければ、どれ程の癒しのチカラを注ごうともマナの癒しは意味を成さないのだろう。

「巫戯化んな…諦めて堪るかよ！！元々空の俺なら堪えられる筈だ、気をしっかり持てユーフィー！！」

自分自信も霞んでいく意識の中で、か細い息を途切れ途切れに吐くユーフォリアに呼び掛ける。

今にも存在が潰えそうなその少女を現世［うつしよ］に繋ぎ止める為に、連鎖する生命の象徴のオーラ『リンケージ』を行おうとして。

「駄目だよ…空さん…アイちゃんは”生命”…マナそのものだから…きっと堪えられないもん…」

「莫迦野郎！”家族”を助けるのに可能性なんざ考慮できるかよ！！」

苦しそうに頸を振り、掌を重ねた彼女に窘められてしまう。それは正に真理だ。

とあるエターナルは悟りを啓いたその果てに『”生命”はマナのぶつかり合いで起きた現象を錯覚したモノ』と俯瞰しているという。

「もう…狡いよ、空さん…いつも意地悪なのにこんな時ばっかり…優しくして…」

「煩せェ、『鬼の霍乱』だ…」

…ならば、”生命”というカタチを持つ永遠神剣では一一…ナルには堪えられまい。

「判るの…だんだん、あたしじゃなくなっていくのが……だから、お願い…あの『無限の先の光』であたしをナルごと消滅させて…」

「……ッ…！！？」

…直ぐに、それが何の事なのかに思い至る。出雲の地で【空隙】のスールードの分体を因果ごと消滅させた”無限光の聖剣”で『討て』と、そう言っているのだ。

「…あたしのままで…あたしじゃなくなる前に…」

彼の武術服の胸元を震える指先で握り締めて、そして儚くも美しい…諦めきった笑顔を向けた。

一一カッと、頭に血が昇る。救えなかった鈴鳴［アイツ］と同じ笑顔を見せたユーフィー［ソイツ］が…どうしても、許せなくなった。

「ちょっとアキ…何する気よ！！」

握り締める【真如】の本体…無限を汲む空［カラ］の弾倉として使う、蒼滄［あお］き刃。

…鞘［サヤ］も鍔［ツバ］も柄［ツカ］すらも持たず、”生命”を奪えない出来損ないの永遠神剣。

一一上等、絶対死なせねェ…その”生命”を助けて、『助からない』とか『死なせて』とか言った事を後悔させてやる…！！

そのなまくらの聖刃を真正面から抱き寄せた背中に当てて一一

「先に謝っとく。もし痛かったら…殴りでも蹴りでも好きにしろ」

「…ふぇ？あ…く…っ…！？」

…〟生命〟を『断ち斬る』事は無く『繋ぎ結ぶ』優しき滄海［ウミ］の刃にて、魂を隔てる境界［カラダ］を貫き強制的に結びつけた

――…

The 86th Name…"水平線［ホライゾン］"

先ず肌に感じたのは、水の感触。生命を拒絶するように冷たく深く…水底は見えない。そこに到って漸く、自分が海中に没している事に気付いた。

「ーーぶはっ！！？ゲホッ！！」

穢れた波濤がうねる海面まで浮上して息を吐き、瞼にまで張り付く前髪を掻き上げる。途端に、肺腑を腐らせるような闇色の風が吹き付けて来た。

「此処は…」

左手に握る瑠璃「ラピス・ラズリ」の聖刃…波紋の刃紋のダマスカスブレード【真如】を右肩に提げた永遠神銃へと装填し直しながら、月の光すらも見えない曇天の夜空を見上げる。頭がつかえそうだと、取り留めも無い錯覚に陥る程に低い黒雲を。
更に、虚無の質量を持って幽かに澱んだ闇［ヒカリ］が埋める周囲を見渡したーー

「ーーていっ！！」
「あだーッ！？！」

その時、頭頂にガツーンと物凄く覚えのある痛みが走った。具体的に言うのなら、以前に魔法の世界で喰らわされた【悠久】のセルフ『プチコネクティドウィル』的なダメージが。
お陰で、まだ【真如】を装填していなかった永遠神銃を海中に落としてしまうが…何とかショルダースリングを足に引っ掛けて事無き

を得る。

「お、お前な…！助けに来た相手にそれは無いんじゃねェのか…」
「頼んでないもんっ！む～っ！！！」

神剣で強「したた」かに打たれた頭を摩りつつ立ち泳ぎで振り向けば、同様に立ち泳ぎをしながらもう一撃『プチニティリムーバー』を加えようと【悠久】を振り上げたユーフォリア。
流石に空間を削る一撃は避けたい彼は、その細腕を掴み【悠久】を取り上げる。

「きらい…だいきらい…意地悪、意地悪っ……！…怖かったのに…怖かったけど頑張ったのに…！！」
「……」

…それでも彼女は怒りを鎮めず、彼の胸板を叩き続ける。驚く程に弱々しいチカラ、それを甘んじて受けながら一一弐振りの永遠神剣を携えた両腕で、抱き竦めた。

”一一暖かく、清らかな…母なる再生の光…”
「……っ…」

そうして紡がれたのは一一…唄。美しい旋律の、名も無き『妖精の護り唄』。

”すべては剣より生まれ、マナへと帰る。どんな暗い道を歩むとしても、精霊光が私たちの足元を照らす”

頭ではなく、心に染み入る韻律。耳ではなく、魂を震わせる旋律。
雑音など消え果てた、ただ清音。

”清らかな水、暖かな大地、命の炎、闇夜を照らす月…すべてが私たちを導きますよう”

美しくも儚く、哀しくも鮮やかな。それはそう、正しく夜に怯える幼子に唄う子守唄。

”すべては再生の剣より生まれ、マナへと帰る。マナが私たちを導きますよう…”

無明の闇の底、昏冥の溟［ウミ］…神話に謳われる奈落［タルタロス］の深淵に於いて。咏［ウタ］唄うは、歩みを止めぬ”生命”の象徴たる空風［カゼ］の青年。

「…どっかのクソ生意気な餓鬼が言ってた。『諦めずに歩き続けろ。まだ途中だ、今はどれだけ辛くても、きっと希望の光は見える』…とかな。好き勝手に人様に希望の光を見せといて、テメェは絶望の闇なんかに浸らせやしねぇよ」

「…ぐすっ…そんな乱暴な言い方…してないもん…ばか…」

濡れた蒼い瞳に髪、零下［ナル］の淵水［ミズ］に冷えきった小さな躯は小刻みに震えている。勿論その震えは、水温のせいだけではない。

…随分と無理をした言葉だったのだろう。当然だ、ユーフォリアは負担とならない為、自分から意に沿わぬ言葉を口にしたのだから。

「…よっ、と」

「っあ、ちょっ…空さん！？」

その小さな躯を『お姫様抱っこ』で抱き上げながら、アキはオーラ

を足場として海面に立った。
ユーフォリアは不安定さから彼の頸に腕を回す。腕を回して、自分から近付けてしまった距離に赤面した。

「…諦めるなんて許さねェ。潔く死ぬ勇気を出すくらいなら…生き足掻いて見せろ。少なくとも俺は、そういう奴の方が好きだ」
「…それが、誰かに迷惑を掛ける事になっても？」
「たりめーだろ、そもそも”生命”は生きる為に生まれて来るんだ。死ぬまでは生き続けなきゃ、それこそ迷惑掛けてるってもんだ」

見上げてくる空色の瞳に応えて、見下ろす鳶色の瞳。暫し交錯する視線に、やがて。

「厳しいよね、空さんは…」
「まぁな。自慢じゃねェが、俺はドSだ。人が苦しむ姿を見るのが大好きなんだよ」
「……ほんとに自慢じゃないよ、ソレ……空さんのへんたいっ」
「煩せェよ、ッたく…」

少しだけ元気を取り戻した彼女の軽さを噛み締めながら、彼は軽口に軽口を返す。

一一まぁ、アレだ…なんつーか、お前が笑顔じゃねェと俺の調子が狂うんだよ…

周囲は既に、背景を削ぎ落としたように奥行きの無い漆黒が拡がるのみと成り果てている。
…腐食して朽ち逝くこの世界は、ナルに呑まれたマナの末路を示す箱庭だ。

「そういえば、ここ…何処？あの闇は全部ナルみたいだけど」
「…別の世界だってのは確かだ。俺は【真如】をバイパスにして、お前に”生誕の起火”とマナを流し込んでナル化マナを押し出そうとしたんだが…どうなってんだか」

その只中に有りてユーフォリアに【悠久】を返し、器用に脚だけで空中に放り出した永遠神銃の弾倉装填部に【真如】を装填する。

「でも、ナルは…マナじゃどうしようもないんじゃ…」
「だから、生き足掻け。何の為に生きてんだッての。諦めない限り、神すらも越え往く可能性を持つ唯一が”生命”だろうが」

そしてそのライフル剣銃【真如】に、彼の生命の象徴である”生誕の起火”を流し込んだ。
爆発的に増加するマナ、その生むステンドグラスのオーラを纏う。

「…それに第一俺は、黒くて靄々［モヤモヤ］してて定型が無くて。別の存在を浸蝕したり増殖したり、利用するようなモンが大っ嫌いなんだよ」
「ふぇ？」

そして、心底反吐が出るといった表情で吐き捨てた。勿論、脳裡に浮かんでいるのは『波動』の形状だった第五位神剣［カラ銃］。

「何にしろ、多寡が敵性宇宙の源なんざ幾らでも踏み越える…その為の無限弾倉だ！！」

刹那、焔のように揺らめく蒼茫の煌めきに包まれた【真如】が変移していく。施条剣銃［ライフル］から片刃大剣［エンハンス＝ソード］へと。

波紋の刃紋が久遠に無間に拡がり、刃に嵌まる瑠璃色の夜明の宝珠から無限よりも広大な光［可能性］を溢れさせている『無限光の聖剣”アイン＝ソフ＝アウル”』へと、移り換わる。

【はい、アキ様…貴方が願う限り、【真如】は…アイオネアは応えます！】

それを低く落とした右の腰溜めに左腕一本で構え――エターナルの生命力に比例するという、起源の煌めきを携えて。
神の定めた神剣宇宙の法［ロウ］を、零除算［ゼロ・ディバイド］にて『設問自体を無効化する』神殺しのトリックを武器として。

「――ハァァァッ！！！」

終わり逝く世界の果てまで須らく両断する水平の、蒼茫の煌めきを放ちながら振り抜かれた無限光の剣撃は汚濁の闇を討ち祓い、虚無にて均一に混じり合った天と地…空と海を斬り拓いた――……！！

「…綺麗」

呟く声は腕の中で。暗雲も闇風も穢波も澱水も祓い浄められた世界は…平等なる天と地。雲一ツすら無い蒼穹と鏡のように凪いだ滄海。その狭間に何処までも遠く遥かな、水平線が拡がる『平穏』。

「…ああ、本当にな」

…断線する意識の中。その悠久に続くであろう、劫莫たる水平線を瞼に焼き付けた……

…開いた瞼の先には、水平線ではなく石畳。その更に先には、休憩している家族の皆の姿がある。

「う…くっ…！！」

当のアキは、アルフェ＝ベリオの壁に背を預けて寄り掛かっている状態だった。

「目、醒めたのね。良かったわ」

応えたのは、目の前に屈んだ黒髪に和装の巫女。第一位の永遠神剣【叢雲】の意志ナルカナ。

「俺は…いや、今は何してる？」

「状況は一変したわ。拠点を確保した途端に敵が退いてったから、休憩してる…漏れたナル化マナはあたしが全部収拾してるし、今のところ皆は平気よ」

と、ズキズキ痛んで用を成さない脳を回転させようとした視界に、彼の膝を枕にして眠っている少女達が映る。

「「すぅ…すぅ…」」

右腿には永遠神剣第三位【悠久】を抱き締めた、蒼髪に羽根を持つ妖精の女剣士ユーフォリア。

左腿には空位なる不実の永遠神銃を抱き締めた、滄髪に花冠を戴く龍の修道女アイオネア。

…ユーフォリアはナル化から復帰した疲れ、アイオネアは無限光を使った疲れで眠っているようだ。正しく呼吸を刻んでいる二人に、安堵の溜息を零す。

「ユーフィーのナル化マナは完全に消えてるわ。にしてもあんた、”生誕の起火”を使い熟せるなんてね…」

そこに、少し見直したような視線を向けたナルカナ。だがそれに、アキは『意味が解らん』といった視線をもって答えた。

「えっと…起火がどうかしたのかよ？」
「はぁ！？あんた知らないで使った訳？！」

驚いた声を上げたのナルカナに、眠っている少女達がぐずる。アキは『静かにしろよ』の意を籠めたジト目を向けて一一最後に映ったのは。

「こんの…ド阿呆ーーっ！！」

物凄い勢いで顔面に減り込んだ、ナルカナの渾身の右ストレートだった。加えて言うなら、頭の後ろは大理石のような白い石材で組み上げられているのだ、その衝撃の逃がしようは無い。

「ふひゃぁ？！ななな、何！！？」
「はぅぅ、耳がぁ…」
「～～～～@§☆¥＄¢％！！？！」

怒声に跳び起きたユーフォリアとアイオネアが慌てる中、最早意味を成す言葉すら出せないアキは顔を押さえて七転八倒転げ回る。

「お、おいナルカナ！？何してんだよ！！」

その騒ぎに、流石に皆も気付いたらしい。疲れた躯を起こして集まってくる。

「〝生誕の起火〟ってチカラはね、時間樹を生み出すだけじゃなくて、ナルはおろか如何なるチカラにすらも『侵されないチカラ』なのよ！あんたは世界を生み出して、あの娘から押し出したナル化マナを制御した…」

だが、烈火の如く怒り狂う彼女の矛先は変わらずアキに向いたままだ。

「でもね、覚えときなさい！起火はエターナルにとっては一か八か！あんたがユーフィーにやったのはね、生きるか死ぬかの瀬戸際の策だったのよ！！」

「……！」

その指摘に、アキは身を起こす。知らなかったでは済まされない、もしかしたら取り返しのつかない事態になっていたかもしれない…その事実に驚愕しながら。

「な、ナルカナさん！あたしは、こうしてちゃんと生きてますから…空さんを責めるのは」

「いい…黙ってろ、ユーフィー…結果的にはそうでも、俺は間違いなく家族を危険に曝した…」

ナルカナから庇うように自分へと抱き着いたアイオネアを離れさせ、庇うように立ったユーフォリアを振り向かせて。

「…すまねェ、本当に…御免」
「あぅ…」

土下座に近い形で、頭を下げる。困ったユーフォリアは暫く何かを考え込んでいたが…不意に、彼女は彼の手を取った。

「……？」

突然の行為に、思わず眼前で絡む二ツの掌を見詰める。じわりと、体温が染み込んでくる掌を。

「あたしは嬉しかったよ、空さんが助けに来てくれて…見捨てても良かったのに助けてくれて…」
「……」

その彼に彼女は、はにかみながら優しく微笑みかける。誰もを癒す、日だまりの笑顔。
それは跳ねっ返りのこの青年にも、やはり同じ効果を及ぼした。

「だから、胸を張って。言ってたじゃない…『神を殺せるチカラなんかより人を救えるチカラが欲しかった』って。空さんは…あたしを救ってくれたんだよ」

二人の周囲には、それをやはり、優しく見ている皆の姿が在る。
怒っているのはナルカナだけだ。

「…まぁ、確かに起火は神剣じゃなくてエターナル本人のチカラ…しかも”生命”なんてカタチの神剣を持ってるあんたは間違いなく、第一位の神剣士すら上回る”生誕の起火”を持ってるでしょうね」

ぶすっと膨れたまま、ナルカナが呟く。彼女自身が一位神剣なのだ、認めるのは癪なのだろうが。

――…全く、格好つかねぇなぁ…やっぱり何処までいっても、俺はカマセの宿星の生まれか…

溜息を零したアキが立ち上がる、その刹那に。

『――そう、ナルすら制御する…そんなチカラを我々は望んでおったのだ!!』

『――漸く…漸く、見付けたぞ!!我等が計画の鍵［キー］を!!』

突如響いた老人と壮年の男性の声。同時に、アルフェ＝ベリオ全域を魔法陣が包み込み――凄まじい光を放ったのだった。

その魔法陣の発する光が消えた時、アルフェ＝ベリオから何もかもが消えていた。人は勿論、建造物さえも。

「…ッ何だ!?!」

「あ、あれ…皆は?!」

ただ、『全ての対象になれない』アキとアイオネア、そのアキと手を握り合っていたユーフォリアを残して。

「…何も驚く事はあるまい、此処には予め罠を張っておったのよ。転送装置による強制転移の罠を」

「クク…『策士策に溺れる』だな。そもそも、貴様ら如きたかだか数十年生きた程度の小童の策程度に…」

…そして一一その三人の目の前に立った二人の男。

「一一理想幹の神である我等が、裏を掻かれる筈も無かろうが！！」

枢機卿のような法衣に身を包んで、掌に紫の単眼を持つ魔法具型の第四位神剣【栄耀】を携えた老人…理想幹枝人エトル＝ガバナ。

妖術士とも魔術師ともとれる装束に身を包んで、金色の鐶が左右に三対嵌められた杖型の第四位神剣【伝承】を携えた男…理想幹枝人エデガ＝エンプルが立った一一…

The 87th Name…"深謀"

百華繚乱の中央島ゼファイアス。美しき箱庭のただ中にあってアキは、空間に波紋を刻んで永遠神銃と同化したアイオネア…ライフル剣銃【真如】を携えた。

「”予定以上”に早い進攻だったが、所詮は餓鬼の浅知恵よ。我等は貴様の能力を見極める為にわざと泳がせておったのだ」

地を踏み進んで来る足音と共に、錫杖【伝承】の鳴らす澄んだ音色と凄まじいプレッシャーが彼らへ投げ掛けられた。

身構えるアキだが聖なる刃に波紋の刃紋は無く、尽きさぬ筈だった蒼滄［あお］き輝煌も無限光の聖剣”アイン＝ソフ＝アウル”の使用による反動で濁りきっている。

【ごめんなさい、アキ様…】

（気にするな…今は休んでろ）

『空［カラ］』の銃弾も使えない今、何も斬れないその剣銃は無用の長物。加えて彼は、”生誕の起火”の連発で相当に消耗している。

「全くだ、我等の手の上で踊っている事にも気付かぬとは…愚かなものじゃ。くくく…」

同じく踏み出して来る足音、宙に浮かぶ【栄耀】の単眼が睨むように彼等に向けられている。

彼の隣ではナル化から持ち直したばかりのユーフォリアが杖代わりにしていた【悠久】を重そうに、苦しそうに構えた。

「外部存在に神にも侵せぬ存在…どうだ、手を組まぬか？サルバルの穴を埋める人材を探しておるのだ…計画成功の暁には望むモノをくれてやるぞ？」

だが、その消耗を見越して現れた管理神は歯牙に掛ける様子もない。それどころか、エデガは二人を勧誘までしてのける。
余計な事を嫌うエトルは、それにやれやれと肩を竦めた。

「ふざけないで！あなた達のやり方は好きになれません、話し合う事で解り合う事だって出来るのに…全てを一方的に、暴力や滅びで解決しようとするなんて！」
「仕方なかろう、悠長な方法ではこの時間樹は枯死してしまうのだ。この理想幹さえ我等が管理してきた。故に、我等こそ真の神…」

激昂したユーフォリアの言葉にも、エデガは落ち着き払っている。勝利する絶対条件を揃えての戦闘に、誰が不安など感じようか。

「…戯れはもう止せ、エデガよ。こやつらに我等の『理想世界』は理解出来ぬ。ならば今までと同じ…恐怖と暴力にて縛るのみよ」

マナが篭り、紫色の光が【栄耀】を覆う。同時に見開かれたエトルの、どろりと濁った青い瞳。
対峙する相手の瑕疵を見抜いて、幾度と無く彼に勝利を齎してきた『アナライズ』の眼だ。

一一知恵が武勇を凌駕する好例、ヤバい状況だ。数はイーブンだが…疲弊しきった俺達で全快の奴ら相手は厳し過ぎる。

「…奇遇だな、クソ爺…俺もそう思ってたところだ」

聖外套を脱ぎ、それをアイオネアの依代である透徹城の内に拡がる”真世界［アタラクシア］”へ繋げた空間の波紋に仕舞い込む。

「ーーまぁ確かに涎垂モノの条件だからよ…テメェらを消滅させてから考える事にするぜ！！」

そして、【真如】をスリングにて襷掛けで背負ったアキは疲労困憊の躯に鞭打って、腰のガンベルトに吊した拳銃【比翼】と【連理】を手に取った。
右手に紅金のデザートイーグル、左手に蒼金のコルトパイソンを。

ーー対抗する策は…一ツきりだ。あいつらがそれに気付いてくれるまで堪えられるかが、俺達の生命のボーダーライン…！

「ふん、残念だが…どうやら何処までいっても平行線のようだな。我等が計画の為、イレギュラーは排除する…」

溜息と共に掲げられた【伝承】、そのエデガの頭上に現れ出る神異『パワーオブブルー』。

「…何、あれ…！？」

「クソッタレめ…見せ付けてくれやがる…！！」

…嚇炎のビーストソード、切先がY字に分かれた岩の両刃斧剣、闇に染まるズー・アル・フィカール、灼熱の大鉈、氷の断頭剣、流水のクレイモア、砂のグラディウス、風纏う音叉状の和剣。
根源力にて編まれ、半透明に透き通る色とりどりの剣また剣が…

「ーー消えろ！！」

二人へ向けて一斉に刃先を揃え、剣の槍襖が撃ち出された――！！！

…光が消えた後、一行は浮遊感と共に迫り来る雪原の拠点フロン＝カミィスを見る。望は、【黎明】を抜き放ちながら舌打ちした。
寄り添うかのように側に居る希美［ファイム］も、すかさず【清浄】を構える。

「…ックソ、理想幹神の奴ら！」

難無く着地してのけた学園一行は、狙い済ましたように遅れて落ちてきたアルフェ＝ベリオの建造物の残骸を粉砕した。
降り注ぐ破片の雨の中で、一行は悔しそうに天を見遣る。

「してやられたわね…見なさい、アキとユーフィーが居ないわ」
「それもあいつらの狙いだってのかよ！？」
「間違いないわ、厄介な二人組を纏めて始末する気なんでしょう。弱っている今の内に、ね」

天を見上げ、ゼファイアスを覆う光の膜へと舌打ちしたナルカナの言葉に皆の表情が強張る。
中でも、ルプトナとソルは今にも走り出しそうな姿勢だ。

「じゃあ急がなきゃダメじゃん、早く戻らないと！」
「そうだ、急ごうぜ！！」
「…そうしたいのは山々だけどね、クー君が転送先を壊してるし」
「「空のバカヤローっ！」」

そんな二人を窘めながら、何かを思案しているヤツィータは溜息を零す。完全に裏を掻かれた、と。

「あの光は、理想幹を覆っていた障壁と同類と見るべきかのう…。とすれば、破るにはさっきと同じ方法を取るべきか」

「ですがナーヤ殿、今度は完全に打ち合わせ無しです。理想幹神達の妨害も在るでしょうし、流石に非現実的かと」

カティマの言葉にナーヤはむぅ、と唸り声を上げる。その瞬間、絶が神剣の気配が近づいて来るのを察知して腰を低く落し、【暁天】を構えた。

「…どうやら、向こうはこちらも逃すつもりは無いようだ」

近付く気配は、この戦いが始まった段階で感じていたミニオンよりも遥かに強大だ。加えて、天より降下して来る巨大な影達も在る。

「…ハイミニオンね。あたし達、光をもたらすものにも僅かに数体しか供与されなかった奴らよ」

「少なくとも三十は難いだろうな…しかも、抗体兵器まで」

眉をひそめながら、エヴォリアとベルバルザードが各々【雷火】と【重圧】を構える。それを受け、他の神剣士達も神剣を構えた。そこで、スバルが遠くを見遣る。

「…もう一つ、悪い知らせです。どうやら、ノル＝マーターも来たみたいですね」

「全く、次から次にうじゃうじゃと！」

《防戦は得意なのですが…流石にこの戦力差は厳しいですね》

《しかし、やるしか無いだろう。だが、此処を切り抜けたとしても

どうやって中央島に戻る？》

《…アッキーがさー、壊してさえ無かったらねー…》

《本当、後先考えない上に肝心要でポカやらかすのよ…アイツは》

苛立たしげに吐き捨てたタリア、ミゥは以前の経験から現状を危惧している。そんなミゥを叱咤して、ルゥは差し当たっての問題点を挙げた。

勿論ワゥやゼゥに解決策は無く、安易な事をした策士を糾弾するに留まる。

《そこなんですけど…考えが有ります》

だが、ポゥはそんな事を呟いた。皆が一斉に『えっ！！！？』と彼女に視線を向ける。

「本当か、ポゥ！？どんな？！」

《えええ、えっと、その、あくまで可能性に賭ける事になるんですけどどど…》

凄い剣幕の皆に詰め寄られて相当に吃［ども］った、緑の少女は彼女なりの『策』を口にした。

「成る程…確かに、それに賭けるしかあるまい」

「では、準備を。行きましょう、ナーヤ殿、ソルラスカ！」

「よっしゃ、久々だが気合い入れていくぜ！」

…ブリーフィングを終えた一行は役割分担を速攻で終わらせ、各自の行動に移る。ナーヤとカティマとソルの三人はフロン＝カミィスに引っ込んで行った。

「抗体兵器はあたしが相手するわ、雑魚は任せるわよ」
「分かってる…皆、征くぞ！！」

ナルカナと望の言葉に『応っ！！』と応え、残った彼等は再度戦闘を開始する――

土埃が晴れた時、そこには古戦場のような光景が拡がっていた。
剣［ツルギ］の墓標が林立するその死地に、『フローズンアーマー』と『イミュニティー』を並列にて展開したアキが、ユーフォリアを庇って立っていた。

「空さん、どうしてっ…！？」

彼女の声にも、彼は振り向かない。ただ眼前の、神を名乗る道化師を睨みつけるのみ。
その道化師に、良いように遊ばれている自身の不甲斐無さを歯噛みしつつ。

「大人しくしておればよいものを…貴様からかのう！」
「んっく…チカラを貸して、ゆーくん！！」

更に、エトルの【栄耀】より撃ち出された『ビジョンスフィア』の紫光を、ユーフォリアの『オーラフォトンバリア』が防御する。

「…ックソ…！」

そこで、アキは呻き声を漏らす。他は逸らす事が出来たが、運悪く

右の太股を貫き通した翠の和剣を伝って朱い血が地面に滴った。

「どうしてあたしを庇ったりしたのっ！」

【真如】の急速治癒が得られない今、負傷は直接的に戦闘力の低下を起こすというのに、彼の得意な高速戦闘の要である脚をやられてしまった。

「…ただの帳尻合わせだっての。気にすんな」

「気にするなって…まさか空さん、さっきの事…」

脚に走る鋭い痛みを堪えながらも、和剣を引き抜く。気が遠くなるが、敵の神剣の能力で出来たモノにいつまでも貫かれているよりは遥かにマシだろう。

「マナよ、光放つ薄絹となり害意を跳ね除けよ――『レジスト』」

…彼女の精霊光、抵抗のオーラを浴びた傷口は血を流すのを止める。マナ製の躯とは便利なモノだ。

「こう見えても守りは得意技だ…生き残るぞ。皆が来るまで…！」

「…はい！」

ユーフォリアを…何より、苦痛に屈しそうな自分を叱咤する。

「ふはははっ、仲間など来ぬぞ！外輪の浮島に送り返して抗体兵器やハイミニオン、ノル＝マーターを送り付けてやったのだからな」

「ゼファイアスに繋がる転送装置は無い…我等の駒に砕かせた故にな。加えて障壁も展開した、神獣に乗っての進入も不可能！」

…それを、管理神達は嘲笑った。丁度ゲームのプレイヤーが、絶対に負けない雑魚敵の起こす抵抗を嘲るように。

「どうせ、貴様達は死ぬのじゃ。少し遊んでやろう…」

「「…ッ!?」」

刹那、背後に【栄耀】が現れた。マナにより肥大し、その内部から漆黒の腕［かいな］が伸びる。

その狙いは――ユーフォリアだ。振り向こうとするアキだが、脚の傷により素早い動きが取れない。

一方で、対応したユーフォリアは『サージングオーラ』を展開するべくマナを練り上げて――…

「――真の神に刃を向けるとは、愚か者が…最早、刃向かう事すら許さぬ!!」

その空間を、凍えた空気が包む。エデガの神剣魔法…マナの恩恵を断つ『フリージングスフィア』が覆った。

「あれ…?!なんだか、身体が怠いです…きゃあっ!?」

それにより、マナの欠乏した彼女のスキルは不発に終わる。

加護の無い彼女に、剛腕の一撃は致命的。何とか【悠久】で防いだ彼女を高く打ち上げる。

「クッ…!ユーフィー!!」

追撃を掛けようとする【栄耀】、それに照準を合わせて引鉄を――

「貴様らがどうなろうと、我等には関係ない…」
「グあッ！？！」

…引くよりも早くエデガの言霊が響き、地面が炸裂した。同じく、空中に弾き出されて。

「苦悶の声を、上げるがいい！！」
「闇に沈め！！」

そして二人はそれぞれ、追い縋り打ち下ろす【栄耀】の黒い腕と…エデガの【伝承】が紡ぐ根源力の、巨大な光球に撃たれた――！！

The 88th Name…"蒼と滄"

エトルの『クライブリンガー』によって花畑へと叩き付けられて、咲き乱れる花を撒き散らしながら転がったユーフォリアが、仰向けに止まる。
その直ぐ脇の地面に投げ出された【悠久】が衝き刺さった。

「…パパ…ママ…助けて…」

痛烈に打たれた躯の軋みに呻いて目を開く。霞んだ眼差しの先には、彼女から僅かに離れてエデガの『パワーオブブラック』を受けて俯せに倒れたアキの姿。
それを見て、彼女は意識を飛ばしたのだった。

「ほう…これは」
「それなりに、やるではないか」

衝き付けていた【伝承】を下ろすエデガと【栄耀】を手元に戻したエトルが嘆息を漏らす。
…倒れ込んでいたアキの腕に力が篭り、もたつきながら…さながら幽鬼のように起き上がった為に。

「…カハッ…ハァ、ハ…！！」

…自在にカタチを変えて襲い来るエデガの根源力は、第四位という位と相俟って凄まじい威力を発揮する。それはアキが操るモノより遥かに強大だ。
その一撃をまともに受けて、それでも立ち上がった頑丈さと根性を一一嘲ったのだ、『無意味』と。

「笑えよ…笑えるのは生きてる間だけだ…あの世じゃあ、もう笑えねぇ…」

即座に纏った『威霊の錬成具』と武術着の上半身部分は燃え尽きて、彼が刻んできた”生命［れきし］”の証明…積み重ねた鍛練と研鑽、幾つもの修羅場で琢磨されてきた細身だが筋肉質でしなやかな猛禽を連想させる、決して消える事の無い幾つもの傷痕［れきし］が残る躯を曝している。

満身創痍の躯で携えたままの弐挺拳銃を衝き付ける。背負った聖刃は…未だに濁りきったまま。

【おやおや、随分追い込まれてるじゃないかボウヤ？】

【だらしねェ野郎だぜ、それでも媛様の伴侶か】

（…煩ッせェな、黙ってチカラを貸しやがれ！）

やはり空位の伍挺拳銃も【真如】と同じく無限の弾倉だが、現在は【真如】の加護が無い為にただのカラ銃だ。

銃弾は圧縮した根源力にて、箱型と円筒型のマガジンごと構築して装填する。

「――ハァァァッ！！！」

【比翼】からは灼けつく熱閃が、【連理】からは凍てつく水の塊が撃ち出された。合計十三発を撃ち尽くした彼は両マガジンを排して弐挺に再度創り出したマガジンを装填する。

反動［リコイル］による手首の痛みと、地を踏み締めた事による腿の痛みを堪えて前を見れば――

「問題無かろう、この程度」

エトルの【栄耀】より発せられた、マテリアルとフォースの両方に均等に高い防御力を誇る紫の球体バリア『グリムチューター』にて防がれている。

『…へぇ、ムカつくじゃないか。上等だね、消炭にしてやるよ！！』
『奇遇じゃねェか、同じ事を考えてたトコだ…凍り腐れ！！』

声と共に、各属性を象徴する空位眷属の化身たる霊獣達が現れ出た。
比翼の紅金鷲が右肩へ止まり、比目の蒼錦蛇が左腕に巻き付く。

そのどちらもが銃口の向いている方向へと――管理神達へと、名匠によりカットを施されたルビーとサファイアのように美しい魔眼の瞳を向けた。

『『――果てろ！！』』

刹那にて、ノル＝マーターが焼き砕かれ凍り砕かれた。迎撃不能の起源弾はその魔法の瞳［ほうせき］に籠められた『スターダスト』と『エーテルシンク』だ。
ギリシャ神話のメドゥーサ退治のような鏡のトリックは通用しない。同じ事をやっても、鏡ごと燃え尽きるか凍てつくだけ。

深淵の銃弾により敵の神剣魔法を撃ち消して戦闘マナを奪いつつ、
『初めから命中している』因果を持つ星屑の銃弾で撃ち砕く。
どれ程強力な防御機構を備えようとも、この弐挺の組み合わせの前には無力だ。

「少しはやるようだが、それではどうにもならんぞ」

…だが、エデガは赤と青の高位の神剣魔法を、それぞれ青緑と赤黒をプロテクションする根源力の盾『プリズマティックシールド』と『プリズマティックバリア』にて無力化した。
貫通効果が無い、それこそがこのコンボの唯一の弱点だろう。

「…クソッ…タレ……！」

完膚無きまでに自分の努力を凌駕された屈辱に、歯を食い縛った。

「甚振［いたぶ］るのにも飽きた、そろそろ始末するか……今すぐに、覚悟を決めるがよい！！」

その表情を満足げに見下した神は『やっと』、本腰を入れる。
くるりと一回転させた【伝承】が高く掲げられ魔法陣が空中に展開された刹那、周囲を真紅に染めてオーラが煌めいた。

「一一二度と邪魔が出来ぬよう…引き裂いてくれるわ！！」

永遠神剣に刻みつけられた様々な神の智慧『パワーオブレッド』により、彼の操る根源力が爆発的に膨れ上がったのだ。

「我々の計画は完璧じゃ…だが、備え有れば憂い無し。先に備えておくとしよう」

当然、その恩恵はエトルにも分け与えられる。いや増す【栄耀】の光が、妖しく拡散した。

一一野郎、一体何をしやがった！！

何も起きない神剣魔法の発動に、隙無く身構えたアキのそんな考え

を見透かしてか。エトルはニタリと笑った。

「…心配せずとも、すぐに勝負をつけてやるわい。罠にかかったと気付いた時が、死ぬ時じゃ！！」

「……ッ！！」

その刹那にアキは右を大型回転式拳銃トーラス＝レイジングブル、【海内】に持ち替える。

【追い込まれてから僕を喚ばないで欲しいなぁ】

円筒型の弾倉を装填すれば、彼の前方に現れたエメラルドの魔眼の幽角獣。

「悪いな…一丁頼む！！」

『何にせよ媛様の為か…仕方ない、守り抜いてあげるよ！』

蹄を帯電させて高く掲げた前脚を振り下ろせば、呼応して翠色の魔法陣が展開された。敵の魔法へと警戒して、せめて防護を固めようと岩石の城塞『ガイアブレス』を発動し――

「――くく、死相が見えるぞ！」

「…しまっ…！！？」

仕掛けられた悪性の罠である神剣魔法『ボトムレスピット』を発動させてしまった。エトルの背後に、妖艶な魔女の如き頭巾とローブを纏った女が現れる。

それこそが、彼の永遠神剣第四位【栄耀】の守護神獣『滅びの指』。

冷酷無比な殺人者である――！！

「こやつは相手を痛め付ける事が何よりも好きなのだからな…楽に死ねるなどと思うな、蕃神！」

エトルが、攻撃を許可する。口許しか見えていないが、滅びの指は薄く…残虐な笑みを浮かべて腕を指し出した。

「…チィッ！！？」

そのローブの下から迫り出した、無数の肉質な触手。それは汚れた津波のように競い合って、アキとユーフォリアに押し寄せた――…

中央島ゼファイアスの、更に中央に座す中枢部…巨大な時間樹の幹が貫く理想郷、幾何学的な紋様の刻まれた立方体の青い石が幾つも積まれている、ログ領域に直接のアクセスが可能な装置の置かれた『ゼフェリオン＝リファ』。

管理神の本拠にして、この時間樹エト＝カ＝リファの全ての歴史を記す本棚である。無論、一般的な人間が想像する本棚等とは似ても似つかない、光の奔流であるが。

その居城の守護の為に多数が配置されていたノル＝マーターを全て機能停止させて、ハイミニオンを消滅させた『人影』はゆっくりと、それに手を伸ばした……

前後左右、そして上下からも迫り来る触手の雨霰。対応して、持ち

替えた黒金のベレッタＭ９２Ｆと白金のＣＺ－７５の弐挺拳銃に、黒と白の各属性である二本の箱型弾倉を装填して構えた。
もう篭手と【天涯】に【地角】、下半身には『威霊の錬成具』製の根源力の鎧とホルスターに納めた【比翼】と【連理】くらいしか、残っていない。

【次は儂［ワシ］らの出番かな？】
【このような輩に苦戦するなんて、担い手としての自覚が足りないのではありませんかしら？】
（小言は後で幾らでも聞くからよ、今はチカラを貸せッ！！）

【地角】からは過重力の暗闇が、【天涯】からは分子崩壊の閃光が撃ち出される。入り乱れる黒白の銃弾が寄せる触手を撃ち砕く。

【まぁ、なんて汚らしい言葉遣い…宜しい、言質は取りましたわ。貴方には、媛様の伴侶に相応しい刃皇［はおう］となるべく騎士道と紳士の気品と帝王学をみっちりと学んで頂きますわよ！】

銃弾の残る【天涯】を連射しつつ、撃ち尽くした【地角】の弾倉を排する。空弾倉は、地面に落ちる前に根源力を満たし満タンの弾倉として再構築された。
すかさず左足でサッカーのようにリフティングし、軸にした右脚の苦痛に気が遠くなりながらも拳銃自体を横殴りに振り抜きリロードする。

【それは面白そうじゃのう…よしよし、儂も他者の心を手玉に取る手練手管をしっかりと教え込んでやろうぞ。くくく…覚悟しておくがよい】

今度は【地角】を連射しながら、撃ち尽くした【天涯】のマガジン

を排す。再びフルの弾倉と化したマガジンを蹴り返して、縦に振り下ろしてリロードした。
…しかしそれは、小石で大津波に太刀向かうような行為。少しずつ圧されて、やがて迫り出した岩石の城塞に背を預ける形になった。

『心の底から悍ましい…ワタクシ、久々にトサカに来ましたわ！！』
『くく、確かにのう…儂も逆鱗に触れられたのは久し振りじゃ！！』

顕現した、右腕に巻き付く黒闇龍と左肩に止まった白閃鳳は、蛇球のように蠢く触手の塊を睨みつけて吐き捨てる。
…それぞれ、ブラックオニキスとダイヤモンドの魔眼が見据える敵に狙いを定め――

『『――失せろ、下郎！！』』

【比翼】と【連理】と同じく迎撃不可能の起源弾として、魔眼の瞳から神剣魔法である『無限回廊』と『ライトバースト』を撃つ。
暗闇と重力の牢獄に囚われ、回避の出来ないそれらに閃光と焦熱の奔流が襲い掛かる。

「中々にやるではないか。だが、侮りはせぬ…ただ対応するのみ」

相当数の触手が纏めて消滅させられが、それでも滅びの指の攻勢は止まらない。この程度ではエトルの予測の範疇なのだ。

「なまじ力が有るから、戦おうとする…その力、奪ってくれる！！」

…そして業を煮やしたエデガが、駄目押しの『パワーオブブルー』を放つ。展開された剣の槍襖は、先程の倍近く。
アキと霊獣達の三つの口は揃って舌打ち、その触手の波と根源力の

剣による砲弾へと更なる起源弾を放った――！

The 88th Name ?・・・"蒼と滄?"

昏みに沈んでいた意識が、明るい方へと浮上する。ギシリと痛む躯に、ユーフォリアは不承不承瞼を開く。

「…っう…んん…?」

「あ…ゆーちゃん、大丈夫?」

その空色の円らな瞳に映ったのは、滄い髪に花冠を戴いた刧の媛君と…踏み締めた大地から岩の城壁『ガイアブレス』を発生させて、全周から押し寄せる触手から彼女達を護る翠の幽角獣だった。

『おや、目が覚めたかな。可愛いお嬢さん?』

「えっ…?アイちゃんに、貴方は…確かアイちゃんの…」

気付いたユニコーンは振り向くと、翠の魔眼と共に笑顔を向ける。

『覚えてくれてたなんて光栄だね、僕も君の事はよく覚えてるよ。一目見てずっと気になっててさ。もし良かったら今度、膝枕をして欲しいなぁなんて――』

「あの、空さんは、空さんはどこに居るんですかっ!?」

そこで、外から銃声が聞こえる。まだ外で戦っているのだと知り、彼女は【悠久】を握り締める。

『ちぇ、おかしいなぁ…効いてる筈なんだけど…』

「アキ様は外に居るの…私とゆーちゃんを護るように言って、一人であの人達と…」

「…やっぱり…さっきの起火での事を気にしてるんだ…!」

どうやら魅了の効果は、全く出ていないようだった。それに幽角獣は溜息を落として壁を眺める。
一方ユーフォリアは、壁を叩いて開く所が無いかを探している。

『止めときなよ、外は色々大変な事になってるから。特に女の子は行かない方がいいよ、エグいし』
「エグいって…と、とにかくここから出してください、早く助けに行かないと…！」

しれっと答えたユニコーンの言葉の通り、この城壁に隙間はない。魔力が練り込まれた超硬度の岩石は触手の侵入を許さない為に天蓋を作り、地中すらも固めているのだから。

『何でさ、護られてる内が華だよ。世の中、護って貰いたくたって護って貰えない奴だって居るんだからさ』

その発動元である、足元で輝いている魔法陣を…この幽角獣が術式を解かぬ限りは。

「…それは、違います。だって、あたし達は…家族だもん」
『家族だからさ、護りたくなるんじゃない？それが動機じゃないか、彼も君も』

ぷるぷると、少女は蒼穹と同じ色の髪を揺らした。そのさざめきに一角獣は、陽光の注ぐ大空を連想する。

「家族は護り抜くものなんかじゃない……護り合うものだから！！」
「……！」
『……』

その台詞にアイオネアはぎゅっと掌を握り締め、幽角獣は眼を細めて彼女を見遣る。

…それは彼女達の両親の在り方だ。かつて、とある世界での戦争中に出逢ったユーフォリアの両親は、その戦争で背を預けて戦い抜き結ばれた。それは決して一方的に護るようなモノではなく、互いに互いを護り合うモノだった。

永遠者として終わらぬ戦いの渦中に身を投じた今でも尚、想い合い護り合う。そんな両親の後ろ姿を、ずっと見続けてきた彼女だ。

そしてアイオネアの両親もまた、彼女を護る為に全霊を尽くして、自分達を護り合った。結果的には道を違えたが、それも互いが必ず最後には解り合えると知っていたからに外ならない。

「…だから、お願い…お馬さん、ここを出して！！」

『馬は酷いなぁ…これでも気高き幻獣種の代表格なんだけど』

ユーフォリアの必死の願いに溜息を漏らして、幽角獣は一一

『判ったよ、参った参った…』

天蓋の一部がカタパルトのように開く。そこから出ろと言う事なのだろう。

『残念だけど、僕には君より媛様の方が大事だから。どうなっても知らないよ』

「うん、ありがとうお馬さん！」

『はは…もういいや』

変型した【悠久】に乗り、そこを目指そうとして…彼女は俯く媛君を見る。

「大丈夫だよ、アイちゃん…直ぐに一緒に帰って来るから、一緒にお灸を据えちゃおうね」

「ゆーちゃん…私は…いつもそう…護られてばっかり……」

その唇が紡いだのは、自責の言葉だった。魂の契約を誓い合った、共に歩むべき伴侶の危機…そして生まれて初めて出来た親友も危機に飛び込もうとしているというのに、チカラを発揮する事も出来ない不甲斐無さに。

「ずっとずっと…父様［とうさま］に母様［かあさま］に、【調律】様に皆に…アキ様にゆーちゃん…」

「アイちゃん…」

…胸元で祈るように掌を組み、瞼を伏せて。永遠に弥栄［いやさか］なる”生命”を象徴する劫なる姫君は一一

「護られてばかりなんて、もう厭…迷う事なんて無い…私は…」

万象を”肯定”する銘［な］を持って、”否定”のみしか”否定”する事を許されない彼女は一一金と銀の、右左で色の違う龍眼の瞳を決意に染める。

「私は天地の狭間に生まれた唯一の空位永遠神剣【真如】…ありのままである事を肯定する…不可能は不可能だけ……」

その願いを”肯定”する。生まれて初めて、己の欲望を肯定した。

…そもそも『空位』とは名のみの、誰も就いていない位の事。故に

最低の位だが…その位に就いているからと言って『他の剣に劣る』と何故言えようか。むしろ、それ故に彼女は奇跡を起こせるのかもしれない。

この空位永遠神剣の本来のカタチは”生命［いのち］”、何であろうと限定されぬ『天壌無窮の可能性』を宿した空海［くうかい］だ。諦めない限り、”生命という奇跡”はあらゆる奇跡を起こす可能性を引き寄せられる唯一の奇跡。

「一一…遍く可能性を斬り拓く、”刃［ヤイバ］”なんだから…！！」

『終わりより始まる』というその刃が紡ぎ出す奇跡は、決定された未来を覆して超越する事。
それは神のチカラをもってしても否定出来ぬモノ…否定を否定する概念を宿す”刃”を止められる概念など、決して存在しえない。

故にこの刃とその担い手は、進む道を閉ざそうと立ちはだかる障害の全てを、凌駕してのける可能性を有している一一…！！

ずるりと蠢く触手に取り囲まれ、太刀［たち］尽くしたアキは力無く息を吐く。最早、引鉄を引く体力も気力も残っていない。

「よく堪えたのぅ…正直、予想外じゃったぞ」
「全くだ、前世とは比べるまでも無かったぞ。ただ…我々の敵では無かったな」

触手の海が十戒のように割れて、そこを管理神達が歩む。そして…
エデガが最後通牒を行う。

「もう一度だけ言おう…我等の駒と成れ。そうすれば貴様も、その岩戸の中の娘も助けてやる…」

…勝利を確信した、傲慢な言葉。それに、アキは――

「…そうだな、流石に…もう無理だし…これで終わりにしようぜ」

スッと、何も持っていない左手を…まるで握手をせがむかのように差し出した。

「…く、ははは…そうだ、それでよい…敗者とはいえ、礼を尽くす者にはそれなりの待遇を約束しようぞ！」

エデガは実に愉快そうに、快哉快哉と笑う。笑いながら直ぐ近くまで歩み寄り、永遠神剣【伝承】を持っていない方の左手をアキへと差し出して――組み合う。

「――あばよ！」
「――何ィィッ！？」

…前に摺り抜け、その左の篭手の裏側から引き抜かれて構えられた暗殺拳銃［デリンジャー］【無銘】に、左胸を撃ち貫かれた――！！

「それで勝ったつもりか？哀れな…管理神の力を見せてくれよう」
「――何ッ！！？」

だが、そのエトルの見下す声に呼応してか、エデガの周囲から黒い

マナが溢れ出る。
それはエデガの銃創に吸い込まれ、瞬く間に傷痕まで消し去った。

「…ふ、我々の伝承こそが真実となるのだ…貴様に付け入る隙など無い！！」

それこそ、エトルが仕掛けていた真の罠。受けた傷に反応してそれを癒す治癒魔法『ライフバーン』、この戦闘の開始時に仕込まれたモノだった。

「…我々に逆らった罪は、万死に値する…」

憤怒に染まったエデガの【伝承】から、光が溢れる。膨れ上がっていく根源力と共に一一…四本腕にヘルムを被った、筋骨隆々の蛮族の如き巨人が現れた。
その腕にはそれぞれ黒塗りの刀に深紅の斧、深緑のハルバードに青い鉈剣を番えている。

「一一楽に死ねるなどと、思うなァァッ！！」

それこそが、第四位神剣【伝承】の守護神獣『全能のパーサー』。
破壊衝動の塊、正しく獣一一！！

『オオオオォォォォォ！！！！』

咆哮と共に、四つの得物が抵抗も出来ないアキに向けて振り下ろし、或いは振り抜かれる。
滅びの意念が籠められた、暴風の如き乱撃は『ウィンドオブラス』。
技巧も何も無い、ただただ目に映るモノを破壊しようとするだけの暴力の権化。

それがアキを捉える瞬間ーー

「「「ーーー!!?!」」」

…三人の眼に映る、木っ端微塵に吹き飛んだ岩家と、そこから飛び出した一条の蒼滄い光。

そしてーー

「ーーチカラを貸して、ゆーくん…アイちゃん!!!」

アキを庇って両手に二本の大剣型の永遠神剣…穢れ無き聖光で形成された刃を持つ第三位【悠久】と、無限の光を纏った波紋の刃紋の刃を持つ空位【真如】によって、パーサーの得物四つを受け止めたユーフォリアの姿が映ったーー!!

The 89th Name…"生誕の起火"

フロン＝カミィスの周辺は、爆音と燃え立つ残骸、断末魔とマナに還り逝く死骸、焦げた鉄と肉の鼻を突く臭いが溢れるこの世の地獄と化していた。
美しかった景観は見るべくも無い程に荒れ果てていると言うのに、それでも戦いは終わらない。

納めたままの刀を構えて、無防備な背中に襲い掛かる黒。その居合『月輪の太刀』が一一

「凶運招く死の剣よ、あんたに死兆を見せてあげる一一『ストームブリンガー』！！」
「あは、あはは…きゃははは…」

神剣ごと、振り向き様に放たれた質量すら持つ闇の剣に断たれる。

「…あたしの名に連なる力、王の聖剣一一『エクスカリバー』！！」
「……重ッ傷…」

更にその隙だらけの背中を狙った青が『ヘヴンズスウォード』にて斬り掛かるも、不可視の剣に苦もなく両断されてしまった。

「フシュウウウ…！！」

その絶望的な戦局を打開すべく、抗体兵器と三体のハイミニオン、二十機を越すノル＝マーターにて構成された軍勢。
一斉に攻撃の姿勢をとったそれらが、攻撃を行う一一よりも速く、打ち鳴らされた拍手が一つ。

「叢雲の名の下に命ず。汝、世界霊魂の大海に還れ…」

ナルカナの詠唱と共に地面と頭上、その中間に三重冠の紅い魔法陣が展開される。

それと同じくして、赤い不死鳥が現れる。第一位永遠神剣【叢雲】の意思である不死鳥…ナルカナの守護神獣『転生と誕生の翼』が。

「――『リインカーネーション』！！」

その放った聖なる焔が、敵を包み込み焼き尽くす。死と再生の象徴たる焔に抱かれた全てが、可能性の大海へと還っていく。

…手も足も出ないとはこの事だ。長く艶やかな濡れ羽烏色の黒髪と白い袖を舞姫のように振り、戦闘開始以来『一歩も足場を変えず』に拠点を護りながら、正に剣舞を見せるナルカナ。

この地獄にただ中に在って、血の一滴すらも浴びずに咲き誇る大輪の菊花。常日頃の尊大で傍若無人な振る舞いも納得出来る、それ程に圧倒的な強さと美しさ。

「１＋１＝２じゃない…あたしと神獣、合わせて２００！１０倍よ、１０倍！！（※１００倍です）」

…これさえ無ければ、だが。

勝ち誇っているナルカナだが、敵はまだ残っている。ハイミニオンこそ全滅させているが、抗体兵器はあと十機。ノル＝マーターは、まだ五十機以上。

「このっ、ちょこざいなー！きーっ、せんせーに言ってやろー！！」

それらが全て遠巻きに取り囲み、ナルカナに向けて銃撃や神剣魔法、虚のチカラを放とうとする。
流石に護りきれないと焦り、子供の負け惜しみのような事を口走る彼女。

「――ナルカナ、準備完了だ！！」
「うひゃあっ！！？」

望がナルカナの手を引き、拠点に向けて走り出す。それを合図き、各々で戦っていた面々が集結して拠点に飛び込んでいった。

最後の望とナルカナが拠点に飛び込んだ瞬間に機械兵達は一斉射撃を遂行する。様々な銃弾、そして虚無の竜巻にフロン＝カミィスは木っ端微塵に粉砕された――

己が全霊を籠めた四本腕の殺撃を、自身の八分の一程しかない少女一人に防がれて。
パーサーの頭部を覆うヘルムから覗く巨大な単眼が見開かれて驚愕に…そしてすぐに血走り、烈火の如き憎悪へと染まる。

「……っ！！」

四本を受け止めたユーフォリアに襲い掛かる、根源力を消し飛ばす滅びの意念を孕む嵐。
これこそが『ウィンドオブラス』の真の威力、敵対者に戦闘マナを失わせてこの後のパーサーの殺戮を円滑に進める為のモノであり、

そして――

「鼠など…踏み潰すのも面倒だ。じっとしておれ、纏めて消し去ってやるぞ！！」

エデガの、敵の根源力を奪い取る『フリージングスフィア』も――

【――ゆーちゃん、私のチカラ…受け取って！】

「チカラが…マナが戻ってくる…ありがと、アイちゃん！」

「ッ…鬱陶しい連中よのぅ！！」

零よりマナを生み出す【真如】の前には何の意味も無い、余りにも無意味なモノ――！！

「――たぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

振り抜かれた【悠久】と【真如】の光の刃はパーサーの持つ得物を全て弾いた。

「いくよゆーくん、あたしたちは…！」

【ああ…いこうユーフィー、僕達は！！】

その隙を突いて、彼女はその二ツを重ね合わせる。右手で【悠久】の柄［ツカ］の中程を握って、左手では聖刃【真如】の茎［なかご］を重ねた、鍔に続く部分の柄を握り締めて…さながら、一本の両手剣［ツヴァイハンダー］のように振りかぶった。

「【――希望を繋ぐ、チカラになる！！」】

…本来の姿である【真如】は最早『空』そのものだ、何であろうと

それと同じ概念を持たぬモノには触れる事も能わぬが…故に全てと重ねられる。

「オオオオォォォォォッ！！！」

タタラを踏まされた巨人兵だが、むしろその反動を利用して右上側の腕に握る刀を振り下ろす。

「っ最大の力を！」

それに対応し、袈裟掛けに大きく振り抜いた【悠久】。鍔競り合うまでも無く、無限より莫大なマナを補給する”刃”による無限光の刃はその刀を粉砕した。

だが、パーサーは右下側腕に握る深紅の斧で薙ぎ払う。

【最高のっ速度で！！】

返す太刀で下段に振り払った刃が斧と共に地面を斬り刻る。そして、振り上げる剣戟で左上側腕から振り落とされた深緑のハルバードを粉砕して、ユーフォリアは高く…高く飛び上がる。

大上段に振り上げた全き聖なる剣は、彼女の姿を逆光とする。霞むその姿、それは幻か――あらゆる可能性を実現可能な刃の加護に、すらりと伸びたように見える手足、大人びた表情。

それを左下側腕の青い鉈剣を四本の腕で構えて防御する事を試みたパーサー。

「【最善のタイミングっ！！！」】

「ガァァァァァッ！！？！！」

振り下ろされたのは無限光の剣戟、希望を繋ぐ掛橋…彼女の父親の剣技『コネクティドウィル』そのものを見舞う。
鉈剣を両断されて、更に左側の腕二本を斬り落とされたパーサーが絶叫しながら送還された。

「あたしの命の全て…光になって、【悠久】と一つに…っ!?!」

巨人の狂戦士を真っ向斬り伏せたユーフォリアは更なる剣戟、時空ごと敵を削り取る…彼女の母親の剣技『エタニティーリムーバー』にてエデガを狙うが一一体内からの苦痛に動きが止まる。

「こんなの…空さんはどうやって、アイちゃんのチカラを…!」

【真如】のチカラは、担い手以外では堪えられない。『器』という概念であるからには限度を定めるモノ、故に無限以上を納める事は不可能だ。
彼女は呻きながら敵を睨みつけた。それは一体どんな因果か、則ち空位の”刃”が斬るのは永遠神剣を納める一一…

「ぬっ…我等は絶対だ、誤差など有る筈が無い!!」

そのユーフォリアに向けて全てを見通す『アナライズ』を発動して、エデガと同時に攻撃指示を出すエトル。その背後に立つ滅びの指の触手が、彼女を狙い伸びる。

「一一ウォォォォォォッ!!!」
「ぐっ!?流石…というべき…か」

…が、その濁眼に映ったのは神にすらも不可知なる可能性を携える青年の右手の【海内】…幽角獣の魔眼『エレメンタルブラスト』。

連射された翠色の雷嵐が、触手を薙ぎ払う。

『さて、僕の役目は此処までだ…後は自力でどうにかしてよね』

「何が『僕の役目は此処まで』だ。結局役目熟せてねぇだろ馬！！」

『うわぁ、あの娘にならともかく君に言われると心底腹立つ。それに仕方ないだろ？本気の媛様を、封じられる訳が無いじゃないか』

それと同時に、アキは脚の痛みを推して駆け出す。並走する幽角獣だったが、送還されて姿が消えていく。

【媛様…”生命”の生み出す可能性を封じ込めるなんて傲慢な事は、何にも出来ないよ。母なる海から上がって、やがては父なる星からすらも旅立とうとするようにね】

「成る程、道理だなッ！！」

…ならば、この生命も立ち止まる道理は無い。グリーヴを纏った脚を踏み込み、根源力を爆発させて加速を得る。

「一一我に叶うと思うておるのか、愚か者め！！」

その瞬間、エトルの手元で無気味な紫色の光を発しながら浮かんでいた【栄耀】が多数の分体を生み出した。

それらは自ら死地へと向かい来る、愚か者を取り囲んで浮遊する。

しかしアキは速度を落とさない。気炎の燃え立つ青年の瞳は、己の勝利を確信した老獪なる神のみを捉えている。

一一超えられる。そうだ、俺の師は時を詠む事で必勝を成す女神。

ならば…俺はあらゆる可能性を詠む事で必勝を成そう！！

「まだ抵抗するというのか…よかろう一一散れ！！」

同時一斉に、光を放つ【栄耀】。まるでレーザーの檻のようなそれは『ホロウアバター』。
捕えた獲物の神名や、永遠神剣が与える補助効果を砕き抹消する…永遠神剣から与えられるチカラで刃向かう愚者の虚妄を殺す為の、エトル＝ガバナの秘奥一一！！

「遅い一一！」

対して、”生誕の起火”…刹那の後の世界を迎える最小の一歩にして、神にも不可能な明日を斬り拓く最大の一歩を斬り拓くチカラだ。限界など無い。”生命”が象徴する無限の光は、時間すらも超越して”遍く可能性を斬り拓く”一一！！

針の穴を通すような身のこなしでアキは、加速し続けながら光線を全て掻い潜った。

「なんだと、我の予測を上回るというのかッ！？」

肉薄した弐騎、道化の神と渾名の通り”風”と化した伽藍洞の志士。至近に到って、繰り出されたのはその一一『拳』！！！

「一一…ッぎ…！！」
「ふ、はは…！痴れ者め、神剣も無しに我を討てると思うたか！！」

…それは当然、強固なマテリアル防御力に加えて悪辣なまでに高い反撃効果を持つ紫色の球体バリア『インフェナルチューター』にて護られたエトルには届かない。
それどころか、攻撃を加えたアキの方がダメージを受けてしまう。

「…ハ、解ってねェな。【真如】なら…此処に有るぜ！！」

【栄耀】の放つ圧力にバラバラに吹き飛ばされそうになる体躯の、そのど真ん中…心臓付近の傷痕を右手で叩く。その傷痕こそ、彼の契約の証。

彼の契約した神剣は”生命”なのだ。ユーフォリアが持っているのは、そのチカラのただの媒介。

「…どういう意味だ？！貴様の神剣は、小娘が…！」

そうして予想外の返答に焦る道化の神を笑う。真実などを知らせる義理などない、知者を気取る愚者だろうが愚者を気取る知者だろうが、彼にとっては笑うべき対象に過ぎない。

「第一テメェらな、計画通りとか侮らないとか…そんな事言ってる時点で一一！」

ミシミシと軋みを上げるバリア、擦れ合う硝子のように耳障りな音が内側に響き、その元凶たるヒビが見てとれる。

慌てて濁眼を見開いたエトルだが一一敵の瑕疵を見抜く神剣魔法、『アナライズ』の瞳でも、アキの拳には回避方法も脱出方法も迎撃方法も見出だせない。

「何という、こんなところで……我が敗れる？！そんな莫迦なッ！！」

その魂は概念的な対象にならず、その躯は決して侵されないのだ。

如何に全てを見抜く眼だろうと、見えないモノは見えない。

そもそも、彼は一一全ての可能性でその拳打を必中させる。それを可能とするのが神剣宇宙で唯一、”確率の支配者”たる永遠神剣空

位【真如】の担い手の権利…！

「とっくの昔に、油断してんだよ糞爺ィィィィィッ！！！！」

アキは黄泉と同調する防御である、『インフェナルチューター』を完全に粉砕してのけて。

「フグォォァァッ！！？！？」

必中にして必勝の絶拳、彼の師の奥義である『クリティカルワン』をエトルの鰓だらけの顔面に刈り込ませた――！！

背後に居た滅びの指を巻き込んで殴り飛ばされて、数十メートルも吹き飛ばされたエトル。

持ち主と同様に失神したらしく、送還された滅びの指。残ったのは…圧し折れた鼻からだらだらと血を流し、ささらのようになった歯を見せたままに白目を剥いて気絶している老人だけだ。

「見曝［みさら］せ…神剣の加護に頼りっぱなしで俺達に勝てるかよ。もっと躯を鍛えなカミサマ…」

拳を振り抜いた姿勢のまま、アキは返吐を吐く。無茶をした左腕は、一体どんな状態になっているか想像すらしたくない。

「エトル！？おのれ、若造どもめ…我が本気を知り恐れ戦［おののの］くがよい！この攻撃を凌げたらな！」

自身の神獣を打ち倒され、更にはエトルが敗れた事を悟り、焦燥を隠せなくなったエデガ。その背後に『パワーオブブルー』を遥かに上回った、圧倒的多数の剣が展開される。
その技こそ、エデガの奥義である『パワーオブグリーン』。指向性を持たせた根源力、この理想幹の潤沢なマナに応じて、それは正に無数ーー!!

「…っゆーくん、アイちゃん!」
【くっ…解ってるさ!】
【ゆーちゃん…【悠久】さん…】

その切っ先全てを向けられているユーフォリアが、何とか立ち直り剣を構え直す。
だが、苦痛は止まない。内側から引き裂かれるようなその鮮烈なる痛みに歯を食い縛ってーー

「ーーいけるな、ユーフィー!!」
「…あっ…空さん……うんっ!!」

…その彼女を背中から抱き抱えるように、アキが剣の柄を握った。己の左手を彼女の右手に、右手を左手に重ねて…『∞［無限大］』を描く。
その瞬間、今まで感じていた痛みが嘘のように消え失せた。

「理解しろ、等とは言わん。此処から…去れ!!」

今か今かと、獲物を狩れとの主の号令を待ち侘びていた剣の槍襖が通過点に在る全てを薙ぎ払って、暴威の剣嵐は到達点の若き二人の命を狩り取るべく、一斉に空間を疾駆するーー!!

「「【【ーーハァァァァッ！！！」」】】

揃って一歩を踏み出す。その剣嵐に対し、圧倒的多数の暴力に一歩を踏み出して、横一閃に。

無限光の刃は確かなカタチを為し、因果を絶つ聖刃は剣の嵐すらも打ち砕き斬り拓きーー

「この身が滅ぼうとも…為さねばならん…のだ……」

『プリズマティックシールド』で防ごうとしたエデガは、【伝承】ごと両断されたのだったーー……

The 90th Name…"【叢雲】"

極楽浄土を模した箱庭の中心世界ゼファイアスに咲き乱れた百華が、水平に振り抜かれた聖なる剣の起こした風によって舞い上がる。

それと同時に最小単位『マナ』の粒子と化してエデガ＝エンプルと永遠神剣・第四位【伝承】が立ち昇っていく様を見詰めながら。

「見てるか…誓いは果たしたぜ…レストアス…ッ！」

遂に幾多の無理が祟り傷が開いてしまった右脚の痛みに耐え切れず、気が遠くなりながら崩れ落ちるように尻餅をつく。

「ふきゃっ！？！」

「ーーイッ…！？！」

…その際に永遠神剣の柄を握ったままだったので、ユーフォリアも後方に引き倒されるカタチで尻餅をつかされてしまう。

それが右腿の上だった為に絶叫を上げてしまいそうになったが……何とか堪えきった。

「あぅ、ご、ごめんなさい空さん…！お尻が…」

「い、いや…気にすんな。むしろ気付けになったからよ…」

羽根を逆立てるくらいに慌てて、ユーフォリアはその小振りな尻をずらしたが…じくじくとした痛みは残る。

微かに眉をひそめたその様子に、彼女は暫くもぞもぞと動いて。

「…あ、あのね空さん。その……手を…離して貰えないと、手当て

が出来ないの…」

もじもじと恥ずかしそうに身体を揺らし、【悠久】の柄を握り合う掌を見詰めて。俯いた為にさらりと流れた蒼穹［あお］い髪から覗くうなじと耳までを真っ赤に染めた彼女は、ぽそっと消え入りそうな声で告げた。

「…あー……」

生誕の起火の使い過ぎて、数時間も間を置かずに何度も限界を突破した代償として。

…指先から肘、膝から爪先までは引き攣ったように動かない。四肢の末端の感覚はほぼ死んだも同然の状態だ。

「…悪い。流石にハナクソほじる力も、って奴でな。躯が言う事を聞かねェんだ、振り解いてくれ」

一一だから、不意にくらりと来たのはきっと…その疲れの所為だ。

「むー…振り解けって言われても空さんが両手握ってるし、あたしだってへとへとだし…」

「じゃあアレだ…アイ？」

呼び掛けてみるが、返事は無い。だが、瑠璃［ラピス＝ラズリ］の海の聖刃は確かに存在しているし、何より自身が生きている以上消滅した訳では無いのだ。

アイオネアも【悠久】も疲れ果てて、休息に入ったのだろう。

「さぁて、どうしたもんかね…」

「も～、それやめて～！」

何とか意識を持ち直し、丁度いい高さに在るユーフォリアの頭の上に顎を置いて、ふいーっと溜息を吐く。勿論、嫌がる彼女は羽根をパタつかせて抗議した。

「一一糞…餓鬼…どもが…！」

「「……ッっ！？！」」

…そしてそこが、まだ敵地だった事を思い出す。確実に止めを刺していない、残った神の存在を。

「貴様らのような……無知なる者などに…我らの理想世界の達成を…邪魔されて……堪るか…！」

「野郎…まだ生きてやがったか、しつけェな！」

…ふらりと立ち上がって、憤怒と憎悪に染まった青い濁瞳を向けるエトル＝ガバナ。

元々土気色の肌に加えて、アキの一撃を受けて変な方向に曲がった鼻と、その鼻から流れた血の跡が残った様は正しく怨霊。

「何故、理解出来んのだ…北天神も南天神も、全ては創造神により生み出されただけの紛いモノだ！今のままでは我らは、【叢雲】を封印する為だけに創られた時間樹…この『牢獄』の番犬に過ぎんのだぞ！？」

「…牢獄…だと？」

「……っ」

その悍ましい姿にそぐわず、呪詛の如き文句を吐き付ける。意味の判らない言葉に、つい鸚鵡返しをしてしまった。

その直ぐ真下で、ユーフォリアが息を飲んだ事にも気付かずに。

「我は認めんぞ…必ず、ふざけた宿命を与えた『奴』を『座』から追い落とし、我の理想世界を創り上げて見せる…その為にも！！」

狂気じみた声と共に突き出されたエトルの右の手元に浮かび上がる、無数のヒビが入った【栄耀】が軋みながらも紫光を発する。
あと一度でも何か衝撃を受ければ、割砕するであろうその神剣。

「ーー死ねェェェいッ！！！！！」
「…ックソ！！」

だが最早反撃どころか、アキにもユーフォリアにも立ち上がる気力すら残っていないーー！！

「…な、に…？ぐ、アァァッ！？」

…その右腕が青いマナを纏う槍戟に撃ち抜かれて断裂する。呆気に取られていたエトルだが、苦痛に直ぐに悲鳴を上げた。

「ーー……ちょっと、ケイロン。『外したらフォローよろしく』って言ったじゃないの。あの神剣を狙ってたんですけど？」
【…申し訳ありません、沙月殿。セフィリカに取り込まれている間に、どうも腕が鈍ったようです】「会長…！？」

…その『マーシレススパイク』の射手は、ログ領域から救出された学園生徒会長…永遠神剣・第六位【光輝】の担い手たる斑鳩沙月と守護神獣ケイロン。

「…万物の根源たるマナよ、間断無き命を我らに与えよーー『ヴァイタルエクステンション』！！」

そして…放たれた【栄耀】の紫光より二人を護ったのは、地面より迫り出した巨大な古木の守護神獣『賢明なる巨人』と、永遠神剣・第五位【慧眼】の担い手サレス＝クウォークス。

「こちらには『賢明なる巨人』の加護が在る。我々の前に、敗北の運命など存在しない！！」

「サレスさん？！」

その巨木より漏れ出すマナの慈光が、アキとユーフォリアを包む。圧倒的な癒しのチカラに、身体の傷と疲れが癒えていく。

「一一待たせたな、二人とも！！」

そこに望を先頭にした陣形を取る、旅団と光をもたらすものが駆け付けて、二人を囲んで防衛陣形を整えた。

「馬鹿な…！？貴様ら…どうやって此処に？！」

右腕の傷口を押さえて、よろめきながら空を見渡す。ゼファイアスを被う障壁は解除されていない。
もしも障壁が解除されれば、空間転移によりゼフェリオン＝リファに取って返し、潜伏している筈のサレスを始末する算段だった。

…だが、障壁が解除されなかった為にエトル達は中央島にサレスは居ないと判断、目下の障害である二人の永遠者［エターナル］を相手にしていたのだ。

「…残念だが、答えてやる義理も無い。ただ…よくやったな、巽、ユーフォリア。お陰で上手く事が運んだ」

「ハハ、さっすが代表。お見通しでしたか。相変わらず敵に回したくねェ…」

「よく言うよ、私の【慧眼】にも記載されない君の行動を判断する事、その深意を探る事がどれだけ大変だったか…情報が少ない君もな、ユーフォリア」

「あはは…」

指先で眼鏡を押し上げながら、彼は背後の二人を見遣った。呆れたような物言いだが、そこには労りの響きが有る。

「…さてと、無駄話はそこまでで良いでしょ？にしても雑魚よね、あれだけの好条件を整えておいて負けるなんて」

「ああ、此処までだ…」

進み出たナルカナ、その隣には望。そして『断罪の女神』ファイム＝ナルス……

「わたしを利用した事…わたしに望ちゃんを殺させようとした事…みんなを傷付けた事！絶対に許さないんだから！！」

否、永遠神剣・第六位【清浄】の担い手たる永峰希美。相剋の神名と衝動を、彼女の意志とファイムの意志に分割して有する事で克服した姿が在った。

「…我が…我の…予測が…」

一体どこで手筈を間違えたというのか。必ず勝てる筈だった戦いは最早、勝率こそが零。

相方は消滅させられ、手勢は壊滅寸前。本拠ゼフェリオン＝リファも陥落し、自身が展開した障壁の為に残った手勢が駆け付ける事は

おろか脱出すら適わない。

「…こうなれば、奥の手だ！」

…そうして引きずり降ろされた、『神座の守護者』の神名を持った道化が天に向けて左手を翳す。
その指先が鍵盤を弾くように動き、周囲にナル化マナが湧き出た。

それはエデガが消滅した地点へと凝集し一一足元から積み重なって彼を再構築していく。

「……おお…身体が…チカラが戻ってくるぞ…！！」
「まだじゃ、こやつらを倒さねばならんのだからのう！」
「何…！？ま、待てエトル…まだ、ナルは制御出来ぬ筈では…！よ、止せ、我を実験台にするつもりか…グァァァッ！？！」

既にエデガの蘇生は完了している。しかしエトルは、更なるナル化マナを送り込んでいく。

「おいおい、仲間割れか？なんだありゃあ…」
「知らないわよ、こっちこそ説明が欲しいわ」
「あいつら…勝手をあたしと同化してんじゃないわよ！！」

…ソルとタリアの疑問に答えた訳ではないだろう、ナルカナは相当に苛立った様子で叫ぶ。

「一一させるかッ！！」
「一一ぬぅっ！？」

そこに、【慧眼】を開いて燐光を纏ったサレスが突撃する。エトル

は対応しきれず、それに【栄耀】の攻撃でしか抗し得ない。

「サレス様ぁぁぁっ！！」

「落ち着け、サレスは無事みたいだぜ！」

爆発と閃光、土煙が満ち溢れる中にタリアの悲鳴じみた叫びが木霊する。駆け出そうとする彼女を、ソルが止めた。

その言葉通り、多少の傷は負っているがサレスは生きている。

「…おのれ、ナルの注入を阻まれたか…まさか、捨て身で来るなどとは思わなんだ」

「予想出来なかった、か？我々が生きているのは…現在［イマ］だ。幾ら過去から予測しようと、人は変わり続けている！」

「ッ…だが…十分だ！さぁエデガよ、精々時間を稼ぐが良い！！」

悔しそうに表情を歪めたエトル。だが直ぐにその姿が揺らぎ、空間転移にて消えていく。

「待て、逃がすかッ！」

「止めなさい、今はアイツより…コイツの方が厄介よ！」

それを追おうと駆け出しかけた望を、ナルカナが止めた。

その視線の先には――…

「…オオォォ…オオォォォ……」

空間に浮かぶ闇の塊。最早エデガの形などしていない、ただ、周囲を呑み込む底知れない闇色の穴がぽっかりと空いているだけ。

そこから感じられるのも、冷たい気配。マナを呑み込もうとする、ナル化マナの気配だけだ。

「何と言う…悍ましさなのでしょうか…」
「…これが、ナルに呑まれた者の末路という訳じゃな…」
…カティマとナーヤが、冷や汗を浮かべて神剣を構える。合わせて他の皆、躯の傷と疲れは癒えても気力までは戻ってきていないアキとユーフォリア以外がそれぞれに神剣を構えた。
「無駄よ、あんた達の神剣じゃあ呑まれるだけ。アキならいけるんでしょうけど…今は無能、か」
「…放っとけ、莫迦野郎」
ナルカナはふぅ、と溜息を零して望を見遣る。そして一一…
「望、あたしを遣いなさい。アレには、あたしも混じっちゃってるけど容赦しなくていいから」
白い光と共に、その身体が一本の剣に換わっていく。毛抜型の柄を持つ、鍔元の刃部分には青い宝玉の嵌められた優美なシルエットをした両刃の和剣。
そこから発せられる、思わず息を呑んでしまう程の神性と武の気配。その姿こそ彼女本来の姿である、永遠神剣・第一位【叢雲】だ。恐るべきは、それが『意志』だけに過ぎないという処だろう。
「…分かった。それしかなさそうだな…」
望は【黎明】を腰の鞘に戻すと、右手をその柄に伸ばす。ゆっくりと伸びたガントレットに包まれた腕が、しっかりと柄を握る。
「のわっ！何なのだ、今の声は？」

「…ナルカナ、どうかしたのか?変な声を出して」

その瞬間、念話にて何かしら悶着が起こったらしく、レーメと望が訝しむ。

「凄い力を感じる…俺の身に余るくらいに。でも、確かにこれなら奴も倒せるな…いくぞ!!」

だが、目の前の闇の存在を再確認した望は構わず駆け出した。迫り来る神剣に敵意を感じ取り、闇はナルに満ちた波動を放つ。呑み込まれてしまえば、マナ存在では耐えられまい。

「ハァァァァッ!!!」

望は両手で握り締める【叢雲】を大上段から振り下ろしてその悪意の波動を斬り開き、跳躍して一一その刀身を楯の力…闇の中心へ、深々と突き立てた一一!!

「オォオ…オオォオォォォ…!」

不気味な鳴動と共にエデガだったモノが霧散していく。後に残ったのは、何も無い虚空だけ。ナルに呑まれた以上、転生も無い。…可能性すらも呑み込む、真なる虚無がそこに在った。

「流石だな、完全勝利だぜ望!」

「ひー、ふー…いつもよりずっと疲れた…」

その戦い振りに皆は口々に望達へ賞賛の言葉を贈っていたが、未だ動けないアキだけは腕の中で身を震わせた少女に気付いた。

『ヴァイタルエクステンション』によって既に肉体的には完全回復

し、手は柄から離れてそれぞれの持ち主…【悠久】はユーフォリア、神銃に戻った【真如】はアキの左手に戻っている。

「…どうした、ユーフィー？」

「えっ…あ、うん…」

声を掛けられ、未だに彼の胡座の上に腰を落としていた彼女は振り返る。

力無く笑っているようだが、その目には一一…涙が浮かんでいた。

「もしも…もしも空さんに助けてもらえなかったら……あたしも…あんなふうになってたのかなって……怖く…なっちゃって……っ」

目の当たりにした死より悍ましい終末に、その小さな心は打ちのめされたのだろう。もしかしたら、自分もああして終焉を迎えていたかもしれない、と。

かたかたと身を震わせる彼女を、まるで子供のようだと感じて……まだ、子供だったんだと気付く。

「…莫迦。そんなしょうも無い事…金輪際忘れちまえ…いいな？」

…遥か高く巻き上げた花びらが、漸く降り注いで来る。色とりどりの甘やかな香気を含んだ、まるで風花のように。

「空さん…ぐすっ…」

遂に涙を零したユーフォリアは、その涙を見せたくないとばかりにアキの胸元に顔を埋める。

「…ぅん…うんっ…ふぇぇ……」

それを咎めたり逆らったりせず、彼は彼女が泣き止むまでずっと…
蒼く滑らかな長い髪を梳き続けたのだった……

The 91th Name…"家路"

ゼフェリオン＝リファを中心点にアルフェ＝ベリオ跡地の正反対の拠点、『リド＝ヴァーダ』に停泊するものべーを目指す一行。
アキは泣き疲れて眠ってしまったユーフォリアをおんぶした状態で【悠久】を支えに彼女の腿を固定、【真如】のスリングを襷代わりにして走っていた。

「…にしても、いつの間にか随分懐かれてるじゃない？私がいない間に何をしたのよ、巽君？」
「ふふ…本当に兄妹みたいだね」
「何もしてねっての、全く…」

くふふー、と茶化す沙月と温かい目で見守る希美にジト目を返す。

「っとと…」

…と、意識を逸らした為に小石に蹴躓いてよろけてしまう。当然の事だが、アキも疲労困憊なのだ。

「う～ん…むにゃむにゃ…すぅ…すぅ…」

だが…自分を頼り背中で健やかな寝息を立てる存在が居る以上は、痛いだの苦しいだの疲れただのでヘタレていられない。

「…ったく、人の気も知らねェでいい気なもんだ…」

歯を食い縛り、尽き果てた体力を尽き果てた気力で空転させる。
正しく『終わりから始まる』能力を持つ、永遠神剣・空位【真如】

の担い手の面目躍如たる芸当だ。

「ところでよぉ、空。どうやって俺らがあそこに駆け付けたか知りたくねぇか？」

…そこに、どや顔のソルが寄って来る。自分が立案した策でも無いというのに、余程彼に自慢したいらしい。

そんな彼の方を見ずに、アキは。

「にしても、流石はクウォークス代表。空間跳躍の門を建てただけで中枢の転送装置に繋げろッて事だと気付くなんて」

…前方を走っていたサレスに話し掛けた。呼び掛けられ、サレスは彼の隣に移動して来る。

「あんな場所に、これみよがしに建てられれば馬鹿以外は気付く。寧ろ、打開策に気付かなかったらとヒヤヒヤしたものさ」

「ですね…俺の方も限界ギリギリでしたし。敵に回したくねぇな」

ソル・カティマ・ナーヤ共通の、コンストラクタ…つまりは戦況を優位に導く為のアーティファクト構築スキルで、フロン＝カミィスに拠点間を繋ぐ『空間跳躍の門』を建設した。

その深意をサレスが【慧眼】にて読み取り、ゼフェリオン＝リファから直接中枢の転送装置にリンクさせて、本来は空間跳躍の門同士でしか出来ない転送を可能にする。それこそが、アキとポゥが各々で同時に思い描いた策戦だ。

…つまり、この策戦の肝は如何に管理神に気取られずにサレスとの連携を取るかと管理神を引き付けられるかだった。

要するに、この策戦による勝利は三人の阿吽の呼吸で仕組まれた事

になる。

そして漸く、アキはソルに満面の笑みを浮かべて振り向く。物凄く清々した顔で。

「…で、なんか用かソル？」

「…ううん、別に何も…」

すごすご退却していく、そんな彼をタリアが呆れた目で見ていた。

「…ところで、代表。ナル化マナとエトルはどうするんですか？」

…ものべーが見えたその瞬間に、ゼファイアスを覆う障壁が消えていく。それを驚く事も無く眺め、アキは質問を口にした。

サレスは眼鏡を押し上げて、深く思案した後に。如何にも『解っている事を聞くな』とばかりに溜息を吐く。

「永遠神剣があれだけズタズタに損傷しているんだ、エトルは長くは持たないだろうさ。ナル化マナは…抗体兵器を利用する」

虚のチカラを振るう抗体兵器は、その内部にナル化マナを貯める事が出来る。更に、理想幹の巨大な精霊回廊に接続すれば莫大な増殖が可能な設計になっている。

それを利用するという訳だ。

「制御系を奪い、残機を回収に。増殖した機も順次回収するように再設定して中枢をシステムダウンさせた。如何なる異能を持っても干渉不能の君の能力や攻撃と同じ。どんな策を弄そうと、アクセス出来ない以上どうしようもない」

「怖えなァ…本当、敵に回したくねェや」

…ニヤリと笑いかけたサレスに、アキは苦笑を返す。そして一行は、ものべーの作り出した”転移門”をくぐったのだった。

命からがら、中枢部ゼフェリオン＝リファに降り立ったエトル。

精霊回廊に繋いでいた抗体兵器やマナゴーレムは奪い取られており、ミニオンを生産しようにも神剣【栄耀】は割砕寸前だ。

もう…一撃を放つのが限度だと、神剣士の本能が悟っている。

「おのれ…おのれ…このままでは済まさんぞ…！」

それでも彼は憎しみを収めない。ログ領域から今も漏れ出しているナル化マナにも気を止めず、障壁を再展開し残存勢力を奪還すべく、もう動きもしないコンソールに急ぐ――

「――おじいさん、そんなに急いでどこに行くの？」

その時、突然背後から響いた声に、彼は冷水を浴びせられたような怖気を感じて振り返る。

そこに立っていたのは――…女。白いヴェールのみを身に纏った、露出の多い紅い長髪と瞳の美女…『最後の聖母』イャガだった。

「こんにちは、随分と急いでいるけど…どこかで、パーティーでも催されてるの？」

…ニコリと、彼女は優しく微笑む。だが、その笑顔は要するに――

食卓に並べられた料理に向ける、祈りや感謝と同じ。

「貴様…何者だ！一体どうやってここに入った？！」

「ごめんなさいね、それは私にも判らないの。何者なのか、何処に行くのか」

「くっ…頭のおかしい女め…」

一歩を踏み出したイャガに対して…じり、と。エトルは後退った。腐っても、時間樹を運営した神。彼女がどんな存在なのか、解らずとも肌で感じ取ったのだろう。

「どうして、逃げようとするの？私はお喋りがしたいだけなのに」

底の無い奈落のような深紅の瞳に、魂まで吸い込まれそうな錯覚に陥ってしまう。

…既に悟っている。逃げなければ、殺される。この女は始めから…危害を加える心算で現れたのだ。

「う、煩い、近寄るな！！我は神、理想幹神なるぞ！！」

「あら…貴方、神だったの……？ちっともそうは見えないわ」

その言葉に、エトルは憎悪の瞳をイャガへと向ける。彼は手負いの獣だ、追い込まれてしまうと何をするか判らない。

『アナライズ』により隙を探り、『ビジョンスフィア』を放とうと構えて一一

「そうね、時間も勿体ないから…早速、食事を摂らせて貰うわね」

と、突然に彼女は口を開いて一一閉じた。本当にただ、それだけ。

「…ふふ、貴方…見た目と違って意外とイケるのね」
「…？」

それだけでイャガの口からは骨を噛み砕くような無気味な音が響き、エトルが地面に倒れ込んだ。
一体何が起こったのかも判らずに、今まで地面を踏み締めていた筈の足を見れば――

「なんだ…これは？」

…綺麗さっぱり、膝から下が無くなっていた。右の腕を失ったのは記憶に有るが、足はいつ失ったか判らない。

「腕も美味しそうね」
「な…！なんだ、これは…？！」

再度、彼女が虚空にかじりついた――瞬間、左腕が無くなった。肩、腿、腹部…イャガがその口を開き閉じる度に躯が欠損していく。
だと言うのに、血の一滴も流れず痛みも無い。何一つ、彼には目の前の状況が理解出来ない。

「…は、ははは…そうか…これは…夢だな！？悪い夢に違いないではないか…！！」

…その余りにも不条理な存在に、神の誇りも矜持も何もかも、全てを彼は投げ捨てた。
これは夢だ、と。覚めれば消える悪夢に違いない、と。

「そうね、もう貴方に現［うつつ］の理は要らないわ。夢の続きは…私の胎内［ナカ］で見ていなさい」

それすらも彼女は優しく包み込む。彼女にとっては、あらゆる生命が赦すべきモノ。だから、なんであれ否定はしない。
今までで一番大きく、その口唇を開いて一一…

「一一一待て、その前に!!」

悲痛なまでの声で、『その前に』…一体、彼は何と言おうとしたのだろうか。
彼女の口が閉じられてしまった今、その言葉の続きが紡がれる事は二度と無い。代わりに響くのは、骨を噛み砕く咀嚼音。
最後に残っていた上半身を一気に喰われて完全に消滅した。それが『欲望の神』にして、理想幹神と呼ばれた男の末路。

「…美味しかったわ、でも…まだ足りないわね」

彼女は、剥き出しの腹を撫でる。人一人を呑み込んだにも関わらず、全く膨らんではいない。

「さぁ、次の食事を探しましょうか…」

そう、薄く笑って…イャガは遠くへと離れていく次元くじらの姿を見詰めた後に、ナル化マナを回収しようと集結して来る抗体兵器達を眺めた……
…少なからず危惧していたエトルからの攻撃は一斉無く、理想幹を

脱出したものべーは、悠々と分枝世界間に泳ぎ出た。

「どうやら、追撃は無いようだ。皆、よくやった…我々の完勝だ」

学園の校庭にて、いつ敵が来ても闘えるよう即応体勢を整えていた一行。一斉にシュプレヒコールが上がる――

「…はふ…ボク、もう疲れて歩けないよ…」

「あー、本当に疲れたわ…お酒が呑みた～い」

「ふう……早くシャワーを浴びて寝てしまいたいのう」

「ぐごー…」

「…ソルなんて立ったまま寝てるわよ」

「まぁ、器用なものですね…」

…事も無く、皆は一斉に脱力した。誰しも、極限まで緊張していたのだから。三々五々に警戒を解き、皆は神剣を仕舞う。張り詰め、凍てついていた空気が一気に弛緩し、朗らかな温かさが満ちていく。

「にしても……懐かしの物部学園［わがや］、変わってないわね～」

ぐっと背伸びをした沙月。ほんの数日だろうが、やはり離れていると恋しくなるモノなのだろう。

――ログ領域で前世『誕生を司る太陽神』”セフィリカ＝イルン”に躯を乗っ取られていたという会長。浄戒で前世は消滅したそうだが…そんな神が居たのか。俺の前世鍍金［メッキ］も剥げたな…

「…わたしもなんだか、懐かしく感じちゃうな…」

朗らかに笑っている希美。サレスによってログ領域から相剋を分断されて、二ツの意思が並列しない限り神名が目覚める事はない。事実上は克服したのだ。

「ふぅ、つーかーれーたー…少し休むわ」

…と、一番元気そうなナルカナが校舎に消えていく。

先程エデガを倒す際に、望に柄を握られてから様子がおかしかったのだが…持ち直したようだ。

「…じゃあ、俺もコイツを部屋に寝かせてから休むわ…」

「そうだな…明日の事は明日考えようぜ…あふ…」

それに続いて、他のメンバーも次々に校舎に入っていく。

人を背負っている為と、第一位の神剣を片鱗とはいえ使った疲労によりヘロヘロと歩くアキと望も、最後尾で校舎に向かった。

昇降口で望と別れ、途中自販機でミネラルウォーターを二ツ買ってユーフォリアの部屋に向かう。

蒲団に寝かせ肩まで掛布を掛け、枕元に永遠神剣・第三位【悠久】とペットボトルを置いて。

「……」

何かに操られるかのようにスッと、右手を…無防備なその頭に手を伸ばしかけて、はたと止める。

一一危ねェ危ねェ…幾らなんでもそれは無しだよな、うん。相手の同意も無しに…

ちらりと、盗み見る。スヤスヤと眠るユーフォリアの寝顔ーー…の頭の白い羽根を。
それは今でもピコピコと、まるで誘うように動いている。

ーーあれはやっぱ生えてんのか?!いやいや落ち着け、同意無しじゃ痴漢と同類…例え事後承諾でOK貰えたとしても、俺自身の矜持が許さねェェェ!!

ついつい摘みたくなる衝動に衝き動かされる右手を捕まえて、ぶん投げる。繋がっているのだから、意味はないが。残り僅かな気力を総動員して、部屋を後にしようとして振り返ればーー

「…何してるの、巽君?」
「……いや…別に」

…そんな様子を、完璧に不審者を見る目で見ていた沙月と希美と…バッチリ目が合ったのだった。

「なんつーか、その…大分疲れが溜まってるみたいで…手が出て」
「うん…そうだね。空くん、大分憑［つ］かれてるみたいだよね」

一応の理性の勝利に安堵しながらリノリウムの廊下を歩くアキと…今度は可哀相な人を見る目をする希美とジト目を向けてくる沙月。

火照った躯に冷たさは心地好いが、決して美味く感じないミネラルウォーターを傾ける。
本当ならばアイオネアの産む靈澪［アイテール］が飲みたかったのだ。しかしまだ休息している状態、無理な注文だ。

「全く…いい、ユーフィーちゃんに手を出すのは犯罪ですからね」

「そうだよ、最近改正された条例に違反しちゃうよ?経歴に前科が付いちゃうよ?」

呆れ顔の二人は人差し指を立てて、説教する口調になる。まだ戦闘装束姿だが、恐らくはこれから風呂なのだろう。脇に抱えた着替えの制服が、如実に物語っている。

「いやいや、そういう意味の手を出すじゃねェから!羽根が本物かどう…か…」

「…何よ?」

不本意な誤解をされている事に、反駁しようとして…アキは、沙月の頭を見遣る。

「…因みに会長…その頭の羽って…何ですか?」

そこには紅い髪と…白い『羽』が存在している。

沙月はにこりと、一部の隙も無い笑顔でアキに笑い掛けて。

「さぁ?」

「『さぁ?』ってアンタ…自分の事ですよね?」

「しかし驚いたわ…君が神剣士になってるなんて」

「わぁ、華麗なスルー。後、俺は神剣士じゃなくて神銃士です」

「あはは…相変わらず、空くんはそういうところにこだわるね…」

視線の先には、ライフル剣銃型の永遠神銃【真如】。深い瑠璃色のダマスカスブレードを揺らして、得意げに口を開く。

その時、丁度浴室とアキの自室の分かれ道にに差し掛かっている事に気付いた。

「本当、今回は食事当番の事とかで迷惑掛けてごめんね…お疲れ様、空くん」
「ま、そうね…ユーフィーちゃんをしっかり護りきった事は褒めてあげるわよ」
「あー…そういうの苦手だから、止め止め……じゃあ、また明日」
…そうして希美と沙月の二人は、揃ってふわりと笑う。こそばゆい気持ちになったアキは、頬を掻き歩き去ったのだった。

…そして理想幹を脱出した翌日、分枝世界間を航行するものベーは魔法の世界を目指している。
その時、泥のような眠りを貪っていた全員が自然に起きて結集していた。

「ううう…頼む、急いでくれ…もうもたねェ…」
「早く…早く持って来てよ～…」
「うにぃ……ゆーくん…どうして鞘みたいなカタチに…みゅーぎぃってだぁれ…？」
「んん～…ゆーちゃん起きて～」

台に突っ伏して掠れた声で呟く、ソルとルプトナ。まだ寝呆けて、こっくりこっくり舟を漕いでいるユーフォリアを、倒れないようにアイオネアが支えている。

別の台には望とレーメ、ナルカナとカティマとナーヤ。更にタリアとヤツィータとスバル。
エヴォリアとベルバルザードに、澄ました顔で【慧眼】の頁を捲る

サレス。

そして更に別の卓にミゥとルゥとゼゥ、ポゥ…まだ寝ているワゥの姿が在った。因みにいつもの生命維持ユニットには入っていない。この食堂はアイオネアとものべーの協力技で『煌玉の世界』の特殊なマナが満たされている。

「希美ちゃーん、こっちの焼売は出来たけど唐揚げは出来たー！？」
「はい先輩、今揚がりましたー！空くん、炒飯は？」
「悪い、もう少し掛かりそうだ…おい暁！餃子は焼けたか！」
「何！水餃子じゃなかったのか？」
「「「ええっ！？！」」」
「冗談だよ」
「「「暁ィいぃ！！」」」

…そう、食堂だ。厨房は忙しさの余り戦場に、食卓は餓えきった屍が幾つも突っ伏して地獄の様相を呈していた。

漸く全員に食事が行き渡った時、代表して望が立ち上がった。視線が集中した事を感じて、彼は少し緊張して表情を硬くする。

「えっと…皆、今回の戦いは皆の頑張りがあって成功した。誰一人欠ける事も無く帰って来れたのも、一重に皆のお陰だ…」

掲げられるグラス、注がれているのは学生の手前ジュースだ。ソルやヤツィータは『締まらない』と文句を垂れていたが。

「勝利を祝して――乾杯！！」

『カンパーイ！！』と唱和した瞬間、獣が獲物を貪るように騒々し

い食事が始まった。
その先陣を切るソルとルプトナ、ナルカナ、ワゥの奪い合いを余所に、アキは調理者特権として先に取っておいた料理…アイオネアに預けていた分に箸を付けた。

「アキ様…どうぞ」
「ング、ムグ…悪いな、アイ」

空位の永遠者である代償として、腹が減る事を忘れたアキは申し分程度に料理を口に運ぶ。
そんな彼に、左隣に座った制服姿の花冠の少女は靈澪を湛えた聖盃とたおやかな微笑みを向ける。

「…にしても、化身ってのもピンキリよねぇ。アイちゃんみたいな器量の佳い娘も居れば、あーんな騒々しくて生意気なのも居るんだしね。よーしよーし…」
「あぅ…えっとその……有り難うございます、サツキさん…」
「会長…それ、本人に聞かれたら大変な事になりますよ」

俯いて人差し指をつつき合わせるアイオネアを撫でながら、ポツリと呟く沙月の視線の先。
ソル達を『ディシペイト』により氷漬けにして無力化、料理の一人締めを図り…煌玉の世界の特殊な波長のマナが神剣魔法に合わず、逆に力を削がれて望のチョップでたしなめられてしまったナルカナの姿が在った。

「…ああ、そうだ会長。俺、嘆願が有ったんでした」
「嘆願？一体何かしら」

箸を置いて改まる。そして、決意と共に。

「一一学園祭、やりましょうよ」

理想幹攻略作戦を開始する前に、冗談めかして言っていたその本心を口にしたのだった……

The Other Name ?・・・"創世光"

…見上げれば満天の星の煌めき。見下ろせば底知れぬ奈落の闇底。
かつて神世の争乱の舞台となったその場所の名は『根源回廊』。
その最深奥、燐光を発する巨大な時間樹の『種子』が安置された、
原初の『座』に座している灰色の髪の女は…古き誓約のままに瞼を
開く。

己が目を覚ました理由は明白だ。彼女は再び、瞼を閉じて…その眉
をひそめた。

「…そうか。此処まで取り返しがつかない状態にまで陥ったか」

何かを『視た』らしい彼女の女にしては低く…凛と通る怜悧な声。
その声に喚ばれたかのように二ツの巨影が、通路を振動させながら
現れて一一…傅［かしず］く。
絶対的服従の姿勢。目の前の存在が己らを遥かに凌駕するものだと、
二ツの影は本能で知っている。

この時間樹には彼女の持つ神剣を上回る存在は有り得ない。
何故ならば、彼女の持つ神剣こそこの時間樹を創世したモノ。この
神剣以上の存在率は、決して有り得ないのだ。それが、この時間樹
の最低限の絶対条件だ。

ただ…或る壱振りの第一位神剣を除いて。

「もはや修復は不可能か…愚かな神共が、造物主の意志に逆らって
好き勝手にしたものよ。何より…『ナル』を持ち出すなど…！」

その影達が、女の孕む怒気により気圧される。その女が腰に佩す、斬馬刀の発する圧倒的なマナに。

「そもそも、神などを生んだのが間違いだった。我と貴様らだけで何も問題は無かったのだ…」

刹那に発された、虹色に輝く三重の魔法陣［オーラ］。その煌めきはまるで、夜空を埋める星々の輝きを凝集したよう。天に瞬く星も、地を染める闇も、何もかもを精霊光が打ち払う。

「…此処は牢獄だ、ナルカナだけを永遠に封ずる為に在れば良い。他の役目も存在も…不要！」

光により浮かび上がるは、金色の球体を背後に浮かべた…古き代の女帝のような装束に身を包んだ、神々しき創世の女神。

傅くは天使と悪魔の翼を右に、紫の鬣［たてがみ］を左側に靡かせた、強靭な躯と鳥類の脚を持つ白い体躯の巨大な大猩々［ゴリラ］。更に右腕と一体となった氷か水晶の如き刃を持ち、斬り落とした己の首を掴んだ巨人の女剣士。

その、二体の原初存在たる永遠者［エターナル］を従えて。そして、精霊光から生み出された創造主の軍勢『永遠者の分身［エターナルアバター］』達が、原初の舞台に犇めきながら整然と列ぶ。

「――創造神の名に於いて命ず。滅び逝く樹を零へと還し…新たな牢獄［せかい］を創世する！！」

戦前の鼓舞のように、高く斬馬刀を掲げる至高神。応えて、彼女の配下達が各々の得物を構える。

この時間樹の全てを終わらせて、始まりへと戻す為に。

…こうして、物語は終極に向けて加速していく――…

The 92th Name・・・"剣の心"

燦々と降る、ものべーの生み出す光。中庭のトネリコの根に敷いたレジャーシートに寝転んだまま、アキは伍挺拳銃の手入れを行っていた。

魔法の世界迄はまだ数日、本来は『根源力を操れる【真如】ならば、【伝承】の技を使えるのでは』と各色の剣を創ったが、創れたが撃ち出せずに悩み、意見を求めて『では、ワタクシどもの装飾品も創れるのでは?』と言われたのが運の尽き。無限の可能性を持っている癖に。

「…これで満足か?」

【…そうだねぇ…まぁ、これなら僕らしいかな。オーケーさ】

物凄く面倒臭そうに手入れ…いや、カスタマイズを行った【海内】に向けてげんなりと問う。

「そーかい、俺はプレーンな方が好きなんだがね」

【それは君の趣味、僕の在り方は僕が決めるさ】

銃口の制動機［コンペンセイター］と固定式の刺突専用バヨネット、銃身の上部にはレーザーサイト。グリップ下端には打撃用スパイク。大量のアクセサリーを装備されて、拳銃は原型から大分変わってしまっていた。

【ふふ、アタイらだってめかし込みたいものなんだよ】

【そういう事だ、黙って俺っちらの言う通りの強化をしてろ】

【貴方がた人だろうとワタクシ達神剣だろうと見た目は重要ですわ。どんなに心意気が優れていても、見た目が悪いモノは見向きもされ

ないのですから】

【左様、儂らも漸く神剣としてのカタチを取れた訳だからのう】

「判ったからキーキー言うなよ」

しかも、【海内】だけではない。【比翼】に【連理】、【天涯】と【地角】にも各々カスタマイズが施されている。

【比翼】にはコンペンセイターと、展開式の紅い片刃バヨネット。大型のコンペンセイターで自動式拳銃に見える形状となった、下部には青い片刃のバヨネットが装備されてある【連理】。

【天涯】には、固定式の白い両刃バヨネットとフラッシュライトが装備されている。同じく、深紫のバヨネットとフラッシュライトが装備された【地角】。

「んぁー、マジで疲れた…」

合計三時間も、チマチマした作業を続けた為に凝り固まった背中を伸ばす。

「…ん？」

その時、屋上の逆光に蒼と滄の影を認める。南側校舎に懸かる太陽光を遮って見上げてみれば、二人で一緒に洗濯物を取り込んでいるユーフォリアとアイオネアの姿が在った。

元々から背が低い二人組である、そのままでは物干し竿に届かない。なので踏み台を使うが…取込係は運動神経抜群のユーフォリア、運動音痴のアイオネアは受取係でそれぞれ生足と黒タイツの健康的な脚線美を見せていた。

「……」

…と、自分達を見るアキの視線を感じたのか、アイオネアがこちらを見る。そして嬉しそうに小さく控え目に手を振る。健気な笑顔、見ているだけでも癒されるというモノだ。何となくずっと見上げてしまう。それに気付いて、ユーフォリアはアイオネアの視線を追い中庭から自分達を見上げる彼の姿を認めそれに気付いて、ユーフォリアはアイオネアの視線を追い、中庭から見上げている姿を認めて少しはにかみながら手を振ろうとして。

「〜〜！」

何かに思い至って一気に顔を紅潮させ、スカートの裾を抑えて。頭から湯気を噴き出しそうな勢いで怒り【悠久】を喚び出して。

「ーーふギッ！？！」

アキを中心にして練り上げられた禁制のオーラが発動、その動きを完全に封じる。

抵抗するどころか声を出す事すらままならぬ彼の目に最後に映った光景…あわあわ慌てるアイオネアとユーフォリアの神獣である双龍が、彼に向けて対消滅のブレスを吐いた光景だった——…

漸く躯が動くようになり、受け身無しで数十メートルを転がされてタンコブだらけ土埃塗れになったアキがトネリコの樹の下に帰ってきた。

「…何で俺は『グラスプ』されて、止めに『ダストトゥダスト』を

打ち込まれたんだと思う?」

【スカートの女性を下から見上げれば、そうなって当然でしょう】

「ああ、成る程ね…ッて、逆光で何も見えなかったッての!!」

【『李下に冠を正さず』ですわ…というよりも貴方、見えたら見るつもりでしたのかしら?】

「…男としての本能で、つい…」

文句を言いながらも、伍挺拳銃を全てホルスターに戻して。誤解を解き、水を飲みがてらに手伝ってやるかと立ち上がる。

【暫く。お待ちなさいな、神銃士「ドラグーン」。何故最後の壱挺を仕上げないのです?】

「最後の壱挺…は暗殺用だから、アクセサリーは要らねェだろ」

それを、【天涯】が呼び止めた。よく判らない言葉に暫し考え込み…それが【無銘】を指している事に思い当たった。

懐から抜き出したフリントロックの拳銃をくるりと弄ぶ。

【そんなもの、聞いてみなければ判らないでしょう?】

「聞くって、誰にだよ。【無銘】に化身は一一…」

『居ないだろーがよ』と言おうとして。妙な気配に振り返る。が、そこには樹の幹に映る彼の影しかない。

他者の気配を感じて、首を傾げて向き直ろうとして。

一一待て。太陽は今、南中に在る。何で影が樹の幹に?

気付き、バッと振り向けば一一…明らかに質量を持った『影』が、空間に浮かんでいた。振り向いた彼に『やぁ』と言う感じで。

「う、何だコイツ気持ち悪ッ！？」
『……！？』

思わず口走ってしまった言葉に、大層ショックを受けた影は木陰で膝を抱えて『の』の字を書き始めてしまう。

【失礼な…その者こそが、媛様の至近から御身をお守りする直衛の『幻影死霊』。ドッペルゲンガーやシェイプシフターと呼ばれる類の存在ですわ】
「あ、悪いな…どうも黒くて靄々したモノは嫌いで」
『……』

謝罪を口に出されて、立ち直った影は『どうぞ宜しく』とばかりに腕を出してきた。しかもシェイクハンド。

「えっと、あんたもカスタマイズしたい？」
『……』

言葉は話せないらしく、フルフルと頭を振る。カスタムは必要無いらしい。

「そーか、あんたとは上手くやれそうだ」

謙虚な影の姿勢に好感を感じて、アハハと懐に【無銘】を戻そうとして。

【…ええ、ですが【無銘】自体を作り替えて欲しいそうですわ】
「もっと面倒臭せェェ！」

コクコクと頷いたその影に向け、【無銘】を投げ付けたのだった。

それから数十分後、学園の廊下をアキはフラフラ歩いていた。
漆黒の梨地に金のエングレーブが施されたデリンジャー、モチーフとなっているのは上下二連銃身の中折れ式拳銃『ディファイアント＝デリンジャー』だ。

「疲れた……」

『生誕の起火』までを使わされてしまい、疲労した彼はポケットに【無銘】を戻す。そして――…

「うーむむむ…」
「……」

廊下の向こう側を除き見ている、あからさまに挙動不審なナルカナの後ろ姿を認めたのだった。

――関わるな…アレに関わったら最後だ。君子危うきに近寄らず、退くのも勇気だぜ！

結論づけ踵を返す。足音を立てず気配を遮断する【無銘】のタツミ時代の隠密スキルを発揮して――

「あら、良いトコロに来たわね。ちょっと付き合いなさい、アキ」
「…台風除けの加護が欲しい」

にっこり笑う台風の目［ナルカナ］に肩を掴まれて、そのまま彼女

が居た位置に引きずられてしまう。

「他人の意見が欲しかったのよ。アンタはアレ、どう思う？」

「アレッて…」

嫌々ながら覗き見た先、そこに。

「ごめんなさい、望さん。荷物を持ってもらっちゃって…」

「有り難うございます…」

「いや、いいって。ユーフィーとアイは頑張り屋だからな……つい構いたくなるんだよ」「あぅ…えへへ…」

「はぅ…」

屋上から洗濯物を取り込んで来たユーフォリアとアイオネアの荷物を持とうとしている望。その望が二人の頭を撫でている。

「…アレが、どうかしたのか？」

一一正直言えば。望が女の子の頭を撫でてるのなんて見飽きたぜ。あのクソッタレハーレム野郎が…

「どうかしたじゃないわよ！おかしいじゃない！」

そんなアキの反応が気に食わないのか、ナルカナは眉を吊り上げる。そしてビシリと自分の、二本のアホ毛の辺りを指差した。

「あたしは望に一度も撫でられた事無いわよ！」

「……じゃっ、俺忙しいんで」

スッと敬礼して場を後にしようとする。しかし、喉元に【叢雲】の

影を突き付けられては止まるしかないだろう。

「望を観察して判ったんだけどね、よく希美とかユーフィーの頭を撫でてるのよ。なのに、あたしを撫でた事は一回も無いのよ」

「死ぬ程どうでもいいグヘッ!?」

鼻白んだアキに、右ストレートが刺り込まれる。彼は慌てずに持参したポケットティッシュをこより、鼻に詰めた。

「…慣れていくのが自分でも解る…んで、何だよ?俺に何を望んでるんだお前は。撫でて欲しいの?撫でたら解放してくれるの?」

「…【叢雲】の名に於いて命ず。汝、世界霊魂の大海に還れ…」

「判った、悪かった…とにかく、どうしたいのかを説明してくれ」

真剣に『リインカーネーション』の詠唱を始めたナルカナを制し、とにかく解決策を考える為に話を聞く態勢に入った。

「まぁ…何て言うか…ほら、こないださ、望があたしを握ったじゃない?」

「エデガを倒した時か…そういや、あん時様子が変だったよな?」

「うん、その時に…」

…と、ナルカナは急にしおらしい表情になった。自分の体を抱いて、頬を赤く染める。

「何て言うかこう、胸がきゅーってなると言うか…あれ以来、望が他の女の子に優しくしてのを見ると…妙にムカムカするのよ」

「…あのクソッタレハーレム野郎は…」

溜息混じりに、つい反吐を吐いてしまうのも仕方あるまい。握った

だけで惚れさせるなど、一体お前はどんなテクニシャンだと。

――スゲーな、怖いモン無しだなアイツ。いつか背中から刺されるんだろう。そうじゃないと、世界に奴の遺伝子しか残らない。

「だから、どうにかしてあたしも撫でられたいの。どうすればいいか今すぐ三つ作戦を考えなさい。五秒以内にね」

「無理、無謀、無駄パァ！？！……何回俺の顔面にコークスクリューぶち込んだら気が済むんだテメー、メンドーサ気取りかァァッ！」

再度顔面に右ストレートを受けて、遂にキレたアキ。だがナルカナは廊下の向こうを覗いたままだ。

「あの二人と希美とあたしの違い…うーむむむ……はっ、そうか！皆色々と小さいわ！？まさか望は…小さい娘好き！？！」

真剣に悩む彼女の表情に、溜息を禁じ得ない。脳天気な彼女だが、思いの外一途なようだ。

――羨ましいというか何と言うか…本当、業の深い野郎だ。良い女ばっか独占しやがって男の敵め。せめて毎日一回は箪笥の角に小指ぶつけてくんないかな、アイツ。

…というか、彼に惚れる女性は皆が誠心誠意一途に、他には見向きもしない上に見た目も極上の女性ばかりだ。希美も沙月もカティマもルプトナもナーヤも皆が皆。

「…まあ、素直になれば良いだけだと思うけどな」

「へっ？」

…ポツリと呟かれたその言葉に、ナルカナは振り返る。ポカーンと口を開けた無防備な表情だった。

「…一言『撫でろ』って言えば、撫でてくれると思うぜッて言ってんだよ。アイツ、間違いなく振り回されるの好きだし」

「で、でも…断られたら?あたしは…嫌われ者のナル神剣だし…」

思い出す、理想幹戦でナル化マナに包まれた時の感覚。この宇宙を充たす生命と敵対する…六十兆の細胞一つ一つが纏めて反吐を吐くような嫌悪感を。

「…それが、ナルを『自分』って言ってた理由か…」

「っ…何よ、文句ある!あたしは特別な第一位の永遠神剣なのよ!担い手なんて居なくても【運命】も【宿命】も【聖威】も及ばない、超絶美少女ナルカナ様よっ!!」

珍しく自信の無いナルカナの様子に、少し笑いが込み上げて来る。それを見咎めたナルカナは不愉快そうな顔をして、腰に手を当てて結構な声を出した。

「別に…お前はお前だしな。個性って奴だろ」

「むぅ…」

…それすらすんなりと肯定されてしまい、意固地になる理由を見失った彼女は眉尻を下げる。

この男の渾名は”天ツ空風［カゼ］”、ただただ前に進むという意志を表す。

同じ方向に向かう家族であれば、その背中を強引にでも押す追い風として。行方を阻む敵に対しては、その存在理由すらも一片の容赦

さえ無く薙ぎ払う向かい風として。彼の意に沿わぬ全て、何もかもを吹き飛ばす風なのだ。

――常日頃の強気な態度は…そのコンプレックスを隠す為の鎧なのだろう。流石は楯のチカラを持つ神剣、守るのが得意らしい。

「ただ在りのままに、在るがままに。己らしく在る事を貫けばいい。アイツはマジにぶつかってくる相手を笑わねェし、差別なんかはもっとしねェよ。てゆーか、あの鈍感に気付いて欲しいんだったら解りやすいくらいじゃねェとな」

そして風とはそもそも、天を覆う雲を吹き払うモノであればこそ。空風は叢雲［クモ］を吹き飛ばし、太陽か月、星の光明を齎す。

「…解りやすい、くらい…」

…またもや悩み始める彼女。もう言う事も無いと、アキは角を出て歩き始める。

「ま、精々頑張れ。援護はしないけど邪魔もしない。テメーらで…勝手に泥沼演じてくれや」

最後に、どうしてそんなハーレム構築の手助け見たいな事を言ってしまったのかと自嘲して。取って付けた憎まれ口を叩く彼の背中。

「余計なお世話なのよ、バーカ」

吹き抜けた空風に向け、叢雲より雹か霰のような憎まれ口と――…

「……ありがとう」

慈雨の如き柔らかな笑顔が、叩き付けられたのだった。

翌日朝早く、寝起きであるアキはうつらうつらと洗面台に向かい。

「ふぁ…あふあふ……」

ボサボサの頭を掻き、実に面倒な感じでアンニュイに歩いて――…

「きゃっ！？」

「う…ッ！？悪い…」

…小柄な人影にぶつかって謝る。その黒髪の、市松人形を思わせるパッツン前髪の改造和服の少女はしとやかに笑顔を見せて。

「…こちらこそ申し訳ありません、空さま。常日頃、姉がお世話になっております」

「いや、別にいいさ。お前も頑張れよ…俺も応援してるからな」

「うふふ…頼りにしておりますね、『兄上［あにうえ］』様？」

そう、ニヒルに声を掛けて。約、三歩ほど歩いてから――

「わっかりやすゥゥゥゥッ！？！」

確実に三歩ほど遅れたツッコミを、あからさまに幼女形態を取ったナルカナに突っ込んだのだった。

The 93th Name・・・"萌芽"

コチコチと、時計の針の音がやけに大きく響く朝の食堂。朝食時でほぼ全員が揃っているというのに、会話は一切無い。
…いや、話なら先程まで有った。いつも通りのナルカナと一一その脇に座っている小柄な少女…凡そ十二～三歳程度だろうと思われる（永遠神剣の化身が成長するかは判らないが）姿の『ナルカナ』が、どうしてそんな事になったのか弁明を行っていたのだが。

「要するに、望君には『小さい娘の方が人気が有るんじゃないか』と思った深層意識が独り歩きして分体を創ってしまった…と。そういう訳ね、ナルカナ？」
「そういう事、あたしだって吃驚［びっくり］よ。勝手に実体化して、勝手に学園の中を歩き回って…どういうつもりよ？」
「はい、私も自我が芽生えた時には驚きました…ですが、こうして望さまにお会い出来る体を得たのですから、私は幸せです」

水底のような静謐を破ったのは、実に不愉快そうに腕を組む沙月だ。詰問を受けたナルカナ（大）はふて腐れて唇を尖らせて、隣ではナルカナ（小）が笑い掛けた。

「「「「「「はぁ…」」」」」」
「…ハァ」

『また望か…』という皆の冷たい視線と溜息、何よりも希美と沙月とカティマとルプトナとナーヤ、そして頭上に仁王立ちしたレーメの発するプレッシャーを受けて。
深海というところはきっとこんな風なのだろうな、と。そんな現実逃避を望は行った。

「引鉄は空さまの『素直になれ』と、『解り易く』の言葉ですね。あの言葉でお姉ちゃんは、自分が小さい場合の姿…つまり私を想像しましたから」
「巽君…歯ぁ食い縛りなさい」
「良いっすよ……俺を殴って気が済むなら、好きにすればいいじゃないですか…」

結果的にそういう事になったかと、アキは言われた通りに歯を食い縛った。
沙月の右掌は【光輝】の光によりコーティングされて『インパルスブロウ』の…往復ビンタの破壊力を上げている。

「…清廉なる、生きし子らを育む優しき水よ。我は御名を唄う…」
隣ではアイオネアが必死になって、アキを護る為に青属性を無効化する神言『ワードオブブルー』を呟いている。

「有り難うな、アイ…けど、いやきっとペネトレイトするから…」
「……（がびーん）！？！」

だが、体験からその威力を知っている彼はそれを止めた。ショックを受けたアイオネアは、いじけて指をつつき始めてしまう。

「…沙月さま、女性がそのようなご無体をなさらないで下さいませ。兄上さまも兄上さまです、女性の尻に敷かれ過ぎるのはどうかと思いますよ？」
「「『兄上さま』？」」
「ぬぁっ、ちょ…あんたねぇ！！」

…と、沙月を窘めた妹ナルカナの言葉に一同は目を円くした。一方、本体の姉ナルカナは何故か顔を赤らめる。

「…そう言えば、さっきもそんな呼ばれ方したけど…なんでだ？」

全く以ってそんな呼ばれ方をする記憶が無い彼は、首を傾げながら小さな方へと問い掛ける。

「簡単な話ですよ。お姉ちゃんはあの時に、いつもは昼行灯だけど困った時には道を示してくれる…そんな空さまを、『お兄ちゃん』みたいに感じたんです。なので私にとっては、空さまは兄上さまの認識になっているんですよ」

「わーっ、何言ってんのよアンタ！分体の分際でーっ！！」

遂に、実力行使にて妹ナルカナの口を塞ぎに掛かった姉ナルカナ。その双手を回避した妹ナルカナは、膝カックンにより姉ナルカナを撃退した。

「へぇー！それって空の方が好きって事じゃん、望より！！」

「そうですね！巽は特別な存在という訳ですから、望より！！」

「うんうん！妹にとって兄は憧れだもんね、望ちゃんより！！」

…と、物凄い勢いでそんな言葉を突っ込んだルプトナとカティマ、希美。

恐らく彼女ら望ハーレムの面々の間には、利害の一致から新参者を拒むコミュニティーが形成されているのだろう。背には『これ以上競争する相手を増やして堪るか』というどす黒いオーラが展開されていた。

「うふふ、何をおっしゃっているんですか皆さま。妹とは兄の視点

では永遠の二番手、則ち妹の視点でも兄は永遠の二番手なのですよ。
それが、空さまがお姉ちゃんを射止められない絶対の理由です」
「そこまで露骨に予防線張らなくても、兄貴呼ばわりされたくらいで特別な存在になったとか調子に乗らねーっての！！」

…しかし、黒さでは妹ナルカナも負けていない。むしろ、姉よりも弁が立っている分だけ性質が悪いというモノだ。

「そ、そんな事無いよ！妹キャラは永遠の二番手なんかじゃないんだからーっ！ねっ、リアルにお兄さんが居るナーヤちゃん！」
「いや、わらわに聞かれてものう…あれは実兄じゃし、余り尊敬も出来ぬし。何よりわらわは小動物キャラなのでな」
「うわーん、裏切られたー！！」

その言葉に、望の妹的立ち位置の希美が反駁する。しかし、助けを求めた相手が悪い。というより、助けを求めた相手の兄が悪い。
ナーヤは実に歯切れ悪く口篭り、あっさり協定を破棄した。

「ッてゆーか、人を鞘当てのダシに使うなよ！！！」

そんなアキの声も届きはしない。コミュニティーが崩壊した彼女らは己のアイデンティティーを護る為の論争を始める。

「つまり、姉キャラの私が一番手って事よねー、望君？」
「違いますー！妹キャラですー！」
「そーだよ、親友キャラが一番手に決まってんじゃん！」
「「アホキャラは黙ってて！！」」
「何をー！？！」

…先手を打ったのは沙月、それを希美が防御する。そしてその尻馬

に乗ったルプトナは二人の連携で撃墜された。

「第一、一番手は誰が何と言おうとパートナーのこの吾だ！」
「「「煩い、ペット扱い！！」」」
「何だとー！？！」
「…今のはわらわもか？わらわも加えたじゃろ！？！」

その期に乗じてレーメが踏ん反り返るも、今度はルプトナを加えた三重の防御に阻まれる。尚、三人はナーヤも同時に指差していた。そして最後に、今まで黙っていたカティマが一一

「皆さん、落ち着いて下さいな。つまり総合して姫キャラが一番」
「「「「「外野！！」」」」」
「はは…ははは……」

ダブルナルカナが火花を散らし、更にハーレムの面々が内輪揉めを始め、実に不毛な戦いが始まってしまう。『もうどうにでもなれ』と捨て鉢になっている望。

…因みにソルとタリア、サレスは『付き合ってられるか』とばかりに食事を摂り終えて出ていっており、残る絶とナナシ、ヤツィータとエヴォリアとベルバルザードはどんな決着がつくかを面白がって見ている。スバルとユーフォリアとアイオネアは、どうして良いか判らず傍観の姿勢をとっていた。

「あはは…泥沼どころかブラックホールですね、ヤツィータさん」
「だから面白いんじゃないのよ、スバル君。見てる分にはだけど」
「男として言わせて貰うとすれば、腹が立つだけの光景だがな…」

苦笑するだけしか出来ないスバルに笑い掛けたヤツィータ、一方の

ベルバルザードは湯呑みを傾けて食後の番茶を啜っている。因みに覆面はしたまま、一体どうやってとかツッコんではいけない。
隣のエヴォリアと絶もまた、茶を啜りながら口を開く。

「全く、係わり合いには成りたくないわね。にしても、絵に書いたようなモテ方するのね、あの子。あんな優柔不断そうな男のどこがいいのかしら」
「手厳しいな、エヴォリア…だがそこが望の魅力なのさ」
「…マスター、それはフォローになっていないかと」

口々に呑気な事を言っていた面々の方に、疲れ果てた表情でアキが歩み寄る。そして、度重なる怒号を飛ばした事でいがらんでいる喉をアイオネアの聖盃に充ちる靈澪［アイテール］で潤して。

「もぉぉやってらんねぇぇッ！暁ィ、ベルバ先輩、スバルさん！！気晴らしに付き合ってくれ！！！」

神銃形態に変わったアイオネアを一回転させてスピンローディング、彼らの起源である『空』の銃弾を装填する。

その際に【真如】の青藍に煌めく聖刃が薙いだ真円の空間を波紋が揺らし、展開された極彩色。緻密なステンドグラスの精霊光を通り抜けた瞬間には、いつも通りの…黛［まゆずみ］色の手甲と脚絆に、中華服ともアオザイ風とも取れる黒い戦装束へと変わっていた。最後に通る右腕で、彼のオーラが繋ぐ”真世界”より金の鵄［トビ］と銀の八咫烏が刺繍された聖外套を抜き出して袖を通さずに羽織って、永遠神銃【真如】をスリングで左肩に担ぎ準備を完了する。

「そうだな、丁度胸焼けしていたところだ」
「まぁ、腹熟しには良いだろう」

「ハハ…了解、付き合いますよ」

了承して、絶とベルバルザードとスバルが立ち上がる。連れ立って出て行った男三人の姿を見送り、女三人は未だに囂［かまびす］しいハーレムの面々を見遣った。

「むー…」

「あら、どうしたのお嬢ちゃん？貴女も加わるのかしら？」

「ブラックホールがビッグバンに変わっちゃうのね、外野としては大歓迎よ」

「ち、違いますよ～っ！えっと、その…どうして空さんは平気な顔をしてるのかなって…」

と、今までずっと押し黙っていたユーフォリアが唇を尖んがらせた。そこをエヴォリアとヤツィータに茶化されて、プンスカと頭から湯気を噴かんばかりに赤くなる。

「ああ、希美ちゃんの事？」

「平気って…随分とブチ切れてたじゃないの、彼？」

その妙な言葉に、少なくとも彼女よりは人生経験の豊富な女二人が首を捻る。

「そんな事、無いですよ。空さんが怒った風にするのは要するに、楽しかったり嬉しかったりする時の照れ隠しですから」

「そうなの？良く見てるわね…」

そんな二人を見るでもなく、彼女は窓から校庭に立ってグットパーでチーム分けをしている四人の…ベルバルザードに次ぐ長身の青年を見遣った。

三度繰り返してアキと絶、スバルとベルバルザードに組分けて一定の距離を取り、一礼すると彼等はそれぞれの得物を構える。

「まぁ、単純に諦めたんじゃない？あの娘、完全に彼は眼中に無い感じだし」

「そうねぇ、まず勝ち目は零ね。横恋慕にすらなってないもの」

と、苦笑する二人。頭の中で望とアキを比べでもしているのだろう、そのパッとしなさに。

校庭では実戦形式の特訓が始まる。速度と手数に優れる絶が遠距離射撃を行うスバルを狙って駆け、アキは一定距離を保ち続けながら重戦車の如きベルバルザードの足を止める。

「そんな事無いですよっ、空さんだってたまには…」

と、ユーフォリアが擁護しようとしたその瞬間。ベルバルザードが呼び出した、暴君ガリオパルサが吐いた『ハイドラ』の獄炎。

それを、アイオネアが無限に生む”無のエーテル”…彼が常日頃呑む靈澪［アイテール］で包み無意味とする彼特有のバニッシュスキル、『サブリメイション』で打ち消したまでは良かった。

が、完成に気を良くした隙に接近され『バーサークチャリオット』を直接顔面にメガトンパンチ風に食らわされてしまう。数メートル程吹き飛ばされたが、上手く受け身を取って距離を稼いだ。

「「……たまには？」」

「…え、えっと、十回に一回は…カッコイイ時が…うぅ～～っ」

悔しそうに、恥ずかしそうに唸る少女にエヴォリアとヤツィータは意地の悪い笑みを見せる。

尚、ハーレムの面々は今も抗争の真っ最中だ。

「僅か一割ですか、それはまた」

「ふぇ、あ、貴女は…」

だが、その戦場から妹ナルカナがいつの間にか離脱。ユーフォリアの隣に腰掛けていた。悠然と茶をシバいている辺り、姉よりも大物なのかもしれない。

「あら、貴女はもういいの？」

「はい、どうせ泥仕合ですから。あれで決着がつくようならこんな状態にそもそも陥りませんよ」

「道理ね…あの娘達も早く気付けばいいのに」

迫り来る絶にスバルが放つ光の矢『ディバインシャイナー』を、絶は『受流し』で逸らす。そのまま接近して放つ『雲散霧消の太刀』だったが、スバルは一切動じずに『オーラバリア』を展開し防ぐ。

「ところで、何の話をしていたのですか？良ければ私も聞きたいのですけど」

「そうそう、そうでした。続きをどうぞ、ユーフィーちゃん」

促され、渋々と彼女は口を開く。余り乗り気ではないのか、或いは自分でも考えを整理できていないのか。

「…好きな人が他の人を好きで、自分を見てくれてもいないのに…それでも想い続けてて、哀しくならないのかなって…そう思ったんです」

その瞬間、ベルバルザードの神剣魔法『グラビトン』を打ち消して、

アキが駆けた。大上段に構えたライフル剣銃【真如】を、防御の為に構えられた大薙刀【重圧】に向けて振り下ろし――…

「空さん、前に言ってたんです。『報われなくたって、結ばれなくたって。俺自身が選んで行動した結果で、愛する人が他の男とでも幸福になってくれたなら…そこに意味は在る』って。でも…好きな人に好きになって貰えるのが一番幸せじゃないですか」

オーラを纏わない波紋の聖刃は大薙刀の柄をあっさりと透り抜け、その意外な能力に意表を衝かれて反応出来なかったベルバルザードの鳩尾に銃口が減り込まれた。
それだけでは、【真如】は生命を奪えない。しかしトリガーを引くだけで、彼の内側の銃口から放たれる干渉不能の銃弾が彼の生命の証たる心臓を撃ち抜くだろう。

「…そうねぇ、ユーフィーちゃんくらいの年じゃ判らないかもしれないけど、幸せのカタチは人それぞれ違うの。片想いだって立派な愛よ、行き過ぎなきゃね」
「『遠くに在りて想うのも愛』、という訳ですね。見た目と違って詩的な生き方をしているんですね、兄上さまは」
「というか…達観してるわねぇ。彼、本当に十代？三十代後半じゃなくて？」
「あら…分かるわ、エヴォリア。彼、あと二十年早く生まれてたらナイスミドルだったのにね。いや若い若い…」

…覆面で良く判らないが、恐らく舌打ちしたベルバルザードが敗北を認める。一方の絶とスバルも、決着が付いたらしく二人の方へと歩いてきた。
アキは絶と手を打ち合わせ、勝利の確認を行う。そして次はスバルと組んで戦闘訓練を開始した。

「良く判りません、そんなの…」
「貴女にも、分かる時が来るわ。いつか、誰かを好きになった時に。『花の命は短し、恋せよ乙女』ってね」

それを眺める四人の、まだ合点がいかない様子のユーフォリアに…
ヤツィータはその頭を撫でながら、優しく微笑み掛けた……

The 94th Name…"英雄"

調子に乗って目茶苦茶にした校庭を均し終えて、泥だらけになった躯を風呂で洗い流した後。

――ものべーの擬似天幕が夕暮れの空を映している。希美の話では、明日の明け方には魔法の世界に到着するそうだ。

風呂の前で待っていた、理想幹で能力の開花があったらしく頭上に幻日と幻月、日暈と月暈。幻日環と幻月環が組み合わされた複雑な三重冠の虹の環。

内部に湛えた五色の精霊素が銀河を充たす星雲［ネビュラ］のように煌めくハイロゥを浮かべた法衣姿のアイオネアから、盃を受け取り飲み干した。

黙って左手を差し出せば、それに嬉しそうに腕を組む彼女を部屋へエスコートする。歩幅の違いと、急ぐと転び易い彼女を気遣って。

瑠璃色の宝珠が嵌められた首輪状のアミュレットの後ろ側から伸びるスリングが、まるで龍尾のように揺れていた。

「…あれは…ミゥさん、か…？」

…と、その道中に在る自室の前に影を見出だす。浮遊する結晶体、白い鳥の羽を縒り合わせたようなそれは――クリスト＝ミゥ。

《タツミ様、お待ちしていました。少々お時間宜しいでしょうか》

「ええ、まぁ…構いませんけど」

抑揚のない口調に、何処か違和感を禁じ得ない。だが断る理由にも

成り得ず、了承する。
ちらりと、左腕を強く抱き締めた彼女を見遣れば――

「アキ様、私は一人でも戻れますから…お気遣いなく」
「そうか、転ばないように気を付けるんだぞ？」

…と、上目遣いの金銀の双眸が腕を解いた。生花の花冠を避けて、緩やかなウェーブの滄い海色の髪を梳きながら注意する。小さな龍角と、尖った耳朶が見えた。

「は、はい…」

白磁の肌を夕陽よりも赤く染めた龍の修道女は、慌てて頭を下げて花冠を廊下に転がしてしまう。
それを拾い上げていたたまれなくなったらしく、漆黒のキャソックの裾と純白のリャサを翻し。ぺたぺたと裸足の足を鳴らして足速に走り去って行った。

…途中で自分の足に躓いて、一回転んで。

《……えっと…だ、大丈夫なのでしょうか…？》
「まぁ、影が護ってくれてるから大丈夫かと」
《はぁ…そうなんですか…》

暫し呆気に取られていたミゥだが、気を取り直して先導するように飛翔する。

――はて、俺は何かやっちまったのか？ルゥさんやワゥなら夕飯で食べたいメニューを申請しに来たとか想像出来るけども…

彼女の背中からは言葉を拒絶するオーラがひしひしと感じられる。
辿り着いたのはクリスト室。

扉を開いて中に入れば、結晶体に入っていないルゥとゼゥ、ポゥ、ワゥも揃って彼を見遣った。
いよいよ、何か粗相をやらかしてしまったのかと思案に暮れたアキだったが。

「まぁ、一先ず座ってはどうだ」

ルゥに促されて、用意されていた椅子に腰掛ける。五対計十個の瞳に曝されて居心地悪く、さながら法廷に連行された被告のようだ。

「…えっと…俺ってば、何かやらかしましたか？」

…幾ら考えても何も思い至らず、遂に痺れを切らして言葉を発する。
その時、結晶体から抜け出したミゥが口を開いた。

「いえ、ただ…空隙のスールードについてお聞きしたいだけです」
「…スールード、ですか…」

その言葉に、アキだけでなく全員の表情が暗澹たるモノとなった…

朝の一件の後、制服から着替えぬままに仰向けで布団に転がって。
【悠久】を抱くユーフォリアは、天井を見上げてずっと解の出ない自問を繰り返していた。

「…どうして」

呟きはカーテンを引いていない窓から、朱い風と共に流れ込む斜陽に染められた虚空に消えた。

兄が答えてくれないのなら、彼女以外には【悠久】しか居ない部屋の静謐に、声は拡散するのみ。

…幼いと言ってしまえばそれまでだが、今でも尚砂糖を吐きそうなくらい相思相愛の両親を持つ彼女には判らない思想だった。

愛する人に愛される、それ以上の幸福が在るものかと。

「…どうして――ひゃわっ!?!」

「はぅぅ、ごめんなさい…」

もう一度呟いたその瞬間、部屋の扉が結構な勢いで開かれた。驚き跳ね起きたユーフォリアと、その声に驚き咄嗟に謝ったアイオネアの眼差しが交錯した。

「な、なんだ…アイちゃんかぁ…お帰り」

「た、ただいま…ゆーちゃん」

…互いにぎこちなく笑い合って、アイオネアは祈りを捧げるような仕種をとった。するとハイロゥが薔薇窓のオーラへと変わり、足元まで通過する。魔法陣が収束した後、彼女は制服姿に戻っていた。

「まぁ、綺麗なオーラですね」

「…ふぇ、あ、ありがとうございます…？」

と、開きっぱなしの扉から黒髪の少女…妹ナルカナが笑い掛けた。

姉と同じだった改造和服は、学園指定の制服に着替えている。

「あの、ご用ですか？えっと…」

と、来客に気付いたユーフォリアが問い掛けて…何と呼ぶべきか、困ったような表情を見せる。

それに妹ナルカナは『待ってました』と言わんばかりに、満面の笑顔を見せた。

「これはどうも、申し遅れました。私は『イルカナ』、妹ナルカナ改めイルカナと申します。望さまに名付けて頂きました」

「「は、はぁ…」」

瞬間、ユーフォリアとアイオネアが目配せしあう。そして『安直』と感じた事を確認しあった。

『レイメイ』でレーメなように、『イモウトナルカナ』でイルカナなのだろうと。

「同じくらいの年の方がいらしたのでお話をしたいと思ったんですよ。とても興味が有りますから…『空位［ホロゥ］』の神剣さん？」

「わ、私…ですか？」

しとやかに微笑んで彼女は、後ろ手に扉を閉める。アイオネアへと視線を向けたままで。

話し終え、そして話を聞き終えて。アキは瞼を開く。

「…そうですか。『煌玉の世界』が滅んだのは、空隙のスールード

の仕業でしたか」
「…そうよ。アイツが私達の世界に剣を突き立てて…煌玉の世界を滅ぼした…！」
唇を噛み、悔しそうに吐き捨てるゼゥ。慰めるようにミゥがその肩に手を置いた。

「しかし、まさか『剣の世界』の段階で君に接触していたとはな…もっと、早く教えてほしかった」
「…すいません、ルゥさん。あの時分では、只の行商人だとしか…正体を知らなかった、なんて言い訳にもなりませんけど」
「…それは、仕方が無いですよ…タツミさんの優しさに付け込んだスールードが卑劣なんです」
ルゥは『自分の手で討てなかったのが残念だ』とばかりに眉を顰め、珍しくポゥまでもが嫌悪を露にした。

「アイツに、ボク達は大切なものをいっぱい奪われたんだよ。世界も、エルダノームに住んでた人も、クリたんだって…」
一一…『クリたん』。一瞬誰かと思ったが、滅び逝く世界を救おうとした勇者と説明された冒険者、『クリストファー＝タングラム』と同一の人物なのだと悟る。他の面子には『クリフォード』とか、『クリスさん』等と呼ばれていたようだ。

「…しかもそれが、『人が足掻いて足掻いて、そして滅びる姿が愛おしいから』なんだよ？ボクは…絶対に許さない！」
発火しそうなくらいに本気の怒りを見せたワゥ。当然だ、誰が故郷を消されて…それを防ごうとした努力を嘲笑われて…惚れた相手を

殺されて平静でいられるものか。

――ああ、判ってる。有害か無害かで言えば、アイツは有害だった。人を惑わす類の悪女だった。

…握り締めた拳を、胸に当てる。この拳は幾つも『死』を振り撒いてきた。『生命』の象徴たる永遠神剣【真如】を宿した彼は、既に肉体だけではなくその存在自体が死を導く永遠神剣だ。だがしかし間違いなく、人間でもある。

どちらでも無く、どちらでも在る。生きてもいなければ、死んでもいない。この輪廻解脱を迎えた事こそが、彼と彼女が森羅万象から『対象になれない』という能力の本質なのだ。

「…でも、俺にとっては…アイツは大事な存在だった。それだけは誰にも文句は言って欲しくないし、言わせない」

「…アッキー…」

その『死』を以って、彼は――…その存在を輪廻の輪から弾き出したのだ。守りたかった存在を、己の手で滅却した。

だから、歯を食い縛ってでもそれを肯定する。それは彼が他の人物…母と慕った女性にも感じたモノだったから。

「少なくともアイツは…俺の知る鈴鳴は自分の定めに刃向かった。『在るがままで在る』ってのは、『自分に流される』事じゃない。『自分に打ち克つ』事なんです」

ぽっかりと心に孔の空いたその感覚はまだ、忘れていない。

「少しでもマシな自分で在ろうと、闘う事。それが例え烏有に回帰したとしても、俺は――…それを美しいと感じたんだ…！」

だが、いずれはその消し難い痛みも…止め途無く寄せる永遠［ナミ］が、跡形も無く押し流すだろう。
喜びも哀しみも、えり好みする事無く。虹色の記憶もいずれは色を失い、灰色を経て…空と消える。

「だから誰が何と言おうと…俺は鈴鳴をスールードとは認めない、アイツはアイツなんです。それで…どうか勘弁して下さい、お願いします！」

土下座せんばかりに頭を下げる。斬首を待つ罪人のように、何の為の…誰の為の裁きかも、はっきりしないままで。

「…タツミ様は、酷い方ですね」

静かなミゥの呟きにより深く頭を下げた。憎まれても仕方が無い、それ程の事を口にしたのだから。その洗い立ての頭…石鹸の香りがする癖っ毛の髪に一一ぽん、と。小さな掌が置かれた。

「判っています、貴方がそういう人だという事は剣の世界から…」

彼女は一言一言、しっかりと発音する。まるで物分かりの悪い弟を諭すように。

「…そのまま真っ直ぐに。曲がる事無く、貫いて下さい。それで…大目に見てあげます…」

頭を上げる。目に映るのは優しい…しかし、堪える笑顔。
堪えられた涙の持つその意味は、間違えようも無い。

一一…だから、最初のあの日に…国境村で『命の雫』を手に入れた時にそう決めたように。俺は最後まで問う事はしない。
それが…俺の礼儀だ。

「…はい」

その一言だけを口にして、アキはもう一度頭を下げたのだった。

机を囲んで座る、蒼滄墨の少女達。手元にはそれぞれマグカップ、聖盃、紙コップ。充たされた水は聖盃から注がれたモノ。

「なるほど…つまり貴女のチカラは『空』…零［ゼロ］が基軸になる。空が充たされているモノとして、色［マナ］とすり替える…と」
「はい、イルカナさん……その、変換量は容器次第ですけど…」

二人分を注ぎ終え、空になる聖盃。それに彼女が祈りを捧げれば…揺らぐように聖盃の淵から波紋が生まれて鎮まり、水鏡と換えた。

「…充分に規格外な能力ですよ、アイオネアさん。概念系の神剣は大抵オプションが付きますけど…だから銃を使っているんですね。何度撃ち尽くしたところで、それが原動力。無限の連鎖…正真正銘『永劫輪廻』ですか」
「凄いよねぇ、イルカナちゃん。エターナルでもそんな神剣…あ、”輪廻の観測者”の【無限】はそれっぽいけど…」

照れた金銀の龍瞳と得意げな蒼瞳と見詰め合った黒瞳の眼差しが、紙コップの内側に映る己の黒瞳と交錯する。

たった十分程だが、仲良くなるのにそう時間は掛からなかった。

「…『空』ですか、道理で。確か、古い意味で中空を表す数字…」

「…えっと…どうかしましたか、イルカナさん？」

「ところで『担い手が存在する』のはどんな気分なんですか？私も一応化身なので、興味有ります」

あからさまに話を逸らして、彼女は媛君を見詰める。此処からは、研究ではなく神剣の化身の分体としての興味だ。

「…幸福です、とても…」

それに媛君は、己の慎ましい胸に手を当てて答える。奇しくもその瞬間に、彼女の所有者も同じように己の胸に拳を当てていた。

「…私はずっと、箱庭の中で良いと思ってました。外は怖いところだって皆から聞いてたし、位階も貰えなかった空っぽの神剣だから…誰にも必要にされないって」

夜明けとも夕暮れともつかない、薄紫に微睡む、伽藍洞の真世界。そこで初めて人と出逢った彼女は、無限遠の世界よりもずっと広い空を見た。

「でも、アキ様は私と手を繋いで下さった。空っぽには、可能性が充たされてるんだって…だから私は、冀望をくれたアキ様の冀望になりたくて…」

「…ちょっと待って、じゃあ貴女のその能力は…後付け？」

「はい、私には空っぽの器しか…可能性しか無かったから。アキ様に見合う能力を身につけたの」

驚いたように問い掛けたイルカナに、当然だと答える。

生命に『同じもの』は決して有り得ない。遺伝子に限界は在っても、生命の系統樹に限界は無い。

彼女は契約者の魂によって能力を変える神剣だ。ただ、神剣宇宙の誕生した瞬間からアキと契約する事が決まっていた以上、今の能力以外は有り得なかったのだが。

「本当に規格外なんですね、貴女の能力は…ううん、だからこそ…無限よりも莫大なチカラを生めるのかしら…」

何かを得心したらしく、もう一度頷いて水に口を付けるイルカナ。

「ふぅ…本当に美味しいですね。流石は零位元素」

「零位元素？」

「こちらの話ですよ。でも…」

と、ふと。イルカナは表情を暗くした。何かを諦めるように。

「羨ましい…私は結局お姉ちゃんのオマケ。化身の分体だから」

「あ…」

ユーフォリアが思い至ったのは、彼女が一応は神剣の化身ながらも本体を持たないという事。そこに本能が有ったら…もう入口も出口も無い迷宮のようなものだ、と。

「…違います。イルカナさんは、紛れも無くイルカナさんですよ。『在るがままで在る』という事は『自分に流される』事じゃなくて『自分に打ち克つ』事なんです」

その否定を否定した刧媛。懺悔を聞き入れる聖女のように、主人と同じ時に同じ言葉で。

「空っぽでも、運命を斬り拓けたんです。一位のイルカナさんならもっと素敵な未来を斬り拓けます、きっと…」

面食らったイルカナは、ポカンと口を開いていたが…やがて。

「…出来る…のかな？」

虹色に煌めいて見える冀望の光を、見出だしてしまう。

「はい、勿論ですよ。諦めたら、終わるんじゃなくて続かなくなるんです…だから、諦めないで…」

そうして、聖女よりも聖女である真性悪魔は微笑んだ。銘のまま、『在るがままで在れ』と。

「うん、諦めちゃダメ。私も応援するから！」

「ありがとう…二人とも」

ぐっと手を握ったユーフォリア、その手を優しく解いてゆっくりと立ち一一顔を上げたイルカナ。

「…もうすぐ食事の時間ですね。さぁ、行きましょう…アイちゃん、ユーちゃん」

そこには…日頃の彼女の、雛菊のように愛らしい笑顔が在った……

The 95th Name…"家族"

闇の中の強い振動の後、ものべーの周りの景色が一変する。果てしない雲海、雲よりも高い…永遠に続く蒼天のただ中。
見覚えのあるその世界は一一紛れも無く、魔法の世界だ。天空都市ザルツヴァイまでは後半刻、神剣の担い手達は各々の時間を過ごしていた。

「……」
「……」

…そんな学園の校庭に充ちる、息苦しい程に冷たく研ぎ澄まされた殺気。その発生源は校庭の中央で対峙する二人の戦装束の男…絶とアキ。
そのパートナーである、ナナシとアイオネア。外野で戦装束を纏うソルラスカとカティマとルプトナ、ユーフォリアとイルカナ、有事の際の備えとして呼んだ白衣姿のヤツィータの八人は階段に腰掛け、静かに眺めるだけだ。

「……」
「……」

【暁天】の鯉口を切ったままで、低く腰を落して居合抜きの構えを見せる絶。対するはガンベルトに吊したホルスターに納めたままの【無銘】に左手を翳し、クイックドローの構えを見せるアキ。
それは鏡写しと言っていいのかもしれない。和と洋の違いは有れど…共に『神速』と『一撃必殺』を信条とする戦闘スタイル。

「……」

「……」

狼の如き青い眼差しと、鷹の如き鳶色の眼差しが交錯する。そこに瞬きなどは一切無く、呼吸さえも最低限だ。

息詰まる心と心の鬩ぎ合い。勝負の決着は一瞬、互いの放つ圧迫に屈して先に動いた方が負ける。

故に――全く同時。

「「……ッッ！！」」

同時に瞬きを行ったその瞬間に、絶は火花さえ発しながら【暁天】の白刃を鞘走らせて。

アキは【無銘】を抜いて、照星を使うまでも無く無色無音のマズルフラッシュを閃かせた――！

――ギィィィン！！！

耳を劈［つんざ］く金切り音と共に、目を瞽［めしい］んばかりの閃光を撒き散らす。

柔なる刃の『絶妙の太刀受』は、【無銘】に装填されている不可視［エーテル］製の銃弾を真っ二つに断ち切ってのけた。

音も、気配すらも無いその銃弾をパリィしたのは――偏に絶の技量というよりも、始めからその弾道を見ていたからに他ならない。

それでも、音速を遥かに上回った銃弾の軌跡を見極める空間把握は流石だが。

だが、今の【無銘】は二連。振り抜かれた【暁天】の刃は簡単には引き戻せず。
人差し指を銃身に沿えて、中指をトリガーに掛けた…もう一度引鉄を引くだけの銃は火を噴く――！

「――甘いッ！！」

その銃弾が、左手で振り抜いた鞘にて打ち砕かれた。絶はその勢いのままに一回転、大きく踏み込み袈裟掛けに『雲散霧消の太刀』で首級を狙う――！

――ギィィィン！！！

その刃を『威霊の錬成具』により創られた…腕全体を包み込む黒く重厚なガントレット。異界の律により鍛えられた防具を纏う拳にて握り止める。
易々と鋼鉄すら斬り裂く【暁天】の刃だが、この世とは違う理法で護られたその防具は簡単には斬り裂けない。

舌打ちした絶は次いで反転、襲い来る鞘の鐺［こじり］――！

「――お前もなッ！！」

踏み込まれた絶の足を踏み付けて基点とし、背中合わせで。逆手に持った手槍のようなそれすらも、錬成具を纏わせた左肘で挟み込み受け止めて――【無銘】の銃口をがら空きの後頭部へ突き付けた。

「…既に二発撃ったよな。つまり、それはカラ銃だ」

「確かにな……けど、俺の起源は『空［カラ］』だ。今はカラ銃からこそが本領発揮だぜ？それに一一零［ゼロ］は、俺の距離だ」

…ニヤリと、背中合わせの零距離で。互いに見えぬと言うのに笑い会う。そして一一…

「…参った。やれやれ、前は鞘で沈めてやったんだが…その神剣は本当に厄介だ」

「二回も同じ手を食うか。そして二回も同じ手は使わないッてな」

戦闘姿勢を解いて、絶は【暁天】を鞘に納めて腰に戻した。アキも錬成具を根源力に還して【無銘】をホルスターに納める。

この旅の始まりに負けた事への、リベンジを完遂して。

「お疲れ様です、マスター」

「お、お疲れ様です、アキ様…」

ふわりと飛翔するナナシと較べて、元来運動が苦手なアイオネアは『とてとて』という擬音が出そうな調子で駆け寄って来ている。

「アイちゃん、あんまり急いだら転んじゃうよ？」

両手は捧げ持った聖盃で塞がっており、充ちる靈澪［アイテール］を零さないようにして走っている為に見るからに危なっかしい足取り。ユーフォリアも、ハラハラするような眼差しで見守っていた

「良いですか、タツミ。今回貴方が勝てたのは、様々な奇跡が噛み合った事による僥倖です。決して調子に乗らないように」

「へいへい、じゃあ次はグゥの音も出ないように倒して見せるさ」

絶をギブアップさせた事に、冷静に怒り心頭らしいナナシのジト目にそんな軽口を叩いた。瞬間――

「アキ様…どうぞ――きゃふ?!」

「ひゃあっ!?!」

ダンゴムシを踏ん付けてしまうが、生命を奪えない彼女にはその命を奪えない。驚き丸まったそれに足を滑らせて、前に転んでしまうアイオネア。

彼女の持っていた聖盃は宙を舞いアキの顔面に向けて飛翔して――首を横に倒して避け、人差し指と中指で挟んで止めたが…中身は、ナナシに全て掛かってしまった。

「っと、大丈夫か、アイ?」

「はふ…は、はい…」

顔から盛大に転んだ彼女だったが、怪我の類は無い。やはり、影の死霊がクッションになって護っているのだろう。

涙ぐむ彼女を落ち着かせがてら、乱れた滄い髪を梳いて調えてやり、外れた花冠を龍角に嵌める要領で冠せてやる。

「あーあ、大丈夫?何してんのさ、空っ!」

「んもぅ、だから気を付けてって言ったのに…空さんっ!」

「えっ、俺のせい?」

それぞれ歩み寄ってきたルプトナとユーフォリアに叱られたアキ。

「あぁ、ドジっ娘……実害を被るのはアレですが、見ている分には良いものですね…」

カティマはカティマでアイオネアに、妙に熱い視線を送っている。
因みにその時、ソルは自分の勝負に向けてアップを開始していた。

「…あ、貴方達は～～！」

…と、そんな彼の背後から響いてくる怨嗟［ナナシ］の声。
こりゃ『無限回廊』かぁと腐って振り向けば、予想の斜め上を行く光景が目に入ってきた。

「……へっ？」

びしょびしょに濡れそぼった一一丁度、アイオネアやユーフォリアと同じくらいの背格好をした少女…黒いローブにヘソの出た上下の服を纏った、山刀［マチェーテ］のようなナイフを腰に供えるナナシの姿だった。

「えっと…成長期？」

…等と口走っ瞬間に銀閃が鼻先を掠める。前髪がさっくり横一線になってしまった。

「全く…貴方のパートナーの強力な”破戒［ディスペル］”のせいで、小さくなる術が消失してしまっただけです」
「だからって、お前…パッツンにしてくれなくても良いだろうが！どーしてくれんだコレェェ！！」

取り澄まして切っ先が無い長方形のナイフを鞘へと納めたナナシに、アキは前髪を指差してツッコむ。勿論、ナナシはどこ吹く風だ。小さくなろうとして忌々しそうに濡れた躯を拭う。乾かないと無理らしい。

「まぁ、お揃いですね兄上さま」
「お揃いたくはなかったけどな！ッたく、鋏借りて…いや、創ろうと思えば創れるか…？」

イルカナの言葉にまでツッコんだ後、左掌に意識を集中させて――根源力製の鋏を創り出した。

「あら、クー君。散髪だったら、お姉さんがやってあげるわよ？」
「良いんですか、姐さん？いやぁ、流石に自分じゃ遣り辛くて」

と、ヤツィータに鋏を渡して――地面に墜ちる。空位の鋏は、彼女の掌を透過したのだ。

「あー、そっか…あたしには触れないんだっけ」
「空［カラ］だから普通の存在には触れられない、という訳ですね」

それを拾い上げたイルカナが、銀の鋏を色々な角度から眺める。

「私やお姉ちゃんが触れるのは、虚無と混同されやすい概念だからでしょうか…それなら、『器』の沙月さまや『力』のレーメ、分体も同じルプトナさま、【叢雲】の生んだ神剣を持つ望さまと絶さま、カケラそのもののナナシやそれを持つ出雲の巫女達が触れられる説明も付きますけど…だとしたらユーちゃんが触れるのは何故？」
「ルカちゃん、どうしたの？」
「あ、ううん、別に…」

…ぶつぶつと某かを思案して呟く彼女に、名前を呼ばれた気がしたユーフォリアが呼び掛けた。気を取り直したイルカナは、鋏を開閉して具合を確かめる。

「すんません姐さん…気持ちだけ、有り難く貰っときます」

残念そうな声を上げたヤツィータに詫びを入れた瞬間、イルカナが鋏を持ったままで。

「では、僭越ながら私が」

「わあ、それすごい面白そうだよルカちゃん！ね、アイちゃん！」

「う、うん…」

と、ちびっ子スリーが徒党を組み視線を向けて来る。それを受けて、回りに居た神剣士達も面白そうに彼を見遣った。

――超嫌な予感。

「――ッッ！」

その予感に衝き動かされるまま、時間加速［タイムアクセラレイト］して一同から離脱――

「ユーちゃん、やりなさい」

「うん、『グラスプ』！！」

「ふゲォあああ！？」

…失敗。躯の自由を奪われて地面に転がされてしまう。そんな彼の回りに、幾人もの足音が近寄って来た。

――畜生め、なんでコイツの魔法効果だけは俺に通用するんだ…！

「先ずは目を塞ぎます、兄上さま。結果は終わって見る方が面白い

でしょうから」
「ま、待て…俺達は、話せば判り合える筈だ…！」
「ふぅ、喧しいわね…口も封じておきましょうよ」
「そうだな、息が出来れば良いだろう」
「次は術が解けても逃げられないように、手と足だね。ゆーくんに頼もうか」

イルカナから目隠しに布を巻かれ、ヤツィータの言葉に悪乗りした絶に猿轡を噛まされて。更に念を押して『青の存在、光の求め』の二頭に巻き付かれて、概念的にも物理的にも拘束された。

「じゃあ、抵抗不可［なすがまま］になったし…早速鋏を入れます」
「切るところ残しといてよー、皆の楽しみなんだからさー！」
「おーい、前髪の一部を赤く染めてやらねぇか？」
「……！？！」

言葉も発せず、身動きも出来ない。かしょーん、かしょーんと鋏を鳴らし、笑ってその切っ先を向けて来るイルカナと自分の番を待つルプトナ。染髪料まで持ち出したソルラスカに、精神的にも視界が暗くなる程の絶望を味わう。
それでも、同じ生命を共有する龍の修道女にコンタクトを――

「アイオネア、貴女のマスターを貴女色に染めてしまいましょう。きっと愉しいですよ？」
「アキ様を…私色…に……？」
「……」

と、耳元でカティマに囁かれて。うっとりとした意識をアイオネアに向けられた時…彼はこの世全てを悪［にく］む事としたのだった。

ものベーが接岸する。懐かしいザルツヴァイの町並み。そして事前に入れておいた連絡により、横断幕まで用意して待っていた物部学園の教師生徒達の姿があった。

望や希美、沙月などの魔法の世界前の加入組と絶は信助達と再会を懐かしみ、新規参入組のスバルやナルカナ達は挨拶を交わし。元は敵のエヴォリアとベルバルザードは大いに驚かれて。

最後に、ブリーチされた上で金髪ツンツン頭にされたアキが笑われ、生徒会長モードの沙月が拍手を叩いて注目を集める。

「ところで皆、一つ提案が在るんだけど…学園祭をやらない？」

その一言に、学生達はにんまりと笑い――

「…そう言うと思って、実はもう準備完了してます。後は設営するだけっすよ、会長！！」

一同を代表して発言した信助が、彼女にサムズアップを見せた……

The 96th Name…"昊空の果て"

飾られた教室から外に出た、長身金髪の青年。心底から怠そうに、ワックスでツンツンに尖らされた攻撃的な髪型を撫で付けて溜息を落としながら…アキは看板を立て付けた。
そこに書いてある文字は日本語で『喫茶・悠久』。学園祭の出し物の一ツで、軽食なんかを出したりするらしい。

「施錠完了、と…」

鍵を締めて設営を終えた教室を後に廊下を歩く。少し前までの学園は比にもならない活気、ちらほら擦れ違う学生の姿が在る。
その全員が、男子も女子も自分の服装を入念にチェックしている。

「よ、巽。今上がりか？」
「ああ、終わったよ」
「お疲れ、あんたが終わったなら準備完了よ。遣れば出来るものね、半日で終わっちゃった」

と、信助と美里が隣に並ぶ。若干笑いを堪えた感じで。そんな二人に黒無地のTシャツの彼はジト目を向けた。

「そりゃあ、一人で七箇所も押し付けられなきゃもっと早く済んでたけどな」
「そこはアレだろ、神剣士補正で常人の何倍か頑張ってくれよ」
「そうそう、前にも増して筋肉質になってるんだしさ。オーガ入居予定でしょ、その背中」
「差別だ、差別。訴えて勝つぞ。後、そんな輩は断固住まわせん」

そんな軽口を交わし、辿り着いた自室。二人に断りを入れて身嗜みを整える。

…髪もどうにかしようとしたが、何せ脱色［ブリーチ］されたのだ。今からでは染色も間に合わない、せめてもの抵抗に可能な限り髪を寝かせた無造作ヘアーで通す事にした。

――本日の夕食はなんと、晩餐会形式。明日の学園祭に向けて食堂も会場設営された為と理想幹攻略戦の勝利も祝した前夜祭として、ザルツヴァイでも最高級の三ツ星ホテルを屋上からエントランス、果ては浮島までトトカ一族の名義で貸し切ったらしい。

…ッたく、金持ちが本気を出すと恐えェなァ……

…窓の外は暮色、夜の帳が静かに学舎を包もうとしている。遠くを見遣れば、雲の地平線に沈む太陽の残照が赤から紫、青から紺へとグラデーションを彩っている。

丁度、昼と夜の狭間。そのどちらでも無い、此岸と彼岸の触れ合う逢魔刻の青黒い風。

――後、一日か。この平穏も…

…何故だろうか。その美しさに、この昊［そら］の向こうの分枝世界間…以前ユーフォリアから聞いた、その更に彼方に在る永遠者達の跳梁跋扈するという外部の宇宙を幻視し――いずれ漕ぎ出す、その果て無き宇宙［うみ］の敵意に満ち溢れた波濤と、虚空より己を観測する三ツ目の眼差しを感じた気がして…ゾクリと身を震わせた。

「…ふぅ、何をナーバスになってんだか…」

感傷的になる頭を振って学園指定の青い制服をしっかりと着込み、無精髭が伸びたりしていないかを確かめて。

…前回の理想幹の戦で、エデガの『パワーオブブラック』を受けた際に身代わりのように燃え尽きたお守りを思い出す。
またも物思いに耽りそうになる頭を再度振って、燃え残った鳳凰の尾羽の根付を首飾りとして掛けて昇降口に向かう。

「ところでさ、巽。ほんとに制服で良いと思う？お葬式なら聞いた事有るけど…」
「さぁな、俺だって高級店なんて入った事ねェからな…探り探りで行くしか」
「ナーヤちゃんが良いって言ってたんだから良いんじゃねぇの？」

丁度階段の踊り場に差し掛かった時、美里が姿見鏡で服装を改めて不安そうに口を開いた。
とは言え答える二人も似たようなもの、歯切れは悪い。

と、昇降口に三人分の小柄な影。空色の蒼い髪のユーフォリアに、海色の滄い髪のアイオネアと一一夜色の黎［くろ］い髪のイルカナの姿。

「おおー、物部学園四大妹キャラの三人が纏めて！」
「四大って何よ？」
「ナーヤちゃんを入れて四大だろ？常識だぜ…」
「んな常識、知りたくねーわ」

一部生徒［もりしんすけ］を筆頭にカルト的な人気を誇る、ちみっ娘三人組だ。

「あ、空さんだ」
「アキ様…」

「あら、兄上さま？寄寓ですね」
「ああ…お前らか…別に目的地は同じなんだから、寄寓って訳でも無いだろ」
「そんな事は在りませんわ、兄上さま。物事に絶対は有り得ませんから…」

何と無く並び立つ。背の低い少女達と並べば、彼だけが胸より上の飛び出した状態となった。
と、自然に右隣へポジショニングしたユーフォリアが袖をクイクイと引いた。

「えへへ…学園祭なんて初めてだから、とっても楽しみ。空さんの準備は終わった？」
「終わってなきゃあマズいだろ？そういや、そっちの仕立てはもう済んでるのか？」
「バッチリだよね、アイちゃん、ルカちゃん。タリアさんとナーヤさんのも仕上がったし！」

随分興奮してテンションを上げており、溌剌とした向日葵のように顔を上げて歩く。
まるで遠足前の子供のようだと、微笑ましい気分になった。

「うん…少し、その…恥ずかしい服だけど…」

それに答えたアイオネアも、普段よりは浮かれているようだ。自然と彼の左隣に並んでいつものように腕を取って抱き締め、恥じらう白百合のように俯き加減で歩いている。
一連の様子を全て後ろから眺めていたイルカナは、人差し指を唇に当てて面白そうに呟く。

「…まぁ、兄上さまったら両手に華ですね。入る隙が在りません、私だけあぶれてしまいました」

それが聞こえていた華の二人は、暫し顔を見詰め合い…ポンッと、言う音が聞こえそうな程に揃って顔を赤くした。

「なな、何言ってるのルカちゃん、そんなのじゃないよっ！大体、空さんなんて意地悪なだけだし、トーヘンボクさんだし…！」

「はぅぅ…」

ただし、その対応は全く正反対だ。気まぐれな仔猫のように慌てて、パッと跳び退いて一定の距離を取ったユーフォリアとは対照的に、アイオネアは健気な仔犬のようにより強く、ギュッと彼の左腕に抱き着いて顔を隠す。

「あら、では兄上さまの右腕は私のポールポジションにしてしまいますね」

「お、おいっ！？」

…そして、空いたアキの右腕へとユーフォリアの代わりにイルカナが抱き着いた。

悪戯っぽく無邪気な雛菊の花が、くりくりとした黒い瞳を輝かせた仔狐のように。

「「ええっ！？！」」

面食らったのは本人［アキ］よりも寧ろ、ユーフォリアとアイオネアの方だった。

「どど、どうしてそうなるの～！！だってあの、ルカちゃんは望さ

んが好きなんでしょっ！？」
「～～～～……（こくこくこくこくっ）！！？」

それにパタパタと頭の羽根をパタつかせて抗議するユーフォリアに、赤べこみたいに未だかつて無い勢いで首肯したアイオネア。
結構大きい声だった為に、周りの学生達が何事かと注目し始めた。
そして次第に、物凄ーく居心地が悪くなってくる。

「うふふっ、何を言うかと思えば。この程度の触れ合いなら、昨今の妹キャラには当然。お姉ちゃんが妙な雰囲気の部室から見付けた『どーじんし』には、そう書いてあったもの」
「「『どーじんし』？」」
「コラッ！ンないかがわしいモノ参考にすんなッ！！てか離せ、お前の知識は穿ってる！！」

…だが、イルカナはどこ吹く風で反論してのける。周囲からの零下の視線に腕を振り解こうと試すが、しっかりと掴まれていて小柄な彼女を片腕で持ち上げる具合になっただけ。
ぶら下がるようなその姿勢、二人より少し高くなった目線から――

「第一、ユーちゃんにはとやかく言う権利は無いでしょ？永遠神剣として契約してるアイちゃんならともかく、ユーちゃんは兄上さまのなんでもないんだから」
「うぅっ…そ、それはそうだけど…アイちゃ～ん！！」
「それにアイちゃんも、永遠神剣は一人一本とは限らないんだから…それに『一位の私はもっと凄い未来を斬り拓ける』のよね。ほら、文句なんて言えないでしょ？」
「ふぇ…あぅ…ユーちゃ～ん…」

道理を説かれ、言質を取られて。ぐうの音も出せずに二人は互いの

名前を呼び合う。
対して、したり顔のイルカナは…唐突に破顔する。

「ぷっ…あははは、冗談よ。もう、二人してからかい甲斐の塊なんだから…」
「あう～…」
「むぅ、ルカちゃんのいじめっ子～っ！」

パッと、絡めていた腕を解いて。代わりにアイオネアの腕を取って数歩前に出たイルカナ。
手を引かれて転びそうになりつつ、何とかついて行こうとしているアイオネア。それをユーフォリアが追い掛けて走り去っていく。

「…いやぁー、少し見ない間に髪の色形どころか人物［キャラ］まで大分変わったよなぁ、巽君？何、遅れてきたモテ期かチクショー」
「世刻と違って、全員ちびっこなところが泣かせるけどね…今から六法全書を読んでおいた方がいいわよ、巽」
「…お前ら、気が済んだら早く足を退けてくれる？俺、まだ上履きだから小指取れそうなんだけど」

そして当事者なのに蚊帳の外な、周囲からの凍えた視線を浴びつつ制靴履きの信助と美里にぐりぐりと足を踏まれているアキが居たのだった。

「…つーか、俺が責められるのはおかしくね？どう考えても被害者だろ、俺。アタリ屋に当たられた具合の」
「いぃーや、お前は甘んじてこのくらいのやっかみを受けるべきだ

ね。組合に属する男子から」
「何の組合なのかはツッコまねーからな」

…そうして、辿り着いたホテルのエントランス。因みに、会場設営で出遅れた学生も加えた十五人程の中規模な集団と化している。
それがゲート付近で、ヒソヒソ話をしながらたむろしていた。

「な、なぁ…本当にあそこで良いのか？」
「た、多分…フィロメーラさんが届けてくれた地図だと、此処よ」

しかし――実に入りづらい雰囲気だ。何せ、警護の為か扉の前にはＳＷＡＴ、或いはグリーンベレー的な…屈強で統率の取れた最新鋭装備に身を包む警備員が、見えるだけで八人立っている。

「生徒会長達は一足先に行っちまったし…とにかくここは神剣士の巽に任せるぜ」
「そ、そうね…お願い！」
「都合良い奴らだね…ハイハイ、行きゃあ良いんだろ、行きゃあ」

美里の手から招待状を受け取り、それをヒラヒラさせながら淀みの無い足取りを見せる。幾度も人間のままで死線を潜り続けた彼に、武装した兵士程度では畏怖すらも感じられない。
それに、仔鴨のように後ろを歩く学生達が尊敬の眼差しを見せた。リボンの色から察するに、同級生の女子学生達がヒソヒソと。

「なんだか今の巽くん、少しだけ格好良いわ…ロリコンだけど」
「そうね、こういう時には頼りになるわ…ロリコンだけど」
「違うと言うのに……」

…障子紙よりも遥かに薄っぺらい尊敬だったが。

招待状を渡すと、中身を確認した警備員が敬礼と共に道を開ける。
それに安堵したらしく、学生達ははしゃぎながら自動扉をくぐっていった。

それを見送ったアキは、一番先頭に居たにも関わらず一番最後に扉をくぐろうとして…ふと、背後を見遣った。

「……？」

自分が使わなかった転送装置の脇、夜気に包まれた空と同じ色の闇。
そこを暫く眺めて。

「巽、何やってんだよー！置いてくぞー！」

中から信助に呼ばれ、首を傾げて扉をくぐった。

「…ふふ、うふふふふ…やっぱり我慢した甲斐が合ったわ…」

…夜闇に沈む浮島の、清涼な空気を震わせる風が吹く。毒々しい、青黒い風だ。

「だって――あんなに美味しそうになって、帰ってきてくれたんだもの…」

その陰りから、闇よりもなお深い深紅の奈落［ひとみ］が覗いていた事を見落として……

The 97th Name…"導き"

貴族の舞踏会に使われるような、一階分丸ごとぶち抜いた大ホール。大理石造りのような豪奢な内装の中二階まで在るその会場では、多様な料理が並べられビュッフェ形式の食事会が催されている。そしてクラシックな弦楽器でこれまたクラシックな音楽を奏でる、燕尾服のクラシカルなおじ様方が居たりした。

――前夜祭としてこれ以上無い…てか、学園祭より金掛かってね？とか思ったのは内緒だ。

そのホールで巻き起こるの喧騒…ソルラスカがいきなり腕相撲大会を始め、それに応じたルプトナと良い勝負を繰り広げたり。その後、両方ともがカティマ一人に瞬殺されたり。

一体いつの間にかは知らないが、『学園のマドンナ［斑鳩沙月］』と比肩する程の人気を獲得していた『学園のアイドル［ナルカナ］』が総選挙を開催したりという騒ぎに捕まらないように慎重に抜け出し…本当は立入禁止らしいのだが、雲海に浮かぶザルツヴァイの夜景を一望出来る屋上に陣取る。

「こりゃあ、絶景だな…」

夜空にも浮島にも、色とりどりに煌めく星々。違いと言えば、眼下には満月が無い事くらいか。

景色を眺めながら建物の外側に足を投げ出すように腰掛ける。指を鳴らして、虚空に刻み付けた波紋で繋いだ真世界から貯蔵酒を取り出した。

――このホテルは支えの塔の次に高い建造物だそうで、闇に沈んだ

白亜の町並みの光と雲の海。少し手を伸ばせば掻き出せそうな星空の大パノラマを望む。
酒の肴には最高だろう、後は良い華［オンナ］でも居れば極上だったんだけど。

封緘を解いて、同時に取り出した聖盃へと酒を注ぐ。トパーズ色の細かな発泡、茉莉［ジャスミン］の華のように芳醇な香気を漂わせる三鞭酒［シャンパン］。

「我が識蔵［アラヤ］に、納まらぬモノは無し…なんてな」

だがこれも、アイオネアの異能で生み出された甘露。インド神話のアムリタ、ヒンドゥー教のソーマ、拝火教のハオマ、道教の仙丹、神道の変若水、錬金術士が生涯を賭けて追い求めたという賢者の石、赤きティンクトゥラ、不老不死の霊薬エリクサー等と同格の神酒［エーテル］だ。

聖盃を充たした黄金色の水月を、同じ色の満月に翳す。古く、ある経典では満月を神の盃に見立てていたらしい。
唸るような夜の風に吹かれつつ、さながら満月を蝕むように盃の縁に唇を沿えて酒月を傾ける一一…

「こらーっ！またお酒なんて呑んでーっ！！」
「んブふゥーッ！？ゲホ、嚇かすなっての…痛ッ、鼻に入った！」

…と、そんな彼の背後に現れた蒼の長髪。その怒声に金髪の青年は一瞬、椿早苗教諭かと思って口に含んでいた酒を軒並み噴き出してしまう。

「…全くもう、少し目を離したらこうなんだから…」

「そうピーチクパーチク囀んなよ、喧しい…後、前にも言ったけどもう歳は取れないんだから大目に見ろよ…お前は俺の母ちゃんか」

口許を拭いつつ目を向けてみれば、膨れっ面のユーフォリアが腕を組んで眉を吊り上げていた。

それに頭をポリポリ掻きながら、横目で『うへぇ』と眉根を寄せる。

最近…特に写しの世界辺りから、小言を言われる事が多くなってきた気がして。

「ん…アイはどうした、さっきは一緒だっただろ？」

「アイちゃんだったら、美里さんに写真を取られてるけど…」

「ああー…そりゃあ無駄な事を」

苦笑してしまう。恐らく、美里は頸を捻るばかりだろうと。

空位神剣の彼女には、そもそも影すら出来無い。同軸だろうと平行だろうと一切関係なく、『対象になれない』能力故に”同一存在”は存在しえないのだから。

「あの…あたしより…アイちゃんが来た方が嬉しかった…？」

…と、物思いに耽っている間に、右の傍に寄っていたユーフォリアがクイクイと袖を引いた。縁石に腰を下ろしている為に同じ高さの、少し…悲しげな眼差しで。

「ーーはぁ？なんだそりゃ…別に、文句はねェよ」

不意に、そんな事を縋るような瞳で言われて、つい間の抜けた声を出してしまう。

ーー正確には、誰にも来て欲しくなかったんだけどな…

その不条理にイラついた末の言葉だけは、辛うじて噛み殺して。

「そ、そっか…良かったぁ」

何が良かったと言うのか、無邪気にも安堵の微笑みを見せる彼女。
断りも無く、隣に腰を下ろすと…同じように金色の月輪を眺めた。

「……」
「……」

…言葉は無く、ただ風だけが狼の遠吠えのように鳴いている。星が流れ、瞬きの間に燃え尽き、闇に消えていく。
覚えのある星座など無い、異世界の空。根無し草の浮遊都市は虚空を漂い、その箱庭の内でも生命は途切れる事無く続いていく。

「一一くしゅんっ！！…あぅ」

可愛らしいくしゃみを響かせて、ユーフォリアは寒そうに己の身を抱いた。
宇宙［そら］に近いだけはあって、この世界は冷え込んでいる。昼間でさえも建物の陰では身震いしてしまうのだ、夜間の屋外では制服くらいでは堪えられまい。

「ッたく、女が躯を冷やすなって…ほらよ、コレでも羽織っとけ」
「でも…空さんは寒くないの？」

取り出した、黒羅紗の如く厚手で保温性の高い彼の聖外套を頭から被せてやる。
金の鵄と銀の八咫鴉が刺繍されたそれを見詰めて、彼女は逡巡する

ように問う。

「莫ー迦、寒いに決まってんだろ。だから酒を呑んでんだよ、露人がウォッカを呑むのと同じ…躯を温める為にな」

何故か自慢げにのたまい、聖盃を揺らす。盃の水面に映る月と星が幻灯のように煌めき、さざめく。

「ん…全然意味わかんないけど、ありがと…うん、暖かいね…」

そんなアキに笑い掛けて、彼女は明らかにオーバーサイズな聖外套に袖を通した。

二重の折り返しと霊銀［ミスリル］製のカフスで装飾された袖口からは、白魚のように繊細な指先しか出ていない。

「そうか？あー…それと、臭いは勘弁してくれ。洗っても取れないんだ、香水でも使うかな…」

「ううん、そんな事全然無いよ。あたしにとっては、空さんの匂いだもん。なんだか安心する…」

剣の世界でクロムウェイに貰って以来、あらゆる戦場で纏い続けた外套が存在を昇華させた神装。

それにしてはやたらと現世染みた硝煙の鼻につく香を嗅いで、決然とユーフォリアは彼を見遣る。

「…あのね、空さん…空さんは…この後、どうするの？」

「この後？そうだな…風呂入って歯ァ磨いて寝るけど」

「そうじゃなくて…もう、判ってる癖に……空さんのいじわる…」

その決意を冷やかされて、ツンと桜色の唇を尖んがらせる。流石に

不謹慎だったかと反省し、今度は真面目な返答をした。

「…そういや、俺が旅団の食客でいられるのは前世と【幽冥】とのケリを付ける迄…だったな。自分で言ったのに忘れてたぜ」

…高層の風が吹く。いつかと同じ匂いを孕んだ風が。
そして彼は、隣の少女に語るには明らかに大きすぎる声を上げた。
この学園祭が終わった後の、己の身の置き方を。

「俺は――…眺め続けてみようと思う」

そこで一旦言葉を切り、グラスに残った酒をクイッと飲み干す。
喉から鼻までを突き抜ける香気と炭酸と酒精の刺激に、五臓六腑を震わせて。

…恐らくは、すぐ近くで聞き耳を立てているであろう人物に向けて。
間接的に暇乞いを。

「折角、無限の生命なんてモノを得たんだからな…殺し合いなんて詰まらない事よりも、この有限の神剣宇宙の始まりから終わりを…久遠に続く無色と無間に続く透明を…いつまでもどこまでもずっと、眺め続けてみようと思う」

「……」

時間樹を離れてしまえば、そこにエターナルの存在した記録は抹消されてしまう。〝渡り〟と呼ばれるその法は例え半人前の永遠者でも、如何に【真如】の透過する能力を持ってしても逃れられはしない。影響を受けるのは本人ではなく、時間樹内の者達だから。

だから――…その、ユメの終わりを口にする。永遠の生命を得ると

はそういう事だ。神［いでんし］に定められた死を超越した替わりに…死は、全て己の責任と化す。
生き続ける意味は、己で見付けるより他に無い。解放たる死を忘却したのだから、その責任は全て己の双肩に。未来永劫に安らぎなど無い、永遠に手に入らない希望を探し求めて彷徨い続ける放浪者。

「…フ……」

…その一言に、聞くべき事は全て聞いたと言わんばかりに。緑色のポニーテールを靡かせて、サレスは物影より歩き去っていく。

「…ッ？」

これ以上は無粋になると悟って、向かうその先に。いつからそこに居たのか判らなかった、制服姿の少女を認めて足を止めた。

一方、ユーフォリアは少し淋しげに睫毛を震わせて唇を開く。

「じゃあ、空さんも時間樹を出ていくんだ…意外、てっきり出雲に行くんだって思ってたから」
「ハハ…いい歳こいていつまでも親の脛をかじってられっかっての。つーか、まだ仮定の話だ。真に受けんなよ」
「…『仮定』なんだ…だったら、まだチャンスは有るかな…」

『あるがまま、ありのままにそう在り続ける』と。その銘を持った永遠神剣と同化した、脱色された金色の髪を寒風に遊ばせる青年は鼻白んで。煌めく満月と天の川を見上げて呟いた。

絶望［オワリ］を希望［ハジマリ］にすり替えて。立ち止まらない風の体言として一一最期の一瞬まで、己の壱志［イジ］を貫くべく。

再び満たして黄金の甘露を、自棄を起こしたのかまたも一気に飲み干して似合わない軽口を叩いた。

「空さん…あの、もし良かったらでいいんだけど…その…」

「ん？」

そんな様子を眺めてほうっと溜息を落とし、白い息を吐いた彼女は…袖から覗く人差し指の指先を、ツンツンと付き合わせて。

「あたしと一緒に一一…カオスに行きませんかっ！！」

余程緊張していたのか耳朶や首筋までも真っ赤に染めつつ、いつか以来の敬語まで使って大きな声を出した。

「そしたら家族も一杯できるし、時深さんとも一緒に居られるし…一石二鳥だよ？ね、そうしようよ空さん！」

「…カオス、ねぇ…俺は空っぽだ、加わったところで戦力は増えも減りもしねェぞ？役に立つかどうかも判らん」

そのまま鳥みたいに身振り手振り、頭の羽根もパタパタ羽ばたかせながら、カオスに属するメリットをアピールする。それに思案して、彼女に問い返した。

「もう、役に立つかどうかなんて関係ないもん、一緒に居たいの…って、ちち違くてあの、空さんは一人だと凄く弱いし、自堕落さんだし…あたしが付いててあげないと一一きゃふっ！？！」

「お前まで俺をヒモ呼ばわりする気かっての…」

でこピン一閃、額を押さえて蹲る彼女の怨みがましい眼差しから瞳を逸らす。

――あれは確か、そう…イタリアの言葉。『幸福が多く訪れん事を”ユーフォリア”』との両親の祈りが籠められた、まるで福音のような名を持つ少女。
そして名が示す通り、小さな身体一杯に出逢った人から貰った幸福をギュッと凝縮した、他人すらも幸福にする笑顔を見せる。

「…まぁ、それも…良いかもな」
「…えっ？」

そして、すぐ傍に居る彼女にすら聞き取れるかどうか判らない声量で呟いた。
それにユーフォリアは嬉しそうに瞳を輝かせて笑顔を見せる――

「無宿無頼の風来坊も良いけど、コネを作っとくのも悪くねェなって事だよ。いざという時に頼れるしな」
「うわぁ、不純…」

…一瞬でジト目に変化した視線を感じつつ、酒を煽る。望んだ通りの表情が見れた事に満足して。

――だから俺には…しかめっ面が精一杯、図体ばかりでかくて中身は伽藍洞な『空”あき”』の俺には…お前の笑顔は眩しくて見えないんだよ…

酒の苦味が心地好く、それよりも遥かに苦い想いを吐き出しそうになって…それを喉元で、辛うじて押し止めた。

――まぁ、何にしろ…その為にはきっちり幕を下ろさなきゃあな。
神世の古から延々、続きに続いた俺の…転生の理由に。

彼の携えし聖刃は則ち、終わりと始まりをイコールとするモノだ。
ならば一一始まりは、必ず終わりの後に。

「ふあっとと…！」

その瞬間、吹き抜けた強風に安定を崩した彼女の肩を抱き留める。

「っと、気を付けろよな…明日は学園祭だぜ？怪我なんてしてちゃ楽しめねェぞ」
「あ…うん…」

思わず重ねた二つの掌は対照的。白く汚れの無い小さな掌に対し、傷だらけで節張ったガンオイルの染み付いて取れない掌。

「不純でもいいもん…貴方がロウに行かないなら…それでいいの」

その、父のものにどこか似ている強い腕力を感じつつ。先程の彼に負けず劣らず聞き取れるかどうかの声量で彼女は呟いた。

天を満たす星空に縁取られた絵画のような、二人の後ろ姿を静かに見詰める金と銀の龍瞳。

「…アキ様…ゆーちゃん…」

滄く長い髪に花冠を戴く彼女は、目の前のサレスに一瞥すら与えずに、ただ…じっと己の伴侶である筈の青年と生涯初の親友の後ろ姿

を見詰めるだけ。
龍の媛君は悲しげな瞳で、きつく己のスカートの裾を握る。

「……ないで……」

そして、誰にも聞こえない小さな声で何かを呟いて。成り行きから動けなくなっていたサレスの視界から消えて行く。

「…やれやれ」

『これは面白い事になりそうだ』、と。そんな彼の呟きは、遥かな星天に融けていった……

The 98th Name.・・"朝の一幕"

アラーム音に眼を覚まして、備え付けのタイマーを切る。大欠伸をしてベッドを抜け出し、洗面台に向かう。

「うぉっと…びっくりした…」

鏡に写った金髪に驚き、今はそうだった事を再確認して。無精髭を剃り顔を洗い、歯を磨いて。

寝癖の付いた髪を適当に整えて、クローゼットに掛けていた学制服に袖を通して。

――さぁ、泣いても笑っても人生最後の学園祭…精々永らく記憶に残るように楽しもうか。

歩きながら入口脇のカードキーを引き抜いて、虚無感を抱きつつ…蛻の殻の部屋を後にした。

赤絨毯の廊下を歩む。気が付けば――薄紫色の髪に赤いメッシュの男と黒い髪を赤い髪留めで纏めた少女、ソルラスカとルプトナの姿が在った。

「あーふ、おはよーさん、空…」

「おふぁよー…あき…あふあふ」

「おう、朝っぱらから暑苦しいな。避けて通りてェ」

「ぬかせっての…さぁて、朝メシ食ったら学園祭だ。急ごうぜ」

盛大な欠伸をしたソルラスカと、眠たげに眼を擦るルプトナの三人で揃って歩き出す。幼馴染みの望と希美より気が合う二人。そのまま、エレベーターの下矢印を押して待つ。

「あー…やっぱし、早起きは性に合わねぇ…」
「ホントだよ…んー、それっ」
「っあ、オイ、何しやがるっ」

伸びをしたソルに同意するように答えたルプトナが、実に怠そうにアキの背中に飛び乗った。

「へへ～楽ちん楽ちん。このまま食堂に運んでよ」
「ざけんな、テメーの足で歩けよ…ってか、お前は先ず自分の得物の破壊力を自覚しろ！」
「得物？【揺籃】は出してないじゃんか」

振り解こうとするが、彼女の主な武器の脚が腰に巻き付けられて、解けない。
首に回された腕が絞られて彼女の持つ物部学園有数の…ヤツィータに次ぐ程豊か過ぎる双丘が背中に押し付けられ、健全な男子として否応なしに動悸が速くなる。

「いいじゃん、けちけちしてさー。ユーフィーにはやってんだし、差別するなよなー」
「アイツはアイツ、お前はお前だ。それに差別じゃなくて区別」
「元気だなテメーら…で、どんな具合だった？」
「DないしE、夢と希望が詰まっているとみた」

何とか彼女を背中から下ろして、ソルラスカに答えを返す。

軽く握った左腕を曲げて己の右胸に当てると、それにソルも右腕で同じ仕種を返した。

「？」

それに置いてきぼりにされたルプトナだけが、首を傾げていた。

…窓から差し込む陽射しに、一瞬意識が白む。ソルラスカとは剣の世界で爪と銃、ルプトナとは精霊の世界で靴と銃を交えた。いずれも、出逢った時には本気で殺し合った間柄だったというのに今はこうして一一…思わず、涙が出そうになるくらいに平凡な日常を繰り広げている。

一一そうだ、楽しいだろう。もう、お前の手に入らない…魂の安寧［アタラクシア］は。

「一一ハ」

瞬間、ただ失意だけで死にそうになった。己が捨てるモノの煌めきに目を逸らすべく、反響する思考に蓋をする。
もう決めた事だ、己に与えられた名の通り…この世の一切は無意味なのだと。

「なぁソル…ルプトナ。俺はお前達に出会えて、本当に良かった」
「「一一はぁ？」」

と、そんな歯が浮くような台詞を口にした瞬間、エレベーターの扉が開いたのだった。

レストランフロアに入り、ソルとルプトナが離れていく。
洋風セットを取って、座れる席を捜してみれば…右から蒼・黒・滄の三人娘の姿。

「よう、お前らも朝メシか」
「「あ……」」
「兄上さま…」

同じテーブルで食事を摂っているユーフォリアとイルカナ、そしてアイオネアと合流する。

「…どうした、何か困り事か？」

ふと、きっと合流する前からそうだったのだろう、妙に浮かない顔をした三人に気付く。

「え？あ、ううん…別に…」
「何でも…ないです」

…それを受けて、ユーフォリアとアイオネアが揃って首を振った。
浮かべた笑顔は、薄曇りの陽光か月光のようだ。
ふるりと揺れた長く艶やかな髪は大空を翔ける蒼穹［あお］色の風、大海をうねる滄海［アオ］色の波を連想させる。

「そうか…まぁ、あれだ。ピンチになる前には頼れよ」

誰しも自分の力で解決したい事が有るだろうと、食い下がる事無くぶっきらぼうに話を終える。

頼られるのと頼らせるのは違う、甘やかすだけでは大成しない場合は確かに在る。

「…うん、ありがと…」
「はい…有難うございます」

答えた彼女達は一一微かに、笑顔を見せてくれた気がしたのだが。
互いにそれを見ると、何故か表情を固くして目を逸らし合った。

「…兄上さま、少しお耳を」

グイッと耳を引っ張られる痛みに意識を向ければ耳元に寄せられた、先程おんぶの際に肩に置かれたルプトナの横顔にどこか似ているイルカナの端正な顔立ち。

「一体に何をしたんですか？」
「何って…何が？」
「しらばっくれないでください、ほら…あれ」

と、指差された先に目をやれば…金色の聖盃に湛えたアイテールを伏し目がちに口に含むアイオネアの姿。
爪先から順に確認してみる。黒いロングブーツにタイツ。学園指定の制服に瑠璃の宝珠が嵌められた首輪型のアミュレット、海色の髪に一一サークレット状に編まれた常緑の冠。

「ああ…花冠［カローラ］が月桂冠［ローレル］になってるな」
「夕べ、兄上さまを探し行った後にああなっていました。それからずっと落ち込んでいて、慰めようにも目線すら合わせてくれません。お陰でユーちゃんまで落ち込んでしまったんですよ…」

はて、と思い出してみる。昨日はアイオネアに会っていない筈だ。

「……まさかとは思いますけど…アイちゃんが大人しくて兄上さまに絶対服従なのを良い事に、無理な事をしたとか」

「するか、アイは同じ生命を共有した妹つーか、一卵性双生児より自分に近い存在だぞ」

「ですよね。兄上さまはもし恋人が出来ても、大事にするあまり手が出せないタイプでしょうから」

「放っとけ」

一一昨日は、そう…ユーフィーに会ってそれから部屋に戻って寝ただけだけど。

そう考えてユーフォリアを見遣ると…パンをかじろうと大きく口を開いていた彼女とバッチリ視線が交わった。

そんな状態を見られた恥ずかしさからか、赤くなった顔で睨まれる。

そして一一にこりと、花の蕾が綻ぶような笑顔を見せてくれた。

「なるほど、そーいう事ですか…アイちゃんが落ち込む筈ですね」

「…オイ待て、何誤解してるんだお前。誘われただけだ、カオスに来ないかッてな」

「それを聞いて、確信しました。全く…困ったものです、早くアイちゃんに謝ってくださいね」

そしてジト目のイルカナに溜息を落とされてしまった。

「ご馳走様でした、ルカちゃん…アイちゃん…あの、最後の準備をしに行こうか…？」

「ええ、そうね。先に行ってて、ユーちゃん、アイちゃん」

「……うん…」

食事を終えたユーフォリアが立ち上がり、イルカナとアイオネアに声を掛ける。それに答えて二人が立ち上がって、イルカナを残して歩いていく。

「兄上さま、私達永遠神剣の化身だって…一個の意志を持った女の子なんですよ」

「…どういう意味だ、俺はアイを武器扱いなんてしてねェよ」

そして真剣な瞳の彼女に…真摯にその一言をぶつけられた。

だが、その一言は多分に心外で…思わず、恫喝するようにトーンを下げてしまう。

「だとしたら、尚更見損ないます。己の言葉に矛盾する貴方を」

「――俺が、矛盾してる…？」

が――彼女は同じる事も無く、彼を睨みつけた。気圧されたのは、寧ろアキの方だ。

イルカナは、背後を通り抜ける際にポソリと。

「貴方なら…誰よりも志を重要視する兄上さまなら、必ず理解してくださると信じていますから…」

…そんな言葉を残していった。

「…知った風な口を利きやがって…」

残されたアキは一人毒づき、椅子に深く腰掛ける。

――ユーフィーとの話を聞いてたとして…アイが嫌がる筈が無い。

あの二人は随分仲が良いんだから…一緒に居れるのは寧ろ嬉しい事だろうに…

思考するが、腑に落ちない。誰も損をしない選択の筈だ。

『…次に結んだ手は決して離さぬように。貴方を慕ってくれる者なんて、もう二度と現れはしないでしょうから…』

と、その時ふと甦ったレストアスとの別れの際に掛けられた言葉。
その金言に自分は応えられているのだろうか、と。

「ああ――…確かに、謝らねぇとな…」

瞬間、一体何をしているのだろうかと。漸く気付いた己の頬を勢いよく張ったのだった。

The 99th Name…"白昼の一幕"

生徒会長・斑鳩沙月の、校庭での学園祭開幕の宣言より既に半刻。
様々な催し物により賑やかな声に溢れる校舎内は活気に充ち溢れている。
充ち溢れていると言えば以前にもやった、ものべーとアイオネアの合わせ技によって『煌玉の世界』のマナが充ちており、クリスト族達にも学園祭を楽しめるように、そして無闇に神剣魔法を使えないようにもしてある。

そして、様々なテキ屋があるその祭の中に在って、特に盛況な店が在った。喫茶店『悠久』、外面は軽食喫茶だが、その実態は――

「――あ、おかえりなさいませ、ごしゅじんさま～」
「うひょー、ただいまユーフィーちゃ～ん！」

開いた扉に向けて愛想を振り撒くユーフォリアに、信助は喜色満面で答えた。
特筆すべきは、その彼女の格好。白いレースとフリルがふんだんにあしらわれたエプロンドレスに、ヘッドドレス。つまりは、所謂…メイド服という奴だ。本職のそれに較べれば露出が多いが。

そう、此処は一昔前に一世を風靡した、あの――…『メイド喫茶』なのだった。

「あ、信助さん。もう四回目ですよ…他のところを回らなくて良いんですか？」
「良いの良いの。ここは俺達の…モテない男達のオアシスなのさ」
「はぁ…何馬鹿な事言ってんのよ、アンタは」

「全くじゃ。何度も来るな、席の回転率が悪くなるじゃろうが」

と、同じくウェイトレスのタリアとナーヤも現れた。そのどちらもがやっぱり似たメイド服。

ただし、ユーフォリアが赤を基調としていたのに対してナーヤは青。タリアは二人とデザインが多少異なり薄い緑を基調にボーダー柄が使われ、余程抵抗が在ったのかヘッドドレスではなく同色の帽子となっていた。

そんな二人に口々に冷たい言葉を掛けられ、彼は――

「はぁぁ～…痺れるぅぅぅ～…」

『それもアリ』といった具合に、身もだえていた。

「…あんな方が契約相手だったらと思うとゾッとします。ああいう事をしたら、百年の恋も冷めるというものね、アイちゃん」

「……うん…」

「その点で言うなら、兄上さまはむっつりだから安心ね」

「……うん…」

「アイちゃん…はぁ、兄上さまはまだ謝ってないのかしら」

それを冷やかに見る、黒を基調としたメイド服に身を包むイルカナが、黄色を基調としたメイド服を纏うアイオネアに話し掛ける…のだが、月桂冠を戴くメイドさんはしょんぼりと俯いたまま生返事を返しただけだ。

「おーい、メイドさーん。注文が有るんだけどー」

「メイドさーん、おしぼりー！」

その時、客連中から声が上がった。他にも数人の女生徒が給仕役に居るが、此処に来ている大多数の男子生徒はメイド…しかも、美形揃いの神剣組を目当てにしていると言っても過言ではない。

呼ばれた彼女達は笑顔で、何処か…タリアに至っては、露骨に面倒そうに仕事に戻って行った。

というのも彼女は、ほぼ今日この職務内容［メイドカフェ］をやる事知らされたらしい。その性格からすれば、不本意この上あるまい。

「さぁさぁ、ユーフィーちゃん。俺も席に案内してくれよ」

「んもぅ、仕方ないですね…」

「んじゃあ、さっきと同じ紅茶とスコーンでね」

「はーい」

『はふぅ』と溜息を落とし信助をテーブルまで案内する彼女。席に着いた彼はメニューを見ずに注文して、厨房の在る奥に引っ込んだユーフォリアの後ろ姿を見ながらだらし無くニヤつく。

やがて、注文通りのメニューを盆に置いた彼女が現れた。

「ご注文の品になります、どうぞごゆっくり…あ、おかえりなさいませ、ごしゅじんさま～」

「あ、ちょっとまったユーフィーちゃん！」

さっさとそれらを置いて、新たに訪れた客の方へと向かおうとした彼女を呼び止める。そして――

「いやぁ、紅茶が熱いからさー…ふーふーして欲しいなぁ、って」

「…信助さん、あんまりわがまま言うと流石に怒っちゃいますよ」

全力でそんな事を述給いたもうた。さしものユーフォリアも眉根を

寄せ、少し厳しい声を発する。

「いいよー、怒っても。いや寧ろユーフィーちゃんになら積極的に怒られたい！」

「おいおい、汚ねぇぞ信助！ユーフィーちゃん、俺も俺も！」

「俺も俺もー！」

「むう、みんなで馬鹿にしてー！もう許しません、成敗ですっ」

…既に手の施しようの無い信助達［せっそうなし］の鼻息荒い言葉に、頬を膨らませたユーフォリアは一一テーブル上に備え付けてある、呼び出し用の小さな銀色ベルを手に取り『ちりんちりんちりん…ちりりーんちりりーんちりりーん…ちりんちりんちりん』と規則的な音色を奏でた。

それは紛う事なきモールス信号…その瞬間、厨房からまるで黒い風のように。

「一一お客様…申し訳在りませんが、ウチはそういういかがわしい店ではございませんので」

「「「奥から怖いお兄さんが出て来たァァッ！？！」」」

漆黒の燕尾服に白い手袋、紐タイに磨き上げられた革靴という執事然とした姿の、ディファイアント＝デリンジャー【無銘】に銃弾を装填しながら最高の笑顔を見せるアキが現れた。

「オイィィ、聞いてねーぞ！何で俺達の憩いの場［パライソ］の厨房に殺人シェフが居るんだよ！」

「そうだそうだ、戦艦ミズーリ号に帰れ！」

「暴走した列車に姪っ子の誕生日ケーキを作りに帰れ！」

「同じ学園に通う生徒をケ◯シー＝ライバック扱いなんて良い度胸じゃねーか！聞いて驚け莫迦野郎共、お前らがメイドの手作りだと

思って喜んで食ってたモノ、あれ全部俺の手作りだから。篭ってるのは俺の真心だからな！」

「「「うえっぷ……なんかスゲエ気持ち悪くなってきた…」」」

周りからの非難と暴言に、アキは大声で答える。それに伸助に賛同して声を上げていた男子生徒達は、揃って顔色を悪くした。

「それじゃあ空さん、後は任せたからね」

「おぅ、任しとけ。こいつらには俺直々に『腐雨腐雨［ふうふう］』しとく」

「「「止めてェェェッ！！？」」」

そして解放されたユーフォリアは、ぱたぱたと急ぎ足で先程入って来た客の方に向かっていく…と、待ちくたびれたのか客の望と希美に沙月と絶、カティマとルプトナ、ソルラスカとサレス、ナルカナの九人は既に直ぐ近くまで来ていた。

「やれやれ…何騒いでんだか」

「ふむ、大盛況のようだな」

「おお、のぞむではないか！ささ、ゆっくりしていくが良いぞ」

「特等席をご用意いたしますね、望さま」

「サ、サレス様っっ？！ようこそいらっしゃいました！」

「ちょっと、ナーヤ、イルカナ！勝手に望を連れてくんじゃないわよっ！」

「まぁまぁ、ナルカナさん。みなさんも近くに案内しますから」

…辛い事だが、全てありのままを話そう。俄かに色めき立つ店内。想い人の登場にナーヤとイルカナ、タリアがかつて無いくらい発奮して案内し、息巻く望ハーレムの面々をユーフォリアが案内する。

「あ、あの…暁くんっ！私が案内するね！」
「ちょっと、それは私がやるからこの料理持って行って！」
「…おっとと…そう急かさないでくれよ」

絶はといえば一般の女生徒メイド達が我先にと案内を買って出て、牽制しあいながら引っ張るように連れていき、最後には一一…。

「……」
「「……」」

誰からも見向きもされなかった、一匹の孤狼が佇んでいた。

…目が合う。狼は哀しそうに瞳を伏せた。だから…耐え切れずに、アキと信助がその肩に手を置いたのだった。

…店内の勝ち組負け組の配置は、あっという間に別れた。日当たりの良い窓側席は望ハーレム勢力と一般メイド達に構われる絶勢力、そして痒い所に手が届くタリアのサービスを受けるサレスの三国が割拠する戦国に突入して、残りの生徒（八割方男子）は一挙に廊下側の日当たりの悪い席に移されてしまった。

「…すげぇ格差、何コレ。珍百景に登録してぇよ、兄貴」
「…こんな屈辱的光景を登録してどうすんだ、信助」

すっかり不貞腐れて体育座りした信助とソルラスカが先頭を切って、そんな明るい方を恨めしそうに見ている。
店内に溢れる負の視線に殺傷能力が有ったのならば、きっと三百回

は殺せるだろう。黴や茸が生えてきそうな陰湿さを感じる。

そんな男子生徒達に十字を斬り、適当な念仏を唱えて唯一神の加護でもあるように願った後に。

「…で、エヴォリアさん。アンタは紅茶一杯でいつまで粘る気だ」

「あら、別に良いじゃない。まだ残ってるんだし」

その廊下側の席の一角、残る二割の女生徒の中心に居るエヴォリアにジト目を向けた。

テーブルの上にはタロットカードらしきモノ。易者をやって学園祭を愉しんでいるらしい。因みに、ベルバルザードは直ぐ脇で葛切りを食っている。

「すいませーん、ガトーショコラと紅茶のおかわりを」

「承知致しました、お嬢様」

と、耳に届く女生徒からの注文。それにより仕方なく、メイド喫茶という事で取り敢えず執事として畏まった様子で、頭を下げて厨房に引っ込んでいった。

「あ…アイ」

「あ…アキ様」

と、そこでバッタリと出くわした相方。信助曰く『愁えるあの表情もまた堪んねー』らしい、謝らなければならないのに忙しさも有り捕まえられなかったアイオネアの姿。

彼女も彼女で注文を受けているのだろう、銀の盆には結構な料理が置かれていた。しかも驚くべき事に彼女、今日はまだ一度もドジを踏んでいない。

一一千載一遇のチャンスか、謝るなら今だな。丁度、人目も無い事だし。

「…少し時間、良いか」

「…厭…です…聞きたくない…」

…と、こちらの決意をどう察したのか。急に怯え始めて盆を落とし、ふるふると首を振って後ずさる彼女。

まるで、目前まで迫った捕食者に怯える非力な小動物のような仕種で。

「アイ…聞いてくれ、俺は一一」

二人の間に横たわる溝を象徴するかのように展開された魔法の隔壁が、歩みを阻む。

絢爛たるステンドグラスの如く、細緻な真円形の薔薇窓…動く事を止めた大気とマナを組み合わた、物理効果［マテリアル］・魔法効果［フォース］への絶対的な防御壁と全属性に対する完全無欠の遮断幕［プロテクション］を誇る、彼女の一一【真如】の持つ『最強の楯』であるディフェンススキル。

「厭…厭です……聞きたくない…聞きたくない…！」

遂には手で耳を塞ぎ、きつく目をつむって駄々をこねるように長い髪を揺らす。

「ッ……この、いい加減に…！！」

だが一一彼自身も全幅に信頼する加護『精霊光の聖衣』でさえも、

波紋を刻みながら摺り抜けた。
起源たる『空［アカシャ］』の内包する要因、『風』と『水』に起因した流体制御による『時空間連続の停止』も、意識的にその密度を飛躍的に高めて『対象外』能力を強化した彼には失効したのだ。

出来るだけ怯えさせないように、ゆっくりと歩を進める。
当の彼女は壁にお尻をぶつけて退路を失い、口を真一文字に結んで見ざる言わざる聞かざるの構え。

「一一あっ……」

その腋下に両手を入れて持ち上げ、キッチンテーブルに座らせる。
視線の高さが合った事に驚き力の緩んだ腕を掴み、耳を覆った手を外して一一すっぽり収まる小さな掌を包み込んだ。

「…御免な。そりゃあ怒るよな、勝手にお前の進む道まで俺が決めちまって…」

今の己の”生命”は、彼女から借り受けた半分。それをまるで、自分だけのモノで在るかのように振る舞った己を恥じつつ頭を下げる。

「…そんな事は…良いんです」
「…え？」

謝罪の言葉を遮ってアイオネアが口を開く。顔を上げれば至近に、真っ直ぐに見詰めてくる文字通り宝石の光沢を放つ金銀の双眸。

「私はアキ様の刃です。アキ様のお進みになる道を切り開く為の刃ですから…私の進む道は、いつも必ずアキ様と共に在ります」

泪の向こうに見える龍瞳に、迷いなど一片も無い。曇り無く純粋な言葉に偽りは無かった。

「なら、どうして…」

『今にも泣き出しそうなんだ』、と。だからこそ口を突いた、その問い掛けに彼女は。

「私では、アキ様に御満足頂ける力には……為れませんか…？」

「―――…！？！」

…震えた唇から紡がれたその一言、揺れる瞳から零れたその一滴に全てを悟る。

『…カオス、ねぇ…俺は空っぽだ、加わったところで戦力は増えも減りもしねェぞ？役に立つかどうかも判らん』

何気なく呟いたあの、自虐の言葉。他の何でもないあの言葉こそが、彼女の心を傷付けた正体だった事に。

そして、思い知る。己を卑下する事は、自らこの少女を貶める事と同義なのだ。

「……ないで…頑張りますから…見捨てないで……」

それが概念でありながらも事象…有形にして無形なるカタチを持つ”生命”というモノ。

己が如何にそれを甘く見ていたかという事を本当に今更思い知る。

それに気付いた時、思わず彼女を抱き締めていた。

「…莫迦だな、俺がアイを捨てる訳が無いだろ?寧ろ、お前に愛想尽かされる方がしっくりくる位の駄目男だぜ?」

――それに……俺は絶対に生命を捨てはしない。俺は、俺を捨てた奴らのようにはならない。

「…そんな事、在り得ません。私はどんな事が有ってもアキ様と…この生命の尽きた後でも、永久に共に在ります」

ゆっくりと背中に回される細腕の感覚に安寧を覚える。以前、あの天上海で彼女に抱き締められた際に感じたモノと同じ。陽光射す海に揺蕩うような、あの安信［あんしん］。

「ああ、俺も同じだ。似た者同士だな、俺達って」

「当たり前ですよ…だって、同じ生命なんですから…」

腕の中から見上げ、微笑んでくる瞳に微笑み返す。滄い髪に手櫛を通せば、まるで彼女の喜びを表すように冠の蕾が華開いていく。

「ごめんなさい、アキ様…我が儘な事をしてしまって…」

「全然我が儘の部類に入らないって…そうだ、アイ。罪滅ぼしって訳じゃ無いけど、何でも一つ我が儘聞いてやるぞ」

「えっと…その…突然言われても、思い付きません…」

「期限付きじゃ無いからいつでも良いさ」

月桂冠［ローレル］から、いつもの花冠［カローラ］に戻るのに時間は懸からなかった。

そうして仲直りを終えて、静かになった室内に――

「…次はきっとキスですよ、キス。しかも深いやつ」

「きき、キス?!しかも深いやつって何?!」

「「……」」

といった具合に、興味津々に此方を覗くイルカナとユーフォリアの姿が在ったのだった。

The 100th Name…"祭本番"

生徒から受けた注文の品を届けて一息つき、何気なく周囲に視線を巡らせてみる…と、目に入るのは宙を舞った食器群が降り注ぐ場面だった。
…勿論、ケーキやパフェ等中身が入った状態で雨霰と。救いは紅茶等の熱い物が無かった事だろう。

「はぅ…ソルさん、シンスケさん…ごめんなさいぃ…」
「オーケー…気にすんなよ…」
「そうだぜ、アイちゃん…もう、慣れたからさ…三回目だし」

そして慌てて起き上がりパフェやケーキを頭から浴びたソルラスカと信助に、ぺこぺこと頭を下げているアイオネアの姿。
どうやら、悩みが解決して集中力が切れてしまったたらしい。二人に許しを貰い、二人が受け止めていた食器を受け取ってキッチンに引っ込んで行った。

一一因みに信助を初め、一般生徒達はアイに触れられるとの事だ。
どうやらアイに触れられないのは、原則的に『永遠神剣及び神剣と契約している存在』らしい。
中には例外も居るみたいだが。

「…ふぅ、兄上さまと仲直りしてテンションが復活したのは良いのですけど…ドジっ娘属性まで復活ですか。困ったものですね」
「……ぐう…」

通りすがりにそう、わざとらしく呟いていくイルカナ。取り敢えず契約者の務めとしてぐうの音だけは出しておいた。

…と、室内に澄んだ割砕音が響く。アイオネアが盆に乗せて持って来たばかりの熱々のおしぼりを、驚きのあまりに転んでソルラスカと信助の顔にぶつけてしまった程に盛大な音だった。

「「ギャアア、熱いィイ!?!」」

「はぅぅ、ご、ごめんなさい～」

野太い悲鳴を上げて七転八倒する二人とさっきよりも速いペースでぺこぺこ謝るアイオネアを尻目に、イルカナは深い溜息を落とす。

「…まぁ、使えなくなった具合で言えば彼女もどっこいですけど」

その眼差しの先に――

「あっ、ごめんなさい望さん！」

「大丈夫大丈夫…ユーフィーこそ、怪我してないか」

ボンヤリと歩いていて望のズボンへアイスコーヒーを零してしまい、更にグラスを割り慌てふためくユーフォリアの姿が在った。

「は、はい…本当にごめんなさい――痛っ…うぅ」

その慌ての所為か、彼女は素手でグラスの破片を拾おうとして指を切ってしまった。

人差し指の先にぷっくりと、赤い血球が出来る。それを見た少女は、目を潤ませてしまう。

「ったく、何やってんだお前は…悪いな、望」

「あ、空さん…大丈夫だから」

「望さま、直ぐに代わりのアイスコーヒーを持って参りますね」

「いや、いいさ。それより怪我の手当をした方がいい」

イルカナとアイコンタクトで打ち合わせ、その手を掴んでハンカチで血を拭う。アイオネアを呼ぼうかとも思ったが、忙しそうな彼女を呼び付けるのもどうかとやめた。まあ、忙しくなったのは自分のドジの所為なのだが。

「む～っ、大丈夫…本当に大丈夫だから…！」

そんな思慮の間にもユーフォリアはむずがるように手を振り解こうとするが、アキに触れられて永遠神剣の加護を受けられなくなった少女の細腕では屈強な青年の腕を解く事など不可能だった。

「煩せぇなぁ、黙ってろ。傷痕が残ったりしたらコトだろうが」

「うぅ～…」

左手を構えて、カティマの防御技『茨の篭手』を爪先まで覆う篭手としたモノを具現化する。次いで意識を集中して、魂の深奥に燈る煌めき『生誕の起火［ニトロ］』をマナ［ガソリン］に混ぜる。…それは急加速度的に増幅されて精霊光［タービン］を展開［まわ］し、一発の銃弾を精製した。アキの武器は本来的に『銃』ではなく、銃から撃ち出される『銃弾』なのだから。

「…精霊光の風よ、歩みを止めぬ者達の背を押す追い風となれ――『トラスケード』」

それを握り込み、親指の爪を撃鉄の代わりに雷管を打ち発砲すれば――拳から漏れ出す、清涼な蒼茫の風。蒼く輝くオーラの風は彼女の指先の傷を跡形も無く癒した。

「これでよし、っと…後はグラスの修復か」
「えと、ありがと…片付けなら、あたしが…」
「いいから、お前は早くおしぼり持って来い」

最後に、割れたグラスの全破片をエーテル塊で包み込んで一一完全分解して再構築、終わりを始まりに還し、そこから無限に分岐する可能性の系統樹を形作って割砕前の状態…則ち『グラスとなった』可能性を選び取り回帰させる。
それを望の座っているテーブルの上に乗せた瞬間、アイスコーヒーのピッチャーを持ったイルカナが戻って来た。

「どうぞ、望さま」
「ああ、有難う空、イルカナ」

グラスに氷とコーヒーを注ぐと、コースターの脇にガムシロップとミルクのポーションを置いてからストローを差す。良く出来た給仕さんだった。

「…兄上さま、料理の作り置きの方は出来ていますか？」
「ん、ああ…ある程度は冷蔵庫に入れてあるぞ」

そしてイルカナは、ユーフォリアが盆に乗せて持って来たおしぼりを受け取り彼女を押し止めた。

「それなら充分ですね。兄上さま、ユーフィーちゃん。お店は私とナーヤさま達だけで大丈夫なので、アイちゃんと上がって下さい」
「ええっ、でも…」
「これ以上ヘマをされるとこっちが迷惑なんです。それに…貴方達は楽しませるより、まずお祭りを楽しむべきですよ」

反論しようとしたユーフォリアを一言で斬って捨て、そして全てを見通すかのような黒い瞳で見詰められる。『分かってますよね？』と。

――やれやれ、俺に慰めろってか？そういうのは望とか、いつでも誰にでも優く出来るような優男に頼めっての…

「諒解、お言葉に甘えさせて貰うさ。じゃあ一人で回るのも何だ、俺らと一緒に回るかユーフィー」

「うん…えっと、あの…じゃあ、着替えてくるね」

落ち込んで萎れたユーフォリアの頭頂部に、軽ーく空手チョップを落として注意を向けさせる。

彼女は少しだけ嬉しそうに痛む頭を押さえ、途中でアイオネアの手を引き隣の部屋へと消えて行く。

（…さて、それではお姉ちゃん。望さまのズボンが染みにならないようにお拭きして）

（イルカナ…あんた…あたしに花を持たそうと）

それを見送った後で、イルカナはナルカナに思念を送った。

そう、望争奪戦のアドバンテージを取る為に。

（うふふ、当たり前じゃないですか。お姉ちゃんが選ばれる＝私も付随するという訳なんですから）

「イルカナ…あんたの思い、受け取ったわ！望、あたしがズボンを拭いて――」

そんな打算的な妹の支援を受け、姉は勢い込んで望に向き直り伝家の宝刀［プライモディアルワン］を振り抜く――

「一一あ、大丈夫だよナルカナ。わたしが拭いてるから」
「…くっ、希美…?!」
…もうとっくに、自前のハンカチで拭いている希美の笑顔を見たのだった。
「…さぁて、今回も始まりました第三次世刻大戦。実況は私こと、森信助。解説は神銃士こと、巽空さんです！」
「何で俺だ、ソルに頼めよ」
「兄貴はタリアさんに見惚れてて役に立たねぇんだよ」
「まぁ、仕方ねぇか…」
テーブルに着いたまま、さながらプロレスの実況席のような口調の信助。アキは手早く空間に刻んだ波紋を通り抜けて、学生服を着た状態で現れた。
ソルはといえば、確かにメイド姿のタリア…サレスにかいがいしく仕える彼女を指を咥えて見ていた。余りに不憫なその姿に不覚にも、涙がちょちょぎれそうになってしまう。
「…さて、流石は緑属性の希美。伝家の宝刀をも通さないあの防御は並大抵じゃ突破出来ない。次は誰がどう出るか…」
「希美さま、乾いたハンカチより濡らしてあるおしぼりの方が適任でございます一一」
…と、呟いた瞬間。一歩出遅れたイルカナがナルカナにおしぼりを手渡そうとして一一既にお盆から消えている事に気付く。
「一一そうよ、希美ちゃん。此処はおしぼりを持ってる私が拭いておくから、希美ちゃんはケーキでも食べてなさい」

「そんな…沙月さま…！」
「…速い…私にはインターセプトが全く見えませんでしたよ、解説の巽さん！」
「いや全くですね実況の森さん。神速のインタラプトと、さながらトムキャット並の多数ロック性能…流石は会長。あれこそ、全てを貫く最強のバニッシュスキル――『オーラフォトンスパイク』！」
そして目にも留まらぬ速さを以ておしぼりをゲットしていた沙月が、希美に取って代わろうとする。
「何だか懐かしいなぁ。望ちゃん、よく飲み物零してたよね」
「うーん、そうだったっけか？」
「そうだよぉ、もう…都合の悪い事ばかり忘れて…」
「な…まさか希美ちゃん…その技は！？」
だが、希美は全く動じない。それぱかりか沙月の言葉は完全に無視されてしまった。
沙月は驚きと屈辱の入り混じった瞳で、そんな彼女を見遣る。
「巽さんんん？！あれは…あの技はまさかァァァ！」
「その通りです森さん！あれこそ仲良し幼馴染みのみが展開可能な、共有する時間と記憶による結界［スイートメモリー］…関係無い者には突破どころか干渉すら不可能な究極のディフェンススキル――『ノゾミブロック』です！ハハ、同じ幼馴染みでもこの差ァ、素面でやってられっかァァァ！！」
「丁寧な解説を有難うございます。はたしてあの防御を突破出来る猛者は現れるのか！面白くなってきました、そして呪われろ望！！」
ヤケクソ気味に気勢を上げる信助と、真世界から以前のように酒を取り出して煽るアキ。

「アンタ達、ノリノリね…」

…それを見ていたエヴォリアが、呆れた様子で呟いていた。と――

「汚れを落とすんだったら洗濯が一番だよ。ボクの【揺籃】の水で洗い流してあげるよ、望！」

「――なっ…！？！」

「っ！？こ、こら、ルプトナっ！」

その刹那、望の後ろからルプトナが豊満な胸を彼に押し付けるかのように抱き着く。望は上辺で抵抗しつつも、満更でもなさそうだ。

「…わたしにも…わたしにもあれくらいばいーんとたわわな果実があれば…ううう…」

希美がその圧倒的なボリュームを見た後、絶句しつつも己のモノを改める。そして――がっくり肩を落とした。

「粉砕ィィィ！トラウマを突いてあの鉄壁を完全に粉砕したァァ！なんて破壊力なんだァァッ！！」

「青の真髄は何か…インタラプト？バニッシュ？そんな猪口ざいなモノじゃない、その真骨頂は敵を防御ごと砕く攻撃力だ！あの質量こそルプトナ巨乳［ナントカ］――『ランページブルー』ゥゥ！」

「解説有難うございます巽さん。さあさあ、あの質量に勝てるのはヤツィータさん位…残るメンバーはどう立ち向かうのか！そして、何より呪われろ望！！」

アキが喇叭呑みしていた酒を奪うように信助も一気呑みし、怨嗟に近い実況を開始する。

「ふふん、愚か者め。るぷとなよ…物部学園の制服は、手洗いしか出来ぬのじゃ！」
「な、なんだってー！？足じゃダメなの？！」
「そういう意味じゃあ無いだろ、てかちょっと待て、どんな洗い方をする気だったんだ！」

と、そのルプトナを望の正面からナーヤが指差す。それにショックを受けたらしいルプトナが大袈裟にのけ反った。

「判ったのなら引っ込むがいい、そもそもお主らは客じゃろうて。のぞむの世話はのぞむ専属メイドである、わらわに任せておけ」
「いつ俺の専属になったんだよ」
「ぬぅ、なんじゃのぞむ？わらわでは不服か…？」
「うっ…いや、そういう訳じゃ」

そんなイケずな望の言葉を受けて、ナーヤは文字通りにじゃれつく子猫のように彼の膝に顎を置いて見上げた。

「出たァァァ！真打ち登場です！物量に対抗して、フェチを攻める作戦に出たァァァッ！！メイド服に猫耳、止めにロリ！好きな人には堪らない、真性の三種の神器！！」
「属性効果［フォース］は常に赤と共に在るもの…その破壊力たるや、正に銀河を吹き荒れる大嵐ーー『コズミックテンペスト』！！！」「チッキショォォォ、俺もあんな風にされたいです言われたいです、解説の巽さん！」
「先ずは生まれ変わって出直して来て下さい、実況の森さん！」
「そして呪われ望！あとサレスもな！」
「とにかく、持ちうる限りの属性を注ぎ込んだ属性攻撃だ、あれを上回るのは至難の技だぞォォ！」

酒乱なのか喚く信助をアキが嗜め、更には横から酒瓶を取り上げたソルラスカが加わり、精霊の世界で結成した負け犬男同盟が再結成される。
そして遂に――最後に残っていたカティマが口を開いた。

「――ところで、話は変わりますが望…この後、是非行ってみたい催し物が在るのですが付き合って頂けますか？」
「ぶった斬ったァァァ！今までの流れを完全にぶった斬りましたよ巽さん！」
「『布津御魂の太刀』ィィ！北天の剣神が本気を出したァァッ！！」

完全に流れを無視して話を変えて、彼女は望にエスコートを頼む。
それに、望［どんかん］は――

「ああ…別にいいけど」
「な、何～っ！わらわはまだ店番があるのじゃぞ！」
「ええ、誠に残念ですね。沙月殿は生徒会長としての責務が有り、希美はこの後にライブ、ルプトナとナルカナ殿は…確か洗濯と、床を拭くのでしたっけ」
「「「「な…！？！」」」」
「更に『ファイナルベロシティ』で置き去りにする気だ！半端ねェ、北天の剣神マジ半端ねェ！！」

今までの揚げ足を取る形で、彼女は瞬く間に恋敵を殲滅していく。
そこに情け容赦は、一片たりとも見られなかった。

「ふふん…甘いぞカティマ！吾は全然ヒマだ！」

ババーンと、満を侍してレーメが望の頭の上で踏ん反り返る。

「ええ――願ったり叶ったりですよ、うふふ…」
「と、突然だが用事を思い出した。二人で楽しんでくるがいい！」
だが、可愛いモノ好きのカティマの熱い眼差しを浴びてぶるりと身を震わせ、望の胸ポケットの中に撤退して行った。

「ちょっとナルカナ！今この瞬間こそがあんたの傍若無人スキルの発揮のしどころでしょう！此処を逃したら、あんたなんて存在価値皆無の穀潰しよ！！」
「ちょっと沙月、あんたあたしを何だと思ってんのよ！ナルカナ様を敬えー！！」
「駄目ですー！望ちゃんは午後は私のライブに来てくれる約束なんですー！」
「第一、ボクは洗濯なんてしないってのー！」
「そうじゃのぞむ、今日一日此処でゆっくりしていくがよい！そうしようぞ、な、な！！」
「皆さん、往生際が悪いですよっ。望、さあ行きましょう！」
「イダダダッ、ちょ、腕とか足とか首とか取れる…っ！？！」

そして結局、引っ張り合いの騒乱に発展してしまった。阿鼻叫喚の地獄絵図、それを男子生徒の怨嗟『もげろ』コールが取り囲む。
そこに、メイド服から学園指定の制服に着替えて来たユーフォリアとアイオネアが揃って現れた。

「お待たせ空さん…って、何この状況？」
「ああ…モテるが故の当然の苦労を味わっているモテ男の観察だ。いやー、モテなくて良かった」
酔いなど無い様子で立ち上がってハハハッとヤケクソ気味に笑い、

いつも通りに出した左腕をいつも通りにアイオネアが抱き締めて、並び歩く。
そんな流れるような一連の動作を、ユーフォリアが思い悩むように見詰めていた。

「ん…？どうした、行かないのかユーフィー」

と、振り返り様に何気無く空いている右手を差し出してみる。

「……え、あ、うん…」

すると――きゅっと。思いがけずその掌を握り返された。
紅葉みたいに小さくて、やたらに温かな掌だ。握り締めれば簡単に壊れてしまいそうな、硝子細工を思わせるその儚さに…思わず息を飲む。

「…って、わわ、ごめんなさいっ！」

しかしそれも束の間。正気を取り戻したユーフォリアが慌てて手を振り解き、タタタッと軽快にドアから出て行った。

「……何だ、ありゃ」

そう吐き捨てつつ、今だに温もりが残る掌を握って歩き出す。

「……」

俯き、僅かに不満の色を浮かべるアイオネアに気付く事無く……。

The 101th Name…"祭の終り"

お祭騒ぎの学生達で賑わう廊下を歩く、滄金蒼の三人組の後ろ姿。
適当に目に映る店を冷やかしては別の店に移る。そんな事をもう、二十分は続けている。

「「「……」」」

…三人ともむっつり黙りこくったままで。

「あー…なぁ、学園祭の楽しいかユーフィー？」
「えっ…あっ、うん。賑やかで、とっても楽しいよ」

なんとか搾り出した問い掛けに、作り物めいた笑顔で答えられた。
そして再び、沈黙が場を満たす。騒がしいのは彼等の周りのみ。
元々アイオネアは引込思案だし、アキはツッコミ以外では多弁ではない性質だ。この組み合わせでは自然とユーフォリアが喋る具合になるのだが…今回はその彼女が、無音を作り出す原因だった。

「……（じーっ）」
「……」

その癖、気が付けばじっと見詰めている。視線を辿ればアイオネアと繋がれた手があった。
かと言って、別に手を繋ぎたいという訳でも無いらしい。差し出してみた手は、不思議そうに見詰め返すだけだ。

――参ったな…流石に判らねーぞ。コイツ、何を悩んでやがんだ？

勿論、珍しく気を使って盛り上げようと努力はしてみた。

先ず、射的屋で当てたコルク弾を跳ね返しては銃口に再装填という荒業で陳列された景品を壊滅寸前に追い込んだり、ヨーヨー釣り屋で固有時を加速しながら根こそぎ釣り上げたりして、営業妨害だと怒られたり。

タコ焼き屋では六玉のうち一玉に魔法の世界一辛い唐辛子的な何かが詰まっているロシアンタコ焼きなるモノを食わせようとして自爆したりしたのだが…その時だけは楽しそうにしていても、少し経てば思い悩む様子を見せる。

そうして、どうしたモノかと途方に暮れて一一偶然に通り掛かった保健室の前で。

「やっほークー君。呑んでるー？キャハハハ…」

「一一んがふっ！？！ぐえぇぇ…」

チョークスリーパーをキメられる形で、ベロベロに酔っ払った白衣姿のヤツィータに抱き竦められたのだった。

「ぷはっ、ちょ、酒臭ェ！姐さん、アンタ何を昼日中から酒なんてかっ喰らってんすかッ！」

「なーによぅ、お祭りなんだからいいじゃないのよ…っていうか、君からだってお酒の匂いがするんでけど？」

「くっ…しまった、俺も呑んでたんだった…」

ジタバタ足掻いて何とかチョークを抜け出そうと、反論を試みる。だが、同じ穴の貉で在る事を確認するだけの結果に終わった。

酒精に紅潮する端正な顔が間近でスンスン鼻を鳴らす様に…何より、ルプトナさえ上回る大質量兵器を感じて照れてしまう。

「…全くもう…ヤツィータさん、また学生をからかって…」
「堅い事を言わないの早苗ちゃん。あたしはただ幼気［いたいけ］な女児二人を勾引［かどわ］かして、人気の無いところでエッチな事をしようとしてる悪～いお兄さんにお灸を据えてるだけなんだから」
「適当な事言ってんじゃねーですよッ！センセー助けて！」

そこに保健室から、藍色の長髪の女性…椿早苗教諭が現れて保健医を窘める。
正に天の助け、アキは彼女に救いを求める眼差しを送り――

「それなら仕方ないですね、生徒指導は私達教師の責務ですもんね～ひっく」
「――て、思いっ切り酔っ払ってらっしゃるがな！？！」

完全に座った目に、直ぐに希望は絶望にすり替わったのだった。
そもそも保健室［ヤツィータ部屋］から出てきた時点で気が付くべきだったのだが。

「そうそう、思春期の男子学生が過ちを犯さないようにちゃあんと指導してあげないと。ねぇクー君、酒盛りに付き合わない？今なら美酒に美女が揃ってるわよ～？」
「それもそうですね～、スバル君はもう酔い潰れちゃいましたし…ひっく」
「スバルさんんん！」

彼女らの言葉に扉が開いたままの保健室に目を向ければ、中は無数の酒瓶と俯せのスバルが転がっている光景が目に入った。
それに、この後の我が身の危険を察知して更に暴れてみる。だが、

更に前から早苗にしどけなく寄り掛かられて動きを完全に封じられてしまった。

「あら、不満かしら？なんなら、お姉さん達がおチビちゃん達には到底出来無いあんな事やこんな事…とってもイイコトしてあげてもいいのよ？」

「そうよ～、迷える生徒を正しい道に導くのも教師の役目なんだから…お姉さん達にま・か・せ・て…ひっく」

「…ふが…！」

と、耳元に囁かれるヤツィータと早苗の…砂糖菓子を生粋の蜂蜜に漬け込んでコトコト煮込んだような甘い声。

まるで耳から摂取される麻薬だ。健全な男性ならば、たやすく理性を溶かされてしまうであろう甘い女魔［あま］い囁き声が、脳髄まで染み込んでくる。

更にはアルコールで火照った肌はほんのりと桜色に染まり、濡れた瞳はうるうると揺らめいて見える。呼吸と心拍は速く、躯の両面に押し付けられたDとF（目測）が抵抗の意志を奪い去っていく。

――流されよう。そうだよ、それが一番だ。魅了EXスキル持ちの望と違って俺にはこんなチャンス、もう二度と無いだろう…流されちまおうぜ、俺。女教師と保健医なんて、男の本懐じゃねぇかよ。

…と、自分の心の中の悪魔までもが囁いてくる。よくよく考えればチョークが決まったままだ、息が出来ていない。

「ぶー…！」

「むー…！」

そんな薄らぐ意識の中で、こちらへと多分にに怒気を孕んだ視線を向けてくるＡＡコンビ…もとい、蒼滄コンビが見えた。

――くっ、惑わされるな俺！酔いどれの言っている事を真に受けてどうするんだ、心を確かに持て！！そうだ、日本男児として毅然たる矜持を持つんだ。俺は…侍だ！！！

妹みたいな彼女らに、末席ながら男としては無様な姿は見せる訳にいかない。

そうして意志を固める。男として侍として、毅然たる態度で――

「お供します、お姉様方！」

――据え膳食わぬは武士の恥ですよね、先達様！

…即効で自分から理性をかなぐり捨てて――顔面に減り込む大きな蒼く大きな鏃のようなものを見たような気がした瞬間、彼の意識はブラックアウトしたのだった。

「…それじゃあヤツィータさん、椿先生。あたし達急ぎますから、もう行きますね」

「……（ぷんぷん）！」

と、笑顔なのだが『？』マークを浮かべているユーフォリアが失神したアキの首根っこを引っ掴んで引きずっていく。もう片方の手には、彼女の永遠神剣【悠久】。

そんな彼女に続くアイオネアも、ぷりぷりと頭から湯気を吹く勢いで怒っていた。

「…やれやれ、少しからかい過ぎちゃったかしら」

「ふふ、可愛いものですね…」

見送る二人に、先程までの酔った印象はほとんど無い。要するに、大人が子供をからかって楽しんだだけだ。悪趣味としか言いようが無いが。

「さて、それじゃあパーッと呑み直しましょうか」

「賛成～！」

そうして、二人は平然と保健室に戻って行ったのだった。

「うーん…とんでもない激流の川の向こうから【時詠】と【時果】を持った巫女装束の般若が追ってくる～…」

ズキズキ痛む顔面を摩りながら、悪夢から浮上した意識をハッキリさせる。

瞼を開いて周囲を窺ってみれば、燦々と降り注ぐ木漏れ日に生命の躍動を感じさせる葉擦れと樹の幹。中庭のトネリコの根本の定位置に背中を預けて座っていた。

「あ…起きた」

「う、俺は何を…」

「呼吸が出来なくて失神したの。覚えてないの？」

そこに聞こえた冷たい声。そちらを見れば、一切の温度を感じない、絶対零度のジト目を向けてくるユーフォリア。

――そう…だったっけ？なんか、顔面に物理的なダメージを受けて昏倒した気が……あれ、そもそも何でそうなったんだっけ。駄目だ、思い出せねぇ…

記憶が完全に消し炭になっている。鼻の奥にツーンと、錆鉄の臭いがした。

消えてしまうような記憶ならば、大した事では無かったのだろうと。取り敢えず怪我が無い事を確認して、少し離れた所のアイオネアから靈澪［アイテール］を貰おうと手を伸ばしてみれば。

「……（ぷいっ）」

「あれ？おい、アイ？アイオネアさーん…」

…と、そっぽを向かれてしまう。彼女にしては実に珍しく、物凄く怒っているようだ。

「何か怒ってんだけど…どうしたんだユーフィー？」

「……つーんだ」

「ってあれ？おい、ユーフィー？ユーフォリアさーん…お前も？！」

そして更に、ユーフォリアにまでそっぽを向かれてしまった。

「…どーせあたし達はちっちゃいですよーだ」

「ちっちゃいですもんっ…」

「ちっちゃい…？何言ってんだよ一体…あ」

そう言ってしまった瞬間、記憶が帰ってくると同時に二人が厳しい視線を向けてきたのだった。

「大体、空さんは女の人にだらし無さ過ぎ！ちょっと迫られたら、

すぐにデレデレしてっ！」
「はぁ？それ望に言って欲しいんだけど。俺の幸運Ｅが招き寄せたささやかな幸運くらい、見逃してくれよ」
「ふーんだ、空さんのおっきいの好きっ」

何だか、酷く心外な事を言われて怒られてしまう。別にこだわりは無いつもりなのだが。

「そりゃあ、無いよりは有った方がやっぱり…」
「うぅ～っ…！アキ様のおっぱい星人…！！」
「どこでそんな言葉を…ナルカナか？イルカナか？俺のアイに妙な言葉を教えやがって…」

怒り心頭に達したのか、ぷーっと頬を膨らませた少女達は気圧されのけ反ったアキへと徐に迫り――

「あ、あたし達だって頑張れば、それなりにあるんだからっ！」
「あ、あるんですっ…！」

膨れっ面と併せてトマトみたいに顔を真っ赤にしながら、制服の上から自分達のささやかな膨らみを寄せて上げて見せた。

「……あー、十年後なら見甲斐も出るんだろうけどな。ほらほら、女の子がそんなはしたない事するもんじゃないぞー」
「「む～～っ！！！」」

…しかし哀しいかな。元々が余りにささやか過ぎた為に、制服の上からでは変化が見て取れなかったのだった。
未熟ながら女のプライドを傷付けられた二人は一層憤慨したらしく、何か決意した顔を見合わせて。

「…だったら、直接確かめてみてよっ！！」
「……（こくこくっ！）」
「は一一うぉっ？！」

機敏な動きで躯ごと突進し、胸板に抱き着いた。逃げられないよう、投げ出していた足をそれぞれで蟹挟みまでして。
流石に密着されてしまえば如何にささやかだとは言え、女性らしく柔らかな感触。まぁ、ヤツィータや早苗と較べれば『ぷに』くらいの感触だったが。

「こ、これなら…判るでしょ」
「……ああ、判る」

…透き通るように白く、ふっくらとした頬っぺたを恥じらいに紅く染めてくっつけたまま、じーっと窺うようないじましい上目遣いを向ける蒼空と滄海の少女達。
温めたミルクのような甘い香り、その気が有れば無垢な唇を纏めて奪える体勢。

「よく判るぞ、うーん…どうやらアイの方がちょっとだけ、大きいみたいだな」

神妙な顔付きでそんな可愛らしい仕種を見せてくれる弐羽の幸せの青い小鳥に、驚きが去ってみればドS根性と悪戯心がむくむく起き上がってきたのだった。

底意地悪く笑いながらそう伝えてやると、アイオネアは恥ずかしげにパッと距離を取ってしまう。
一方、ユーフォリアは頭の羽根をパタつかせながら刃金の如き胸板をぽかぽかと殴り付けてきた。

「そっ、そんな事無いよっ?!同じ身長で同じ体重なんだから、胸の大きさだって同じだもん!お風呂で較べたんだから~!」
「いやいやいや、明らかにアイの方が大きいぞ?この前、布団の中で確認した限りじゃ…もしかしてBだったかもしれないな」

そうして、勿体付けるように口にした言葉。確かに、理想幹からの帰途初日は自室に【真如】を持ち帰ってしまい、わざわざ送り帰すのも面倒だったので添い寝したというだけの事だった。

「?アキ様…あれはただの添い」
「ふぇ、お布団の中…?それってもしかして…パパとママみたいに…は、はははだ、はだかで…」

淑女の嗜みとして肌を曝す事への羞恥は有るものの、その先の秘事から遮断されていたアイオネアは不思議そうに首を傾げただけが、ユーフォリアはどうも思い至る事が有ったらしく、トマトの赤から完熟トマトの濃赤に顔を変えた。

「…だ、だったらっ!」
「ん?…って、オイィィッ!?!」

…と、何を思ったのか。いきなり交差させた腕で制服の上着の裾を

掴み、ガバッと男気溢れる脱ぎ方をする。
すんでの所で間に合って、張りのあるお腹と愛らしいお臍がちらりと見えただけで終わった。

「い、いきなり何してんだお前はッ！コラッ、しまえ！」
「アイちゃんのを見たんだったら、あたしのと較べてどっちの方が大きいか判断できるじゃない！」
「待て待て、何をヤケクソ起こしてんだ！判った、俺が悪かった！ゴメンナサイ、からかいました！！アイのは見た事ないし、ほぼ同じ大きさです！！！」

ふーっと、子猫が威嚇するように唸る彼女を宥めすかして止めさせ、ジト目で睨まれつつ素早く周囲を確認する。

「……反省、した？」
「したした、しました」

学園祭で校舎内の人の移動が多く、三方向を窓に囲まれているのでもしかしたら誰かに見られていたかもしれないと思ったが…誰にも気付かれなかったようで、安堵の溜息を落とした。

一一危ねぇ…ヒヤヒヤさせやがる。あんな場面見られたら、どんな理由でも俺が封印指定［めっさつ］されちまう。魔女裁判や異端審問も真っ青の、一方的な糾弾で。

「…ったく、そういうのは本当に好きになる相手の為に取っとけ」

ぺしりと頭を叩いて拘束から脱し、色々な意味で火照った頬を魔法の世界の冷たく冴えた風に曝して落ち着かせる。
躯の調子は万全、そうで無かったとしても最後の学園祭だ。早く、

もう手に入らない日常に戻ろうと促そうとして――軽く叩いた頭に置いたままの掌で彼女の丸っこい頭を優しく撫でてやる。

「あ…んん…ふふ」

「変な声を出すなっての。なんか、幼児に悪戯してるような気分になるだろうが」

幾度かの、意地悪して撫でてやらなかった謝罪も籠めて。

「幼児じゃないもんっ！んにゅ…だって珍しく空さんが優しいから。ふふ…くすぐったいよぉ…もう、羽根はやめてったらぁ」

それに、始めは不服そうな表情をしていた彼女も、次第に嬉しそうに顔を綻ばせていく。

時折、ピコピコ動く羽根に触れる指の感覚に鼻に掛かった甘い溜息を漏らしながら。

「なんだよ、望とか他の奴らにはよく撫でられてるだろ？別に今更、嬉しがるでも無いだろうに」

「そうだけど、なんだか違うの。空さんが撫でてくれた事なんて、今回でたった二度目だし…空さんのってね、他の人のより温かくておっきいから…嬉しいの」

「その言葉のセレクトはワザとか…全く。お前な、俺みたいな悪党にまで甘えてたら…その内痛い目見るぞ」

「大丈夫だもん。空さんのコト、信じてるから」

『信じてる』等と言われては弱い。純粋な好意を向けられるのに、悪い気などする筈も無く。羽根をギュッと握り締めるのは止めておいてやる事にした。

「だって、悪党は悪党でも小悪党だもんね」
「やっぱ握り締めるっ」
「させないもーんだっ」

悪戯っぽく、ぺろっと舌を出した彼女の羽根を握り締めようとするが、両手で右手を押さえ込まれて妨害され…屈託の無い笑顔を間近に見せられた。その愛らしい様子に不覚にも鼓動の高鳴りを覚えて止め時を見失ってしまう。
幼き昔、初めて子猫を撫でた時のように名残惜しくなって。

「何に悩んでるかは判らねぇけど…元気が戻ってきて良かったよ。俺はな、そうやって向日葵みたいに笑ってるお前が好きなんだ」
「「一一えっ…？」」

つい、そんな余計な…自分でも、意外な言葉を口走ってしまった。
勿論、それはラブではなくライク。兄が妹に抱く好意と同じ類だ。それを恋情と誤解する程、伊達に片想いはしていない。間違いなく本心では有るが。
それに返った驚きの声が、二つ。どちらも驚きの声だったが、息が抜けるような眼前の蒼空の風鳴りに対して、向こうの滄海の海鳴りは息を飲むように。

「すす、好きって…ええっ!?だ、だってあの…空さんは希美さんが好き一一」
「あ、巽～!いいところに居た、助けて～!」

突然掛かった女の横槍［こえ］に、注意を向ける。見てみれば一階の窓から身を乗り出して、わりかし切羽詰まった様子で手を振る学生…美里の姿。

「助けてとは穏やかじゃねぇな、何が有った？」
「あぅあぅ…」

オーバーフロー気味に頭から湯気を吹いているユーフォリアを放置して、当の美里に近寄る。
彼女も彼女で慌てているらしく、結構な距離走ったのか呼吸は乱れて、額には汗が見て取れた。

「…どうもこうも…お願い、一緒に来て！」
「イテテテテ、判ったから首飾りを引っ張るな！ユーフィー、アイ、ちょっと行ってくるから勝手に楽しんでてくれ！」

取り敢えず二人に断りを入れて、仕方なく窓から廊下に飛び入る。
一目散に走る美里に引きずられるような格好で、廊下の曲がり角を曲がっていった。
…一方、走っていった彼を見送るでもなく呆然と立ち尽くしていたユーフォリアがアイオネアに問い掛ける。

「あ、アイちゃん…どうしよう…あたし、もしかして…こっここここ告白されちゃったのかな…？男の人から、生まれて初めて…」
「…違うもん。さっきの『好き』は、私がゆーちゃんを好きなのと同じ『好き』だもん…！」

そのアイオネアは、俯いて自分のスカートがクシャッと捲れる程に強く握り締めていた。いつもなら『はしたない』と決してやらないが…感情が激昂［たか］ぶった時に癖としてやってしまう仕種。

「…アイちゃん…？」

彼女らしくない、突き放すような物言いに驚いたのか。振り返ったユーフォリアの目に映った一一…泣き出しそうなその表情と、頭上でネビュラの煌めきを放つ三重冠のハイロゥ。

「…私はね、ゆーちゃんが好き。元気で積極的な…私に無いモノを持ってるゆーちゃんが」

「え、うん…あたしもアイちゃんが好きだよ。お淑やかで清楚な…あたしに無いモノを持ってるアイちゃんが」

…さぁっと、涼やかな風が吹く。背格好も似ていれば、靡いた髪も近似色の鏡写し。

ただしそこには…空と海程に遥かで、決して交わる事の無い絶望的な開きがあった。

「だけど…私はアキ様の進むべき可能性［ミチ］を斬り拓く刃だから。天位でも地位でもない…不当に抑圧され続ける”永遠神剣”の願いから生まれた空位の『刃』だから…他のどの位に勝てなくたって、『鞘』だけには”納まらない”……負けたくないの」

「『鞘』？アイちゃん、それって一体一一」

聞き慣れない…だが、心を動かす言葉にユーフォリアが聞き返す。

「「一一っっ！？！」」

その瞬間だった。校舎から、男女の入り混じった複数の悲鳴が木霊したのは。

冷たいリノリウムの廊下を軽快に走りつつ、美里を追い抜いたアキは調子を合わせて彼女の隣に並び立って問うた。

「何があったんだ、喧嘩か？」

「ううん、部外者が入り込んじゃったのよ。その人、出店の食べ物を凄い勢いで食べちゃってさぁ…あたし達じゃあ止められないの」

げんなりした様子に、苦労した末に頼ってきたのだという事を悟る。だが、そういう事は先ず責任者の生徒会長に頼るべきではないかと、ジト目を向ける。

「…言っておくけど、生徒会室に行っても会長が居なかったから、アンタに頼ったんだからね」

「へいへい、頑張りますよお嬢様。で、相手は何人だ？」

「一人、女の人よ。真っ赤な髪をしたすっごい綺麗な人なんだけど…何て言うか、綺麗過ぎて無気味だった」

と、急に歯切れが悪くなる。妙に思い顔を覗き込めば、怯えるように顔を強張らせていた。

その時、人混みが目に入る。掻き分けて進めば――少し前に通ったタコ焼き屋の前で、衆人環視の中黙々とタコ焼きを食べている露出の多い美女の後ろ姿。

《あ、サツキじゃなくてアッキーが来てくれたんだ》

「おぅ、どんな状況だ？」

同時に、浮遊するクリスト五姉妹の姿を認める。その近くまで移動して、現状を問うた。

《どうもこうも、見ての通りよ。あの赤毛の女が、出店の食べ物を

軒並み食べたの。現在進行形で》

《困りましたね…一般人を相手に力ずくという訳にいきませんし》

《…頼むタツミ、早く追い払ってくれ。あのままでは、タコ焼きが全滅してしまう。まだ私は食べていないんだ》

《ルゥ姉さんったら…》

…憔悴しているルゥの様子に苦笑しながら、歩を進める。そして、女の肩に手を置いた。

「…ふぅ。すいませんお姉さん、この学園は関係者以外は立入禁止なんです。そのタコ焼きは食べてしまって構いませんから、直ぐに出て行ってくれます？」

「あら、タコ焼きっていうのね、この食べ物。不思議な味ね、でも嫌いじゃ無いわ」

一つ咳ばらいして喉の調子を整え、女性に歩み寄る。女は振り返る事も無くそんな返事を返した。

「…それにね、もう食べないから大丈夫。だってメインディッシュが漸く到着したんだもの、こんな前菜にもならないモノを食べてる場合じゃないでしょ？」

「アぁ？」

思わず、イラッとした声を上げてしまうする。こういったまともな会話が出来ない手合いが、アキの一番嫌いなタイプだった。

そしてタコ焼きが廊下に落ちる。ボトボトと潰れたそれらに意識を取られ、それを見たのは一瞬後。

「全て一つになりましょう。それが、真の平和よ」

「一一…ッ！？！」

主の呼び掛けに虚空から染み出るように具現化し、無造作に右手に握られた黒い柄巻きの短刀。鞘を持たぬそれは紛れも無い永遠神剣、最初から白刃を剥き出しにしている――凶獣の顎門［アギト］にも見えた。

――間髪容れずに跳ね退く。一歩で約五メートル、着地してアイを招聘した後に『精霊光の聖衣』を展開しつつ、生徒を逃がして助けを――…

「なッ――？！！」

刹那、その姿が掻き消えた。そう思った次の瞬間には、空間転移で目の前に現れた白い紗［ヴェール］製のローブのみを身に纏う女。肌も露わな”最後の聖母”イャガの無機質な…さながら硝子玉の如く濁る真紅の奈落［ひとみ］と――

「――いただきます」

その軌道に存在する空間そのものを刈り斬りつつ、振り下ろされる永遠神剣・第二位【赦し】の閃きだった――…

大気を蹴っての再バックステップと同時にライフル剣銃【真如】を招聘し、薔薇窓の精霊光を背後に展開して戦装束を纏う。そのままオーラを『精霊光の聖衣』として、イャガの進行を止めた。

「――ちょ、ちょっと巽…!?」

「――来るなァァァッッ!!!!!」

その真後ろに居た美里が、呆気に取られる外野の生徒の中で最初に立ち直り漆黒の聖外套を纏う後ろ姿に走り寄ろうとした――瞬間に、アキは怒号と共に喀血して膝をついた。

「…か、ハッ…ァ…逃げろ…早く…逃げろッ…!」

ビシャリと聞くに堪えない嫌な音を立てて、廊下に打ち撒けられた夥しい量の血液。粗く切れた息を吐けば吐く程、じわじわと戦装束に血の染みが広がっていく。その有様に彼女の脚は、恐怖から自然と止まった。

「あははっ…力を無駄遣いすると不味くなっちゃうわよ?」

《そんな…私達の攻撃をあれだけ受けて、無傷だなんて…!》

そして見た。即応したクリストの攻撃が全て直撃しながらも悠然と立ち、遥か彼方で薄く笑うイャガの右手。その手に握られた短刀の刃を伝う血の雫が、廊下に落ちるさまを。

「いっ…いやぁぁぁぁっ!?!」

「うわぁぁぁぁっ!??」

魔法が解けたかのように、静寂の底に沈んでいた廊下が悲鳴の坩堝と化す。学生達は剣の世界や魔法の世界で負傷者の手当をした事は有るが、それはつまるところ専門技術を持つ医者でなくても大丈夫な怪我人だったに過ぎない。
ここまで多量の出血、そしてこんなに間近で戦闘を見た事は皆無。恐慌をきたしたとして、誰に責められようか。

【アキ様…傷が…傷が治りません！どうして…！】
（お前の癒しでもか…クソッタレ…俺達には不治の効果なんて通用しねぇってのに…）

失血で朧に霞む意識に五体の感覚と視界、霊魂を震わせて伝播してくるアイオネアの焦燥。
如何なる完璧な効果を有する神剣であろうと、彼らの前ではただの装備へと成り下がる。それが空位神剣のみに許された『対象外』の能力。

【どうして…どうしてっ！？】

だが一一彼女の神剣に付けられた傷が癒えない。【真如】の治癒を持っても塞がらない。『対象外』の能力を突き崩した理念が、理解出来ない。

「…解らない？簡単な話よ」
【…えっ……！？】

裸足の足が、ぺたりぺたりと廊下を歩く。ゆっくり、ゆっくりと。
立ち塞がるクリスト達など見えぬかのように。

≪『ストラグルレイ』！≫
≪『フリーズアキューター』！≫
≪『シャドウストーカー』！≫
≪『ナパームグラインド』！≫
≪『ブラストビート』！≫

隙だらけの彼女に、クリスト達の攻撃が再度襲い掛かる。光に氷、影に炎、暴風が彼女を捉え――

「――貴方の剣、〝生命〟の癒しは『不当な』傷の否定による補填。だから、普通の戦い方じゃあ即死させないと完全に治癒する…」

≪≪≪≪≪――なっ？！≫≫≫≫≫

そんな彼女らを意にも介さずに、空間跳躍でアキとアイオネアの目の前に現れた。見上げてくる鋭い鷹の目と怯える龍の瞳に、均整の取れた肢体がミロのヴィーナスを思わせる聖母は、能面の如く張り付いた笑顔で応えて。

「でもね、私の【赦し】には斬り裂いた空間を私の胎内［おなか］に繋げる能力が有るのよ。つまりは『斬る』んじゃなくて『喰べる』の。〝生命〟は〝喰べる〟事でも連鎖するでしょう？」

【赦し】を祈るように、胸の前で柄尻へと左手を添えて捧げ持つ。血と脂に曇る刃が、啜った血肉を舌舐めずりして味わうかの如く…鈍く妖しく煌めいた。

「私はね、全てを救済したいの。罪を犯さなければ生きていけない罪深い生命の全てを。殺すのではなく食［こうてい］する…つまり、私のは『正当な』傷。だから貴方の癒し［ひてい］は通用しないわ…だってそうでしょう、肯定を否定したら――否定になるもの」

「ーーッ…！」

それは道理にして、正しく真理。条理が反った瞬間である。
尚且つ、その起源は『空［くう］』と『喰［クウ］』。同音異字というトランスライナー。

「ふーーうふふ。それにしても、なんて美味しいの…貴方の血肉、信じられないくらい美味しいわ。今まで食べた何よりも…」

ーーー則ち。”天つ空風”のアキと、”最後の聖母”イャガの相性は…『最高に最悪』である――！！

「何が有ったんですか、一体ーーっ…！」

響く悲鳴とアイオネアが消えた事、そして爆発に危急を察して駆け付けてきたユーフォリアは、その目に映った女の姿に息を飲む。

「ーー”最後の聖母”イャガ…！」
《っ、させないーー！》
「もう…私は貴女達みたいな小物に興味［しょくよく］は湧かないの。邪魔しないで」

【悠久】を呼び出し、一瞬で戦闘体勢を整えたユーフォリアと共に反転、負傷しているアキを庇おうと飛翔するクリスト達。その六人にイャガは左掌に【赦し】を突き刺した後で、腕だけを向ける。向けられた掌には【赦し】による刺し傷。そして細腕は異様な迄に肥大しーーやがて内側から廊下に収まりきらず、壁を砕く程に無数のノル＝マーターと抗体兵器どもを産み落とした。

装甲を粘液にぬめらせた機械兵達の眼に光が点る。イャガの胎内で搾取されて喪失していたマナを、外部より得る事で活動を再開したのだ。
緩慢にその銃口を周囲の学生達の方へと向けて、銃声［うぶごえ］を上げる――

「――ユーフィー、ミゥさん！俺の事はいいから、学生達を護ってくれ！！俺はまだ戦える…だから、今は…戦えない奴らを最優先にしてくれ！！」
《ですけど…っ…諒解しました…タツミ様、お気を付けて！》

そんなノル＝マーター数機のコアを針の穴を通す正確さで背後から撃ち抜き、停止させて叫ぶ。
一寸だけ迷った様子を見せたミゥだったが…苦渋に満ちた顔と共に、四人を引き連れて飛んだ。

「何言ってるの、空さん！その人はイャガ！ロウ＝エターナルでも最古参の一人で、第二位永遠神剣【赦し】の担い手…」

だが、震えの止まらないその膝と今も廊下に拡がり続ける血溜まりを見た瞬間、ユーフォリアは変型させた【悠久】で宙を翔けて悲鳴に近い勢いで叫んだ。
己を狙った攻撃である事に気付き、イャガは少女に向けて微笑む。
空虚なその笑顔は、まともな感性ならば寒気しか感じられまい。

「その二ツ名は、”最後の聖母”！！”法皇”や”虚空の拡散”、”輪廻の観測者”、”悟り”に並ぶ一角なの…空さん一人で、どうにかできるような相手じゃないよっ！！！」

滑空する『ルインドユニバース』を空間跳躍で躱わして、イャガは少し離れた位置…機械兵を後ろに立った。

「何してるの、アイちゃん！早く空さんの傷を――」

【治らない…治らないの…】

ユーフォリアは慌ててアキに肩を貸そうとして…その装束の血染みに息を飲み、アイオネアを向いて…そして強い癒しの力を持たない自分に臍を噛む。

「ハ――”最後の聖母”イャガねぇ…仰々しい名前だ、確かに敵いはしねぇだろうな」

【赦し】に斬り裂かれた胸部を、『威霊の錬成具』で昆虫の外骨格のように隙間無く密着させて出血だけは防いでいる。だが、所詮は応急処置。放っておけば死に至る深手。

左肩口から入った刃は、短刀故に長さが足りず心臓こそ避けたが…左肺に胃、膵臓に右腎臓に大腸と小腸の一部と、約四割もの臓腑を破壊していた。

「だけどな、ユーフィー…それがどうした！」

「えっ…？」

呼吸しただけでも脂汗と冷や汗が滴って失神してしまいそうな程の痛みが走るが、皮肉にもその痛みが意識を繋ぎ留めている。

そんな中で大声を上げるなど――自ら地獄に飛び込む行為となんら変わりは無い。

「敵が自分よりベテランで強力な武器を持ってるってだけで…自分がやるべき事を、放棄する気か？負ける相手とは戦えないってか？

お前はそんなに無責任な奴か！」
「っ……でも…でも、それじゃあ空さんは死んじゃう…」
【そうです、アキ様…今は体勢を立て直すべきです！ノゾムさんやナルカナさんなら、きっと…】
今にも泣いてしまいそうな彼女達の言う通りだ、様子見の一撃だけでも戦闘不能寸前の身。その全力を出されてしまえば、塵一つさえ残らないだろう。
更には仲間が撃破された事により、敵戦力と認識した機械兵達が彼の方へも移動を開始する。
「…まぁ、確かに正義の味方とか大悪党なら完全な死亡フラグだけどな。でも、どんな話でも小悪党がラスボスと闘ったら…死なずにノコノコ生き残るもんだって相場が決まってんだ…」
現状はどう見ても絶体絶命。救援は遥か遠く、マナ不足から脱したノル＝マーターどもがクリスト達と空中戦を行い、敵襲に気付いた他の神剣士達が巨駆を以って地表を侵攻する抗体兵器どもに抗戦を開始したばかりだ。
「こんな時にふざけないでよっ！逃げるのだって立派な戦術でしょ、空さんは…空さんは弱ー－」
「－－言うなッ！！」
怒号に、身と心を竦ませる少女。爪が突き刺さりそうな程にきつく握り締めた右拳を、ユーフォリア目掛けて突き出して－－
「……莫ー迦、このチビスケめ。お前だって言ってただろ…」
「あぅっ！な、何を…」

ペシッと、彼女の額にデコぴんを放った。打たれた額を押さえて、彼を見上げるユーフォリアへと。

「…信じてるって、言ってくれただろう？」

――改めて言われなくても判ってるさ…俺は弱い。卑下じゃなく、事実として。きっと、この学園のどの神剣士よりも。

今にも卒倒してしまいそうな躯を、ただ根性だけで。

「知らねぇんなら、教えてやるよ。男ってのは莫迦な生物でな…」

――弱さを認めるのは、そりゃあ強さに繋がるだろう。自覚するとしないじゃ大違いだからな。

…但し、認めていい『弱さ』は己の『力の弱さ』一つだけ。まかり間違っても、己の『心の弱さ』を肯定してはならない。

今にも断絶してしまいそうな心を、ただ見栄だけで。

「いい女から『信じてる』なんて一言を言われちまうと、例え相手が全能神だろうが悪魔だろうが…第一位の永遠神剣だろうが、全部を纏めて敵に回したって撃ち斃してのける…！」

――生命に同じモノは一つだって無い。だから、他の誰に負けても何一つ恥じる事は無い。だけど…自分に負ける事だけは、死ですら雪げない恥だ。

我が身可愛さに信じてくれる相手に寄り掛かる事、それは裏切りに他ならない。それを赦す事だって、優しさなんかじゃない。

今にも霧散しそうな魂を――ただ”壱志［イジ］”だけでもって、

奮い立たせて。

「――自分の実力以上のチカラも、平気で出せるんだよ…！！」

――だから、俺は他のどんな何に屈しようと…それにだけは絶対に屈しない！この”壱志”に懸けて！！

震える指先でのサムズアップと、誰がどう見ても痩せ我慢の空元気で浮かべた不敵な笑顔を見せた。

「…空さんの馬鹿…どうしてそこまで強がりなの」

「なんだよ、今更気付いたのか？長い付き合いだってのに、ひでぇ女だ」

…そして、思いっ切り呆れられてしまう。だが、予想していた通りの反応だったのでほぼダメージは透過［スルー］した。

そんな彼の反応に彼女はふう、と溜息を吐いて。

「場のチカラを借りれば、有利に戦えるから…純白の燐光よ、五色の煌めきとなりて此処に集え――『エレメンタル』！」

そして、展開した精霊光。場の属性値を上昇させる精霊素のオーラに、防御力と抵抗力を上昇させる加護のオーラ。

その効果により、傷が僅かに楽になる。焼け石に水では有るが。

「…信じてるからね、空さんは…嘘つきにはならないって…約束、覚えてるって」

「さぁて、何の事だったっけか」

「…嘘つき」

最後に、そんな軽口を交わして。窓硝子を粉砕して外に飛び出して行く彼女の、名残惜しい微笑みと蒼く靡いた長い髪を視界の端に。

「ふふ…お別れは済んだの？でも、心配しなくていいわ。貴方達は皆、外の子達も含めて、私のお腹の中でまた会える…大切な人達と一つに成れるの、素敵でしょ？」

「…ハ。冗談じゃねぇ。俺は俺だ、オンリーワンのな…」

…そして真正面の、見たくも無いイャガの笑顔を睨み付けた。

「テメェと一つに成る、だっけ？下らねぇな、何が救済だよ。一体、誰が望んだ？テメェの押し付けがましい『赦し』なんざ俺は…」

吐き捨て、ループレバーを押すと同時にライフル銃の本体を後方に一回転させる。次に、引くと同時にグリップを握り締めながら聖母へと…

「この、”天つ空風”のアキは一一カス程も望んでねェんだよ…！！」

スピンローディングにより『空』の起源弾をリロードした永遠神銃の螺旋のライフリングが施された銃口と、瑠璃色の【真如】の静謐［うみ］から幾つもの波紋が生まれ、拡がり…重なる事で更に波紋を生み出し続ける、水鏡の刃を突き付けた。

「…どうして？目の前に、幸せがあるのに…自分から、苦しもうとするの？一人一人の力は弱くても、手を取り合ってより大きな力に立ち向かうのが普通でしょう？」

…その”禁句”に、初めてイャガは笑顔以外の表情を浮かべる。眉

を顰めて悲しげに呟いた。

「判らねぇか？…ハ、これだから無駄に強い力を持ってやがる奴は…弱者の壱志が判ってねェ」

「…”壱志”？」

それに、彼は見下すように…強者を憐れんで。

口許から零れる血を聖外套の袖で拭った際に、己には似つかわしくない甘やかな芳香を感じる。

「…チ、俺もまだまだだな…」

その正体には、直ぐに気付いた。この聖外套を貸した事が有る相手など、ただ一人だけ。

その事に気付いた瞬間、負ける気などしなくなってしまった。

「――来いよ、エターナル…お前に本物の『生命』を見せてやる。俺の【真如】の神髄を…あらゆる苦難を乗り越え行く、奇跡を呼ぶ奇跡の原典をな！！」

トリガーを引きつつ発したオーラにより周囲の空間を軋ませ、激震させながら――…巻き起こる蒼く澄んだ颶風［トラスケード］の唸りと共に、気勢を上げた――！！！

The 103th Name…"喚び声"

耳を聾さんばかりの轟音と共に、ノル＝マーターの放つ弾が学園祭の名残…設営された出店や出し物等の目に映る全てを暴風雨の如く、廊下や壁、天井も含めた到る所を粉砕蹂躙していく。
イャガの襲撃により、物部学園のお祭り騒ぎは阿鼻叫喚と化した。

テレポートした赤の腕部や脚部の発振レンズから放たれた追尾光線『ホーミングレーザー』を、実際に水の盾『ウォーターシールド』を円盾として具現化させて防御。次に至近で高圧水の霰弾を放つ青の『フロストスキャッター』を、同じく実際に具現化させた光の盾『オーラシールド』で防いだ。
その盾を砕くべく、尖った水晶を秒間千発の高速度で連射する緑の『デュアルマシンガン』と天井を貫いて撃ち上げられた白の閃光弾『ジャスティスレイ』が双つの盾を少しずつ削り取っていく。

「ッ…チィ！」

盾を放棄してステップや宙返り等、機動力を駆使した回避を行うが…直ぐに胸部を刈るような痛みで脚が止まった。
その絶好の好機を見逃す程、機械兵器は無能ではない。大きく腕を振りかぶった黒が一一その前腕を、まるでロケットパンチのように撃ち出した。

「一一ゴフっ！？」

命中と同時に時空震を発生させる剛拳『アゴニーオブブリード』が強かに胸を打ち付け、壊れかけの内臓を全部引きずり出したくなる程ご機嫌にシェイクする。

一一…クソッタレ、ミニオンとかノル＝マーターにまでガチで負けかねないエターナルとかね。
神剣宇宙広しと言えども俺くらいのモンだろ、不甲斐無くて泣けてきやがる……！

拳と時空震によるダメージ自体は『威霊の錬成具』によって大した事はないが、内側から訪れる激痛に気が触れそうになった。
機動による回避は、自身の状態と敵の数の多さから不可能だ。攻撃を受け止める以外に方法はない。しかし、護っているだけでは勝負には勝てない。負けないとしても、勝てもしないのだ。

（完全回復とは言わない…何とか内臓だけでも快復は出来ないか、アイ！）
【…一つだけ、方法が有ります。『ラストエリクシア』なら…】

思い返すのは、海の中で耳に響く鯨のように美しい歌声。絶える事の無い生命の賛美歌、過去に一度しか使った事の無い、魔法すらも越えた”転生の神律”。
彼岸の彼方へと消えていった生命に『再生』ではなく、同一の存在のままに『再誕』を赦す祝福を。

（…成る程な、『転生』する事でしがらみを離れれば…『万全』の状態に回帰出来るかもって事か）
【はい…ですが、あれの発動条件は『生命が消滅』する事…つまり現状では、『私達の死』です…】

精神を集中して、襲い来る攻撃に正対するベクトル…『内から外』のみの一方通行で汐力を掛けて、失速・停止させる事で防御とする護り『サージングオーラ』を展開する。

ノル＝マーターの攻撃は見えない壁に減り込んだように次第に速度を落として、空中で停止した。

（…理解した。どんなに御大層な理由が有ろうが、自分から死んだ奴自身は未来永劫に救われない。”死者に奇跡は起こせない”よな。奇跡を起こすのは、いつだって…”現在を生きる意志”だけだ）

【はい…ごめんなさい】

（謝る事無いっての。痛みくらいでヘタレた俺の方が悪かったんだからな…！）

霞みが掛かる精神に喝を入れて、眼前の軍勢を睨み据える。更なる汐力に、最後の学園祭を文字通り『ぶち壊し』にしてくれた相手に向けて一一己らの銃弾が反転して撃ち返された。

前衛の機は己らの攻撃により撃ち抜かれて四散。だが、後衛の機は各々のディフェンススキルでそれを防ぐ一一。

「副砲、解放…」

その絶好の好機を逃す程、アキは無能ではない。真世界への城門を開いて虚空に波紋を刻みながら…透徹城内の真世界より、バレルを五つ出現させる。

そのバレルは最早『銃』等と言う生易しいレベルのモノではなく、戦闘機の主砲やガンポッドとして、或いは戦艦の副兵装…ＣＩＷＳ［近接防御兵器群］に搭載される、『機関砲』だ。

「標的視認…砲身起動」

火器管制及びトリガーとして機能している【真如】を構えて照準機［サイト］を覗き込めば、連動して複数の砲門が狙いを定め…軋みを上げながら回転を始める。

そして、銃身部分に右手を沿えてトリガーを引けば――連射に次ぐ連射。間断無く駆け抜ける流星雨の如き飽和銃撃がチャチな玩具の起こす暴風雨を蹴散らしながら、疾駆する。

精霊素のオーラ『エレメンタル』で威力を増している各色の銃弾は装甲材を貫通する事を目的としたＨＶＡＰ［高速徹甲弾］。硬質の弾芯が一片の情け容赦なく氷の鎧『フローズンアーマー』や炎の法衣『ファイアクローク』、風の壁『デボテッドブロック』、光楯『オーラフォトンバリア』、闇の帳『トリーズンブロック』を易々と貫き、脆弱なディフェンススキルごと悉く残骸に変える。

『Ｍ６１バルカン』をモチーフとした大口径ガトリング砲を用いた、理想幹神エデガ＝エンプルの技『パワーオブブルー』の模倣した多属性の銃弾を放つ。

剣そのものは撃ち出せない彼が、銃弾［ケン］を撃ち出す為に真世界に作り上げたファランクスだ。

「フシュウウウ…」

「主砲展開…弾頭装填」

次いで前に出たのは、分厚く強靭な装甲により銃弾を寄せ付けない抗体兵器。だが機械兵器の調理法ならば熟知している。

再び虚空に波紋を刻みながら展開された計五門の加農［カノン］砲。

「存在の一欠片まで消し飛べ――『ドラゴンズロアー』――――！！」

放たれるその轟音たるや、正しく龍の咆哮［ウォークライ］だ。既に『砲撃』どころか『艦砲射撃』、学園の校舎を崩壊させかねない程の大火力。

戦艦の主砲級の、四十センチ大砲に装填された砲弾はＡＰＦＳＤＳ

［離脱装弾筒付き安定翼徹甲弾］。更に強力な貫徹銃弾が抗体兵器の『峻厳タル障壁』を貫き、装甲の隙間…関節部を精密に狙い撃つ事でバラバラの屑鉄と分解した。

「ふふ、凄いアグレッシブさね。『神銃士”ドラグーン”』とはよく言ったものだわ、貴方まるで本当の『龍』みたい」

廊下を蹂躙した雑兵の一個師団は壊滅した。だが、しなやかな指先で虚空に描かれた淡く白い魔法陣『精霊光の聖衣』にて守護された敵の本丸［イャガ］はまだ…傷一ツ負ってはいない。

ーー今の状態で剣戟は分が悪い。距離を保って戦いたいところだが…空間跳躍する奴の前には、距離なんて在って無いようなモノ。ならば、隙を見せずに一気呵成に攻め抜くまで！

その距離を維持したままで再装填した【真如】の薬室［チャンバー］。落とした撃鉄が”生誕の起火”を薬莢の内へと導く。それを受けたエーテルが炸裂してオーラフォトンへ変わり、螺旋の軌道を描く蒼茫の輝煌…割込不可［アンチインタラプト］の聖なる光『オーラフォトンクェーサー』として、さながら戦艦の如き重兵装を覗かせる真世界からの支援砲撃『ドラゴンズロアー』を加えた上で撃ち出す。

「大盤振る舞いね。じゃあ、遠慮なくーーいただきます」

「ーーなッ？！」

だが、宇宙起源の光と龍の咆哮は振るわれた【赦し】の割いた空間にぽっかりと空いた肉質の胃界…イャガの胎内に繋がる”口”に呑み込まれて消滅した。

そして、それを成した短刀を祈るように握り…刀身の輝きと共に、

足元に金色の魔法陣を展開する。

「痛みも、不安も…全て私が引き受けるわ。その為に、私は此処に居るの」

「ーーがアッ!?!」

その刹那に、左前腕と右肩、左腿に走った烈しい『痛み』。赤い光が肉を刈り、骨を軋ませる苦痛に堪らず膝を突く。

やはり傷は癒えない、瞬時に鎧を纏う事で失血を最小限に留めた。

ただし、その為に意識を逸らした所為で城門が閉じてしまった。

「…悩まなくていいの、私に身を委ねて。そして…消えなさい」

「ッーー!?!」

それと同時に空間跳躍で目の前に現れたイャガが、クロークを翻しながら…技巧も何も無く無造作に【赦し】を振り下ろす。

斬り裂く相手のあらゆる罪を赦す、『禊［みそぎ］』の一撃を。

「ふざけんじゃねェ、クソッタレがァァッ!!!」

「ーーっ!?!」

それに、クロスカウンターの如く対応した剣戟。立ち上がりつつ、迫り来る【赦し】の刃をスレスレで躱わして最下段から刷り上げた一閃『オーラフォトンブレード』が蒼い残光をたなびかせて、対応出来なかったイャガの左脇腹から右腋下までを逆袈裟斬りにした。

ーー手応えは有った。その所為で、こっちも傷が開いて死にそうな程の苦痛を味わったが。

駆け抜けて、隙を見せないように正眼に構えつつ反転する。イャガ

は斬り裂かれたて血を流す胸部を押さえて――

「ふふ…やっぱり期待した通りね。待った甲斐が有ったわ、こんなに美味し［つよ］くなったなんて…もっと見せて、最後まで」

「…イカレてるぜ、アンタ…」

激痛を生み出す筈の傷痕…魂自体に刻まれた『空』起源の、二度と癒えない刀創を愛しそうに撫でた上で…にこりと。

総毛立つ程に美しく、美しい故に心底から悍ましく感じる。全ての『苦難を受け入れるもの』は狂気すら肯定した女神の如く、美しい笑顔を見せた。

「…でも、つまらなくなったわ。美味しく熟した代わりに、小さく纏まってしまったもの。気取った小鉢に盛りつけられてちまちまと小出しにしてる今の貴方よりも、食材も調味料も丸ごと大鉢に叩き込んだような野生味溢れてた貴方の方が好みだったわ」

「何を訳の解らねぇ事をッ…！」

吐き捨てつつリロードする。だが、彼女を射撃で倒せない事は先程放ったクェーサーやロアーが呑み込まれた事で承知している。

――剣戟しかねぇってか、畜生…どうしてこう、俺って奴はにっちもさっちもいかないのかねぇ……

腐りそうになる意識を奮い立たせ、刃にオーラを纏わせる。

隙を見せた瞬間に斬り返すべく、『待の先』に意識を集中する――

「悲しみも苦しみも、もう味わわなくていいの。だから…」

「な――」

その刹那、掲げられた【赦し】が空に融けて『消えた』。余りにも意外なその行動に、不覚にも思考が停止してしまった。

「――お休みなさい」

飢餓状態に陥り、上空から数十倍にも膨れ上がりながら空間と天井を突き破り墜ちて来る槌と化した【赦し】…その刃で貫いた相手のあらゆる罪を赦す『祓［はらい］』の一撃に対しても――…

「うぉぉぉぉっ！」

銀光一閃、【黎明】を振り払った望の前に抗体兵器が崩れ落ちる。他の神剣士達も体育館を護るようにそれぞれ交戦しており、尽きる事の無い敵を辛うじて押し止めていた。

学生達は何とか皆体育館への避難に成功。だが、その学生達を護る為の神剣士が有するマナこそが敵の襲撃目標なのだ。

守ろうとすればする程に敵が集中してしまう、その悪循環。しかも、幾ら打ち倒しても一向に敵数が減らない。それもその筈だ、先程天空のに開いた穴…中から巨大な剣が校舎に向けて墜ちて行った穴から、ぞろぞろと抗体兵器が湧き出てきている。

「――ノゾム、来るぞっ！」

「くっ…！！」

レーメの声に気を取り直して見てみれば、更に五体が現れる。幾ら

何でも無勢が過ぎる、ナルカナでさえ舌打ちしながら歩みを止めるだけで精一杯だ。

（…護れないのか、俺の力じゃ…皆を…！）

己の無力に歯噛みする、望のその脳内に――

『――ならば、我に代われ』

「――ッ？！！」

重厚で温度の感じられない、彼の前世…『破壊と殺戮の神』の声が響いた。

The 104th Name…"零［Zero］"

…土埃が晴れた時、立っていた者は二人だけ。帰ってきた【赦し】を手に微笑んだままのイャガと、『威霊の錬成具』の具現化である鎧が蜘蛛の巣状にひび割れているアキ。

穴の空いた天井から覗く、時間樹の枝が絡み合う分枝世界間。魔法の世界で戦ってノル＝マーターや抗体兵器がザルツヴァイへと侵入してしまう事を危惧したサレスの命で、脱出したのだろう。

大質量に加えて重力までもを味方に付けた【赦し】を防ぎきれずに、『サージングオーラ』の護りは突き破られた。

躱すだけの時間は稼げたが、それでも掠っただけでこの有様だ。

「…ッ」

係累を維持出来なくなった胸鎧類が完全に崩れ、根源力へと還る。

大量の血が零れ落ち、失血と苦痛に躯の方が付いて来なくなる。

ふらりと、前のめりに。たった今、己が作った血溜まりの中に倒れ込もうと――

「――ッッ……！」

震える脚を突っ張り…己自身の力で踏み止まった。躯が既に死に体でも、心が既に情動を停止していても。叛骨の魂が理不尽な暴力に屈する事を許さない。否、赦してくれない。伽藍洞の分際で。

彼に宿っていた『転生の魂』は、とっくの昔…弱くある事を厭って刻んだ”触穢”の神名［どく］により、『繰り返す戒』の内に蝕まれて磨耗し狂い痴れて。

最期には如何なる『星の導』か、躯を捨ててまで妄念の成就に奔走し…あの枯れ果てた黄昏の世界で、自らが捨てた空白［オノレ］自身により滅ぼされたのだから。

――クソッタレ…クソッタレ…！負ける訳にはいかないんだ、俺は絶対に…”家族”を護るんだ…！！

砕けんばかりに奥歯を喰い縛る。砕けて意識が保てるのならば安いモノだ、今の状況ならば。

緩慢な動作で聖外套を脱いで袖をサラシとして使い、腸［ハラワタ］が零れ出さないようにきつく縛る。さながら、腰の部分に纏う幌布［マント］の如く。

「どうしたの？貴方の壱志［イジ］、見せてくれるんじゃないの？」

「――…ヤ、ロウ…ゴフッ！」

反駁しようと声を出したその瞬間、何かが勢いよく喉を競り上がる感覚に咳込む。堪らず膝を突いて、口許に当てていた掌を開けば…黒ずんだ固まりかけの血塊。

それを握り潰し、見上げるように睨みつけた。

――…それだけが、俺の願いだ。『奸計の神』”クォジェ＝クラギ”でも、”天つ空風のアキ”でも無く…ただ一人の”人間”だった自分、”巽空”として…時深さんみたく、強くて優しい人間になるんだ！！！

魂の消え失せた空洞で在りながら…ただ空白で在ると。そう誓った壱志［イジ］が未だに、無様に燻り続けている。

何モノも生み出す事無く、何モノにも成れない『无［ム］』のみが。

ただ今も尚…焼き付いた壱志のみでも願いを叶えようと、無意味に

足掻いている。

――何が永遠者［エターナル］だ。ハ、笑わせてくれる。永遠を手にした者の辿る末路は”忘却”だ。
何も残りゃしない、人だった頃と何が違うってんだ。デメリットが大き過ぎるだろう、望んでこんなモノになる奴が居るってんなら…相当自分が嫌いかイカレてるか、或いはその両方。要するに、俺も含めてどうにかしてる。

瞬きの内に流れて消え去る流星の如く生き急ぐ、その生命。
結局は死の彼方に消え去り、何も残さない――その空虚。

――いいさ、俺は…それでいい。栄光なんて要らない、輝きなんざただの一瞬だけで充分だ。刹那の後に消え去る幻想だろうと一向に構わない。
…だから……せめて。忘れられるとしたって、証明が欲しいんだ。この時間樹［ふるさと］で、確かに異空［オレ］という生命が生きた…こんな俺にも確かに”絆”を結んだ…”家族”が居たという、その証明［おもいで］が。

【……アキ様……】

…だが、それこそ彼が”美しい”と感じるモノだ。永遠を生きる者の思想としては、最優と言っていいだろう人格破綻。
善も悪も、正も邪も。在るがままに有りのままを肯定する。謂れの無い全ての罪業を背負わされて、死の荒野に放たれる贖罪の山羊の如く。余りに純粋過ぎる挺身。

【…アキ様、こんな時ですけど…私の『我が儘』が決まりました】
（『我が儘』？ああ…そういえば、そういう約束だったな…）

ライフル銃の弾倉部に装填された深淵にさざめく波紋の刃の、突然の潮騒［コトバ］に意識を傾ける。イャガは己の勝利を確信しているのか、若しくは興味が有るのか。じっと彼を見詰めるのみだ。

――そうだ…俺が負けたら、アイも死ぬ事になる。何としたって、守らないと…

そんな聖母の、深紅の瞳［ならく］を感じながら――

【…どうか、勝利を下さいませ。私に、”最後の聖母”イャガから…永遠神剣・第二位【赦し】から…どんな手段を用いても、私に――この『空位【真如】［わたし］』に――……勝利を！】

（……！）

その時、まるで目から鱗が落ちるように。暗い雲を風が斬り裂き、その隙間から差し込む陽光が深い海に注ぐように。

「…莫迦だな」

――…本当に莫迦だ、俺は。今更気付いた、俺が契約した相手、はこんなにいい女だったのか。

大体、前提から間違ってる。姫君を護る騎士［ナイト］なんて御大層なものは俺の柄じゃない。そんな気障ったらしく気取ったモンじゃなくて……俺は雇い主の邪魔者を、善悪正邪に関係なく殺す暗殺者［アサシン］だったじゃないか。

「やっぱ我が儘なんかじゃねぇよ、それ。アイツに勝つなんてのは、当たり前の事だろ……！」

【アキ様…はいっ！】

海面に散乱する眩い光に、海底に沈みかけていた戦意が浮上する。

――そりゃあ、負けが込む筈だ。武器に合わせて戦術を変えるのは三流だ。一流［ホンモノ］なら――自分の戦術に合わせて武器を取るモンだろ！

…そう呟くと同時に、彼の口角が吊り上がった。嘲笑か、侮蔑か。或いはその両方を持って、アキは己を省みた。

――…いい夢を見させて貰った。まぁ確かに…ずっと餓鬼の時分にそんな『選ばれた人間』みたいな在り方に…本気で憧れた事だって有っただろう。

今までに成した事を省みて、自分が手を繋いだ相手［しんけん］の…余りに無辜な水鏡が映した己の、余りに穢れた姿から、目を背けていた事に気付いた。

血溜まりを掻き消す程に眩ゆい光、ステンドグラスの精霊光が展開される。天と地と、その間の空の三重に。
彼の笑いをどう見たか、イャガは頗る嬉しそうに笑顔を返した。

「――マナよ、咎人に滅びと赦しを与えよ。償いの刻が始まるわ」

そして三度、祈りを捧げた最後の聖母。応えた【赦し】が光と共に魔法陣を展開する。

（アイ…言ってくれたよな。お前は、『俺の進む道を斬り開く為の、俺と共に在る刃』なんだって）

【はい、アキ様…私は、チカラを与えるモノじゃなくて…アキ様の

可能性で輝く空白ですから…】

…空間が烈震する。何か圧倒的な存在が悠然と、分枝世界間［ウミ］を泳いでいるのを肌で感じる。

（…有難うな、誇るべき俺の永遠神剣。俺は始めて、お前を武器に使う。だから…お前の”生命”全てを俺にくれ…奴を討つ為に！）

【おかしな事をおっしゃらないで下さい…始めから終わりまで私は…貴方の所有物［モノ］です】

その『大変動』の間にも、空位の永遠神銃が解けていく。元来在るべき形に、この神剣宇宙で最低位の永遠神剣…位も、カタチすらも持たぬ『零』の剣に還っていく。

”――世界は高く天に張り　刻は深く地に根差す

幽世［かくりよ］にユメは生まれ
現世［うつしよ］にユメは果てる”

…同時に、心に響く唄声。遥かな『刧初海［アイオネア］』の海鳴りが、静かに染み渡っていく。

――俺の護り方は受動的な『楯』になる事じゃない。俺の護り方は能動的な…コンマ一秒でも早く、速く――付け入る隙も無く敵を殺す『刃』になる事だ！

廊下に当てた両腕脚、体躯全てを深滄の装甲が覆う。順番に上腕部をリアブレイス、肘をクーター、前腕部をヴァンブレイス。大腿部をキュイス、膝をポレイン、脛部をグリーヴ。躯を板金の鎧、古代ローマのロリカ＝セグメンタータ様の蛇腹の鎧が覆っていく。

”比翼の鳥は天の涯［はて］に飛び
連理の枝は地の角［はて］に伸び
無銘の唄は海の内［はて］に響く”

それは、真実の”無銘の唄”。彼女の生まれた原始の宇宙において、彼女の父母が口ずさんだ子守唄。

「何をする気なのか知らないけど、貴方の生命［けん］じゃあ私には勝てないわよ。ただ一言、貴方は救いを求めればいいの。後は私に任せて…」

強壮なダマスカス綱じみた甲冑…否、野暮ったく古臭い鎧や剣、楯や鞘とは全く別の構造理念。空気抵抗を斬る為、空気抵抗から護る為に洗練されたその装甲。
内部の人員や機器を防護する為の肉厚な戦車の装甲［プレート］と、速度と可動性能を追究した流線型と軽量化を施された防御度外視のF1カーの装甲［カウル］の違い。

「一一…御厚意に御高説、揃ってウザッてぇんだよエターナル…！俺は俺の”壱志”に懸けて絶対に…生命の何たるかも知らねぇ…永遠神剣が起こす奇跡に頼らなきゃ、自分の道も斬り拓けない奴らには負けやしねぇ……！」

”虚［うつ］し世にユメは生まれ
確［かく］り世にユメは果てる
虚［うつ］し世にユメは生まれ
確［かく］り世にユメは果てる”

それは…宇宙の開闢の風景を咏う祝詞にして、終焉を咏う呪詛。
その頃の宇宙でただ一ツの、該当の無い『空位』の位を示す。

――そうさ、俺は…俺達は、零を充たした空［から］だ。それこそが俺の最大の武器。
勝負とは、天秤で実力を計る事と同じ。俺と戦うという事は、空の天秤皿と鬩ぎ合う事となり…相手は自重によって自滅する。勝手に地面に落ちて勝手に零れ落ちる。こっちは宙に投げ出されようと、零れるモノなんて始めから無い。弱者が強者から一方的に奪い取るって訳だ。

そこに二度［ふたたび］、黒ずんだ血を吐きながら放たれた”禁句”。それにやはり彼女は笑顔を持って応えた。

「苦しまなくていいの、終わりはきっと訪れるから…全てを赦してあげる」

瞬間に、空間を咀嚼するべく力が振るわれる。無数の歯が、口の中の『禁句』を噛み砕くように。

「――【赦し】、総ての罪は此処に浄化しましょう――…これが、断罪よ」

そしてもう一度、虚空に【赦し】が消えた。それは先程の『祓』の比では無い、『大祓』。

「…ごめんなさい、逃げられたりすると面倒なの。ね？一つになりましょ…」

先程のモノよりも、遥かに莫大なマナを持って。全てを…己すらも

喰い潰そうと、天空より【赦し】が疾駆する。
そして、真横から巨大なクジラが迫って来た。さながらオキアミを莫大な海水ごと飲み込むように、ものべーよりも遥かに巨大な次元くじらが…第二位神剣【赦し】の守護神獣［パーマネントエンジン］『パララルネクス』が。

”かつて一一……”

『大変動』に『禁句』、『大祓』…その全てがアキに向けて迫る。

「ハ一一今度はそっちが大盤振る舞いかよ…」

苦笑と同時にアキの頭部を装甲が覆う。流線型のバシネットを纏い、その頭上には三重のネビュラのハイロゥ。
睨みつけると同時にクラウチングスタートの姿勢をとった。

「上等…俺も全力だ。もう一度、喰えるモンなら喰って見せろよ、この俺の…全身全”零”を！！！！」

”かつて未だ、天地が一ツだった頃一一一……”

装甲の背中部分にハイロゥが集束する。ハイロゥは両の肩甲骨部分で蒼く半透明に透き通った龍翼と龍尾にカタチを換えた。
その姿はさながら、獲物を狙って鱗に包まれた強靭な体躯にチカラを溜める一一龍が如く。

「一一……！！！！」

刹那、廊下を踏み砕きながら跳躍する。距離はたったの六メートル、しかし一一神剣の担い手同士の戦いでは絶望的な開きだ。

その合間を縫って優美に動く指先で展開された白く輝く魔法陣は、『精霊光の聖衣』。イャガの防御、遍く歩みを閉ざす究極の楯。

突破困難な障壁に、もし少しでも退けば三種の攻撃がその身を砕くだろう。

「ーーーハァァァァァッ！！！！」

それでも、歩みを止めはしない。深滄の龍騎兵［ドラグーン］は一切速度を緩める事無く、その”生命”をただ一発の銃弾と変えて。

”無すらも無かったその深奥に、全ての始まりにして終わりの一一ただ一振りの…『零位永遠神剣』が在ったーーーー……”

幾重にも待ち受ける深紅の聖母の虎口へと駆け抜けたーーー！！！

…爆音が轟く。校庭に犇めく抗体兵器が纏めて、『天ヲ穿ツ』灼光を放ったのだ。

「…クッ…」

それを辛うじて受け止めた神剣士は、既に軒並み戦闘不能となっている。希美やサレス、ナルカナの癒しも間に合わない。ノル＝マーターと空中戦を行っているユーフォリアとクリスト達を除けば、まともに立っているのはたった二人だけ。

「一一癒し系ヒロイン、ナルカナ様登場！…ちょっと望、何よその目は」

「…いや、元気だと思ってな…」

望とナルカナだけだ。しかし望は皆と同じく、『バイオリズム』の癒しを受けても足元はおぼつかず大剣とした【黎明】を杖代わりに立っている状態だ。あと一撃でも受ければ倒れてしまうだろう。

「あとはあたしに任せなさいよ。望は…皆を守って」

先に駆け出したナルカナが、抗体兵器のど真ん中で暴れ出す。だが、多勢に無勢。動脈に達した傷口を押さえるような徒労だ。横目に映るのは、傷付いて何度も打ち倒されて…それでも学生達を護る事を諦めない”家族”達の姿。

「…やっぱり…それしかないよな。そう、それしか…」

「ノゾム…？」

「待ってよ、望ちゃん…先に傷を治してから…」
「そうよ、ナルカナが引き付けてくれてる間に少しでも体勢を立て直して…」

一歩、また一歩と。抗体兵器へと歩み出す。それに気付いたのは、レーメと沙月と希美、ルプトナとカティマ、ナーヤの六人。

「…皆…ごめん。俺にもっと、力が有れば…」
「な、何言ってるんだよ望っ！」
「そうです、まだ…まだ諦めるには早い！」
「そうじゃ、わらわ達が…こんなデク人形共に負けるものかっ！」

呼びかけられて、望が振り返る。ゆっくりと…諦めたような表情で微笑んだ。
翻意を促す言葉、それに望は目を閉じた。まるで最後に見た家族達の姿を、瞼の裏に焼き付けるかのように。

「望ちゃん！」
「望君！」
「望っ！」
「望！」
「のぞむ！」

五人のその悲痛な叫びに、彼は目を開いて――

「違う――我が名は、ジルオル…ジルオル＝セドカだ」

…凍てついた声と共に、氷点下の眼差しを向けた……

「…驚いたわ。一体、どんな奇跡を起こしたのかしら？」

頭上から聞こえた女の声。深滄の龍鎧は解け、左掌に握られている瑠璃［ラピス＝ラズリ］の刃へと…ライフル剣銃、”透禍［とうか］剣”【真如】へと還っていた。

その刃と銃口をイャガの傷の真中に撃ち込んだ姿勢のまま、問いに答える。

「奇跡なんかじゃねぇよ…そんなモン、中々起こらない必然をそう呼んだだけの事なんだからな…」

「ふふ…その言い方じゃあ貴方、最初から私に勝つ事が決まってたみたいじゃない」

心臓に銃弾…係累と断絶を同時に齎す【真如】の起源『空［くう］』を直接叩き込まれた彼女の右手に、無残にヒビ割れた短刀…第二位【赦し】が握られていた。

「…そうさ、最初から決まってたんだよ。俺の【真如】はあんたらの『始まった後と終わる前』しか対象に出来ない永遠神剣と違って『始まる前と終わった後』に干渉出来るからな…」

有り得てはならない事だ、確かに放たれた筈の『大祓』も『禁句』も召喚されたパララルネクスも…『精霊光の聖衣』さえもが、全て”最初から存在していなかった”かのように消えている。

「ああ一一成る程、理解出来たわ。着弾まで零秒どころかマイナス…時空を遡りながら命中する一撃とはね。発動するより前にはもう勝負が決しているなんて…流石は、時間を操る【時詠】のトキミの

秘蔵っ子と言ったところかしら」

にこりと笑って、聖母は左の指先で彼の頬を撫でた。

「最後に聞かせてくれる？貴方の神剣…”生命”が何なのか。ずっと知りたかったの、”生命”って一体…どんなモノなのか」

その冷たい指の感覚が、少しずつ希薄になる。イャガの胎内を経由して流し込まれた”生誕の起火”に、自身が含有するマナの時間樹化によって【赦し】は内部から破壊されていた。

如何にエターナルとは言え、永遠神剣を手放した状態で死ねば一一後は消え去るだけだ。

「…簡単だ。『知覚する全て』…それが”生命”ってモンだ」

迷い無く、回答は実に単純明快。イャガは一一

「是非とも、死睨に聞かせてあげたい台詞ね…それにしても、私を捨て駒にするなんて…酷い『私』…ふふ、でも…貴方…想像以上に……凄かったわ……うふふふ…ふふふふふ……」

その言葉を残して。聖母は、マナの霧と消えて逝った。

「……」

勝利の感慨も無く天を仰ぎ見れば、幾つも星が瞬く。いや、それは今も戦うユーフォリアやクリスト達がノル＝マーターを打ち砕く光。

そして、神剣士達が闘っているのか。

真横の校庭を見遣れば一一無数の破砕音。そして、その合間に響く…この世では始めて聞く禍々しい咆哮。

「……莫迦…野郎が…」

…その聞き覚えのある、耳障りな『破壊と殺戮の神』の闕［こえ］を聞きながら。

今度こそ、意識は自分自身が躯に充たしたモノ…果てしなく広がる『零』へと拡散していった……

巨大な時間樹を眺める大男、獅子鬣の如き金髪を靡かせる三つ目の”輪廻の観測者”のすぐ隣に、鈴を転がすような笑い声が響く。

「うふふ…見ましてボー・ボー？【赦し】のイャガ…分体とはいえ、第二位【赦し】の担い手である”最後の聖母”イャガを、生まれたばかりのエターナル如きが…」

さながら、クリスマスプレゼントにはしゃぐかのように。白い髪に白いローブと…凄まじい存在感を放つ杖を持った幼い少女が、他人の失敗を嘲笑い…その死を歓喜で迎えた。

「欲しい…是非とも、我がロウ＝エターナルに欲しい人材ですわ、あの坊や。まぁ、男ぶりで言えば前の坊やに軍配が上がりますけど…トキミさんのお気に入りを奪うのも面白そうですし、少なくともあの三人よりは役に立ちそうですしね」

…その口調や爛々たる輝きを放つ老獪な眼差しは明らかに異質。

熱の篭る眼差しは、円熟した女の色香を放っている。

「…では、時間樹に攻め入るか？止めておいた方がいいと思うがな…」法皇”テムオリン」

「貴方に言われなくても。そんな真似をして、何になるのかしら？私のモットーは『スマートに』、知恵により望みを叶える事ですわ。力で押さえ付けるなんて、馬鹿にでも出来る無粋な真似は…簡単過ぎて詰まらないでしょう？」

その少女こそがロウ＝エターナルの事実上の盟主、第二位【秩序】の担い手”法皇”テムオリン。

彼女は左手に持つ杖を徐に回し、ボー・ボーに突き付けた。

「それに――ああいう手合いは、放っておいてもコチラ側に来ますし…何より、彼をコチラ側に引き入れてくれる毒婦ならもう、既に居るみたいですもの」

「フ…相変わらずだな」

紅い三日月のように悍ましい笑顔を向けられたボー・ボーは、事もなげに丸いレンズのサングラスの位置を直す。

両腕を組んだまま、背中に生えた三本目の腕…彼の永遠神剣である第二位【無限】を使って。

「ああ…愉しみですわね。無垢なあの顔が、悲しみに歪むところが…ふふふ……」

紅い舌を覗かせて、ペロリと唇をなめずって。

その唇から、限りなく無限に近い有限宇宙に…再び悪辣な鈴の音色が響いたのだった。

The 105th Name・・・"道標［ひかり］"

…深海の底に沈んだように安息を齎さない、眠りの淵。意識が覚醒しても身じろぎさえ出来はしない、金縛りじみた微睡み。

（見えない、もう、何モ…）

見ているのは本当に瞼の裏の闇なのか、その暗黒はたやすく死すら連想させる。
いや、死ならばまだ救いが在る。この闇はまるで…無限の光すらも呑み込む虚無の闇。

（聞こえない、モウ、何モ…）

最大で在るが故に最小の、全てに先駆けるが故に全ての後手となる常世。

（嫌ダ…消エタクナイ……誰カ、助ケテクレ…誰カ……助ケテ…）

喚ぶべき声も無い、伸ばすべき手も無い。緩慢に、その意識すらも無ですら無い『ナニカ』に解けて消えていく。
そして一一気付く。その『誰カ』にすら思い至らない。固有で在る筈の、記憶すらも失せ果てた。

（無イ、無イ、無イ。何モ無イ。何モ、ナニモ。ツメタイ、クライ、コワイ…サムイ一一…）

死に逝く感覚が、零下に沈む魂を蝕む。何せ耐えるべきモノが無い、抗うべきモノが無い。

軒並み朽ち果てていく自我。無限を唄う有限にして、不実と虚無で築かれた『空［くう］』。あらゆる奇跡［かのうせい］の尽き果てた、終わりの『零』。

（　　）

永遠の刹那にて充たされる伽藍洞、それを望んだのは自分自身だ。
『本来在るべき姿に回帰する』、これはそれだけの話。

（　　ーーア…）

その一瞬の光陰、過ぎ去った■を見る。消え去っていないのならば手が在る箇所にじわりと拡がる、懐かしい暖かさを感じた。
流れ込んで来る温度に、躯を埋め尽くす『零』が薄らいでいく。

（…カエ…ラナイと…ヤクソクが…約束が有るんだ…）

…思い出が有る。確かに想い出が在る。その暖かさは…確かな道標［ひかり］。
光を目指す。動かす手足など無いが、そちらを目指して零の大海を浮上する。

この闇の『終わり』には、続きが有る。あの光は、その『始まり』へと続いている。

（…待て…消えるな…）

だが、光は薄らぐ。ゆらゆらと、水面に兆すように朧に揺らぐ。
アレを逃せば、もう二度と帰れはしないと解っている。

「――消えるなァァァッ！！！」

消えていく光に、消えていた声を張り上げて手を伸ばした――……

「――くっ…アアアアッッ！」

「――きゃわぷっ？！！」

『光』を手繰り寄せた瞬間、砂嵐のような視界と雑音［ノイズ］。砂を噛むような不快感に加えて鉄の臭い。復旧していく感覚器官が、まず触覚…取り分け痛覚が冷たく滾るような苦痛を伝えてくる。痛みこそ生きる実感という訳だ。イャガとの戦いで全身に負った傷が、皮肉にも意識を引き戻す役に立った。

「ハァ、ハァ…くっ……！」

「あ、あうあう…」

荒い息を吐きながら――温かく、柔らかな『光』を抱き締める腕に力を篭めて苦痛をやり過ごす。

幾度か失神してしまいそうになるが、その間隔が長くなるにつれて次第に視覚が、嗅覚が、聴覚が…だんだんと帰ってきた。

「はぅ…あの、えっと、空さん……そんなに力を入れたら、苦しいよぉ…」

「…帰ってきた…漸く…」

目に映るのは、わたわたともがく白い翼。耳まで朱に染まる白磁の肌に、見上げてくる蒼穹色の瞳と髪。鼻腔を擽るのは、甘ったるいミルクのような香気。

そして、鼓膜を揺らすのは…慌てふためくユーフォリアの声。その全てに『彼』は言い知れぬ安堵を覚えた。

「帰ってきたぞ――…【調律】」

「空さん…？むぎゅうぅ…はふ、ううーっ…」

さながら――元の『鞘』に収まる『刃』ように。二度と離さないとばかりに、更なる力を篭める。

そんな彼に、来るしそうに呻いたユーフォリアは――

「いい加減にしなさーいっ！」

「あべしっ！？！」

…それなりの威力で、ぽかっと。グーパンチを繰り出した。

「あ、あれ…？ここは…」

その一撃によって、やっと正体を取り戻したアキは周囲を見渡した。白いベッドに白いシーツ、白い壁に床、天井。

どう見ても物部学園の保健室ではなく、かなり本格的な病院施設のようだった。

「…支えの塔のメディカルルームです。アキ様、酷い怪我を負っていましたから…」

「まぁ、今の様子を見た分では…相当に元気が有り余っているようですけどね、兄上さま？」

「うーーっ、ふーーっ！！」

「……」

それより何より、こちらを怒りのオーラを放ちながら見詰めてくる

アイオネアと意地の悪い忍び笑いを漏らすイルカナ、猫が威嚇するような声をあげるユーフォリア。

「…ちっ、なんて喧しい奴らだ。病院の中では静かにしろと親から習わなかったのか？これだから、下賤な輩は…」

「あはは…まあまあ、お気づきになられて良かったではありませんか」

「……」

そして一一辟易した表情で毒づくニーヤァと苦笑するフィロメーラの存在が問題だったが。

「…それより、被害は？」

「話を逸らしおったな。学生には無い、寧ろ貴様が一番の重傷だ」

…それに、一先ずの安堵の溜息を漏らす。だが、すぐ思い出した。

「一一望は」

口にした瞬間、部屋を満たす空気が変わった。それが雄弁に、何があったかを物語っている。

「やっぱりか、あのヤロウ…」

「うん…望さん…ジルオルは敵を全滅させてから…敵が出て来てた次元の裂け目の中に入って行ったの…」

悲しそうに語ったユーフォリア、アイオネアやイルカナだけでなくフィロメーラも沈痛な表情だ。

「…あれからどのくらい経った、俺は一体どのくらいの間…無様を

曝してたんだ！」
「お、落ち着いて下さい、巽様。一日経っていません、約十三時間と言ったところです」
「クソッタレ――くっ！」
フィロメーラの制止も聞かずに、ベッドから跳び起きる。だが――胸や腕、脚の痛みに膝を突く。
未だ癒えないその傷痕、手当ては包帯が巻かれているだけ。
「っ…クウォークス代表か希美、ポゥを喚んでくれ…！とにかく、傷を塞がなきゃ話にならねぇ…」
「「「「……」」」」
と、そこで再び沈黙。そしてその瞬間、『己が魔法の世界にいる』という事が…彼に強い焦燥を生み出した。
「待て…他の皆はどうした？」
「は。当然、追い掛けて行ったに決まっている。役に立たん学生と傷病者の貴様、貴様の心配をして残ったそこの三人を残してな」
「…置いてかれたって訳か……」
蔑むようなニーヤァの物言いも、何一つ気にならない。ただ、そう口にした瞬間…心を充たした失意だけで死にそうになった。
「違うよ、だって…空さんはね、もう『治癒神剣魔法の効果対象』からも外れてるの。サレスさんも希美ちゃんもポゥちゃん、それにナルカナさんも試したけど…皆、だめだったから…仕方なく…」
「…それどころじゃないですよ、兄上さまを”対象”にした神剣魔法や神剣効果は『発動』すらしなくなってました」
「…ごめんなさい、アキ様…私の所為です…アキ様と私の同調率が

百%になったから…アキ様は本物の”空白［ゼロ］”になったんです。『零には、何を掛けても零』ですから…」

ギリ、と歯を喰い縛る。確かに、自分自身でそれを理解できた。

「…自然治癒しかないってのかよ、こんな時に…」

「…兄上さま、無理を仰らないで下さい。エターナルとは刻の制約を超越した存在…つまり、身体に流れる時間は無いのです…」

『永遠神銃』を介する事で今までの同調率は”零”だったが、イャガを斃す為に彼は【真如】と一ツになった。

自ら”零”に掛かり、”零”と化した己はもう…癒しを受け取る権利も喪失したのだと。そこにイルカナから注釈が加えられた。

「…ううん、出来るよ」

「「え――」」

返った驚きの声は二ツ、イルカナとアキの声の二ツだった。

「エターナルもね、成長する事は出来るの。証拠も有るよ、あたしは『生まれた時からエターナル』だったから…」

「…そんな、成長するエターナルなんて完全に矛盾してる。永遠に変化しない存在だからエターナル――」

「――…どうすれば、いいんだ。どうすればその、『成長』をする事が出来るんだ…！」

呆気に取られるイルカナの言葉を遮り、情けないがアイオネアに肩を支えて貰いながらユーフォリアに呼び掛ける。

真摯な彼の眼差しを受けて彼女は目をつむり、深く何かを思案して――やがてゆっくりと瞼を開く。

「…えっと、その…あたし、意識しなくても自然に出来てたから」

眉を『ハ』の字に、情けない目をして。

「お前な、期待させといてそれはねぇだろ…」

「むーーっ…そんな言い方しなくたって…」

そんな彼女に向けて溜息を落し、うっすら涙ぐみながら膨らませた頬をつついて『ぷきゅー』と空気を吹き出させて。

「解った…こうなったら、俺なりのやり方でやってやる！」

ベッドに腰掛けて、アイオネアを促しライフル剣銃【真如】として番える。

自身を中心とした空間に、精緻な薔薇窓のステンドグラスの精霊光［オーラ］を展開して瞼を閉じた。

一一恐らく、ユーフィーが言っているのはパソコンで言うところの『改良と更新［アップグレード］』だろう。

棍のつまりが、旧データの廃止と新データの導入…この心体の破壊と再構築か…

生き証人が目の前に居るからには『あらゆる奇跡を起こす、奇跡の原典にして原点』である”生命”に実現可能な範囲の内だ、ならば…彼には不可能では無い。

気を引き締めて、『現在の自分』を破却しながら『新しい自分』を思い描く。

「…ッ…！」

だが、余りに漠然とし過ぎていてイメージが掴めない。当たり前だ、ただ『新しい自分』をイメージするなど誰に出来ようか。

――クソッタレ…こんなところで立ち止まってられっかよ…！俺の”壱志”はこんなところで朽ちる程、甘ったれてねぇ……！

…薄らいでいく自我、再度意識が遠退いていく。

『――慌てないで、空さん…落ち着いて確固たる自分を持って…』

『ユーフィー…？』

そんな中、【真如】を握る両手を包み込んだ温かな掌。重ねられた永遠神剣【悠久】を透して響く、ユーフォリアの声。

『…『新しい自分』なんて、判りにくいものじゃなくてもっと簡単に…『成りたい自分』をイメージして』

『…『成りたい自分』…か……』

それならば、簡単に思い描ける。『自律した頼られる大人』、それが彼の思い描く『成りたい自分』だ。

『うん…今よりもっとかっこいい空さんに成ってくれたら…嬉しいよね、アイちゃん？』

【えっと…う、うん…】

恥じらうように、ぽつりと漏らし合う少女達の心音。それを敢えて無視し、次に『成長』のイメージ…芽吹いた種子から大樹が枝葉を張っていくように。

廻る精霊光により生じた、最早、目を開けていられない程の疾風…

メディカルルーム中に逆巻く蒼茫の刧波［カルパ］の深奥で。

『――ッ！』

自らの思い描く、成りたい姿へと〝天つ空風のアキ〟を拡張・再構築していく――！！！

The 106th Name…"エターナル"

…遥か遠き雲の海に浮かぶ浮島、果て無き深遠に落ち込んでいく雲が滝を思わせる世界。
白い雪が降り積もり、雪解け水が大地を潤し、下草の繁茂する青い湖となり、熱砂が水を飲み込み、黒土と変わり、緑の草木が生命を謳歌し、百花咲き乱れる各浮島。

かつて、『理想幹神』を名乗った二柱の神が居城を構えた理想世界…時間樹の幹たる『理想幹』。

「行くわよ、ケイロン！外したらフォロー宜しく――『デマテリアライズ』！」
「退きなさい…退かねば斬る――『北天星の太刀』！」

その内の、百花咲き乱れる中央島『ゼファイアス』。その更に中央に位置する中枢『ゼフェリオン＝リファ』にて爆炎が上がる。
下段から打ち上げて突き砕こうとした剣状の【光輝】を押し退ける形で繰り出された【心神】による斬り上げで撃破された抗体兵器の機能停止を確認するまでも無く、沙月や希美、カティマにルプトナ、ナーヤを先頭とした神剣士達は先を急いでいた。

「…おい、斑鳩。そろそろ休憩を取った方が…」
「そんな暇、無いわよっ！暁君、貴方望君が心配じゃないの！」

…やれやれ、といった具合に絶は肩を竦めた。いや、彼だけで無く続いているソルラスカとサレスにスバルの『旅団』男性組、タリアにヤツィータの女性組、クリスト五人姉妹。そして、エヴォリアとベルバルザードの『光をもたらすもの』組もだが。

「……」

そして一行の最後尾には、気乗りしていない様子のナルカナが続いていた。というのも、この少し前に『うんうん、やっぱりジルオルはかっこいいわよね』との発言で皆から大顰蹙［ヒンシュク］を買い、それで流石に『無いわ』と落ち込んでいるだけの自業自得だが。

戦術も何も無く、ただ前進を繰り返すだけの強行軍。かれこれ十五時間以上もまともな休憩を取っていない。体力は学園防衛戦で既に限界を迎えており、その精神力は一一支柱であった望の離脱で限界を迎えていた。

特に憔悴しきっているのが、彼に好意を寄せている先陣の五人だ。ただの一歩たりとも立ち止まろうとしない。

「一一フシュウウウウ…」

「ああもう、鬱陶しいったらありゃしない一一行くよじっちゃん、ルプトナキーーック！！」

そんな彼女らを嘲笑うかの如く、立ちはだかる巨躯の機兵達。神代に雷名を轟かせた破壊神ジルオルの制御下に下り、『浄戒』で強化された抗体兵器はイャガが連れたモノとは較べ物にならない。

その『峻厳タル障壁』は【揺籃】の纏った、氷鏃の蹴り『クラウドトランスフィクサー』を…易々と受け止める。力同士が鬩ぎ合って、硝子を引っ掻くように耳障りな音色が響く。

「まだまだ、てやぁぁーっ！」

そこで、もう一方から水流を放出して加速を得る。天秤はルプトナ優位に傾き、もう少しで障壁を貫通して抗体兵器をも貫通する一一

「どんな装甲も火力を集中すれば脆いものよ…当たれい――『フレイムレーザー』！」

本当に後もう少しというところで、勢いよく地面へマイクスタンドのように突き立てられた【無垢】から招聘された『クロウランス』が、肩口の砲門から灼熱の光線を放出。それにより、あろう事か氷の鏃と水流が蒸発してしまう。

だが、抗体兵器の重装甲は弱点の魔法を持ってしても容易な突破を許さず、只でさえ『涅槃ノ邂逅』により周囲の環境は抗体兵器側の有利を生み出しているのだ。

…全く持って連携が噛み合わない五人。寧ろ、足を引っ張り合っているかの様にすら見える。

「フシュウウウウ…」

その五人に向けて抗体兵器の眼窩より放たれる、幾条もの赤い光が『地ヲ祓ウ』。

嵐のような攻撃に、先陣と後衛が分断されてしまった。

「…神剣の主が命ずる。マナよ、癒しの風となれ――『ハーベス…きゃああっ！？」

そして、弱り目に祟り目。攻撃で受けた傷を回復する行為は、ただ命令を実行するだけの殺戮兵器で在る抗体兵器の、傷を回復する事を許さぬ『無我ノ知慧』の衝撃波によって更に傷を刻られる結果となり…最早満身創痍の彼女達には耐え切れない――！

「…神銃の主が命ずる。マナよ、輝ける零風［エーテル］へと変わ

り、意味在る全てを零海に還せ――『サブリメイション』！」

その刹那、遥か天空に滄く澄んだ神風が吹き抜ける。蒼茫の滄風は一同を包み込むように舞い降りて致死の衝撃を無に帰して、加えて抗体兵器に作り替えられた環境を在るべき姿に還元。

更には、『無我ノ知慧』を放った抗体兵器すらも”零”へと『昇華』していった。

「「「「「「――え」」」」」」

呆気に取られる五人の眼前に着地した、瑠璃の波紋を生み出す空位［ホロゥ］のライフル剣銃【真如】を携えて黒の武術着を纏う、龍の翼と尾の如きウィングハイロゥを羽撃［はばた］かせた…毛先のみが金色の黒髪の青年。歳は二十三か四・五の、精悍な印象を受けるが紛う事なく巽空その人。

若過ぎずに、かと言って落ち着き過ぎない雰囲気の醸し出す真龍の騎士［ドラグーン］。

「往くぞ、アイ…俺達の手で未来を斬り拓く！」

【はい、アキ様…私は、その為の”刃”ですから！】

…それこそ彼が『成りたい自分』として思い描いたモノだ。望めば、彼の永遠神剣はどんな姿の彼…例えば世刻望よりも人望が有り、容姿が良く、強いチカラを持った存在とする可能性も有った筈。

だが彼が成りたかったのはそんな空虚なモノではなく、神剣の銘が示す通りの…『在るがままの姿』だった。

そしてその神風を纏う龍の騎士…”天つ空風のアキ”と共に降り立つ、【悠久】のユーフォリア。

「ーー前の雑魚は俺が壊［ヤ］る。ユーフィー、後ろの雑魚はお前に任せる」
「うん。気をつけてね、空さん」
「吐［ぬ］かせ、お前こそなーー」
その二人は、背中合わせのままに言葉を交わしてーー背中合わせのまま、示し合わせたかのように、全く同時にサムズアップした。
「ーーフシュウウウウ…」
一機、抗体兵器が前に進み出る。新たに現れた蹂躙目標を赤い眼に捉え、そしてーー
「誰に向けてガン飛ばしてやがる、木偶人形風情が…！」
全く同時に頭に両肩、両脚を粉砕された抗体兵器が崩れ落ちた。
剣銃をスリングで肩に掛けて腕を組んだ青年の背後の空間に波紋を刻みながら、銃口のみを覗かせた伍挺の拳銃【比翼】と【連理】、【天涯】と【地角】、【海内】の銃弾だ。
それに、残った機が危険度を算出する。『最優先で殺せ』と、光背からの光槍で『空ヲ屠ル』。が、その槍衾を全て受け止めて退けたのは…円楯。龍の鱗を敷き詰めたかのようなラウンドシールドへと変じていたシールドハイロゥ。
それを受けて抗体兵器どもは一斉に口腔を開き、『天ヲ穿ツ』べく深紅の波動を放とうとーー。
「目障りだ、有象無象…さっさと消え失せろ」
だがーー余りに遅い。アキの周囲を旋回し、二重螺旋の軌道を描く

二ツの宝珠。東洋の龍が手に持つという如意宝珠を思わせる夜明の宝玉…スフィアハイロゥにより、際限無く高まっていくマナ。既に彼の居城たる真世界への城門は開かれて、全ての砲門は彼等…抗体兵器に狙いを定めていた。

背後の虚空へと展開された、天に根を張り地に枝を伸ばす聖なる樹。十もの珠玉［セフィラ］を多数の経［パス］にて結んだ『生命の樹』を形作る、オーラフォトンの砲門［アギト］。その始源に位置する”王冠”より、各々セフィラを結ぶ三叉路を循環していく零澪［ミズ］の銃弾。それが終焉の”王国”に至った瞬間――アキは、スピンローディングにてリロードした【真如】を構えた。

その銃口に展開されるのは、隠匿されし真理…”知識”のセフィラに対応するオーラフォトン。

「…マナの塵の、一欠片たりとも遺さずにな――『オーラフォトンクェーサー』！」

撃鉄が墜ちる。同時に放たれた、合計で十一発もの準星の煌めき。赤黒く禍々しい波動を上回る速度で駆け抜けた蒼白く神々しい星の光が、中央島『ゼファイアス』の大地ごと抗体兵器の大部隊を薙ぎ払った――！

中央島の一部を完全に消し飛ばし、漸く収まった嵐。あれだけ居た抗体兵器の軍勢は、ユーフォリアに打ち倒された最後の一機の残骸しか残っていない。

「――ハ。俺を倒したきゃ、まずこの世に存在する全ての永遠神剣と契約して来い。〝零〟には〝無限〟でもイーブンじゃねぇぜ」

その残骸へと手向けの銃弾を贈り、完全に消滅させる。

「空…くん？」

「た…巽君…よね？」

恐る恐るという具合に声を掛ける、希美と沙月を筆頭とした五人。

その一行に、彼は振り返り――

「――いいや、俺は空位の永遠者［エターナル］…〟天ツ空風のアキ〟だ……」

もう一度スピンローディングしたライフル剣銃【真如】を肩に担ぎ、淋しげな笑顔と共にそう告げたのだった。

The 107th Name…"因縁の導き"

中央島『ゼファイアス』の中心に位置する『エト＝カ＝リファ』の幹にしてログ領域へ続く門、底の無い奈落より天の果てまでを貫く巨幹と、人工物としか思えぬ青い石箱が不自然な調和を見せる中枢『ゼフェリオン＝リファ』。

結界に護られたそこへ至る唯一の橋頭堡たる小浮島には、足の踏場どころか三次元的に蟻の這い出る隙間も無い程のノル＝マーターが犇めいていた。

元より意志も生命も持たない機械兵士達は、同士討ちも厭わない。転送装置へと各々の銃口を向けて、愚かしくも侵入者が死出の門をくぐって銃弾のシャワーを浴びせられる為に現れるのを今か今かと待ち受けている。

その明らかな罠に繋がる転送装置が起動する。集団での戦闘を得意とするノル＝マーターどもが一斉に射撃を放つ、その嵐の只中に。

「一一遅ぇな、遅過ぎる。全く…蠅が停まって見えるぜ」

頭部以外に、無限に波紋の拡がり続ける装甲…夜明け前の空と同じ瑠璃［ラピス＝ラズリ］色の装甲を纏って龍翅を羽撃かせた神銃士が単騎、無傷のまま降り立った。

涼しげに腕を組み、如何なる技か。転送装置を利用せずに現れた彼の両掌に握られた、紅玉［ルビー］と蒼玉［サファイア］の弐挺拳銃。【比翼】と【連理】から発された魔法壁『イミュニティー』と物理障壁『レゾリュートブロック』がノル＝マーターの弾を防いで転送装置を護っている。

だが、それらはどう見たところで『彼自身を護ってはいない』のだ。

天を覆う星の数程の絨毯射撃を某かの方法で『微動だにせず』、全てを避けて見せた。

「せめて、肩慣らし位には成れよ――『タイムアクセラレイト』」

…それどころか。目にも留まらぬ速度にて数十機単位が縦、或いは横一閃に両断された。無論、それを成したのも弐挺拳銃。

その片刃の銃剣［バヨネット］にて振るわれた、横一閃は灼熱を纏う朱焔の刃『ファイアフリッカー』。縦一閃は、凍気を纏う碧氷の刃『ヘヴンズスウォード』。

更に、ディフェンススキルを展開した機体へと向けて撃鉄が落ちる。神剣魔法を弾頭として装填した銃弾である”神銃弾［マグナム］”、青の『サイレントフィールド』と赤の『レゾナンスレイジ』。マナ振動が停止した、一切のサポートスキルが発動しない無音の世界で、機兵は無意味な動作を繰り返すのみ。

「もっとスピード上げてくぜ――『タイムリープ』！」

浮島を覆う程に巨大な、薔薇窓のステンドグラスのオーラに次いで…いつの間にやら持ち替えられた黒い縞瑪瑙［ブラックオニキス］と白い金剛石［ダイアモンド］の弐挺拳銃は【天涯】と【地角】。電光を纏う刃『ディクリーズ』と暗闇を纏う刃『会者定離の太刀』が、次々と敵機を薙ぎ払う。

何とか突出した黒が一機、彼へと『アゴニーオブブリード』を至近で放とうと肉薄して――放たれた神銃弾、白の『グラスプ』と黒の『ディクレピト』に身を曝す。

「――ハ。やっぱり肩慣らしにも成らなかったか、屑鉄」

禁制のオーラで行動不能とされ、更には『浄戒』で与えられた加護も失い…最後に番えられた緑柱石［エメラルド］の大型拳銃【海内】の『インペイル』で胴を貫かれて銃口を埋められる黒。
留めに放たれたマグナム…理力を高めて技の威力を増し、攻撃方法と防御方法、加護を奪い去り丸裸にした上で容赦無く繰り出された『エレメンタルブラスト』が、黒の内部を目茶苦茶に破壊しながら吹き荒れ――天災に巻き込まれた軍勢は、細切れにされて崩壊していった。

…煤煙と残骸、燻る炎が至る所に撒き散らされた小さな浮島へと、転送装置を使って降り立った学園一行。
辺りの惨状を見回して、一番乗りの赤髪の少女は。

「…呆れたわ、本当に一人で制圧するなんて」
「別に問題は無いでしょう、何で苛ついてんですか？大変だったんですよ？島ごと消し飛ばす訳にもいかないし、チマチマと一機一機解体［バラ］すのは」
「最後に大技使ったでしょ、何がチマチマよ」
「あらら、見られてましたか」

…腕を組んで、そう不機嫌そうに唇を尖らせた沙月の呟き。それに答えたのは転送施設に腰を下ろし、息一ツ切らさず各拳銃の手入れをしているアキ。
その隣には、五色のマグナム弾が溢れる聖盃を捧げ持った修道女…繚乱たる百花の花冠とネビュラのハイロゥを戴いた、滄き海の媛君アイオネアが寄り添っている。

「けど…本当に宣言通り、たった一分であれだけのマナゴーレムを捻り潰すなんてな…」
「時間を浪費するのは、この世で最も贅沢な事だぜ、ソル」
手入れと使った分の神銃弾の装填を終えた伍挺の拳銃をホルスターへと戻して立ち上がる。
促されて立ち上がったアイオネアがささやかな胸元に抱いた聖盃はエーテルの煌めきと消え、空いた両腕で彼女は嬉しそうに彼の左腕を抱き寄せた。
「…てゅーか、あんたの能力って一体何？今まではまだ効いてた、あたしの治癒魔法とかオーラまで効かなくなってたじゃないのよ」
そこに歩み寄ったのはナルカナ。基本、自分の思い通りにならない事が嫌いなので腹立たしげに眉根を寄せる彼女に、彼はしれっと。
「ーーハ、莫迦莫迦しい。自分の異能［チカラ］をひけらかして自慢する莫迦が、一体何処に居るってんだよ」
「何をー！不敬よ、アキの分際でー！ナルカナ様を敬えー！」
そう厭味ったらしく鼻で笑って…さながら虚仮にするかの様に口にした。仮にも第一位の、永遠神剣の意志を。
アキの安い挑発によって呆気なく爆発したナルカナが掴み掛かろうとした瞬間ーー二人の間に割って入った、小さな蒼の少女。
「ふふーん、何を隠そう空さんは”最速”の神剣士なんですよっ！」
「”最速”～？」
ユーフォリアは得意げにナルカナへと向かって無い胸を反らして、

そんな事を言った。

「一一って、何でお前が言うんだチビ助ッ！もっと溜めさせろよ！少しくらい勿体付けさせろや！」

「はにゅうぅぅ～？！」

そんな彼女の背後から手加減無しにむぎゅーっと、思いっきり頭の羽根を握り締める。

それに余程びっくりしたのだろうか。ユーフォリアは突飛な泣き声を上げて、雛鳥が羽ばたくように両腕をバタつかせた。

「は、なーにが最速よ。だったらあんた、今すぐ此処で風力・温度・湿度を答えて見せなさいよ！」

「南東の風、風速０．３メートルに気温２０℃、湿度３２％」

「普通に答えた？！」

「あのな、俺の得物は銃だ。射撃ってのは遠距離になればなる程、気象条件が重要になるんだ…おお、これは中々…」

「ひゃあっ、やめて空さん、そこはだめぇぇっ！」

『ぎゃらっしゃー！』と憤慨する草薙の剣。その背後からどうどうとスバルが宥めようとしていたが、多分効果は無いだろう。

その間にも、もにもにと手触りの良い白い羽根を揉みしだく。

「察するに、どんなに優れた剣や楯を持っていても『先に斃された相手にそれを使う機会は無い』…そこを追求した、最強の剣と楯を兼ね備えた能力という訳か」

「成る程な…しかしどんなに速くても、付け入られる隙「チャンス」は無くならないだろう。例えば…同じ概念とか？」

「普通の奴なら、な。だが、俺の概念に破綻は無いぜ。我が概念は『因果と結果の直結』…終わりを始まりに、始まりを終わりに…俺

には付け入られる『過程』自体が存在してないからな。俺の起こす因果は、必ず狙った通りの結果を履行する銃弾になる訳だ」

「巽せんせぇー…、ソルラスカ君とルプトナさんとナルカナさんが付いてこれなくて寝てまーす」

サレスと絶の言葉に道理を返し、希美の言葉は敢えて聞き流す。

【真如】の銃弾は真理を履行する銃弾だ。過程の存在しない銃弾は因果…則ち『装填された』瞬間に結果…狙った対象が何をしようと、既に『撃ち抜いて』いる結果を出しているのだ。

それは、タイムラグ零秒の因果と結果。神にさえ付け入る隙は無い、効果はただ、相手を撃ち殺す事だけを設定されており――事前に用意していた用意すらも無為へと還す、真性悪魔の魔弾。

――だが、この世界に於いて過程抜きに物事は成立しない。だから銃弾は飛翔しているように見える。まぁ、あくまでも『見せ掛け』なんで…命中した瞬間にその間に起きた事象を全て”スキップ”して結果を出すんだが。イャガはそれを受け、『逆行した』と錯覚したのだろう。

…にしても、これは良い羽毛だ。枕に最適かもしれない。そんなに量は採れないだろうけど。

水鳥に似たユーフォリアの羽根の手触りを愉しみつつ、そんな事を考えた…その時。

「きゅうぅぅ…だめぇ…許してぇ、空さぁん…」

「……っああ、悪い悪い…」

敏感な部位を長々と弄られた所為か、頬を朱色に染めてうるうると涙ぐんだ眼差しで見上げてくる。責めるような、だが信頼しきった

透明な瞳に見詰められたその刹那…自分自身、訳の解らない衝動が全身を駆け抜けた。
まるで電気にでも触れたかのように素早くユーフォリアを解放する。
彼女もまた電気に触れたように勢いよく離れると、羽根を押さえながらアイオネアに抱き着いた。

「ふえぇ～ん、アイちゃあ～ん…空さんに好き放題に弄ばれた～…もうお嫁にいけないよぉ…」
「むぅ…アキ様…弄りたいなら…私の角だって、えっと、その…」
「誤解を招く言い方してんじゃねーよ！…お前ら、何だその冷たい目。見てただろリアルタイムで」

泣きじゃくる天使の翼を持つ少女の背中を撫でつつ、ぷーっと頬を膨らませた龍角の少女と学園一行…特に、女性陣の冷たい眼差しに曝される。

「ええ、じっくりと見てたわよ…駄目じゃないクー君、公衆の面前で愛撫は良くないわよ。そういうのはベッドの中でやりなさい」
「とにかァァく！俺こそが最速！何人たりとも、例え神だろうとも俺より速く走らせねぇ！スピードイズパワー、速さこそ強さだ！」

中には例外的に、面白がっている朱いショートヘアの女性も居たが。
それらを振り切るように気勢を上げた。

「でもねぇ、あんまり早漏［はや］過ぎるのもちょっと…」
「そうね、考え物だわ」
「ご心配無く姐さん、姐御…俺は中折れ無しの無限弾倉なんで」
「あら…二人相手くらいお茶の子済々って事？それは愉しみね」
「あんた達、何の話をしてるのよ何の話をっ！」
「「何って…ナニの話？」」

「こいつらは～～！」

顔を赤くしたタリアに突っ込まれ、『冗談通じないよね』とばかりにアキとヤツィータとエヴォリアはやれやれと肩を竦めた。

「てゆーかさ、ボクだけなのかもしれないけど…強い空とか、何か詐欺っぽくない？」

《ああー、判る判る。ボクも何かそんな気がする！》

「そうじゃな…たつみは弱くても諦めず、その上で報われないのが存在証明じゃったからの」

「それに、アサシンの癖に派手な焼プリン頭ですし…」

《要約すると強くて厭味で派手な焼プリン頭男か…最低の人種ね、アンタ》

《ゼゥったら…そんなに明け透けに言うんじゃありません》

《ミゥ…それはフォローになっていないと思うぞ》

《ルゥ姉さんもですけどね…》

「役立ってまで、なんでそこまでボロクソ言われなきゃいけねーんだ！あと姫さん、なんでわざわざ焼いた？天パですか、天パの事を言ってんですか！」

…一気にだらけた空気が広がる。それは、二十時間近い継戦時間の中で初めての休憩時間だった。

そんな中、瞑想するように周囲の気配を探っていたベルバルザードが目を開く。

「この先に凄まじい力を感じる。恐らくは…」

「一一判ってますよ、奴とは…俺一人でケリを付ける」

言葉を遮ったのは、気怠げに髪を掻き上げたアキ。それに一行は、当たり前だが驚いた顔を見せた。

「一人って…ちょっと巽君、一体何を言ってるのよ」
「そうだよ、空くん！わたし達は皆で協力して望ちゃんを取り返す為に…」
「空位の担い手”天つ空風のアキ”の名に於いて命ず――…誰一人、動くな」
「「「「「「――！？」」」」」」

その瞬間、彼の左手に招聘された【真如】。そこから発された気に、一行は指先一つ動かす事が出来無くなる程に身を縛される。

「くうっ…ちょっとアキ…アンタ、強制力なんて……なんであたしまで…」
「流石は【叢雲】の意志ナルカナ…第一位ともなると理解が速くて助かる」

説明するのが面倒臭かったのか、またも気怠そうに溜息を落として…苦笑いした。

「理屈は判ってんだけどさ…心が納得しないんだよ。もう今は関係ないけど…前世［オレ］だって俺な訳でさ…」

そうして歩き始める。死を賭してまで追い求めた”家族”を残して、ただ一人…皆に背を向けて。

「――負けっぱなしは、趣味じゃねぇんだよ」

何の因縁［ヨスガ］なのだろうか、神世とは真逆に、今度は彼の方が…”天つ空風のアキ”が、”破壊と殺戮の神”の待ち受ける決戦場へと向かって行った……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3552n/

聖なるかな外典“無銘の唄”

2011年11月30日23時53分発行